

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

原田北遺跡 I
原田西遺跡
(上)

平成 5 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

はら だ きた
原 田 北 遺 跡 I
はら だ にし
原 田 西 遺 跡
(上)

平成 5 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団



原田北・原田西遺跡全景（東から西方向を望む）



原田北・原出口遺跡全景（南から北方向を望む）



原田北遺跡第79号住居跡（弥生時代後期）



原田北遺跡第55号住居跡（古墳時代中期）



原田北遺跡第3号住居跡出土遺物



原田西遺跡第6・8号住居跡出土遺物

序

茨城県は筑波研究学園都市に整備された公共施設や、世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを広域つくば圏に拡大して、地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めております。

その一環として、住宅・都市整備公団は、土浦市北部の今泉地区に「テクノパーク土浦北」の建設を進めており、その予定地内に、埋蔵文化財包蔵地である原田北遺跡他3遺跡が所在しております。財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成2年4月から発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成2年度から3年度にかけて、調査を行った原田北遺跡と原田西遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団はもとより茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 磯田 勇

例 言

- 1 本書は、平成2年度から平成3年度にかけて、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施した、茨城県土浦市大字今泉字原田1984-16ほかに所在する原田北遺跡と土浦市大字今泉字原田1995-イほかに所在する原田西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 原田北遺跡、原田西遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。平成4年度初めの組織改正により、従来の企画管理課は企画管理課と経理課に分かれることとなった。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	小 林 元 角 田 芳 夫	昭和63年4月～平成3年7月 平成3年7月～	
常 務 理 事	小 林 洋 本 田 三 郎	平成元年4月～平成3年3月 平成3年4月～	
事 務 局 長	一 木 邦 彦 藤 枝 宣 一	平成元年4月～平成4年3月 平成4年4月～	
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行 水 飼 敏 夫	平成2年4月～平成4年3月 平成4年4月～(平成2年4月～平成4年3月まで企画管理課長代理)
	主任調査員	小 山 映 一	平成2年4月～平成3年3月
	主任調査員	根 本 康 弘	平成3年4月～
	係長	園 部 昌 俊	昭和63年4月～平成3年3月
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～平成4年3月
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～
経 理 課	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～
	主 任 事	飯 島 康 司	平成4年4月～(平成3年4月～平成4年3月企画管理課)
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～(平成2年4月～平成4年3月企画管理課)
調 査 課	課 長 (部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～
	調査第一班長	久 野 俊 度	平成2年度
	主任調査員	斎 藤 弘 道	平成2年4月～9月調査
	調 査 員	小 松 崎 猛 彦	平成2年度調査
	調 査 員	上 野 修 生	平成2年10月～平成3年3月調査
	調査第三班長	柴 正	平成3年度
	主任調査員	小 泉 光 正	平成3年度調査
	主任調査員	緑 川 正 實	平成3年10月～平成4年3月調査
	主任調査員	海老澤 稔	平成3年度調査
主任調査員	上 野 修 生	平成3年4月～平成3年9月調査	
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～
	主任調査員	緑 川 正 實	平成4年7月～整理・執筆・編集
	主任調査員	海老澤 稔	平成4年4月～整理・執筆・編集

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、緑川正實が第5章第2節1(2)、第3節3、第6章第2節2～4を、海老澤稔が第1章～第4章、第5章第1節、第2節1(1)、2～7、第3節1・2、第6章第1節、第2節1、第3節、結語を分担執筆した。
- 4 本書に使用した記号等については、第4章遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 5 本書の作成にあたり、西・北関東の弥生式土器については、茨城県立水戸農業高等学校の川崎純徳氏と日本人類学会評議員の鈴木正博氏に御指導をいただいた。
- 6 直刀の保存処理及び分析については、帝京大学山梨文化財研究所に依頼した。分析結果については附章として報告する。
- 7 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 8 遺跡の概略

遺 跡 名	原田北遺跡, 原田西遺跡				
フリガナ	ハラダキタイセキ, ハラダニシイセキ				
副 題	土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 I				
シ リ ー ズ	茨城県教育財団文化財調査報告第80集				
著 者	緑川正實, 海老澤稔				
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
発 行 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
発 行	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番2号				
発 行 日	1993 (平成5) 年3月31日				
所 収 遺 跡	市 町 村	コード	北 緯	東 経	標 高
原田北遺跡	土 浦 市	08206-C72	36° 8' 02"	140° 11' 51"	27.4m
原田西遺跡	土 浦 市	08206-C71	36° 7' 55"	140° 11' 49"	27.2m
所 収 遺 跡	主な時代		主な遺構		主な遺物
原田北遺跡	縄文(草創・早・前・中後期), 弥生(後期), 古墳(前・中期), 奈良・平安時代		住居96, 土坑124, 溝3, 火葬墓2, 炭焼窯10, 遺物包含層2		土器, 土製品(紡錘車・土錘), 石器, 石製品, 金属製品(直刀・剣・刀子・鉄鏃・鎌・古銭)
原田西遺跡	縄文(草創・早・前・中期), 弥生(後期)		住居12, 土坑95, 溝2, 遺物包含層1		土器, 土製品(紡錘車・土錘), 石器, 石製品, 金属製品(鉄鏃)

目 次

口絵

序

例言

目次 (図版・写真・表目次を含む)

一上 卷一

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法	9
第1節 地区設定	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構確認	10
第4節 遺構調査	11
第4章 遺構・遺物の記載方法	12
第1節 遺構の記載方法	12
第2節 遺物の記載方法	14
第5章 原田北遺跡 I	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 遺構と遺物	20
1 竪穴住居跡	20
(1) 弥生時代の竪穴住居跡	20
(2) 古墳時代の竪穴住居跡	205

— 下 卷 —

2	土 坑	315
3	溝	325
4	方形周溝状遺構	328
5	火葬墓	330
6	炭焼窯	332
7	遺物包含層及び遺構外出土遺物	344
第3節	考 察	363
1	縄文時代	363
2	弥生時代	363
3	古墳時代	375
第6章	原田西遺跡	389
第1節	遺跡の概要	389
第2節	遺構と遺物	389
1	竪穴住居跡	389
2	土 坑	423
3	溝	428
4	遺物包含層及び遺構外出土遺物	431
第3節	考 察	446
1	縄文時代	446
2	弥生時代	446
結 語		453
附 章	原田北遺跡第62号住居跡出土直刀の分析調査	454

插图目次

— 上 卷 —

第 1 图	原田北・原田西遺跡周辺遺跡分布图	6
第 2 图	調査区呼称方法概念图	9
第 3 图	原田北遺跡基本土層图	9
第 4 图	原田西遺跡基本土層图	10
第 5 图	原田北・原田西遺跡調査区	18
第 6 图	第 1 号住居跡実測图	21
第 7 图	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	22
第 8 图	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	24
第 9 图	第 3 号住居跡実測图	24
第 10 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	25
第 11 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	26
第 12 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)	27
第 13 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(4)	28
第 14 图	第 4 号住居跡実測图	31
第 15 图	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	32
第 16 图	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	33
第 17 图	第 5 号住居跡実測图	34
第 18 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	35
第 19 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	36
第 20 图	第 6 号住居跡実測图	38
第 21 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	39
第 22 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	40
第 23 图	第 7 号住居跡実測图	41
第 24 图	第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影图	42
第 25 图	第 8 号住居跡実測图	43
第 26 图	第 8 号住居跡出土遺物実測・拓影图	44
第 27 图	第 9 号住居跡実測图	45
第 28 图	第 9 号住居跡出土遺物実測・拓影图	46
第 29 图	第 11 号住居跡実測图	48
第 30 图	第 11 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	49
第 31 图	第 11 号住居跡出土遺物実測图(2)	50
第 32 图	第 12 号住居跡実測图	52
第 33 图	第 12 号住居跡出土遺物実測・拓影图	53
第 34 图	第 13 号住居跡実測图	55
第 35 图	第 13 号住居跡出土遺物実測・拓影图	56
第 36 图	第 14 号住居跡実測图	57

第 37 图	第 14 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	59
第 38 图	第 14 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	60
第 39 图	第 15 号住居跡実測图	61
第 40 图	第 15 号住居跡出土遺物実測・拓影图	61
第 41 图	第 16 号住居跡実測图	63
第 42 图	第 16 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	64
第 43 图	第 16 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	65
第 44 图	第 16 号住居跡出土遺物実測图(3)	66
第 45 图	第 18 号住居跡実測图	67
第 46 图	第 18 号住居跡出土遺物実測・拓影图	68
第 47 图	第 20 号住居跡実測图	71
第 48 图	第 20 号住居跡出土遺物実測・拓影图	72
第 49 图	第 21 号住居跡実測图	73
第 50 图	第 21 号住居跡出土遺物実測・拓影图	74
第 51 图	第 22 号住居跡実測图	75
第 52 图	第 22 号住居跡出土遺物実測・拓影图	76
第 53 图	第 23 号住居跡実測图	77
第 54 图	第 23 号住居跡出土遺物実測・拓影图	78
第 55 图	第 24 号住居跡実測图	80
第 56 图	第 24 号住居跡出土遺物実測・拓影图	81
第 57 图	第 25 号住居跡実測图	82
第 58 图	第 25 号住居跡出土遺物実測・拓影图	83
第 59 图	第 27 号住居跡実測图	85
第 60 图	第 27 号住居跡出土遺物実測・拓影图	86
第 61 图	第 29 号住居跡実測图	87
第 62 图	第 29 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	88
第 63 图	第 29 号住居跡出土遺物実測图(2)	89
第 64 图	第 30 号住居跡実測图	91
第 65 图	第 30 号住居跡出土遺物実測・拓影图	91
第 66 图	第 31 号住居跡実測图	93
第 67 图	第 31 号住居跡出土遺物実測・拓影图	94
第 68 图	第 32 号住居跡実測图	95
第 69 图	第 32 号住居跡出土遺物実測・拓影图	96
第 70 图	第 33 号住居跡実測图	97
第 71 图	第 33 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	98
第 72 图	第 33 号住居跡出土遺物実測图(2)	99
第 73 图	第 34 号住居跡実測图	100
第 74 图	第 34 号住居跡出土遺物実測・拓影图	102

第 75 图	第35号住居跡実測図……………103	第115图	第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……151
第 76 图	第35号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……104	第116图	第73号住居跡実測図……………154
第 77 图	第36号住居跡実測図……………105	第117图	第73号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……155
第 78 图	第36号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……106	第118图	第75号住居跡実測図……………157
第 79 图	第36号住居跡出土遺物実測図(2)……………107	第119图	第75号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……158
第 80 图	第37号住居跡実測図……………108	第120图	第76号住居跡実測図……………160
第 81 图	第37号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……109	第121图	第76号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……161
第 82 图	第38号住居跡実測図……………110	第122图	第77号住居跡実測図……………163
第 83 图	第38号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……111	第123图	第77号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……164
第 84 图	第39号住居跡実測図……………112	第124图	第78号住居跡実測図……………166
第 85 图	第39号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……113	第125图	第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……167
第 86 图	第40号住居跡実測図……………114	第126图	第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……168
第 87 图	第40号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……115	第127图	第79号住居跡実測図……………170
第 88 图	第41号住居跡実測図……………116	第128图	第79号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……172
第 89 图	第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……118	第129图	第80号住居跡実測図……………174
第 90 图	第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……119	第130图	第80号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……175
第 91 图	第42号住居跡実測図……………120	第131图	第81号住居跡実測図……………177
第 92 图	第42号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……121	第132图	第81号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……178
第 93 图	第43号住居跡実測図……………122	第133图	第81号住居跡出土遺物実測図(2)……………179
第 94 图	第43号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……123	第134图	第82号住居跡実測図……………180
第 95 图	第47号住居跡実測図……………124	第135图	第84号住居跡実測図……………181
第 96 图	第47号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……125	第136图	第84号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……182
第 97 图	第50号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……126	第137图	第86号住居跡実測図……………184
第 98 图	第56号住居跡実測図……………127	第138图	第86号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……185
第 99 图	第56号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……128	第139图	第87号住居跡実測図……………186
第100图	第62号住居跡実測図……………130	第140图	第87号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……187
第101图	第62号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……131	第141图	第89号住居跡実測図……………190
第102图	第63号住居跡実測図……………133	第142图	第89号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……191
第103图	第63号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……134	第143图	第90号住居跡実測図……………193
第104图	第67号住居跡実測図……………137	第144图	第90号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……193
第105图	第67号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……138	第145图	第91号住居跡実測図……………194
第106图	第68号住居跡実測図……………140	第146图	第91号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……195
第107图	第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……141	第147图	第92号住居跡実測図……………197
第108图	第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……142	第148图	第92号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……198
第109图	第70号住居跡実測図……………144	第149图	第93号住居跡実測図……………199
第110图	第70号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……145	第150图	第93号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……200
第111图	第71号住居跡実測図……………146	第151图	第96号住居跡実測図……………201
第112图	第71号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……147	第152图	第96号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……202
第113图	第72号住居跡実測図……………149	第153图	第 2 号住居跡実測図……………206
第114图	第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……150	第154图	第 2 号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……207

第233図	第4号炭焼窯実測図……………	336	第272図	第5号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	402
第234図	第5・6・7号炭焼窯実測図……………	338	第273図	第6号住居跡実測図……………	404
第235図	第8号炭焼窯実測図……………	339	第274図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	406
第236図	第9号炭焼窯実測図……………	340	第275図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……	407
第237図	第10号炭焼窯実測図……………	342	第276図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) ……	408
第238図	炭焼窯出土遺物実測・拓影図 ……	343	第277図	第7号住居跡実測図……………	410
第239図	原田北遺跡遺物包含層実測図……………	345	第278図	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	411
第240図	遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	346	第279図	第7号住居跡出土遺物実測図(2) ……	412
第241図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(1) ……	349	第280図	第8号住居跡実測図……………	413
第242図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(2) ……	350	第281図	第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	414
第243図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3) ……	351	第282図	第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……	415
第244図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(4) ……	352	第283図	第9号住居跡実測図……………	417
第245図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(5) ……	353	第284図	第9号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	418
第246図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6) ……	354	第285図	第10号住居跡実測図……………	419
第247図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(7) ……	355	第286図	第10号住居跡出土遺物拓影図……………	420
第248図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(8) ……	356	第287図	第11号住居跡実測図……………	421
第249図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(1) ……	358	第288図	第11号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	421
第250図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(2) ……	359	第289図	第12号住居跡実測図……………	422
第251図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(3) ……	360	第290図	第12号住居跡出土遺物拓影図……………	422
第252図	原田北遺跡弥生式土器変遷図……………	364	第291図	土坑出土遺物実測・拓影図 ……	424
第253図	原田北遺跡弥生時代時期別住居跡配置図 ……	368	第292図	第1・2号溝実測図 ……	429
第254図	原田北遺跡弥生時代住居跡一覽図……………	372	第293図	第1・2号溝出土遺物実測・拓影図……………	431
第255図	原田北IV期出土土器……………	376	第294図	原田西遺跡遺物包含層実測図……………	433
第256図	原田北V期出土土器(1)……………	377	第295図	遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	437
第257図	原田北V期出土土器(2)……………	378	第296図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(1) ……	438
第258図	原田北VI期出土土器……………	379	第297図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(2) ……	439
第259図	原田北遺跡古墳時代時期別住居跡配置図 ……	381	第298図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3) ……	440
第260図	原田北遺跡古墳時代住居跡一覽図(1) ……	382	第299図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(4) ……	441
第261図	原田北遺跡古墳時代住居跡一覽図(2) ……	383	第300図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(5) ……	442
	原田西遺跡		第301図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6) ……	443
第262図	原田西遺跡遺構全体図……………	387	第302図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図 ……	444
第263図	第1号住居跡実測図……………	390	第303図	遺物包含層・遺構外出土石製品・ 土製品・鉄製品実測図 ……	445
第264図	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	391	第304図	原田西遺跡弥生時代時期別住居跡配置図 ……	448
第265図	第2号住居跡実測図……………	393	第305図	原田西遺跡弥生式土器変遷図……………	450
第266図	第2号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	394	第306図	原田西遺跡住居跡規模・長軸方向 ……	452
第267図	第3号住居跡実測図……………	396			
第268図	第3号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	397			
第269図	第4号住居跡実測図……………	398			
第270図	第4号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	399			
第271図	第5号住居跡実測図……………	401			

表 目 次

表 1 原田北・原田西遺跡周辺遺跡一覧表 ……8	表 4 原田北遺跡土坑一覧表 ……322
表 2 原田北遺跡弥生時代住居跡一覧表 ……203	表 5 原田西遺跡住居跡一覧表 ……423
表 3 原田北遺跡古墳時代住居跡一覧表 ……313	表 6 原田西遺跡土坑一覧表 ……425

写真図版目次

P L 1 調査後全景(Z地区, 原田西遺跡), 調査後全景(A・B地区)	第8号住居跡出土遺物, 第9号住居跡, 第9号住居跡出土遺物(1)
P L 2 遺跡遠景, 遺構確認状況(B地区)	P L 16 第9号住居跡遺物出土状況, 第9号住居跡出土遺物(2), 第11号住居跡, 第11号住居跡出土遺物(1)
P L 3 調査前全景, 遺構確認状況(Z地区), 遺構確認状況(D地区)	P L 17 第11号住居跡遺物出土状況, 第11号住居跡出土遺物(2)
P L 4 遺構確認状況(A地区), 遺構確認状況(B地区), 調査後全景Z地区(1)	P L 18 第12号住居跡, 第12号住居跡遺物出土状況, 第12号住居跡出土遺物
P L 5 調査後全景Z地区(2), 調査後全景B地区(1), 調査後全景B地区(2)	P L 19 第13号住居跡, 第13号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡出土遺物, 第14号住居跡
P L 6 第14・16号住居跡出土遺物, 第41・78号住居跡出土遺物	P L 20 第14号住居跡遺物出土状況(1), 第14号住居跡遺物出土状況(2), 第14号住居跡出土遺物(1)
P L 7 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況(1), 第1号住居跡遺物出土状況(2), 第1号住居跡遺物出土状況(3), 第1号住居跡出土遺物(1)	P L 21 第14号住居跡出土遺物(2), 第15号住居跡, 第15号住居跡遺物出土状況
P L 8 第1号住居跡出土遺物(2), 第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況(1)	P L 22 第16号住居跡, 第16号住居跡遺物出土状況(1), 第16号住居跡遺物出土状況(2), 第16号住居跡出土遺物(1)
P L 9 第3号住居跡遺物出土状況(2), 第3号住居跡遺物出土状況(3), 第3号住居跡遺物出土状況(4)	P L 23 第16号住居跡遺物出土状況(3), 第16号住居跡炉土層断面, 第16号住居跡出土遺物(2)
P L 10 第3号住居跡出土遺物(1)	P L 24 第18号住居跡, 第18号住居跡遺物出土状況, 第18号住居跡出土遺物
P L 11 第3号住居跡出土遺物(2), 第4号住居跡, 第4号住居跡遺物出土状況(1), 第4号住居跡遺物出土状況(2), 第4号住居跡出土遺物(1)	P L 25 第20号住居跡, 第20号住居跡遺物出土状況, 第20号住居跡出土遺物, 第21号住居跡, 第21号住居跡遺物出土状況
P L 12 第14号住居跡出土遺物(2), 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況, 第5号住居跡出土遺物(1)	P L 26 第21号住居跡出土遺物, 第22号住居跡, 第22号住居跡出土遺物
P L 13 第5号住居跡出土遺物(2), 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況(1), 第6号住居跡出土遺物(1)	P L 27 第22号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡, 第23号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡出土遺物, 第24号住居跡出土遺物
P L 14 第6号住居跡遺物出土状況(2), 第6号住居跡遺物出土状況(3), 第6号住居跡出土遺物(2), 第7号住居跡, 第7号住居跡出土遺物	P L 28 第24号住居跡, 第24号住居跡遺物出土状況, 第25号住居跡, 第25号住居跡遺物出土状況,
P L 15 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況,	

- 第25号住居跡出土遺物
- P L 29 第27号住居跡, 第27号住居跡遺物出土狀況, 第27号住居跡出土遺物, 第29号住居跡, 第29号住居跡出土遺物
- P L 30 第29号住居跡遺物出土狀況(1), 第29号住居跡遺物出土狀況(2), 第29号住居跡出土遺物, 第30号住居跡, 第30号住居跡出土遺物(1)
- P L 31 第30号住居跡遺物出土狀況, 第30号住居跡出土遺物(2), 第31号住居跡, 第31号住居跡遺物出土狀況, 第31号住居跡出土遺物(1)
- P L 32 第31号住居跡出土遺物(2), 第32号住居跡, 第32号住居跡遺物出土狀況, 第32号住居跡出土遺物
- P L 33 第33号住居跡, 第33号住居跡遺物出土狀況(1), 第33号住居跡遺物出土狀況(2), 第33号住居跡遺物出土狀況(3), 第33号住居跡遺物出土狀況(4)
- P L 34 第33号住居跡出土遺物, 第34号住居跡
- P L 35 第34号住居跡遺物出土狀況(1), 第34号住居跡遺物出土狀況(2), 第34号住居跡出土遺物, 第35号住居跡出土遺物
- P L 36 第35号住居跡, 第35号住居跡遺物出土狀況, 第36号住居跡, 第36号住居跡遺物出土狀況(1)
- P L 37 第36号住居跡遺物出土狀況(2), 第36号住居跡出土遺物, 第37号住居跡出土遺物(1)
- P L 38 第37号住居跡, 第37号住居跡出土遺物(2), 第38号住居跡, 第38号住居跡出土遺物, 第39号住居跡, 第39号住居跡出土遺物(1)
- P L 39 第39号住居跡出土遺物(2), 第40号住居跡, 第40号住居跡出土遺物
- P L 40 第41号住居跡, 第41号住居跡炉確認狀況, 第41号住居跡出土遺物(1)
- P L 41 第41号住居跡出土遺物(2), 第42号住居跡, 第43号住居跡
- P L 42 第42号住居跡出土遺物, 第43号住居跡出土遺物, 第47号住居跡出土遺物, 第50号住居跡, 第50号住居跡出土遺物
- P L 43 第56号住居跡遺物出土狀況, 第56号住居跡出土遺物, 第62号住居跡, 第62号住居跡遺物出土狀況(1), 第62号住居跡遺物出土狀況(2),
- 第63号住居跡
- P L 44 第62号住居跡直力 X 線写真
- P L 45 第62号住居跡出土遺物, 第63号住居跡遺物出土狀況(1), 第63号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 46 第63号住居跡出土遺物, 第67号住居跡, 第67号住居跡遺物出土狀況(1), 第67号住居跡遺物出土狀況(2), 第67号住居跡出土遺物(1)
- P L 47 第67号住居跡出土遺物(2), 第68号住居跡, 第68号住居跡遺物出土狀況, 第68号住居跡出土遺物(1)
- P L 48 第68号住居跡出土遺物(2), 第70号住居跡, 第70号住居跡出土遺物
- P L 49 第71号住居跡, 第71号住居跡遺物出土狀況, 第71号住居跡出土遺物, 第72号住居跡, 第72号住居跡遺物出土狀況(1)
- P L 50 第72号住居跡遺物出土狀況(2), 第72号住居跡遺物出土狀況(3), 第72号住居跡出土遺物(1)
- P L 51 第72号住居跡出土遺物(2), 第73号住居跡, 第73号住居跡出土遺物(1)
- P L 52 第73号住居跡出土遺物(2), 第75号住居跡, 第75号住居跡出土遺物
- P L 53 第76号住居跡, 第76号住居跡出土遺物, 第77号住居跡
- P L 54 第77号住居跡出土遺物, 第78号住居跡, 第78号住居跡遺物出土狀況
- P L 55 第78号住居跡出土遺物
- P L 56 第79号住居跡, 第79号住居跡出土遺物, 第80号住居跡出土遺物(1)
- P L 57 第80号住居跡出土遺物(2), 第80号住居跡, 第81号住居跡
- P L 58 第81号住居跡遺物出土狀況, 第81号住居跡出土遺物, 第82号住居跡
- P L 59 第84号住居跡, 第84号住居跡遺物出土狀況(1), 第84号住居跡遺物出土狀況(2), 第84号住居跡出土遺物(1)
- P L 60 第84号住居跡出土遺物(2), 第86号住居跡
- P L 61 第86号住居跡出土遺物狀況, 第86号住居跡炉土層断面, 第86号住居跡出土遺物
- P L 62 第87号住居跡, 第87号住居跡遺物出土狀況,

- 第87号住居跡出土遺物(1)
- P L 63 第87号住居跡出土遺物(2), 第89号住居跡出土遺物
- P L 64 第89号住居跡, 第90号住居跡, 第91号住居跡
- P L 65 第90号住居跡出土遺物, 第91号住居跡出土遺物, 第92号住居跡出土遺物, 第93号住居跡出土遺物, 第96号住居跡出土遺物
- P L 66 第92号住居跡遺物出土狀況, 第93号住居跡, 第96号住居跡
- P L 67 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土狀況, 第2号住居跡出土遺物
- P L 68 第10号住居跡, 第10号住居跡遺物出土狀況, 第10号住居跡出土遺物, 第17・26号住居跡
- P L 69 第17・26号住居跡遺物出土狀況(1), 第17・26号住居跡遺物出土狀況(2), 第17号住居跡出土遺物(1)
- P L 70 第17号住居跡出土遺物(2)
- P L 71 第19号住居跡, 第19号住居跡遺物出土狀況, 第28号住居跡, 第28号住居跡遺物出土狀況(1), 第28号住居跡出土遺物(1)
- P L 72 第28号住居跡遺物出土狀況(2), 第28号住居跡出土遺物(2)
- P L 73 第28号住居跡出土遺物(3), 第44号住居跡
- P L 74 第44号住居跡遺物出土狀況(1), 第44号住居跡遺物出土狀況(2), 第44号住居跡出土遺物(1)
- P L 75 第44号住居跡出土遺物(2)
- P L 76 第45・46号住居跡, 第45・46号住居跡遺物出土狀況(1), 第45号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 77 第45号住居跡出土遺物, 第48号住居跡, 第48号住居跡遺物出土狀況, 第48号住居跡出土遺物(1)
- P L 78 第48号住居跡出土遺物(2), 第49・50号住居跡, 第49・50・94号住居跡遺物出土狀況
- P L 79 第49号住居跡出土遺物
- P L 80 第51号住居跡, 第52号住居跡
- P L 81 第52号住居跡出土遺物
- P L 82 第53号住居跡, 第53号住居跡出土遺物, 第54号住居跡, 第54号住居跡遺物出土狀況, 第54号住居跡出土遺物(1)
- P L 83 第54号住居跡出土遺物(2), 第55号住居跡, 第55号住居跡遺物出土狀況
- P L 84 第55号住居跡出土遺物
- P L 85 第57号住居跡, 第57号住居跡遺物出土狀況, 第57号住居跡出土遺物(1)
- P L 86 第57号住居跡出土遺物(2), 第58号住居跡出土遺物(1)
- P L 87 第58号住居跡, 第58号住居跡遺物出土狀況, 第58号住居跡出土遺物(2)
- P L 88 第60・62号住居跡, 第60・62号住居跡出土遺物, 第61号住居跡, 出土遺物(1)
- P L 89 第61号住居跡遺物出土狀況(1), 第61号住居跡遺物出土狀況(2), 第61号住居跡出土遺物(2)
- P L 90 第61号住居跡出土遺物(3)
- P L 91 第64号住居跡, 第64号住居跡遺物出土狀況, 第64号住居跡出土遺物, 第65号住居跡, 第65号住居跡出土遺物
- P L 92 第66号住居跡遺物出土狀況, 第66号住居跡出土遺物
- P L 93 第69号住居跡, 第69号住居跡遺物出土狀況, 第69号住居跡出土遺物
- P L 94 第74号住居跡, 第74号住居跡出土遺物
- P L 95 第83号住居跡, 第83号住居跡遺物出土狀況(1)(2), 第83号住居跡出土遺物(1)
- P L 96 第83号住居跡出土遺物(2), 第85号住居跡, 第85号住居跡出土遺物(1)
- P L 97 第85号住居跡遺物出土狀況, 第85号住居跡出土遺物(2), 第88号住居跡
- P L 98 第88号住居跡遺物出土狀況, 第88号住居跡出土遺物
- P L 99 第94号住居跡, 第94号住居跡出土遺物(1)
- P L 100 第94号住居跡出土遺物(2), 第65・95号住居跡, 第95号住居跡出土遺物
- P L 101 第6号土坑, 第27号土坑土層断面, 第20・27・30・50・97号土坑出土遺物
- P L 102 第49・50・51・52号土坑, 第59・72号土坑出土遺物, 第1・2号溝(1), 第1・2号溝(2), 第1号溝出土遺物
- P L 103 第1・2号溝(3), 第1・2号溝土層断面, 第1号方形周溝狀遺構
- P L 104 第1号火葬墓土層断面, 第1号火葬墓遺物

- 出土狀況, 第2号火葬墓遺物出土狀況, 第1・2号火葬墓出土遺物
- P L 105 第1号炭焼窯, 第2号炭焼窯, 第3号炭焼窯
- P L 106 第4号炭焼窯, 第5・6・7号炭焼窯, 第7号炭焼窯
- P L 107 第8号炭焼窯, 第9号炭焼窯, 第10号炭焼窯
- P L 108 遺跡全景 (Z・D地区), 遺物包含層全景
- P L 109 遺物包含層(1), 遺物包含層(2), 遺物包含層(3)
- P L 110 遺物包含層土層断面, 遺物包含層遺物出土狀況(1), 遺物包含層遺物出土狀況(2), 遺物包含層遺物出土狀況(3), 遺物包含層遺物出土狀況(4)
- P L 111 遺物包含層出土遺物(1)
- P L 112 遺物包含層出土遺物(2), 遺物包含層出土遺物(3), 遺物包含層出土遺物(4), 遺物包含層出土遺物(5), 遺物包含層出土遺物(6)
- P L 113 遺物包含層出土遺物(7), 遺物包含層出土遺物(8), 遺物包含層出土遺物(9)
- P L 114 遺物包含層出土遺物(10), 遺物包含層出土遺物(11), 遺物包含層出土遺物(12), 遺物包含層出土遺物(13), 遺物包含層出土遺物(14)
- P L 115 遺物包含層出土遺物(15), 遺物包含層出土遺物(16), 遺物包含層出土遺物(17), 遺物包含層出土遺物(18), 遺物包含層出土遺物(19)
- P L 116 遺物包含層出土遺物(20), 遺物包含層出土遺物(21), 遺物包含層出土遺物(22), 遺物包含層出土遺物(23)
- P L 117 遺物包含層出土遺物(24)
- P L 118 遺跡遠景, 遺物包含層全景
原田西遺跡
- P L 119 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土狀況, 第1号住居跡出土遺物
- P L 120 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土狀況, 第2号住居跡出土遺物
- P L 121 第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土狀況, 第3号住居跡出土遺物
- P L 122 第4号住居跡遺物出土狀況(1), 第4号住居跡遺物出土狀況(2), 第4号住居跡出土遺物
- P L 123 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土狀況(1), 第5号住居跡遺物出土狀況(2), 第5号住居跡遺物出土狀況(3)
- P L 124 第5号住居跡出土遺物, 第6号住居跡出土遺物(1)
- P L 125 第6号住居跡出土遺物(2)
- P L 126 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土狀況(1), 第6号住居跡遺物出土狀況(2), 第6号住居跡出土遺物(3)
- P L 127 第7号住居跡, 第7号住居跡遺物出土狀況, 第7号住居跡出土遺物(1)
- P L 128 第7号住居跡出土遺物(2), 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土狀況
- P L 129 第8号住居跡出土遺物(1)
- P L 130 第8号住居跡出土遺物(2), 第9号住居跡出土遺物
- P L 131 第9号住居跡, 第10号住居跡, 第11号住居跡出土遺物
- P L 132 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土狀況, 第12号住居跡
- P L 133 第85・90号土坑出土遺物, 第1号溝, 第1号溝出土遺物, 第2号溝(1)
- P L 134 第2号溝(2), 遺物包含層, 遺物包含層出土遺物
- P L 135 試掘土層断面, 第70号土坑及び遺物包含層出土遺物, 遺物包含層遺物出土狀況(1), 遺物包含層遺物出土狀況(2), 遺構外出土遺物
- P L 136 第70号土坑遺物出土狀況, 遺物包含層・遺構外出土遺物(1), 遺物包含層・遺構外出土遺物(2)
- P L 137 遺物包含層・遺構外出土遺物(3), 遺物包含層・遺構外出土遺物(4), 遺物包含層・遺構外出土遺物(5)
- P L 138 遺物包含層・遺構外出土遺物(6), 遺物包含層・遺構外出土遺物(7), 遺物包含層・遺構外出土遺物(8)
- P L 139 遺物包含層・遺構外出土遺物(9), 遺物包含層・遺構外出土遺物(10), 遺物包含層・遺構外出土遺物(11)
- P L 140 遺物包含層・遺構外出土遺物(12)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県は筑波研究学園都市における世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを広域つくば圏に拡大して地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めている。

昭和63年4月、土浦市は茨城県と協議し、「土浦北地区工業開発」を進めていくことを決定した。工事に先立ち、昭和63年5月、土浦市から土浦市教育委員会に「埋蔵文化財の有無及びその取扱について」照会があり、昭和63年6月、土浦市教育委員会は開発区内の表面観察と確認調査（試掘調査）を進め、埋蔵文化財の存在を確認し、平成元年5月、土浦市（土浦市企画部特定開発課）へ確認結果を回答した。

平成元年9月、茨城県教育委員会は土浦市教育委員会から「土浦北地区工業開発」の開発主体が、平成元年6月26日付けで、土浦市（土浦市企画部特定開発課）から住宅・都市整備公団に変更になった旨連絡を受けた。以後、埋蔵文化財の取り扱いについては、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団との間で協議を進めることとなった。平成2年1月、住宅・都市整備公団つくば開発局と茨城県教育委員会は、土浦北地区の埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から協議を重ねた。その結果、一部現状保存をし、原田北遺跡他3遺跡については記録保存の措置をとることとなった。

平成2年1月、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年2月、住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に、原田北遺跡他3遺跡の発掘調査の依頼があり、茨城県教育財団は住宅・都市整備公団と発掘調査についての打ち合わせを行った。その後、茨城県教育財団と住宅・都市整備公団は、原田北遺跡他3遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、平成2年4月から原田北遺跡他3遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

原田北遺跡、原田西遺跡の発掘調査は、平成2年4月1日から平成4年3月31日までの2年間にわたって実施した。以下、調査経過の概要について記述する。

平成2年度

4月 発掘調査を開始するための諸準備を行う。現場事務所や倉庫の設置、駐車場の確保、作業

員募集等を実施した。16日から作業員を投入して、諸施設の整備、原田北・原田西遺跡の伐開作業を行った。27日に原田北遺跡において、2遺跡の発掘調査の円滑な推進と作業の安全を祈って、鍬入れ式を挙行了した。

5月 1日から10日にかけて、原田西遺跡の伐開作業を継続実施し、10日から、2遺跡の試掘調査を実施した。試掘の結果、原田北遺跡では弥生式土器の破片が出土し、住居跡や溝と考えられる落ち込みが確認できた。

6月 前月に引き続き、試掘調査を実施した。2遺跡ともに、谷部に遺物を包含する層（以下、遺物包含層と呼ぶ）が存在することを確認した。原田西遺跡においては、土器片は少なかつたものの土坑を多数確認した。遺構の分布状況や表土の厚さ等を検討して、27日から重機による表土除去作業を開始し、それと並行して、遺構確認作業も行った。

7月 表土除去作業、遺構確認作業を継続し、19日に重機による表土除去作業を終了した。その後、遺構確認作業を続け、確認状況の写真撮影、遺構配置図作成を行った。31日からは、原田北遺跡の遺物包含層の調査に入った。

8月 原田北遺跡の調査を継続した。包含層の調査は暑さと土量の多さで難行したが、縄文早期の土器片などを層位的に調査し、成果をあげることができた。

9月 遺物包含層の調査を継続し、18日には住居跡の調査も開始した。27日には炭焼窯、火葬墓の調査にもに入った。

10月 住居跡の調査は20軒台まで進行した。溝3条の調査も終了した。

11月 調査は順調に進み、原田北遺跡の住居跡26軒の調査はほぼ終了した。遺物包含層においては、有舌尖頭器、石鏃、縄文草創期の土器片などが出土した。

12月 12日に原田北遺跡の調査を終了した。検出遺構は住居跡26軒（弥生時代23、古墳時代3）、土坑5基、溝3条、火葬墓2基、炭焼窯8基、粘土採掘坑2基、遺物包含層2か所であった。

1月 7日から原田西遺跡の調査を開始した。月末までに住居跡11軒、溝2条、土坑15基の調査を行った。住居跡はすべて弥生時代のものであった。

2月 住居跡、土坑、溝の調査を進めた。遺構調査がほぼ終了した14日に都和公民館において報告会、16日には遺跡において、現地説明会を行った。

3月 5日には、これまで調査した遺跡内の遺構・遺物の性格を明確にするために、班内研修会を実施した。中旬に遺跡の航空写真撮影を行い、これまでに作成した図面類の点検、修正、遺物の洗浄及び注記等を実施し、16日に一切の調査を終了した。

平成3年度

4月 9日に事務所を再開し、諸準備を行った。10日から原田北遺跡C・D地区と土捨場の伐開作業を開始し、合わせて試掘用グリッドの設定を行った。

- 5月 10日からC・D地区の試掘に入り、弥生式土器片などが出土した。C地区東部とD地区南部のグリッドにおいては、地山まで約2mと深いところがあり、埋没谷と思われた。
- 6月 D地区の表土除去を17日から開始した。表土除去作業と並行して、遺構確認作業も行った。弥生時代の住居跡9軒、炭焼窯、埋没谷などを確認した。
- 7月 15日からC地区の表土除去作業と遺構確認作業を行った。C地区東部で埋没谷が2か所、住居跡7軒、溝1条などを検出した。
- 8月 2日からD地区の住居跡の調査を開始した。D地区は遺構覆土の粘性が強く、調査は難行したが、在地弥生式土器と南関東系弥生式土器と一緒に出土するなど成果があがった。
- 9月 前月に続いて、D地区の遺構調査を進めた。中旬頃は雨天日が多く、若干調査も遅れぎみであったが、12日にはD地区の調査が終了し、24日には航空写真撮影を行った。
- 10月 原出口遺跡の遺構調査と並行して、A・B地区の試掘調査を行い、弥生式土器片、土師器片とともに住居跡と思われる落ち込みを確認した。23日から、重機による表土除去作業を開始し、合わせて遺構確認作業も行った。
- 11月 18日、A・B地区の遺構確認作業終了。住居跡48軒、溝2条、土坑約100基を確認した。26日からC地区の遺構調査を開始し、弥生式土器などが出土した。
- 12月 引き続きC地区の調査を継続し、11日に住居跡7軒、土坑9基、溝1条の調査を終了した。12日からはA・B地区の調査に入り、住居跡の調査から開始した。
- 1月 6日から調査を再開し、A・B地区の住居跡の調査を進めた。月末までには、和泉期の大形住居跡6軒はほぼ終了することができた。
- 2月 前半、積雪による調査の遅れも多少あったが、中旬から天候も持ち直し、18日にはA地区の調査を終了することができた。27日には報告会を実施した。
- 3月 B地区の住居跡、土坑の調査を進めた。調査のほぼ終了した7日には、現地説明会を実施し、300名近い見学者があった。以後、補足調査を実施し、19日には航空写真撮影を終了した。事務所では諸帳簿の点検を行い、それと並行して、遺跡内の危険箇所の安全対策を行い、26日に調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

原田北遺跡は、土浦市大字今泉字原田1984-16ほか、原田西遺跡は土浦市大字今泉字原田1995-イほか、に所在しており、土浦市役所から北へ約7.5kmに位置している。

土浦市は、首都東京から北東へ約60kmにあり、茨城県南部のほぼ中央部に位置している。当市は、県南部の商・工業や文化の中心地で、近年、筑波研究学園都市と一体となった開発が進められている。市域は、東西約10km、南北約12.5km、面積約92km²で、人口は129,745人(平成4年4月1日現在)である。北は新治郡千代田町、東は同郡出島村に接するとともに、霞ヶ浦の土浦入に面している。南は稲敷郡阿見町、牛久市、西はつくば市、新治郡新治村に接している。当市は、古くから水陸交通要衝の地で、桜川が霞ヶ浦に注ぐ河口付近に市街地が形成された。現在、JR常磐線や国道6号、常磐自動車道が市の南南西から北北東にほぼ並行に走っており、都心と結ばれているほか、国道125号や主要地方道土浦大洋線などにより、県西地方や鹿行地域、成田方面とも結ばれている。

当市の地形は、中央部の霞ヶ浦の土浦入に注ぐ桜川流域の沖積低地と、北東側の新治台地と、南西側の稲敷台地の3つに分けられる。新治台地は、筑波山塊から南東に延びた標高24~27mの洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。稲敷台地は真壁台地から南東に延びた標高24m前後の洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。桜川とその支流による沖積低地は、多くは水田として利用されているが、河口付近は市街地となっている。

地質は、中粒砂からなる成田層上部の上を礫混じりの中粒砂からなる龍ヶ崎砂礫層が不整合に覆っている。その上に木の葉や昆虫などの化石が含まれる砂層と粘土層からなる常総粘土があり、さらにその上を厚さ2~3mほどの関東ロームがこれも不整合に覆っている。

原田北遺跡、原田西遺跡は、常磐自動車道沿いの西側にあり、土浦市の北端部に位置している。遺跡の所在する新治台地北西部は、標高24~26mの平坦な台地で、畑地や山林として利用されている。遺跡の北側には、霞ヶ浦高浜入りに注ぎ込む恋瀬川の支流である天の川の低地があり、その低地は水田として耕作されている。遺跡西側からは小支谷が樹枝状に入り込み、遺跡周辺は複雑な地形となっている。2つの遺跡はこの小支谷を挟んで対峙しており、台地と水田との比高は、9mほどである。

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦沿岸地方は、利根川下流域や東京湾沿岸地方とともに多くの遺跡が所在することで知られ、霞ヶ浦西岸に位置する土浦市周辺もその例にもれない。県内で発見された縄文時代の貝塚は350か所ほどであるが、なかでも霞ヶ浦周辺からは集中して発見され、明治12年(1879)に飯島 魁・佐々木忠次郎博士によって調査された⁽¹⁾陸平貝塚(美浦村)を筆頭に⁽²⁾安食平貝塚(出島村)、若海貝塚⁽³⁾(玉造町)、⁽⁴⁾椎塚貝塚(江戸崎町)、⁽⁵⁾上高津貝塚(土浦市)等は早くから知られた著名な遺跡である。とりわけ国指定史跡の上高津貝塚は、古くは明治39年(1906)に江見水蔭により調査されたのを初めとし、近年の調査の成果から縄文時代の後・晩期にわたって馬蹄形に形成された、ヤマトシジミを主とする貝塚遺跡であることが判明している。このように、霞ヶ浦周辺は、縄文時代を中心とした遺跡の宝庫である。

先土器時代の遺跡は、県内において90遺跡ほど報じられている。⁽⁶⁾土浦市においては、10か所の遺跡が確認されており、昭和61年に調査された⁽⁷⁾向原遺跡では、ナイフ形石器・石核・磨石等が報告されている。その他、⁽⁸⁾宮脇遺跡、いさろ遺跡からポイントやスクレーパーが表採されている。

縄文時代になると、146か所の遺跡が確認され、早期では、当教育財団が昭和62年に手野町で調査した⁽⁹⁾ゴリン山・⁽¹⁰⁾原ノ内遺跡・⁽¹¹⁾真木ノ内遺跡があり、原ノ内遺跡からは早期の屋外炉2基と田戸下層式の土器片が出土している。当遺跡の周辺では、⁽¹²⁾根鹿西遺跡<18>で茅山式土器が採集されている。前期では、前述の向原遺跡があり、黒浜式期の住居跡1軒が検出されている。中期では、住居跡やフラスコ状土坑が多数検出されている⁽¹³⁾木田余台遺跡があり、当遺跡周辺においても⁽¹⁴⁾裏山遺跡<52>、⁽¹⁵⁾中都遺跡<53>、⁽¹⁶⁾西原遺跡<42>において土器の散布が確認されている。後・晩期になると、前述の上高津貝塚の他、昭和54年に土浦市教育委員会により調査された⁽¹⁷⁾池の台遺跡があり、地点貝塚も伴っている。

弥生時代の遺跡は、土浦市全体としては少なくなるが、天の川流域においては、増加している。代表的な遺跡として後期後半の県南地域の土器である「上稲吉式」の標式遺跡である⁽¹⁸⁾千代田町上稲吉西原遺跡<35>がある。⁽¹⁹⁾上稲吉西原遺跡は、当教育財団により、昭和53年に調査された遺跡であり、A・B地区合わせて10軒の弥生時代の住居跡が検出されている。出土土器は、これまで霞ヶ浦周辺地域で何例か知られていた、口縁部に貼瘤、頸部下半に無文帯がみられる土器が主体を占めていた。これらの土器群は既存の土器型式にはなかったもので、しかもその分布も知られるようになってきたことから、「上稲吉式」の設定がなされたのである。⁽²⁰⁾原田北・原田西遺跡と上稲吉西原遺跡は近接しており、天の川に沿ってかなりの数の集落が存在したことがうかがえる。この他の天の川流域の遺跡としては、⁽²¹⁾右岸地域に土浦市吹上坪遺跡<16>、⁽²²⁾根鹿北遺跡<17>、⁽²³⁾根鹿西遺跡<18>、⁽²⁴⁾西原遺跡<42>などがあり、⁽²⁵⁾左岸地域に新治村永井寄居遺跡<3>、⁽²⁶⁾談所前



第1図 原田北・原田西遺跡周辺遺跡分布図

遺跡<11>、^{かしまじんじやまゑ}鹿島神社前遺跡<13>、^{いじま}飯島遺跡<29>、^{いづみまゑ}泉前遺跡<27>、^{みしまうしろ}三島後遺跡<15>等がある。

古墳時代の遺跡としては、市指定の^{おうづか}王塚古墳と^{きさきづか}后塚古墳が霞ヶ浦を望む手野町台地上に存在する。后塚古墳は、全長55mの前方後方墳で、王塚古墳は柄鏡形の前方後円墳で約90mを測る。両者ともに外表施設の埴輪が確認されず、埴輪出現以前の様相を持つことなどにより、4世紀末頃のものとなっている。おそらくは、后塚古墳から王塚古墳へと続いていく桜川下流域を治めていた初期の首長墳と考えられる。当遺跡の周辺では、天の川右岸台地上に^{あたごやま}愛宕山古墳群<48>が存在する。愛宕山古墳群は「2基の前方後円墳と約20基の円墳とからなる」とされている。盟主墳とされる愛宕山古墳は全長約50m、高さ約5mで、地主の久家重中氏宅にはかつて盗掘された際に発見したという人物埴輪及び円筒埴輪の破片が保管されている。愛宕山古墳群の東側には、小谷を挟んで全長約50mの前方後円墳と推定される^{はちまんじんじや}八幡神社古墳<46>が存在し、本遺跡周辺は古墳時代においても一中心地域となっていたことをうかがわせる。周辺の集落跡としては、^{おおかど}大門遺跡<26>、

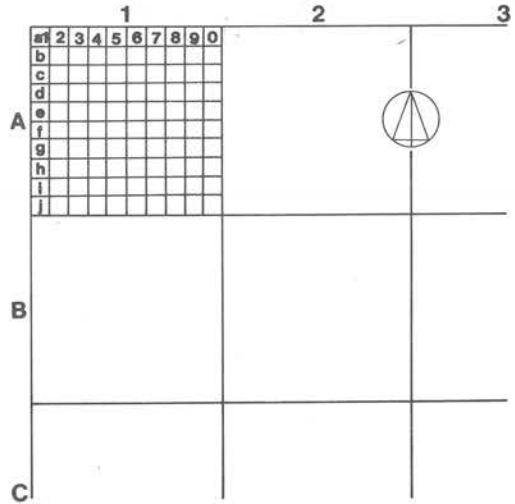
表1 原田北遺跡・原田西遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	遺 跡 の 時 代					図中 番号	遺 跡 名	遺 跡 の 時 代				
		縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降			縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降
1	永井寄居須恵窯跡				○		29	永井飯島遺跡	○	○	○	○	
2	永井能西寺瓦谷遺跡			○	○		30	ろくろうじ古墳			○		
3	永井寄居遺跡	○	○	○			31	堂原古墳群			○		
4	本郷宮後遺跡		○	○			32	吉兵衛屋敷古墳			○		
5	本郷南前・五量遺跡		○				33	下佐谷遺跡				○	
6	本郷原山古墳群			○			34	中佐谷遺跡			○		
7	本郷下川遺跡			○	○		35	上稲吉西原遺跡		○	○		
8	永井腰当遺跡			○	○		36	中佐谷南遺跡	○		○		
9	永井館跡					○	37	西田古墳群			○		
10	永井馬場後遺跡			○	○		38	原山A遺跡	○				
11	永井談所前遺跡		○	○			39	原山B遺跡	○				
12	永井中妻遺跡	○	○	○			40	御手洗古墳群			○		
13	永井鹿島神社前遺跡		○	○			41	下田原遺跡			○	○	
14	永井柵遺跡			○	○		42	西原遺跡	○	○			
15	永井三島後遺跡	○	○				43	原出口遺跡		○	○		○
16	吹上坪遺跡			○			④④	原田北遺跡	○	○	○	○	○
17	根鹿北遺跡		○	○			④⑤	原田西遺跡	○	○			
18	根鹿西遺跡	○	○	○			46	八幡神社古墳			○		
19	吹上片蓋古墳群			○			47	愛宕山古墳			○		
20	兵伏塚					○	48	愛宕山古墳群			○		
21	永井芥田西遺跡			○	○		49	今泉古墳			○		
22	永井十三塚遺跡			○	○		50	今泉城跡					○
23	細内遺跡			○	○		51	永井内田遺跡		○	○	○	
24	塙台遺跡			○	○		52	裏山遺跡	○				
25	登戸遺跡			○			53	中都遺跡	○		○		
26	大門遺跡			○			54	西山遺跡	○		○		
27	永井泉前遺跡		○	○	○		55	板谷遺跡			○		
28	永井唐崎遺跡			○	○		56	西後遺跡				○	

第3章 調査方法

第1節 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、原田北遺跡においては、X軸（南北）15,160m、Y軸（東西）32,600m、原田西遺跡においては、X軸14,800m、Y軸32,560mの交点を基準とし、この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。



第2図 調査区呼称方法概念図

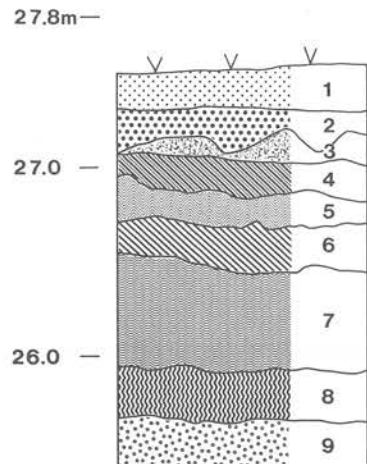
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区において北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、小調査区の名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1」「B2b2」のように呼称した。

第2節 基本層序の検討

1 原田北遺跡

原田北遺跡の中央部、G6c9区内にテストピットを設定し、土層を観察した。

第1層は表土（耕作土）で、20～25cmほどの厚さを有し、ローム粒子、炭化粒子を微量含む締まりの弱い黒褐色土である。第2層は15～25cmの厚さを有し、ローム粒子を少量含む暗褐色土であるが、耕作による攪乱を受けている。第3層は、5～15cmの厚さを有するローム粒子を少量含む褐色土で、ソフトローム層への漸移層である。第4層は15～25cmの厚さを有するソフ



第3図 原田北遺跡基本土層図

トローム層であり、明褐色を呈している。第5層は20cm前後の厚さを有し、ローム粒子を多量に、ロームブロックを中量含み粘性がややある明褐色土で、ソフトローム層とハードローム層を分ける鍵層となるものである。第6層は20～30cmの厚さを有し、明褐色を呈するハードローム層であるが、第4層より色調が暗い。第7層は50cm前後の厚さを有し、黄橙色の鹿沼パミスを微量含む明褐色土である。第8層は橙色、第9層は黄橙色を呈するハードローム層であり、極めて締めりのある層である。

原田北遺跡の遺構の多くは、第4層のソフトローム層を掘り込んで構築されているが、第1号溝のように、ハードローム層に達する例もみられる。

2 原田西遺跡

原田西遺跡のテストピットは、調査区のほぼ中央部、A5e₆区に設定し、土層を観察した。

第1層は表土で25～40cmの厚さを有し、木根が多い締めりの弱い暗褐色土である。第2層は15cm前後の厚さを有し、ローム粒子を少量含みやや締めりのある褐色土であり、一部木根による攪乱を受けている。第3層は30cm前後の厚さを有し、ローム粒子を少量含む締めりのある暗褐色土である。第4層は50cm前後の厚さを有するソフトローム層であり、明褐色を呈する。第5層は30～40cmの厚さを有し、ローム粒子を中量含み、締めり・粘性ともにあるにぶい褐色

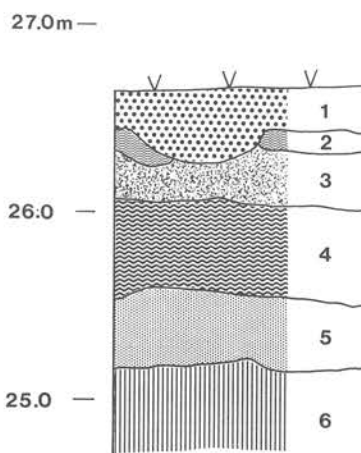
を呈する土層であり、この層により、ソフトローム層とハードローム層に分けられる。第6層は橙色を呈するハードローム層であり、粘土も少量含み、硬く締めりがある。

原田西遺跡の遺構は、第4層の上面で確認されており、竪穴住居跡は第4層から第5層を掘り込んでいる。溝では、第6層まで掘り込まれているものもある。

第3節 遺構確認

原田北遺跡、原田西遺跡の調査前の状況は平地林や畑地であり、両遺跡の畑地からは、弥生式土器片が採集されていることから、弥生時代を中心とした遺構の存在が予想された。

両遺跡の遺構確認は、次のような方法で実施した。まず、調査区域全域にグリッドを設定し、調査面積の16分の1、次いで8分の1の割合で試掘を行い、遺構の確認を試みた。その結果、弥生式土器片や土師器の破片が出土し、住居跡や土坑と思われる落ち込みが確認された。表土の厚



第4図 原田西遺跡基本土層図

さは30～130cmであることも判明した。この試掘結果をふまえ、調査区域全面の重機による表土除去を実施した。その後、遺構確認作業を行い、原田北遺跡においては、住居跡96軒、土坑133基、火葬墓2基、溝3条、炭焼窯10基、遺物包含層2か所などを確認した。原田西遺跡では、住居跡12軒、土坑97基、溝2条、遺物包含層1か所などを確認した。

第4節 遺構調査

原田北遺跡、原田西遺跡における遺構調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、平面プラン確認後、遺構の中央部で直交するように土層観察用ベルトを2本設定して四分割し、それぞれを掘り込む「四分割法」で実施した。それぞれの地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は、長径方向で二分割して掘り込む「二分割法」で実施した。溝の調査は、長さに応じて数か所の土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。

土層については、色調、含有物の多少・大小、粘性、締まり具合等を観察して、分類の基準とした。色相については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社発行）を使用して観察記録した。

遺物は、現位置を保って遺構を掘り下げた後、住居跡、土坑、溝等の名称と出土地区の名称、取り上げ番号、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は、水系方眼地張り測量で行い、土層断面や遺構断面の実測は、標高をもとに、水平にセットした水系を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが、炉や部分的な微細図については、10分の1の縮尺で作成した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。遺構番号は、調査順に付していった。

第4章 遺構・遺物の記載方法

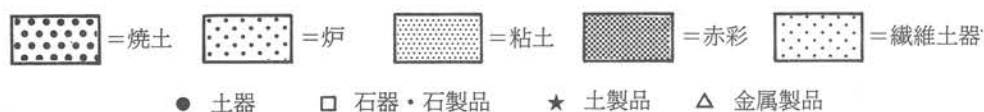
第1節 遺構の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下のとおりである。

(1) 使用記号

名称	住居跡	土坑	溝	炭焼窯	ピット	土器	土製品	石器・石製品	金属製品	拓本土器
記号	S I	SD	SK	SY	P ₁ ~	P	DP	Q	M	TP

(2) 遺構・遺物の実測図中の表示



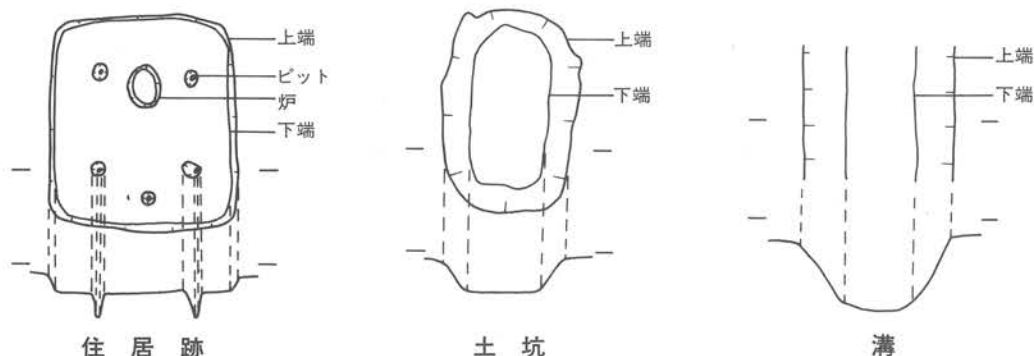
(3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別毎、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。また、整理の過程で新たに番号を付したものについては、旧番号を（ ）内に表示した。

(4) 土層の分類

土層観察における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し、図版実測図中に記載した。攪乱層については「K」と表記した。

(5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



- ① 各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図を2分の1に縮小し、トレースして版組し、それをさらに2分の1に縮小して掲載することを基本とした。
- ② 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。

③ 本文中の記載について

- 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記した。
- 「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
 方形（短軸：長軸=1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸=1：1.1以上のもの）
- 「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸（径）、短軸（径）をm単位で表記した。壁高は、残存壁高の計測値である。（ ）を付したものは現存値を示す。
- 「長軸方向」は、炉をとおる長径を長軸とし、その長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。
- 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直、65°～80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに90°以上を内傾とした。
- 「壁溝」は、その形状や規模を表記した。規模は床面からの計測値とした。
- 「床」は、傾斜や床質等を表記した。
- 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P₁、P₂はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径、深さを示した。
- 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。
- 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態等を記録した。
- 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6) 表の見方

①住居跡一覧表

住居跡 番号	位 置	長軸方向	平 面 形	規 模		床面	柱穴数	炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)						

- 位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 長軸方向は、座標北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。
 (例 N-10°-E, N-10°-W) なお、[] を付したものは推定である。
- 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形及び長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
 方形（短軸：長軸=1：1.1未満のもの） 長方形(短軸：長軸=1：1.1以上のもの)
- 規模の欄の長軸・短軸は、上端の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。

- 床面は、平坦、凹凸、皿状及び緩い起伏に分類して表記した。
- 柱穴数は、平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。
- 炉は、その数を記した。
- 覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為堆積のものは「人為」と表記し、不明のものは空欄とした。
- 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と、出土土器片の数を記した。
- 備考は、重複関係等について記した。

②土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					

- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土坑でないとは判断したものは欠番とした。
- 平面形は、掘り込み上面の形状を記した。
円形（短径：長径=1：1.1未満のもの） 楕円形（短径：長径=1：1.1以上のもの）
- 規模の欄の長径及び短径は、上端部の計測値(m)で表した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。
- その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

第2節 遺物の記載方法

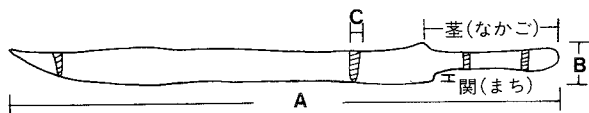
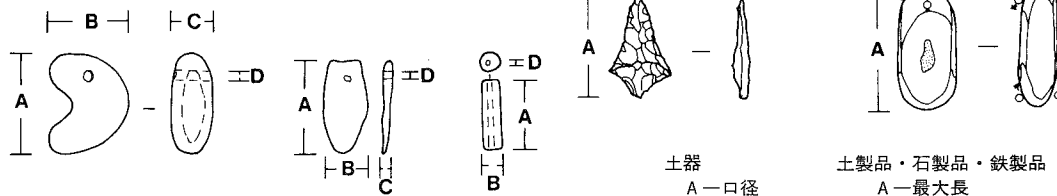
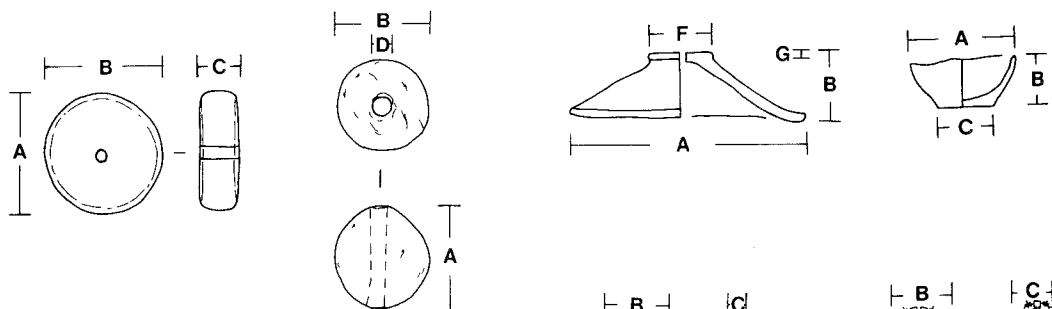
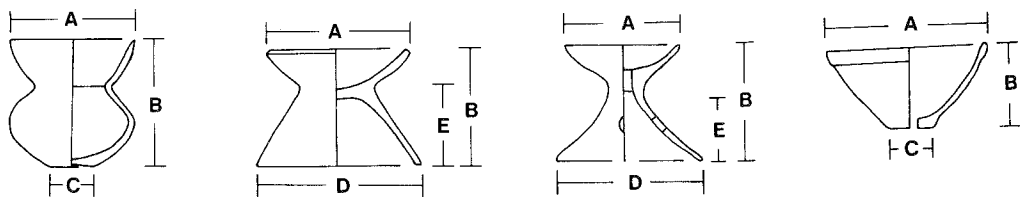
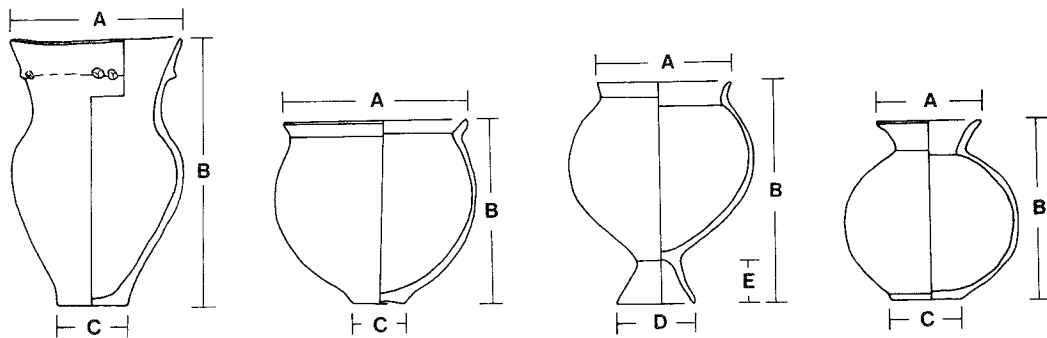
(1) 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

- ①土器の実測図は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- ②土器拓影図は、右側に断面を図示した。
- ③遺物は、原則として実測図をトレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより、異なる場合もある。

(2) 表の見方

①出土土器観察表



土器

- A—口径
- B—器高
- C—底径
- D—脚部径
- E—脚部高
- F—つまみ径
- G—つまみ高

土製品・石製品・鉄製品

- A—最大長
- B—最大幅
- C—最大厚
- D—孔径
- 磨りの範囲
- 敲きの範囲

ア. 弥生式土器

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考

イ. 土師器

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○法量は、A—口径 B—器高 C—底径 D—脚部径 E—脚部高 F—つまみ径 G—つまみ高 単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。

○胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調及び焼成の順で記した。色調については、前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については、良好、普通及び不良に分類し、焼き締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。

○備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

②土製品観察表

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					

○図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○法量の欄で、()を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

○備考は、遺物の特記すべき内容について記載した。

③石器・石製品観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

○図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○法量の欄で、()を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

○備考は、遺物の特記すべき内容について記載した。



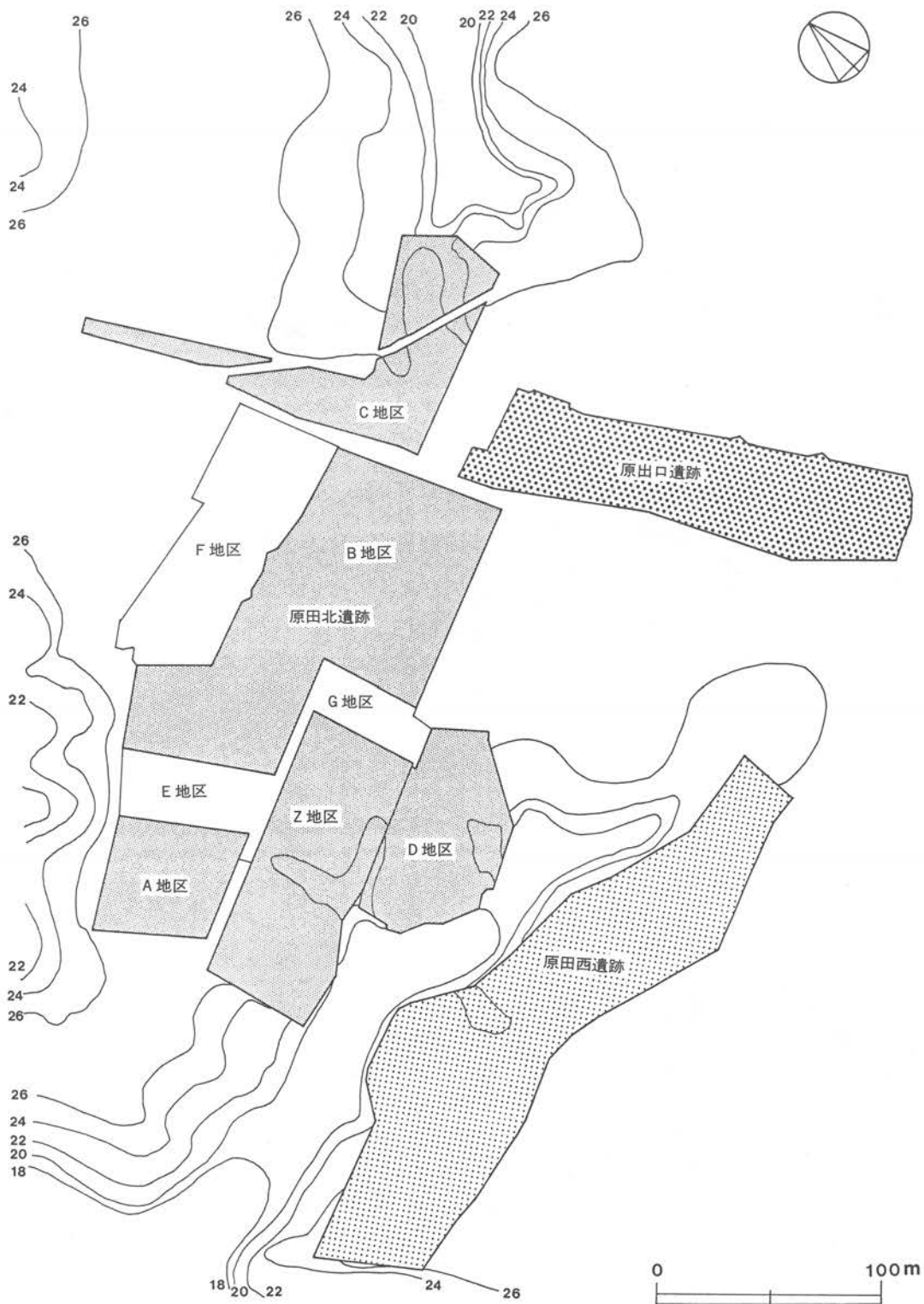
遺跡見学



作業風景



伐開風景



第5図 原田北・原田西遺跡調査区

第5章 原田北遺跡 I

第1節 遺跡の概要

原田北遺跡は、土浦市の北端部に位置し、遺跡の所在する新治台地北西部は、標高23～26mの平坦な台地で、畑地や山林として利用されている。当遺跡の北側には、天の川の低地があり、その低地は水田として利用されている。当遺跡の西側からは小支谷が樹枝状に入り込み、周辺は複雑な地形となっている。当遺跡には弥生式土器片や土師器片が散布しており、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡として確認されていた。

平成2年度の調査区（Z地区とする）は遺跡の中央部から南西部に位置する。平成3年度の調査区は4地区に分かれており、A地区は遺跡の中央部から西部に、B地区は中央部に、C地区は北東部に、D地区は南部に位置する。

調査面積は、Z地区6,814m²、A地区3,056m²、B地区12,984m²、C地区5,863m²、D地区3,953m²の計32,670m²である。

今回の調査によって検出された遺構は、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡96軒、土坑124基、溝3条、方形周溝状遺構1基、火葬墓2基、炭焼窯10基、遺物包含層2か所である。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物包含層の下層からは縄文時代草創期と考えられる有舌尖頭器、土器片などが出土し、その上層から早期の井草式、田戸下層式土器などの土器片を層位的にとらえている。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡67軒で、調査区全域から検出されている。時期はすべて後期後半のものである。5～6軒に1軒の割合で床面積30m²以上の住居跡が検出されている。形状は隅丸長方形や隅丸方形のものが多い。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡が遺跡西部のA地区とB地区西部に集中して29軒検出されている。中期（和泉期）のものが中心であり、形状は方形を呈しているものが多い。床面積64m²以上のものが6軒あり、最大のものは約136m²である。

奈良・平安時代の遺構としては、火葬墓がZ地区東部において2基検出されている。

炭焼窯は、古銭・陶器片などの出土遺物から江戸時代以降のものと思われる。

遺物は遺物収納箱（60×40×20）cmで186箱ほど出土している。縄文式土器は早・前期の土器が中心であり、おもに遺物包含層から出土している。住居跡からは、壺・甕・高坏など弥生式土器、及び壺・甕・高坏・坩などの土師器が比較的多量に出土している。その他、紡錘車・土錘等の土製品、磨製石斧・石鏃などの石器、円形・剣形などの石製模造品、直刀・鉄鏃などの鉄製品も出土している。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡からは96軒（弥生時代後期67軒，古墳時代前・中期29軒）の竪穴住居跡が検出されている。弥生時代の住居跡は小谷に囲まれた遺跡の所在する台地に広がって検出され，古墳時代の住居跡は遺跡西部の台地中央部に集中して検出されている。これらの住居跡は重複し合っているものは少なく，遺構の遺存状態は比較的良好である。以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

(1) 弥生時代の竪穴住居跡

第1号住居跡（第6図）

位置 Z地区南東部，B5j区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.50m，短軸5.55mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-33°-W。

壁 壁高は27～38cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉周辺は踏み固められ硬い。

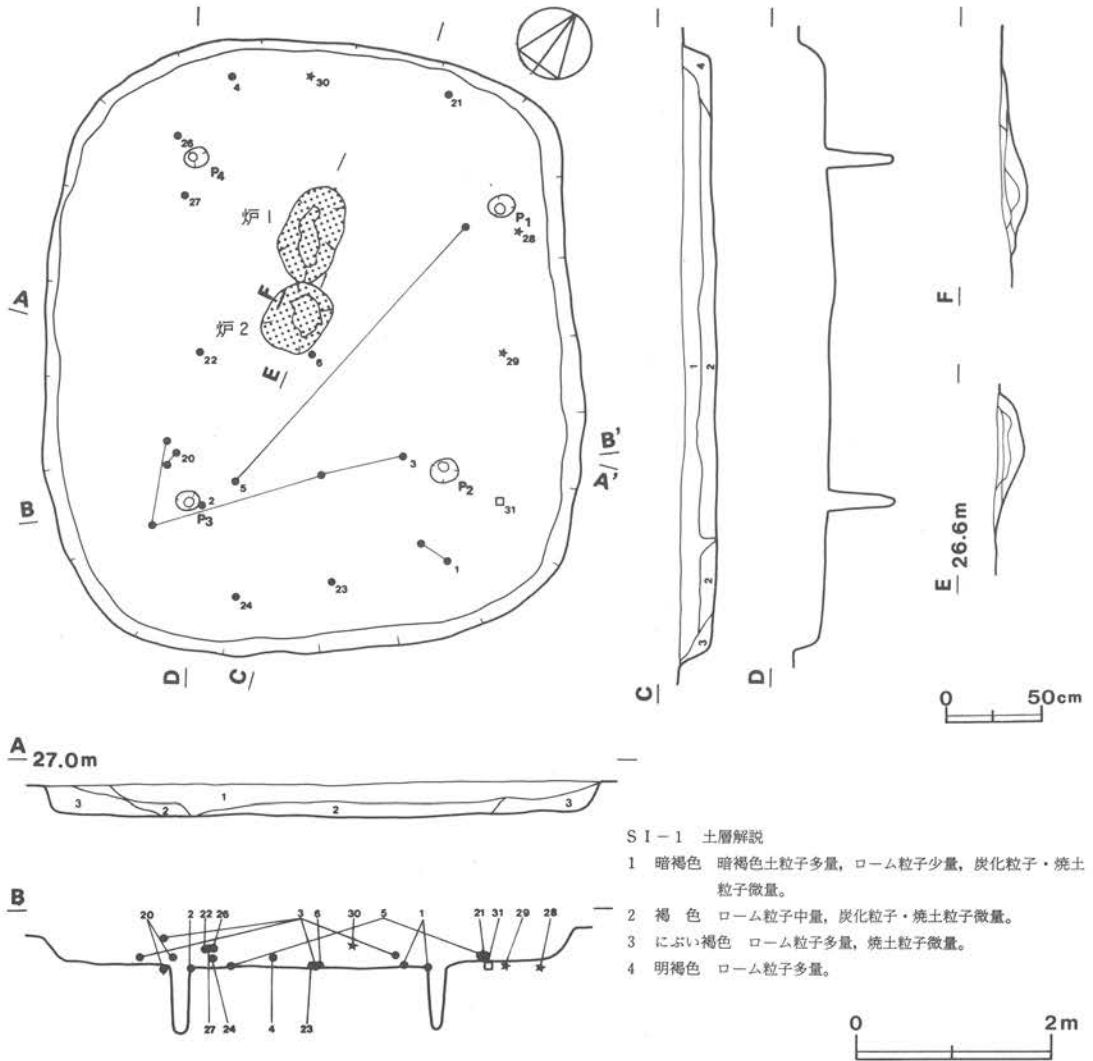
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は長径26～36cm，短径20～28cmの楕円形を呈し，深さ68～70cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに2か所（炉₁・炉₂）検出されている。炉₁は中央から北西壁寄りに位置している。平面形は長径106cm，短径60cmの楕円形を呈し，床面を13cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。炉₂は炉₁の南側に位置している。平面形は長径75cm，短径62cmの楕円形を呈し，床面を14cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が焼土化（赤変はしているが，さほど硬化していないもの）している。

覆土 暗褐色土・褐色土が厚く堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 全体に散乱したような状態で，覆土下・中層を中心に弥生式土器片（広口壺6），弥生式土器細片（381点）が出土している。その他，覆土上層から流れ込みと思われる土師器細片（34点）小礫が出土している。1の広口壺は東コーナー付近の床面から横位の状態で，2の広口壺は南コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。3の広口壺は中央部からやや南寄りの床面から出土したものと，覆土中・上層から出土したものとが接合されている。4は広口壺の胴部片であり，北西壁付近の覆土下層から出土している。28の紡錘車は北コーナー付近の床面から，29の紡錘車は北東壁際の床面から，30の勾玉は北西壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。

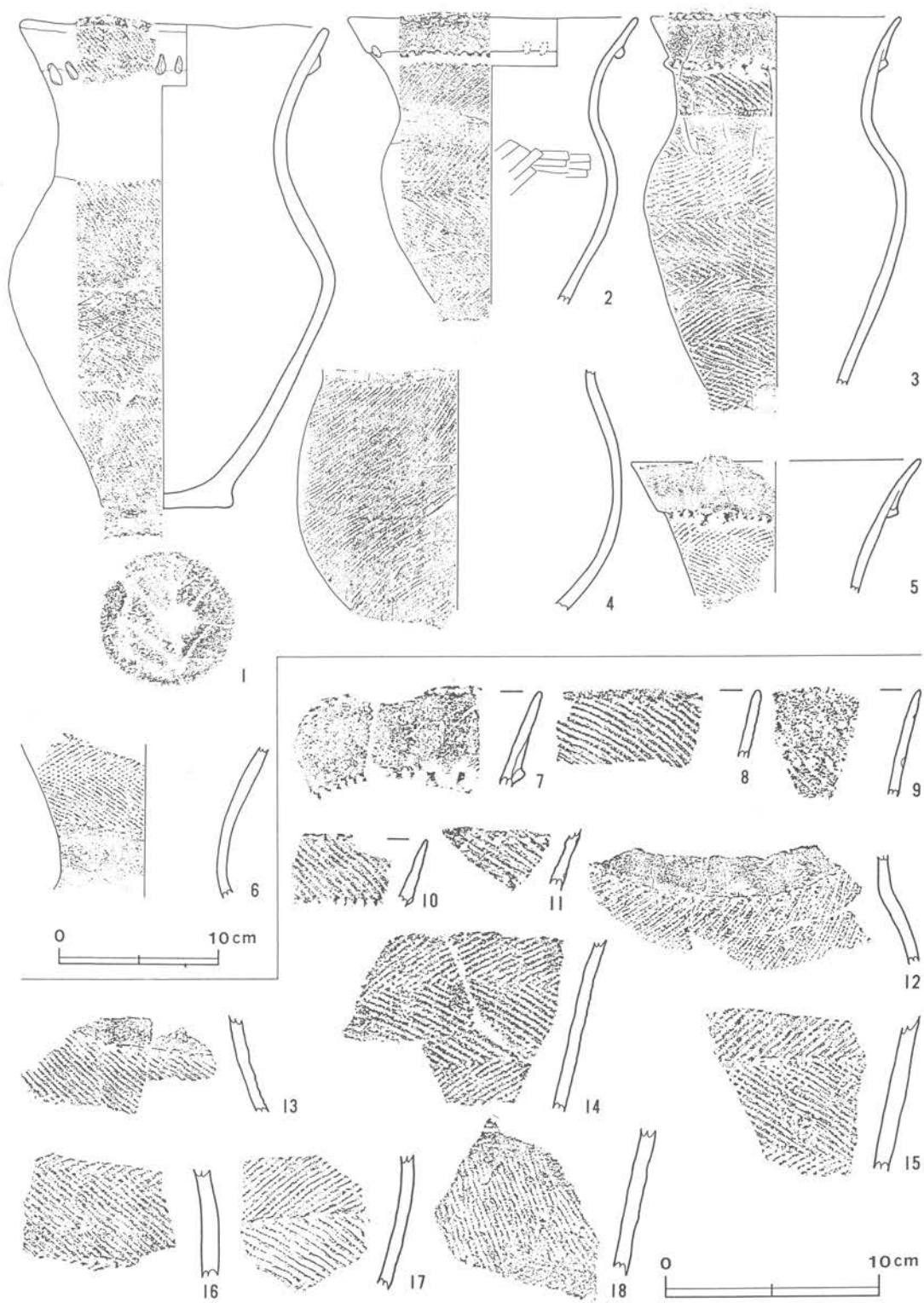
所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第6図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	広口壺 弥生式土器	A 19.3 B 30.6 C 8.2	平底でわずかに張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。胴部上位に最大径を持つ。口唇部と薄い複合口縁上にも縄文が施されており、口縁下端には2個1組の瘤が7単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯としそれ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P1 90% 東コーナー付近床面 外面スス付着
2	広口壺 弥生式土器	A 18.0 B (17.9)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反する。口縁に最大径を持ち、口唇部にも縄文が施されている。無文の複合口縁下端には2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。内面は口縁部横ナデ、胴部下半は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙赤褐色 普通	P2 70% 南コーナー付近床面



第7図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第7図 3	広口壺 弥生式土器	A 15.6 B (23.2)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては緩やかに外反する。胴部上位に最大径を持ち、口唇部には縄文が施されている。無文の複合口縁下端には縄文原体による押圧がなされ、2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。口縁部内面には軽い横ナデが施されている。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 3 60% 中央から南寄り床面 内・外面スス付着
4	広口壺 弥生式土器	B (15.1)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がっている。頸部下半を無文帯とし、最大径は胴部中位に持つ。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとっていない。	砂粒・長石・石英・ 雲母 明赤褐色 普通	P 4 30% 北西壁付近覆土下層
5	広口壺 弥生式土器	A [18.1] B (8.4)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部には縄文が施されている。無文の複合口縁下端にも縄文原体による押圧がなされ、2個1組の瘤が貼られている。頸部以下には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P 5 15% 南部覆土下層
6	広口壺 弥生式土器	B (9.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は内彎し、口縁部は緩やかに外反している。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部上半の縄文は羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P 6 15% 中央部床面

第7・8図7～27は、第1号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～11は口縁部片である。7は無文の複合口縁で下端には縄文原体による押圧がなされている。8は縄文施文の単口縁を呈している。9・11は縄文施文の単口縁で、原体による刺突が2列横位に施されている。10は縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下端は縄文原体による押圧がなされている。12・13は頸部片で、頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。14～19は胴部片で、いずれにも縄文が施されている。18の原体は単節であるが、14～17、19は附加条1種(附加2条)である。14～17は羽状構成をとっている。20～27は底部片である。22以外には縄文が施されている。原体は、27は単節、20・21、23～26は附加条1種(附加2条)である。22・23・25は木葉痕を持つ。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第8図 28	紡錘車	4.0	4.0	2.1	5.0	38.4	100	床面	DP 1
29	紡錘車	4.0	4.0	1.7	5.0	(32.9)	98	床面	DP 2
30	勾玉	3.9	2.1	1.6	4.0	17.8	100	覆土中層	DP 3

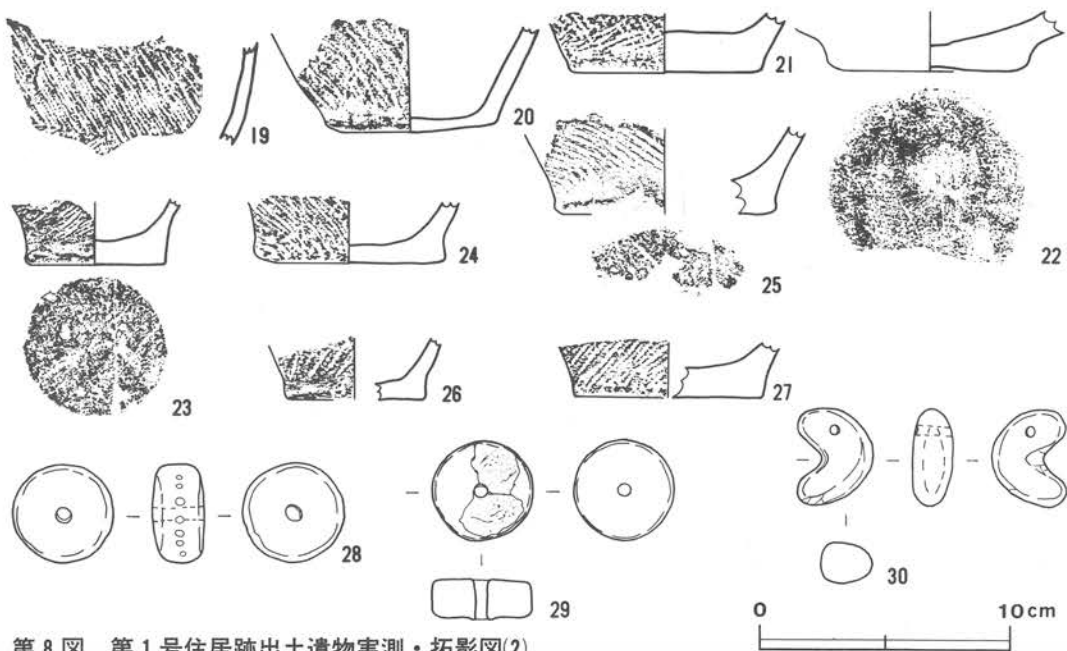
第3号住居跡(第9図)

位置 Z地区の東部、B4h₉区を中心に確認されている。

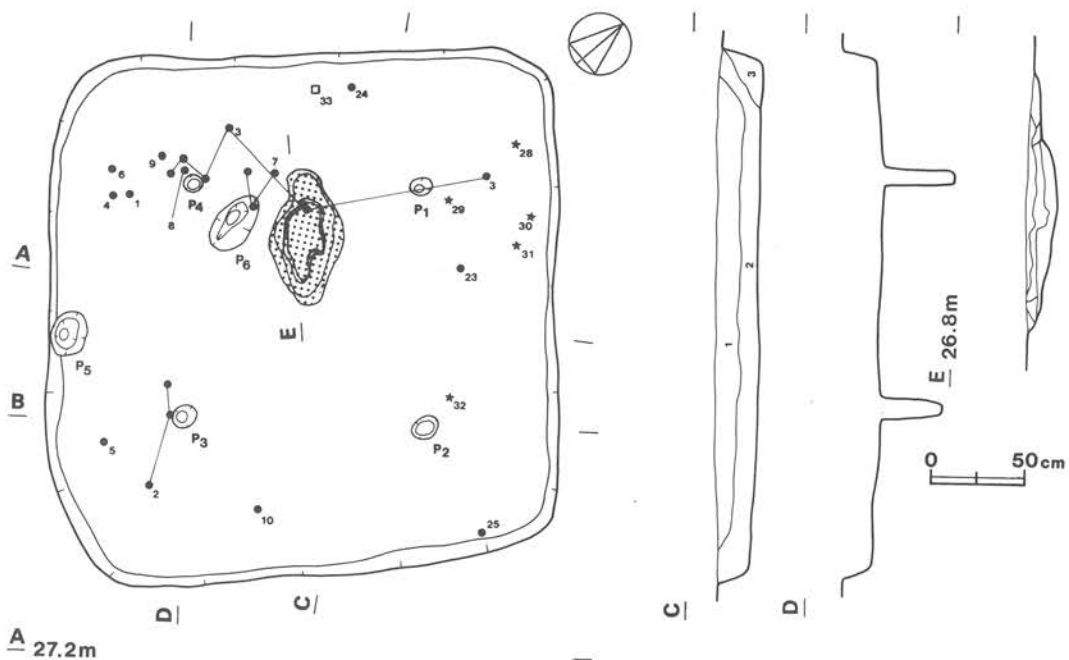
規模と平面形 長軸5.54m、短軸5.32mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-55°-W。

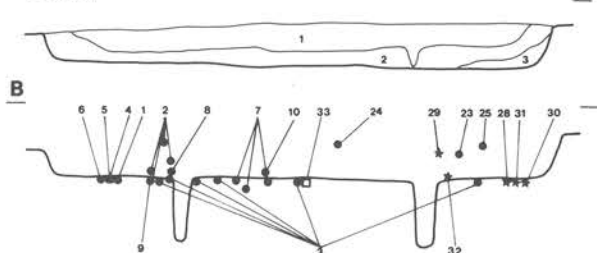
壁 壁高30～49cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。



第8図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



A 27.2m

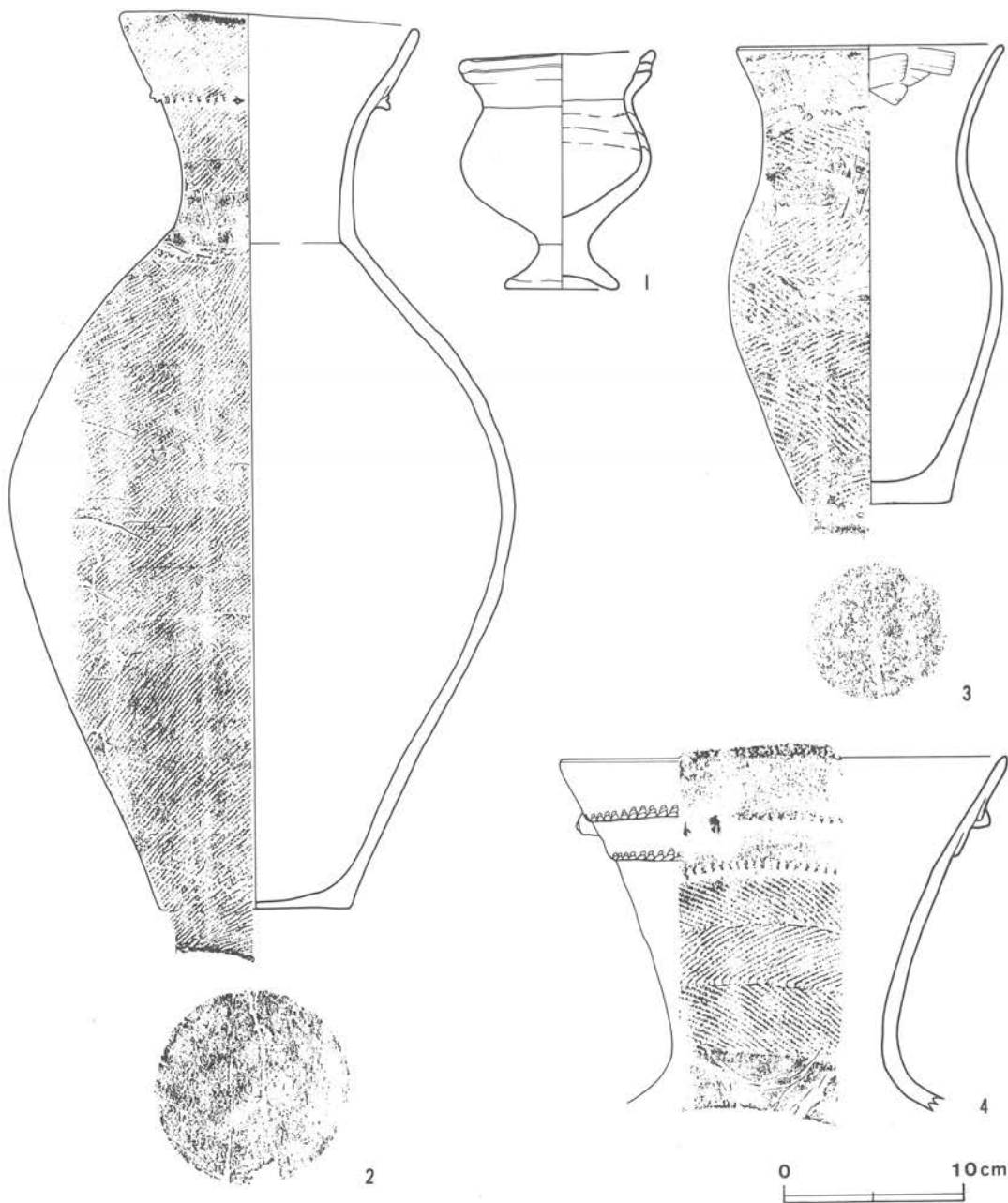


S1-3 土層解説

- 1 暗褐色 暗褐色土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。

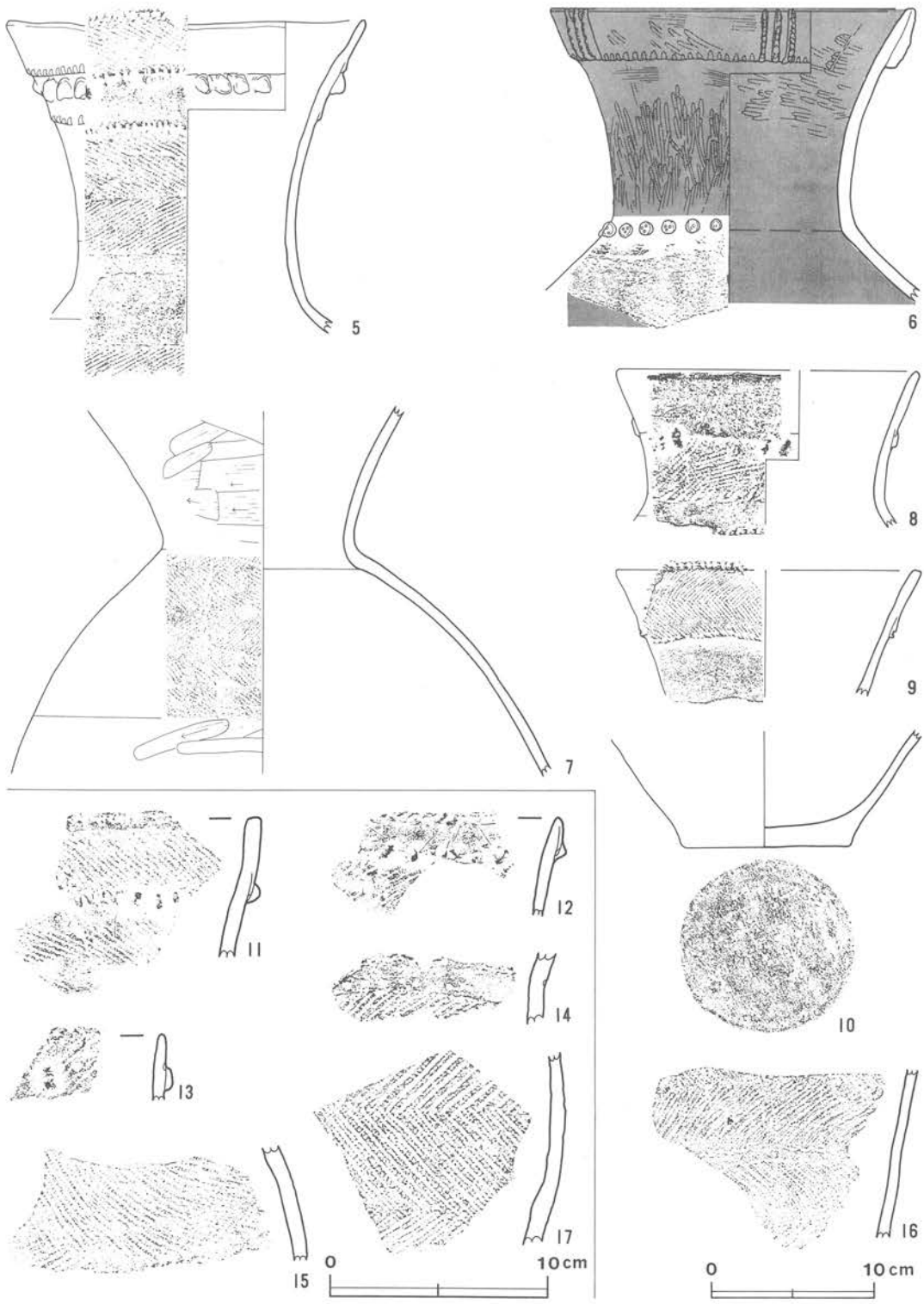
0 2m

第9図 第3号住居跡実測図



第10図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

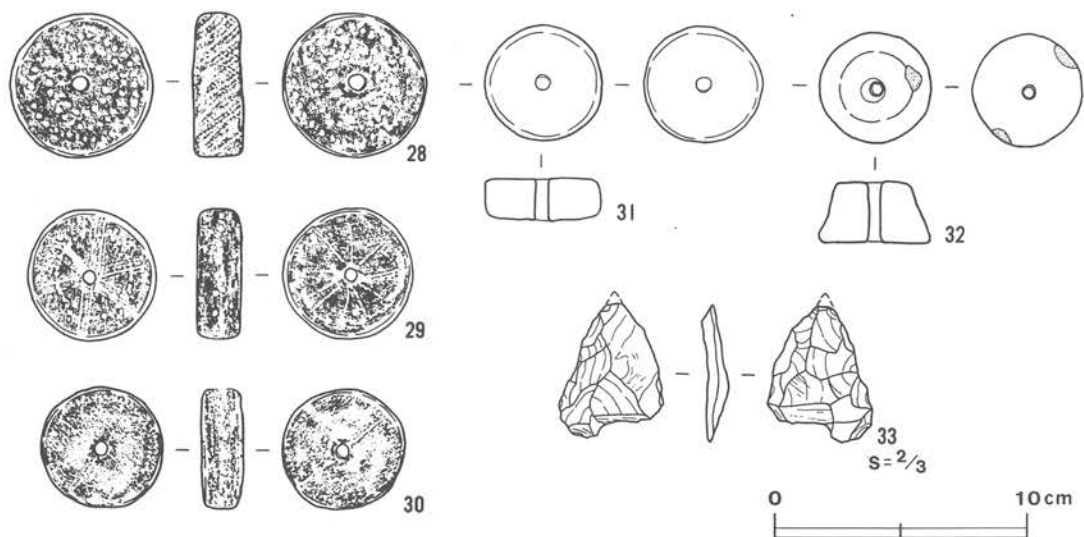
床 南部の一部に凹凸があるが、他の部分はほぼ平坦である。特に、炉周辺は踏み固められ硬い。
 ピット 6か所 ($P_1 \sim P_6$) 検出されている。 $P_1 \sim P_4$ は長径24~34cm, 短径17~25cmの楕円形を呈し、深さ66~80cmで支柱穴と思われる。支柱穴を結んだ線は一辺2.6mの方形となる。 P_5 は長径46cm, 短径37cmで楕円形を呈し、深さ38cmで南西壁中央付近に検出されており、貯蔵穴の可能性はある。 P_6 は炉の西側に位置しており、長径70cm, 短径38cmで楕円形を呈し、深さ12cmであり、性



第11图 第3号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)



第12图 第3号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)



第13図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図(4)

格は不明である。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。長径142cm，短径77cmの楕円形を呈し，床面を17cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け，赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 住居跡の床面や覆土下・中層からは弥生式土器片(台付甕1，壺1，広口壺8)，弥生式土器細片(1,222点)が出土している。その他，覆土中・上層から流れ込みと思われる土師器細片(122点)・縄文式土器片(5点)が出土している。1は小形の台付甕で，西コーナー付近の床面から横位の状態で出土している。2は大形の広口壺で，南コーナー付近の床面からの出土しているが，覆土中・上層から出土した破片とも接合されている。3は小形の広口壺で，西コーナー付近の床面から出土しており，覆土下層から出土したいくつかの破片と接合されている。4の広口壺は6の南関東系の装飾壺とともに下半部を欠損しているが，2つ並んで正位の状態で西コーナー付近の床面から出土している。5の広口壺は下半部を欠損しているが，南コーナー付近の床面から出土している。28～32の紡錘車は北東壁際の床面から出土しているが，29は覆土中層から出土している。33の石鏃は北西壁際の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	台付甕 弥生式土器	A 10.9 B 13.6 D 6.3 E 2.5	脚部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がり，最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外傾している。口縁部は内・外面とも軽く横ナデされている。口縁部中位に小孔が1対穿たれている。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P24 100% 西コーナー付近床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第10図 2	広口壺 弥生式土器	A 16.8	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。胴部ほぼ中位に最大径を持つ。口唇部、複合口縁上にも縄文が施されている。口縁下端は縄文原体の圧痕が施されるほか、2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・スコリア 淡黄色 普通	P25 70% 南コーナー付近床面
		B 51.1			
		C 10.8			
3	広口壺 弥生式土器	A 14.9	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。胴部やや上位に最大径を持つ。無文の薄い複合口縁を呈するが、貼瘤を持たない。口縁下端には、棒状工具による刺突が施されている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒 におい橙色 一部赤褐色 普通	P26 80% 西コーナー付近床面 外面スス付着
		B 26.2			
		C 8.5			
4	広口壺 弥生式土器	A 25.0	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。口唇部には縄文が施されているが、2段の複合口縁上は無文である。口縁下端には縄文原体による圧痕が施されている。1段目の下端には2個1組の瘤が、6単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、頸部上半の縄文は羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P27 30% 西コーナー付近床面
		B (20.0)			
第11図 5	広口壺 弥生式土器	A 21.8	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反して立ち上がる。2段の複合口縁を呈し、1段目には縄文が施され、下端には棒状工具によるキザミ目が施されている。2段目の上部には4個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。2段目と頸部下半は無文で、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。1段目は縦回転による、頸部上半は横回転による羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P28 30% 南コーナー付近床面
		B (19.6)			
6	壺 弥生式土器	A 22.3	口縁部から頸部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては、僅かに外反して立ち上がる。やや幅広い複合口縁を呈し、3本1組の棒状浮文が5単位にわたり貼られている。口縁下には木目痕を有するキザミ目が施されている。頸部は無文帯とし、下端にはボタン状の貼付けが周回している。肩部には帯状に網目状燃糸文が施されている。網目状燃糸文施文部以外はヘラ磨き後に赤彩されている。	砂粒・長石・雲母 におい黄橙色 普通	P29 30% 西コーナー付近床面 内面剝離
		B (18.2)			
7	広口壺 弥生式土器	B (22.7)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。頸部と胴部下半を無文帯とし、肩部には羽状に単節縄文が施されている。頸部と胴部下半の無文帯の部分は横位にハケ目整形されている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P30 30% 中央からやや西寄り床面
8	広口壺 弥生式土器	A [18.6]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反している。口縁部は無文の薄い複合口縁を呈し、下端には2個1組の瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には木めの単節縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P31 5% 西コーナー付近覆土下層
		B (9.5)			
9	広口壺 弥生式土器	A [18.6]	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾して立ち上がる。縄文施文の薄い複合口縁を呈し、口唇部・口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口縁下と頸部上位には刺突文が施され、頸部は無文帯としている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P32 10% 西コーナー付近床面
		B (7.8)			
10	広口壺 弥生式土器	B (6.9)	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。底面には木葉痕を持つ。外面は無文でナデ整形。内面は軽くヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P33 10% 南コーナー付近覆土下層
		C 10.2			

第11・12図11～27は、第3号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11～13は口縁

部片である。11は附加条1種（附加2条）の縄文が施文される複合口縁を呈し、下端には縄文原体によるキザミ目が施され、瘤が3個貼られている。12は無文の複合口縁を呈し、下端には瘤がほぼ等間隔に貼られている。13は縄文施文の単口縁を呈し、瘤が貼られている。14は頸部片であり、頸部下半を無文帯としている。15～22は胴部片であり、いずれにも附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、15～20、22は羽状構成をとっている。23～27は底部片であり、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第13図 28	紡 錘 車	5.8	5.7	2.0	6.0	78.7	100	床 面	D P 16
29	紡 錘 車	5.3	5.2	1.8	5.0	58.2	100	覆 土 中 層	D P 17
30	紡 錘 車	4.8	4.8	1.7	6.0	44.5	100	床 面	D P 18
31	紡 錘 車	4.7	4.7	1.7	6.0	41.9	100	床 面	D P 19
32	紡 錘 車	4.4	4.4	2.4	5.5	(47.3)	98	床 面	D P 20

図版番号	器種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第13図 33	石 鏃	(2.7)	2.1	0.4	(1.8)	チャート	床 面	Q 4

第4号住居跡（第14図）

位置 Z地区東部，B4f7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.28m，短軸5.23mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-51°-W。

壁 壁高48～55cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で，全体に踏み固められ硬い。

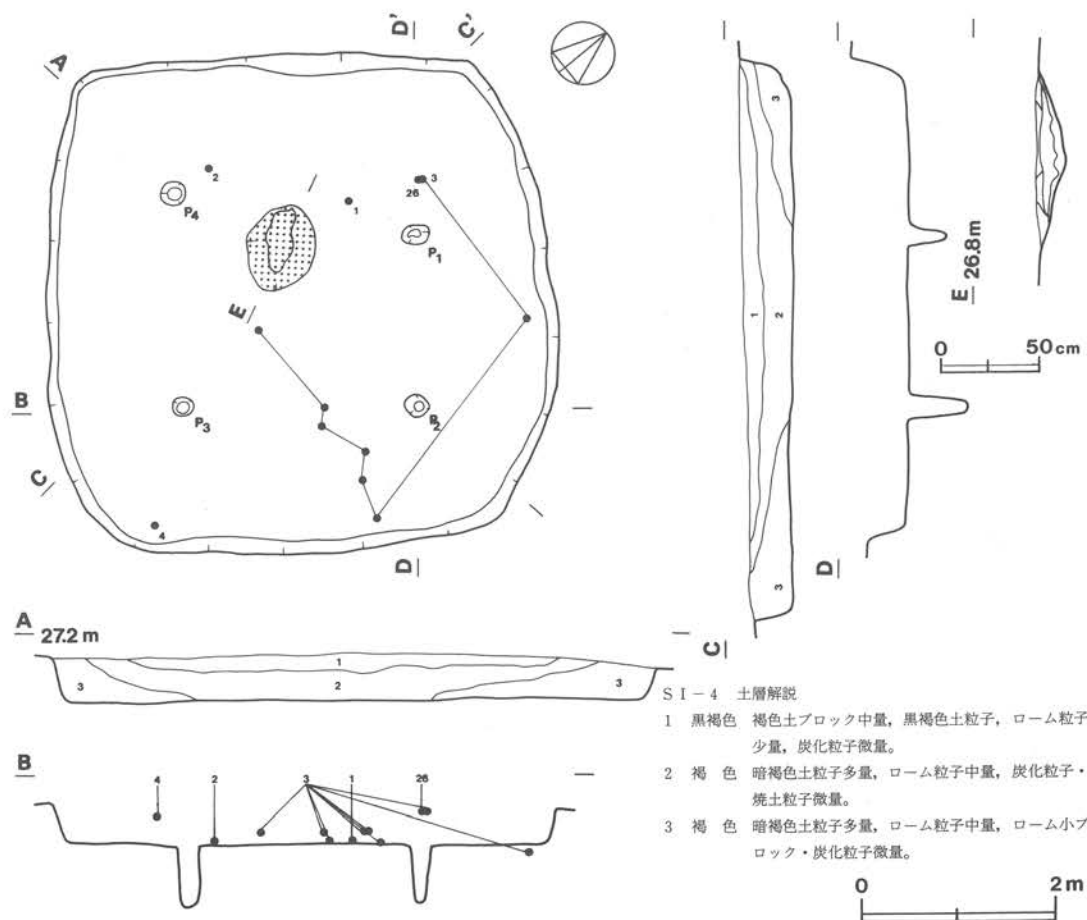
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は長径23～33cm，短径20～27cmの楕円形を呈し，深さ40～70cmの主柱穴である。主柱穴は不整形に配されている。

炉 長軸線上の中央からやや北西壁寄りに検出されている。平面形は長径93cm，短径74cmの楕円形を呈し，床面を14cm掘り込んでいる地床炉である。炉床は熱を受け，赤変硬化している。

覆土 黒褐色土・褐色土が厚く堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 住居全域の床面，覆土下層を中心に弥生式土器片（広口壺4），弥生式土器細片（527点）が出土している。その他，流れ込みと思われる土師器細片（78点）が出土している。1の簾状文が施されている小形の広口壺は，中央からやや北寄りの，2の広口壺は中央からやや西寄りの床面からそれぞれ出土している。3の広口壺は北東壁際の床面から出土しているが，覆土下・中層出土の破片とも接合されている。29の磨石は覆土上層から出土している。

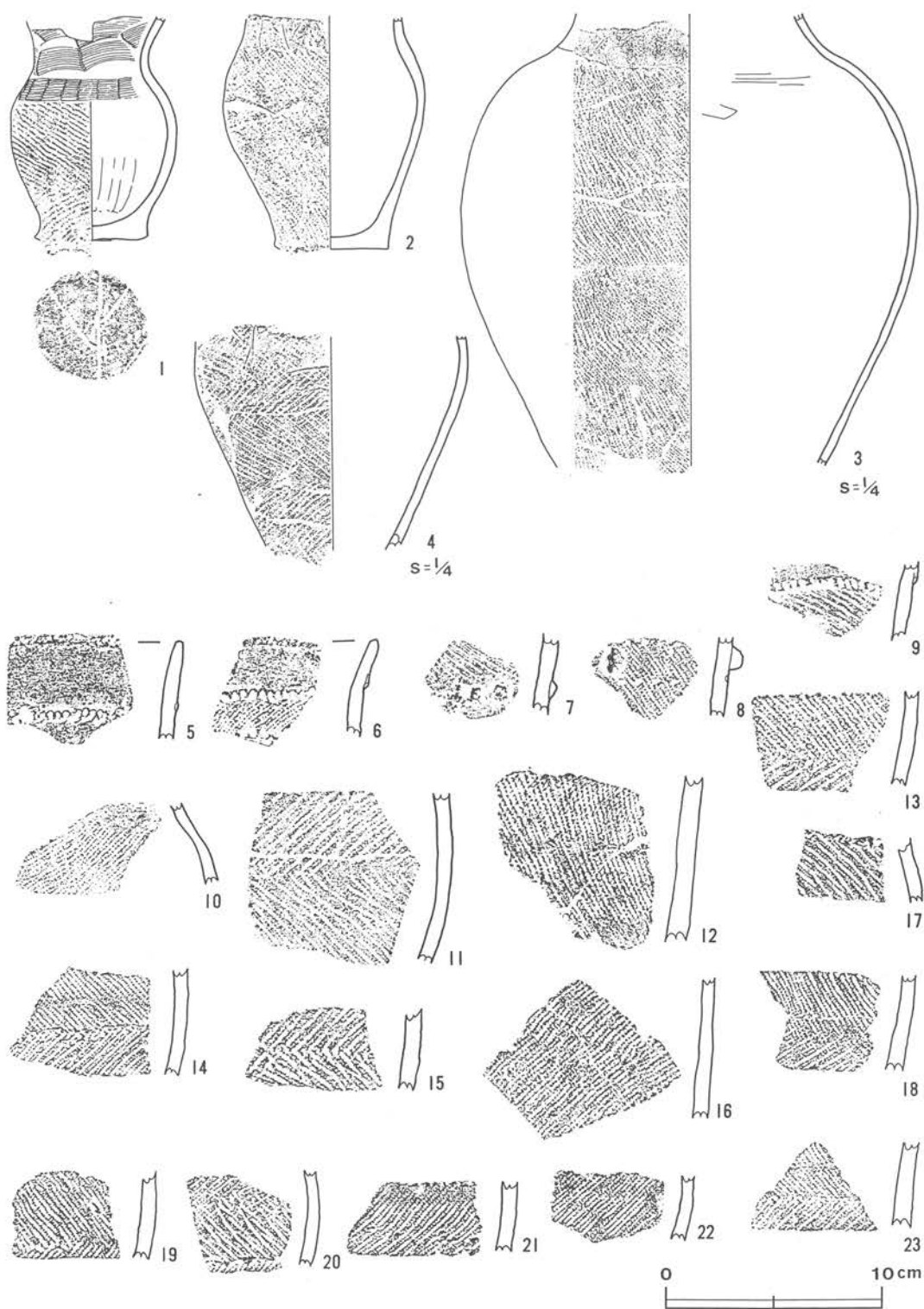
所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



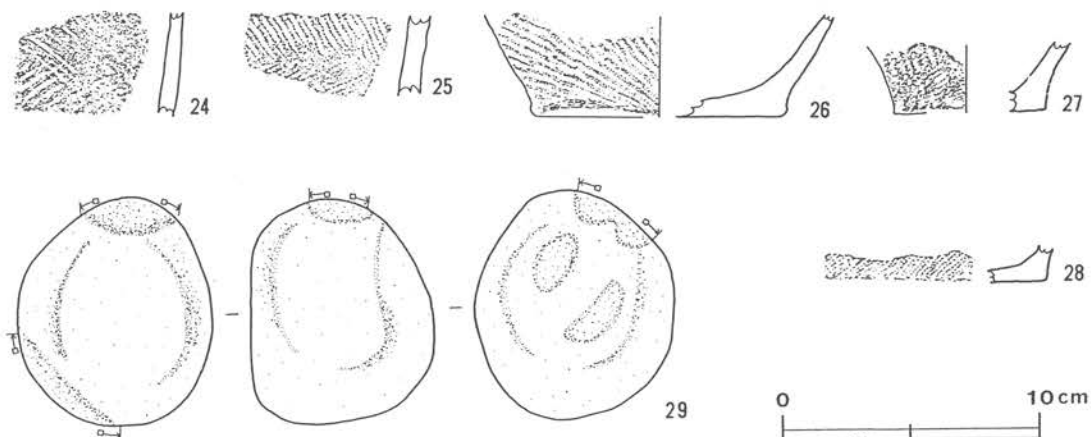
第14図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	広口壺 弥生式土器	B (10.4) C 5.3	平底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がり, 口縁部は頸部から緩やかに外反している。胴部やや上位に最大径を持つ。頸部には9本櫛歯による連弧文が施され, 胴部と簾状文により区画している。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持ち, 胴部下半の内面はヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P37 80% 中央からやや北寄り床面
2	広口壺 弥生式土器	B (10.8) C 5.3	口縁部欠損。平底でわずかに張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部やや上位に最大径を持つ。頸部下半を無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが, 羽状構成をとらない。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P38 70% 中央からやや西寄り床面
3	広口壺 弥生式土器	B (28.0)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎ぎみに立ち上がり, 頸部は無文帯とし, 胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが, 羽状構成をとらない。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P39 40% 北東壁際床面 外面スス附着
4	広口壺 弥生式土器	B (13.1)	胴部片。胴部は内彎し, 胴部上位に最大径を持つ。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており, 羽状構成をとっている。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P40 20% 南コーナー付近覆土中層



第15图 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第16図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第15・16図5～28は、第4号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～9は口縁部片である。5は無文で薄めの複合口縁を呈し、下端は縄文原体により刺突されている。6・9は無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により刺突され、頸部には縄文が施されている。7は縄文施文の複合口縁を呈し、下端には瘤が貼られている。8は縄文施文の単口縁を呈し、貼瘤と2列横位の刺突が施されている。10は頸部片であり、頸部下半を無文帯としている。11～25は胴部片で、すべてに縄文が施されている。原体は11～15, 17・18, 20～24は附加条1種(附加2条), 16・19・25は単節である。11, 13～15, 18～20, 23・24は羽状構成をとっている。26～28は底部片で、胴部には27は単節, 26・28は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図	磨石	9.1	7.8	7.3	703.5	砂岩	覆土上層	Q5敲石併用

第5号住居跡(第17図)

位置 Z地区東部, B4f₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.90m, 短軸6.12mの不整長方形を呈している。

長軸方向 N-34°-W。

壁 40～56cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺は硬いが、それ以外はさほど踏み固められてはいないので軟らかい。

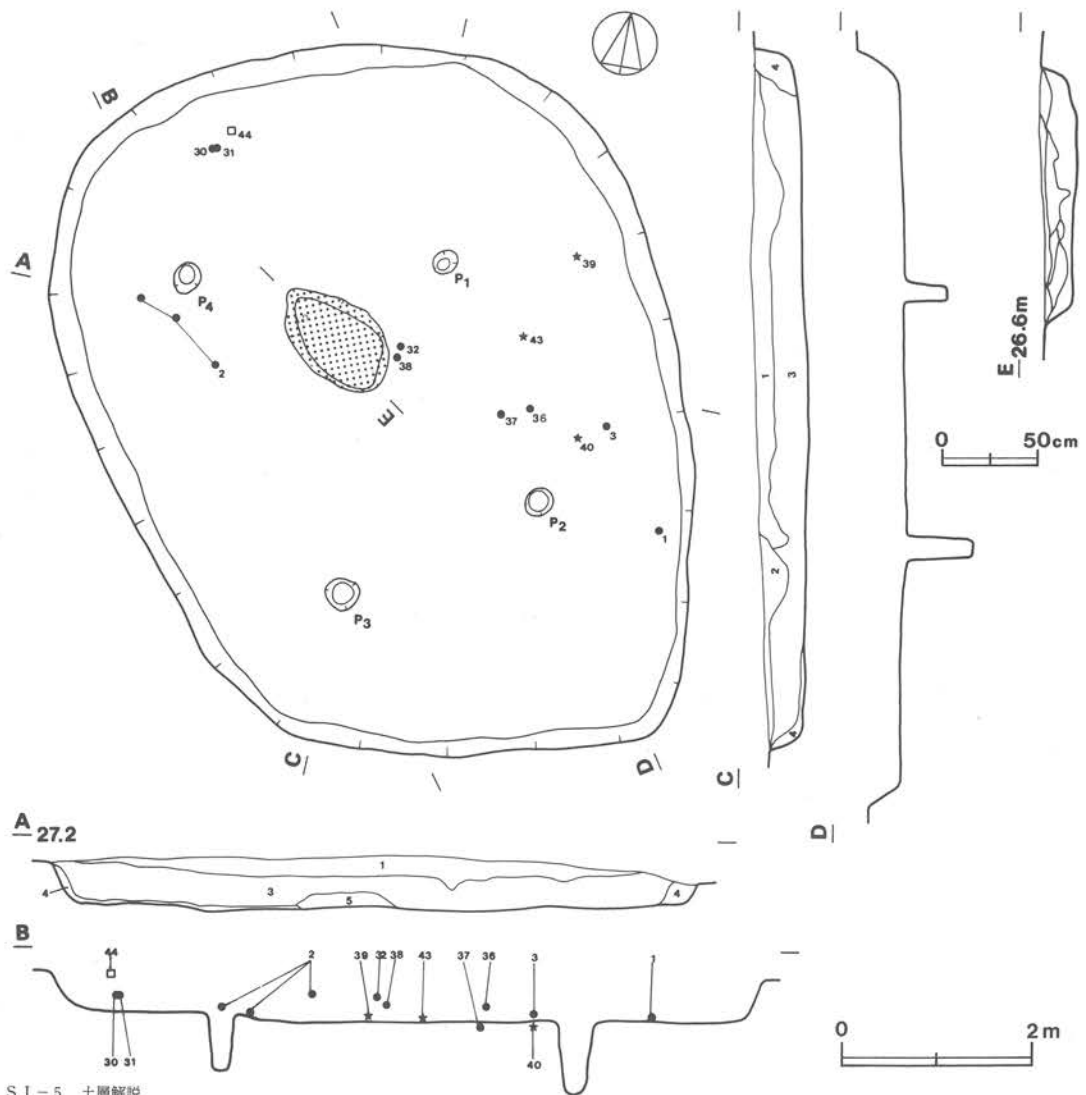
ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。いずれも支柱穴で、長径28～35cm, 短径22～30cmの楕円形を呈し、深さ45～76cmである。支柱穴は不整形に配されている。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径136cm, 短径95cmの楕円形を呈し、床を19cm掘り込んだ地床炉である。炉床はさほど焼けてはいない。

覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土下・中層を中心に弥生式土器片(甕1, 広口壺2), 弥生式土器細片(927点)が多量に出土している。その他, 流れ込みと思われる土師器細片(62点)が覆土中・上層から少量出土している。1の甕, 3の広口壺は, 北東壁付近の覆土下層からそれぞれ出土している。2の広口壺は西コーナー付近の覆土下層から出土しているが, 覆土中層からのものと接合されている。39・40の紡錘車は床面から, 42の土製勾玉, 44の磨石は, 覆土中層から上層にかけて出土している。

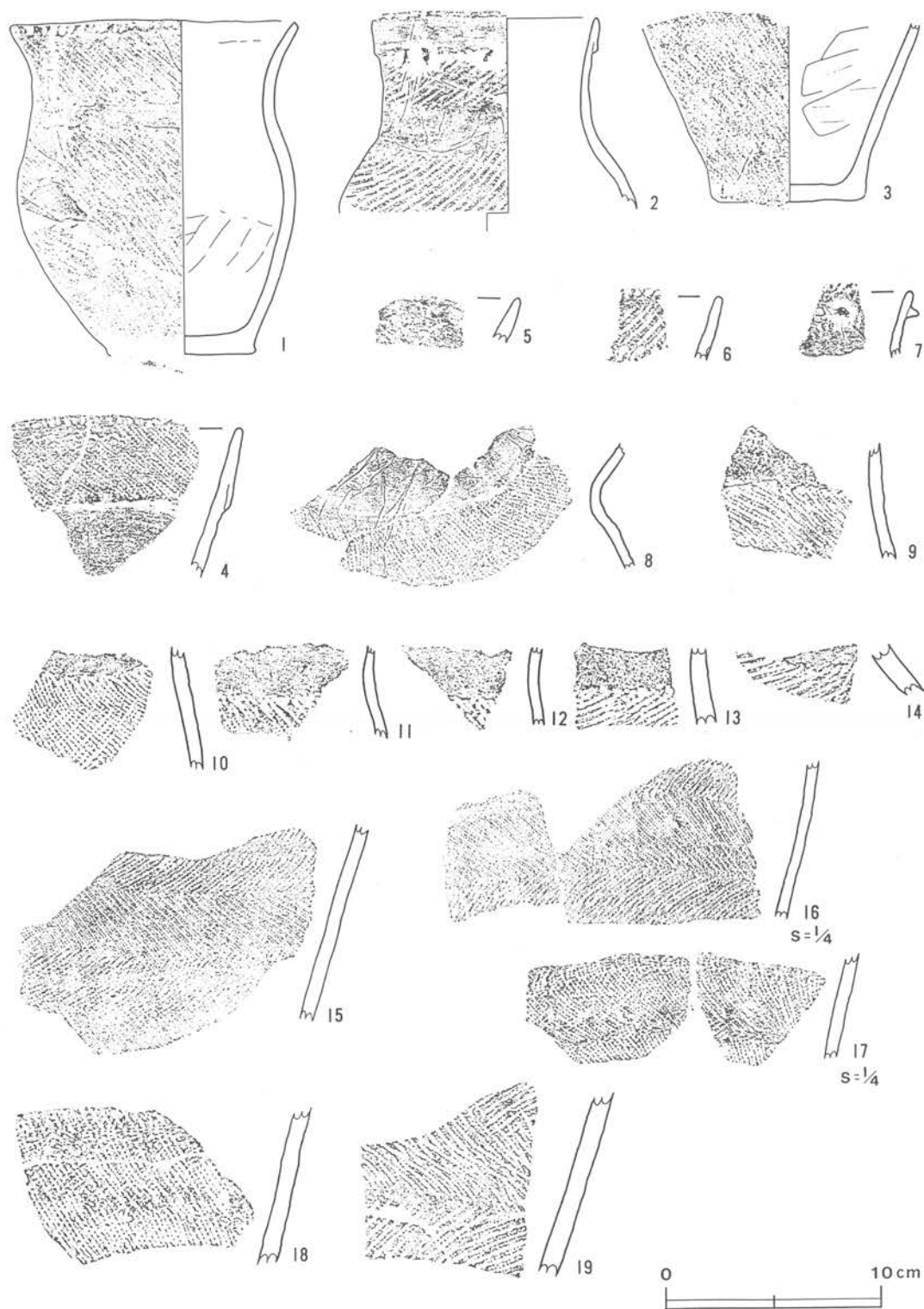
所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



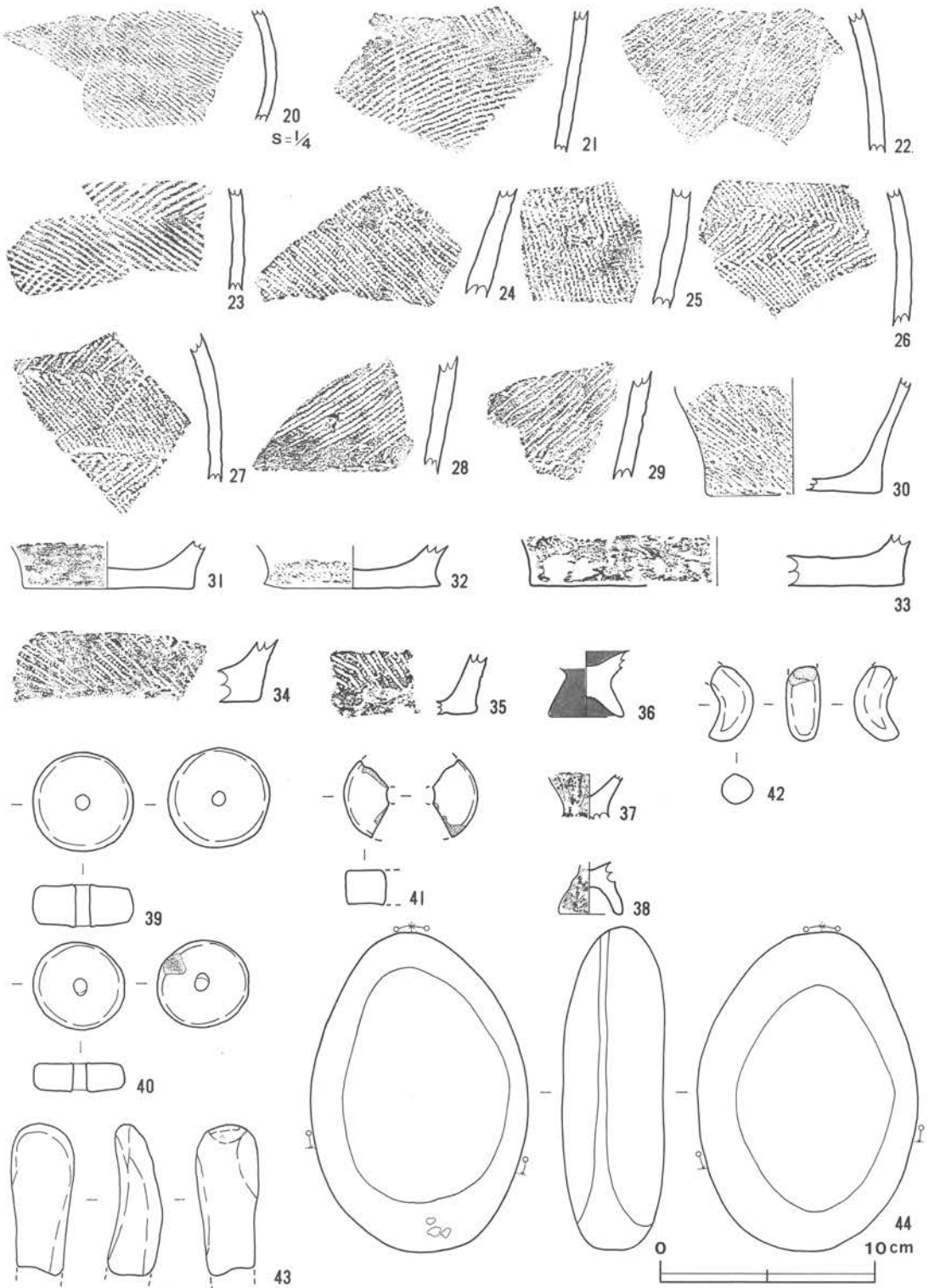
S I - 5 土層解説

- | | |
|--------------------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 暗褐色土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。 | 3 にぶい褐色 ローム粒子中量, 炭化物・焼土粒子微量。 |
| 2 黒褐色 黒色土粒子多量, ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。 | 4 明褐色 ローム粒子多量。 |
| 5 灰褐色 ローム粒子・小中ブロック・焼土粒子少量。 | |

第17図 第5号住居跡実測図



第18图 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第19图 第5号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	弥生式土器	A 13.4	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から、口縁部にかけては緩やかに外反している。単口縁を呈し、頸部下半以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成はとっていない。胴部下半内面は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・雲母 に お い 赤 褐色 普通	P42 80% 北東壁付近覆土下層 外面スス付着
		B 15.6			
		C 6.9			
2	広口壺 弥生式土器	A [10.5]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は内彎してからほぼ垂直に立ち上がる。無文の複合口縁下端には縄文原体の圧痕が施され、2個1組の瘤が7単位にわたり貼られる。頸部下半は無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口縁部内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄褐色 普通	P43 15% 西コーナー付近覆土下層 外面スス付着
		B (9.1)			
3	広口壺 弥生式土器	B (8.2)	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P44 40% 北東壁付近覆土下層 外面スス付着
		C 7.1			

第18・19図4～38は、第5号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～7は口縁部片である。4は縄文施文の幅広な複合口縁を呈し、頸部を無文帯としている。5は無文の単口縁を呈している。6は縄文施文の単口縁を呈し、下端には原体刺突が施されている。7は無文の単口縁を呈し、貼瘤を持つ。8～14は頸部片で頸部下半を無文帯としているものである。胴部にはすべて附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。15～29は胴部片である。15～24、28・29には附加条1種（附加2条）の、25～27には附加条1種（附加2条）と単節縄文による羽状縄文が施されている。15と16、17と18、25～27は同一個体と思われる。30～35は底部片である。いずれも平底で、32には張り出しが見られる。31の胴部は無文であるが、他には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。36～38は高坏の脚部片であり、「ハ」の字状に開いている。外面は無文で、いずれも小形のものである。36の内・外面は赤彩されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第19図	39 紡錘車	4.8	4.7	2.1	7.0	52.5	100	床面	DP21
	40 紡錘車	4.3	4.1	1.3	6.5	(25.0)	98	床面	DP22
	41 紡錘車	[4.4]	[4.4]	1.7	[7.0]	(11.4)	30	覆土中層	DP23
	42 勾玉	(2.4)	1.0	1.0	—	(2.8)	80	覆土上層	DP24
	43 不明土製品	(7.2)	3.0	2.6	—	(43.5)	80	覆土上層	DP25

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第19図	44 磨石	15.0	10.3	4.6	996.7	石英斑岩	覆土上層	Q6

第6号住居跡（第20図）

位置 Z地区北東部、B4c8区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.38m、短軸3.80mの不整長方形を呈している。

長軸方向 N-5°-E。

壁 壁高26~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められ硬い。

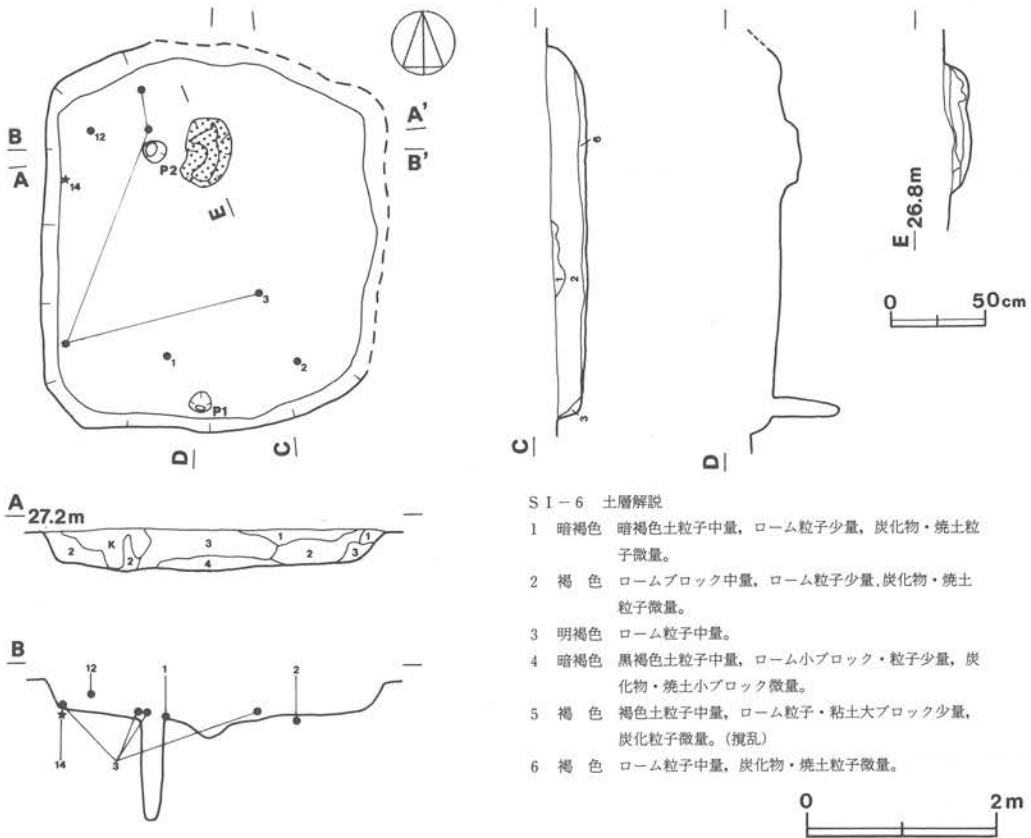
ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₂は長径25cm, 短径23cmの楕円形を呈し、深さ100cmである。P₁は長径24cm, 短径20cmの楕円形を呈し、深さ73cmである。いずれも支柱穴と思われる。P₁とP₂は南北に対応しており、2本柱の住居と思われる。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径70cm, 短径47cmの楕円形を呈し、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。

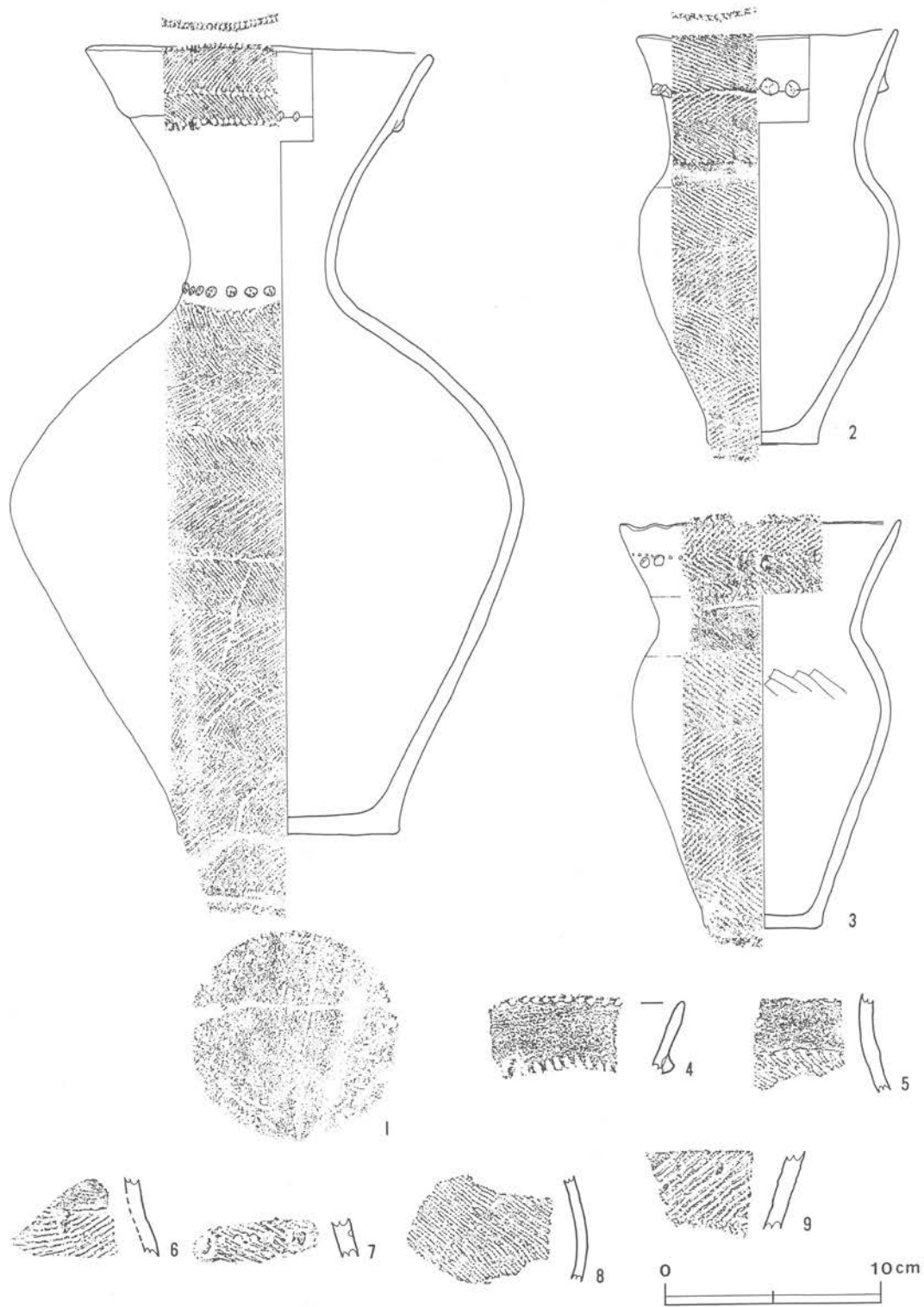
覆土 ロームブロックを含む褐色土・明褐色土が厚く堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下・中層を中心に弥生式土器片(広口壺3), 弥生式土器細片(217点)が出土している。1は大形の広口壺で、南壁付近の床面から横位の状態で、2は南東コーナー付近の床面から、斜位の状態でそれぞれ出土している。3の広口壺は中央部の覆土下・中層出土のいくつかの破片が接合されている。14の紡錘車は西壁際の覆土下層から出土している。

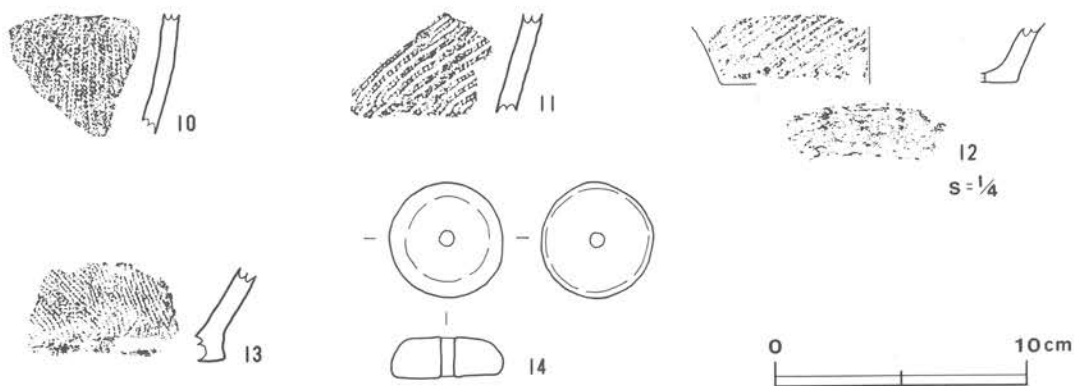
所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第20図 第6号住居跡実測図



第21图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第22図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	広口壺 弥生式土器	A 21.4 B 49.0 C 13.4	平底。胴部はやや肩張りぎみで底部から内彎して立ち上がり、頸部は強くくびれる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部やや上位に持つ。縄文施文のやや幅広い複合口縁を呈し、中央からやや下位と下端に円形刺突が2列横位に施されている。口唇部にも縄文が施され、口縁下端には2個1組の瘤が7単位にわたり貼られている。頸部を無文帯とし、下端にはボタン状の貼付けがなされている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P51 南壁付近床面 40%
2	広口壺 弥生式土器	A 15.8 B 25.6 C 6.5	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁と胴部上位に持つ。縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施され、口縁部の縄文は縦回転による羽状構成をとっている。口縁下端には2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部上半と胴部縄文は横回転による羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 明赤褐色 普通	P52 南東コーナー付近床面 2次焼成 100%
3	広口壺 弥生式土器	A (17.4) B 25.0 C 6.7	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外傾している。胴部上位に最大径を持つ。縄文施文の単口縁を呈し、下端には刺突文が施されている。口唇部には縄文原体による圧痕がみられ、口縁下には2個1組の瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし、頸部上半・胴部縄文は羽状構成をとっている。縄文原体は附加条1種(附加2条)である。胴部上半の内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P53 中央部覆土下層 外面スス付着 70%

第21・22図4～13は、第6号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は口縁部片で、無文の複合口縁を呈し、下端には縄文原体によるキザミ目が施されている。5～7は頸部片である。5・6は頸部下半を無文帯としている。7の頸部下端には円形の刺突文が施されている。8～11は胴部片である。いずれにも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。12・13は底部片である。12の胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が、13には単節縄文が施されている。12は木葉痕を持つ。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第22図 14	紡錘車	4.7	4.5	1.6	5.0	37.3	100	覆土下層	DP26

第7号住居跡 (第23図)

位置 Z地区東部, B4d₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.56m, 短軸5.12mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-69°-E。

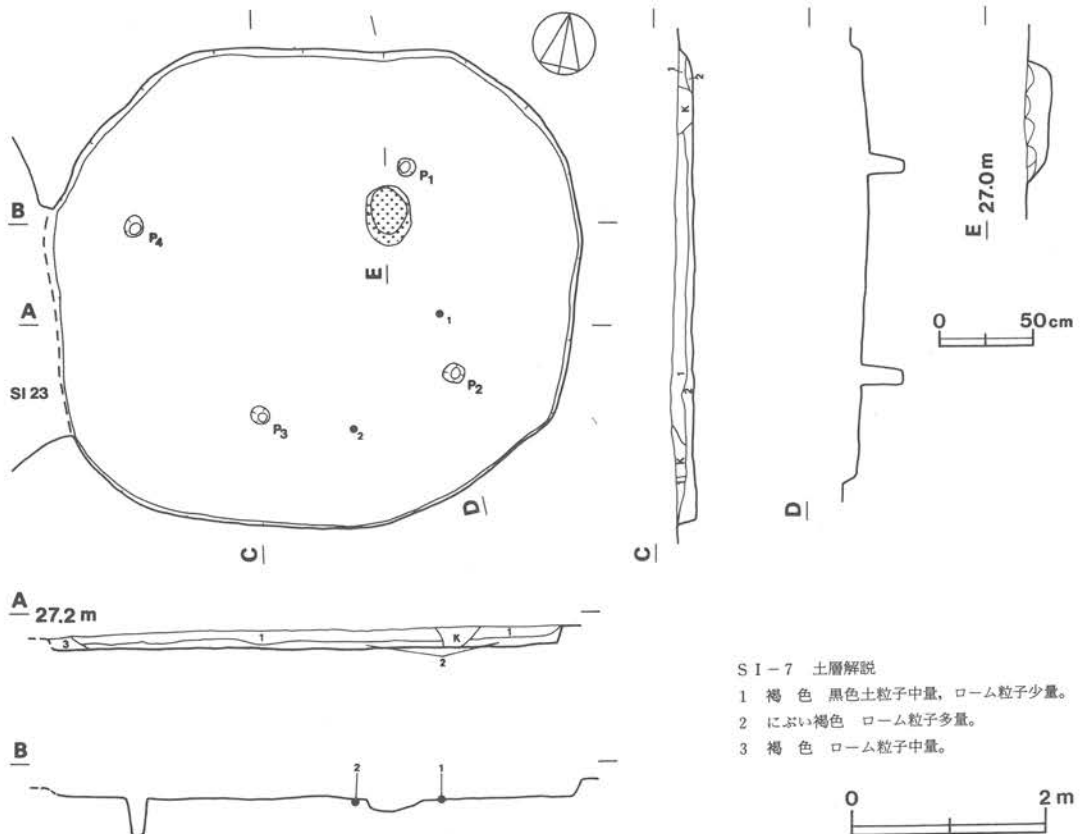
壁 壁高12~22cmで, ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体に踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。いずれも支柱穴で, 長径24~28cm, 短径21~25cmの楕円形を呈し, 深さ37~48cmである。支柱穴を結んだ線は不整形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北東寄りに検出されている。平面形は長径64cm, 短径46cmの楕円形を呈し, 床を13cm掘り込んだ地床炉である。炉床はあまり焼けていない。

覆土 にぶい褐色土・褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

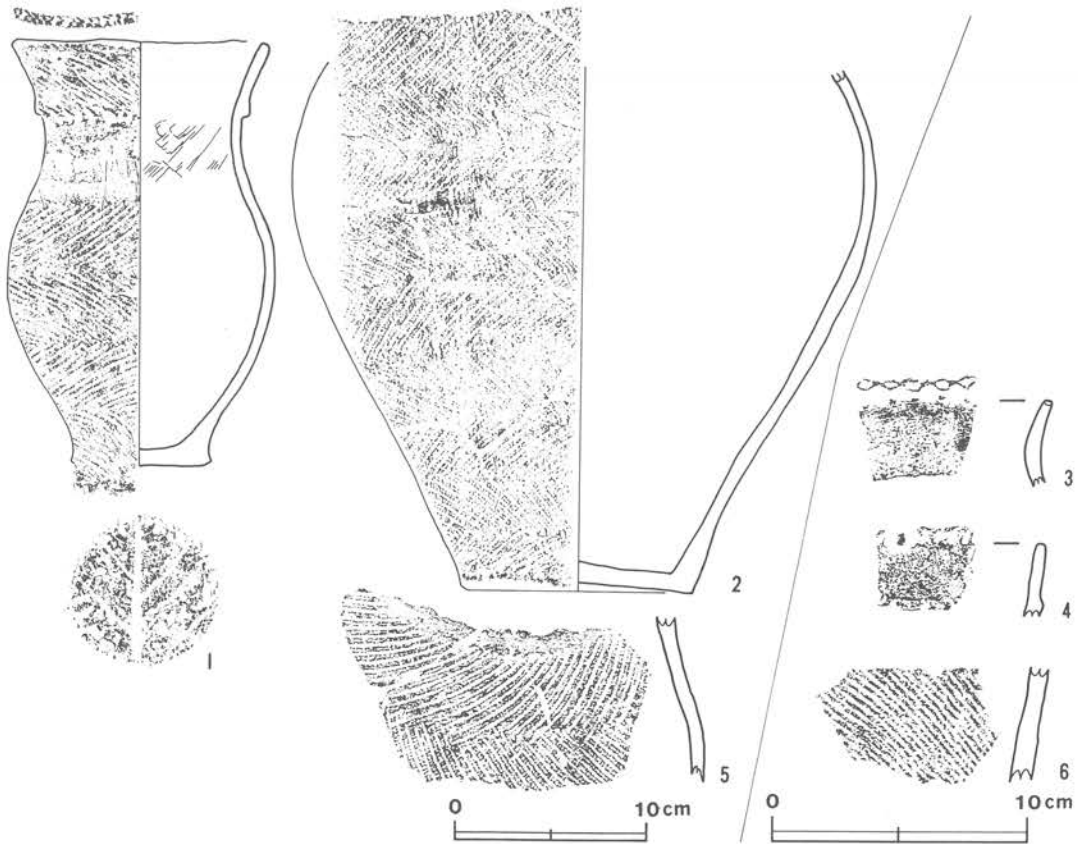


第23図 第7号住居跡実測図

遺物 中央部から東壁付近の床面や覆土下層に集中して、弥生式土器片(広口壺2), 弥生式土器細片(81点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる縄文式土器細片(12点)が出土している。

1は広口壺で, 中央からやや東寄りの床面から横位の状態で, 2は南壁中央付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第24図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	広口壺 弥生式土器	A 13.2	平底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がり, 頸部から口縁部にかけては緩やかに外反している。胴部中位に最大径を持つ。やや幅広い縄文施文の複合口縁を呈し, 口唇部と口縁下端には縄文原体による圧痕が施されている。頸部を無文帯とし, 胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており, 羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持ち, 内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P55 90% 中央からやや東寄り床面 外面スス付着
		B 22.5			
		C 7.5			
2	広口壺 弥生式土器	B (28.0)	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部やや上位に最大径を持つ。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており, 羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P56 50% 南壁中央付近床面
		C 12.2			

第24図3～6は、第7号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は無文の単口縁を呈する甕形土器の口縁部片で、口唇部は押圧され、小波状となっている。4は無文の複合口縁を呈し、口唇部と口縁下端には押圧によるキザミ目を持つ。5は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。6は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第8号住居跡（第25図）

位置 Z地区北東部，B6d区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.88m，短軸3.83mの隅丸方形を呈している。

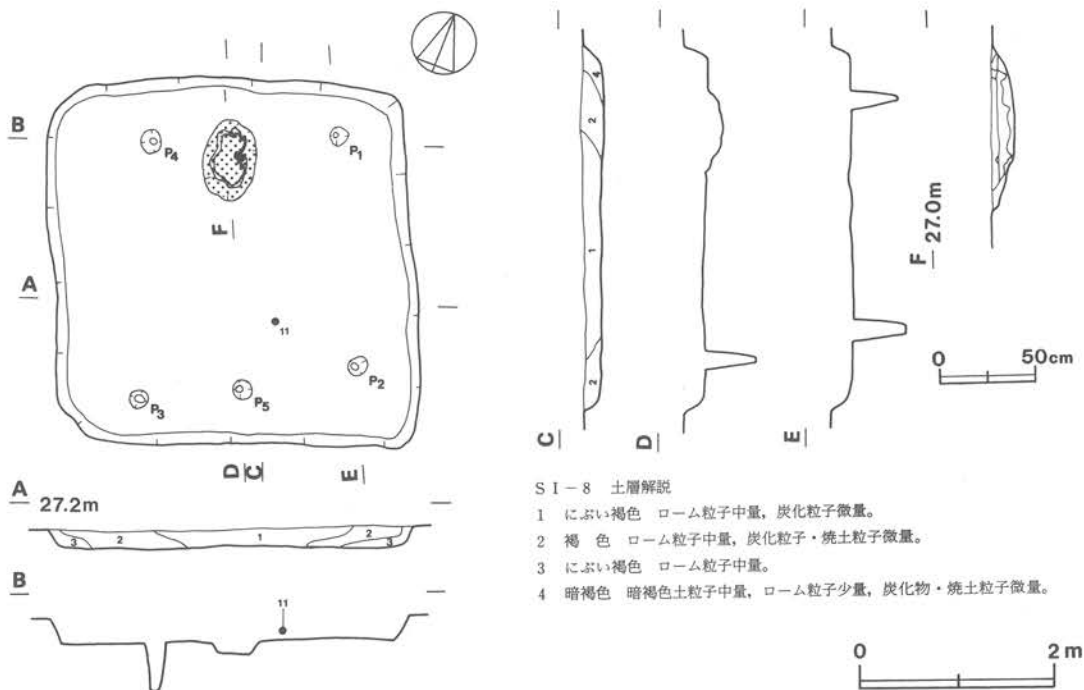
長軸方向 N-22°-W。

壁 壁高14～24cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部は踏み固められて硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は，径20～30cmの円形を呈し，深さ50～55cmであり，規模・配列から主柱穴と考えられる。P₅は径22cmの円形を呈し，深さ55cmで出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径88cm，短径55cmの楕円形を呈し，床を5cm掘り下げた地床炉である。炉床は熱を受け，赤変硬化している。

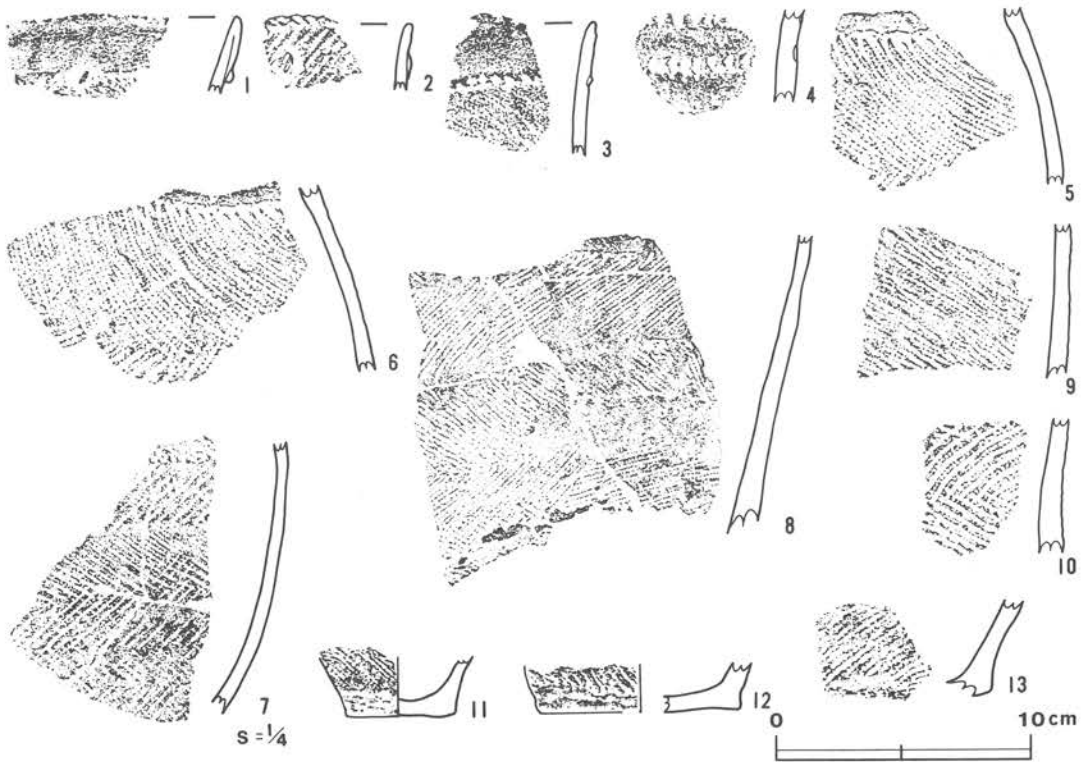


第25図 第8号住居跡実測図

覆土 ローム粒子を含むにぶい褐色土・褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土下・中層を中心に弥生式土器細片(245点)が出土している。その他、流れ込みと思われる土師器細片(17点)が出土している。11の底部片は、中央部からやや南東寄りの覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第26図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図

第26図1～13は、第8号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1～4は口縁部片である。1は無文の複合口縁を呈し、下端に瘤が貼られている。2は縄文施文の単口縁を呈し、瘤が貼られている。3は無文で薄目の複合口縁を呈し、下端には縄文原体による押圧が施されている。4は無文の単口縁と思われ、キザミ目が横位に2列施されている。5・6は頸部片である。同一個体と思われ、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。7～10は胴部片である。いずれにも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、7・8・10は羽状構成をとっている。11～13は底部片である。平底で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第9号住居跡 (第27図)

位置 Z地区中央部, B4i6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.75m, 短軸4.74mの不整隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高20~30cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

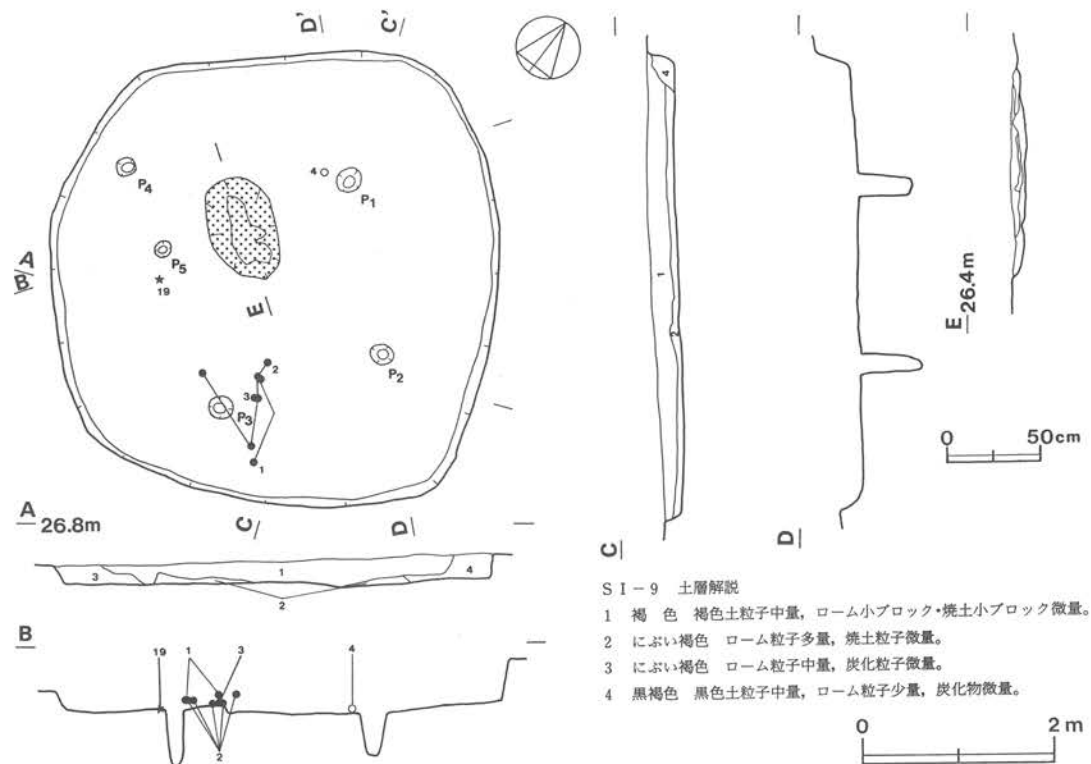
床 ほぼ平坦で, 炉周辺は踏み固められて硬い。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は, 径18~30cmの円形を呈し, 深さ58~67cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は径20cmの円形を呈し, 深さ61cmの補助柱穴と思われる。

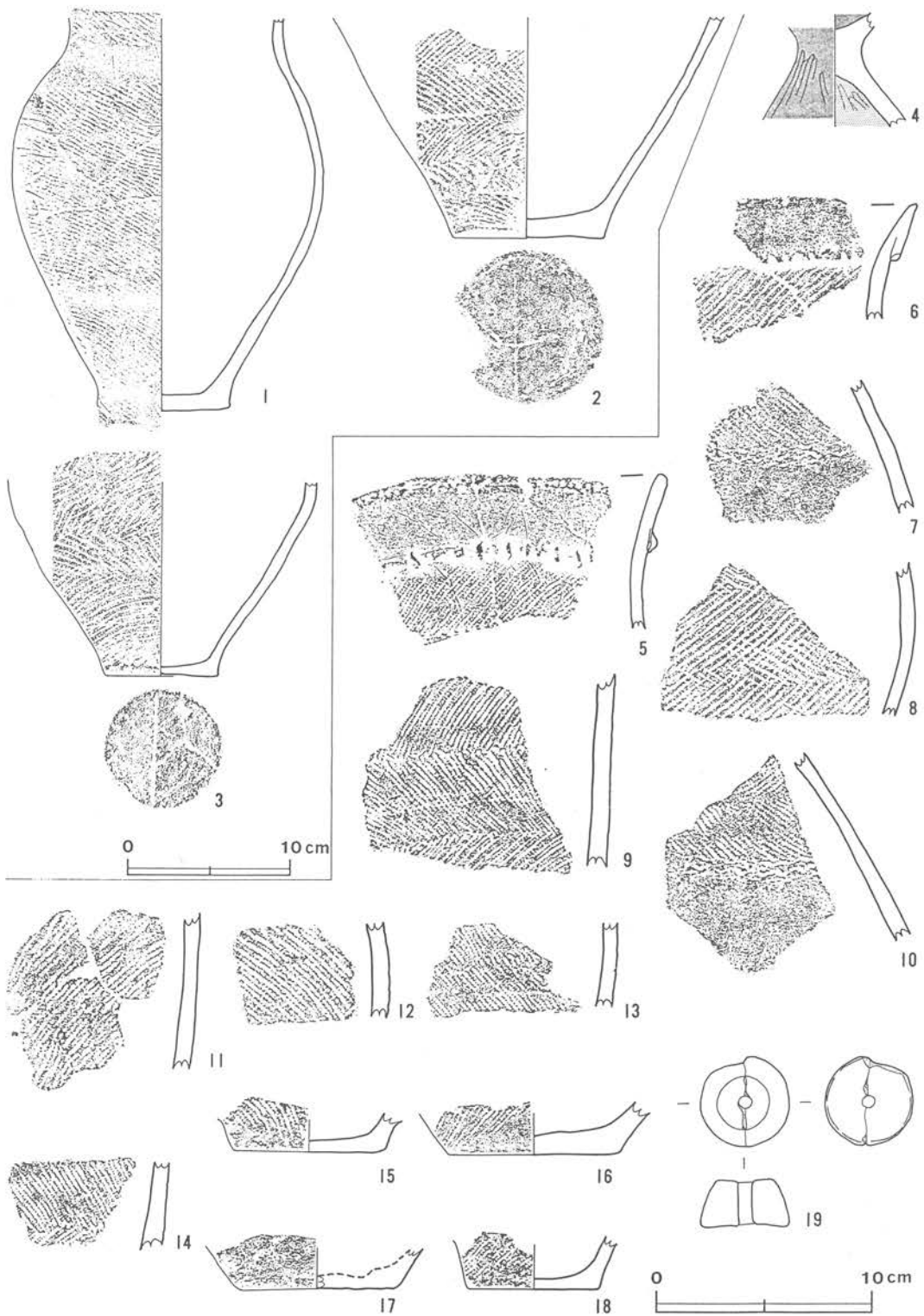
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径113cm, 短径68cmの楕円形を呈し, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け, 赤変硬化している。

覆土 褐色土・にぶい褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下層を中心に弥生式土器片(広口壺3), 弥生式土器細片(286点)と土師器片(高坏1)が混在して出土している。1の広口壺は南東壁中央際の覆土下層から, 2の底部片は南コーナー付近の覆土下層から, 3の底部片は中央部からやや南東寄りの床面からそれぞれ出土している。4の高坏脚部は中央部から北西寄りの床面から横位の状態で出土している。



第27図 第9号住居跡実測図



第28图 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

19の紡錘車は中央部からやや西寄りの床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第9号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第28図 1	広口壺 弥生式土器	B (24.3)	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部は外反している。最大径を胴部中位に持つ。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P58 70% 南東壁中央際覆土下層 内・外面スス付着	
		C 8.0				
2	広口壺 弥生式土器	B (13.8)	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。内面は剝離が激しい。	砂粒・長石・石英 淡黄色 普通	P59 30% 南コーナー付近覆土下層	
		C 9.3				
3	広口壺 弥生式土器	B (12.1)	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 一部赤褐色 普通	P60 30% 中央部からやや南東寄り 床面	
		C 7.0				
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 4	高坏 土師器	B (5.2)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は内彎して立ち上がる。	坏部・脚部外面はヘラ磨き後に赤彩。坏部内面はヘラ磨き後に赤彩。脚部内面はヘラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P61 20% 中央からやや北西寄り 床面

第28図5～18は、第9号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5・6は口縁部片である。5は無文でやや幅広い複合口縁を呈し、下端に瘤がほぼ等間隔に密に貼られている。6は無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。頸部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7～14は胴部片である。7・10は胴部上位に単節縄文が施され、結節文により下位の無文部と区画している。8・9・11～14には縄文が施され、原体は8・12は附加条1種（附加2条）、9は附加条1種（附加2条）と単節縄文、11・13・14は単節縄文である。15～18は底部片である。いずれも平底で、胴部には15・16・18は附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、17は無文である。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第28図 19	紡錘車	4.2	4.2	2.2	6.0	(39.4)	90	床面	D P27

第11号住居跡（第29図）

位置 Z地区やや東部寄り，B4f4区で確認されている。

重複関係 南東部を第10号住居跡の北コーナー部によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.06m，短軸4.70mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-47°-W。

壁 壁高22～32cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体に踏み固められて硬い。

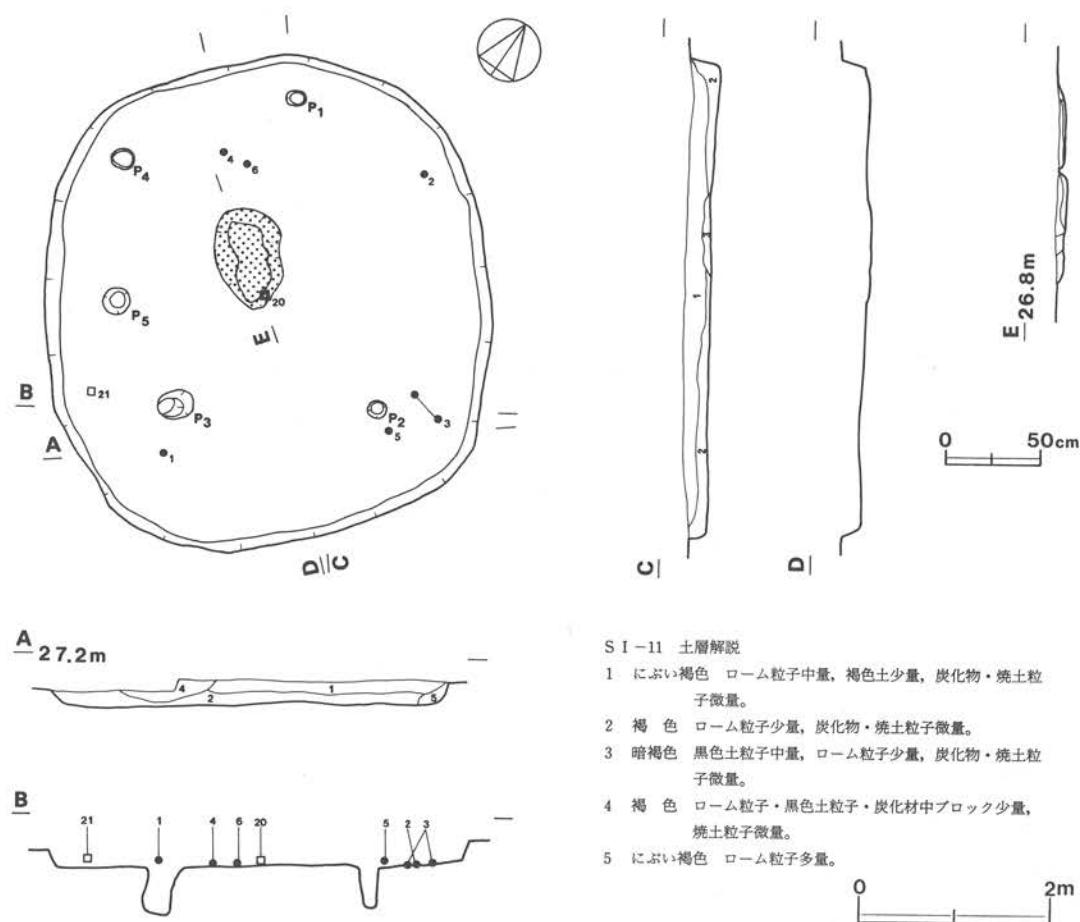
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は、径20~38cmの円形を呈し、深さ45~52cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は長径32cm, 短径26cmで楕円形を呈し、深さ37cmで出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上のほぼ中央から検出されている。平面形は長径105cm, 短径68cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。

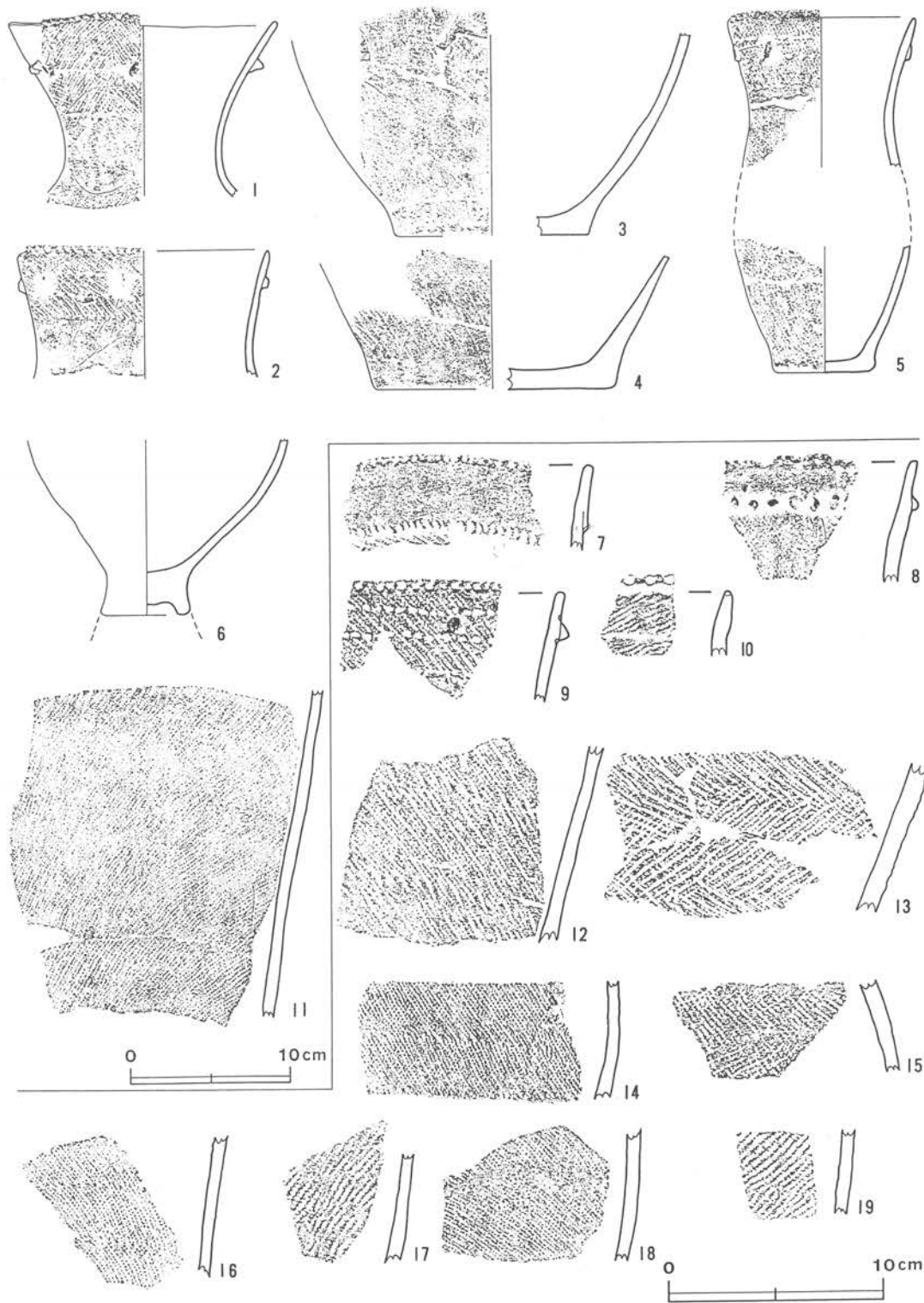
覆土 におい褐色土・褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面を中心に弥生式土器片(台付甕1, 広口壺5), 弥生式土器細片(428点)が出土している。覆土上層からは流れ込みと思われる縄文式土器片(11点), 土師器細片(8点)が出土している。1の広口壺は南コーナー付近の, 3の底部片と5の広口壺は東コーナー付近の, 6の台付甕は北西壁付近の床面からそれぞれ出土している。20の石皿は中央部の床面から, 21の砥石は南西壁際の覆土下層から出土している。

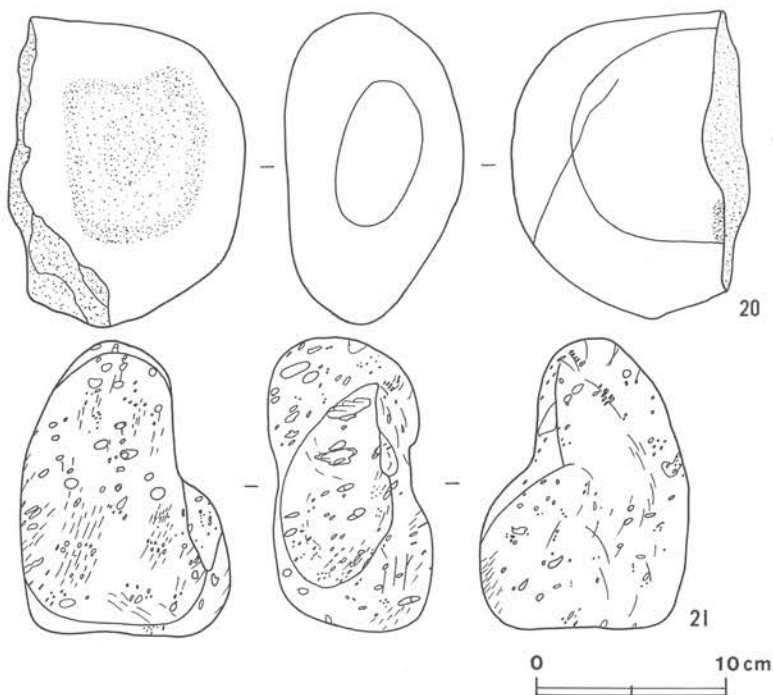
所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第29図 第11号住居跡実測図



第30图 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第31図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.7 B (10.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。薄い2段の複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁部の縄文は縦回転の羽状構成をとっている。1段目の下端には2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部は無文帯としている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P66 30% 南コーナー付近床面
2	広口壺 弥生式土器	A [15.6] B (7.9)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁部には縄文原体による刺突文が2列周回し、刺突文間に瘤が1個ずつほぼ等間隔に貼られている。頸部は無文帯とし、縄文原体は附加条1種(附加2条)である。内面は横ナデされている。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P67 20% 北コーナー付近覆土下層 外面スス付着
3	広口壺 弥生式土器	B (12.4) C [12.0]	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P69 15% 東コーナー付近床面
4	広口壺 弥生式土器	B (8.0) C [15.0]	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P70 5% 中央部からやや北西寄り 床面
5	広口壺 弥生式土器	A 11.4 B [22.1] C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反している。最大径を胴部中位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、中位と下端に横位2列の刺突文が周回している。刺突文間には瘤が1個ずつほぼ等間隔に貼られている。頸部下半部は無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P71 50% 東コーナー付近床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第30図 6	台付甕 弥生式土器	B (10.9) D 5.5 E 0.7	脚部から胴部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開くものと思われるが、破損箇所を磨り、短い脚部として再利用している。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は緩やかにくびれ、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は軽くハケ目調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P72 15% 北西壁付近床面

第30図7～19は、第11号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～10は口縁部片である。7は無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体によりキザミ目が施されている。頸部には縄文が施されている。8は無文の単口縁を呈し、下端には瘤がほぼ等間隔に貼られ、頸部には縄文が施されている。9は縄文施文の単口縁を呈し、口縁中位に横位2列の刺突が施され、その間に瘤が貼られている。10は縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部には押圧が加えられ、小波状を呈している。11～19は胴部片で、11～16、18には附加条1種（附加2条）が、17・19には単節縄文が施されている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第31図 20	石 皿	12.6	9.3	7.0	1192.4	石英斑岩	床 面	Q7
21	砥 石	11.9	8.1	6.3	4.1	軽 石	覆土下層	Q8

第12号住居跡（第32図）

位置 Z地区北部寄り，B4f₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.75m，短軸4.62mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-30°-W。

壁 壁高17～28cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体によく踏み固められて硬い。

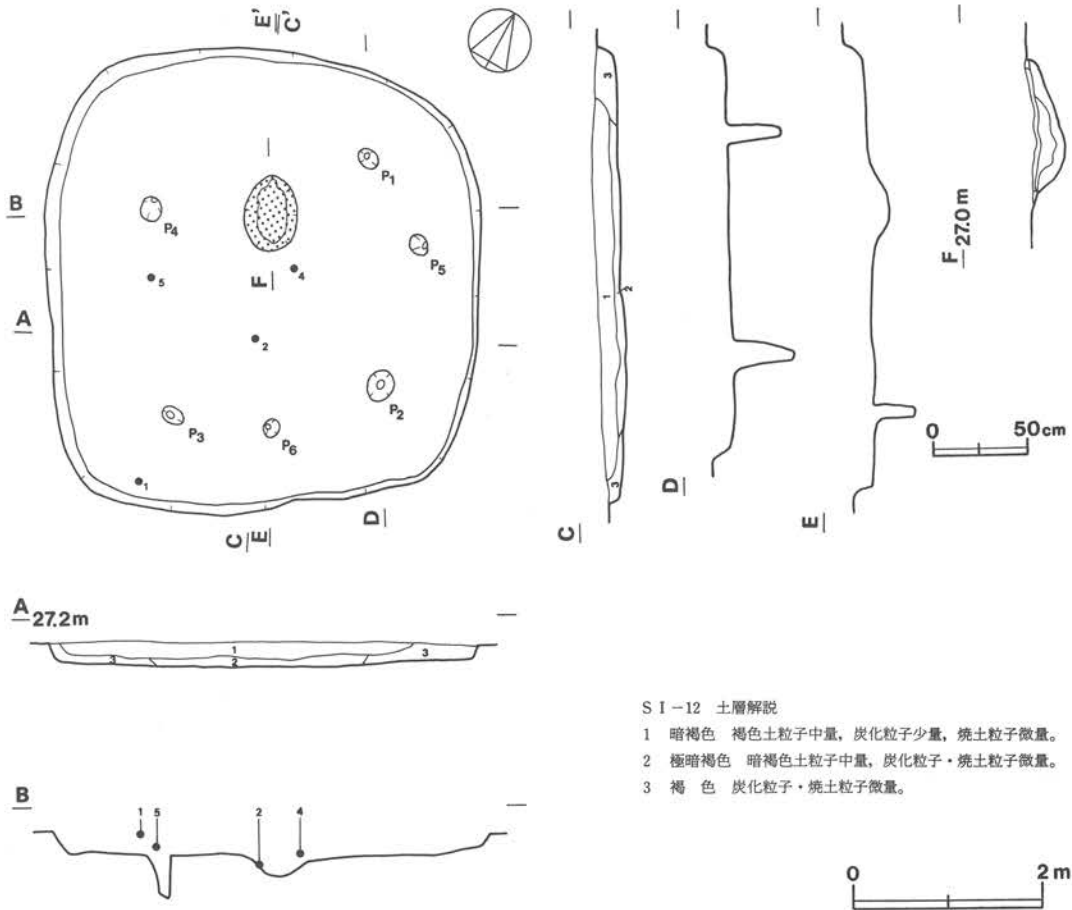
ピット 6か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は長径25～35cm，短径17～28cmの楕円形及び不整楕円形を呈し，深さ57～68cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₆は長径22cm，短径18cmの楕円形を呈し，深さ52cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は長径23cm，短径20cmの不整楕円形を呈し，深さ52cmで補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。長径80cm，短径60cmの楕円形を呈し，床を14cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け，赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・極暗褐色土が全体に堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 南部の床面や覆土から，弥生式土器片（広口壺3，甕1，高坏1），弥生式土器細片（88点）が出土している。1の広口壺は南コーナー付近の覆土上層から横位の状態で，2の広口壺は中央部からやや南の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

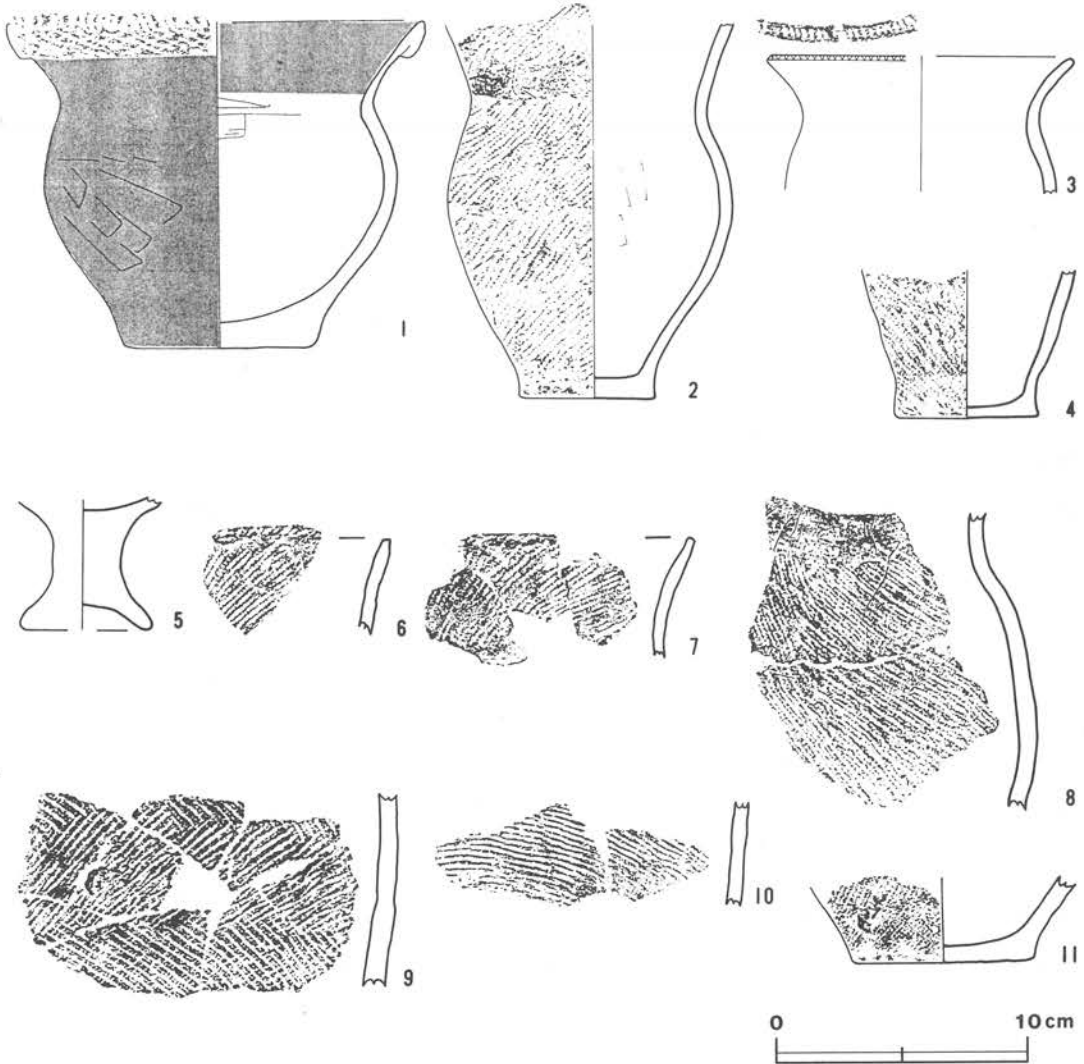


第32図 第12号住居跡実測図

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	広口壺 弥生式土器	A [16.4]	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。複合口縁を呈し、網目状然糸文が施されている。下端にはヘラ状工具によるキザミ目が施されている。頸部外面は横ナデ、胴部は粗くヘラ削りがなされている。外面は頸部と胴部上半、内面は口縁部が赤彩されている。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P73 80% 南コーナー付近覆土上層 外面スス付着
		B 13.1			
		C 7.4			
2	広口壺 弥生式土器	B (15.1)	口縁部欠損。平底。張り出しを持つ底部から胴部にかけては内彎して立ち上がる。頸部は緩やかな「く」の字状を呈している。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	P74 70% 中央部からやや南寄り 床面 外面スス付着
		C 5.5			
3	甕 弥生式土器	A (12.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。口唇部にはヘラ状工具によるキザミ目が施されている。外面無文で、口縁部は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P75 5% 中央部覆土上層
		B (5.5)			
4	広口壺 弥生式土器	B (6.0)	底部片。平底。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がってから外傾している。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P76 10% 中央部覆土下層
		C 5.8			

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第33図 5	高 坏 弥生式土器	B (5.1) D 5.1 E 1.0	脚部片。脚部は中実で裾部が「ハ」の字状に大きく開く。胴部外面には縄文が施されている。脚部外面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P77 10% 中央部からやや西寄り 覆土中層



第33図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図

第33図6～11は、第12号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6・7は単節縄文が施される単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。同一個体と思われる、口縁部が外反する広口壺である。8は頸部片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成をとっていない。9・10は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、9は羽状構成をとっている。11は底部片で胴部には細目の単節縄文が施されている。

第13号住居跡（第34図）

位置 Z地区北部，B4d₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.63m，短軸6.10mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-26°-W。

壁 壁高17～50cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，入口部から炉周辺がよく踏み固められて硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は径24～32cmの円形を呈し，深さは40～86cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅は径26cmの円形を呈し，深さは33cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径196cm，短径70cmの楕円形を呈し，床を18cm掘り込んだ地床炉である。ほぼ中央にあったものを北西側へ拡張したものと思われる。拡張後の炉床は，熱を受け，赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が全体に堆積しており，自然堆積と思われる。

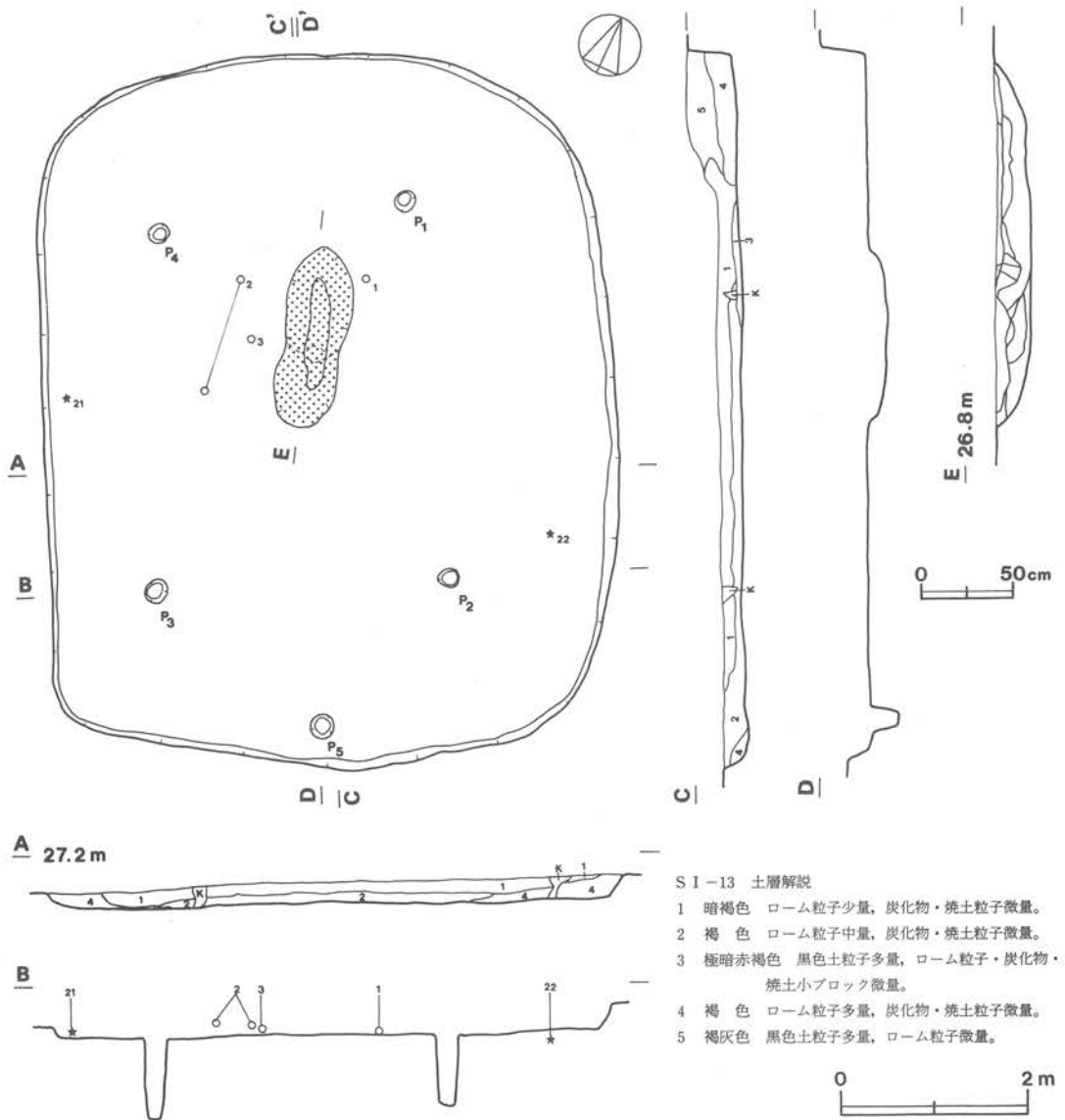
遺物 中央部や西部と東コーナー付近の床面及び覆土下・中層から，弥生式土器細片（706点）と土師器片（高坏1，器台2），土師器細片（234点）が混在して出土している。9・13は弥生式土器の胴部片で東コーナー付近の床面から横位の状態で出土している。1は土師器の高坏脚部であり，炉の北側の覆土下層から出土している。2・3は赤彩された土師器の器台であり，炉の西側の覆土中層から出土している。21の紡錘車は南西壁中央際の床面から，22の紡錘車は東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 覆土からは土師器片が出土しているが，住居跡の形態は隅丸長方形を呈しており，床面からは弥生式土器片だけが出土しているので，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第13号住居跡出土土器観察表

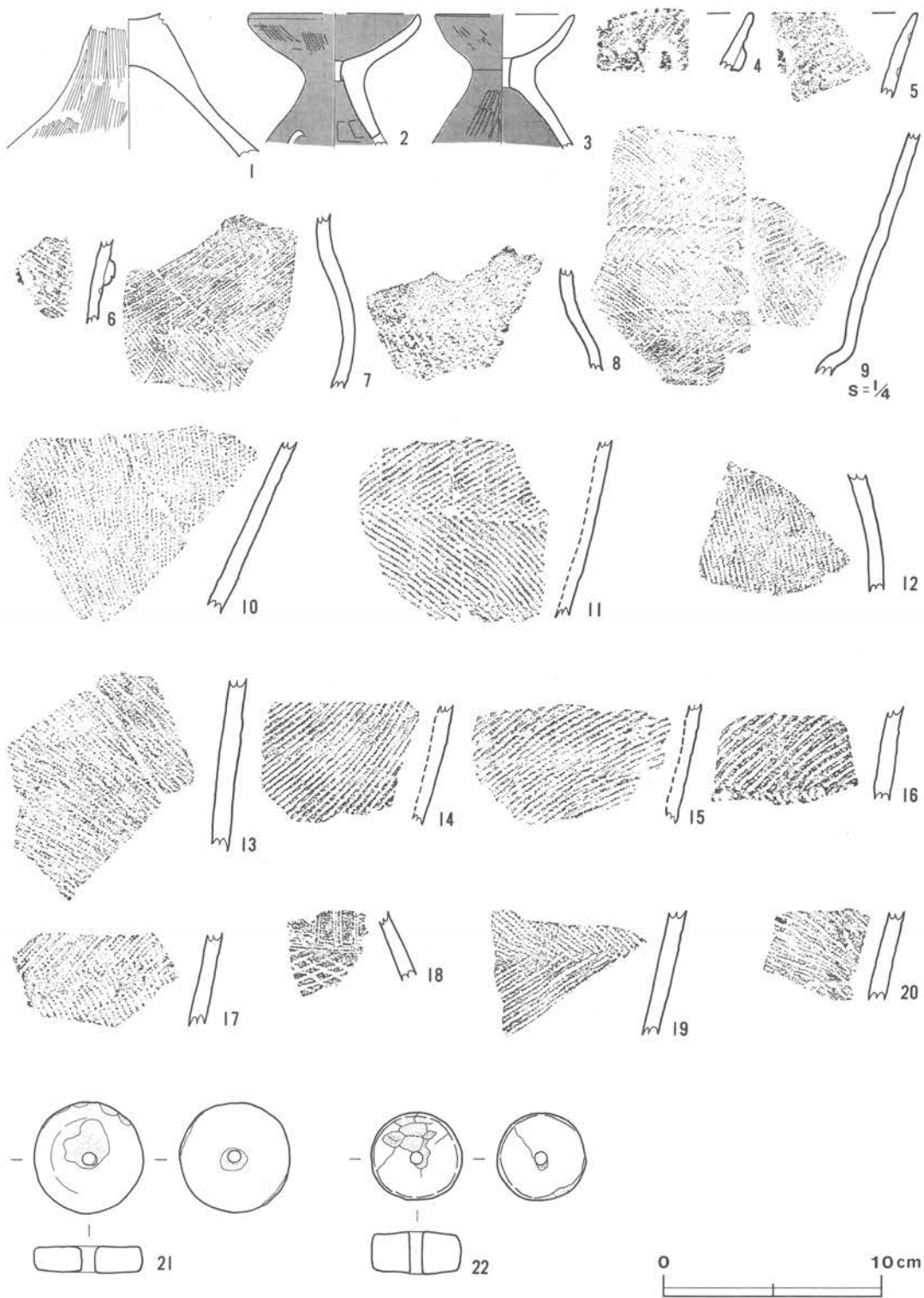
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	高坏 土師器	B (6.7)	脚部は「ハ」の字状に開き，裾部で大きく広がる。	外面はハケ目整形。内面は横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙褐色 普通	P78 30% 炉北側覆土下層
2	器台 土師器	A [7.7] B (6.3) E (2.9)	脚部は「ハ」の字状に開き，3孔が穿たれる。器受部は外傾して立ち上がり，口縁部で内彎する。接合部に中央孔を持つ。	器受部外面はハケ目整形後に赤彩。器受部内面と脚部外面は横ナデ後に赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P79 40% 炉西側覆土中層
3	器台 土師器	A [6.4] B (6.1) E (2.8)	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎して立ち上がる。接合部に中央孔を持つ。	器受部外面はハケ目整形後に赤彩。脚部外面はヘラミガキ後に赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P80 20% 炉西側覆土中層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第35図	21 紡錘車	5.2	5.1	1.2	7.0	(39.9)	98	床面	D P 29
	22 紡錘車	4.2	4.1	2.0	6.0	(31.5)	98	床面	D P 30



第34図 第13号住居跡実測図

第35図 4～20は、第13号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は口縁部片である。4～6は縄文施文の単口縁を呈し、横位の刺突文間に瘤が貼られている。4・5は同一個体と思われる。7・8は頸部片である。頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。18は頸部から胴部にかけての破片で、頸部にはスリット手法による充填波状文が施されており、櫛歯数は4本である。胴部には附加条2種（附加1条）による縄文が網目状に施されている。9～17, 19・20は胴部片である。いずれにも縄文が施されており、原体は9～11, 13～17, 19・20は附加条1種（附加2条），12は単節である。9・11・16・17・19は羽状構成をとっている。



第35图 第13号住居跡出土遺物実測・拓影図

第14号住居跡 (第36図)

位置 Z地区中央部, B4j₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.05m, 短軸4.80mの不整形を呈している。

長軸方向 N-83°-W。

壁 壁高7~45cmで, 外傾して立ち上がっている。

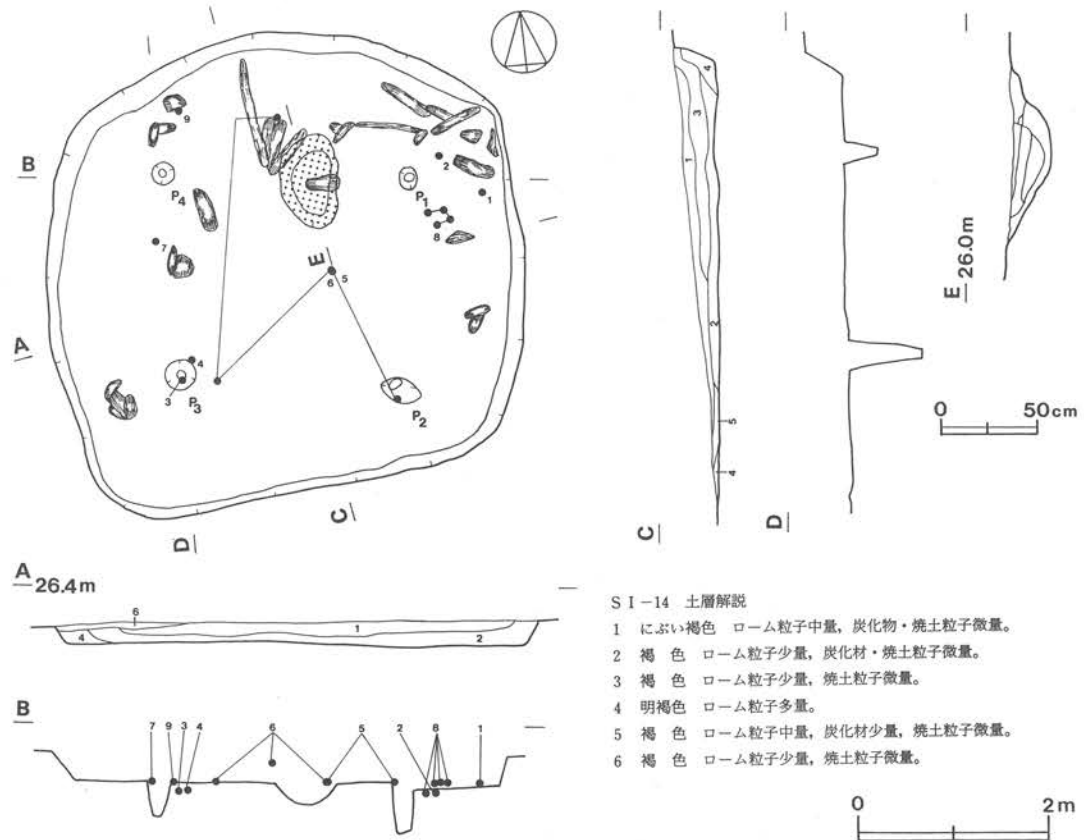
床 ほぼ平坦であり, 炉周辺と南壁付近は踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は径24~35cmの円形を呈し, 深さ48~81cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径98cm, 短径60cmの楕円形を呈し, 床を19cm掘り込んだ地床炉である。炉床はあまり焼けていない。

覆土 ローム粒子を含む褐色土・にぶい褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下・中層から弥生式土器片(広口壺7, 細口長頸壺1, 高坏1), 弥生式土器細片(189点)が出土している。1・2は広口壺で, 北東コーナー付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。3の胴下半部は南西コーナー付近のピット内から出土している。



第36図 第14号住居跡実測図

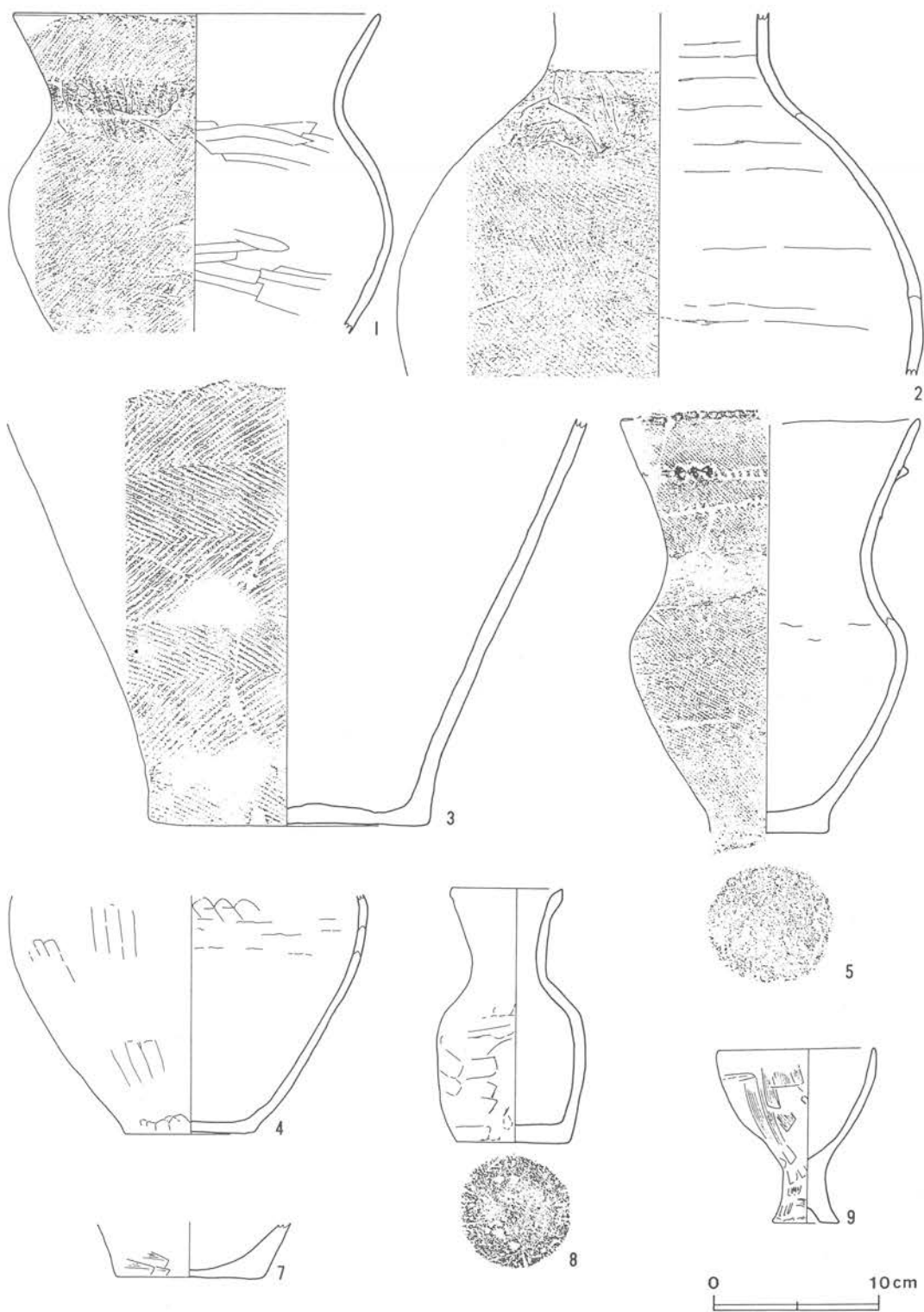
4の広口壺は南西コーナー付近の床面から、5は南東コーナー付近の覆土下層から、6は4の東側の覆土下層からそれぞれ出土している。8の長頸壺は中央からやや東寄りの床面から横位の状態で出土している。9の高坏は北壁中央際の覆土下層から出土している。

所見 北部を中心に、炭化材が床面及び覆土下層から比較的多量に出土し、焼土ブロックも検出されていることから、火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺物からは弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	広口壺 弥生式土器	A 22.4 B (19.9)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外傾している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、頸部を無文帯としている。肩部以下にも附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P81 60% 北東コーナー付近床面
2	広口壺 弥生式土器	B (22.6)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけて大きく内彎して立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。内面には輪積み痕が明瞭に残っている。	砂粒・長石・石英・雲母 明黄褐色 普通	P82 40% 北東コーナー付近床面
3	広口壺 弥生式土器	B (24.8) C 17.3	胴下半部。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとる。内面は剥離が著しい。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P83 25% 南西コーナー付近ピット内
4	広口壺 弥生式土器	B (14.7) C 8.1	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部は無文で、外面は縦方向に粗くヘラ削りされている。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P84 40% 南西コーナー付近床面
5	広口壺 弥生式土器	A [18.1] B 25.5 C 7.0	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、肩張りの形態を示す。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。口唇部と2段の複合口縁には縄文が施されている。口縁下端には縄文原体による刺突が施されている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P85 40% 南東コーナー付近覆土下層 外面スス付着
第38図 6	広口壺 弥生式土器	B (19.6) C 9.4	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英 明灰褐色 普通	P86 30% 南西コーナー付近覆土下層 外面スス付着
第37図 7	広口壺 弥生式土器	B (3.5) C 9.3	胴下半部。平底を呈し、底部から胴部にかけて外傾して立ち上がっている。胴部は無文であり、外面は横ナデ、内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 明黄褐色 普通	P87 5% 炉西側覆土下層
8	細口長頸壺 弥生式土器	A 7.0 B 15.6 C 7.1	平底を呈し、底部から胴部にかけては内彎して立ち上がり、頸部で強くくびれ、口縁部は外反する。最大径を肩部に持つ。外面は無文であり、ナデ調整されている。底面外縁に木葉痕を持つ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P88 95% 中央からやや東寄り 床面
9	高坏 弥生式土器	A [9.6] B 10.8 C 4.0	脚部は「ラッパ」状に開く。坏部は内彎して立ち上がる。脚部外面と坏部外面は軽くハケ目調整されており、内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P89 90% 北壁中央際覆土下層

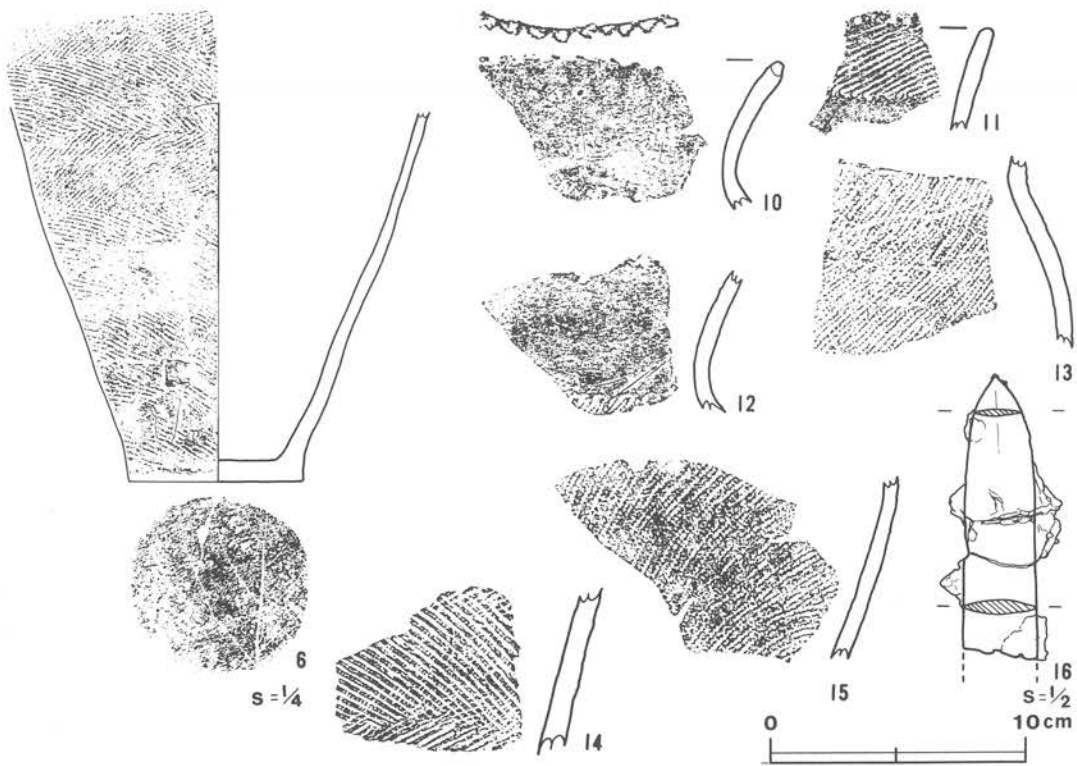
第38図10～15は、第14号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は無文の単口縁を呈し、口縁部が外反する甕形土器である。口唇部は交互押圧により、小波状を呈し、胴部には附加条縄文が施されている。11は縄文施文の単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。頸



第37図 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

部は無文帯としている。12は頸部片であり、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。13～15は胴部片である。13～15には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、14は羽状構成をとっている。

16は覆土から弥生式土器とともに出土した鉄剣であり、2つの刃部の破片が接合されている。基部は欠損しており、^ま柄・^{なかご}茎については不明である。柄等、木質の遺存は認められない。造りは剣形で偏平な形状で反りはなく、中央部に膨らみを持っているが、^{しのぎ}鑄は明瞭でない。^{きつきき}鋒は「フクラ」が付く。



第38図 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図 16	剣	(7.5)	1.9	0.3	—	(16.4)	30	覆土	2片が接合

第15号住居跡 (第39図)

位置 Z地区北部, B4e3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.73m, 短軸3.78mの楕円形を呈している。

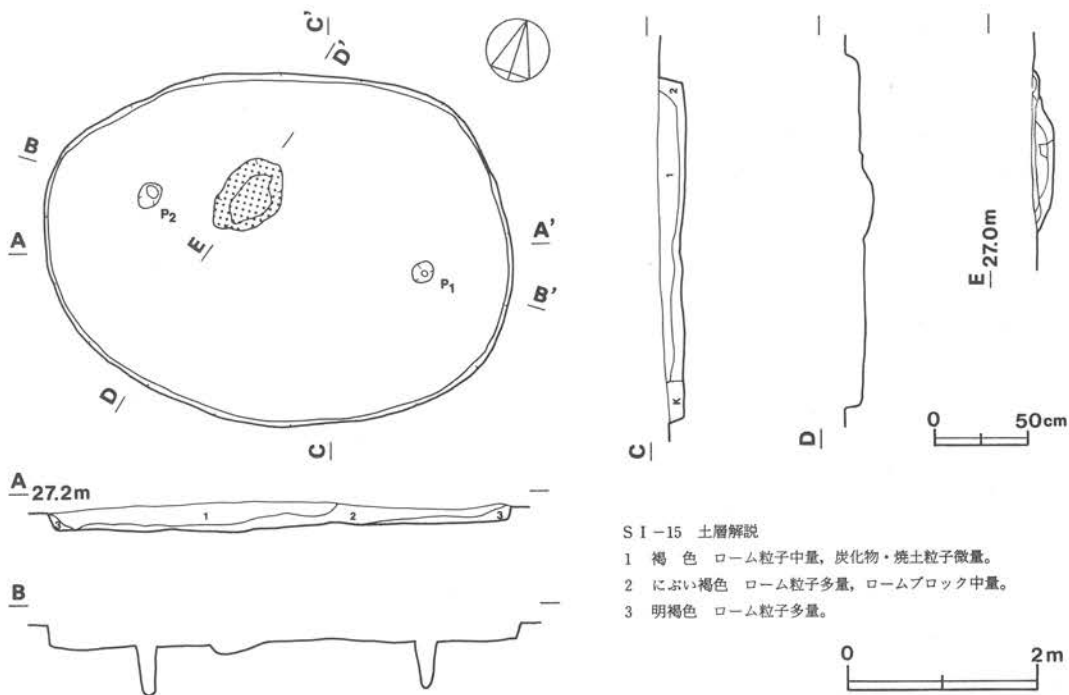
長軸方向 N-61°-E。

壁 壁高14~31cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

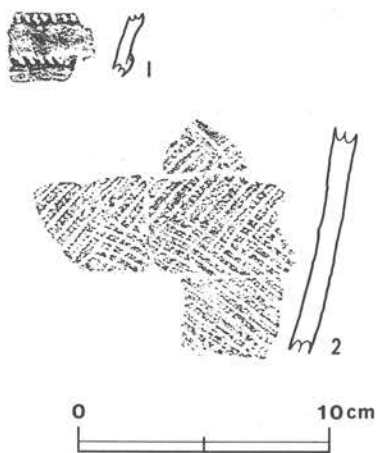
床 ほぼ平坦であり、さほど踏み固められておらず、軟らかい。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は長径26~30cm, 短径20~22cmの楕円形を呈し、深さは51~53cmの支柱穴である。配列から2本柱の住居と思われる。

炉 短軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径90cm, 短径61cmの楕円形を呈し、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。



第39図 第15号住居跡実測図



第40図 第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・にぶい褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 主に覆土下層から弥生式土器細片(106点)と土師器細片(55点)が出土している。1の口縁部片は住居跡中央の覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第40図1・2は、第15号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は無文で2段の複合口縁を呈するものと思われるが、1段目が欠損している。口縁下端には縄文原体による押圧が施されている。2は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。

第16号住居跡（第41図）

位置 Z地区中央部，B4e₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.64m，短軸5.55mの隅丸長方形を呈する。

長軸方向 N-32°-E。

壁 壁高11～32cmで，北西壁，北東壁，南東壁は外傾し，南西壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，南東壁付近と炉周辺が踏み固められて硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は径24～32cmの円形を呈し，深さは53～72cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径33cmの円形を呈し，深さ50cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北東寄りに検出されている。平面形は長径111cm，短径74cmの楕円形を呈し，床を6cm掘り込んだ地床炉である。南西部からは，炉の長軸とほぼ直交する形で炉石が出土している。炉床はあまり焼けていない。

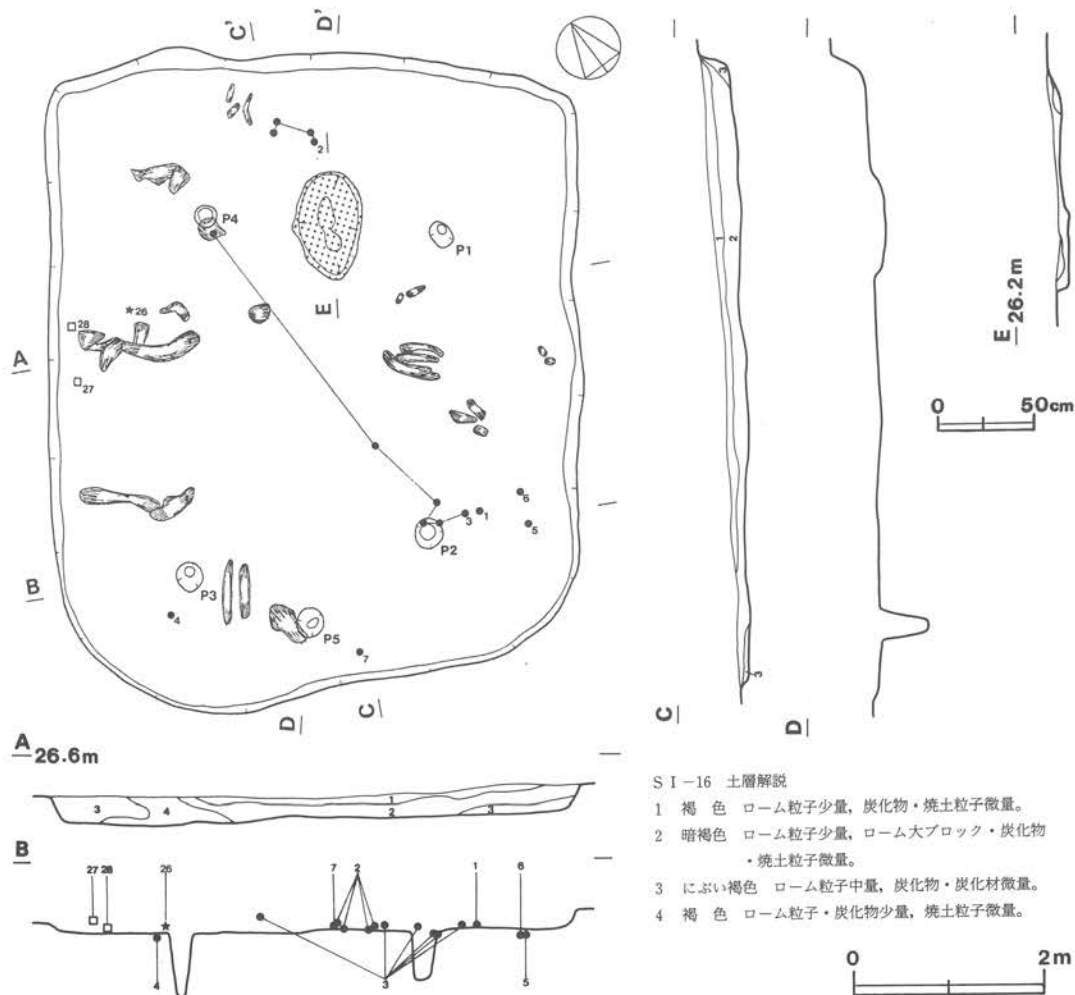
覆土 褐色土・暗褐色土が全体に堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下層から弥生式土器片（広口壺5，長頸壺1，細口壺1），弥生式土器細片（375点）が出土している。1・5・6の広口壺は南コーナー付近の床面から横位の状態で出土している。2は底部を欠損している広口壺で，北東壁中央部付近の床面から出土している。3は1の西側の床面からの出土で，一部覆土上層のものと接合している。4は西コーナー付近の床面から出土している。26の紡錘車，27・28の磨石は北西壁中央部付近の覆土下層から出土している。

所見 床面からは炭化材が比較的多量に出土しており，火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺物からは弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	広口壺 弥生式土器	A 20.0 B (21.6)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。縄文施文の単口縁を呈し，口唇部にも縄文が施されている。羽状構成をとらず，縄文原体は太めの単節縄文である。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P90 80% 南コーナー付近床面 外面スス付着

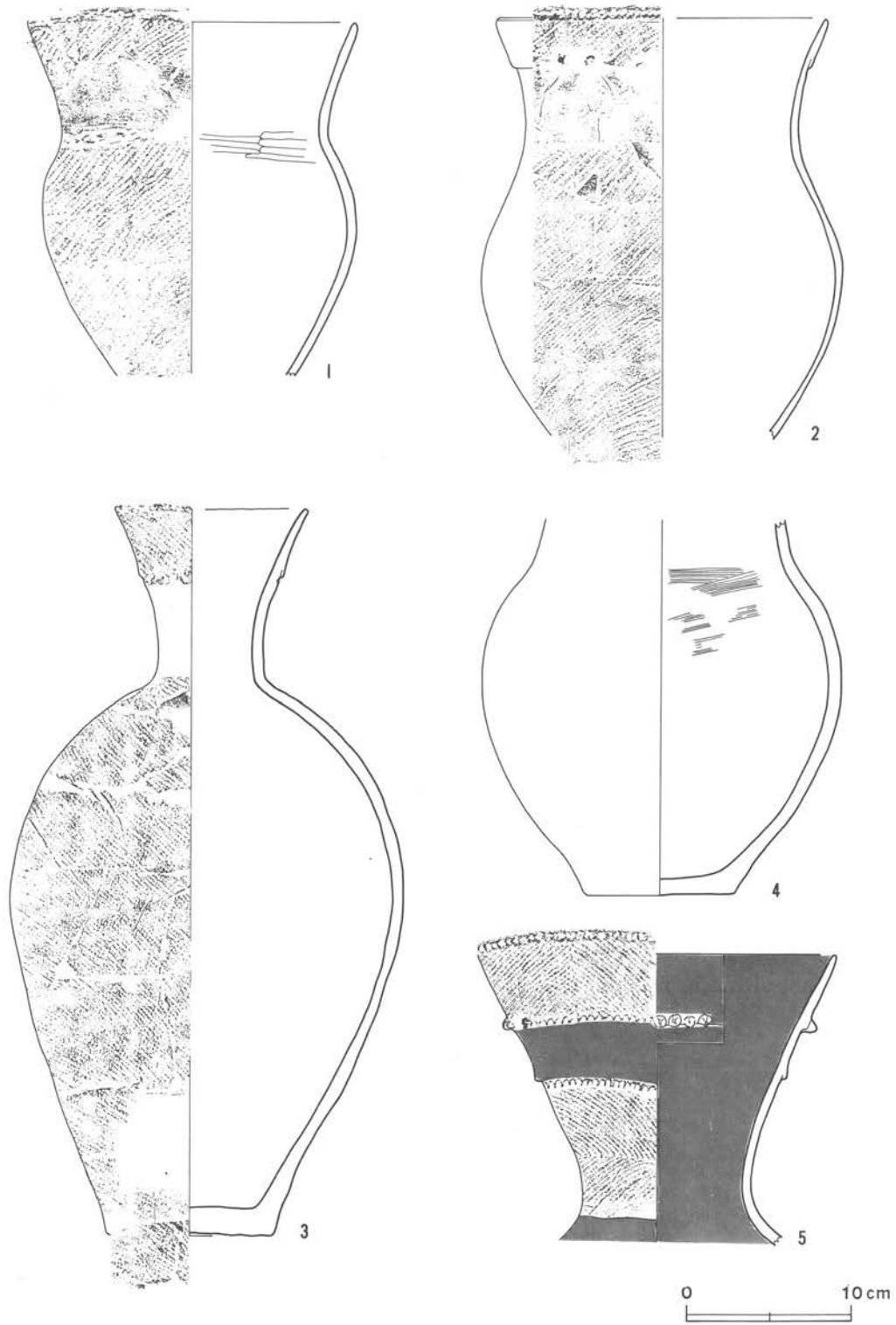


SI-16 土層解説

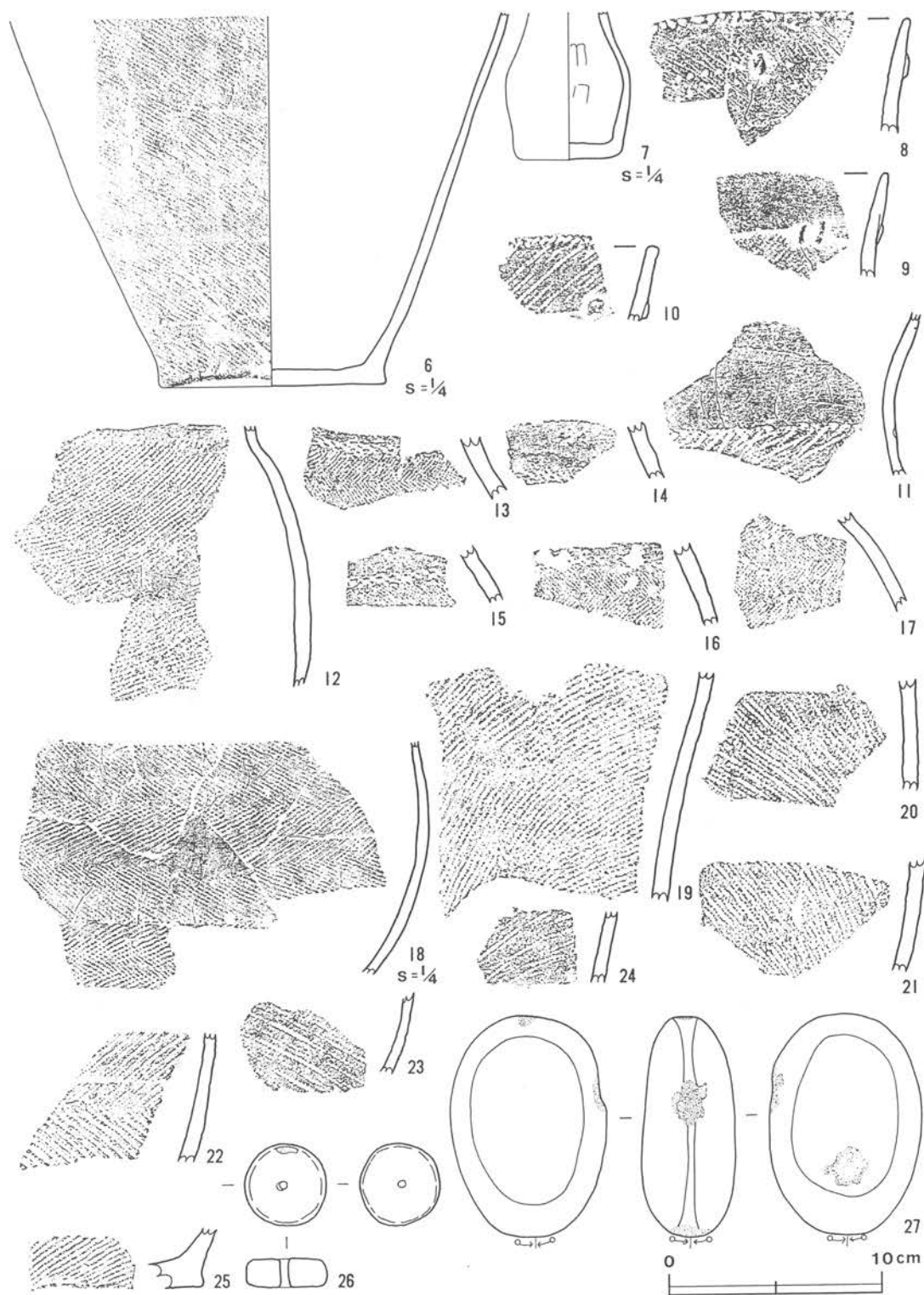
- 1 褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム大ブロック・炭化物・焼土粒子微量。
- 3 におい褐色 ローム粒子中量, 炭化物・炭化材微量。
- 4 褐色 ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。

第41図 第16号住居跡実測図

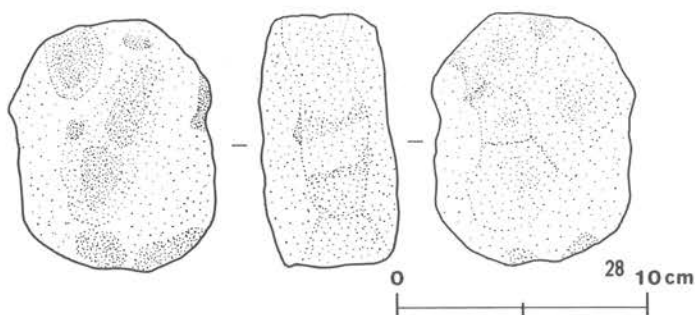
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42図 2	広口壺 弥生式土器	A [19.8] B (25.7)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁下端には2個1組の瘤が貼られている。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・雲母 におい橙色 普通	P91 50% 北東壁中央部付近床面 外面スス付着
3	細口壺 弥生式土器	A [11.7] B 44.6 C 10.1	平底。長めの胴部は内彎して立ち上がる。頸部で強くくびれ、頸部から口縁部にかけては外反している。器高に比べ、口径が小さい。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の複合口縁を呈し、頸部を無文帯としている。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。口縁部内面は横ナデされ、胴部には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 におい橙色 普通	P92 70% 南コーナー付近床面
4	広口壺 弥生式土器	B (23.0) C 9.0	胴下半部。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。最大径を胴部上位に持つ。外面は無文で軽くハケ目調整されている。内面も軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英 におい橙色 普通	P93 40% 西コーナー付近床面 外面スス付着



第42図 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第43图 第16号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)



第44図 第16号住居跡出土遺物実測図(3)

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42図 5	広口壺 弥生式土器	A 21.5 B (17.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。2段の複合口縁を呈し、1段目には縄文が施され、縦回転による羽状構成をとり、下端に4個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。2段目と頸部下半を無文帯とし、赤彩されている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。内面は横ナデされ、口縁部が赤彩されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P94 30% 南コーナー付近床面
第43図 6	広口壺 弥生式土器	B (24.2) C 14.2	胴下半部。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。内面は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P95 40% 南コーナー付近床面 外面スス附着
7	長頸壺 弥生式土器	B (9.3) C 6.4	底部片。胴部は底部から内彎して立ち上がる。外面は無文で、縦方向にナデ調整されている。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P96 30% 南西壁中央際覆土下層

第43図8～25は、第16号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～10は口縁部片である。8は縄文施文の単口縁を呈し、横位に2列、縄文原体による刺突が施されており、その間に瘤が貼られている。9は無文の複合口縁を呈し、下端に2個1組の瘤が貼られている。頸部には縄文が施されている。10は縄文施文の薄い複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁下端には瘤が貼られている。11は頸部片であり、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。12～24は胴部片である。12は頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとっていない。13～17は胴部上位に結節文区画による羽状縄文が施されているもので、同一個体と思われる。18～22には附加条1種(附加2条)の縄文が、23・24には附加条1種(附加1条)の縄文が施されている。25は平底で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第43図 26	紡錘車	3.9	3.9	1.4	4.0	25.8	100	覆土下層	D P31

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第43図	磨石	10.4	7.5	4.6	491.7	砂岩	覆土下層	Q9
第44図	磨石	10.2	8.1	5.4	686.4	砂岩	覆土下層	Q10

第18号住居跡（第45図）

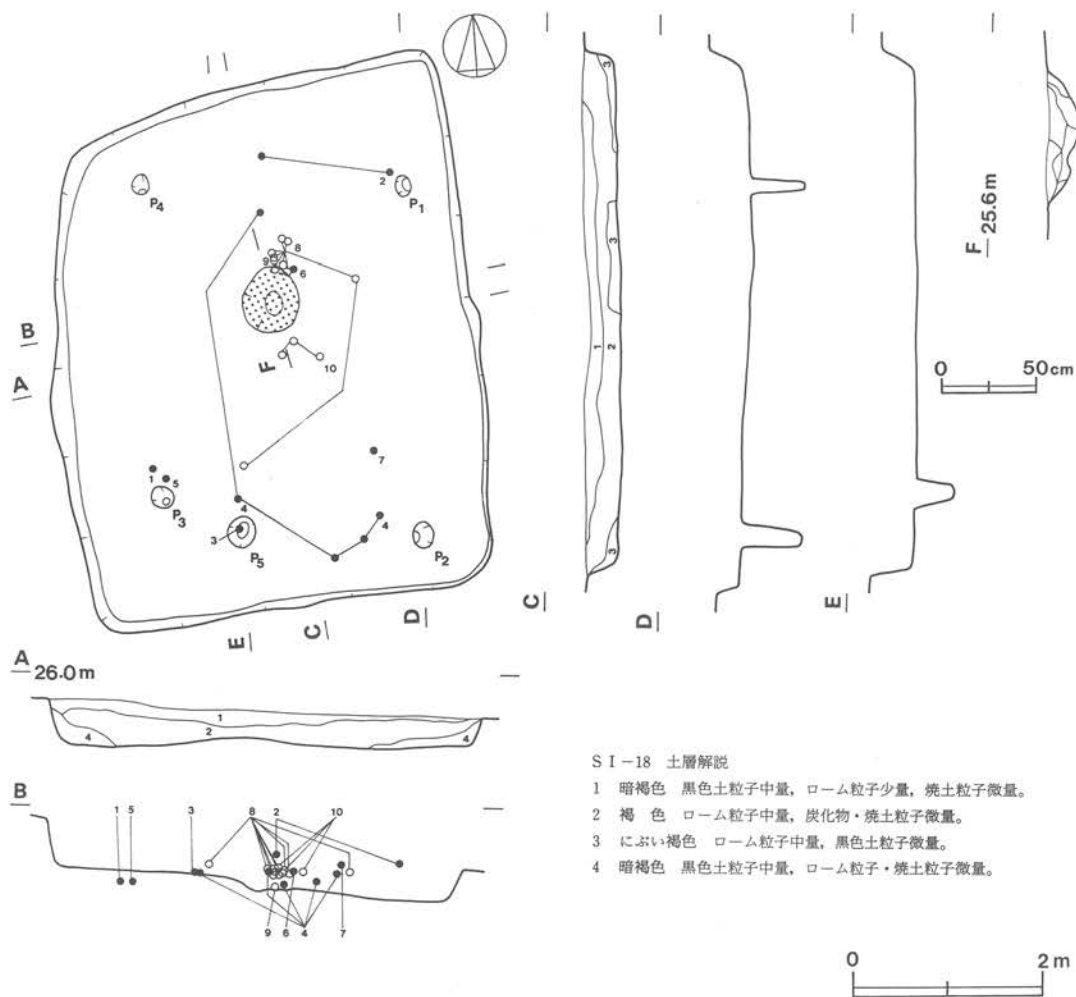
位置 Z地区中央部，B3j₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.50m，短軸4.50mの不整長方形を呈している。

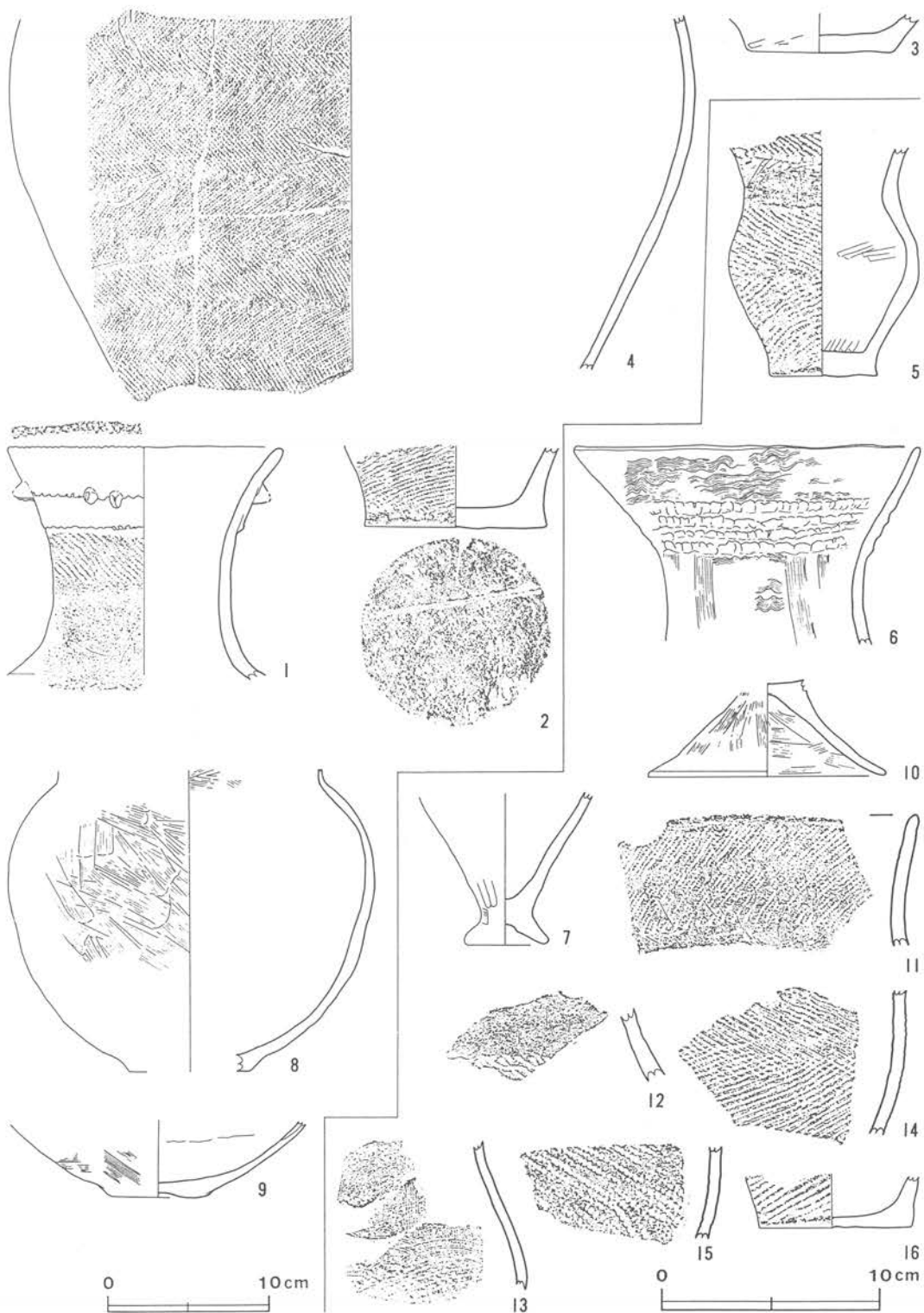
長軸方向 N-4°-W。

壁 壁高28~50cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体に軟らかい。



第45図 第18号住居跡実測図



第46图 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は長径23~28cm, 短径18~22cmの楕円形を呈し、深さは55~63cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は長径34cm, 短径30cm, 深さ41cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径68cm, 短径57cmの楕円形を呈し、床を16cm掘り込んだ地床炉である。炉床はあまり焼けていない。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層から弥生式土器片(広口壺 6, 台付甕 1), 弥生式土器細片(102点)と土師器片(甕 1, 壺 1, 台付甕 1), 土師器細片(387点)が混在した状態で比較的多量に出土している。1は弥生式土器の広口壺で南西コーナー付近の床面から正位の状態で出土している。4は弥生式土器の胴部片で南壁付近の床面から出土したものと、炉北側の覆土下層から出土したものが接合されている。5は小形の弥生式土器の広口壺であり、南西コーナー付近の床面から斜位の状態で、8は土師器の甕で炉北側の覆土下層からそれぞれ出土している。6は弥生式土器の広口壺で炉北側の床面から出土している。9は土師器の壺底部片で炉北側の床面から正位の状態で出土している。10は台付甕の脚部で中央部覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態が不整形長方形を呈していることや、床面から弥生式土器が多量に出土していることから、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.0	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。無文で2段の複合口縁を呈し、口唇部と口縁下端には縄文原体による瓦痕が施されている。1段目の下端には2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部上半には縄文が施され、頸部下半はやや幅広い無文帯となっている。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P112 30% 南西コーナー付近床面
		B (14.3)			
2	広口壺 弥生式土器	B (4.9)	胴下半部。底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P113 10% 北東コーナー付近 覆土下層
		C 11.3			
3	広口壺 弥生式土器	B (2.0)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。無文で内・外面ともにナデ調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P114 10% 南壁中央付近覆土下層
		C 9.1			
4	広口壺 弥生式土器	B (21.9)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P115 70% 南壁付近床面
5	広口壺 弥生式土器	B (10.6)	口縁部欠損。平底。胴部から頸部にかけて内彎して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。内面は粗くへら削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P116 70% 南西コーナー付近床面 内・外面スス付着
		C 5.0			
6	広口壺 弥生式土器	A 15.9	頸部から口縁部にかけての破片。胴部は底部から外傾して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。口縁は片口状を呈している。口縁部には横走波状文が施され、頸部とは4本の押瓦隆起線により区画している。頸部にはスリット手法による横走波状文が施されており、櫛歯数は10本である。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P118 20% 炉北側床面
		B (9.2)			
7	台付甕 弥生式土器	B (6.9)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部に対して脚部は短く、坏部は外傾して立ち上がる。内・外面とも横ナデ調整されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P122 15% 南東コーナー付近覆土上層
		D 3.8			
		E 1.0			

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 8	壺 土師器	B (8.7) C [7.6]	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面は斜位のハケ目整形。胴部内面は横位・斜位のハケ目整形後に粘土貼り付け。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P119 30% 炉北側覆土下層 内・外面スス付着
9	壺 土師器	B (4.8) C 6.4	胴下半部。上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面はハケ目整形。内面はハケ目整形後に横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P120 5% 炉北側床面
10	台付壺 土師器	D 10.9 E 4.5	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。	外面は縦位のハケ目整形。内面は横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P121 30% 中央部覆土中層 外面スス付着

第46図11～16は、第18号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11は縄文施文の単口縁を呈し、頸部を無文帯としている広口壺である。12・13は頸部片である。12は頸部下半を無文帯とし、胴部には直前段反捲りの縄文が施されている。13はスリット手法による充填波状文が施されており、胴部には附加条2種（附加1条）の縄文が施されている。14・15は胴部片であり、14には細目の附加条縄文が、15には太目の附加条縄文が施されている。16は平底で胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第20号住居跡（第47図）

位置 Z地区西部，C2c₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.10m，短軸3.65mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-23°-W。

壁 壁高20～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，南東壁寄りによく踏み固められて硬い。

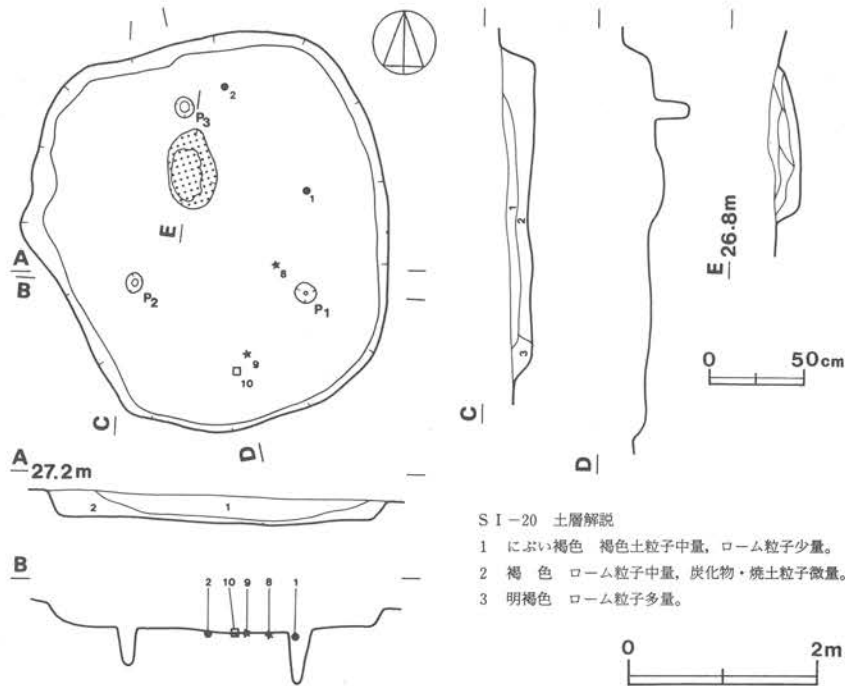
ピット 3か所(P₁～P₃)検出されている。P₁～P₃は径19～24cmのほぼ円形を呈し，深さは36～49cmである。支柱穴と思われるが，他に柱穴は検出されていない。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径82cm，短径50cmの楕円形を呈し，床を16cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け，赤変硬化している。

覆土 褐色土・にぶい褐色土が全体に堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 中央部から東部の床面を中心に，弥生式土器片（広口壺2），弥生式土器細片（102点）と土師器細片（102点）が混在して出土している。1は広口壺の下半部であり，北東壁中央付近の床面から，2の広口壺は北西壁ほぼ中央付近の床面から，それぞれ横位の状態で出土している。9の紡錘車は南東壁付近，8は中央部からやや南東側の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



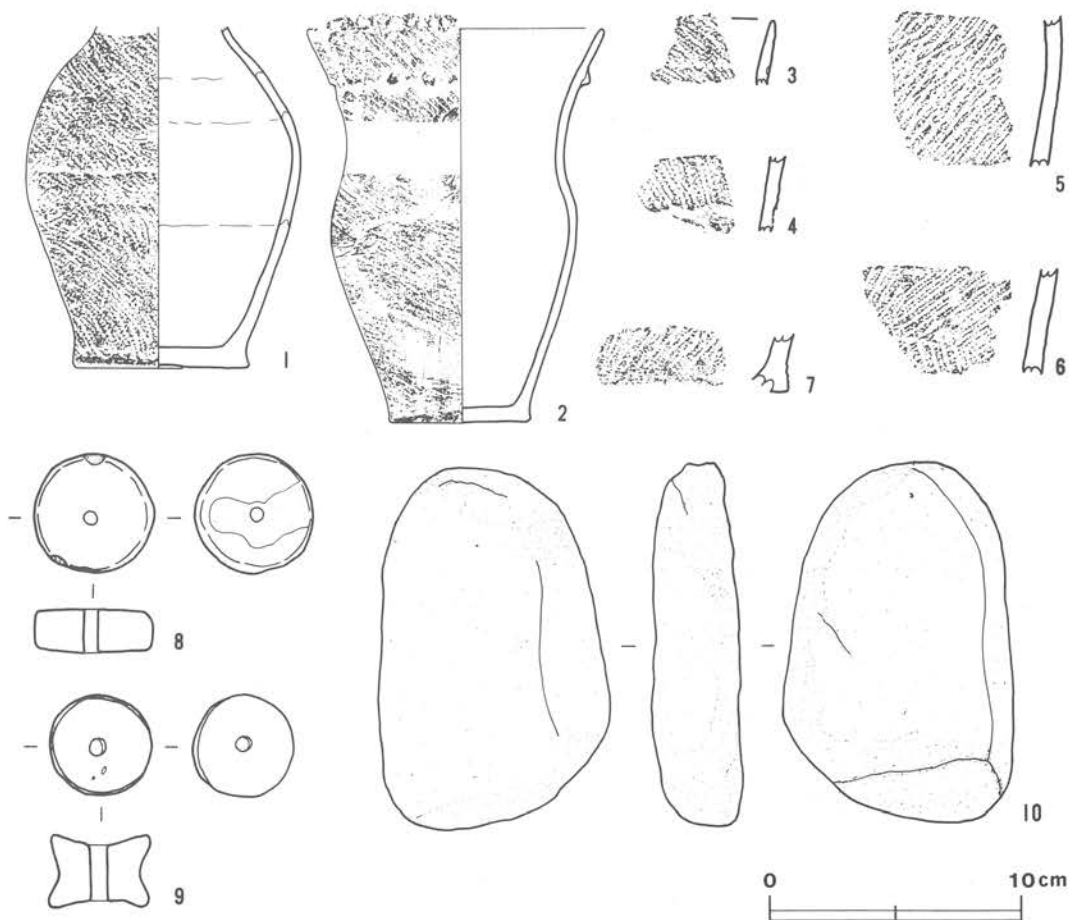
第47図 第20号住居跡実測図

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	広口壺	B (13.7)	口縁部欠損。張り出しを持つ平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部は強くくびれる。頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P123 70% 北東壁中央付近床面
	弥生式土器	C 6.9			
2	広口壺	A 11.7	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下には2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P124 80% 北西壁中央付近床面
	弥生式土器	B 15.8			
		C 5.7			

第48図3～7は、第20号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は縄文施文の単口縁を呈し、縄文原体による刺突が横位になされている。4は縄文施文の単口縁を呈し、頸部を無文帯としている。5・6は胴部片で附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。7は底部片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第48図 8	紡錘車	4.8	4.7	1.7	6.0	45.4	100	床面	DP34
	紡錘車	4.1	4.0	2.9	6.5	45.9	100	床面	DP35
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第48図 10	敲石	14.5	9.3	3.5	763.4	砂岩	覆土	Q12	



第48図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図

第21号住居跡 (第49図)

位置 Z地区北西部, C2a₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.71m, 短軸4.40mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-66°-E。

壁 壁高25~38cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 中央部からやや北西壁寄りに長さ4.05m, 幅1.02mの攪乱坑がある。全体に平坦であるが, 床面は軟らかい。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径24~30cmの円形を呈し, 深さは37~44cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は北西壁寄りから検出され, 径30cmの円形を呈し, 深さ64cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

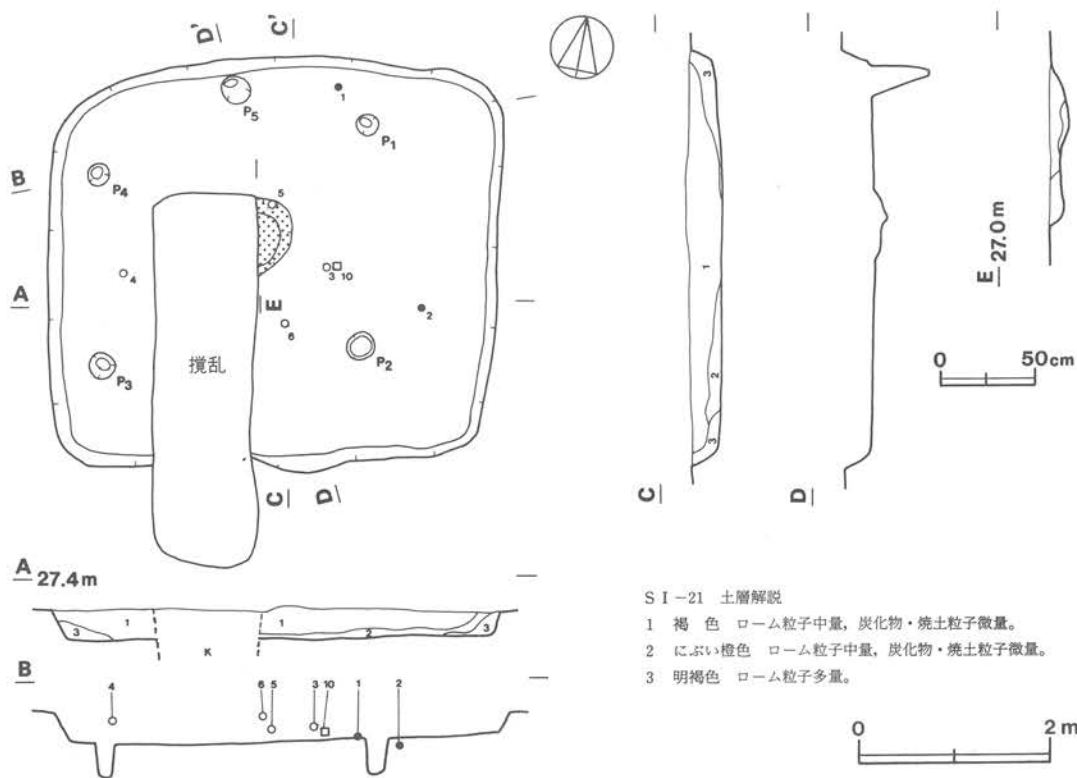
炉 ほぼ中央に検出されている。西部を破壊されているが, 平面形は長径80cm, 推定短径 [70] cmの楕円形を呈していたと思われる, 床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床はあまり焼けていな

い。

覆土 褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 床面及び覆土下層から弥生式土器片(広口壺2), 弥生式土器細片(275点)が, 覆土中・上層から土師器片(甕1, 壺1, 高坏2), 土師器細片(93点)が出土している。1は弥生式土器の底部片で北西壁中央際の床面から逆位の状態で, 2は弥生式土器の胴部片で南東壁付近の床面から, 3は土師器の甕で中央部の覆土中層から出土している。5は土師器の高坏で中央部の覆土下層から, それぞれ出土している。その他, 10の石鏃が中央部の覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や床面の遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

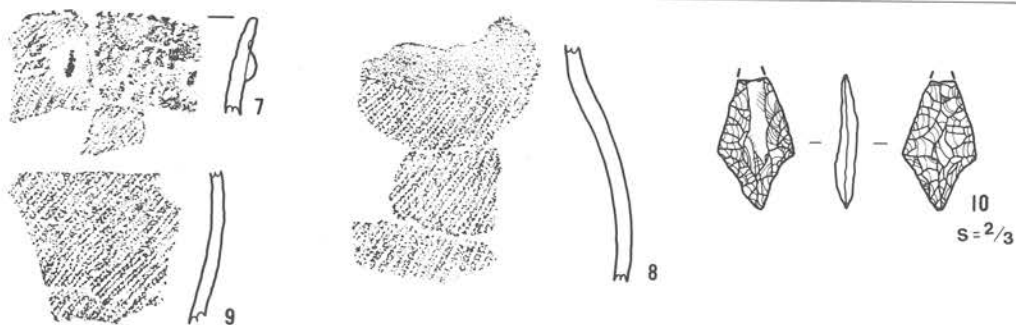
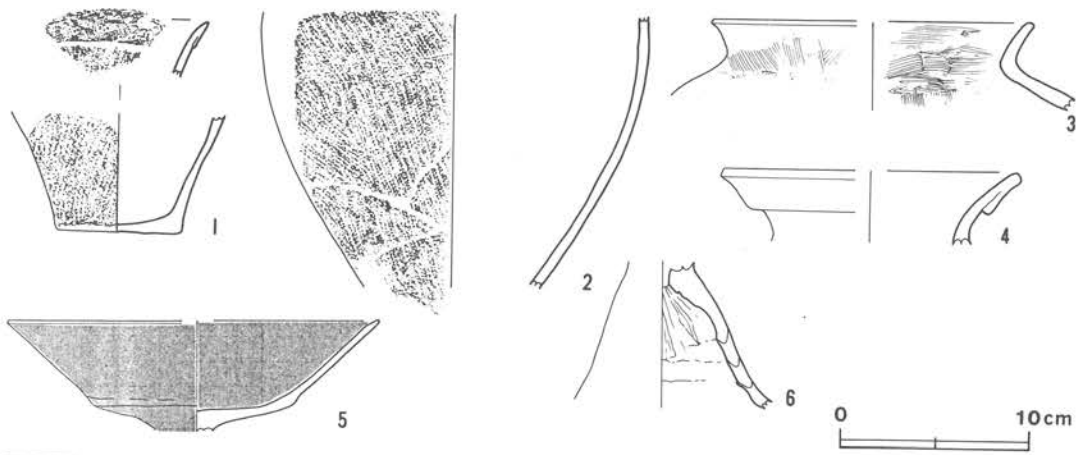


第49図 第21号住居跡実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	広口壺 弥生式土器	B (6.4)	底部片。胴部は底部から内彎して立ち上がる。無文の複合口縁を呈し、頸部に縄文が施されている土器と同一個体。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P125 20% 北西壁中央際床面
		C 6.7			
2	広口壺 弥生式土器	B (14.6)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英・ スコリア 橙色 普通	P126 10% 南東壁付近床面 外面スス付着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 3	甕 土師器	A [16.6]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	口縁部外面は縦位のハケ目整形。内面は横位のハケ目整形。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P127 5% 中央部覆土中層
		B (4.6)				
4	壺 土師器	A [15.5]	口縁部片。複合口縁。口縁部は外反して立ち上がる。	内・外面ともに横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P128 5% 西壁中央付近覆土上層
		B (3.8)				
5	高 土師器	A [19.2]	坏部片。坏部は稜を持ち、外傾して立ち上がる。	内・外面ともに横ナデ後に赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P129 40% 中央部覆土下層
		B (5.9)				
6	高 土師器	B (7.8)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	外面はヘラナデ。内面は指ナデ。下半に輪積み痕。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P130 30% 中央からやや南寄り 覆土中層



第50図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

第50図7～9は、第21号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は縄文施文の単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁中位には縄文原体による刺突文が2列横位に施されており、その間に瘤がやや間隔をおいて貼られている。8は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9は胴部片で8と同一個体と思われる。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第50図	石 鉢	(2.6)	1.5	0.4	(1.4)	頁岩	覆土下層	Q13

第22号住居跡 (第51図)

位置 Z地区北西部, C1j₅区を中心に確認されている。北コーナー部は調査区外へのびている。

規模と平面形 長軸推定で [4.80] m, 短軸4.45mの隅丸方形を呈すると思われる。

長軸方向 N-53°-W。

壁 壁高43~75cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

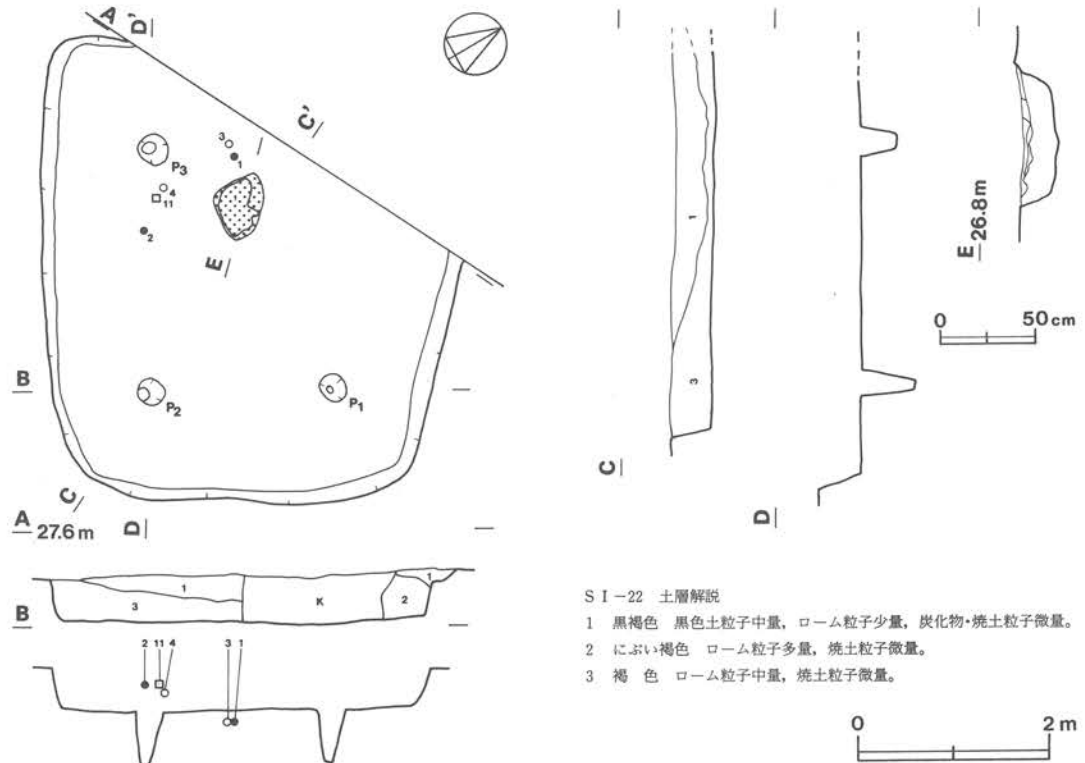
床 ほぼ平坦で, 南西壁付近は踏み固められて硬い。

ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁~P₃は径25~28cmの円形を呈し, 深さ39~58cmの支柱穴である。北側の支柱穴は未検出であるが, 支柱穴を結んだ線は長方形となるものと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径75cm, 短径51cmの不定形で, 床を18cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け, 赤変硬化している。

覆土 褐色土の上に黒褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

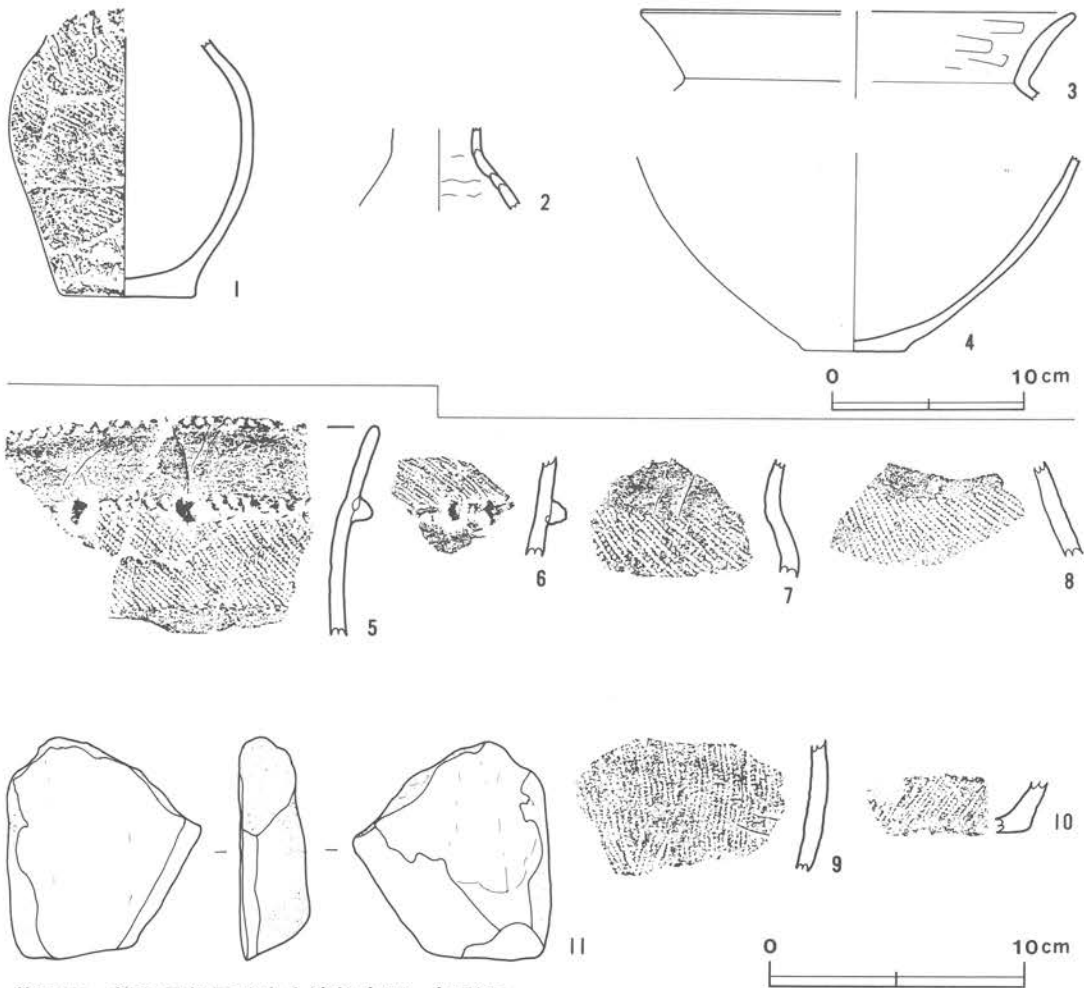
遺物 中央からやや西寄りに集中して, 弥生式土器片と土師器片が少量出土している。弥生式土器片(広口壺1, 長頸壺1), 弥生式土器細片(164点)は床面及び覆土下・中層から, 土師器片(甕2), 土師器細片(577点)は床面及び覆土中・上層から出土している。1は弥生式土器の広口壺で中央から北西寄りの床面から横位の状態で, 4は土師器の甕底部片で中央から西寄りの覆土中層か



第51図 第22号住居跡実測図

ら出土している。3は土師器の甕口縁部片で中央から北西寄りの床面から出土している。

所見 住居跡の形態や床面の出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第52図 第22号住居跡出土遺物実測・拓影図

第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第52図 1	広口壺 弥生式土器	B (10.4)	胴下半部。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P131 60% 中央から北西寄り床面	
		C 5.4				
2	長頸壺 弥生式土器	B (3.4)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎してから、ほぼ垂直に立ち上がる。外面は無文で、軽くハケ目調整されている。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・石英・ 雲母 浅黄橙色 普通	P132 10% 中央からやや北西寄り 覆土中層	
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕 土師器	A [22.9]	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	外面は横ナデ。内面は粗いヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P134 5% 中央から北西寄り床面
		B (4.7)				
4	甕 土師器	B (10.5) C 5.6	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・ にぶい赤褐色 普通	P133 20% 中央から西寄り覆土中層

第52図5～10は、第22号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は無文の単口縁を呈し、口唇部と口縁下端には縄文原体による押圧が施されている。口縁下端に貼瘤を持つ。頸部上半には単節縄文が施され、下半を無文帯としている。6は縄文施文の単口縁を呈し、下端には縄文原体による押圧と貼瘤が見られる。頸部は無文帯としている。7・8は頸部片であり、下半を無文帯とし、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9は胴部片であり、単節縄文が施されている。10は底部片であり、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第52図	11 磁石	8.7	7.8	2.9	202.3	硬砂岩	覆土中層	Q14

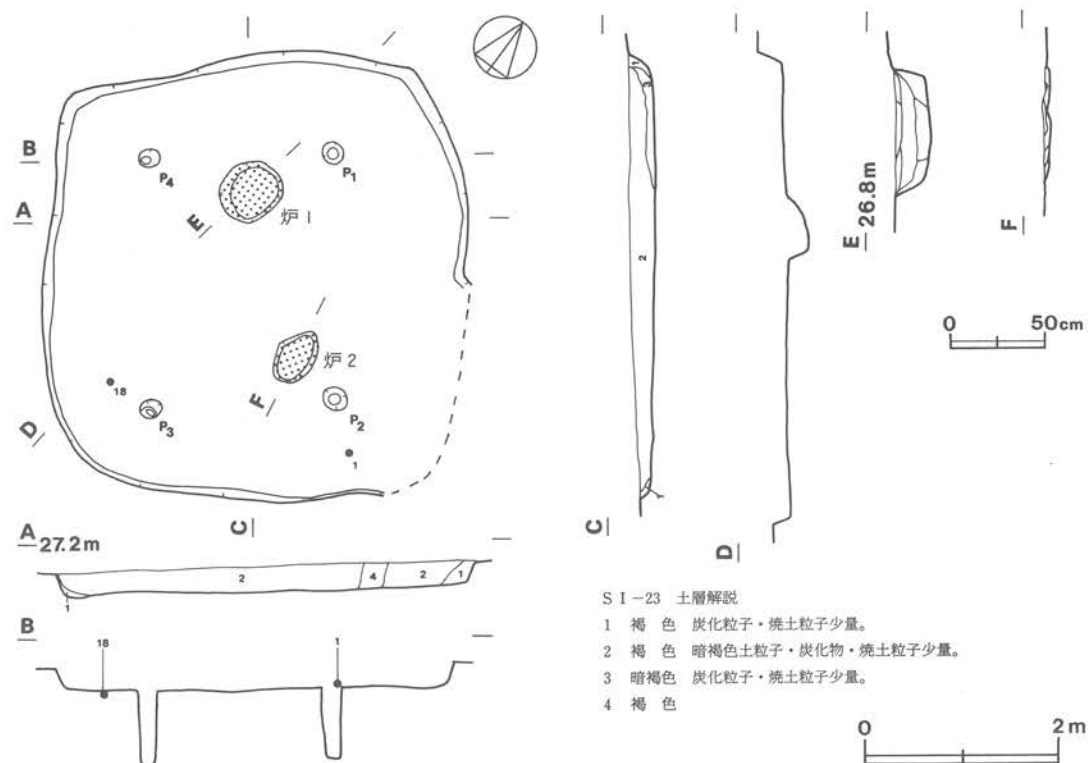
第23号住居跡（第53図）

位置 Z地区東部、B4ds区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.70m、短軸4.37mの不整隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-38°-W。

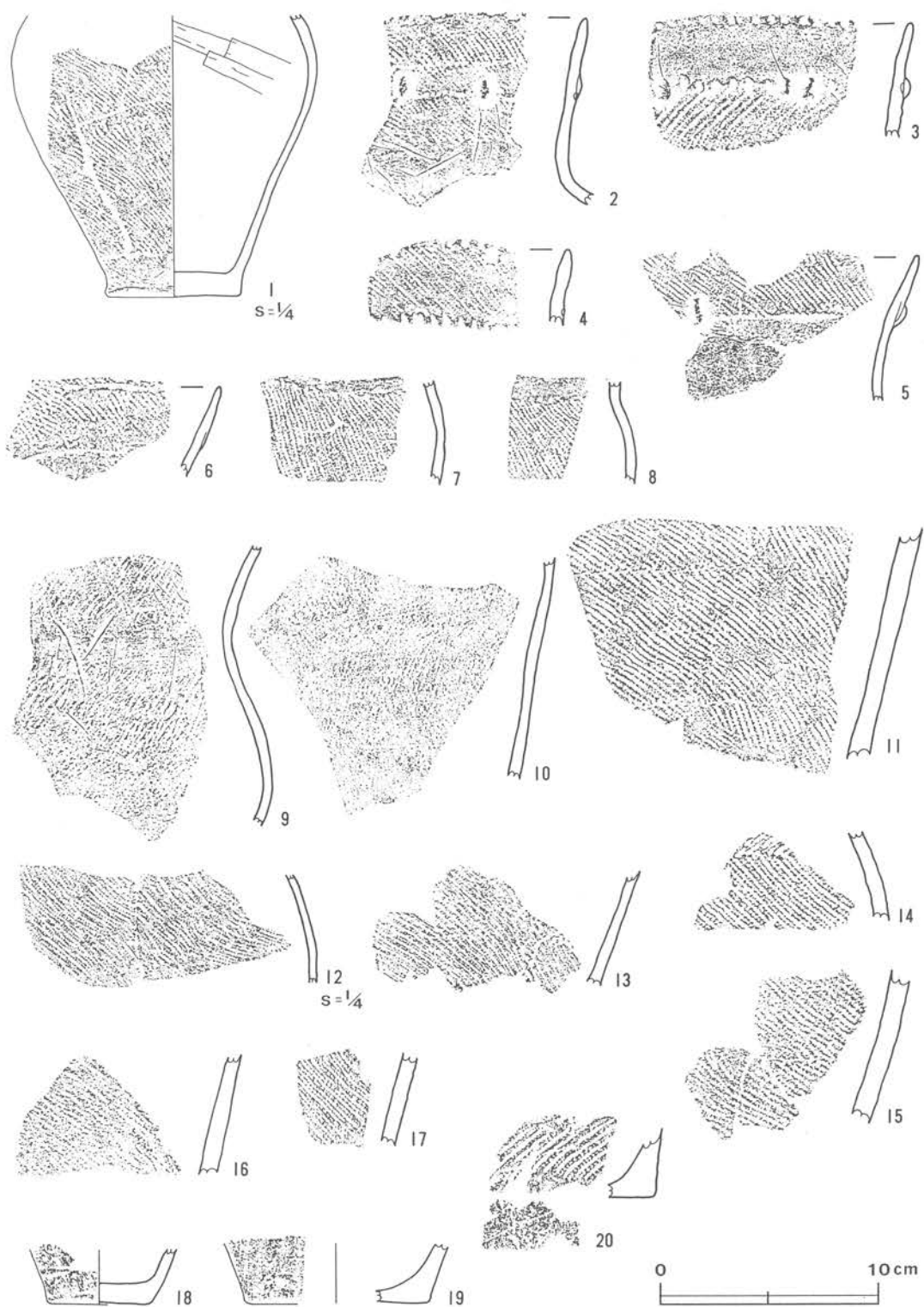
壁 壁高12~28cmで、外傾して立ち上がっている。



第53図 第23号住居跡実測図

S1-23 土層解説

- 1 褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 暗褐色土粒子・炭化物・焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 褐色



第54图 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は径20~26cmの円形を呈し、深さは70~86cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は、長方形となる。

炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁は中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径69cm、短径57cmの楕円形を呈し、床を17cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。炉₂は中央からやや南東寄りに検出されている。平面形は長径59cm、短径47cmの楕円形を呈し、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床はあまり焼けていない。

覆土 暗褐色土粒子を含む褐色土が厚く堆積し、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に、弥生式土器片(広口壺1)、弥生式土器細片(169点)が出土している。1の広口壺は東コーナー付近の床面から、18の底部片は南コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	広口壺 弥生式土器	B (17.5) C 8.4	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。単節縄文が施されるが、羽状構成をとらない。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P135 40% 東コーナー付近床面 内・外面スス付着

第54図 2~20は、第23号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2~6は口縁部片である。2は縄文施文の単口縁を呈し、中位と下位に縄文原体による刺突文が周回する。その刺突文の間にはやや間隔をもって、瘤が貼られている。頸部は上半に縄文が施され、下半を無文帯としている。3は無文の薄い複合口縁を呈し、下端には2個1組の貼瘤を持つ。頸部上半には縄文が施されている。4は縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部と下端には原体による押圧が施されている。5・6は同一個体と思われ、単節縄文の施される複合口縁を呈し、下端には貼瘤を持つ。頸部を無文帯としている。7~9は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。9の原体は直前段反撚りである。10~17は胴部片である。14以外は羽状構成をとらず、原体は10が直前段反撚り、11・12・15は単節縄文、13・14・16・17は附加条1種(附加2条)である。18~20は底部片である。18・19は外面無文である。20の胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、底面には木葉痕を持つ。

第24号住居跡 (第55図)

位置 Z地区南東部、C4a₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.20m、短軸3.72mの不整長方形を呈している。

長軸方向 N-86°-W。

壁 壁高10~33cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められて硬い。

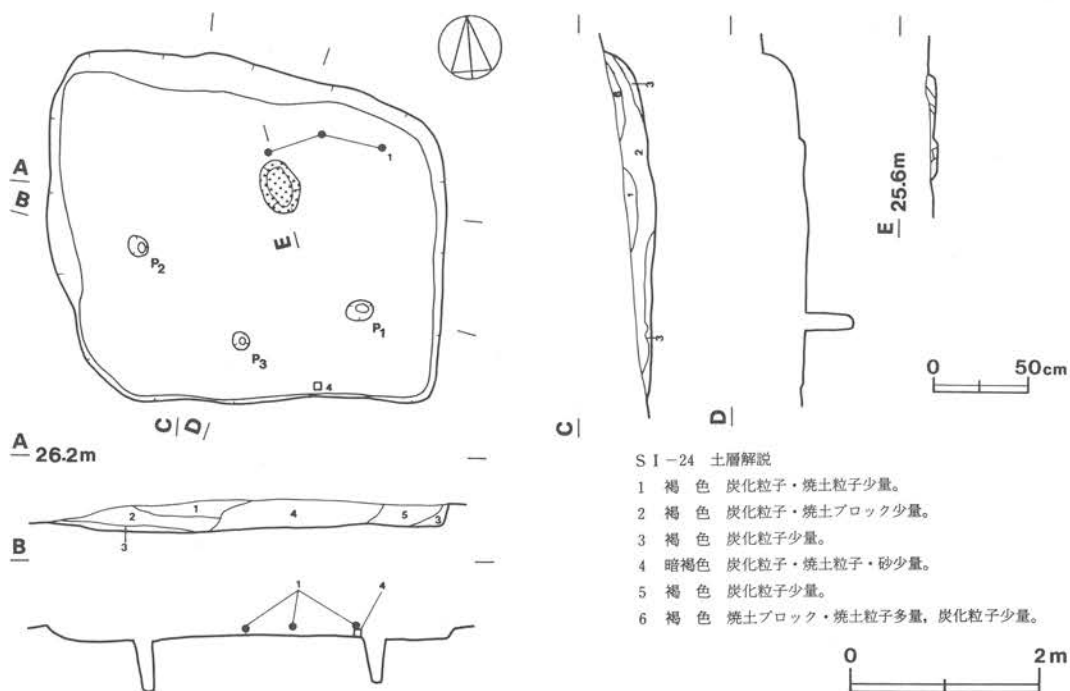
ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁~P₃は径18~25cmの円形を呈し、深さは48~55cmであり、支柱穴と思われる。P₁~P₃の配列では南側に片寄っているが、他にピットは検出されていない。

炉 中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径56cm、短径38cmの楕円形を呈し、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部の一部が焼土化している。

覆土 暗褐色土の上に褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 北壁付近の床面及び覆土下層から弥生式土器片(広口壺1)、弥生式土器細片(30点)が出土している。1の胴部片は北壁中央部付近の覆土下層から出土したものと、北東コーナー付近の覆土下層から出土したものが接合されている。4の砥石は南壁際の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



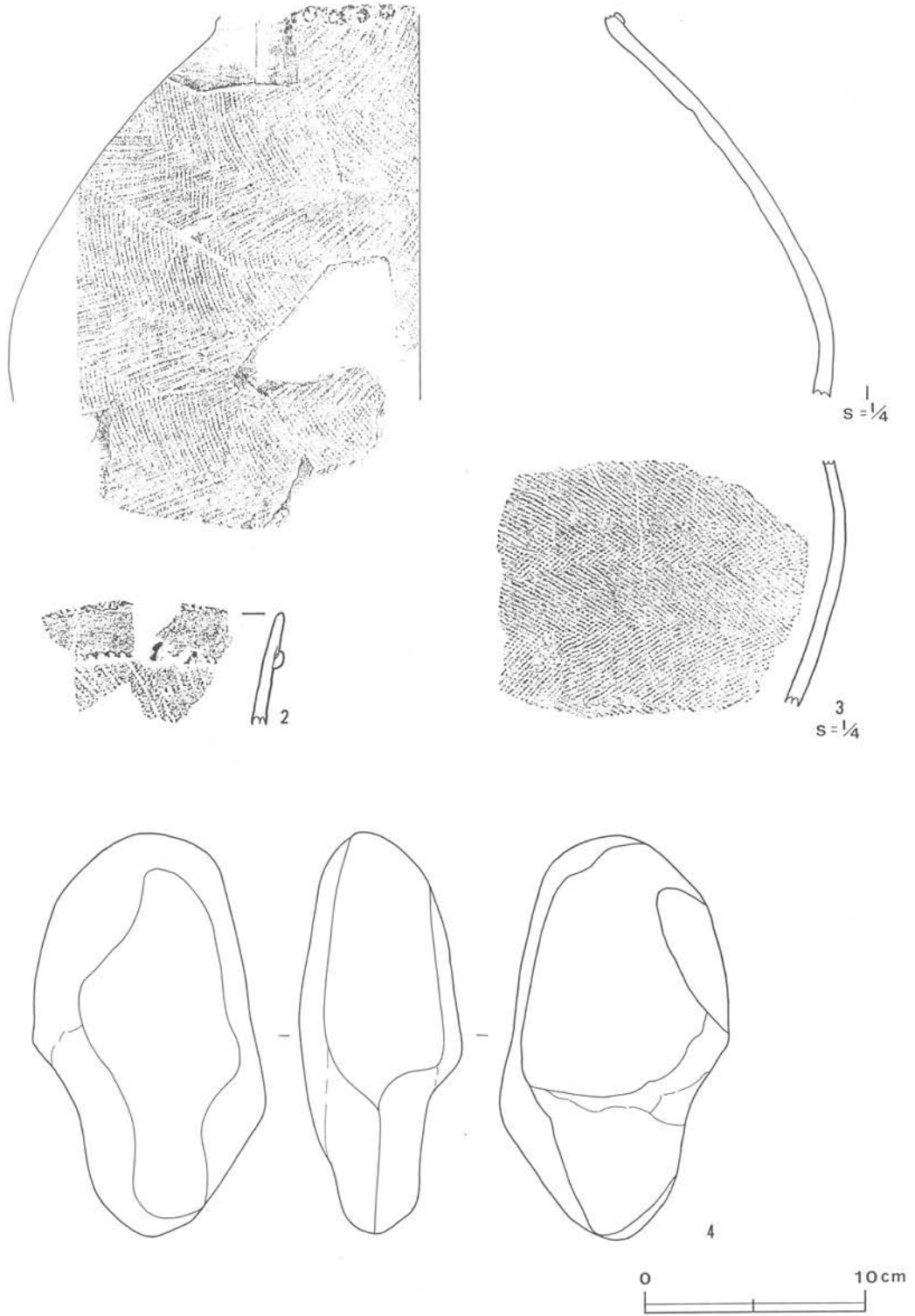
SI-24 土層解説

- 1 褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 炭化粒子・焼土ブロック少量。
- 3 褐色 炭化粒子少量。
- 4 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂少量。
- 5 褐色 炭化粒子少量。
- 6 褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子少量。

第55図 第24号住居跡実測図

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	広口壺 弥生式土器	B (23.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては大きく内彎して立ち上がる。頸部下端にボタン状の貼り付けがなされている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。内面は摩滅している。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P138 30% 北壁中央付近覆土下層



第56图 第24号住居跡出土遺物実測・拓影図

第56図2・3は、第24号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は無文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施されている。口縁下端には縄文原体による押圧が施され、2個1組の瘤が貼られている。頸部上半には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3は胴部片であり、細目の附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第56図	4 砥石	18.1	10.8	7.5	1490.7	砂岩	床面	Q15

第25号住居跡（第57図）

位置 Z地区中央部B4j_s区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.38m、短軸2.54mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-55°-E。

壁 壁高8~24cmで、外傾して立ち上がっている。

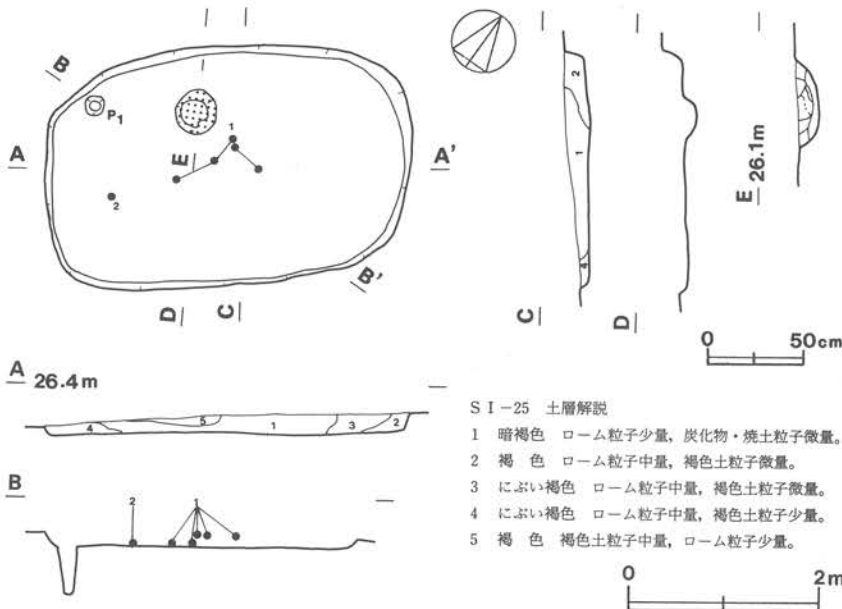
床 平坦であるが、全体にあまり踏み固められておらず、軟らかい。

ピット 1か所（P₁）検出されている。P₁は長径26cm、短径22cm、深さ53cmの楕円形を呈している。柱穴と思われるが、他の柱穴は検出されていない。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径47cm、短径42cmの楕円形を呈し、床を11cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央からやや北側が一部焼土化している。

覆土 暗褐色土がレンズ状に厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

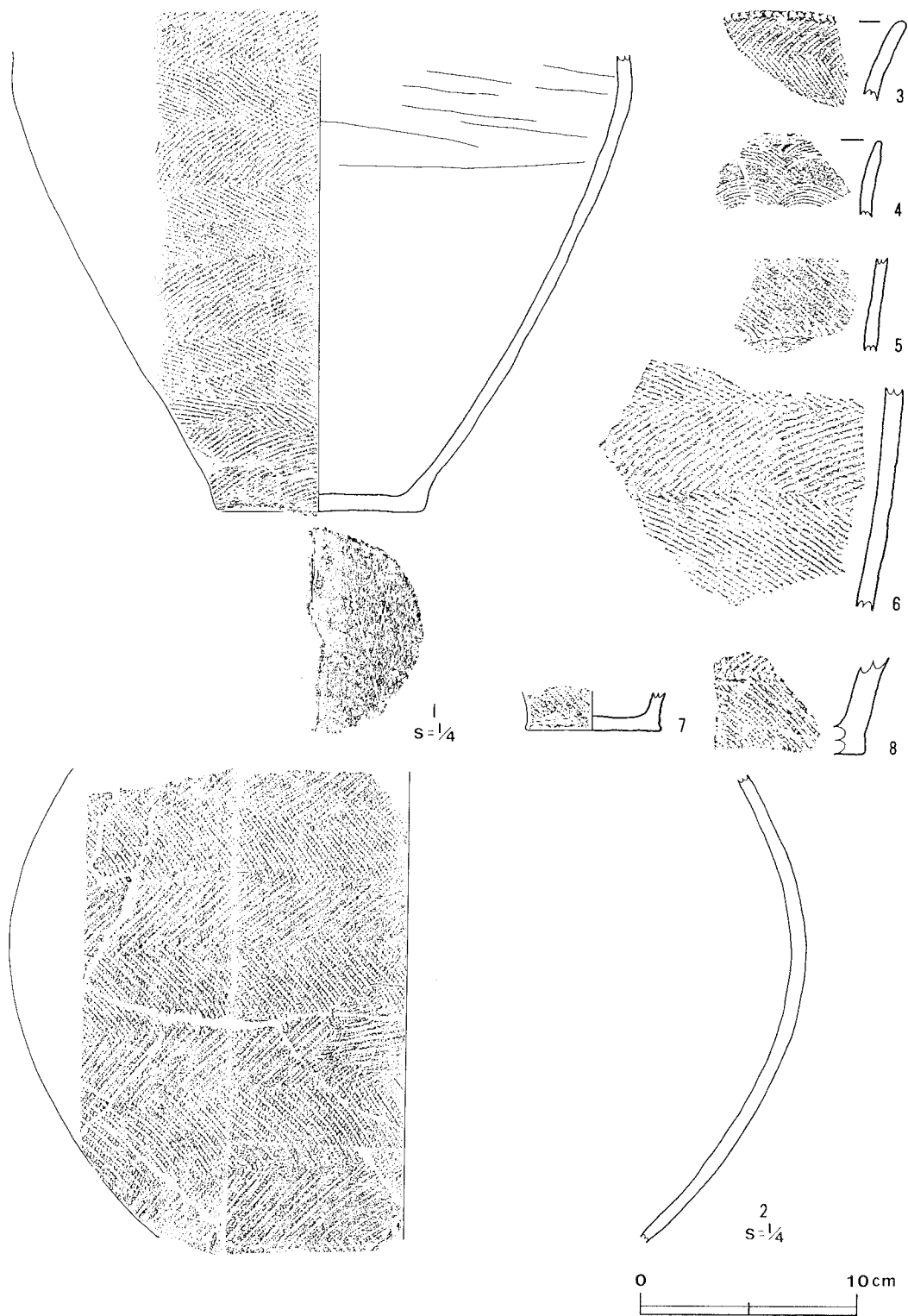
遺物 中央部の覆土下・中層から弥生式土器片（広口壺2）、弥生式土器細片（26点）が出土している。



る。1の広口壺は中央部の覆土下・中層から出土したいくつかの破片が接合されている。2の胴部片は南西壁付近の覆土下層から出土している。

第57図 第25号住居跡実測図

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第58図 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図

第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	広口壺 弥生式土器	B (28.4) C [12.9]	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P139 35% 中央部覆土下・中層
2	広口壺 弥生式土器	B (28.9)	胴部片。胴部は大きく内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。内面は剥離が著しい。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P140 25% 南西壁付近覆土下層

第58図3～8は、第25号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は縄文施文の単口縁を呈し、単節縄文と附加条1種(附加2条)による羽状構成をとっている。4は単口縁を呈し、口縁部には7本櫛歯による連弧文が施されている。5は頸部片であり、頸部上半には縄文が施され、下半を無文帯としているものである。6は胴部片であり、附加条1種(附加2条)による羽状構成をとっている。7・8は底部片であり、胴部には附加条1種(附加2条)による縄文が施されている。

第26号住居跡(第158図)

位置 Z地区北東部、B4b₀区を中心に確認されている。

重複関係 第17号住居跡によって大部分を掘り込まれている。

規模と平面形 現存部で長軸(2.45)m、短軸(2.15)mで形状は不明である。

長軸方向 不明。

壁 壁高8～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であるが、現存部はあまり踏み固められておらず、軟らかい。

覆土 褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土下層から弥生式土器細片(11点)、覆土中層から土師器細片(22点)が出土している。

所見 覆土下層から出土している遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第27号住居跡(第59図)

位置 D地区北東部、H5a₈区を中心に確認されている。北西部及び北東部は調査区外へのびている。

規模と平面形 長軸5.00m、短軸4.83mの隅丸長方形を呈しているものと思われる。

長軸方向 N-67°-W。

壁 壁高41～52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部はよく踏み固められて硬い。

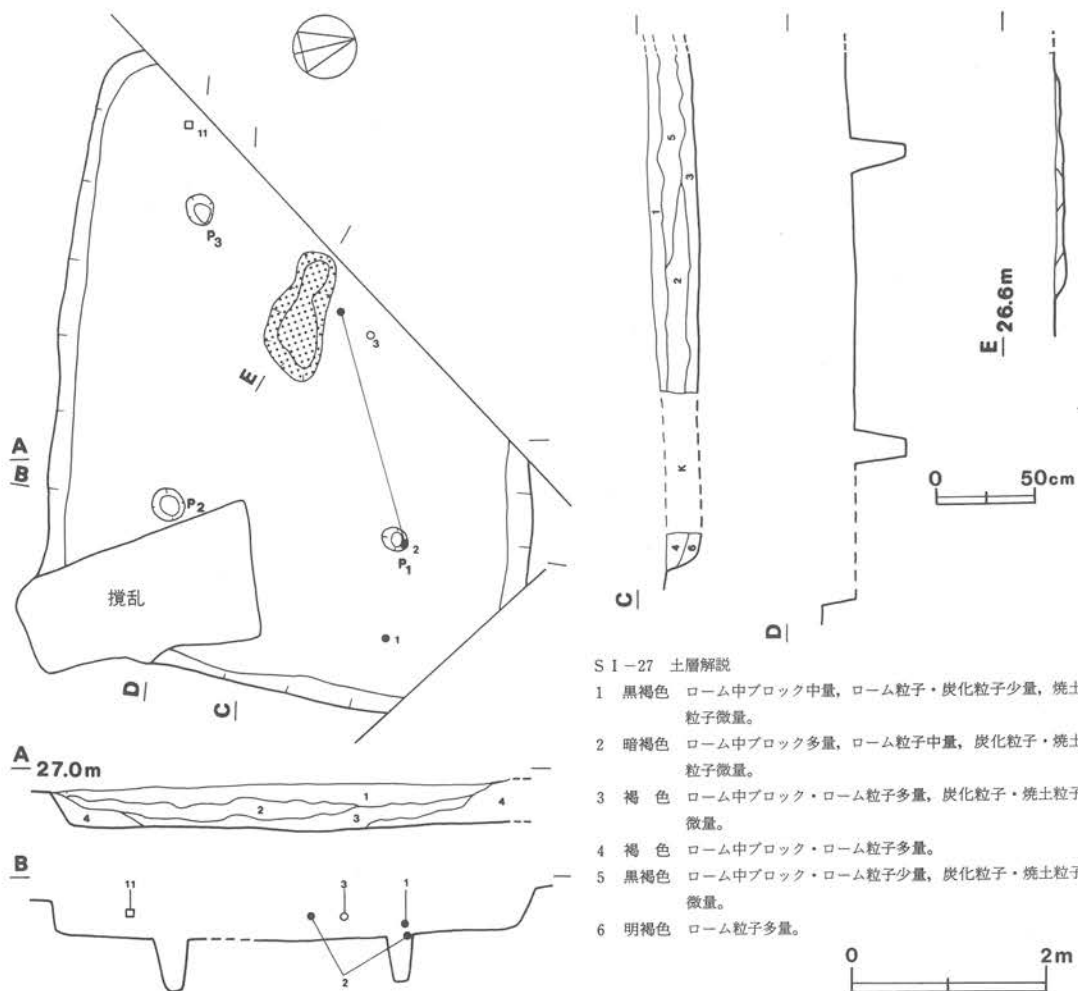
ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁~P₃は径25~35cmの円形を呈し、深さ52~61cmの主柱穴である。北東部の柱穴は調査区外にあると思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径136cm、短径62cmの不定形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。

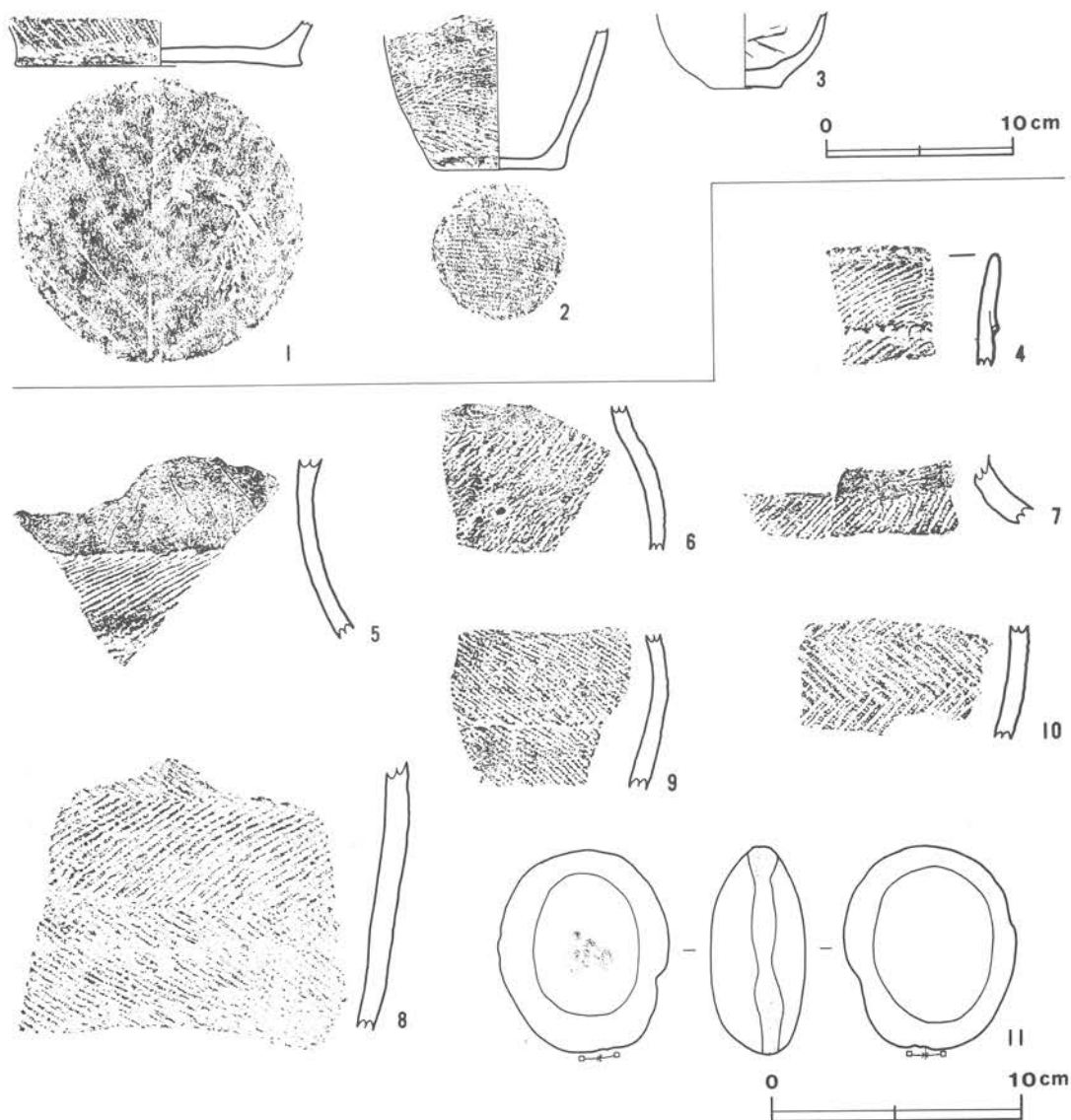
覆土 褐色土の上に暗褐色土・黒褐色土が厚めに堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域にわたって、床面及び覆土下層から弥生式土器片(広口壺2), 弥生式土器細片(454点)が、覆土中・上層からは土師器片(埴1), 土師器細片(114点)が出土している。2は弥生式土器の広口壺の底部片であり、中央部から東寄りの覆土下層から出土し、北東壁付近の覆土下層から出土したものや炉北側の覆土中層から出土したものと接合されている。3は土師器の埴で炉北側の覆土中層から出土している。11の磨石は西コーナー付近の覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第59図 第27号住居跡実測図



第60図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第60図 1	広口壺	B (2.2)	底部片。上げ底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石 橙色 普通	P141 5% 東コーナー付近覆土下層	
	弥生式土器	C 14.8				
2	広口壺	B (7.5)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には布目痕を持つ。	砂粒・長石 にふい橙色 普通	P142 30% 中央から東寄り覆土下層 外面スス付着	
	弥生式土器	C 6.9				
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	埴土師器	B (4.1) C 3.6	胴下半部。上げ底。胴部は底部から大きく内彎して立ち上がる。	胴部外面は軽いヘラナデ。内面は粗いヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P143 20% 炉北側覆土中層

第60図4～10は、第27号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。口唇部・頸部上半にも縄文が施されている。5～7は頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。8～10は胴部片であり、8・10は羽状構成をとっている。縄文原体は6が直前段反撚りで、それ以外は附加条1種(附加2条)である。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第60図	11 磨石	8.4	6.8	3.8	289.2	砂岩	覆土中層	Q16

第29号住居跡 (第61図)

位置 D地区北部, H5b4区を中心に確認されている。

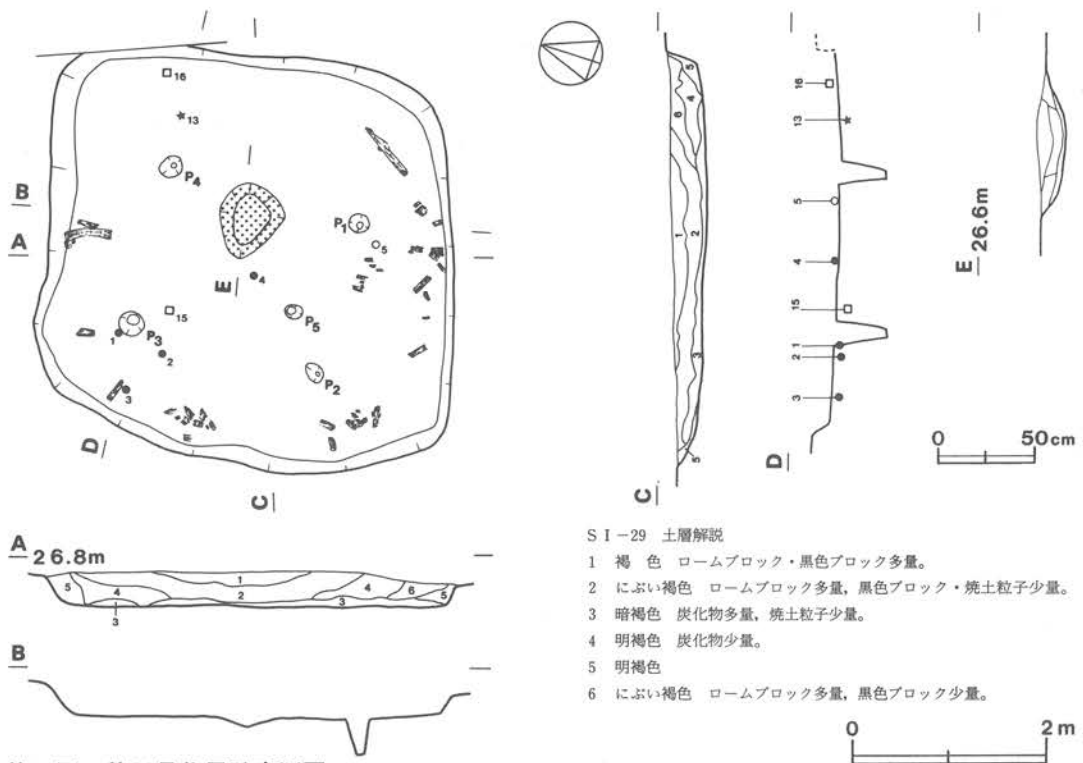
規模と平面形 長軸4.38m, 短軸4.27mの隅丸方形を呈している。

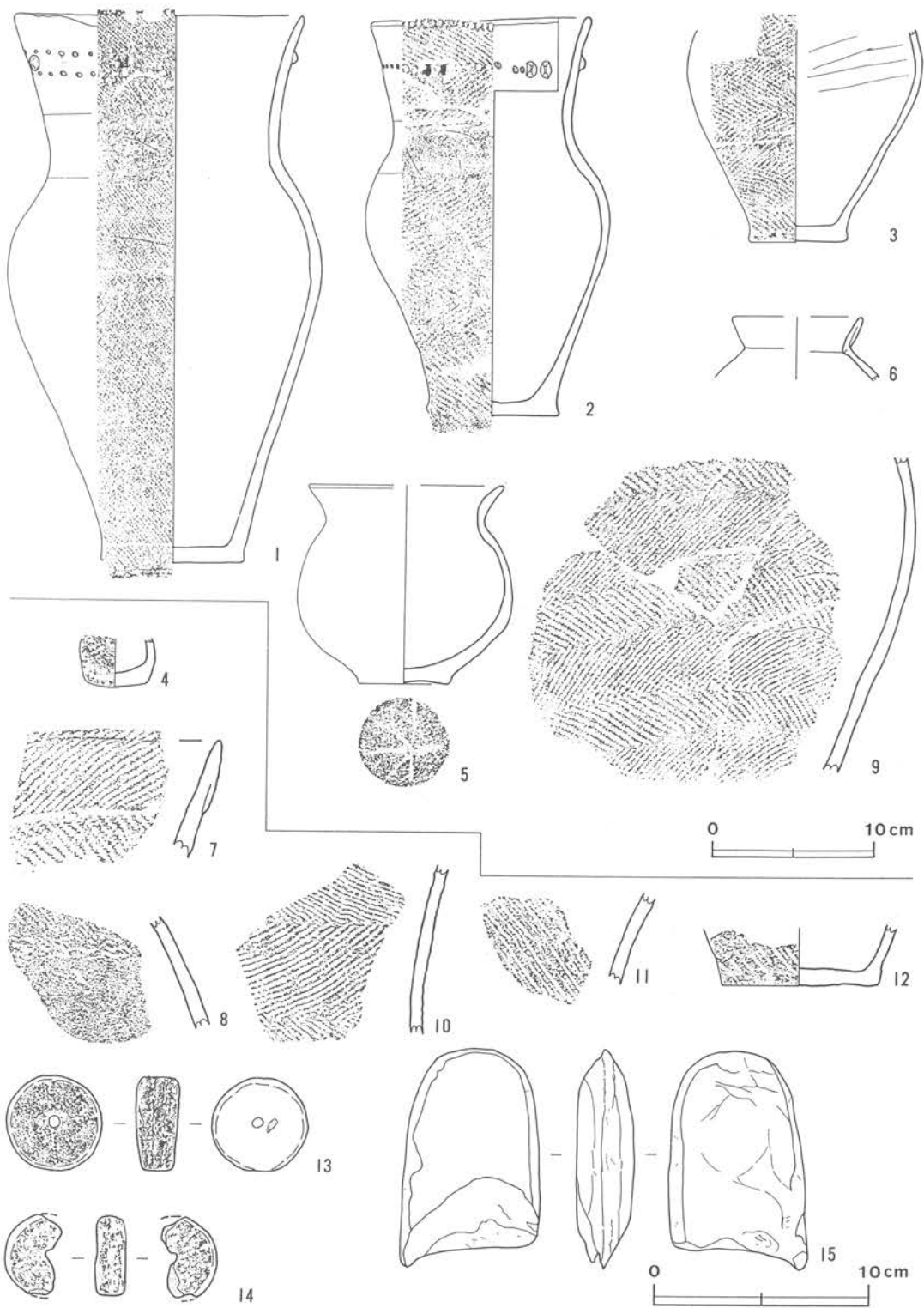
長軸方向 N-68°-E。

壁 壁高19~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部を中心によく踏み固められて硬い。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径20~28cmの円形を呈し、深さ40~56cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅は径20cmの円形を呈し、深さ30cmの補助柱





第62図 第29号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

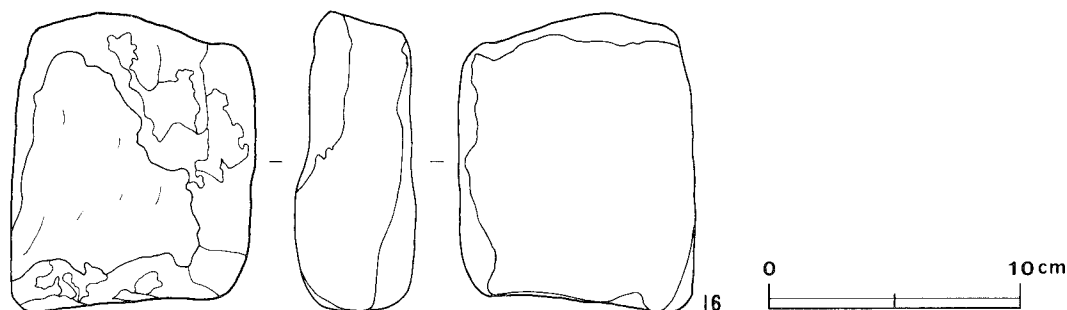
穴と思われる。

炉 ほぼ中央に検出されている。平面形は長径125cm、短径84cmの不定形で、床を16cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。

覆土 炭化物をやや多く含む暗褐色土の上に、ロームブロックを多量に含むにぶい褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 北西コーナー付近の床面および覆土下層からは弥生式土器片(広口壺3, 手捏土器1), 弥生式土器細片(55点)が, 南壁付近の覆土下層を中心に土師器片(甕2), 土師器細片(23点)が出土している。その他, 覆土より石皿, 磨製石斧が出土している。1~3の広口壺は北西コーナー付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。5は土師器の甕で南東壁中央付近の覆土下層から横位の状態で出土している。4の手捏土器は中央部の覆土下層から正位の状態で出土している。13の紡錘車は北東コーナー付近の床面から出土している。

所見 床面及び覆土下層から炭化材が広範囲に出土しており, 火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第63図 第29号住居跡出土遺物実測図(2)

第29号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	量法(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.9	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し, 中に2列の円形刺突文が周回している。刺突文間には瘤がほぼ等間隔に貼られている。頸部を無文帯とし, 胴部以下には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが, 羽状構成はとらない。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P162 90% 北西コーナー付近床面 内・外面スス附着
		B 34.2			
		C 8.9			
2	広口壺 弥生式土器	A 13.4	平底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し, 下端には刺突文が施され, 2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 ぶい黄橙色 普通	P163 85% 北西コーナー付近床面 外面スス附着
		B 25.0			
		C 7.6			
3	広口壺 弥生式土器	B (7.3)	胴下半部。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 羽状構成をとっている。内面はハケ目調整されている。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P164 45% 北西コーナー付近床面
		C 6.1			

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考	
第62図 4	手捏土器 弥生式土器	B (2.0) C 2.9	丸底。胴部は内彎して立ち上がる。外面には縄文が施されている。内・外面とも指ナデ。	砂粒・長石・雲母 黄橙色 普通	P166 20% 中央部覆土下層	
図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
5	甕 土 師 器	A [12.0] B 12.3 C 5.7	平底でやや突出。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。	口縁内・外面は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラナデ。内面は粗いヘラ削り。	砂粒・スコリア・ バミス にふい褐色 普通	P165 75% 南東壁中央付近覆土下層
6	甕 土 師 器	A [8.2] B (3.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	内・外面ともに横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P167 10% 中央部覆土中層

第62図7～12は、第29号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は太目の単節縄文が施文されるやや幅広な複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。8～11は胴部片である。8の胴部上位には結節文区画による単節縄文が施されている。9は単節縄文による羽状構成をとっている。10・11は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。12は平底を呈し、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第62図 13	紡 錘 車	4.5	4.4	2.0	4.5	47.3	100	床 面	D P36
14	紡 錘 車	(4.0)	[4.0]	1.5	[5.0]	(12.2)	40	覆 土	D P37
図版番号	器 種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考	
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第62図 15	磨 製 石 斧	10.0	6.5	2.8	244.5	ホルンフェルス	床 面	Q19	
第63図 16	石 皿	14.9	13.6	6.4	1889.7	花崗岩	覆 土 中 層	Q18	

第30号住居跡（第64図）

位置 D地区中央部，H4es区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.76m，短軸4.27mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-34°-W。

壁 壁高24～34cm，外傾して立ち上がっている。

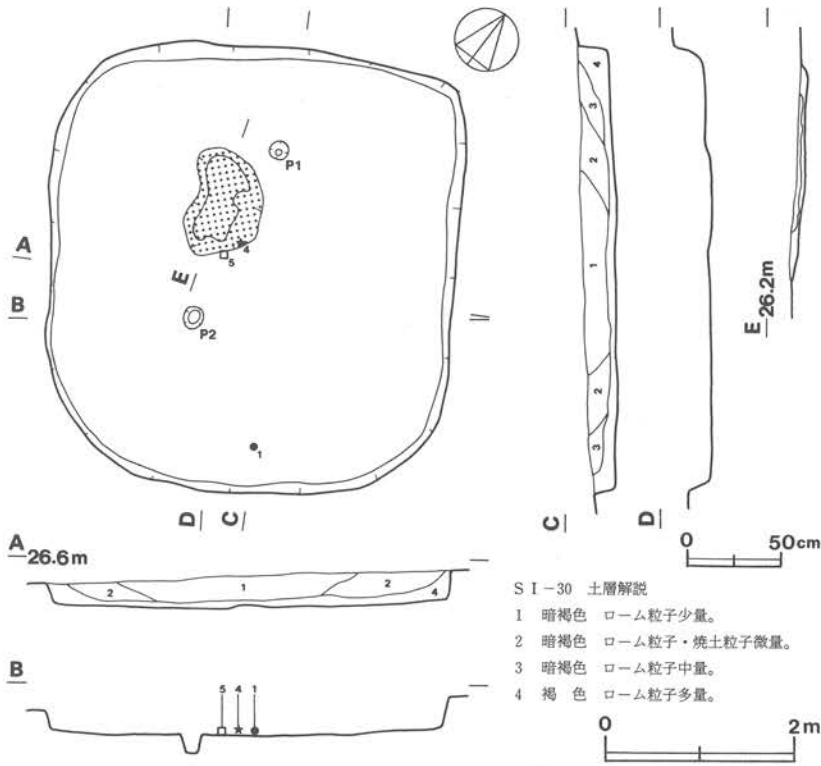
床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 2か所（P₁・P₂）検出されている。P₁・P₂は径20cmの円形を呈し，深さは21～46cmの主柱穴と思われる。柱穴を結んだ線は長軸方向とずれがあるが，配列から2本柱の住居と思われる。

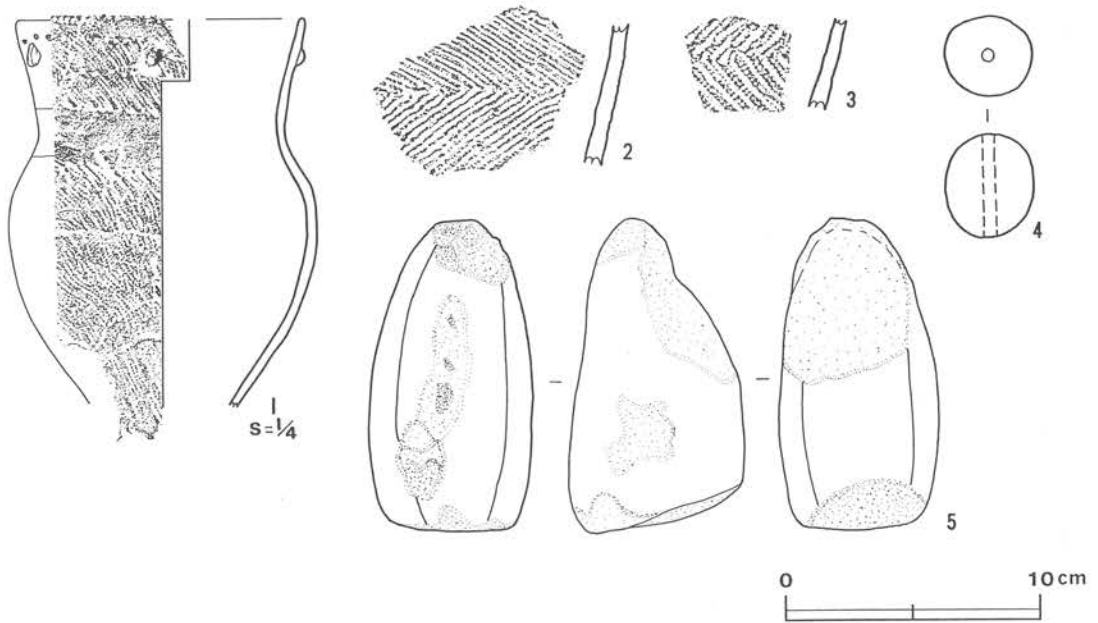
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径105cm，短径77cmの不定形で，床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床はさほど焼けてはいない。

覆土 褐色土の上に暗褐色土が厚く堆積し，自然堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土下層から弥生式土器細片(63点)が出土している。その他，覆土から敲石が出土している。1は広口壺の上半部であり，南東壁中央際の覆土下層から出土している。4の土錘



第64図 第30号住居跡実測図



第65図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	広口壺 弥生式土器	A [14.9] B (20.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外傾している。胴部上位に最大径を持つ。縄文施文の単口縁を呈し、2列の刺突文が周回している。刺突文間には瘤がほぼ等間隔に貼られる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 黄橙色 普通	P168 30% 南東壁中央際覆土下層

第65図2～3は、第30号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は胴部片であり、附加条1種(附加2条)による羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第65図 4	土 錘	3.5	3.2	4.1	5.5	45.9	100	覆土下層	D P38

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第65図 5	敲 石	12.4	6.4	7.2	702.3	砂 岩	覆 土	Q20 磨石と併用

第31号住居跡 (第66図)

位置 D地区中央部, H5h₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.55m, 短軸4.49mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-14°-E。

壁 壁高40~56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり、中央部は踏み固められて硬い。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径26~32cmの円形を呈し、深さ54~67cmの主柱穴である。P₅は補助柱穴と思われる。主柱穴を結んだ線はほぼ正方形となる。

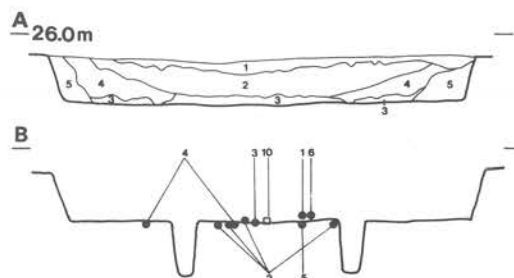
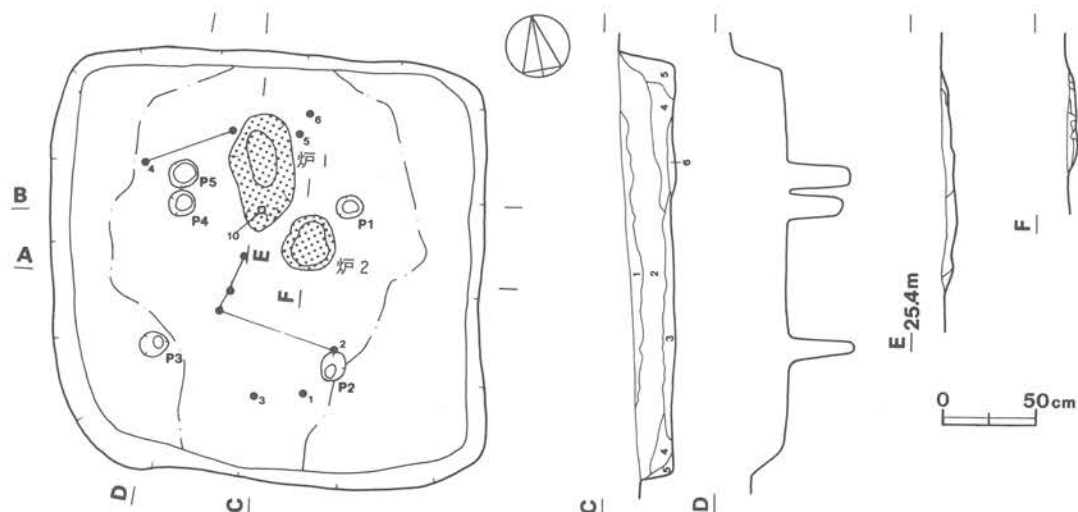
炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁は長軸線上の北寄りに検出されている。平面形は長径123cm, 短径66cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。炉₂は住居跡の中央部, 炉₁の南側から検出されている。平面形は長径58cm, 短径53cmの不定形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。小形であるが炉床は全体に熱を受け、赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含むにぶい褐色土が厚く堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に弥生式土器片(広口壺4, 無頸壺1, 高坏1), 弥生式土器細片(71点)が出土している。1・3の広口壺は南壁付近の覆土下層から横位の状態で、それぞれ出土している。2の無頸壺は炉南側の床面に散乱していたいくつかの破片が接合されている。4は小形の広口壺で炉の北西側の覆土下層から横位の状態で出土している。10の石皿は炉南

部の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



S I - 31 土層解説

- 1 暗褐色 黒色ブロック多量、ローム粒子少量。
- 2 におい褐色 ロームブロック・ローム粒子多量、黒色ブロック少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量。
- 4 におい褐色 ローム粒子・黒色ブロック少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量。
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量。

第66図 第31号住居跡実測図

第31号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.1	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁と胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、貼瘤を持たない。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P169 90% 南壁付近覆土下層
		B 25.8			
		C 7.6			
2	無頸壺 弥生式土器	B 20.8	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、口縁に至る。口唇部は破損部を磨り、作出している。胴部上半に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P170 70% 炉南側床面 広口壺を再利用
		C 8.6			
3	広口壺 弥生式土器	A 8.9	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の複合口縁を呈し、貼瘤を持たない。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。胴部下位は軽くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄褐色 普通	P171 90% 南壁付近覆土下層
		B 18.6			
		C 6.0			
4	広口壺 弥生式土器	A 9.1	平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反している。無文の複合口縁を呈し、下端に2個1組の瘤が4単位にわたり貼られている。頸部上半を無文帯とし、頸部以下には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア におい赤褐色 普通	P172 60% 炉北西側覆土下層 外面スス附着
		B [13.3]			
		C [5.5]			



第67図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第67図 5	広口壺 弥生式土器	B (20.2)	胴部片。胴部は球形に内彎して立ち上がる。胴部には縄文が施され、単節縄文と附加条1種(附加2条)による羽状構成をとっている。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P173 10% 炉北東側床面 外面スス付着
6	高坏 弥生式土器	B (5.5) D 5.5	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。内・外面ともヘラナデされている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 黄橙色 普通	P174 10% 炉北東側覆土下層

第67図7～9は、第31号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は無文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施されている。口縁下端には縄文原体による押圧と2個1組の貼瘤が伴う。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。8は単節縄文施文の複合口縁を呈し、下端には縄文原体による押圧が施されている。頸部上半にも縄文が施されている。9は胴部片であり、単節縄文が施されている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67図	10	石	皿	28.7	12.0	7.4	2439.0	硬砂岩 床面 Q21

第32号住居跡(第68図)

位置 D地区中央部, H5h₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.

68m, 短軸3.07mの隅丸長方形を呈している。

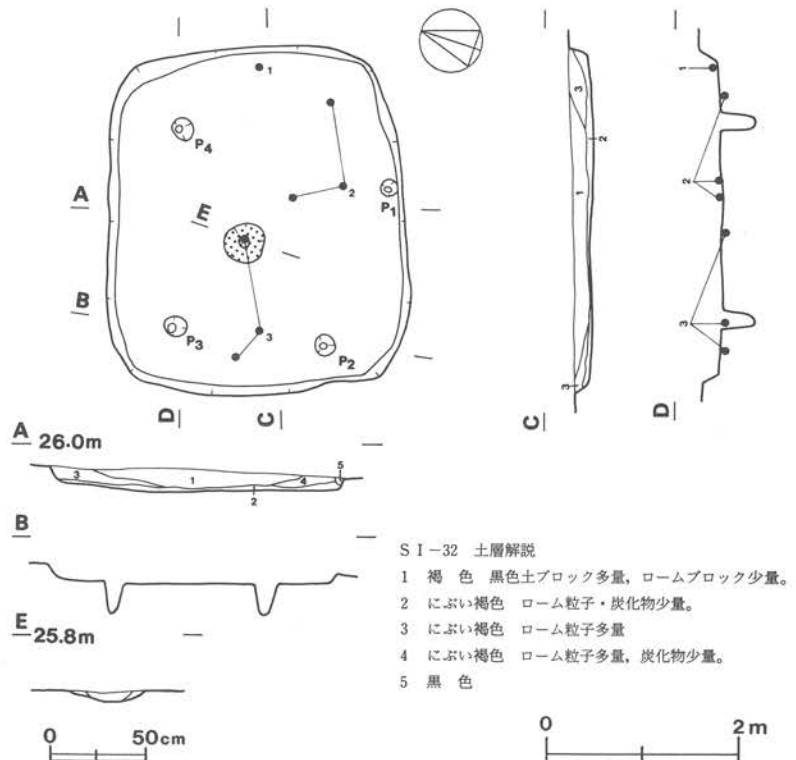
長軸方向 N-70°-E。

壁 壁高14~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であるが、全体にあまり踏み固められておらず、軟らかい。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。

P₁~P₄は径20~25cmの円形を呈し、深さは31~35cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は不整形となる。



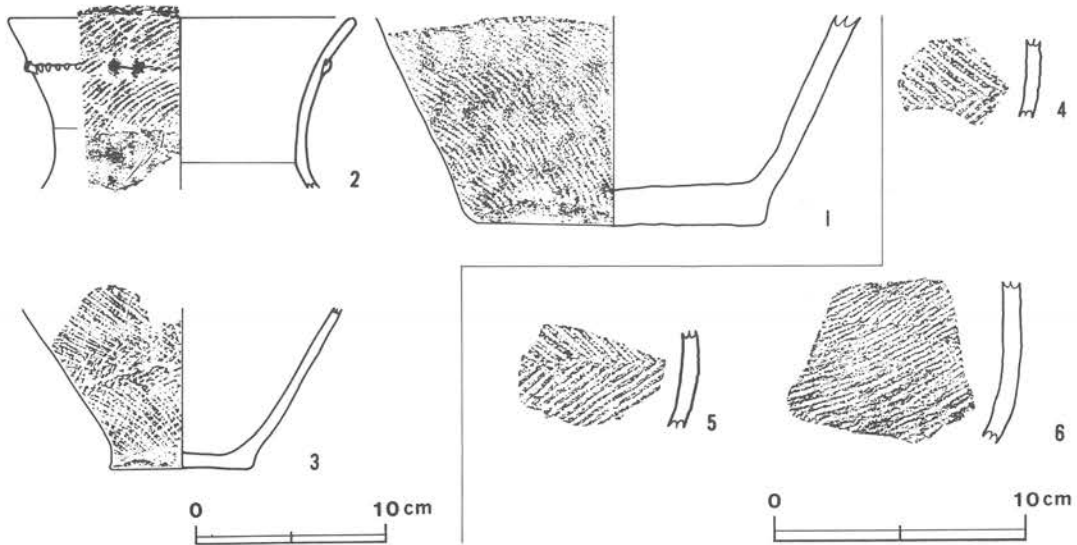
第68図 第32号住居跡実測図

炉 ほぼ中央に検出されている。平面形は径40cmの円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が焼土化している。

覆土 黒色土ブロックをやや多く含む褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に弥生式土器片(広口壺3), 弥生式土器細片(108点)が出土している。1の底部片は北東壁中央際の覆土下層から斜位の状態で出土している。2の口縁部片は東コーナー付近の床面及び覆土下層出土のものが、いくつか接合されている。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第69図 第32号住居跡出土遺物実測・拓影図

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	広口壺 弥生式土器	B (11.2) C 16.1	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。単節縄文が施されるが、羽状構成をとらない。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P175 30% 北東壁中央際覆土下層
2	広口壺 弥生式土器	A 18.3 B (9.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の薄い複合口縁を呈し、下端に刺突文が周回し、2個1組の瘤が7単位にわたり貼られている。頸部上半には縄文が施され、下半を無文帯としている。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P176 20% 東コーナー付近床面
3	広口壺 弥生式土器	B (8.3) C 7.5	胴下半部。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がっている。附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P177 20% 西コーナー付近床面

第69図4～6は、第32号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。4・5は羽状構成をとっている。

第33号住居跡 (第70図)

位置 D地区北部, H4e8区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.73m, 短軸4.40mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-22°-W。

壁 壁高21~45cmで, 外傾して立ち上がっている。

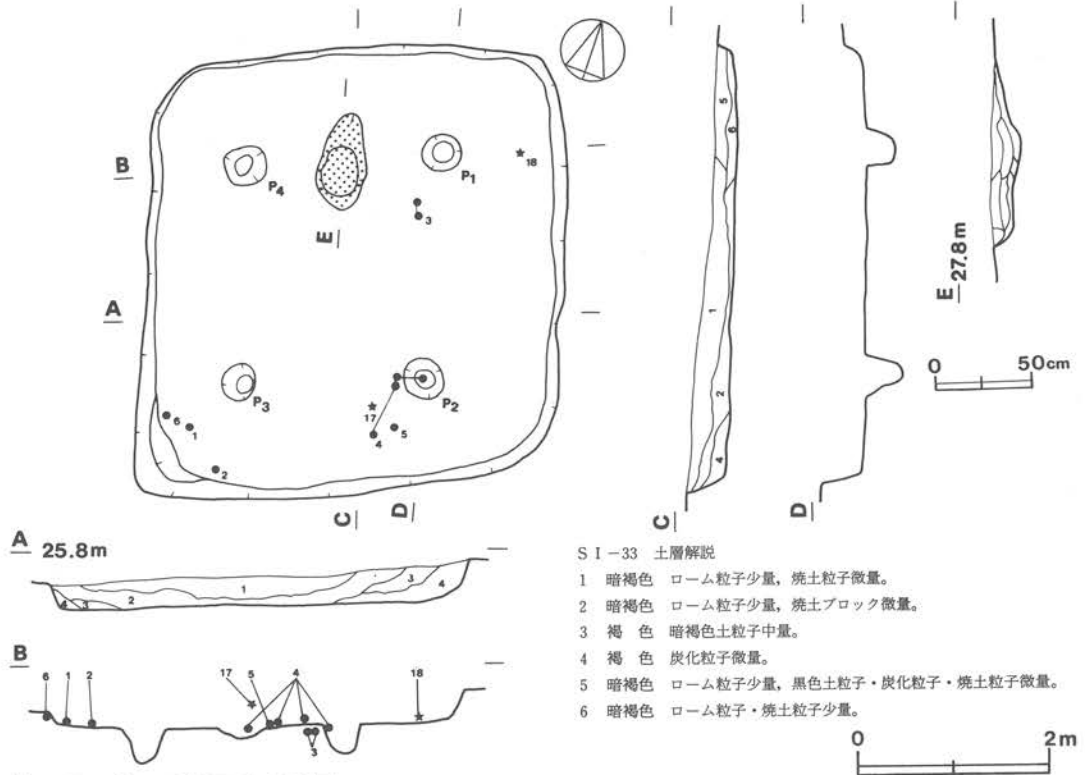
床 ほぼ平坦で, 中央部は踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は径36~44cmの円形を呈し, 深さは31~48cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。

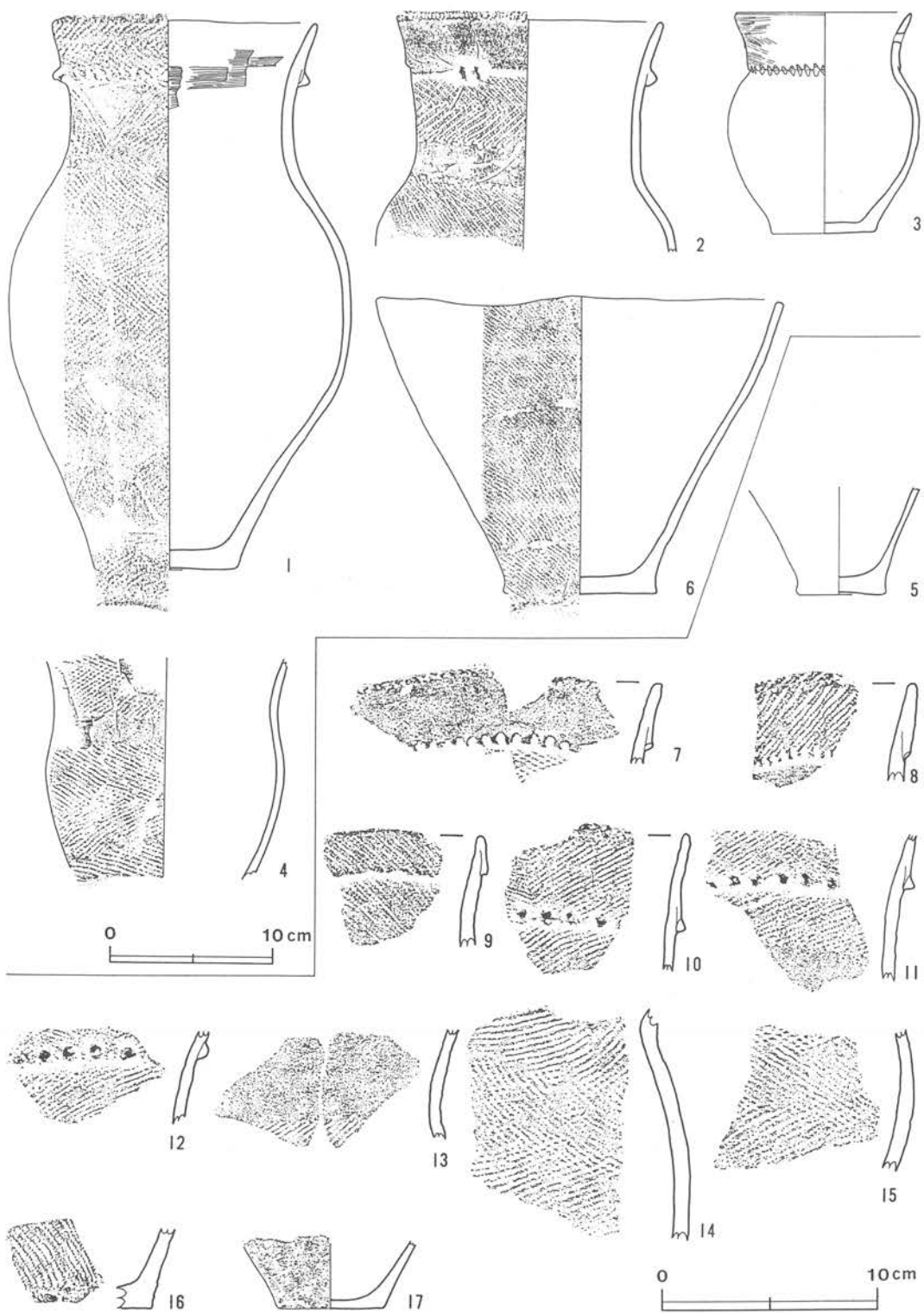
炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径102cm, 短径52cmの不定形を呈し, 床を15cm掘り込んだ地床炉である。炉の中央部は赤変硬化している。炉のやや南側からは炉の長軸と直交するように土器片が出土しており, 置台としたものと思われる。

覆土 暗褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面を中心に弥生式土器片(広口壺5, 鉢1), 弥生式土器細片(293点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる縄文式土器片(6点)や土師器細片(116点)が出土している。1の広口壺は南コーナー壁際の床面から正位の状態で, 2の広口壺と6の鉢は南コーナー壁際の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。3は小形の壺で炉の東側の床面から横位の状態で



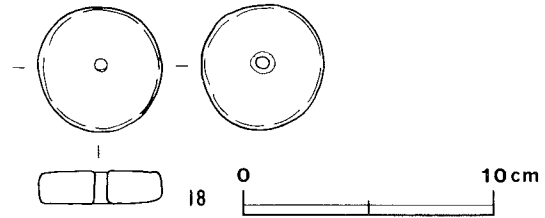
第70図 第33号住居跡実測図



第71图 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

出土している。18の紡錘車は北コーナー付近の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第72図 第33号住居跡出土遺物実測図(2)

第33号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.1	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。羽状縄文の施される複合口縁を呈し、下端には2個1組の瘤が6単位にわたり貼られる。頸部には4本櫛歯による連続山形文が施され、さらに櫛歯文に沿って縄文が充填されている。胴部縄文は羽状構成をとり原体は附加条1種(附加2条)である。内面には横位のハケ目調整が見られる。	砂粒・長石・石英・パミス にぶい褐色 一部赤褐色 普通	P178 95% 南コーナー付近床面 2次焼成 内・外面スス附着
		B 33.8			
		C 8.5			
2	広口壺 弥生式土器	A 16.3	胴部から口縁部にかけての破片。胴部から頸部にかけて内彎し、頸部から口縁部にかけては外傾して立ち上がっている。無文の複合口縁を呈し、口唇部にはキザミ目が施されている。口縁下端には2個1組の瘤が7単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P179 30% 南コーナー付近床面 外面スス附着
		B (14.3)			
3	広口壺 弥生式土器	A 10.8	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。頸部に段がありその位置に縄文原体による刺突文が施されている。口縁部は内・外面ともにハケ目調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P181 90% 炉東側床面
		B 13.6			
		C 6.3			
4	広口壺 弥生式土器	B (13.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反している。全面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P182 15% 東コーナー付近覆土下層 外面スス附着
5	広口壺 弥生式土器	B (4.9)	底部片。平底。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がってから外傾している。胴部は無文で、軽くヘラナデされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P183 10% 南東壁付近床面
		C 4.1			
6	鉢 弥生式土器	A 25.1	平底。胴部は底部から緩やかに内彎して立ち上がり、口縁に至る。口唇部は破損部を磨り、作出している。胴部には単節縄文が施されるが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・雲母 黄橙色 普通	P180 90% 南コーナー付近床面 広口壺を再利用
		B 18.3			
		C 8.5			

第71図7～17は、第33号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～12は口縁部片である。7は無文の複合口縁を呈し、口唇部には縄文が施されている。口縁下端は縄文原体により押圧されている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。8は縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁下端には縄文原体による押圧が施され、頸部を無文帯としている。9は縄文施文の複合口縁を呈し、頸部上半にも縄文が施されている。10～12は同一個体と思われる、縄文施文のやや幅広な複合口縁を呈し、口縁下端には瘤がほぼ等間隔に貼られている。頸部上半には縄文が施され、下半を無文帯としている。原体は細目の単節縄文である。13は頸部片であり、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施

されている。14・15は胴部片であり，附加条1種（附加2条）による羽状構成が施されている。
16・17は底部片であり，平底を呈し，16の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されてい
るが，17は無文である。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第72図 18	紡錘車	5.1	5.0	1.4	5.5	42.6	100	床面	DP39

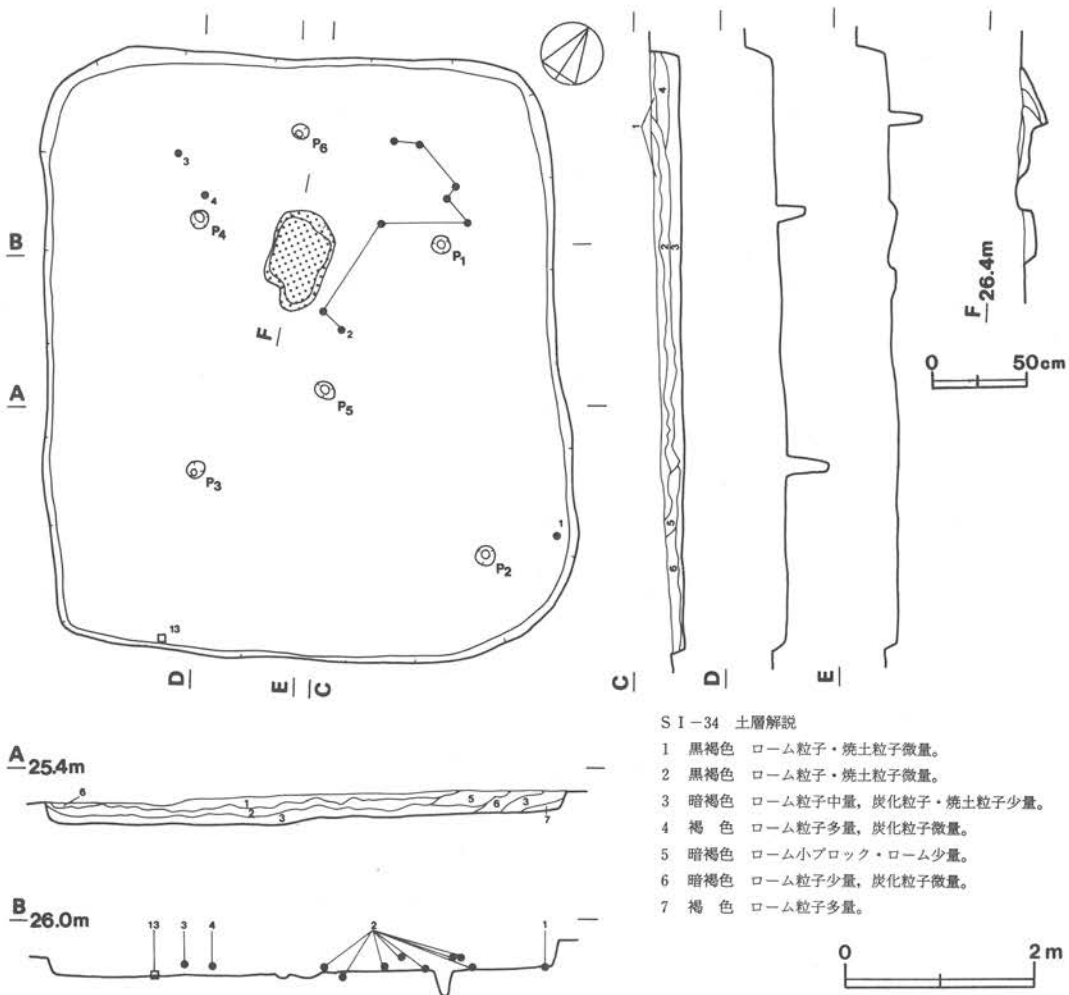
第34号住居跡（第73図）

位置 D地区中央部，H4h₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.38m，短軸5.38mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-31°-W。

壁 壁高14~30cmで，外傾して立ち上がっている。



第73図 第34号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部は踏み固められて硬い。

ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₄は径20~24cmの円形を呈し、深さは29~48cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅・P₆は補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径105cm、短径63cmの不整形円形を呈し、床を14cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・黒褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。

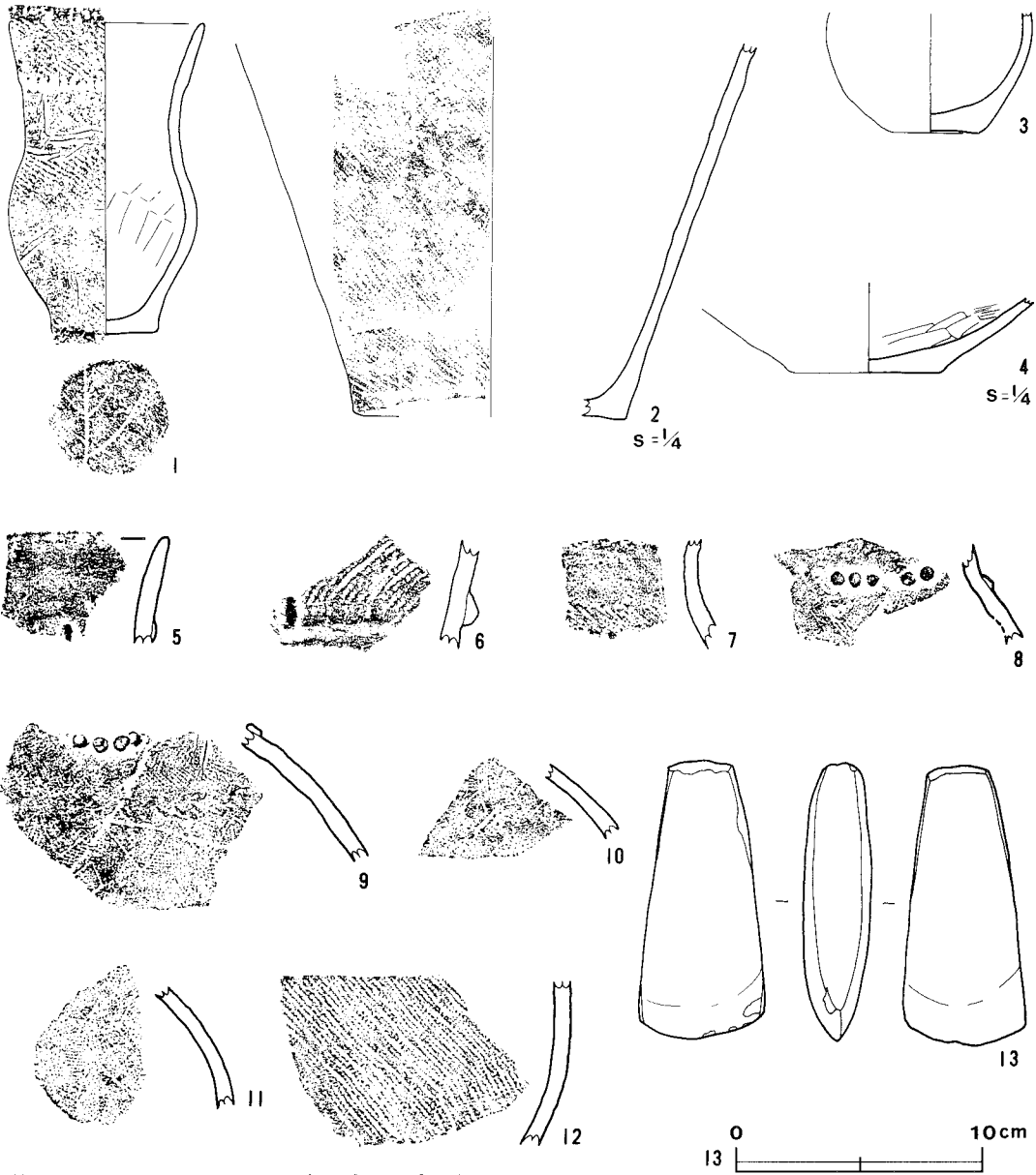
遺物 北西壁付近の覆土下・中層から、弥生式土器片(広口壺4)、弥生式土器細片(154点)が出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器片(12点)、土師器細片(39点)が出土している。1は小形の広口壺で東コーナー壁際の床面から横位の状態で出土している。2は北西壁付近の床面や覆土中層から出土した多数の破片が接合されている。4は炉の西側の覆土下層から出土した底部片である。13の磨製石斧は南コーナー付近の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第34号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	広口壺 弥生式土器	A 8.0	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。口唇部にキザミ目を持つ。縄文施文の複合口縁を呈し、下端には縄文原体の刺突文が施されている。頸部を無文帯とし、胴部以下に附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P185 85% 東コーナー壁際床面 外面一部摩滅
		B 13.0			
		C 4.4			
2	広口壺 弥生式土器	B (20.6)	胴下半部。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P186 30% 北西壁付近 床面及び覆土中層
		C [15.0]			
3	広口壺 弥生式土器	B (5.0)	底部片。上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。内・外面とも軽くヘラナデされている。	砂粒・長石・石英 灰褐色一部橙色 普通	P187 15% 西コーナー付近覆土中層
		C 3.8			
4	広口壺 弥生式土器	B (4.0)	底部片。平底で突出している。胴部は底部から緩やかに外傾して立ち上がる。外面は軽くヘラナデ。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P188 15% 炉西側覆土下層
		C 8.3			

第74図5~12は、第34号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は無文でやや幅広い複合口縁を呈し、口唇部にはキザミ目が施されている。口縁下端には瘤が貼られている。6は縄文施文の幅広い複合口縁を呈し、口縁下端に瘤が貼られ、頸部を無文帯としている。8~11は同一個体であり、胴部上半の破片である。胴部最上位に「ボタン」状の貼付けがなされ、その下に細目の単節縄文が横位に施されている。結節文によって区画される下位の文様は、沈線により上下2本の鋸歯状に区画され、その区画内に縄文が施されている。上下の鋸歯状文が交わる菱形を呈する無文部には赤彩が施されている。12は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。



第74図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第74図	13	磨製石斧	11.4	5.0	2.8	281.1	角閃片岩	床 面	Q22

第35号住居跡 (第75図)

位置 D地区北部, H4g₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.95m, 短軸3.70mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-67°-E。

壁 壁高14~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南西壁付近と炉周辺は踏み固められ硬い。

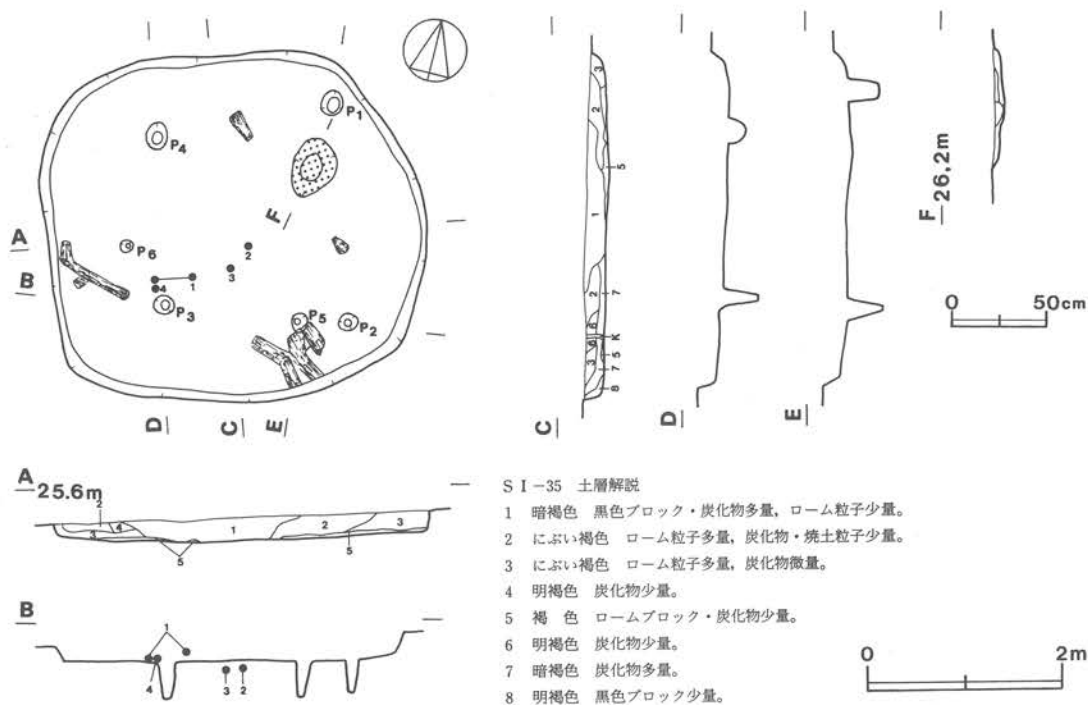
ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₄は径20~26cmの円形を呈し、深さは19~38cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は長径22cm、短径18cmの楕円形を呈し、深さ40cmで、出入口施設に伴うピットと思われる。P₆は深さ9cmと浅く、性格は不明である。

炉 床中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径65cm、短径47cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

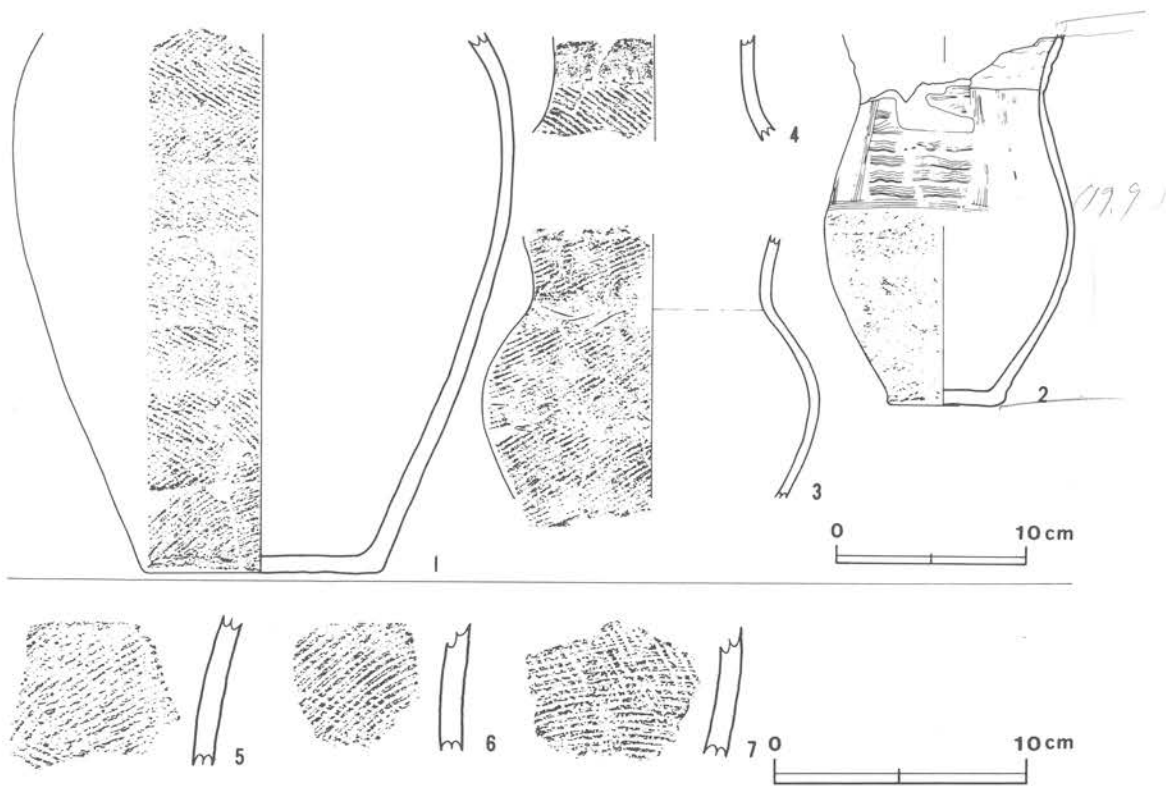
覆土 にぶい褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部の床面及び覆土下層に集中して、弥生式土器片(広口壺4), 弥生式土器細片(154点)が出土している。3の広口壺は中央部の床面から出土している。1・4の広口壺は中央からやや南西寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。2の広口壺は中央部の床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡の床面及び覆土下層からは炭化材と焼土ブロックが広範囲に検出され、火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第75図 第35号住居跡実測図



第76図 第35号住居跡出土遺物実測・拓影図

第35号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	広口壺 弥生式土器	B (28.8) C 12.3	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。 附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。内面は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・雲母・ パミス にぶい褐色 普通	P189 30% 中央からやや南西寄り 覆土下層
2	広口壺 弥生式土器	B (19.9) C 6.2	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。 頸部から口縁部にかけては外反している。口縁部と頸部の境界には4本の押圧隆起線が貼られている。頸部はスリット手法による縦区画充填波状文が施され、櫛歯数は4本である。胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P190 60% 中央部床面 外面摩滅 2次焼成
3	広口壺 弥生式土器	B (14.0)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英・ 雲母 暗赤褐色土 普通	P191 20% 中央部床面 外面スス付着
4	広口壺 弥生式土器	B (5.4)	頸部片。頸部はほぼ垂直に立ち上がっている。頸部下半を無文帯とし、頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P192 5% 中央からやや南西寄り 覆土下層

第76図5～7は、第35号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～7は胴部片であり、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。

第36号住居跡 (第77図)

位置 D地区北部, H4d区を中心に検出されている。

規模と平面形 長軸4.29m, 短軸4.05mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-25°-W。

壁 壁高16~39cmで, 北西壁, 北東壁は緩やかに外傾して, 南東壁, 南西壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 南東壁付近と炉周辺は, 特によく踏み固められ硬い。

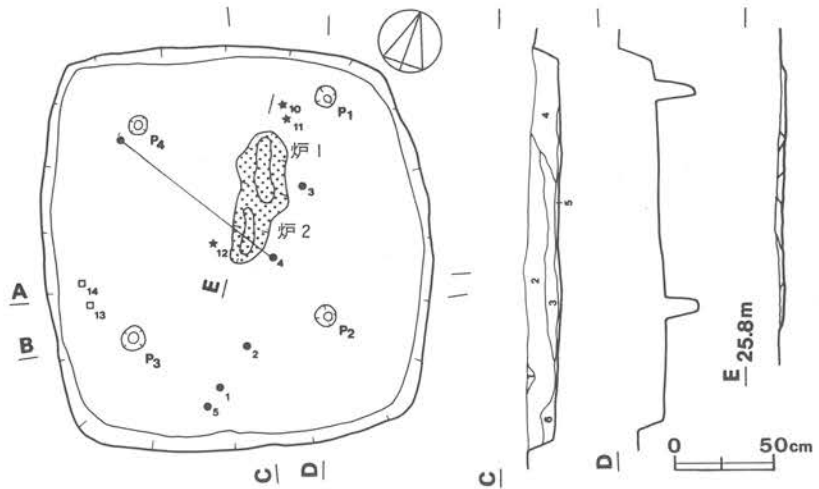
ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は径20~25cmの円形を呈し, 深さは36~45cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形を呈する。

炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁は長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径90cm, 短径45cmの楕円形を呈し, 床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中心部が赤変硬化している。炉₂は中央部に検出され, 長径78cm, 短径38cm, 深さ4cmの地床炉で, 北部を炉₁によって掘り込まれている。炉床は赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域

の床面及び覆土下層から集中して弥生式土器片 (広口壺3, 長頸壺1, 甗1), 弥生式土器細片 (125点) が出土している。1・2の広口壺と5の甗は南東壁中央付近の床面から横位の状態で, それぞれ出土している。4は小形の長頸壺で西コーナー付近の覆土下層から出土している。10・11の紡錘車は北西壁



A 26.2m

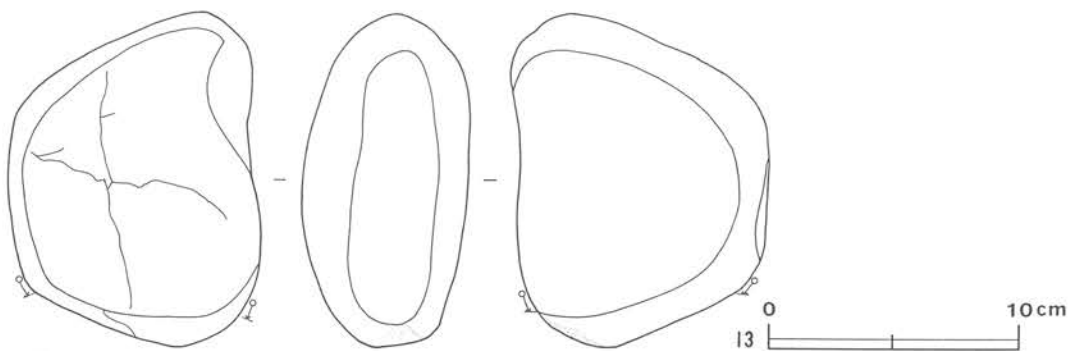
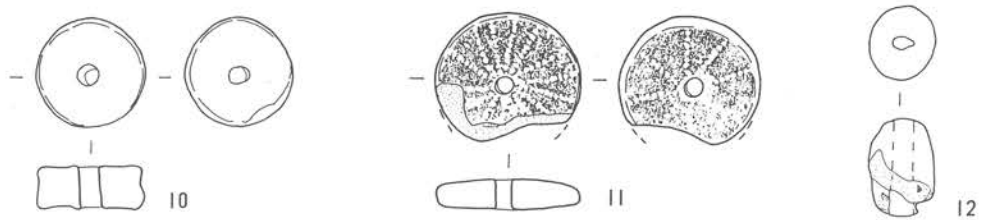
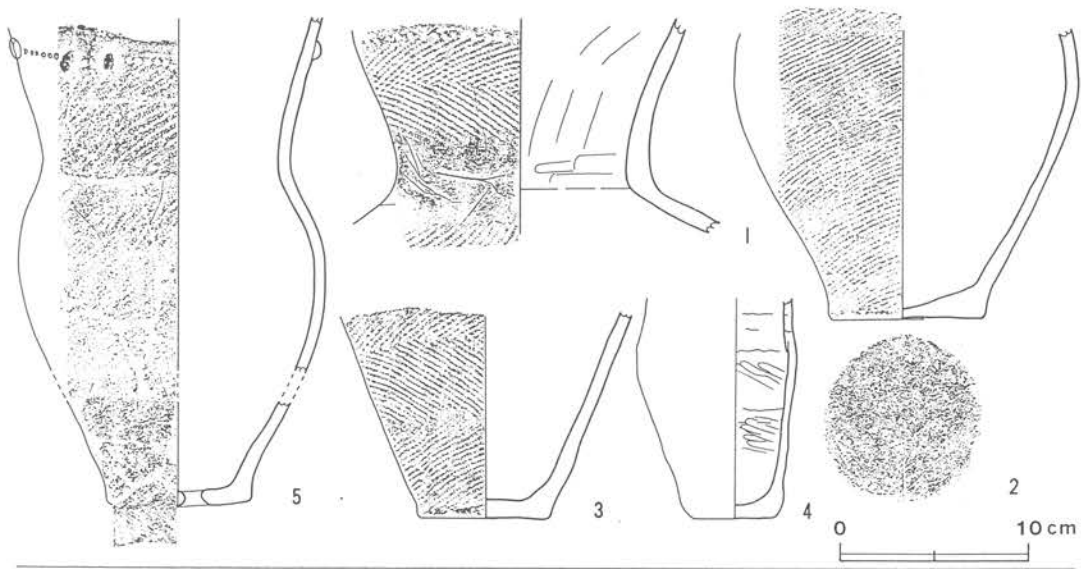
B

第77図 第36号住居跡実測図

SI-36 土層解説

- 1 暗褐色 黒色ブロック多量, 炭化物少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 黒色ブロック・炭化物少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子。黒色ブロック・炭化物少量。
- 4 におい褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量。

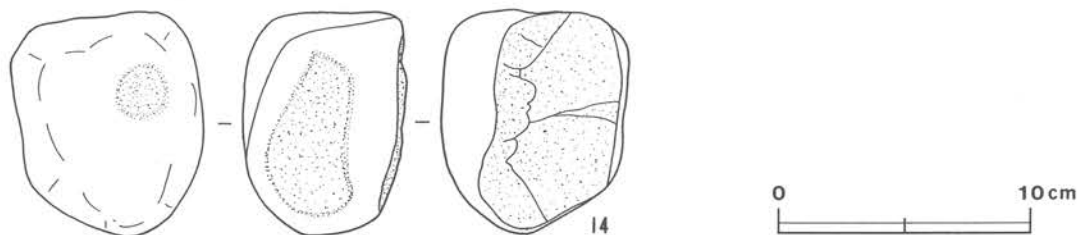




第78图 第36号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

付近の床面及び覆土下層から出土している。12の土錘は中央部の覆土中層から、13・14の磨石は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第79図 第36号住居跡出土遺物実測図(2)

第36号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第78図 1	広口壺 弥生式土器	B (10.5)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。口縁下端には刺突文が周回している。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。頸部下半は無文帯としている。内面は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P194 30% 南東壁中央付近床面
2	広口壺 弥生式土器	B (16.4) C 8.1	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとっていない。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・ 橙色 普通	P195 20% 南東壁中央付近床面
3	広口壺 弥生式土器	B (10.8) C 7.1	胴下半部。平底。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P196 20% 炉東側床面 内面スス付着
4	長頸壺 弥生式土器	B (11.8) C 4.5	胴部から頸部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部から頸部にかけては内彎している。外面は無文でヘラナデされている。内面はヘラ削りされており、輪積み痕も見られる。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P197 50% 西コーナー付近 覆土下層
5	甗 弥生式土器	B [25.8] C 8.0	平底。胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。無文の単口縁を呈し、下端には2個1組の貼瘤と縄文原体による刺突文が施されている。頸部下半は無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。底部には焼成後の穿孔がある。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 一部明褐色 普通	P193 60% 南東壁中央付近床面 胴部下半摩滅が著しい 2次焼成 広口壺の再利用

第78図6～9は、第36号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半は無文帯とし、胴部には縄文が施されている。7～9は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、いずれも羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第78図 10	紡錘車	4.4	4.4	1.8	8.5	42.1	100	床面	D P 40
11	紡錘車	5.8	[5.7]	0.7	7.0	(35.7)	80	覆土下層	D P 41
12	土錘	2.9	2.7	4.0	8.0	(21.9)	70	覆土中層	D P 42

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第78図 13	磨石	13.5	10.0	6.9	1362.1	砂岩	覆土下層	Q23 敲石併用
第79図 14	磨石	9.3	7.6	6.4	658.8	粘板岩	覆土下層	Q24

第37号住居跡 (第80図)

位置 C地区北部, B6b_s区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.02m, 短軸3.27mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-55°-W。

壁 壁高14~22cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり, 全体によく踏み固められて硬い。

ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₂は長径55cm, 短径35cmで楕円形を呈し, 深さ60cmである。P₃は径35cmで円形を呈し, 深さ30cmである。形状, 深さから柱穴と思われる。P₂・P₃は南東壁際に片寄っているが, 他に柱穴と思われるピットは検出されなかった。P₁は深さ10cmと浅く, 性格は不明である。

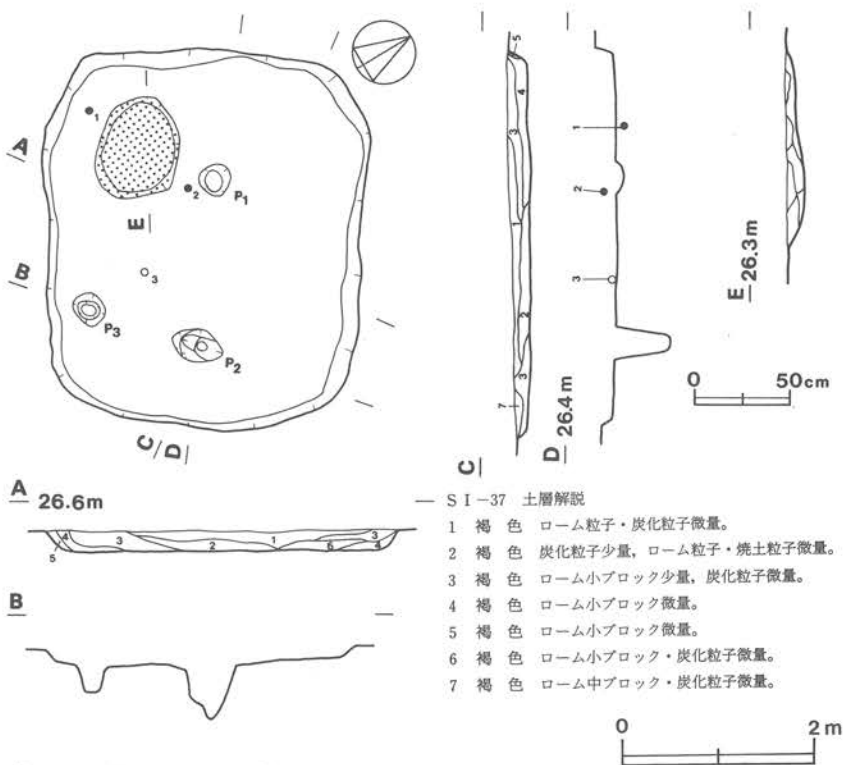
炉 中央から西寄りに検出されている。平面形は長径110cm, 短径84cmの楕円形を呈し, 床を9cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け, 赤変硬化している。

覆土 ロームブロックを含む褐色土の堆積がみられ, 人為堆積と思われる。

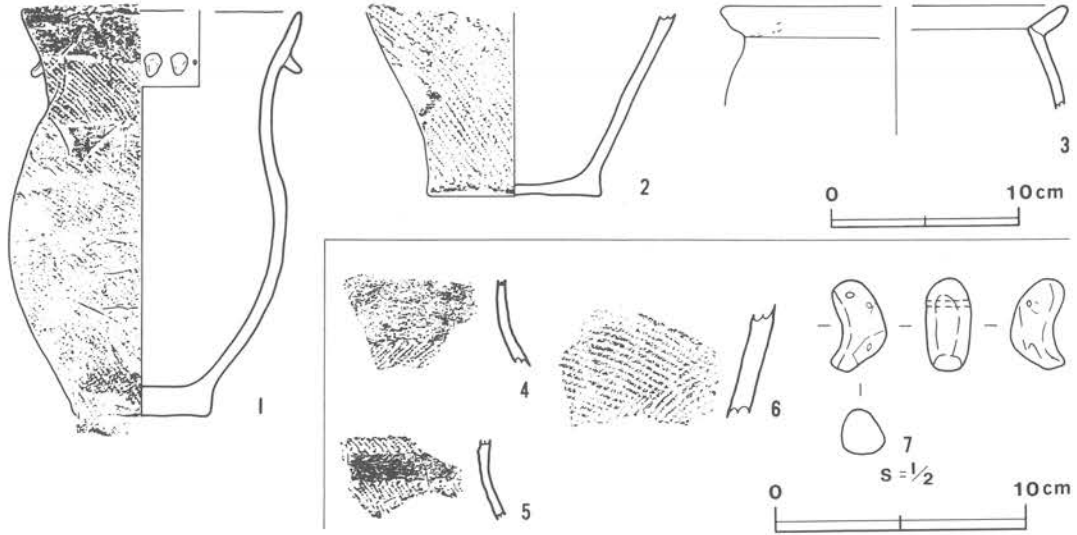
遺物 中央部から西コーナー付近の床面及び覆土から弥生式土器片 (広口壺2), 弥生式土器細片 (40点)と土師器片 (甕1), 土師器細片 (7点)が出土している。1は弥生式土器の広口壺で西コーナー壁際の床面から横位の状態で, 2は弥生式土器の胴下半部で炉東側の覆土中層から正位の状態で, 3は土師器の甕で

中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。7の勾玉は中央部の覆土上層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第80図 第37号住居跡実測図



第81図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図

第37号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第81図 1	広口壺 弥生式土器	A [11.0]	平底。突出している底部から胴部にかけては内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。無文の薄い複合口縁を呈し、下端に2個1組の瘤が貼られる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英・雲母 淡黄色 普通	P198 70% 西コーナー壁際床面 外面スス付着	
		B 16.4				
		C 5.4				
2	広口壺 弥生式土器	B (7.4)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	P199 30% 炉東側覆土中層 外面スス付着	
		C 7.0				
3	甕 土師器	A [14.0] B (4.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	口縁部外面はヘラ削り。内面は横ナデ。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P200 5% 中央部覆土下層

第81図4～6は、第37号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は頸部片であり、4は頸部を無文帯とし、5は頸部下半を幅の狭い無文帯としている。6は胴部片であり、羽状構成がみられる。4～6の縄文原体はいずれも附加条1種（附加2条）である。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第81図 7	勾玉	(2.5)	1.5	1.2	1.5	(4.0)	70	覆土上層	DP43

第38号住居跡（第82図）

位置 C地区北部, B6d_s区を中心に確認されている。西側2分の1ほどは調査区外へのびている。

重複関係 南東部を第4号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 現存長軸(4.25)m, 短軸(2.24)mで、隅丸長方形を呈するものと思われる。

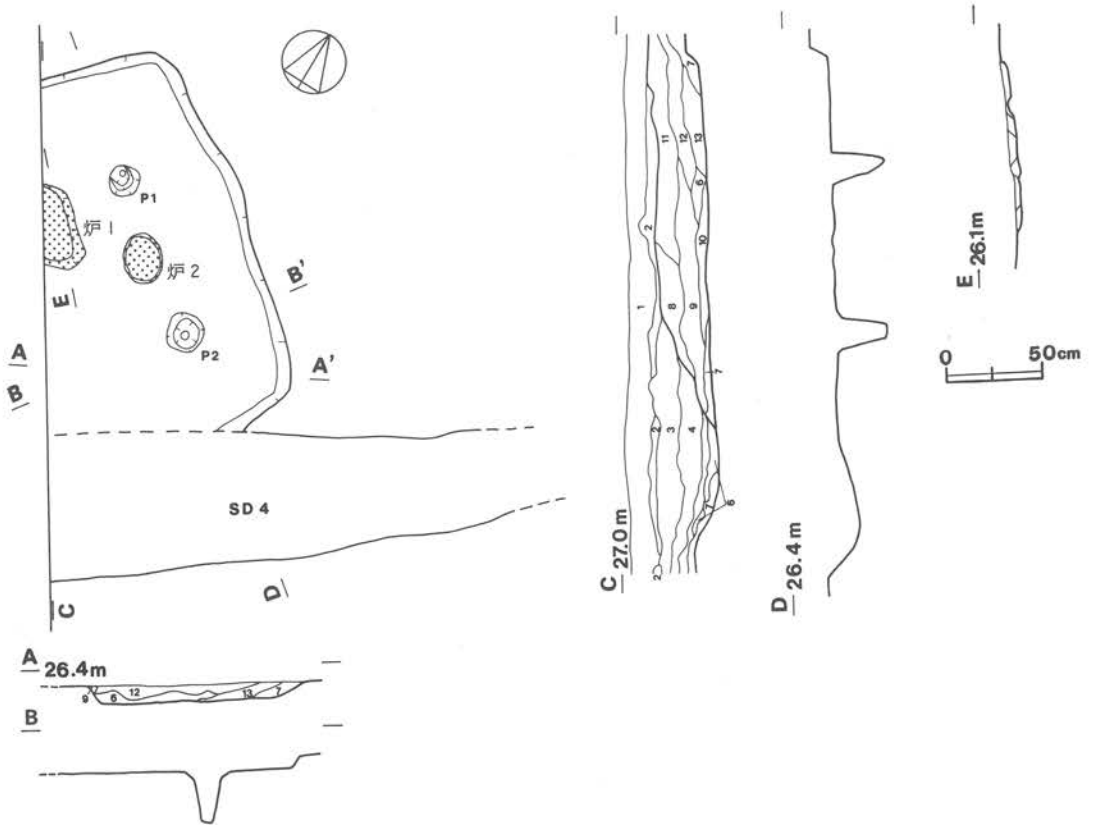
長軸方向 N-41°-W。

壁 壁高17~21cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められて硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は径34~42cmの円形を呈し、深さ52~55cmの
 支柱穴である。支柱穴を結んだ線は北東壁と平行である。

炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁は中央から北西寄りに検出されている。平面形は長
 径94cm, 現存短径 (31) cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化
 している。炉₂は中央部から北東寄りのP₁とP₂の間に検出されている。平面形は長径53cm, 短径40



SI-38 SD-4 土層解説

- | | | | |
|-------|--|--------|---|
| 1 明褐色 | ローム小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子多量。 | 8 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック, ローム粒子・炭化粒子少量。 | 9 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少
量。 |
| 3 黒褐色 | ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子・
焼土粒子少量。 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子中量,
炭化粒子少量, 焼土粒子微量。 |
| 4 黒色 | ローム小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子微量。 | 11 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量。 | 12 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量。 |
| 6 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。 | 13 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック少量。 |
| 7 明褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック少量。 | | |



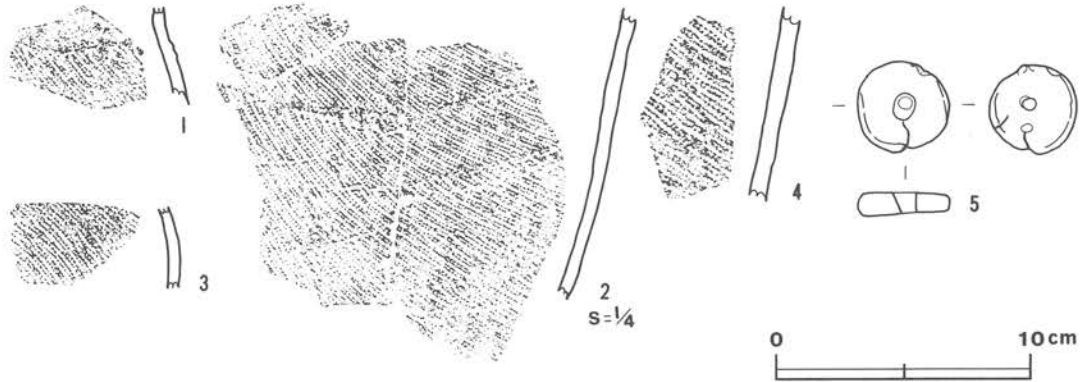
第82図 第38号住居跡実測図

cmの楕円形を呈し、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は焼土化している。炉₁の補助的なものと思われる。

覆土 下層には、ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 覆土中・下層から弥生式土器細片(49点)、土師器細片(7点)が出土している。2・4の胴部片は南東壁際の覆土下層から、5の紡錘車は炉床から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第83図 第38号住居跡出土遺物実測・拓影図

第83図1～4は、第38号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。2～4は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが羽状構成をとっていない。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第83図 5	紡錘車	3.7	3.5	1.0	8.5	(12.0)	95	床面	DP44

第39号住居跡 (第84図)

位置 C地区北部, B6d7区を中心に確認されている。南東コーナー一部は調査区外へのびている。

規模と平面形 長軸4.36m, 短軸4.30mの方形を呈している。

長軸方向 N-54°-W。

壁 壁高10~18cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺はよく踏み固められて硬い。

ピット 5か所(P₁~P₅)検出されている。P₁~P₄は径28~34cmの円形を呈し、深さ42~65cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径25cmの円形を呈し、深さ35cmの補助柱穴と思われる。

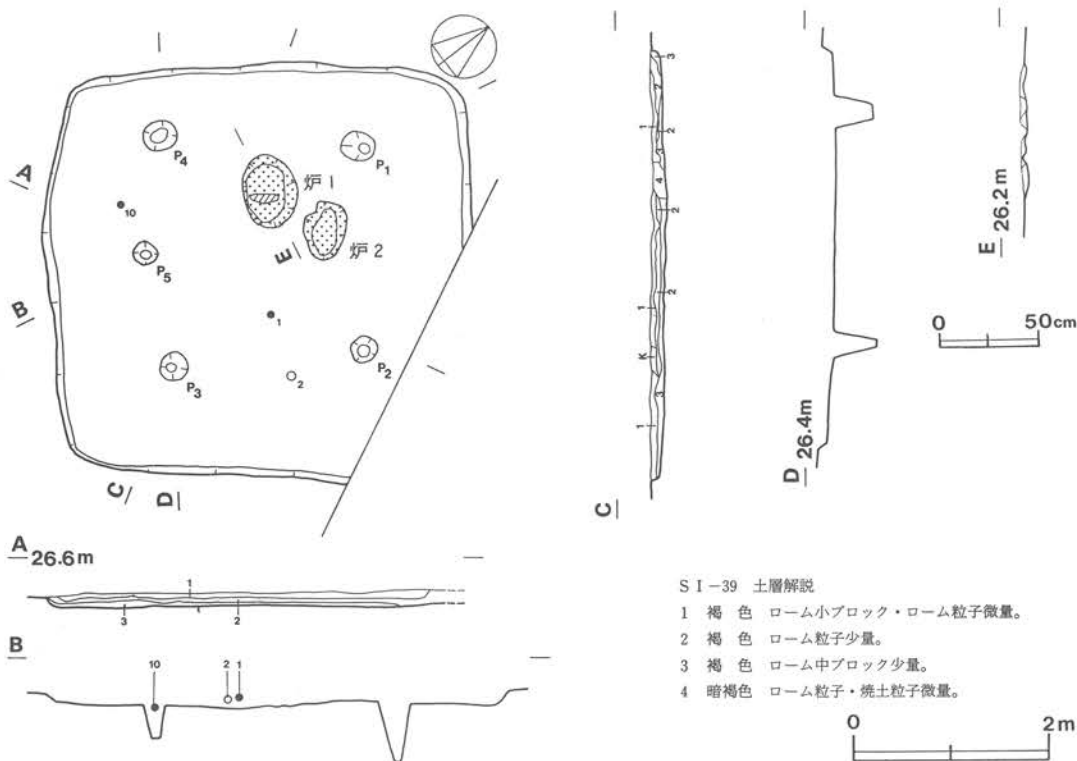
炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。

平面形は長径77cm, 短径56cmの楕円形を呈し, 床を4cm掘り込んだ地床炉である。中央部には長軸と直交するように炉石が置かれている。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。炉₂は炉₁の東側から検出され, 平面形は長径60cm, 短径50cmほどの不整楕円形を呈し, 床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は焼土化しており, 炉₁の補助的なものと思われる。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積しており, 人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下・中層から集中して弥生式土器片(広口壺1), 弥生式土器細片(137点)が出土している。その他, 土師器片(高坏1), 土師器細片(40点)が覆土中層から少量出土している。1は弥生式土器の広口壺で中央部の覆土中層から, 2は土師器の高坏で中央からやや東寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や床面及び覆土下層の出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



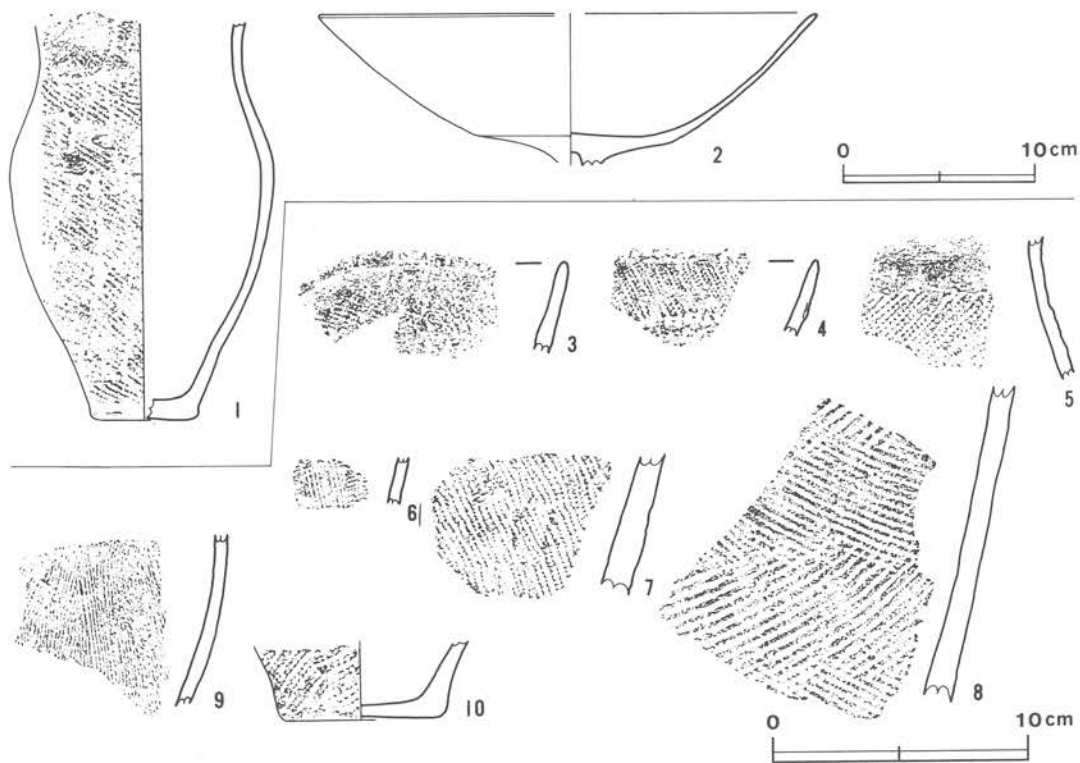
第84図 第39号住居跡実測図

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	広口壺 弥生式土器	B (21.1) C 5.6	底部から頸部にかけての破片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部は外反している。頸部を無文帯とし, 胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P201 40% 中央部覆土中層 外面スス付着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 2	高坏 土師器	A [26.4] B (4.1)	坏部片。坏部は緩やかに内 彎して立ち上がる。	外面はヘラナデ。内面はヘ ラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P203 30% 中央からやや東寄り覆土中層

第85図 3～10は、第39号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は口縁部片である。3は単節縄文が施文される単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。4は附加条1種（附加2条）の施文される複合口縁を呈し、口縁下端には縄文原体による押圧が施されている。5・6は頸部片である。5は頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。6はスリット手法による充填波状文が施されており、櫛歯数は3本である。7～9は胴部片である。7・8には附加条1種（附加2条）による縄文が施されており、8は羽状構成をとっている。9は台付甕の胴部片でハケ目痕が明瞭に残っている。10はやや上げ底を呈し、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。



第85図 第39号住居跡出土遺物実測・拓影図

第40号住居跡（第86図）

位置 C地区南部，E8b₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 北東部，南東部を大きく攪乱されており，現存長軸(2.88)m，短軸(2.70)mで形状は不明である。

長軸方向 南西壁の向きから [N-52°-W] と推定される。

壁 壁高10~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、残存部はよく踏み固められて硬い。

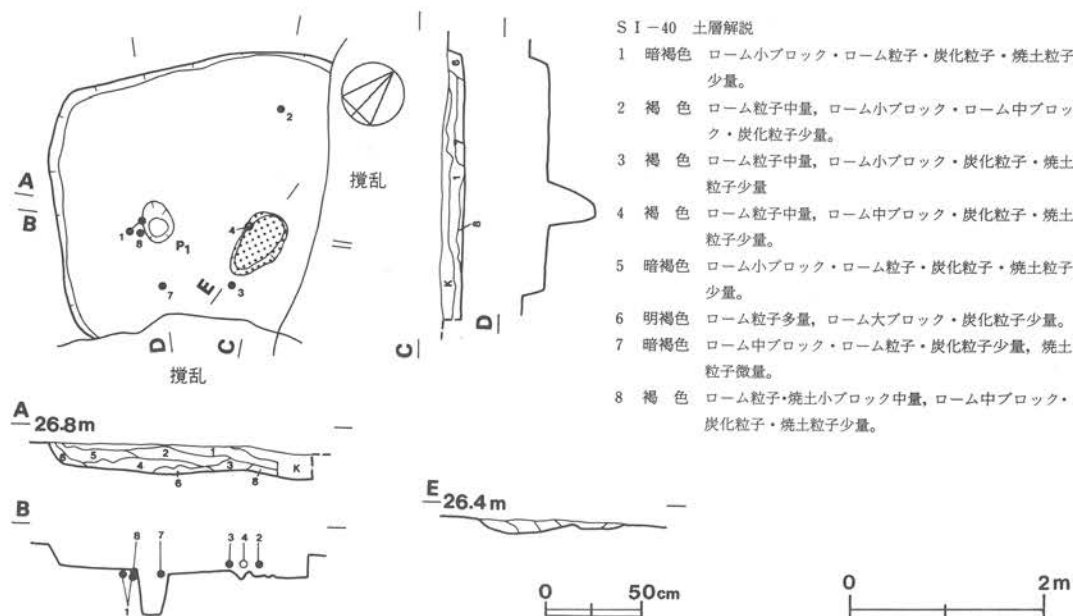
ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は長径45cm、短径30cmの楕円形を呈し、深さ49cmの主柱穴と思われるが、攪乱により他の主柱穴は検出されていない。

炉 床中央から北西寄りのP₁の東側から検出されている。平面形は長径78cm、短径45cmの楕円形を呈し、床を7cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け、赤変硬化している。

覆土 暗褐色土が下層から堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層から、弥生式土器片(広口壺2, 高坏1), 弥生式土器細片(16点)と土師器片(甕1), 土師器細片(8点)が混在して出土している。1は弥生式土器の広口壺胴下半部で南西壁付近の床面から、2は弥生式土器の広口壺胴部片で北西壁付近の覆土下層からそれぞれ出土している。4は土師器の甕口縁部片で、ほぼ中央の覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や床面の出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



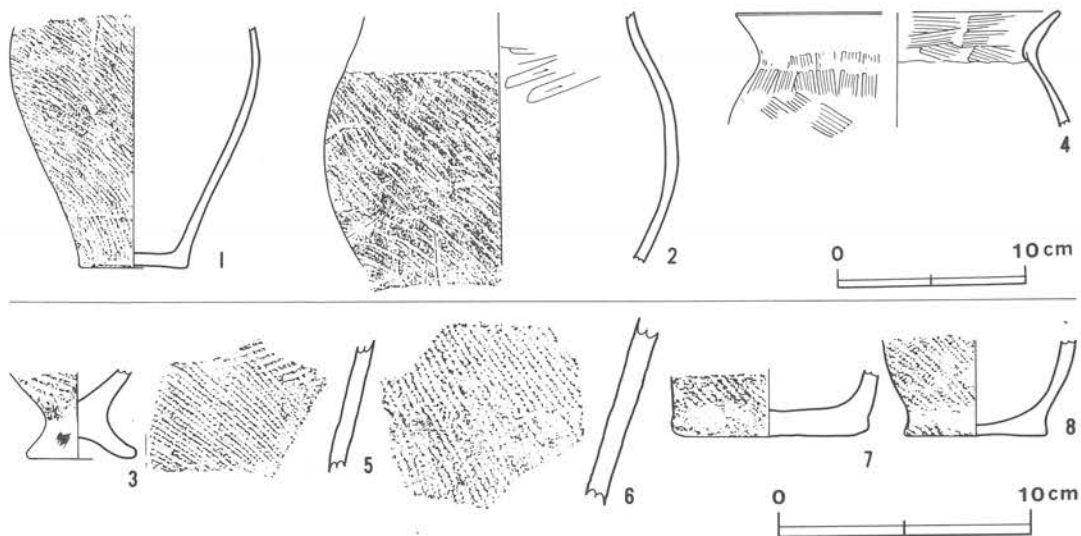
第86図 第40号住居跡実測図

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	広口壺 弥生式土器	B (12.9) C 5.7	胴下半部。上げ底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石 明黄褐色 普通	P204 南西壁付近床面 20%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第87図 2	広口壺 弥生式土器	B (13.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は外反している。頸部を無文帯とし、胴部には「 <u>附加条1種(附加1条)</u> 」の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。内面はヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P205 30% 北西壁付近覆土下層 外面スス付着	
3	高坏 弥生式土器	B (3.5) D 4.3 E 0.8	脚部から坏部にかけての破片。短めの脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。坏部外面には「 <u>附加条1種(附加2条)</u> 」の縄文が施されている。脚部外面はハケ目調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P209 20% 中央部覆土中層	
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	甕 土師器	A [17.2] B (6.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	口縁部外面は横ナデ。頸部から胴部にかけてハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P208 10% ほぼ中央覆土下層

第87図5～8は、第40号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5・6は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施され、5は羽状構成をとっている。7・8は底部片である。8は張り出しを持ち、胴部は内彎して立上がっている。ともに胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。



第87図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図

第41号住居跡（第88図）

位置 C地区北部，C6a₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.21m，短軸4.22mの隅丸長方形を呈すると思われるが，東コーナー部は攪乱されている。

長軸方向 N-51°-W。

壁 壁高20～52cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，南東壁側は踏み固められて硬い。

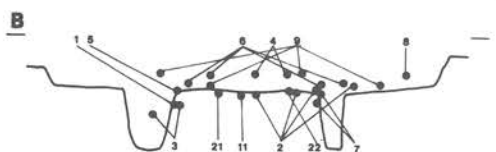
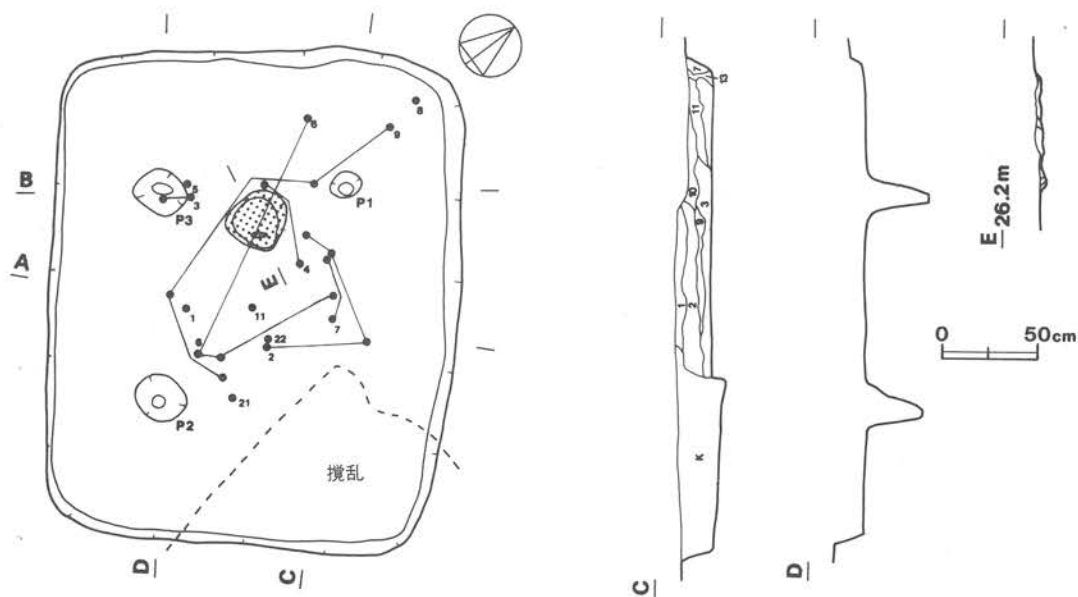
ピット 3か所（P₁～P₃）検出されている。P₁～P₃は長径28～55cm，短径20～32cmの楕円形を呈

し、深さ53~68cmの支柱穴である。攪乱により東側の支柱穴は検出されていないが、支柱穴を結んだ線は長方形となるものと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径64cm、短径58cmの不定形で、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉のやや南部からは長軸と直交するように炉石が置かれた状態で出土している。炉床はよく焼け、赤変硬化している。

覆土 床面から30cm前後の厚さでローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積し、人為堆積と思われる。

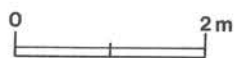
遺物 中央部の床面及び覆土下層から集中して、弥生式土器片(広口壺10, 台付甕1), 弥生式土器細片(508点), 土師器細片(22点)がに出土している。1の広口壺は、中央部からやや南側の床面から横位の状態で、2の広口壺は中央部からやや東側の床面からそれぞれ出土している。これら



S1-41 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子, 焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量。
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 7 褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 10 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 11 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 12 褐色 ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 13 褐色 ローム中ブロック少量。

第88図 第41号住居跡実測図



の土器は覆土下層出土のいくつかの破片と接合されている。4の口縁部片は中央部の覆土中層から、9の胴下半部は炉北側の床面及び覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

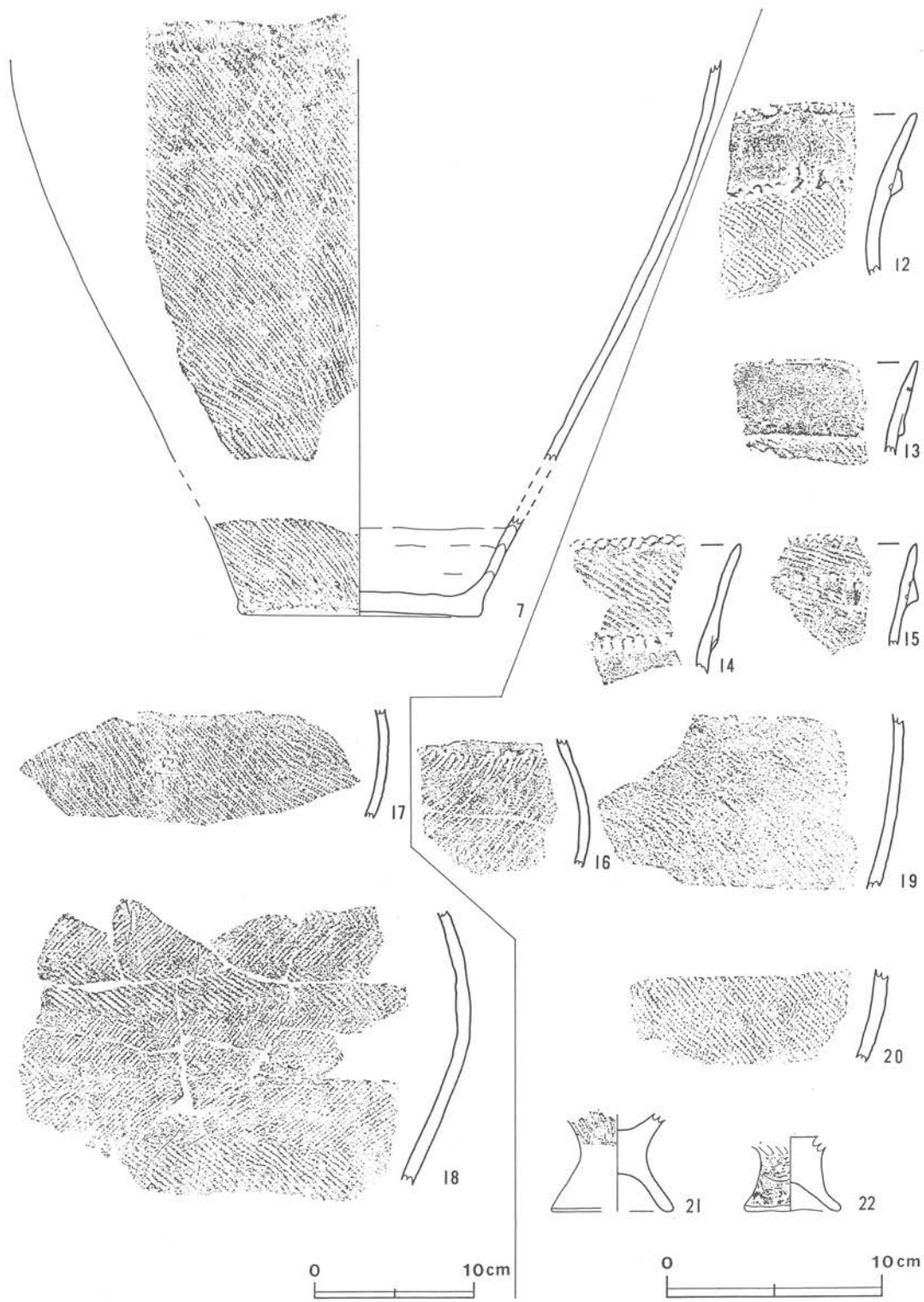
第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.8	上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。胴部上位に最大径を持つ。無文の複合口縁を呈し、下端には3個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P210 95% 中央からやや南側床面 外面スス付着
		B 31.1			
		C 8.5			
2	広口壺 弥生式土器	B (34.4)	大形土器の胴部片で内彎して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P211 5% 中央からやや東側床面
3	広口壺 弥生式土器	B (11.1)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部には太目の附加条1種（附加2条）が施されている。内面は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P212 20% 中央からやや西寄り床面
4	広口壺 弥生式土器	B (8.2)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、縄文原体による刺突文が3条周回している。1条目の刺突文下に瘤が貼られている。原体は附加条1種（附加2条）である。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P213 5% 中央部覆土中層
5	広口壺 弥生式土器	A [14.0]	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、縄文原体による刺突文が2条周回している。1条目の刺突文間に瘤が貼られている。頸部を無文帯としている。縄文原体はやや太目の単節縄文である。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P214 5% 中央からやや西寄り覆 土下層
		B (7.0)			
6	広口壺 弥生式土器	B (7.7)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は底部から内彎して立ち上がっている。頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面は粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P215 10% 中央部覆土下層 外面スス付着
第90図 7	広口壺 弥生式土器	B [30.7]	胴下半部。平底で張り出しを持ち、胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P222 20% 炉東側床面 外面スス付着
		C 15.7			
8	広口壺 弥生式土器	B (10.7)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がっている。頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。内面は軽く横ナデされている。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P216 20% 北コーナー付近覆土下層 外面スス付着
9	広口壺 弥生式土器	B (14.3)	胴下半部。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石 橙色 普通	P217 20% 炉北側床面・覆土中層 内面炭化物付着
		C 8.1			
10	広口壺 弥生式土器	B (6.3)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石 明褐色 普通	P218 20% 中央部覆土中層 内面炭化物付着
		C 8.0			
11	台付甕 弥生式土器	B (5.1)	脚部から胴部にかけての破片。脚部は「ラッパ」状に開く。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P219 10% 中央部床面
		D 6.6			
		E 1.6			

第90図12～22は、第41号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。12～15は口縁部片である。12は無文の複合口縁を呈し、下端に縄文原体による押圧が施され、2個1組の瘤が貼られている。頸部上半には太目の附加条1種（附加2条）が施されている。13は無文の複合口縁を呈し、頸部上半には縄文が施されている。14は縄文施文のやや幅広な複合口縁を呈し、口唇部・



第89图 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第90図 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

口縁下端は縄文原体により押圧されている。頸部は無文帯としている。15は縄文施文の単口縁を呈し、中位に刺突文が2列横位に施されている。刺突の間に貼瘤が伴う。16~20は胴部片である。いずれにも縄文が施されており、原体は16・17・20が附加条1種（附加2条）、19が直前段反撚り、18が単節である。18は羽状構成をとっている。21・22は「ハ」の字状に開く台付壺の脚部片である。

第42号住居跡（第91図）

位置 C地区南部，E8a₁区を中心に確認されている。

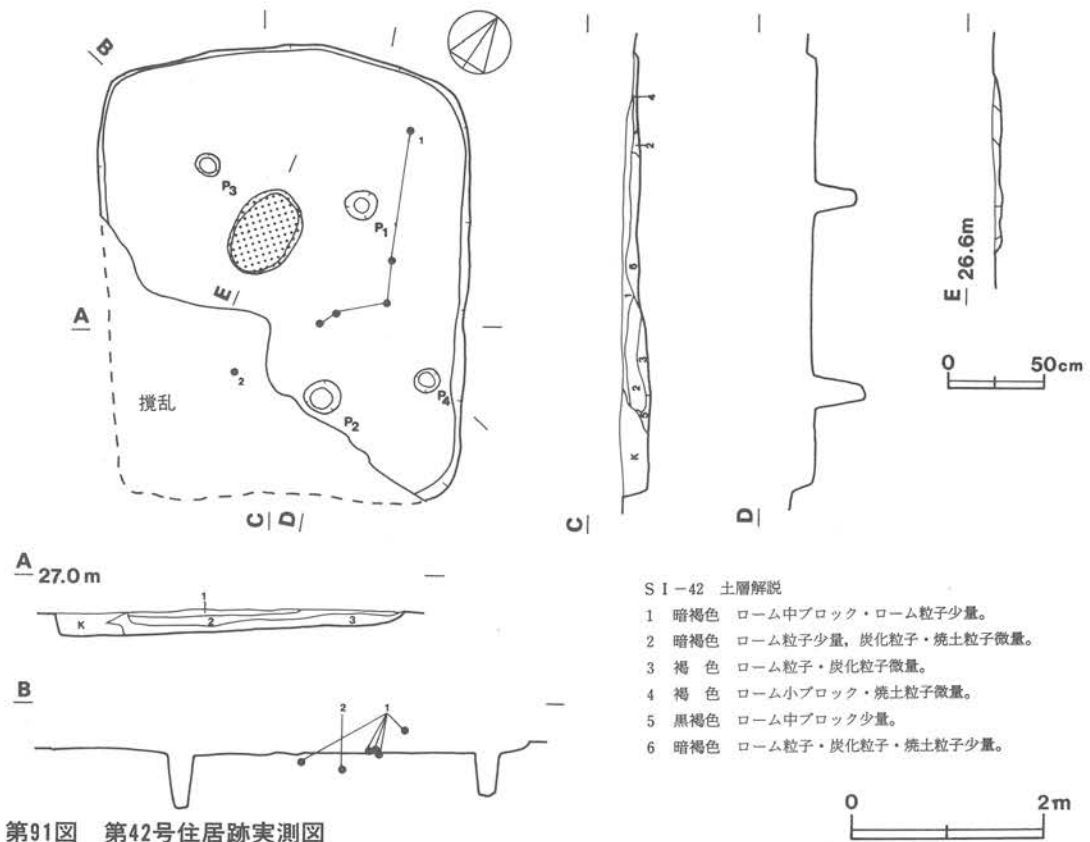
規模と平面形 長軸5.93m，短軸4.66mの長方形を呈するものと思われるが，南コーナー付近は大きく攪乱されている。

長軸方向 N-36°-W。

壁 壁高4~32cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦であり，残存部は踏み固められ硬い。

ピット 4か所（P₁~P₄）検出されている。P₁~P₃は径26~28cmの円形を呈し，深さは45~59cmの主柱穴である。攪乱により南側の主柱穴は検出されなかったが，主柱穴を結んだ線は方形とな



第91図 第42号住居跡実測図

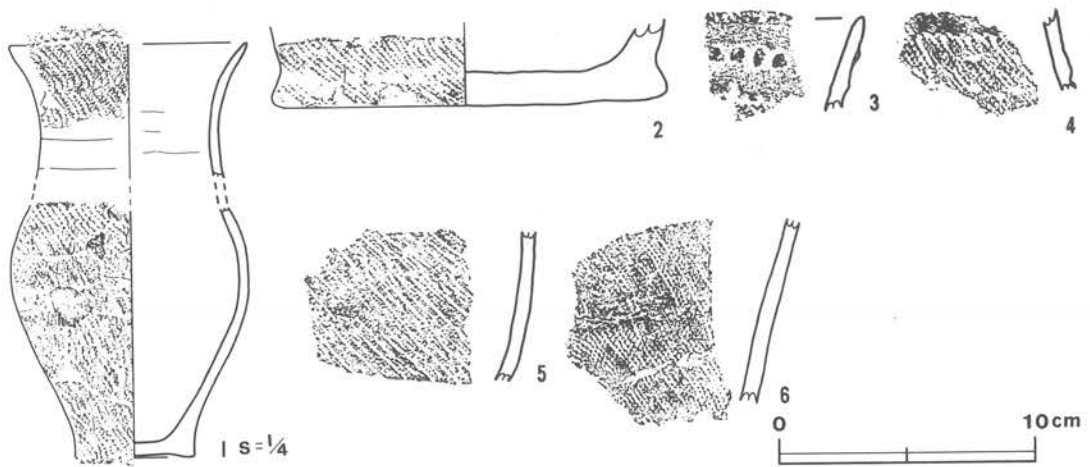
るものと思われる。P₄は径30cmの円形を呈し、深さ45cmの補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径96cm、短径66cmの楕円形を呈し、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 北東壁際の床面及び覆土下層から集中して、弥生式土器片(広口壺2)、弥生式土器細片(101点)が出土している。1の広口壺は炉東側の床面から出土したものと、覆土下層から出土したいくつかの破片が接合されている。2の底部片は炉南側の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第92図 第42号住居跡出土遺物実測・拓影図

第42号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第92図 1	広口壺 弥生式土器	A [12.6]	上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、頸部を無文帯としている。胴部には単節縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P223 炉東側床面 2次焼成
		B [22.0]			
		C 6.3			
2	広口壺 弥生式土器	B (3.4)	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P224 炉南側床面
		C 15.6			

第92図3～6は、第42号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は無文で2段の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施されている。1段目下端には瘤が密に貼られており、2段目下端は棒状工具により刺突されている。4は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下端を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。5・6は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。

第43号住居跡 (第93図)

位置 C地区南部, E8a区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.49m, 短軸4.35mの長方形を呈している。

長軸方向 N-66°-W。

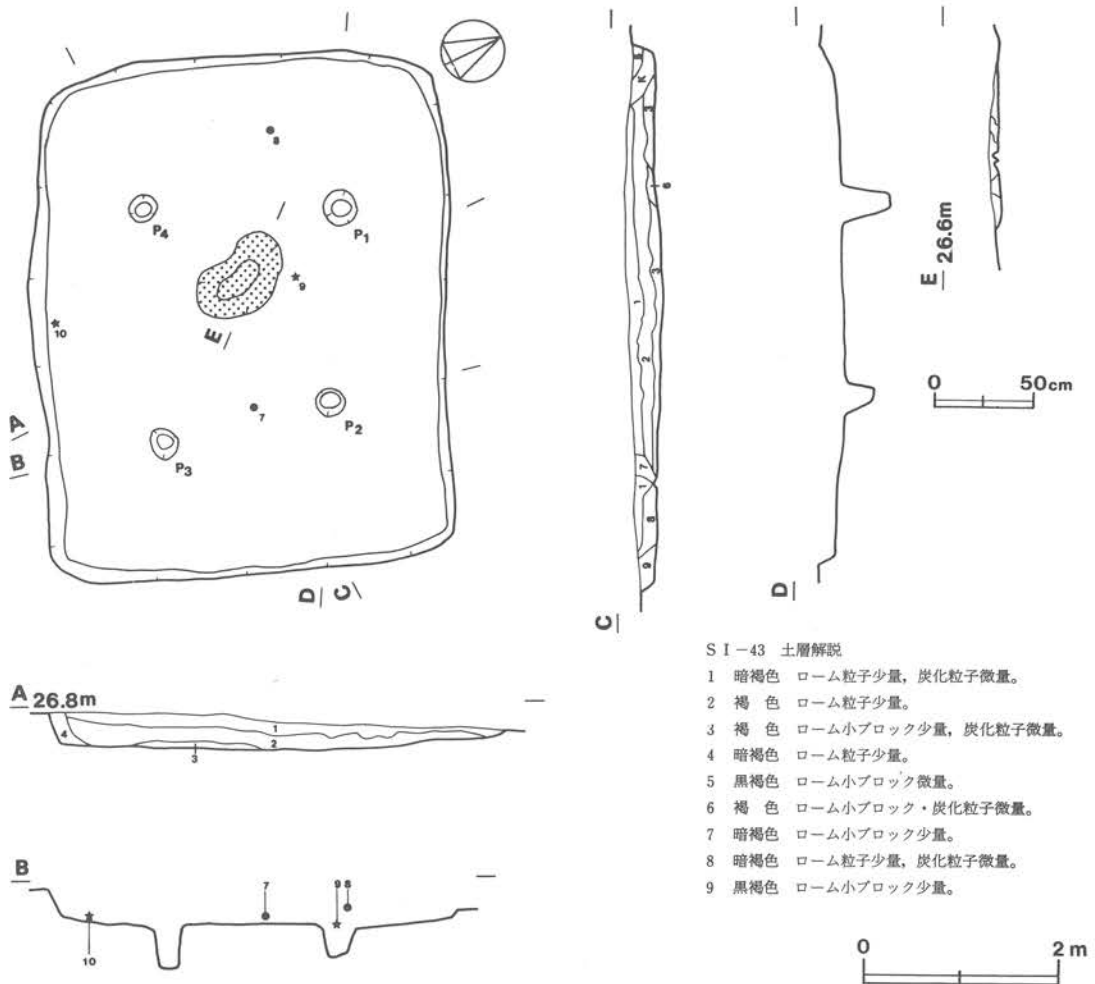
壁 壁高12~38cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は径28~32cmの円形を呈し, 深さは32~54cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は不整形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径105cm, 短径63cmの不定形を呈し, 床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け, 赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

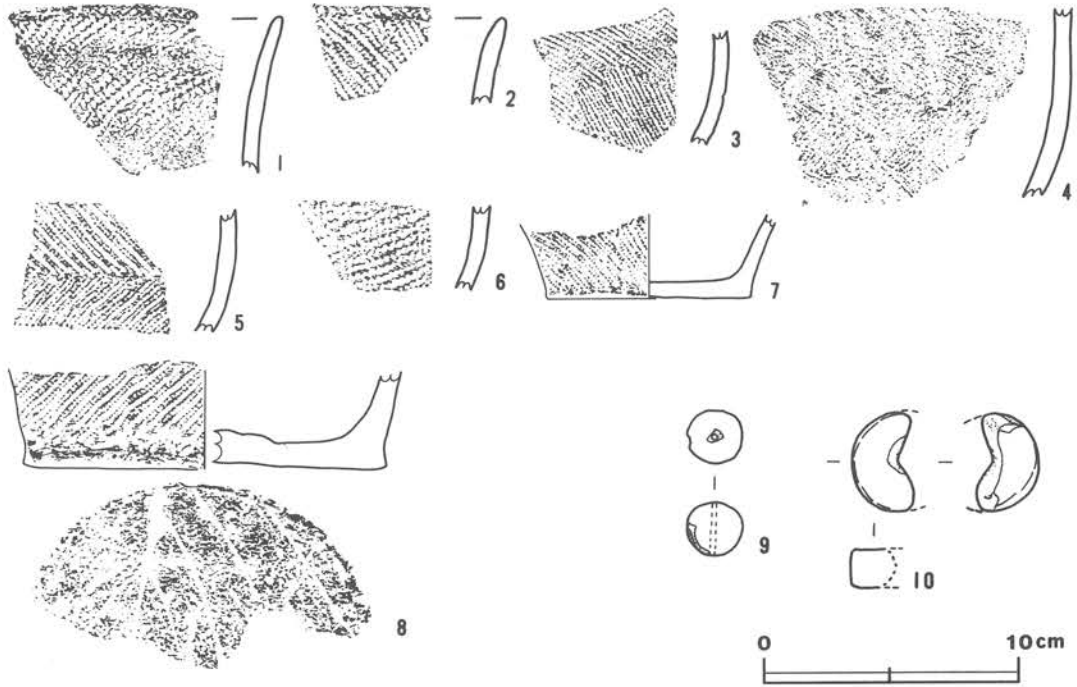


S I - 43 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック微量。
- 6 褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 9 黒褐色 ローム小ブロック少量。

第93図 第43号住居跡実測図

遺物 中央部の床面及び覆土下層から集中して弥生式土器細片（97点）が出土している。7の底部片は炉東側の覆土中層から、8の底部片は炉西側の覆土上層から、それぞれ出土している。9の土錘は炉北側の床面から、10の紡錘車は南西壁付近の覆土下層から、それぞれ出土している。
 所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第94図 第43号住居跡出土遺物実測・拓影図

第94図1～8は、第43号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、いずれも太目の単節縄文が施される単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。3～6は胴部片であり、3・6は単節縄文が、4・5は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7・8は底部片である。ともに平底で胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8は底面に木葉痕を持つ。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第94図 9	土錘	2.3	2.2	2.2	2.0	(9.2)	95	床面	DP45
10	紡錘車	[4.2]	4.1	1.6	—	(15.1)	50	覆土下層	DP46

第47号住居跡（第95図）

位置 A地区ほぼ中央、G2a₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.73m、短軸3.91mの長方形を呈している。

長軸方向 N-49°-W。

壁 壁高42~48cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 南東壁ほぼ中央付近から北コーナー付近にかけて、幅0.95mほどの攪乱溝が存在しているが、現存部は平坦でよく踏み固められて硬い。

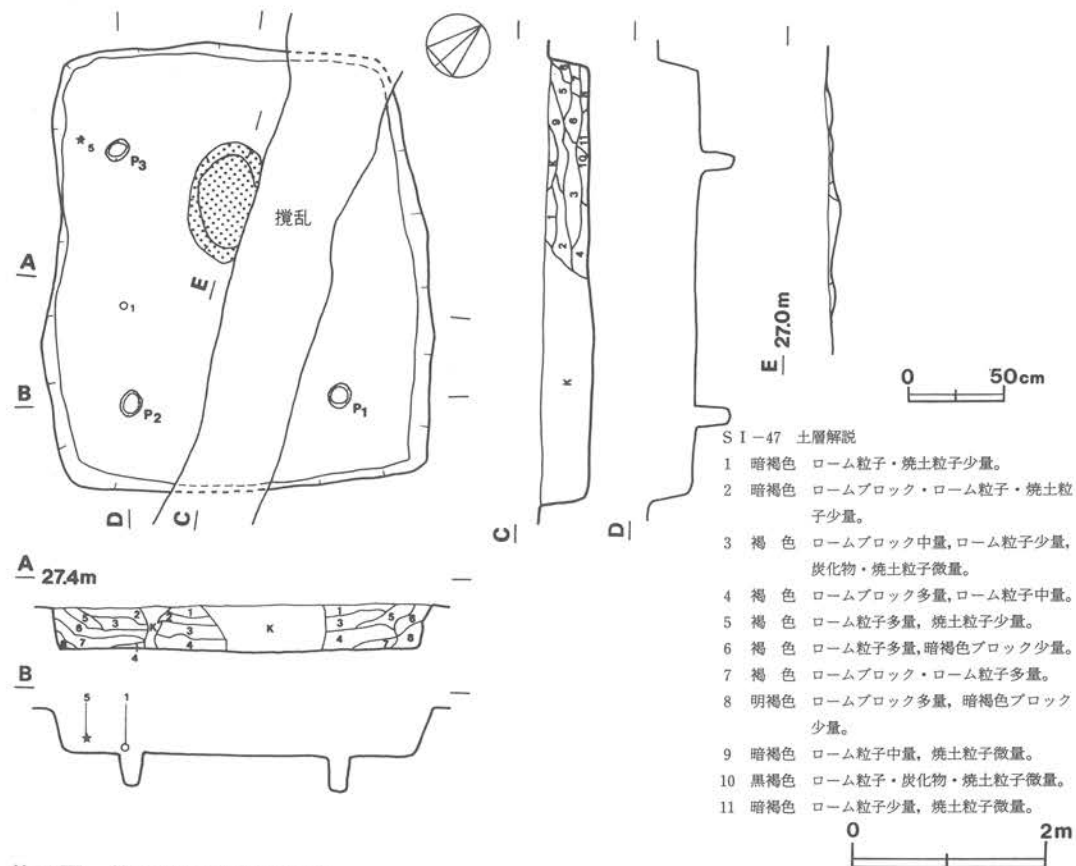
ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁~P₃は径22~28cmの円形を呈し、深さは36~37cmの主柱穴である。攪乱により、柱穴が1か所未検出であるが、主柱穴を結んだ線は長方形となるものと思われる。

炉 長軸線上のやや北西寄りに検出されている。平面形は長径125cm、現存短径(65)cmの楕円形を呈し、床を7cm掘り込んだ地床炉で、炉床は赤変硬化している。

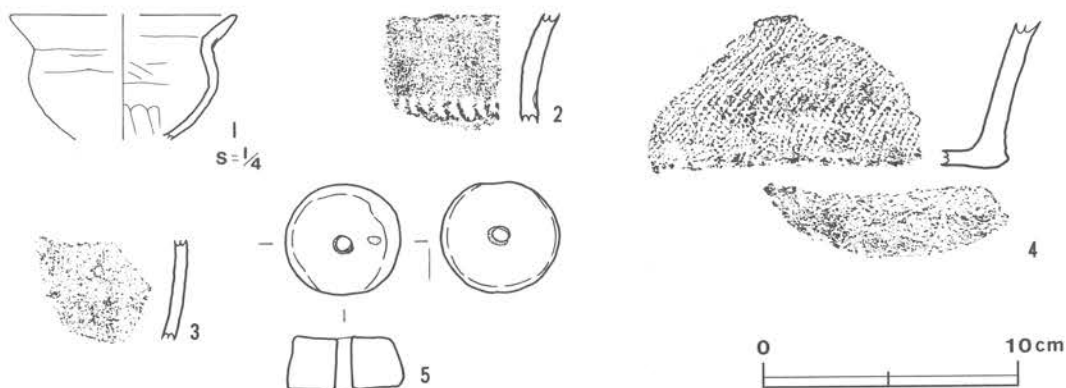
覆土 ロームブロック、ローム粒子を含む褐色土の堆積がみられ、人為堆積と思われる。

遺物 南西壁付近の覆土下・中層から、弥生式土器細片(8点)と土師器片(鉢1)、土師器細片(137点)が混在して出土している。4は弥生式土器の底部片で中央部の覆土下層から逆位の状態で出土している。1は土師器の小形鉢で南西壁付近の覆土下層から、5の紡錘車は西コーナー付近の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や覆土下層の出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第95図 第47号住居跡実測図



第96図 第47号住居跡出土遺物実測・拓影図

第47号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	鉢 土師器	A [12.0] B (6.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	口縁部内・外面は横ナデ。胴部内面はへら削り。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい橙色普通	P263 20% 南西壁付近覆土下層

第96図2～4は、第47号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は頸部片であり、外面無文で頸部下端に原体による刺突が施されている。3は胴部片であり、外面はハケ目調整されている。4は底部片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第96図 5	紡錘車	4.7	4.5	2.3	7.0	51.6	100	覆土中層	DP48

第50号住居跡（第175図）

位置 A地区南西部，G2g_s区を中心に確認されている。

重複関係 北西部を第49号住居跡に掘り込まれ，さらに南東部を第94号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸は第49・94号住居跡に掘り込まれているため，現存部で(5.25)m，短軸6.96mである。形状は長方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-61°-W。

壁 壁高30～43cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は径32～36cmの円形を呈し，深さは40～42cm

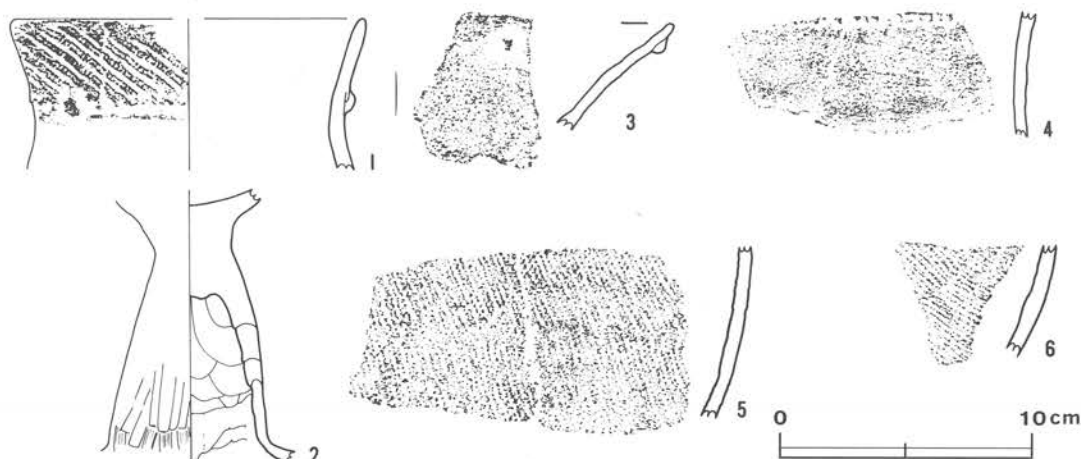
の支柱穴である。他の支柱穴は第94号住居跡に掘り込まれているため、未検出であるが、支柱穴を結んだ線は北西壁とほぼ平行である。

炉 長軸線上の中央から北西壁寄りに検出されている。平面形は長径100cm、短径62cmの楕円形を呈し、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉のほぼ中央には、長軸と直交するように長さ25cmほどの炉石が置かれた状態で出土している。炉床は赤変硬化している。

覆土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全体の床面及び覆土下・中層から弥生式土器片(広口壺1, 弥生式土器細片(146点)と土師器片(高坏1), 土師器細片(503点)が混在して出土している。1は弥生式土器の口縁部片で西コーナー付近の床面から、2は土師器の高坏脚部で炉の東側の覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や床面の出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第97図 第50号住居跡出土遺物実測・拓影図

第50号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第97図 1	広口壺 弥生式土器	A [14.1] B (6.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の複合口縁を呈し、下端に刺突文と貼瘤が伴う。頸部を無文帯とし、横ナデされている。原体は附加条1種(附加2条)である。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P296 5% 西コーナー付近床面	
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	高坏 土師器	E (11.0)	脚部片。やや足高の脚部で、裾部は「ラッパ」状に開く。	外面はハケ目調整。内面は指ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P297 30% 炉東側覆土下層

第97図3～6は第50号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は高坏の口縁部片であり、外面無文で口縁近くに瘤が貼られている。4は頸部片であり、口縁下端に縄文原体による刺突が施されており、頸部を無文帯としている。5・6は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第56号住居跡(第98図)

位置 B地区南西部, F4j₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.95m, 短軸3.30mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-22°-W。

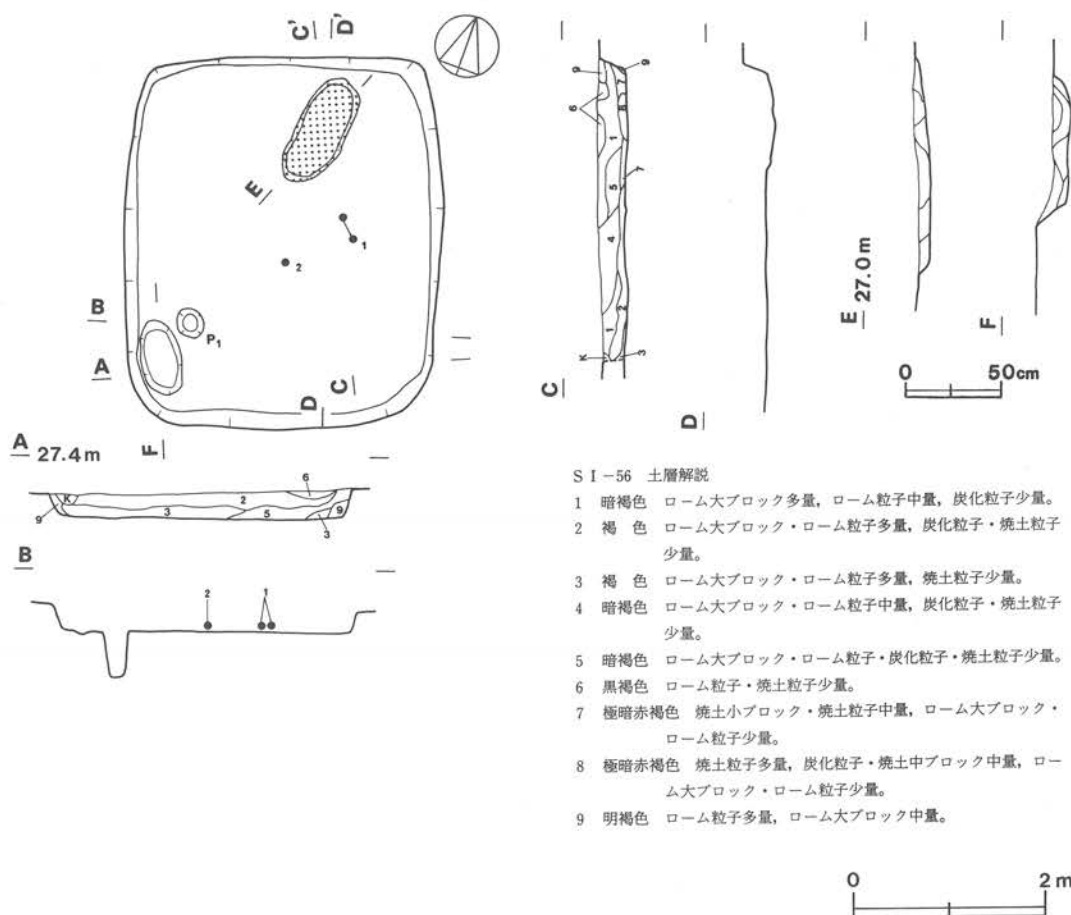
壁 壁高23~32cmで, 外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴 南コーナー付近に確認されている。平面形は, 長径82cm, 短径43cmの楕円形を呈し, 深さ10cmである。床面は平坦で, 壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 全体に平坦で, 炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 1か所(P₁) 検出されている。P₁は長径34cm, 短径28cmの楕円形を呈し, 深さは48cmである。支柱穴と思われるが, 他の支柱穴は検出されていない。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径121cm, 短径50cmの楕円形を呈し, 床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

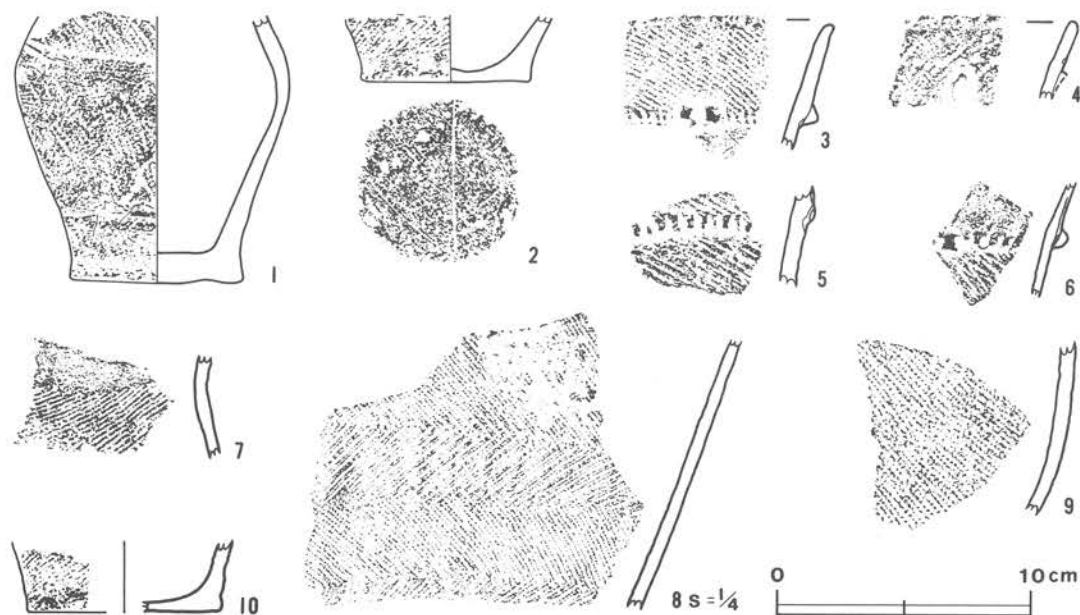


第98図 第56号住居跡実測図

覆土 ローム粒子，ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積しており，人為堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土下層を中心に弥生式土器片（広口壺2），弥生式土器細片（142点）が少量出土している。1の広口壺は炉南側の覆土下層から出土している。2の底部片は中央部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第99図 第56号住居跡出土遺物実測・拓影図

第56号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	広口壺 弥生式土器	B (10.7) C 7.0	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり，附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが，羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 354 50% 炉南側覆土下層
2	広口壺 弥生式土器	B (2.7) C 6.7	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり，附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P 355 5% 中央部覆土下層

第99図3～10は，第56号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～6は口縁部片である。3は縄文施文の薄めの複合口縁を呈し，口縁下端には縄文原体による押圧が施され，2個1組の瘤が貼られている。頸部は無文帯としている。4は縄文施文の単口縁を呈し，口唇部にも縄文が施されている。中位に縄文原体による刺突文が2列横位に施され，刺突文間に瘤が貼られている。5は縄文施文の複合口縁を呈し，下端には縄文原体による押圧が施されている。6は無文の複合口縁を呈し，口縁下端には縄文原体による押圧が施され，貼瘤も伴う。7は頸部から胴部にかけての破片で，頸部下端を無文帯とし，胴部には縄文が施されている。8・9は胴部片

で、8は附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。9は単節縄文が施されている。10は平底で、胴部には縄文が施されている。

第59号住居跡(第190図)

位置 A地区南東部, G3d₄区を中心に確認されている。南側5分の4ほどは調査区外へのびている。

重複関係 北西コーナーを第58号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 5分の1だけの調査であり, 長軸(2.80)m, 短軸(0.70)mで, 形状は不明である。

壁 壁高15~25cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 現存部はあまり踏み固められておらず, 軟らかい。

覆土 暗褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 覆土下層から弥生式土器細片(18点)が出土している。

所見 第58号住居跡に掘り込まれていることや出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第62号住居跡(第100図)

位置 B地区南西部, F4h₁区を中心に確認されている。

重複関係 北部を第60号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸推定[4.36]m, 短軸4.25mの隅丸方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高31~32cmで, 外傾して立ち上がっている。

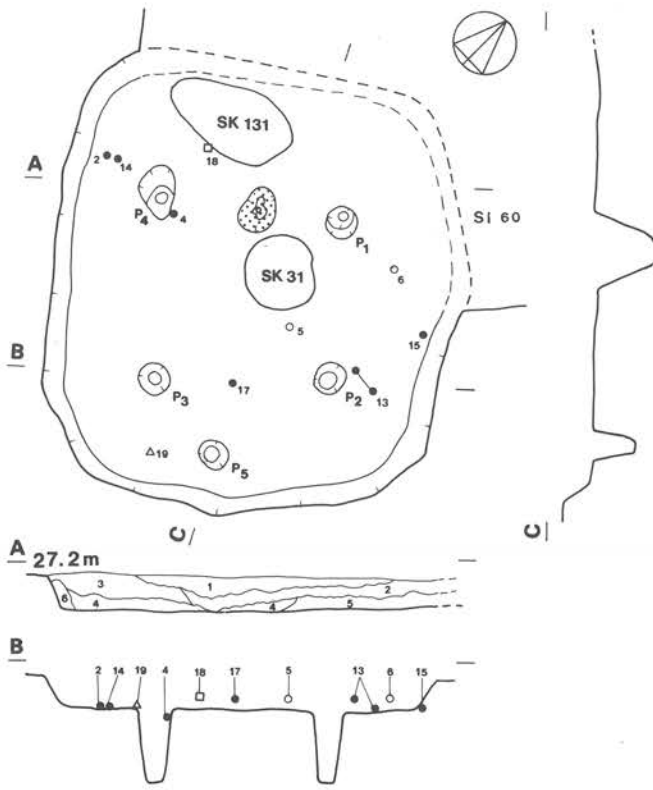
床 南東壁付近はやや凹凸があるが, 他は平坦で全体によく踏み固められ硬い。

ピット 5か所(P₁~P₅)検出されている。P₁~P₄は径28~38cm円形を呈し, 深さは65~80cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径32cmの円形を呈し, 深さ49cmで出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径48cm, 短径35cmの楕円形を呈し, 床を6cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

覆土 黒褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土中・下層を中心に弥生式土器片(広口壺4), 弥生式土器細片(86点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる土師器片(高坏1, 埴1), 土師器細片(73点)が覆土中・上層から出土している。1は広口壺の口縁部片で中央からやや南東寄りの覆土下層から, 3は広口壺の底部片で北東壁中央付近の覆土下層から, 13の底部片は中央から南東寄りの覆土中層から,



SI-62 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 4 暗褐色 炭化材・焼土粒子少量，ローム粒子微量。
- 5 褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量。
- 6 褐色 ローム小ブロック少量，焼土粒子微量。



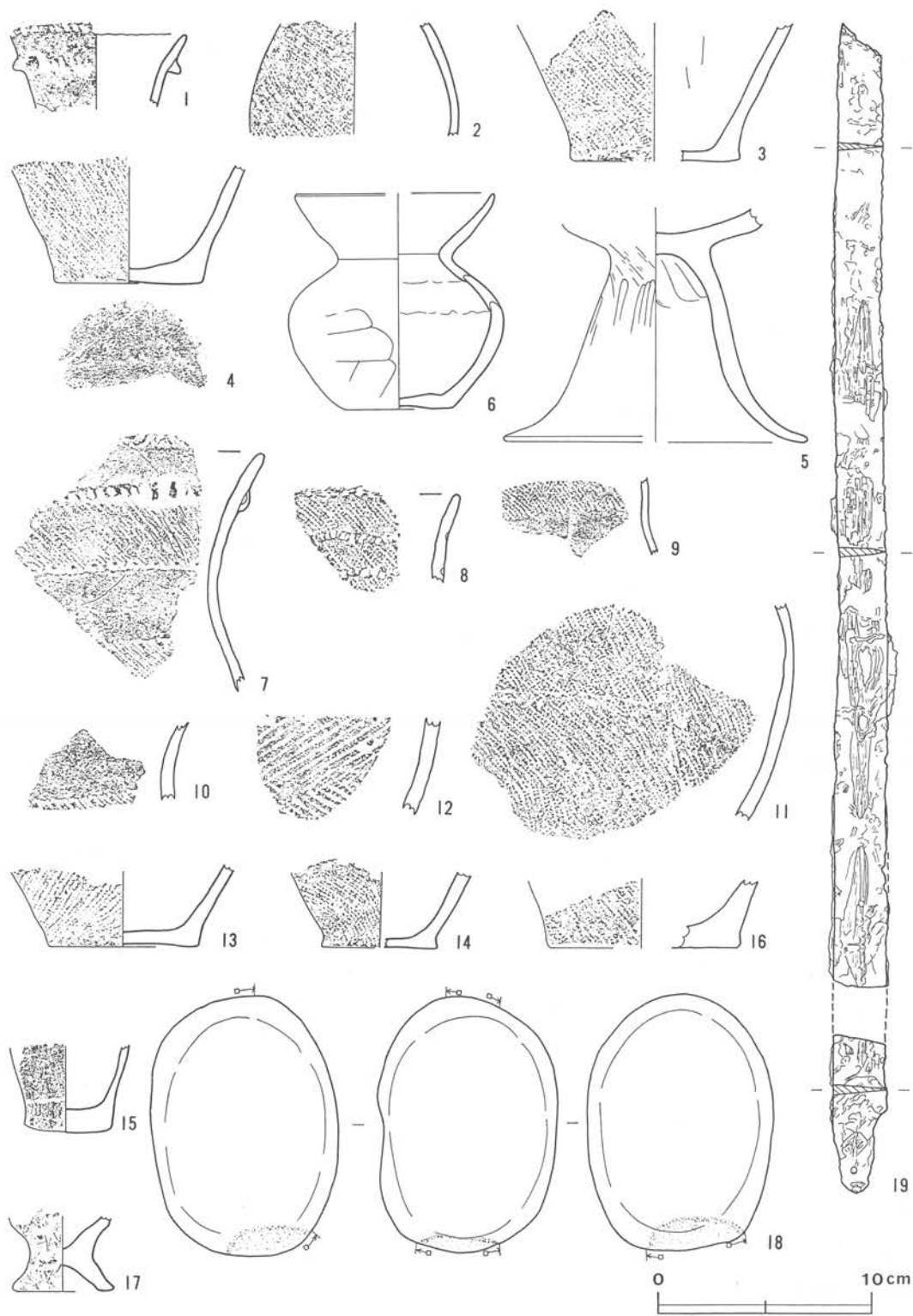
それぞれ出土している。2は広口壺の胴部片で西コーナー付近の床面から出土している。5は土師器の高坏で中央からやや南東寄りの覆土中層から、6は土師器の埜で中央からやや北東寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。18の敲石は覆土から出土している。19の直刀は南コーナー付近の覆土下層から出土したが、出土地点周辺の覆土は焼土ブロック・炭化物を多量に含んでいる。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第100図 第62号住居跡実測図

第62号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	広口壺 弥生式土器	A 8.3 B (3.5)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がっている。無文の複合口縁を呈し、口唇部と口縁下にはキザミ目が施されている口縁下端には2個1組の瘤が貼られている。頸部は縦位にヘラナデされている。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P 426 10% 中央からやや南東寄り 覆土下層
	2	広口壺 弥生式土器	B (5.3)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がっている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通
3	広口壺 弥生式土器	B (6.5) C [8.0]	底部から胴部にかけての破片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 420 10% 北東壁中央付近覆土下層 内面炭化物付着
	4	広口壺 弥生式土器	B (5.6) C 6.8	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通



第101図 第62号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 5	高坏土器	B (11.0) D [14.4] E 9.2	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ラッパ」状に大きく開く。坏部は内彎して立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面は縦位のヘラ削り。脚部内面は強い指ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 427 30% 中央からやや南東寄り 覆土中層
6	埴土器	A [9.5] B 10.1 C 5.1	上げ底。胴部は大きく内彎して立ち上がる。口縁部は僅かに内彎している。	口縁部内・外面は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。胴部内面に輪積み痕。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 428 40% 中央からやや北東寄り 覆土中層

第101図7～17は、第62号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は無文の複合口縁を呈し、口縁下端には縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が貼られている。頸部下半は無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8は縄文施文の単口縁を呈し、中位に縄文原体による刺突文が2列横位に施されている。9・10は頸部片であり、9は頸部上半には単節縄文が施されており、下半は無文帯としている。10は頸部は無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。11・12は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。13～16は底部片であり、13・14・16の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、15は無文である。17は台付甕の脚部片と思われ、「ハ」の字状に開いており、外面は無文である。

第101図19の直刀は南^{きつさき}コーナー付近の覆土下層から、鋒を南南東に刃を西南西に向け、二つに折れて出土している。刀身の一部分が欠けているほかは、ほぼ完形で遺存状態は良好である。鉄製で内反りぎみである。鑄^{しのぎ}は錆のため明瞭でない。刀身には柄の木質の一部が遺存している。鋒は直線をなす^{かます}鯨^{まち}鋒である。関の部分は錆が激しいが、棟関は明瞭でなく思われ、刃関は刃部から130°で0.6cmの長さをもって^{なかご}茎に至っている。茎長は3.9cmと刀身長50.8cmに対して非常に短い。幅は茎尻に向ってやや狭くなっている。茎尻から1.1cmの位置に目釘穴が1個認められる。茎尻は栗切尻と思われる。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図	18	敲石	12.0	8.9	8.4	1283.2	安山岩 覆土	Q50

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第101図	19	直刀	54.7	2.5	0.4	—	223.6	95	覆土下層 2片が接合

第63号住居跡（第102図）

位置 B地区西部，F4a₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.68m，短軸4.85mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-46°-W。

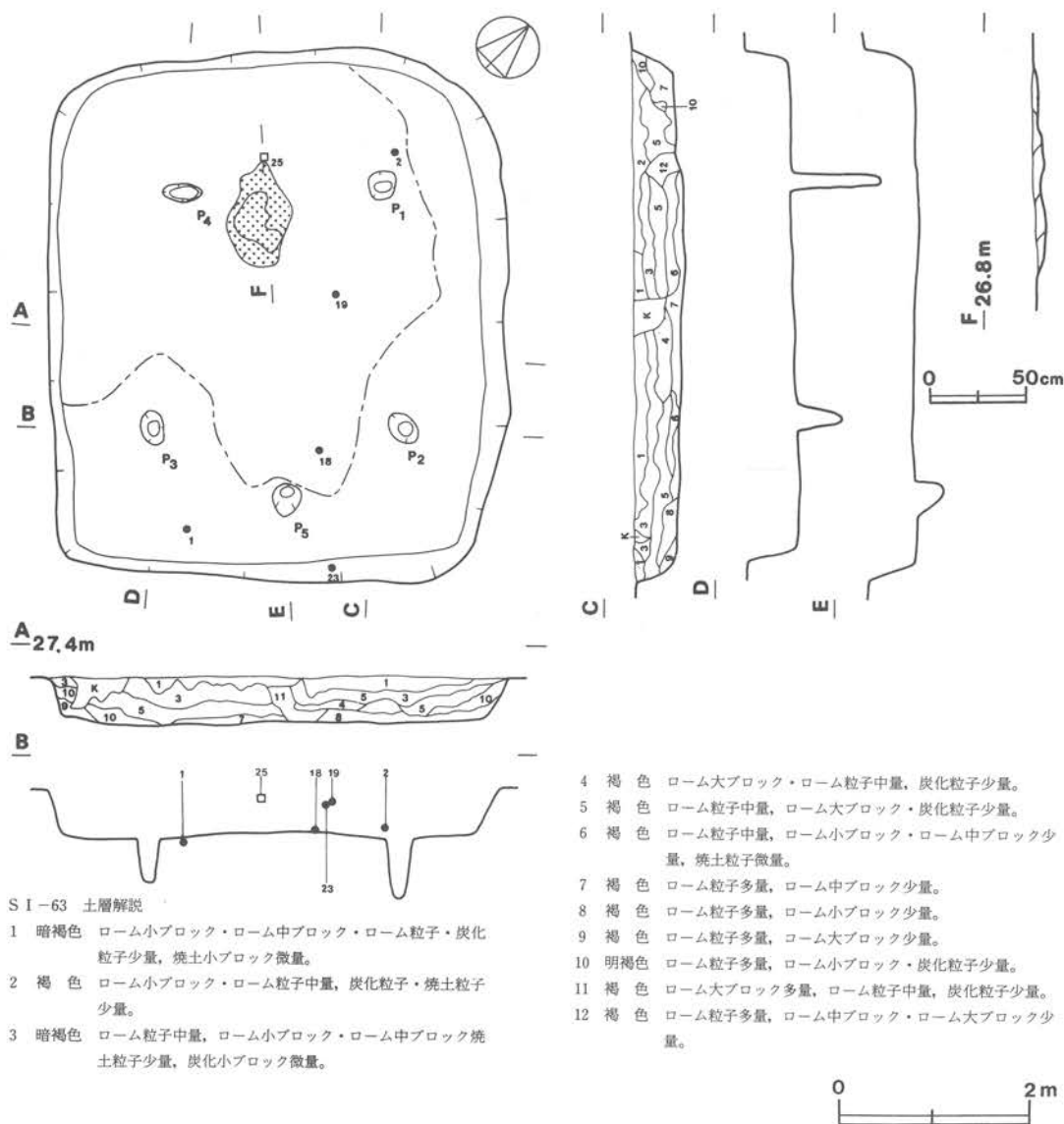
壁 壁高40～55cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

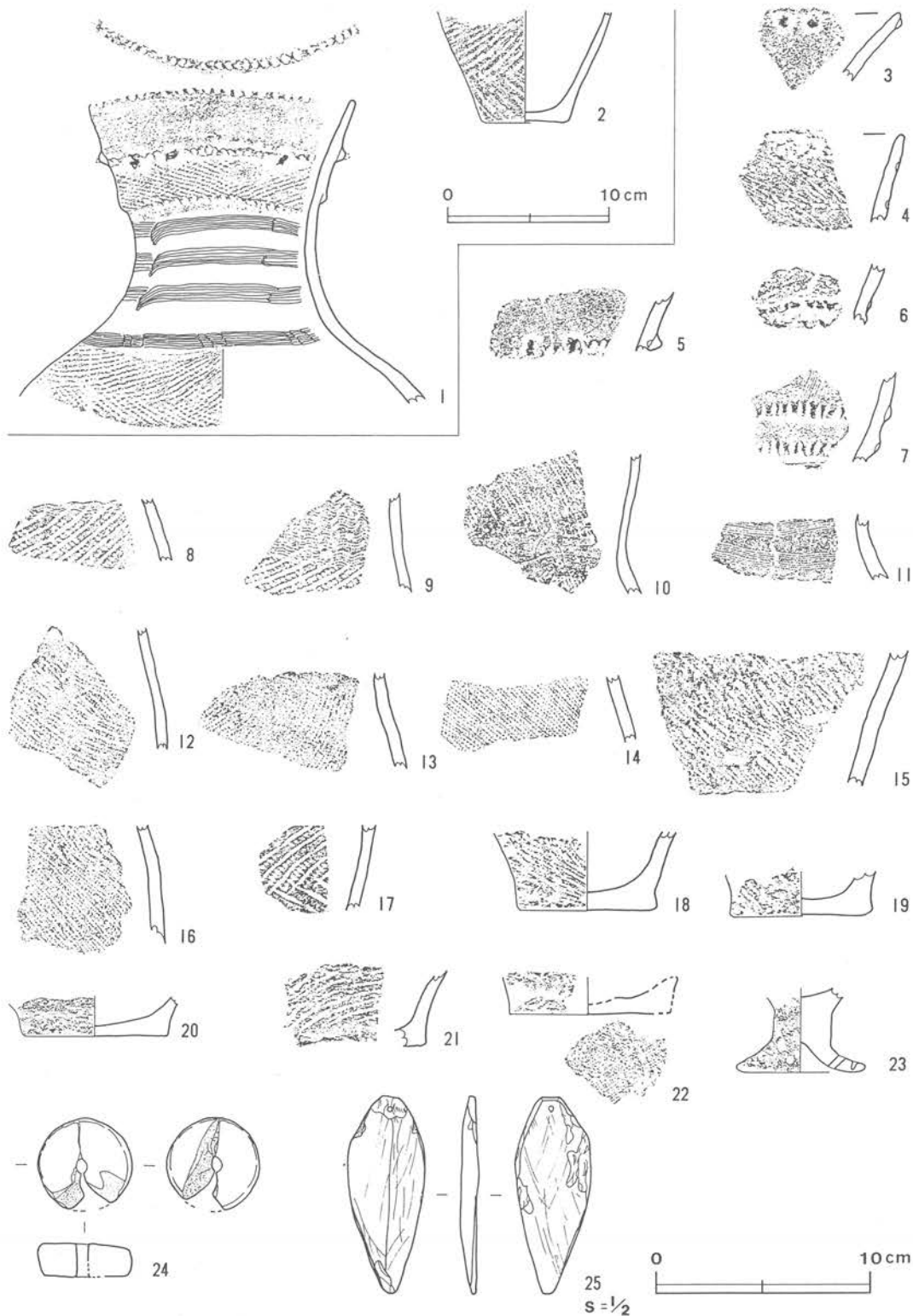
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は長径30~35cm, 短径23~28cmの楕円形を呈し、深さ51~97cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径36cm, 短径31cm, 深さ29cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径110cm, 短径70cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

覆土 下層は25cm前後の厚さを有し、ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積しており、人為堆積である。上層は暗褐色土であり、自然堆積と思われる。



第102図 第63号住居跡実測図



第103图 第63号住居跡出土遺物実測・拓影图

遺物 南東壁付近の覆土下・中層に集中して、弥生式土器片(広口壺2)、弥生式土器細片(359点)が出土している。その他、流れ込みと思われる土師器細片(173点)と石製模造品が覆土中・上層から出土している。1の櫛描文の施されている広口壺は、南東壁際の床面から逆位の状態で出土している。2の底部片は北コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、24の紡錘車は中央から南東壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。25の石製模造品は中央から北西寄りの覆土上層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第63号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.7 B (19.1)	胴上半部。胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。2段の複合口縁を呈し、1段目は無文で、2段目には縦回転による羽状構成が見られる。口唇部、口縁下端は縄文原体により押圧されている。1段目下端には2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部には6本櫛歯による大振りな連弧文が3段にわたり施されている。頸部には7本櫛歯による3連止め簾状文によって区画している。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P430 40% 南東壁際床面
2	広口壺 弥生式土器	B (7.0) C 5.4	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。外面は摩耗が著しい。	砂粒・長石・石英・ 雲母 黄橙色 普通	P431 10% 北コーナー付近覆土下層

第103図3～23は、第63号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～7は口縁部片である。3は高坏の口縁部片であり、口縁に沿って瘤が貼られている。4は縄文施文の単口縁を呈し、中位に円形刺突文が2列横位に施されている。5は無文の複合口縁を呈し、口縁下端には縄文原体による押圧が施され、2個1組の瘤が貼られている。6は口縁部は無文で頸部とは2本の隆起線により区画し、隆起線には縄文原体による押圧が施されている。7は口縁部に7本櫛歯による縦線文が施されており、頸部とは2本の隆起線により区画されている。隆起線上にはヘラ状工具によるキザミ目が施されている。8～11は頸部片である。8・9は同一個体であり、頸部にスリット手法による充填波状文が施されている。櫛歯数は5本である。胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。10は頸部下半を無文帯とし、それ以外は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。11には7本櫛歯による横走文が施されている。12～17は胴部片である。12・13は頸部下半を無文帯としている。胴部には、すべてに縄文が施されており、原体は12～16が附加条1種(附加2条)、17が附加条2種(附加1条)である。18～22は底部片である。18・19の胴部には附加条1種(附加2条)の、21には附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。22の底面には布目痕を持つ。23は高坏の脚部片であり、裾部は「ラッパ」状に開き、1孔が穿たれている。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第103図 24	紡 錘 車	4.5	4.4	1.6	5.5	(30.3)	80	覆 土 上 層	D P 53

図版番号	器種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第103図 25	石製模造品	6.1	2.4	0.6	12.1	滑 石	覆 土 上 層	Q51

第67号住居跡 (第104図)

位置 B地区中央部, F4d₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.65m, 短軸6.12mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-23°-E。

壁 壁高42~48cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められ硬い。

ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₃は長径52~60cm, 短径40~48cmの楕円形を呈し, 深さ82~90cmの支柱穴である。東側の支柱穴は攪乱のため検出されていないが, 支柱穴を結んだ線は長方形となるものと思われる。P₅・P₆は補助柱穴と思われる。P₄は長径35cm, 短径28cmの楕円形を呈し, 深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北東寄りに検出されている。平面形は長径180cm, 短径105cmの楕円形を呈し, 床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部が赤変硬化している。

覆土 暗褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

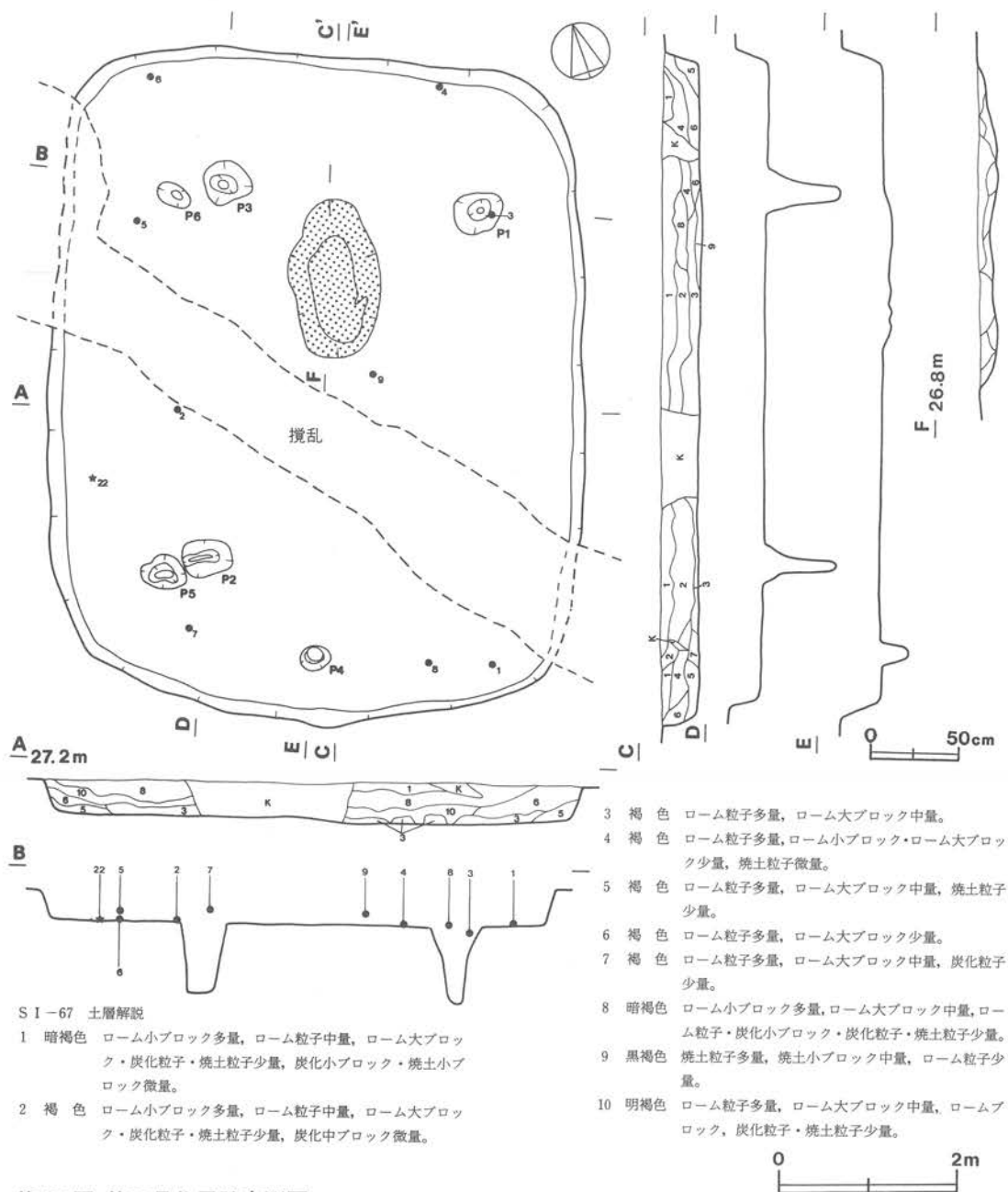
遺物 壁付近の床面及び覆土下・中層から弥生式土器片(広口壺5, 細頸壺1, 高坏3), 弥生式土器細片(481点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる土師器細片(136点)が出土している。1の細頸壺は南コーナー壁際の床面から正位の状態で, 2の広口壺は中央からやや西寄りの床面から横位の状態で, 3の広口壺はP₁から出土している。4の底部片は北コーナー壁際の床面から, 22の紡錘車は西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

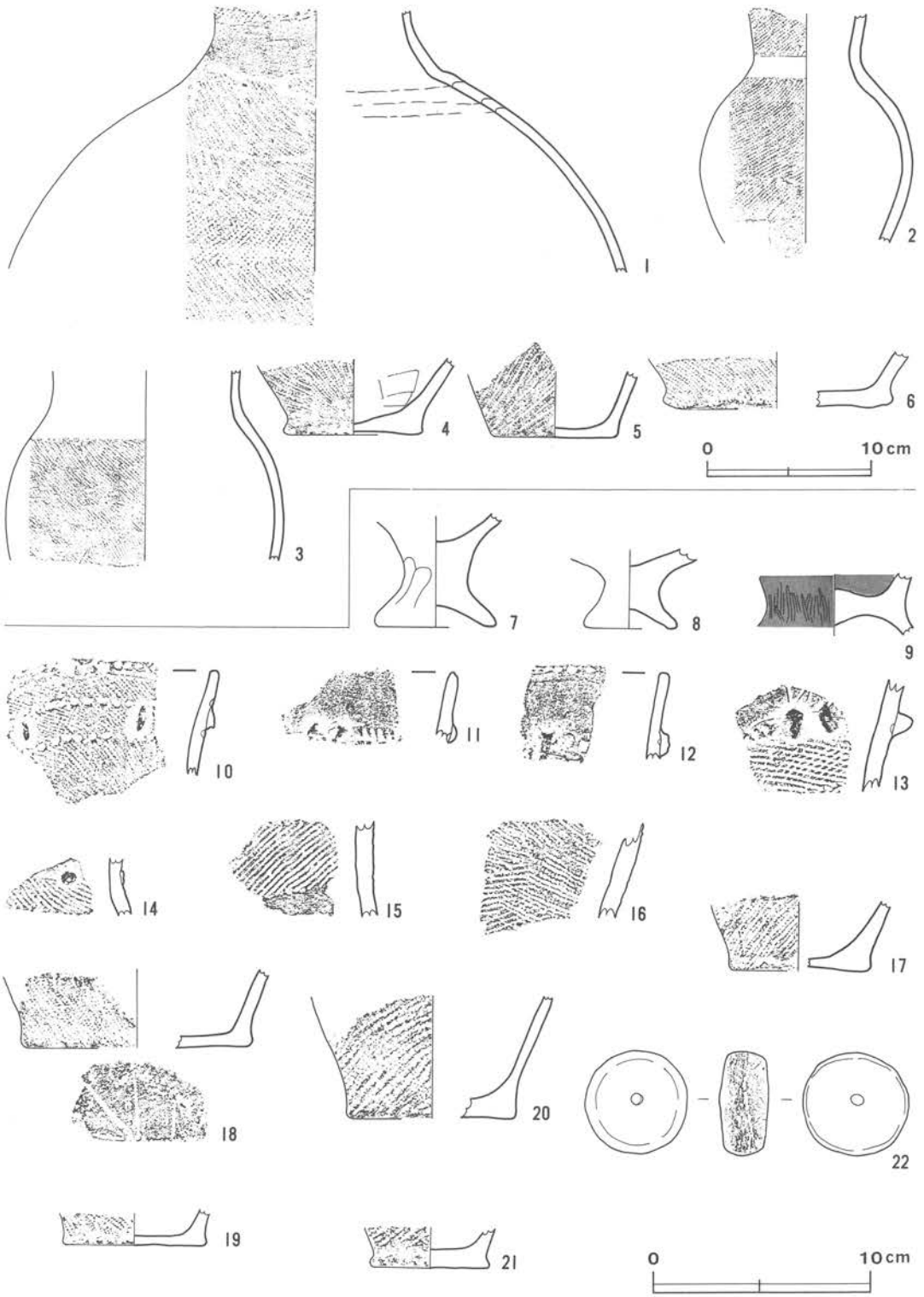
第67号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	細頸壺 弥生式土器	B (16.2)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては大きく内彎し, 強くくびれる。頸部下半を無文帯とし, 胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 羽状構成をとる。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P 457 30% 南コーナー壁際床面
2	広口壺 弥生式土器	B (14.3)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がり, 頸部は外反している。頸部下半を無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが, 羽状構成はとらない。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 458 20% 中央からやや西寄り床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第105図 3	広口壺 弥生式土器	B (11.9)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけて内彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部を無文帯とし、ハケ目調整している。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・バミス にぶい橙色 普通	P459 P,内覆土 外面スス附着 20%
4	広口壺 弥生式土器	B (4.8) C 8.6	胴下半部。上げ底。突出ぎみの底部から胴部にかけて外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P460 北コーナー壁際床面 10%



第104図 第67号住居跡実測図



第105图 第67号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第105図 5	広口壺 弥生式土器	B (4.2) C 7.7	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	P461 10% 北コーナー付近覆土中層 内・外面スス付着
6	広口壺 弥生式土器	B (3.6) C [14.2]	底部片。上げ底。突出する底部から胴部にかけては外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P462 5% 北コーナー壁際床面
7	高坏 弥生式土器	B (5.3) D 5.6 E 2.5	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ラッパ」状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。外面はヘラ削りされている。	砂粒・長石・バミス にふい橙色 普通	P468 50% 西コーナー付近覆土中層
8	高坏 弥生式土器	B (3.8) D 4.4 E 2.0	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。外面はヘラナデされている。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P469 50% 南コーナー付近床面
9	高坏 弥生式土器	B (2.9)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部外面と坏部内面は赤彩されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 橙色 普通	P470 5% 中央部覆土中層

第105図10～21は、第67号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10～14は口縁部片である。10は縄文施文の単口縁を呈し、中位に縄文原体による刺突文が2列横位に施され、刺突間に貼瘤が貼られている。11～13は無文の複合口縁を呈し、口縁下に縄文原体による押圧が施され、2個1組の瘤が貼られている。14・15は頸部片で、頸部上半には縄文が施され、頸部下半は無文帯としているものである。14には頸部下位に「ボタン」状の貼付けがなされている。16は胴部片で附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。17～21は底部片である。21は張り出しを持つ。いずれも胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第105図 22	紡 錘 車	4.9	4.8	2.3	5.5	62.2	100	床 面	D P54

第68号住居跡 (第106図)

位置 B地区中央部、F5e₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.03m、短軸5.96mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-39°-E。

壁 壁高17～33cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

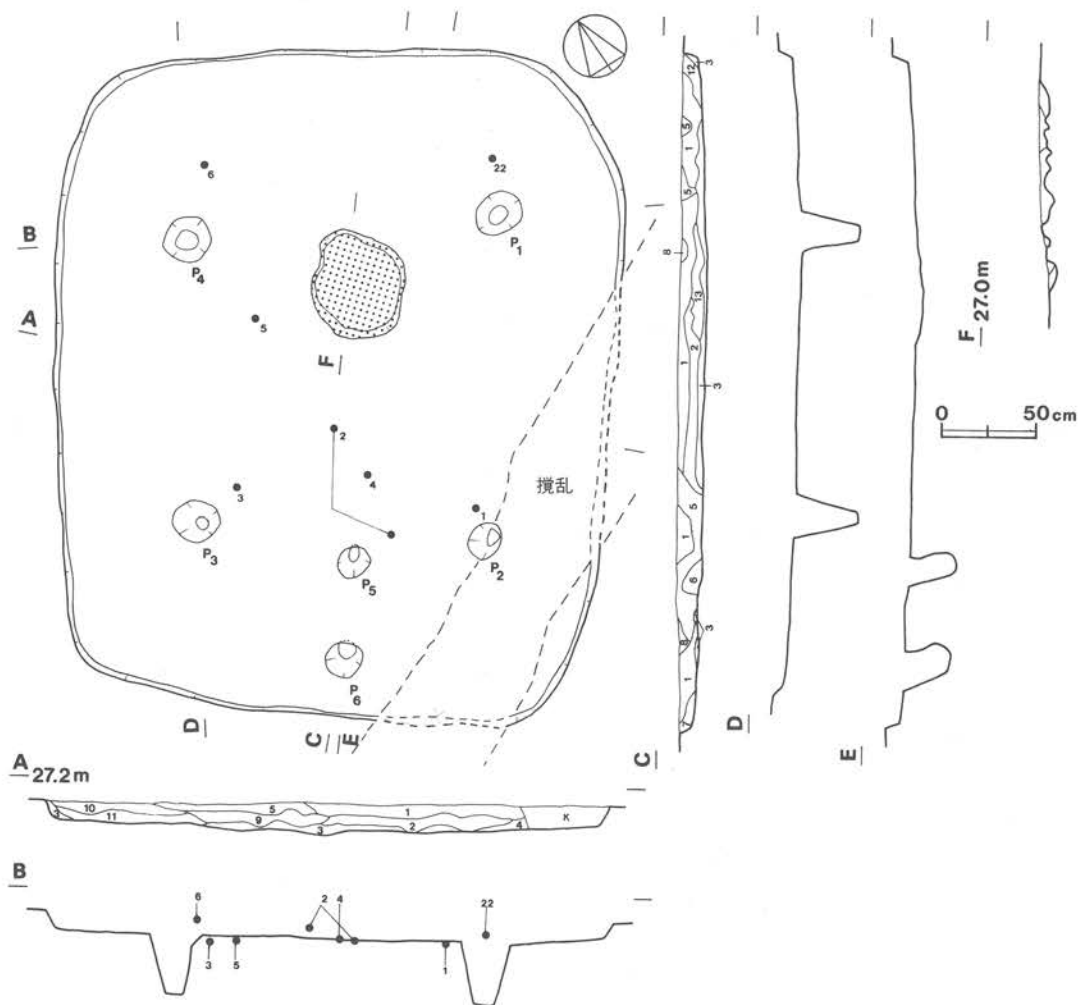
ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は長径40～55cm、短径33～45cmの楕円形を呈し、深さ52～70cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅・P₆は径32～40cmの円形を呈している。双方とも北東方向へ内傾し、深さ53～56cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北東寄りに検出されている。平面形は長径118cm、短径96cmの楕円形を呈し、床を8cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は中央が赤変硬化している。

覆土 暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 炉周辺の床面及び覆土下・中層から弥生式土器片(広口壺5, 高杯1), 弥生式土器細片(303点)が出土している。1の広口壺は炉の南側の床面から横位の状態で, 2の口縁部片は炉の南西側の覆土下層からそれぞれ出土している。3の口縁部片は中央から西寄りの床面から, 4の広口壺は中央部覆土下層からそれぞれ出土している。6の高坏脚部は北コーナー付近の覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

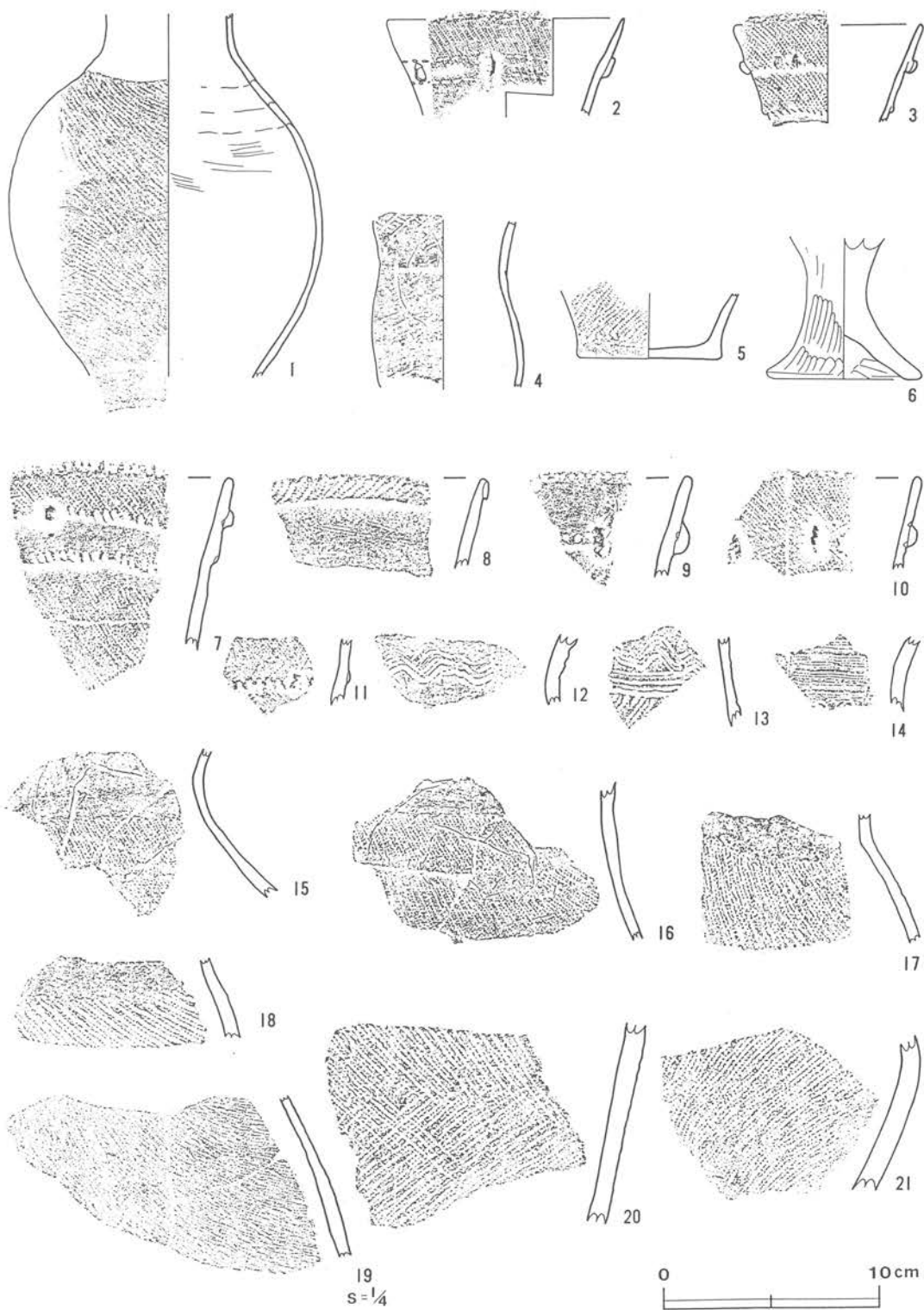


S1-68 土層解説

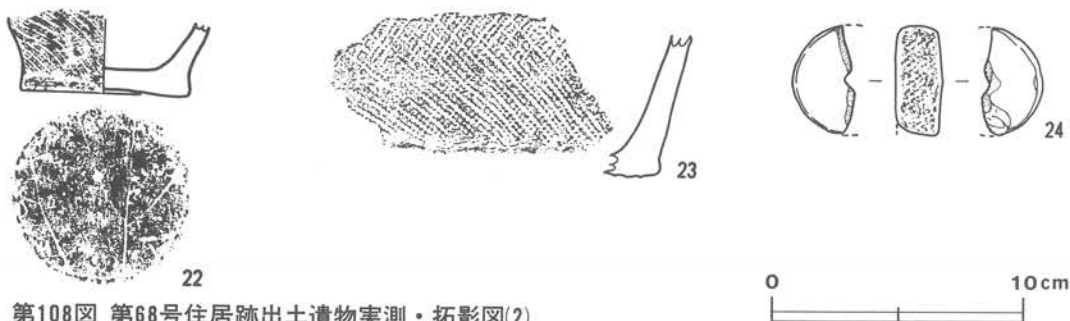
- | | | | |
|-------|--|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子微量。 | 7 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量。 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。 | 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量。 |
| 3 明褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量, 明褐色ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。 | 9 褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック少量。 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量。 | 10 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子微量。 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量。 | 11 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量。 | 12 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量。 |
| | | 13 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量。 |



第106図 第68号住居跡実測図



第107图 第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第108図 第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第68号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	広口壺 弥生式土器	B (22.5)	口縁部欠損。胴部から頸部にかけては大きく内彎して立ち上がり頸部は外反している。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとっていない。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P 471 60% 炉南側床面
2	広口壺 弥生式土器	A [14.6] B (16.0)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、縄文原体による刺突文が2列周回し、その間に瘤がほぼ等間隔に貼られている。原体は細目の附加条1種(附加2条)である。	砂粒・長石 橙色 普通	P 472 10% 炉南西側覆土下層
3	広口壺 弥生式土器	A [11.4] B (6.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。縄文施文の2段の複合口縁を呈し、口唇部・口縁下端には縄文原体による圧痕が施されている。1段目の下端には2個1組の瘤が貼られている。原体は附加条1種(附加2条)である。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P 473 5% 中央から西寄り床面
4	広口壺 弥生式土器	B (10.4)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部のほぼ中央に接合部が確認できる。全面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P 474 30% 中央部覆土下層
5	広口壺 弥生式土器	B (4.1) C 8.6	底部片。胴部は底部から外傾して立ち上がり、単節縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 476 5% 中央部床面
6	高坏 弥生式土器	B (6.7) D 7.3	脚部片。脚部は「ラッパ」状に開く。外面はヘラナデ。内面はヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 477 30% 北コーナー付近覆土中層

第107・108図7～23は、第68号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～11は口縁部片である。7は2段の複合口縁を呈し、1段目には縄文が施され、2段目は無文としている。口縁下端には縄文原体による押圧が施されており、1段目下段には瘤が貼られている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。8は単節縄文が施される複合口縁を呈し、頸部を無文帯とし、ハケ目調整されている。9は無文で薄目の複合口縁を呈し、下端に円形の刺突文が施され、瘤が貼られている。10は縄文施文の単口縁を呈し、中位に2列横位に刺突文が施されている。刺突文の間に瘤が貼られている。11は縄文施文の複合口縁を呈し、下端に縄文原体による押圧が施され、瘤が貼られている。12～14は頸部片である。12・13は同一個体と思われる、4本歯の横走文により胴部と区画され、横走波状文が施されている。14には6本歯の縦区画充填横走文が密に施されている。15～18は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。19～21は胴部片で、いずれにも縄文が

施されている。原体は19が直前段反撚りで、20・21が附加条1種（附加2条）である。22・23は底部片である。22は上げ底ぎみで木葉痕を持ち、胴部には縄文が施されている。23の胴部縄文は羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第108図 24	紡 錘 車	[4.5]	[4.4]	1.9	—	(21.3)	45	覆 土	D P 55

第70号住居跡（第109図）

位置 調査区中央部，F5a₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.45m，短軸6.25mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-9°-W。

壁 壁高30～40cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は径54～68cmの円形を呈し，深さは85～94cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径115cm，短径90cmの不定形で，床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け，赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が全体に堆積しており，人為堆積と思われる。

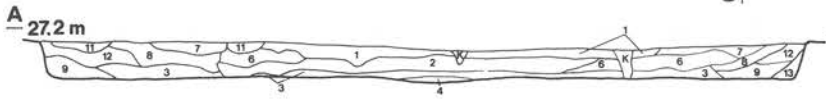
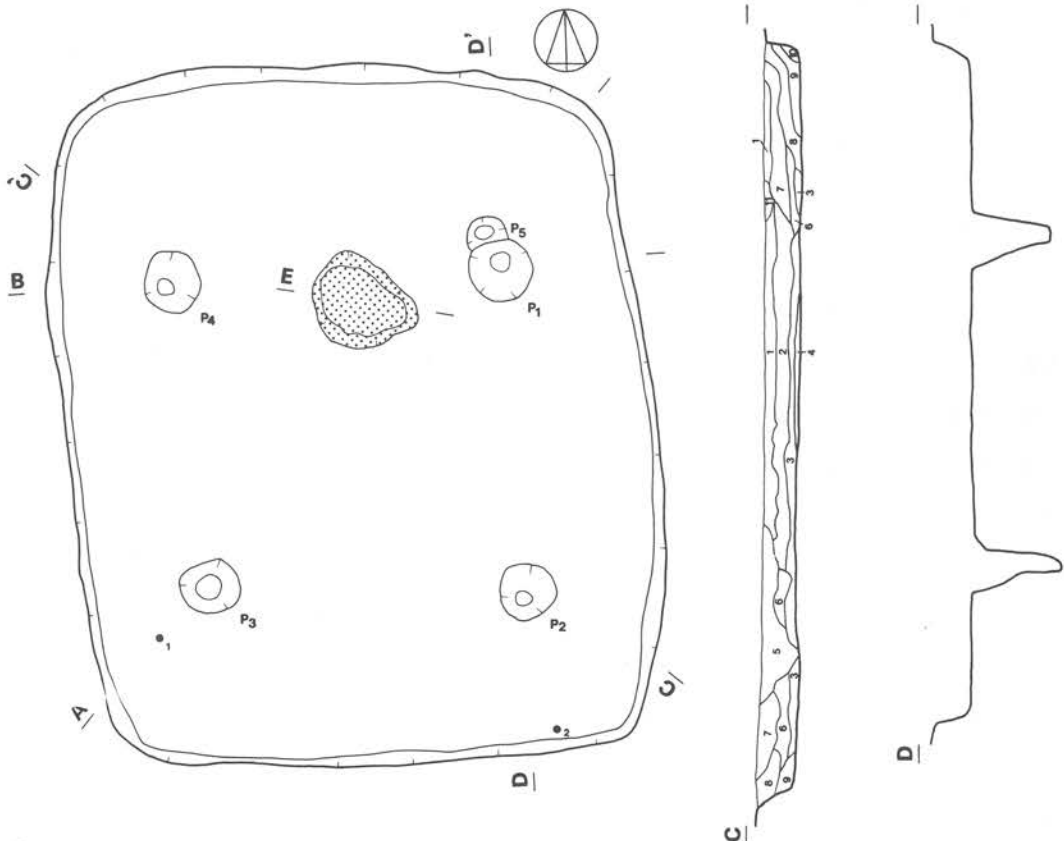
遺物 南壁付近の床面及び覆土下層から集中して，弥生式土器片（広口壺2），弥生式土器細片（284点）が出土している。その他，流れ込みと思われる土師器細片（71点）が出土している。1の底部片は南西コーナー付近の覆土下層から横位の状態で出土している。2の底部片は南東コーナー壁際の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第70号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	広口壺 弥生式土器	B (5.2)	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり，附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 良好	P 498 10% 南西コーナー付近覆土下層
		C 17.6			
2	広口壺 弥生式土器	B (5.0)	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり，附加条1種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 黄橙色 普通	P 499 10% 南東コーナー壁際床面
		C 11.4			

第110図3～8は，第70号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～6は口縁部片である。3は縄文施文の単口縁を呈し，中位に円形の刺突文が2列横位に施されており，刺突文の間に瘤が貼られている。4は縄文施文の複合口縁を呈し，下端は縄文原体により刺突されている。5は細目の単節縄文が施される単口縁を呈している。6は縄文施文の幅の狭い複合口縁を呈



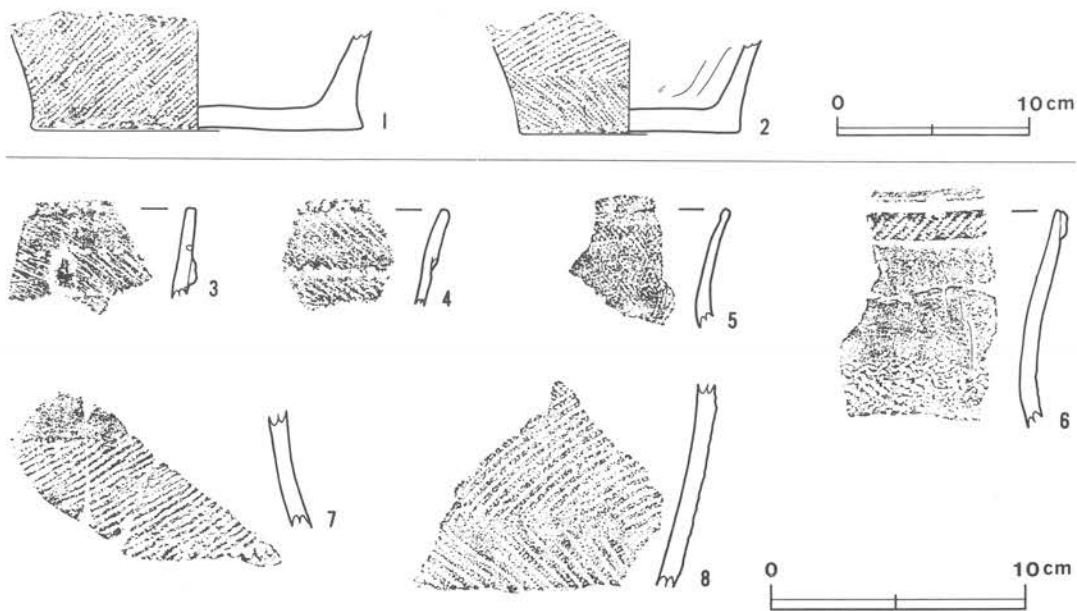
S I - 70 土層解説

- 1 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化小ブロック・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化小ブロック・焼土小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化小ブロック少量。
- 4 明褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量。

- 5 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 黒色土大ブロック・炭化粒子少量。
- 6 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量。
- 7 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量。
- 8 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量。
- 9 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量。
- 10 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。
- 11 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 12 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量。
- 13 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量, 焼土粒子微量。

第109図 第70号住居跡実測図

し、頸部を無文帯としている。胴部とは結節文により区画し、胴部には太目の単節縄文が施されている。7は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。8は胴部片で附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。



第110図 第70号住居跡出土遺物実測・拓影図

第71号住居跡（第111図）

位置 B地区北部，E4h₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.25m，短軸5.24mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-8°-E。

壁 壁高26~42cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で，よく踏み固められ硬い。

ピット 5か所（P₁~P₅）検出されている。P₁~P₄は長径45~62cm，短径33~48cmの楕円形を呈し，深さは82~96cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径50cm，短径38cmの楕円形を呈し，深さ41cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

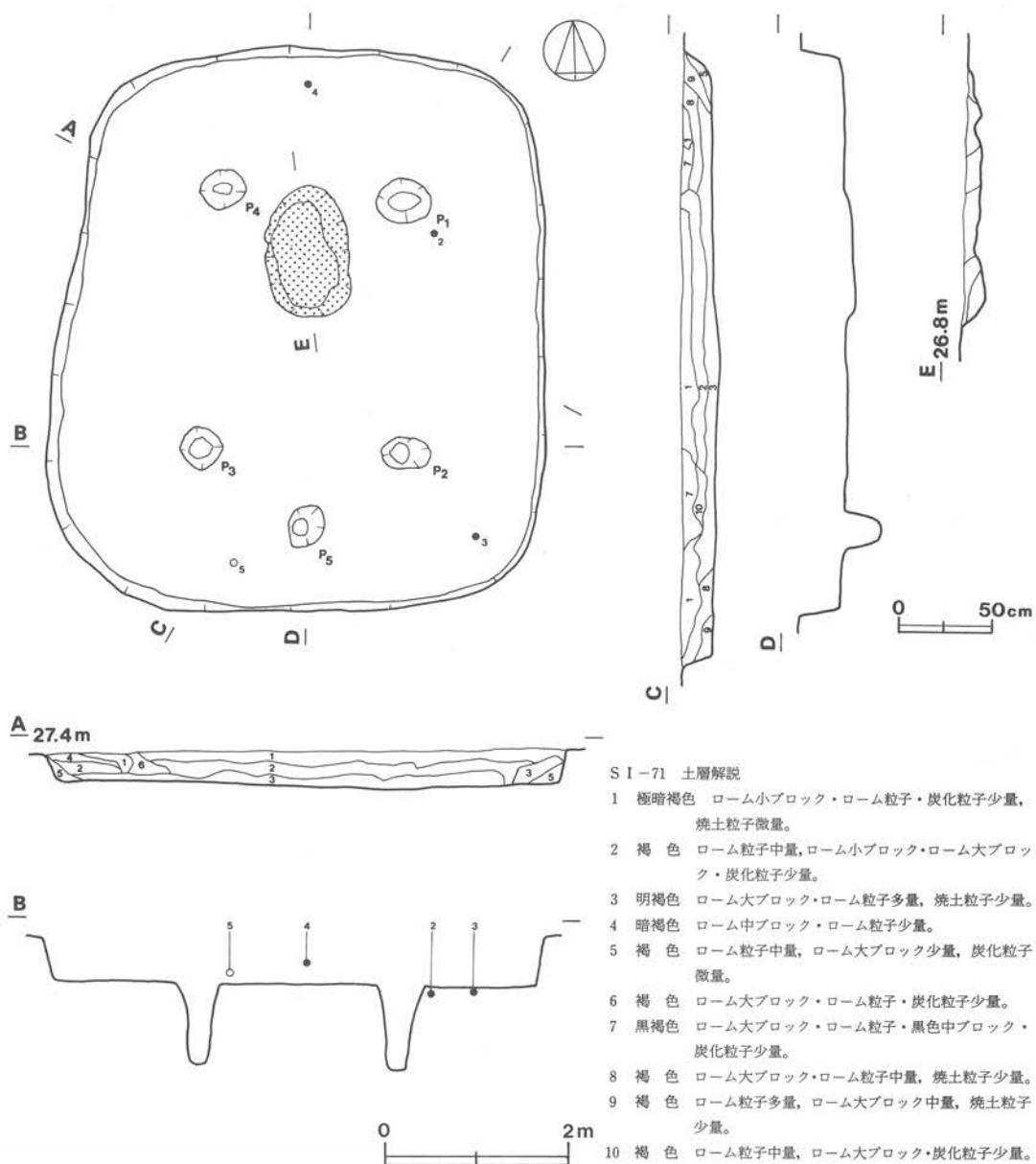
炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径144cm，短径92cmの楕円形を呈し，床を12cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け，赤変硬化している。

覆土 下層はロームブロックを多量に含む明褐色土が堆積しており，人為堆積と思われる。上層は暗褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

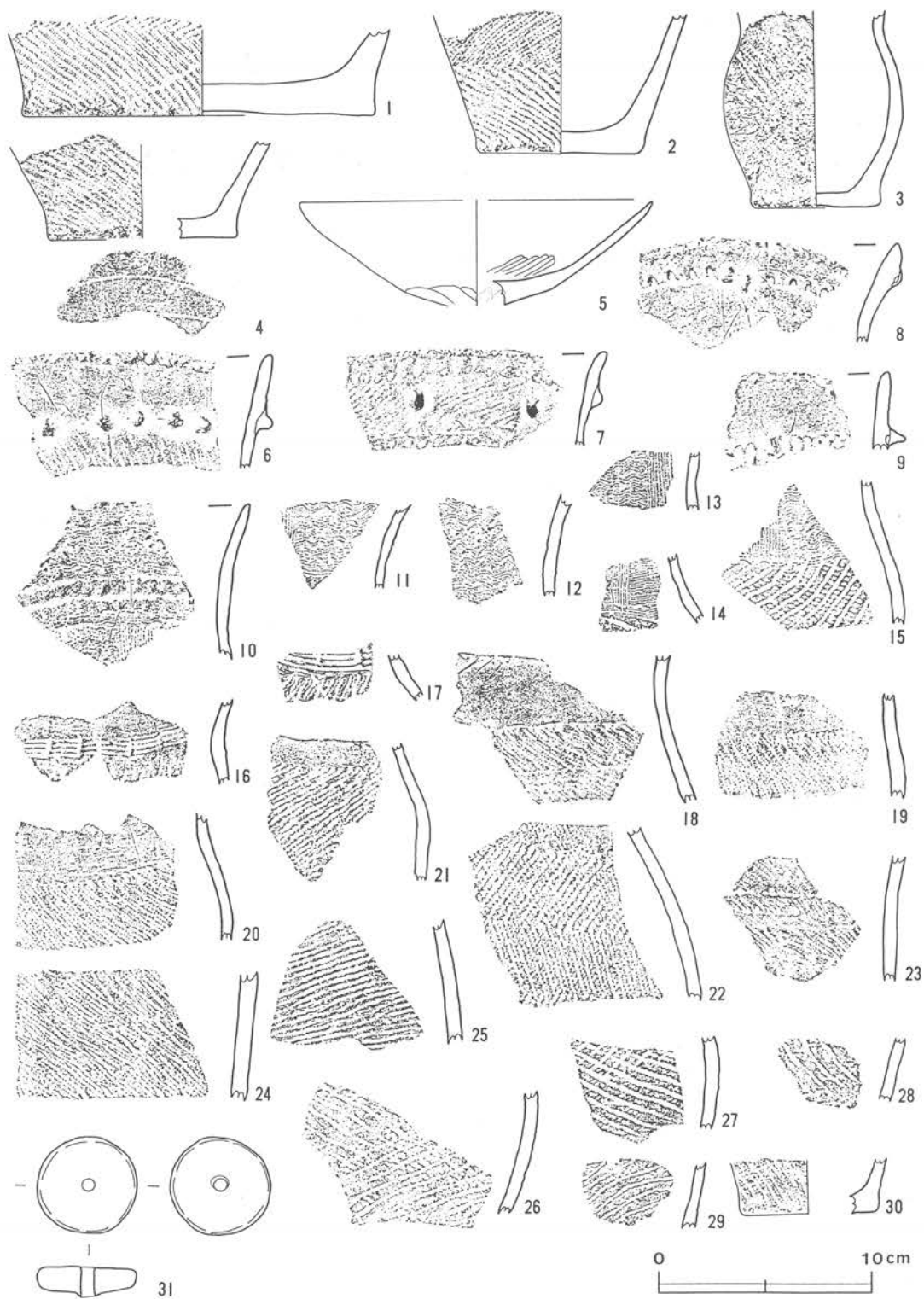
遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に，弥生式土器片（広口壺4），弥生式土器細片（663点）が，南部の覆土中・上層を中心に土師器片（高坏1），土師器細片（158点）が出土している。3

の広口壺は南東コーナー壁際の床面から、2の底部片は炉東側の床面からそれぞれ出土している。5の高坏は南壁中央付近の覆土下層から逆位の状態で出土している。31の紡錘車は中央部の覆土上層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第111図 第71号住居跡実測図



第112図 第71号住居跡出土遺物実測・拓影図

第71号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第112図 1	広口壺 弥生式土器	B (4.1)	底部片。上げ底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、 附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構 成をとっている。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P500 30% 中央部覆土下層	
		C 16.7				
2	広口壺 弥生式土器	B (6.5)	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外 傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施 されており、羽状構成をとっている。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P501 20% 炉東側床面	
		C 7.6				
3	広口壺 弥生式土器	B (9.3)	底部から頸部にかけての破片。平底。胴部は底部から内 彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部下半を無 文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文 が施されている。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P502 40% 南東コーナー壁際床面	
		C 6.2				
4	広口壺 弥生式土器	B (4.4)	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附 加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には 木葉痕を持つ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P503 10% 北壁中央際覆土中層	
		C (9.0)				
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 5	高坏 土師器	A [16.8]	坏部片。坏部は緩やかに内 彎して立ち上がる。	坏部外面下位はヘラ削り。 内面はヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P504 20% 南壁中央付近覆土下層
		B (4.9)				

第112図6～30は、第71号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6～10は口縁部片である。6は無文の複合口縁を呈し、口縁下端に瘤が密に貼られ、頸部には縄文が施されている。7は口縁部上位を無文帯とし、刺突文が4cmほどの幅を持って横位に施されている。刺突文間には縄文が施されており、ほぼ中央に瘤が貼られている。8は無文の複合口縁を呈し、下端は棒状工具による刺突が施され、2個1組の瘤が貼られている。頸部は無文である。9は無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧され、瘤が貼られている。10は口縁部片で、口縁部には5本櫛歯による横走波状文が施されており、2本の押圧隆起線により頸部と区画される。頸部にはスリット手法による充填波状文が施されている。11～17は頸部片である。11～15は10と同一個体と思われ、頸部にはスリット手法による充填波状文が施されており、胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。16・17は同一個体であり、横位に4本櫛歯による簾状文が施されている。18～23は頸部から胴部にかけての破片で、いずれも頸部下半が無文である。24～29は胴部片で、縄文が施されている。30は底部片で胴部には縄文が施されている。原体は21～25、30が附加条1種(附加2条)で、26～29が附加条2種(附加1条)である。

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第112図 31	紡錘車	4.8	4.7	1.5	6.5	30.7	100	覆土上層	DP56

第72号住居跡(第113図)

位置 B地区北部、E4g_s区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.70m、短軸3.34mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-28°-E。

壁 壁高22～35cmで、外傾して立ち上がっている。

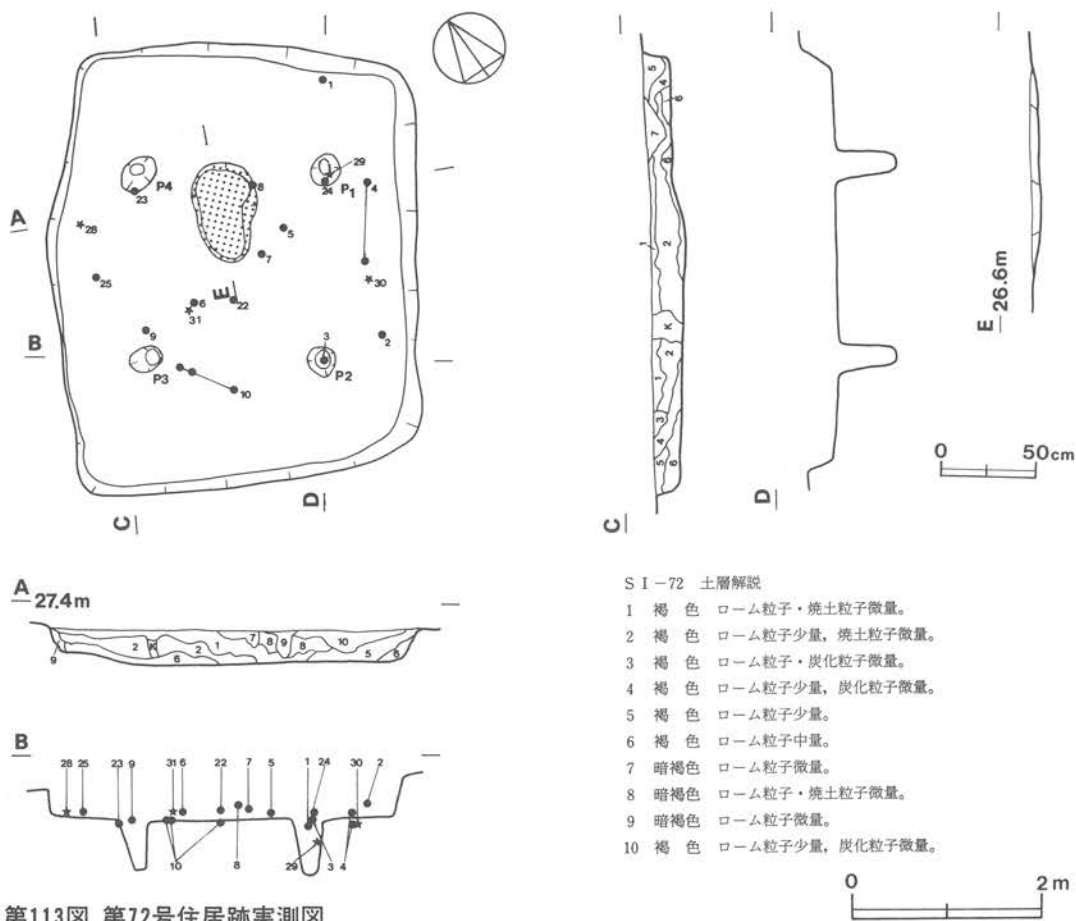
床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は長径32~42cm, 短径26~32cmの楕円形を呈し、深さ54~65cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。

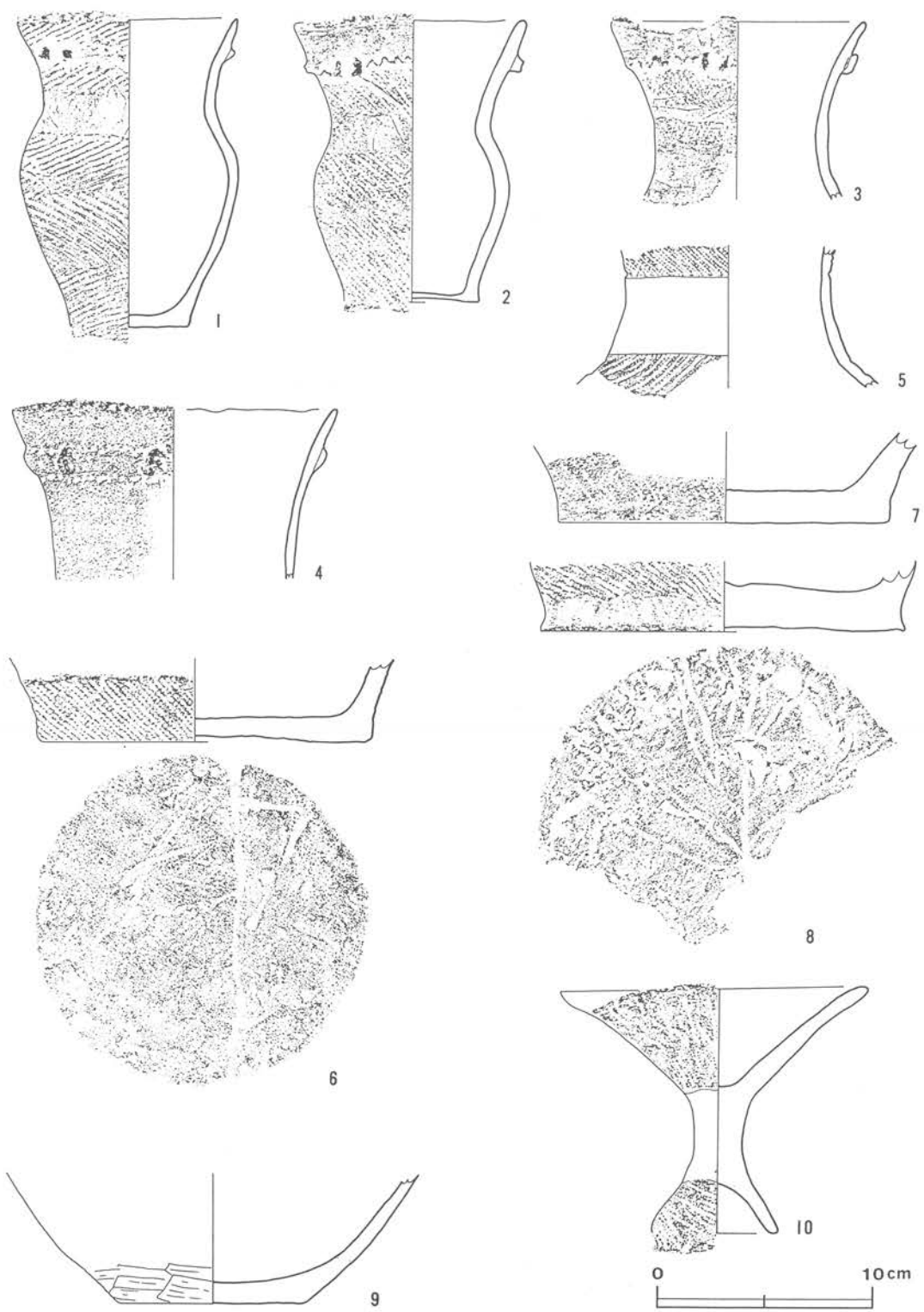
炉 長軸線上の中央から北東寄りに検出されている。平面形は長径108cm, 短径65cmの楕円形を呈し、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床はよく焼け、赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

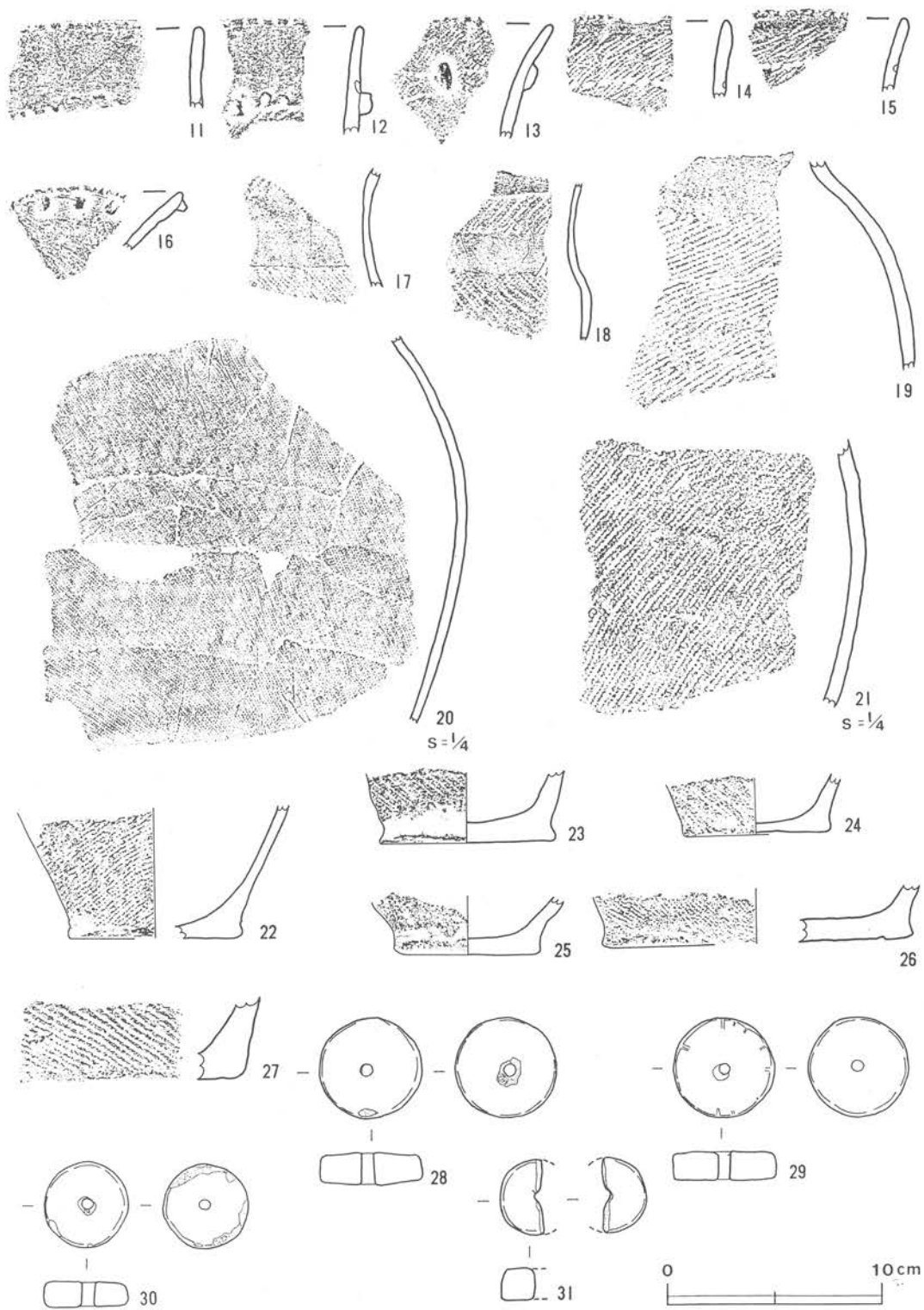
遺物 住居全域の床面及び覆土下層から集中して、弥生式土器片(広口壺8, 壺1, 高坏1), 弥生式土器細片(259点)が出土している。4の口縁部片は南東壁中央際の覆土下層から、5の頸部片は中央部覆土下層から、6の底部片は炉南側の覆土下層からそれぞれ出土している。7の底部片は炉南東側の覆土下層からそれぞれ出土している。1は小形の広口壺で北東壁際の床面から横位の状態で、2は小形の広口壺で南コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、3の広口壺は南コーナー付近のピット確認面からそれぞれ出土している。10の高坏は炉の南西側の床面から横位の状態で出土している。28~30の紡錘車はいずれも壁際の床面から出土している。31は覆土下層



第113図 第72号住居跡実測図



第114図 第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第115図 第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第72号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	広口壺 弥生式土器	A 10.3 B 14.1 C 5.7	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、下位には縄文原体による刺突文が周回している。刺突文間には2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P511 95% 北東壁際床面 2次焼成
2	広口壺 弥生式土器	A 10.9 B 13.3 C 6.1	上げ底で張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。無文の複合口縁を呈し、口唇部には縄文が施されている。口縁下には棒状工具による刺突文が施され、2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P512 95% 南コーナー付近覆土下層
3	広口壺 弥生式土器	A 12.0 B (8.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。無文の複合口縁を呈し、下端には刺突文が施され、2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P513 20% 南コーナー付近ビット 確認面
4	広口壺 弥生式土器	A [15.2] B (8.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、縄文原体による刺突文が2条周回している。刺突文間には瘤がほぼ等間隔に貼られている。原体は附加条1種(附加2条)である。外面は摩耗が著しい。	砂粒・長石 橙色 普通	P505 15% 南東壁中央際覆土下層
5	広口壺 弥生式土器	B (6.7)	頸部片。頸部は外反して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒 橙色 普通	P506 5% 中央部覆土下層
6	広口壺 弥生式土器	B (3.9) C 15.6	底部片。上げ底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P507 5% 炉南側覆土下層
7	広口壺 弥生式土器	B (4.3) C 15.5	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P508 5% 炉南東側覆土下層
8	広口壺 弥生式土器	B (3.3) C 17.0	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、単節縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P509 5% 炉南東側覆土下層
9	壺 弥生式土器	B (6.1) C 8.8	底部片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部は無文で下位は横位にヘラ削りされている。	砂粒・石英・雲母 明褐色 普通	P510 10% 炉南西側床面
10	高環 弥生式土器	A 14.3 B 11.5 D 6.0	脚部は「ハ」の字状に開き、環部は外反して立ち上がる。外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P518 50% 炉南西側床面

第115図11～27は、第72号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11～16は口縁部片である。11・12は無文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施され、口縁下端は縄文原体による押圧が施されている。12は口縁下端に瘤が貼られている。13～15は縄文施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文が施されている。13は刺突文間に瘤が貼られている。16は高環の口縁部片であり、口縁に沿って瘤が密に貼られている。17～19は頸部から胴部にかけての破片である。頸部下半を

無文帯とし、それ以外は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。20・21は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。22～27は底部片であり、胴部には縄文が施されている。23は張り出しを持つ。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第115図 28	紡 錘 車	4.9	4.7	1.5	6.0	41.1	100	床 面	D P 57
29	紡 錘 車	4.8	4.7	1.4	5.5	36.3	100	床 面	D P 58
30	紡 錘 車	4.1	4.1	1.2	6.0	(23.2)	98	床 面	D P 59
31	紡 錘 車	3.6	3.5	1.5	[5.0]	(12.4)	50	覆 土 下 層	D P 60

第73号住居跡(第116図)

位置 B地区北部, E5g₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.12m, 短軸4.64mの長方形を呈している。

長軸方向 N-36°-E。

壁 壁高50～54cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められて硬い。

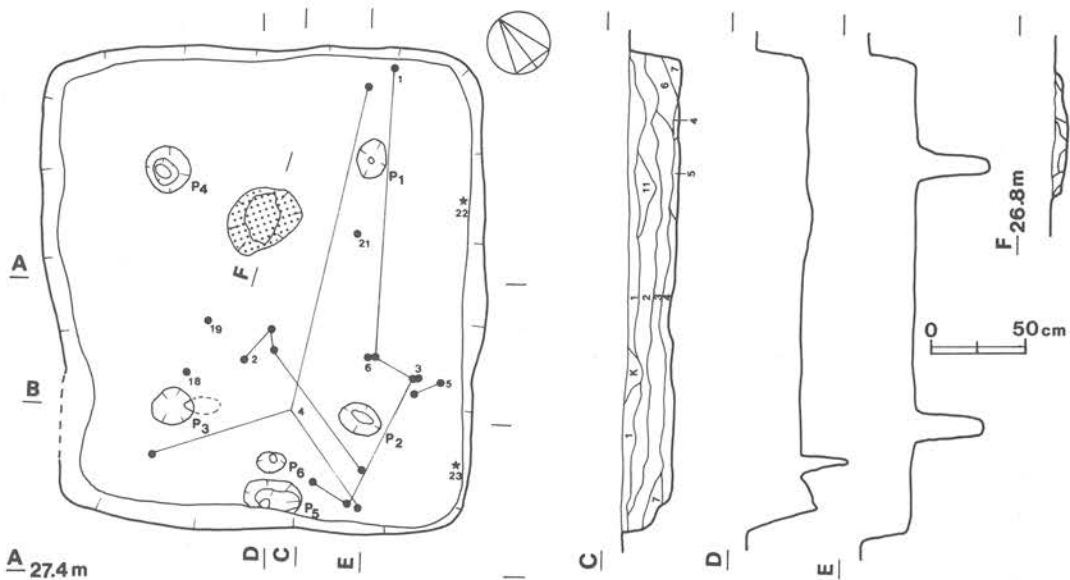
ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は長径41～48cm, 短径33～40cmの楕円形を呈し, 深さは72～77cmの主柱穴と思われる。P₃は東側へ傾斜して掘り込まれているが, 主柱穴を結んだ線は方形となる。P₆は長径33cm, 短径20cmの楕円形を呈し, 深さ47cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は長径60cm, 短径32cm, 深さ18cmの楕円形を呈している。性格は不明である。

炉 長軸線上の中央からやや北東寄りに検出されている。平面形は長径78cm, 短径62cmの楕円形を呈し, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土が厚く堆積しており, 人為堆積と思われる。

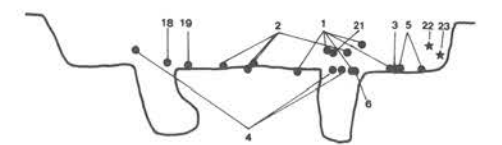
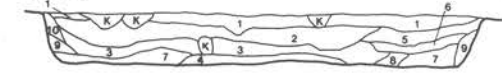
遺物 南部の床面及び覆土下・中層から集中して, 弥生式土器片(台付甕1, 広口壺3, 高坏2), 弥生式土器細片(449点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる土師器細片(46点)が覆土から出土している。2の広口壺は中央から南西寄りの床面から出土したいくつかの破片が接合されている。3は広口壺の胴部片で南コーナー付近の覆土下層から出土している。4の台付甕は西コーナー付近の床面から, 5の高坏は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。22・23の紡錘車は南東壁際の覆土中・下層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



A 27.4m

B



SI-73 土層解説

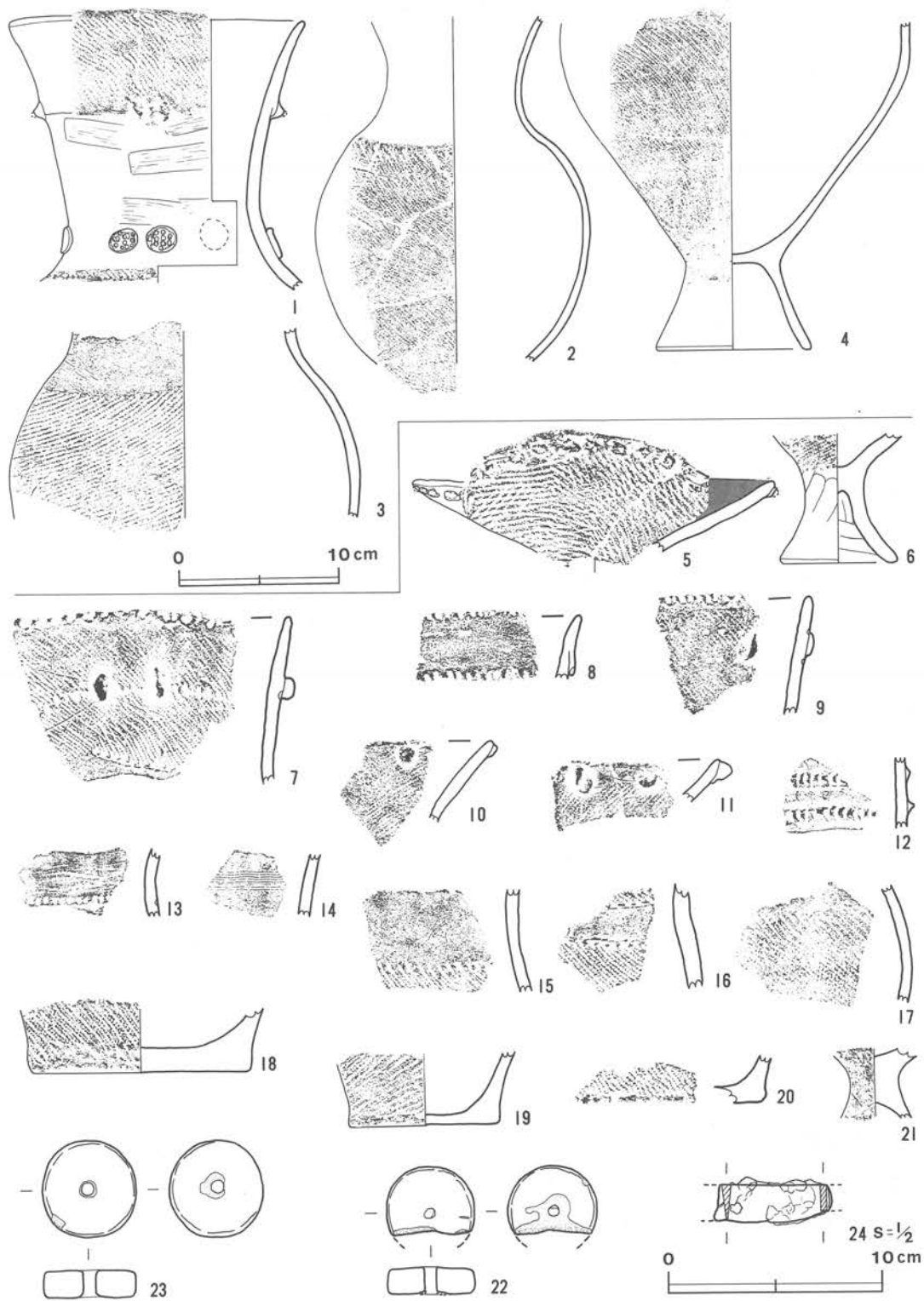
- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量。
- 2 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量。
- 3 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量。
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量。
- 8 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。
- 9 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。
- 10 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量。
- 11 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 12 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, ローム粒子微量。



第116図 第73号住居跡実測図

第73号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	広口壺 弥生式土器	A 18.4 B (17.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の幅広い複合口縁を呈している。下端には2個1組の窟が4単位にわたり貼られている。頸部を無文帯とし、横位にハケ目調整されている。頸部下半には刺突の施されるボタン状の貼付がなされている。縄文原体は単節である。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 519 25% 中央から南西寄り覆土中層
2	広口壺 弥生式土器	B (21.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は外反している。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 520 25% 中央から南西寄り床面
3	広口壺 弥生式土器	B (11.6)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 521 30% 南コーナー付近覆土下層



第117图 第73号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第117図 4	台付 甕 弥生式土器	B (20.4) D 9.1 E 5.5	脚部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎しながら立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。脚部外面は無文でヘラナデされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P524 40% 西コーナー付近床面
5	高 坏 弥生式土器	A [17.0] B (3.4)	坏部片。坏部は大きく開き、外傾して立ち上がる。外面には縄文が施され、口縁に沿ってほぼ等間隔に瘤が貼られている。内面は赤彩されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P525 20% 南東壁際床面
6	高 坏 弥生式土器	B (6.1) D 5.6 E 4.0	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。坏部外面には細目の単節縄文が施されている。脚部はヘラナデされている。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P526 10% 中央部南寄り床面

第117図7～21は、第73号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～11は口縁部片である。7は縄文施文の薄目の複合口縁を呈し、下端に縄文原体による押圧がなされ、2個1組の瘤も貼られている。8は無文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施され、口縁下端は縄文原体による押圧がなされている。9は細目の単節縄文が施される単口縁を呈し、口縁中位に2列横位の刺突文が施されている。刺文間には瘤が貼られている。10・11は同一個体であり、高坏の口縁部片である。細目の単節縄文が施され、口縁に沿って瘤が貼られている。12～14は頸部片であり、13は無文で頸部下位に縄文原体による刺突文が施されている。12はヘラ状工具によるキザミ目が施される隆起線によって口縁部と頸部が区画されており、櫛描文が施されている。14は8本歯の工具により横走文が施されている。15～17は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。18～20は底部片であり、平底を呈し、胴部には縄文が施されている。21は高坏の脚部片であり、坏部外面に縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第117図 22	紡 錘 車	4.3	4.2	1.3	5.0	[21.7]	70	覆土中層	DP61
23	紡 錘 車	4.6	4.4	1.3	6.0	33.0	100	覆土下層	DP62

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第117図 24	刀 子	(3.7)	1.65	0.3	—	(4.8)	20	覆土	M4

第75号住居跡 (第118図)

位置 B地区中央部, E5j₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.33m, 短軸4.88mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-26°-W。

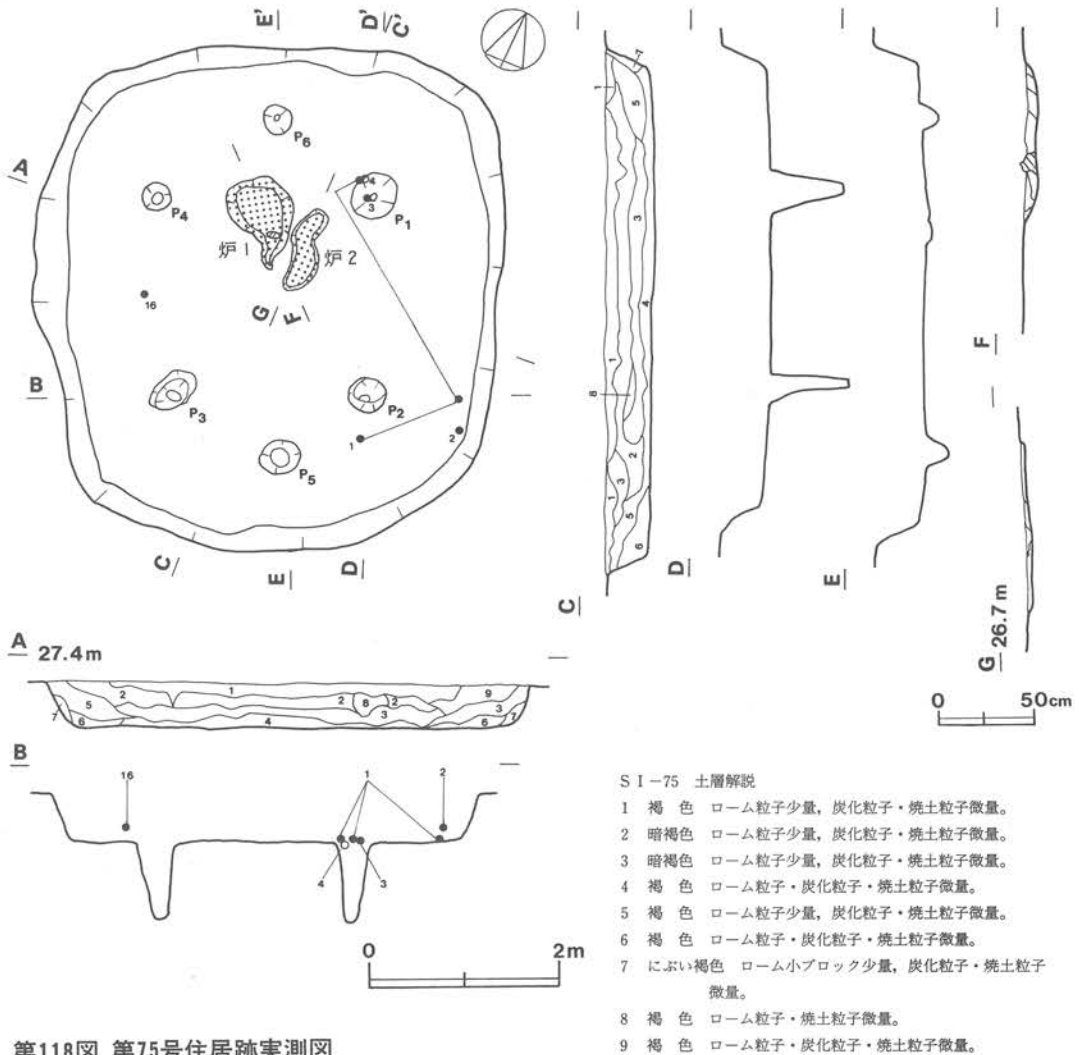
壁 壁高42～51cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₄は長径33~55cm, 短径29~44cmの楕円形を呈し、深さ76~84cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径43cm, 短径31cmの楕円形を呈し、深さ36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₆は長径32cm, 短径28cm, 深さ19cmで、北西側支柱穴間のほぼ中央の北西壁寄りから検出されているが、性格は不明である。

炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁は長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径97cm, 短径66cmの不定形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉南部から炉石が出土し、炉床は赤変硬化している。炉₂は炉₁の南東側から検出され、長径90cm, 短径20cmで、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、焼土化している。炉₁の補助的なものと思われる。

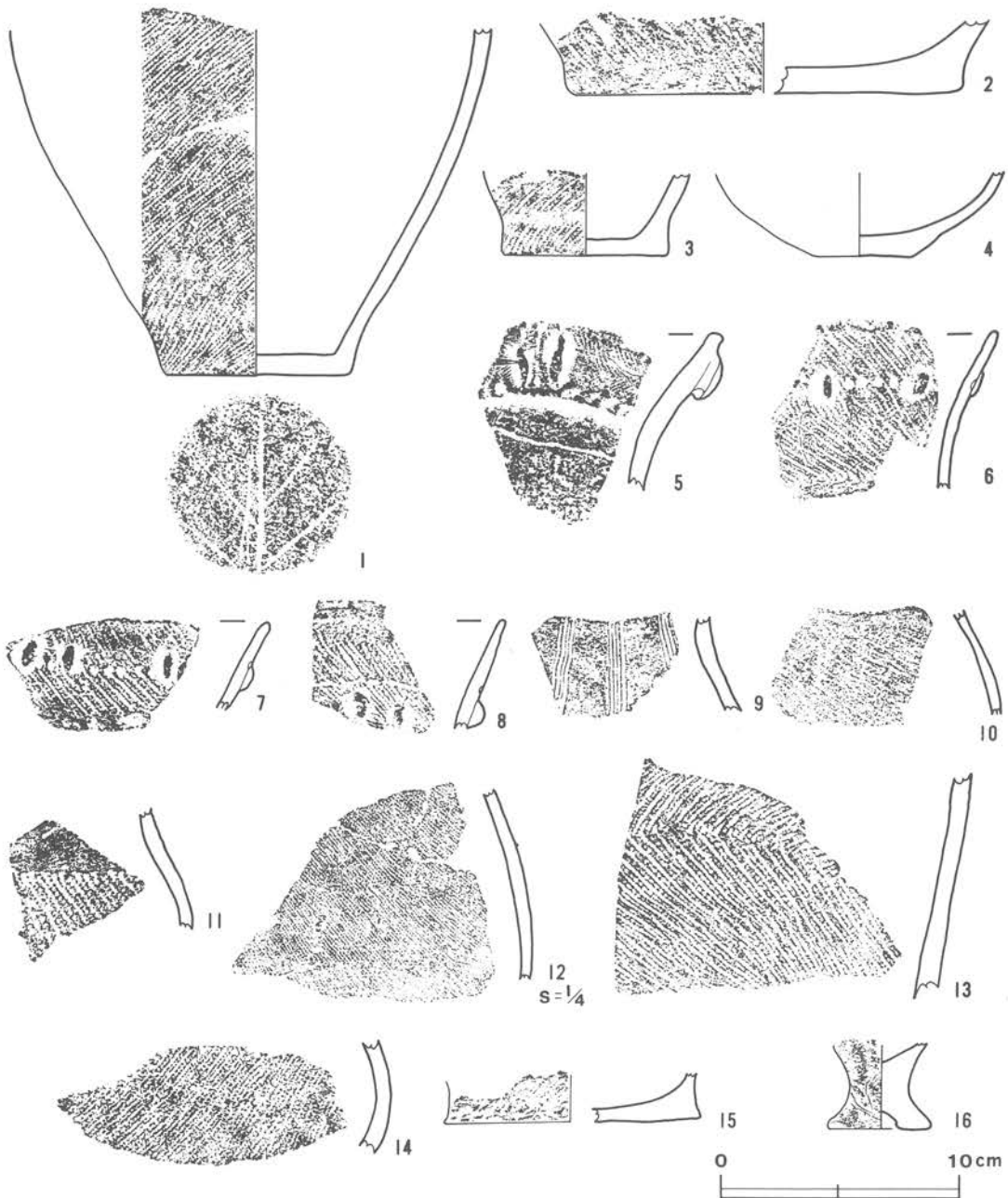
覆土 暗褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。



第118図 第75号住居跡実測図

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層から集中して弥生式土器片(広口壺3), 弥生式土器細片(349点)と土師器片(壺1), 土師器細片(24点)が出土している。1の広口壺下半部は東コーナー付近の床面から逆位の状態で, 3は広口壺の底部片で炉東側のピット確認面から正位の状態で, それぞれ出土している。4は土師器の壺で炉の東側床面から正位の状態で出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第119図 第75号住居跡出土遺物実測・拓影図

第75号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様		胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	広口壺 弥生式土器	B (15.0)	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。単節縄文が施されているが、羽状構成をとらない。底面には木葉痕を持つ。内面は粗くヘラ削りされている。		砂粒・石英・雲母 にふい橙黄色 普通	P535 30% 東コーナー付近床面
		C 8.1				
2	広口壺 弥生式土器	B (3.1)	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。		砂粒・長石・雲母 にふい黄橙黄色 普通	P536 5% 東コーナー付近覆土中層
		C [16.9]				
3	広口壺 弥生式土器	B (3.6)	胴下半部。平底。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がってから外傾している。附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。		砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P537 10% 炉東側ピット確認面
		C 7.2				
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 4	壺 土師器	B (3.6)	底部片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面下位はヘラ削り。内面はヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふい黄橙黄色 普通	P538 5% 炉東側床面
		C 4.0				

第119図5～16は、第75号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～8は口縁部片である。5は細目の単節縄文が羽状に施されている複合口縁を呈し、2本1組の棒状浮文が貼付けられている。頸部は無文帯としている。6・7は同一個体である。縄文施文の単口縁を呈し、口縁下位に縄文原体による刺突文が周回し、その位置に2個1組の瘤が貼られている。8は縄文施文のやや幅広な複合口縁を呈し、下端に2個1組の瘤が貼られている。9は頸部片で、4本歯の工具により、縦線文が施されている。10・11は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。12～14は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、13は羽状構成をとっている。15は底部片で、平底を呈し、張り出しを持っている。胴部には縄文が施されている。16は高坏の脚部片で、「ハ」の字状に短く開く。

第76号住居跡(第120図)

位置 B地区北部、E5c₉区を中心に確認されている。北側2分の1は調査区外へのびている。

規模と平面形 長軸は北側が未調査のため現存部で(4.22)m、短軸5.75mの隅丸方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-35°-W。

壁 壁高42～52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺はよく踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁・P₂は径32～34cmの円形を呈し、深さ59～72cmである。P₃は長径45cm、短径35cmの不整楕円形を呈し、深さ86cmである。P₁～P₃は支柱穴と思われる。北西の支柱穴は未検出であるが、支柱穴を結ぶ線は、長方形となるものと思われる。P₄は径35cmの円形を呈し、深さ62cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

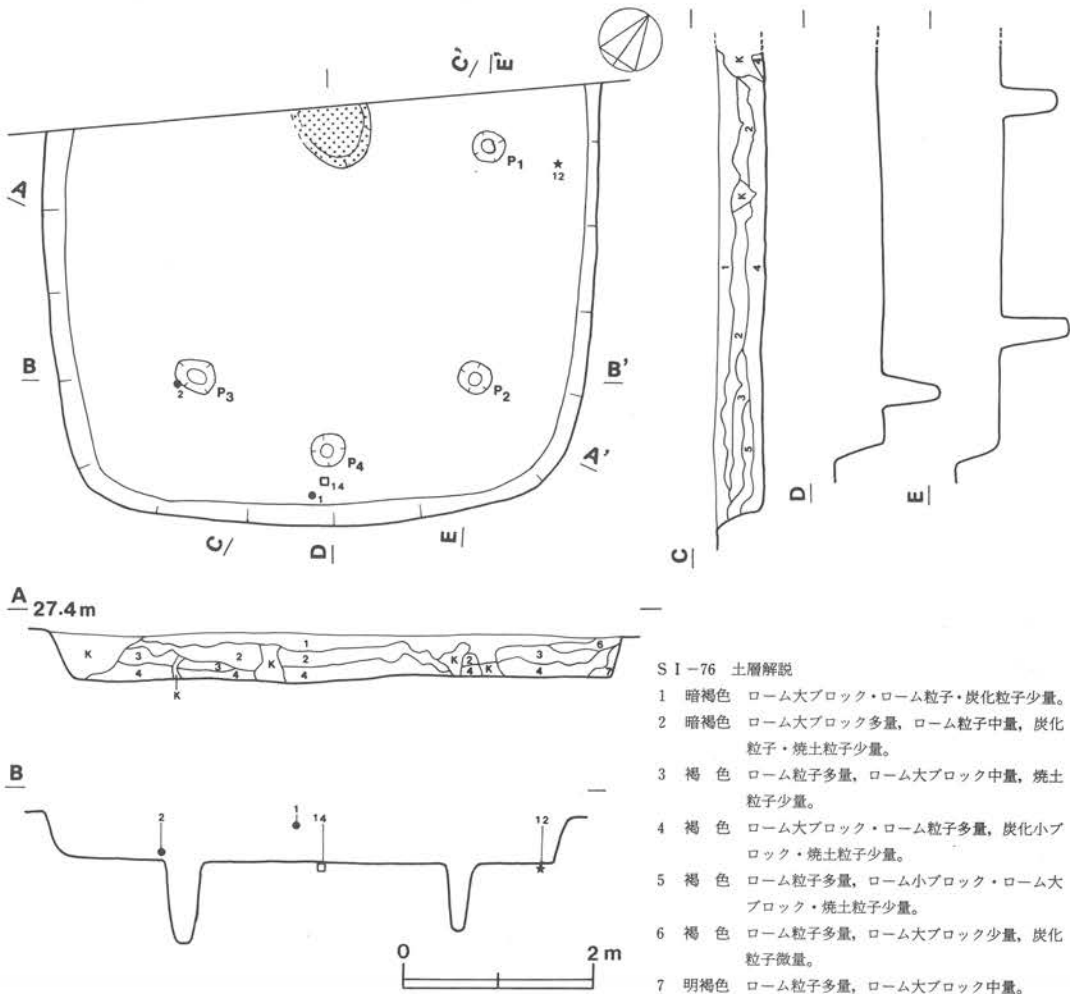
炉 南部だけ検出されている。平面形は現存長径(75)cm、短径65cmの楕円形を呈するものと思

われ、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

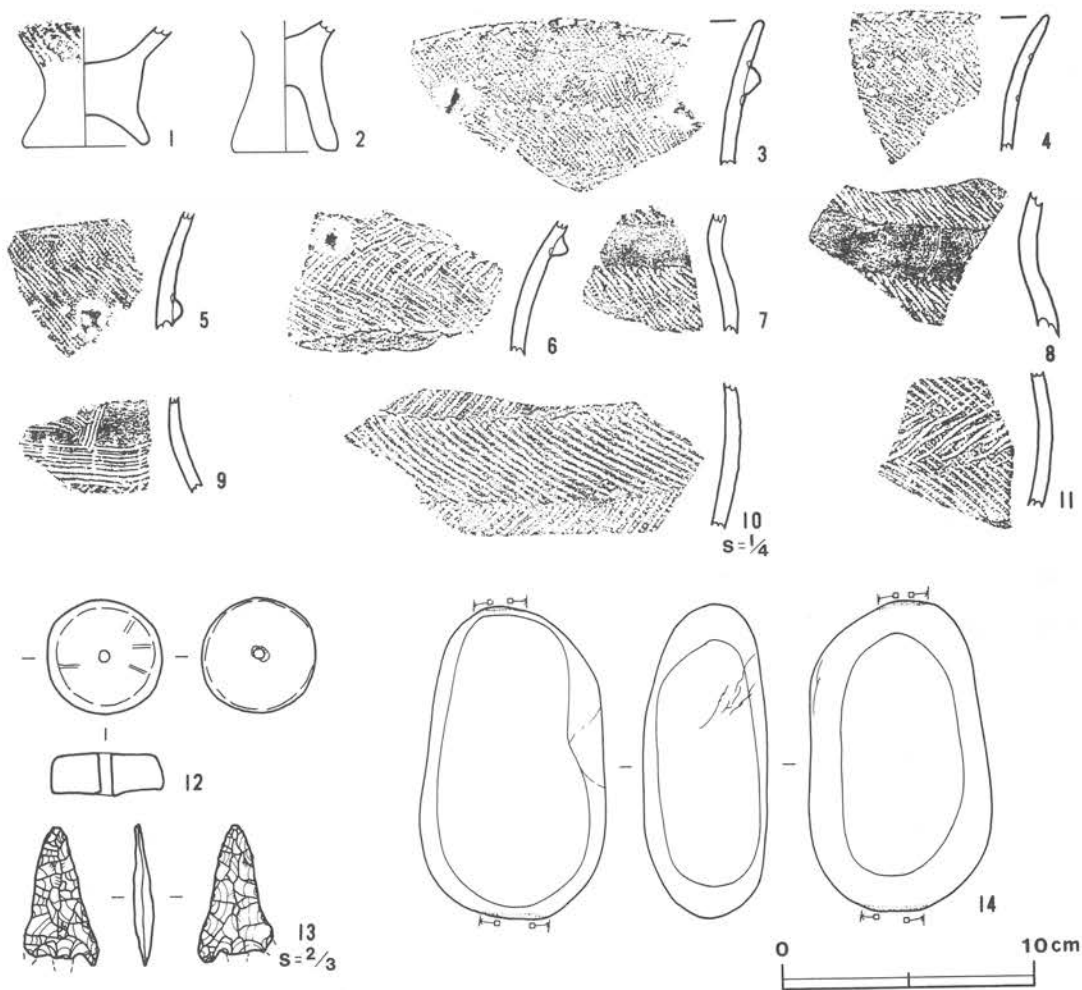
覆土 下層はローム粒子・ロームブロックを多量に含んでいる褐色土であり、人為堆積と思われる。上層は暗褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土中・上層を中心に、弥生式土器片(台付甕1,高坏1),弥生式土器細片(582点)が出土している。1は台付甕の脚部で南東壁中央際の覆土上層から、2は高坏の脚部で南コーナー付近の覆土中層から、それぞれ出土している。12の紡錘車は南東壁際の床面から出土している。13の石鏃は中央部の覆土上層から、14の敲石は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第120図 第76号住居跡実測図



第121図 第76号住居跡出土遺物実測・拓影図

第76号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	台付 甕 弥生式土器	B (4.8) D 5.6 E 2.5	脚部から胴部にかけての破片。脚部は短く「ハ」の字状に開く。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P540 10% 南東壁中央際覆土上層
2	高 坏 弥生式土器	B (5.3) D 4.3 E 2.7	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾している。外面はハケ目調整されている。	長石・石英 にふい橙色 普通	P541 10% 南コーナー付近覆土中層 内面炭化物付着

第121図3～11は、第76号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～6は口縁部片である。3・4は同一個体であり、縄文施文の単口縁を呈し、口縁下位に2列横位の刺突文が施されている。刺突文間に瘤が貼られている。頸部上半にも縄文が施されており、原体は単節である。5・6は縄文施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文間に瘤が貼られている。6は羽状構成をとり、頸部下半を無文帯としている。7～9は頸部片である。7・8は同一個体であり、頸部

下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9は縦区画された後、連弧文により充填され、胴部とは9本歯の簾状文で区画している。10・11は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第121図 12	紡錘車	4.6	4.6	1.7	5.0	40.3	100	床面	D P 63

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第121図 13	石 鏃	(2.9)	(1.5)	0.4	(1.0)	頁 岩	覆土上層	Q58
14	敲 石	12.2	7.4	4.9	625.2	流紋岩	床 面	Q59

第77号住居跡（第122図）

位置 B地区北部、E6d₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.47m、短軸5.19mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-7°-E。

壁 壁高37~49cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

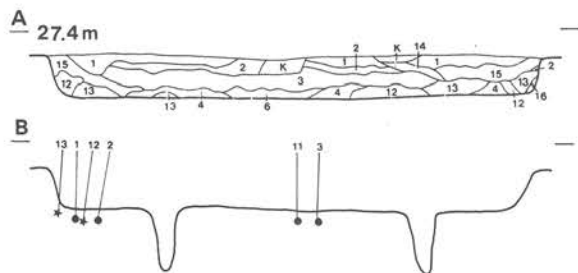
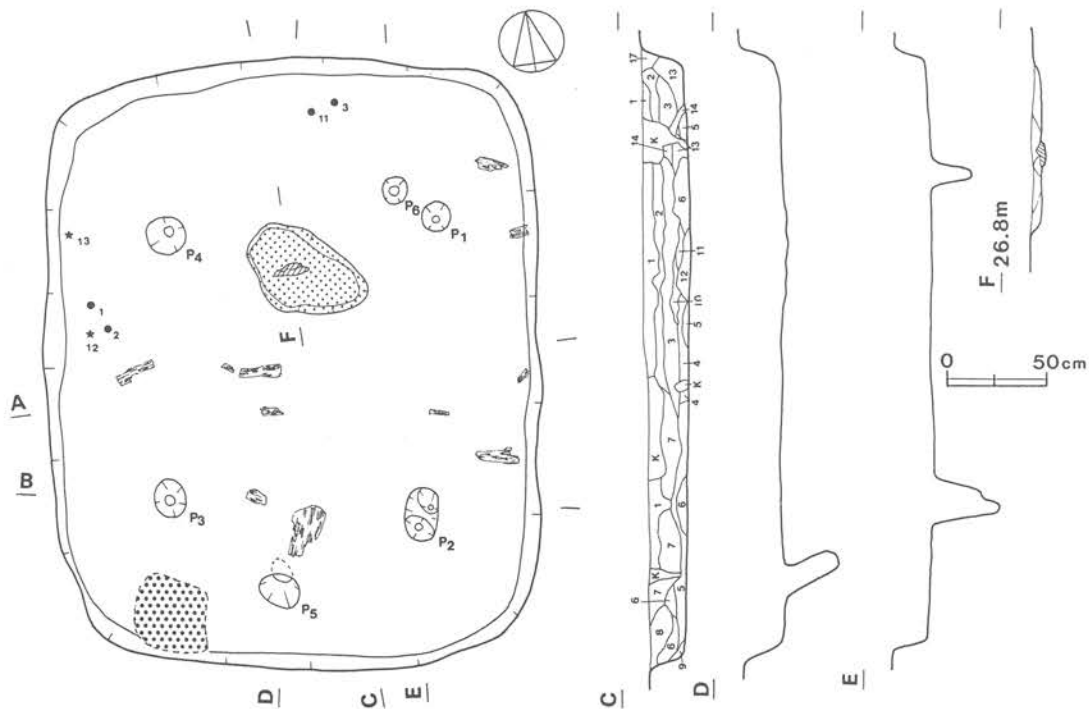
ピット 6か所（P₁~P₆）検出されている。P₁~P₄は長径32~56cm、短径30~38cmの楕円形を呈し、深さは58~71cmの主柱穴である。P₂は掘り直しが確認されているが、主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径45cm、短径34cmの楕円形を呈し、深さ59cmの出入口施設に伴うピットと思われる、北側へ傾斜して掘り込まれている。P₆は径30cmの円形を呈し、深さ45cmの補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径133cm、短径83cmの不定形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。ほぼ中央には炉石が置かれた状態で出土し、炉床は赤変硬化している。

覆土 下層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積し、人為堆積と思われる。上層は暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 壁際の床面から集中して弥生式土器片（広口壺3）、弥生式土器細片（300点）が出土している。3の胴部片は北壁中央際の床面から横位の状態で、1・2は小形の広口壺で西壁ほぼ中央際の、床面からそれぞれ横位の状態で出土している。12・13の紡錘車は西壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 床面及び覆土下層から、広範囲に炭化材や焼土ブロックが検出されており、火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺物からは、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

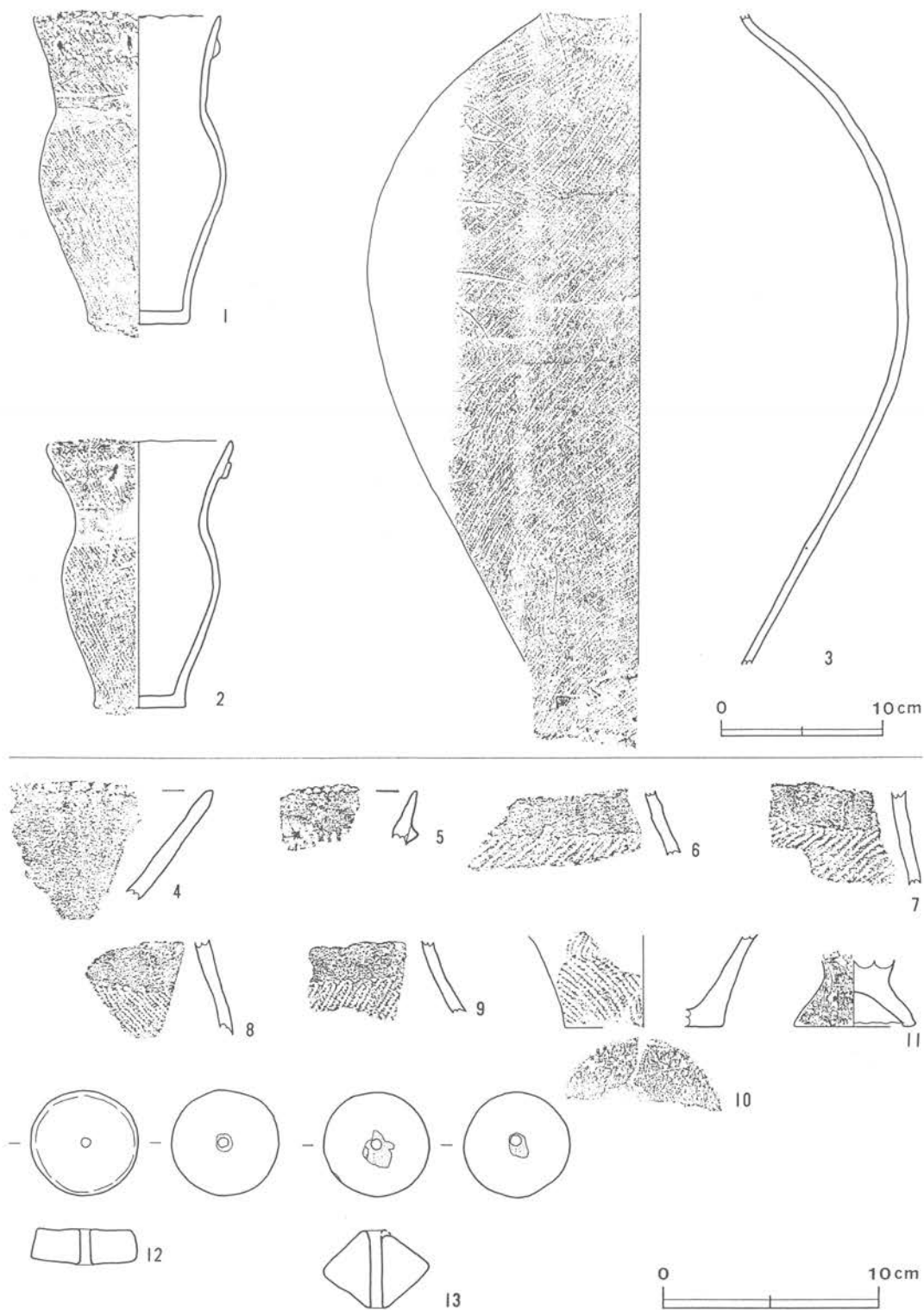


SI-77 土層解説

- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・ローム大ブロック・炭化小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>2 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>3 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック・焼土粒子中量, 炭化小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック少量。</p> <p>4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>5 黒褐色 炭化粒子多量, ローム小ブロック・炭化大ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量。</p> <p>6 黒色 炭化粒子多量, 炭化大ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量, ローム大ブロック微量。</p> <p>7 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>8 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化小ブロック・焼土粒子少量。</p> | <p>9 極暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>10 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>11 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量, 炭化大ブロック微量。</p> <p>12 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック少量。</p> <p>13 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。</p> <p>14 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。</p> <p>15 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, ローム大ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック中量, 炭化小ブロック・炭化粒子少量。</p> <p>16 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量。</p> <p>17 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量。</p> |
|--|--|



第122図 第77号住居跡実測図



第123図 第77号住居跡出土遺物実測・拓影図

第77号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	広口壺 弥生式土器	A 11.6	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。縄文施文の単口縁を呈し、口唇部は縄文原体の押圧が強くなされ、小波状を呈している。口縁部には刺突文が2条周回し、その間には瘤がほぼ等間隔に6個貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P543 95% 西壁中央際床面
		B 19.2			
		C 6.4			
2	広口壺 弥生式土器	A 15.5	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。縄文施文の単口縁で片口状を呈している。口縁部には刺突文が2条周回し、その間に瘤がほぼ等間隔に6個貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P544 95% 西壁中央際床面
		B 16.2			
		C 5.6			
3	広口壺 弥生式土器	B (40.8)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけて大きく内彎して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P542 40% 北壁中央際床面

第123図4～11は、第77号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は高坏の口縁部片であり、口唇部に縄文が施され、外面は無文である。5は無文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施されている。下端は縄文原体により押圧され、瘤が貼られている。6～9は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10は底部片で、胴部には縄文が施されている。11は台付甕の脚部片で、「ハ」の字状に開く短い脚である。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第123図 12	紡錘車	5.0	4.9	1.7	5.0	52.8	100	床面	D P64
13	紡錘車	5.0	4.9	3.6	5.0	(55.5)	98	床面	D P65

第78号住居跡（第124図）

位置 B地区北部，E6f₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.03m，短軸4.62mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-32°-W。

壁 壁高46～55cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉周辺は踏み固められて硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は径29～32cmの円形を呈し、深さは55～70cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は南西コーナー付近から検出されている。径55cmほどの円形を呈し、深さ3cmである。置台として使用したと思われる大形の広口壺を固定させるための掘り方と思われる。

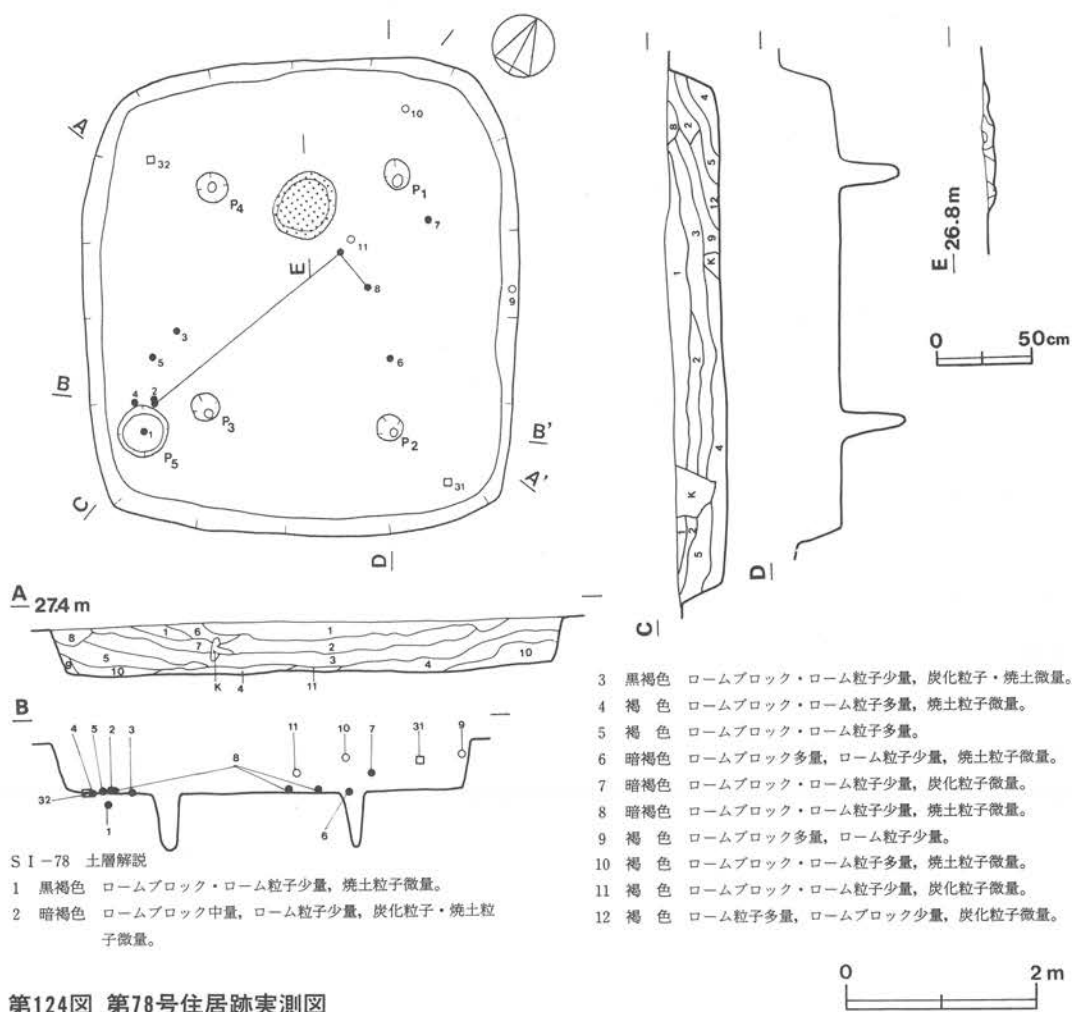
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径75cm，短径62cmの楕円形

を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

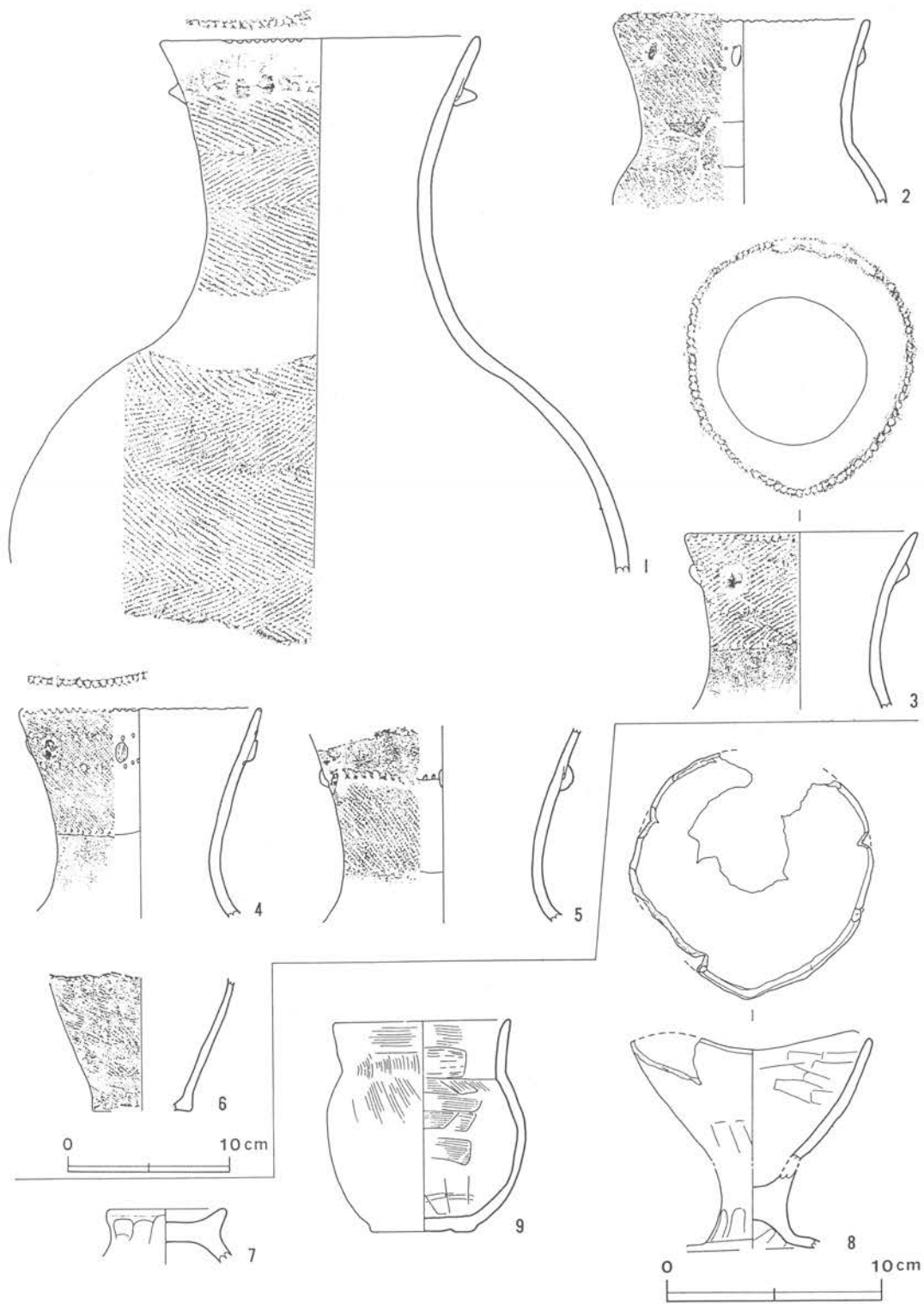
覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下・中層を中心に、弥生式土器片（広口壺6，蓋1，高坏1），弥生式土器細片（493点）と土師器片（甕1，器台2）が混在して出土している。遺存状態が良好なものは南コーナー付近から集中して出土している。1は弥生式土器の大形広口壺上半部で南コーナー付近の床面から正位の状態で，2～5は弥生式土器の広口壺上半部で南コーナー付近の床面から，それぞれ横位の状態で出土している。7の蓋は中央から北東寄りの覆土中層から，8の高坏は中央部覆土下層からそれぞれ出土している。9は土師器の小形甕で北東壁中央際の覆土上層から，10は土師器の器台形土器で北コーナー付近の覆土中層から出土している。31の敲石は東コーナー付近の覆土中層から，32の砥石は西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

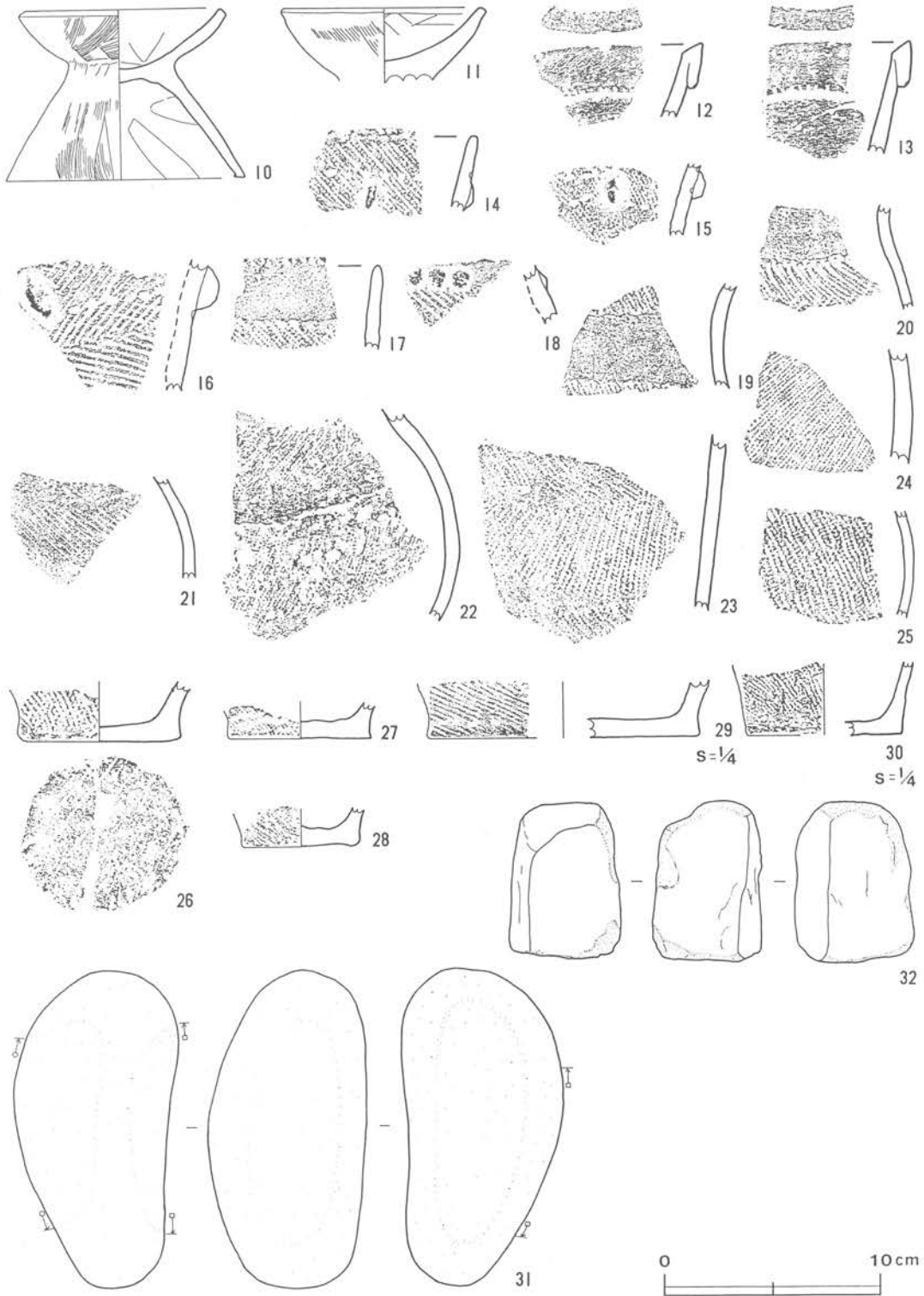
所見 住居跡の形態や床面の出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第124図 第78号住居跡実測図



第125图 第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第126図 第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第78号住居跡出土土器観察表

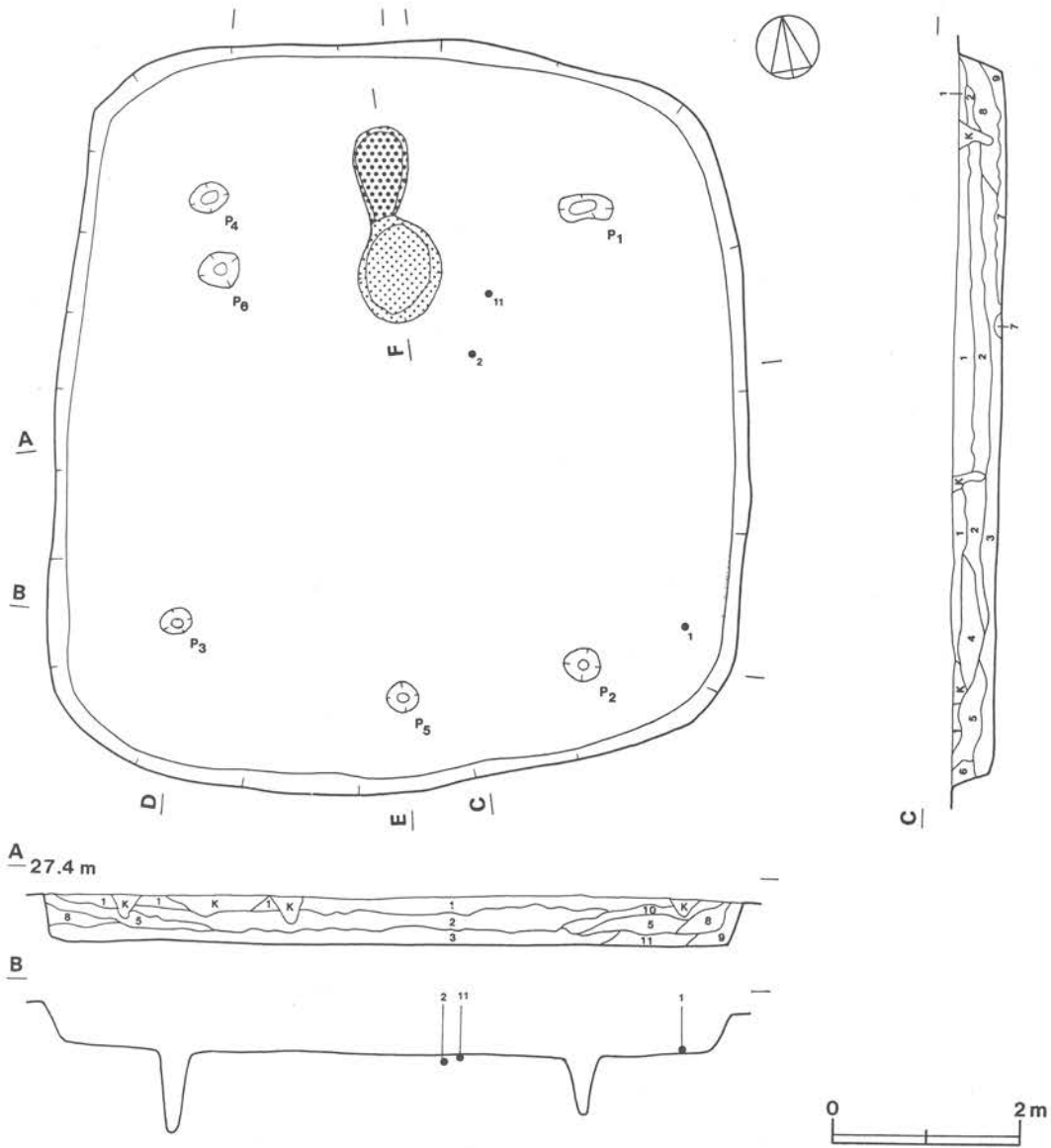
図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様		胎土・色調・焼成	備 考
第125図 1	広口壺 弥生式土器	A 19.8	胴上半部。胴部から頸部にかけては大きく内彎している。頸部から口縁部にかけては外反している。無文の複合口縁を呈し、下端には刺突文が施され、2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。		砂粒・長石・石英 橙色 普通	P547 50% 南コーナー付近床面
		B (33.2)				
2	広口壺 弥生式土器	A 15.9	胴上半部。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。縄文施文の単口縁を呈し、2列の刺突文間にほぼ等間隔に瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。		砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P548 40% 南コーナー付近床面 外面スス付着
		B (11.4)				
3	広口壺 弥生式土器	A 15.5	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がり、口縁は片口状を呈している。縄文施文の単口縁を呈し、2条の刺突文が施され、その間にはほぼ等間隔に瘤が7個貼られている。頸部下半をやや幅広い無文帯としている。原体は附加条1種（附加2条）である。		砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P549 35% 南コーナー付近床面
		B (12.0)				
4	広口壺 弥生式土器	A 15.0	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、2条の刺突文が施され、その間にはほぼ等間隔に瘤が9個貼られている。頸部下半をやや幅広い無文帯としている。原体は附加条1種（附加2条）である。外面は一部摩滅している。		砂粒・長石 橙色 普通	P550 30% 南コーナー付近床面
		B (13.0)				
5	広口壺 弥生式土器	B (12.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がっている。無文の複合口縁を呈し、下端には縄文原体による押圧がなされ、2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部上半には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、下半を無文帯としている。		砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P551 30% 南コーナー付近床面
6	広口壺 弥生式土器	B (8.3)	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。		砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P553 30% 中央からやや東側床面
		C [6.2]				
7	蓋 弥生式土器	B (2.5)	天井部は突出し、平坦なつまみ状を呈している。外面は粗くヘラ削りされている。		砂粒・長石 橙色 普通	P557 10% 中央から北東寄り 覆土中層
		F 5.6				
		G 1.0				
8	高 坏 弥生式土器	A 11.3	脚部は裾部が大きく開く「ラッパ」状を呈している。坏部は内彎して立ち上がり口縁に至る。押圧による波状口縁で片口状を呈する。内・外面は粗くヘラ削りされている。		砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P558 60% 中央部覆土下層
		B [10.5]				
		E (2.1)				

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第125図 9	壺 土 師 器	A 8.4	平底。突出している底部から胴部にかけて内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面はハケ目整形。胴部内面下位はヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P552 80% 北東壁中央際覆土上層
		B 9.9				
		C 5.0				
第126図 10	器 台 土 師 器	A 9.8	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎して立ち上がる。	外面はハケ目整形。内面はヘラ削り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P559 60% 北コーナー付近覆土中層
		B 8.0				
		D 11.2				
		E 5.5				
11	器 台 土 師 器	A 5.6	器受部片。器受部は器厚を減しながら、内彎して立ち上がる。	外面はハケ目整形。内面はヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P560 40% 中央部覆土中層
		B (3.4)				

第126図12～30は、第78号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。12～17は口縁部片である。12・13は同一個体であり、結節文を伴う細縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。口縁下端にはキザミ目が施され、頸部は無文で赤彩されている。14～16は縄文

施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文間に瘤が貼られている。18~22は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。23~25は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、23は羽状構成をとっている。26~30は底部片で、平底を呈し、胴部には縄文が施されている。

図版番号	器種	石	法量				石質	出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第126図	31	甃	15.0	7.7	7.4	1210.1	流紋岩	覆土中層	Q60
	32	甃	7.5	5.3	5.2	274.5	砂岩	床面	Q61



第127図 第79号住居跡実測図

第79号住居跡（第127図）

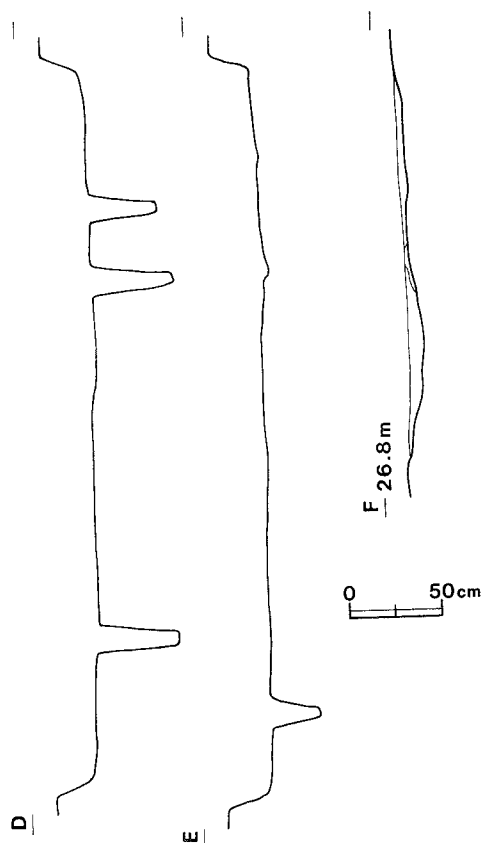
位置 B地区北部，E6h₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.97m，短軸7.44mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-8°-E。

壁 壁高42~52cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。



S I -79 土層解説

- | | | |
|----|-----|---|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム大ブロック多量，ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 3 | 褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子少量。 |
| 4 | 褐色 | ローム大ブロック多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。 |
| 5 | 褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量。 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム大ブロック中量，炭化粒子少量。 |
| 7 | 黒褐色 | ローム小ブロック多量，ローム大ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量。 |
| 8 | 明褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 9 | 褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子微量。 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量。 |
| 11 | 明褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子少量。 |

ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₄は長径35~58cm，短径26~36cmの楕円形を呈し，深さは65~87cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₆は長径46cm，短径38cm，深さ90cmの補助支柱穴と思われる。P₅は径32cmの円形を呈し，深さ58cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

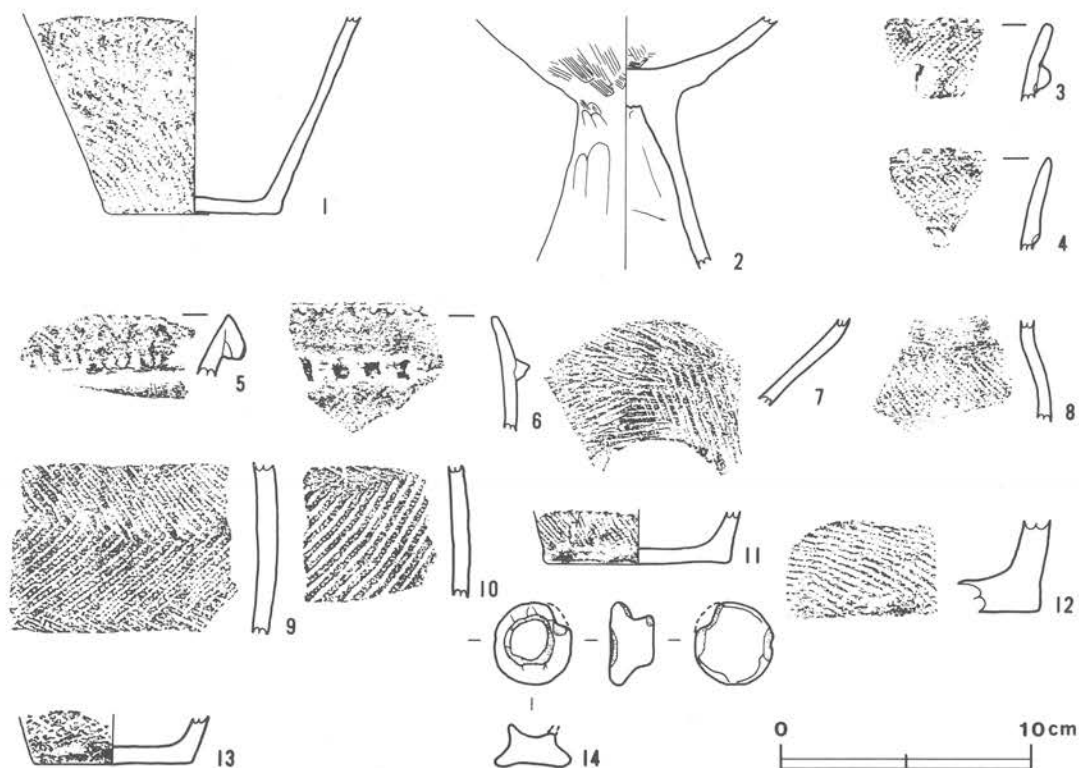
炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径112cm, 短径86cmの楕円形を呈し, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。炉の北側には長径98cm, 短径56cm, 深さ4cmほどの浅い落ち込みが検出されているが, 底面は焼けておらず, 覆土は焼土粒子を含む暗褐色土で, 灰置き場のような炉に伴う施設と考えられる。

覆土 下層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土であり, 人為堆積と思われる。上層は黒褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 覆土下層から弥生式土器片(広口壺1, 台付甕1), 弥生式土器細片(541点)が出土している。

1の底部片は南東コーナー付近の覆土下層から, 2の台付甕は中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第128図 第79号住居跡出土遺物実測・拓影図

第79号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	広口壺	B (8.0)	底部から口縁部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが, 羽状構成をとっていない。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P561 30% 南東コーナー付近覆土下層
	弥生式土器	C 6.9			

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第128図 2	台付甕 弥生式土器	B (10.0) E (7.0)	脚部から胴部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がる。胴部外面はハケ目整形され、脚部はヘラ削りされている。脚部内面には輪積み痕が見られる。	砂粒 にふい橙色 やや良好	P563 15% 中央部床面

第128図3～13は、第79号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～6は口縁部片である。3は単節縄文施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文間に瘤が貼られている。4は単節縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。5は単節縄文施文の折り返し口縁を呈し、頸部を無文帯としている。6は口縁部がやや内彎する鉢形土器と思われる、無文の複合口縁を呈する。口縁下端にはほぼ等間隔に瘤が密に貼られている。胴部には単節縄文が施されている。7は高坏の坏部片であり、外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8は頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。9・10は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。11～13は底部片であり、胴部には縄文が施されている。13の原体は附加条2種（附加1条）である。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第128図 14	耳 栓	3.4	3.2	1.8	—	(11.0)	90	覆 土	D P 66

第80号住居跡 (第129図)

位置 B地区北東部, E6g₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.30m, 短軸3.96mの方形を呈している。

長軸方向 N-30°-W。

壁 壁高29～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 5か所(P₁～P₅)検出されている。P₁～P₄は径24～35cmの円形を呈し、深さは40～46cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径22cmの円形を呈し、深さ28cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は径55cmの円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。中央からやや西寄りには炉石が置かれてた状態で出土している。炉床は中央部が赤変硬化している。

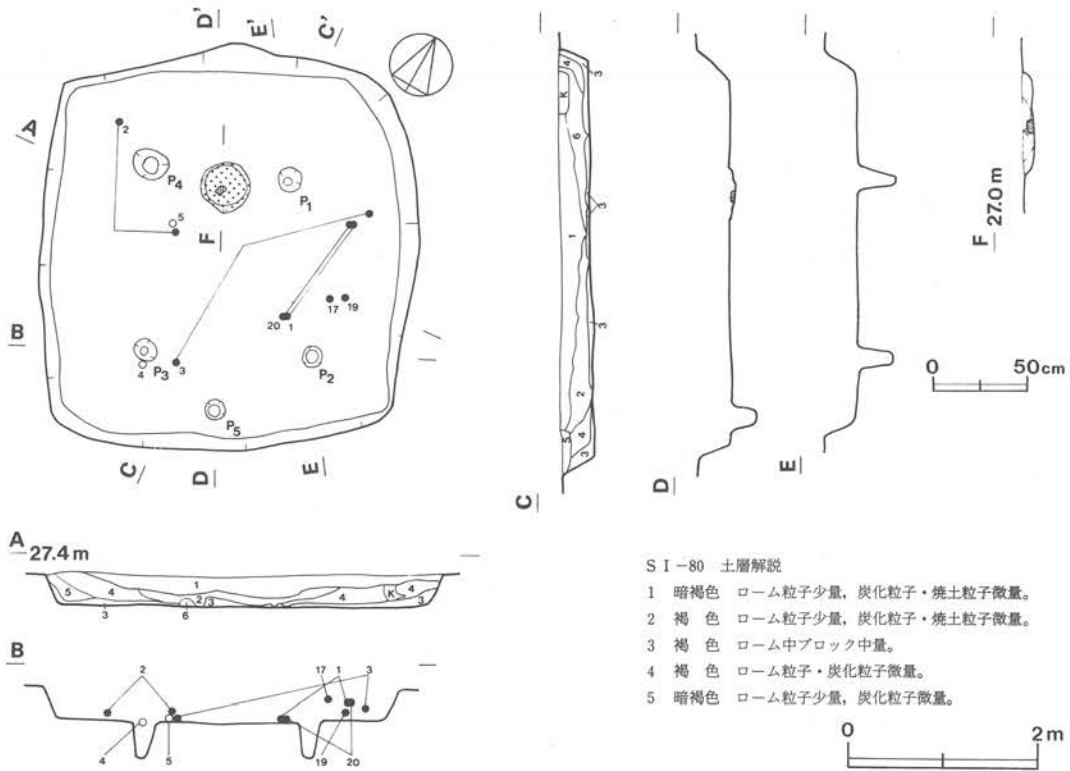
覆土 暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下・中層を中心に弥生式土器片(広口壺3), 弥生式土器細片(409点)と土師器片(高坏1, 埴1), 土師器細片(21点)が出土している。2は広口壺の底部片で中央部の覆土下層から出土したものと西コーナー付近の覆土下層から出土したものが、接合されている。

3は広口壺の底部片で中央から南寄りの床面から、17の底部片はやや北東壁付近の覆土中層から

それぞれ出土している。21の紡錘車は中央部の覆土上層から出土している。

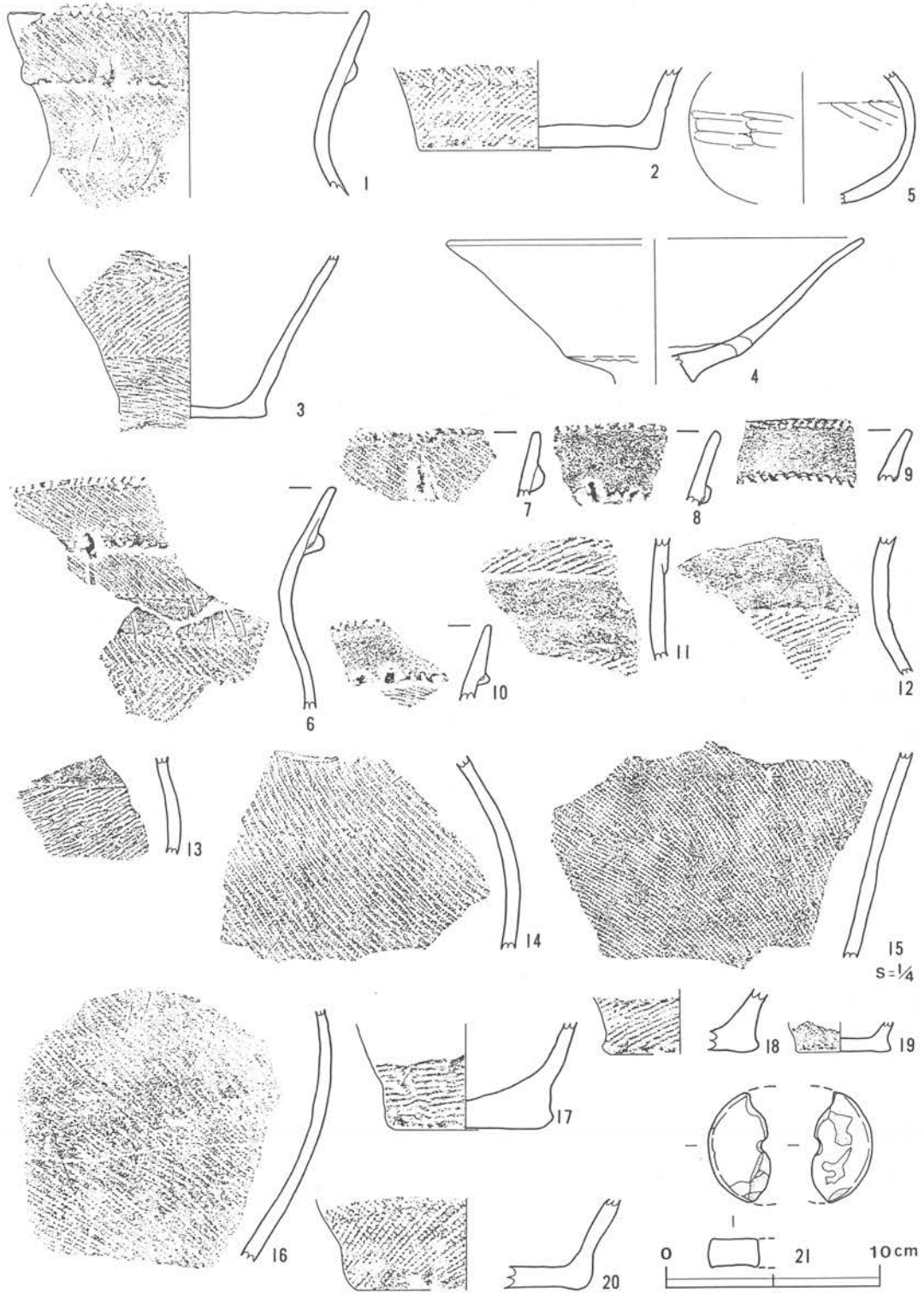
所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第129図 第80号住居跡実測図

第80号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第130図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.0	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。縄文施文の複合口縁を呈し、下端には交互刺突が施され、貼瘤が伴う。頸部下半を無文帯としている。縄文原体は附加条1種(附加2条)である。	砂粒・長石 橙色 普通	P569 5% 北東壁中央付近覆土下層	
		B (8.7)				
	2	広口壺 弥生式土器	B (3.9) C 11.2	底部片。上げ底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・石英 橙色 普通	P564 10% 中央部覆土下層
3	広口壺 弥生式土器	B (7.6) C 7.0	底部から胴部にかけての破片。平底で突出している。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P565 20% 中央から南寄り床面	
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 4	高坏 土師器	A [19.7]	坏部片。坏部は稜を持ち、緩やかに外反して立ち上がる。	外面は縦位のヘラナデ。内面は横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P571 30% 中央からやや南寄り覆土下層
		B (6.7)				
5	埴 土師器	B (6.2)	胴部片。胴部は大きく内彎する。	外面は横位の粗いヘラ削り。内面は指ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P572 30% 中央部覆土下層



第130图 第80号住居跡出土遺物実測・拓影图

第130図 6～20は、第80号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6～11は口縁部片である。6・7は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。口唇部にも縄文が施され、口縁下端に瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8～10は、無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧され、10には瘤が貼られている。11は単節縄文施文の複合口縁を呈し、頸部上半を無文帯としている。12・13は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部に縄文が施されている。13の原体は直前段反撚りである。14～16は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、いずれも羽状構成をとらない。17～20は底部片である。胴部には縄文が施されており、18・19は張り出しを持っている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第130図 21	紡錘車	5.7	5.6	1.4	—	[19.6]	40	覆土上層	D P 67

第81号住居跡（第131図）

位置 B地区北東部、E6c₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.98m、短軸4.05mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-12°-E。

壁 壁高43～56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 北東部を攪乱されているが、ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

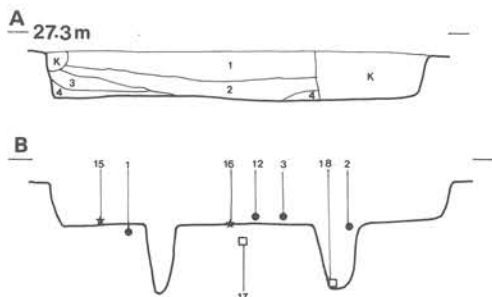
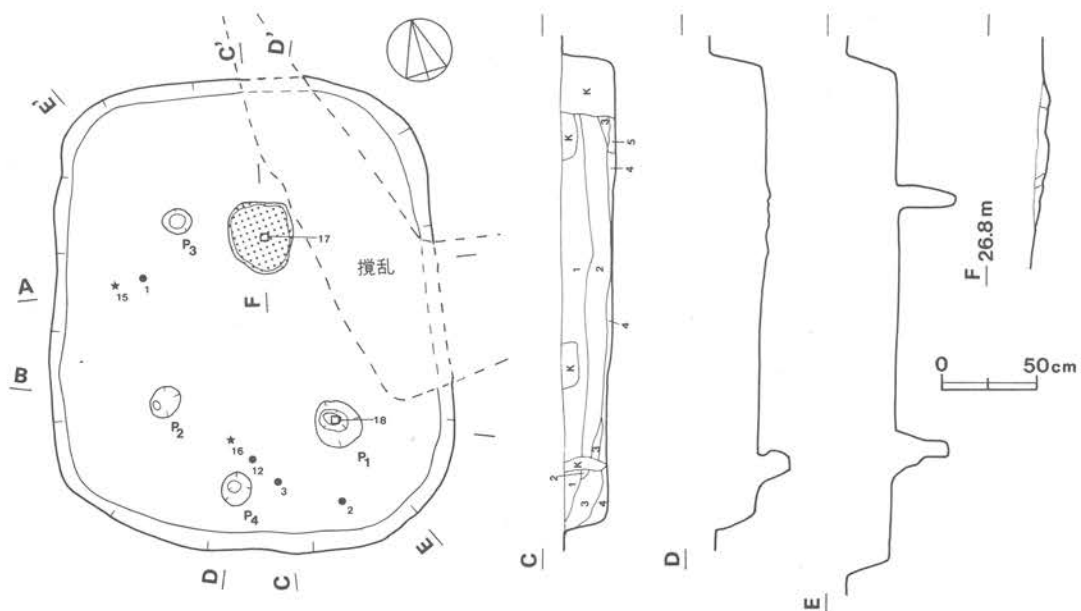
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₃は径28～51cmの円形を呈し、深さは57～74cmの支柱穴である。北東部のピットは攪乱により未確認であるが、支柱穴を結んだ線は方形となるものと思われる。P₄は長径35cm、短径30cmの楕円形を呈し、深さ36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径76cm、短径66cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。中央部には炉石が置かれた状態で出土している。炉床は赤変硬化している。

覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に弥生式土器片（広口壺3）、弥生式土器細片（257点）が出土している。1の口縁部片は炉西側の床面から横位の状態で出土している。2の底部片は南東コーナー付近の床面から正位の状態で出土している。16の紡錘車は炉南側の床面から、15の紡錘車は西壁付近の床面からそれぞれ出土している。17・18の敲石は覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



S I-81 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム大ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム大ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、焼土粒子微量。

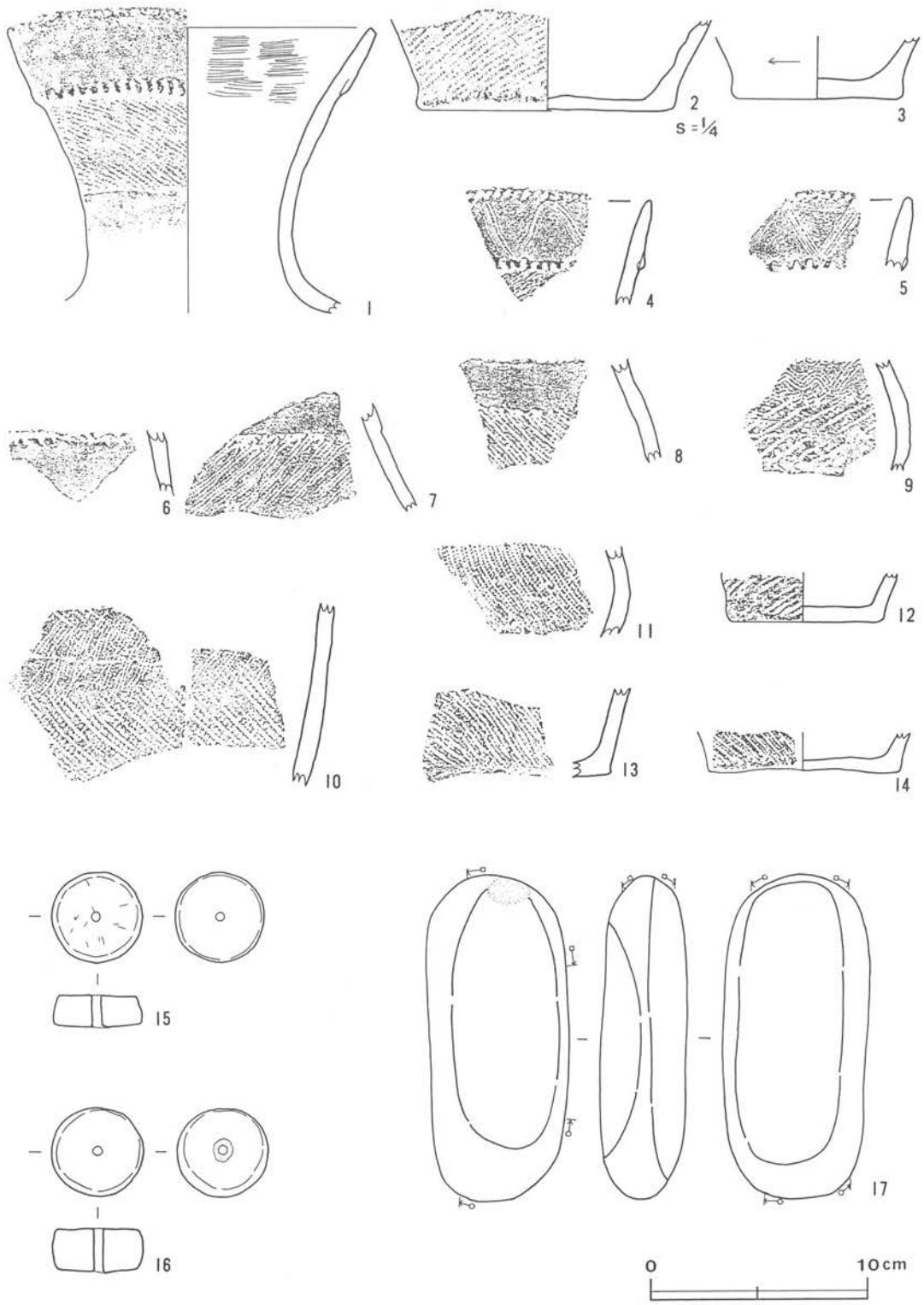


第131図 第81号住居跡実測図

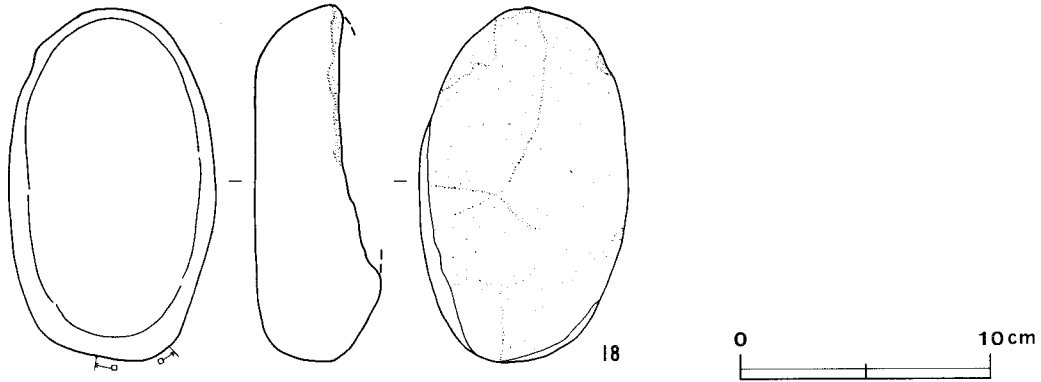
第81号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	広口壺 弥生式土器	A [17.2] B (13.5)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体による押圧が施されている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部下半は無文帯としている。頸部下半はハケ目調整されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P573 30% 炉西側床面
2	広口壺 弥生式土器	B (5.8) C 16.0	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面は剝離が著しい。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P574 10% 南東コーナー付近床面
3	広口壺 弥生式土器	B (3.0) C 7.9	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面は無文でヘラナデされている。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P575 10% 南壁中央付近覆土下層

第132図4~14は、第81号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は同一個体であり、複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施され、口縁下端には縄文原体の押圧が施されている。



第132图 第81号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第133図 第81号住居跡出土遺物実測図(2)

口縁部には4本歯工具による連続山形文が施されている。頸部には細目の縄文が施されている。6～9は頸部から胴部にかけての破片であり、6～8は頸部を無文帯としている。9は頸部に4本歯工具による横走波状文が施され、胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。10・11は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、10は羽状構成をとっている。12～14は底部片であり、平底を呈し、胴部には縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第132図 15	紡錘車	4.3	4.3	1.5	4.0	31.8	100	床面	D P 68
16	紡錘車	4.4	4.2	2.1	4.5	46.8	100	床面	D P 69

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第132図 17	敲石	安山岩	15.3	6.8	4.1	653.7	覆土中層	Q 62
第133図 18	敲石	安山岩	14.3	8.3	5.0	668.7	覆土中層	Q 63

第82号住居跡 (第134図)

位置 B地区北東部, E7g₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.38m, 短軸4.65mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-8°-E。

壁 壁高36~47cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦であり, 中央部はよく踏み固められ硬い。

ピット 8か所 (P₁~P₈) 検出されている。P₁・P₂は径32~34cmの円形を呈し, 深さは58~68cmである。P₃・P₄は短径27~29cm, 長径33~35cmの楕円形を呈し, 深さ62~68cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われる。支柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は長径50cm, 短径38cmの楕円形を呈し, 深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。南壁中央部際に, 長径98cm, 短径42cm, 深さ26cmとやや大きめのP₆が検出されたが, 性格は不明である。P₇・P₈は短径26~28cm, 長径33~36

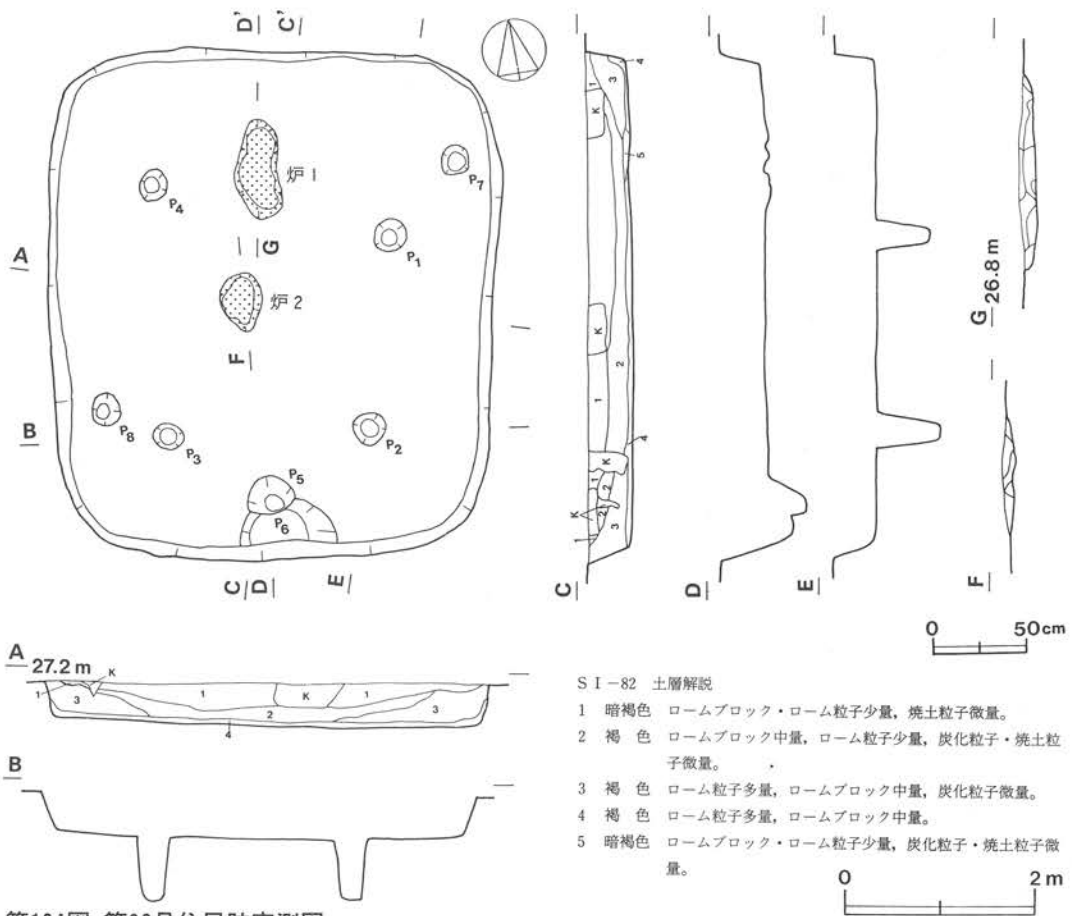
cmの楕円形を呈し、深さ53~62cmである。補助柱穴と思われる。

炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径106cm, 短径45cmの不定形で、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。炉₂は炉₁の南側、住居跡のほぼ中央に検出され、長径64cm, 短径45cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく熱を受け、赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土中層から弥生式土器細片(57点)が出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第134図 第82号住居跡実測図

第84号住居跡 (第135図)

位置 B地区南部, G6d₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.05m, 短軸4.40mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-58°-W。

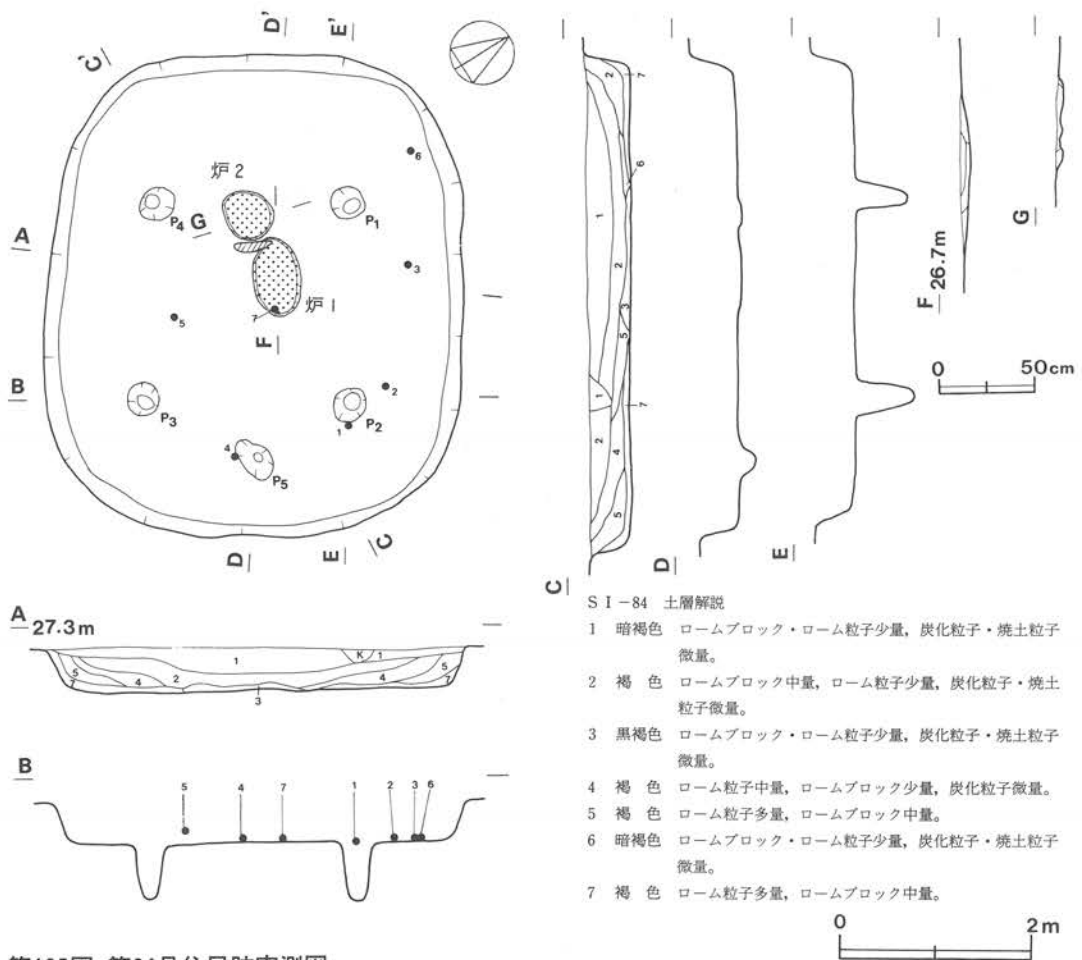
壁 壁高38~47cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺及び出入口施設に伴うピットの北東側はよく踏み固められて硬い。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径32~36cmの円形を呈し、深さは49~63cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は、ほぼ長方形となる。P₅は長径38cm、短径31cmの楕円形を呈し、深さ18cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 2か所 (炉₁・炉₂) 検出されている。炉₁はほぼ中央に検出されている。平面形は長径85cm、短径45cmの楕円形を呈し、床を11cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体に赤変硬化している。炉₂は炉₁の西側にあり、平面形は長径58cm、短径48cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。炉₁と炉₂の間に炉石と思われる長さ約40cmの礫が出土しているが、2つの炉に共有することも考えられる。

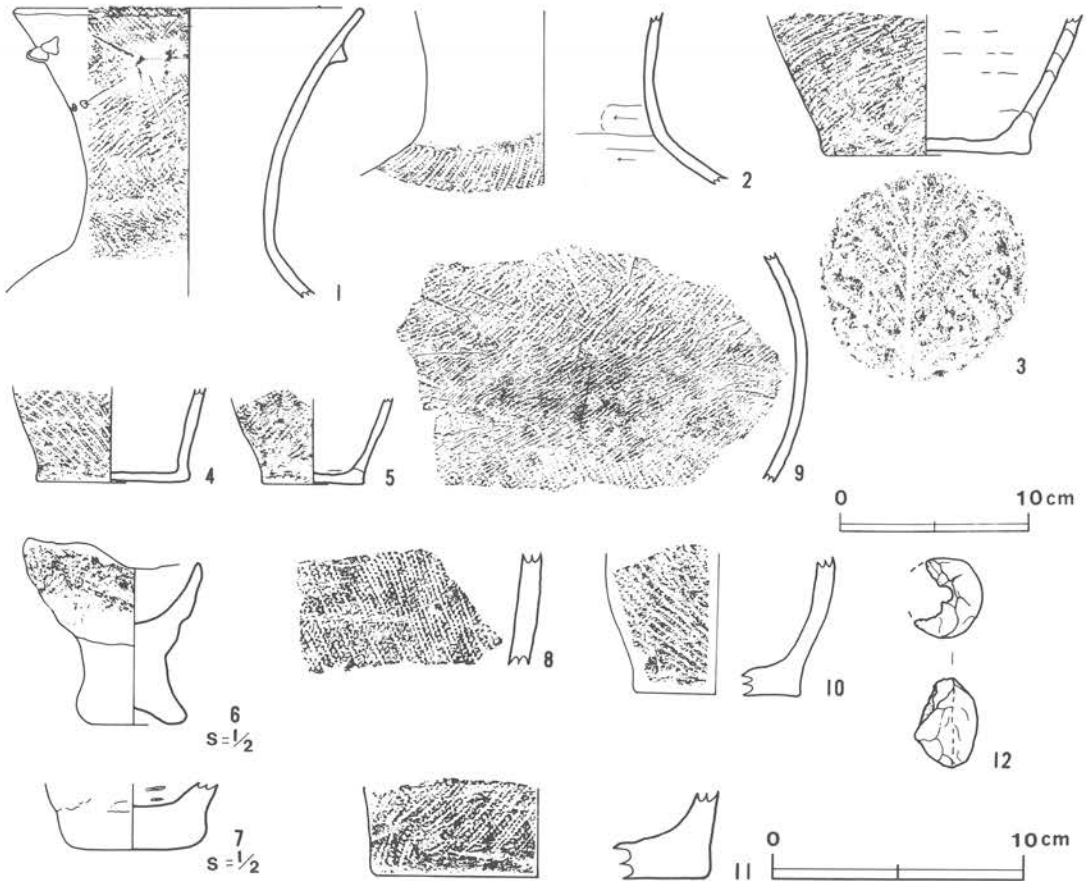
覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。



第135図 第84号住居跡実測図

遺物 住居跡全域の床面及び覆土下層を中心に、弥生式土器片(広口壺5,手捏土器2),弥生式土器細片(64点)が出土している。その他,流れ込みと思われる土師器細片(43点)が出土している。1と2の広口壺は東コーナー付近の床面から正位の状態出土している。6の手捏土器は北コーナー付近の覆土下層から出土している。7の底部片は中央部の覆土下層から,12の球状土錘は覆土上層から,それぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から,弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第136図 第84号住居跡出土遺物実測・拓影図

第84号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	広口壺 弥生式土器	A 18.5 B (15.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し, 3個1組の瘤が5単位貼られている。口縁部下位に円形刺突文が周回している。頸部上半には単節縄文が施され, 頸部下半を無文帯としている。胴部縄文は羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P 593 20% 東コーナー付近床面
2	広口壺 弥生式土器	B (8.9)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては強くくびれ, 頸部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部を無文帯とし, 胴部には単節縄文が施されている	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P 594 20% 東コーナー付近床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第136図 3	広口壺 弥生式土器	B (7.5)	底部片。上げ底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P595 10% 北東壁中央付近床面
		C 11.2			
4	広口壺 弥生式土器	B (5.1)	底部から胴部にかけての破片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石 橙色 普通	P596 10% 南東壁中央付近床面
		C 8.2			
5	広口壺 弥生式土器	B (4.6)	底部片。胴部は底部から外傾して立ち上がり、単節縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P597 15% 中央からやや南寄り覆土中層
		C 4.5			
6	手捏土器 弥生式土器	A 4.7	脚部は中実で「ハ」の字状に開く。坏部は内彎して立ち上がる。口縁は半分が高く段がある。坏部外面には単節縄文が施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P598 100% 北コーナー付近覆土下層
		B 5.0			
		C 2.9			
7	手捏土器 弥生式土器	B (1.8)	丸底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。内・外面ともハゲ目整形されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P599 30% 中央部覆土下層
		C 3.6			

第136図8～11は、第84号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8・9は胴部片であり、縄文が施されている。8の原体は附加条1種(附加2条)、9は附加条1種(附加2条)と直前段反撚り、単節縄文によって羽状構成をとっている。10・11は底部片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第136図 12	土 鉢	3.2	2.9	3.6	[9.0]	(19.1)	50	覆土上層	DP70

第86号住居跡 (第137図)

位置 B地区南部、G6a₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.86m、短軸4.28mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高48～55cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

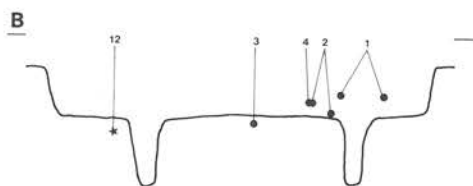
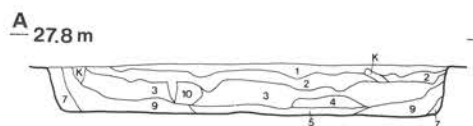
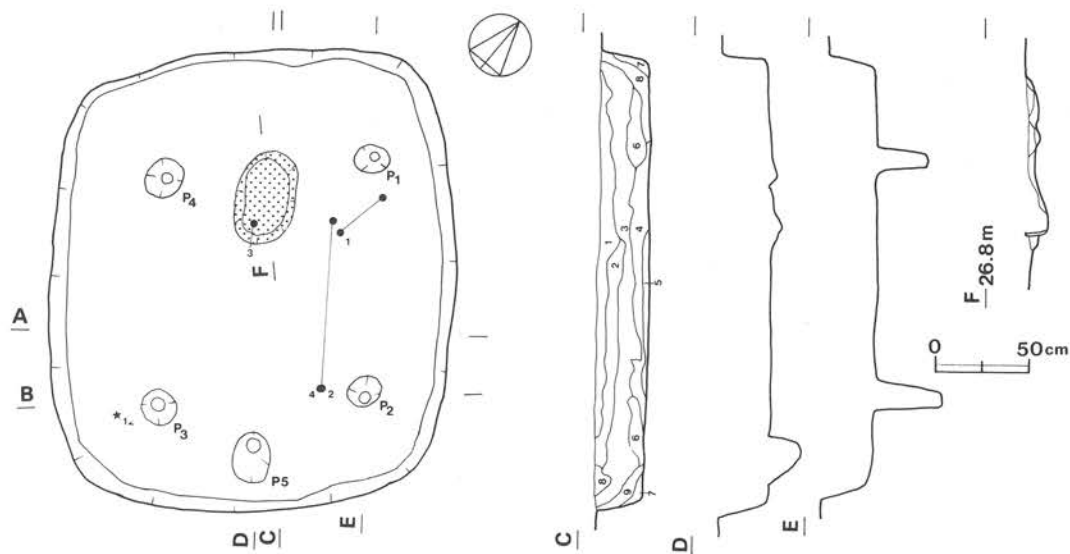
ピット 5か所(P₁～P₅)検出されている。P₁～P₄は径32～43cmの円形を呈し、深さは56～92cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径55cm、短径38cm、深さ35cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径96cm、短径63cmの楕円形を呈し、床を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉の南部からは長さ35cm、幅13cmの土器片が置台として埋め込まれた状態で出土している。炉床は中央部が赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 北東壁付近の覆土中・下層から弥生式土器片(広口壺2, 甕1, 鉢1), 弥生式土器細片(237点)が出土している。1の広口壺は北東壁中央付近の覆土下層から、4の鉢と2の甕は中央から東寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。12の紡錘車は南コーナー付近の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



S I-86 土層解説

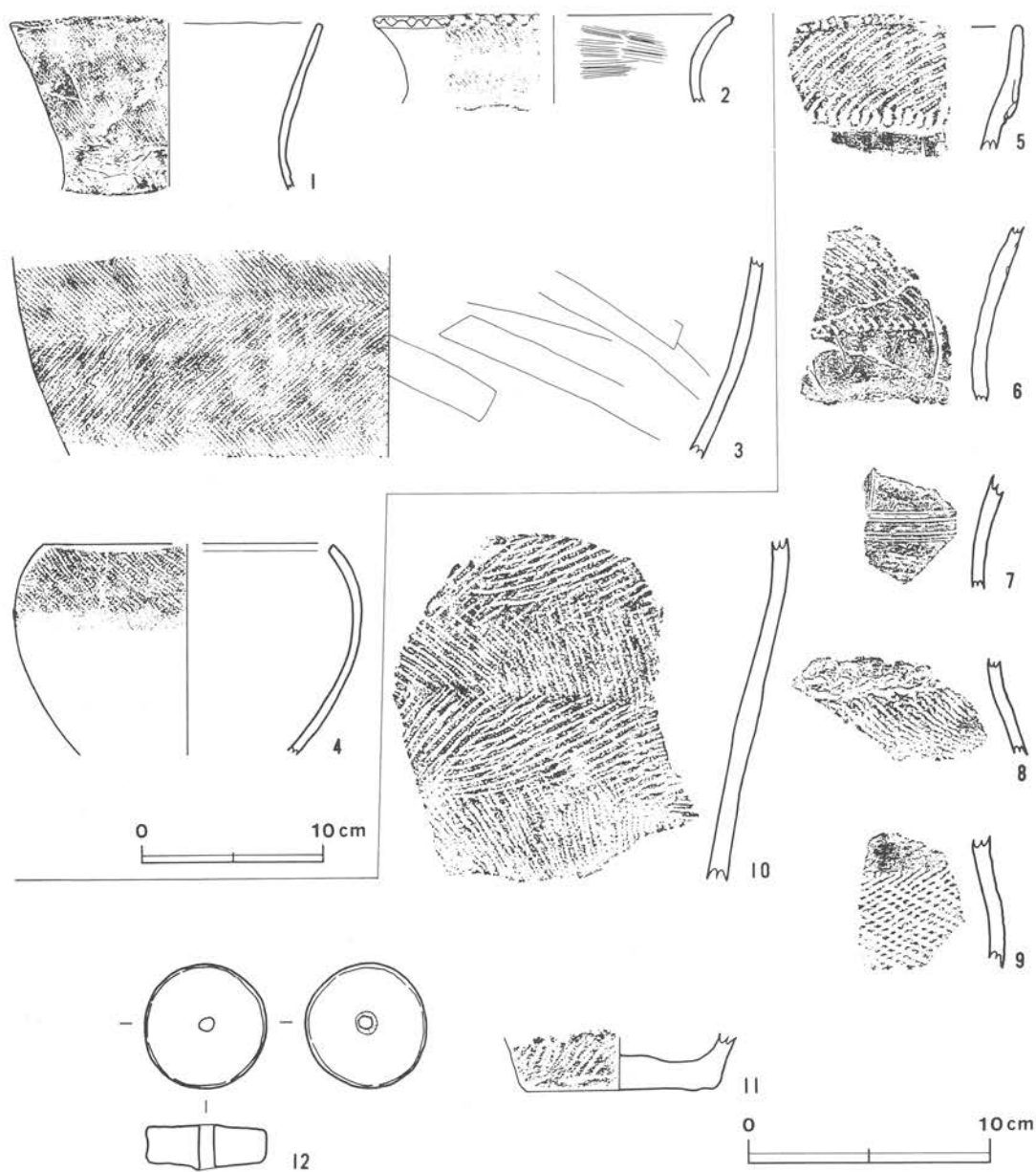
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 4 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量。
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 7 褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量。
- 8 黒褐色 ローム粒子微量。
- 9 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量。
- 10 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。



第137図 第86号住居跡実測図

第86号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	広口壺 弥生式土器	A [17.3] B (9.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈している。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P607 20% 北東壁中央付近覆土下層 内・外面スス付着
2	甕 弥生式土器	A [20.0] B (5.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。口縁は交互押圧による小波状を呈している。口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部を無文帯としている。内面はハケ目調整されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P608 5% 中央から東寄り覆土下層
3	広口壺 弥生式土器	B (11.4)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、単節縄文と附加条1種(附加2条)による羽状縄文が施されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P609 5% 炉南部床面 2次焼成
4	鉢 弥生式土器	A [16.0] B (11.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部から口縁部にかけては内彎して立ち上がる。口唇部と口縁部には単節縄文が施されている。胴部は無文でヘラナデされている。	砂粒・長石・バミス 橙色 普通	P610 20% 中央から東寄り覆土下層



第138図 第86号住居跡出土遺物実測・拓影図

第138図5～11は、第86号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5・6は口縁部片である。5は縄文施文の複合口縁を呈し、口唇部に縄文が施され、口縁下端は縄文原体により押圧されている。頸部は無文帯としている。6は縄文施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文が施されている。頸部は無文帯としている。7～9は頸部から胴部にかけての破片である。7は多条の櫛描文が縦位、横位に施されている。

されている。8は頸部下半を無文帯とし、結節文によって胴部と区画され、胴部には単節縄文が施されている。9は頸部下半を無文帯とし、胴部は附加条縄文が重複し、網目状の縄文となっている。10は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。11は平底で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第138図 12	紡錘車	5.3	5.1	1.9	6.0	56.7	100	床面	DP71

第87号住居跡 (第139図)

位置 B地区南部, F7i₃区を中心に検出されている。

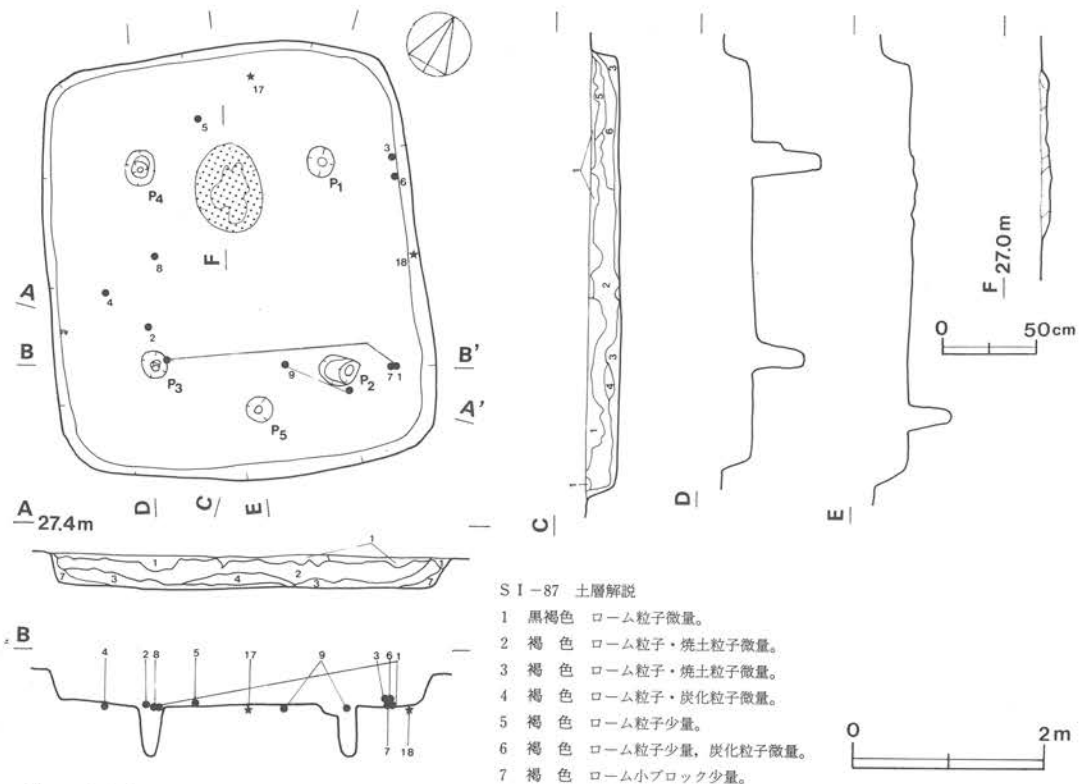
規模と平面形 長軸4.58m, 短軸3.91mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-30°-W。

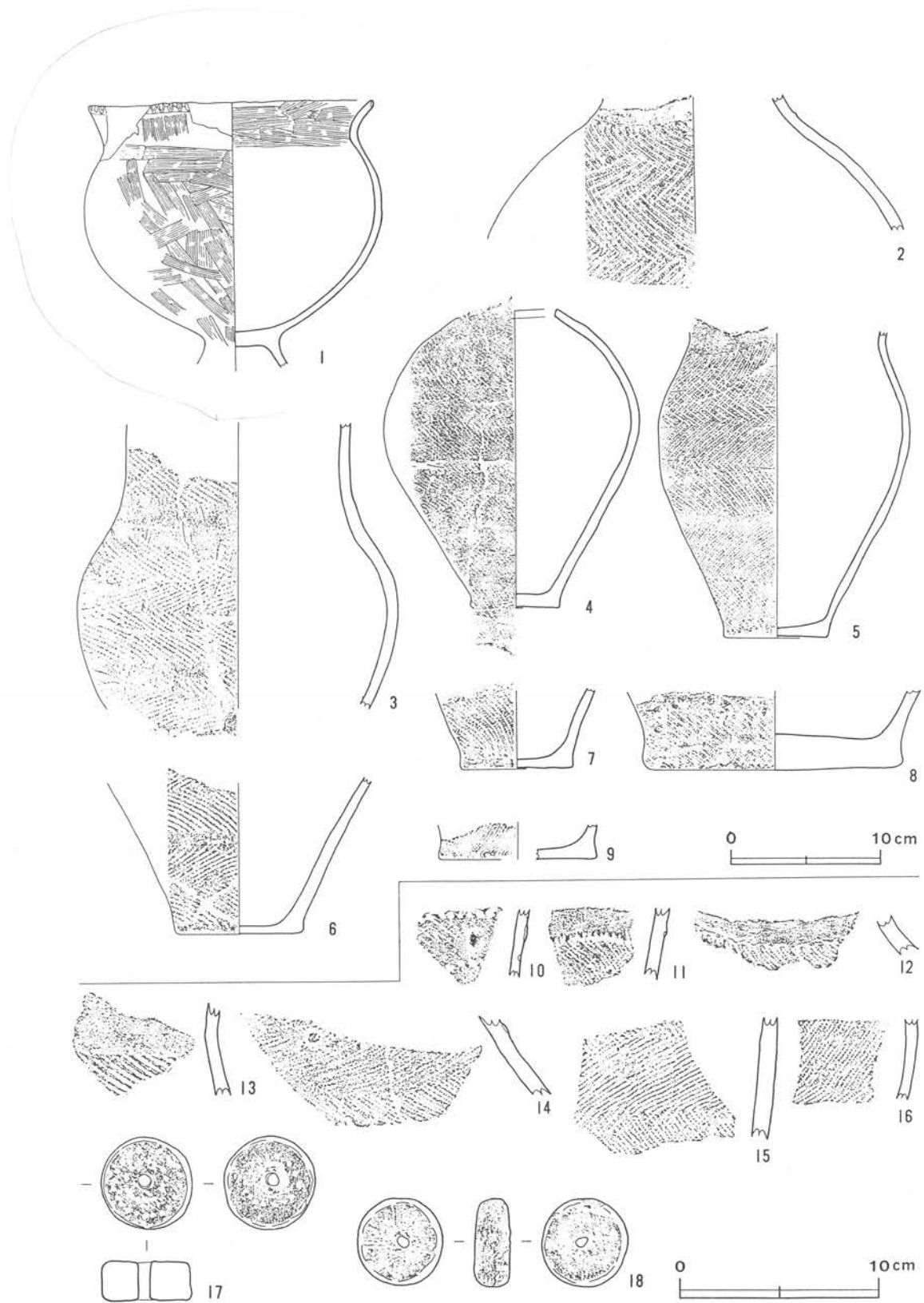
壁 壁高27~34cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺はよく踏み固められ硬い。

ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は長径30~42cm, 短径25~34cmの楕円形を呈し、深さは50~74cmの支柱穴である。P₂とP₄は2段に掘り込まれている。支柱穴を結んだ線は長



第139図 第87号住居跡実測図



第140図 第87号住居跡出土遺物実測・拓影図

方形となる。P₅は径30cmの円形を呈し、深さ45cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径94cm、短径70cmの楕円形を呈し、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部を中心によく焼けて、赤変硬化している。

覆土 褐色土・黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 壁周辺の床面及び覆土下層から弥生式土器片(台付甕1, 広口壺7, 無頸壺1), 弥生式土器細片(347点)が出土している。1の台付甕は南コーナー付近の床面から横位の状態で、2の広口壺と4無頸壺は南西壁中央付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。5の広口壺下半部は北西壁中央付近の床面から斜位の状態で、3の広口壺は北コーナー付近の覆土下層から横位の状態で出土している。17と18の紡錘車は北西壁際中央付近と北東壁際中央付近のそれぞれ床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第87号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	台付甕 弥生式土器	A 19.1 B (18.0) E (1.6)	脚部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。口縁にキザミ目が施されている。口縁部外面は縦位に、内面は横位に、ハケ目整形されている。胴部外面は横位・斜位にハケ目整形され、内面はヘラナデされている。	砂粒・パミス 橙色 普通	P619 80% 南コーナー付近床面 2次焼成
2	広口壺 弥生式土器	B (9.2)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては内彎して立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P611 20% 南西壁中央付近床面 2次焼成
3	広口壺 弥生式土器	B (19.0)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P612 30% 北コーナー付近覆土下層 外面スス付着
4	無頸壺 弥生式土器	A 6.6 B 19.8 C 6.1	底部は平底でやや突出する。胴部は底部から内彎して立ち上がる。外面全体に細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。	砂粒・長石 橙色 普通	P613 90% 南西壁中央付近床面 広口壺を再利用
5	広口壺 弥生式土器	B (20.4) C 7.0	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P614 70% 北西壁中央付近床面 外面スス付着
6	広口壺 弥生式土器	B (10.4) C 8.6	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P615 15% 北コーナー付近覆土下層
7	広口壺 弥生式土器	B (5.2) C 7.6	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P616 15% 東コーナー付近覆土下層
8	広口壺 弥生式土器	B (5.3) C 17.5	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P617 10% 中央から南西寄り覆土 下層
9	広口壺 弥生式土器	B (2.3) C [10.6]	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P618 5% 中央から南東寄り覆土 下層

第140図10～16は、第87号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10・11は口縁部片である。10は縄文施文の単口縁を呈し、2列横位の刺突文が施され、刺突文間には瘤が貼られている。11は無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。頸部には縄文が施されている。12～14は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。14の胴部最上位には「ボタン」状の貼付けがなされている。15・16は胴部片であり15は単節と附加条1種（附加2条）による羽状縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第140図 17	紡錘車	4.6	4.6	2.1	7.0	58.2	100	床面	D P 72
18	紡錘車	4.5	4.3	1.9	7.0	42.5	100	床面	D P 73

第89号住居跡（第141図）

位置 B地区南東部，F7c₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.08m，短軸5.04mの方形を呈している。

長軸方向 N-51°-W。

壁 壁高41～51cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は長径50～65cm，短径42～50cmの楕円形を呈し、深さは70～97cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅は長径48cm，短径35cmの楕円形を呈し、深さ18cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

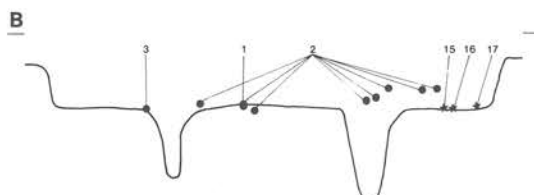
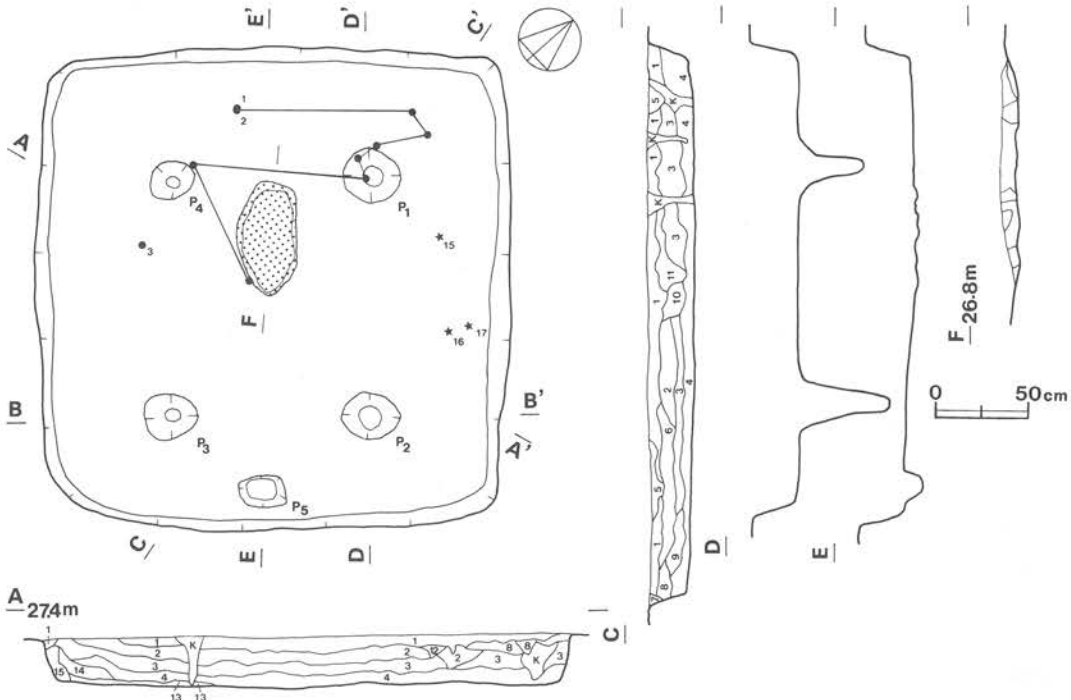
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径120cm，短径63cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け、赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色土・褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 北東壁と北西壁付近の床面及び覆土下・中層を中心に弥生式土器片（広口壺4），弥生式土器細片（252点）が出土している。1の広口壺は北西壁中央付近の覆土下層から横位の状態で出土している。2の底部片は北コーナー付近の覆土中層から出土したいくつかの破片が接合されている。

15～17の紡錘車は北東壁付近の床面及び覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



SI-89 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量, ローム大ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。

- 5 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 7 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 9 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子微量。
- 10 暗褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 11 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
- 13 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 14 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 15 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量。

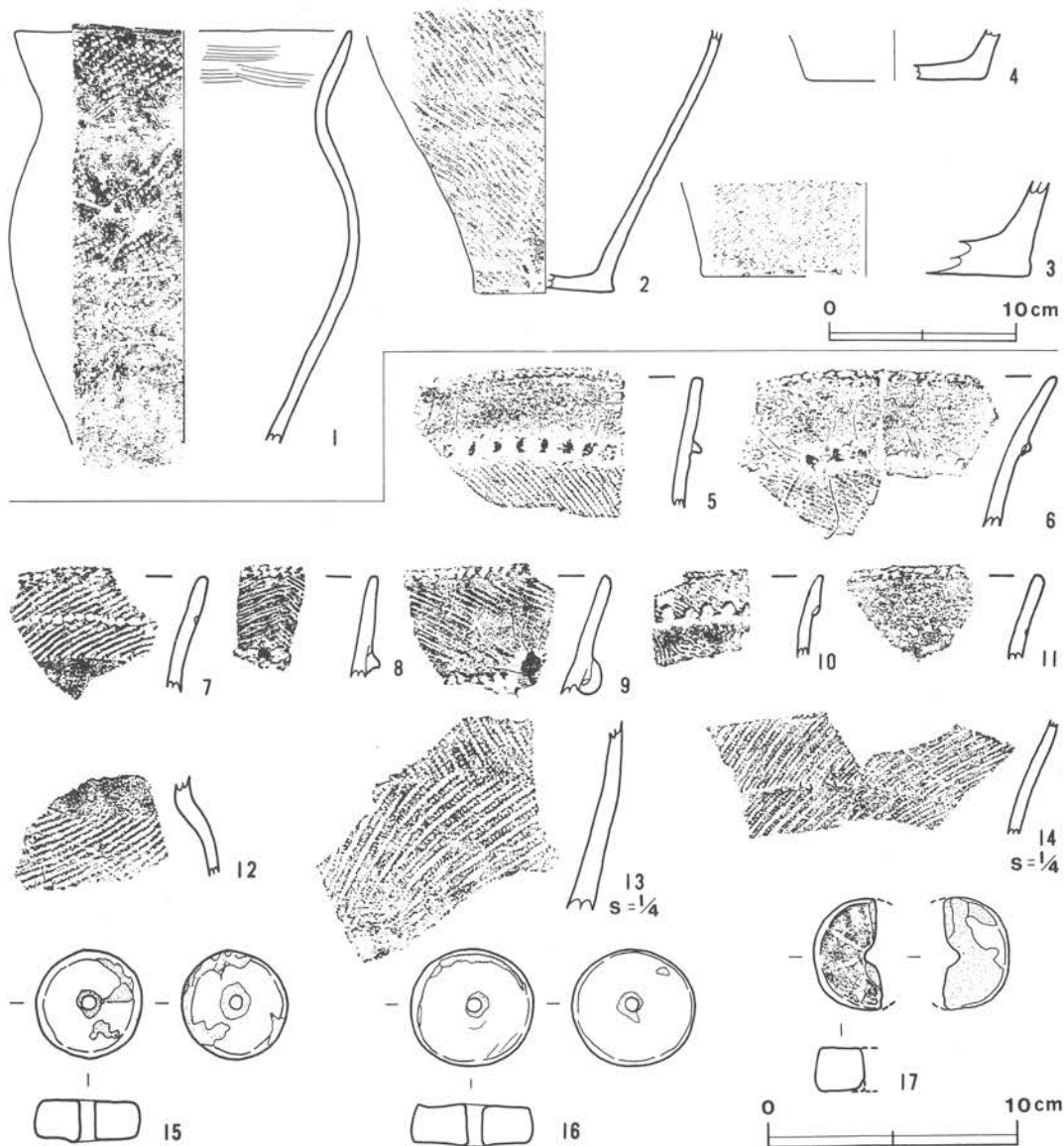


第141図 第89号住居跡実測図

第89号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	広口壺 弥生式土器	A [18.1] B (22.2)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し、頸部を無文帯としている。胴部には太目の単節縄文が施されている。頸部と胴部下半は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・パミス 明褐色 普通	P632 60% 北西壁中央付近覆土下層 2次焼成
2	広口壺 弥生式土器	B (14.1) C [7.5]	胴下半部。上げ底でやや突出する。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されるが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P633 40% 北コーナー付近覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第142図 3	広口壺 弥生式土器	B (5.1) C [17.7]	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P 634 5% 中央から西寄り覆土下層 内面炭化物付着
4	広口壺 弥生式土器	B (2.7) C [9.8]	底部片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。外面は無文で、粗くヘラ削りされている。	砂粒 にぶい橙色 不良	P 635 5% 中央部覆土中層



第142図 第89号住居跡出土遺物実測・拓影図

第142図5～13は、第89号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～10は口縁部片である。6は無文の複合口縁を呈し、口縁下端は縄文原体により押圧され、3個1組の瘤が貼られている。頸部には細目の附加条1種(附加2条)が施されている。7は縄文施文の単口縁を呈し、口縁下端に縄文原体による刺突文が1条横位に施されている。頸部下半を無文帯とし、それ

以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8は細目の附加条1種（附加2条）が施される複合口縁を呈し、口縁下に瘤が貼られている。口縁部の縄文は縦回転の羽状構成をとっている。9は縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下は縄文原体により押圧され、瘤が貼られている。10は縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下端は縄文原体により押圧されている。頸部にはスリット手法による縦区画充填波状文が施されている。11は無文の単口縁を呈し、口縁下位に刺突文が横位に施されている。12は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。13・14は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。13は羽状構成をとっている。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第142図 15	紡 錘 車	4.5	4.4	1.8	5.5	(38.0)	95	床 面	DP74
16	紡 錘 車	5.0	4.8	1.7	6.5	(46.7)	98	床 面	DP75
17	紡 錘 車	4.6	[4.5]	1.8	[6.0]	(25.3)	50	覆 土 下 層	DP76

第90号住居跡（第143図）

位置 B地区東部，F7a_s区を中心に確認されている。北東部2分の1ほどは調査区外へ伸びている。

規模と平面形 長軸4.92m，現存短軸（2.34）mの長方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-38°-W。

壁 壁高55～63cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

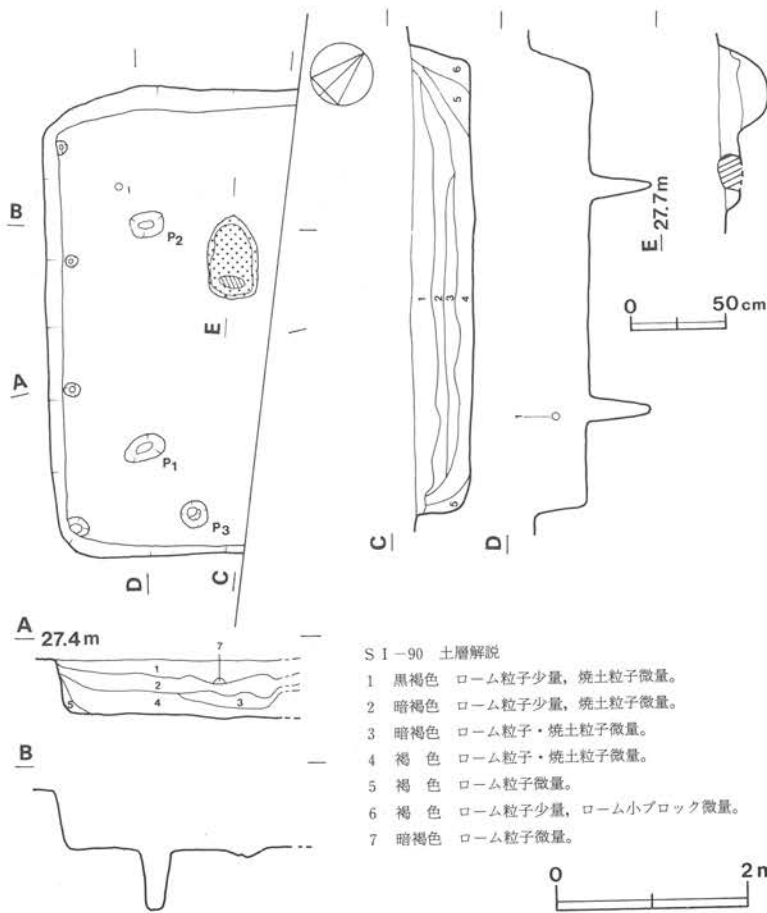
ピット 7か所（P₁～P₇）検出されている。P₁・P₂は長径35～46cm，短径25～28cmの楕円形を呈し，深さは64～66cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は南西壁と平行となる。P₃は径30cmの円形を呈し，深さは33cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₄～P₇は径13～20cm，深さ10～23cmで，南西壁に沿って1.2～1.5mの間隔で存在する。性格は不明である。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径90cm，短径52cmの楕円形を呈し，床を26cm掘り込んだ地床炉である。炉の南部からは長軸に直交するように炉石が置かれた状態で出土している。炉床は中央部が赤変硬化している。

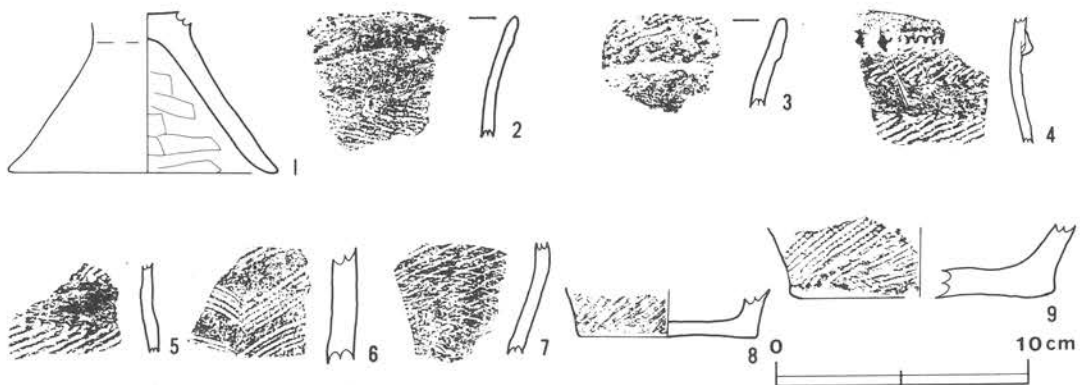
覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積し，自然堆積である。

遺物 覆土中層を中心に弥生式土器細片（50点）と土師器片（台付甕1）が出土している。1は土師器の台付甕脚部で西コーナー付近の覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第143図 第90号住居跡実測図



第144図 第90号住居跡出土遺物実測・拓影図

第90号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	台付甕 土師器	D 10.7 E (6.5)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	外面はヘラナデ。内面は横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・バミス 明赤褐色 普通	P 636 40% 西コーナー付近覆土中層

第144図2～9は、第90号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は無文の複合口縁を呈し、頸部には縄文が施されている。3は縄文施文の複合口縁を呈し、頸部を無文帯としている。4・5は同一個体であり、無文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧され、2個1組の瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。6は頸部片であり、5本歯による連弧文が施されている。7は胴部片であり、附加条2種（附加1条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。8・9は底部で、胴部片には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

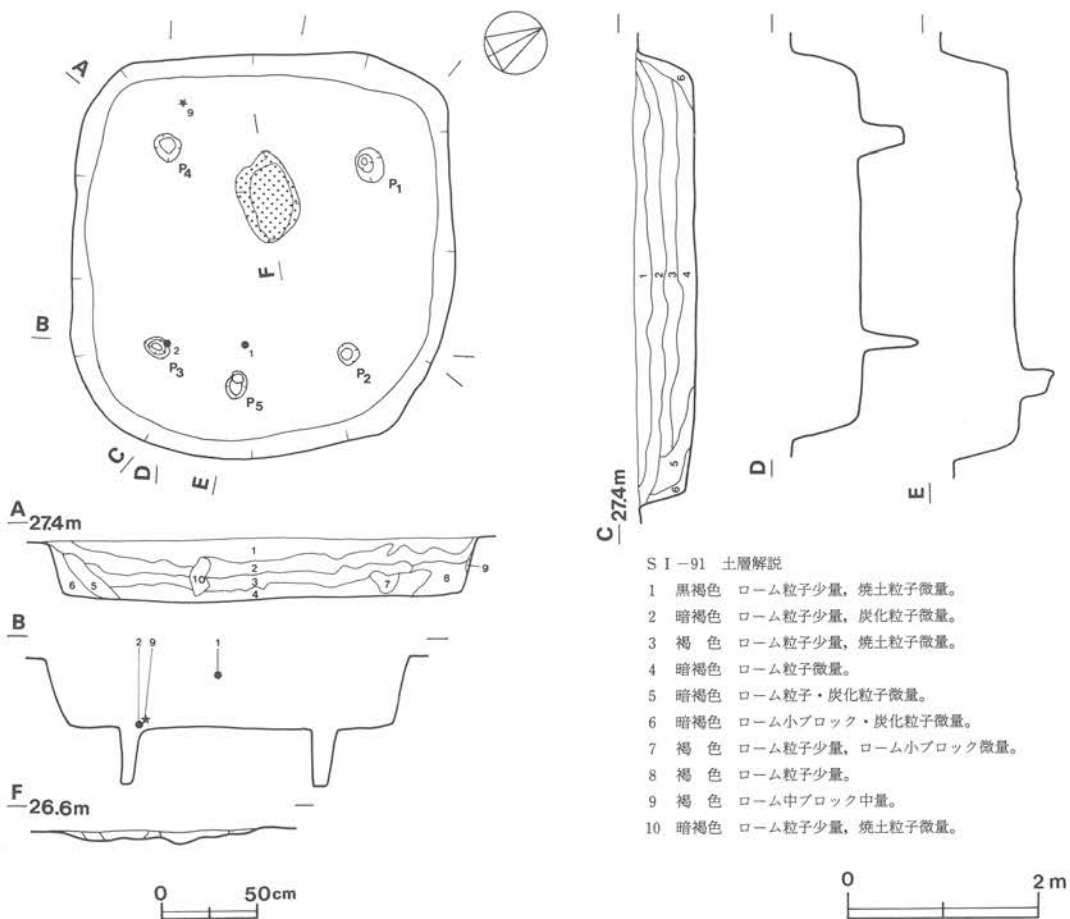
第91号住居跡（第145図）

位置 B地区南東部，F7c₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.25m，短軸4.04mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-63°-W。

壁 壁高50～63cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。



第145図 第91号住居跡実測図

床 平坦で、中央部は踏み固められ硬い。

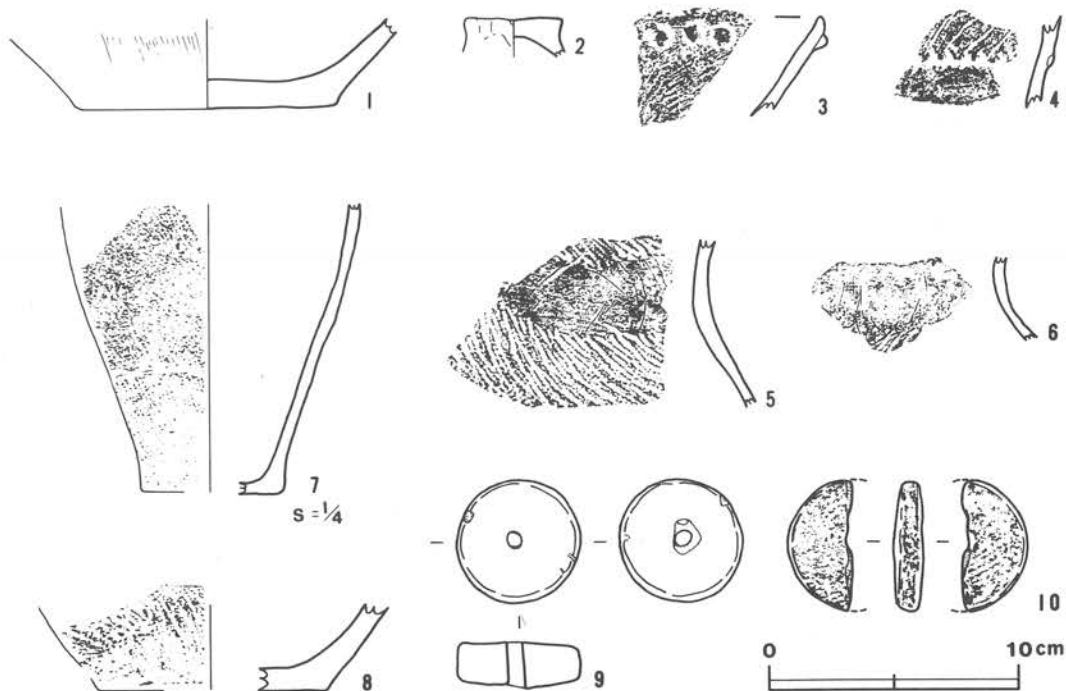
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径22~35cmの円形を呈し、深さは53~73cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は正方形となる。P₅は長径25cm、短径20cmの楕円形を呈し、深さ34cmの出入口施設に伴うピットと思われ、北西方向へ斜めに掘り込んでいる。

炉 長軸線上の中央からやや北西壁寄りに検出されている。平面形は長径100cm、短径62cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け、赤変硬化している。

覆土 黒褐色土・暗褐色土・褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 南西壁付近の覆土下・中層を中心に弥生式土器片(壺1, 蓋1), 弥生式土器細片(138点)が出土している。その他、流れ込みと思われる土師器細片(70点)が出土している。1の底部片は中央から東寄りの覆土中層から、2の蓋は南コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。9の紡錘車は西コーナー付近の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



第146図 第91号住居跡出土遺物実測・拓影図

第91号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第146図 1	壺 弥生式土器	B (3.6) C 10.5	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面は無文で、ハケ目調整後、横ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい黄橙色 普通	P 637 10% 中央から東寄り覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第146図 2	蓋 弥生式土器	B (1.4) F 3.9	つまみ部片。つまみは僅かに外反し、中央部が凹みを持つ円形を呈している。外面は無文で粗くヘラ削りされている。	砂粒・長石 におい黄橙色 普通	P638 10% 南コーナー付近床面

第146図3～8は、第91号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は高坏の口縁部片であり、口縁に沿って瘤がほぼ等間隔に貼られ、外面には細目の附加条1種（附加2条）が施されている。4は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。頸部は無文帯としている。5・6は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7・8は底部から胴部にかけての破片である。7は長胴を呈し、単節縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。8の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第146図 9	紡錘車	5.1	5.0	1.9	7.0	(53.3)	98	床面	D P 77
10	紡錘車	5.4	[5.4]	1.3	—	(16.7)	50	覆土	D P 78

第92号住居跡（第147図）

位置 B地区南東部，F8h₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 東コーナーは調査区外へのびているが、長軸4.20m，短軸4.20mの隅丸方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-60°-W。

壁 壁高60～63cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺はよく踏み固められ硬い。

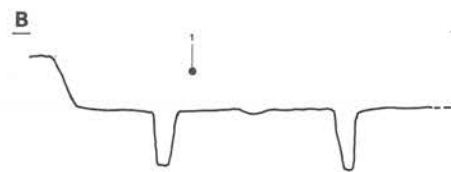
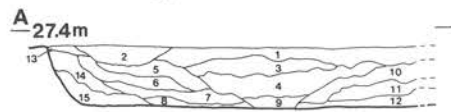
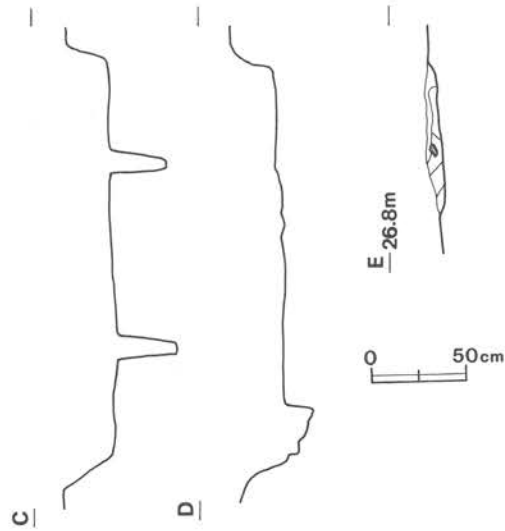
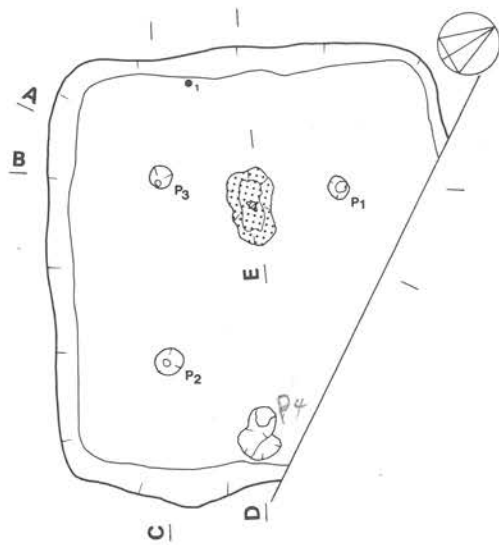
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₃は径25～30cmの円形を呈し、深さは56～67cmの主柱穴である。東側の主柱穴は未検出であるが、主柱穴を結んだ線は方形となるものと思われる。P₄は長径56cm，短径30cmの不定形を呈し、深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径85cm，短径40cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。中央には炉石が置かれた状態で出土している。炉床は赤変硬化している。

覆土 黒褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 壁周辺の覆土中・上層から弥生式土器片（広口壺1），弥生式土器細片（104点）が出土している。1の口縁部片は北西壁際の覆土上層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と思われる。



S I - 92 土層解説

- 1 黒色 黒色土粒子多量,炭化粒子少量,ローム粒子・焼土粒子微量。
- 2 黒褐色 黒色土粒子多量,炭化粒子少量,ローム粒子・焼土粒子微量。
- 3 黒色 黒色土粒子多量,炭化粒子少量,ローム粒子・焼土粒子微量。
- 4 黒褐色 黒色土多量,ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量。
- 5 黒褐色 黒色土多量,ローム粒子少量,ローム小ブロック・焼土粒子微量。

- 6 暗褐色 黒色土粒子中量,ローム小ブロック少量,ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 7 暗褐色 ローム粒子中量,ローム小ブロック・黒色土粒子少量,炭化粒子・焼土粒子微量。
- 8 褐色 ローム粒子多量,黒色土少量,炭化粒子・焼土粒子微量。
- 9 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量,黒色土粒子・焼土ブロック・焼土粒子少量。
- 10 暗褐色 黒色土粒子多量,ローム粒子中量,ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 11 褐色 ローム粒子多量,ローム小ブロック中量,黒色土粒子少量,炭化粒子・焼土粒子微量。
- 12 褐色 ローム粒子多量,黒色土粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 13 黒褐色 黒色土粒子多量,ローム粒子少量,炭化粒子・焼土粒子微量。
- 14 暗褐色 黒色土粒子多量,ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子・焼土粒子微量。
- 15 褐色 ローム粒子多量,ローム小ブロック中量,黒色土ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量。



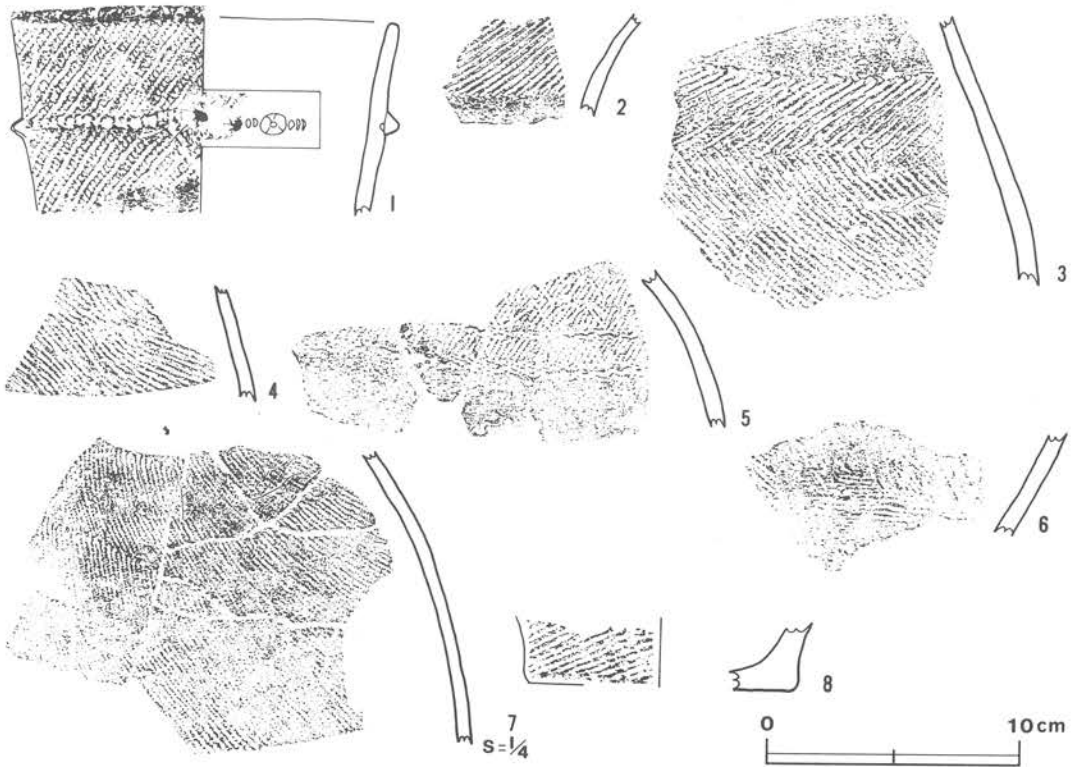
第147図 第92号住居跡実測図

第92号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	広口壺 弥生式土器	A [15.4] B (8.4)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁を呈し、下位に3個1組の瘤と刺突文が施されている。原体は附加条1種(附加2条)である。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P639 10% 北西壁際覆土土層

第148図2～8は、第92号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は頸部から胴部にかけての破片である。2・3は頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、3は羽状構成をとっている。4～7は胴部片である。5は胴部上位に結節文区画による単節縄文が施され、さらに沈線により連続山形文が施されている。結節文より下位

は無文である。6・7は縄文が施されているが、原形は6が直前段反撚り、7が単節である。8は平底を呈し、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。



第148図 第92号住居跡出土遺物実測・拓影図

第93号住居跡（第149図）

位置 B地区南東部、F7g₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.44m、短軸4.61mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-51°-W。

壁 壁高64~69cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

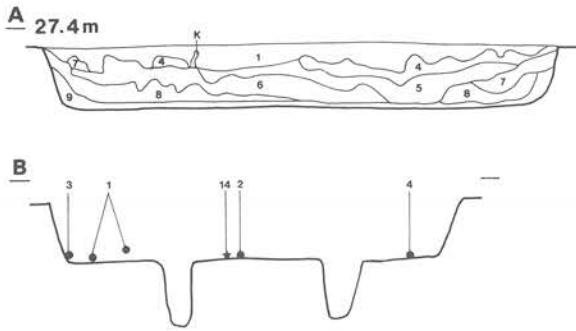
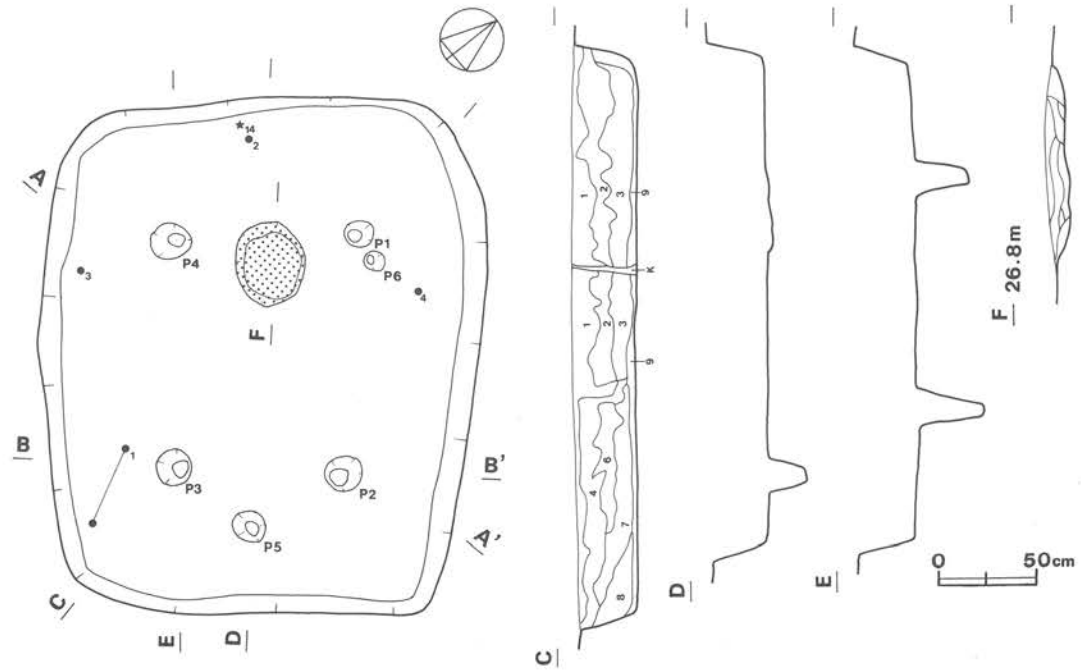
ピット 6か所（P₁~P₆）検出されている。P₁~P₄は径30~42cmのほぼ円形を呈し、深さ56~71cmの支柱穴である。P₅は補助柱穴と思われる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₆は径34cmの円形を呈し、深さ42cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径92cm、短径74cmの楕円形を呈し、床を13cm掘り込んでいる。炉床は中央部がよく焼け、赤変硬化している。

覆土 下層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土・明褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。上層は黒褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積である。

遺物 壁際の床面及び覆土下層から、弥生式土器片(広口壺3,台付甕1),弥生式土器細片(447点)が出土している。1の広口壺は南コーナー付近の覆土下層から,2の広口壺の上半部は北西壁中央際の床面から正位の状態ですれぞれ出土している。3の底部片は西コーナー付近の床面から出土している。14の紡錘車は北西壁中央際の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から,弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



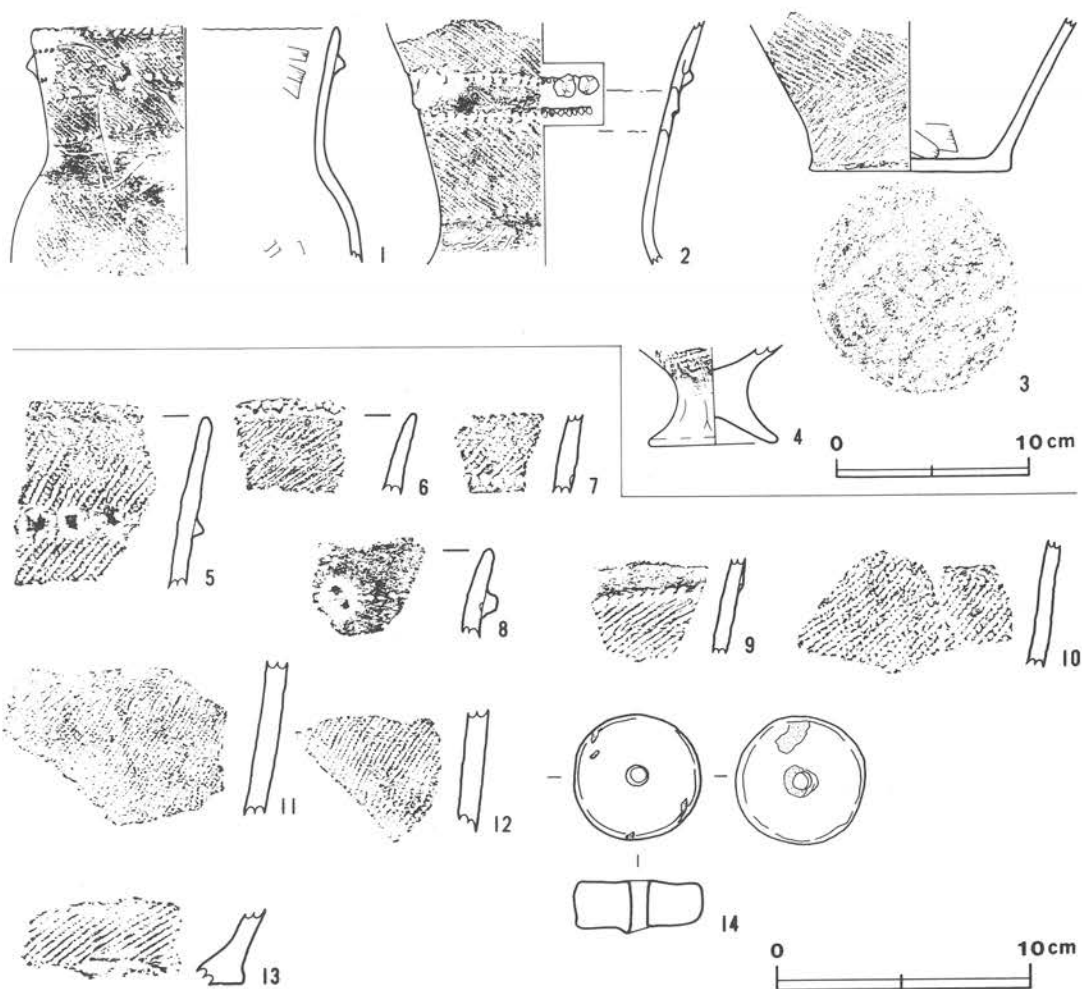
- S I-93 土層解説
- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
 - 2 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量。
 - 3 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 焼土粒子微量。
 - 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
 - 5 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
 - 6 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
 - 7 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量。
 - 8 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
 - 9 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子微量。

第149図 第93号住居跡実測図

第93号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	広口壺 弥生式土器	A [16.0] B (12.6)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部から頸部にかけて内彎して立ち上がっている。頸部から口縁部にかけては外反する。縄文施文の単口縁を呈し, 2列の刺突文が周回している。刺突文間には瘤が貼られている。頸部下半を無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 640 30% 南コーナー付近覆土下層 外面スス付着

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第150図 2	広口壺 弥生式土器	B (13.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。2段の複合口縁を呈し、1段目には縄文が施され、2段目は無文としている。口縁下端には縄文原体による刺突が施されている。2段目上位には2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P641 30% 北西壁中央際床面
3	広口壺 弥生式土器	B (8.3) C 11.1	胴下半部。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P642 20% 西コーナー付近床面
4	台付甕 弥生式土器	B (5.2) D 6.9 E 3.0	脚部から胴部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P643 20% 中央から北寄り覆土下層



第150図 第93号住居跡出土遺物実測・拓影図

第150図5～13は、第93号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～9は口縁部片である。5～7は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。5には3

個1組の瘤が貼られている。8・9は無文の複合口縁を呈し、口縁下端に縄文原体による刺突文が施されている。8は頸部を無文帯とし、9は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10～12は胴部片であり、10・11には附加条1種（附加2条）の、12は単節の縄文が施されている。13は張り出しを持つ底部片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第150図 14	紡錘車	5.1	5.0	2.0	8.0	63.9	100	床面	D P 79

第96号住居跡 (第151図)

位置 B地区南西部, F4j₁区を中心に確認されている。西側3分の2ほどは調査区外へのびている。

規模と平面形 長軸5.78m, 現存している短軸(1.62)mの隅丸方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-34°-W。

壁 壁高33~54cmで、外傾して立ち上がっている。

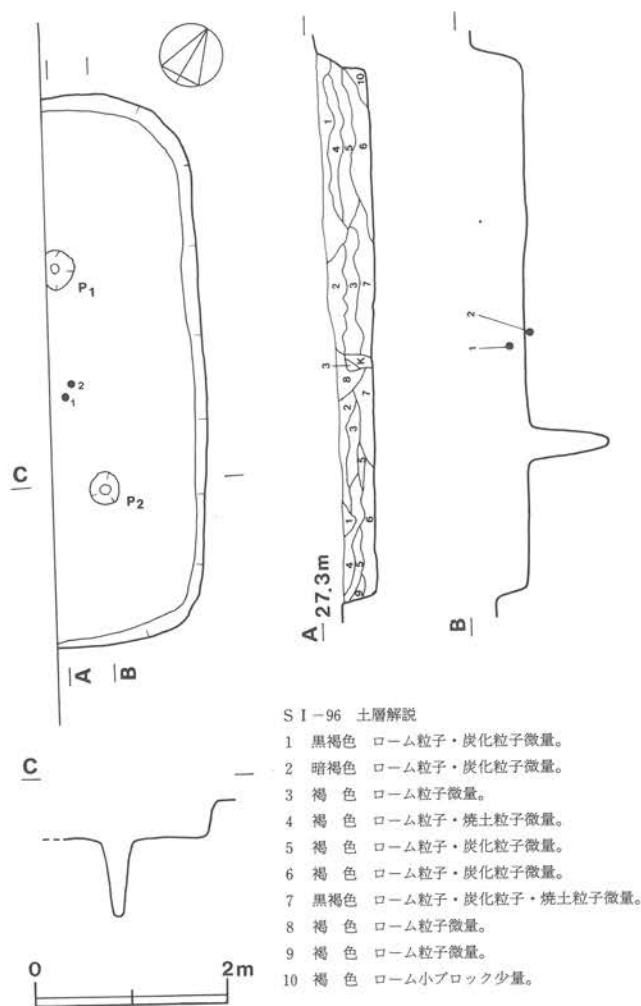
床 ほぼ平坦で、現存部はよく踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は径35~44cmの円形を呈し、深さは60~80cmの主柱穴である。他の主柱穴は調査区外に存在するものと思われる。

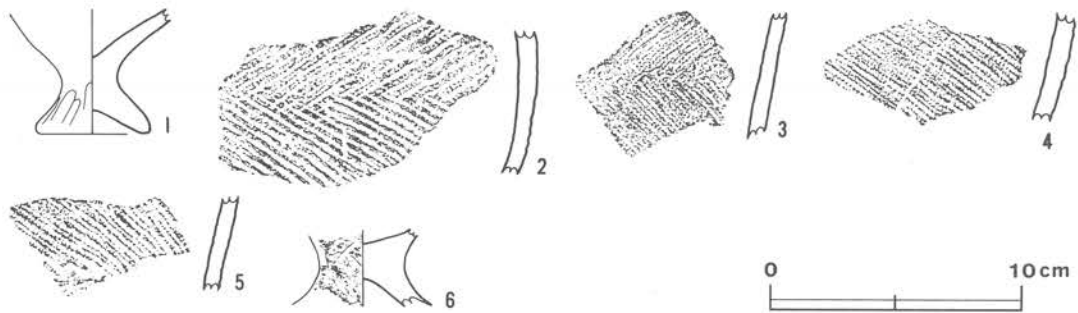
覆土 褐色土・黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土中層から弥生式土器片(高坏1), 弥生式土器細片(6点)が出土している。1の高坏は中央部の覆土中層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第151図 第96号住居跡実測図



第152図 第96号住居跡出土遺物実測・拓影図

第96号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	高坏 弥生式土器	B (4.6) D 4.5 E 2.3	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に大きく開き、坏部は外傾して立ち上がる。脚部外面は無文で軽くヘラナデされている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P670 40% 中央部覆土中層

第152図2～6は、第96号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～5は胴部片であり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。2・3・5は羽状構成をとっている。6は台付甕の脚部と思われる、「ラッパ」状に大きく開いている。

表2 原田北遺跡弥生時代住居跡一覽表

住居跡 番 号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模		床面	柱穴数	炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)						
1	B5j _s	N-33°-W	隅丸長方形	6.50 × 5.55	27~38	平坦	4	2	自然	弥生式土器片387,土師器片34,土製品3,石製品1	
3	B4h _s	N-55°-W	隅丸方形	5.54 × 5.32	30~49	平坦	6	1	自然	弥生式土器片1232,土師器片122,縄文式土器片5,土製品5,石製品1	
4	B4f _r	N-51°-W	隅丸方形	5.28 × 5.23	48~55	平坦	4	1	自然	弥生式土器片531,土師器片78,縄文式土器片2,石製品1,須惠器片2	
5	B4f _o	N-34°-W	不整長方形	7.90 × 6.12	40~56	平坦	4	1	自然	弥生式土器片930,土師器片62,須惠器片3,土製品5,石製品1	
6	B4c _s	N-5°-E	不整長方形	4.38 × 3.80	26~44	平坦	2	1	人為	弥生式土器片220,土師器片17,縄文式土器片2,土製品1	
7	B4d _s	N-69°-E	隅丸長方形	5.56 × 5.12	12~22	平坦	4	1	自然	弥生式土器片83,土師器片1,縄文式土器片12	
8	B6d _s	N-22°-W	隅丸方形	3.88 × 3.83	14~24	平坦	5	1	自然	弥生式土器片245,土師器片17,縄文式土器片1	
9	B4i _e	N-42°-W	不整隅丸方形	4.75 × 4.74	20~30	平坦	5	1	自然	弥生式土器片289,土師器片1,土製品1	
11	B4f _r	N-47°-W	隅丸方形	5.06 × 4.70	22~32	平坦	5	1	自然	弥生式土器片434,土師器片8,縄文式土器片11,石製品2	第10号住居跡と重複
12	B4f _r	N-30°-W	隅丸方形	4.75 × 4.62	17~28	平坦	6	1	自然	弥生式土器片93,土師器片3,縄文式土器片2	
13	B4d _s	N-26°-W	隅丸長方形	7.63 × 6.10	17~50	平坦	5	1	自然	弥生式土器片706,土師器片237,土製品2	
14	B4j ₂	N-83°-W	不整方形	5.05 × 4.80	7~45	平坦	4	1	自然	弥生式土器片198,土師器片7,金属製品1	火災住居跡
15	B4e _s	N-61°-E	楕円形	4.73 × 3.78	14~31	平坦	2	1	人為	弥生式土器片106,土師器片55	
16	B4e _s	N-32°-E	隅丸長方形	6.64 × 5.55	11~32	平坦	5	1	自然	弥生式土器片382,土師器片3,土製品2,石製品3	火災住居跡
18	B3j ₃	N-4°-W	不整長方形	5.50 × 4.50	28~50	平坦	5	1	自然	弥生式土器片109,土師器片390	
20	C2c _s	N-23°-W	隅丸長方形	4.10 × 3.65	20~32	平坦	3	1	自然	弥生式土器片104,土師器片102,土製品2,石製品1	
21	C2a _o	N-66°-E	隅丸方形	4.71 × 4.40	25~38	平坦	5	1	自然	弥生式土器片277,土師器片97,縄文式土器片6,石製品1	
22	C1j ₃	N-53°-W	隅丸方形	[4.80] × 4.45	43~75	平坦	3	1	自然	弥生式土器片166,土師器片579,縄文式土器片6,石製品1	一部調査区外
23	B4d _s	N-38°-W	不整隅丸方形	4.70 × 4.37	12~28	平坦	4	2	自然	弥生式土器片170,土師器片5,縄文式土器片2	
24	C4a _o	N-86°-W	不整長方形	4.20 × 3.72	10~33	平坦	3	1	自然	弥生式土器片31,石製品1	
25	B4j ₃	N-55°-E	隅丸長方形	3.38 × 2.54	8~24	平坦	1	1	自然	弥生式土器片28,土師器片3	
26	B4b _o	不明	不明	(2.45) × (2.15)	8~15	平坦			自然	弥生自然土片11,土師器片22	第17号住居跡と重複
27	H5a _s	N-67°-W	隅丸長方形	5.00 × 4.83	41~52	平坦	3	1	自然	弥生式土器片456,土師器片115,石製品1	一部調査区外
29	H5b _r	N-68°-E	隅丸方形	4.38 × 4.27	19~38	平坦	5	1	人為	弥生式土器片59,土師器片25,縄文式土器片1,土製品2,石製品2	火災住居跡
30	H4e _s	N-34°-W	隅丸長方形	4.76 × 4.27	24~34	平坦	2	1	自然	弥生式土器片64,土師器片3,土製品3,石製品1,須惠器片1	
31	H5h _r	N-14°-E	隅丸方形	4.55 × 4.49	40~56	平坦	5	2	人為	弥生式土器片77,石製品1	
32	H5h _r	N-70°-E	隅丸長方形	3.68 × 3.07	14~25	平坦	4	1	自然	弥生式土器片111,土師器片1	
33	H4e _s	N-22°-W	隅丸方形	4.73 × 4.40	21~45	平坦	4	1	自然	弥生式土器片299,土師器片116,縄文式土器片6,土製品1	
34	H4h _s	N-31°-W	隅丸長方形	6.38 × 5.38	14~30	平坦	6	1	自然	弥生式土器片158,土師器片39,縄文式土器片12,石製品1	
35	H4g _e	N-67°-E	隅丸方形	3.95 × 3.70	14~25	平坦	6	1	自然	弥生式土器片158,縄文式土器片1	火災住居跡
36	H4d _s	N-25°-W	隅丸方形	4.29 × 4.05	16~39	平坦	4	2	自然	弥生式土器片130,土師器片2,土製品3,石製品2	
37	B6b _s	N-55°-W	隅丸長方形	4.02 × 3.27	14~22	平坦	3	1	人為	弥生式土器片42,土師器片8,土製品1	
38	B6d _s	N-41°-W	隅丸長方形	(4.25) × (2.24)	17~21	平坦	2	2	人為	弥生式土器片49,土師器片8,土製品1	一部調査区外,第4号溝と重複
39	B6d _r	N-54°-W	方 形	4.36 × 4.30	10~18	平坦	5	2	人為	弥生式土器片138,土師器片41,縄文式土器片4	一部調査区外
40	E8b _r	[N-52°-W]	不 明	(2.88) × (2.70)	10~18	平坦	1	1	自然	弥生式土器片19,土師器片9	一部攪乱

住居跡 番 号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模		床面	柱穴数	炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)						
41	C6a0	N-51°-W	隅丸長方形	5.21 × 4.22	20~52	平坦	3	1	人為	弥生式土器片519,土師器片22	一部攪乱
42	E8a1	N-36°-W	長 方 形	5.93 × 4.66	4~32	平坦	4	1	自然	弥生式土器片103,土師器片2	一部攪乱
43	E8a4	N-66°-W	長 方 形	5.49 × 4.35	12~38	平坦	4	1	自然	弥生式土器片97,土師器片5,土製品2	
47	G2a2	N-49°-W	長 方 形	4.73 × 3.91	42~48	平坦	3	1	人為	弥生式土器片8,土師器片138,縄文式土器片1,土製品1	一部攪乱
50	G2g5	N-61°-W	長 方 形	(5.25) × 6.96	30~43	平坦	2	1	人為	弥生式土器片147,土師器片504	第49,94号住居跡と重複
56	F4j3	N-22°-W	隅丸長方形	3.95 × 3.30	23~32	平坦	1	1	人為	弥生式土器片144,土師器片25	
59	G3d4	不 明	不 明	(2.80) × (0.70)	15~25				自然	弥生式土器片18,土師器片80	一部調査区外,第58住居跡と重複
62	F4h1	N-42°-W	隅丸長方形	[4.36] × 4.25	31~32	平坦	5	1	自然	弥生式土器片90,土師器片75,石製品1,金属製品1	第60号住居跡と重複
63	F4a3	N-46°-W	隅丸長方形	5.68 × 4.85	40~55	平坦	5	1	自然	弥生式土器片361,土師器片173,縄文式土器片4,土製品1,石製品1	
67	F4d0	N-23°-E	隅丸長方形	7.65 × 6.12	42~48	平坦	6	1	自然	弥生式土器片490,土師器片136,縄文式土器片3,土製品1	一部攪乱
68	F5c1	N-39°-E	隅丸長方形	7.03 × 5.96	17~33	平坦	6	1	自然	弥生式土器片309,土師器片20,縄文式土器片5,土製品1	一部攪乱
70	F5a1	N-9°-W	隅丸長方形	7.45 × 6.25	30~40	平坦	5	1	人為	弥生式土器片286,土師器片71,縄文式土器片12	
71	E4h0	N-8°-E	隅丸長方形	6.25 × 5.24	26~42	平坦	5	1	自然	弥生式土器片667,土師器片159,土製品1	
72	E4g8	N-28°-E	隅丸長方形	4.70 × 3.34	22~35	平坦	4	1	人為	弥生式土器片269,土師器片35,土製品4	
73	E5g3	N-36°-E	長 方 形	5.12 × 4.64	50~54	平坦	6	1	人為	弥生式土器片455,土師器片46,土製品2	
75	E5j1	N-26°-W	隅丸長方形	5.33 × 4.88	42~51	平坦	6	2	自然	弥生式土器片352,土師器片25,縄文式土器片1	
76	E5c0	N-35°-W	隅丸長方形	(4.22) × 5.75	42~52	平坦	4	1	人為	弥生式土器片584,土師器片31,縄文式土器片4,土製品1,石製品2	一部調査区外
77	E6d2	N-7°-E	隅丸長方形	6.47 × 5.19	37~49	平坦	6	1	人為	弥生式土器片303,縄文式土器片7,土製品2	火災住居跡
78	E6f1	N-32°-W	隅丸長方形	5.03 × 4.62	46~55	平坦	5	1	自然	弥生式土器片501,土師器片3,石製品2	
79	E6h1	N-8°-E	隅丸長方形	7.97 × 7.44	42~52	平坦	6	1	自然	弥生式土器片543,土師器片16,縄文式土器片1,土製品1	
80	E6g0	N-30°-W	方 形	4.30 × 3.96	29~35	平坦	5	1	自然	弥生式土器片412,土師器片23,土製品1	
81	E6c0	N-12°-E	隅丸長方形	4.98 × 4.05	43~56	平坦	4	1	自然	弥生式土器片260,土師器片23,土製品2,石製品2	
82	E7g1	N-8°-E	隅丸長方形	5.38 × 4.65	36~47	平坦	8	2	自然	弥生式土器片57,土師器片9,埴輪片1	
84	G6d1	N-58°-W	隅丸長方形	5.05 × 4.40	38~47	平坦	5	2	自然	弥生式土器片71,土師器片43,土製品1,石製品1	
86	G6a0	N-42°-W	隅丸長方形	4.86 × 4.28	48~55	平坦	5	1	自然	弥生式土器片241,土師器片3,縄文式土器片3,土製品1	
87	F7i1	N-30°-W	隅丸長方形	4.58 × 3.91	27~34	平坦	5	1	自然	弥生式土器片356,土製品2	
89	F7c1	N-51°-W	方 形	5.08 × 5.04	41~51	平坦	5	1	人為	弥生式土器片256,土師器片20,土製品3	
90	F7a0	N-38°-W	長 方 形	4.92 × (2.34)	55~63	平坦	7	1	自然	弥生式土器片50,土師器片1,縄文式土器片2	一部調査区外
91	F7c0	N-63°-W	隅丸長方形	4.25 × 4.04	50~63	平坦	5	1	自然	弥生式土器片140,土師器片70,土製品2	
92	F8h1	N-60°-W	隅丸長方形	4.20 × 4.20	60~63	平坦	4	1	自然	弥生式土器片105,土師器片13,埴輪片5	一部調査区外
93	F7g0	N-51°-W	隅丸長方形	5.44 × 4.61	64~69	平坦	6	1	自然	弥生式土器片451,土師器片5,縄文式土器片4,土製品1,埴輪片5	
96	F4j1	N-34°-W	隅丸長方形	5.78 × (1.62)	33~54	平坦	2	0	自然	弥生式土器片7	一部調査区外

(2) 古墳時代の竪穴住居跡

第2号住居跡 (第153図)

位置 D地区東部, B4j₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.84m, 短軸7.35mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-35°-W。

壁 壁高は12~30cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 14か所(P₁~P₁₄)検出されている。P₁~P₄は, 径22~32cmの円形を呈し, 深さ47~62cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅・P₈は, 径25~26cmの円形を呈し, 深さ43~50cmで, 規模や配列から補助柱穴と考えられる。P₆・P₇・P₉~P₁₄は, 径20~30cmの円形を呈し, 深さ39~63cmで, 性格は不明である。

炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は, 長軸線上の中央から北西寄り, 平面形は長径104cm, 短径72cmの不定形を呈し, 床を約11cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。炉₂は, 炉₁の東側から検出され, 平面形は長径94cm, 短径76cmの不定形を呈し, 床を約11cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。炉₁と炉₂は, 炉床が隣接して構築されている。

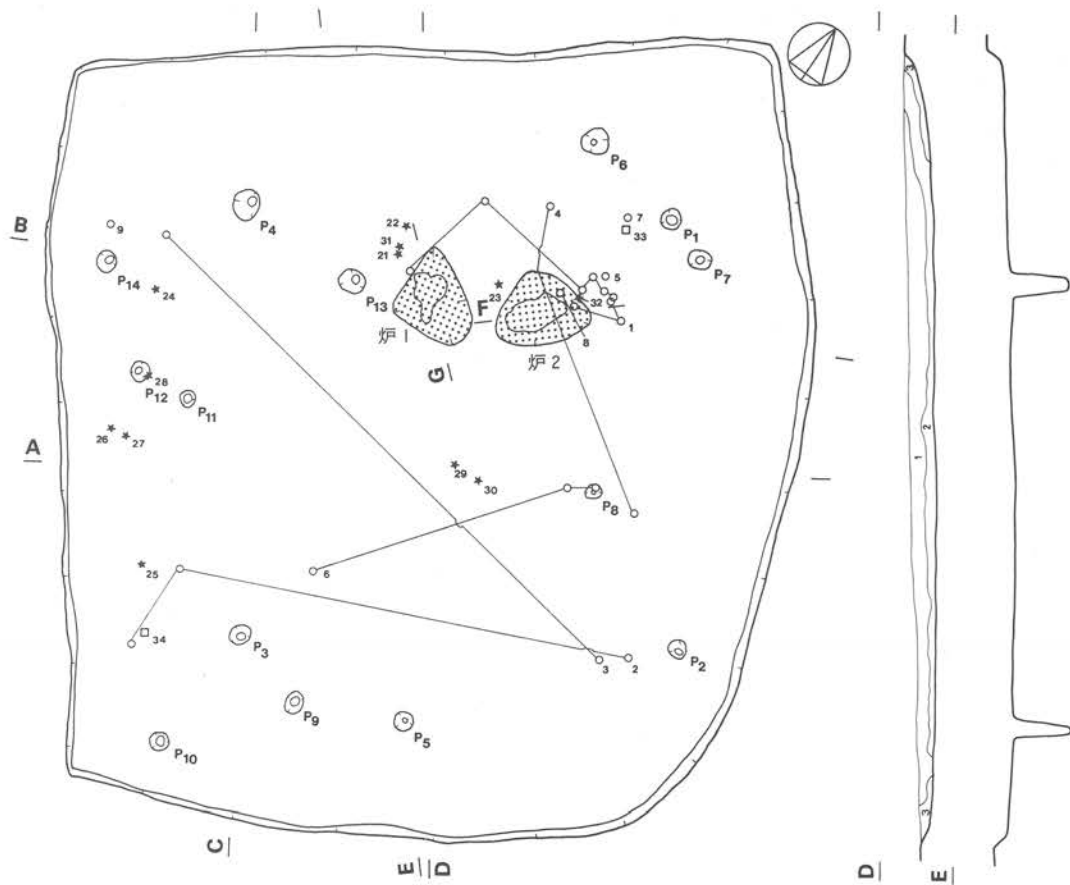
覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土の中層や上層から土師器片(甕6, 埴1, 高坏2), 土師器細片(2226点), 弥生式土器細片(71点)及び土製品・石器が少量出土している。7の埴は北部中央の覆土上層から正位の状態で, 8の高坏は北部中央の覆土上層から横位の状態で, 9の高坏は西コーナー付近の覆土下層から横位の状態で, それぞれ出土している。21~23・31・32の球状土錘は北部の床面及び覆土から, 26~28の球状土錘は南西壁中央部付近の床面から, それぞれ散らばって出土している。33の磨石は北部の覆土上層から, 34の砥石は南部の床面から出土している。

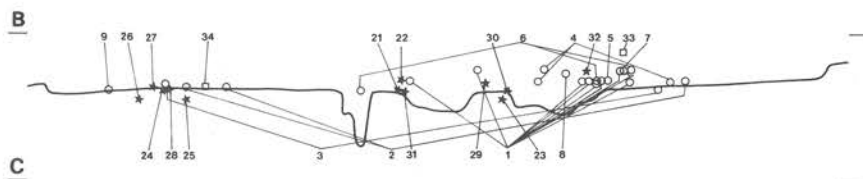
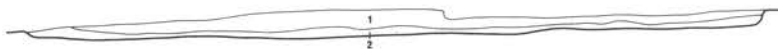
所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	甕 土師器	B (18.9) C 7.9	胴部下半の破片。平底。胴部は球形状を呈する。	胴部外面へラナデ。底部木葉痕有り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P15 40% 北部中央覆土中層
2	甕 土師器	A [16.4] B (7.5)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内・外面へラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P18 10% 東コーナー付近覆土下層
3	甕 土師器	A 17.0 B (3.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P19 5% 東コーナー付近覆土下層



A 27.0m



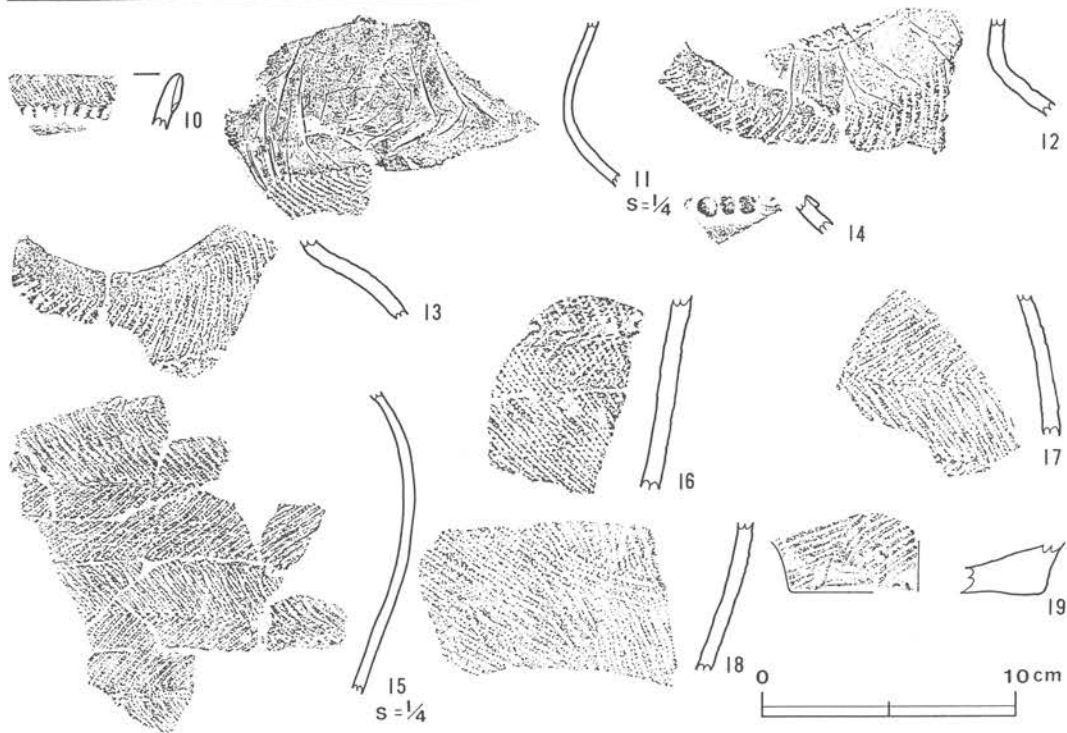
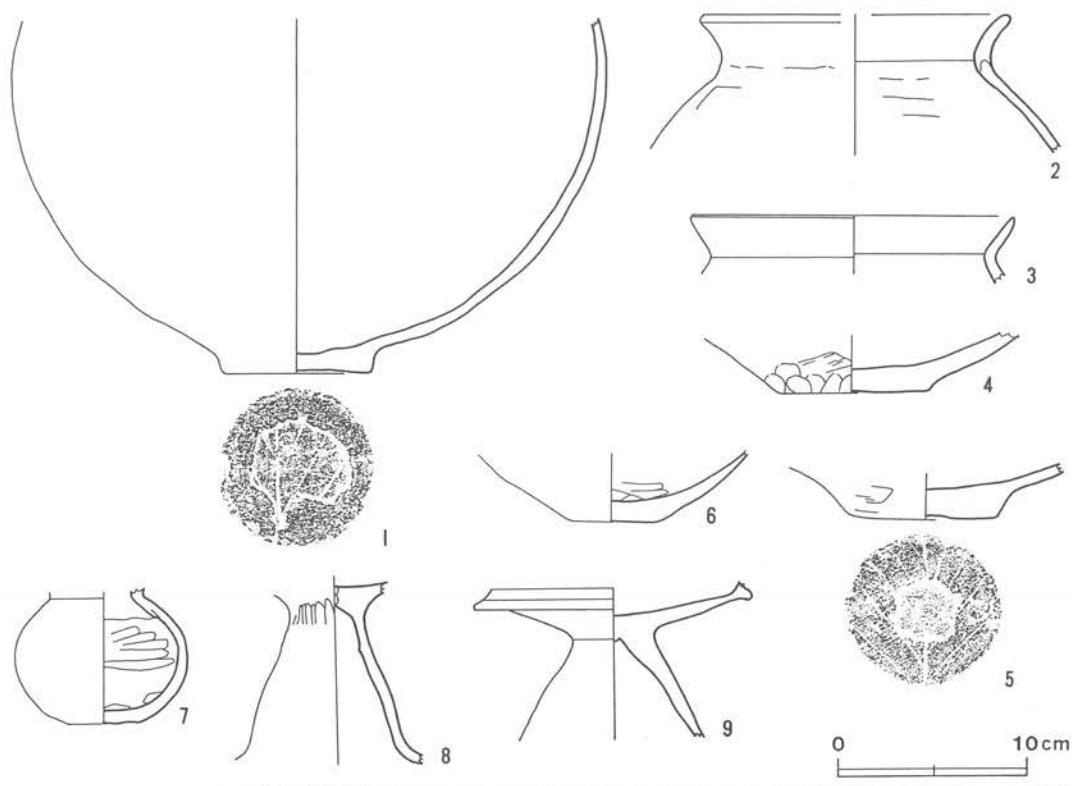
F 26.6m



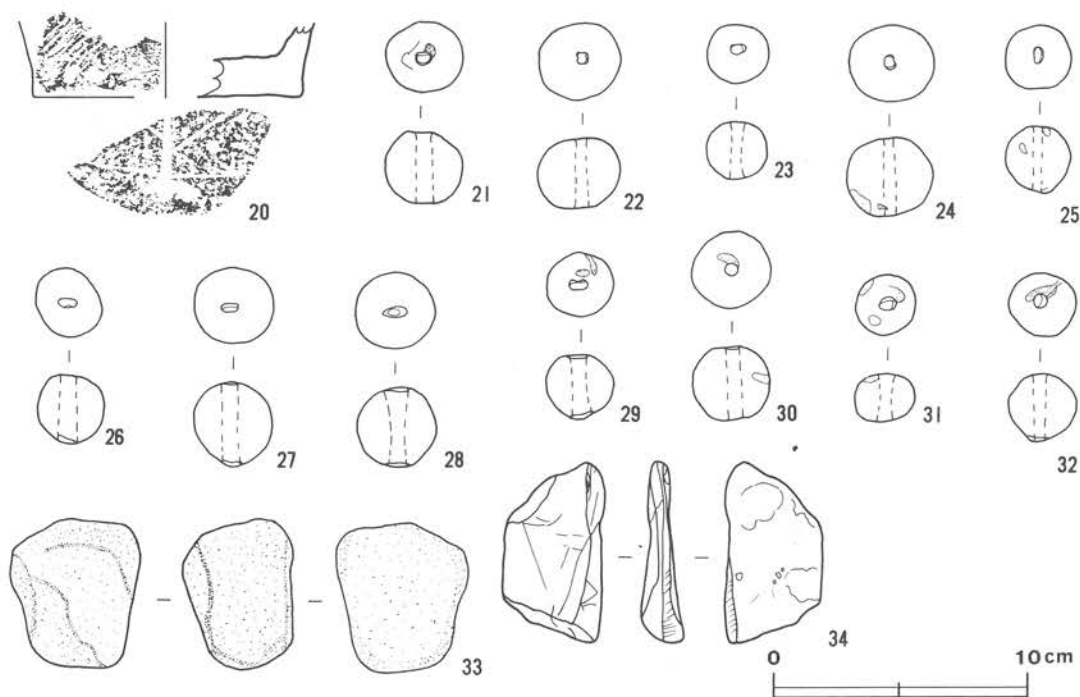
- SI-2 土層解説
- 1 暗褐色 暗褐色土粒子多量, ◻-ム粒子微量。
 - 2 褐色 ◻-ム粒子中量。
 - 3 褐色 ◻-ム粒子多量。



第153図 第2号住居跡実測図



第154图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第155図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 4	甕 土師器	B (3.0) C 7.9	底部片。平底。	底部外面指頭による圧痕有り。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P20 20% 北部中央覆土中層
5	甕 土師器	B (2.5) C 7.9	底部片。突出した平底。	底部木葉痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P21 10% 北部中央覆土上層
6	甕 土師器	B (3.5) C 4.7	底部片。平底。	底部内面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P22 10% 中央部東寄り覆土下層
7	埴 土師器	B (7.2) C 3.8	坏部欠損。胴部は偏平な球形状を呈する。	胴部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P17 70% 北部中央覆土上層
8	高坏 土師器	B (9.6) E (8.5)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部上位ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P23 40% 北部中央覆土上層
9	高坏 土師器	B (8.2) E (5.4)	坏部上半欠損。脚部は円筒状を呈する。坏部は底部に周縁が突き出ている。	坏部内・外面摩擦著しい。脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P16 80% 西コーナー付近覆土下層

第154・155図の10～20は第2号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は口縁部片で、複合口縁を呈し、折り返し部の外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、その下位には縄文原体による押圧が施されている。11～13は頸部から胴部上位にかけての破片で、頸部

は無文帯で胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。14は頸部下位の破片で、無文帯に粘土粒が貼付されている。15～18は胴部片、19・20は底部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。20は底部に木葉痕がある。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第155図 21	球状土錘	2.9	3.1	2.9	7.0	23.4	100	北部覆土下層	DP 4
22	球状土錘	2.9	3.3	3.1	5.0	28.9	100	北部覆土中層	DP 5
23	球状土錘	2.4	2.5	2.4	6.5	13.2	100	北部床面	DP 6
24	球状土錘	3.2	3.4	3.1	4.5	31.8	100	西部覆土中層	DP 7
25	球状土錘	2.7	2.6	2.5	3.5	18.0	100	南部覆土下層	DP 8
26	球状土錘	2.8	2.7	2.2	8.0	19.0	100	南西壁中央部付近床面	DP 9
27	球状土錘	3.4	3.2	3.1	7.0	31.6	100	南西壁中央部付近床面	DP 10
28	球状土錘	3.3	3.2	3.1	10.0	28.1	100	南西壁中央部付近床面	DP 11
29	球状土錘	2.7	2.7	2.1	8.5	16.1	100	中央部覆土中層	DP 12
30	球状土錘	3.0	3.2	3.2	6.0	27.7	100	中央部覆土下層	DP 13
31	球状土錘	1.9	2.5	2.5	7.0	11.0	100	北部覆土下層	DP 14
32	球状土錘	2.8	2.8	2.6	6.0	15.3	100	北部覆土中層	DP 15

図版番号	器種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第155図 33	磨 石	5.7	5.2	4.5	178.0	花崗岩	北部覆土上層	Q 2
34	砥 石	7.2	4.1	1.8	43.6	頁 岩	南部床面	Q 3

第10号住居跡（第156図）

位置 D地区東部，B4g₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.98m，短軸5.44mの方形を呈している。

長軸方向 N-39°-W。

壁 壁高は4～10cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は，径20cm～63cmの円形を呈し，深さ42～52cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 4か所（炉₁～炉₄）検出されている。炉₁は，長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径128cm，短径82cmの楕円形を呈し，床を約12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。炉₂は，中央から東寄りに検出されている。平面形は長径65cm，短径55cmの楕円形で，床を9cm掘り込んだ地床炉である。炉₃は，中央部付近から検出されている。平面形は，長径53cm，短径44cmの楕円形で，床を13cm掘り込んだ地床炉である。炉₄は，炉₃の西側に隣接して検出されている。平面形は長径54cm，短径43cmの楕円形で，床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉₂・炉₃のいずれも，炉床は熱を受けて赤変硬化している。

覆土 褐色土・にぶい褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

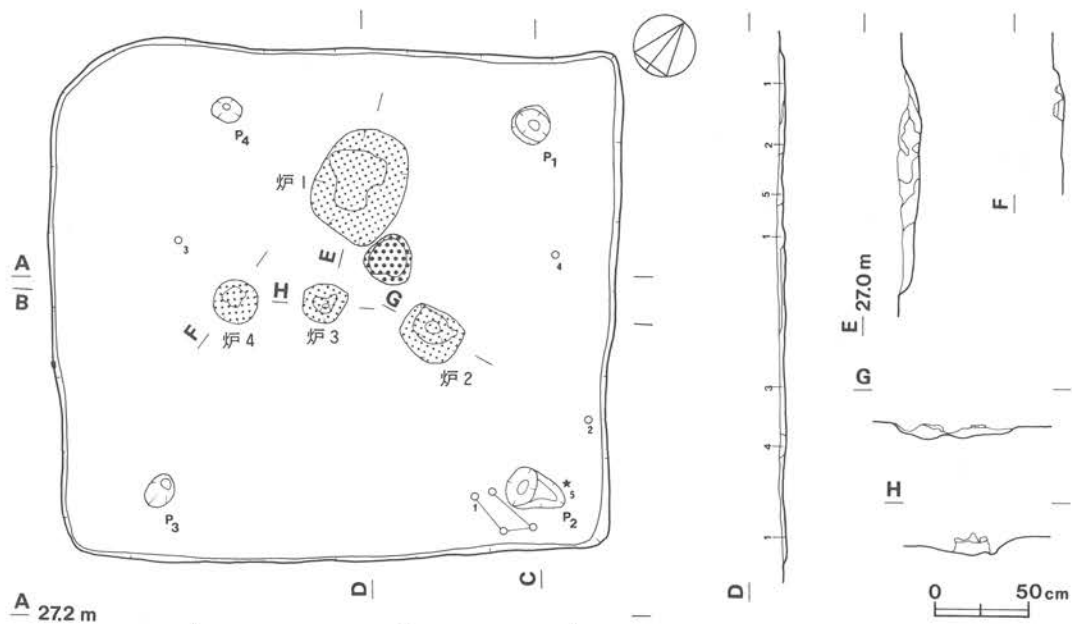
遺物 住居跡全域の床面や覆土の下・中層から土師器片(甕1, 壺1, 高坏2), 土師器細片(389点), 弥生式土器細片(26点)及び土製品がごく少量出土している。特に, 東コーナー付近及び北西部の炉付近に集中して出土している。1の甕は東コーナー付近の覆土下層から散らばって, 2の甕は東コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で, 3の高坏は西部南寄りの床面からつぶれた状態で, 4の高坏は北東壁中央部付近の覆土下層から逆位の状態で, それぞれ出土している。5の球状土錘は, 東コーナー付近の覆土下層から出土している。その他, 炉₁の南東側の床面からは, 長径8cm, 短径5cmの不整楕円形を呈する焼土ブロックが検出されている。

所見 本跡は, 重複関係から第11号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	甕 土師器	A 18.0 B (20.6)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は球形状を呈し, 口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P62 30% 東コーナー付近覆土下層
2	壺 土師器	A [20.1] B (5.0)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は複合口縁で, 頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P63 5% 東コーナー付近覆土下層
3	高坏 土師器	A [21.8] B (11.9) E (4.8)	脚部下半欠損。脚部は円筒状を呈する。坏部は底部に周縁が突き出ており, 口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P64 60% 西部南寄り床面
4	高坏 土師器	A [18.4] B (6.6)	坏部片。坏部は外傾気味に立ち上がり, 口縁部で外上方に開く。	坏部外面ナデ, 内面摩滅が著しい。	砂粒・長石・スコリア 赤色 普通	P65 25% 北東壁中央部付近覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第157図 5	球状土錘	2.8	2.9	2.3	7.0	11.7	100	東コーナー付近覆土下層	D P28



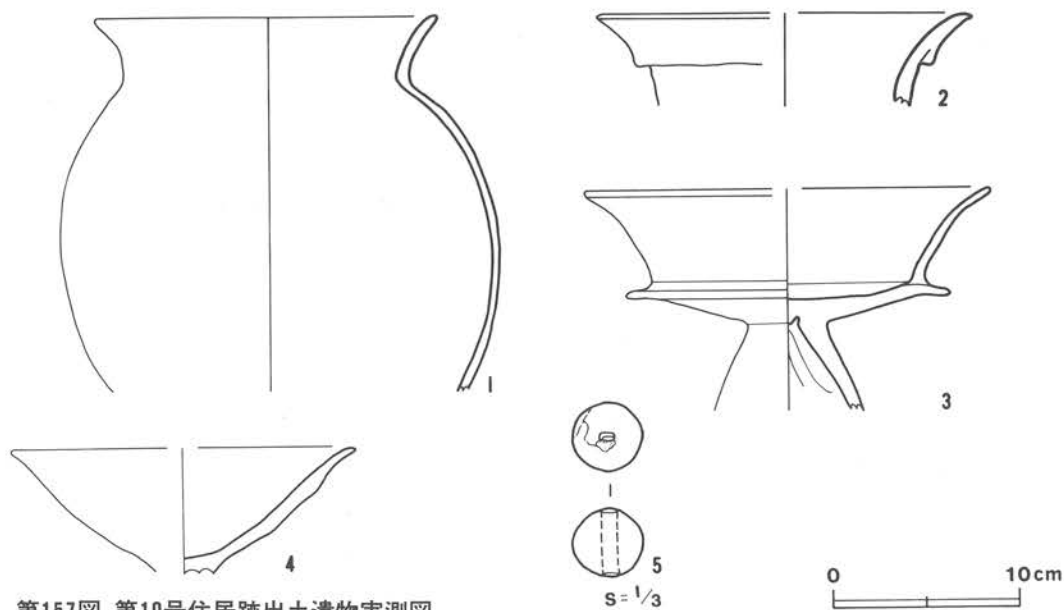
A 27.2 m

S I-10 土層解説

- 1 褐色 褐色土粒子中量, ローム粒子少量。
- 2 にぶい褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 暗褐色土粒子多量, 炭化物少量。
- 4 褐色 褐色土粒子中量, ローム粒子少量。
- 5 褐色 褐色土粒子中量, ローム粒子・焼土中ブロック少量。

0 2 m

第156図 第10号住居跡実測図



第157図 第10号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡 (第158図)

位置 D地区東部, B4b6区を中心に確認されているが, 東部は, 調査区外に延びている。

重複関係 本跡の西部は, 第26号住居跡の東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸7.95m, 短軸〔7.80〕mの不整形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-15°-E。

壁 壁高は9~17cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり, 炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁は, 径52cm~62cmの楕円形を呈し, 深さ47cmで, 規模や位置等から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は第26号住居跡と重複したり, 東部が調査区外のため検出されない。その他, P₂・P₃は径22~24cmの円形を呈し, 深さ52cmで規模や位置等から第26号住居跡に伴うものであると思われる。

炉 長軸線上の中央よりやや南寄りに炉₁が検出されている。平面形は, 長径70cm, 短径48cmの楕円形を呈し, 床を約10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。その他, 北東部に検出されている炉₂は, 平面形が長径53cm, 短径51cmの円形を呈し, 床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉床はよく熱を受け, 赤変硬化している。位置等から第26号住居跡に伴うものであると思われる。

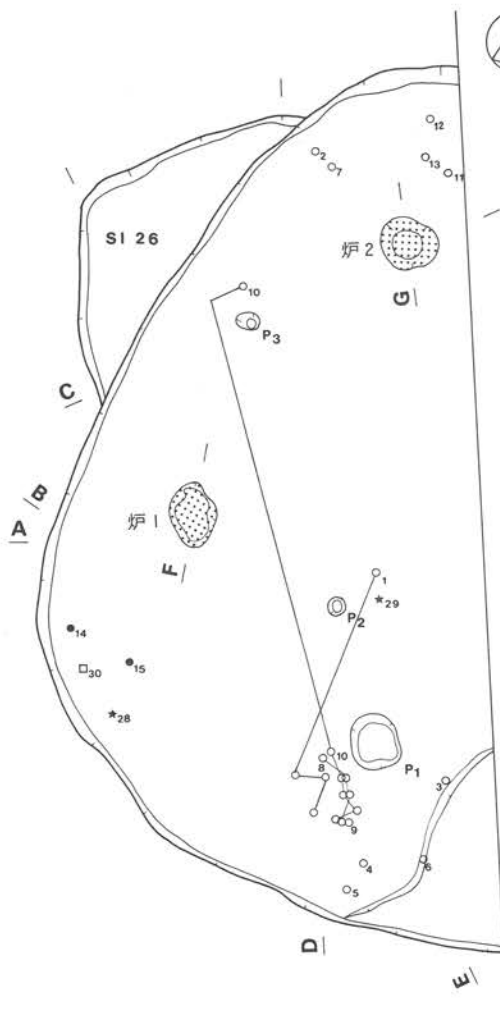
覆土 褐色土・黒褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土の下・中層から土師器片(甕3, 埴3, 高坏7), 土師器細片(395点), 須恵器細片(4点), 及び土製品・石製品が極少量出土している。その他, 流れ込みと思われる弥生式土器片(壺2), 弥生式土器細片(409点)が出土している。1の甕, 8・9・10の高坏は, 南壁中央部付近の覆土下層からつぶれた状態で, 2の甕及び7の高坏は, 北西コーナー付近の覆土中層及び下層からつぶれた状態で, それぞれ出土している。4・5の埴は, 隣接して南壁中央部付近の覆土下層から横位の状態で, それぞれ出土している。28の紡錘車は南西コーナー付近の床面から, 29の紡錘車は中央部からやや南寄りの床面から, 30の敲石は南西コーナー付近の床面から, それぞれ出土している。その他, 流れ込みと思われる14・15の壺は, 南西コーナー付近の覆土から出土している。

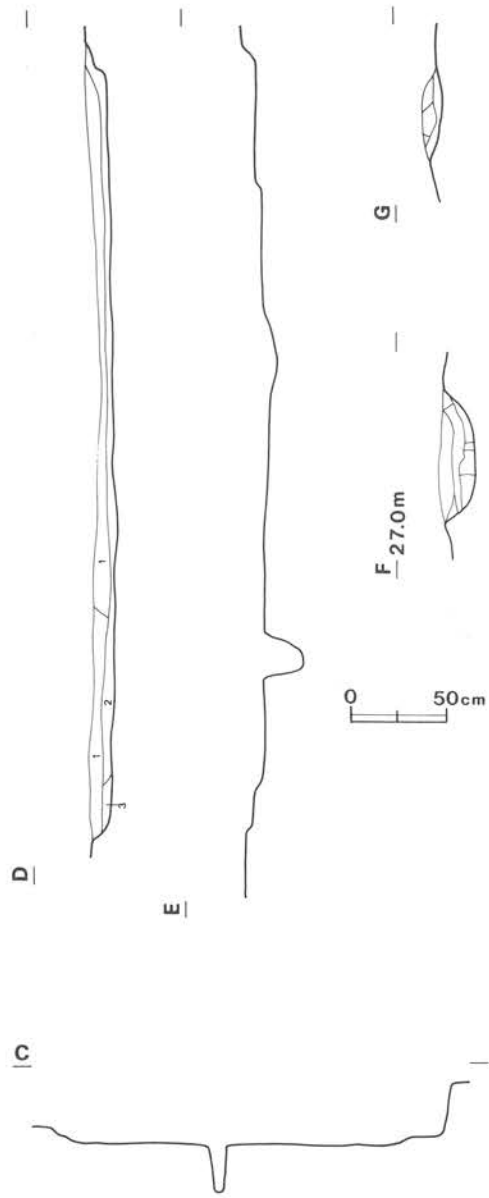
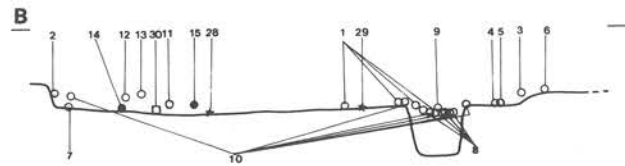
所見 本跡は, 重複関係から第26号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	甕 土師器	A 16.9 B 25.1 C 5.0	平底。胴部は球形状を呈し, 口縁部は頸部から外反して 立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色 普通	P97 85% 南壁中央部付近覆土下層



A 27.6 m

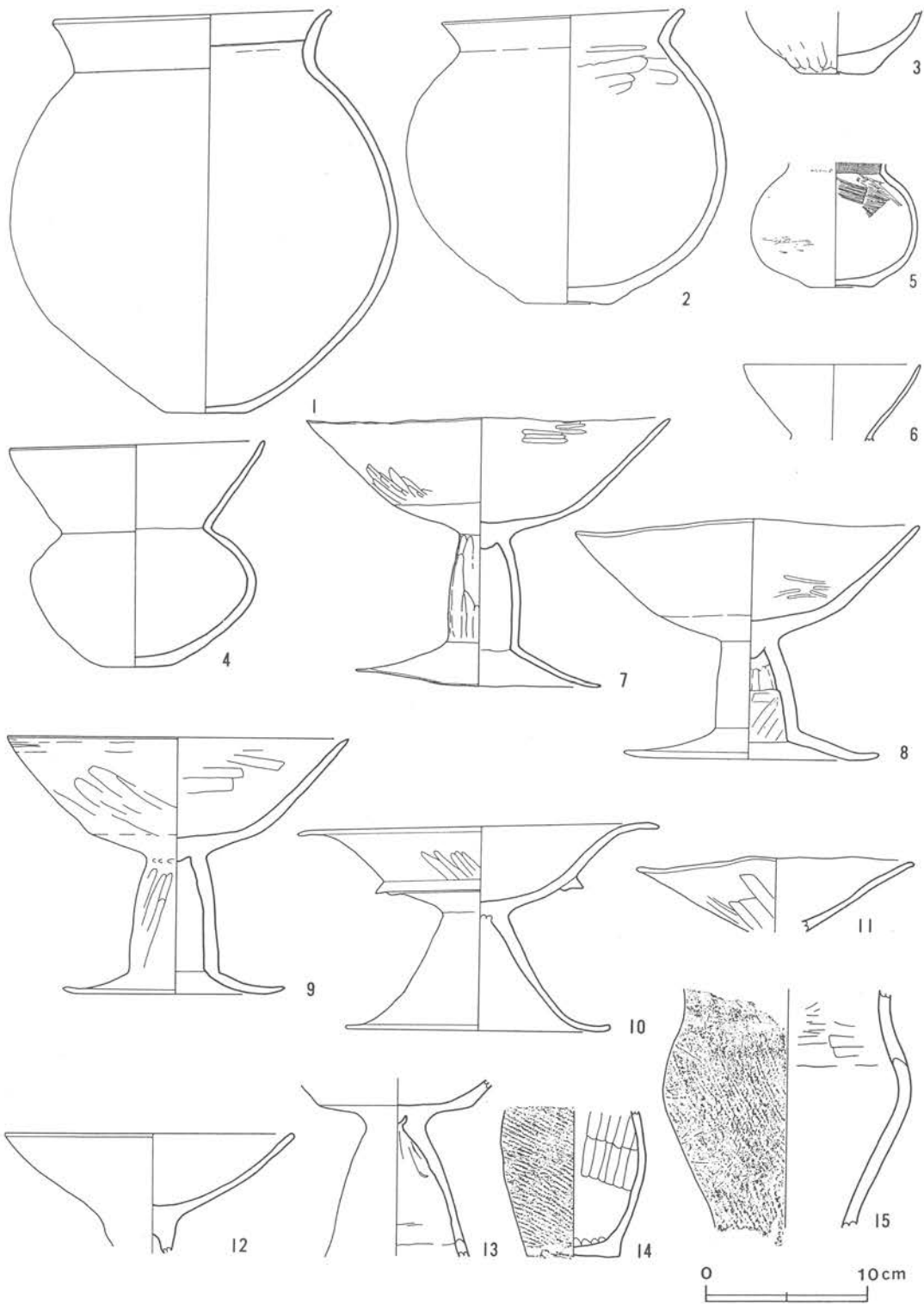


SI-17 土層解説

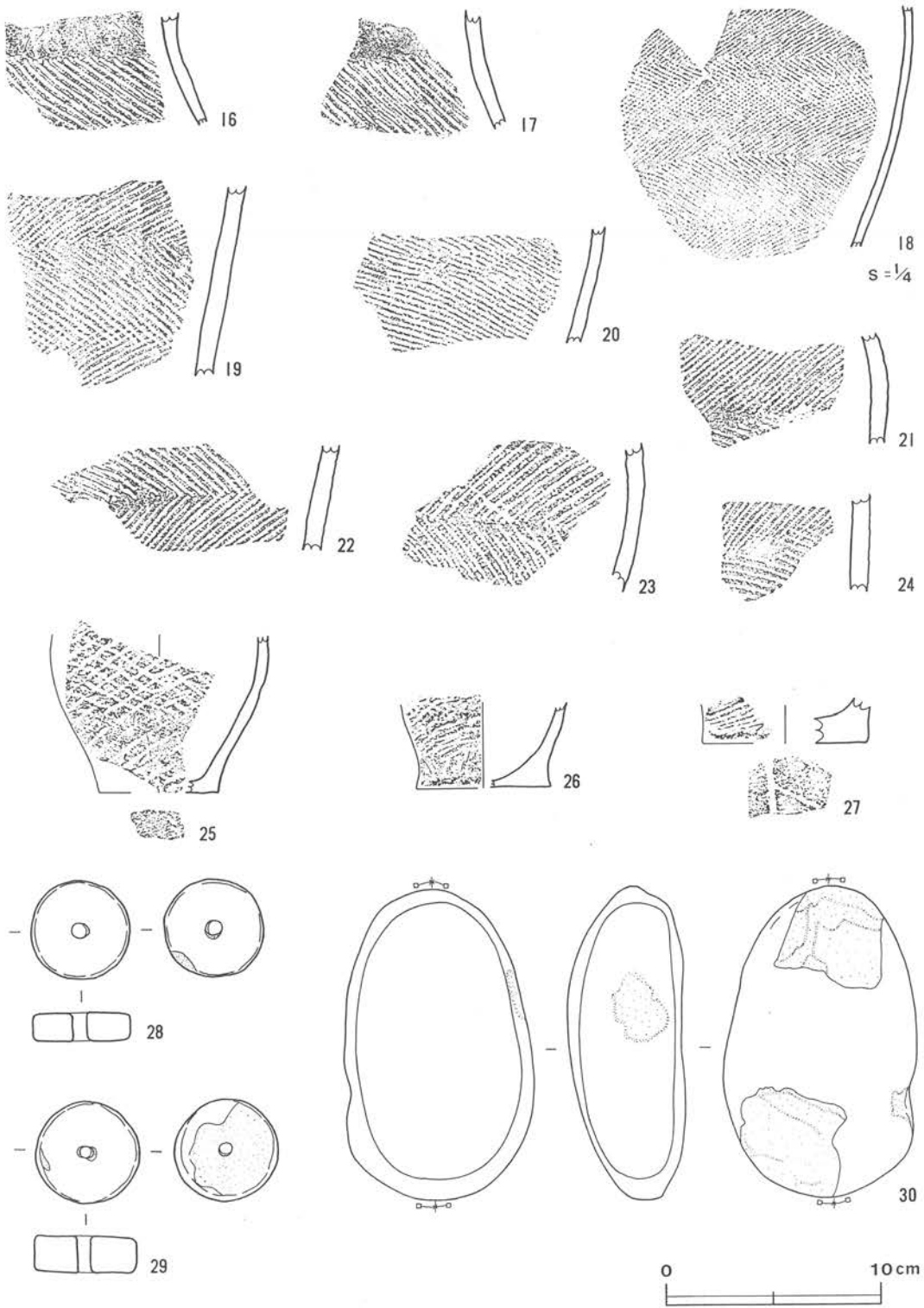
- 1 褐色 ローム粒子中量, 褐色土粒子少量, 焼土炭化物微量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, 褐色土粒子少量, 焼土粒子微量。
- 3 濃い褐色 ローム粒子多量。



第158図 第17・26号住居跡実測図



第159図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第160图 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第159図 2	甕 土 師 器	A 15.0	平底。胴部は球形を呈し、 口縁部は頸部から外反して 立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴 上半部内面横位のヘラ削 り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 におい黄褐色 普通	P98 85% 北西コーナー付近覆土中層
		B 18.4				
		C 5.2				
3	甕 土 師 器	B (3.9)	底部片。平底。	内・外面とも摩滅が著しい。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 浅黄褐色 普通	P99 5% 南壁中央部付近覆土中層
		C 4.6				
4	罎 土 師 器	A 15.8	平底。胴部は扁平な球形を 呈し、最大径を中位より やや上に持つ。口縁部は外 傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底 部ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア におい橙色 普通	P107 90% 南壁中央部付近覆土下層
		B 14.0				
		C 3.9				
5	罎 土 師 器	B (7.7)	口縁部欠損。わずかな上げ 底。胴部は球形を呈し、 最大径を中位に持つ。	頸部内面赤彩痕有り。胴部 内・外面ハケ目整形。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P108 70% 南壁中央部付近覆土下層
		C 3.9				
6	罎 土 師 器	A 11.0	口縁部片。口縁部は内彎気 味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 明赤褐色 普通	P109 40% 南壁中央部付近覆土中層
		B (4.8)				
7	高 坏 土 師 器	A 22.5	脚部は円筒状を呈し、裾部 で大きく開く。坏部は下位 に弱い稜を持ち、外傾して 立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚 部外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 普通	P100 85% 北西コーナー付近 覆土下層
		B 16.7				
		D 15.2				
		E 8.9				
8	高 坏 土 師 器	A 21.1	口縁部一部欠損。脚部は円 筒状を呈し、裾部で大きく 開く。坏部は下位に弱い稜 を持ち、外傾気味に立ち上 がる。	坏部内面ヘラ削り。脚部内 面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P101 60% 南壁中央部付近覆土下層
		B 14.6				
		D 15.7				
		E 6.7				
9	高 坏 土 師 器	A 21.0	脚部は円筒状を呈し、裾部 で大きく開き、端部でわず かに上方に向かう。坏部は 下位に弱い稜を持ち、外傾 気味に立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚 部外面ヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P102 80% 南壁中央部付近覆土下層
		B 16.0				
		D 13.7				
		E 8.6				
10	高 坏 土 師 器	A 22.5	口縁部一部欠損。脚部はラ ッパ状を呈し、裾部でほぼ水 平に広がる。坏部は、底部に 周縁が突き出しており、口縁部 は外傾気味に立ち上がり、上 端部で大きく外反する。	坏部外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P103 70% 南壁中央部付近覆土下層
		B 13.0				
		D 16.4				
		E 7.0				
11	高 坏 土 師 器	A 17.1	坏部片。坏部は外傾気味に 立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア におい黄褐色 普通	P104 40% 北西コーナー付近覆土中層
		B (4.6)				
12	高 坏 土 師 器	A 17.9	坏部片。坏部は内彎気味に 立ち上がる。	坏部外面摩滅が著しく、内 面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P105 40% 北西コーナー付近覆土中層
		B (7.4)				
		E (1.3)				
13	高 坏 土 師 器	B (11.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈 する。	脚部内・外面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 赤色 普通	P106 30% 北西コーナー付近覆土中層
		E (8.6)				

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第159図 14	壺 弥生式土器	B (9.0)	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。胴部外面には、 附加条1種(附加2種)の縄文が施されている。胴部内面は、 縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 におい橙色 普通	P110 80% 南西コーナー付近覆土下層
		C 5.7			
15	壺 弥生式土器	B (14.8)	胴部下位から頸部下位にかけての破片。胴部は内彎し、 頸部で直立気味に立ち上がる。外面は、附加条1種(附加 2条)の縄文が施されている。内面は横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P111 20% 南西コーナー付近覆土中層

第160図の16～27は第17号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。16・17は頸部下位から胴部上位にかけての破片で、頸部は無文帯で胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。18～24は胴部片で、外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。25・26は胴部から底部にかけての破片で、外面には附加条2種（附加1条）の縄文が施されている。25は、底部に布目痕がある。27は底部片で、外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、底部に木葉痕がある。

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第160図 28	紡 錘 車	4.6	4.6	1.4	7.0	36.2	100	南西コーナー付 近床面	D P 32
29	紡 錘 車	4.8	4.8	1.7	6.0	47.1	100	中央部床面	D P 33

図版番号	器種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第160図 30	敲 石	143	9.0	5.4	942.0	砂 岩	南西コーナー 付近床面直上	Q11

第19号住居跡（第161図）

位置 Z地区中央部，C2b₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部は，第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.92m，短軸(3.65)mの方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高は8～17cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 2か所(P₁・P₂)検出されている。P₁・P₂は，径20～22cmの円形を呈し，深さは48～65cmの支柱穴である。4本柱と思われるが，北部及び東部の支柱穴は第1号溝に掘り込まれているため検出されない。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径100cm，短径66cmの楕円形を呈し，床を16cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

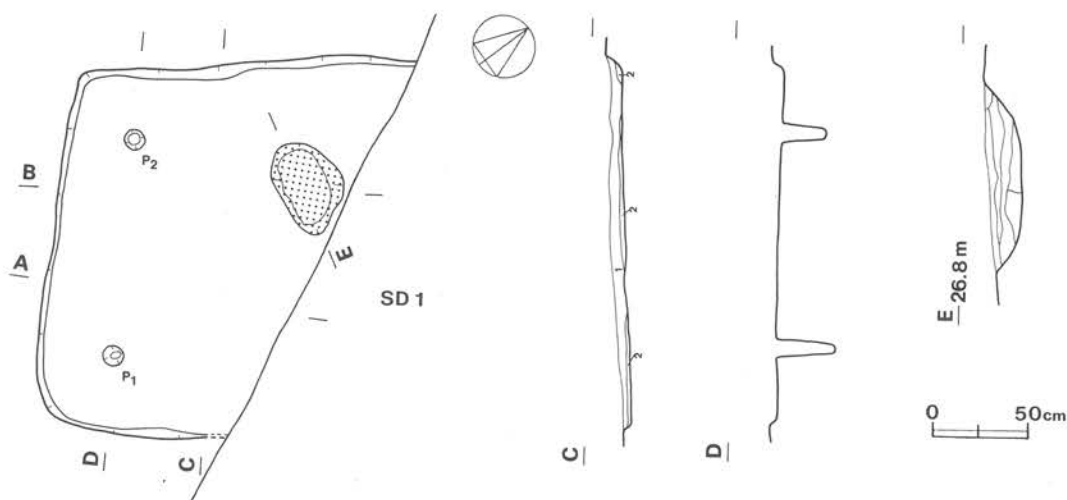
覆土 褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 西コーナー付近の覆土の下層や中層から，土師器細片(161点)が出土している。その他，流れ込みと思われる縄文式土器細片(2点)，弥生式土器細片(6点)が覆土上層から出土している。

所見 本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第28号住居跡（第162図）

位置 D地区南東部，H5c₀区を中心に確認されている。



SI-19 土層解説

- 1 にぶい褐色 褐色土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。

A 27.0m

B

第161図 第19号住居跡実測図

0 2m

規模と平面形 長軸5.06m, 短軸4.88mの方形を呈している。

長軸方向 N-90°。

壁 壁高は25~36cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10~28cm, 深さ5~9cmで, 断面形は, 皿状を呈している。

床 平坦で, 全体によく踏み固められ硬い。

ピット 11か所(P₁~P₁₁) 検出されている。P₁~P₄は, 径25~32cmの円形を呈し, 深さ22~36cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅~P₁₁は, 径18~27cmの円形を呈し, 深さ21~40cmで性格は不明である。

炉 長軸線上の中央からやや西寄りに検出されている。平面形は, 長径105cm, 短径70cmの不定形を呈し, 床を約4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体がよく熱を受け, 赤変硬化している。

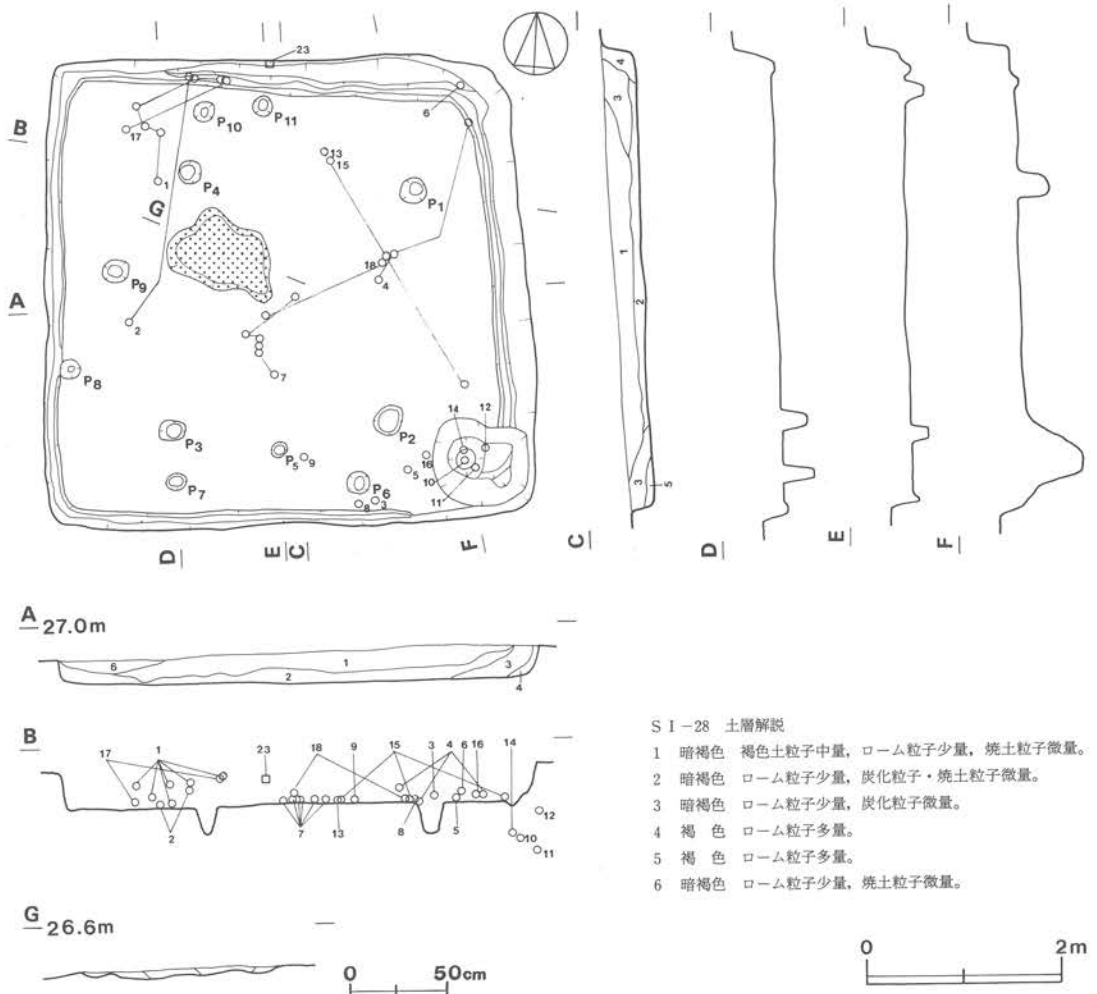
貯蔵穴 南東コーナーに検出されている。平面形は, 長径100cm, 短径90cmの楕円形を呈し, 深さは50cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

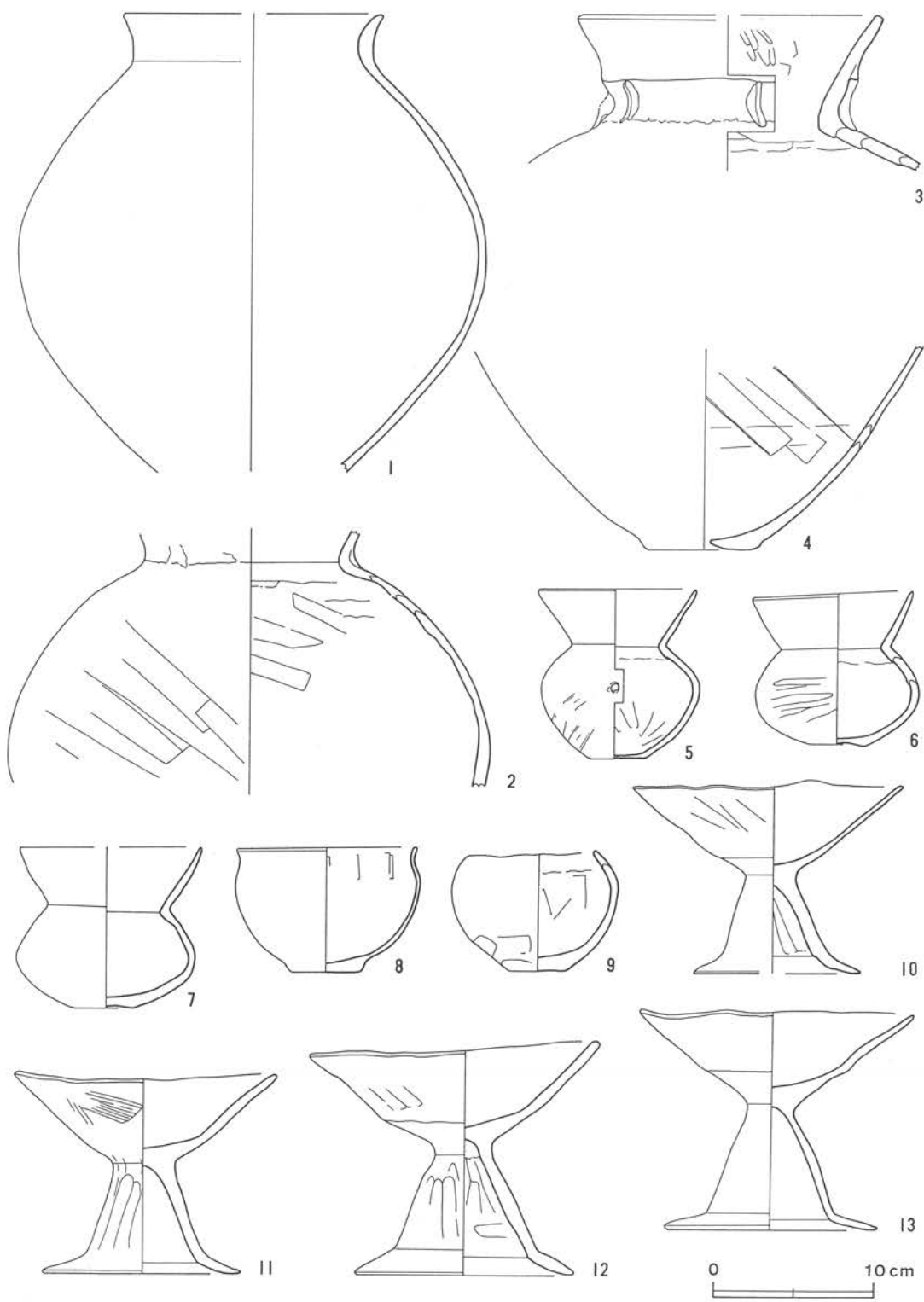
遺物 貯蔵穴内覆土や床面及び覆土下層から土師器片(甕1, 壺2, 甑1, 埴3, 埴1, 鉢1, 高坏9), 土師器細片(193点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる弥生式土器細片(37点)が覆土上層から少量出土している。1の甕は北西コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で,

2の壺は北壁中央から西寄りの床面から横位の状態で、4の甕は中央部からやや東寄りの床面からつぶれた状態で、それぞれ出土している。5の罎は南東コーナー付近の覆土下層から正位の状態で、6の罎は北東コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、7の罎は中央部の覆土下層から散らばった状態で、それぞれ出土している。8の碗は南壁中央部の覆土下層から正位の状態で、9の小形鉢は南壁中央付近の床面直上から正位の状態で、10・11・12・14の高坏は貯蔵穴内から、13の高坏は北部中央の床面からつぶれた状態で、15の高坏は東部の床面から横位の状態で、16の高坏は南東コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、17の高坏は北西コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で、それぞれ出土している。

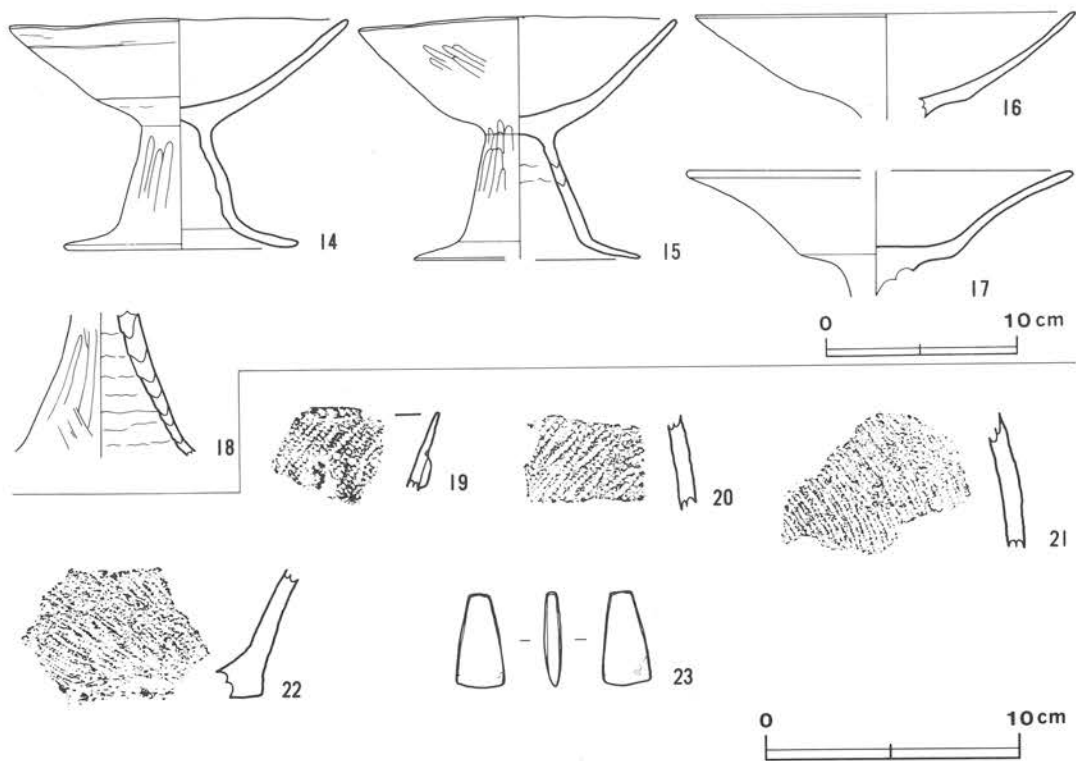
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



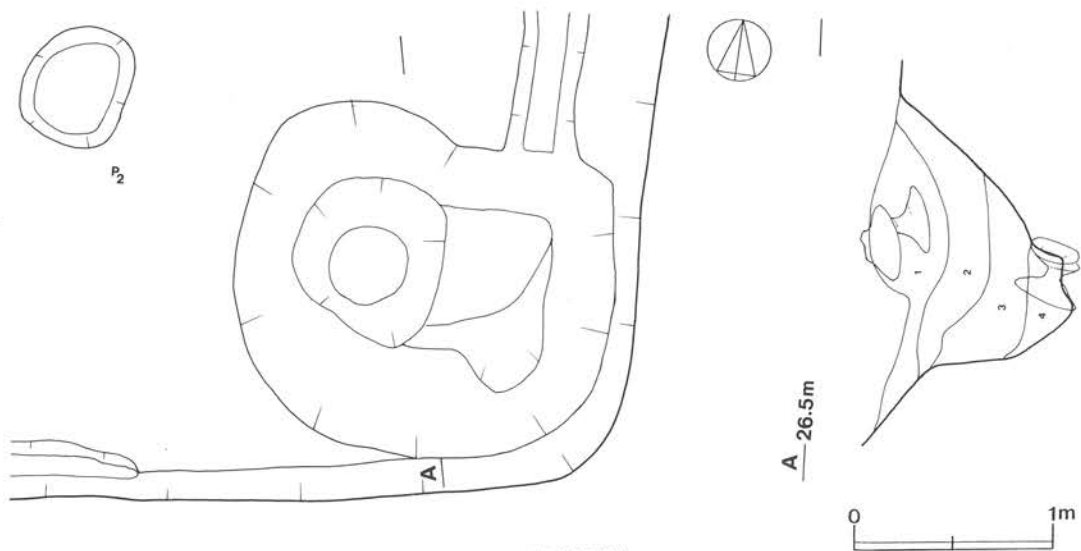
第162図 第28号住居跡実測図



第163图 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



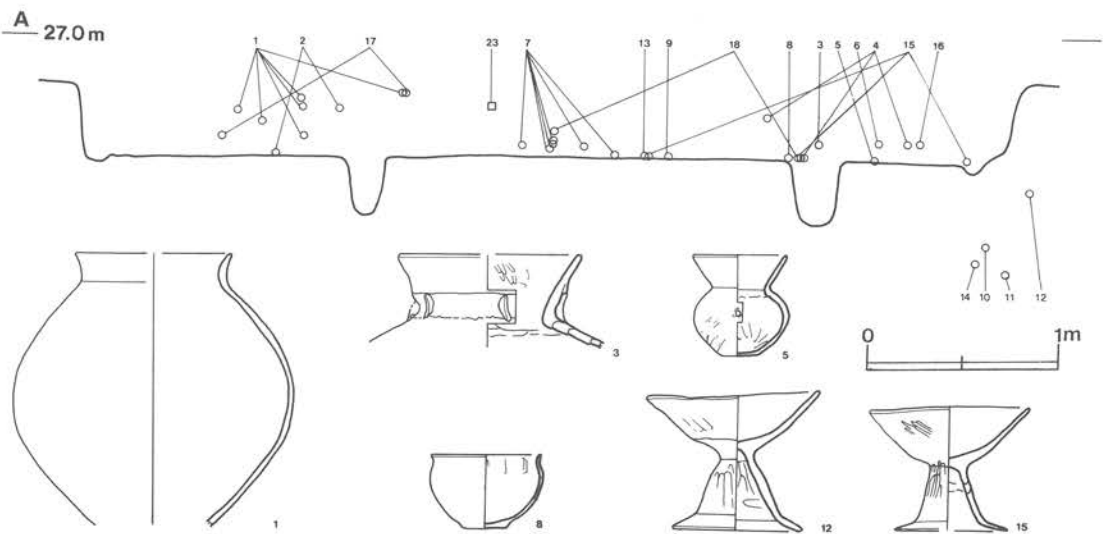
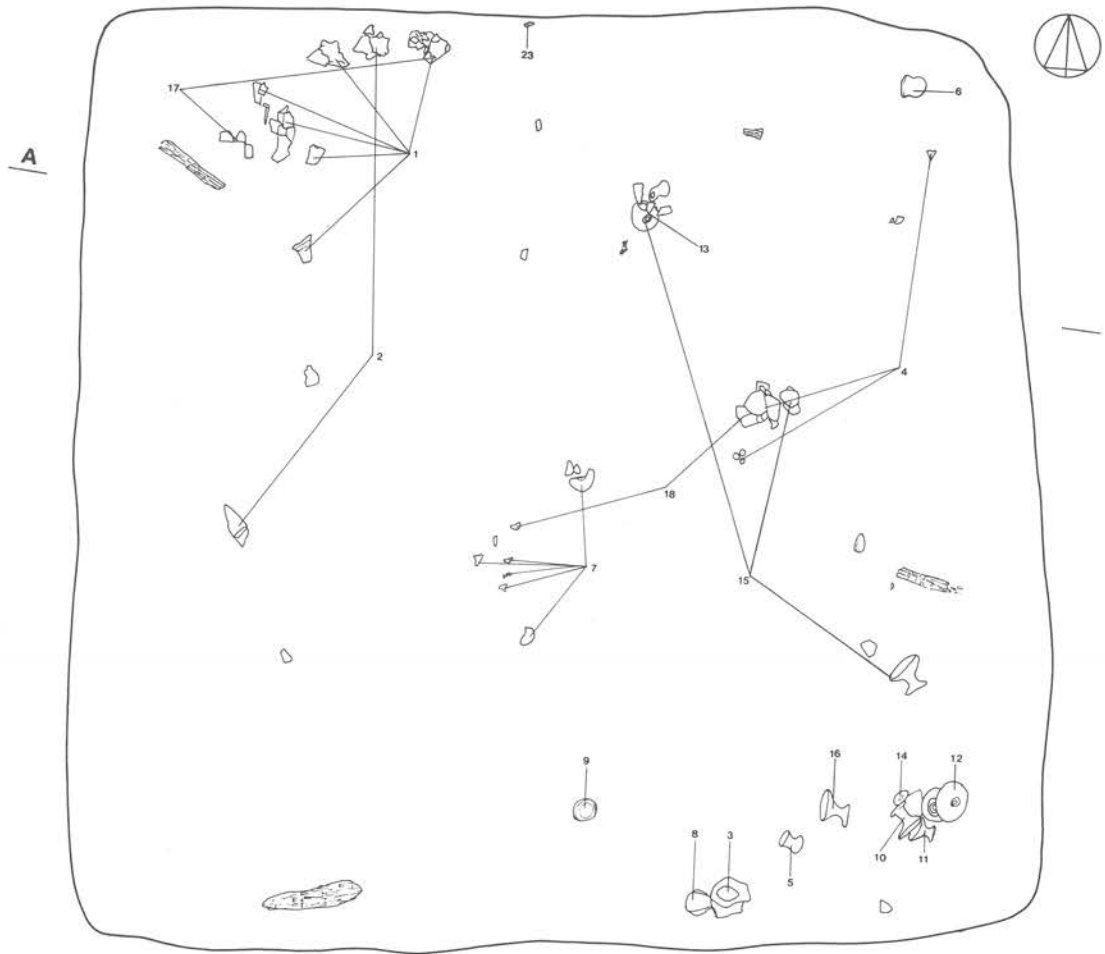
第164図 第28号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



S I - 28 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, 炭化物微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, 黒色ブロック微量。

第165図 第28号住居跡貯蔵穴実測図



第166图 第28号住居跡出土遺物位置図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第163図 1	甕 土 師 器	A [16.2] B (28.5)	胴部下位から口縁部にかけての破片。底部欠損。胴部は球形状を呈し最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 144 30% 北壁コーナー付近覆土下層
2	壺 土 師 器	B (15.7)	胴部中位から頸部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は外反する。	胴部内・外面ヘラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 145 20% 北壁中央から西寄り床面
3	壺 土 師 器	A [19.1] B (9.8)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は折返し口縁で外傾して立ち上がる。口縁部に隆起帯を施している。	口縁部内面ヘラ磨き。頸部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 146 10% 南壁中央部付近覆土下層
4	甗 土 師 器	B (12.7) C 7.0	胴部下半の破片。平底。底部中央に径7mmの孔を穿つ。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P 147 40% 中央部からやや東寄りの床面
5	埴 土 師 器	A 9.8 B 10.5 C 3.4	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。胴部中央に円孔(径6mm)が穿たれている。口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 157 90% 南東コーナー付近覆土下層
6	埴 土 師 器	A 9.7 B 9.6 C 3.4	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 158 90% 北東コーナー付近覆土下層
7	埴 土 師 器	A [11.4] B 10.0 C 3.7	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P 159 90% 中央部覆土下層
8	碗 土 師 器	A 11.4 B 10.0 C 3.7	わずかな上げ底。体部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 160 90% 南壁中央部付近覆土下層
9	小形鉢 土 師 器	A 7.9 B 7.6 C 3.5	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 161 95% 南壁中央付近床面
10	高 坏 土 師 器	A 15.9 B 11.2 D [10.5] E 6.2	脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P 148 95% 貯蔵穴内覆土
11	高 坏 土 師 器	A 16.3 B 12.5 D 6.7 E 12.3	脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 149 98% 貯蔵穴内覆土
12	高 坏 土 師 器	A 18.1 B 14.8 D 13.5 E 8.9	脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。脚部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 150 95% 貯蔵穴内覆土
13	高 坏 土 師 器	A 16.9 B 14.1 D 13.0 E 7.7	脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 151 90% 北部中央床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 14	高坏土師器	A 18.1 B 12.1 D 12.4 E 7.3	脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に開く。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P152 貯蔵穴内覆土 90%
15	高坏土師器	A 16.8 B 12.9 D [11.8] E 6.7	脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に開く。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラナデ。脚部外面ヘラ削り、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P153 東部床面 90%
16	高坏土師器	A 20.0 B (5.6)	坏部片。坏部は内彎気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面摩滅が著しい。	砂粒・雲母・スコリア・パミス 橙色 普通	P154 南東コーナー付近覆土下層 40%
17	高坏土師器	A [20.0] B (6.6)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち外反気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 におい橙色 普通	P155 北西コーナー付近覆土下層 30%
18	高坏土師器	B (7.8)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・パミス 橙色 普通	P156 東部覆土下層 30%

第164図の19～22は第28号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。19は口縁部片、20は胴部片で、単節LRの縄文が施されている。21は胴部片、22は胴部下位から底部にかけての破片で、外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第164図 23	磨製石斧	3.8	2.0	0.6	3.8	輝緑岩	北壁中央部 付近覆土上層	Q17

第44号住居跡（第167図）

位置 A地区西部、G1b₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸11.70m、短軸11.60mの方形を呈している。

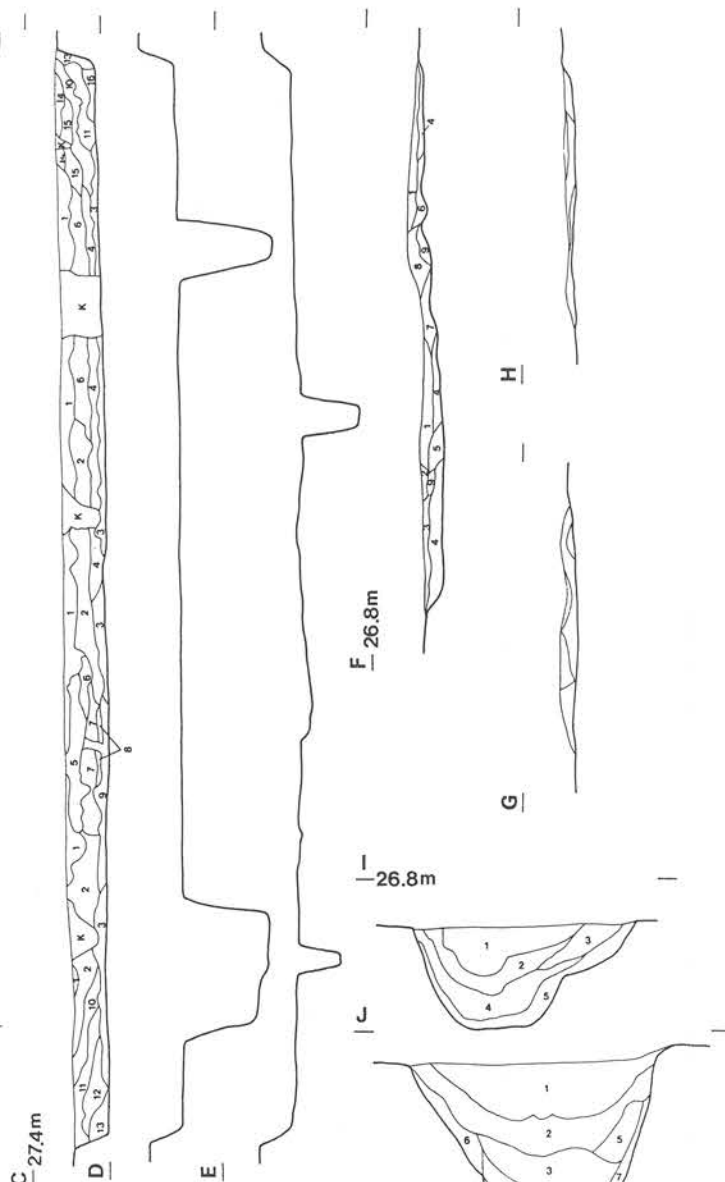
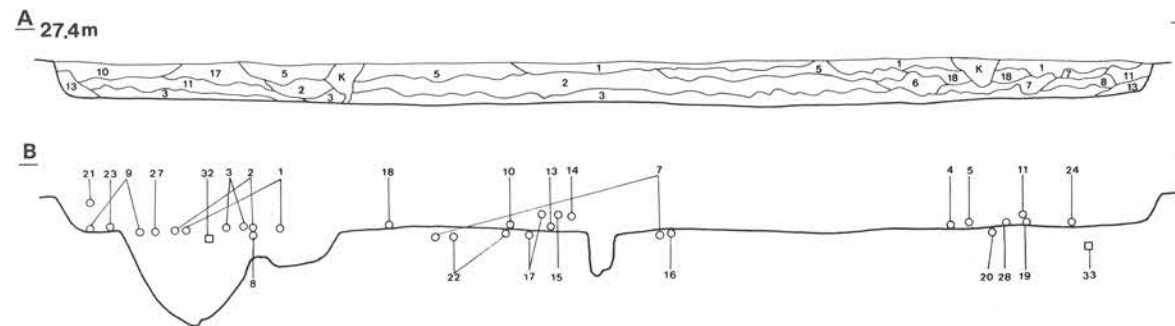
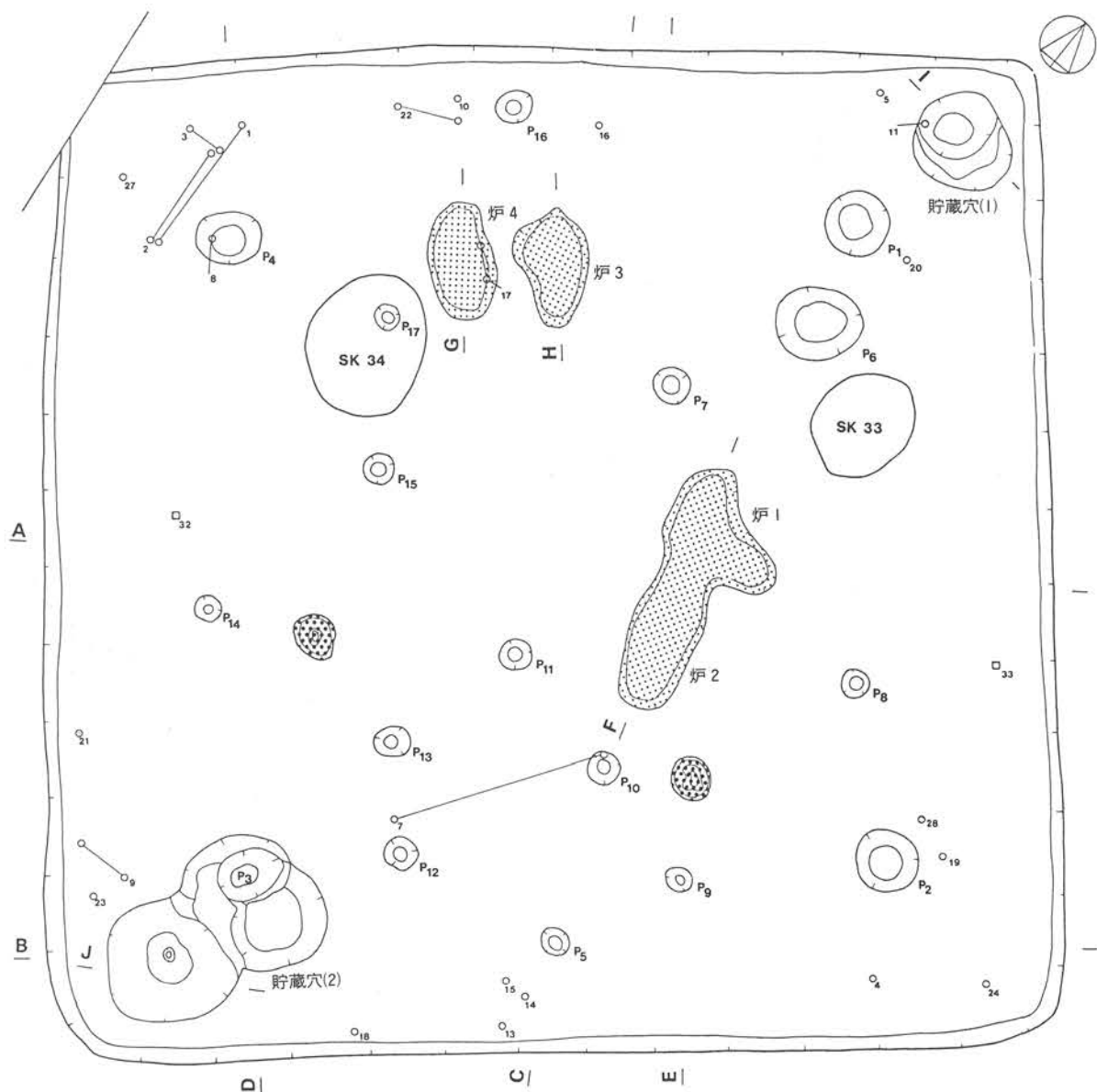
長軸方向 N-30°-W。

壁 壁高は38～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められ硬い。

ピット 17か所(P₁～P₁₇)検出されている。P₁～P₄は、径72～82cmの円形を呈し、深さ90～103cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₈・P₉・P₁₂・P₁₄は、径32～44cmの円形を呈し、深さ45～53cmで、規模や配列から補助柱穴と考えられる。P₅～P₇、P₁₀・P₁₁・P₁₃・P₁₅～P₁₇は、径36～101cmの円形を呈し、深さ43～115cmで性格は不明である。

炉 4か所(炉₁～炉₄)検出されている。炉₁は、長軸線上の中央に検出され、平面形は長径169cm、短径82cmの不整楕円形を呈し、床を約12cm掘り込んでいる。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。炉₂は、炉₁に隣接して炉₁の南側から検出され、平面形は、長径148cm、短径84cmの不整形を呈し、床を約10cm掘り込んでいる。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。炉₃は、長軸



- SI-44 土層解説
- 1 黒褐色 黒色土中ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量。
 - 2 極暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量。
 - 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量、ローム大ブロック微量。
 - 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子少量。
 - 5 黒褐色 黒色土中ブロック・黒色土大ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
 - 6 極暗褐色 ローム粒子・黒色土中ブロック・焼土粒子少量。
 - 7 暗褐色 ローム中ブロック・焼土小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
 - 8 褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量、炭化小ブロック・焼土粒子少量。
 - 9 赤褐色 焼土粒子多量、ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック中量、炭化小ブロック、焼土小ブロック少量。
 - 10 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
 - 11 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子少量。
 - 12 明赤褐色 ローム粒子・焼土粒子多量、ローム小ブロック・炭化小ブロック・焼土小ブロック少量。
 - 13 明褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム大ブロック少量。
 - 14 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
 - 15 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム大ブロック微量。
 - 16 明褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム大ブロック少量。
 - 17 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
 - 18 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック・焼土粒子少量。

- SI-44 貯藏穴(1)土層解説
- 1 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量。
 - 2 褐色 ロームブロック多量、ローム粒子少量。
 - 3 褐色 ロームブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量。
 - 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量。
 - 5 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。

- SI-44 貯藏穴(2)土層解説
- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量。
 - 2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量。
 - 3 灰褐色 ローム粒子微量。
 - 4 褐色 ローム小ブロック少量。
 - 5 褐色 ローム粒子微量。
 - 6 にぶい褐色 ローム小ブロック少量。
 - 7 褐色 ローム粒子多量。

第167図 第44号住居跡実測図

線上の中央から西寄りに検出され、平面形は、長径140cm、短径82cmの楕円形を呈し、床を5cm掘り込んでいる。全体によく熱を受け、赤変硬化している。炉₄は、炉₃の西側に検出され、平面形は、長径134cm、短径76cmの楕円形を呈し、床を9cm前後掘り込んでいる。炉₃同様全体によく熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 2か所検出されている。貯蔵穴(1)は、北コーナーから検出され、平面形は長径120cm、短径は103cmの楕円形を呈し、深さは58cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。貯蔵穴(2)は、南コーナーから検出され、平面形は長径136cm、短径75cmの不整楕円形を呈し、深さは101cmである。底面は丸底で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

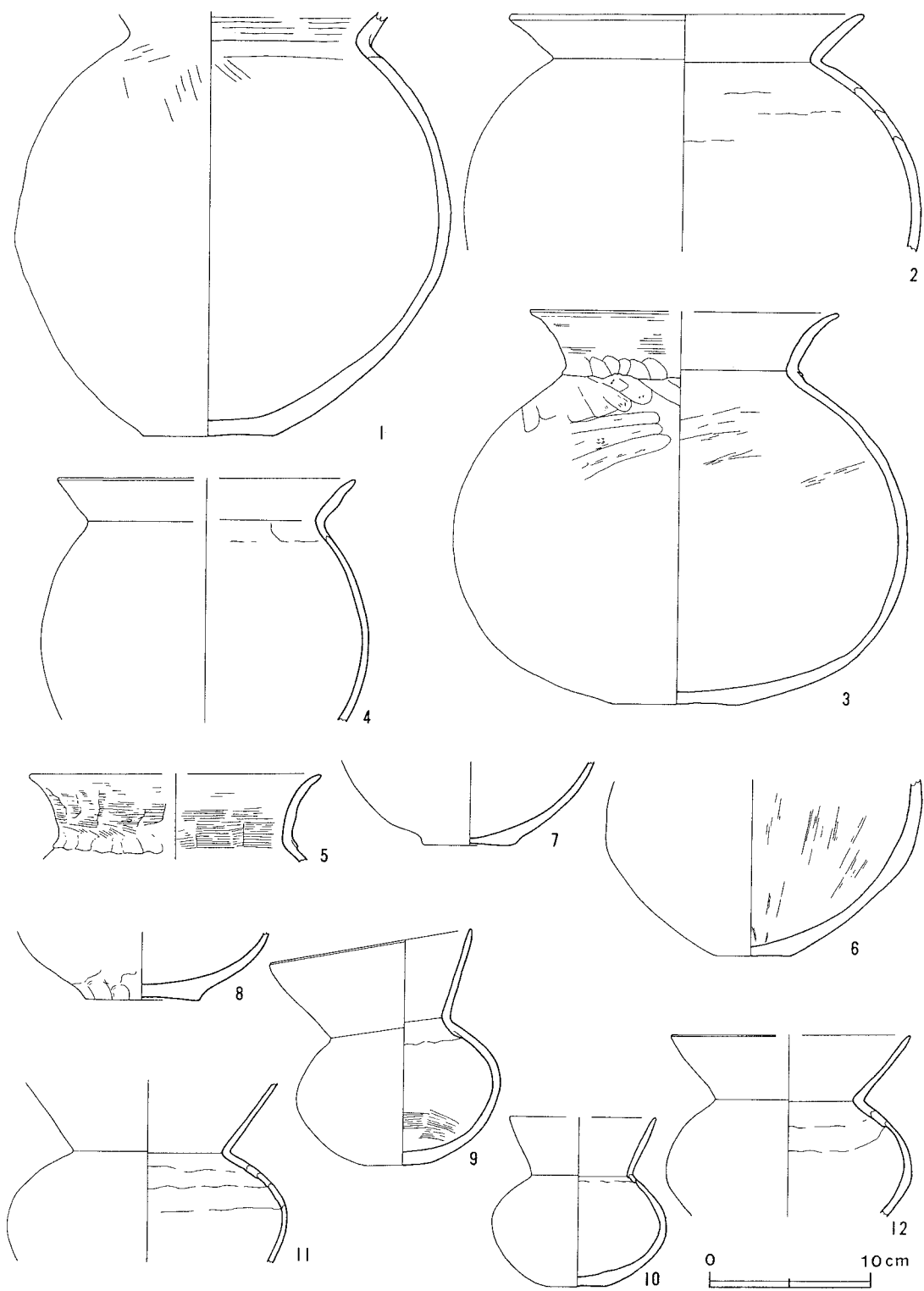
覆土 褐色土・黒褐色土・明褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土下層や中層から土師器片(甕8, 埴7, 高坏15), 土師器細片(2999点), 弥生式土器細片(14点)及び土製品・石製品が少量出土している。1~3の甕は西コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、9の埴は南コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、10の埴は北西壁中央部付近の覆土下層から横位の状態で、14・15の埴は南東壁中央部付近の覆土中層から逆位及び斜位の状態で、それぞれ出土している。16の高坏は北西壁中央部付近の床面から横位の状態で、17の高坏は中央部北西寄りの覆土下層から逆位の状態で、18の高坏は南コーナー付近の覆土下層から横位の状態で、32の管玉は、中央部からやや南西寄りの床面直上から、33の石製模造品の有孔円板は北東壁中央部付近の床面から、それぞれ出土している。その他、炉₂の南東側の床面からは、径46cmの円形を呈する焼土ブロックが、炉₂の南西側の床面からは長径56cm、短径48cmの楕円形を呈する焼土ブロックが、それぞれ検出されている。

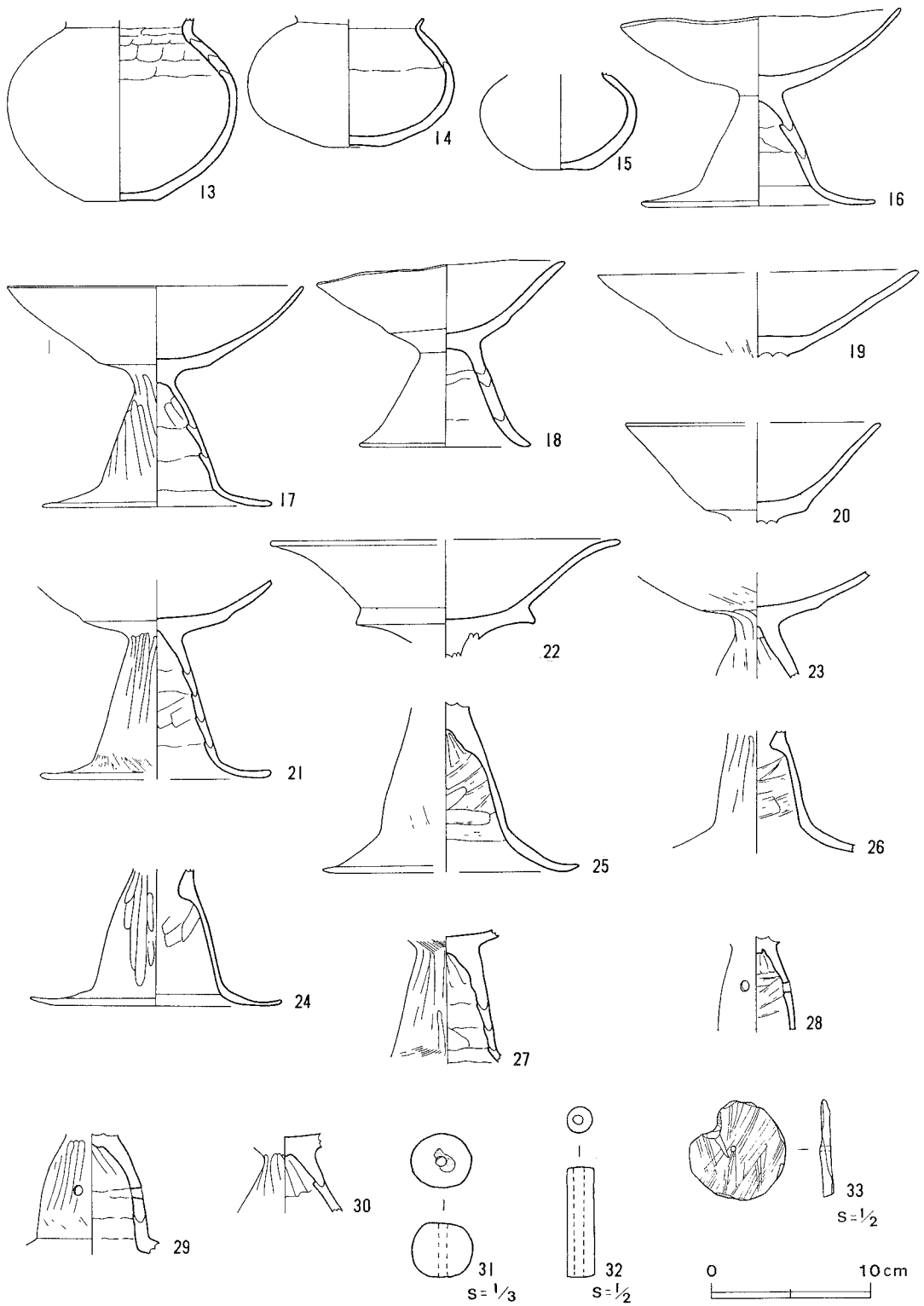
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 1	甕 土師器	B (26.6) C 8.3	口唇部欠損。平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反し、外側に折り返す。	口縁部外面ナデ内面ヘラ削り。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P227 90% 西コーナー付近覆土下層
2	甕 土師器	A 22.1 B (15.1)	胴上半部片。胴部は球形状を呈し、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して開く。	口縁部内・横ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P228 45% 西コーナー付近覆土下層
3	甕 土師器	A [19.3] B 24.8 C 8.0	胴部から口縁部にかけての破片。平底。脚部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反し上位で大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭痕有り。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P229 40% 西コーナー付近覆土下層
4	甕 土師器	A [18.8] B (15.4)	胴上半部片。胴部は球形状を呈しする。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P230 10% 東コーナー付近覆土下層
5	甕 土師器	A [18.4] B (5.6)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P231 10% 北コーナー付近覆土下層



第168图 第44号住居跡出土遺物実測図(1)



第169图 第44号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第168図 6	甕 土 師 器	B (11.1) C 4.5	胴下半部片。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P 232 40% 北コーナー付近覆土中層
7	甕 土 師 器	B (5.3) C 5.9	底部片。平底。胴部は内彎する。	底部内・外面摩滅著しい。	砂粒・長石 橙色 普通	P 233 20% 中央部覆土下層
8	甕 土 師 器	B (4.3) C 4.1	底部片。上げ底気味の平底。	底部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 234 15% 西コーナー付近覆土下層
9	埴 土 師 器	A 12.8 B 15.0 C 4.4	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。頸部は内側に折り返す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 250 90% 南コーナー付近覆土下層
10	埴 土 師 器	A [9.3] B 10.7 C 3.7	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内面輪積み痕有り。胴部外面ナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P 251 80% 北西壁中央部付近覆土下層
11	埴 土 師 器	B (11.3)	胴下半部欠損。胴部は偏平な球形状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 252 60% 北コーナー付近覆土中層
12	埴 土 師 器	A [14.9] B (11.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は偏平な球形状を呈し、口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内面横ナデ。胴部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 253 40% 北コーナー付近覆土上層
第169図 13	埴 土 師 器	B (11.5) C 4.5	口縁部欠損。平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	胴部内・外面ナデ輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 254 60% 南東壁中央部付近覆土下層
14	埴 土 師 器	B (8.0) C 3.9	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	P 255 60% 南東壁中央部付近覆土中層
15	埴 土 師 器	B (6.0) C 3.6	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を上位に持つ。	胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 256 50% 南東壁中央部付近覆土中層
16	高 坏 土 師 器	A 17.4 B 12.4 D 14.6 E 6.5	脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面横ナデ。脚部内面ナデ。脚裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 235 100% 北西壁中央部付近床面
17	高 坏 土 師 器	A 18.5 B 13.8 D 14.4 E 7.8	脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は内彎気味に立ち上がる。	坏部内面摩滅が著しい。脚部外面縦位のヘラ削り。脚裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 236 80% 中央部北西寄り覆土下層
18	高 坏 土 師 器	A 15.4 B 11.7 D 10.6 E 6.2	脚部は円筒状を呈し、坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	坏部内・外面摩滅著しい。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 237 90% 南コーナー付近覆土下層
19	高 坏 土 師 器	A [20.0] B 5.2	坏部片。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 239 30% 東コーナー付近覆土下層
20	高 坏 土 師 器	A [15.9] B (6.3)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	内・外面摩滅が著しい。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 240 40% 北コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169図 21	高坏土師器	B (12.5) D [14.4] E 9.3	脚部から坏部にかけての破片。脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は下位に稜を持ち、内彎する。	脚部外面縦位のヘラ磨き。脚裾部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリアにふい黄橙色普通	P 241 40% 南コーナー付近覆土上層
22	高坏土師器	A [21.0] B (6.2)	脚部欠損。坏部は底部に口縁が突き出ており、口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリアにふい黄橙色普通	P 238 50% 北西壁中央部付近覆土下層
23	高坏土師器	B (6.4) E (3.2)	脚部中位から口縁部にかけての破片。脚部は円筒状を呈し、坏部は内彎する。	坏底部外面ヘラ削り。脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい黄橙色普通	P 242 30% 南コーナー付近覆土下層
24	高坏土師器	B (15.6) D 15.6 E (8.6)	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母浅黄橙色普通	P 243 60% 東コーナー付近覆土中層
25	高坏土師器	B (10.5) D [16.1] E (8.9)	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部内面上位ヘラナデ、中・下位ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア橙色普通	P 244 60% 東コーナー付近覆土中層
26	高坏土師器	B (7.7)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母浅黄橙色普通	P 245 20% 貯蔵穴内覆土
27	高坏土師器	B (8.4) E (7.3)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ削り、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母明赤褐色普通	P 246 20% 西コーナー付近覆土下層
28	高坏土師器	B (6.0) E (5.4)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、中央に円孔(径6mm)が3か所穿たれている。	脚部内面上位ヘラナデ、中位ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア浅黄橙色普通	P 247 20% 東コーナー付近覆土下層
29	高坏土師器	B (7.7) E (7.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、中央に円孔(径6mm)が2か所穿たれている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母浅黄橙色普通	P 248 20% 東コーナー付近覆土下層
30	高坏土師器	B (5.0) E (3.5)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P 249 20% 西部覆土中層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第169図 31	球状土師	2.6	2.9	2.1	5.0	21.4	100	貯蔵穴内	D P 47

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第169図 32	管玉	3.5	0.9	-	4.3	流紋岩	中央部から南西寄り床面	Q25 孔径0.2cm
33	有孔円板	3.1	3.2	0.1	3.9	滑石	北東壁中央部付近床面	Q26 孔径0.2cm

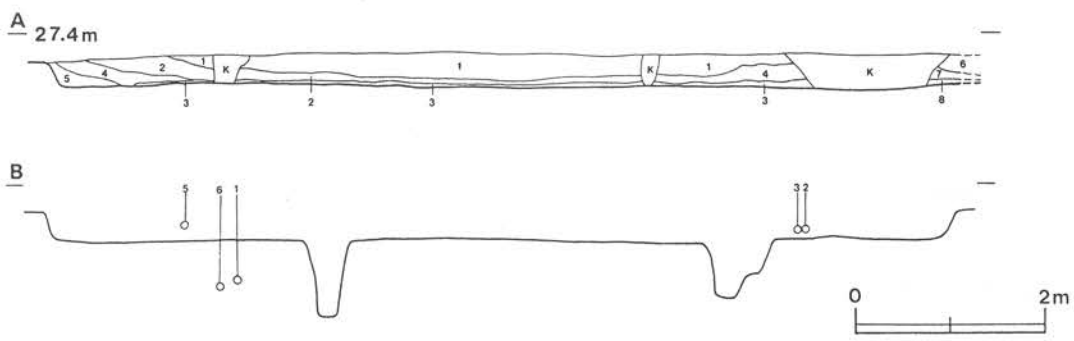
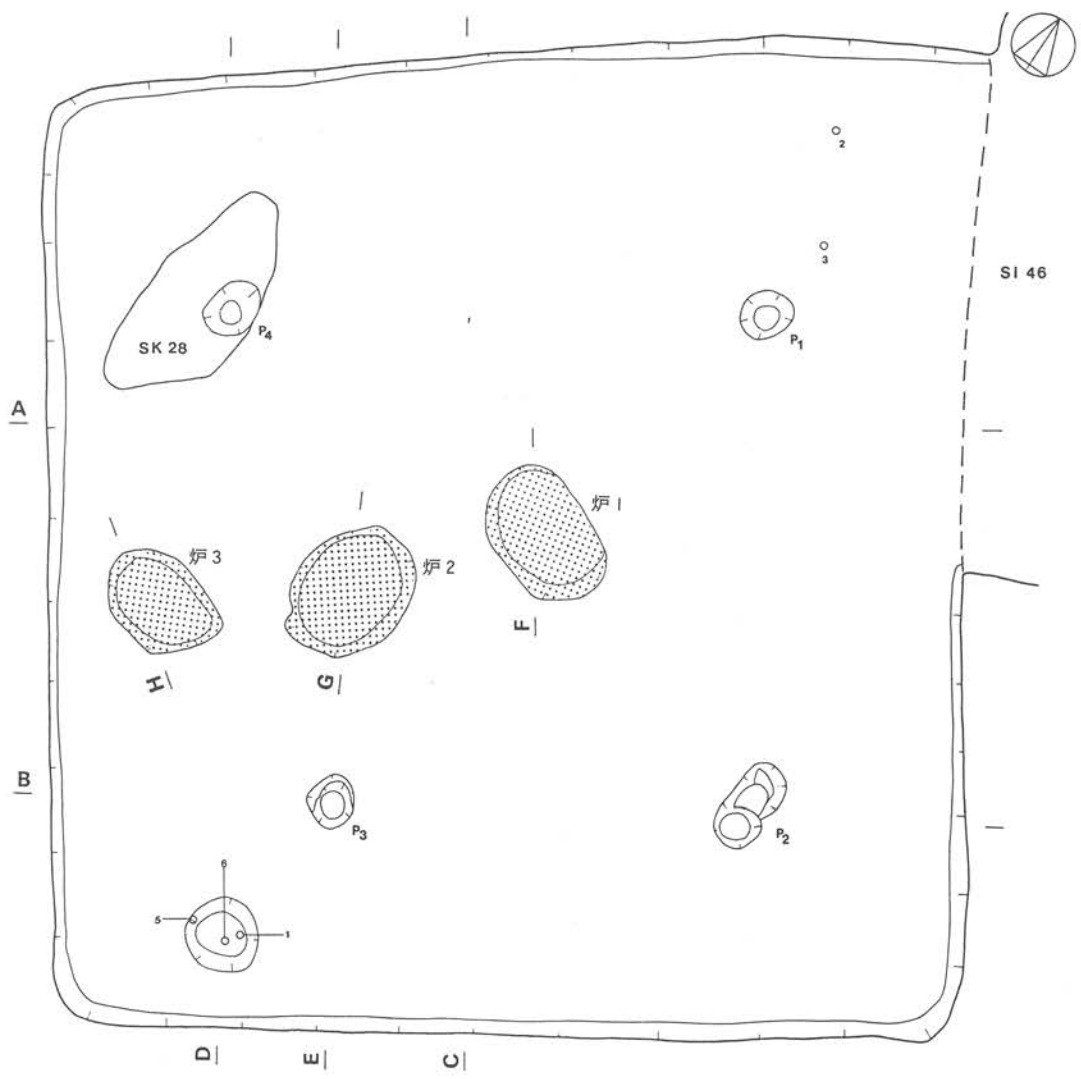
第45号住居跡 (第170図)

位置 A地区西部、G2d₃区を中心に確認されている。

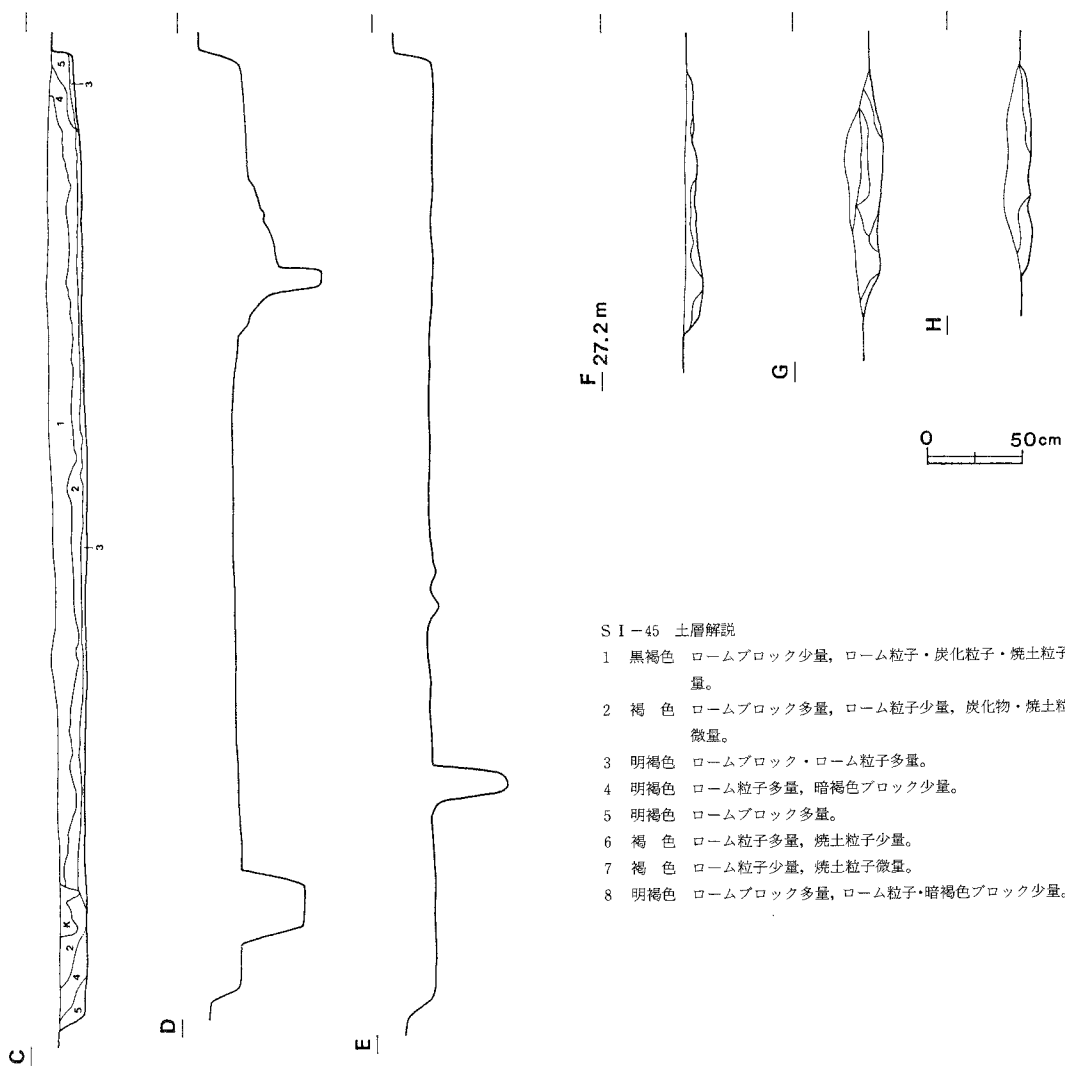
重複関係 本跡の北東壁は、第46号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸10.52m、短軸9.66mの方形を呈している。

長軸方向 N-38°-W。

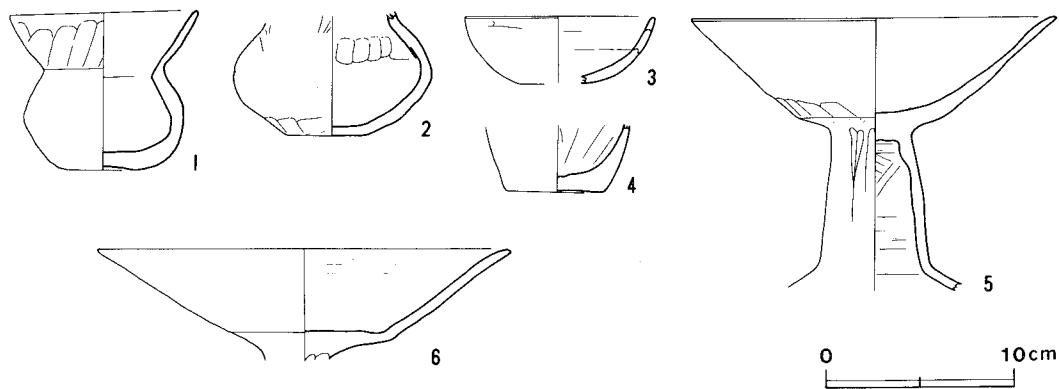


第170图 第45号住居跡実測図



S I - 45 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ロームブロック多量, ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 3 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。
- 4 明褐色 ローム粒子多量, 暗褐色ブロック少量。
- 5 明褐色 ロームブロック多量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 8 明褐色 ロームブロック多量, ローム粒子・暗褐色ブロック少量。



第171図 第45号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は26～38cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁～P₄は、径26～49cmの円形を呈し、深さ55～88cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形になる。

炉 3か所(炉₁～炉₃)検出されている。炉₁は、長軸線上の中央に検出されており、平面形は長径76cm、短径51cmの楕円形を呈し、床を約8cm掘り込んだ地床炉である。炉₂は、中央から西寄りに検出されており、平面形は、長径75cm、短径58cmの楕円形を呈し、床を約12cm掘り込んだ地床炉である。炉₃は、炉₂の西側の床面から検出されており、平面形は、長径66cm、短径57cmの楕円形を呈し、床を7cm掘り込んだ地床炉である。いずれも、炉床は熱を受けて赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナー付近に検出されている。平面形は径38～40cmの円形を呈し、深さは67cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・黒褐色土・明褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡の貯蔵穴や覆土の下層及び中層から土師器片(埴2, 碗1, 鉢1, 高坏2), 土師器細片(929点), 弥生式土器細片(14点)が出土している。1の埴及び5・6の高坏は貯蔵穴内から横位の状態でそれぞれ出土している。3の碗は北コーナー付近の覆土中層から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、重複関係から第46号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第171図 1	埴 土師器	A 19.3	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部外面へラ削り、内面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P259 98% 貯蔵穴内覆土 一部スス付着
		B 8.6				
		C 3.2				
2	埴 土師器	B (6.5)	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P260 70% 北コーナー付近覆土中層
		C 4.1				
3	碗 土師器	A 10.1	底部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P261 70% 北コーナー付近覆土中層
		B 3.6				
4	小形鉢 土師器	B (3.6)	体部片。わずかな上げ底。体部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面へラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P262 5% 北部覆土中層
		C 5.3				
5	高坏 土師器	A 19.3	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で水平近くに広がる。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がり、上端部でやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部外面へラ削り。脚部外面縦位のへラ磨き、内面へラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P257 70% 貯蔵穴内覆土
		B (14.7)				
		E (8.1)				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第171図 6	高坏 土師器	A 21.8 B (6.0)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P258 30% 貯蔵穴内覆土。

第46号住居跡 (第172図)

位置 A地区中央部, G2c4区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は, 第45号住居跡の北東部に掘り込まれている。

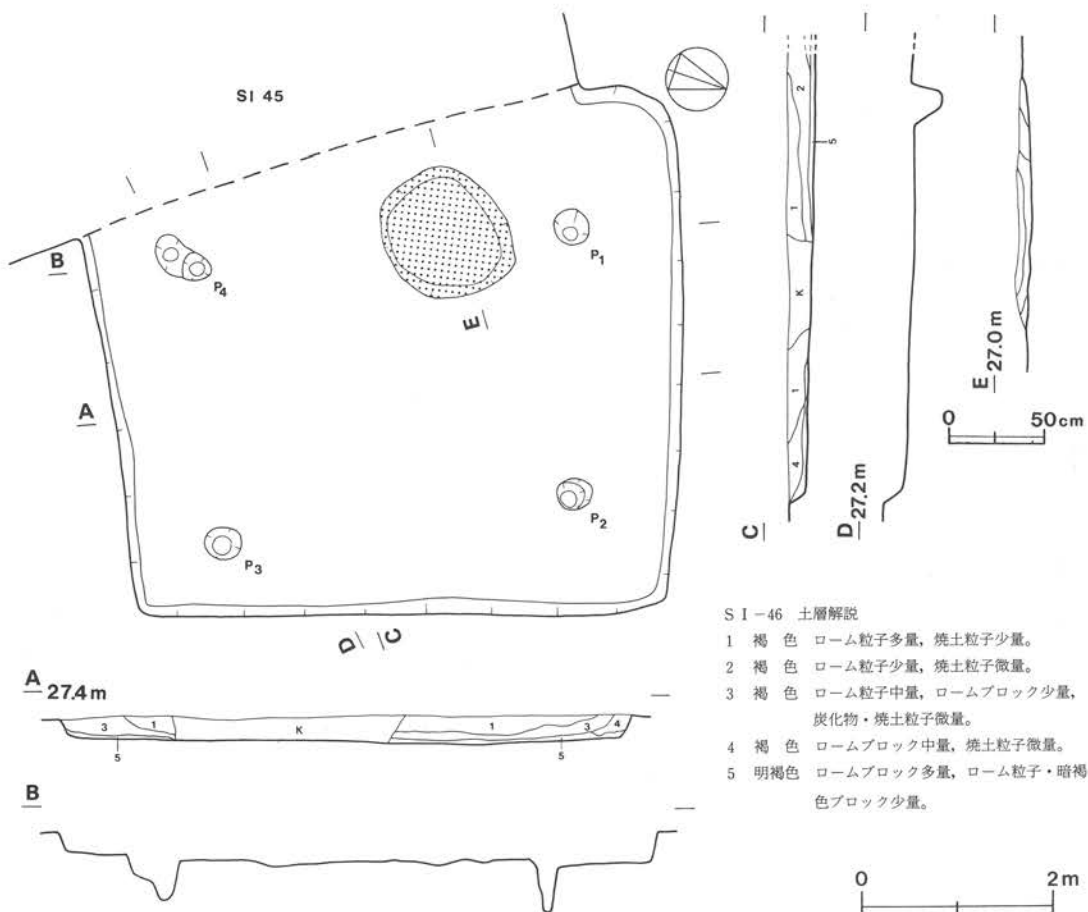
規模と平面形 長軸6.04m, 短軸(5.62)mの長方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-16°-W。

壁 壁高は20~29cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で, 踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₄は, 径18~33cmの円形を呈し, 深さ25~52cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は長方形となる。



第172図 第46号住居跡実測図

炉 中央から西寄りに検出されている。平面形は長径76cm、短径63cmの楕円形を呈し、床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。

覆土 褐色土・明褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土の下層や中層から土師器細片(351点)が出土している。その他、覆土上層からは流れ込みと思われる弥生式土器細片(61点)が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第45号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第48号住居跡 (第173図)

位置 A地区西部、G2f₁区を中心に確認されているが、南西側は調査区外に延びている。

規模と平面形 長軸6.80m、短軸〔6.43〕mの長方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-44°-W。

壁 壁高は36~54cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 3か所(P₁~P₃)検出されている。P₁~P₃は、径41~49cmの円形を呈し、深さ48~49cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。4本柱と思われるが、他は調査区外であり検出されない。

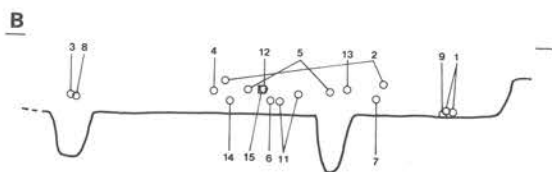
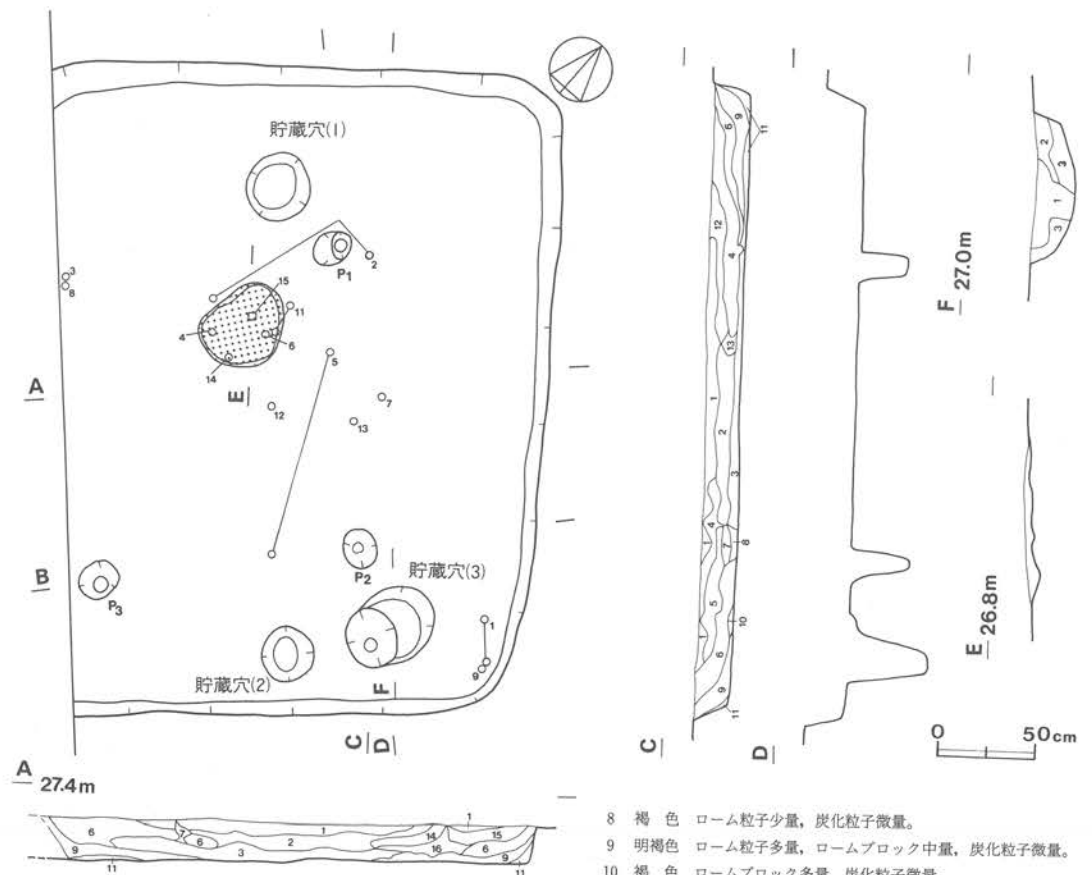
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径98cm、短径77cmの楕円形を呈し、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体が熱を受け、焼土化している。

貯蔵穴 3か所検出されている。貯蔵穴(1)は、北西壁中央部付近から検出され、平面形は径65cmほどの円形を呈し、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。貯蔵穴(2)は、南東壁中央部付近から検出され、平面形は径57cmほどの円形を呈し、深さは74cmである。底面は皿状で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。貯蔵穴(3)は、南東壁中央部から東コーナー寄りに検出され、平面形は長径98cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さは85cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土の下層や中・上層から集中して、土師器片(甕5、壺3、埴2、高坏4)、土師器細片(3094点)が出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器片(1点)、弥生式土器細片(17点)が出土している。1の甕は東コーナー付近の床面から横位の状態で、6の壺及び11・13・14の高坏は中央部の覆土中層から横位の状態で、それぞれ出土している。その他炉内の北東側には、長径111cm、短径68cmの不正楕円形をした焼土ブロックが、炉内の西側には、径45cmの円形を呈する焼土ブロックが、それぞれ検出されている。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



- 8 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 9 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 炭化粒子微量。
- 10 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量。
- 11 褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量。
- 12 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 13 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 14 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量。
- 15 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量。
- 16 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。

S I - 48 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 褐色 ロームブロック中量, ローム粒子・炭化物少量。
- 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量。
- 7 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量。

S I - 48 貯蔵穴土層解説

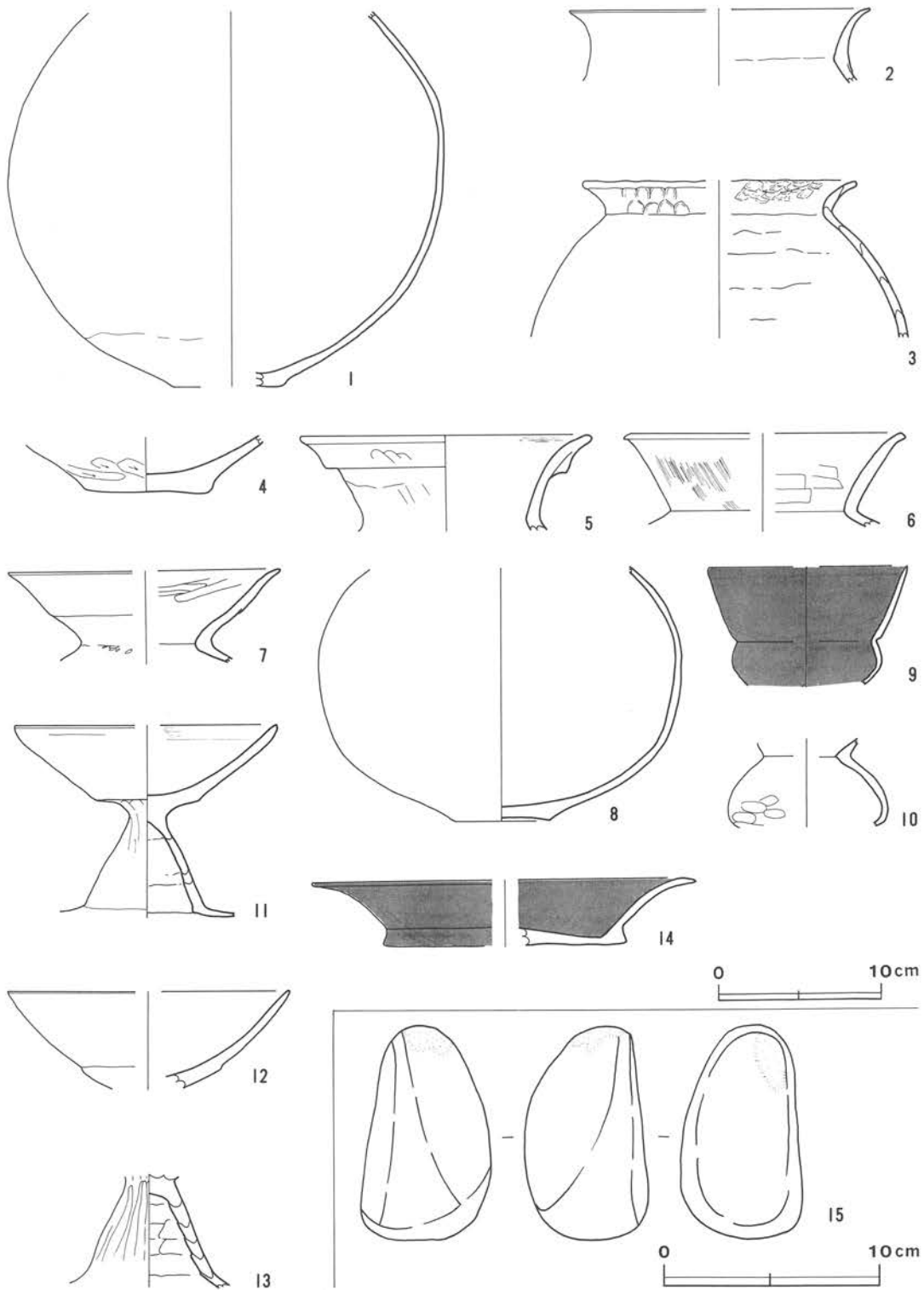
- 1 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量。
- 2 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 粘土ブロック少量。
- 3 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。



第173図 第48号住居跡実測図

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	甕 土師器	B (23.7) C [7.2]	胴部片。突出した平底。胴部は球形を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P264 40% 東コーナー付近床面



第174图 第48号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第174図 2	甕 土 師 器	A [18.7]	口縁部片。口縁部は外反して開く。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 265 10% 中央部覆土上層
		B (7.2)				
3	甕 土 師 器	A [17.2]	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面指頭圧痕有り。内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 266 5% 西部南寄り覆土中層
		B (10.0)				
4	甕 土 師 器	B (3.2)	底部片。突出した平底。	底部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P 267 10% 中央部覆土上層
		C 7.6				
5	壺 土 師 器	A 18.1	口縁部片。口縁部は複合口縁で外反して開く。	口縁部外面横ナデ後一部ヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P 268 10% 中央部覆土中層
		B (6.0)				
6	甕 土 師 器	A [17.4]	口縁部片。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部外面横ナデ後ハケ目整形、内面横ナデ後一部ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P 269 10% 中央部覆土中層
		B (6.0)				
7	壺 土 師 器	A [17.0]	口縁部片。口縁部は外反気味に立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 270 5% 中央部覆土中層
		B (5.7)				
8	壺 土 師 器	B (16.0)	胴部片。わずかな上げ底。胴部は球形状を呈する。	胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 271 40% 西部南寄り覆土中層
		C 5.9				
9	埴 土 師 器	A [12.1]	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は偏平な球形状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ、赤彩痕有り。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P 276 10% 東コーナー付近覆土下層
		B (7.5)				
10	埴 土 師 器	B (5.5)	胴部片。胴部は偏平な球形状を呈する。	胴部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス にぶい黄褐色 普通	P 277 20% 中央部覆土上層
11	高 坏 土 師 器	A [16.5]	脚部から坏部にかけての破片。脚部は円筒状を呈し、裾部はほぼ水平に広がる。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部外面ナデ。坏底部外面ヘラ削り。脚部外面ヘラ削り、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P 272 60% 中央部覆土中層
		B (12.1)				
		E (6.5)				
12	高 坏 土 師 器	A [17.7]	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎しながら立ち上がり、大きく開く。	坏部内面摩滅著しい。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P 273 40% 中央部覆土中層
		B (6.1)				
13	高 坏 土 師 器	B (7.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 明褐色 普通	P 275 40% 中央部覆土中層
14	高 坏 土 師 器	A [23.8]	坏部片。坏部は底部に周縁が突き出しており、口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩痕有り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P 274 30% 中央部覆土中層
		B (4.2)				

図版番号	器 種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第174図 15	敲 石	10.2	6.1	5.7	484.2	砂 岩	中央部覆土上層	Q 27

第49号住居跡（第175図）

位置 A地区南西部，G2g₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南東壁は，第50号住居跡の北西壁を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.02m，短軸〔4.21〕mの長方形を呈すると推定される。

長軸方向 N-37°-E。

壁 壁高は17~36cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₄は，径26~48cmの円形を呈し，深さ21~31cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は長方形となる。

炉 検出されていない。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを多量にふくむ褐色土が堆積しており，人為堆積と思われる。

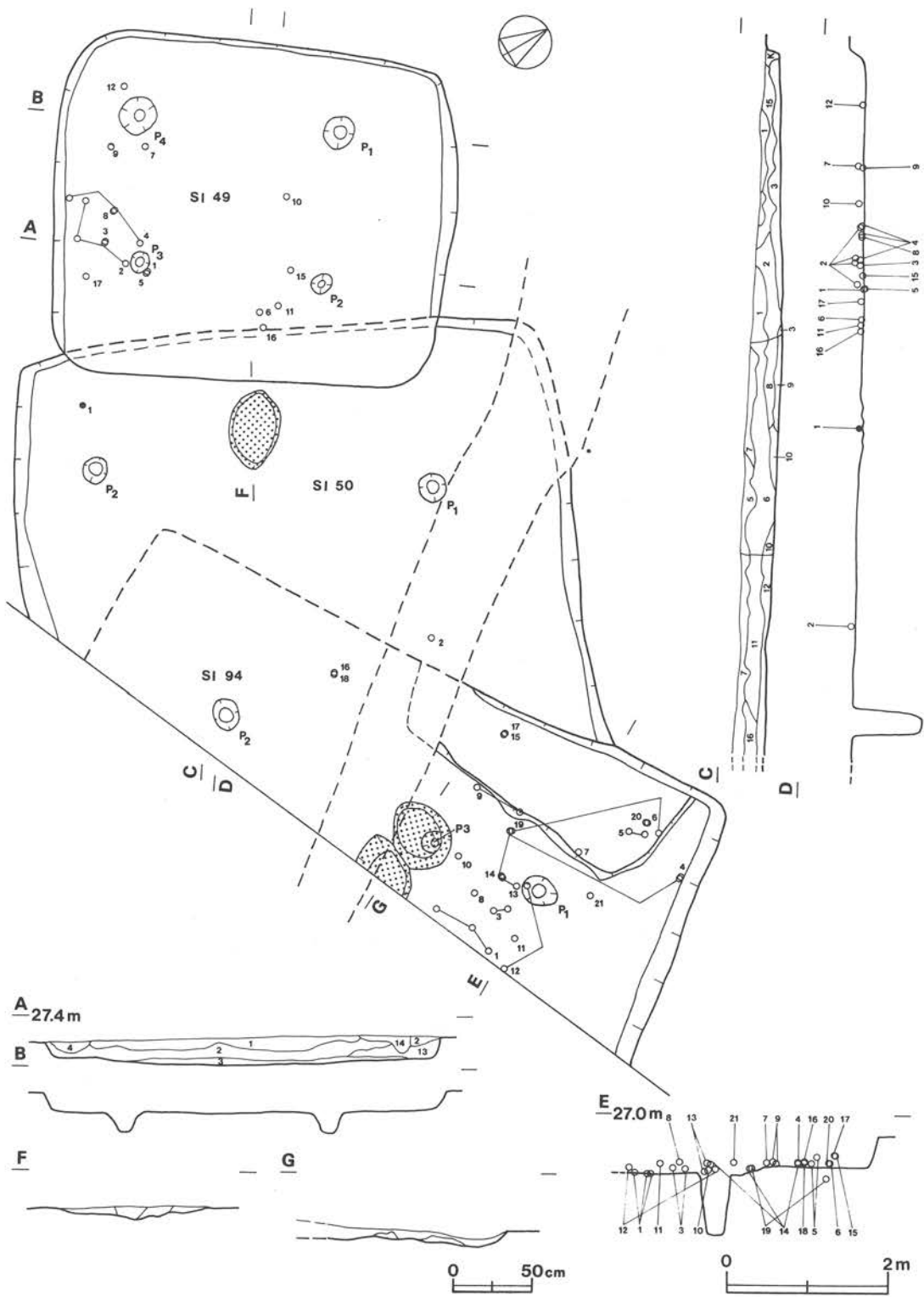
遺物 北部を除く覆土の下層や中・上層から土師器片（甕1，壺1，埴7，鉢1，高坏7，器台1），土師器細片（725点）が出土している。その他，流れ込みと思われる弥生式土器細片（36点）が出土している。3の埴は南部の覆土下層から横位の状態で，5の埴は南部の覆土下層から正位の状態で，6の埴は東部の覆土下層から逆位の状態で，7の埴は西部中央の覆土中層から正位の状態で，10の小形鉢は中央部の覆土中層から正位の状態で，11の高坏は東部の覆土下層からつぶれた状態で，18の器台は中央部北東寄りの覆土中層から正位の状態で，それぞれ出土している。

所見 本跡は，重複関係から第50号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 1	甕 土師器	B (16.8) C 6.8	胴部下位の破片。突出した平底。胴部は内彎する。	底部ヘラナデ。胴部外面ナデ，内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P 278 30% 南部覆土下層
2	壺 土師器	A 16.4 B (14.4)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は球形状を呈する。口縁部は複合口縁で，頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 279 30% 南部覆土中層
3	埴 土師器	A 13.2 B 15.0 C 3.9	平底。胴部は偏平な球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 288 95% 南部覆土下層
4	埴 土師器	B (13.7)	底部欠損。脚部は球形状を呈し，口縁部は外傾気味に立ち上がる。	頸部外面ヘラ削り。胴部外面ナデ，内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・パミス 明赤褐色 普通	P 289 60% 南部覆土下層
5	埴 土師器	A 9.6 B 10.0 C 3.0	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 290 90% 南部覆土下層

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第176図 6	埴 土 師 器	A 9.9	わずかな上げ底。胴部は偏 平な球形状を呈し、最大径 を中位に持つ。口縁部は外 傾して立ち上がる。	口縁部外面斜位のヘラ削 り、内面横ナデ。胴部外面 ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P 291 95% 東部覆土下層
		B 8.2				
		C 3.5				
7	埴 土 師 器	A 8.9	わずかな上げ底。胴部は偏平 な球形状を呈し、最大径を 中位に持つ。口縁部は内彎 気味に頸部から立ち上がる。	口縁部外面ヘラ削り、内面 横ナデ。頸部外面ヘラ磨き。 胴部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア・ バミス 橙色 普通	P 292 98% 西部中央覆土中層
		B 9.1				
		C 2.1				
8	埴 土 師 器	A 10.6	わずかな上げ底。胴部は偏 平な球形状を呈し、最大径 を中位に持つ。口縁部は外 傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴 部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P 293 90% 南部覆土下層
		B 8.8				
		C 3.9				
9	埴 土 師 器	B (6.0)	口縁部欠損。平底。胴部は 偏平な球形状を呈し、最大 径を中位よりやや下に持つ。	胴部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・バミス 橙色 普通	P 294 60% 西部覆土下層
		C 3.0				
10	小 形 鉢 土 師 器	A 10.5	平底。体部は内彎しながら 立ち上がり、口縁部でやや 外反する折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。脚 部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 浅い黄橙色 普通	P 295 95% 中央部覆土中層
		B 7.4				
		C 2.7				
11	高 坏 土 師 器	A [21.0]	脚部はラッパ状を呈し、裾 部ではほぼ水平に広がる。坏 部は下位に弱い稜を持ち、 外反気味に立ち上がり大き く開く。	口縁部内・外面横ナデ。脚部 内面ヘラナデ、輪積み痕有 り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P 280 70% 東部覆土下層
		B 14.7				
		D [17.4]				
		E 9.0				
12	高 坏 土 師 器	A [21.5]	坏部片。坏部は外傾気味に 立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P 281 30% 西コーナー付近覆土下層
		B (6.1)				
13	高 坏 土 師 器	B (11.0)	脚部から坏部にかけての破 片。脚部は円筒状を呈し、坏 部は下位に弱い稜を持つ。	脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P 282 40% 中央部覆土中層
		E (7.8)				
14	高 坏 土 師 器	B (8.6)	脚部片。脚部は円筒状を呈 し、裾部で水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ削り、 内面上部指ナデ、輪積み痕 有り。	砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい黄橙色 普通	P 284 40% 西部覆土下層
		D 16.8				
		E 8.0				
15	高 坏 土 師 器	B (9.1)	坏部欠損。脚部は円筒状を 呈し、裾部で水平近くに広 がる。	脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい黄橙色 普通	P 285 50% 東部覆土下層
		D 16.2				
16	高 坏 土 師 器	B (10.6)	脚部片。脚部は円筒状を呈 し、裾部で水平近くに広が る。	脚部内面ヘラナデ、輪積み 痕有り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P 286 40% 東部覆土下層
		D 15.1				
17	高 坏 土 師 器	B (8.8)	脚部片。脚部は円筒状を呈 する。中央に円孔(径7mm) を穿こうとした痕がある。	脚部外面縦位のヘラ磨き、 内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 287 30% 南部覆土下層
		E (7.5)				
18	器 台 土 師 器	A 7.0	脚裾部欠損。脚部は「ハ」 の状を呈し、器受部は碗状 を呈している。	器受部内・外面摩擦著しい。 脚部外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・ バミス 橙色 普通	P 283 70% 中央部北東寄り覆土中層
		B (5.8)				
		E (3.7)				



第175图 第49・50・94号住居跡実測図

S I-49・50・94 土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量。 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量。 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物・焼土粒子微量。 | 10 褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量。 |
| 3 明褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量。 | 11 褐色 | ローム粒子多量, 炭化物・焼土粒子微量。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量。 | 12 褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量。 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量。 | 13 褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック・暗褐色ブロック少量。 |
| 6 褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子微量。 | 14 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 7 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量。 | 15 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量。 |
| 8 褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量, 暗褐色ブロック少量。 | 16 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量。 |

第51号住居跡 (第177図)

位置 A地区中央部, G2c7区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西壁中央部から南コーナーにかけて帯状に, 第1・2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸8.90m, 短軸8.86mの方形を呈している。

長軸方向 N-47°-E。

壁 壁高は24~46cmで, 緩やかに外傾し立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 炉周辺は踏み固められ硬い。

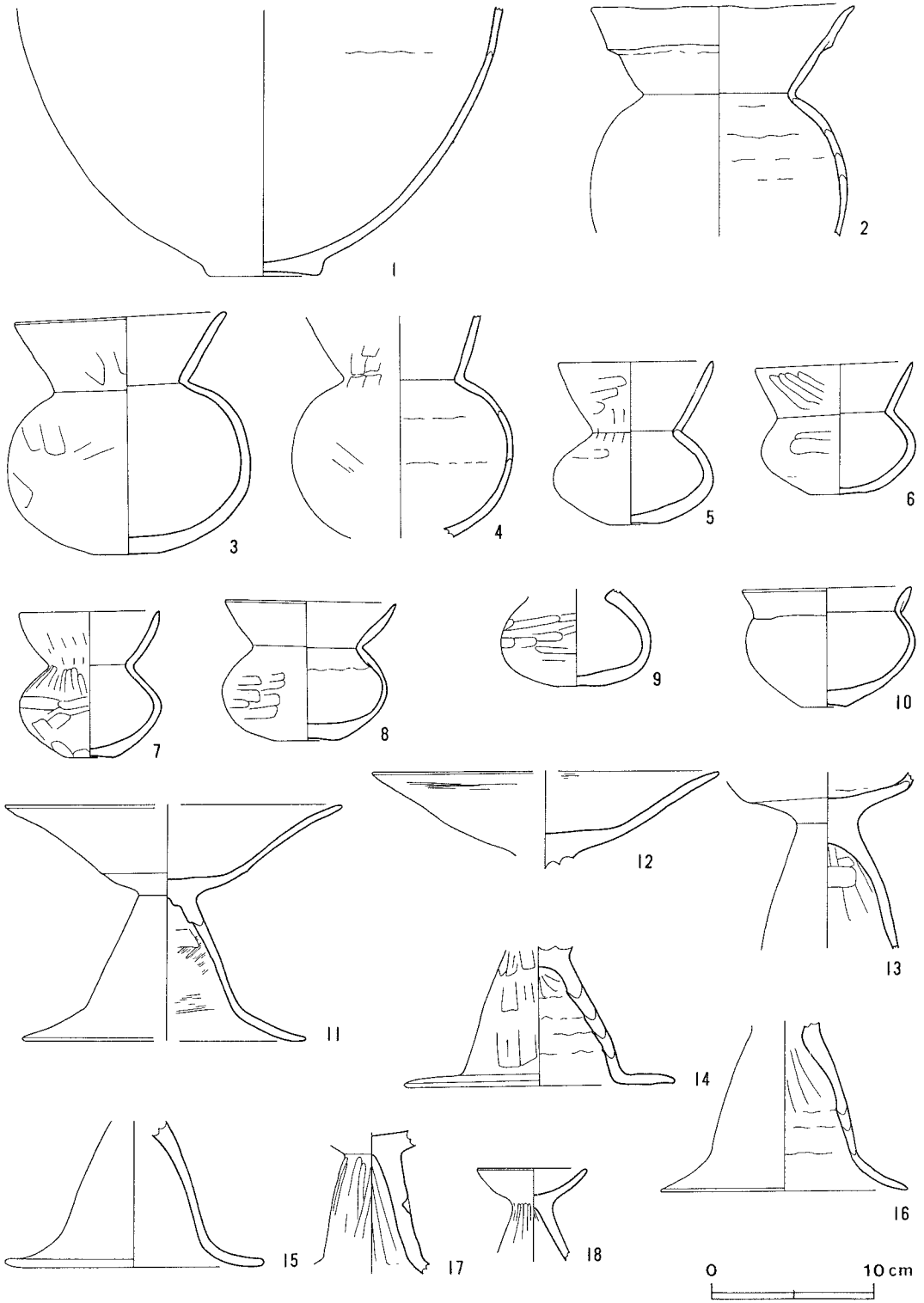
ピット 8か所(P₁~P₈)検出されている。P₁~P₄は, 径24~29cmの円形を呈し, 深さ50~64cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は正方形となる。P₅~P₈は, 短径24~66cm, 長径24~85cm, 深さ10~70cmで性格は不明である。

炉 長軸線上の中央からやや北東寄りに検出されている。平面形は長径114cm, 短径92cmの楕円形を呈し, 床を約8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土・明褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 炉付近を中心として, 土師器細片(500点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる縄文式土器細片(3点), 弥生式土器細片(11点)が出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第1・2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第176图 第49号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡（第178図）

位置 A地区中央部，F2i₅区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西壁西寄りから南東壁西寄りにかけて帯状に，第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.70m，短軸5.15mの長方形を呈している。

長軸方向 N-22°-W。

壁 壁高は32～43cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，踏み固められ硬い。

ピット 3か所(P₁～P₃)検出されている。P₁・P₂は，径25～30cmの円形を呈し，深さ20cmで規模や配列から支柱穴と思われる。P₃は，径42cmの円形を呈し，深さ36cmで性格は不明である。他の支柱穴は，第1号溝と重複しているため検出されない。

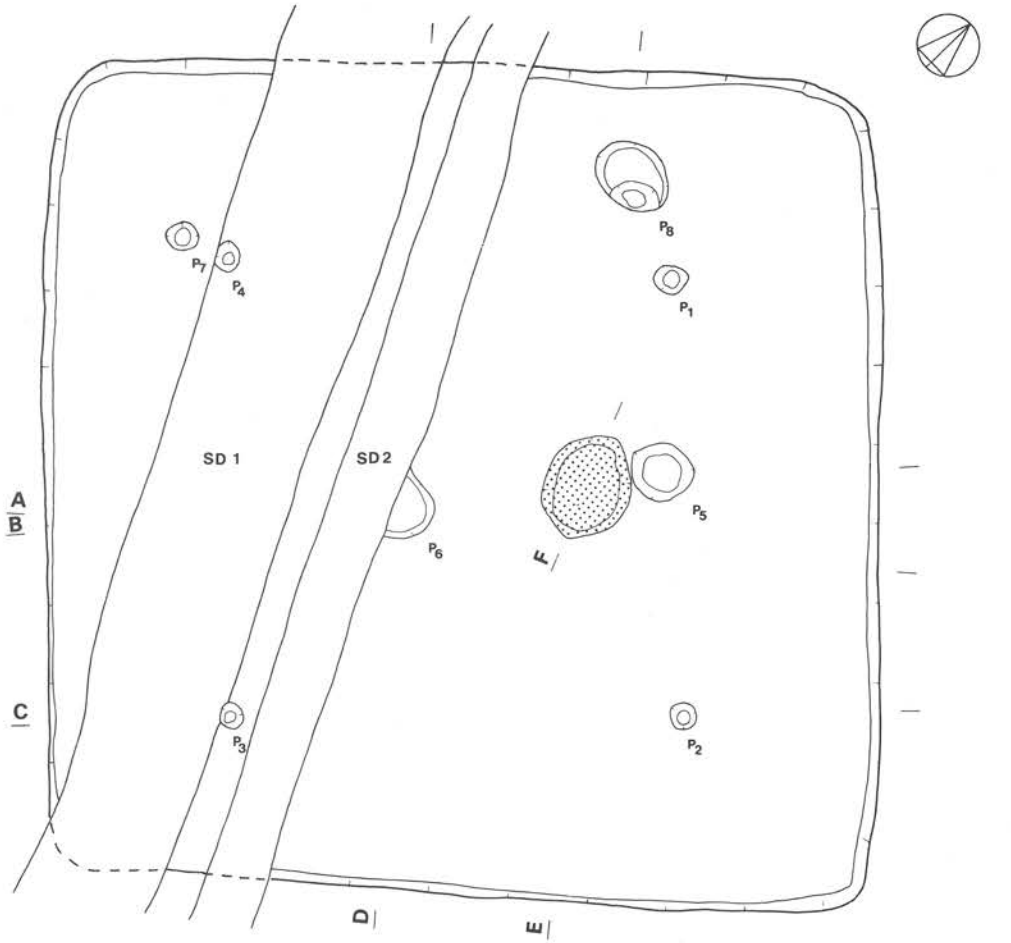
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径108cm，短径88cmの楕円形を呈し，床を約6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナーからやや北東寄りに検出されている。東部を第1号溝に掘り込まれているが，平面形は長径142cm，短径は94cmの楕円形を呈し，深さは50cmである。底面は平坦で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

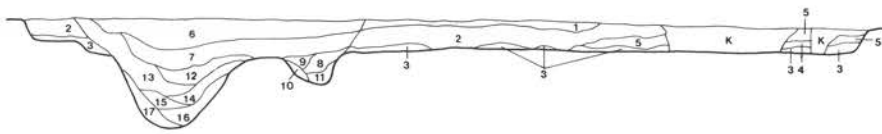
覆土 褐色土・暗褐色土・明褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 覆土の下層や中層から土師器片(甕2，壺1，埴2，高坏9)，土師器細片(1011点)が出土している。特に貯蔵穴内からは，集中して出土している。その他，流れ込みと思われる縄文式土器細片(1点)，弥生式土器細片(63点)が出土している。1・2の甕は貯蔵穴内から斜位の状態で，3の壺は貯蔵穴内からつぶれた状態で，4の埴は南東壁中央部付近の覆土下層から逆位の状態で，5の埴は貯蔵穴内から横位の状態で，7・12・13の高坏は貯蔵穴内から隣接して横位の状態で，それぞれ出土している。

所見 本跡は，重複関係から第1号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



A 27.6 m



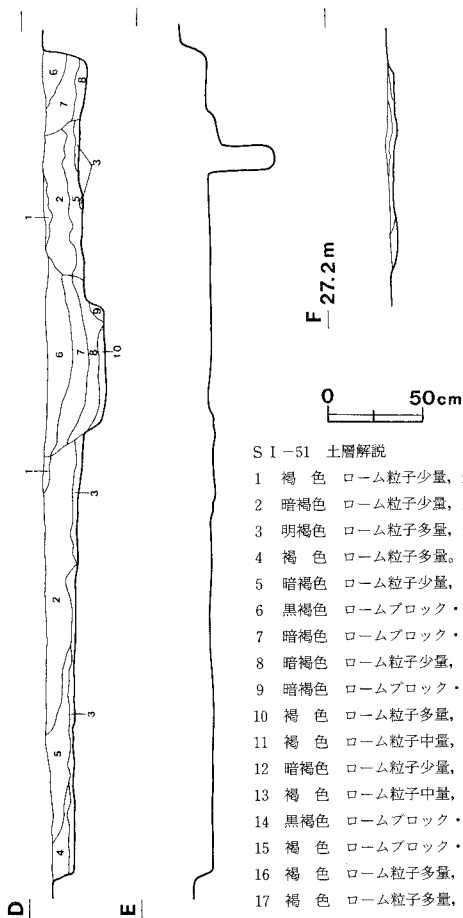
B



C



第177图 第51号住居跡実測図

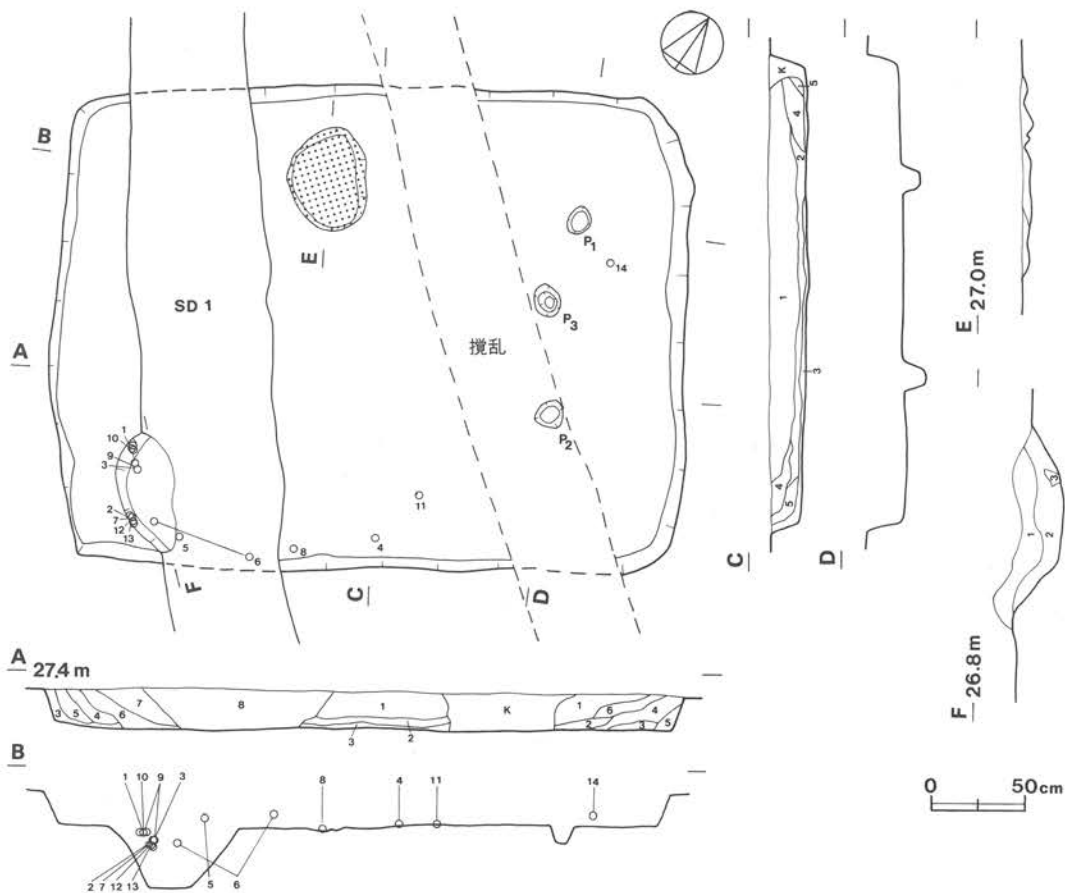


SI-51 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 6 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 7 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 9 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 10 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。
- 11 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 12 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 13 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 14 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 15 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量。
- 16 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量。
- 17 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量。

第52号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 1	甕 土師器	A [17.2]	わずかな上げ底。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して立ち上がり、外側に折り返す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にふい橙色 普通	P 298 貯蔵穴内覆土
		B 25.4				
		C 5.1				
2	甕 土師器	A [18.1]	胴部から口縁部にかけての破片。平底。胴部は球形状を呈する。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P 299 貯蔵穴内覆土
		B 25.7				
		C 4.5				
3	壺 土師器	A 17.8	突出した平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は複合口縁で、外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P 300 貯蔵穴内覆土
		B 35.5				
		C 8.6				
4	埴 土師器	A 10.1	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ、内面ヘラ当て痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 310 90% 南東壁中央部付近覆土下層
		B [8.8]				
		C 3.3				



S I-52 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量, 暗褐色粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。
- 5 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 暗褐色ブロック少量。
- 6 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。

- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 8 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。

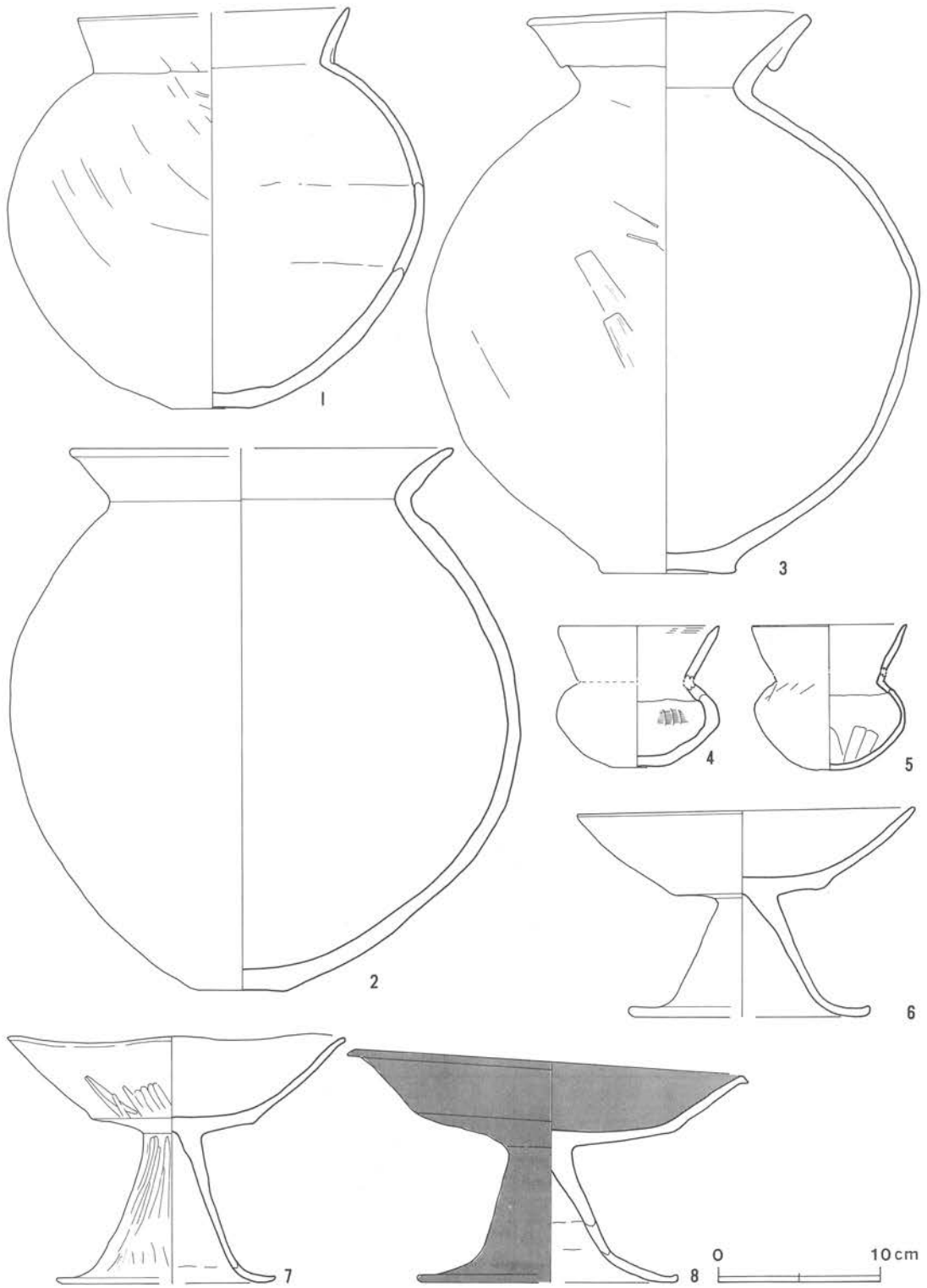
S I-52 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。

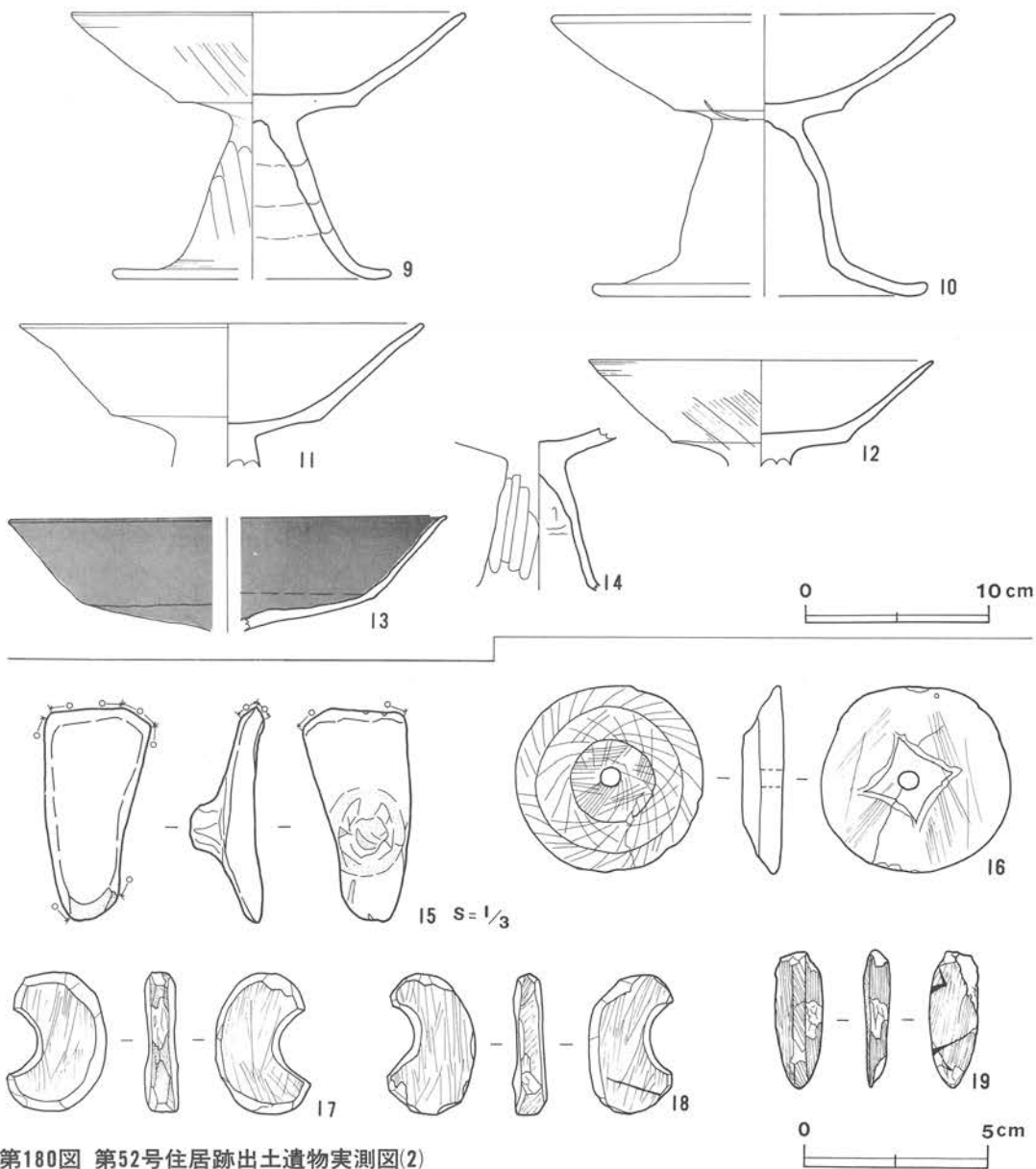
第178図 第52号住居跡実測図



図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 5	罎 土師器	A 8.8	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ, 内面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にふい黄橙色 普通	P311 貯蔵穴内覆土 90%
		B [9.0]				
		C 2.1				
6	高坏 土師器	A 21.0	脚部はラッパ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ナデ。脚裾部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P301 貯蔵穴内覆土 一部スス付着 70%
		B 13.1				
		D [15.0]				
		E 7.7				
7	高坏 土師器	A 21.4	脚部はラッパ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がり上位でやや外反する。	脚部外面縦位のヘラ磨き, 裾部内・外面横ナデ。坏口縁部外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P302 貯蔵穴内覆土 70%
		B 15.4				
		D [14.0]				
		E 9.4				



第179図 第52号住居跡出土遺物実測図(1)



第180図 第52号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 8	高 土 師 器	A 25.1 B 13.1 D [16.3] E 8.4	脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	脚部内面ナデ。坏口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩痕有り。輪積み痕有り。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P 303 70% 南東壁中央部付近床面
第180図 9	高 土 師 器	A 21.8 B 14.8 D [15.6] E 9.3	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラップ状を呈し、裾部はほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	脚部外面ヘラ削り、坏部外面ヘラ磨き、口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリアにふい橙色普通	P 304 60% 貯蔵穴内覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180図 10	高坏土師器	A [22.2] B 15.7 D [18.4] E 9.8	脚部から坏部にかけての破片。脚部は円筒状を呈し、裾部はほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	脚部内・外面ヘラナデ。坏部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・石英 橙褐色 普通	P305 50% 貯蔵穴内覆土
11	高坏土師器	A 22.2 B (8.1) E (1.7)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙褐色 普通	P306 30% 南東壁中央部付近床面
12	高坏土師器	A 19.0 B (6.0) E (0.5)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がり、上位でやや外傾する。	坏部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙褐色 普通	P307 30% 貯蔵穴内覆土
13	高坏土師器	A [24.3] B (6.4)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	坏口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P308 20% 貯蔵穴内覆土
14	高坏土師器	B (9.0) E (7.2)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙褐色 普通	P309 5% 北東壁中央部付近覆土中層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第180図 15	砥石	9.0	4.5	3.2	—	60.7	100	覆土内	D P50

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第180図 16	紡錘車	5.1	5.1	0.6	34.3	滑石	北東コーナー付近床面	Q28
17	勾玉	3.8	2.7	0.9	14.4	滑石	北西コーナー付近覆土下層	Q29
18	勾玉	3.9	2.4	0.9	13.1	滑石	北西コーナー付近覆土下層	Q30
19	石剣	2.7	1.4	0.6	3.8	滑石	北東部床面	Q31

第53号住居跡 (第181図)

位置 A地区西部, F2h₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.13m, 短軸3.78mの方形を呈している。

長軸方向 N-19°-W。

壁 壁高は25~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₄は、径25~28cmの円形を呈し、深さ42~48cmで支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。

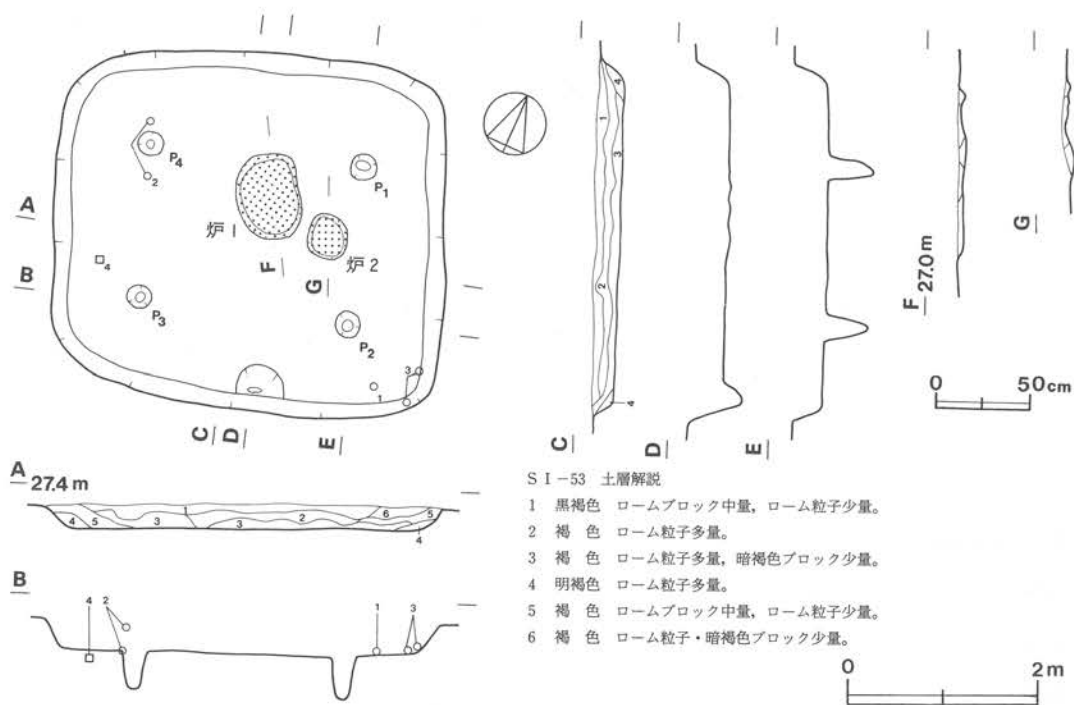
炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は、長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は径45cmほどの円形を呈し、床を約6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく熱を受け、赤変硬化している。炉₂は、炉₁の東側から検出され、径43~48cmの円形を呈し、床を約6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、炉₁同様中央部がよく熱を受け、赤変硬化しており、炉₁の補助的なものと思われる。

貯蔵穴 南壁中央部付近に検出されている。平面形は半円形を呈し、長径51cm、短径は34cmで、深さ20cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土の下層や中層から、土師器片(甕2, 碗1), 土師器細片(371点)が出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器細片(2点), 弥生式土器細片(26点)が出土している。1の甕は南東コーナー付近の覆土下層から横位の状態で, 2の甕は北西コーナー付近の覆土中層から横位の状態で, 3の碗は南東コーナー付近の覆土下層からつぶれて逆位の状態で, それぞれ出土している。

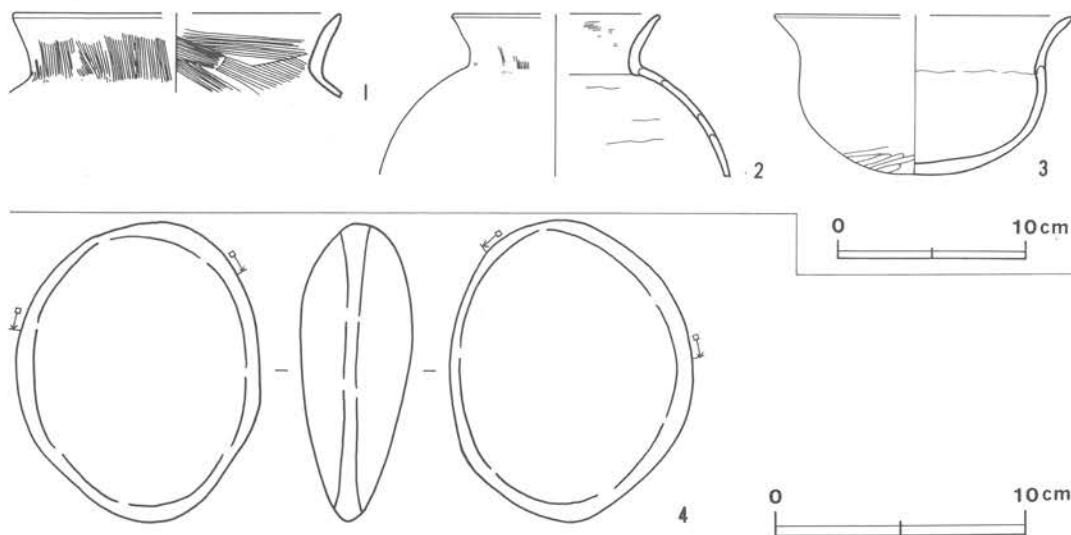
所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第181図 第53号住居跡実測図

第53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 1	甕 土師器	A [17.3] B (4.6)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後ハケ目整形。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P312 5% 南東コーナー付近覆土下層
2	甕 土師器	A [11.0] B (8.7)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケ目整形, 内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P313 5% 北西コーナー付近覆土中層
3	碗 土師器	A [15.8] B 8.6 C 2.1	体部から口縁部にかけての破片丸底。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面上位に輪積み痕有り。底部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P314 40% 南東コーナー付近覆土下層



第182図 第53号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第182図 4	甌 石	12.2	9.6	4.5	665.1	砂岩	西部床面	Q32

第54号住居跡 (第183図)

位置 A地区中央部, F2j_s区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.23m, 短軸5.31mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-34°-E。

壁 壁高は53~63cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下をほぼ全周している。上幅9~18cm, 深さ4~8cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 1条検出されている。南東壁のほぼ中間から中央に向かって延びている。長さ0.90m, 上幅10~18cm, 深さ約7cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で, 支柱穴を結ぶ線の内側及び炉付近は, よく踏み固められて硬い。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₄は, 径36~47cmのほぼ円形を呈し, 深さ70~79cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。

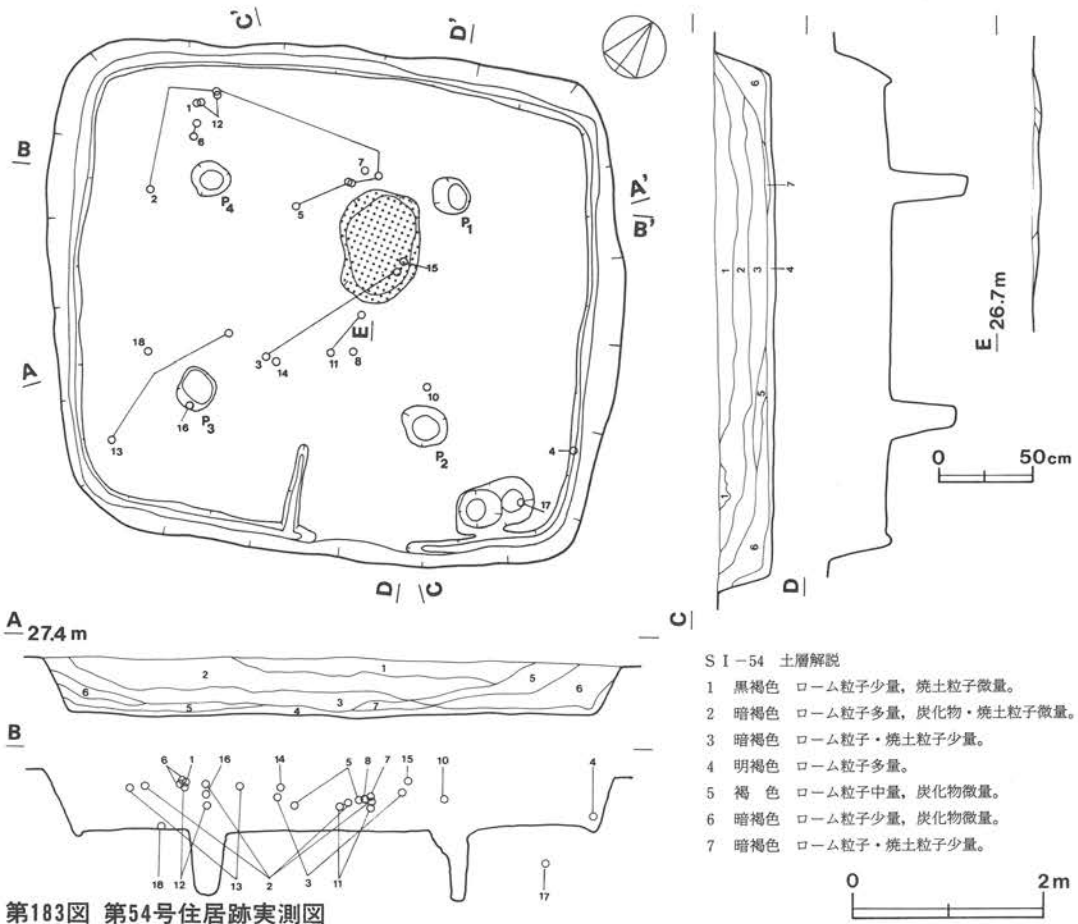
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径117cm, 短径82cmの楕円形を呈し, 床を約4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。

貯蔵穴 東コーナー付近に検出されている。平面形は長径84cm, 短径50cmの楕円形を呈し, 深さは45cmである。底面はやや凹凸があり, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・明褐色土・暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土下層から上層にかけて土師器片(壺3, 埴4, 鉢2, 高坏7, 器台1, 手捏土器1), 土師器細片(2328点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる弥生式土器細片(13点)が出土している。4の埴は東コーナー付近の覆土下層から横位の状態で, 7の埴は中央部北西寄りの覆土上層から横位の状態で, 9の小形鉢は西部中央の覆土上層から正位の状態で, 10の高坏は東部中央の覆土上層から横位の状態で, 11の高坏は中央部の覆土上層から横位の状態で, それぞれ出土している。その他, 17の器台は貯蔵穴内から逆位の状態で, 18の手捏土器は南部の床面から正位の状態で, それぞれ出土している。

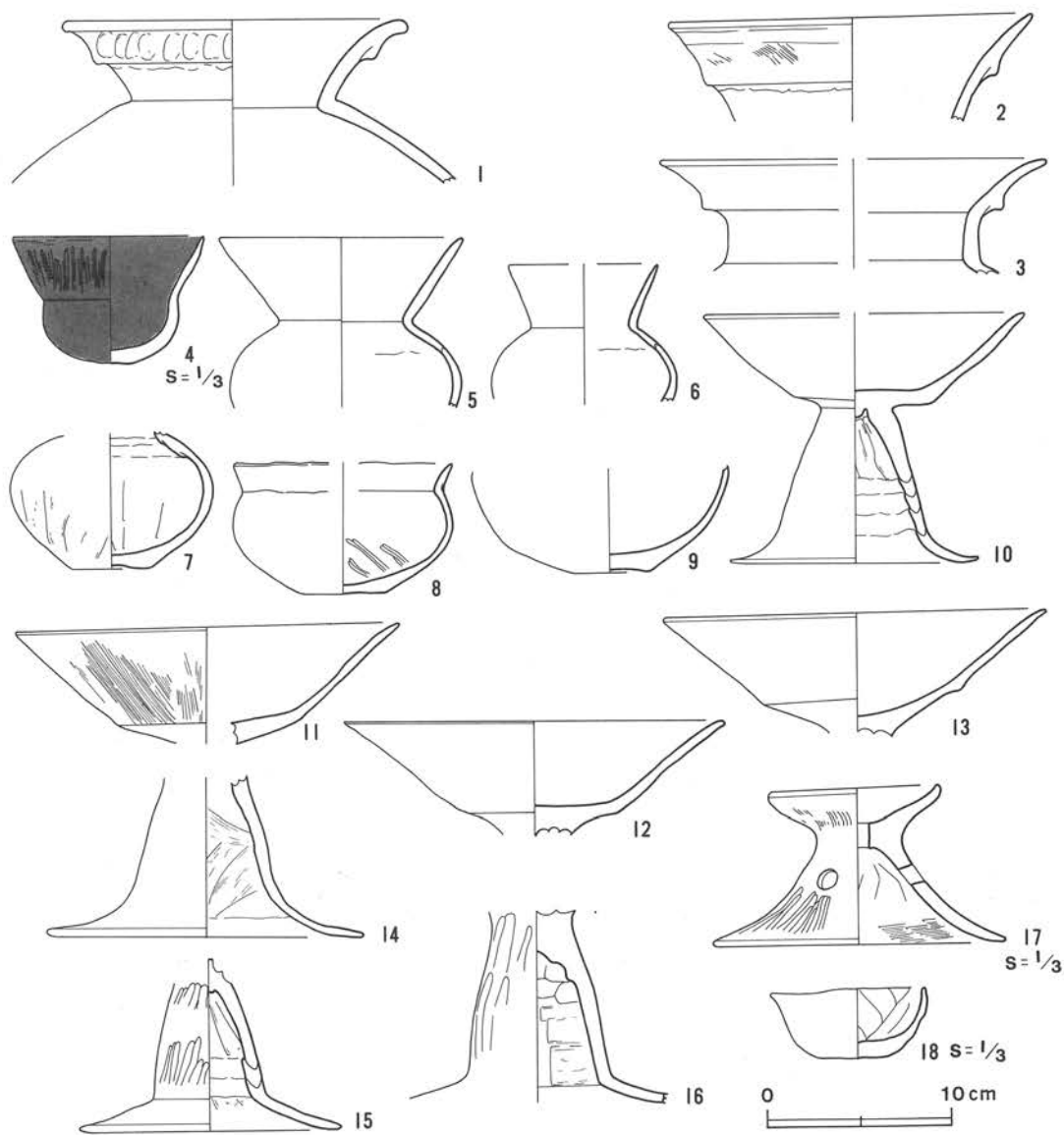
所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第183図 第54号住居跡実測図

第54号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	壺 土師器	A 18.8 B (8.9)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して頸部に至り、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は複合口縁で、外反する。	口縁部外面横ナデ後指頭圧整形、内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P315 西コーナー付近覆土上層



第184図 第54号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 2	壺 土師器	A 19.9 B (5.9)	口縁部片。口縁部は複合口縁で外反しながら立ち上がる。	口縁部外面横ナデ後一部ハケ目整形, 内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P316 10% 西部覆土上層
3	壺 土師器	A [21.0] B (6.4)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、頸部で直立気味に立ち上がり、上位で外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄橙色 普通	P317 5% 中央部覆土上層
4	埴 土師器	A 7.8 B 5.2 C 1.3	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面横ナデ後一部ハケ目整形, 内面横ナデ。胴部外面ナデ。内・外面赤彩痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P325 80% 東コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 5	埴土師器	A 13.2	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は偏平な球形状を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 326 40% 中央部北西寄り覆土中層
		B (9.2)				
6	埴土師器	A [8.0]	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は偏平な球形状を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 328 20% 西部覆土上層
		B (7.5)				
7	埴土師器	B (7.4)	口縁部欠損。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 329 60% 中央部北西寄り覆土上層
		C 4.2				
8	小形鉢土師器	A [11.9]	体部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ナデ後ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P 327 40% 中央部覆土中層
		B 7.0				
		C 4.3				
9	小形鉢土師器	B (5.6)	体部片。わずかな上げ底。体部は内彎する。	内・外面摩滅著しい。	砂粒・長石 にぶい橙色 やや不良	P 330 30% 西部中央覆土上層
		C 4.0				
10	高坏土師器	A [17.4]	胴部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がり、端部でわずかに外反する。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面ヘラナデ、内面輪積み痕有り。脚裾部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 318 70% 東部中央覆土中層
		B 13.5				
		D 13.5				
		E 8.4				
11	高坏土師器	A 20.9	坏部片。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾気味に立ち上がり大きく開く。	坏部外面ナデ後一部ハケ目整形内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 319 40% 中央部覆土上層
		B (6.6)				
12	高坏土師器	A 20.8	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾しながら立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	P 320 20% 西コーナー付近覆土上層
		B (6.3)				
13	高坏土師器	A 20.9	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・パミス 橙色 普通	P 321 30% 南部覆土上層
		B (6.5)				
14	高坏土師器	B (8.6)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内面ヘラ削り、裾部横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・パミス 橙色 普通	P 322 40% 中央部覆土上層
		D 17.1				
15	高坏土師器	B (9.3)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 323 40% 中央部覆土上層
		D 14.2				
		E (8.0)				
16	高坏土師器	B (10.7)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P 324 20% 南部覆土上層
		E (10.1)				
17	器台土師器	A 7.1	脚部はラッパ状に開く。側面に円孔(径8mm)が3か所穿たれている。器受部は皿状を呈し中央に単孔がある。	脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 331 80% 貯蔵穴内覆土
		B 6.5				
		D 11.9				
		E 4.7				
18	手捏土師器	A 6.3	体部片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	内面に指頭圧痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 332 10% 南部床面
		B 2.9				
		C 2.5				

第55号住居跡（第185図）

位置 A地区中央部よりやや南東部，G2b₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.54m，短軸7.44mの方形を呈している。

長軸方向 N-35°-W。

壁 壁高は12～19cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10～33cm，深さ5～13cmで，断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 5条検出されている。北東壁のP₁寄り，北東壁のP₂寄り，南東壁のほぼ中間，南西壁のP₃寄り及び南西壁のP₄から，それぞれ中央部に向かって延びている。長さ1.44～1.82m，上幅13～29cm，深さ6～9cmで，断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で，全体的に踏み固められ硬い。

ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は，径31～44cmの円形を呈し，深さ52～68cmで規模や配列から主柱穴と考えられる。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径46cmの円形を呈し，深さ37cmで，P₆は，長径37cm，短径31cmの楕円形を呈し，いずれも性格は不明である。

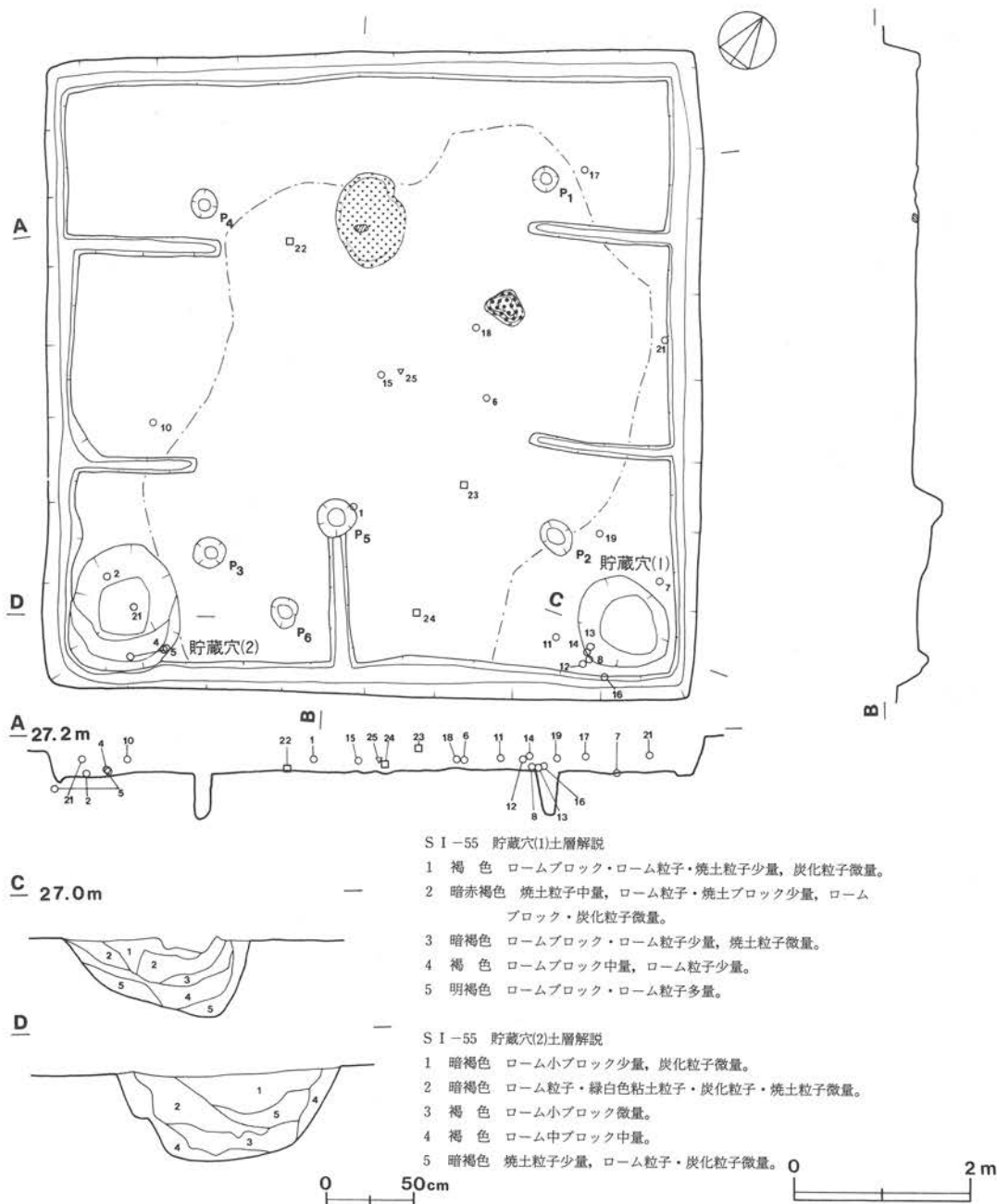
炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径108cm，短径78cmの楕円形を呈し，床を約5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

貯蔵穴 2か所検出されている。貯蔵穴(1)は，東コーナーから検出され，長径114cm，短径100cmの楕円形を呈し，深さは45cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴(2)は，南コーナーから検出され，長径147cm，短径113cmの楕円形を呈し，深さは57cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 中央部の床面から覆土中層にかけて土師器片(甕5，壺1，埴9，鉢1，高坏5)，土師器細片(1552点)，石製品及び鉄製品が少量出土している。その他，流れ込みと思われる弥生式土器細片(3点)が出土している。7の埴は東コーナー付近の床面から横位の状態で，11の埴は東コーナー付近の覆土中層から逆位の状態で，9の埴は貯蔵穴内から斜位の状態で，10の埴は北西壁中央付近の覆土中層から横位の状態で，13・14の埴は東コーナー付近の覆土下層及び中層から逆位の状態で，15の埴は中央部の覆土中層から逆位の状態で，それぞれ出土している。22の石製模造品の剣は中央部床面から，25の鉄鏃は中央部の覆土中層から，それぞれ出土している。その他，中央部北東寄りの床面からは，長径45cm，短径35cmの不定形を呈する焼土ブロックが検出されている。

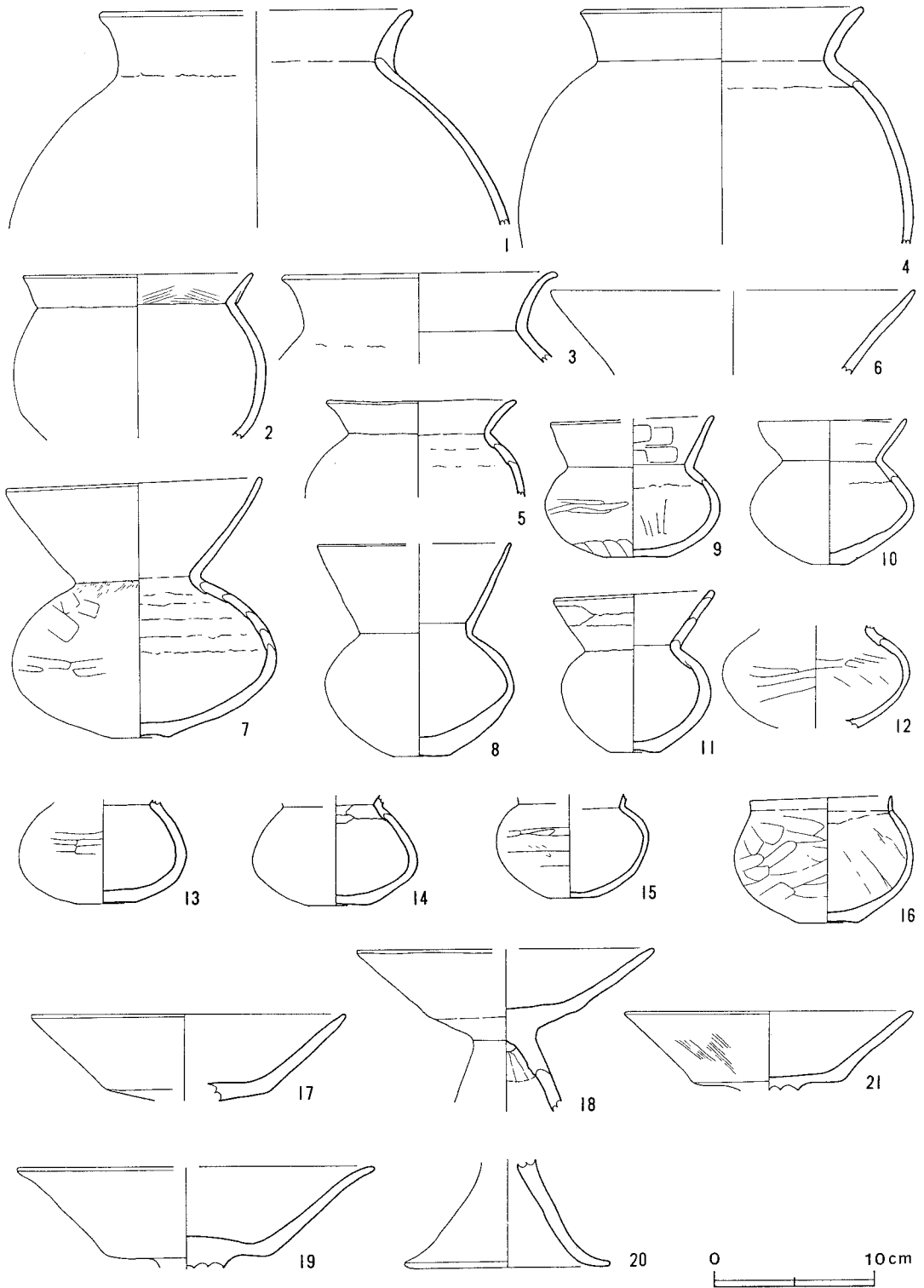
所見 本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



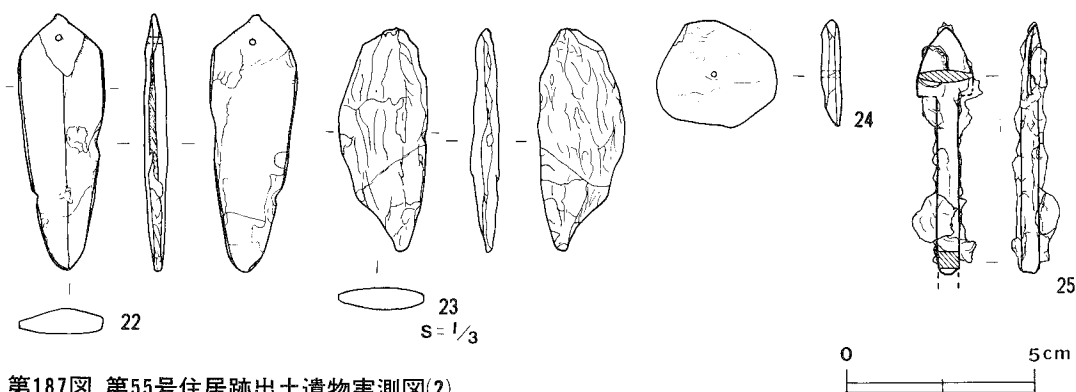
第185図 第55号住居跡実測図

第55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第186図 1	甕 土師器	A [19.5] B (13.6)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して頸部に至り、口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P333 15% 中央部南寄り覆土中層



第186图 第55号住居跡出土遺物実測図(1)



第187図 第55号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第186図 2	甕 土師器	A 14.3 B (10.3)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P348 50% 貯蔵穴内覆土
3	甕 土師器	A 17.2 B (5.7)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は大きく外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P349 10% 貯蔵穴内覆土
4	甕 土師器	A 17.7 B (14.9)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部は、「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい褐色 普通	P350 20% 南コーナー付近覆土下層
5	小形甕 土師器	A 12.0 B (6.0)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は、外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P351 20% 貯蔵穴内覆土
6	壺 土師器	A [22.7] B (5.3)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P334 10% 中央部覆土中層
7	埴 土師器	A 16.2 B 16.1 C 3.8	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色 普通	P339 90% 東コーナー付近床面
8	埴 土師器	A [12.2] B 13.2 C 3.7	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P340 85% 東コーナー付近覆土下層
9	埴 土師器	A [10.2] B 8.8 C 4.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部外面横ナデ、内面横ナデ後ヘラ削り。胴部内・外面ヘラ削り。輪積み痕有り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P341 90% 貯蔵穴内覆土
10	埴 土師器	A 9.4 B 9.0 C 2.3	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位より上に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P342 100% 北西壁中央部付近覆土中層
11	埴 土師器	A 10.1 B 10.0 C 3.1	わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P343 80% 東コーナー付近覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第186図 12	埴土師器	B (6.4)	胴部片。胴部は、偏平な球形形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒にぶい褐色普通	P 353 30% 東コーナー付近覆土中層
13	埴土師器	B (6.9) C 3.8	口縁部欠損。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい橙色 普通	P 345 70% 東コーナー付近覆土下層
14	埴土師器	B (6.9) C 3.8	口縁部欠損。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位よりやや下に持つ。	胴部内・外面ナデ。	砂粒にぶい黄橙色普通	P 346 70% 東コーナー付近覆土中層
15	埴土師器	B (6.4) C 3.0	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	胴部内面ナデ後ヘラ削り、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリアにぶい黄橙色普通	P 347 70% 中央部覆土中層
16	鉢土師器	A 9.0 B 7.9 C 4.9	わずかな上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリアにぶい黄褐色 普通	P 344 90% 東コーナー付近覆土下層
17	高坏土師器	A 19.7 B (5.5)	口縁部片。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい橙色 普通	P 335 45% 北コーナー付近覆土中層
18	高坏土師器	A [18.8] B (10.2) E (4.7)	脚部から口縁部にかけての破片。脚部は円筒状を呈している。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面摩滅が著しい。脚部内面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 普通	P 336 40% 中央部覆土中層
19	高坏土師器	A [23.6] B (6.1)	口縁部片。坏部は外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい橙色 普通	P 337 30% 東コーナー付近覆土中層
20	高坏土師器	B (6.8) D 13.6	脚部片。脚部はラッパ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい橙色 普通	P 338 40% 南東壁中央部付近床面
21	高坏土師器	A 18.0 B (5.0)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリアにぶい褐色 普通	P 352 50% 南コーナー付近覆土上層

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考		
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
第187図	22	石	剣	6.8	2.4	0.6	14.0	滑石	中央部床面	Q 33
	23	不	明	9.0	3.5	1.2	37.5	滑石	中央部覆土上層	Q 34
	24	有孔	円板	2.8	3.2	0.6	6.9	滑石	東部床面直上	Q 35

図版番号	器種	全長	鍔身長	鍔身幅			関幅	茎長	備考		
				先幅	中幅	元幅					
第187図	25	鉄	鍔	(6.8)	2.0	0.5	1.5	1.4	0.2	4.8	中央部覆土中層M2

第57号住居跡（第188図）

位置 A地区南東部、G3d₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.40m、短軸3.38mの方形を呈している。

長軸方向 N-32°-W。

壁 壁高は32~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側は、踏み固められ硬い。

ピット 3か所(P₁~P₃)検出されている。P₁~P₃は、径30~33cmの円形を呈し、深さ23~28cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。4本柱と思われるが、他に支柱穴は検出されない。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りに検出されている。平面形は長径108cm、短径69cmの楕円形を呈し、床を約5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナーから検出されている。平面形は長径122cm、短径は105cmの楕円形を呈し、深さは55cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

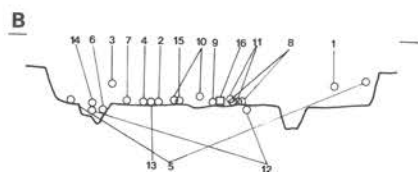
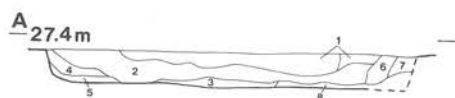
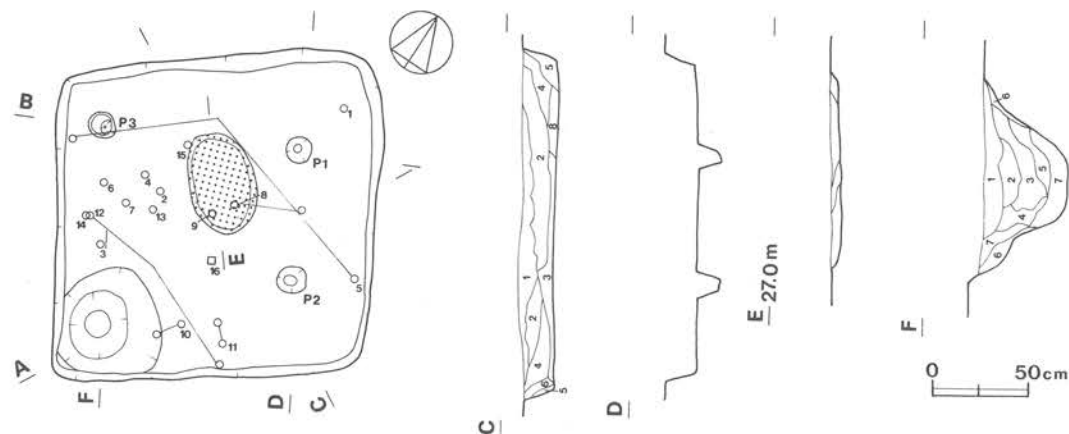
覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土の下層や中層から土師器片(埴4, 高坏11), 土師器細片(231点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる縄文式土器細片(1点), 弥生式土器細片(5点)が出土している。1の埴は北コーナー付近の覆土中層から斜位の状態で, 2の埴は中央部西寄りの覆土下層から横位の状態で, 5の高坏は西コーナー付近の床面から逆位の状態で, 6の高坏は中央部西寄りの床面から横位の状態で, 8の高坏は中央部の床面から斜位の状態で, 9の高坏は中央部の覆土下層から逆位の状態で, 10の高坏は南東壁中央部付近の覆土下層から逆位の状態で, 11の高坏は南東壁中央部付近の床面からつぶれた状態で, 12・14の高坏は南西壁中央部付近の床面から正位の状態で, 13の高坏は中央部西寄りの床面から逆位の状態で, それぞれ出土している。

所見 本跡は, 中央部及び東部の床面や覆土下層から炭化材や焼土等が検出されていることから火災住居跡と考えられ, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第57号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 1	埴 土師器	A 12.7	脚部から口縁部にかけての破片平底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ, 内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P367 30% 北コーナー付近覆土中層
		B 12.4				
		C 3.1				
2	埴 土師器	A 8.7	上げ底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ, 内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P368 70% 中央部西寄り覆土下層
		B 9.9				
		C 4.0				
3	埴 土師器	A [9.0]	平底。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り, 内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P369 80% 南西壁中央部付近覆土中層
		B 9.2				
		C 3.6				
4	埴 土師器	B (7.5)	胴部片。胴部は偏平な球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P370 35% 中央部西寄り覆土下層
5	高坏 土師器	A 18.9	脚部はラッパ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き, 内面ヘラナデ, 輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P356 100% 西コーナー付近床面
		B 13.6				
		D 15.5				
		E 8.3				



S I - 57 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。

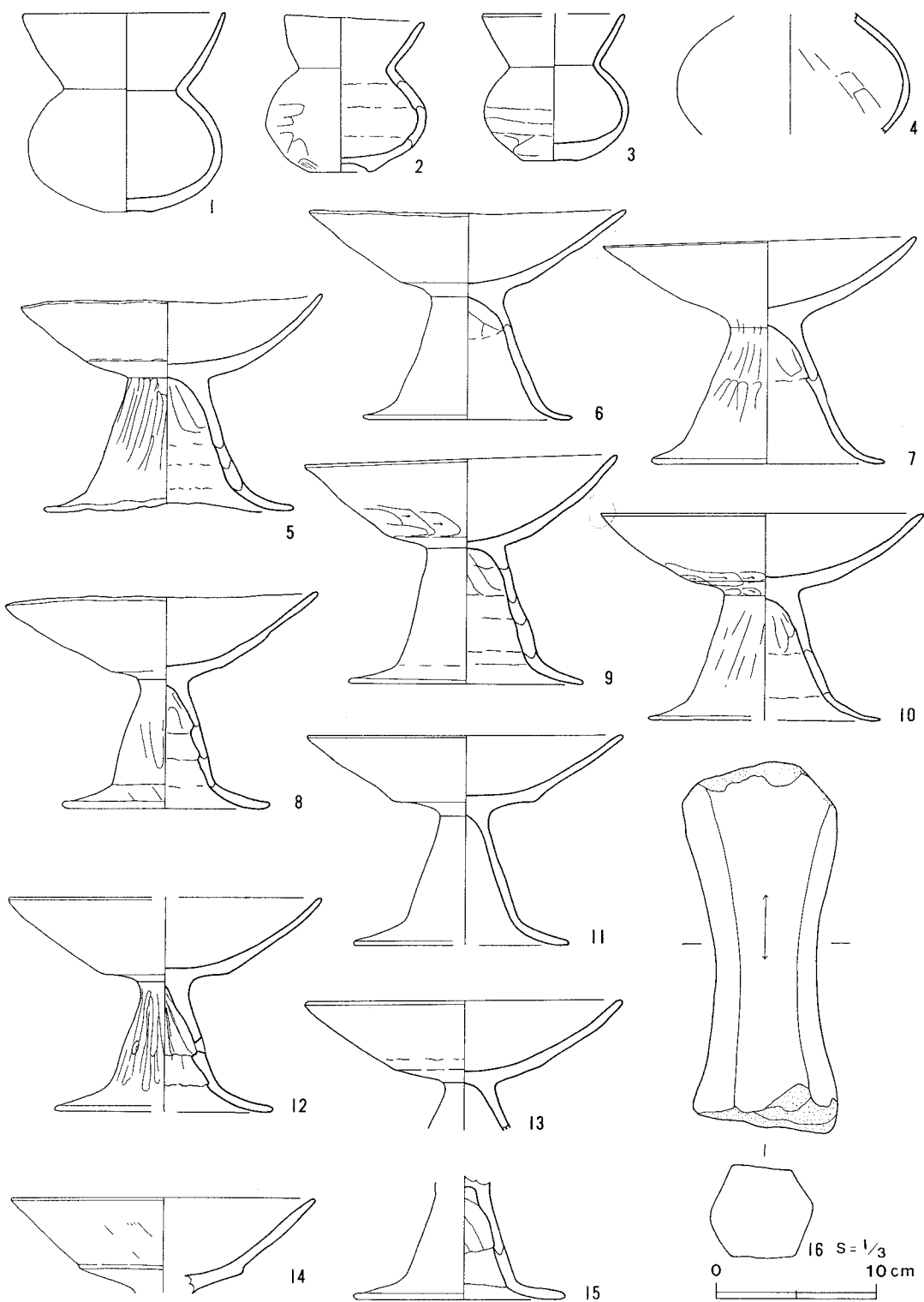
- 3 褐色 ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 6 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子微量。
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量。
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。

S I - 57 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量。
- 7 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量。

第188図 第57号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 6	高坏土 節器	A 19.9	脚部はラッパ状を呈し, 裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち, 外傾気味に立ち上がり, 大きく開く。	坏部内・外面ナデ。脚部内面上位指ナデ, 輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P357 95% 中央部西寄り床面
		B 13.1				
		D 13.1				
		E 7.8				
7	高坏土 節器	A 19.6	脚部はラッパ状を呈し, 裾部でほぼ水平に広がる。坏部は内彎気味に立ち上がり, 大きく開く。	坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き, 内面上位指ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P358 80% 中央部西寄り床面
		B 14.2				
		D 14.5				
		E 9.0				
8	高坏土 節器	A 19.8	脚部はラッパ状を呈し, 裾部でほぼ水平に広がる。坏部は外傾気味に立ち上がり, 大きく開く。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ, 内面上位指ナデ, 輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P359 90% 中央部床面
		B 13.5				
		D 13.0				
		E 8.2				
9	高坏土 節器	A 19.6	脚部はラッパ状を呈し, 裾部でほぼ水平に広がる。坏部は内彎気味に立ち上がり, 大きく開く。	坏部外面ヘラ削り, 内面ナデ。脚部外面ヘラナデ, 内面上位指ナデ, 輪積み痕有り。	砂粒・雲母・バミスに ぶい橙色 普通	P360 90% 中央部覆土下層
		B 14.3				
		D 14.7				
		E 8.5				
10	高坏土 節器	A 20.2	脚部はラッパ状を呈し, 裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち, 内彎気味に立ち上がり, 大きく開く。	坏部外面ヘラ削り, 内面ナデ。脚部外面ヘラナデ, 内面上位指ナデ, 輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P361 70% 南東壁中央部付近覆土下層
		B 12.9				
		D [14.6]				
		E 7.8				



第189图 第57号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第189図 11	高 坏 土 師 器	A 19.8 B 13.0 D [13.3] E 8.5	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラップ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 362 50% 南東壁中央部付近床面
12	高 坏 土 師 器	A [19.6] B 13.3 D [13.6] E 8.2	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラップ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。脚部中央に円孔(径8mm)が2か所穿たれている。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。脚部外面へラ磨き、内面へラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 363 40% 南西壁中央部付近床面
13	高 坏 土 師 器	A 19.9 B (8.1) E (3.0)	脚部欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、内傾気味に立ち上がり大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P 364 50% 中央部西寄り床面
14	高 坏 土 師 器	A 19.1 B (6.0)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 365 50% 南西壁中央部付近床面
15	高 坏 土 師 器	B (7.4) D 13.2 E 6.9	脚部片。脚部はラップ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内面へラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 366 30% 中央部西寄り覆土下層

図版番号	器 種	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量(g)			
第189図	16 砥 石	17.4	7.3	4.9	798.4	凝 灰 岩	中央部覆土下層	Q 36

第58号住居跡 (第190図)

位置 A地区南東部、G3c₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、第59号住居跡の北西コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸8.60m、短軸〔8.50〕mの方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-38°-W。

壁 壁高は30~56cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅11~20cm、深さ8~11cmで、断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 4条検出されている。南東壁のP₃寄り、南西壁のP₄寄り、北西壁のP₄寄り及び北西壁のP₁寄りから、それぞれ中央部に向かって延びている。長さ1.24~1.64m、上幅12~22cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められ硬い。

ピット 10か所(P₁~P₁₀)検出されている。P₁~P₄は、径14~21cmの円形を呈し、深さ45~97cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は、径14cmの円形を呈し、深さ51cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P₆~P₁₀は、径13~36cmの円形を呈し、深さ15~47cmで、性格は不明である。

炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は、長軸線上の中央からやや北西寄りに検出され、平面形は長径83cm、短径56cmの楕円形を呈し、床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉₂は、長軸線上の中央から南東寄りに検出され、平面形は、長径40cm、短径32cmの楕円形を呈し、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床はいずれも中央部が熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナーに検出されている。平面形は長径73cm、短径は52cmの楕円形を呈し、深さ32cmである。底面は丸底で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土の下・中層から土師器片(甕5, 壺1, 埴2, 鉢1, 高坏7), 土師器細片(929点)が出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器細片(1点), 弥生式土器細片(30点)が出土している。1の甕は北西壁中央部付近の覆土上層から逆位の状態で、7の埴は北西壁中央部付近の覆土中層から斜位の状態で、8の埴は南コーナー付近の床面から逆位の状態で、10の高坏は北西壁中央部付近の覆土下層から逆位の状態で、11の高坏は南西壁中央部付近の床面から横位の状態で、それぞれ出土している。その他、中央からやや北東寄りの床面からは長径88cm、短径47cmの楕円形を呈する焼土ブロックが検出されている。

所見 本跡は、重複関係から第59号住居跡より新しい時期に構築されている。床面や覆土下層から炭化材や焼土が検出されていることなどから火災住居跡と考えられ、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

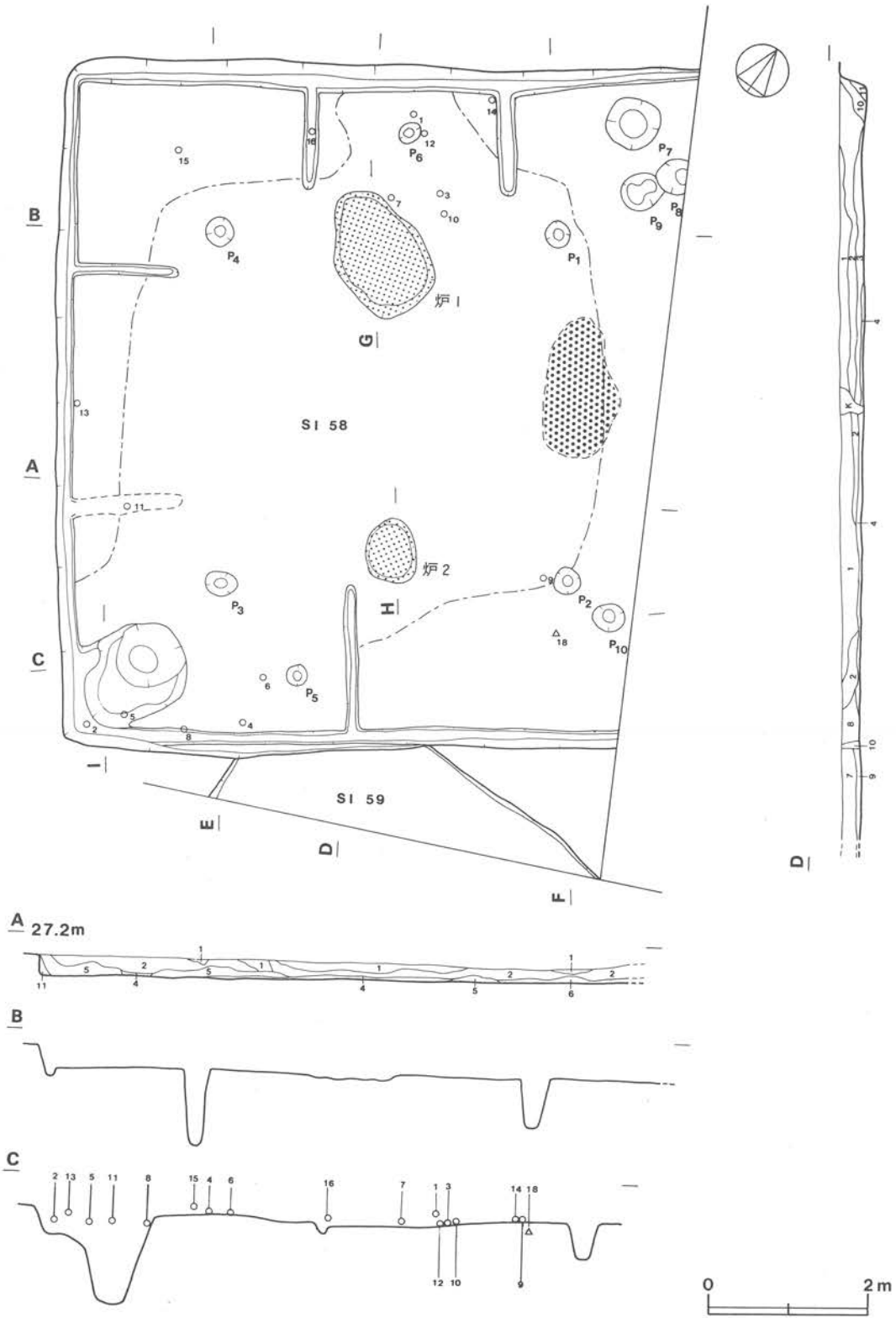
第58号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	甕 土師器	A 20.2 B (22.7)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリアにぶい赤褐色 普通	P 371 50% 北西壁中央部付近覆土上層
2	甕 土師器	A [18.5] B 26.5 C 5.9	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、頸部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 372 70% 南コーナー付近覆土下層
3	甕 土師器	B (14.8) C 5.5	胴部中・下位の破片。突出した平底。胴部は球形状を呈する。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・パミス 明赤褐色 やや不良	P 373 40% 北西壁中央部付近覆土下層
4	甕 土師器	B (17.7) C 6.6	胴部中・下位の破片。突出した平底。胴部は球形状を呈する。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 374 30% 南コーナー付近覆土下層
5	甕 土師器	B (6.7) C 4.5	胴中央部以上欠損。平底。胴部は内彎する。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 379 50% 南コーナー付近覆土下層
6	壺 土師器	A [20.0] B (6.3)	口縁部片。口縁部は複合口縁で外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 375 5% 南コーナー付近覆土下層
7	埴 土師器	A [8.9] B 9.4 C 3.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P 385 90% 北西壁中央部付近覆土中層 一部スス付着

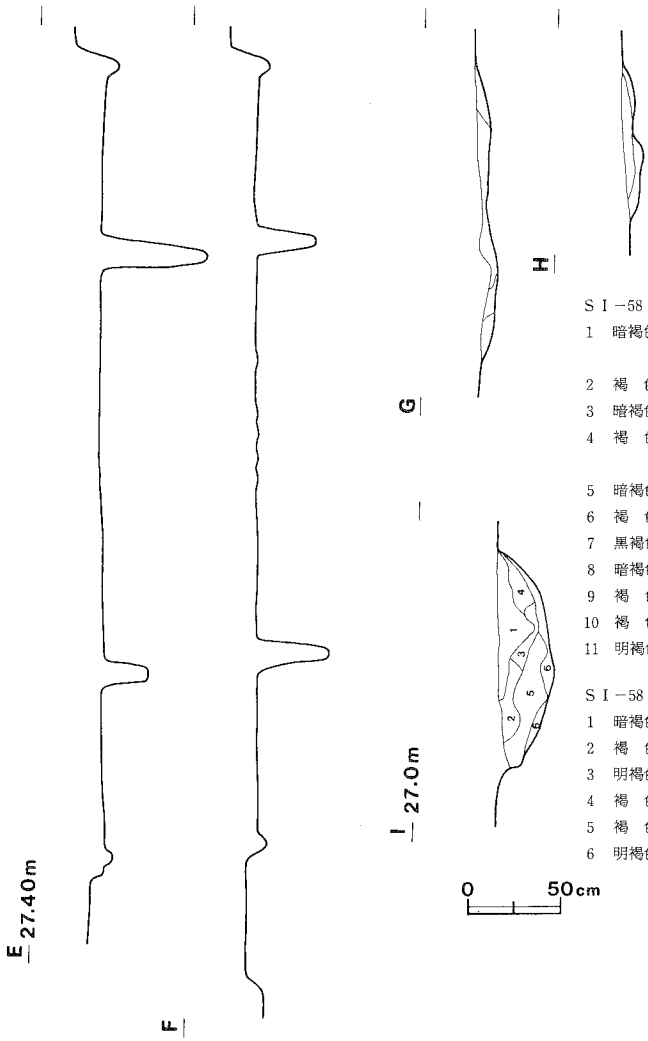
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 8	埴土師器	B [11.1] C 3.9	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P 386 70% 南コーナー付近床面 一部スス付着
9	小形鉢土師器	A 10.5 B 7.7 C 3.4	わずかな上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は頸部から外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 赤橙色 普通	P 384 95% 中央部東寄り床面 一部スス付着
10	高坏土師器	A 22.3 B (12.4) E (7.0)	脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に稜を持ち、外反して立ち上がり、大きく開く。脚裾部欠損。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P 376 90% 北西壁中央部付近覆土下層
11	高坏土師器	A 15.7 B 12.2 D [10.2] E 7.6	脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して開く。	坏部外面ヘラナデ、内面横ナデ。脚部内・外面ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 377 80% 南西壁中央部付近床面
12	高坏土師器	B (11.1) D [12.5] E 8.7	坏部上半欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は下位に稜を持つ。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 378 50% 北西壁中央部付近覆土下層
13	高坏土師器	A [19.2] B (5.8)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち外反気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部外面ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 380 20% 南西壁中央部付近覆土中層
第192図 14	高坏土師器	B (10.1) D 16.6 E 10.0	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部内面上位指ナデ。裾部は内外面横ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母・パミス 橙色 普通	P 381 50% 北西壁中央部付近床面
15	高坏土師器	B (9.5) D [12.3] E 7.5	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 382 40% 西コーナー付近覆土上層
16	高坏土師器	B (9.1) D [15.5] E 8.0	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P 383 20% 北西壁中央部付近覆土中層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第192図 17	球状土錘	2.8	3.0	3.0	5.5	23.7	100	北西壁中央部付近覆土下層	D P 51

図版番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第192図 18	鎌	(11.0)	(5.8)	0.2	26.8	中央部東寄り床面 M 3



第190图 第58・59号住居跡実測図

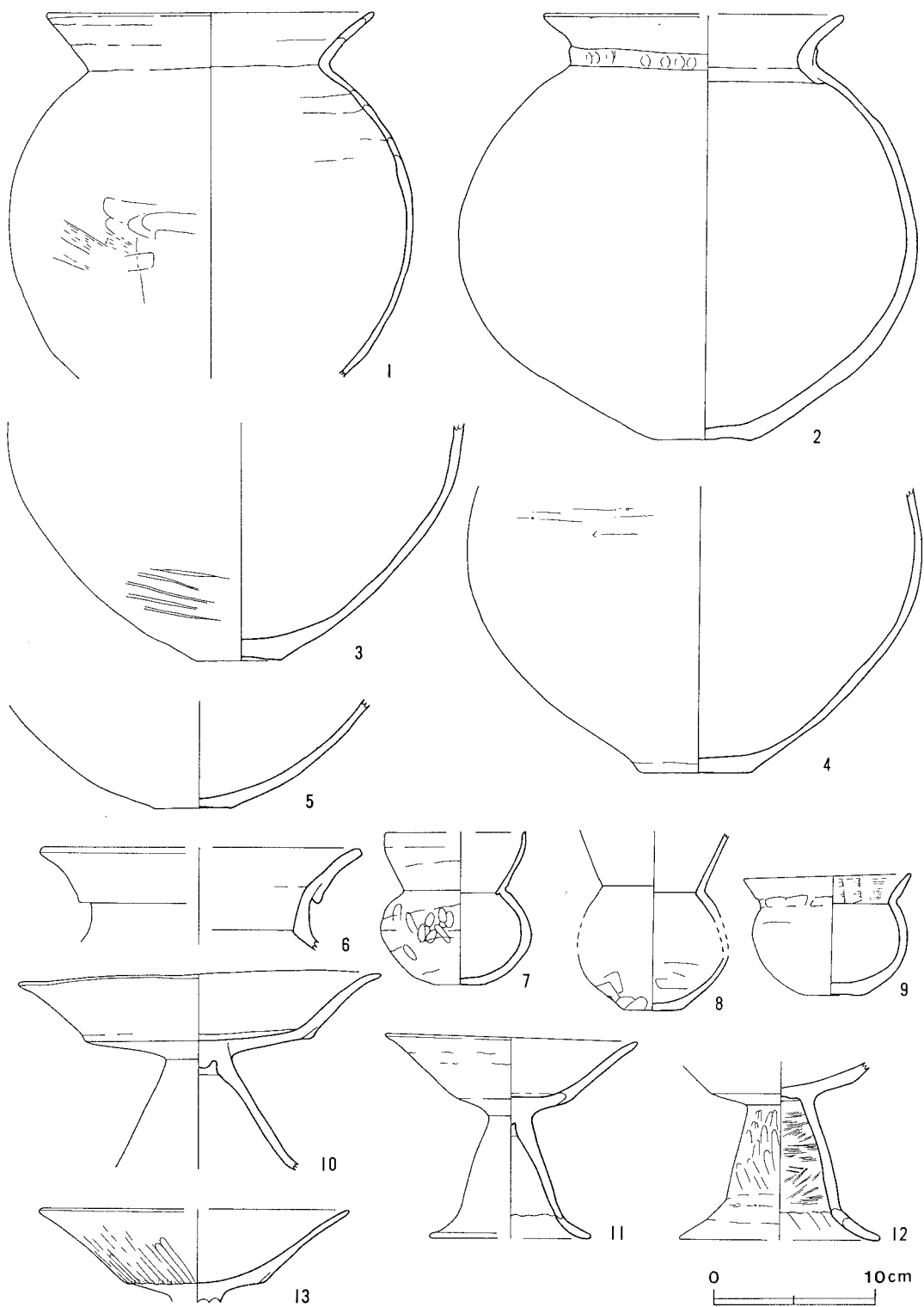


SI-58・59 土層解説

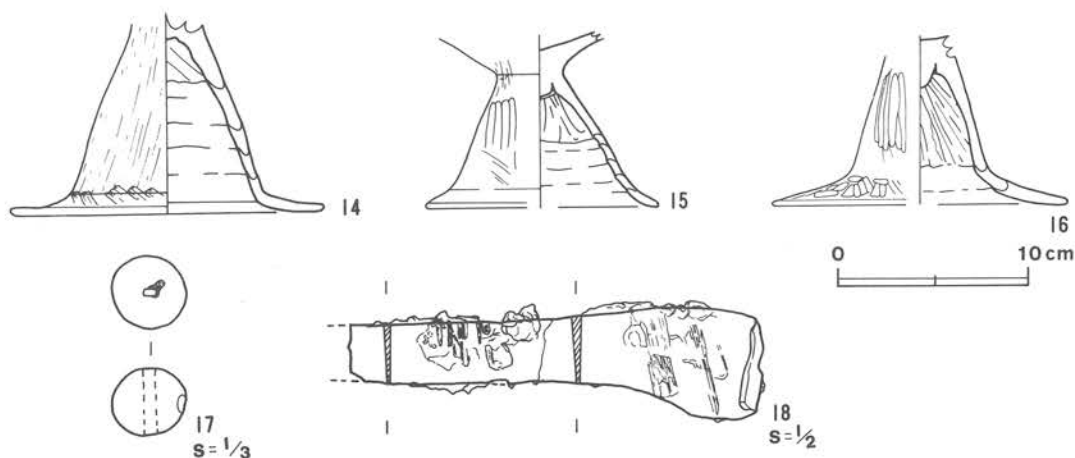
- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 4 褐色 ロームブロック多量, ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 5 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 6 褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 9 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 10 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量。
- 11 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。

SI-58 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量。
- 2 褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量。
- 3 明褐色 ロームブロック・ローム粒子中量。
- 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 5 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 6 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。



第191图 第58号住居跡出土遺物実測図(1)



第192図 第58号住居跡出土遺物実測図(2)

第60号住居跡 (第193図)

位置 B地区西部, F4g₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は, 第62号住居跡の北部を掘り込み, 第30・31・131号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.84m, 短軸5.08mの長方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-43°-E。

壁 壁高は14~40cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められ硬い。

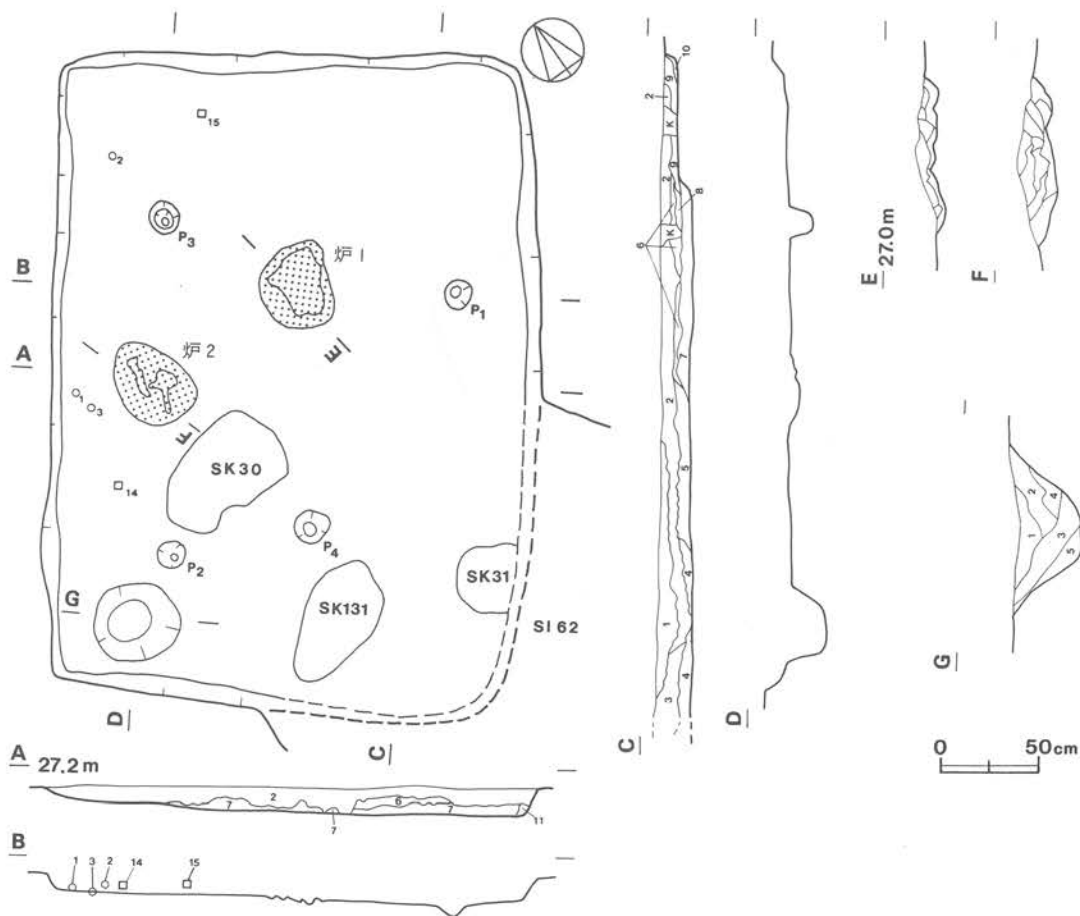
ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₃は, 径29~35cmの円形を呈し, 深さ13~48cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は, 第31号土坑に削り込まれ検出されない。P₄は径35cmの円形を呈し, 深さ45cmで性格は不明である。

炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は, 中央からやや北東寄りに検出されており, 平面形は長径95cm, 短径58cmの楕円形を呈し, 床を約20cm掘り込んだ地床炉である。炉₂は, 長軸線上の中央から北西寄りに検出されており, 平面形は, 長径87cm, 短径72cmの楕円形を呈し, 床を約10cm掘り込んだ地床炉である。いずれも, 炉床は全体によく熱を受け, 赤変硬化している。

貯蔵穴 西コーナー付近に検出されている。平面形は長径91cm, 短径82cmの楕円形を呈し, 深さ32cmである。底面は平坦で, 壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 床面や覆土の下・中層から土師器片(甕1, 高坏2), 土師器細片(577点)及び石製品が少量出土している。その他, 流れ込みと思われる弥生式土器細片(140点)が出土している。1の甕は北西壁中央部付近の覆土下層から, 2の高坏は北コーナー付近の覆土中層から正位の状態で, 3の高坏は北西壁中央部付近の床面から正位の状態で, それぞれ出土している。14の石製模造品の剣



SI-60 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量。
- 4 暗褐色 炭化材・焼土粒子少量、ローム粒子微量。
- 5 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量。
- 6 褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量。
- 7 褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 褐色 ローム小ブロック中量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量。
- 10 褐色 ローム小ブロック少量。
- 11 褐色 ローム中ブロック少量。

SI-60 貯蔵穴土層解説

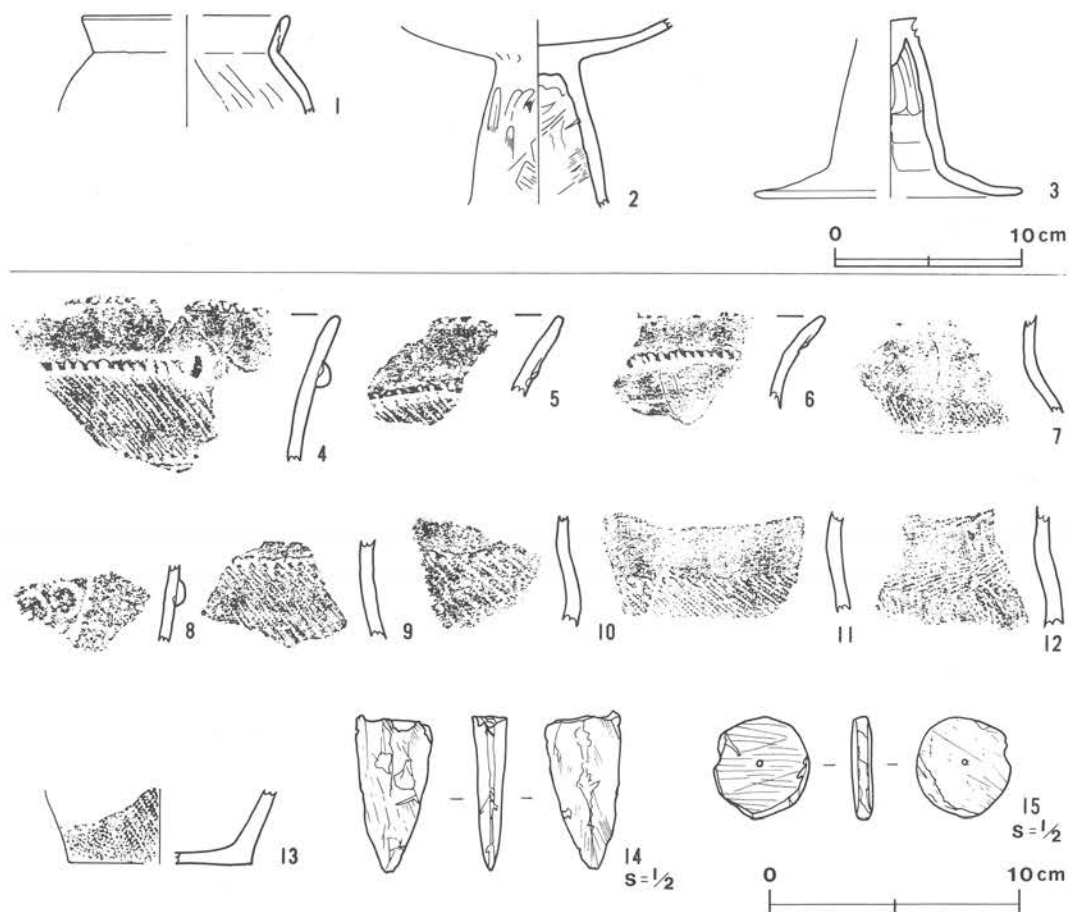
- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子・炭化大ブロック・炭化粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・ローム大ブロック・炭化粒子少量。
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック中量、焼土粒子少量。
- 4 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、炭化小ブロック微量。
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック微量。



第193図 第60号住居跡実測図

第60号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 1	甕 土師器	A [11.0] B (5.2)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P387 10% 北西壁中央部付近覆土下層



第194図 第60号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 2	高坏土師器	B (10.1) E (7.8)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は円筒状を呈し、坏部は内彎する。	脚部外面へラ削り、内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリアにぶい橙色 普通	P388 40% 北コーナー付近覆土中層
3	高坏土師器	B (9.6) D [14.4] E (8.6)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内面へラナデ、裾部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリアにぶい黄橙色 普通	P389 30% 北西壁中央部付近床面

は西部の覆土中層から、15の有孔円板は北コーナー付近の床面から、それぞれ出土している。

所見 本跡は、重複関係から第62号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第194図の4～13は第60号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部には縄文原体による圧痕が施され、その下位には附加条1

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第194図	14	石 剣	(4.2)	2.0	1.0	(8.0)	滑石	西部覆土中層	Q37
	15	有孔円板	2.7	2.7	0.6	6.5	滑石	北コーナー付近床面	Q38

種(附加2条)の縄文が施されている。7・9～12は頸部から胴部上位にかけての破片で、頸部は無文帯で胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。8は口縁部の破片で粘土粒が貼付されている。13は底部片で、外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第61号住居跡(第195図)

位置 B地区西部、F4e₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.05m、短軸6.66mの長方形を呈するものと思われる。

長軸方向 N-47°-W。

壁 南西壁は削平されているが、残存している壁の壁高は45～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅8～32cm、深さ4～8cmで、断面形状は皿状を呈している。

間仕切り溝 1条検出されている。南東壁のほぼ中間から中央部に向かって延びている。長さ19.2cm、上幅14～28cm、深さ7～10cm、断面形は「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、踏み固められ硬い。

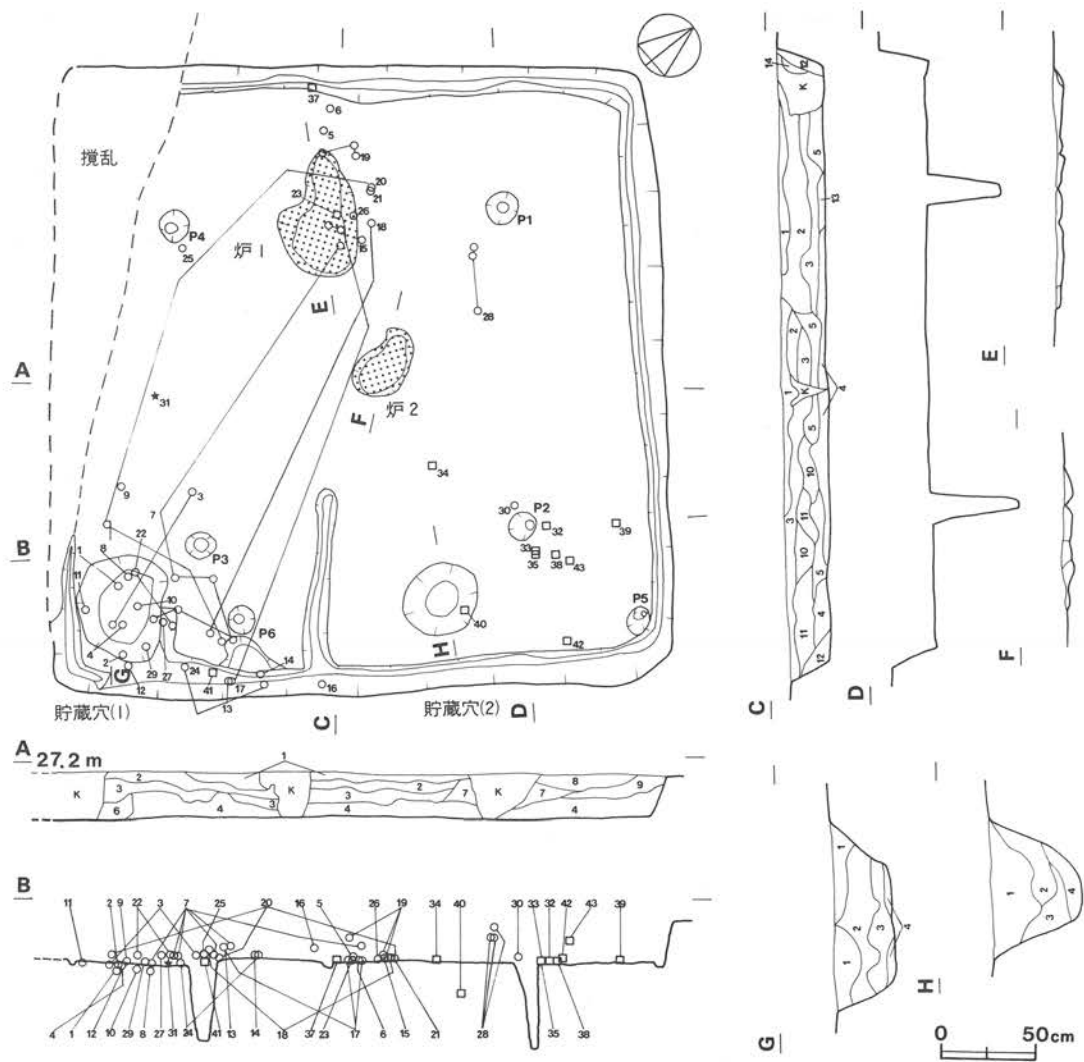
ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は、径33～36cmの円形を呈し、深さ81～93cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅は径30cmの円形を呈し、深さ45cmで出入口施設に伴うピットと思われる。P₆は長径30cm、短径24cmの楕円形を呈し、深さ63cmで性格は不明である。

炉 2か所(炉₁・炉₂)検出されている。炉₁は長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径133cm、短径83cmの楕円形を呈し、床を約4cm掘り込んだ地床炉である。炉₂は長軸線上の中央付近から検出されている。平面形は、長径81cm、短径40cmの楕円形を呈し、床を約6cm掘り込んだ地床炉である。いずれも、炉床は全体によく熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 2か所検出されている。貯蔵穴(1)は、南コーナーから検出され、長径112cm、短径88cmの楕円形を呈し、深さは39cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。貯蔵穴(2)は、南東壁中央部付近から検出され、長径84cm、短径74cmの楕円形を呈し、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 全体的にローム中ブロックを含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下層から土師器片(甕7、壺2、埴7、高坏14)、土師器細片(1650点)及び土製品・石製品が出土している。その他、流れ込みと思われる弥生式土器細片(50点)が出土している。1の甕は貯蔵穴内から斜位の状態で、3・4の甕は貯蔵穴内から重なり合って横位の状態で、5の甕は北西壁中央部付近の床面から正位の状態で、6の甕は北西壁中央部付近の床面から横位の状態で、8の壺は貯蔵穴内から横位の状態で、10・11の埴は貯蔵穴内から横位の状態で、それぞれ出土している。17の高坏は中央部西寄りの床面から横位の状態で、18・19の高坏



S I-61 土層解説

- | | | | |
|--------|--|---------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。 | 7 暗褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。 |
| 2 極暗褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。 | 8 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量。 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。 | 9 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック・焼土粒子少量。 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック・ローム中ブロック中量, ローム大ブロック・焼土粒子少量。 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子少量。 |
| 5 褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック焼土粒子少量。 | 11 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子少量。 |
| 6 黒褐色 | ローム中ブロック・黒色土大ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。 | 12 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量。 |
| | | 13 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量。 |
| | | 14 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量。 |

S I-61 貯蔵穴(1)土層解説

- | | |
|-------|------------------------------|
| 1 褐色 | ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量。 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量。 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。 |
| 4 明褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。 |

S I-61 貯蔵穴(2)土層解説

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 1 明褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量。 |
| 2 明褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子多量。 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。 |
| 4 橙色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。 |



第195図 第61号住居跡実測図

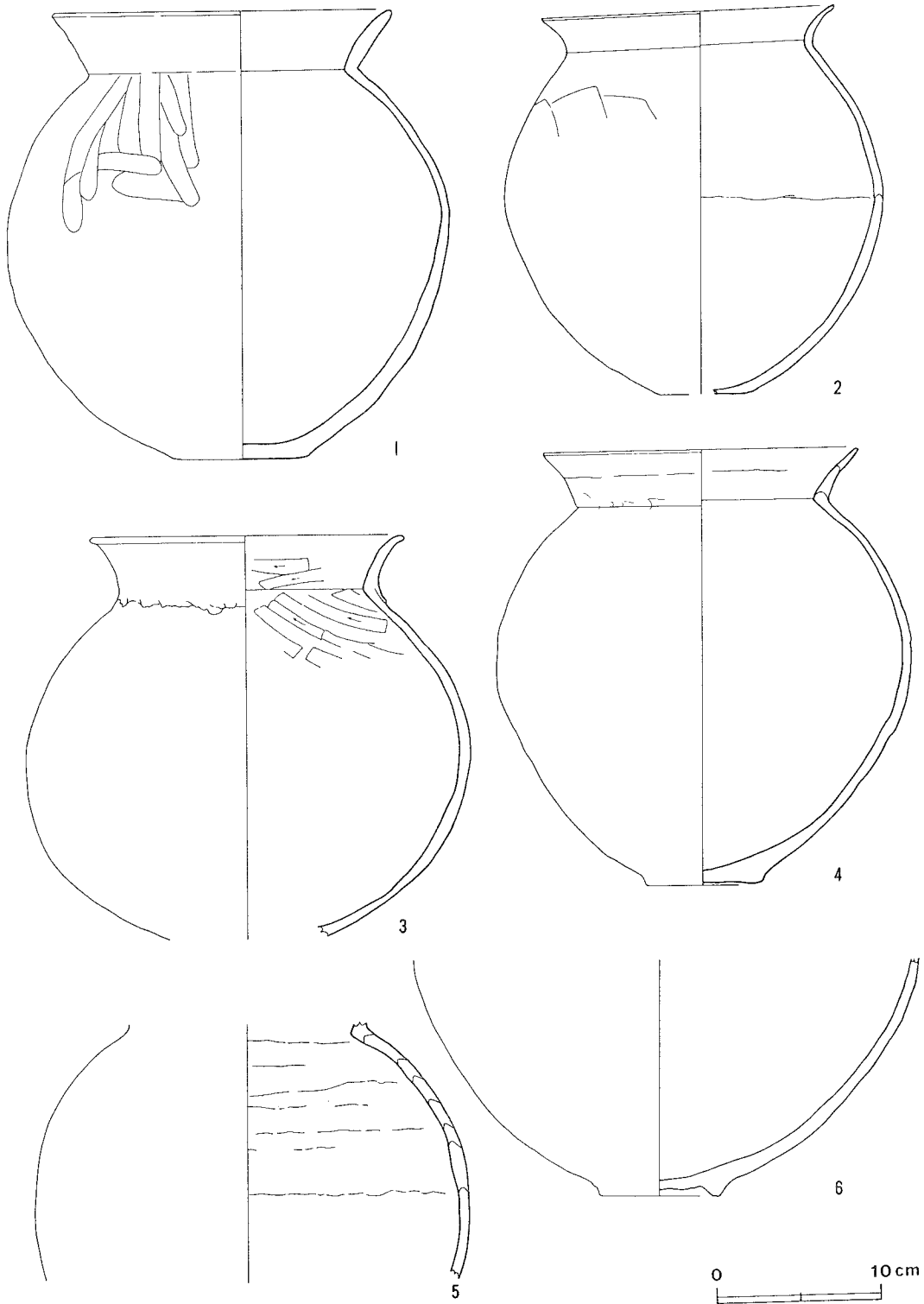
第61号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図 1	甕 土師器	A 21.0	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス 橙色 普通	P 390 95% 貯蔵穴内覆土
		B 27.7				
		C 8.6				
2	甕 土師器	A 18.0	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	P 391 90% 貯蔵穴内覆土
		B 25.0				
		C [5.2]				
3	甕 土師器	A 19.5	底部欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部外面横ナデ、内面横ナデ調整後ヘラナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 392 80% 貯蔵穴内覆土
		B (24.7)				
4	甕 土師器	A 19.5	胴部下位から口縁部にかけての破片。突出した平底。胴部は球形状を呈する。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ、輪積み痕有り。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P 393 60% 貯蔵穴内覆土
		B 27.0				
		C 7.2				
5	甕 土師器	B (16.1)	胴部中位から上位にかけての破片。胴部は内彎する。	胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 394 40% 北西壁中央部付近床面
6	甕 土師器	B (14.5)	胴部上半欠損。突出した上げ底。胴部は内彎する。	胴部外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 395 50% 北西壁中央部付近床面
		C 9.6				
第197図 7	甕 土師器	B (16.1)	胴部下位から口縁部にかけての破片。平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反する折り返し口縁。	胴部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒 赤褐色 普通	P 396 40% 南コーナー付近覆土下層
		C 5.1				
8	壺 土師器	A 15.5	わずかな上げ底。胴部は球形状を呈し、口縁部は複合口縁で、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 397 70% 貯蔵穴内覆土
		B 19.7				
		C 5.7				
9	壺 土師器	A 12.8	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は複合口縁で、頸部から外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。胴部外面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 黄橙色 普通	P 398 40% 南コーナー付近覆土下層
		B (13.7)				
10	埴 土師器	A 12.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P 413 90% 貯蔵穴内覆土 一部スス付着
		B 13.3				
		C 4.0				
11	埴 土師器	A 11.2	胴下半部欠損。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラ磨き。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 414 50% 貯蔵穴内覆土 一部スス付着
		B (7.6)				
12	埴 土師器	A 10.8	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P 415 40% 貯蔵穴内覆土 一部スス付着
		B (6.5)				
13	埴 土師器	B (7.5)	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ナデ。胴部内面に輪積み痕有り。底部に木葉痕有り。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P 416 60% 南コーナー付近覆土中層 一部スス付着
		C 3.6				
14	埴 土師器	B (7.7)	胴部片。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 417 30% 南コーナー付近覆土下層
		C 4.4				
15	埴 土師器	B (5.6)	胴部片。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P 418 30% 中央部西寄り床面 一部スス付着
		C 3.5				

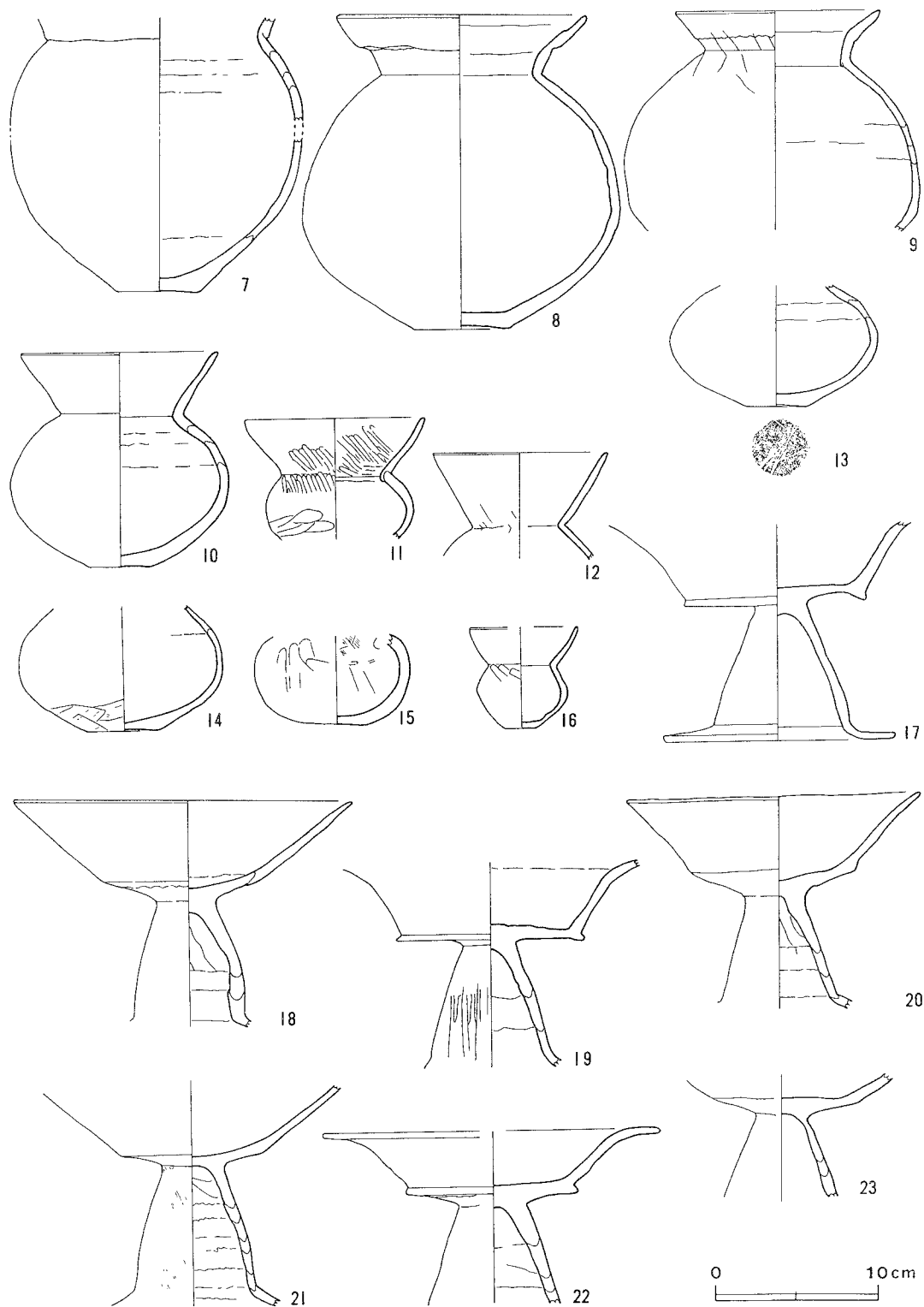
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 16	埴土師器	A [6.6] B 6.3 C 1.9	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄橙色 普通	P 419 90% 南東壁中央部付近覆土中層 胴部外面スス付着
17	高埴土師器	B (13.5) D 14.4 E 8.5	坏部口縁部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。脚部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 399 70% 中央部西寄り床面
18	高埴土師器	A 21.1 B (14.5) E (7.9)	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈している。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾気味に立ち上がり大きく開く。	坏部内・外面摩滅が著しい。脚部内面上位指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・パミス 明赤褐色 普通	P 400 70% 中央部西寄り床面
19	高埴土師器	B (12.8) E (7.8)	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈している。坏部は底部に周縁が突き出ており、外傾して立ち上がり、口縁部で外反して開く。	坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 401 70% 北西壁中央部付近床面
20	高埴土師器	A 18.1 B (13.5) E (7.0)	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈している。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面上位指ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	P 402 70% 南コーナー付近覆土下層
21	高埴土師器	B (13.5) E (8.9)	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈している。坏部は下位に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。	坏部内・外面摩滅が著しい。脚部内面上位指ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 403 60% 中央部西寄り床面
22	高埴土師器	A [21.0] B (10.9) E (6.5)	脚部から口縁部にかけての破片。脚部は円筒状を呈している。坏部は底部に周縁が突き出ており、外反して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ口縁部内・外面横ナデ。脚部内・外面ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄褐色 普通	P 404 30% 南コーナー付近覆土下層
23	高埴土師器	B (7.7) E (5.4)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は円筒状を呈している。坏部は内彎する。	脚部内面上位指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P 405 30% 中央部西寄り床面
第198図 24	高埴土師器	B (6.5) E (5.5)	脚裾部及び坏部欠損。脚部は円筒状を呈している。	脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 黄褐色 普通	P 406 50% 南コーナー付近床面
25	高埴土師器	A 20.6 B (6.0)	脚部欠損。坏部は内彎しながら立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 407 50% 西部覆土下層
26	高埴土師器	B (9.3) D 17.8	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部外面ヘラ磨き、内面横ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア におい橙色 普通	P 408 40% 中央部西寄り床面
27	高埴土師器	B (8.8) E (7.8)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内面ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 淡黄色 普通	P 409 30% 南コーナー付近覆土下層
28	高埴土師器	B (9.0) D 14.2	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面上位ヘラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P 410 30% 北部覆土中層

は中央部西寄り及び北西壁中央部付近の床面からつぶれた状態で、それぞれ出土している。その他、31の土製品の勾玉は中央部南西寄りの床面から、32・33・35・38・39の石製模造品の剣及び42の有孔円板は東部の覆土下層から、34・37の石製模造品の剣は中央部の床面及び北西壁中央部付近の床面から、それぞれ出土している。

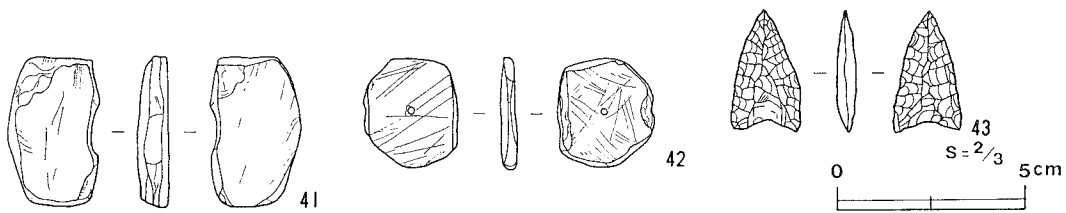
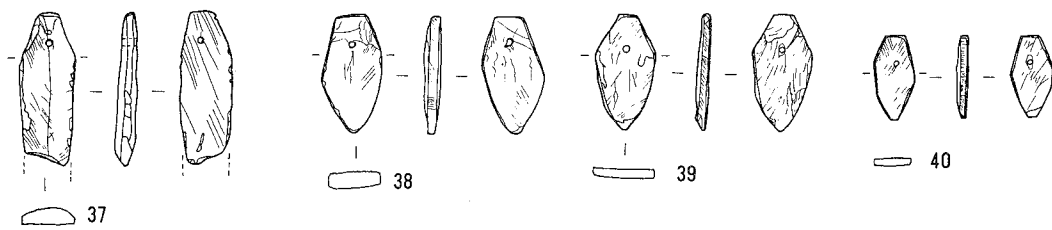
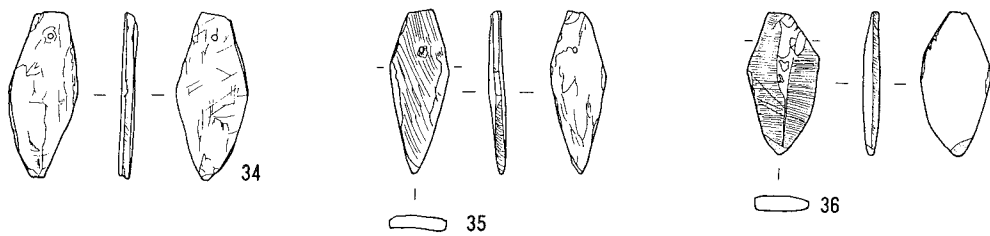
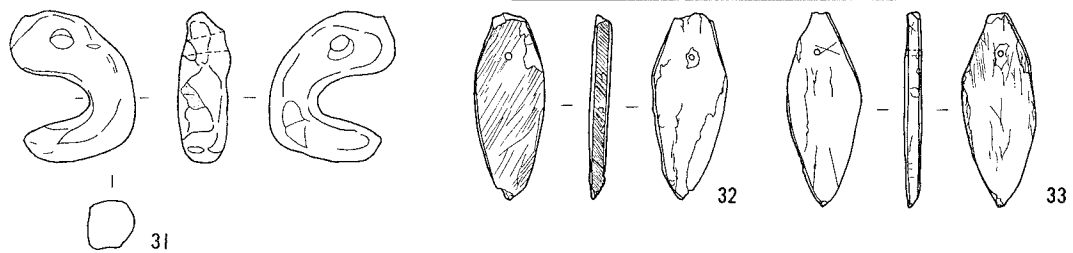
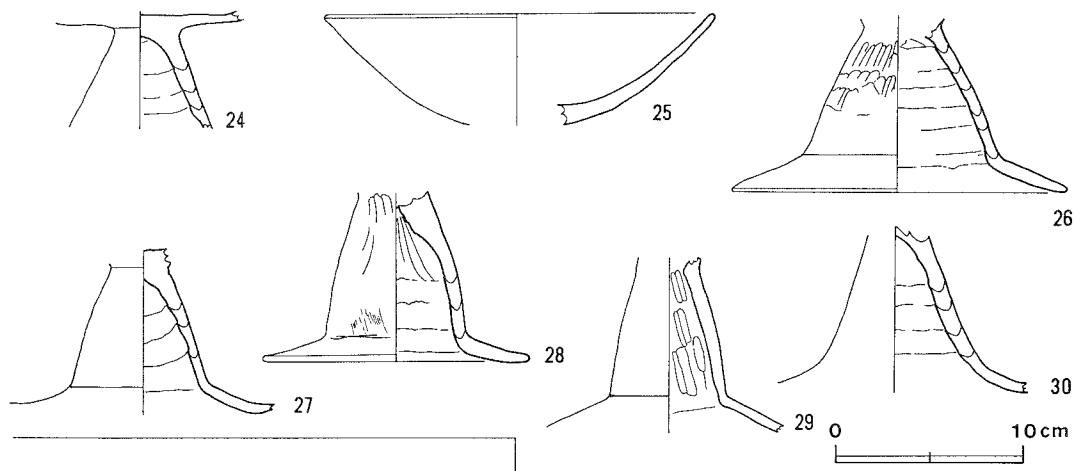
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第196図 第61号住居跡出土遺物実測図(1)



第197图 第61号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第198図 第61号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第198図 29	高土師器	B (9.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部外面ナデ、内面へラ削り。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P411 貯蔵穴内覆土 30%
30	高土師器	B (8.5)	脚部片。脚部はラッパ状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部内面ナデ、輪積み痕あり。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	P412 東部覆土下層 30%

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第198図 31	勾玉	4.0	3.4	1.4	5.0	10.5	100	中央部南西寄り床面	D P52

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第198図 32	石 剣	5.0	1.9	0.6	8.1	滑石	東部覆土下層	Q39
33	石 剣	5.1	2.0	0.5	8.1	滑石	東部覆土下層	Q40
34	石 剣	4.6	1.8	0.5	5.1	滑石	中央部床面	Q41
35	石 剣	4.4	1.5	0.5	2.6	滑石	東部覆土下層	Q42
36	石 剣	3.9	2.0	0.5	4.2	滑石	西部覆土下層	Q43
37	石 剣	(4.1)	1.5	0.6	(3.4)	滑石	北西壁中央部付近床面	Q44
38	石 剣	3.2	1.7	0.4	3.2	滑石	東部覆土下層	Q45
39	石 剣	3.0	1.6	0.2	2.2	滑石	東部覆土下層	Q46
40	石 剣	2.2	1.1	0.2	1.2	滑石	貯蔵穴内覆土	Q47
41	石製円板	4.0	2.4	0.9	13.3	滑石	南コーナー付近覆土下層	Q48
42	有孔円板	3.1	2.5	0.5	5.6	滑石	東部覆土下層	Q49
43	石 鉢	2.4	1.4	0.4	1.1	チャート	覆土中層	Q113

第64号住居跡 (第199図)

位置 B地区北西部，F4i₇区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は，第29号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.12m，短軸3.87mの方形を呈している。

主軸方向 N-45°-W。

壁 壁高は14~30cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 3か所(P₁~P₃)検出されている。P₁~P₃は，径36~39cmの円形を呈し，深さ17~33cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は，第29号土坑と重複しており検出されていない。

炉 長軸方向の中央から検出されている。平面形は長径56cm，短径48cmの楕円形を呈し，床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

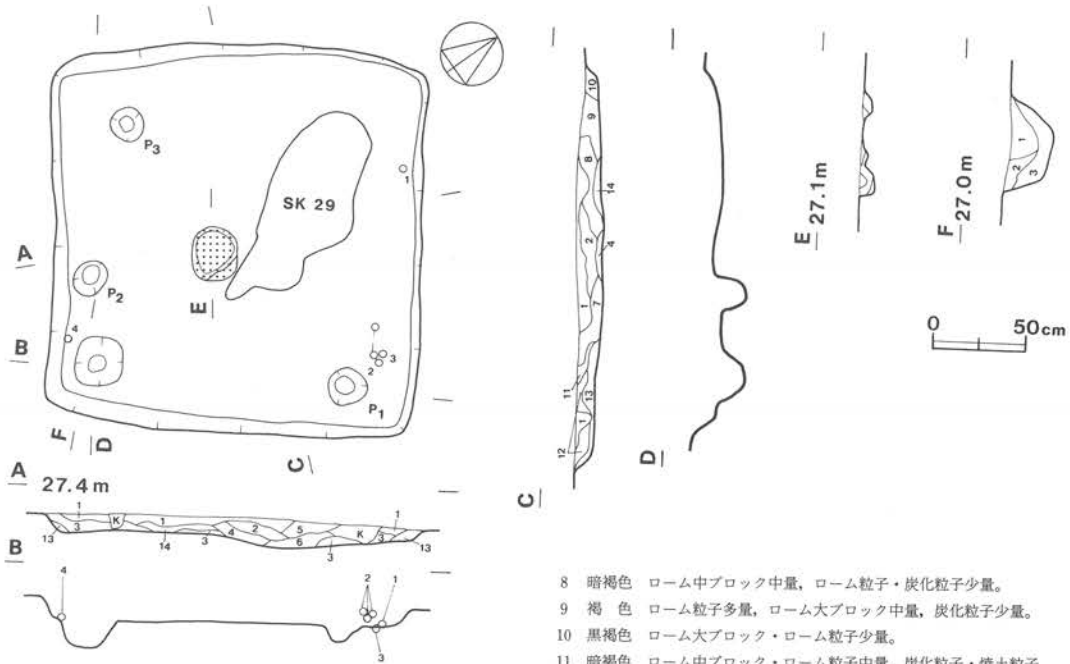
貯蔵穴 南コーナー付近に検出されている。平面形は長径52cm，短径50cmの隅丸方形を呈し，深さ31cmである。底面は平底で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 全体的にロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が堆積しており，人為堆積と思われる。

遺物 貯蔵穴内や覆土から土師器片(埴2，小形鉢1，高坏1)，土師器細片(259点)が出土してい

る。その他、流れ込みと思われる弥生式土器細片(25点)が出土している。1の罎は北東壁北西寄りの床面から横位の状態で、2の罎は東コーナー付近の覆土上層から散らばって、3の小形鉢は東コーナー付近の床面から斜位で、4の高坏は南コーナー付近の床面から逆位の状態で、それぞれ出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



S I-64 土層解説

- 1 黒褐色 黒色土大ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子少量。
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 7 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。

- 8 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量。
- 10 黒褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量。
- 11 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 12 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量。
- 13 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量。
- 14 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量。

S I-64 貯蔵穴土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子微量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。

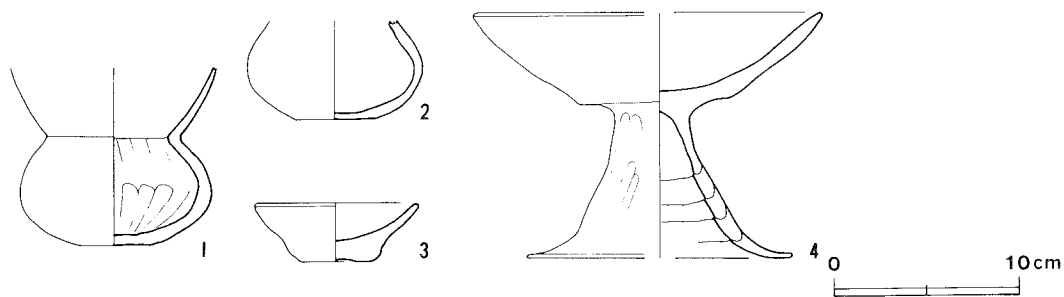


第199図 第64号住居跡実測図

第64号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	罎 土器	B (9.6) C 3.8	口縁部上位欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。脚部外面ナデ, 内面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・バミス 明赤褐色 普通	P 437 60% 北東壁北西寄り床面
2	罎 土器	B (5.3) C 4.4	胴部片。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	P 438 35% 東コーナー付近覆土上層 一部スス附着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 3	小形鉢 土師器	A 8.8	突出した平底。胴部は内彎しながら、立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部へラナデ。胴部外面ナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石・雲母 淡橙色 普通	P439 60% 東コーナー付近床面
		B 3.2				
		C 3.9				
4	高坏 土師器	A [18.6]	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラッパ状を呈し、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面へラナデ。脚部外面へラ磨き。裾部内・外面横ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P436 50% 南コーナー付近床面
		B 13.2				
		D [14.2]				
		E 7.8				



第200図 第64号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡（第201図）

位置 B地区北西部，F4a₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の全域は，第95号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.90m，短軸6.82mの方形を呈している。

長軸方向 N-16°-E。

壁 壁高は34~46cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅8~18cm，深さ5~10cmで，断面形は「┌」状を呈している。

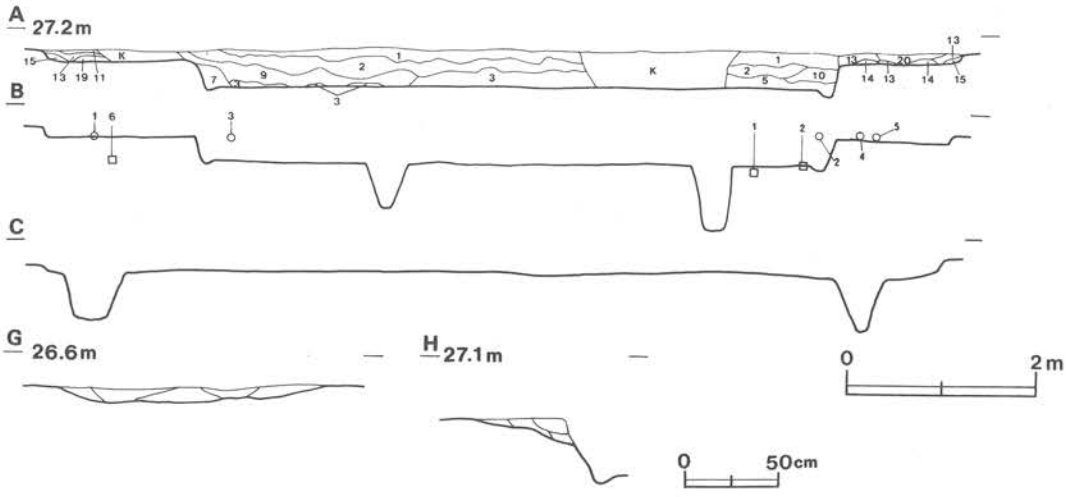
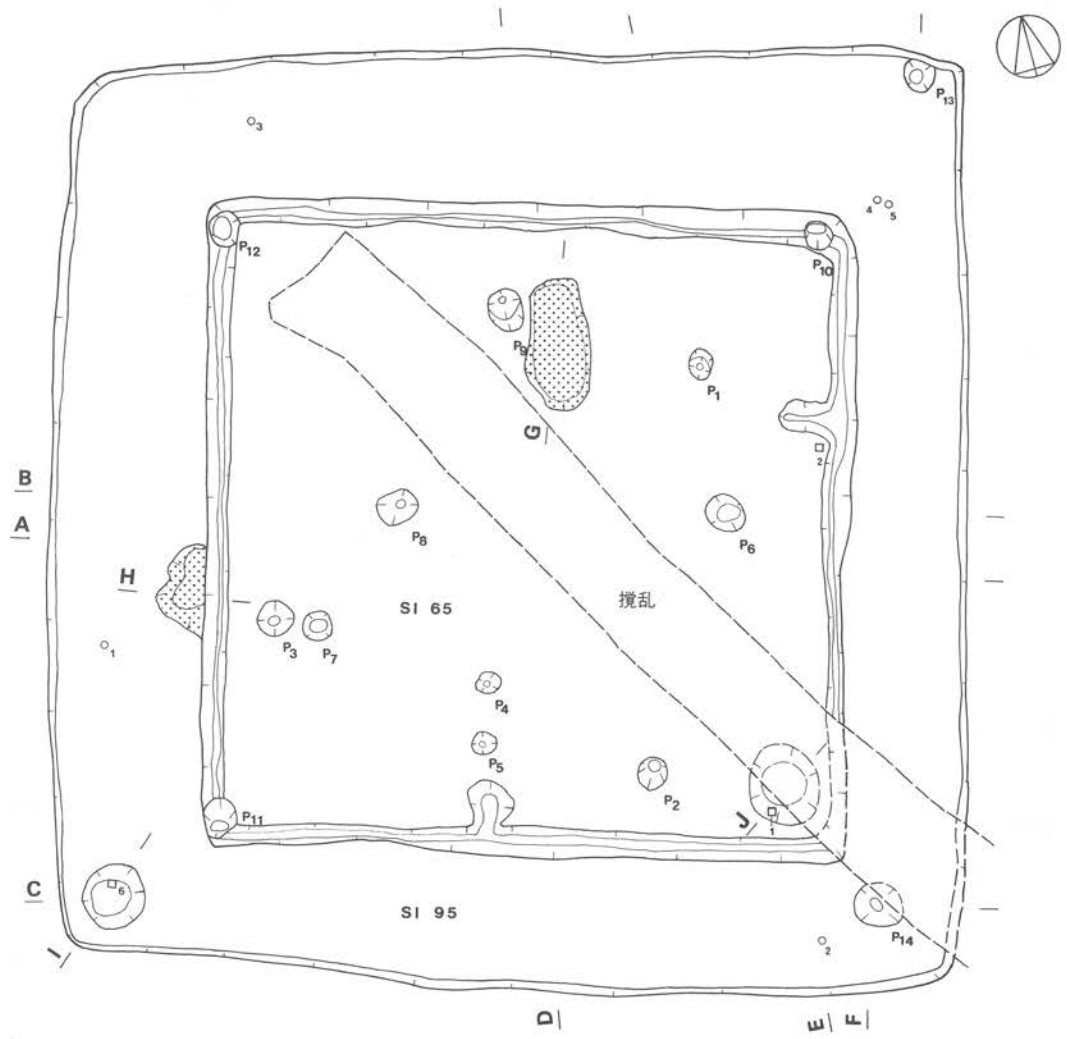
床 平坦で，支柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められ硬い。

ピット 9か所(P₁~P₉)検出されている。P₁~P₃は，径34~32cmの円形を呈し，深さ26~66cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。4本柱と思われるが，北西部の支柱穴は攪乱で検出されない。P₄・P₅は，径27cmの円形を呈し，深さ16~29cmで規模や位置等から出入口施設に伴うピットと考えられる。P₆~P₉は径39~48cmの円形を呈し，深さ13~71cmで規模や配列から補助柱穴と考えられる。

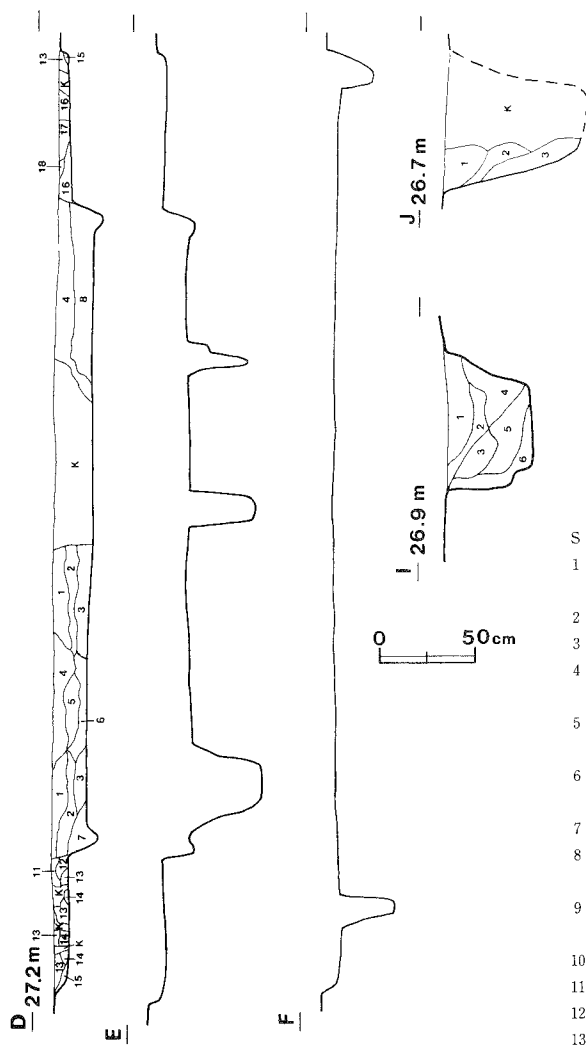
貯蔵穴 南東コーナー付近から検出されている。平面形は長径[88]cm，短径[75]cmの楕円形を呈すると推定され，深さは(72)cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径140cm，短径62cmの楕円形を呈し，床を約8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土・暗褐色土が堆積しており，人為堆積と



第201图 第65·95号住居跡実测图



S I-95 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック少量。
- 4 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化小ブロック微量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量。

S I-65・95 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量。
- 3 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量。
- 4 極暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・焼土中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量。
- 8 赤褐色 焼土粒子多量, ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量。
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量。
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 13 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量。
- 14 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。
- 15 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量。
- 16 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック中量。
- 17 暗褐色 ローム中ブロック多量, ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化小ブロック少量。
- 18 暗褐色 ローム小ブロック・炭化小ブロック多量, ローム粒子少量。
- 19 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・焼土粒子少量。
- 20 黒褐色 ローム大ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。

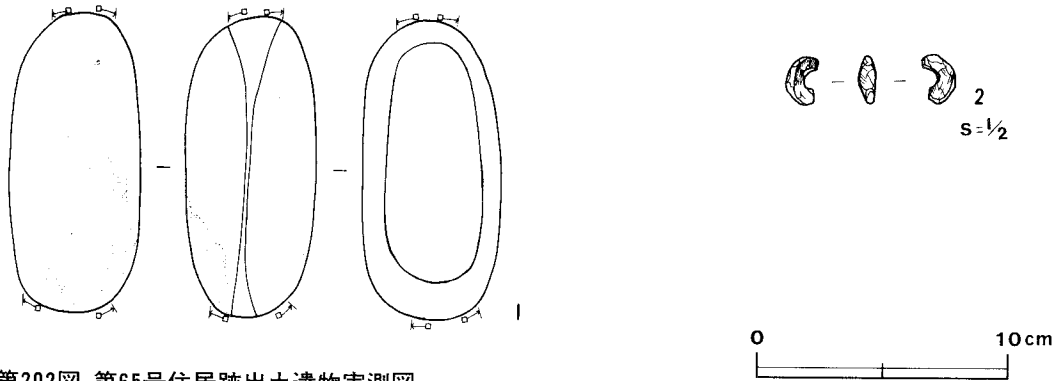
S I-65 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量。
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック少量。
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム大ブロック・ローム粒子中量。

思われる。

遺物 覆土の下層や中層から土師器細片(199点)及び石製品が少量出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器細片(9点), 弥生式土器細片(147点)が出土している。2の石製品の勾玉は東壁中央部付近の床面から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第95号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第202図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第202図 1	敲石	12.3	5.5	5.2	526.0	ホルンフェルス	貯蔵穴内覆土	Q52
2	勾玉	1.3	0.9	0.5	0.5	滑石	東壁中央部付近床面	Q53

第66号住居跡(第203図)

位置 B地区南西部, F4gs区を中心に確認されているが, 南部は調査区外に延びている。

規模と平面形 長軸〔11.06〕m, 短軸10.97mの方形を呈すると推定される。

長軸方向 N-0°。

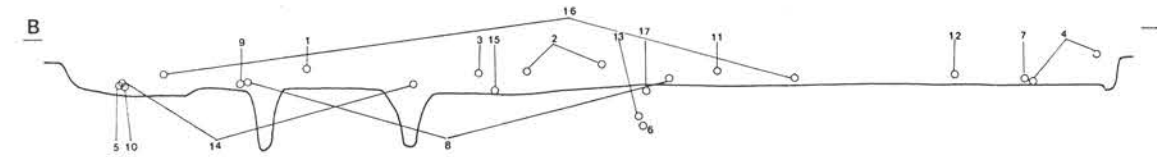
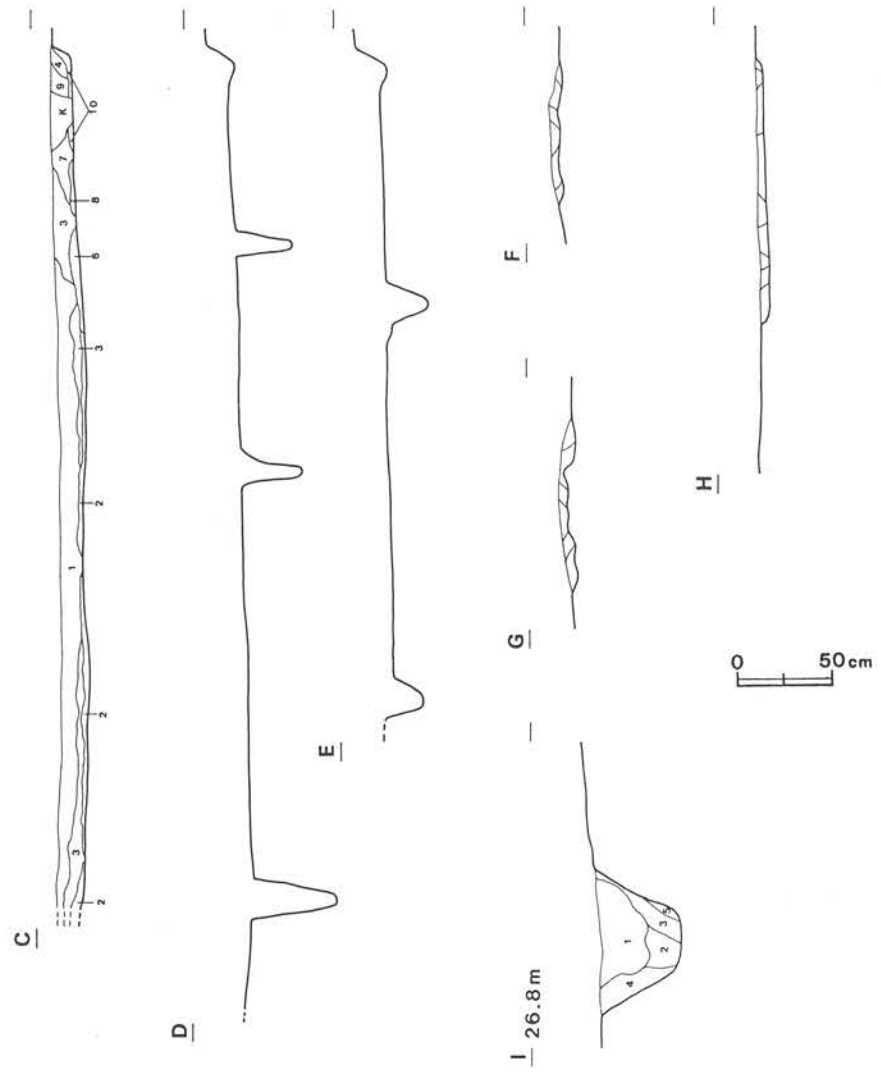
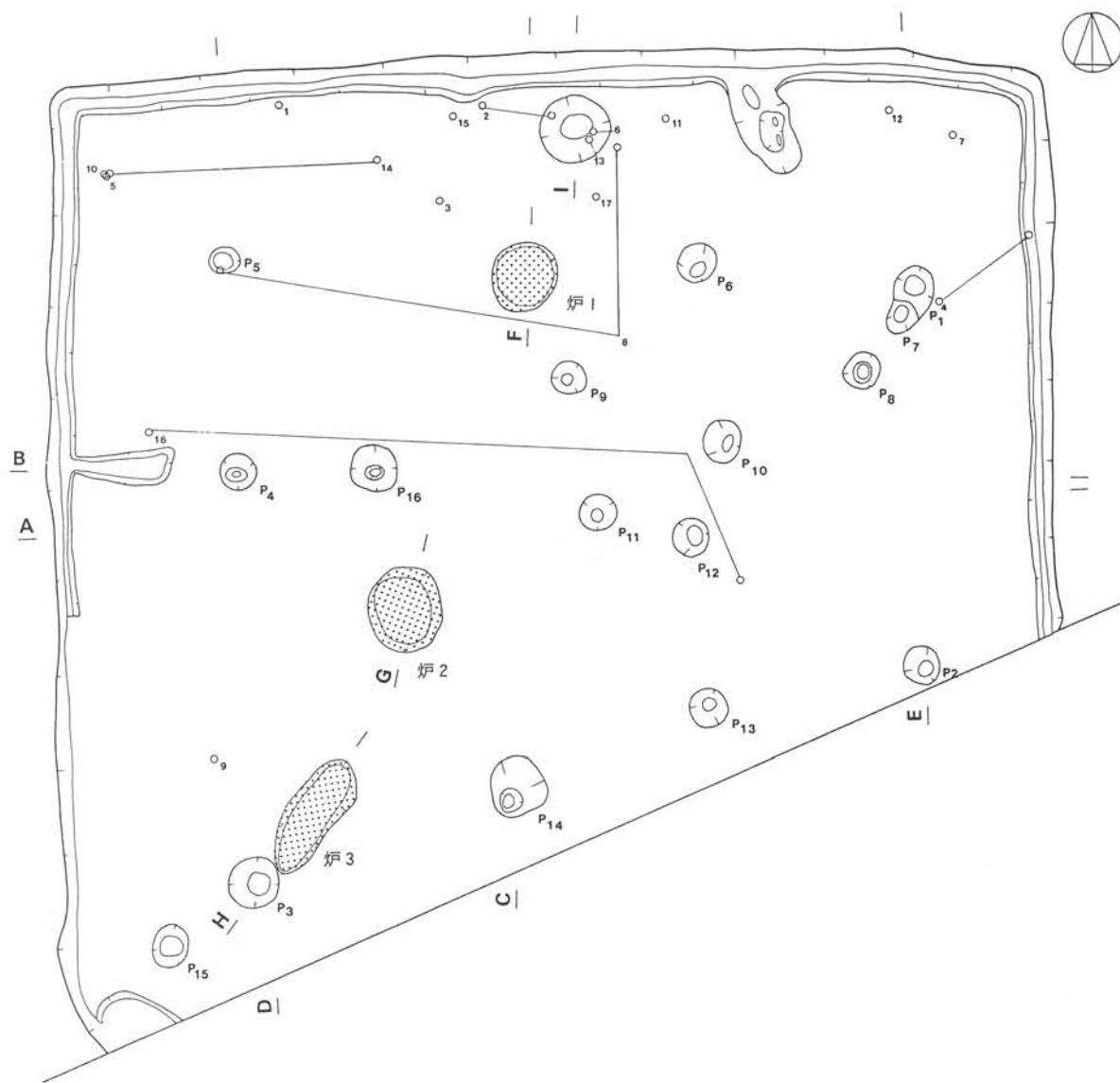
壁 壁高は19~31cmで, 外傾して立ち上がっている。

壁溝 東壁, 北壁及び西壁の一部から検出されている。上幅10~24cm, 深さ6~10cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 1条検出されている。西壁のほぼ中間から中央部に向かって延びている。長さ1.09m, 上幅18~40cm, 深さ8~10cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められ硬い。

ピット 16か所(P₁~P₁₆)検出されている。P₁~P₆は, 径34~58cmの円形を呈し, 深さ36~92cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₇・P₈・P₁₅は, 径36~49cm



SI-66 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・ローム中ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック少量。
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量。
- 6 極暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量。
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量。
- 10 明褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量。

SI-66 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 3 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化粒子少量。



第203図 第66号住居跡実測図

の円形を呈し、深さ32~41cmで規模や配列から補助柱穴と考えられる。P₉~P₁₄, P₁₆は、径39~52cmの円形を呈し、深さ22~60cmで性格は不明である。

炉 3か所(炉₁~炉₃)検出されている。炉₁は、長軸線上の中央から北寄りに検出され、平面形は、長径77cm、短径73cmの円形を呈し、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉₂は、中央部西寄りに検出され、平面形は、長径85cm、短径82cmの円形を呈し、床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉₃は、中央から南西寄りに検出され、平面形は、長径144cm、短径55cmの楕円形を呈し、床を約5cm掘り込んだ地床炉である。いずれも、炉床の中央部はよく熱を受けて、赤変硬化している。

貯蔵穴 北壁中央部付近に検出されている。平面形は、径74~79cmのほぼ円形を呈し、深さは54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

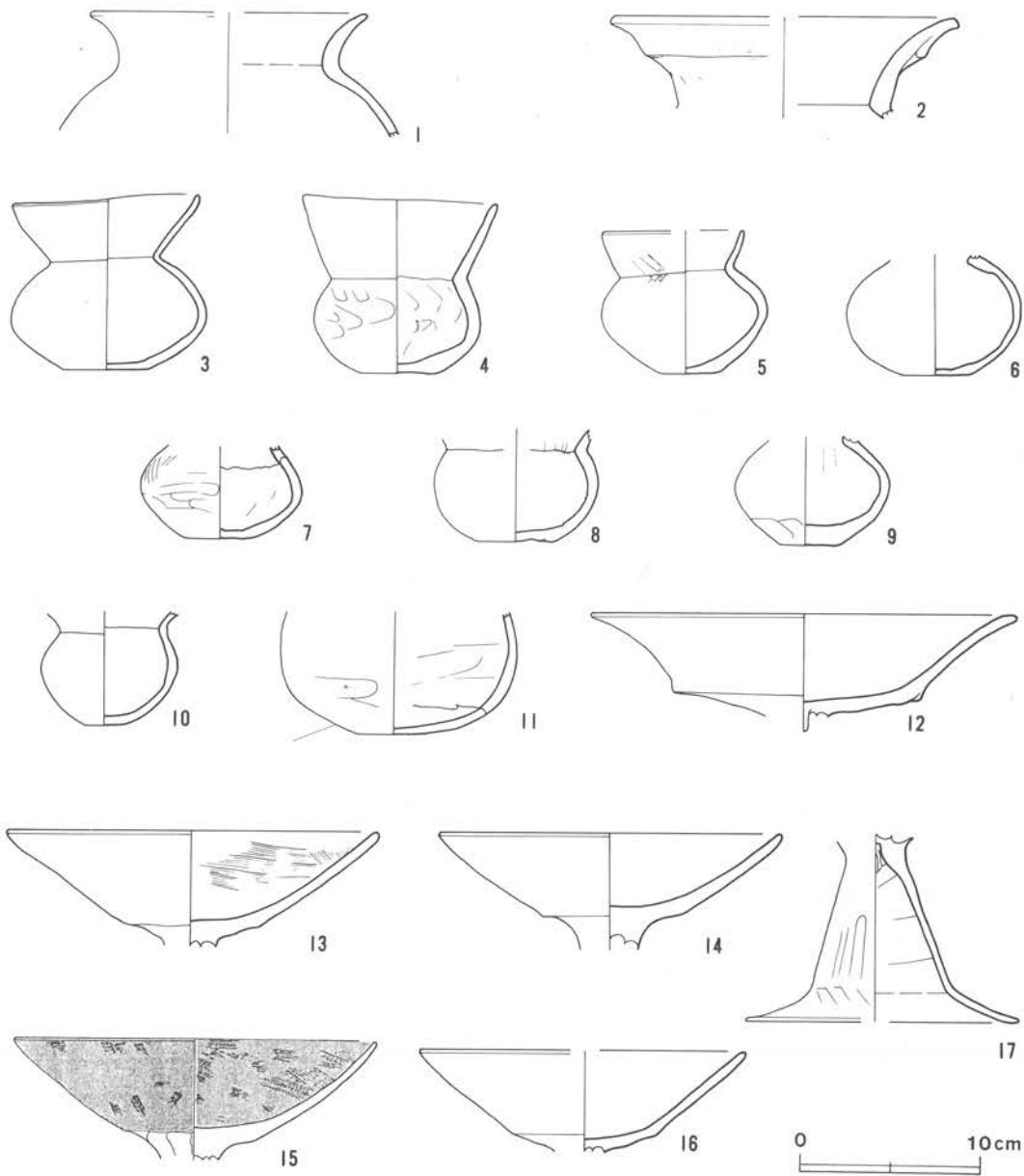
覆土 全体的にローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土の下・中層から土師器片(甕1, 壺1, 埴9, 高坏6), 土師器細片(811点)が出土している。その他、流れ込みと思われる弥生式土器細片(618点), 内耳土器片(1点), 陶器細片(1点)が出土している。3の埴は北壁中央部付近の覆土中層から横位の状態で、5の埴は北西コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で、6の埴は貯蔵穴内から横位の状態で、12の高坏は北東コーナー付近の覆土下層から逆位の状態で、13の高坏は貯蔵穴内から横位の状態で、15の高坏は北壁中央部付近の床面から逆位の状態で、それぞれ出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第66号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第204図 1	甕 土師器	A [15.4] B (6.9)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 440 10% 北西コーナー付近覆土上層
2	壺 土師器	A [19.2] B (5.7)	口縁部片。口縁部は下位に稜を持ち、外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面横ナデ後斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 441 10% 北壁中央部付近覆土上層 内面スス付着
3	埴 土師器	A 10.3 B 9.8 C 4.8	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 黄橙色 普通	P 448 100% 北壁中央部付近覆土中層 一部スス付着
4	埴 土師器	A 10.8 B 10.0 C 4.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面指ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 449 70% 北東コーナー付近覆土下層 一部スス付着
5	埴 土師器	A [8.8] B 8.0 C 3.0	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のハケ目整形。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 450 80% 北西コーナー付近覆土下層 一部スス付着
6	埴 土師器	B (6.7) C 4.0	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 451 70% 貯蔵穴内覆土 内面スス付着



第204図 第66号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第204図 7	埴 土 師 器	B (5.1) C 3.6	口縁部欠損。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面へラ削り、内面へラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 452 70% 北東コーナー付近覆土下層
8	埴 土 師 器	B (6.3) C 4.4	胴部片。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面ナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄橙色 普通	P 453 30% 北壁中央部付近覆土下層
9	埴 土 師 器	B (6.1) C 3.3	胴部片。平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	底部外面へラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 454 30% 中央部南西寄り覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第204図 10	埴土師器	B (6.3) C 2.1	胴部片。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる	胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 455 40% 北西コーナー付近覆土下層
11	埴土師器	B (6.8) C 3.8	胴部中・下位の破片。平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部内・外面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 456 20% 北壁中央部付近覆土中層
12	高坏土師器	A 23.7 B (5.7)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外反して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面摩滅著しい。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P 442 50% 北東コーナー付近覆土下層
13	高坏土師器	A 20.8 B (6.3)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部外面ヘラナデ、内面ナデ後一部ハケ目整形。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 443 50% 貯蔵穴内覆土
14	高坏土師器	A 19.1 B (6.4) E (1.6)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面摩滅著しい。	砂粒・雲母・パミス 明赤褐色 普通	P 444 40% 北壁中央部付近覆土中層
15	高坏土師器	A 19.8 B (6.6)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ後一部ハケ目整形。坏底部外面指ナデ。内・外面赤彩痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 445 40% 北壁中央部付近床面
16	高坏土師器	A [18.1] B (5.5)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部外面ナデ、内面摩滅が著しい。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 446 30% 西部覆土上層
17	高坏土師器	B (10.6) D [15.1] E 9.7	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。	脚部内面上位指ナデ、中・下位ナデ。外面摩滅が著しい。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 447 30% 北壁中央部付近床面

第69号住居跡（第205図）

位置 B地区中央部、F5d₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部の一部は、第68号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.52m、短軸6.70mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-23°-W。

壁 壁高は21~31cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、南コーナー付近は攪乱されており窪んでいるが、全体によく踏み固められ硬い。

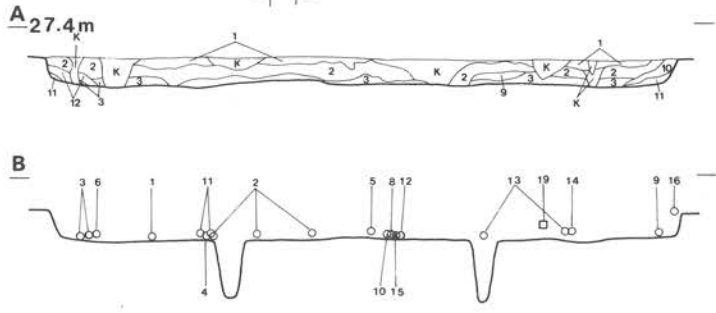
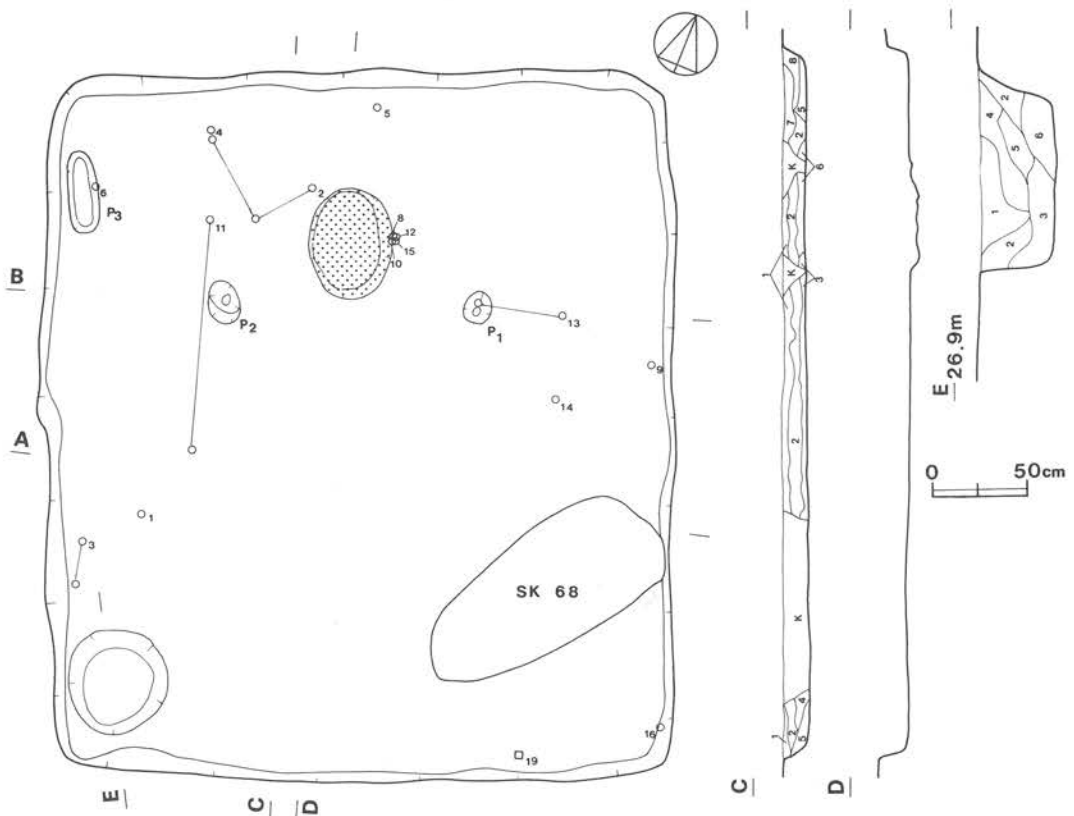
ピット 3か所(P₁~P₃)検出されている。P₁・P₂は、径34~45cmの円形を呈し、深さ63~66cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。他の主柱穴は、第68号土坑の掘り込みや攪乱により検出されない。P₃は、長径86cm、短径31cmの楕円形を呈し、深さ12cmで性格は不明である。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は、長径118cm、短径88cmの楕円形を呈し、床を約10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナーから検出されている。平面形は、長径112cm、短径105cmの楕円形を呈し、深さ49cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 全体的にローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 東部及び北西壁付近の覆土の下層や中・上層から土師器片(甕2, 壺1, 埴3, 鉢1, 高坏8, 手捏土器3), 土師器細片(610点)及び石器・石製品が出土している。その他、流れ込みと思



S I - 69 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，ローム大ブロック微量。
- 2 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 3 褐色 ローム大ブロック多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。
- 4 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量。
- 5 褐色 ローム大ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子少量。
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，ローム大ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック・焼土小ブロック中量，炭化大ブロック微量。
- 7 褐色 ローム大ブロック多量，ローム粒子中量，炭化小ブロック微量。
- 8 褐色 ローム粒子・炭化小ブロック中量，ローム大ブロック・焼土粒子少量。

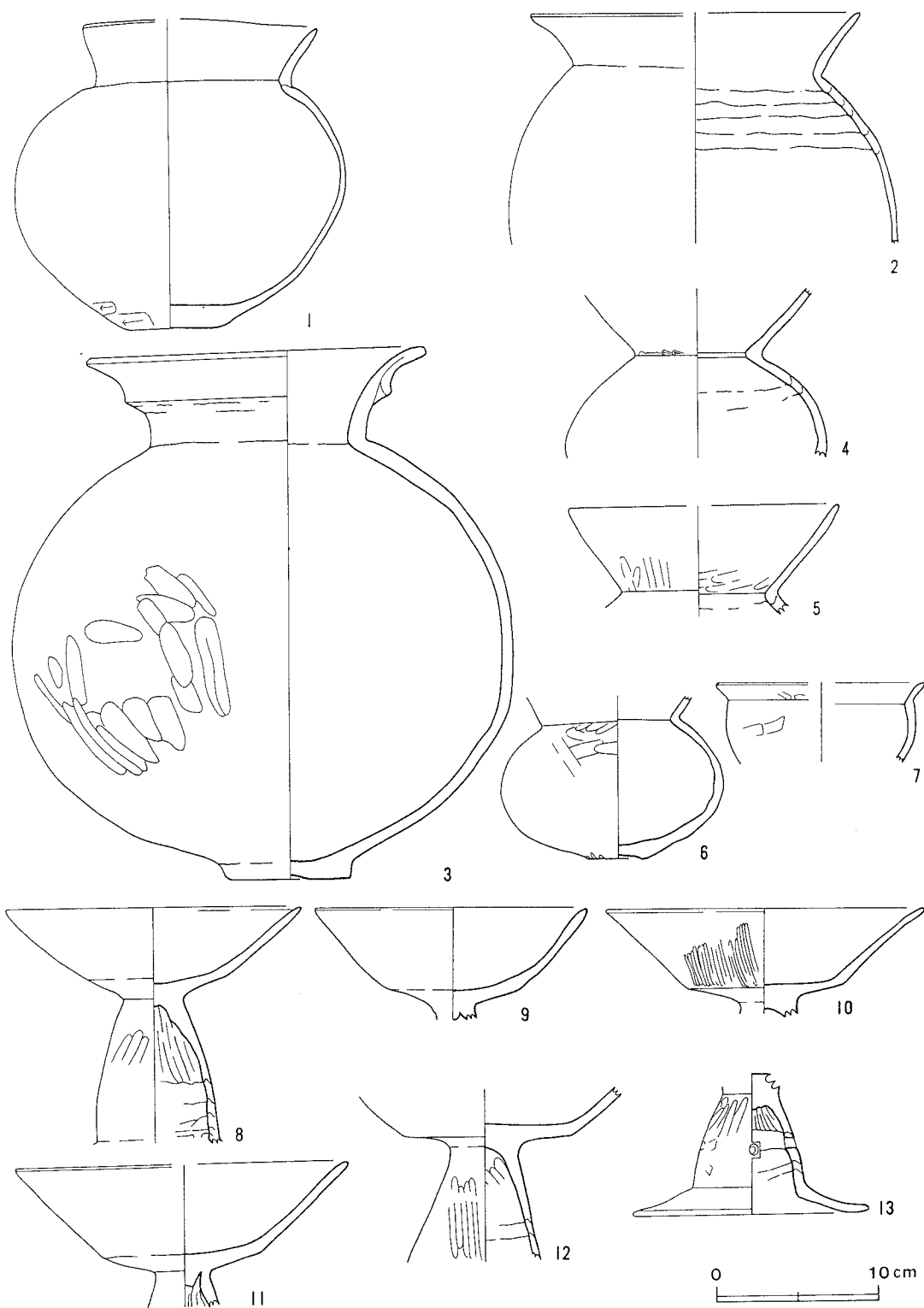
- 9 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子多量，ローム大ブロック少量。
- 11 褐色 ローム粒子多量，ローム大ブロック中量，炭化粒子微量。
- 12 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量。

S I - 69 貯蔵穴土層解説

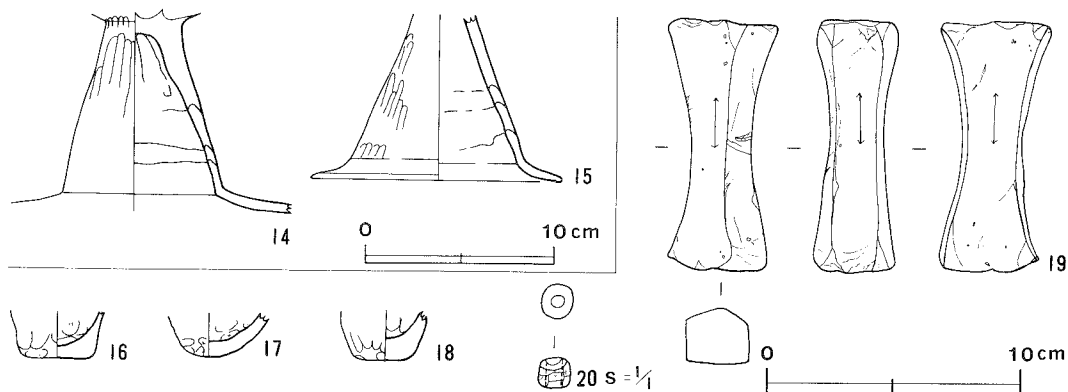
- 1 褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量。
- 2 褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量。
- 3 褐色 ローム中ブロック少量，炭化粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色



第205図 第69号住居跡実測図



第206图 第69号住居跡出土遺物実測図(1)



第207図 第69号住居跡出土遺物実測図(2)

われる縄文式土器細片(8点), 弥生式土器細片(425点)が出土している。1の甕は南部西寄りの覆土下層からつぶれた状態で, 3の壺は南西壁中央部付近の覆土下層から横位の状態で, 6の埴は西コーナー付近の覆土下層から逆位の状態で, 8・10の高坏は北西部中央の覆土下層からつぶれた状態で, 12の高坏は北西部の覆土下層から逆位の状態で, それぞれ出土している。その他, 16の手捏土器は東コーナー付近の覆土上層から正位の状態で, 17・18の手捏土器は東部の覆土上層から正位の状態で, それぞれ出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第68号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から, 古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第69号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第206図 1	甕 土器	A [14.6] B 19.3 C 5.9	平底。胴部は球形状を呈し, 最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へら削り及びへらナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 480 90% 南部西寄り覆土下層
2	甕 土器	A [20.4] B (15.4)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり, 口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 481 30% 北西壁中央部付近覆土下層
3	壺 土器	A 21.1 B 32.8 C 8.0	突出した平底。胴部は球形状を呈し, 口縁部は複合口縁で, 頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へら削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 明褐色 普通	P 482 70% 南西壁中央部付近覆土下層
4	埴 土器	B (10.6)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し, 口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ, 内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリア にぶい赤褐色 やや不良	P 483 30% 北西壁中央部付近覆土下層
5	埴 土器	A [16.3] B (6.8)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。頸部外面へら削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 484 20% 北西壁中央部付近覆土下層
6	埴 土器	B (10.0) C 3.5	口唇部欠損。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し, 最大径を中位に持つ。	胴部内・外面へらナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄褐色 普通	P 493 90% 西コーナー付近覆土下層 一部スス付着

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第206図 7	小形鉢 土師器	A [7.6] B (5.0)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリア 淡黄色 普通	P 494 10% 中央部覆土上層
8	高坏 土師器	A 18.4 B (14.8) E (9.1)	脚裾部欠損。脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部外面ナデ。脚部外面へラ削り、内面へラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 良好	P 485 85% 北西部覆土下層
9	高坏 土師器	A 17.1 B (7.0) E (1.0)	脚部欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 普通 橙色	P 486 50% 北東壁中央部付近覆土下層
10	高坏 土師器	A 19.8 B (6.6) E (0.8)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部外面縦位のへラ磨き。内面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 487 50% 北西部覆土下層
11	高坏 土師器	A [20.8] B (8.9) E (2.0)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 488 30% 中央部西寄り覆土下層
12	高坏 土師器	B (10.8) E (7.2)	脚部から坏部中位にかけての破片。脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に稜を持ち、内彎する。	坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のへラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 489 40% 北西部覆土下層
13	高坏 土師器	B (8.7) D 14.6 E 7.5	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。脚部中央に円孔(径6mm)を2か所穿たれている。	脚部外面縦位のへラ磨き、内面上位へラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 490 30% 北部覆土下層
第207図 14	高坏 土師器	B (10.6) E (10.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のへラ磨き、内面上位指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P 491 40% 北東壁中央部付近覆土中層
15	高坏 土師器	D 13.2 E (8.9)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のへラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒 橙色 普通	P 492 30% 北西部覆土下層
16	手捏土器 土師器	B (1.9) C 2.7	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面へラ削り。	砂粒・雲母 淡黄色 普通	P 495 80% 東コーナー付近覆土上層 一部スス付着
17	手捏土器 土師器	B (1.8) C 1.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面へラ削り。	砂粒・雲母 淡黄色 普通	P 496 80% 東部覆土上層
18	手捏土器 土師器	B (2.1) C 2.2	口縁部一部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面へラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 497 80% 東部覆土上層

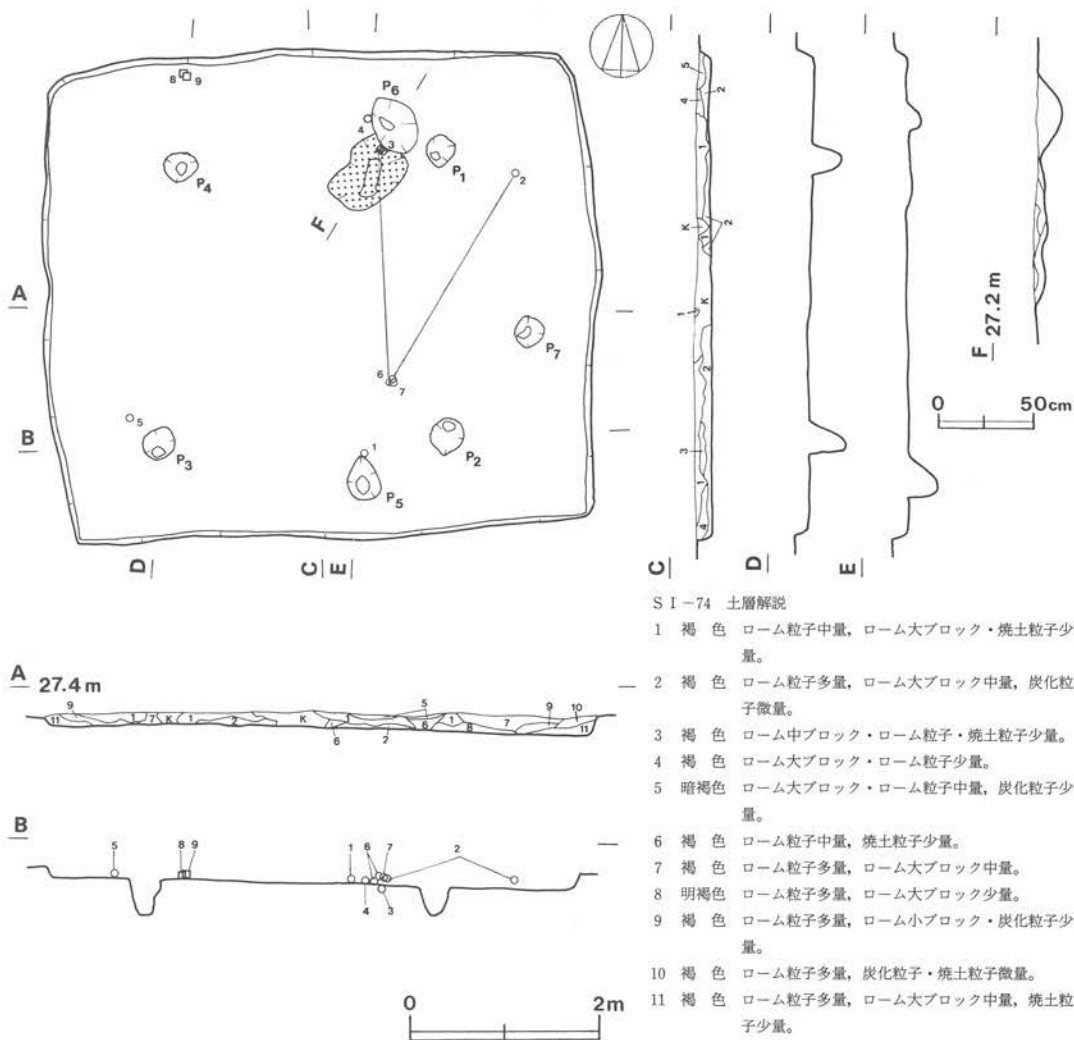
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第207図 19	砥石	10.1	4.5	3.3	138.9	凝灰岩	東コーナー付近覆土中層	Q54
20	臼玉	0.5	0.4	0.3	0.1	滑石	東部覆土下層	Q55 孔径0.2cm

第74号住居跡 (第208図)

位置 B地区北部、E5h₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.84m、短軸5.20mの長方形を呈している。

長軸方向 N-81°-E。



S I-74 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量。
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
- 4 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。
- 8 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量。
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 11 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子少量。

第208図 第74号住居跡実測図

壁 壁高は10~20cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦であり, 全体的によく踏み固められ硬い。

ピット 7か所(P₁~P₇)検出されている。P₁~P₄は, 径34~40cmの円形を呈し, 深さ30~38cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅~P₇は, 径33~45cmの円形を呈し, 深さ24~32cmで性格は不明である。

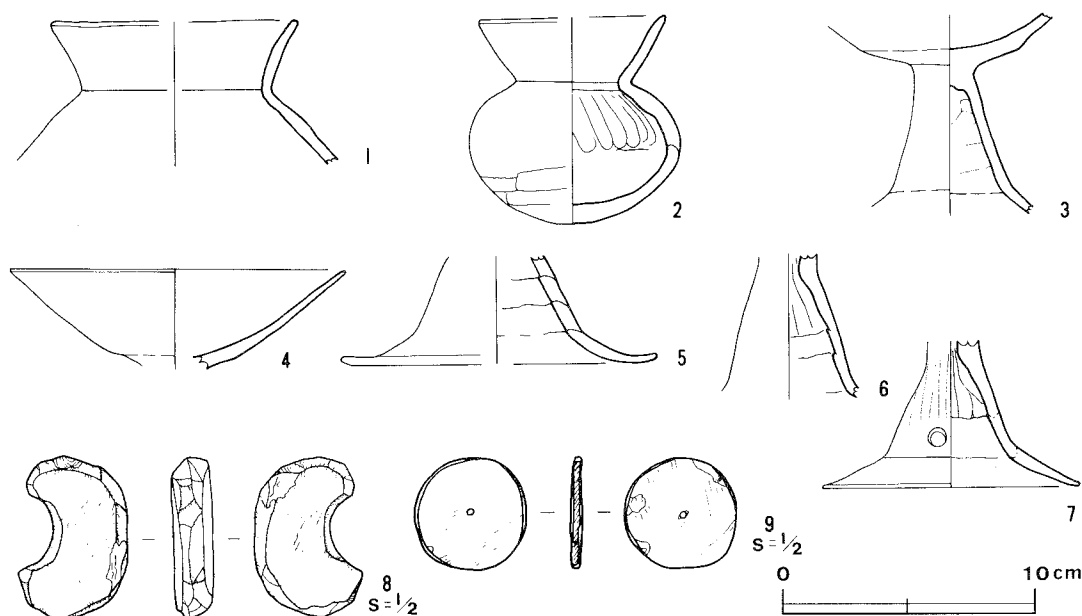
炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は, 長径76cm, 短径51cmの楕円形を呈し, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け, 赤変硬化している。

覆土 全体的にローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が堆積しており, 人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下・中層から土師器片(甕1, 埴1, 高坏5), 土師器細片(80点)及び石製品が

少量出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器細片(12点)、弥生式土器細片(58点)が出土している。1の甕は南壁中央部付近の床面から逆位の状態で、3の高坏は北部の床面から横位の状態で、5の高坏は南西コーナー付近の覆土下層から正位の状態で、7の高坏は中央部南寄りの覆土中層から正位の状態で、2の埴は北東コーナー付近の覆土中層から逆位の状態で、それぞれ出土している。8の勾玉及び9の有孔円板は北壁西寄りの床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第209図 第74号住居跡出土遺物実測図

第74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 1	甕 土師器	A [13.2] B (7.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P 528 20% 南壁中央部付近床面
2	埴 土師器	A [9.9] B 11.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は、やや内彎する。	口縁部内・外面横ナデ、輪積み痕有り。胴部外面ヘラ削り、内面指頭圧痕有り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 534 90% 北東コーナー付近覆土中層
3	高坏 土師器	B (10.8) E (8.0)	脚部及び坏部上位欠損。脚部は円筒状を呈し、坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 やや不良	P 529 50% 北部床面
4	高坏 土師器	A 18.0 B (5.3)	脚部欠損。坏部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 530 50% 北部東寄り覆土下層
5	高坏 土師器	D [16.6] E (5.8)	脚部片。脚部中位から坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 531 20% 南西コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 6	高土師器	E (7.7)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒 におい 橙 色 普通	P532 10% 中央部南寄り覆土中層
7	高土師器	D 13.6 E (7.8)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部は水平近くに広がる。下位に円孔(8mm)が穿たれている。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 橙 色 普通	P533 40% 中央部南寄り覆土中層

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第209図	8 勾玉	4.3	2.9	1.1	21.4	滑石	北壁西寄り床面	Q56
	9 有孔円板	3.0	2.9	0.4	4.8	滑石	北壁西寄り床面	Q57

第83号住居跡 (第210図)

位置 B地区南部，G6d₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.34m，短軸6.31mの方形を呈している。

長軸方向 N-46°-W。

壁 壁高は27～41cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅5～18cm，深さ4～9cmで，断面形は皿状を呈している。

床 ほぼ平坦で，支柱穴を結ぶ線の内側は硬い。東コーナー付近及び北東壁の北コーナー寄りには攪乱されており，窪んでいる。

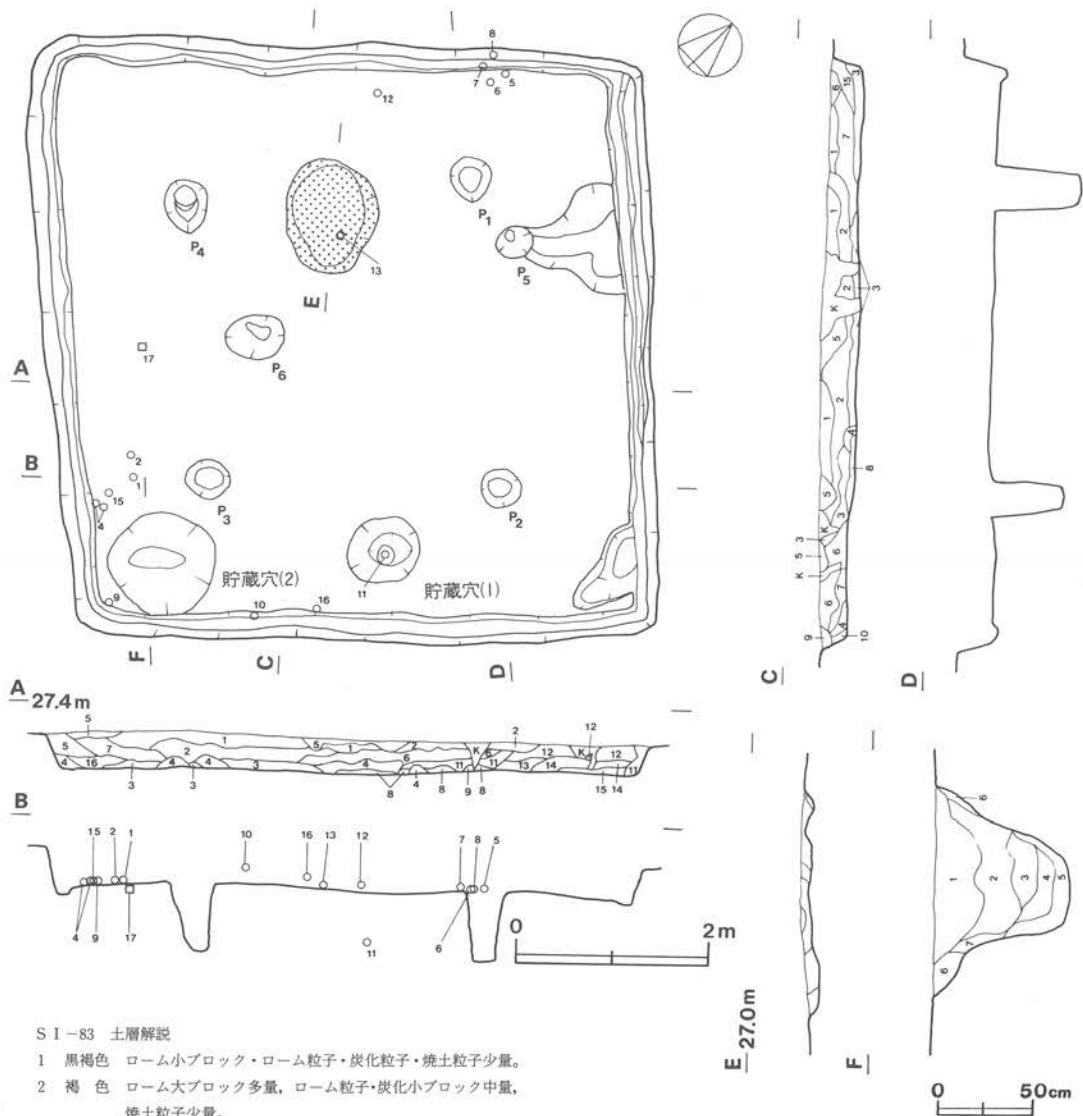
ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は，径40～56cmの円形を呈し，深さ74～88cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅・P₆は，径40～75cmの円形を呈し，深さ52～56cmで性格は不明である。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は，長径122cm，短径95cmの楕円形を呈し，床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け，赤変硬化している。

貯蔵穴 2か所検出されている。貯蔵穴(1)は，南東壁中央付近に検出されており，平面形は長径75cm，短径68cmの円形を呈し，深さは56cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴(2)は，南コーナーに検出されており，平面形は径101～108cmのほぼ円形を呈し，深さは78cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の床面や覆土下・中層から土師器片(甕2，埴1，鉢5，高坏5，手捏土器3)，土師器細片(438点)及び石器・石製品が出土している。その他，流れ込みと思われる弥生式土器細片(105点)が出土している。1・2の甕は南コーナー付近の覆土下層から隣接して横位の状態で，4の鉢は南コーナー付近の覆土下層から散らばって，8の鉢は北コーナー付近の覆土下層から逆位の状態で，9の高坏は南コーナー付近の覆土下層から逆位の状態で，10の高坏は南コーナー付



SI-83 土層解説

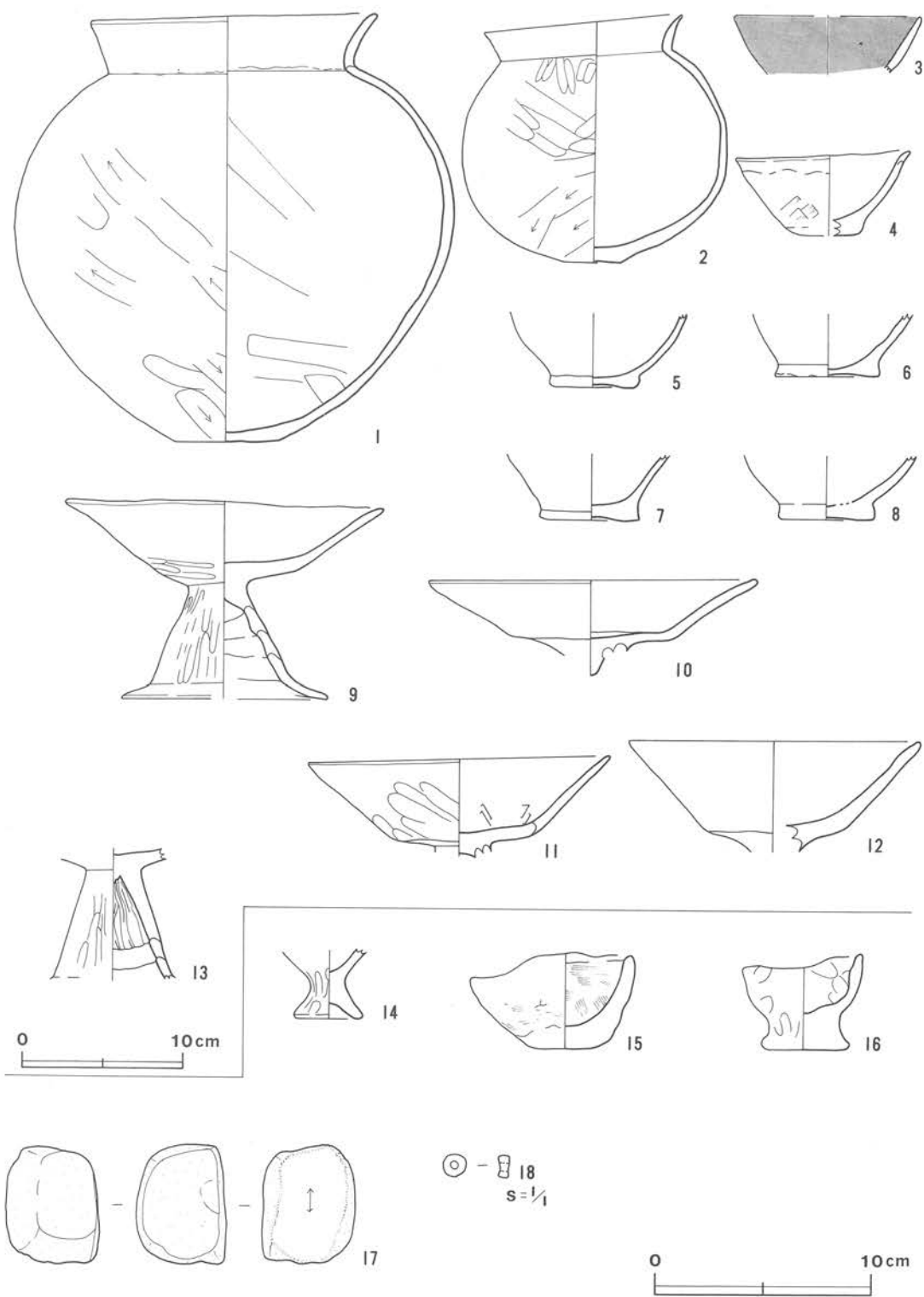
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子・炭化小ブロック中量, 焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム大ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 暗褐色 炭化材多量, ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
- 5 黒褐色 ローム大ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 6 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量。
- 7 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 8 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 10 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 11 暗褐色 炭化小ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 13 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 14 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量。

- 15 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量。
- 16 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック少量。

SI-83 貯藏穴解説

- 1 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・炭化大ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量。
- 3 黒褐色 炭化大ブロック・炭化粒子多量, 焼土粒子中量, ローム大ブロック・ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。
- 7 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化粒子少量。

第210図 第83号住居跡実測図



第211图 第83号住居跡出土遺物実測図

近の覆土中層から正位の状態で、それぞれ出土している。その他、15の手捏土器の小形鉢は南コーナー付近の覆土下層から正位の状態で、16の手捏土器の小形鉢は南東壁中央部付近の覆土下層から逆位の状態で、17の砥石は南西部の床面から、18の石製品の白玉は東コーナー付近の床面から、それぞれ出土している。

所見 本跡は、中央部及び南部の床面や覆土下層から炭化材や焼土が検出されていること等から火災住居跡と考えられ、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第83号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第211図 1	甕 土 師 器	A 17.7 B 26.9 C 6.3	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭痕有り。胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P577 100% 南コーナー付近覆土下層 一部スス付着
2	甕 土 師 器	A 12.4 B 15.7 C 3.5	平底。胴部は球形状を呈する。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P578 95% 南コーナー付近覆土下層
3	埴 土 師 器	A [11.7] B (3.7)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ。一部赤彩痕有り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P585 10% 中央部覆土上層
4	小形鉢 土 師 器	A 11.0 B 5.3 C [4.7]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ後一部ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P586 85% 南コーナー付近覆土下層
5	小形鉢 土 師 器	B (4.8) C 5.5	体部上位欠損。突出した平底。体部は内彎する。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P587 50% 北コーナー付近覆土下層
6	小形鉢 土 師 器	B (4.0) C 6.6	体部上位欠損。突出した平底。体部は内彎する。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P588 50% 北コーナー付近覆土下層
7	小形鉢 土 師 器	B (4.1) C 6.3	体部上位欠損。突出した平底。体部は内彎する。	体部内・外面ヘラナデ。内面底部に指頭痕有り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P589 50% 北コーナー付近覆土下層
8	小形鉢 土 師 器	B (4.0) C 6.0	体部上位欠損。突出した平底。体部は内彎する。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P590 50% 北コーナー付近覆土下層
9	高 坏 土 師 器	A 19.8 B 17.4 D [12.8] E 7.0	脚部は円筒状を呈し、裾部で水平近くに広がる。坏部は外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部ヘラ削り。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P579 80% 南コーナー付近覆土下層
10	高 坏 土 師 器	A 20.6 B (6.0)	脚部欠損。坏部は外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・パミス 橙色 普通	P580 50% 南コーナー付近覆土中層
11	高 坏 土 師 器	A 18.9 B (6.4)	脚部欠損。坏部は外傾気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア・パミス にぶい褐色 普通	P581 50% 貯蔵穴内覆土
12	高 坏 土 師 器	A 18.3 B (7.0)	坏部片。坏部は内彎気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P582 40% 北西壁中央部付近覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第211図 13	高坏 土師器	E (7.9)	脚部片。脚部は円筒状を呈する。	脚部外面へラ磨き、内面へラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・長石 橙色 普通	P583 中央部床面 20%
14	手握土器 土師器	B (13.3) D 3.2 E 1.5	坏部欠損。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面へラ削り。	砂粒 におい黄橙色 普通	P584 東部覆土上層 50%
15	手握土器 土師器	A 7.6 B 4.6 C 3.2	平底。体部は内鬻気味に立ち上がり、口縁部で直立する。	体部内・外面ナデ後一部ハケ目整形。	砂粒 におい黄橙色 普通	P591 南コーナー付近覆土下層 98%
16	手握土器 土師器	A 5.6 B 4.6 C 4.1	突出した平底。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	底部外面へラ削り、体部内・外面ナデ、指頭痕有り。	砂粒 におい黄橙色 普通	P592 南東壁中央部付近覆土下層 95%

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第211図 17	砥石	5.5	4.4	4.2	148.6	花崗岩	南西部床面	Q64
18	白玉	0.4	0.4	0.2	0.1	滑石	東コーナー付近床面	Q65 孔径0.2cm

第85号住居跡 (第212図)

位置 B地区の南部，G6c_s区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.10m，短軸5.99mの方形を呈している。

長軸方向 N-53°-W。

壁 壁高は9～26cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，全体によく踏み固められ硬い。

ピット 6か所 (P₁～P₆) 検出されている。P₁～P₄は径31cm～33cmの円形を呈し，深さ16～42cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径31cmの円形を呈し，深さ22cmで性格は不明である。P₆は性格不明である。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は，長径118cm，短径57cmの不整楕円形を呈し，床を約6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，熱を受け，赤変硬化している。

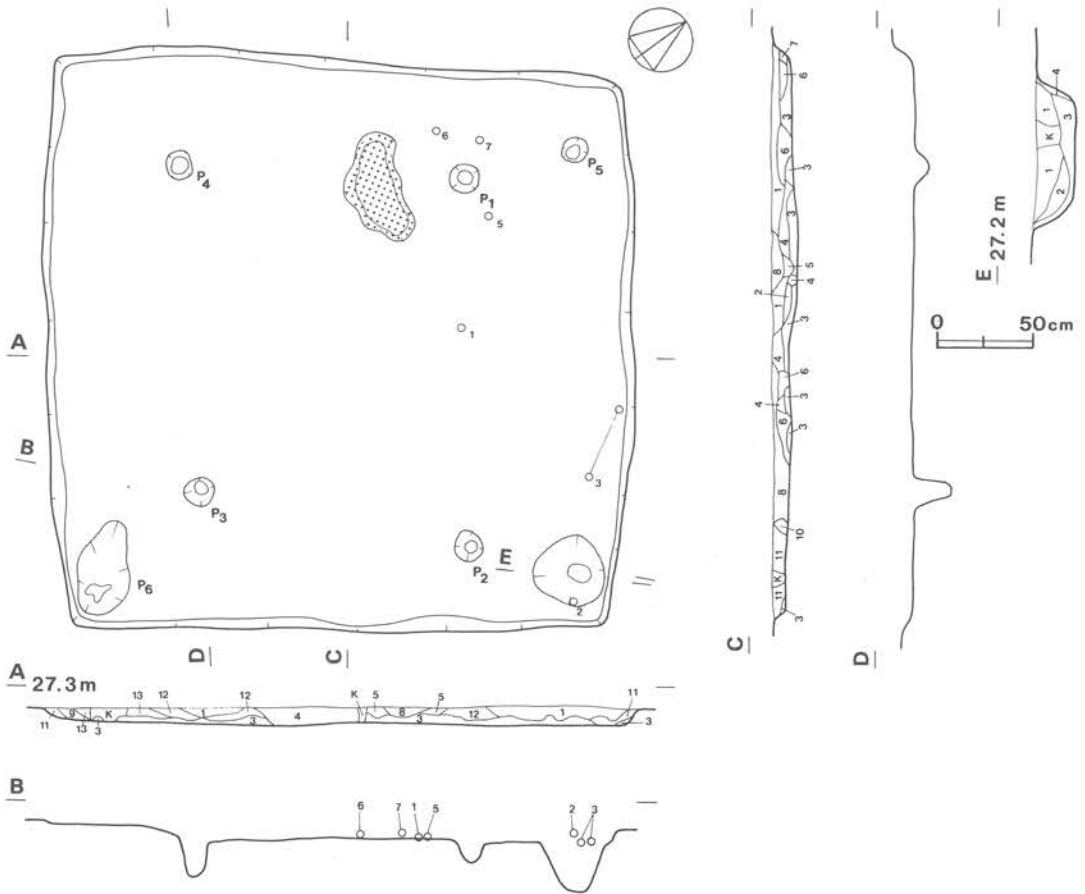
貯蔵穴 東コーナーに検出されている。平面形は径70cmほどの円形を呈し，深さは54cmである。

底面は平坦で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 北部及び東部の覆土の下層や中・上層から土師器片(甕1，埴3，高坏3)，土師器細片(493点)が出土している。その他，流れ込みと思われる弥生式土器細片(8点)が出土している。1の甕は中央北寄りの覆土下層からつぶれた状態で，2・3の埴は東コーナー付近の覆土上・中層から，5の高坏は北部の覆土下層から，6の高坏は北部西寄りの覆土下層から，それぞれ出土している。

所見 本跡は遺構の形態及び出土遺物等から，古墳時代中期の住居跡と考えられる。



S I -85 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・黒色土ブロック中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, 炭化粒子微量。
- 3 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 4 明褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量。

- 5 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。

- 6 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。

- 7 暗褐色 ローム粒子少量。

- 8 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。

S I -85 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。
- 2 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 焼土粒子微量。
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量。

- 9 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量。

- 10 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量。

- 11 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量。

- 12 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量。

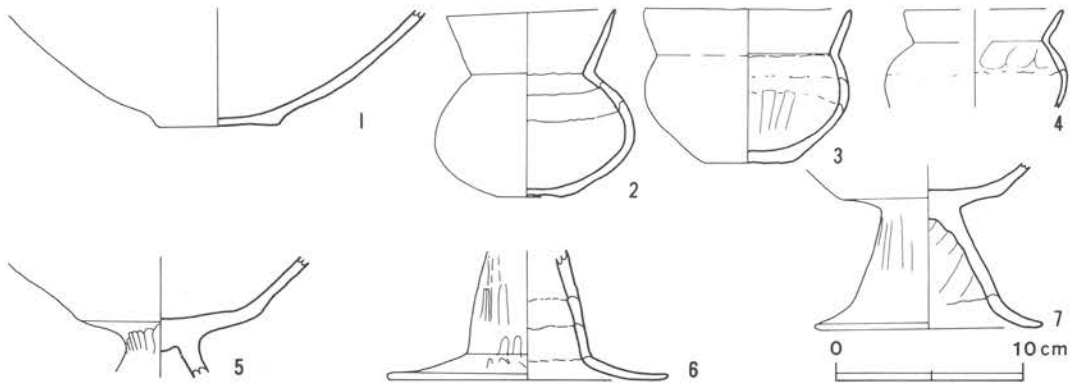
- 13 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量。



第212図 第85号住居跡実測図

第85号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 1	甕 土師器	B (6.2) C 6.6	胴部下位から底部にかけての破片。突出した平底。胴部は内彎する。	胴部外面ヘラナダ。	砂粒・長石・石英・雲母・バミス にぶい橙色 普通	P600 5% 中央部北寄り覆土下層



第213図 第85号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 2	埴 土師器	A 9.0 B 10.1 C 3.5	胴部下位から口縁部にかけての破片。わずかな上げ底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ナデ、輪積み痕有り。	砂粒 橙色 普通	P 604 50% 東コーナー付近覆土上層
3	埴 土師器	A 11.0 B 8.3 C 4.5	胴部中位から口縁部にかけての破片。平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P 605 40% 東コーナー付近覆土中層 一部スス付着
4	埴 土師器	A [8.7] B (5.3)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り、輪積み痕有り。	砂粒・雲母・パミス にぶい黄橙色 普通	P 606 5% 北部覆土上層 一部スス付着
5	高 土師器	B (6.5) E (2.5)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して大きく開く。	坏底部外面縦位のヘラ磨き。内外面ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 601 20% 北部覆土下層
6	高 土師器	B (7.0) D 15.0	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。脚裾部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい黄橙色 普通	P 602 30% 北部西寄り覆土下層
7	高 土師器	B (8.9) D 12.2 E 6.5	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部はラッパ状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。	脚部外面縦位のヘラ削り、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P 603 40% 北部西寄り覆土中層

第88号住居跡 (第214図)

位置 B地区南部, G5b区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.25m, 短軸4.00mの方形を呈している。

主軸方向 N-26°-W。

壁 壁高は23~31cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。南部及び西部は攪乱されており、やや柔らかい。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径60cmの円形を呈し、深さ43cmである。規模や位置

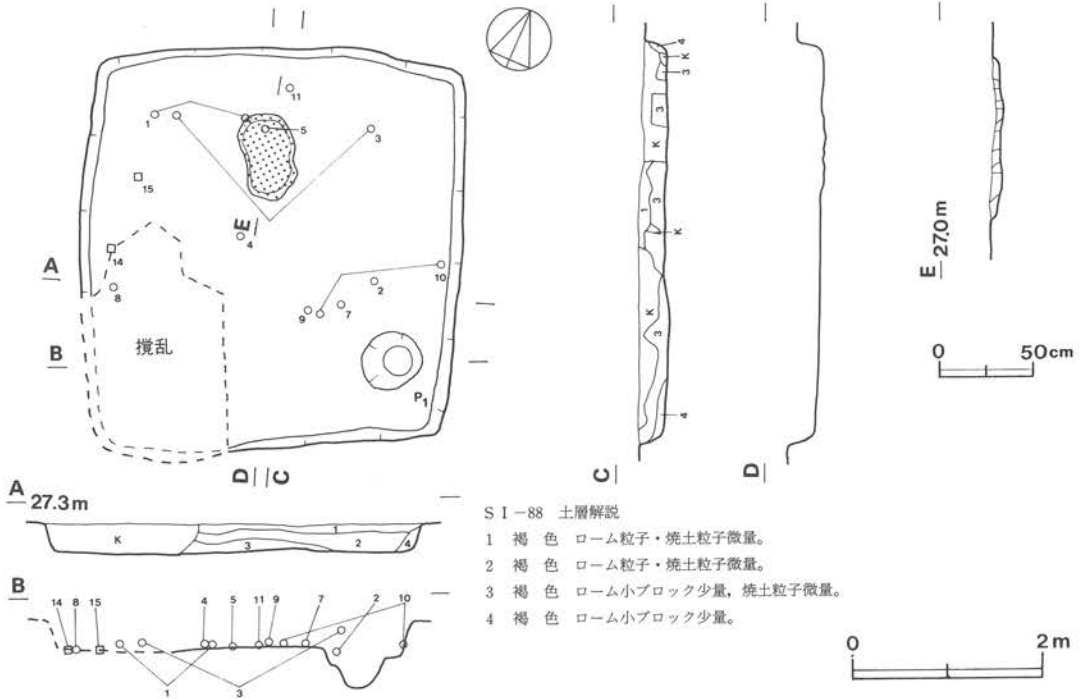
から支柱穴と考えられるが、他の支柱穴は、攪乱を受けて検出されない。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は、長径92cm、短径50cmの楕円形を呈し、床を約5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け、赤変硬化している。

覆土 褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 東部及び北西壁付近を中心に床面や覆土中層から土師器片(甕1, 壺3, 埴2, 鉢2, 高坏4), 土師器細片(284点)及び石器・石製品が少量出土している。その他、流れ込みと思われる弥生式土器細片(196点)及び石製品(石鏃1点)が出土している。2の壺は東部の床面からつぶれた状態で出土し、5の埴は北西壁中央部付近の床面から逆位の状態で、7の鉢は東部の覆土下層から正位の状態で、9の高坏は東部の覆土下層から横位の状態で、10の高坏の上位に重なった状態で、それぞれ出土している。その他、15の紡錘車は、西部の床面直上から出土している。

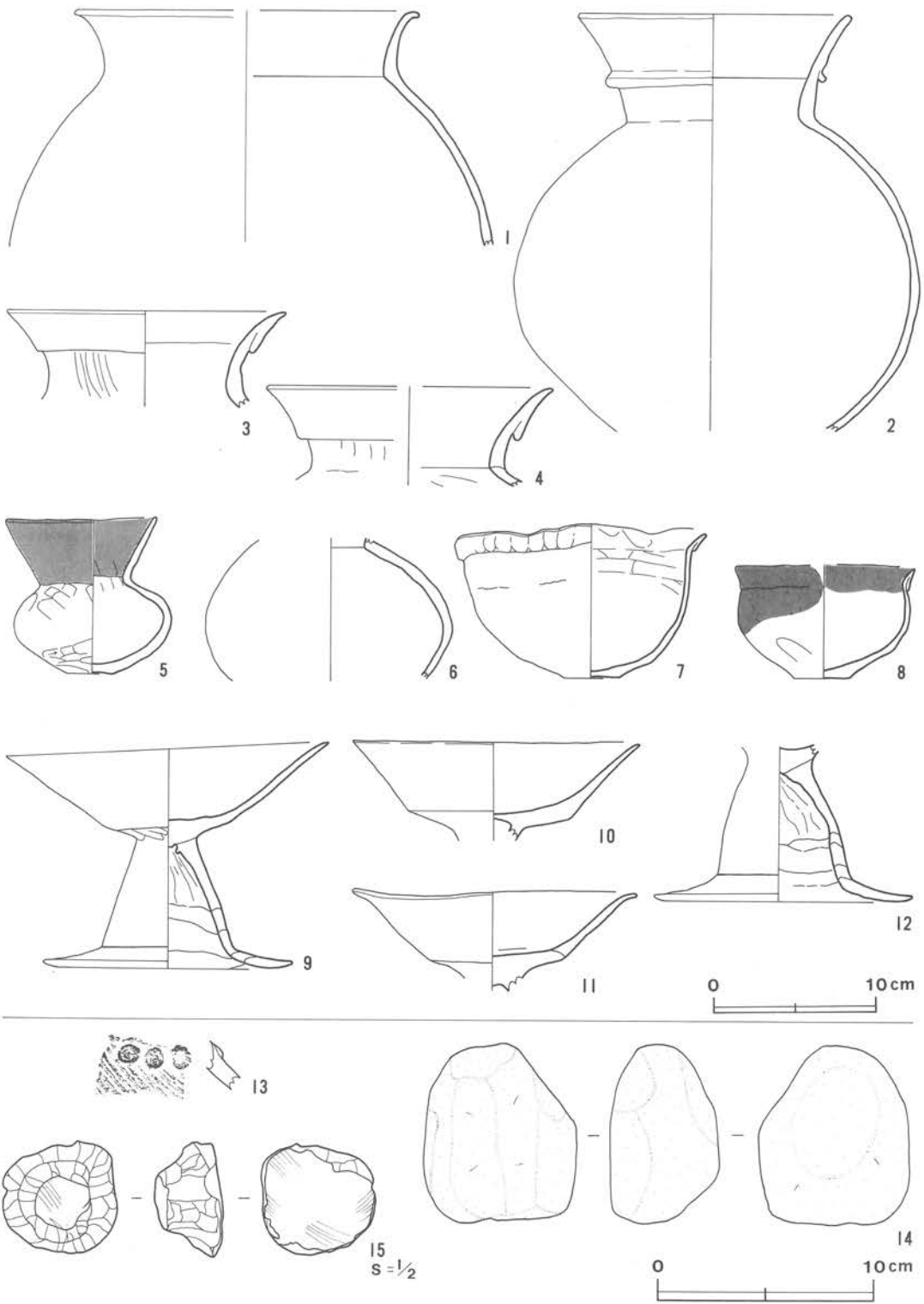
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第214図 第88号住居跡実測図

第88号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 1	甕 土師器	A [21.3] B (14.4)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P620 西部覆土中層 10%
2	壺 土師器	A 16.9 B (25.9)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がる。頸部に隆起帯を施している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P621 東部床面 70%



第215図 第88号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 3	壺 土師器	A 17.2 B (6.0)	口縁部片。口縁部は複合口縁で頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・スコリアにぶい黄橙色 普通	P 622 5% 北部覆土上層
4	壺 土師器	A [17.9] B (6.2)	口縁部片。口縁部は複合口縁で頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英にぶい黄橙色 普通	P 623 5% 中央部覆土下層
5	埴 土師器	A 8.3 B 9.8 C 2.9	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。赤彩痕有り。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P 630 95% 北西壁中央部付近床面
6	埴 土師器	B 8.9	胴部片。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	内・外面摩擦著しい。	砂粒・長石・石英・パミス 橙色 普通	P 631 20% 北西壁中央部付近覆土中層
7	鉢 土師器	A 15.5 B 9.6 C 3.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は複合口縁で、外反する。	体部外面ナデ、内面上位ヘラ削り。底部外面ヘラ削り。体部内面輪積み痕有り。	砂粒にぶい橙色 普通	P 628 95% 東部覆土下層 外面一部スス付着
8	鉢 土師器	A [11.2] B 7.1 C 3.5	体部から口縁部にかけての破片、平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は複合口縁で、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。赤彩痕有り。	砂粒・パミスにぶい黄橙色 普通	P 629 30% 南西壁中央部付近覆土下層
9	高 土師器	A 20.1 B 14.1 D 15.4 E 8.2	脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部外面ヘラ削り。脚部内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒にぶい橙色 普通	P 624 95% 東部覆土下層
10	高 土師器	A 17.8 B (6.3) E (0.9)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア・パミス 橙色 普通	P 625 50% 東部覆土下層
11	高 土師器	A 17.7 B (6.3) E (1.3)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、上位でやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 やや不良	P 626 50% 北西壁中央部付近床面
12	高 土師器	B (9.7) D 16.1 E (8.7)	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で水平近くに広がる。	脚部内面上位指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒にぶい橙色 普通	P 627 50% 東部覆土中層

第215図の13は第88号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。13は頸部下位から胴部上位にかけての破片で、頸部には無文帯に粘土粒が貼付されており、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第215図	14 磨石	8.5	7.1	5.1	348.1	花崗岩	南西壁中央部付近床面	Q 67
	15 紡錘車	3.6	3.5	2.1	30.2	滑石	西部床面	Q 68 未製品

第94号住居跡（第175図）

位置 A地区南部、G2g₆区を中心に確認されているが、南東側は調査区外に延びている。

重複関係 本跡の北西部は、第50号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸（8.54）m、短軸8.23mの方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-29°-W。

壁 壁溝は30~47cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 3か所(P₁~P₃)検出されている。P₁・P₂は平面形は、径20~23cmの円形を呈し、深さ78~85cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。4本柱と思われるが、他の支柱穴は調査区外であり検出されない。P₃は性格不明である。

炉 長軸線上の北西寄りに検出されている。平面形は、長径(110)cm、短径84cmの不整形を呈し、床を約7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受けて、焼土化している。

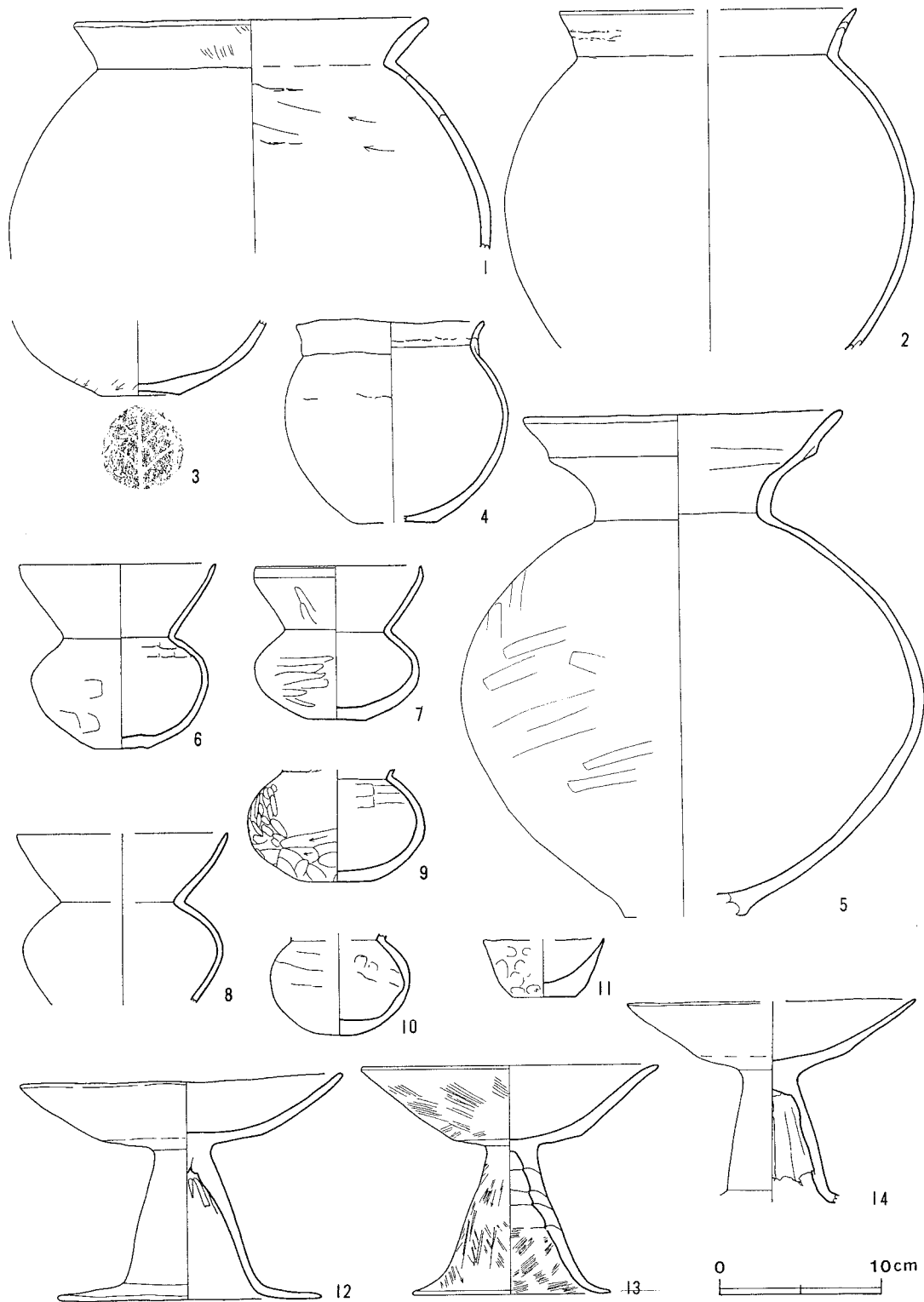
覆土 褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土の下層や中層から土師器片(甕4, 壺1, 埴5, 鉢1, 高坏10), 土師器細片(994点)が出土している。その他、流れ込みと思われる縄文式土器細片(1点), 弥生式土器細片(16点)が出土している。4の小形甕は北コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で、5の壺は北コーナー付近の覆土中層からつぶれた状態で、6・7の埴は北コーナーの覆土下層から横位の状態で、11の鉢は北部の覆土中層から正位の状態で、12の高坏は北部の覆土下層から坏部と脚部が離れた状態で、13の高坏は北部の覆土下層から横位の状態で、それぞれ出土している。

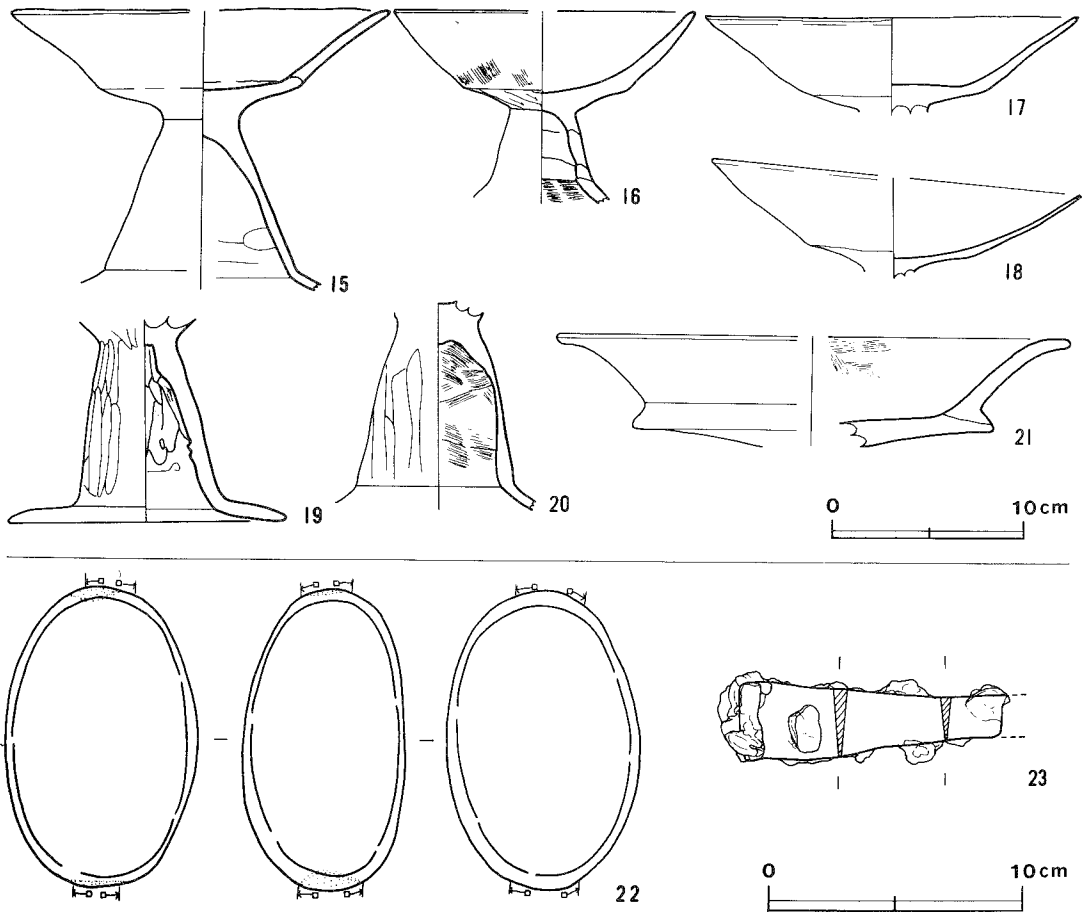
所見 本跡は、重複関係から第50号住居跡より新しい時期に構築されている。南東側が調査区域外のため、ピット及び炉を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第94号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 1	甕 土師器	A 22.1 B (14.6)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。胴部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P645 30% 北部床面
2	甕 土師器	A [18.2] B (23.0)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。口縁部内面輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P646 10% 北部覆土中層
3	甕 土師器	B (4.6) C 5.2	底部片。平底。	底部に木葉痕有り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P647 5% 北部覆土下層
4	小形甕 土師器	A 11.8 B 12.6 C [5.6]	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反する。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・ パミス 明赤褐色 普通	P648 90% 北コーナー付近覆土下層
5	壺 土師器	A 19.6 B 30.9 C [7.7]	突出した平底。胴部はやや扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は有段口縁で、垂直に立ち上がり、上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P644 85% 北コーナー付近覆土中層



第216图 第94号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第217図 第94号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 6	埴土師器	A 12.3	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。	砂粒・雲母 におい褐色 普通	P 659 90% 北コーナー付近覆土下層
		B 11.5				
		C 3.4				
7	埴土師器	A 10.2	平底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇端部で直立する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面へラ削り。胴部外面へラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 660 95% 北コーナー付近覆土下層
		B 11.5				
		C 3.4				
8	埴土師器	A [13.3]	胴下半部欠損。胴部は偏平な球形状を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ナデ。	砂粒・長石・パミス におい橙色 普通	P 661 50% 北部覆土中層
		B (10.6)				
9	埴土師器	B (7.0)	口縁部欠損。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面へラ削り、内面一部ハケ目整形。	砂粒・石英・雲母 灰黄色 普通	P 662 50% 北部覆土下層 一部スス附着
		C 4.1				
10	埴土師器	B (6.4)	口縁部欠損。丸底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	胴部外面へラナデ、内面指頭痕有り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 やや不良	P 663 50% 北部覆土下層
11	小形鉢土師器	A [7.6]	体部片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、上端部は尖る。	体部外面へラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 664 50% 北部覆土中層 一部スス附着
		B 3.6				
		C 4.2				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 12	高坏土師器	A 20.1 B 14.2 D 16.5 E 9.5	脚部は円筒状を呈し、裾部でほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデ。脚部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 649 85% 北部覆土下層
13	高坏土師器	A (18.6) B 14.4 D (12.5) E 9.4	脚部はラッパ状を呈し、裾部で水平近くに広がる。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り。脚部内・外面ヘラ削り。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 650 70% 北部覆土下層
14	高坏土師器	A [18.0] B (12.8) E (8.1)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	坏部外面ナデ。脚部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	P 651 50% 北部覆土中層 一部スス付着
第217図 15	高坏土師器	A [20.1] B (15.1) E (9.5)	脚部欠損。脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に稜を持ち、外反気味に立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデ。脚部内面ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 652 50% 北西壁中央部覆土中層 一部スス付着
16	高坏土師器	A [16.0] B (10.3) E (9.5)	脚部下位欠損。脚部は円筒状を呈する。坏部は下位に稜を持ち、内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ハケ目整形。坏底部外面ヘラ削り。脚部内面ハケ目整形、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 653 50% 北西壁中央部付近覆土下層
17	高坏土師器	A 19.8 B (5.3)	坏部片。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・パミス にぶい黄橙色 普通	P 654 40% 北西壁中央部付近覆土中層
18	高坏土師器	A [19.5] B (4.1)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 655 30% 北西壁中央部付近覆土下層
19	高坏土師器	B (10.7) D 14.8 E 9.5	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で水平近くに広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 657 50% 北部覆土中層
20	高坏土師器	B (11.4) E (10.3)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で水平近くに広がる。	脚部外面縦位のヘラ削り、内面ハケ目整形。	砂粒・雲母・パミス にぶい黄橙色 普通	P 658 30% 北コーナー付近覆土下層
21	高坏土師器	A [27.2] B (10.3)	坏部片。坏部は底部に周縁が突き出ており、口縁部は外反して大きく開く。	坏部外面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・パミス 黄橙色 普通	P 656 25% 北コーナー付近覆土中層

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第217図	22 敲石	12.1	7.8	6.4	782.4	砂岩	北部覆土下層	Q 69

図版番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第217図	23 鎌	(7.1)	(2.2)	0.3	(18.2)	西部覆土上層 M 5

第95号住居跡 (第201図)

位置 B地区北西部、F4a9を中心に確認されている。

重複関係 本跡の柱穴を結んだ線の内側は、第65号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸9.91m、短軸9.67mの方形を呈している。

長軸方向 N-16°-E。

壁 壁高は7~17cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦であり、よく踏み固められて硬いが、北西コーナー及び北壁中央部付近は攪乱を受けていて、やや柔らかい。

ピット 5か所(P₁₀~P₁₄)検出されている。P₁₀~P₁₂は、径36~72の円形を呈し、深さ35~60cmで規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は、攪乱を受けて検出されない。P₁₃・P₁₄は、径38~53cmの円形を呈し、深さ35~60cmで性格は不明である。

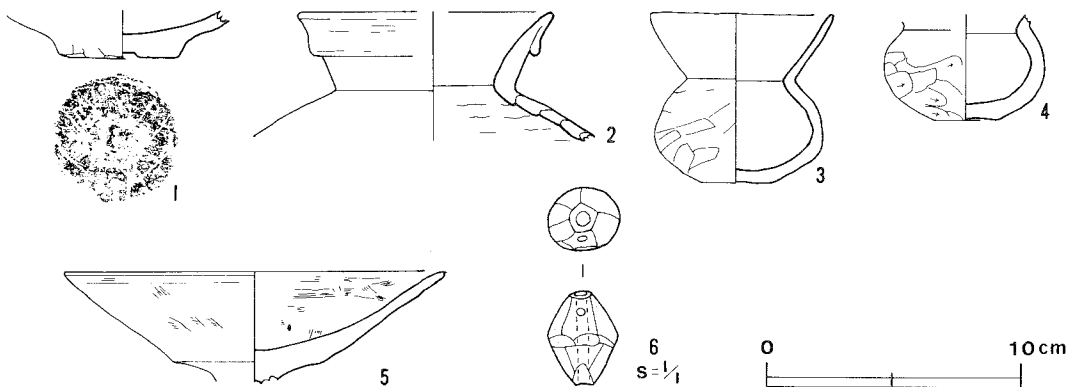
炉 長軸線上の中央から西寄りに検出されているが、東側は攪乱を受けている。平面形は、長径59cm、短径〔44〕cmの楕円形を呈するものと思われ、床を13cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受けて、焼土化している。

貯蔵穴 南西コーナー付近から検出されている。平面形は径66~71cmの円形を呈し、深さは45cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 ローム粒子・ローム中ブロックを多量に含む褐色土・暗褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 住居跡全域の覆土の下層や中層から土師器片(甕1, 壺1, 埴2, 高坏1), 土師器細片(292点)及び石製品が出土している。その他、流れ込みと思われる弥生式土器細片(55点)が出土している。3の埴は北西コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で、4の埴は北東コーナー付近の覆土中層から正位の状態で、5の高坏は北東コーナーの覆土下層から逆位の状態で、それぞれ出土している。その他、6の切子玉は、貯蔵穴内から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第65号住居跡より古い時期に構築されている。遺物の形態や出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第218図 第95号住居跡出土遺物実測・拓影図

第95号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 1	甕 土師器	B (2.5) C 6.5	底部片。平底。	底部に木葉痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 666 5% 西壁中央部付近覆土下層
2	壺 土師器	A [13.6] B (7.3)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P 665 5% 南東コーナー付近覆土中層
3	埴 土師器	A 9.8 B 9.1 C 3.4	胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。	砂粒・雲母・バミス にぶい黄褐色 普通	P 668 80% 北西コーナー付近覆土下層 一部スス附着
4	埴 土師器	B (5.7) C 3.1	口縁部欠損。わずかな上げ底。胴部は偏平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	胴部外面へラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 669 50% 北東コーナー付近覆土中層
5	高 坏 土師器	A 20.2 B (6.0)	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がり、大きく開く。	坏部内・外面一部ハケ目整形。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 667 50% 北東コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	法 量				石 質	出 土地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第218図 6	切 子 玉	1.3	1.0	—	0.1	滑 石	貯蔵穴内覆土	Q70

表3 原田北遺跡古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模		床面	ピット	炉	貯蔵穴	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
2	B4j ₀	N-35°-W	隅 丸 方 形	7.84×7.35	12~30	平坦	14	2	—	自然	弥生式土器片71, 土師器片2235, 土製品12, 石器2	
10	B4g ₄	N-39°-W	方 形	5.98×5.44	4~10	平坦	4	4	—	自然	弥生式土器片26, 土師器片393, 土製品1	
17	B4b ₀	N-15°-E	不 整 方 形	7.95×[7.80]	9~17	平坦	3	2	—	自然	弥生式土器片411, 土師器片408, 須恵器片4, 土製品2, 石器1	第26号住居跡と重複
19	C2b ₀	N-42°-W	方 形	3.92×[3.65]	8~17	平坦	2	1	—	自然	縄文式土器片2, 弥生式土器片6, 土師器片161	第1号溝と重複
28	H5c ₀	N-90°	方 形	5.06×4.88	25~36	平坦	11	1	1	自然	弥生式土器片37, 土師器片211, 石器1	
44	G1b ₀	N-30°-W	方 形	11.70×11.60	38~50	平坦	17	4	2	自然	弥生式土器片14, 土師器片3029, 土製品1, 石製品2	
45	G2d ₃	N-38°-W	方 形	10.52×9.66	26~38	平坦	4	3	1	自然	弥生式土器片14, 土師器片935	第46号住居跡 第28号土坑と重複
46	G2c ₄	N-16°-W	長 方 形	6.04×[5.62]	20~29	平坦	4	1	—	自然	弥生式土器片61, 土師器片351	第45号住居跡と重複
48	G2f ₁	N-44°-W	長 方 形	6.80×[6.43]	36~54	平坦	3	1	3	自然	縄文式土器片1, 弥生式土器片17, 土師器片3108	
49	G2g ₄	N-37°-E	長 方 形	5.02×[4.21]	17~36	平坦	4	—	—	人為	弥生式土器片36, 土師器片743	第50号住居跡と重複
51	G2c ₇	N-47°-E	方 形	8.90×8.86	24~46	平坦	8	1	—	自然	縄文式土器片3, 弥生式土器片11, 土師器片500	第1・2号溝と重複
52	F2i ₅	N-22°-W	長 方 形	6.70×5.15	32~43	平坦	3	1	1	自然	縄文式土器片1, 弥生式土器片63, 土師器片1025, 石器・石製品5	第1号溝と重複 一部攪乱
53	F2h ₀	N-19°-W	方 形	4.13×3.78	25~30	平坦	4	2	1	自然	縄文式土器片2, 弥生式土器片26, 土師器片374, 石器1	
54	F2j ₄	N-34°-E	隅 丸 長 方 形	6.23×5.31	53~63	平坦	4	1	1	自然	弥生式土器片13, 土師器片2346	
55	G2b ₉	N-35°-W	方 形	7.54×7.44	12~19	平坦	6	1	2	自然	弥生式土器片3, 土師器片1573, 石製品3, 鉄製品1	
57	G3d ₁	N-32°-W	方 形	3.40×3.38	32~36	平坦	3	1	1	自然	縄文式土器片1, 弥生式土器片5, 土師器片246, 石器1	火災住居跡

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		床面	ピット	炉	貯蔵穴	覆土	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
58	G3c ₂	N-38°-W	方形	8.60×[8.50]	30~56	平坦	10	2	1	自然	縄文式土器片1, 弥生式土器片30, 土師器片945, 土製品1, 鉄製品1	第59号住居跡と重複 火災住居跡
60	F4g ₁	N-43°-E	長方形	6.84×5.08	14~40	平坦	4	2	1	自然	弥生式土器片140, 土師器片580, 石製品2	第62号住居跡第30・31・131号土坑と重複
61	F4e ₃	N-47°-W	長方形	7.05×6.66	45~50	平坦	6	2	2	人為	弥生式土器片50, 土師器片1680, 土製品1, 石製品12	一部攪乱
64	F4i ₇	N-45°-W	方形	4.12×3.87	14~30	平坦	3	1	1	人為	弥生式土器片25, 土師器片262	第29号土坑と重複
65	F4a ₉	N-16°-E	方形	6.90×6.82	34~46	平坦	9	1	1	人為	縄文式土器片9, 弥生式土器片147, 土師器片199, 石器2	第95号住居跡と重複 一部攪乱
66	F4g ₃	N-0°	方形	[11.06]×10.97	19~31	平坦	16	3	1	人為	弥生式土器片618, 土師器片828, 内耳土器片1, 陶器片1	
69	F5d ₁	N-23°-W	隅丸長方形	7.52×6.70	21~31	平坦	3	1	1	人為	縄文式土器片8, 弥生式土器片425, 土師器片628, 石器・石製品2	第68号土坑と重複
74	E5h ₃	N-81°-E	長方形	5.84×5.20	10~20	平坦	7	1	—	人為	縄文式土器片12, 弥生式土器片58, 土師器片87, 石製品2	
83	G6d ₁	N-46°-W	方形	6.34×6.31	27~41	平坦	6	1	2	自然	弥生式土器片105, 土師器片454, 石器・石製品2	火災住居跡
85	G6c ₃	N-53°-W	方形	6.10×5.99	9~26	平坦	6	1	1	自然	弥生式土器片8, 土師器片500	
88	G5b ₃	N-26°-W	方形	4.25×4.00	23~31	平坦	1	1	—	自然	弥生式土器片196, 土師器片296, 石器・石製品2	一部攪乱
94	G2g ₆	N-29°-W	方形	[8.54]×8.23	30~47	平坦	3	1	—	自然	縄文式土器片1, 弥生式土器片16, 土師器片1015, 石器1, 鉄製品1	第50号住居跡と重複 一部攪乱
95	F4a ₉	N-16°-E	方形	9.91×9.67	7~17	平坦	5	1	1	人為	弥生式土器片55, 土師器片297, 石製品1	第65号住居跡と重複 一部攪乱

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

原田北遺跡 I

原田西遺跡

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番2号

Tel 0292-25-6587

印刷 (株)あけぼの印刷社
水戸市松が丘2-6-24

Tel 0292-51-5265

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

原田北遺跡 I
原田西遺跡
(下)

平成 5 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

はら だ きた
原 田 北 遺 跡 I

はら だ にし
原 田 西 遺 跡

(下)

平成 5 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

目 次

口絵

序

例言

目次（図版・写真・表目次を含む）

— 上 卷 —

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法	9
第1節 地区設定	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構確認	10
第4節 遺構調査	11
第4章 遺構・遺物の記載方法	12
第1節 遺構の記載方法	12
第2節 遺物の記載方法	14
第5章 原田北遺跡 I	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 遺構と遺物	20
1 竪穴住居跡	20
(1) 弥生時代の竪穴住居跡	20
(2) 古墳時代の竪穴住居跡	205

— 下 卷 —

2 土 坑	315
3 溝	325
4 方形周溝状遺構	328
5 火葬墓	330
6 炭焼窯	332
7 遺物包含層及び遺構外出土遺物	344
第3節 考 察	363
1 縄文時代	363
2 弥生時代	363
3 古墳時代	375
第6章 原田西遺跡	389
第1節 遺跡の概要	389
第2節 遺構と遺物	389
1 竪穴住居跡	389
2 土 坑	423
3 溝	428
4 遺物包含層及び遺構外出土遺物	431
第3節 考 察	446
1 縄文時代	446
2 弥生時代	446
結 語	453
附 章 原田北遺跡第62号住居跡出土直刀の分析調査	454

插图目次

—上 卷—

第 1 图	原田北・原田西遺跡周辺遺跡分布图……6	第 37 图	第14号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……59
第 2 图	調査区呼称方法概念图……9	第 38 图	第14号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……60
第 3 图	原田北遺跡基本土層图……9	第 39 图	第15号住居跡実測图 ……61
第 4 图	原田西遺跡基本土層图 ……10	第 40 图	第15号住居跡出土遺物実測・拓影图……61
第 5 图	原田北・原田西遺跡調査区……18	第 41 图	第16号住居跡実測图 ……63
第 6 图	第 1 号住居跡実測图 ……21	第 42 图	第16号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……64
第 7 图	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……22	第 43 图	第16号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……65
第 8 图	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……24	第 44 图	第16号住居跡出土遺物実測图(3) ……66
第 9 图	第 3 号住居跡実測图 ……24	第 45 图	第18号住居跡実測图 ……67
第 10 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……25	第 46 图	第18号住居跡出土遺物実測・拓影图……68
第 11 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……26	第 47 图	第20号住居跡実測图 ……71
第 12 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)……27	第 48 图	第20号住居跡出土遺物実測・拓影图……72
第 13 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(4)……28	第 49 图	第21号住居跡実測图 ……73
第 14 图	第 4 号住居跡実測图 ……31	第 50 图	第21号住居跡出土遺物実測・拓影图……74
第 15 图	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……32	第 51 图	第22号住居跡実測图 ……75
第 16 图	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……33	第 52 图	第22号住居跡出土遺物実測・拓影图……76
第 17 图	第 5 号住居跡実測图 ……34	第 53 图	第23号住居跡実測图 ……77
第 18 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……35	第 54 图	第23号住居跡出土遺物実測・拓影图……78
第 19 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……36	第 55 图	第24号住居跡実測图 ……80
第 20 图	第 6 号住居跡実測图 ……38	第 56 图	第24号住居跡出土遺物実測・拓影图……81
第 21 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……39	第 57 图	第25号住居跡実測图 ……82
第 22 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)……40	第 58 图	第25号住居跡出土遺物実測・拓影图……83
第 23 图	第 7 号住居跡実測图 ……41	第 59 图	第27号住居跡実測图 ……85
第 24 图	第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影图……42	第 60 图	第27号住居跡出土遺物実測・拓影图……86
第 25 图	第 8 号住居跡実測图 ……43	第 61 图	第29号住居跡実測图 ……87
第 26 图	第 8 号住居跡出土遺物実測・拓影图……44	第 62 图	第29号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……88
第 27 图	第 9 号住居跡実測图 ……45	第 63 图	第29号住居跡出土遺物実測图(2) ……89
第 28 图	第 9 号住居跡出土遺物実測・拓影图……46	第 64 图	第30号住居跡実測图 ……91
第 29 图	第11号住居跡実測图 ……48	第 65 图	第30号住居跡出土遺物実測・拓影图……91
第 30 图	第11号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……49	第 66 图	第31号住居跡実測图 ……93
第 31 图	第11号住居跡出土遺物実測图(2) ……50	第 67 图	第31号住居跡出土遺物実測・拓影图……94
第 32 图	第12号住居跡実測图 ……52	第 68 图	第32号住居跡実測图 ……95
第 33 图	第12号住居跡出土遺物実測・拓影图……53	第 69 图	第32号住居跡出土遺物実測・拓影图……96
第 34 图	第13号住居跡実測图 ……55	第 70 图	第33号住居跡実測图 ……97
第 35 图	第13号住居跡出土遺物実測・拓影图……56	第 71 图	第33号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)……98
第 36 图	第14号住居跡実測图 ……57	第 72 图	第33号住居跡出土遺物実測图(2) ……99
		第 73 图	第34号住居跡実測图 ……100
		第 74 图	第34号住居跡出土遺物実測・拓影图 ……102

第 75 图	第35号住居跡実測図……………103	第115图	第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……151
第 76 图	第35号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……104	第116图	第73号住居跡実測図……………154
第 77 图	第36号住居跡実測図……………105	第117图	第73号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……155
第 78 图	第36号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……106	第118图	第75号住居跡実測図……………157
第 79 图	第36号住居跡出土遺物実測図(2)……………107	第119图	第75号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……158
第 80 图	第37号住居跡実測図……………108	第120图	第76号住居跡実測図……………160
第 81 图	第37号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……109	第121图	第76号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……161
第 82 图	第38号住居跡実測図……………110	第122图	第77号住居跡実測図……………163
第 83 图	第38号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……111	第123图	第77号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……164
第 84 图	第39号住居跡実測図……………112	第124图	第78号住居跡実測図……………166
第 85 图	第39号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……113	第125图	第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……167
第 86 图	第40号住居跡実測図……………114	第126图	第78号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……168
第 87 图	第40号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……115	第127图	第79号住居跡実測図……………170
第 88 图	第41号住居跡実測図……………116	第128图	第79号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……172
第 89 图	第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……118	第129图	第80号住居跡実測図……………174
第 90 图	第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……119	第130图	第80号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……175
第 91 图	第42号住居跡実測図……………120	第131图	第81号住居跡実測図……………177
第 92 图	第42号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……121	第132图	第81号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……178
第 93 图	第43号住居跡実測図……………122	第133图	第81号住居跡出土遺物実測図(2)……………179
第 94 图	第43号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……123	第134图	第82号住居跡実測図……………180
第 95 图	第47号住居跡実測図……………124	第135图	第84号住居跡実測図……………181
第 96 图	第47号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……125	第136图	第84号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……182
第 97 图	第50号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……126	第137图	第86号住居跡実測図……………184
第 98 图	第56号住居跡実測図……………127	第138图	第86号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……185
第 99 图	第56号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……128	第139图	第87号住居跡実測図……………186
第100图	第62号住居跡実測図……………130	第140图	第87号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……187
第101图	第62号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……131	第141图	第89号住居跡実測図……………190
第102图	第63号住居跡実測図……………133	第142图	第89号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……191
第103图	第63号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……134	第143图	第90号住居跡実測図……………193
第104图	第67号住居跡実測図……………137	第144图	第90号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……193
第105图	第67号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……138	第145图	第91号住居跡実測図……………194
第106图	第68号住居跡実測図……………140	第146图	第91号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……195
第107图	第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……141	第147图	第92号住居跡実測図……………197
第108图	第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……142	第148图	第92号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……198
第109图	第70号住居跡実測図……………144	第149图	第93号住居跡実測図……………199
第110图	第70号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……145	第150图	第93号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……200
第111图	第71号住居跡実測図……………146	第151图	第96号住居跡実測図……………201
第112图	第71号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……147	第152图	第96号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……202
第113图	第72号住居跡実測図……………149	第153图	第 2 号住居跡実測図……………206
第114图	第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……150	第154图	第 2 号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……207

第155图	第2号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)·····208	第195图	第61号住居跡実測図·····276
第156图	第10号住居跡実測図·····211	第196图	第61号住居跡出土遺物実測図(1)·····278
第157图	第10号住居跡出土遺物実測図·····211	第197图	第61号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)·····279
第158图	第17·26号住居跡実測図·····213	第198图	第61号住居跡出土遺物実測図(3)·····280
第159图	第17号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)·····214	第199图	第64号住居跡実測図·····282
第160图	第17号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)·····215	第200图	第64号住居跡出土遺物実測図·····283
第161图	第19号住居跡実測図·····218	第201图	第65·95号住居跡実測図·····284
第162图	第28号住居跡実測図·····219	第202图	第65号住居跡出土遺物実測図·····286
第163图	第28号住居跡出土遺物実測図(1)·····220	第203图	第66号住居跡実測図·····287
第164图	第28号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)·····221	第204图	第66号住居跡出土遺物実測図·····290
第165图	第28号住居跡貯蔵穴実測図·····221	第205图	第69号住居跡実測図·····292
第166图	第28号住居跡出土遺物位置図·····222	第206图	第69号住居跡出土遺物実測図(1)·····293
第167图	第44号住居跡実測図·····225	第207图	第69号住居跡出土遺物実測図(2)·····294
第168图	第44号住居跡出土遺物実測図(1)·····228	第208图	第74号住居跡実測図·····296
第169图	第44号住居跡出土遺物実測図(2)·····229	第209图	第74号住居跡出土遺物実測図·····297
第170图	第45号住居跡実測図·····232	第210图	第83号住居跡実測図·····299
第171图	第45号住居跡出土遺物実測図·····233	第211图	第83号住居跡出土遺物実測図·····300
第172图	第46号住居跡実測図·····235	第212图	第85号住居跡実測図·····303
第173图	第48号住居跡実測図·····237	第213图	第85号住居跡出土遺物実測図·····304
第174图	第48号住居跡出土遺物実測図·····238	第214图	第88号住居跡実測図·····305
第175图	第49·50·94号住居跡実測図·····242	第215图	第88号住居跡出土遺物実測·拓影図·····306
第176图	第49号住居跡出土遺物実測図·····244	第216图	第94号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)·····309
第177图	第51号住居跡実測図·····246	第217图	第94号住居跡出土遺物実測図(2)·····310
第178图	第52号住居跡実測図·····248	第218图	第95号住居跡出土遺物実測·拓影図·····312
第179图	第52号住居跡出土遺物実測図(1)·····249	— 下 卷 —	
第180图	第52号住居跡出土遺物実測図(2)·····250	第219图	第6号土坑実測図·····315
第181图	第53号住居跡実測図·····252	第220图	第7·8号土坑実測図·····316
第182图	第53号住居跡出土遺物実測図·····253	第221图	第20·27号土坑実測図·····317
第183图	第54号住居跡実測図·····254	第222图	第49~52·59号土坑実測図·····319
第184图	第54号住居跡出土遺物実測図·····255	第223图	土坑出土遺物実測·拓影図·····320
第185图	第55号住居跡実測図·····258	第224图	第1·2号溝実測図·····326
第186图	第55号住居跡出土遺物実測図(1)·····259	第225图	第3号溝実測図·····327
第187图	第55号住居跡出土遺物実測図(2)·····260	第226图	第1号溝出土遺物実測·拓影図·····328
第188图	第57号住居跡実測図·····263	第227图	第1号方形周溝状遺構実測図·····329
第189图	第57号住居跡出土遺物実測図·····264	第228图	第1·2号火葬墓実測図·····330
第190图	第58·59号住居跡実測図·····268	第229图	第1·2号火葬墓出土遺物実測·拓影図·····331
第191图	第58号住居跡出土遺物実測図(1)·····270	第230图	第1号炭烧窯実測図·····333
第192图	第58号住居跡出土遺物実測図(2)·····271	第231图	第2号炭烧窯実測図·····334
第193图	第60号住居跡実測図·····272	第232图	第3号炭烧窯実測図·····335
第194图	第60号住居跡出土遺物実測·拓影図·····273		

第233図	第4号炭焼窯実測図……………	336	第272図	第5号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	402
第234図	第5・6・7号炭焼窯実測図……………	338	第273図	第6号住居跡実測図……………	404
第235図	第8号炭焼窯実測図……………	339	第274図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	406
第236図	第9号炭焼窯実測図……………	340	第275図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……	407
第237図	第10号炭焼窯実測図……………	342	第276図	第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) ……	408
第238図	炭焼窯出土遺物実測・拓影図 ……	343	第277図	第7号住居跡実測図……………	410
第239図	原田北遺跡遺物包含層実測図……………	345	第278図	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	411
第240図	遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	346	第279図	第7号住居跡出土遺物実測図(2)……………	412
第241図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(1) ……	349	第280図	第8号住居跡実測図……………	413
第242図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(2) ……	350	第281図	第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) ……	414
第243図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3) ……	351	第282図	第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) ……	415
第244図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(4) ……	352	第283図	第9号住居跡実測図……………	417
第245図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(5) ……	353	第284図	第9号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	418
第246図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6) ……	354	第285図	第10号住居跡実測図……………	419
第247図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(7) ……	355	第286図	第10号住居跡出土遺物拓影図……………	420
第248図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(8) ……	356	第287図	第11号住居跡実測図……………	421
第249図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(1) ……	358	第288図	第11号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	421
第250図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(2) ……	359	第289図	第12号住居跡実測図……………	422
第251図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(3) ……	360	第290図	第12号住居跡出土遺物拓影図……………	422
第252図	原田北遺跡弥生式土器変遷図……………	364	第291図	土坑出土遺物実測・拓影図 ……	424
第253図	原田北遺跡弥生時代時期別住居跡配置図 ……	368	第292図	第1・2号溝実測図 ……	429
第254図	原田北遺跡弥生時代住居跡一覽図……………	372	第293図	第1・2号溝出土遺物実測・拓影図……………	431
第255図	原田北IV期出土土器……………	376	第294図	原田西遺跡遺物包含層実測図……………	433
第256図	原田北V期出土土器(1)……………	377	第295図	遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	437
第257図	原田北V期出土土器(2)……………	378	第296図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(1) ……	438
第258図	原田北VI期出土土器……………	379	第297図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(2) ……	439
第259図	原田北遺跡古墳時代時期別住居跡配置図 ……	381	第298図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3) ……	440
第260図	原田北遺跡古墳時代住居跡一覽図(1)……………	382	第299図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(4) ……	441
第261図	原田北遺跡古墳時代住居跡一覽図(2)……………	383	第300図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(5) ……	442
	原田西遺跡		第301図	遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6) ……	443
第262図	原田西遺跡遺構全体図……………	387	第302図	遺物包含層・遺構外出土石製品実測図 ……	444
第263図	第1号住居跡実測図……………	390	第303図	遺物包含層・遺構外出土石製品・ 土製品・鉄製品実測図 ……	445
第264図	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	391	第304図	原田西遺跡弥生時代時期別住居跡配置図 ……	448
第265図	第2号住居跡実測図……………	393	第305図	原田西遺跡弥生式土器変遷図……………	450
第266図	第2号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	394	第306図	原田西遺跡住居跡規模・長軸方向 ……	452
第267図	第3号住居跡実測図……………	396			
第268図	第3号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	397			
第269図	第4号住居跡実測図……………	398			
第270図	第4号住居跡出土遺物実測・拓影図 ……	399			
第271図	第5号住居跡実測図……………	401			

表 目 次

表 1 原田北・原田西遺跡周辺遺跡一覧表 ……8	表 4 原田北遺跡土坑一覧表 ……322
表 2 原田北遺跡弥生時代住居跡一覧表 ……203	表 5 原田西遺跡住居跡一覧表 ……423
表 3 原田北遺跡古墳時代住居跡一覧表 ……313	表 6 原田西遺跡土坑一覧表 ……425

写真図版目次

P L 1 調査後全景(Z地区, 原田西遺跡), 調査後全景(A・B地区)	第8号住居跡出土遺物, 第9号住居跡, 第9号住居跡出土遺物(1)
P L 2 遺跡遠景, 遺構確認状況(B地区)	P L 16 第9号住居跡遺物出土状況, 第9号住居跡出土遺物(2), 第11号住居跡, 第11号住居跡出土遺物(1)
P L 3 調査前全景, 遺構確認状況(Z地区), 遺構確認状況(D地区)	P L 17 第11号住居跡遺物出土状況, 第11号住居跡出土遺物(2)
P L 4 遺構確認状況(A地区), 遺構確認状況(B地区), 調査後全景Z地区(1)	P L 18 第12号住居跡, 第12号住居跡遺物出土状況, 第12号住居跡出土遺物
P L 5 調査後全景Z地区(2), 調査後全景B地区(1), 調査後全景B地区(2)	P L 19 第13号住居跡, 第13号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡出土遺物, 第14号住居跡
P L 6 第14・16号住居跡出土遺物, 第41・78号住居跡出土遺物	P L 20 第14号住居跡遺物出土状況(1), 第14号住居跡遺物出土状況(2), 第14号住居跡出土遺物(1)
P L 7 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況(1), 第1号住居跡遺物出土状況(2), 第1号住居跡遺物出土状況(3), 第1号住居跡出土遺物(1)	P L 21 第14号住居跡出土遺物(2), 第15号住居跡, 第15号住居跡遺物出土状況
P L 8 第1号住居跡出土遺物(2), 第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況(1)	P L 22 第16号住居跡, 第16号住居跡遺物出土状況(1), 第16号住居跡遺物出土状況(2), 第16号住居跡出土遺物(1)
P L 9 第3号住居跡遺物出土状況(2), 第3号住居跡遺物出土状況(3), 第3号住居跡遺物出土状況(4)	P L 23 第16号住居跡遺物出土状況(3), 第16号住居跡炉土層断面, 第16号住居跡出土遺物(2)
P L 10 第3号住居跡出土遺物(1)	P L 24 第18号住居跡, 第18号住居跡遺物出土状況, 第18号住居跡出土遺物
P L 11 第3号住居跡出土遺物(2), 第4号住居跡, 第4号住居跡遺物出土状況(1), 第4号住居跡遺物出土状況(2), 第4号住居跡出土遺物(1)	P L 25 第20号住居跡, 第20号住居跡遺物出土状況, 第20号住居跡出土遺物, 第21号住居跡, 第21号住居跡遺物出土状況
P L 12 第14号住居跡出土遺物(2), 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況, 第5号住居跡出土遺物(1)	P L 26 第21号住居跡出土遺物, 第22号住居跡, 第22号住居跡出土遺物
P L 13 第5号住居跡出土遺物(2), 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況(1), 第6号住居跡出土遺物(1)	P L 27 第22号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡, 第23号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡出土遺物, 第24号住居跡出土遺物
P L 14 第6号住居跡遺物出土状況(2), 第6号住居跡遺物出土状況(3), 第6号住居跡出土遺物(2), 第7号住居跡, 第7号住居跡出土遺物	P L 28 第24号住居跡, 第24号住居跡遺物出土状況, 第25号住居跡, 第25号住居跡遺物出土状況,
P L 15 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況,	

- 第25号住居跡出土遺物
- P L 29 第27号住居跡, 第27号住居跡遺物出土狀況, 第27号住居跡出土遺物, 第29号住居跡, 第29号住居跡出土遺物
- P L 30 第29号住居跡遺物出土狀況(1), 第29号住居跡遺物出土狀況(2), 第29号住居跡出土遺物, 第30号住居跡, 第30号住居跡出土遺物(1)
- P L 31 第30号住居跡遺物出土狀況, 第30号住居跡出土遺物(2), 第31号住居跡, 第31号住居跡遺物出土狀況, 第31号住居跡出土遺物(1)
- P L 32 第31号住居跡出土遺物(2), 第32号住居跡, 第32号住居跡遺物出土狀況, 第32号住居跡出土遺物
- P L 33 第33号住居跡, 第33号住居跡遺物出土狀況(1), 第33号住居跡遺物出土狀況(2), 第33号住居跡遺物出土狀況(3), 第33号住居跡遺物出土狀況(4)
- P L 34 第33号住居跡出土遺物, 第34号住居跡
- P L 35 第34号住居跡遺物出土狀況(1), 第34号住居跡遺物出土狀況(2), 第34号住居跡出土遺物, 第35号住居跡出土遺物
- P L 36 第35号住居跡, 第35号住居跡遺物出土狀況, 第36号住居跡, 第36号住居跡遺物出土狀況(1)
- P L 37 第36号住居跡遺物出土狀況(2), 第36号住居跡出土遺物, 第37号住居跡出土遺物(1)
- P L 38 第37号住居跡, 第37号住居跡出土遺物(2), 第38号住居跡, 第38号住居跡出土遺物, 第39号住居跡, 第39号住居跡出土遺物(1)
- P L 39 第39号住居跡出土遺物(2), 第40号住居跡, 第40号住居跡出土遺物
- P L 40 第41号住居跡, 第41号住居跡炉確認狀況, 第41号住居跡出土遺物(1)
- P L 41 第41号住居跡出土遺物(2), 第42号住居跡, 第43号住居跡
- P L 42 第42号住居跡出土遺物, 第43号住居跡出土遺物, 第47号住居跡出土遺物, 第50号住居跡, 第50号住居跡出土遺物
- P L 43 第56号住居跡遺物出土狀況, 第56号住居跡出土遺物, 第62号住居跡, 第62号住居跡遺物出土狀況(1), 第62号住居跡遺物出土狀況(2),
- 第63号住居跡
- P L 44 第62号住居跡直力X線写真
- P L 45 第62号住居跡出土遺物, 第63号住居跡遺物出土狀況(1), 第63号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 46 第63号住居跡出土遺物, 第67号住居跡, 第67号住居跡遺物出土狀況(1), 第67号住居跡遺物出土狀況(2), 第67号住居跡出土遺物(1)
- P L 47 第67号住居跡出土遺物(2), 第68号住居跡, 第68号住居跡遺物出土狀況, 第68号住居跡出土遺物(1)
- P L 48 第68号住居跡出土遺物(2), 第70号住居跡, 第70号住居跡出土遺物
- P L 49 第71号住居跡, 第71号住居跡遺物出土狀況, 第71号住居跡出土遺物, 第72号住居跡, 第72号住居跡遺物出土狀況(1)
- P L 50 第72号住居跡遺物出土狀況(2), 第72号住居跡遺物出土狀況(3), 第72号住居跡出土遺物(1)
- P L 51 第72号住居跡出土遺物(2), 第73号住居跡, 第73号住居跡出土遺物(1)
- P L 52 第73号住居跡出土遺物(2), 第75号住居跡, 第75号住居跡出土遺物
- P L 53 第76号住居跡, 第76号住居跡出土遺物, 第77号住居跡
- P L 54 第77号住居跡出土遺物, 第78号住居跡, 第78号住居跡遺物出土狀況
- P L 55 第78号住居跡出土遺物
- P L 56 第79号住居跡, 第79号住居跡出土遺物, 第80号住居跡出土遺物(1)
- P L 57 第80号住居跡出土遺物(2), 第80号住居跡, 第81号住居跡
- P L 58 第81号住居跡遺物出土狀況, 第81号住居跡出土遺物, 第82号住居跡
- P L 59 第84号住居跡, 第84号住居跡遺物出土狀況(1), 第84号住居跡遺物出土狀況(2), 第84号住居跡出土遺物(1)
- P L 60 第84号住居跡出土遺物(2), 第86号住居跡
- P L 61 第86号住居跡出土遺物狀況, 第86号住居跡炉土層断面, 第86号住居跡出土遺物
- P L 62 第87号住居跡, 第87号住居跡遺物出土狀況,

- 第87号住居跡出土遺物(1)
- P L 63 第87号住居跡出土遺物(2), 第89号住居跡出土遺物
- P L 64 第89号住居跡, 第90号住居跡, 第91号住居跡
- P L 65 第90号住居跡出土遺物, 第91号住居跡出土遺物, 第92号住居跡出土遺物, 第93号住居跡出土遺物, 第96号住居跡出土遺物
- P L 66 第92号住居跡遺物出土狀況, 第93号住居跡, 第96号住居跡
- P L 67 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土狀況, 第2号住居跡出土遺物
- P L 68 第10号住居跡, 第10号住居跡遺物出土狀況, 第10号住居跡出土遺物, 第17・26号住居跡
- P L 69 第17・26号住居跡遺物出土狀況(1), 第17・26号住居跡遺物出土狀況(2), 第17号住居跡出土遺物(1)
- P L 70 第17号住居跡出土遺物(2)
- P L 71 第19号住居跡, 第19号住居跡遺物出土狀況, 第28号住居跡, 第28号住居跡遺物出土狀況(1), 第28号住居跡出土遺物(1)
- P L 72 第28号住居跡遺物出土狀況(2), 第28号住居跡出土遺物(2)
- P L 73 第28号住居跡出土遺物(3), 第44号住居跡
- P L 74 第44号住居跡遺物出土狀況(1), 第44号住居跡遺物出土狀況(2), 第44号住居跡出土遺物(1)
- P L 75 第44号住居跡出土遺物(2)
- P L 76 第45・46号住居跡, 第45・46号住居跡遺物出土狀況(1), 第45号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 77 第45号住居跡出土遺物, 第48号住居跡, 第48号住居跡遺物出土狀況, 第48号住居跡出土遺物(1)
- P L 78 第48号住居跡出土遺物(2), 第49・50号住居跡, 第49・50・94号住居跡遺物出土狀況
- P L 79 第49号住居跡出土遺物
- P L 80 第51号住居跡, 第52号住居跡
- P L 81 第52号住居跡出土遺物
- P L 82 第53号住居跡, 第53号住居跡出土遺物, 第54号住居跡, 第54号住居跡遺物出土狀況, 第54号住居跡出土遺物(1)
- P L 83 第54号住居跡出土遺物(2), 第55号住居跡, 第55号住居跡遺物出土狀況
- P L 84 第55号住居跡出土遺物
- P L 85 第57号住居跡, 第57号住居跡遺物出土狀況, 第57号住居跡出土遺物(1)
- P L 86 第57号住居跡出土遺物(2), 第58号住居跡出土遺物(1)
- P L 87 第58号住居跡, 第58号住居跡遺物出土狀況, 第58号住居跡出土遺物(2)
- P L 88 第60・62号住居跡, 第60・62号住居跡出土遺物, 第61号住居跡, 出土遺物(1)
- P L 89 第61号住居跡遺物出土狀況(1), 第61号住居跡遺物出土狀況(2), 第61号住居跡出土遺物(2)
- P L 90 第61号住居跡出土遺物(3)
- P L 91 第64号住居跡, 第64号住居跡遺物出土狀況, 第64号住居跡出土遺物, 第65号住居跡, 第65号住居跡出土遺物
- P L 92 第66号住居跡遺物出土狀況, 第66号住居跡出土遺物
- P L 93 第69号住居跡, 第69号住居跡遺物出土狀況, 第69号住居跡出土遺物
- P L 94 第74号住居跡, 第74号住居跡出土遺物
- P L 95 第83号住居跡, 第83号住居跡遺物出土狀況(1)(2), 第83号住居跡出土遺物(1)
- P L 96 第83号住居跡出土遺物(2), 第85号住居跡, 第85号住居跡出土遺物(1)
- P L 97 第85号住居跡遺物出土狀況, 第85号住居跡出土遺物(2), 第88号住居跡
- P L 98 第88号住居跡遺物出土狀況, 第88号住居跡出土遺物
- P L 99 第94号住居跡, 第94号住居跡出土遺物(1)
- P L 100 第94号住居跡出土遺物(2), 第65・95号住居跡, 第95号住居跡出土遺物
- P L 101 第6号土坑, 第27号土坑土層断面, 第20・27・30・50・97号土坑出土遺物
- P L 102 第49・50・51・52号土坑, 第59・72号土坑出土遺物, 第1・2号溝(1), 第1・2号溝(2), 第1号溝出土遺物
- P L 103 第1・2号溝(3), 第1・2号溝土層断面, 第1号方形周溝狀遺構
- P L 104 第1号火葬墓土層断面, 第1号火葬墓遺物

- 出土状況, 第2号火葬墓遺物出土状況, 第1・2号火葬墓出土遺物
- P L 105 第1号炭焼窯, 第2号炭焼窯, 第3号炭焼窯
- P L 106 第4号炭焼窯, 第5・6・7号炭焼窯, 第7号炭焼窯
- P L 107 第8号炭焼窯, 第9号炭焼窯, 第10号炭焼窯
- P L 108 遺跡全景 (Z・D地区), 遺物包含層全景
- P L 109 遺物包含層(1), 遺物包含層(2), 遺物包含層(3)
- P L 110 遺物包含層土層断面, 遺物包含層遺物出土状況(1), 遺物包含層遺物出土状況(2), 遺物包含層遺物出土状況(3), 遺物包含層遺物出土状況(4)
- P L 111 遺物包含層出土遺物(1)
- P L 112 遺物包含層出土遺物(2), 遺物包含層出土遺物(3), 遺物包含層出土遺物(4), 遺物包含層出土遺物(5), 遺物包含層出土遺物(6)
- P L 113 遺物包含層出土遺物(7), 遺物包含層出土遺物(8), 遺物包含層出土遺物(9)
- P L 114 遺物包含層出土遺物(10), 遺物包含層出土遺物(11), 遺物包含層出土遺物(12), 遺物包含層出土遺物(13), 遺物包含層出土遺物(14)
- P L 115 遺物包含層出土遺物(15), 遺物包含層出土遺物(16), 遺物包含層出土遺物(17), 遺物包含層出土遺物(18), 遺物包含層出土遺物(19)
- P L 116 遺物包含層出土遺物(20), 遺物包含層出土遺物(21), 遺物包含層出土遺物(22), 遺物包含層出土遺物(23)
- P L 117 遺物包含層出土遺物(24)
- P L 118 遺跡遠景, 遺物包含層全景
原田西遺跡
- P L 119 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況, 第1号住居跡出土遺物
- P L 120 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡出土遺物
- P L 121 第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡出土遺物
- P L 122 第4号住居跡遺物出土状況(1), 第4号住居跡遺物出土状況(2), 第4号住居跡出土遺物
- P L 123 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況(1), 第5号住居跡遺物出土状況(2), 第5号住居跡遺物出土状況(3)
- P L 124 第5号住居跡出土遺物, 第6号住居跡出土遺物(1)
- P L 125 第6号住居跡出土遺物(2)
- P L 126 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況(1), 第6号住居跡遺物出土状況(2), 第6号住居跡出土遺物(3)
- P L 127 第7号住居跡, 第7号住居跡遺物出土状況, 第7号住居跡出土遺物(1)
- P L 128 第7号住居跡出土遺物(2), 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況
- P L 129 第8号住居跡出土遺物(1)
- P L 130 第8号住居跡出土遺物(2), 第9号住居跡出土遺物
- P L 131 第9号住居跡, 第10号住居跡, 第11号住居跡出土遺物
- P L 132 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況, 第12号住居跡
- P L 133 第85・90号土坑出土遺物, 第1号溝, 第1号溝出土遺物, 第2号溝(1)
- P L 134 第2号溝(2), 遺物包含層, 遺物包含層出土遺物
- P L 135 試掘土層断面, 第70号土坑及び遺物包含層出土遺物, 遺物包含層遺物出土状況(1), 遺物包含層遺物出土状況(2), 遺構外出土遺物
- P L 136 第70号土坑遺物出土状況, 遺物包含層・遺構外出土遺物(1), 遺物包含層・遺構外出土遺物(2)
- P L 137 遺物包含層・遺構外出土遺物(3), 遺物包含層・遺構外出土遺物(4), 遺物包含層・遺構外出土遺物(5)
- P L 138 遺物包含層・遺構外出土遺物(6), 遺物包含層・遺構外出土遺物(7), 遺物包含層・遺構外出土遺物(8)
- P L 139 遺物包含層・遺構外出土遺物(9), 遺物包含層・遺構外出土遺物(10), 遺物包含層・遺構外出土遺物(11)
- P L 140 遺物包含層・遺構外出土遺物(12)

2 土坑

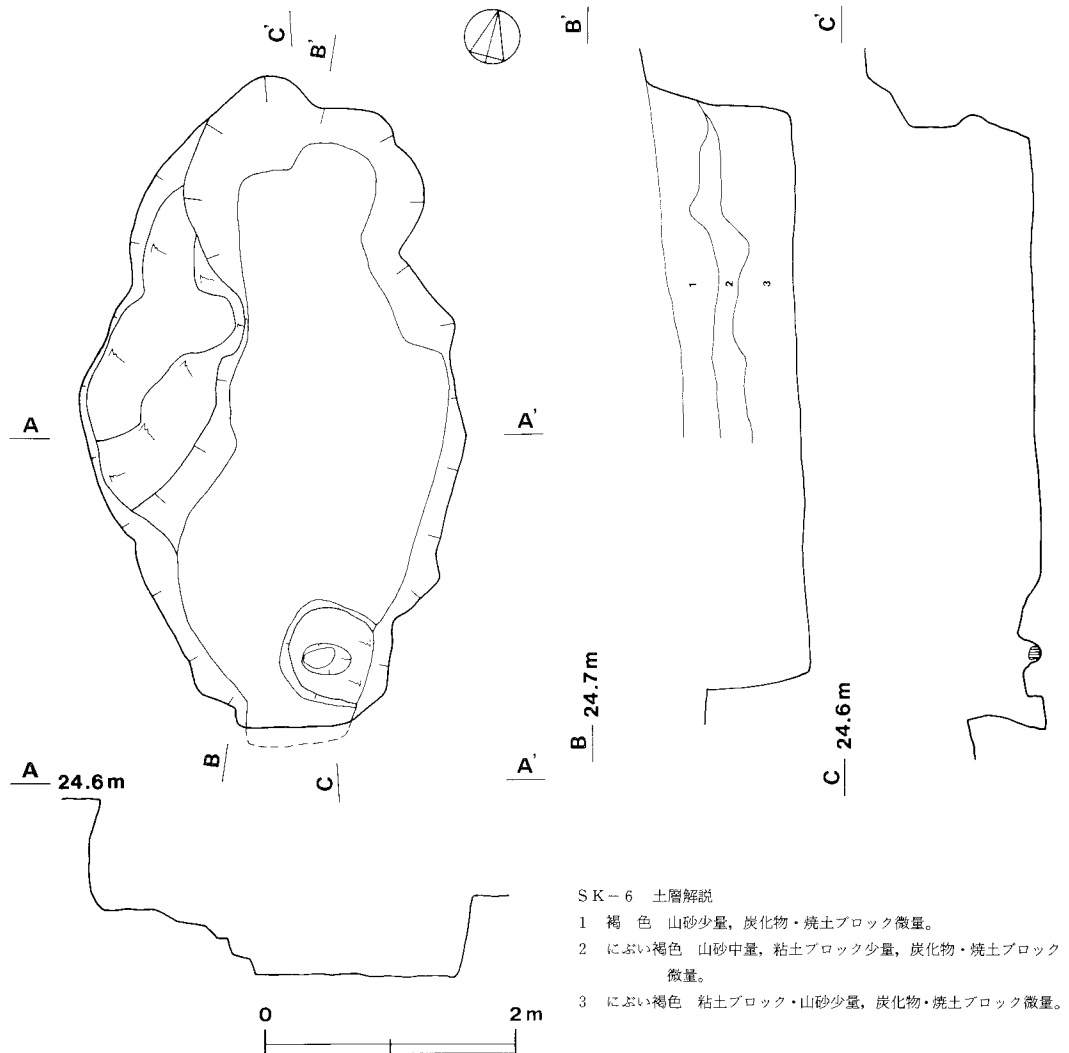
当遺跡からは、中央部のB地区を中心に124基の土坑が検出されている。それらの土坑は形状や規模にはそれぞれ差異が認められるものの、一部を除いては出土遺物が少なく、時期や性格については不明なものが多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物に特徴がある6基の土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表に記載した。

第6号土坑（第219図）

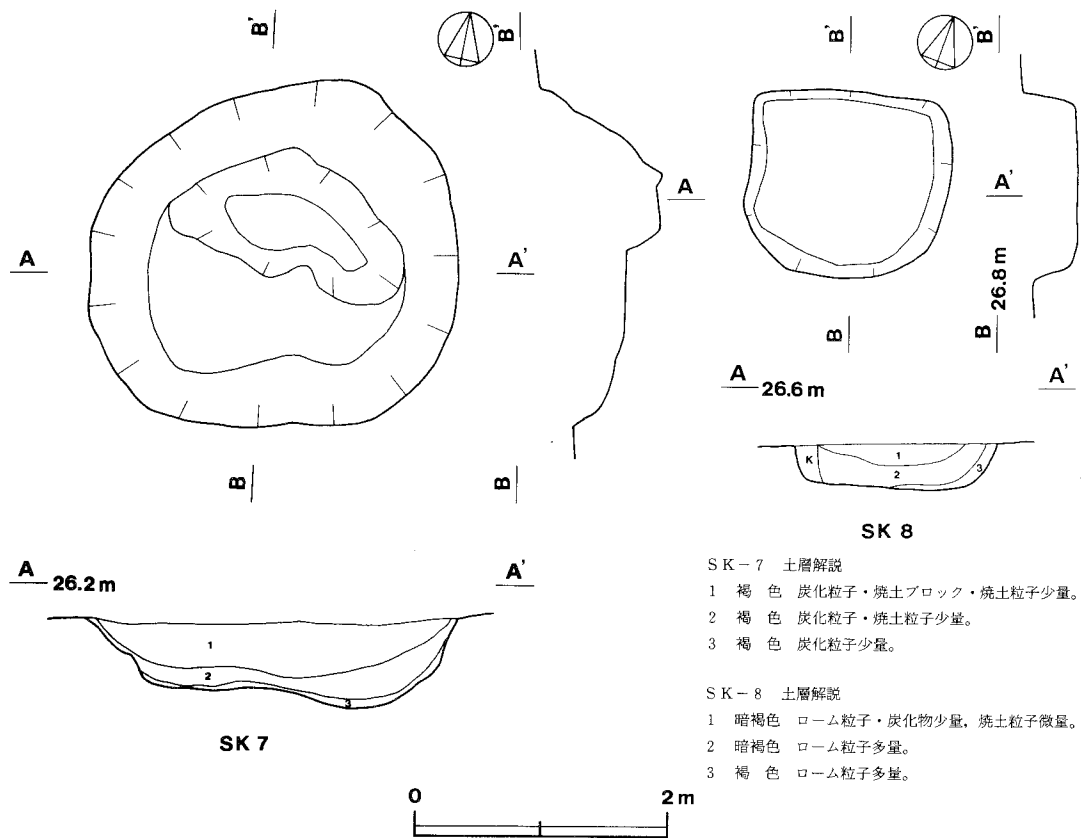
位置 Z地区の中央部、C3e4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径5.38m、短径2.97mの不整楕円形を呈し、深さは1.45mである。

長径方向 N-18°-W。



第219図 第6号土坑実測図



第220図 第7・8号土坑実測図

壁面 北壁は一部オーバーハングして、西壁は段をもち立ち上がっている。東壁はほぼ垂直に、南壁は内傾し立ち上がっている。壁高は北・西側は1.32～1.45mで、南・東側は0.62～0.65mである。壁下半部は粘土層である。

底面 ほぼ平坦であるが、南壁付近に20cmほどの段がある。底面は粘土から成っており、踏み固められ硬い。

覆土 砂・粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物を含むにぶい褐色土・褐色土が厚く堆積しており、人為堆積と思われる。

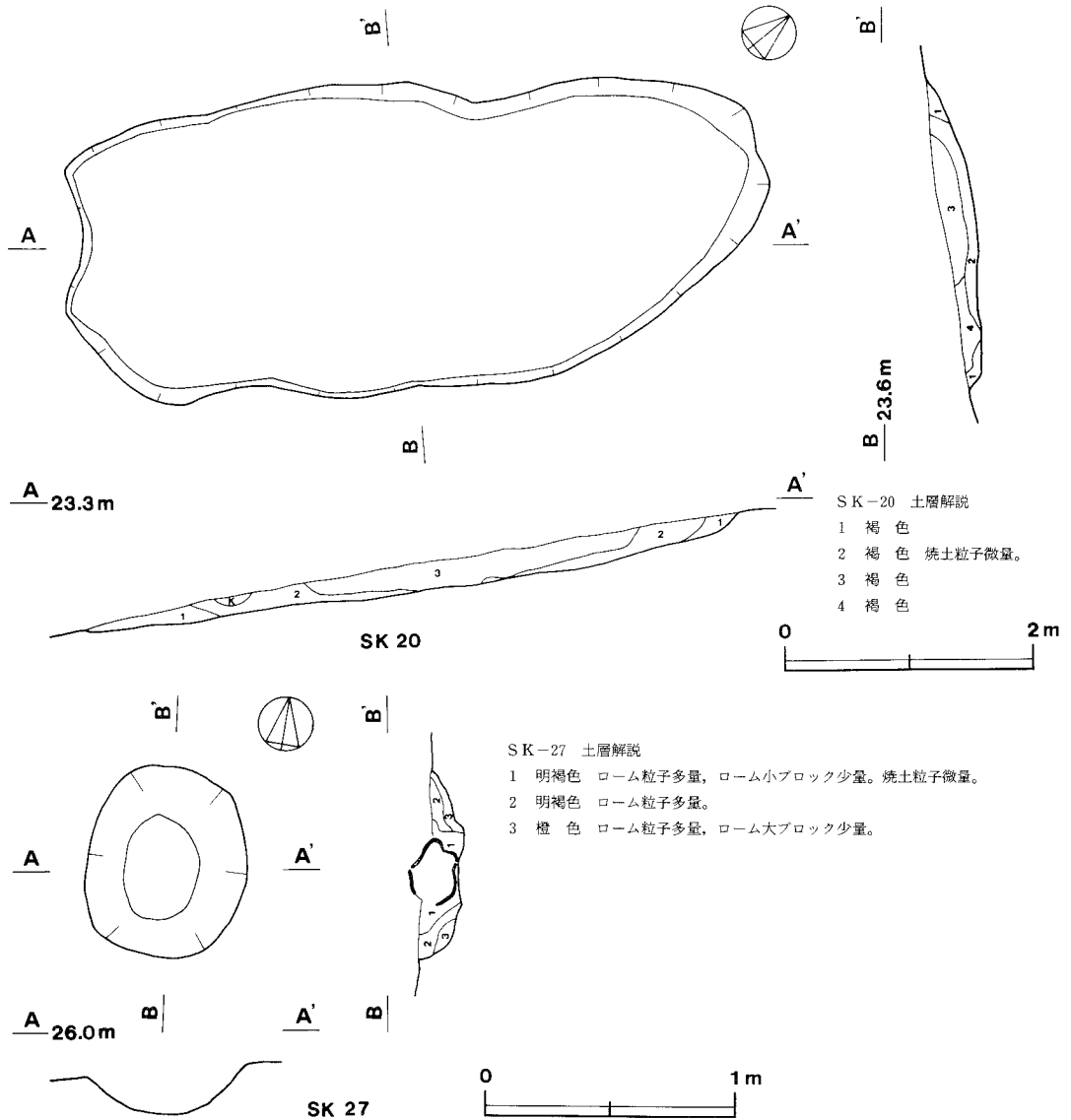
遺物 出土していない。

所見 本跡は覆土・壁・底面の状態から粘土採掘のためのものと思われる。近くに検出されている炭焼窯との関連から、近世以降に構築されたものと考えられる。

第7号土坑（第220図）

位置 Z地区の中央部、B4j₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径3.05m、短径2.82mの不整楕円形を呈し、深さは80cmである。



第221図 第20・27号土坑実測図

長径方向 N-25°-E。

壁面 壁高は25~80cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 全体にやや凹凸があり、軟らかい。北壁際には、長径1.95m、短径1.06mの不定形を呈し、深さ25cmの掘り込みが検出されている。この掘り込みの底面と壁面の一部は粘土層となっている。

覆土 焼土ブロック・炭化粒子を含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は覆土・床面の状態から、粘土採掘のためのものと思われ、近くに検出されている炭焼窯との関連から、近世以降に構築されたものと考えられる。

第20号土坑（第221図）

位置 Z地区南西部，D2a₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径5.60m，短径2.52mの不定形を呈し，深さ30cmである。

長径方向 N-30°-E。

壁面 壁高は10～25cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 南東方向へ傾斜しており，軟らかい。

覆土 褐色土が厚く堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 覆土中・上層から土師器片が少量出土している。第223図2の罎は中央部の覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は出土遺物から古墳時代中期の土坑と思われるが，遺構の性格については不明である。

第27号土坑（第221図）

位置 C地区中央部，D8h₈区から確認されている。

規模と平面形 長径0.78m，短径0.65mの楕円形を呈し，深さ18cmである。

長径方向 N-11°-W。

壁面 壁高は14～16cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 中央部はやや窪んでいる。

覆土 ローム粒子を多量に含む明褐色土を埋め戻している。人為堆積である。

遺物 ほぼ中央の底面に接して，第223図1の広口壺の下半部が斜位の状態で出土している。

所見 本跡は出土遺物から弥生時代後期後半の土坑と思われ，土器内部から骨片などは検出されなかったが土器の出土状態などから，土器棺墓の可能性も考えられる。

第50号土坑（第222図）

位置 A地区中央部，G2b₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第49号土坑の南東部を掘り込み，本跡の南部は第51号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径(1.00)m，短径0.93mの楕円形を呈するものと思われ，深さ64cmである。

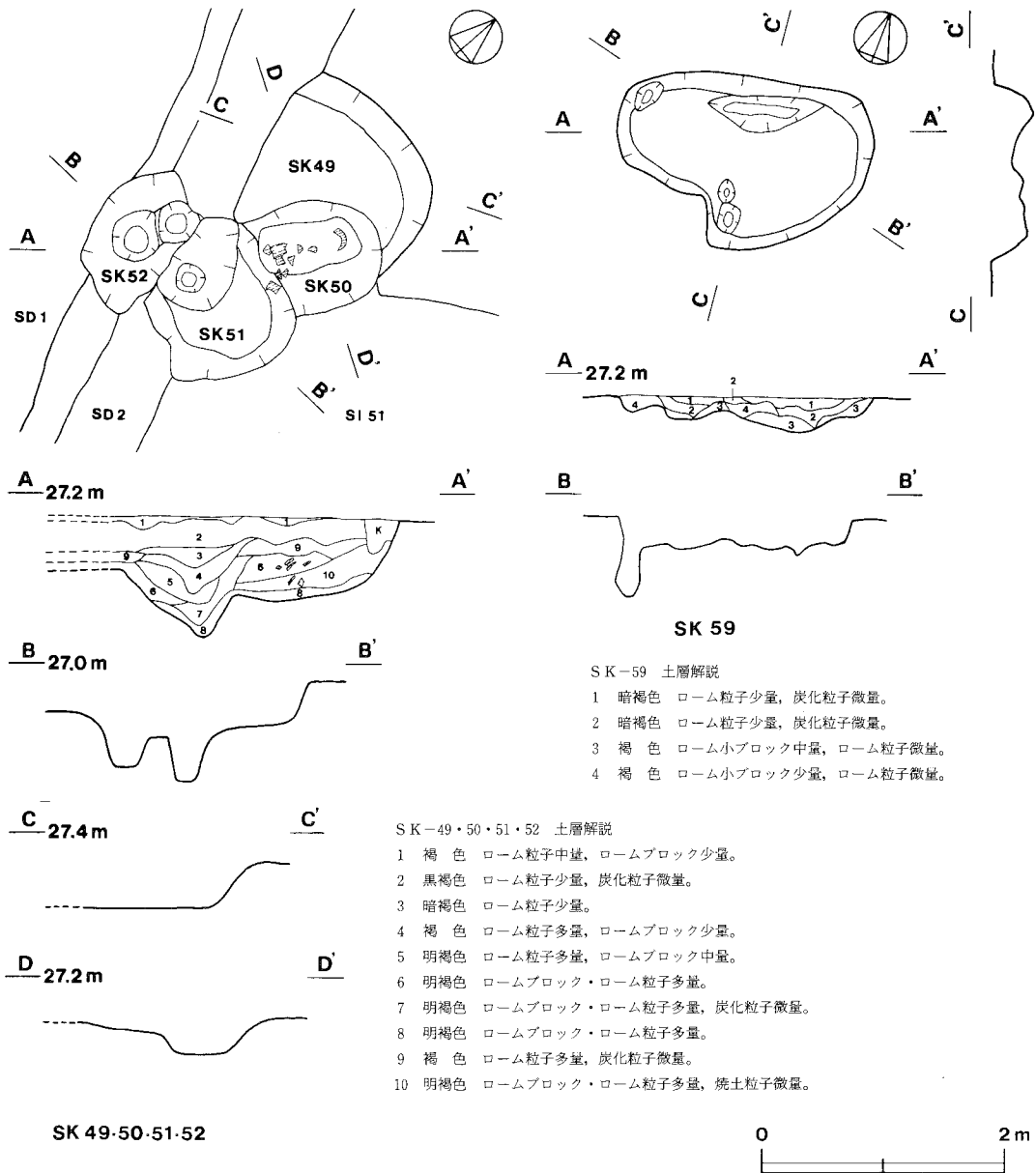
長径方向 N-30°-E。

壁面 壁高は16～60cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦で，硬く締まっている。

覆土 ロームブロックを含む明褐色土が厚く堆積しており，人為堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土下・中層から，土師器片が少量出土している。第223図3の壺は中央部の覆土下・中層から出土したいくつかの破片が接合されている。



第222図 第49～52・59号土坑実測図

所見 本跡は出土遺物から、古墳時代中期の土坑と思われるが、遺構の性格は不明である。

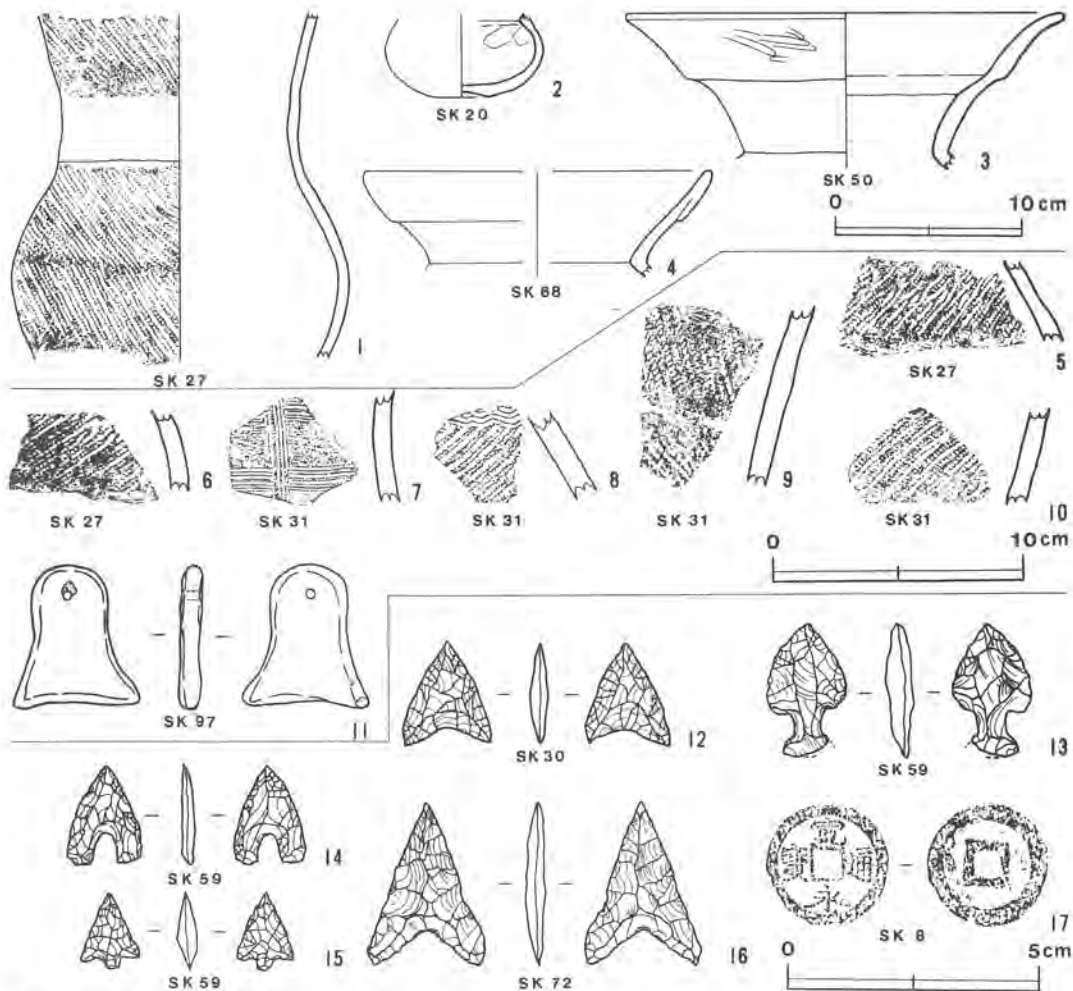
第59号土坑（第222図）

位置 B地区西部, F4h₅区に確認されている。

規模と平面形 長径2.12m, 短径1.43mの不定形を呈し, 深さ53cmである。

長径方向 N-87°-W。

壁面 壁高は18~32cmで, 外傾して立ち上がっている。



第223図 土坑出土遺物実測・拓影図

底面 全体に凹凸があり、硬く締まっている。

覆土 暗褐色土・褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土上層から第223図13～15の石鏃が3点出土している。

所見 本跡は石鏃の形態から弥生時代後期後半の土坑と思われるが、遺構の性格は不明である。

第27号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第223図 1	広口壺 弥生式土器	B (18.5)	底部と口縁部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反している。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい橙色 普通	P675 70% 中央部床面 外面スス付霜

第20号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 2	埴 土師器	B (4.5)	胴下半部。上げ底。胴部は大きく内彎している。	胴部外面は、ヘラナデ。内面は粗いヘラ削り。	砂粒・長石・石英にぶい橙色 普通	P 674 20% 中央部覆土上層
		C 2.8				

第50号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 3	壺 土師器	A 23.4	口縁部片。口縁部は段を持ち、外反して立ち上がる。	口縁部外面は、ヘラ磨き。内面は粗いヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリアにぶい橙色 普通	P 676 20% 中央部覆土下・中層
		B (7.7)				

第68号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 4	壺 土師器	A [18.8]	口縁部片。口縁部は僅かに内彎して立ち上がる。複合口縁。	内・外面ともに横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P 479 5% 覆土
		B (5.7)				

第223図5～10は、土坑出土土器片の拓影図である。5・6は第27号土坑出土である。5・6は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。7～10は第31号土坑出土である。7は頸部片であり、7本歯の工具により縦線文が施されたあと、横線文が施されている。8は頸部に横走波状文が施され、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9・10は胴部片であり、9は単節の、10は附加条1種(附加1条)の縄文が施されている。5～10は弥生後期の土器片と思われる。

土坑出土土製品一覧表

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第223図 11	不明	3.9	3.4	0.6	2.5	6.9	100	覆土	D P 80 S K 97

土坑出土石製品一覧表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第223図 12	石 鏃	2.1	1.8	0.4	0.8	チャート	覆土	Q74 S K 30
13	石 鏃	2.6	1.6	0.5	1.8	チャート	覆土	Q75 S K 59
14	石 鏃	1.9	1.5	0.3	0.7	チャート	覆土	Q76 S K 59
15	石 鏃	1.5	1.2	0.4	0.4	頁岩	覆土	Q77 S K 59
16	石 鏃	3.2	2.4	0.4	1.7	チャート	覆土	Q78 S K 72

土坑出土古銭一覧表

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第223図 17	寛永通寶	寛文8年(1668)	日本	覆土	M7 S K 8

表4 原田北遺跡土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
1	C4a ₁	N-15°-W	隅丸方形	[1.43]	1.38	82	垂直	平坦	自然		SY6, SK3と重複
2	C4b ₁	N-70°-E	不整楕円形	1.58	1.28	118	垂直	平坦	人為		SY5と重複
3	C4a ₁	N-74°-E	(隅丸方形)	1.17	(0.60)	52	垂直	平坦	自然		SY4, SK1と重複
4	C4b ₁	N-56°-E	不整楕円形	1.78	1.42	130	外傾	平坦	自然		SY5と重複
5	B4g ₁	N-19°-E	不整円形	1.42	1.26	26	緩斜	平坦	自然		SX1と重複
6	C3e ₁	N-18°-W	不整楕円形	5.38	2.97	145	垂直	平坦	人為		粘土採掘坑
7	B4j ₁	N-25°-E	不整楕円形	3.05	2.82	80	緩斜	凹凸	人為		粘土採掘坑
8	H5d ₁	N-72°-E	隅丸方形	1.59	1.50	42	外傾	平坦	自然	弥生式土器片24, 須恵器片1, 古銭1	
9	H5e ₁	N-9°-E	不定形	2.08	1.48	50	緩斜	凹凸	自然		
10	H5g ₁	N-7°-E	不整楕円形	1.82	1.40	61	外傾	凹凸	自然		SK11と重複
11	H5g ₁	N-58°-E	楕円形	1.48	1.35	28	外傾	皿状	自然		SK10と重複
12	H5c ₂	N-57°-E	不整楕円形	2.42	2.06	33	外傾	平坦	自然		
13	H5g ₂	N-47°-E	不定形	2.92	0.84	24	外傾	平坦	自然		
14	H5f ₁	N-17°-W	円形	0.46	0.44	16	外傾	平坦	自然		
15	H5g ₁	N-28°-E	楕円形	1.02	0.74	32	緩斜	凹凸	自然		
16	H5g ₁	N-51°-W	楕円形	1.08	0.94	21	緩斜	皿状	自然		
17	H4d ₁	N-4°-W	不整楕円形	2.13	1.48	36	緩斜	皿状	自然		
18	H3h ₁	N-32°-E	楕円形	1.13	0.92	13	緩斜	皿状	人為		
19	H3i ₁	N-51°-W	不整楕円形	1.50	0.77	36	緩斜	平坦	人為	弥生式土器片2	
20	D2a ₁	N-30°-E	不定形	5.60	2.52	30	緩斜	平坦	自然	土師器片30	
21	B6f ₁	N-32°-W	楕円形	2.20	0.97	34	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片2	
22	C7i ₁	N-54°-E	楕円形	2.16	1.10	35	緩斜	皿状	自然		
23	C7j ₁	N-57°-W	不定形	2.20	0.97	34	緩斜	凹凸	人為		
24	D7a ₁	N-23°-E	不整楕円形	4.03	1.38	50	緩斜	凹凸	人為		
25	D7e ₁	N-45°-W	楕円形	1.88	1.06	56	緩斜	皿状	人為		
26	D8j ₁	N-22°-E	不定形	1.35	0.90	15	緩斜	皿状	人為		
27	D8h ₁	N-11°-W	楕円形	0.78	0.65	18	緩斜	皿状	人為	弥生式土器片6	土器棺墓
29	E4i ₁	N-22°-W	不定形	2.06	0.92	48	外傾	皿状	人為	弥生式土器片1, 土師器片7	SI64と重複
30	F4g ₁	N-82°-W	不定形	1.45	0.90	32	外傾	皿状	自然	石鏝1	
31	F4h ₁	N-50°-W	隅丸方形	0.75	0.68	65	外傾	平坦	自然	弥生式土器片65, 土師器片6	
32	G1b ₁	N-48°-W	楕円形	1.62	1.35	49	外傾	凹凸	人為		
33	G1a ₁	N-16°-W	楕円形	1.37	0.99	40	緩斜	凹凸	人為		
34	F1i ₁	N-11°-W	楕円形	2.45	1.33	60	外傾	凹凸	自然		
35	F1h ₁	N-38°-E	不整楕円形	1.02	0.72	23	緩斜	凹凸	自然		
36	F1i ₁	N-28°-E	不整楕円形	0.93	0.74	10	緩斜	凹凸	自然		
37	F1i ₁	N-48°-E	隅丸長方形	1.26	0.64	34	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片1, 土師器片3	
38	F2h ₁	N-24°-E	不整楕円形	3.05	1.95	32	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片3, 土師器片11	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
39	F2e _s	N-64°-E	不整円形	0.98	0.92	18	緩斜	凹凸	自然		
40	F2e _s	N-32°-W	不整隅丸方形	1.13	1.00	35	緩斜	凹凸	自然		
41	F2g _s	N-57°-W	不定形	1.18	1.12	22	緩斜	平坦	自然		S K 42と重複
42	F2g _s	N-69°-E	楕円形	1.00	0.89	40	外傾	凹凸	自然	土師器片8	S K 41と重複
43	F2h ₁	N-13°-W	不整楕円形	1.36	0.90	10	緩斜	凹凸	自然		
44	G2f ₁	N-70°-W	不定形	1.33	0.52	29	外傾	凹凸	自然		
45	F4j ₂	N-79°-E	不定形	2.43	1.80	28	緩斜	凹凸	人為		
46	F3f _s	N-66°-E	不定形	2.56	1.02	25	外傾	凹凸	人為		
47	F4i ₁	N-30°-E	楕円形	0.96	0.52	26	緩斜	凹凸	自然		
48	F3f _s	N-35°-W	円形	2.60	(1.14)	55	垂直	凹凸	人為		南西部は調査区外へのびている
49	G2b _a	-	不定形	(1.48)	(1.36)	40	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片1,土師器片25	S K 50,SD 2と重複
50	G2b ₂	N-30°-E	[楕円形]	(1.00)	0.93	64	緩斜	平坦	人為	土師器片26	SK49・51,SD2と重複
51	G2b _a	N-84°-W	隅丸方形	1.21	1.08	83	外傾	凹凸	人為	弥生式土器片1	SK50・52,SD 2と重複
52	G2b ₂	N-19°-W	不整楕円形	1.22	0.64	48	外傾	凹凸	人為		S K 51,SD 2と重複
54	E4i ₁	N-88°-E	不整楕円形	1.96	1.41	44	緩斜	凹凸	自然		
55	F4d ₁	N-68°-E	楕円形	[1.70]	1.50	34	緩斜	凹凸	自然		S K 56と重複
56	F4d ₁	N-10°-W	楕円形	1.84	1.54	35	緩斜	皿状	自然		S K 55と重複
57	E4j ₂	N-36°-W	不定形	2.78	2.26	16	緩斜	平坦	自然		
59	F4h _s	N-87°-W	不定形	2.12	1.43	53	外傾	凹凸	自然	石鏃 3	
60	E4h _a	N-55°-W	不整楕円形	2.03	1.80	48	外傾	皿状	人為		
61	E5h ₇	N-13°-W	不整円形	1.76	1.71	26	外傾	平坦	人為		S K 62と重複
62	E5h ₇	N-31°-W	楕円形	(1.13)	1.53	18	外傾	平坦	人為		S K 61と重複
63	E5i ₉	N-38°-E	不整楕円形	1.81	1.62	34	緩斜	皿状	人為		
64	E5a ₆	N-25°-W	楕円形	(1.42)	1.08	21	緩斜	平坦	自然		S K 65と重複
65	F5a ₅	N-44°-W	楕円形	[2.00]	1.33	23	外傾	平坦	自然		S K 64と重複
66	F5b ₈	N-53°-W	円形	2.30	2.22	30	外傾	平坦	自然	弥生式土器片8,土師器片8	
68	F5d ₀	N-36°-E	不整楕円形	2.73	1.34	26	緩斜	皿状	自然	土師器片5	S I 69と重複
69	F5f ₇	N-22°-W	不整楕円形	2.32	1.43	32	緩斜	凹凸	自然		
70	F5h ₈	N-73°-E	楕円形	1.12	0.92	21	外傾	凹凸	自然		
71	F5g ₈	N-17°-W	不整楕円形	2.80	1.95	44	緩斜	皿状	人為		
72	F5i ₇	N-64°-E	不整楕円形	1.94	1.03	38	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片2,土師器片1,石鏃1	
73	F5h ₇	N-73°-E	隅丸長方形	4.54	1.52	73	外傾	平坦	人為		
74	F5h ₉	N-75°-E	不定形	0.90	0.40	17	外傾	凹凸	人為		
75	F6h ₁	N-53°-E	不整楕円形	2.94	2.56	22	緩斜	皿状	自然		
76	F5h ₀	N-44°-E	不定形	1.14	1.04	16	緩斜	皿状	自然		
77	G5a ₉	N-15°-E	不整楕円形	2.83	2.02	88	緩斜	皿状	人為	土師器片2	S K 78と重複
78	G5b ₉	N-27°-W	不整楕円形	3.15	2.24	68	緩斜	皿状	自然		S K 77・79と重複

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
79	G5aa	N-63°-E	不 整 方 形	2.94	1.84	35	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片1	S K78と重複
80	G6c1	N-15°-E	不 整 楕 円 形	2.70	1.98	65	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片14,土師器片5	
81	G6ba	N-76°-W	楕 円 形	1.20	0.94	16	外傾	平坦	自然		
82	G6bs	N-60°-W	不 整 隅 丸 方 形	1.66	1.45	19	外傾	平坦	自然		
83	F6js	N-86°-W	不 整 楕 円 形	1.22	1.06	30	緩斜	皿状	人為		
84	G6aa	N-4°-E	不 定 形	2.81	1.40	43	外傾	皿状	自然	弥生式土器片3	
85	G6as	N-31°-W	楕 円 形	2.00	1.63	21	外傾	凹凸	自然		
86	G6aa	N-65°-E	不 定 形	2.22	1.76	29	緩斜	凹凸	自然		
87	F6is	N-70°-E	不 定 形	2.91	0.94	40	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片1	
88	F6hs	N-68°-E	楕 円 形	1.42	0.92	23	外傾	平坦	自然		S K89と重複
89	F6hs	N-79°-W	不 整 楕 円 形	(2.03)	0.90	18	緩斜	平坦	自然		S K88と重複
90	F6gs	N-68°-E	不 整 楕 円 形	1.42	0.70	30	緩斜	皿状	人為		
91	F6hs	N-18°-W	不 整 円 形	1.08	1.05	24	緩斜	凹凸	人為		
92	F6is	N-14°-E	不 定 形	2.57	2.33	20	外傾	平坦	人為		
93	F6js	N-16°-E	隅 丸 方 形	1.66	1.60	20	緩斜	皿状	人為		
95	F6hs	N-50°-W	不 整 楕 円 形	1.20	0.90	31	緩斜	凹凸	人為		
96	F6ds	N-87°-W	不 整 楕 円 形	1.33	1.06	21	緩斜	平坦	自然		
97	F6ds	N-71°-E	不 整 楕 円 形	1.28	1.06	34	外傾	平坦	自然	土師器片4,土製品1	
99	F6fs	N-86°-E	不 整 楕 円 形	1.56	0.73	17	外傾	平坦	自然		
100	F6es	N-78°-E	楕 円 形	2.34	1.35	34	緩斜	皿状	自然		
101	F6es	N-56°-W	楕 円 形	1.82	1.18	14	緩斜	皿状	自然		
102	F6fs	N-87°-E	不 整 楕 円 形	1.49	1.26	21	緩斜	皿状	自然		
103	F6gs	N-58°-E	楕 円 形	1.36	1.11	17	外傾	平坦	自然		
104	F6hs	N-15°-E	楕 円 形	1.55	1.09	26	外傾	平坦	自然		
105	F6hs	N-63°-E	不 整 楕 円 形	1.54	0.98	42	緩斜	凹凸	自然	弥生式土器片4	
106	F6gs	N-25°-E	不 定 形	3.13	2.20	26	外傾	凹凸	自然		
107	F6fs	N-66°-E	楕 円 形	1.98	1.48	21	緩斜	平坦	自然		
108	F6ds	N-74°-E	不 整 楕 円 形	2.18	1.58	35	緩斜	皿状	自然		
109	F6cs	N-46°-W	不 整 楕 円 形	3.33	2.20	26	緩斜	皿状	人為		
111	E6bs	N-77°-W	楕 円 形	2.40	1.89	42	外傾	平坦	人為		
112	E7ds	N-72°-W	不 整 楕 円 形	2.98	2.72	101	緩斜	皿状	人為	縄文式土器片1,弥生式土器片3	
113	F6as	N-86°-E	不 整 楕 円 形	1.54	1.36	47	外傾	凹凸	自然		
114	E6is	N-78°-E	楕 円 形	2.06	1.73	38	緩斜	平坦	人為		
115	E6gs	N-2°-E	不 整 楕 円 形	2.26	1.92	86	外傾	平坦	自然	弥生式土器片2,土師器片7	
116	F7es	N-80°-W	楕 円 形	2.92	1.85	25	緩斜	皿状	人為		
117	F7es	N-60°-W	不 定 形	3.38	2.86	22	緩斜	平坦	人為		
118	F7ds	N-49°-E	不 定 形	3.63	1.95	81	垂直	凹凸	人為	土師器片3	

番号	位置	長径方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
119	F7e ₄	N-57°-E	楕円形	1.20	1.00	22	緩斜	皿状	自然		
120	F7g ₃	N-27°-W	不定形	1.04	0.84	26	緩斜	凹凸	自然		
121	F7b ₁	N-67°-W	不整楕円形	1.96	1.10	22	外傾	凹凸	人為		
122	F7b ₃	N-26°-W	楕円形	1.70	1.31	30	外傾	平坦	自然		
124	E7j ₁	N-19°-E	不整円形	1.34	1.32	28	緩斜	皿状	自然		
125	F7c ₅	N-30°-E	不整楕円形	5.85	2.02	31	緩斜	皿状	自然	土師器片1	
126	F7d ₁	N-32°-W	楕円形	1.08	0.72	20	緩斜	皿状	自然		
127	F7d ₇	N-30°-W	不整楕円形	1.26	0.96	18	緩斜	皿状	自然		
128	F7d ₈	N-3°-E	楕円形	2.23	1.72	31	緩斜	皿状	自然		
129	F4d ₁	N-85°-W	不整楕円形	4.27	3.52	43	緩斜	凹凸	人為		
130	F3e ₇	N-4°-W	楕円形	3.03	1.27	31	緩斜	皿状	人為		
131	F4g ₁	N-74°-E	不整楕円形	1.46	0.70	70	外傾	皿状	人為	縄文式土器片1	
132	F7h ₁	N-65°-E	楕円形	1.77	1.46	19	外傾	平坦	自然		

3 溝

当遺跡からは、溝が3条検出されている。各溝の構築時期や性格については、遺構に伴う出土遺物はなく不明な点が多い。

第1号溝（第224図）

位置 調査区の東部，Z地区C3j₃区～A地区F2d₂区にかけて確認されている。本跡の北西端は調査区外へのびている。

重複関係 本跡はZ地区で第19号住居跡を，A地区で第51・52号住居跡と第49～52号土坑を掘り込んでいる。

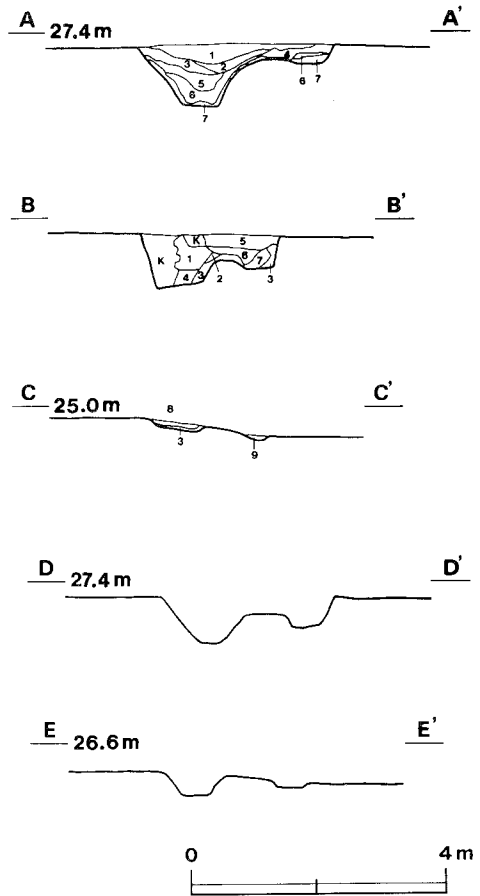
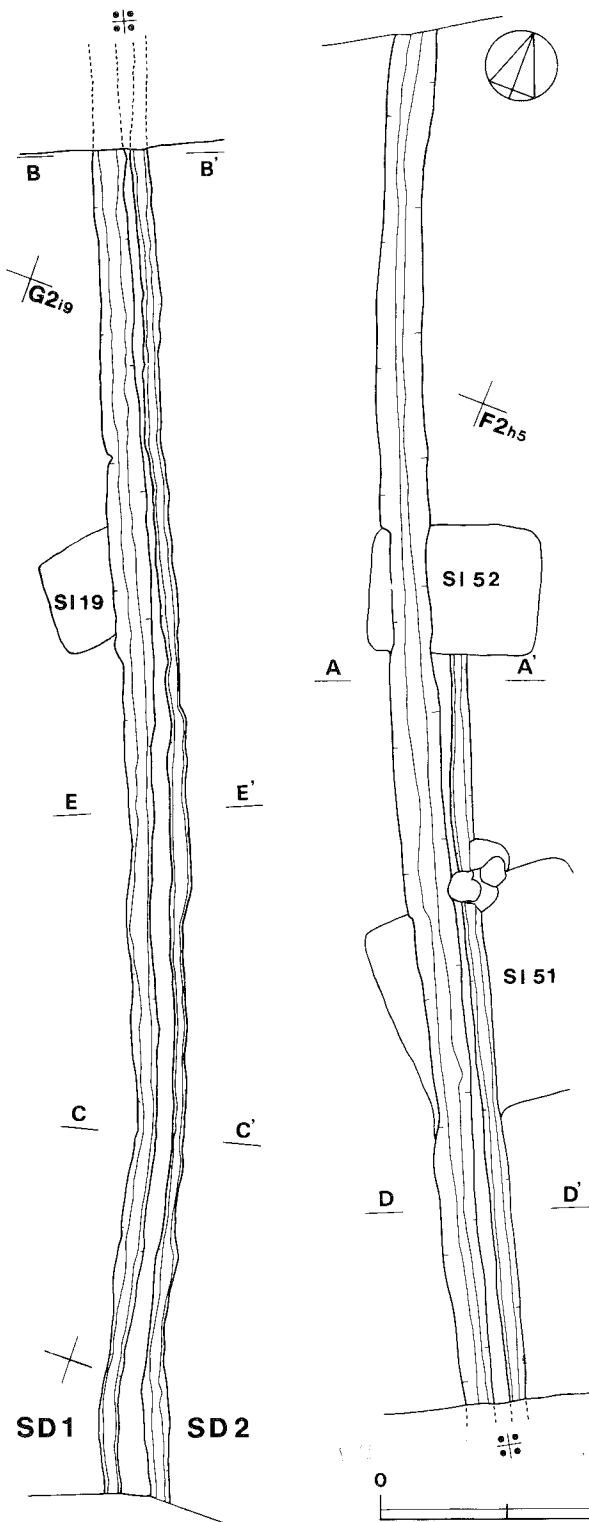
規模と形状 全長110.60mで，上幅1.15～1.92m，下幅0.30～0.82m，深さ75～108cmである。断面形は「ㄣ」状を呈し，底面は硬く締まっている。

方向 C3j₃区から北北西（N-26°-W）へほぼ直線的にのび，第2号溝と並列している。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から流れ込みと思われる縄文式土器片，弥生式土器片，土師器片が少量出土している。

所見 本跡は古墳時代中期の住居跡である第19・51・52号住居跡を掘り込んでいることから，古墳時代中期以降の溝と考えられるが，出土遺物はいずれも流れ込みと思われ，性格は不明である。



SD-1・2 土層解説

A-A'

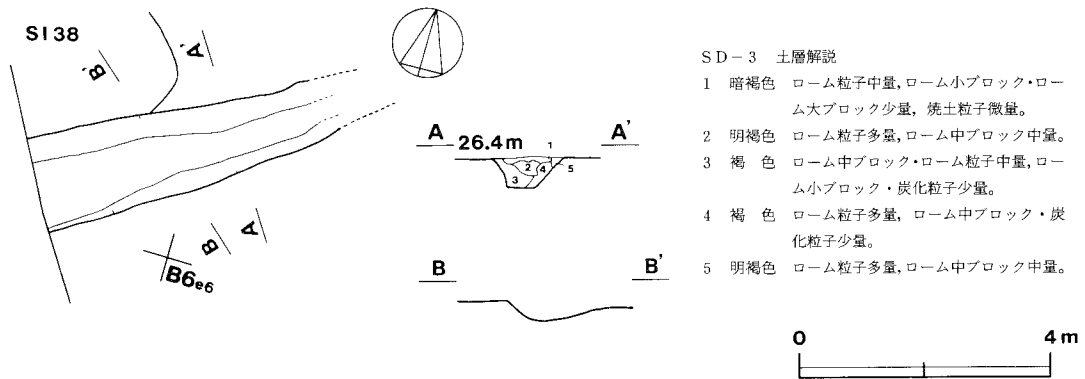
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。
- 5 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量。
- 7 明褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。

SD-1・2 土層解説

B-B' C-C'

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量。
- 3 にぶい褐色 ローム粒子多量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量。
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量。
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量。
- 7 褐色 ローム粒子中量。
- 8 褐色 ローム粒子少量。
- 9 褐色 ローム粒子中量, 粘土・山砂微量。

第224図 第1・2号溝実測図





第225図 第3号溝実測図

第2号溝 (第224図)

位置 調査区東部, Z地区C3j₃区~A地区F2j₅区にかけて確認されている。

重複関係 本跡はZ地区において第19号住居跡を, A地区で第51・52号住居跡, 第49~52号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長85.6mで, 上幅0.56~0.75m, 下幅0.18~0.42m, 深さ5~53cmである。断面形は南部は「」状で, 北部は「」状を呈し, 底面は硬く締まっている。

方向 C3j₃区から北北西 (N-26°-W) へほぼ直線的にのび, 第1号溝と並列している。

覆土 自然堆積。


遺物 覆土から流れ込みと思われる弥生式土器片, 土師器片が極少量出土している。

所見 本跡は古墳時代中期の住居跡である第19・51・52号住居跡を掘り込んでいることから, 古墳時代中期以降の溝と考えられるが, 出土遺物はいずれも流れ込みと思われ, 性格は不明である。

第3号溝 (第225図)

位置 調査区北部, C地区B6d₅区からC地区B6d₆区にかけて確認されている。

重複関係 本跡はC地区の第38号住居跡を掘り込んでいる。

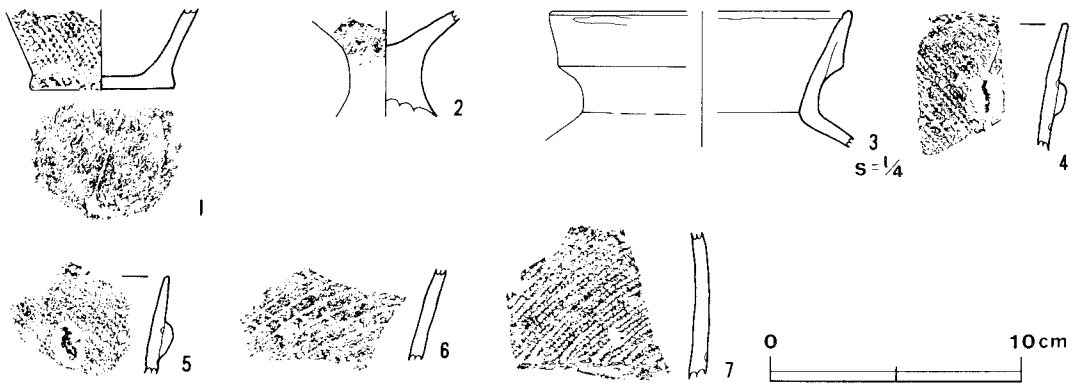
規模と形状 東部は攪乱されており現存長(4.80)mで, 上幅1.00~1.35m, 下幅0.35~0.66m, 深さ18~62cmである。断面形は「」状を呈し, 底面は硬く締まっている。

方向 B6d₅区から東北東 (N-60°-E) へほぼ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から流れ込みと思われる弥生式土器細片が極少量出土している。

所見 本跡は弥生時代後期の住居跡である第38号住居跡を掘り込んでいることから, 弥生時代後期以降の溝と考えられるが, 出土遺物はいずれも流れ込みと思われ, 性格は不明である。



第226図 第1号溝出土遺物実測・拓影図

第1号溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第226図 1	広口壺 弥生式土器	B (3.2) C [5.8]	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P678 10% 覆土
2	高坏 弥生式土器	B (4.3) E (1.9)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P679 20% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第226図 3	壺 土器	A [15.9] B (6.9)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア・パミス 橙色 普通	P677 5% 覆土

第226図4～7は、第1号溝出土土器片の拓影図である。4・5は同一個体と思われる、縄文施文の単口縁を呈し、口縁部下位に2列横位の刺突文が施され、刺突文間に瘤が貼られている。6・7は胴部片であり、6には附加条2種(附加1条)の、7には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

4 方形周溝状遺構

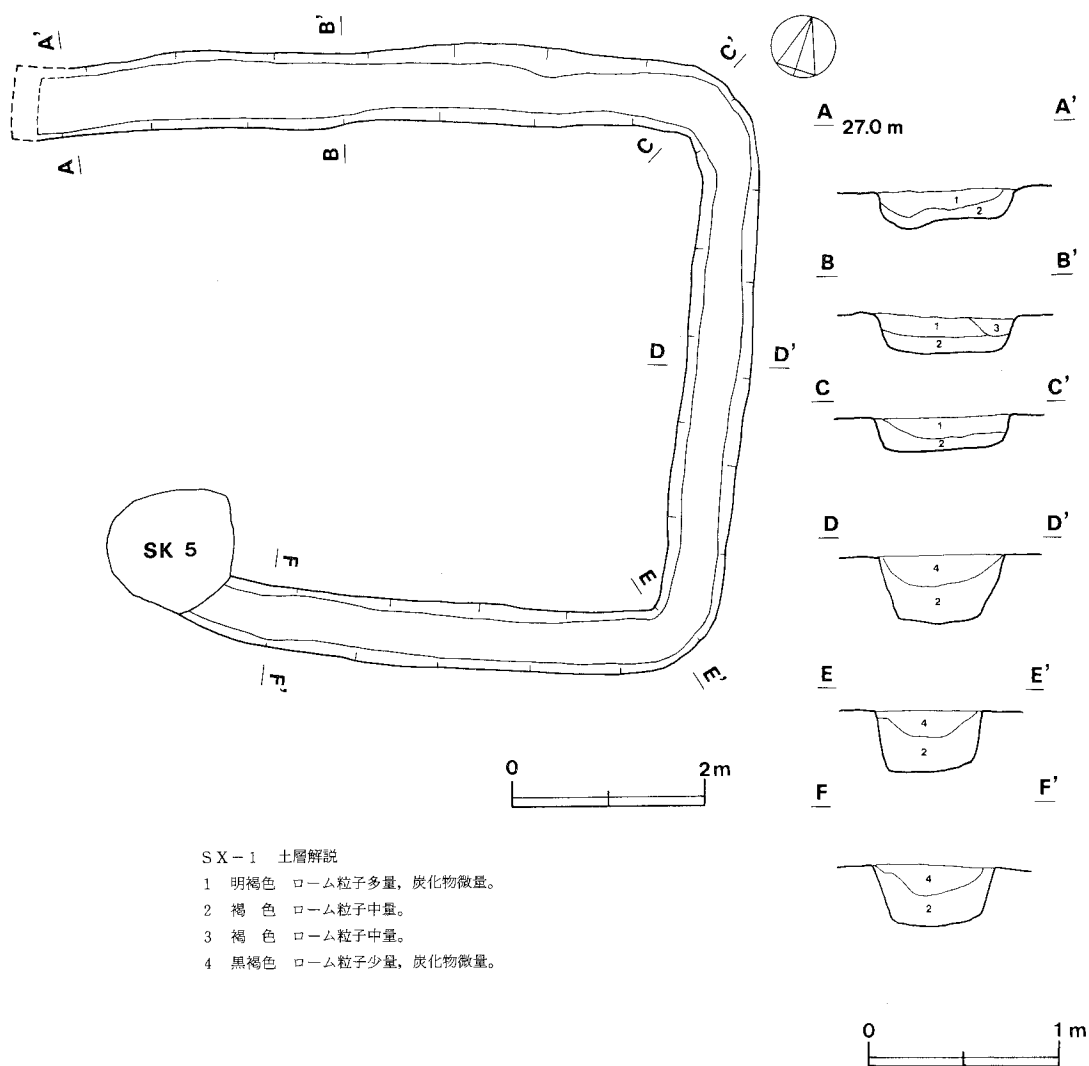
当遺跡の南西部から、方形周溝状遺構が1基検出されている。

第1号方形周溝状遺構(第227図)

位置 Z地区中央部、B4g₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第5号土坑に南西部を掘り込まれている。

規模と形状 南西側溝は検出されていないが、コーナーはほぼ直角に屈曲する「コ」の字形を呈



第227図 第1号方形周溝状遺構実測図

している。規模は外法で東西で[7.76m], 南北6.45m, 周溝幅65~84cm, 深さ22~34cmである。内法部分は平坦で、ピットなどの遺構は検出されず、さほど踏み固められていない。溝の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦で硬い。

長径方向 N-68°-E。

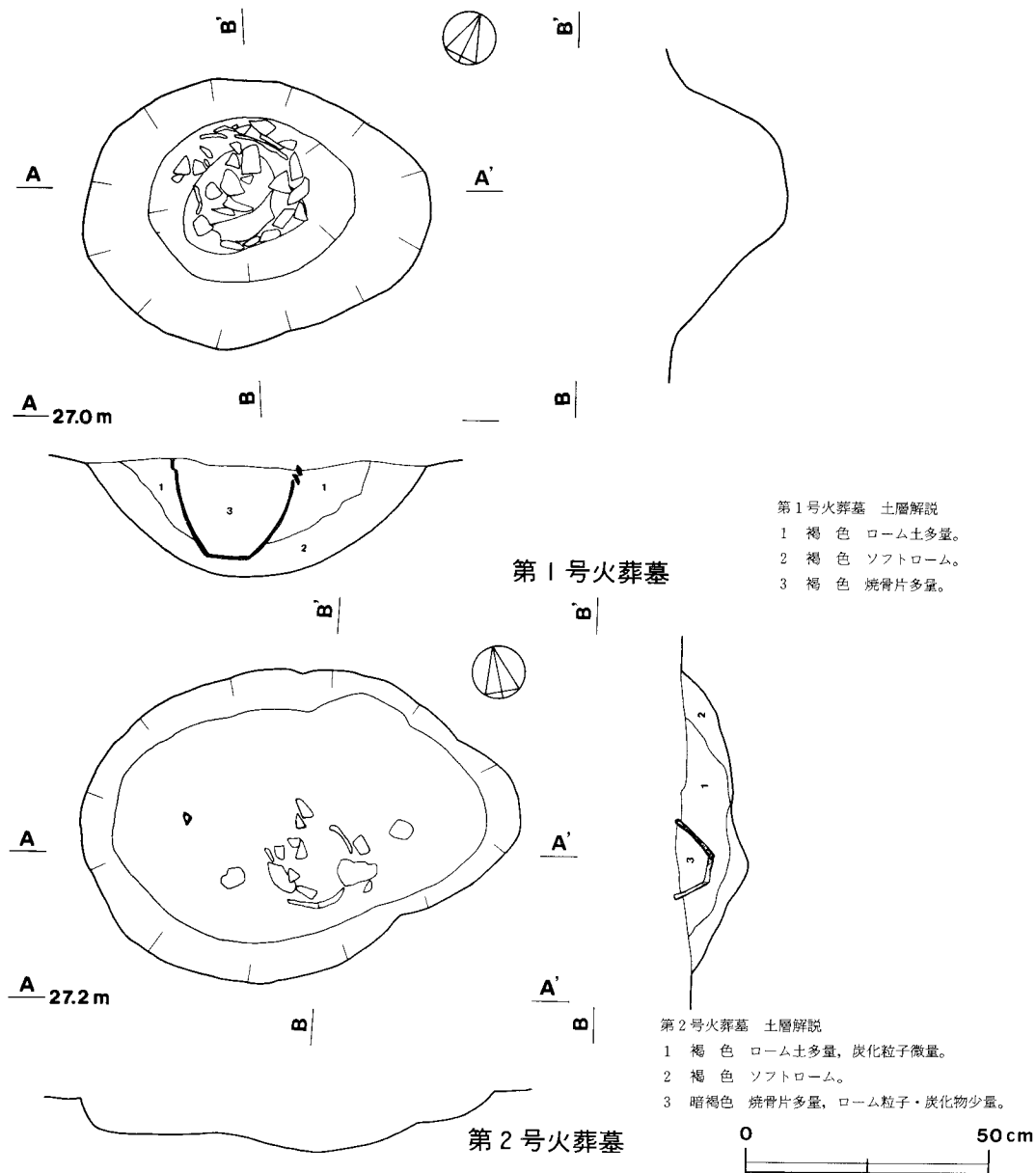
覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から弥生式土器細片, 土師器細片が出土している。

所見 本跡に伴うと思われる遺物もなく, 時期及び性格については不明である。

5 火葬墓

当遺跡のほぼ中央のZ地区東部から火葬墓が2基検出されている。当遺跡の一部は奈良・平安時代には墓域となっていたことが窺える。



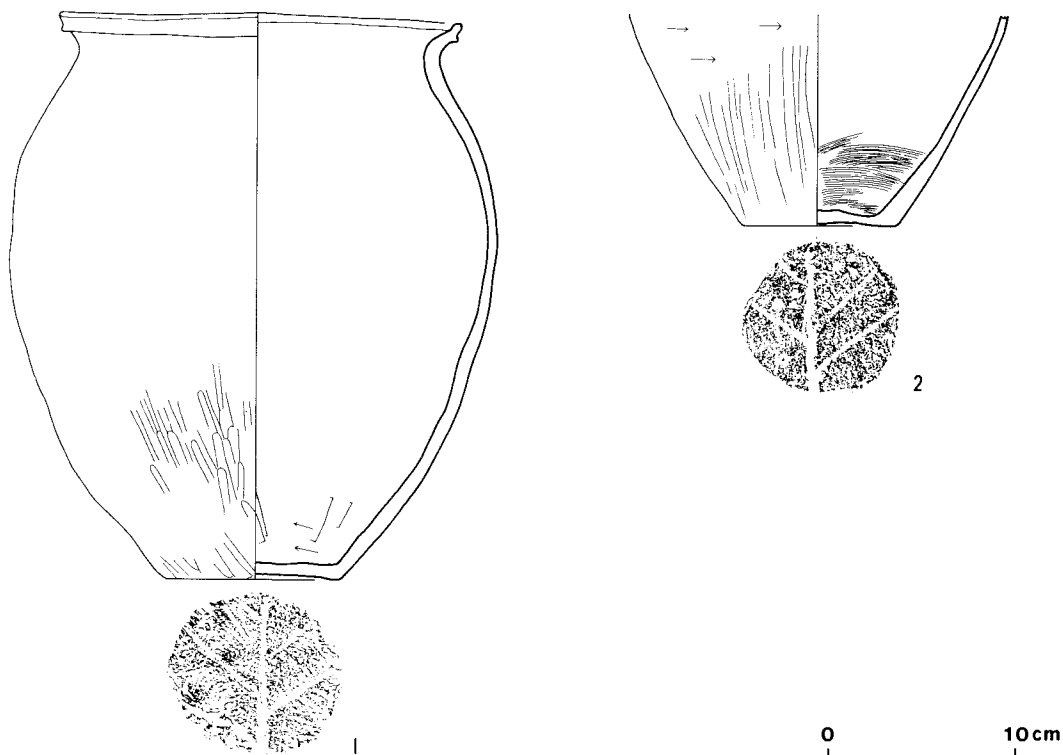
第228図 第1・2号火葬墓実測図

第1号火葬墓 (第228図)

位置 Z地区東端部，B5i₃区に確認されている。

規模と形状 長径72cm，短径54cmの不整楕円形を呈し，深さ26cmである。

長径方向 N-66°-E。



第229図 第1・2号火葬墓出土遺物実測・拓影図

壁 壁高は22～24cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 中央部はやや窪んでいる。

覆土 ソフトロームとローム粒子を多量に含む褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

遺物 墓壙のほぼ中央から、土師器の甕が正位の状態で出土している。甕内部からは焼骨の碎片が多量に検出されている。

所見 本跡は土師器の甕内部から多量の焼骨が検出されたことから火葬墓と思われ、土師器の甕の形態から、8世紀末葉から9世紀初頭の遺構と考えられる。

第2号火葬墓（第228図）

位置 Z地区東部，B4f₉区に確認されている。

規模と形状 長径91cm，短径64cmの楕円形を呈し，深さ17cmである。

長径方向 N-81°-W。

壁 壁高は7～14cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 凹凸があり，中央部はやや窪んでいる。

覆土 ソフトロームとローム粒子を多量に含む褐色土が堆積しており，人為堆積と思われる。

遺物 墓壙のほぼ中央から，土師器の甕が正位の状態で出土している。甕の上半部は欠損してい

る。甕内部からは焼骨の碎片が多量に検出されている。

所見 本跡は土師器の甕内部から多量の焼骨が検出されたことから火葬墓と思われ、土師器の甕の形態から、8世紀末葉から9世紀初頭の遺構と考えられる。

第1号火葬墓出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 1	甕 土師器	A 21.3 B 30.2 C 9.3	上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。胴部上位に最大径を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面上位ヘラナデ。下位ヘラ磨き。底部木葉痕有り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P672 80% 中央部床面

第2号火葬墓出土土器観察表


図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 2	甕 土師器	B (11.3) C 8.2	胴下半部。上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面，下位ヘラ磨き。内面粗いヘラ削り。底部木葉痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P673 45% 中央部床面

6 炭焼窯

当遺跡においては南西部の遺物を包含する谷を取り囲むように、炭焼窯が10基検出されている。時期は出土遺物から近世以降のものと考えられる。

第1号炭焼窯（第230図）

位置 Z地区の中央部，C3f₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長2.66m，最大幅1.80mの不整楕円形を呈し，深さ1.20mである。断面形は「」状を呈している。

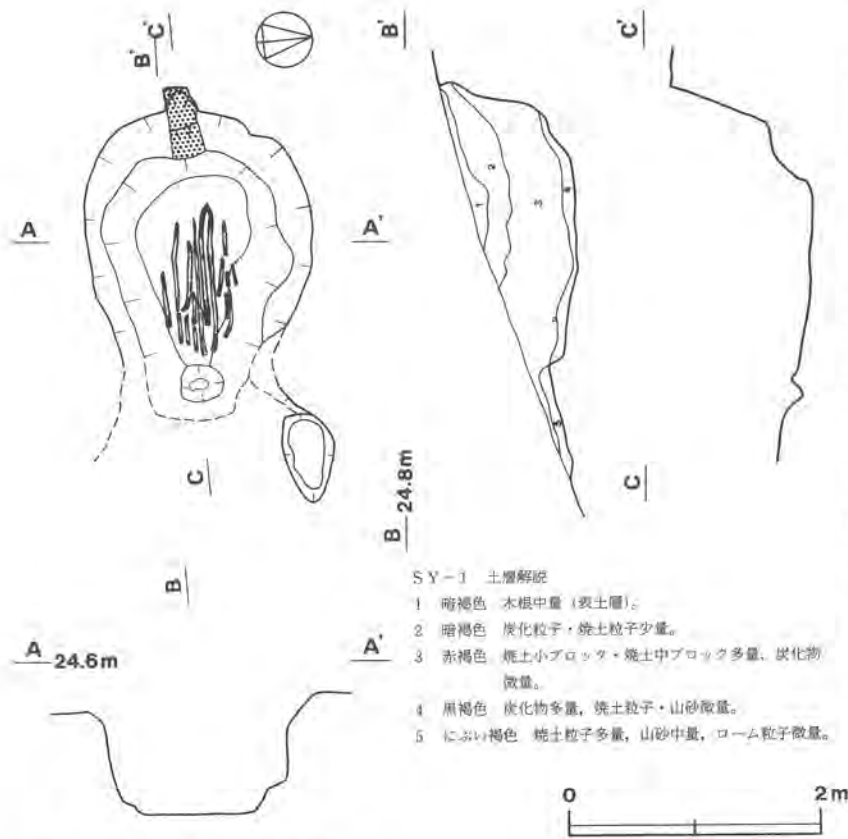
主軸方向 N-87°-W。

壁 壁高は4～118cmで，奥壁下位と北側壁下位に段をもち，外傾して立ち上がっている。段より上部はよく熱を受け，赤変硬化している。窯を構築した粘土と山砂が壁に遺存している。

窯体底部 ほぼ平坦で，焚口部付近で若干高くなっている。焚口部から中央部にかけて，赤変硬化している。

焚口部 窯体東端に確認され，長さ0.48m，幅1.20mである。窯体底部に接して，長径35cm，短径28cmの楕円形を呈し，深さ10cmのピットがあり，小礫も底面に散乱した状態で検出されていることから，窯の閉塞に使用されたものと思われる。底面は赤変硬化している。

焚口部前面 長さ0.96m，最大幅1.92mである。裾部北側壁に接して，平面形は長径72cm，短径40cmの不整楕円形を呈する深さ18cmのピットが検出されており，灰などの掻き出し物を棄てるため




第230図 第1号炭焼窯実測図

遺物 底面に長さ20~120cmほどの炭が縦に並んだ状態で検出されている。焚口部の覆土上層からは寛永通寶が出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、近世以降に構築されたものと思われる。

第2号炭焼窯 (第231図)

位置 Z地区の中央部, B4j区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長3.50m, 最大幅2.17mの不整楕円形を呈し, 深さ0.96mである。断面形は「」状を呈している。

主軸方向 N-17°-E。

壁 壁高は62~92cmで, 外傾して立ち上がっている。側壁中央部は赤変硬化している。窯を構築した粘土と山砂が壁の一部に遺存している。

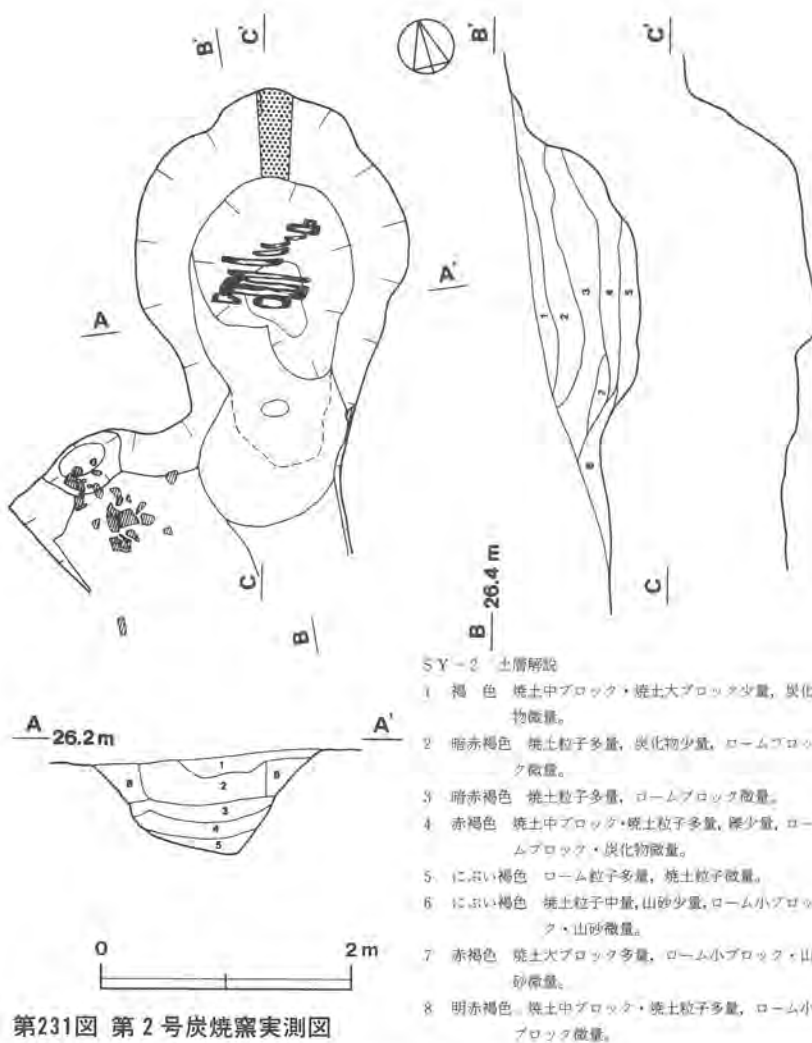
窯体底部 やや凹凸があり, 中央部が窪み, 周辺部が若干高くなっている。中央部から焚口部にかけて, よく熱を受け赤変硬化している。

焚口部 窯体南端に確認され, 長さ0.94m, 幅1.34mである。東側壁に花崗岩の割り石による石組

の施設と思われる。底面は硬く, 作業場として利用されたものと思われる。

煙道部 奥壁中央に位置し, 孔径は約24cmである。奥壁下位の段から上位まで84cmで, 外傾して立ち上がっている。

覆土 下層は焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が厚く堆積しており, 窯体の崩落による堆積と思われる。上層は暗褐色土であり, 自然堆積と思われる。



第231図 第2号炭焼窯実測図


しており、窯体の崩落によるものと思われる。

遺物 底面中央に長さ20~70cmの炭が横に並んだ状態で検出されている。

所見 遺構の構造から、近世以降に構築されたものと思われる。

第3号炭焼窯 (第232図)

位置 Z地区の中央部，C4a₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長3.40m，最大幅1.88mの不整楕円形を呈し，深さ0.85mである。断面形は「」状を呈している。

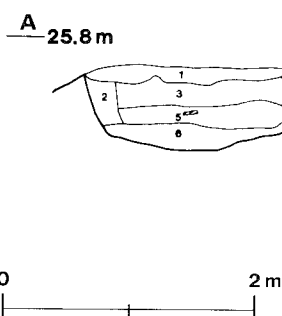
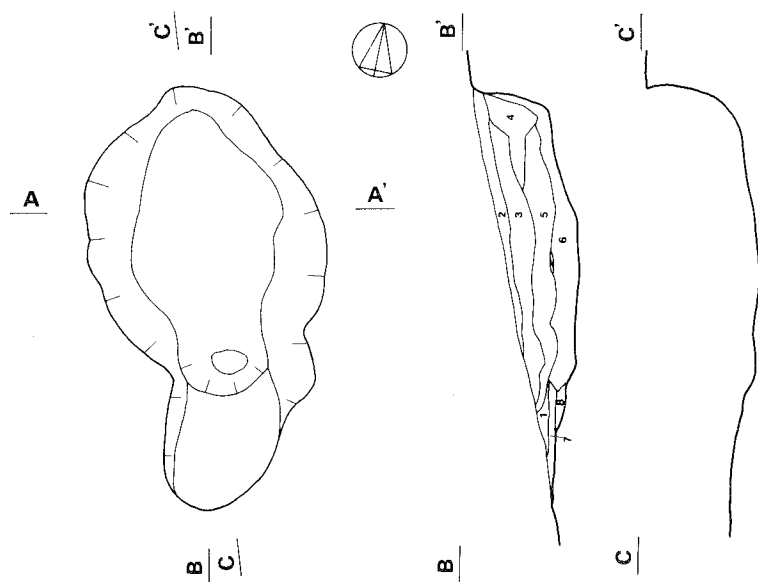
主軸方向 N-21°-W。

壁 壁高は45~78cmで，側壁は内彎ぎみに立ち上がっている。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっており，上半部は赤変硬化している。

が検出されており，閉塞に使用したものと思われる。底面は赤変硬化している。焚口部前面 長さ1.10m，最大幅2.70mで手前に広がっている。底面はほぼ平坦で硬く，作業場として使用されたものと思われる。

煙道部 奥壁中央に位置し，孔径は約20cmである。底面から上面まで90cmで，外傾して立ち上がっている。

覆土 焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む赤褐色土・暗赤褐色土が厚く堆積



SY-3 土層解説

- 1 褐色 焼土中ブロック・焼土大ブロック少量，炭化物微量。
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量，粘土ブロック少量。
- 3 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量，礫中量，炭化物微量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化物少量。
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，礫少量，粘土ブロック微量。
- 6 赤褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック多量，ロームブロック・炭化物微量。
- 7 赤黒色 炭化物多量，焼土粒子・粘土ブロック微量。
- 8 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・粘土ブロック微量。

第232図 第3号炭焼窯実測図

窯体底部 ほぼ平坦

であるが，中央部がやや窪み周辺が高くなっている。壁際には径20cmほどの浅い落ち込みがいくつか検出され，窯体補強の礫を据えるためのものと思われる。

焚口部 窯体南東端に確認され，長さ0.58m，幅1.22mである。底面は赤変硬化している。

焚口部前面 長さ0.95m，最大幅は1.05mである。底面は固く締まりがあり，作業場として利用されたと思われる。

煙道部 奥壁中央に

位置し，孔径は約25cmである。底面から上面までは74cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。


覆土 焼土ブロック・焼土粒子・花崗岩の礫を含む赤褐色土が厚く堆積しており，窯体の崩落によるものと思われる。

遺物 底面から細かく砕けた炭が出土している。

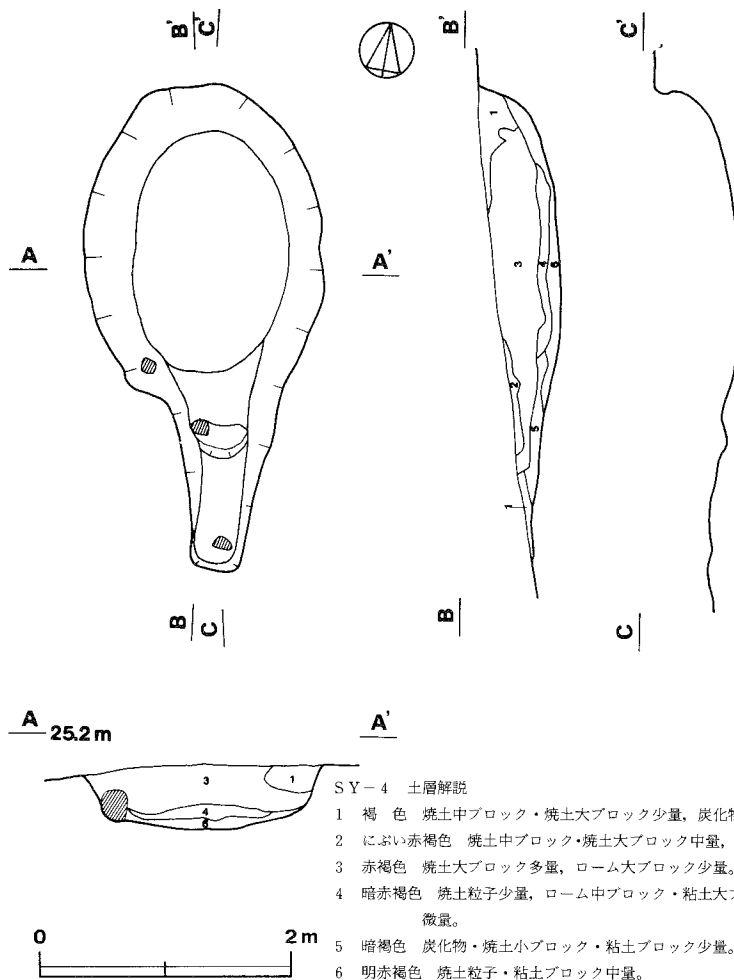
所見 遺構の構造から，近世以降に構築されたものと思われる。

第4号炭焼窯 (第233図)

位置 Z地区の中央部，C2b₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長3.92m，最大幅1.90mの楕円形を呈し，深さ0.55mである。断面形は「」状を呈している。

主軸方向 N-11°-W。



第233図 第4号炭焼窯実測図

煙道部 奥壁中央の赤変している壁の状態から推定すると、孔径は約30cmである。底面から上面までは35cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が厚く堆積しており、窯体の崩落によるものと思われる。

遺物 なし。

所見 遺構の構造から、近世以降に構築されたものと思われる。

第5号炭焼窯 (第234図)

位置 Z地区の中央部、C4b1区を中心に確認されている。


重複関係 焚口部を第2・4号土坑に掘り込まれている。

壁 壁高は25~50cmで、内湾ぎみに立ち上がっている。東側壁中央部は熱を受け、赤変硬化している。

窯体底部 ほぼ平坦であるが、中央部がやや窪んでいる。

焚口部 窯体南端に確認され、長さ0.66m、幅1.05mである。西側壁際に花崗岩の礫が据えられており、閉塞のためのものと思われる。底面は中央部が赤変硬化している。

焚口部前面 長さ0.90m、幅0.45mで広がりをもたない。底面は硬く締まりがある。

規模と平面形 全長推定 [4.05m], 最大幅3.55mの不整形を呈するものと思われ, 深さは0.56mである。断面形は「」状を呈している。

主軸方向 N-88°-E。

壁 壁高は25~52cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

窯体底部 中央部はやや高く, 周辺部は凹凸している。

焚口部 第2・4号土坑に攪乱されており, 不明である。

煙道部 奥壁中央にわずかに赤変しているところがあり, 煙道と思われる。底面から上面までは25cmで, 外傾し立ち上がっている。

覆土 焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が厚く堆積しており, 窯体の崩落によるものと思われる。


遺物 なし。

所見 遺構の構造などから, 近世以降のものと思われる。

第6号炭焼窯 (第234図)

位置 Z地区の中央部, C4a₁区を中心に検出されている。

重複関係 窯体下半部・焚口部を第1・3号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 全長推定で [3.15m], 最大幅2.52mの不定形であり, 深さは0.82mである。断面形は「」状を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

壁 壁高は55~72cmで, 外傾して立ち上がっている。

窯体底部 現存部は平坦で, 雲母片岩の割石を敷いている。

焚口部 第1・3号土坑により攪乱されており, 不明である。

煙道部 奥壁中央に位置しており, 壁の赤変状況から推定すると孔径は約25cmである。底面から上面までは65cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。


覆土 焼土ブロックを多量に含む明赤褐色土が堆積しており, 窯体が崩落したものと思われる。

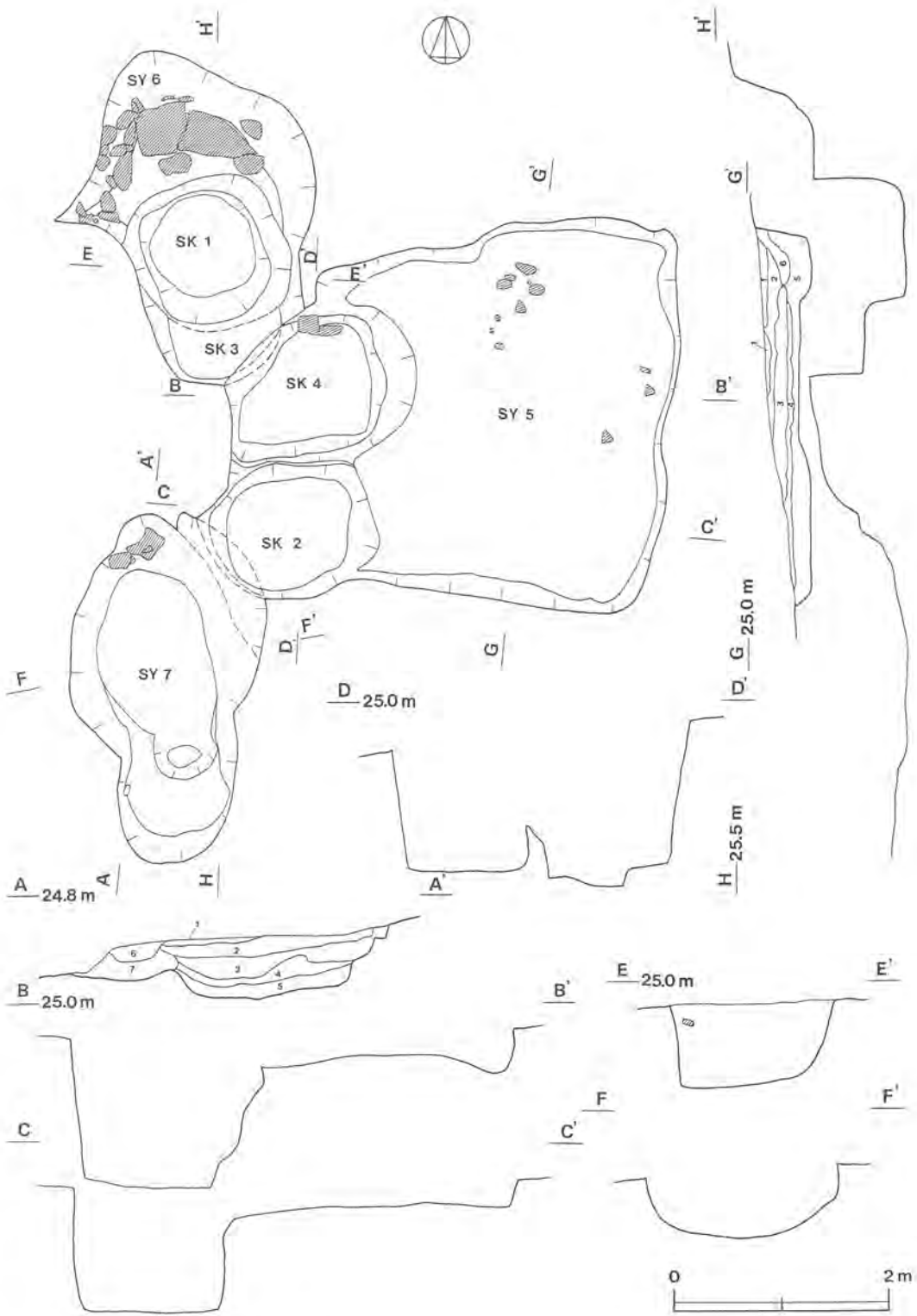
遺物 なし。

所見 遺構の構造から, 近世以降に構築されたものと思われる。

第7号炭焼窯 (第234図)

位置 Z地区の中央部, C4b₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長3.22m, 最大幅1.82mの不整形楕円形を呈し, 深さ0.60mである。断面形は「」状を呈している。



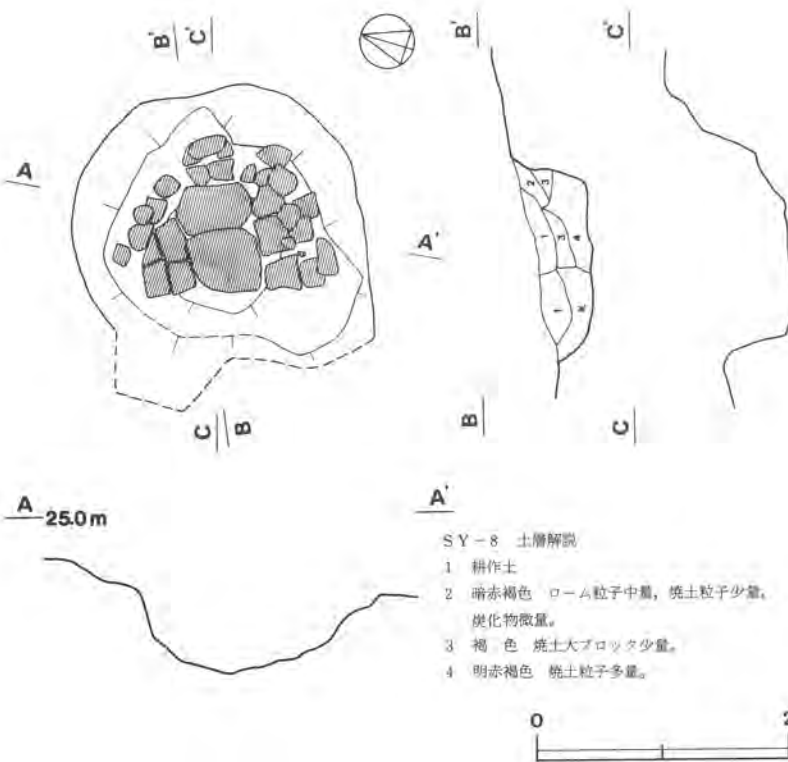
第234图 第5·6·7号炭烧窠夹测图

SY-5 土層解説

- 1 におい褐色 ローム粒子・焼土大ブロック少量、炭化物微量。
- 2 黒色 炭化物多量。
- 3 明赤褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土大ブロック多量。
- 4 におい褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量。
- 5 におい褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土小ブロック微量。
- 6 におい褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土小ブロック微量。

SY-7 土層解説

- 1 におい褐色 ローム粒子・焼土大ブロック少量、炭化物微量。
- 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土大ブロック多量、ローム粒子・炭化物微量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土大ブロック多量、ローム小ブロック少量、炭化物微量。
- 4 におい赤褐色 焼土小ブロック中量、ロームブロック少量。
- 5 赤褐色 焼土大ブロック中量、ローム小ブロック少量。
- 6 におい褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土小ブロック微量。
- 7 褐色 ローム粒子・焼土大ブロック・粘土大ブロック少量。



SY-8 土層解説

- 1 耕作土
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物微量。
- 3 褐色 焼土大ブロック少量。
- 4 明赤褐色 焼土粒子多量。

主軸方向 N-11°
-W。

壁 側壁の壁高は23~55cmで、内灣ぎみに立ち上がっている。奥壁は下位に段をもち、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

窯体底部 中央部が窪み、周辺部はやや高まりをもっている。
焚口部 窯体南端に確認され、長さ0.42m、幅1.04mである。
窯体底部とは5cmの段差がある。

第235図 第8号炭焼窯実測図

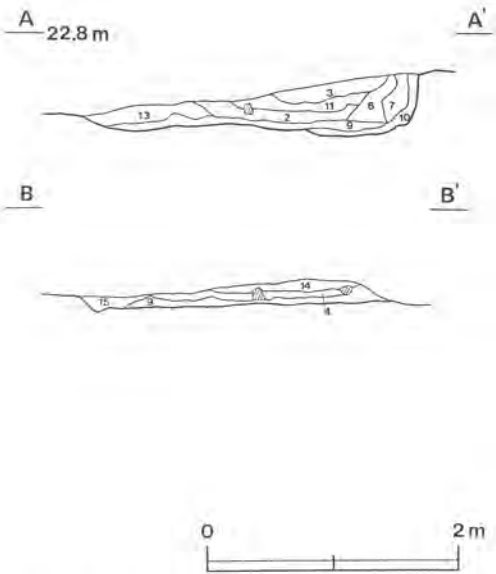
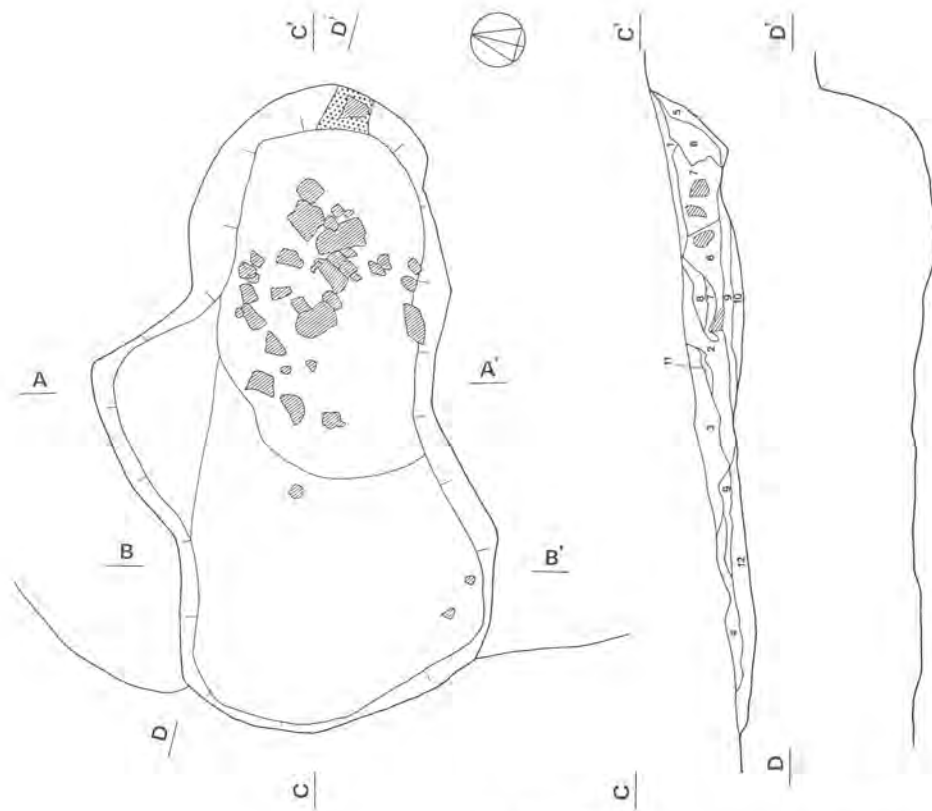
焚口部前面 長さ0.90m、幅約1.10mで広がりをもたない。底面は平坦で硬い。

煙道部 奥壁中央に位置し、孔径約25cmである。奥壁の段から上面までは42cmで緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 焼土ブロックを多量に含む赤褐色土・暗赤褐色土が堆積しており、窯体が崩落したものと思われる。

遺物 なし。

所見 遺構の構造から、近世以降に構築されたものと思われる。




SY-9 土層解説

- 1 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子中量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土大ブロック中量，炭化粒子少量。
- 3 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，礫少量。
- 4 にぶい褐色 ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，焼土中ブロック・礫少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子・焼土大ブロック少量。
- 7 赤褐色 焼土ブロック。
- 8 明赤褐色 焼土粒子・砂粒多量，ローム粒子中量。
- 9 黒褐色 炭化粒子多量，焼土粒子・砂粒少量。
- 10 明赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子中量。
- 11 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子中量。
- 12 にぶい褐色 ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 13 暗褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック多量，ローム粒子・炭化小ブロック中量，焼土粒子少量。
- 14 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化小ブロック少量。
- 15 極暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化小ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量。

第236図 第9号炭焼窯実測図

第8号炭焼窯（第235図）

位置 Z地区の西端部，C2g₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長（2.15m），最大幅2.28mの楕円形を呈するものと思われ，深さは0.99mである。断面形は「」状を呈している。窯体西部・焚口部は調査区外へのびている。

主軸方向 N-68°-E。

壁 壁高は50～95cmで，段を有し外傾して立ち上がっている。側壁には，20cm前後の花崗岩の割石がつまれており，窯壁としていたものと思われる。

窯体底部 花崗岩の扁平な割石が現存部全面に敷かれている。

焚口部 調査区外となっているため不明である。

煙道部 奥壁中央の底面に煙突の置き台としたと思われる板石が検出されている。赤変の状態から孔径は約30cmと思われる。底面から上面までは85cmで，外傾して立ち上がっている。


覆土 焼土を含む明赤褐色土・暗赤褐色土が厚く堆積しており，窯体が崩落したものと思われる。

遺物 なし。

所見 遺構の構造から，近世以降に構築されたものと思われる。

第9号炭焼窯（第236図）

位置 D地区の北西部，H3h₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 全長5.18m，最大幅2.70mの不整楕円形を呈し，深さは0.90mである。断面形は「」状を呈している。

主軸方向 N-81°-E。

壁 壁高は57～86cmで，北側壁は緩やかに外傾して，南側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。南側壁の中央部は赤変硬化している。

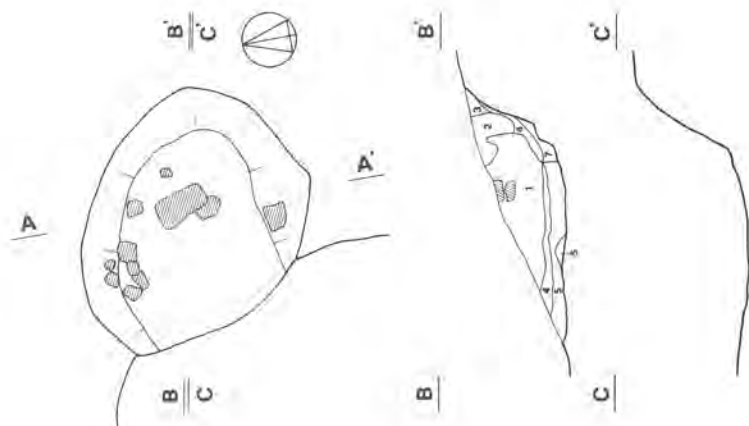
窯体底部 ほぼ平坦であるが，奥壁側と焚口部近くがやや窪んでいる。

焚口部 窯体南端に確認されている。長さ0.40m，幅1.20mである。窯体底部とはわずかに段差がある。底面は赤変硬化している。

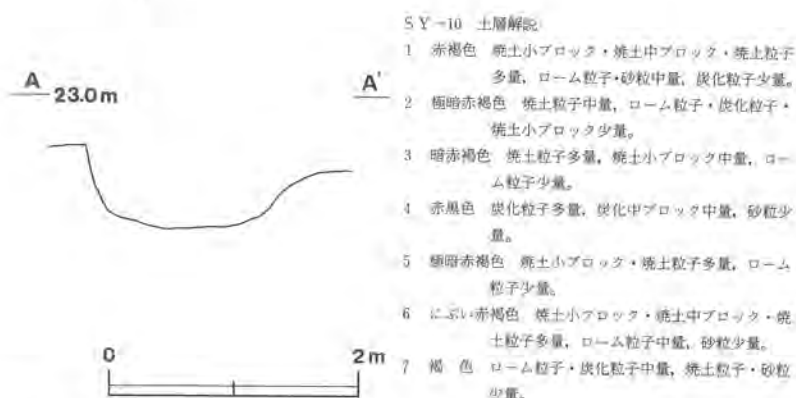
焚口部前面 長さ2.20m，最大幅2.52mで手前に広がりをもつ。底面は硬く締まりがある。作業場として利用したものと思われる。

煙道部 奥壁中央に位置し，孔径約30cmである。底面から上面までは78cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 焼土粒子・焼土ブロック・花崗岩の小礫を含む暗赤褐色土・赤褐色土が厚く堆積しており，窯体の崩落によるものと思われる。



遺物 覆土中層から、窯体補強に利用したと思われる石臼片が出土している。所見 遺構の形態や遺物から、近世以降に構築されたものと思われる。



第237図 第10号炭焼窯実測図

第10号炭焼窯 (第237図)

位置 D地区の北西部、H3i₉区を中心に検出されている。

規模と平面形 西部は削りとられているが、長さ(1.90m)、最大幅1.76mの楕円形を呈するものと思われ、深さは0.81mである。断面形は「」状を呈する。

主軸方向 N-105°-E。

壁 壁高は38~76cmで、南側壁は緩やかに外傾して、北側壁は外傾して立ち上がっている。

窯体底部 ほぼ平坦で、中央部がやや窪んでいる。

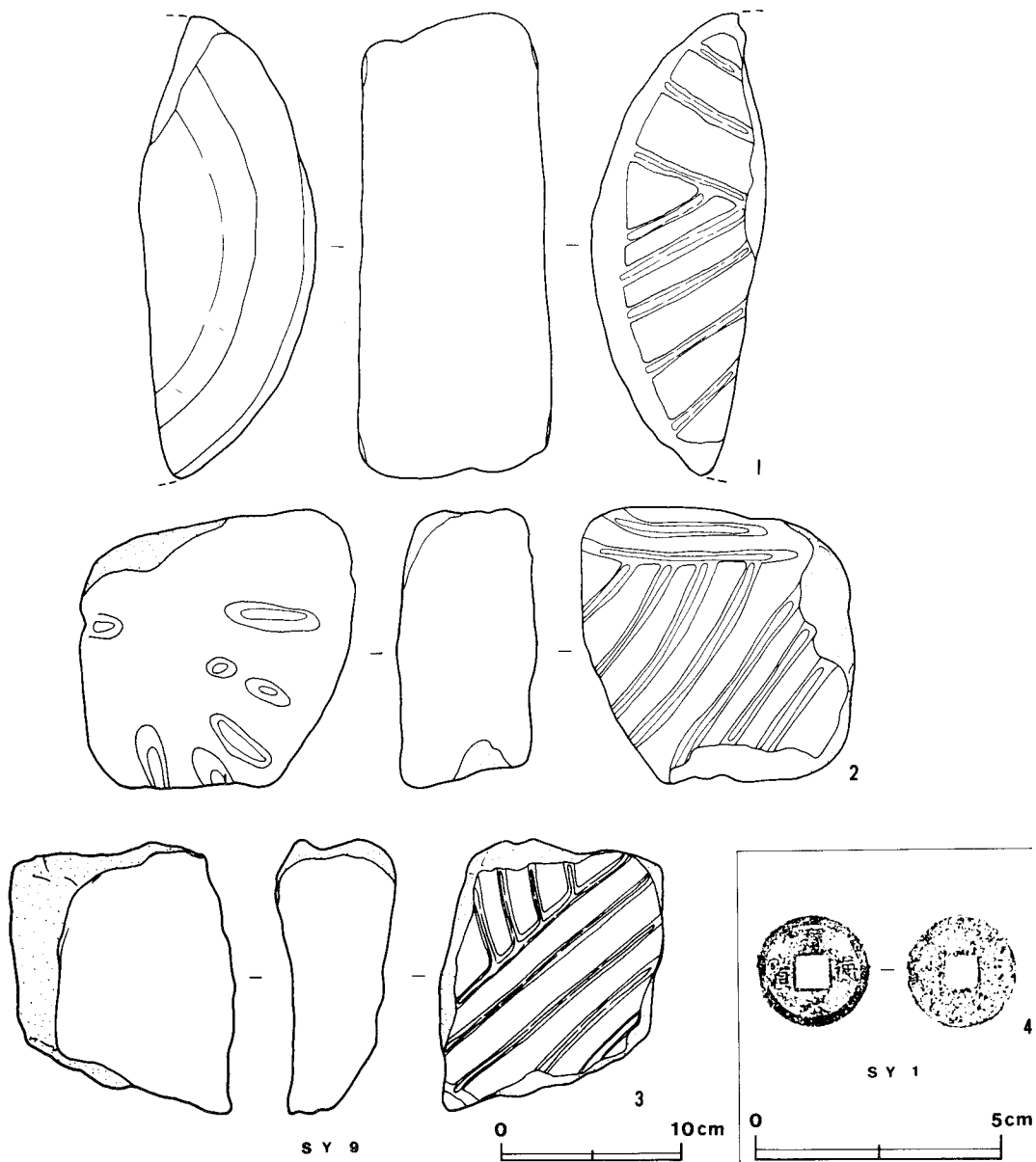
焚口部 削られており、不明である。

煙道部 奥壁中央に位置し、孔径約30cmである。奥壁下位の段から上面まで75cmであり、外傾して立ち上がっている。

覆土 焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む赤褐色土が厚く堆積しており、窯体の崩落によるものと思われる。

遺物 なし。

所見 遺構の構造から、近世以降に構築されたものと思われる。



第238図 炭焼窯出土遺物実測・拓影図

炭焼窯出土石製品一覧表

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考		
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
第238図	1	石	白	25.8	9.7	10.5	3376.3	花崗岩	覆土	Q71 SY9
	2	石	白	15.3	15.2	7.7	2777.7	花崗岩	覆土	Q73 SY9
	3	石	白	15.1	12.5	6.5	1520.9	花崗岩	覆土	Q72 SY9

炭焼窯出土古銭一覧表

図版番号	鑄名	初鑄年 (西曆)	鑄造地名	出土地点	備考	
第238図	4	寛永通寶	寛文8年 (1668)	日本	覆土	M6 SY1

7 遺物包含層及び遺構外出土遺物

谷部に遺物を包含する層（以下、遺物包含層と呼ぶ）は、Z地区中央部からD地区北西部にかけて検出されている。遺物包含層は原田北遺跡と原田西遺跡の間に存在する支谷につながる谷部である。南南東へ傾斜し、B3区からC3区へ向かうA包含層と、南西へ傾斜し、C4区からC3区に向かうB包含層が存在する。

A包含層は最大長45.3m、最大幅16.7m、標高差5.6mである。B包含層は最大長48.3m、最大幅18.7m、標高差5.0mである。

出土遺物は縄文式土器片が中心で、A包含層においては早期の田戸下層式、鶺鴒ヶ島台式、前期の浮島式土器などが南寄りのB包含層との合流部近くから比較的まとまって出土している。B包含層においては北東部の底面近くから有舌尖頭器が出土し、その近くのすぐ上の層から井草式、さらに上層から整形痕を持つ無文土器が出土している。別の地点では田戸下層式と無文土器が伴出し、草創期から早期にかけての土器が層位的にとらえられている。包含層の主体を占める縄文式土器に伴い、石鏃、礫器、磨石、石皿等の石器が出土している。覆土上層からは、弥生式土器片、土師器片、管玉なども出土し、谷が埋没するまでに長い年月を経ていたことが窺える。

ここでは、包含層及び遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図で一括して報告する。なお、本遺跡の遺物包含層と原田西遺跡の遺物包含層は、約30mの幅の支谷を狭んで存在しているため、土器については以下の同じ分類基準を用いて解説する。

第1群 縄文時代草創期及び早期の土器

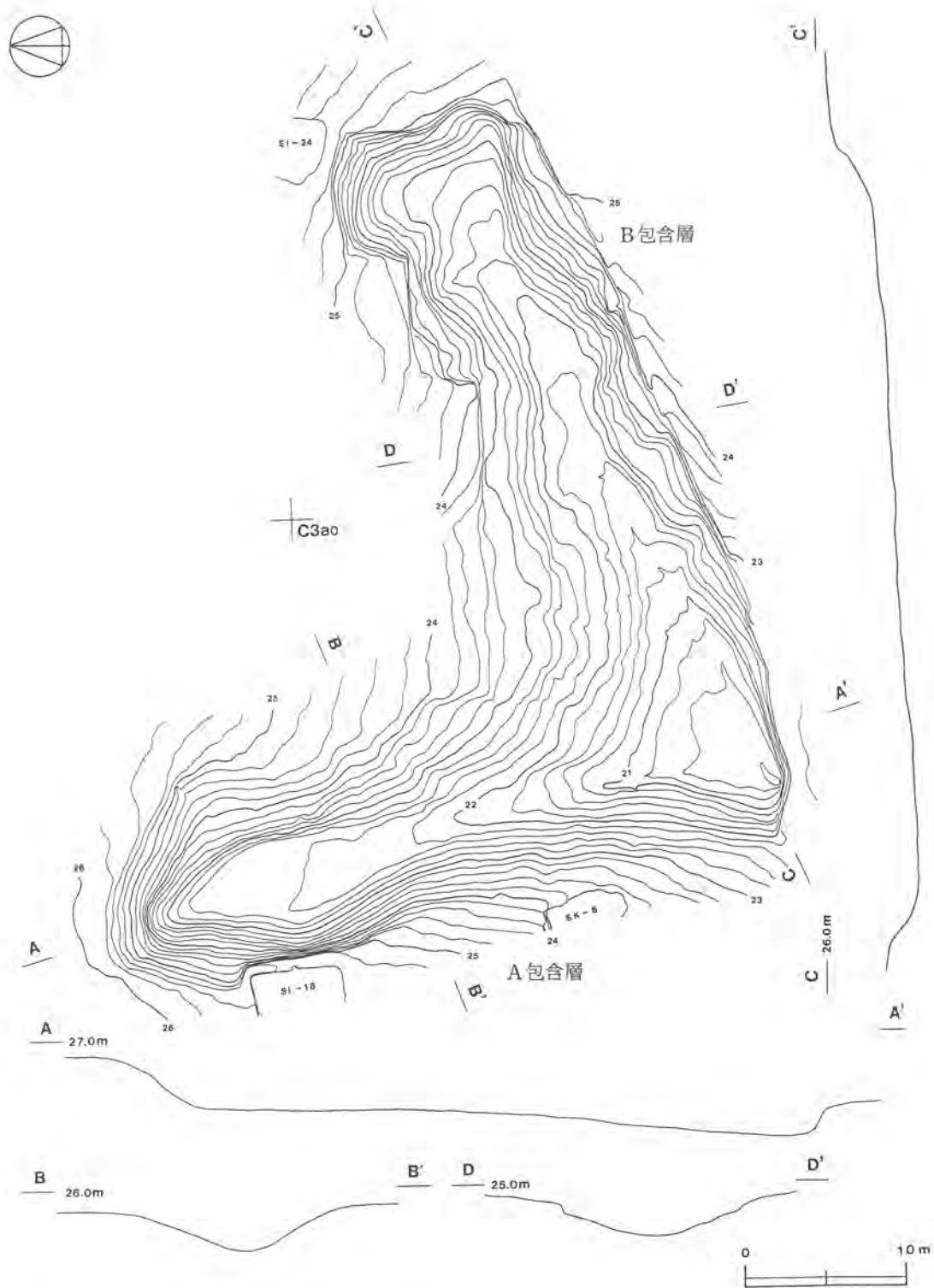
- 第1類 表裏縄文土器
- 第2類 無文土器
- 第3類 撚糸文系土器
- 第4類 沈線文系土器
- 第5類 貝殻条痕文系土器

第2群 縄文時代前期の土器

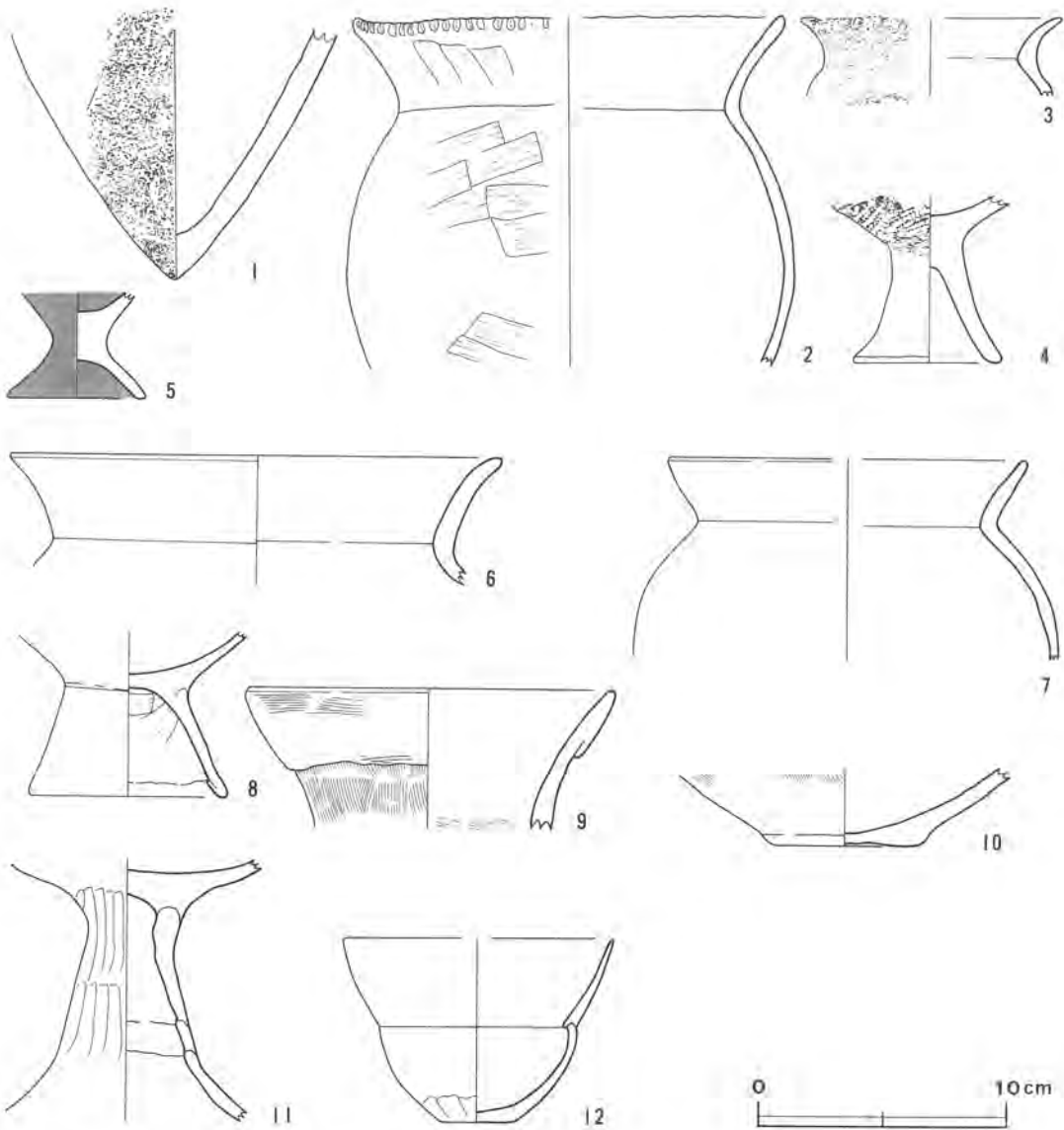
- 第1類 羽状縄文系土器
- 第2類 貝殻沈線文系土器
- 第3類 縄文原体圧痕文及び結節文が施されている土器
- 第4類 細沈線による文様が施されている土器

第3群 縄文時代中期の土器

- 第1類 沈線文が施されている土器
- 第2類 集合沈線文及び彫刻手法を持つ土器
- 第3類 隆起線が貼られている土器



第239図 原田北遺跡遺物包含層実測図



第240図 遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図

第4類 隆帯文と磨消縄文がみられる土器

第4群 縄文時代後期の土器

第1類 沈線文を主体とする土器

第2類 磨消縄文がみられる土器

第5群 弥生時代中期の土器

第6群 弥生時代後期の土器

第1類 櫛描文の施されている土器

第2類 複合口縁を呈する土器

第3類 ハケ目調整されている土器

第4類 縦区画充填波状文が施されている土器

第5類 キザミ目の施されている段を持つ土器

第6類 頸部下半を無文帯とする土器

第7類 結節文による区画を持つ土器

第8類 縄文が施されている土器

第9類 底部片を一括する

遺物包含層出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第240図 1	尖底土器 縄文式土器	B (10.1)	胴下半部。尖底。胴部は外傾して立ち上がる。外面は無文で、整形痕が見られる。	砂粒・長石・石英・スコリア 内・外面橙色 普通	P680 C3g ₇ 20%
2	甕 弥生式土器	A [17.4] B (14.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。口縁に沿ってキザミ目が施されている。口縁部は縦位に、胴部は斜位・横位にハケ目整形されている。口縁部内面は横ナデされている。	砂粒・バミス・スコリア 橙色 普通	P681 C3b ₆ 20%
3	甕 弥生式土器	A [10.6] B (3.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。口縁に沿ってキザミ目が施されている。内・外面ともに横ナデされている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P682 C地区 5%
4	高坏 弥生式土器	B (6.8) D 5.9 E 5.0	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ラッパ」状に開く。坏部は外傾して立ち上がっている。外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 黄橙色 坏部内面黒色 普通	P683 C地区 50%
5	高坏 弥生式土器	B (4.4) D 5.6 E 2.4	脚部は「ハ」の字状に大きく開く。坏部は外傾して立ち上がる。外面は無文で内・外面は赤彩されている。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P684 C4f ₂ 50%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第240図 6	甕 土器	A 19.8 B (4.8)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ともに横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P685 C3c ₄ , B3j ₅ 10%
7	甕 土器	A [14.2] B (8.1)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部にかけては外反している。	口縁部内・外面ともに横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P686 C3b ₆ 30%
8	台付甕 土器	B (6.7) D 8.0 E 4.5	胴下半部。脚部は「ハ」の字状に開き、底面で折り返しを持つ。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面横ナデ。脚部外面横ナデ。内面指頭による強いナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 やや不良	P687 C4g ₉ 全体に摩耗が著しい 30%
9	壺 土器	A 15.0 B (5.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面、ハケ目整形。内面横ナデ。頸部内面、ハケ目整形。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P688 C3b ₆ 10%

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第240図 10	壺 土 師 器	B (3.2)	底部片。上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面下位ハケ目整形。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 689 C3b。
		C 5.8				
11	高 坏 土 師 器	B (10.6)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は中空で、裾部は「ラッパ」状に開く。坏部は内彎して立ち上がる。	脚部外面ヘラ削り。内面指頭によるナデ。輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 690 C3・C4区
		E (8.6)				
12	埴 土 師 器	A [10.9]	平底。胴部は内彎し、頸部は強くくびれ、口縁部は外傾して立ち上がっている。	胴部外面下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P 691 C3b。
		B 7.5				
		C 3.0				

第1群 縄文時代草創期及び早期の土器

第1類 表裏縄文土器、本遺跡においては概当土器なし。

第2類 無文土器 (第241図1～3)

1は口縁部片で口縁部は僅かに内彎して立ち上がる。口唇部は円頭状を呈している。内・外面とも平滑に整形されている。2・3は同一個体と思われる、外面の整形が雑で、砂粒等の移動痕が顕著にみられる。内面は平滑に整形されている。

第3類 撚糸文系土器 (第241図4～6)

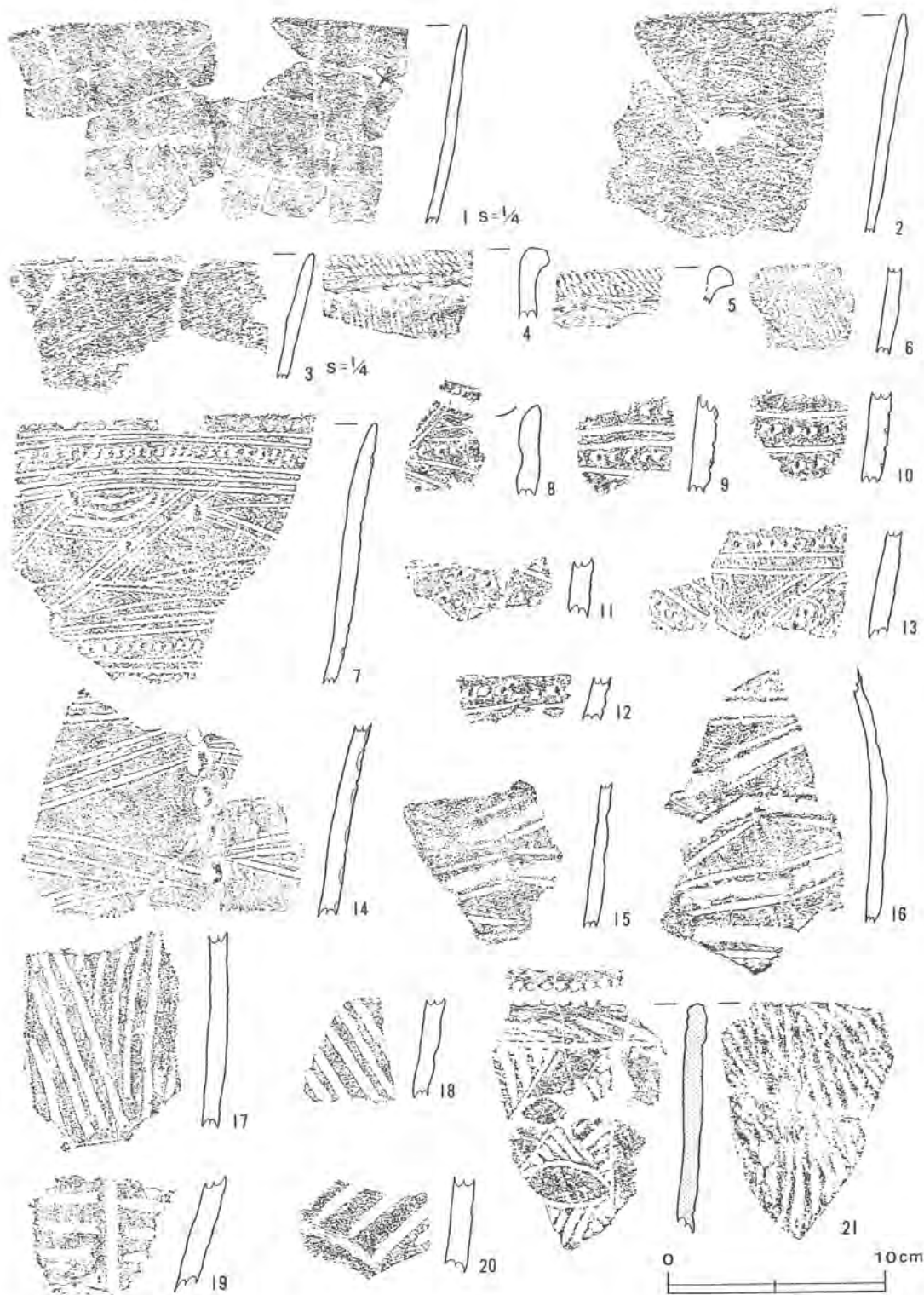
4・5は口唇部が肥厚するが、口縁部の外反は著しくない。口唇部及び外面に、縄文が比較的密に施されている。本類は井草式に比定される。

第4類 沈線文系土器 (第241図7～20)

7は口縁部片で、僅かに内彎して立ち上がる。口唇部は先細りの円頭状を呈している。口縁部文様帯は横位の沈線で区画され、2本1組の沈線が斜位に施されている。口縁部上位と胴部上位には沈線に沿って、竹管による刺突文が施されている。8～13は細沈線、刺突文、貝殻文が組み合わせられた文様が施されている。8は波状口縁を呈している。13は細沈線と刺突文により菱形の文様構成がなされ、それに沿って貝殻腹縁文が施されている。14は円形の刺突文を軸に3本1組の沈線により菱形の文様構成がみられる。15・16は同一個体と思われる、太沈線と細沈線により菱形の文様が施されている。17～20は太沈線により文様が施されている。17は幾条かの沈線を単位とし、右下がりと左下がりに施され、綾杉状の文様となっている。18・20は斜位の、19は縦位の沈線で区画し、横位の沈線を充填させている。本類は田戸下層式に比定される。

第5類 貝殻条痕文系土器 (第241・242図21～41)

21～30は、口縁部はほぼ垂直に立上がり、口唇部に棒状工具による押圧がなされている。地文に貝殻条痕文が軽く施されている。沈線により縦位・斜位の区画がなされ、無文部と有文部を構成している。有文部は斜位の沈線により充填している。有文部の中位には沈線区画による楕円形状の無文部が残されている。内面は貝殻条痕文が縦位、斜位に施されている。31～41は内外面に

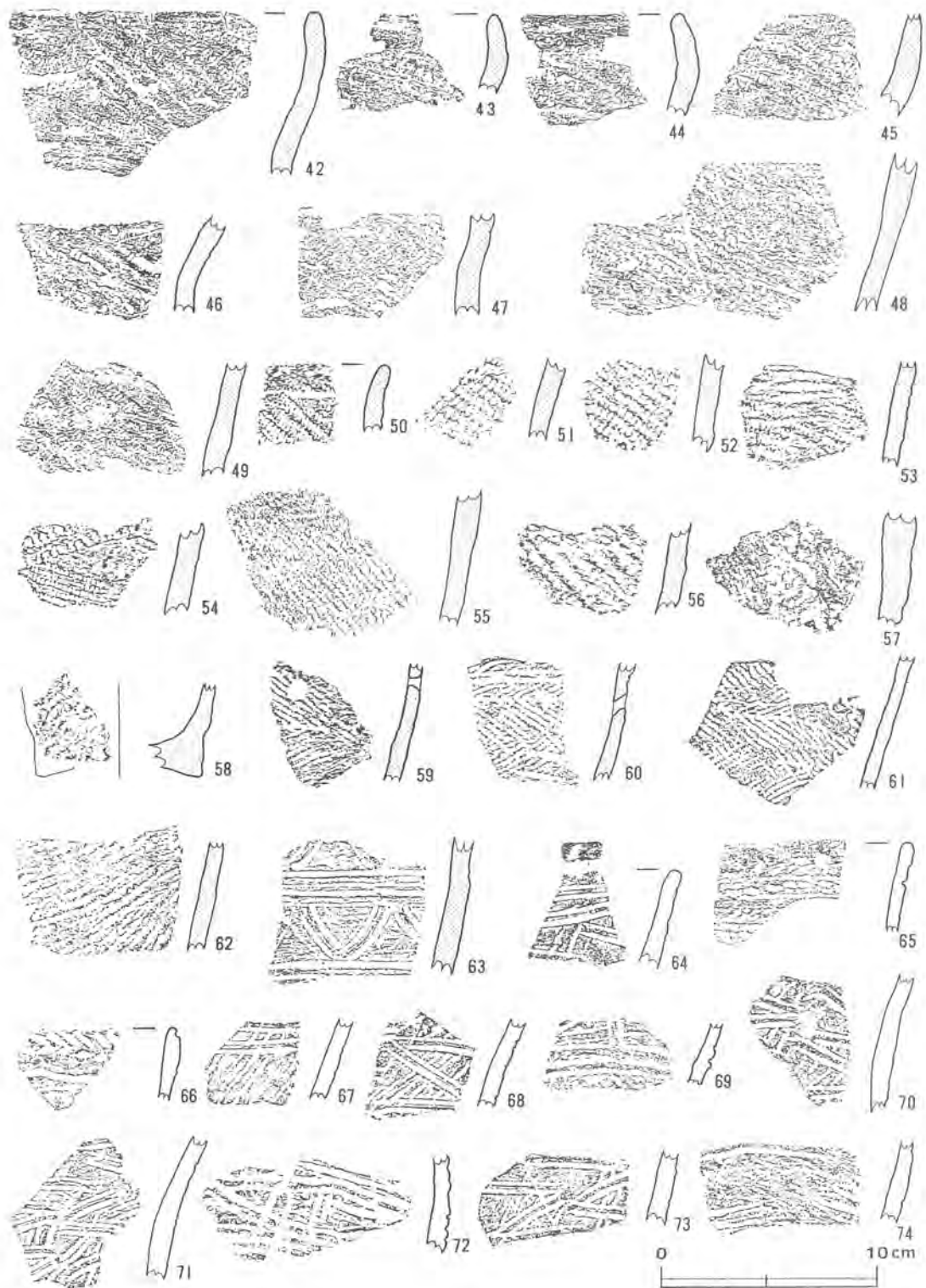


第241图 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影图(1)

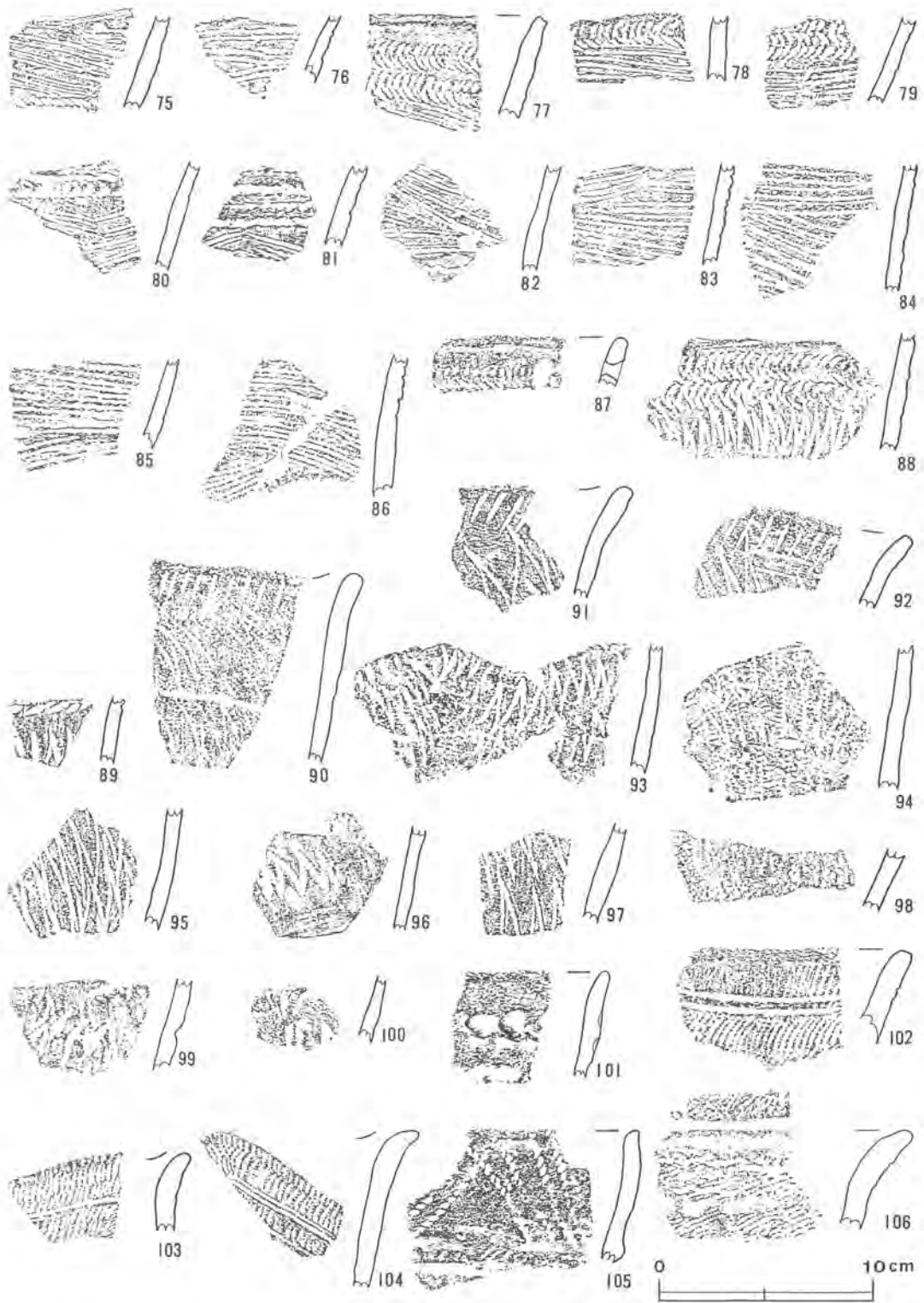


第242図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(2)

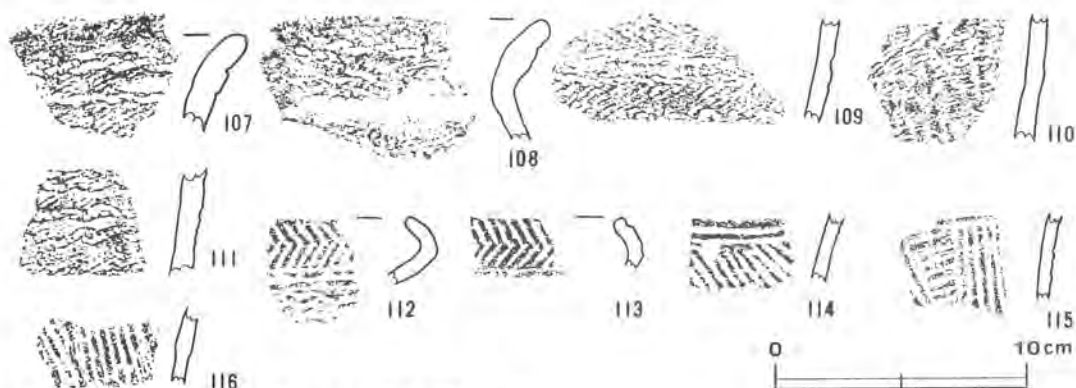
貝殻条痕文の施される土器であり、繊維が多量に混入されている。32は口縁部片で突起を持ち「ボタン」状の貼付けがなされている。33は口唇部にヘラ状工具によるキザミ目が施され、口縁部にも同施文具による沈線が斜位に施されている。21～30は鶴ヶ島台式土器に、31～41は広義の茅山式土器に比定される。



第243図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3)



第244图 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影图(4)



第245図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(5)

第2群 縄文時代前期の土器

第1類 羽状縄文系土器 (第243図42~63)

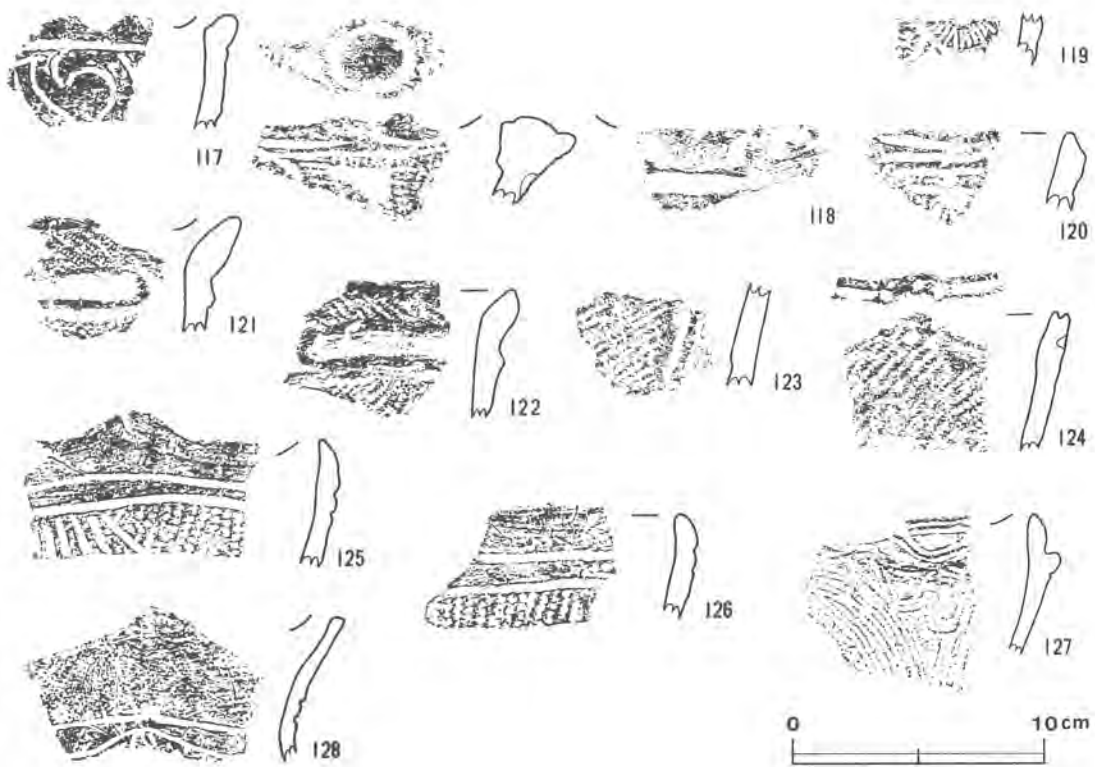
42~49は同一個体と思われ、口縁部は内彎し立ちあがっている。外面にはやや間隔のある捺糸文が全面に施されている。50~58は単節縄文が施されているものである。50は口縁部片で、口縁に沿って沈線が施されており、口縁部は僅かに外反している。54・55の縄文は羽状構成をとっている。58は底部片で上げ底を呈している。59~62は無節縄文が施されるものである。59・60には補修孔が見られる。59~61の縄文は羽状構成をとっている。63は半截竹管により、平行沈線文と山形文が施されている。本類はいずれも胎土中に繊維を多量に含み、黒浜式に比定される。

第2類 貝殻沈線文系土器 (第243・244図64~104)

64~76は地文に捺糸文が施され、その上に半截竹管により平行沈線文が施されるものである。64~66は口縁部片で、64は波状口縁、65・66は平縁であり、外傾して立ち上がっている。77~80は爪形文と平行沈線が施されるものであり、82~86は平行沈線文が密に施され、条痕文状となっている。87~89は口縁に沿って爪形文が施され、その下に波状貝殻文が施されているものである。90~92は同一個体と思われ、緩やかな波状口縁を呈し、口縁に沿ってヘラ状工具によるキザミ目が荒く施され、その下に波状貝殻文が施されている。93~100は波状貝殻文が施されているものである。101は輪積み痕を文様化した凹凸文がみられる。102~104は波状口縁を呈し、口縁に沿って貝殻腹縁によるキザミ目が施されている。64~76は浮島Ⅰ式に、77~89浮島Ⅱ式に比定される。90~100の貝殻波状が施される土器は浮島Ⅱ・Ⅲ式、興津式に継続してみられ、破片だけでは詳細な型式は断定できない。102~104の貝殻腹縁によるキザミ目が施されている土器は興津式に比定される。

第3類 縄文原体圧痕文及び結節文が施されている土器 (第244・245図105~111)

105は波状口縁を呈する口縁部片であり、頸部との境界に隆起線が貼られ、口縁部には縄文原体圧痕文が施される。106~111は横位の結節文が施されているものである。106~108は口縁部片で、口縁は外反し、口縁直下に2条の結節文が施され、それ以下には単節縄文が施されている。105は



第246図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6)

前期末葉の粟島台式に比定される。106～111の結節文の施される土器は前期後葉から中期初頭頃まで粗製土器の主流をなすものであり、詳細な型式は断定できない。

第4類 細沈線による文様が施されている土器 (第245図112～116)

112・113は大きく内彎する口縁部片であり、口縁部には細沈線により矢羽根状の文様が施されている。114～116は細沈線が縦位・斜位に施されている胴部片である。本類は前期末葉の十三菩提式に比定される。

第3群 縄文時代中期の土器

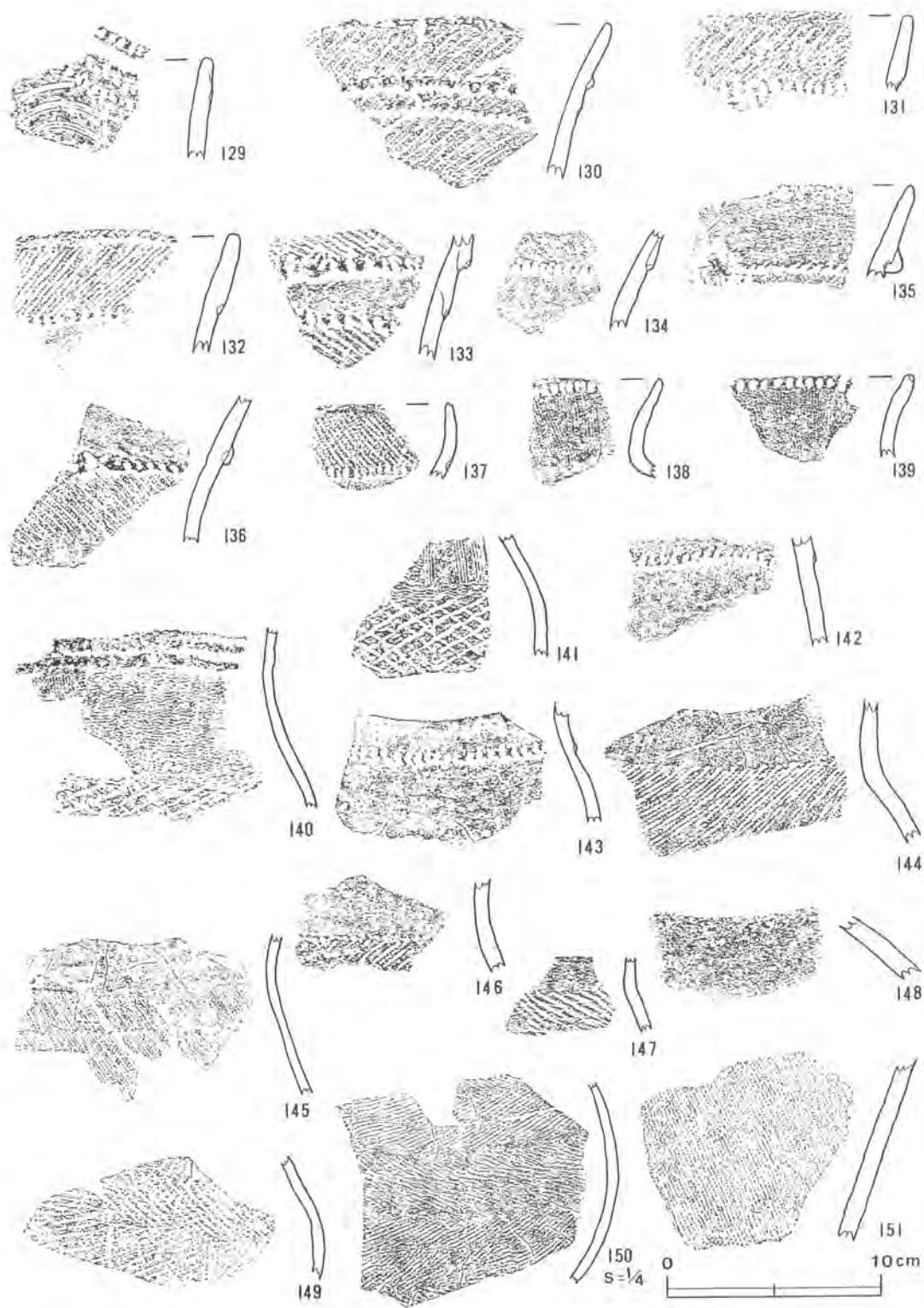
第1類 沈線文が施されている土器 (第246図117)

117は2個1組の突起を持つ口縁部片であり、口縁部に渦状の沈線文が施されている。東北系の土器で中期初頭のものと思われる。

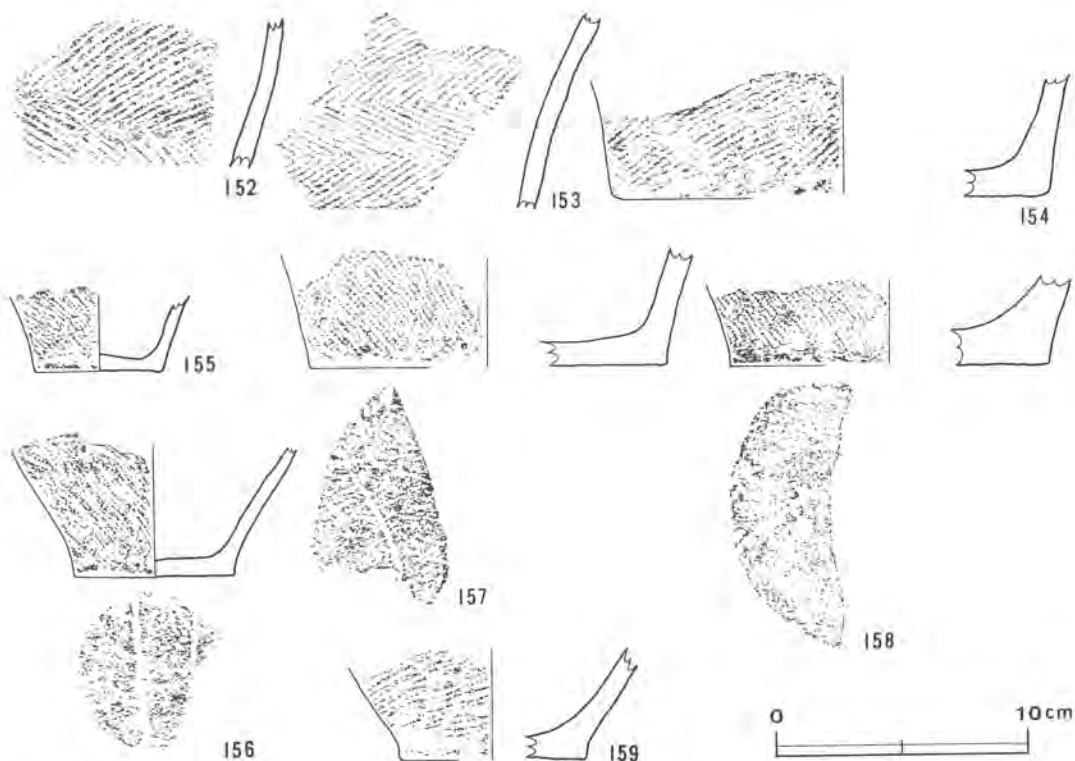
第2類 集合沈線文及び彫刻手法を持つ土器 (第246図118・119)

118は口縁部片であり、沈線により文様を区画し、三角形の彫刻文や集合沈線によるキザミ目が施されている。口唇部は肥厚し、楕円形の文様が描出され、三角形の彫刻文とキザミ目が伴っている。

第3類 隆起線が貼られている土器 (第246図120～123)



第247図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(7)



第248図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(8)

120は口縁に沿って沈線文が施されている。121・122は口縁に沿って隆起線が貼られ、楕円形状に区画するものと思われる。123は胴部片であり、縦位に隆起線が貼られている。第2・3類は五領ヶ台式に比定される。

第4類 隆帯文と磨消縄文がみられる土器 本遺跡においては概当土器なし。

第4群 縄文時代後期の土器

第1類 沈線文を主体とする土器 (第246図124~127)

124は単節縄文を地文とし、波状口縁を呈する。突起の部分に小孔が穿たれている。口唇部には沈線が伴う。125・126は同一個体であり、口縁は小波状を呈する。口縁部を無文帯とし、2本の沈線が周回している。胴部は縄文を沈線文とし、縦位・斜位の沈線文が施されている。127は半截竹管により、曲線文が施され、口唇部にも同施文具により文様が施されている。本類は堀之内I式に比定される。

第2類 磨消縄文がみられる土器 (第246図128)

128は波状口縁を呈し、口縁部には単節縄文が施されている。頸部には沈線により弧状の区画がなされ、沈線間の縄文は磨消されている。加曾利B式に比定される。

第5群 弥生時代中期の土器 本遺跡においては概当土器なし。

第6群 弥生時代後期の土器

第1類 櫛描文の施されている土器 (第247図129)

129は外反して立ち上がる口縁部片であり、口縁部にキザミ目が施されている。口縁は波状を呈し、口縁に沿って2条刺突文が施されている。口縁部の文様は3本櫛歯により縦区画がなされ、連弧文によって充填している。後期前葉のものと思われる。

第2類 複合口縁を呈する土器 (第247図130～137)

130～134は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されているものである。133は2段の複合口縁で2段目は無文である。130には口縁下に密に、133は2個1組の瘤が貼られている。132・134は頸部を無文帯としている。135・136は無文の複合口縁を呈し、瘤が貼られている。137は内彎して立ち上がっている鉢形土器の口縁部片と思われる。

第3類 ハケ目調整されている土器 (第247図138・139)

138・139は口縁にキザミ目が施され、外面は縦位にハケ目調整されているものである。

第4類 縦区画充填波状文が施されている土器 (第247図140・141)

140・141は頸部に縦区画充填波状文が施されており、櫛歯数は4本である。胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。

第5類 キザミ目の施されている段を持つ土器 (第247図142・143)

142・143は頸部下位にキザミ目が施される甕形土器の頸部から胴部にかけての破片である。赤褐色を呈し、他の土器と色調が異なる。

第6類 頸部下半を無文帯とする土器 (第247図144～147)

いずれも頸部下半を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第7類 結節文による区画を持つ土器 (第247図148)

148は胴部上位の破片であり、結節文により無文部と区画している。

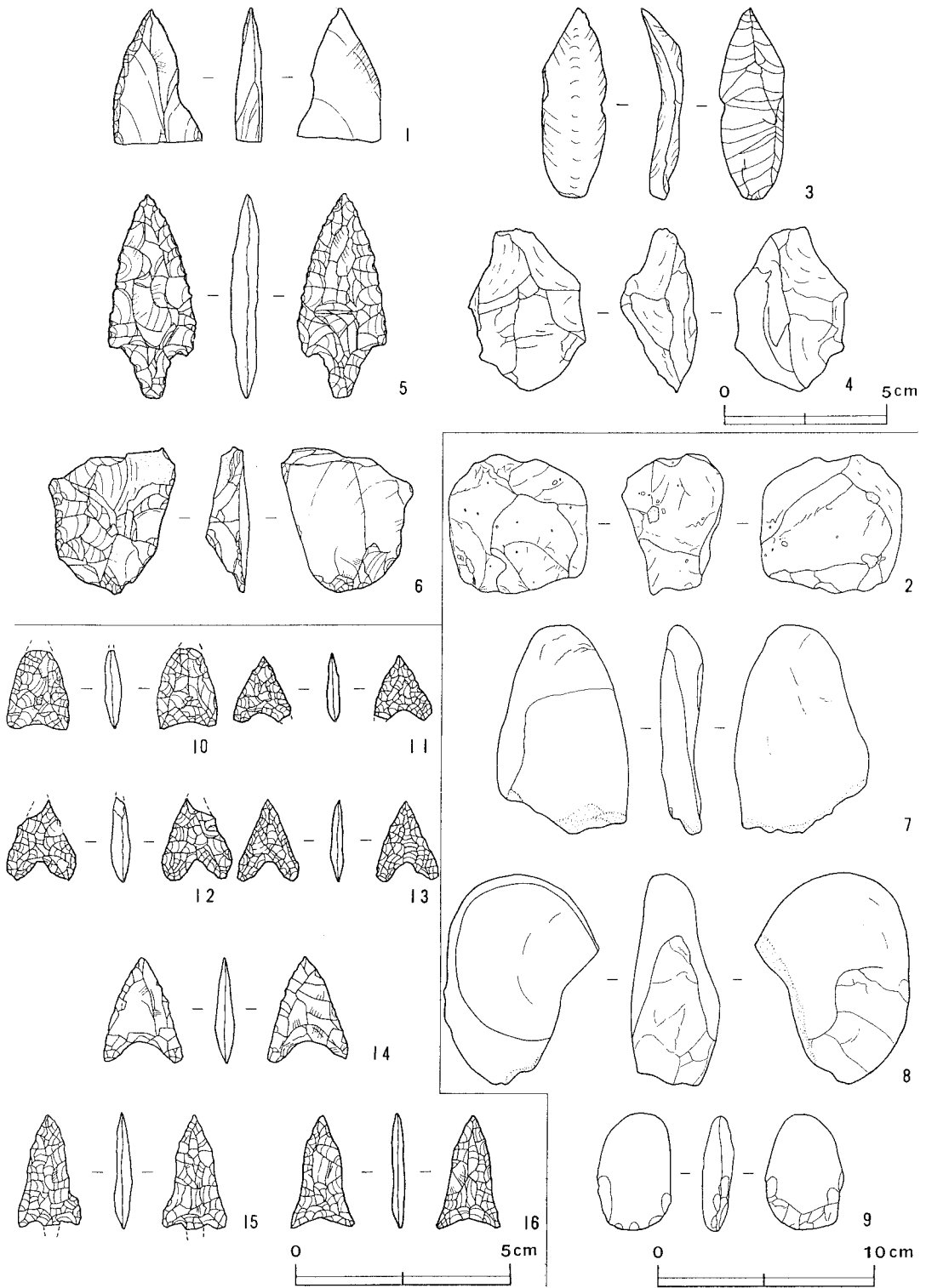
第8類 縄文が施されている土器 (第247・248図149～153)

149から153は縄文が施されている胴部片である。151以外には羽状構成がみられる。150は附加条1種(附加2条)と直前段反撚りによる羽状構成である。その他の土器の縄文原体は附加条1種(附加2条)である。

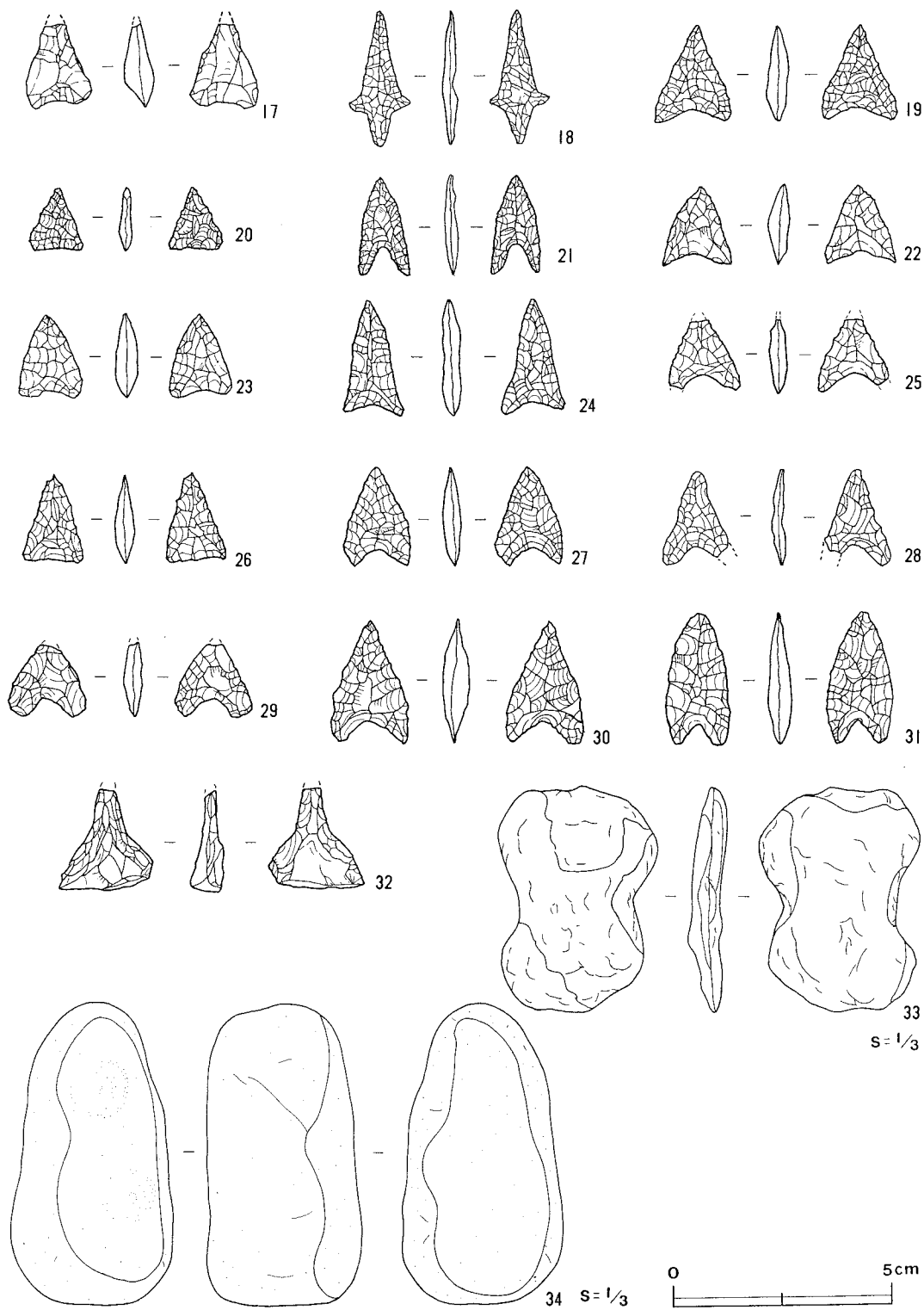
第9類 底部片を一括する (第248図154～159)

154～159は平底を呈し、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。156～158の底面には木葉痕を持つ。

第2類から第9類は後期後葉から末葉に位置付けがなされる土器群である。第2・6・8・9類は土浦周辺の在地土器であり、第3・5・6類は東京湾沿岸地域に分布の中心をみる南関東系土器、第4類は茨城県中央部から北部に分布の中心をみる十王台式土器である。



第249図 遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(1)



第250図 遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(2)



第251図 遺物包含層・遺構外出土石製品実測図(3)

遺物包含層・遺構外出土石製品一覧表

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第249図	1 ナイフ形石器	3.2	2.1	0.7	2.8	頁岩	SI 95	Q116
	2 石核	6.7	7.0	4.8	287.6	安山岩	C3c ₀	Q117
	3 剝片	6.0	2.0	1.4	8.2	頁岩	B4b ₆	Q119
	4 剝片	5.1	3.6	2.4	33.1	安山岩	C3g ₇	Q 88
	5 有舌尖頭器	4.8	2.1	0.6	5.0	流紋岩	C4c ₄	Q100
	6 搔器	(3.4)	(3.1)	1.1	(9.3)	チャート	C3b ₆	Q 81
	7 礫器	9.7	6.3	2.0	140.5	流紋岩	C3g ₇	Q 86
	8 礫器	10.1	7.4	4.4	313.3	硬砂岩	C4e ₂	Q 91
	9 礫器	5.5	3.6	1.5	42.1	フォルンフェルス	SI 44	Q108
	10 石鏃	(1.8)	1.4	0.4	(1.1)	チャート	C3e ₇	Q 82
	11 石鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	チャート	C3g ₈	Q 92
	12 石鏃	(1.9)	1.6	0.5	(0.8)	黒曜石	C3e ₀	Q 93
	13 石鏃	2.0	1.4	0.3	0.4	黒曜石	C3f ₀	Q 94
	14 石鏃	2.5	1.9	0.5	1.1	安山岩	C3g ₇	Q 95
	15 石鏃	(2.8)	1.5	0.4	(1.0)	チャート	C3g ₈	Q 96
	16 石鏃	2.7	1.5	0.3	0.8	チャート	C4e ₁	Q 97
第250図	17 石鏃	(1.9)	1.5	0.7	(1.2)	安山岩	C3区	Q 98
	18 石鏃	3.2	1.4	0.3	0.7	チャート	C4c ₁	Q 99
	19 石鏃	2.2	1.8	0.5	0.9	チャート	C4c ₅	Q101
	20 石鏃	1.4	1.3	0.3	0.4	黒曜石	C4c ₆	Q102
	21 石鏃	2.3	1.2	0.3	0.5	チャート	C4c ₈	Q103
	22 石鏃	1.8	1.6	0.5	0.9	安山岩	C3f ₇	Q105
	23 石鏃	1.9	1.5	0.5	1.0	流紋岩	C4f ₁	Q107
	24 石鏃	2.7	1.5	0.5	1.2	チャート	SI 45	Q109
	25 石鏃	(1.7)	(1.6)	0.3	(0.8)	頁岩	SI 88	Q115
	26 石鏃	2.0	1.4	0.4	1.0	チャート	B2j ₀	Q118
	27 石鏃	2.4	1.5	0.4	0.8	黒曜石	表採	Q122
	28 石鏃	2.2	(1.7)	0.3	(0.6)	頁岩	表採	Q124
	29 石鏃	(1.7)	1.8	0.4	(1.0)	チャート	H5b ₈	Q125
	30 石鏃	2.9	1.8	0.6	2.0	黒曜石	表採	Q132
	31 石鏃	3.1	1.5	0.5	2.0	チャート	B地区表採	Q133
	32 石錐	(2.3)	(2.2)	0.7	(3.2)	安山岩	C3b ₆	Q106
33 分銅型打製石斧	10.5	7.5	1.7	142.3	粘板岩	SI 61	Q112	
34 凹石	14.1	7.6	7.3	899.2	花崗岩	SI 58	Q110	
第251図	35 凹石	11.6	9.6	5.3	725.1	安山岩	B3h ₃	Q129 敲石併用
	36 磨石	6.8	6.6	3.6	206.6	砂岩	C3g ₇	Q 85
	37 石皿	15.8	8.8	4.7	845.7	花崗岩	C3g ₈	Q 90 凹石と併用
	38 砥石	13.8	9.2	4.8	946.3	花崗岩	表採	Q111
	39 砥石	6.6	3.9	2.0	76.1	凝灰岩	B4g ₅	Q120

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第251図 40	砥石	6.8	4.9	4.1	145.3	凝灰岩	表採	Q121
41	砥石	5.4	4.8	1.9	50.4	凝灰岩	表採	Q130
42	砥石	5.3	2.2	2.1	29.1	凝灰岩	表採	Q131
43	石製模造品	5.1	1.9	0.6	8.0	滑石	表採	Q134 剣形
44	管玉	7.4	1.6	1.6	29.6	凝灰石	表採	Q126 孔径4mm
45	管玉	2.4	0.6	0.6	1.1	滑石	C3b ₆	Q79 孔径3mm
46	管玉	2.3	0.7	0.6	1.4	滑石	C3b ₆	Q80 孔径3mm
47	管玉未製品	2.1	1.1	1.1	6.0	滑石	表採	Q123

遺物包含層・遺構外出土製品一覧表

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第251図 48	土錘	3.9	[3.8]	3.3	6.0	(33.3)	70	C4b ₁	DP81

第3節 考察

当遺跡から検出された遺構は、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡96軒、土坑124基、溝3条、方形周溝状遺構1基、火葬墓2基、炭焼窯10基である。本節においては、縄文時代については遺物包含層2か所が検出されているが、その他の遺構は検出されなかったため、土器区分からは省くこととする。弥生時代から古墳時代については、土器をⅠ～Ⅵ期に区分し、それをもとに遺物及び遺構について考察を試みる。

1 縄文時代

当遺跡からは、遺物包含層を中心に縄文式土器が出土している。遺物包含層出土遺物で注目したいのは底面近くから有舌尖頭器が出土し、その上層からは草創期の撚糸文系土器である井草式土器が、さらにその上層からは尖底で外面に整形痕がみられる土器が出土していることである。その地点から南側ではこの整形痕がみられる土器と早期の沈線文系土器である田戸下層式土器が共伴して出土している。このことから、有舌尖頭器→井草式→整形痕がみられる尖底土器・田戸下層式という、草創期から早期にかけての変遷が確かめられている。

その他、包含層では早期の条痕文系土器、前期の羽状縄文系土器、貝殻沈線文系土器、中期の集合沈線文及び彫刻手法を持つ土器、後期の磨消縄文を持つ土器などを層位的にとらえている。

2 弥生時代

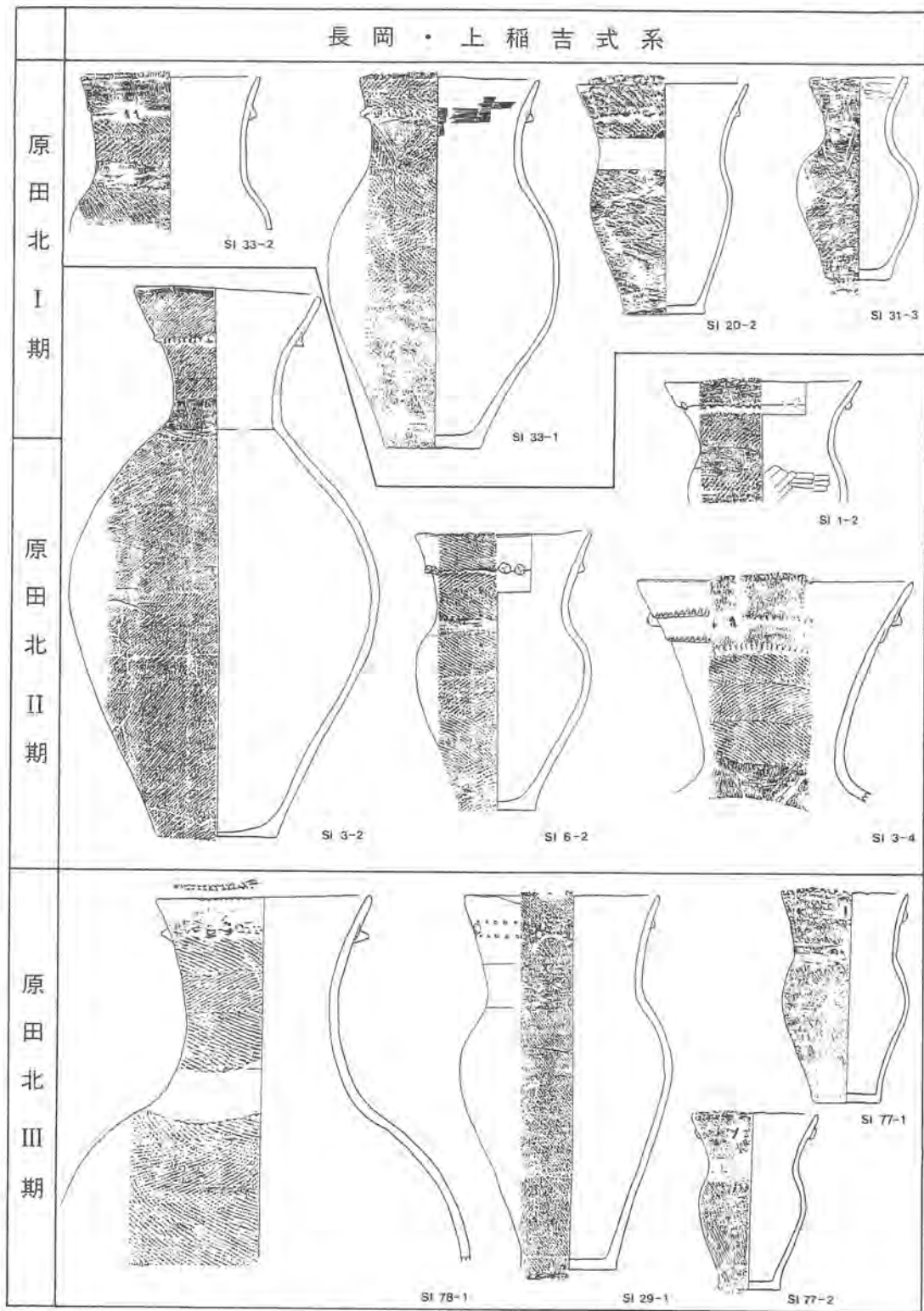
当遺跡から検出された弥生時代の遺構は、竪穴住居跡67軒、土坑2基であり、その他、遺物包含層2か所が検出されている。本項においては、出土した土器の形態や特徴から時期区分を行い、それをもとに住居跡の特徴を述べ、集落についても検討を加えていくこととする。

(1) 遺物について

当遺跡から出土した弥生式土器は、弥生時代後期後半という限られた時期のものである。東日本の地域別土器型式に従えば、附加条縄文が施される「関東東部型」に属する。当遺跡の位置する茨城県南部で「関東東部型」の範疇に入る土器型式は、長岡式土器と上稲吉式土器である。茨城県内で弥生時代後期の土器変遷が確実にとらえられているのは、那珂川下流域であり、長岡式土器の後期後葉、上稲吉式土器の後期末葉の位置付けは、那珂川下流域の土器群との伴出事例から導き出されている。当遺跡の弥生式土器には長岡式土器は含まれておらず、長岡式直後の型式未命名の土器群から上稲吉式土器までが主なものである。那珂川下流域の土器も出土しており、その変遷を参考に当遺跡の土器群の変遷を考えていくこととする。

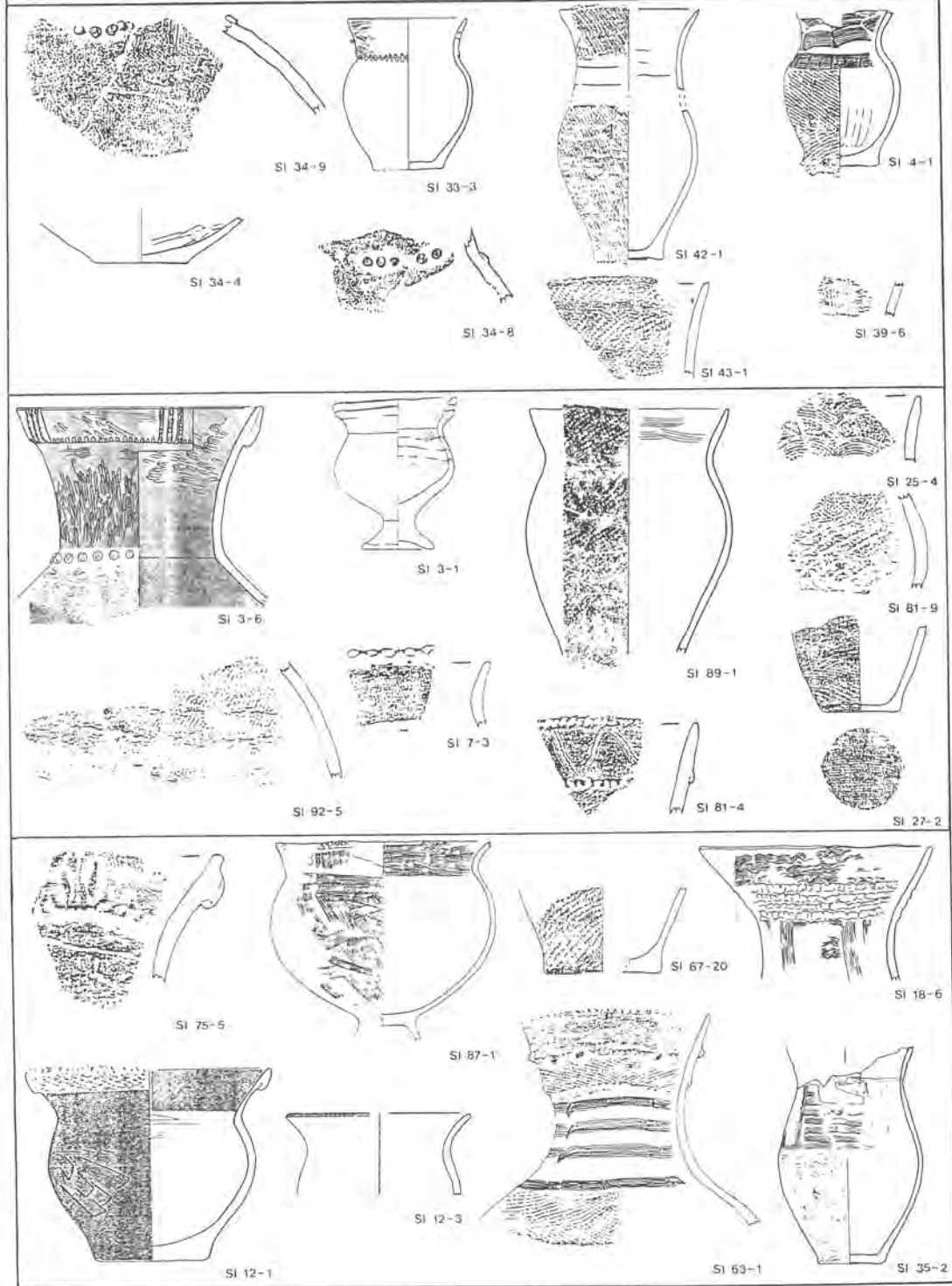
当遺跡の弥生時代住居67軒のうち、第15・59・96号住居跡については、住居跡の大部分が調査

長岡・上稲吉式系



第252図 原田北遺跡弥生式土器変遷図

異系統 (南関東系, 吉ヶ谷・赤井戸式系, 二軒屋式, 十王台式)



区外であることや、遺物が少ないことにより、時期決定が困難であったので、ここでは、時期決定できた64軒の住居跡について述べることにする。

原田北Ⅰ期

長岡式直後、上稲吉式直前のものであり、第4・20・22・31～34・37～40・42・43・47・50号住居跡の15軒が該当する。本時期の土器群は、縄文施文でやや厚めの複合口縁や口縁下端のキザミ目、第33号住居跡出土例にみられる山形文のような頸部を充填する効果が薄い櫛描文、頸部全体を無文帯とする土器などに長岡式土器の系譜を残している。長岡式土器に見られない新しい要素として、口縁下に貼瘤を持つものが出現してくること、口縁下端が指頭押圧される土器がみられなくなること、無文の複合口縁を呈する土器が比較的多くなってくること、千葉方面の影響と思われる外面無文土器が組成の一部に加わってくること、縄文が羽状構成をとるものが多くなってくることなどが挙げられる。貼瘤は2個1組のものが多い。鉢と高坏については、縄文施文の鉢や脚部が無文で小さめの高坏も存在するが、小片で量的にも少なく確実に組成の一つに入るとはいえない。その他、上稲吉式土器には2段以上の複合口縁を呈するものや、口縁部に2列以上の刺突文の施される土器が比較的多く出土しているが、本時期にはほとんどそのような土器は存在しないことも区別の1つとなると思われる。また、上稲吉式土器では大形の広口壺が組成に入ってくるが、この点についても本時期についてはその割合は少ないようである。

本時期の土器群と那珂川流域の土器群と対比すると長岡式系の櫛描文が施される土器が存在すること、貼瘤を持つ土器が出現すること、胴部の縄文が羽状構成をとるものが多くなるなど十王台式直前の土器である東茨城郡大洗町長峯遺跡例⁽¹⁾を標式とする長峯(新)⁽²⁾式との並行関係が考えられる。このことにより本時期は後期後葉(新)に位置付けられる。

本時期における他地域の土器としては、第4号住居跡から頸部に9本歯による連弧文が施され、⁽³⁾胴部と簾状文により区画している二軒屋式Ⅲ段階の土器が出土しているが、胴部縄文も細目の附加条1種(附加2条)であり、二軒屋式土器の特徴である。第33号住居跡からは外面無文で頸部中位に段を持ち縄文原体によるキザミ目が施される土器と第34号住居跡からは胴部上位に結節文と沈線による鋸歯状区画間に縄文が充填される土器が出土しており、所謂南関東系土器である。第43号住居跡出土のやや太目の単節縄文が施され、輪積み痕の見られる土器からは、埼玉西部から群馬南東部を中心に分布している吉ヶ谷・赤井戸式土器との関連が考えられる。

原田北Ⅱ期

上稲吉1(古)式のものであり、第1・3・5～9・24・25・27・36・56・62・72・73・80・81・89～92号住居跡の21軒が該当する。本時期の口縁の形態の特徴として、前時期からの流れである複合口縁が主流であるが、2段の複合口縁を呈し、1段目下に貼瘤を持つものが比較的多くなってくることがまず挙げられる。複合口縁が幅広になってくるのも本時期からで、口縁中位に

刺突文が施されたり、口縁部縄文が羽状構成をとるものも多くなっていくことも本時期になってからである。組成としては、壺形土器において、第3・6号住居跡出土例のように、棒状浮文・「ポタン」状貼付け文・網目状捺糸文など南関東的な手法を取り入れながら、形態的には胴部が球形を呈する南関東の壺形をとらず、なで肩でやや長胴ぎみの在地の形態をとる土器が大形の壺として加わる特徴がある。高坏もこの時期からは確実に組成の中に組み入れられているようであり、第72・73号住居跡に好例がある。脚部はやや小さめで、坏部は外傾して立ち上がり、外面に附加条1種（附加2条）の縄文が施されているものである。

本時期における茨城北部の土器としては、第27・81号住居跡から十王台式の破片が出土している。頸部と胴部を波状文で区画し、胴部には附加条2種（附加1条）が施されているものである。第81号住居跡からは口縁部に4本歯による山形文の施される土器も出土しており、茨城北部との交流の現れと思われる。上稲吉1（古）式と十王台1式との共伴は石岡市外山遺跡第56号住居跡⁽⁴⁾や大洗町髭釜遺跡第32号住居跡⁽⁵⁾などで確認されており、本時期は後期末葉（古）に位置付けられる。

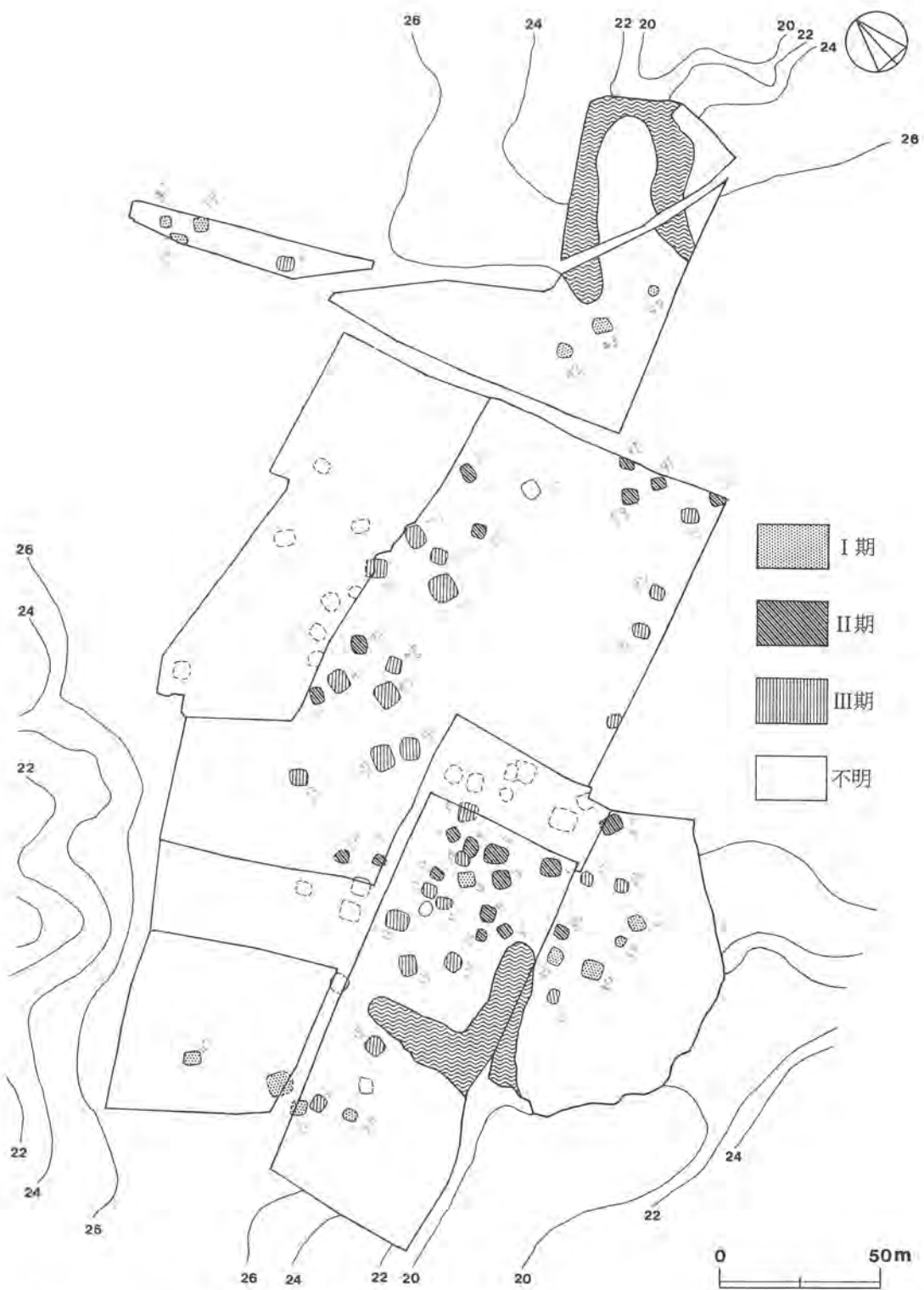
その他の地域の土器としては、第3号住居跡からは小形で無文の台付甕、棒状浮文を持ち赤彩されている壺、第6・24号住居跡からは肩部に「ポタン」状貼付け文を持つ土器、第8号住居跡からは結節文区画の縄文帯を持つ土器、第7・9号住居跡からは無文の甕が出土しており、以前として南関東との交流が盛んであったことが窺える。第25号住居跡の多条櫛描文による連弧文の施されている土器や第73号住居跡の胴部に縄文の施されている台付甕などからは、二軒屋式土器との、第89号住居跡の単口縁を呈し太目の単節縄文が施されている土器からは、吉ヶ谷・赤井戸式土器との関連が考えられ、西・北関東との交流を知ることができる。

土器以外の遺物では、紡錘車が多量に出土していることを注目したい。南関東系土器が出土している第3号住居跡からは5個、第72号住居跡からは4個、第5・89号住居跡からは3個の出土をみている。

本遺跡で各地域からの土器が出土しているのは、各地域との交流がなされていたことを証明し、多量の紡錘車の出土は織物が重要な交易物の一つとなっていたことによるものと思われる。

原田北Ⅲ期

上稲吉1（新）式のものであり、第11～14、16・18・21・23・26・29・30・35・41・63・67・68・70・71・75～79・82・84・86・87・93号住居跡の28軒が該当する。本時期の特徴として、口縁の単口縁化をまず第一に挙げることができる。前時期に比較的多く見られた2段の複合口縁は非常に少なくなり、単口縁化に伴い口縁下端の刺突だけが残り、横位2列の刺突文となっているものである。多くの場合、刺突文間に貼瘤を持つ。第11・13・21・29・41・63・67・68・70・75・76・78・79・86号住居跡例がそれである。第二に、広口壺、甕の無文化が挙げられる。第12・14・16号住居跡からは、外面無文の広口壺、外面無文で口唇部にキザミ目が施されている甕が出土し



第253図 原田北遺跡弥生時代時期別住居跡配置図

ている。赤彩されている広口壺にも網目状捺糸文が施されており、南関東系土器そのものか強い影響によるものと思われる。その他、貼瘤を持つ高坏、口縁部が内彎する鉢が組成に加わっている。

本時期における茨城北部の土器としては、第13・18・35・63・71・79号住居跡から十王台式土器が出土している。これらの十王台式土器は押圧隆起線が高まりを持たず、充填波状文がかなり密に施されている。『日本先史土器図譜』⁽⁶⁾の十王台式土器では、鹿島郡銚田町紅葉出土例と同時期のものと考えることができ、十王台1（新）式としているものである。これにより、本時期は後期末葉（新）に位置付けられる。

他地域の土器では、南関東系のものとして、胴部上位に網目状捺糸文や結節文区画による縄文帯を持つ壺形土器、口唇部にキザミ目が施されていたり、交互押圧による小波状を呈する甕形土器などが第12・14・16・75・78・79・86・87号住居跡から出土している。特に、第87号住居跡から出土した台付甕は本時期と南関東系土器の並行関係を知る上で、重要なものと思われる。二軒屋式土器は第63号住居跡例に好例がある。2段の複合口縁を呈し、1段目を無文帯とし、2段目の縄文は縦回転の羽状構成を取っている。頸部に大振りな連弧文が3段にわたり施され、胴部とは簾状文によって区画しているものである。第63号住居跡からは、単口縁化した上稲吉式や充填波状文が密に施されている十王台式の破片が出土しており、本時期に位置付けられる。大振りな連弧文が施される土器と上稲吉式土器との並行関係は石岡市外山遺跡、栃木県南河内町朝日観音遺跡⁽⁷⁾、同町三王山南塚2号墳周溝出土土器⁽⁸⁾などによって知ることができる。二軒屋式IV段階（新）のものである。

土器以外の遺物では、第14号住居跡から出土した鉄剣が注目される。茨城県内では弥生時代の鉄剣の出土例はないが、千葉・栃木・群馬などでは出土例が知られている。特に、群馬県渋川市有馬遺跡⁽⁹⁾においては、7基の礫床墓から7例出土している。この時期に北関東にもある程度、鉄器が普及していたことを証明する事例である。当遺跡において第14号住居跡例の鉄剣のほか鉄製品の出土は第73号住居跡から刀子が出土しているだけであるが、斧や刃物として使用したと考えられる石製品はごく少量出土しているだけであり、当遺跡においても砥石の存在から、ある程度の鉄製品が普及していたと思われる。

(2) 弥生式土器と土師器の混在について

当遺跡の弥生時代の住居跡から土師器片が少なからず出土している例がある。当遺跡は弥生時代と古墳時代の複合遺跡であり、特に古墳時代中期の集落が検出されている西部でそれが目立つ。弥生時代の住居跡のなかで、実測可能な古墳時代の土師器が出土した住居跡は17軒存在する。そのうち、古墳時代中期の土師器が出土したのは、第22・39・40・50・62・71・79・80・90号住居跡の9軒である。これらの住居跡においては、弥生式土器が床面及び覆土下層から、土師器がそ

の上層から出土しており、弥生式土器と土師器が層位別にとらえられており、共伴していない。このことから、古墳時代中期においても弥生時代終末期の住居跡は、完全には埋まっておらず、ある程度の窪みがあったことが予想される。茨城県内でも大洗町ヨナ川遺跡⁽¹⁰⁾、竜ヶ崎市尾坪台遺跡⁽¹¹⁾などにおいて、同様の事例が報告されている。

それでは、住居跡の床面や覆土中から古墳時代前期の土師器を出土した第13・18・21・29・37・47号住居跡例について考えてみたい。第29・37・47号住居跡においては、床面から弥生式土器片及び小片が出土している。土師器はそれより上層から出土しており、近くに古墳時代前期の住居跡が存在することからして住居廃絶後の流れ込みの可能性が高い。第13・18・21号住居跡においては、かなりの数の弥生式土器片と土師器片が床面から覆土にかけて混在した状態で出土している。弥生式土器と土師器を覆土の層位ごとにとらえることは困難であり、弥生式土器と土師器がほぼ同時期に投棄された可能性がある。しかし、第13・18・21号住居跡出土の土師器の完存率はさほど高くなく、壺などの器種もそろっていないことから、編年的位置付けが困難である。そのため、共伴かどうかは土師器の編年的位置付けが確定してから再検討したい。

第9・78号住居跡出土の土師器と考えた土器については、これらの住居跡からは、図示した土師器以外、土師器は1片も出土していないことからして、それらの住居跡に伴った遺物と考えられる。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての外来系土器と思われる。第78号住居跡出土の台付甕の脚部と胴部下位を再利用したと思われる器台は類例がなく、詳しい系統は不明であるが、弥生後期後半における台付甕の分布圏が東京・埼玉東部・千葉西部を中心とする地域に分布の中心をみることから、その地域から持ち込まれたものと考えられる。

(3) 住居形態と集落構成について

当遺跡においては1軒の大形住居を中心とし、その他は中形・小形の住居からなる4～6軒の住居群がいくつか存在する。このような弥生時代における住居のまとまりを近藤義郎氏は「単位集団」⁽¹²⁾、都出比呂志氏は「世帯共同体」⁽¹³⁾としている。都出氏の「世帯共同体」は「家長世帯を核とし、その兄弟や父母の世帯を合わせた複合家族である可能性が高い」とされる。当遺跡における4～6軒の住居群はその概念に近いものと考えられるので、本項ではそれらの住居群を「世帯共同体」とし、「世帯共同体」がいくつか連携し、耕地開発や土木工事などを協業する段階を「農業共同体」として解説する。

原田北Ⅰ期

本時期で住居の形態について、解説が可能な住居跡は攪乱部分の多かった第40号住居跡を除く14軒である。平面形については、隅丸長方形を呈するもの5軒、長方形を呈するもの4軒、隅丸方形を呈するもの4軒、方形を呈するもの1軒である。前時期の長岡式期における住居の平面形

は隅丸長方形を基本とすることが、竜ヶ崎市長峰遺跡⁽¹⁴⁾や稲敷郡江戸崎町大日山遺跡⁽¹⁵⁾などで確かめられている。本時期の住居の平面形も隅丸長方形を基本とするとしてよいと思われる。

炉の位置は、第33号住居跡では長軸線上の中央から北寄りで、しかも北側支柱穴の中間にあるが、第22・32・39・42・43号住居跡では中央からやや北寄りであるが、北側支柱穴よりは南である。大日山遺跡の長岡式期の6軒の住居跡の炉の位置は、ほぼ中央の位置かやや北寄りであり、北側の支柱穴間に存在するものはないから、北側支柱穴の中間に位置する炉は長岡式期より新しい形態ということが言えよう。

住居の規模は、床面積30㎡以上2軒、20～30㎡7軒、20㎡以下5軒で、平均は22.62㎡である。大日山遺跡では床面積30㎡以上1軒、20～30㎡3軒、20㎡以下2軒で平均25.08㎡である。本時期と大日山遺跡における住居規模の割合は非常に似ている。柱穴の状況は、4本柱を基本としているが、小形の住居である第20・37号住居跡は3本柱の可能性はある。

本時期の集落は、北部の第37～39号住居跡のグループ、東部の第40・42・43号住居跡のグループ、南部の第4・31～34号住居跡のグループ、西部の第20・22・47・50号住居跡のグループの4つのグループからなる。これらのグループは前述の「世帯共同体」と考えられるもので、当遺跡の縁辺部に、50～400mほどの距離を持って存在している。南側の「世帯共同体」では第34号住居跡、西側の「世帯共同体」では第50号住居跡が床面積30㎡以上の大形住居跡であり、その住居を中心に「世帯共同体」が構成されている。これらの「世帯共同体」が耕作を行う単位と思われる。本時期の「世帯共同体」は台地に広く分散して存在し、「世帯共同体」間で大規模開発を行い協業するという「農業共同体」の段階には達していないものと思われる。

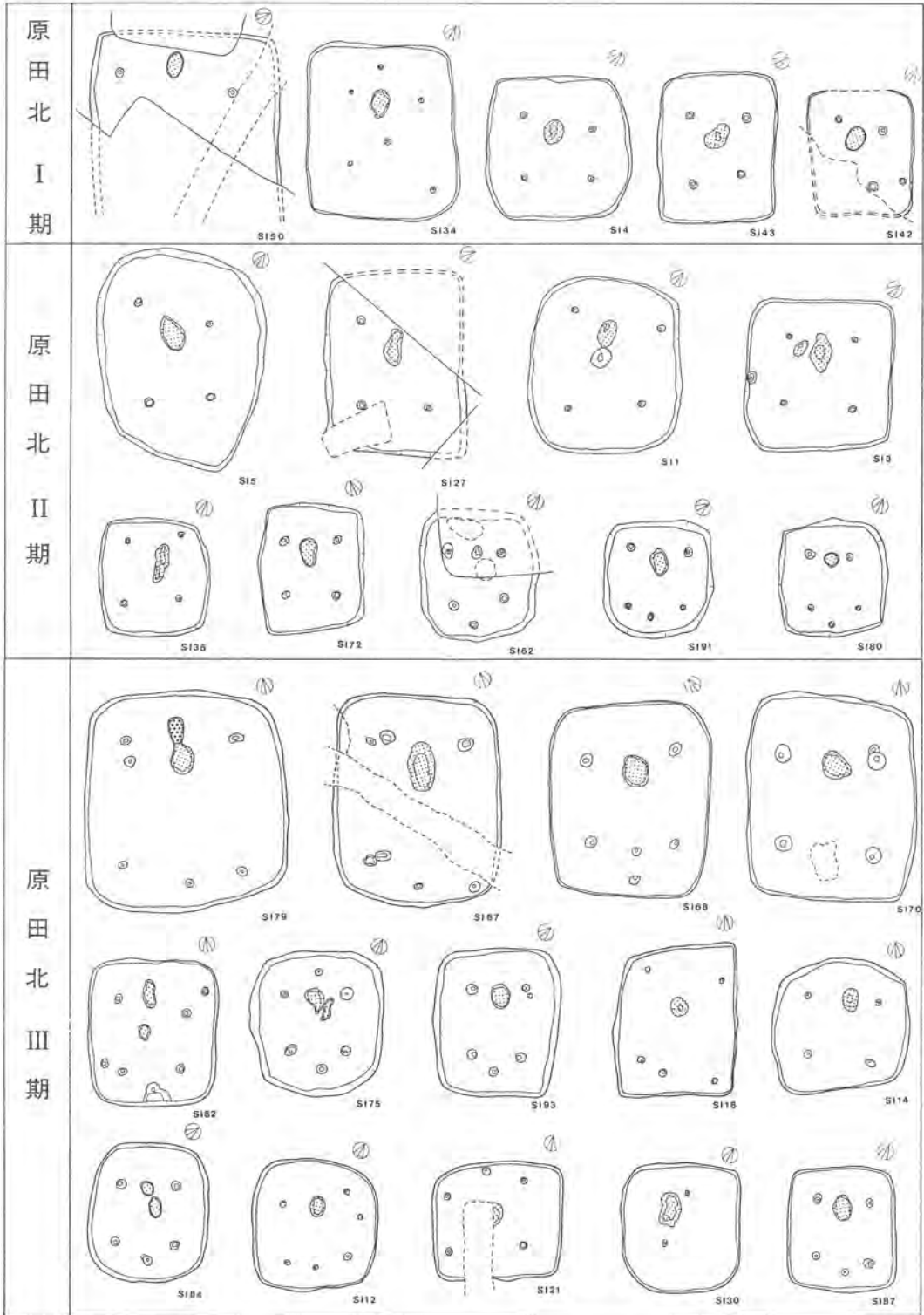
原田北II期

本時期の住居跡で形態・規模などが明確で検討可能な住居跡は、21軒である。平面形については、隅丸長方形6軒、不整長方形3軒、長方形2軒、隅丸方形7軒、不整隅丸方形1軒、方形2軒である。前時期にくらべて方形を呈する住居が増えていることを指摘できる。

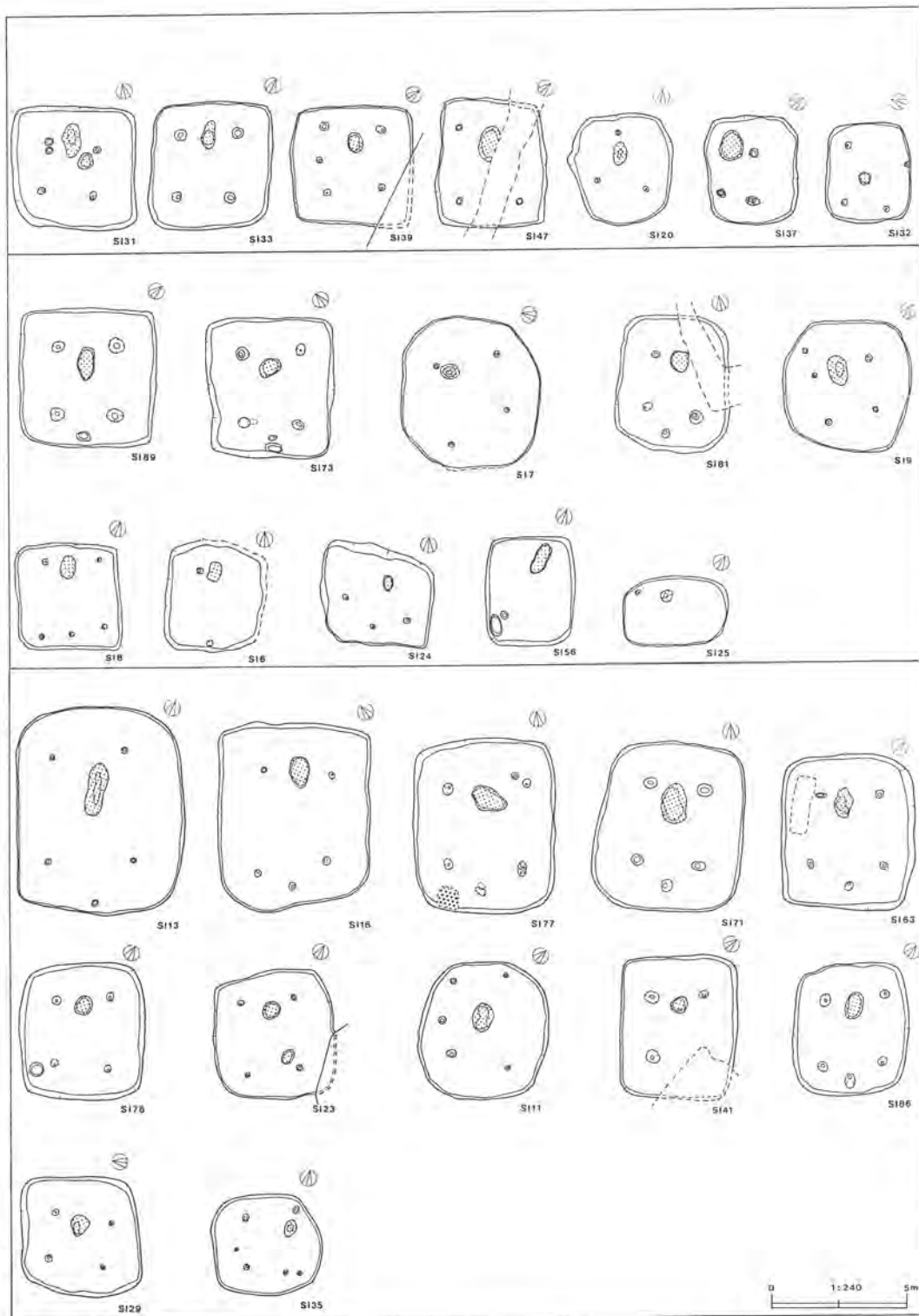
炉の位置は、中央からやや北寄りのもの7軒、中央から北寄り以北側支柱穴の中間の位置にあるもの10軒、北寄りに位置するが柱穴間ではないもの4軒である。前時期よりさらに、炉が北寄りになってきており、北側支柱穴間に炉を持つものが定着化しつつある段階である。

住居の規模は、床面積40㎡以上1軒、30～40㎡1軒、20～30㎡8軒、20㎡以下11軒である。前時期より大形の住居も存在しているが、20㎡以下の割合も増えている。平均は20.70㎡である。柱穴の状況はやはり4本柱を基本とし、長軸線上の中央から南寄りに出入口施設に伴うピットを持つものが多くなってきている。小形の第6・24・25・56号住居跡の柱穴は、1～3か所だけの確認であり、中形以上のものと構造は異なるものと思われる。

本時期の集落は、前時期同様4つのグループからなっている。しかし、中央からやや南の第1・



第254図 原田北遺跡弥生時代住居跡一覽図



3・5～9・24・25号住居跡のグループは9軒からなり、2つの「世帯共同体」が一緒になったものと考えられる。中心的位置をしめる第5号住居跡は48.35㎡あり、前時期の大形住居よりさらに大形となっている。「世帯共同体」と「世帯共同体」が連携し、「農業共同体」へと発展していく過程のものと思われる。「世帯共同体」ごとの長軸方向を見ると、中央からやや北寄りの第72・73号のグループの長軸方向は北からやや東を向き、第89～92号住居跡のグループの長軸方向は、北から西向きと「世帯共同体」ごとに長軸が異なっている。第89～92号住居跡以外のグループは出入口が、当遺跡と原田西遺跡の間に存在する小支谷の方を向いているのに対し、第89～92号住居跡のグループの出入口は台地の中央部を向いている。台地中央部は畑としていたことが予想され、第89～92号住居跡のグループは畑作を中心として生活していたとも考えられる。

原田北Ⅲ期

本時期の住居跡で形態・規模などが明確で検討可能な住居跡は、古墳時代中期の住居跡に大部分を掘り込まれている第26号住居跡を除く27軒である。平面形は隅丸長方形16軒、不整長方形1軒、隅丸方形9軒、不整形1軒である。以前として隅丸長方形が主流で平面形においては、長岡式の伝統を引き継いでいる。次に、隅丸方形が多い。

炉の位置は、中央から北寄りで北側支柱穴の中間に位置するもの21軒、北寄りに位置するが柱穴間でないもの1軒、中央からやや北寄りのもの5軒である。ほとんどの住居が北側支柱穴の中間に炉を持つことは、この時期の特徴となると思われる。住居の中央近くに炉を持つ第18・21号住居跡からは古墳時代前期の土師器が弥生式土器と混在して出土しており、当遺跡の古墳時代前期の住居跡は炉を短軸上のほぼ中央に持つことから、本時期が古墳時代により近い時期のものであることを証明するものと思われる。

住居の規模は、床面積50㎡以上1軒、40～50㎡4軒、30～40㎡4軒、20～30㎡15軒、20㎡以下3軒で平均は28.60㎡である。前時期より大形化していることを指摘できる。特に、第79号住居跡は59.30㎡の面積があり、30～50㎡の規模を持つ住居が8軒も存在することにも注目したい。柱穴の状況は大形・中形の住居とも4本柱を基本とし、ほとんどの住居において出入口施設に伴うと思われるピットが確認されている。

本時期の集落はさらに「世帯共同体」間の連携が進み、住居数も増大している。当地域の拠点集落となっていたことが窺える。当遺跡中央部から北東部にかけては大形住居跡が集中して存在している。59.30㎡の第79号住居跡を最大とし、40～50㎡の第67・68・70号住居跡である。このことは、それぞれの「世帯共同体」の中心となる家が遺跡の中央に集まり、「世帯共同体」が耕地開発などを協業して行うようになってきたからと思われる。「農業共同体」の成立である。その「農業共同体」の指導者が第79号住居跡の住人と予想される。しかし、生産の単位は一つの「世帯共同体」と思われ、本時期においても、4～6軒ぐらいを単位とする小集団は、中央部以外に4つ

のグループが考えられ、それぞれ長軸をほぼ同じ向きにとり、前時期と同じような住居規模の割合で存在しているのである。

注

- (1) 大洗町教育委員会 『茨城県大洗町長峯遺跡』 1973年
- (2) 鈴木正博 「髭釜」研究抄 『婆良岐考古4』 1982年
- (3) 鈴木正博 「十王台式」理解のために(1) 『常総台地7』 1976年
- (4) 茨城県教育財団 「外山遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第XIII集 1982年
- (5) 井上義安 『髭釜 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報』 1980年
- (6) 山内清男 『日本先史土器図譜』第1号 1939年
- (7) 南河内町教育委員会 『朝日観音遺跡』 1987年
- (8) 南河内町教育委員会 『三王山南塚2号墳発掘調査概報』 1990年
- (9) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「有馬遺跡II」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集 1990年
- (10) 茨城県教育財団 「ヨナ川遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第71集 1991年
- (11) 茨城県教育財団 「尾坪台遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第39集 1986年
- (12) 近藤義郎 「弥生文化論」 『講座日本歴史1 原始および古代1』 岩波書店 1962年
- (13) 都出比呂志 「農業共同体と首長権」 『講座日本史1』 東京大学出版会 1970年
- (14) 茨城県教育財団 「長峰遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第58集 1990年
- (15) 茨城県教育財団 「大日山古墳群」 茨城県教育財団文化財調査報告第65集 1991年

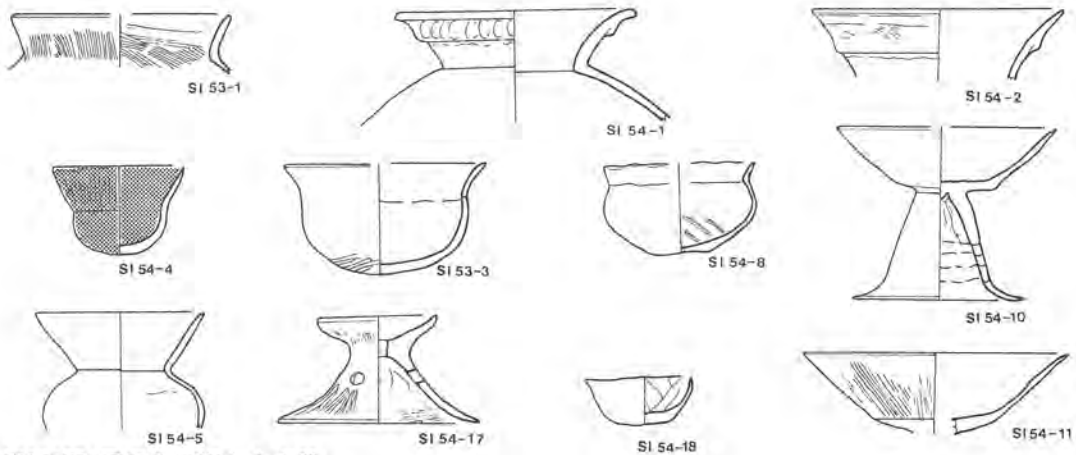
3 古墳時代

当調査区から検出された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡29軒である。南関東における古墳時代の土師器の型式学的編年にもとづき分類してみると、古墳時代前期(五領期)に比定される住居跡は3軒、古墳時代中期(和泉期)に比定される住居跡は26軒である。本文では、古墳時代前期を原田北IV期、古墳時代中期を2期に分け原田北V期、原田北VI期とし、若干の考察を加えるものである。なお、住居跡の規模を分類する上で、床面積が超大形住居跡は81㎡以上、大形住居跡は49㎡以上、中形住居跡は25㎡以上、小形住居跡は25㎡未満とした。

(1) 遺物について

原田北IV期(五領期)

本期は、第46・53・54号出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、壺、埴、鉢、



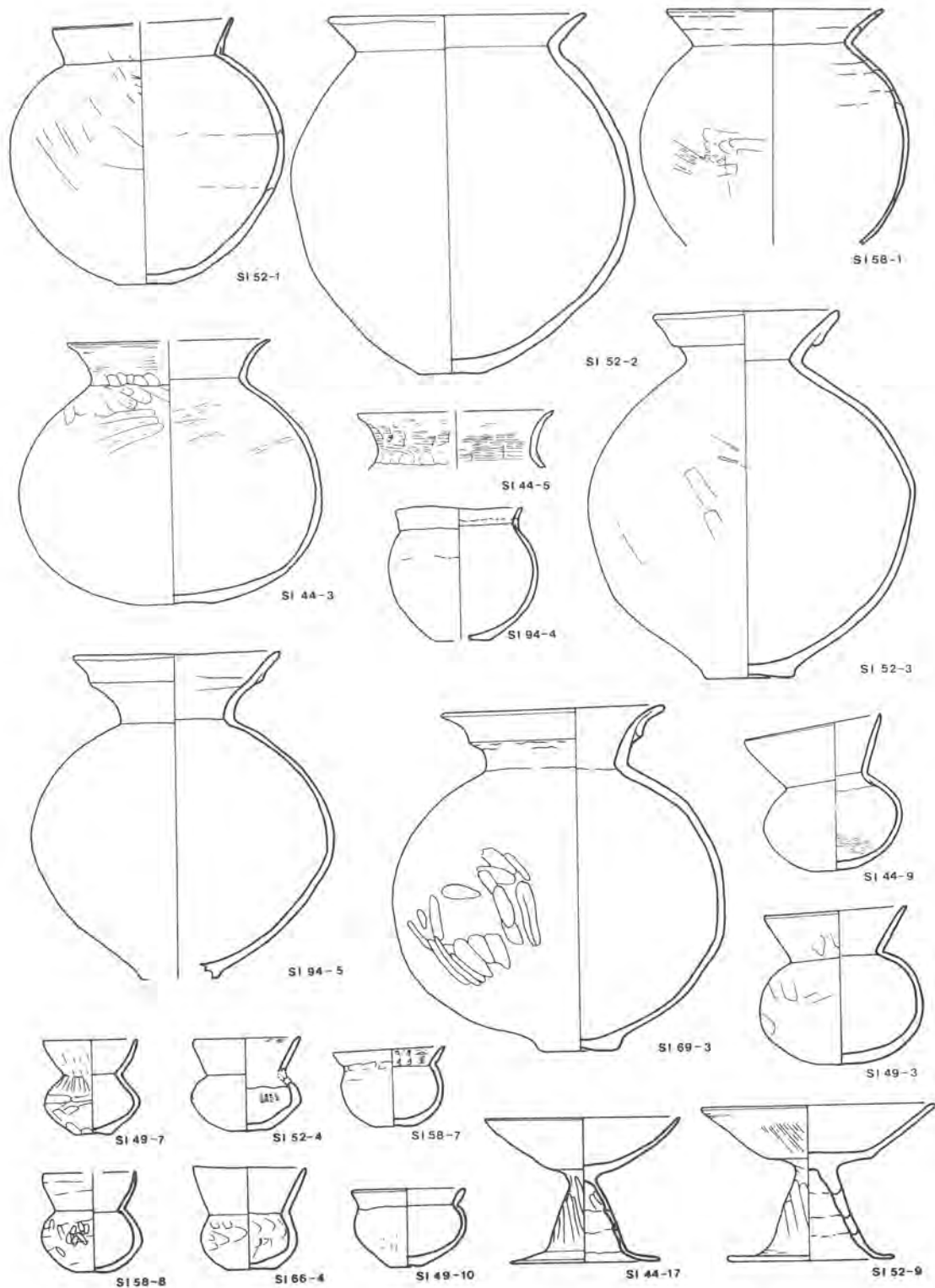
第255図 原田北IV期出土土器

高坏，器台，手捏土器である。甕は，胴中央部から口縁部にかけての破片と口縁部片である。胴部は内彎し，口縁部は外反しており，内・外面にハケ目整形が施されている。壺は，口縁部片で，複合口縁である。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部で外反する。外面はハケ目整形及びナデ調整が施されている。埴は，胴部が偏平な球形状を呈している。口縁部は外反し，外面にヘラ磨きが施され，内・外面に赤彩痕を有するものと，口縁部は外傾するものがある。碗は，丸底で体部は内彎し，口縁部は外反する。鉢は，平底で体部は内彎し，口縁部は折り返し口縁で外反する。高坏は，脚部が円筒状を呈し，坏部は弱い稜を持ち内彎気味に立ち上がるもの，外傾して立ち上がるものがあり，一部ハケ目整形がある。器台は，小形で脚部がラッパ状に開き，円孔が3か所穿たれている。器受部は皿状を呈し，ヘラ磨きが施されている。手捏土器は，碗形を呈し，内面に指頭圧痕がある。

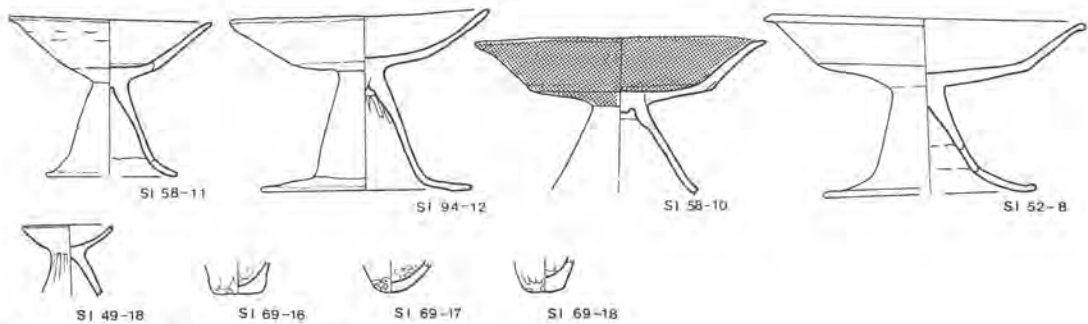
これらの遺物は，土浦市向原遺跡第80号住居跡及び水海道市大生郷遺跡第16号住居跡に類例があり，4世紀後半に位置付けられると思われる。

原田北V期(和泉I期)

本期は，第44・48・49・51・52・58・60・66・69・94号住居跡出土の土器によって構成される。器種は，土師器の甕，壺，埴，鉢，高坏，器台，手捏土器である。甕は，平底で球形状を呈している。頸部は「く」の字状を呈し口縁部で外傾するものもあるが，口縁部は外反し，口唇部で大きく開くものが大半を占める。整形は，ヘラ削り及びナデであるが，一部ハケ目整形がある。小形甕は，胴部は球形状を呈し，口縁部は折り返し口縁で外反するものもある。壺は，突出した平底で，胴部は球形状を呈し，口縁部は複合口縁で外傾するもの，外反するものがある。調整は，ヘラ削り及びヘラナデを施している。埴は，大形のものより小形のものの方が割合が多くなる。平底で，胴部は偏平な球形状を呈し，口縁部は内彎気味に立ち上がるもの，外傾して立ち上がるものがある。鉢は，口縁部が外反し，調整はヘラナデが施されており，IV期と変化はみられない。



第256図 原田北V期出土土器(1)



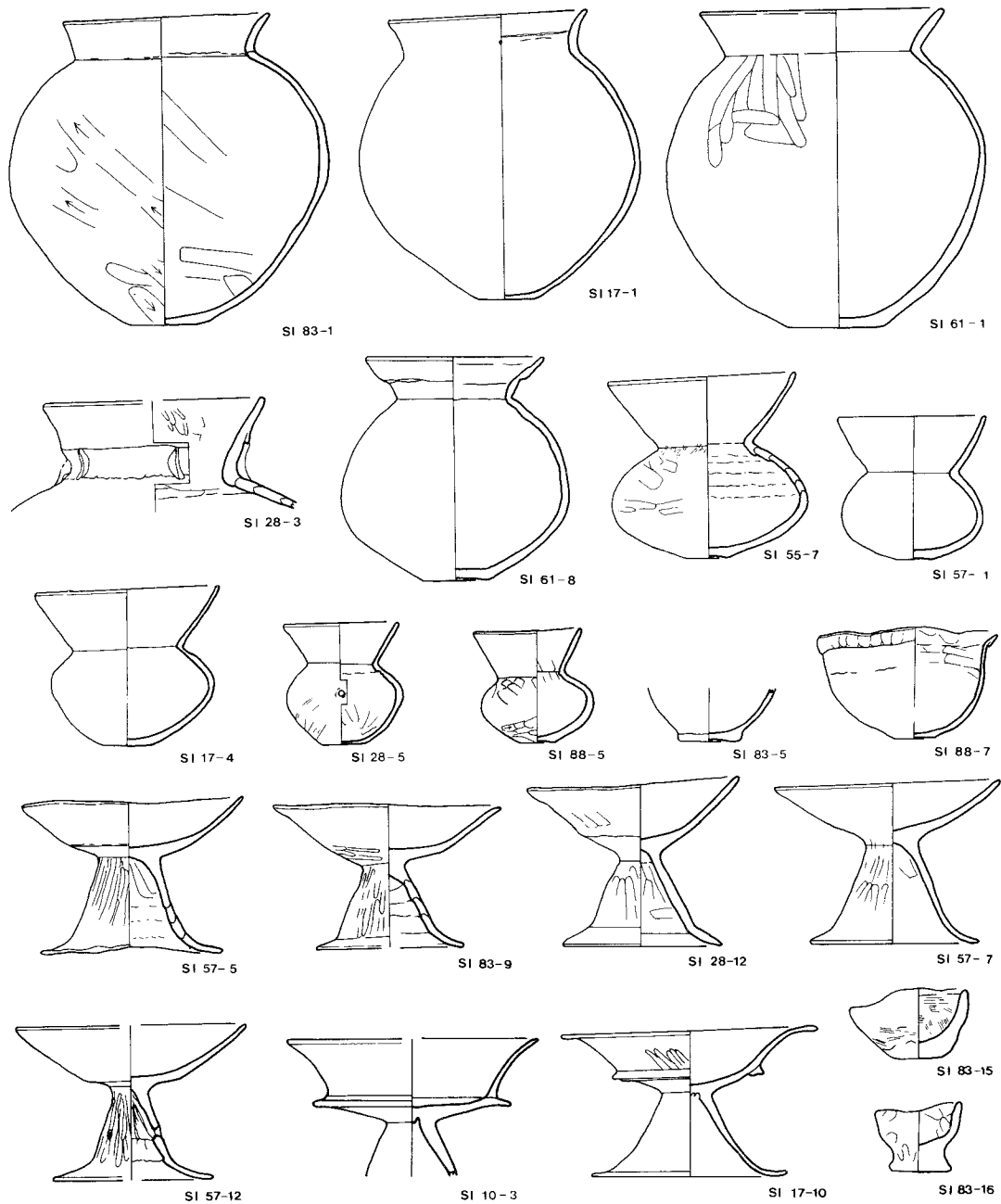
第257図 原田北V期出土土器(2)

高坏は、ハケ目整形のものはほとんどみられなくなる。脚部は、IV期同様円筒状を呈しているが、ラッパ状のものも一部みられる。脚裾部はほぼ水平に開き、坏部は下位に弱い稜を持つもの、明瞭に稜を持つものがあり、口縁部は内彎気味に立ち上がるもの、外傾して立ち上がるもの、外反して立ち上がり口唇部で大きく開くものがある。整形は、坏部はナデ、脚部外面はヘラ磨き及びヘラ削りであるが、一部内・外面に赤彩痕を持つものもみられる。器台は、小形で脚部が短く「ハ」の字状に開き、器受部は碗状を呈している。整形は、脚部外面ヘラ磨きが施されているが、円孔はない。手捏土器は、第69号住居跡から出土しており、底部は丸底及び平底で、調整は内・外面ヘラ削りが施されている。

これらの遺物は、土浦市向原遺跡第66号住居跡、新治郡千代田町志筑遺跡第23号住居跡及び竜ヶ崎市平台遺跡第10号住居跡に類例があり、5世紀前葉に位置付けられると思われる。

原田北VI期（和泉II期）

本期は、第2・10・17・19・28・45・55・57・61・64・65・74・83・85・88・95号住居跡の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、壺、埴、鉢、高坏、手捏土器である。甕は、平底及び突出した平底で、胴部はIV・V期同様球形状を呈している。胴部最大径は、中位及び中位よりやや上のものがある。口縁部は、外反するもの、外傾するものがある。V期に見られたハケ目整形は全く無くなる。壺は、V期とあまり変わりはなく、底部は平底で、胴部は球形状を呈し、口縁部は複合口縁で、頸部が直立気味に立ち上がり口縁部で外反するものと、口縁部が外傾するものがある。埴は、大形・小形のいずれも出土しているが、大形のものの割合が多い。底部は平底で、胴部は偏平な球形状を呈し、口縁部は内彎気味に立ち上がるものもあるが、外傾して立ち上がるものの割合が多い。鉢は、底部は平底で、口縁部が内彎するもの、折り返し口縁で外反するもの、直立するものがある。高坏は、器形の特徴はV期とほとんど変わらないが、坏底部と脚部の境目がやや太めになる傾向がみられる。赤彩痕は全く無くなる。坏底部に周縁が突き出しているものは、稲敷郡江戸崎町大日山古墳群第9号住居跡出土高坏に類例がある。手捏土器は、第83号住居跡から高坏型を呈するものが出土している。



第258図 原田北VI期出土土器

これらの遺物は、土浦市寺家ノ後A遺跡第1号住居跡、寺家ノ後B遺跡第1号住居跡、新治郡千代田町志筑遺跡第50号住居跡及びつくば市下広岡遺跡第91号住居跡に類例があり、5世紀中葉に位置付けられると思われる。

(2) 住居形態と集落構成について

原田北IV期(五領期)

本期に比定される住居跡は、第46・53・54号住居跡である。これらの住居跡は、形状的にみると方形を呈するものが1軒(第53号)、長方形を呈するものが2軒(第46・54号)である。規模的には、中形の住居跡が2軒(第46・54号)、小形の住居跡が1軒(第53号)である。炉は地床炉で、長軸方向の北西寄り(第53・54号)と、中央部西寄り(第46号)に検出されている。貯蔵穴は1軒(第54号)だけが検出されている。支柱穴は3軒とも4か所で、出入口施設に伴うピットは1軒(第53号)だけが検出されている。主軸方向はN-16°~56°で、第54号住居跡を挟んだ第46号住居跡と第53号住居跡との直線距離は約21.5mである。ここで特徴的なことは、住居構造で弥生時代後期には見られないような主軸が短径になっていること、地床炉が東西を結ぶ支柱穴の直線上よりやや中央寄りになっていることである。これらのことは、後述するV期、VI期には無い。

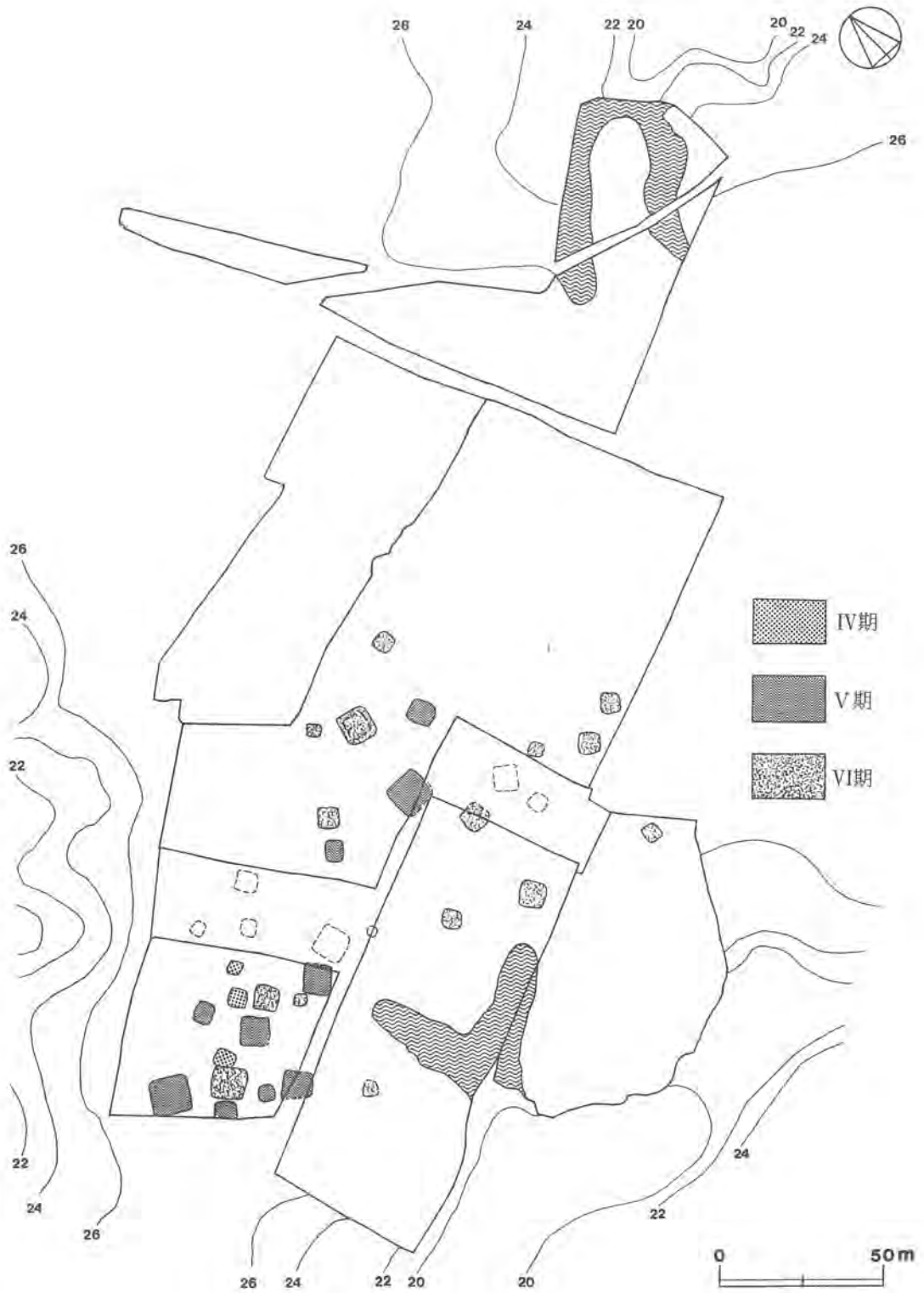
当該期の集落は、調査区の北西部に住居跡が3軒検出されているだけで、台地縁辺部に中形及び小形住居で形成されていたものと思われる。

原田北V期(和泉I期)

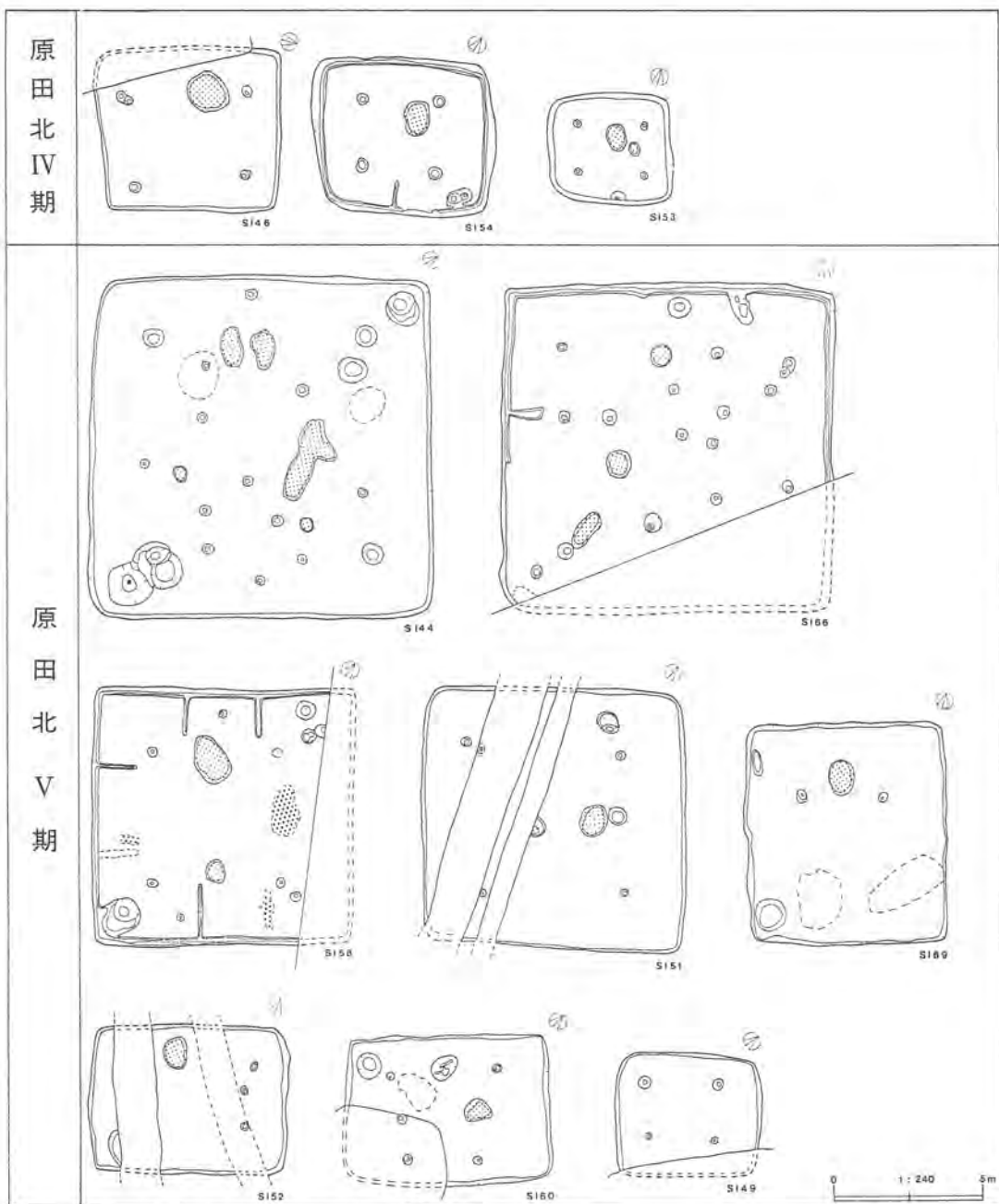
本期に比定される住居跡は、第44・48・49・51・52・58・60・66・69・94住居跡である。これらの住居跡は、形状的にみると方形を呈するものが5軒(第44・51・58・66・94号)、長方形を呈するものが5軒(第48・49・52・60・69号)である。規模的には、超大形の住居跡が2軒(第44・66号)、大形の住居跡が4軒(第51・58・69・95号)、中形の住居跡が3軒(第48・52・60号)、小形の住居跡が1軒(第49号)である。形状と規模を合わせてみると、超大形及び大形の住居跡は第69号住居跡を除き全て方形であり、中形及び小形の住居跡4軒は全て長方形である。同時期に検出されている住居跡の規模をみると、土浦市内では向原遺跡第26号住居跡の72.42㎡が最大であり、県内では竜ヶ崎市の平台遺跡第35号住居跡の90.43㎡、西茨城郡岩瀬町の裏山遺跡第4号住居跡の66.05㎡等がある。当遺跡の第44号住居跡が135.72㎡、第66号住居跡が121.33㎡であることから大規模な住居跡であることが窺える。

炉は、地床炉で長軸方向の北西寄りから検出されているものが4軒(第48・52・69・94号)、長軸方向の中央部東寄りから検出されているものが1軒(第51号)、複数の炉が検出されているものが4軒(第44・58・60・66号)ある。傾向として、超大形及び大形の住居跡から複数の炉が検出されている。同時期では平台遺跡第35・41・45住居跡等から複数の炉が検出されている。

貯蔵穴は、7軒(第44・48・52・58・60・66・69)から検出されている。ほとんどが南コーナー付近及び南西コーナー付近であるが、東コーナー付近(第48号住居跡)や南コーナー付近と北コーナー付近に2か所(第44号住居跡)のものもある。和泉期の貯蔵穴の位置については、茨城県教育財団年報4において「東方向及び南方向に配置され、炉の位置と逆の方向に配されることが多い



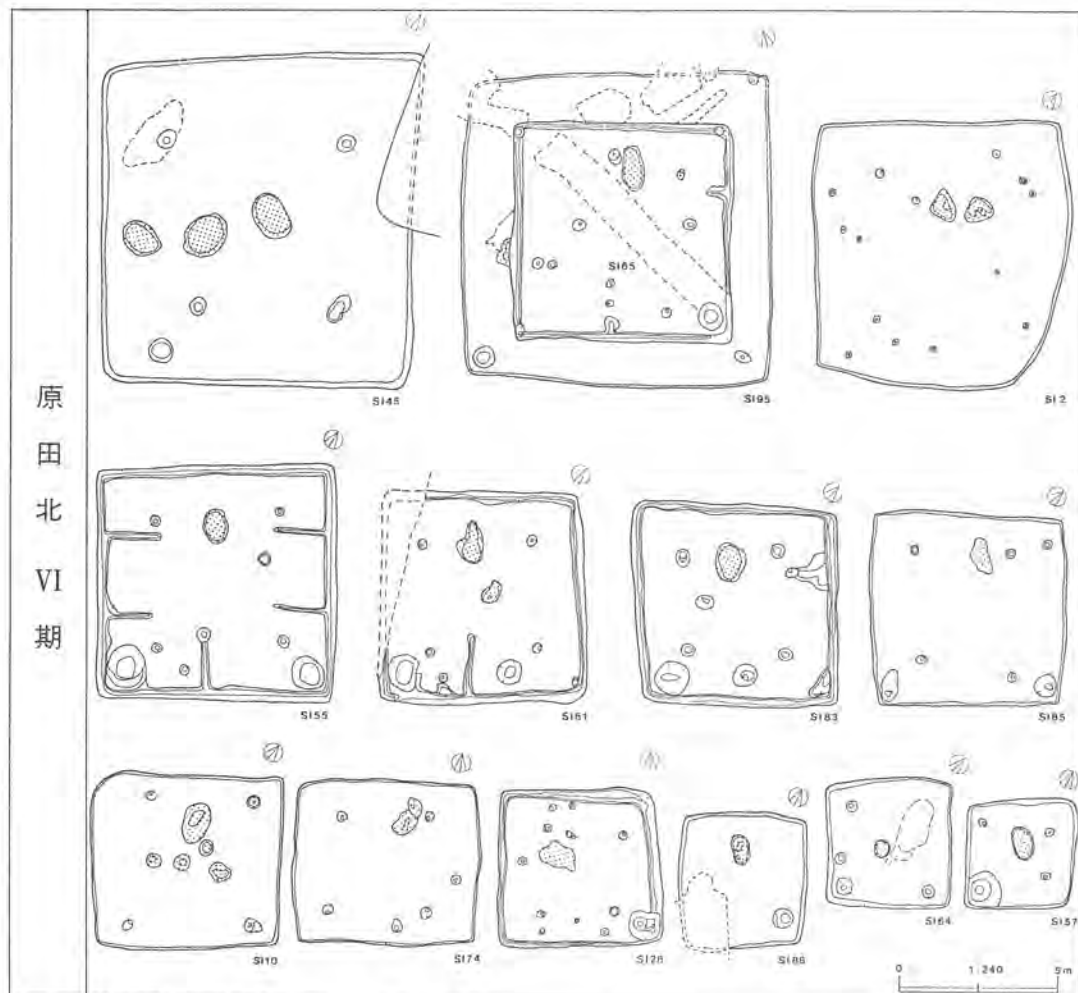
第259図 原田北遺跡古墳時代時期別住居跡配置図



第260図 原田北遺跡古墳時代住居跡一覧図(1)

ことや、コーナー部に配置される例が多いこと」がすでに周知されており、当遺跡も同様な傾向にあると思われる。

壁溝は、2軒(第58・66号)から検出されており、ほぼ全周している。北相馬郡守谷町の中原遺跡の全住居跡(11軒)や平台遺跡の47軒中32軒と比べると10軒中2軒なので割合として少ないが、水海道市大生郷遺跡のように一住居跡からも検出されていない例もあり、立地や環境において何



原
田
北
VI
期

第261図 原田北遺跡古墳時代住居跡一覽図(2)

らかの変化があるものと思われる。

その他、支柱穴は4本が基本となっており、出入口施設に伴うピットが付設されているものは1軒(第58号)のみ検出されている。主軸方向は $N-0^{\circ}\sim 54^{\circ}$ の範囲内にあり、第66号住居跡の $N-0^{\circ}$ 以外は $N-23^{\circ}\sim 53^{\circ}$ に集中している。

当該期の集落は、超大形及び大形の住居跡を中心として、3・4軒を小集落の固まりとして結び付いていたものと思われる。グループに分けてみると、調査区中央部では超大形の第66号住居跡を中心に、第60・69号住居跡が一群を形成している。調査区西部では超大形の第44号住居跡を中心に第48・49・94号住居跡が一群を形成し、さらに調査区の西側に延びて行くものと思われる。同じく調査区西部では、第51・52・58号住居跡が一群を形成し、さらに調査区外に延びていくものと思われる。

原田北VI期(和泉II期)

本期に比定される住居跡は、第2・10・17・19・28・45・55・57・61・64・65・74・83・85・88・95号住居跡である。第65号住居跡は第95号住居跡を掘り込んでおり、第65号住居跡が新しく構築されていると思われるが、遺物等から時期差はあまりないものと思われる。これらの住居跡は、形状的にみると、方形を呈するものが14軒(第2・10・17・19・28・45・55・57・64・65・83・85・88・95)、長方形を呈するものが2軒(第61・74号)である。方形を呈する住居跡の割合は、V期の10軒中5軒(50%)と比べると、16軒中14軒(87.5%)とかなり高くなる。規模的には、超大形の住居跡が2軒(第45・95号)、大形の住居跡が1軒(第55号)、中形の住居跡が8軒(第2・10・17・61・65・74・83・85)、小形の住居跡が5軒(第19・28・57・64・88号)である。同時期に検出されている住居跡の規模をみると水海道市大生郷遺跡は13軒中3軒(第15号住居跡が91.58㎡、第16号住居跡が131.10㎡、第23号住居跡が135.69㎡)が超大形の住居跡で、当遺跡の第45号住居跡(101.62㎡)に勝るものである。形状と規模を合わせてみると、長方形の住居跡は中形の2軒だけで、超大形・大形はV期同様方形である。

炉は、地床炉で長軸方向の北西寄りから検出されているものが10軒(第17・19・28・55・57・65・74・83・85・88号)と多く、中央部から検出されているものが1軒(第64号)、中央部西寄りから検出されているものが1軒(第95号)ある。複数の炉が検出されているものが4軒(第2・10・45・61号)で、北相馬郡守谷町大日遺跡第5号住居跡(2か所)、中原遺跡第15号住居跡(2か所)、平台遺跡第31号住居跡(3か所)に類例がある。

貯蔵穴は、9軒から検出されており、南コーナー付近から4軒(第45・57・64・83号)、東コーナー付近から3軒(第28・65・85号)、南コーナー付近と東コーナー付近の2か所からが1軒(第55号)、南コーナー付近と南東壁中央部付近の2か所からが1軒(第61号)である。平面形は楕円形状を呈していること、住居跡のコーナー付近にあること、底面が平坦であること等V期とほぼ同様であるが、第61号住居跡だけが特異である。

壁溝は、5軒(第28・55・61・65・83号)から検出されており、ほぼ全周している。主柱穴は、4か所が基本であり、それに伴う補助柱穴も検出されている。出入口施設に伴うピットは、2軒(第65・83号)だけが検出されている。主軸方向はN-0°~53°の範囲内にあり、第28・74号住居跡以外はN-15°~53°の範囲内にあり、V期との大きな変化はみられない。

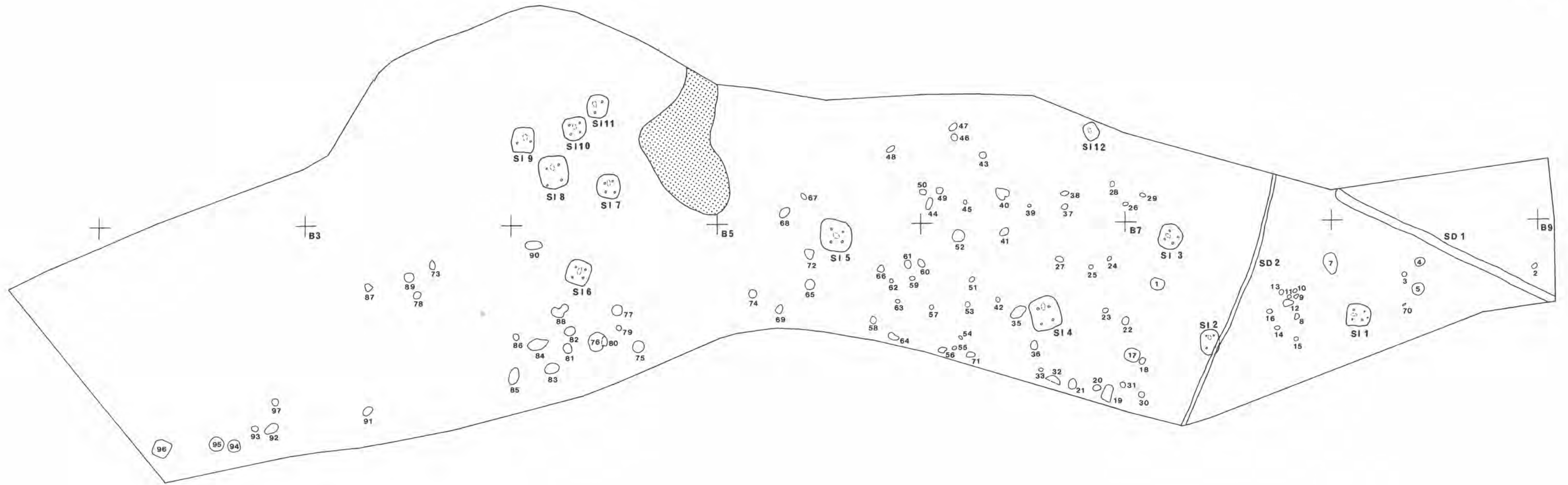
当該期の集落は、調査区中央部から西部及び南部にかけての台地縁辺部の平坦地に16軒検出されているが、さらに調査区外の西側及び南側に延びて行くものと思われる。同時期と考えられる住居跡は、新治郡千代田町志筑遺跡などで検出されており、志筑遺跡では住居跡が3軒(第25・46・50号)検出されている。V期と同様に3~5軒が小集落の固まりとなり、構成されていたものと思われる。中央部は超大形の第95号住居跡を中心に、中形の第61・65・74号住居跡と小形の第64

号住居跡で集落を構成していたものと思われる。調査区南部では、中形の第2・10・17号住居跡と小形の第88号住居跡で集落を構成し、第17号住居跡の東側の調査区外に延びていくものと思われる。さらに調査区南部では、中形の第83・85号住居跡と小形の第28号住居跡で集落を構成し、調査区外の南側に延びて行くものと思われる。調査区西部では、超大形の第45号住居跡を中心に、大形の第55号住居跡と小形の第19・57号住居跡で集落を構成し、調査区外の西側に延びて行くものと思われる。

なお第61号住居跡からは、石製模造品が11点(剣9, 円板2), 土製品が1点(勾玉)出土しており、集落内における祭祀形態を表していると思われる。同時期の石製模造品で三種の神器(剣・玉・鏡)が出土している例は、裏山遺跡第4号住居跡や稲敷郡阿見町下小池東遺跡第12・13号住居跡に類例を見るが、当遺跡の第55号住居跡(剣1, 円板1), 第65号住居跡(勾玉1)及び第74号住居跡(勾玉1, 円板1)からも石製模造品が出土していることをみても、研究ノート「裏山遺跡第4号住居跡について」の中に記載されてある古墳時代後期の有力家族の分立化につながり、古墳時代中期から後期にかけての境界線上にある時期と考えられる。

参考文献

- (1) 杉原荘介・大塚初重 「土師式土器集成本編1・2・3」 東京堂出版 1972年
- (2) 佐藤政則 「常陸地方の和泉式土器試論」 『常陸国風土記と考古学』 雄山閣出版 1985年
- (3) 土浦市教育委員会 「土浦市向原遺跡発掘調査報告書」 1987年
- (4) 黒沢秀雄 「裏山遺跡第4号住居跡について」 『研究ノート創刊号』 茨城県教育財団 1992年
- (5) 阿見町教育委員会 「下小池東遺跡発掘調査報告書」 1981年
- (6) 茨城県教育財団 「志筑遺跡他」 茨城県教育財団調査報告V 1980年
- (7) 茨城県教育財団 「大日遺跡他」 茨城県教育財団文化財調査報告VIII 1981年
- (8) 茨城県教育財団 「下広岡遺跡」 茨城県教育財団調査報告X 1981年
- (9) 茨城県教育財団 「大生郷遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告XI 1982年
- (10) 茨城県教育財団 「平台遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第19集 1983年
- (11) 茨城県教育財団 「寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡他」 茨城県教育財団文化財調査報告 第60集 1990年
- (12) 茨城県教育財団 「大日山古墳群他」 茨城県教育財団文化財調査報告第65集 1991年
- (13) 加藤雅美 「遺跡紹介 古墳時代中期(和泉期)の遺構を中心として」 『年報4』 茨城県教育財団 1985年



第262図 原田西遺跡遺構全体図

第6章 原田西遺跡

第1節 遺跡の概要

原田西遺跡は、土浦市の北端部に位置し、原田北遺跡の南側に小支谷を隔て所在する。当遺跡の西側にも天の川の支流が形成する小支谷があり、周辺は複雑な地形となっている。遺跡の所在する台地は標高25m前後の台地で、北側と西側の小支谷に向かって緩やかに傾斜している。現況は山林及び畑地であり、弥生式土器片が散布していた。

今回の調査は台地北部の東西約300m、南北約50mにわたり、面積14,181㎡である。

調査によって、竪穴住居跡12軒、土坑95基、溝2条、遺物包含層1か所が検出されている。

縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物包含層からは、縄文時代草創期から縄文時代中期の土器片が出土している。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡12軒が検出され、東部のグループと西部のグループに分けられる。時期はすべて後期後半のものである。

土坑及び溝は出土遺物が少なく、時期不明のものが多い。

遺物は収納箱（60×40×20cm）に35箱ほど出土している。縄文式土器は早期・前期の土器が中心であり、おもに遺物包含層から出土している。住居跡からは、壺・甕・高坏・鉢などの弥生式土器が比較的多量に出土している。土製品では紡錘車、石器では石鏃・磨石など、鉄製品では鉄鏃が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡からは、台地縁辺部に沿って、12軒の竪穴住居跡が検出されている。すべて、弥生時代後期後半のもので、東部から検出されている第1～5・12号住居跡は、20～40mほどの間隔がある。西部から検出されている第6～11号住居跡は、近接している。平面形は隅丸方形や隅丸長方形を呈しており、床面積30㎡以上の規模をもつ住居跡は3軒である。これらの竪穴住居跡は重複がほとんどなく、遺存状態は良好である。

以下、検出された住居跡の特徴や主な遺物について、記載していくことにする。

第1号住居跡（第263図）

位置 調査区東部、B8e₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.82m、短軸4.42mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-73°-W。

壁 壁高は35~46cmで、北・西・南壁はほぼ垂直に、東壁は外傾して立ち上がっている。

床 東部はやや凹凸があり西部はほぼ平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

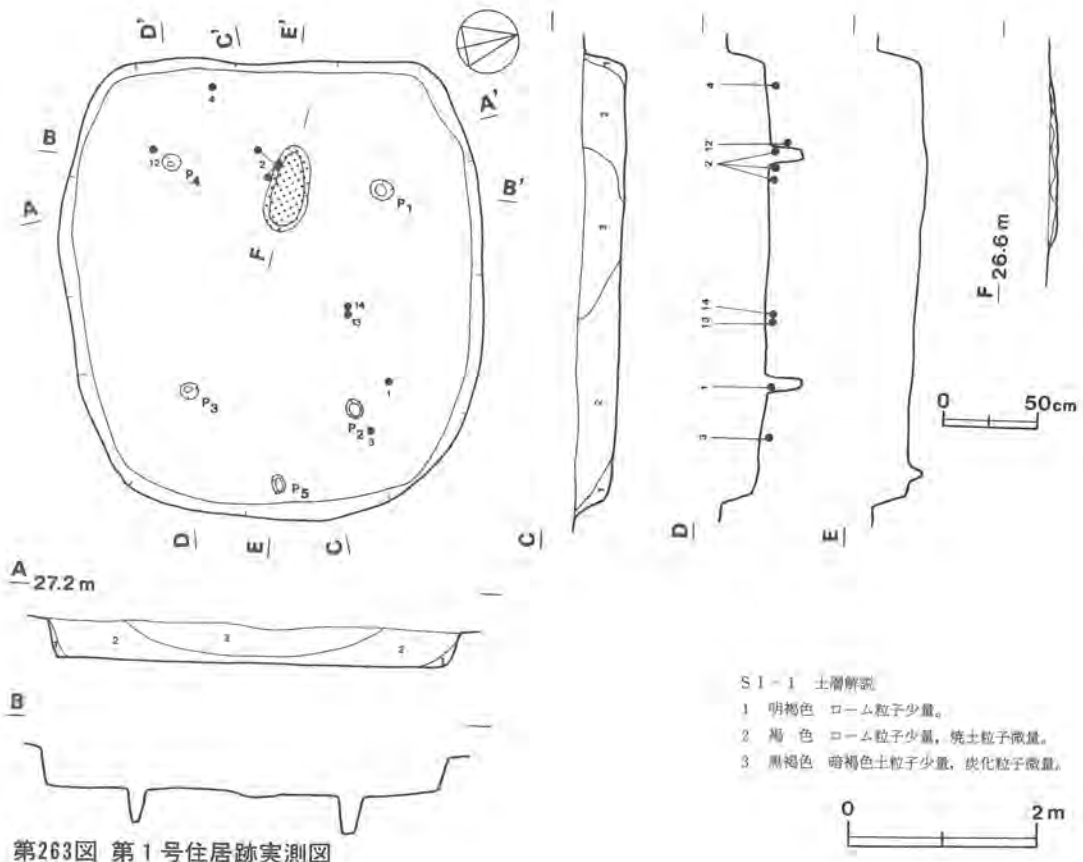
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径18~25cmの円形を呈し、深さ37~44cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は長径43cm、短径19cmの楕円形を呈し、深さ17cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

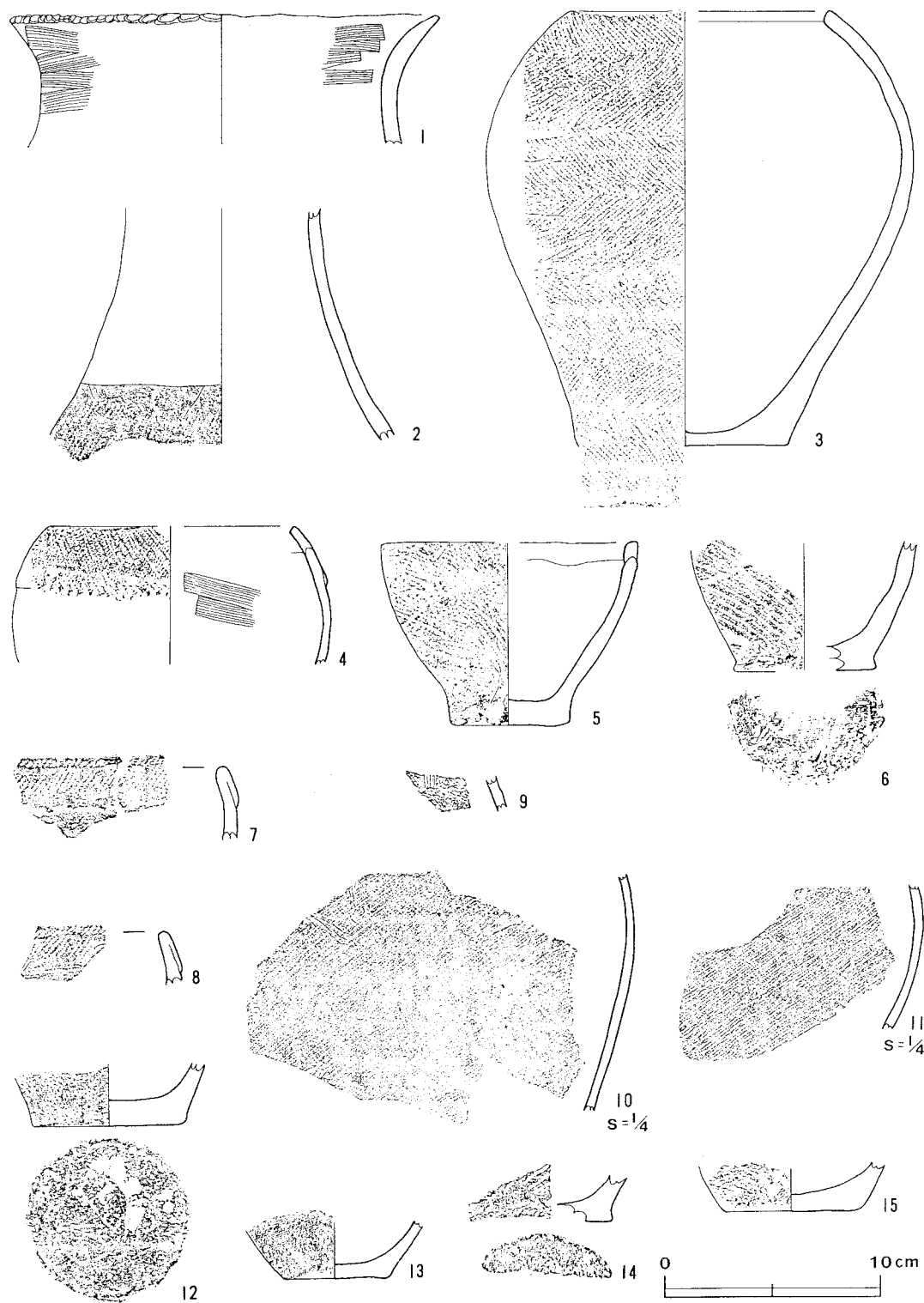
炉 長軸線上の中央から西寄りに検出されている。平面形は長径91cm、短径43cmの楕円形を呈し、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が焼土化している。

覆土 黒褐色土・褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央から北・西寄りの床面及び覆土下層から弥生式土器片(甕1, 広口壺2, 無頸壺1, 鉢2), 弥生式土器細片(88点)が出土している。3の無頸壺は北東コーナー付近の床面から正位の状態で、1は甕の口縁部で北東コーナー付近の床面から逆位の状態で出土している。5の鉢は中央から北寄りの床面から出土したいくつかの破片が接合されている。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と思われる。





第264图 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第264図 1	甕 弥生式土器	A 20.0 B (6.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。口唇部は押圧により小波状を呈している。外面無文で口縁部内・外面は横ナデされている。	砂粒・長石・パミス・スコリア 灰褐色 普通	P 2 20% 北東コーナー付近床面
2	広口壺 弥生式土器	B (11.0)	胴部から頸部にかけての破片。頸部は外反して立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 3 50% 中央から西寄り床面
3	無頸壺 弥生式土器	A [12.1] B 20.4 C 9.7	平底。胴部は内彎して立ち上がり口縁に至る。外面全体に附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成を持つ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P 1 90% 北東コーナー付近床面 広口壺を再利用
4	鉢 弥生式土器	A [11.4] B (6.5)	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施される複合口縁を呈し、下端は刺突が施されている。胴部は無文でヘラナデされている。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 8 10% 西壁中央付近床面
5	鉢 弥生式土器	A [12.0] B 8.5 C 5.6	平底。突出する底部から胴部にかけて内彎して立ち上がり、口縁に至る。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、縦回転の羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 5 80% 中央から北寄り床面
6	広口壺 弥生式土器	B (5.9) C [6.6]	底部片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 7 20% 中央部覆土下層

第264図7～15は、第1号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7・8は縄文施文の複合口縁を呈し、内彎して立ち上がっている鉢形土器の口縁部片である。9はスリット手法による充填波状文が施される土器の頸部から胴部にかけての破片である。10・11は胴部片で、同一個体であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとっていない。12～15は底部片であり、13は外面無文で、それ以外には附加条縄文が施されている。12・14は木葉痕を持つ。

第2号住居跡 (第265図)

位置 調査区東部、B7f₅区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南東部は第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.70m、短軸4.05mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-14°-W。

壁 壁高は36～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

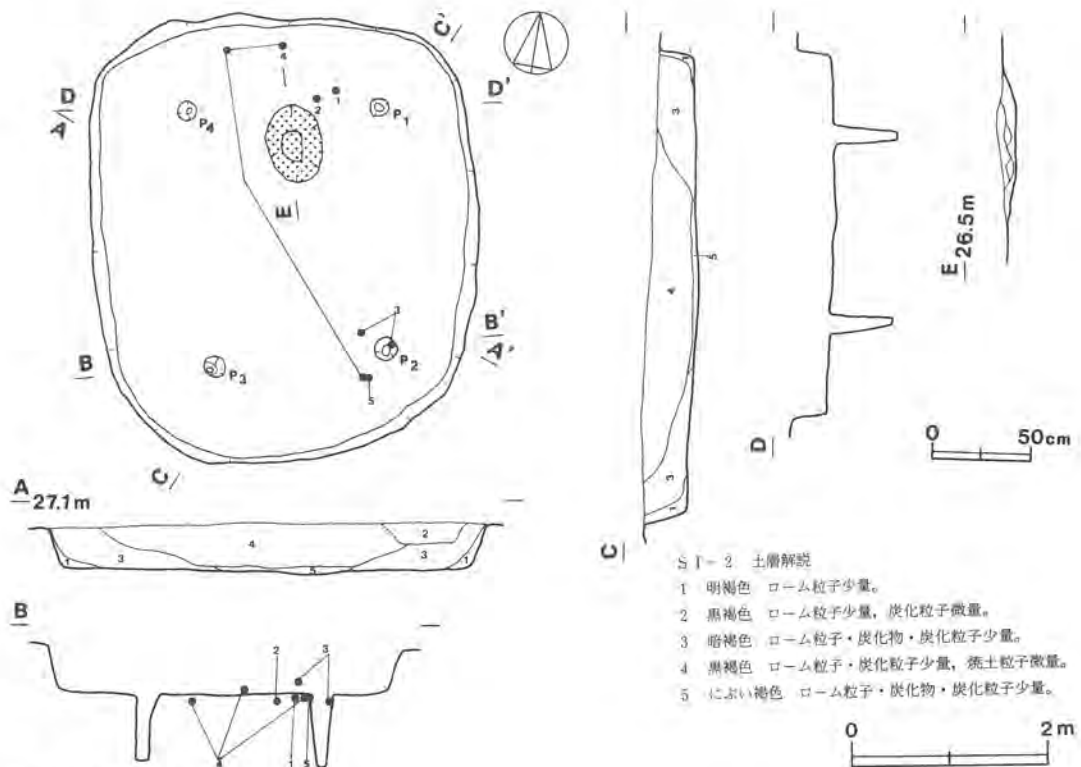
ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁～P₄は径20～26cmの円形を呈し、深さ66～77cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径84cm、短径58cmの楕円形を呈し、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉の南部に長軸と直交するように、弥生式土器の胴部片が立て掛けられた状態で出土しており、置台としたものと思われる。

覆土 暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積し、自然堆積と思われる。

遺物 北壁付近の床面と南東コーナー付近の床面から集中して、弥生式土器片(広口壺5)、弥生式土器細片(53点)が出土している。1は広口壺の上半部で炉北側の床面から逆位の状態で出土している。2は広口壺の上半部で炉北側の床面から横位の状態で出土している。3の広口壺は南東コーナー付近の覆土中層から正位の状態で、4の広口壺は北壁際の床面出土のものと同東コーナー付近出土のものが接合されている。5の底部片は南東コーナー付近の床面から斜位の状態で、それぞれ出土している。

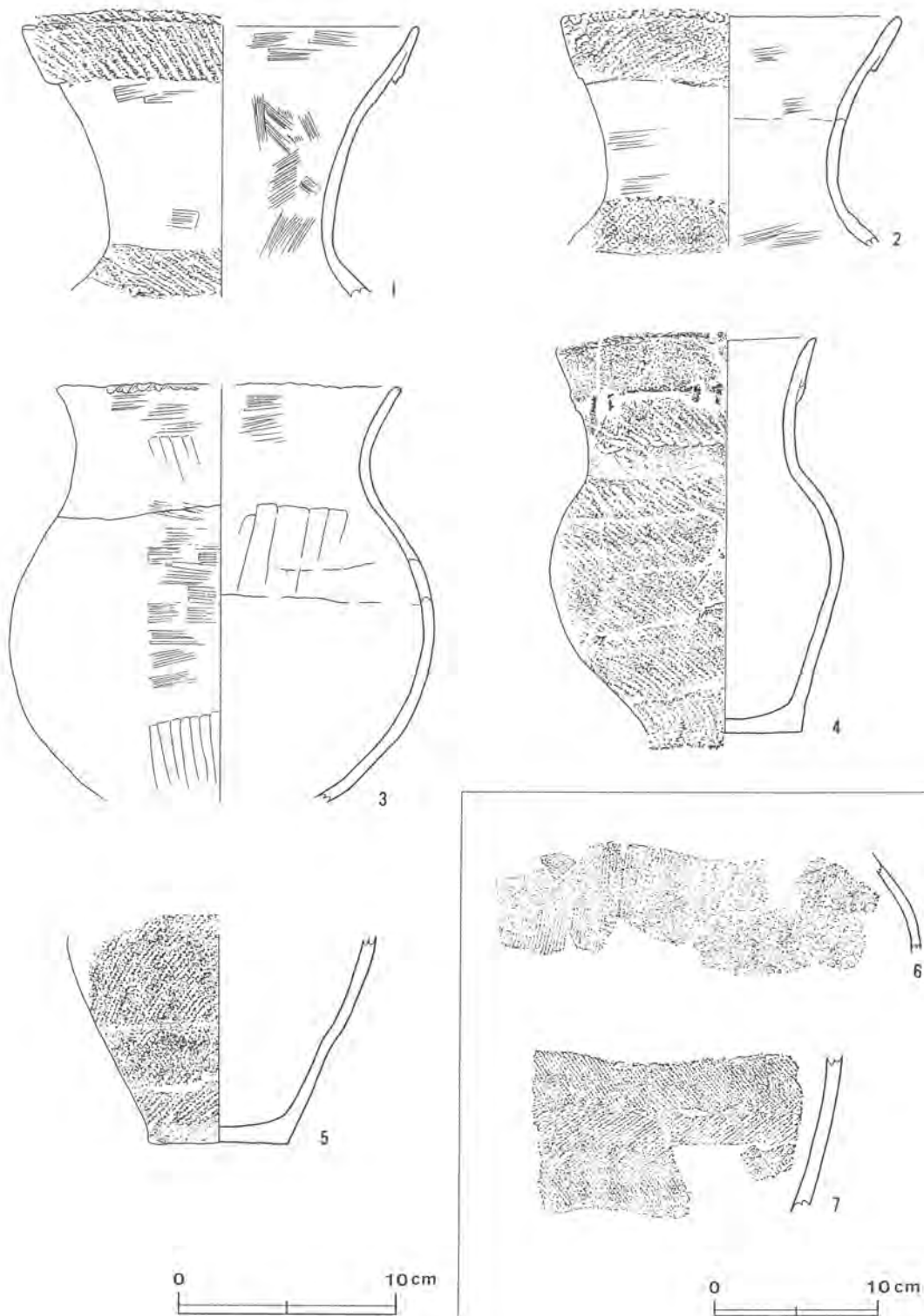
所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第265図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第266図 1	広口壺 弥生式土器	A [18.2] B (12.6)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の複合口縁を呈し、頸部を無文帯としている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はハケ目調整されている。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P9 炉北側床面 30%
2	広口壺 弥生式土器	A 15.7 B (10.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の複合口縁を呈し、頸部を無文帯としている。胴部には単節縄文が施されている。内面は軽くハケ目調整されている。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	P10 炉北側床面 20%



第266图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影图

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第266図 3	広口壺 弥生式土器	A [15.8] B (19.2)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。口唇部は交互押圧による小波状を呈し、外面は無文である。口縁部、胴部上位はハケ目調整、胴部下位はヘラ削りされている。	砂粒・長石・雲母・ パミス にぶい橙色 普通	P11 70% 南東コーナー付近覆土中層 内・外面スス付着
4	広口壺 弥生式土器	A 11.9 B 18.2 C 7.2	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部にゆがみがあり、一方が膨らむ。頸部から口縁部にかけては外反している。無文の複合口縁を呈し、下端には2個1組の瘤が7単位にわたり貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成はとっていない。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい橙色 普通	P12 80% 北壁際床面
5	広口壺 弥生式土器	B (9.6) C 6.5	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。	砂粒・長石・石英・ 雲母 浅黄橙色 普通	P13 50% 南東コーナー付近床面

第266図6・7は、第2号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6は胴部上位の破片で、単節縄文が施され、下位を無文としているものである。7は胴部片で附加条1種（附加2条）の縄文による羽状構成をとっている。

第3号住居跡（第267図）

位置 調査区東部，B7a₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 南西壁の一部を攪乱されているが、長軸4.92m、短軸4.62mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-60°-W。

壁 壁高は30～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全体に凹凸があるが、よく踏み固められ硬い。

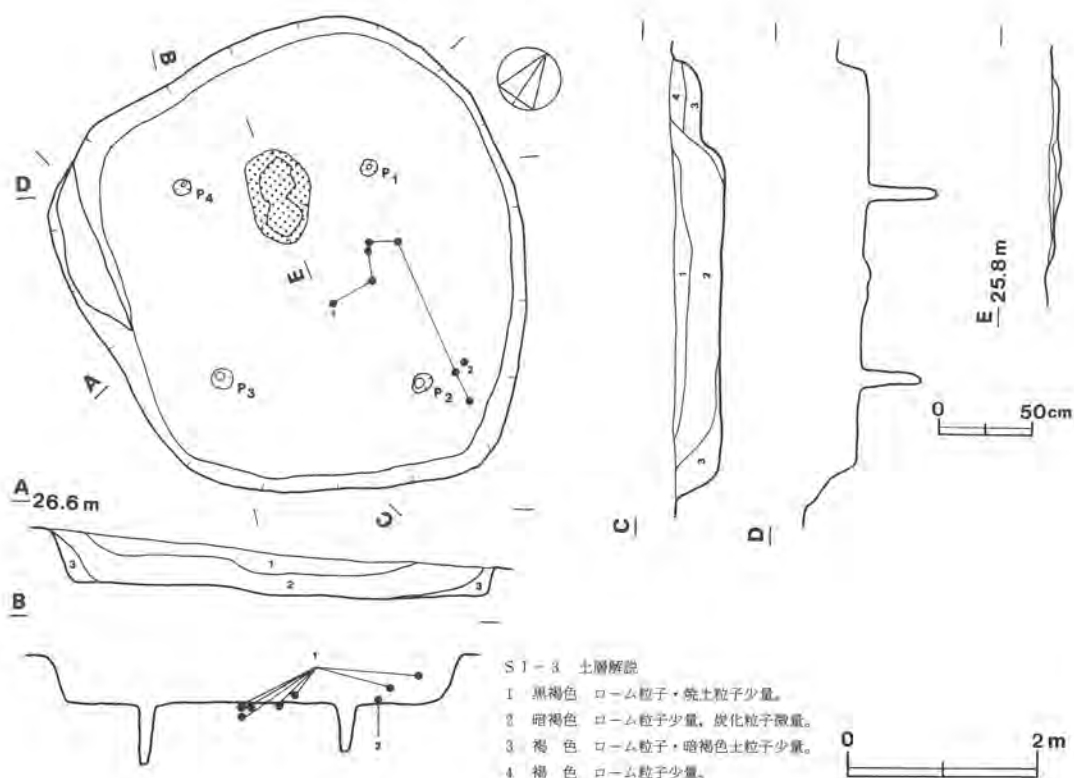
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は径17～25cmの円形を呈し、深さ54～74cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径102cm、短径62cmの楕円形を呈し、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受け、赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積し、自然堆積と思われる。

遺物 中央部から東コーナーにかけての床面及び覆土中・上層を中心に、弥生式土器片（壺1，広口壺1），弥生式土器細片（127点）が出土している。1の壺は中央部から東コーナー付近の床面及び覆土中・下層から出土したいくつかの破片が接合されている。2の底部片は東コーナー付近の床面から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

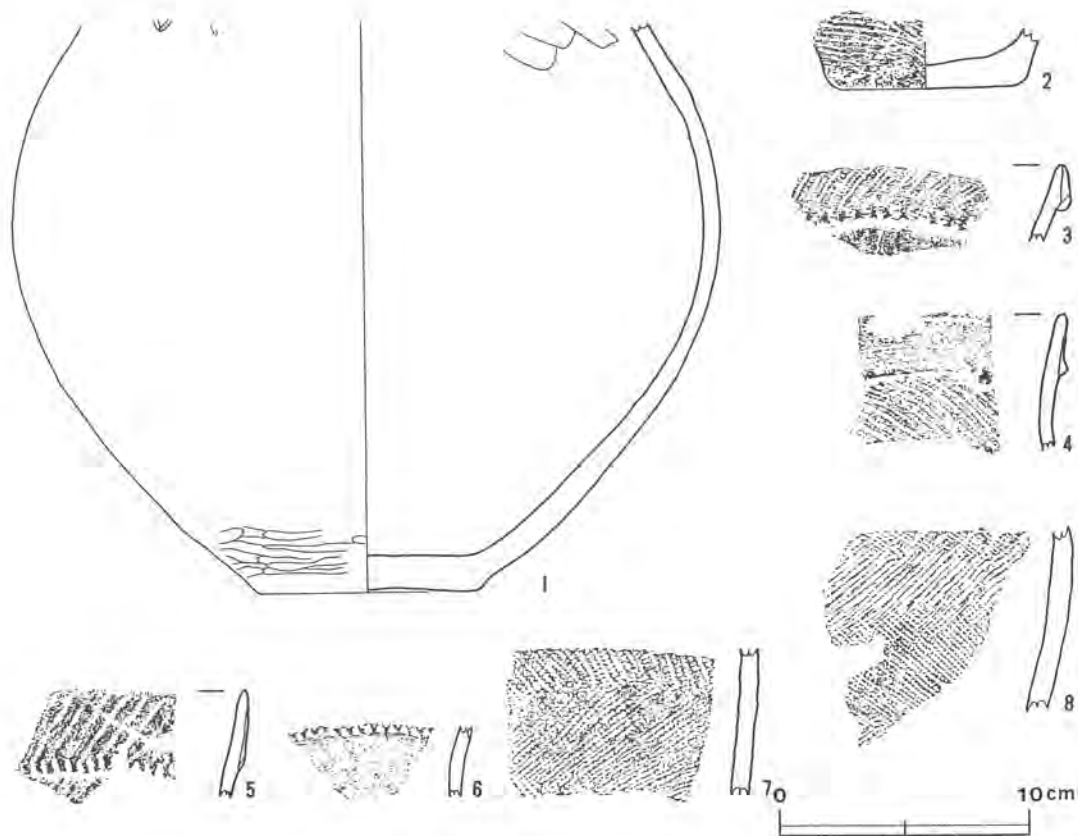


第267図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第268図 1	壺 弥生式土器	B (22.9) C 8.7	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。 胴部上位に沈線による鋸歯状文が施されている。胴部外面下位は横位にヘラ磨きされている。胴部内面上位はヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P14 40% 中央部・東コーナー付近 覆土中・下層 外面スス付着
2	広口壺 弥生式土器	B (2.3) C 7.0	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P15 10% 東コーナー付近床面

第268図3～8は、第3号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～5は口縁部片である。3・5は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧され、頸部を無文帯としている。4は無文の複合口縁を呈し、下端には瘤が貼られている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6は口縁下端に縄文原体による刺突文が施され、頸部を無文帯としている。7・8は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文による羽状構成をとっている。



第268図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡 (第269図)

位置 調査区中央部、B6e7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.28m、短軸5.70mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-21°-W。

壁 壁高は22~56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

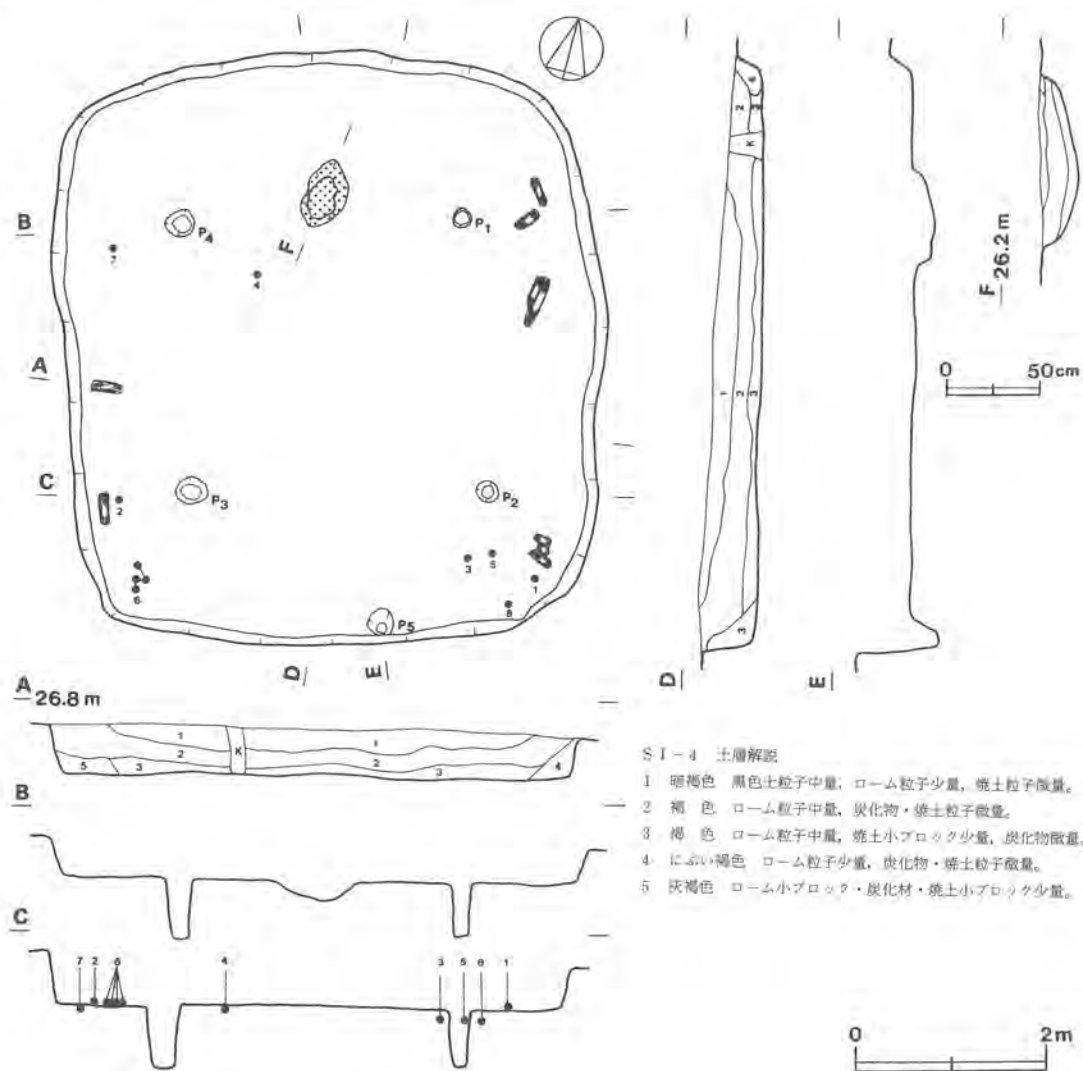
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は径21~34cmの円形を呈し、深さ59~67cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P₅は長径30cm、短径26cmの楕円形を呈し、深さ31cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径74cm、短径45cmの楕円形を呈し、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

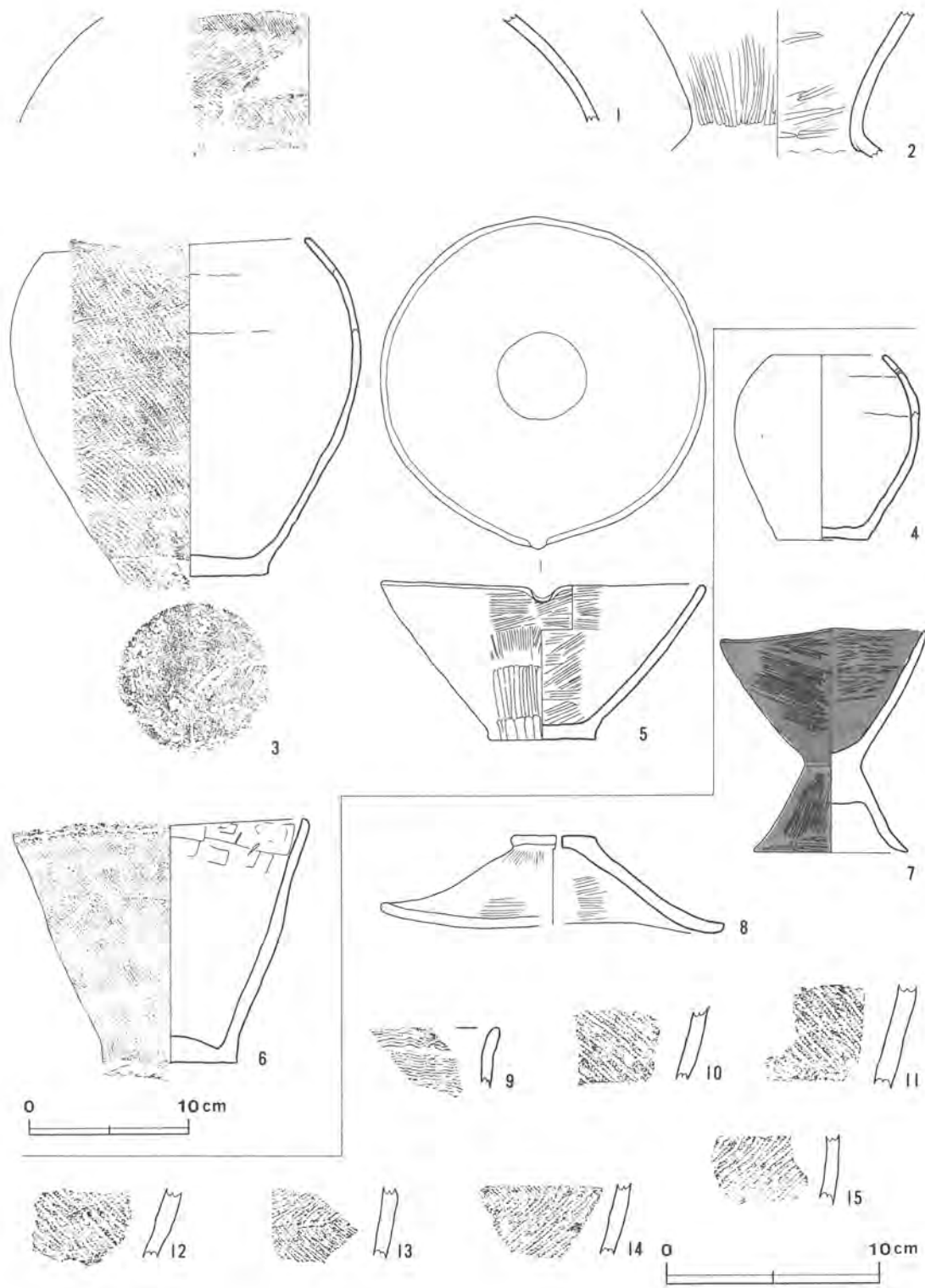
覆土 褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 東コーナー付近と南コーナー付近の床面を中心に弥生式土器片(壺2, 無頸壺2, 鉢2, 高
 環1, 蓋1), 弥生式土器細片(124点)が出土している。その他, 石器が出土している。5は片口
 の浅鉢で東コーナー付近の床面から正位の状態, 3の無頸壺は東コーナー付近の床面から横位
 の状態で, それぞれ出土している。7の高環は西コーナー付近の床面から横位の状態で出土して
 いる。4の無頸壺は中央部からやや西側の床面から横位の状態で出土している。6の鉢は南コー
 ナー付近の床面から, 8の蓋は東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 床面から炭化材が広範囲に出土しており, 火災住居跡と思われる。住居跡の形態や出土遺
 物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第269図 第4号住居跡実測図



第270図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第270図 1	壺 弥生式土器	B (6.8)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部上位に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P18 10% 東コーナー付近床面
2	壺 弥生式土器	B (9.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。内・外面ともヘラ磨きされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P17 20% 南コーナー付近床面
3	無頸壺 弥生式土器	A 16.8 B 21.4 C 9.5	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、口縁に至る。外面全体に附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。内面には輪積み痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P16 90% 東コーナー付近床面 内面スス付着
4	無頸壺 弥生式土器	A 5.3 B 8.9 C 4.2	上げ底。胴部は底部から内彎して立ち上がり口縁に至る。口縁部に2孔が穿たれている。外面は無文でヘラナデされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P19 100% 中央からやや西寄り床面 外面摩耗
5	鉢 弥生式土器	A 20.5 B 10.2 C 6.7	平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、口縁に至る。片口状を呈し、小さな注口が付く。外面は無文で、口縁部はハケ目調整。胴部下位はヘラ磨きされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P20 100% 東コーナー付近床面 内面炭化物付着
6	鉢 弥生式土器	A 18.2 B 15.4 C 8.6	平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部はハケ目整形後に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面は横位にヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P21 100% 南コーナー付近床面 内・外面スス付着 広口壺の再利用
7	高坏 弥生式土器	A 9.9 B 10.5 E 4.2	脚部は「ハ」の字状に開いている。坏部は内彎して立ち上がる。外面と坏部内面は丁寧なヘラ磨きがなされ、その後赤彩されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P22 70% 西コーナー付近床面
8	蓋 弥生式土器	A 16.3 B 4.8 F 4.1 G 0.5	つまみは平坦で、中心から僅かにずれたところに、径2mmほどの穿孔を持つ。天井部は「ラップ」状に大きく開き、口縁に至る。内・外面ともハケ目調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P23 40% 東コーナー付近床面 内・外面スス付着

第270図9～15は、第4号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。9は薄目の複合口縁を呈し、口縁部全体に横走波状文が密に施されている。10～15は縄文が施されている胴部片で、13・14は羽状構成をとっている。縄文原体はいずれも附加条1種(附加2条)である。

第5号住居跡(第271図)

位置 調査区中央部、B5a₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.74m、短軸5.54mの不整隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-74°-W。

壁 壁高は15～50cmで、東・南・西壁は外傾して、北壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、東部はよく踏み固められ硬い。

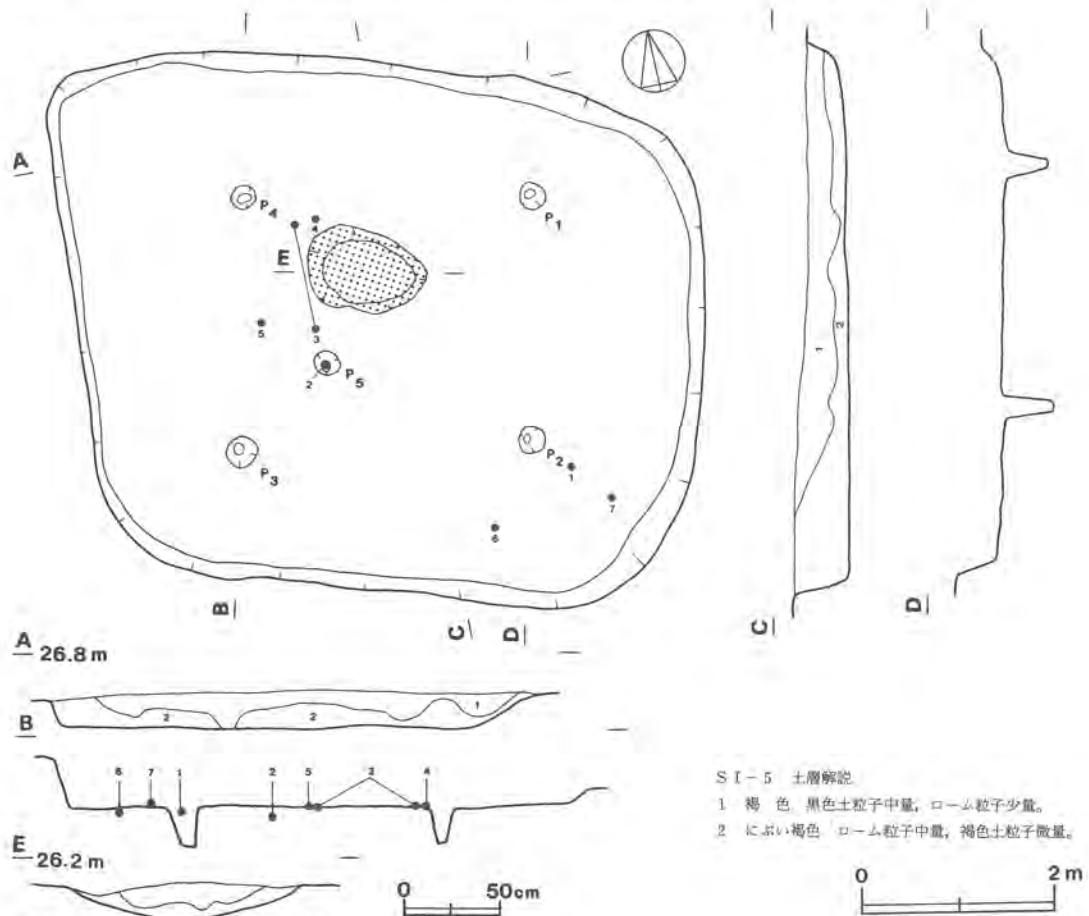
ピット 5か所(P₁～P₅)検出されている。P₁～P₄は径26～35cmの円形を呈し、深さ40～54cmの主柱穴である。P₅は径28cmの円形を呈し、深さ47cmの補助柱穴と思われる。

炉 長軸線上のほぼ中央に検出されている。平面形は長径121cm、短径86cmの楕円形を呈し、床を25cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

覆土 におい褐色土・褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部と南東コーナー付近の床面を中心に弥生式土器片(甕1, 広口壺3, 壺1, 長頸壺1, 高坏2), 弥生式土器細片(97点)が出土している。その他, 流れ込みと思われる縄文式土器片(27点)が出土している。1の甕と6の長頸壺は, 南東コーナー付近の床面から横位の状態で出土している。2の広口壺は中央部のP₅内から横位の状態で, 3の広口壺は中央部の床面から逆位の状態で, それぞれ出土している。7の高坏脚部は南東コーナー付近の覆土下層から出土している。

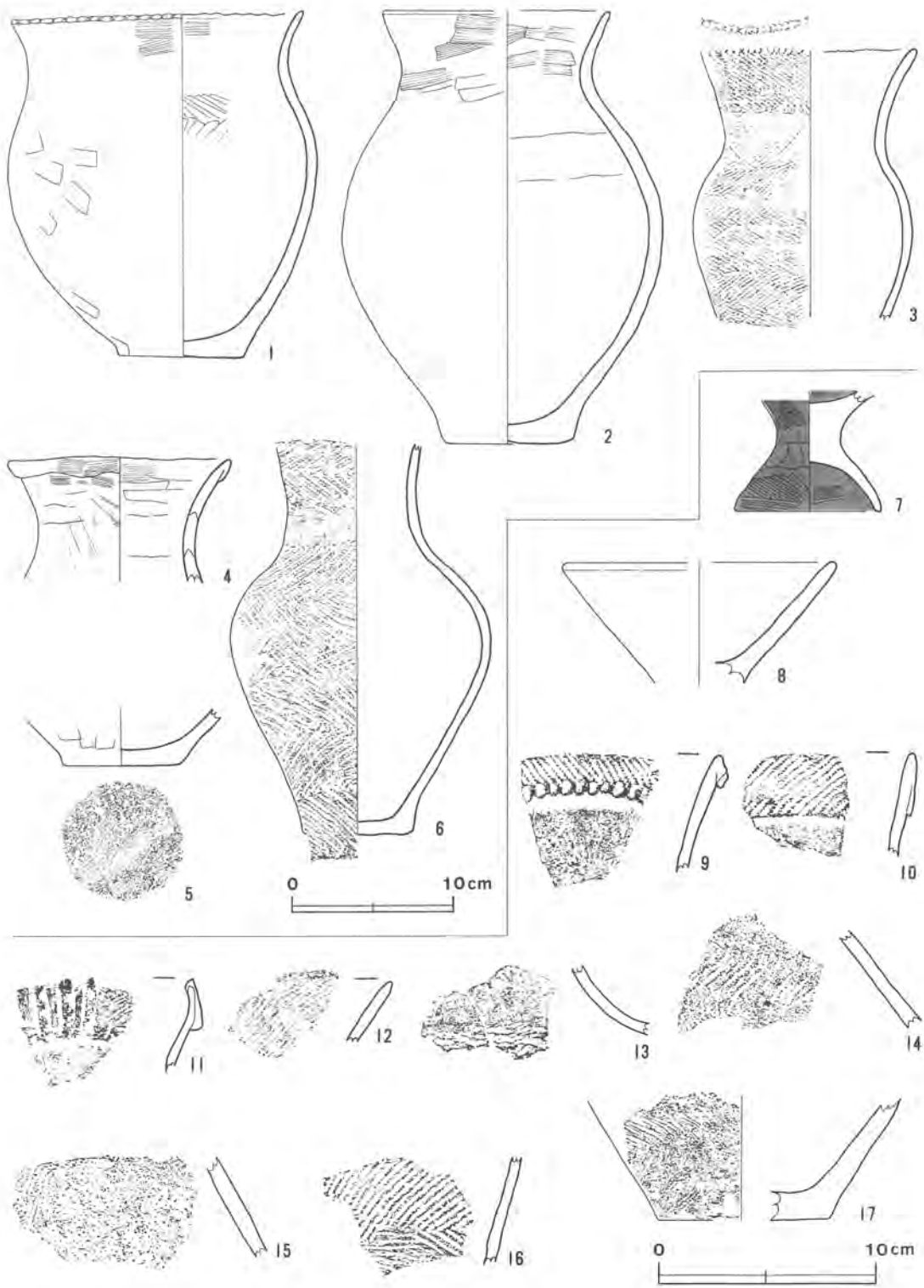
所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第271図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第272図 1	甕 弥生式土器	A 17.7	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。口唇部は押圧され、小波状を呈する。外面は無文で、口縁部はハケ目調整、胴部は粗くヘラ削りされている。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	P24 100% 南東コーナー付近床面 外面スス付着
		B 21.9			
		C 8.0			
2	広口壺 弥生式土器	A [14.2]	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。外面は無文で口縁部から頸部にかけて内・外面ともにハケ目調整されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P25 95% 中央部P ₅ 覆土 外面スス付着
		B 27.2			
		C 8.3			



第272図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第272図 3	広口壺 弥生式土器	A [13.2] B (17.1)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P29 70% 中央部床面
4	広口壺 弥生式土器	A 14.1 B (7.9)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。無文の複合口縁を呈し、ハケ目調整後、斜位にヘラナデされている。口縁部内面は横ナデ。頸部は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・スコリア・雲母 橙色 普通	P27 30% 中央部床面
5	壺 弥生式土器	B (3.5) C 7.5	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面は無文で、胴部下位はハケ目整形後、ヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P28 10% 中央部覆土下層 内面スス付着
6	長頸壺 弥生式土器	B (24.7) C 6.9	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部は強くくびれてから外反している。最大径を胴部上位に持つ。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 明褐色 普通	P26 80% 南東コーナー付近床面 内・外面スス付着
7	高坏 弥生式土器	B (5.7) D 6.7 E 2.4	脚部から坏部にかけての破片。脚部「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。内・外面ともヘラ磨き後、赤彩されている。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P30 40% 南東コーナー付近覆土下層
8	高坏 弥生式土器	A [12.8] B (5.7)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。内・外面とも横ナデされている。	砂粒 にぶい橙色 やや不良	P31 20% 中央部覆土下層

第272図9～17は、第5号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。9・10は太目の単節縄文が施文される複合口縁を呈し、9の口縁下端は棒状工具によるキザミ目が施されている。9・10とも頸部を無文帯としている。11は縄文施文の複合口縁を呈し、棒状浮文が3本以上貼られている。頸部及び内面は赤彩されている。12は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている高坏の口縁部片である。13～15は頸部から胴部にかけての破片で、頸部を無文帯とし、胴部上位に縄文が施されるものである。16は附加条1種（附加2条）の縄文による羽状構成がみられる胴部片である。17は平底で、胴部は外傾し、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第6号住居跡（第273図）

位置 調査区西部，B4c.区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.12m，短軸4.80mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-14°-E。

壁 壁高は43～60cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は長径25～36cm，短径21～24cmの楕円形を呈し、深さ67～81cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は正方形となる。

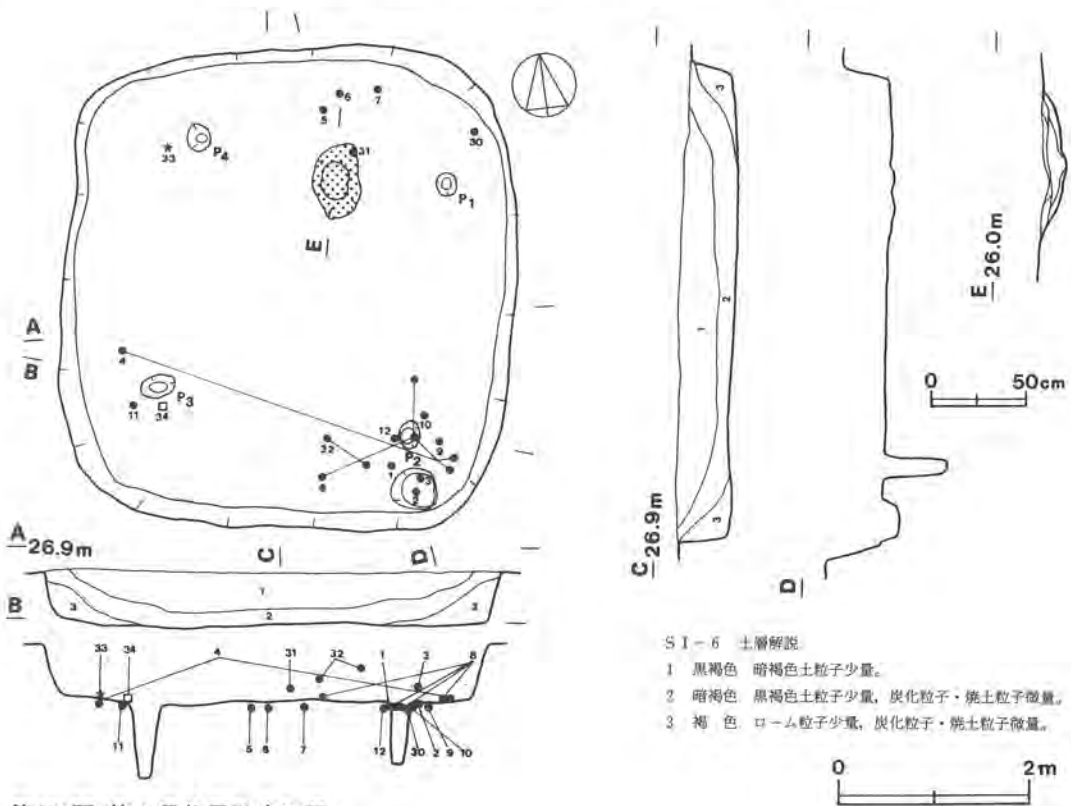
貯蔵穴 南東コーナーに確認されている。平面形は長径48cm，短径44cmの楕円形を呈し、深さ25cmである。底面は平坦で、軟らかい。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径78cm、短径48cmの楕円形を呈し、床を11cm掘り込んだ地床炉である。炉の南部に長軸と直交するように、弥生式土器の胴部片が立て掛けられた状態で出土しており、置台としたものと思われる。炉床はよく熱を受け、赤変硬化している。

覆土 暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 南東コーナー付近と北東コーナー付近の床面及び覆土下層から集中して、遺存状態が良好な弥生式土器片(壺3, 広口壺5, 甑2, 鉢1, 高坏2), 弥生式土器細片(754点)が出土している。その他、石皿が出土している。2の壺は南東コーナー付近の覆土下層から正位の状態で、6の広口壺は北東コーナー付近の床面から正位の状態で、5の広口壺は北東コーナー付近の床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。1・3の壺は南東コーナー付近の床面及び覆土下層から横位の状態で、4と8の広口壺は南東コーナー付近の覆土下層から斜位の状態でそれぞれ出土している。9・10の甑は南東コーナー付近の床面から、11の鉢は南西コーナー付近の床面からそれぞれ横位の状態で出土している。33の紡錘車は北西コーナー付近の覆土下層から、34の石皿は南西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



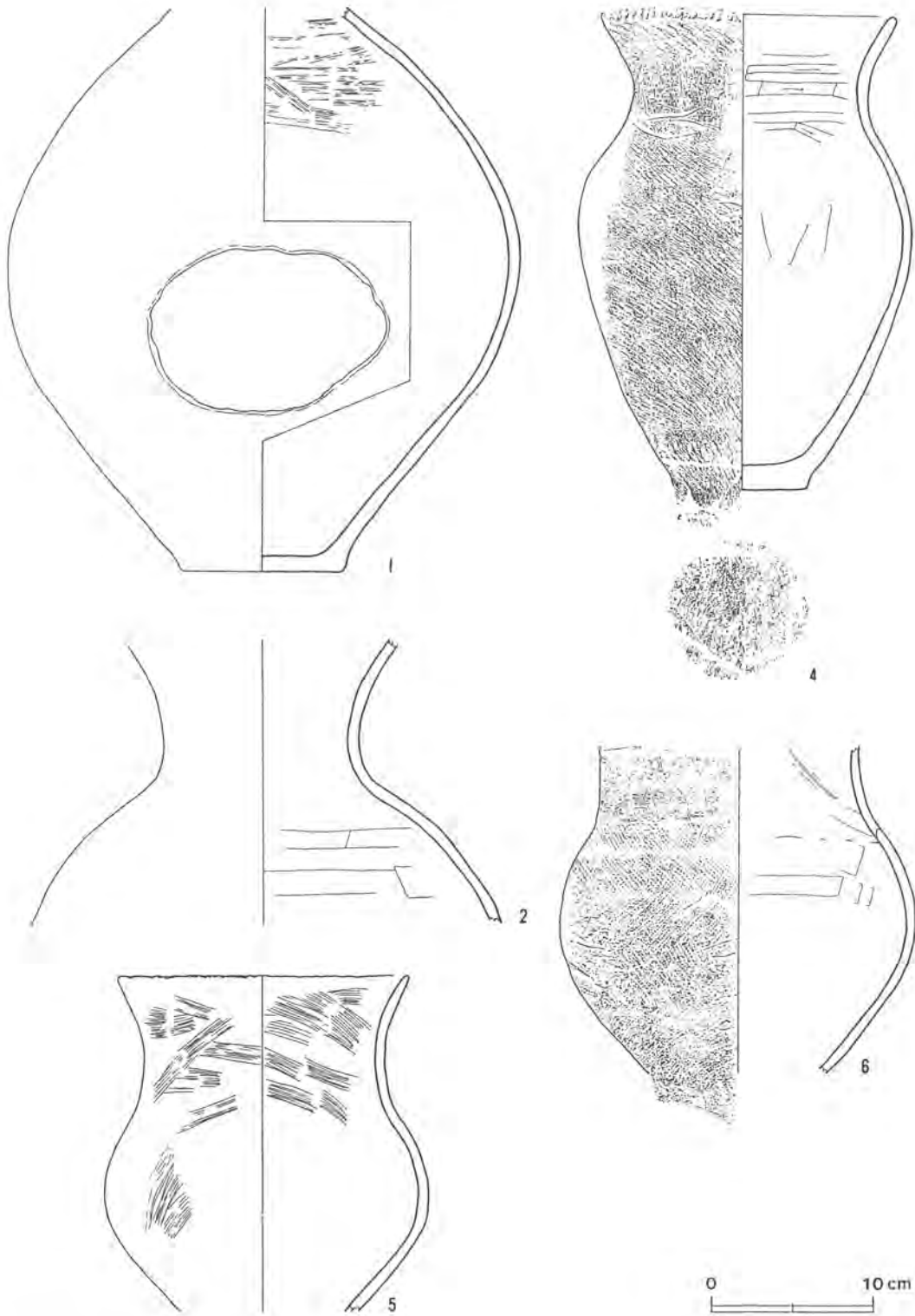
第273図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土土器観察表

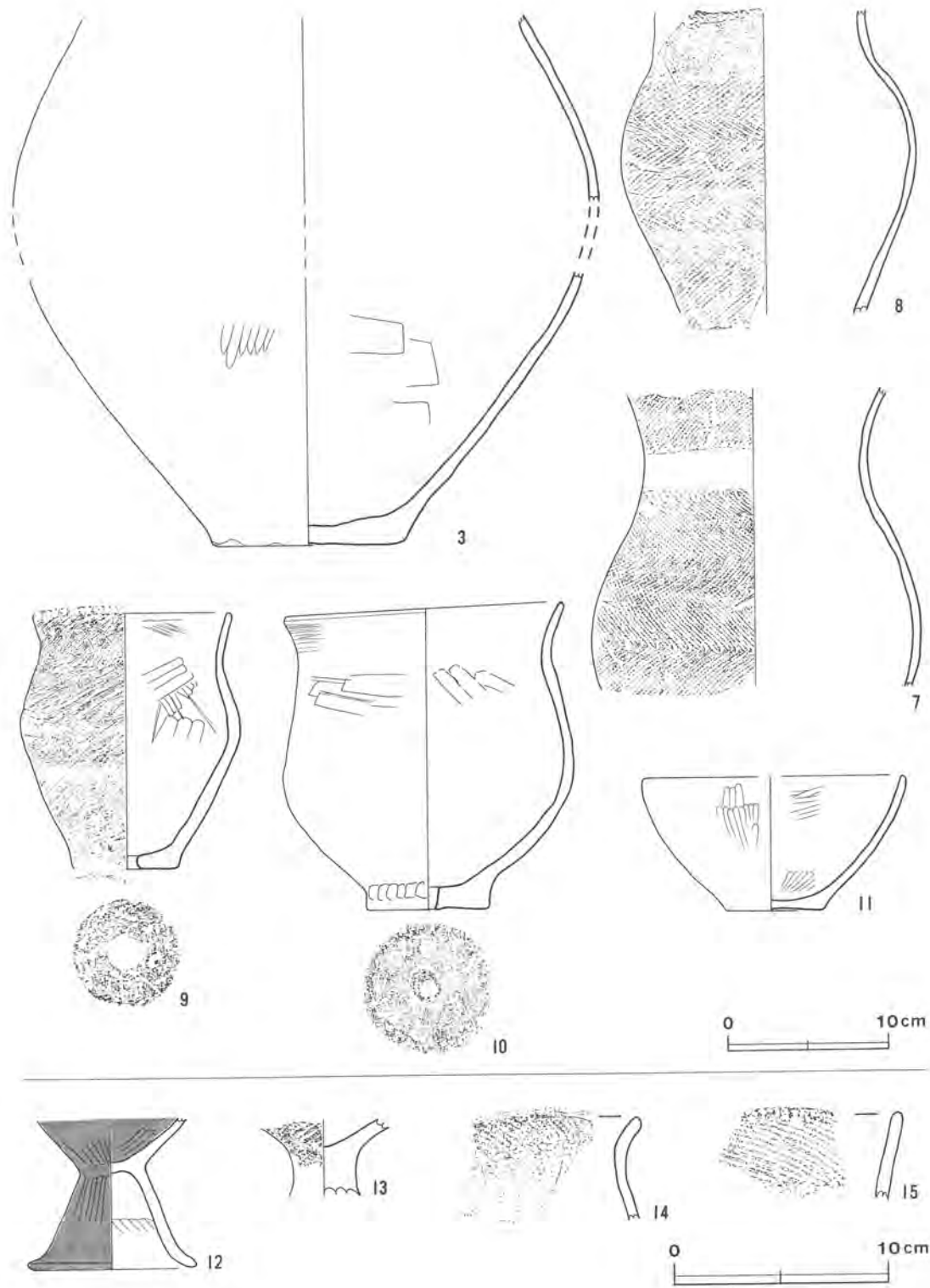
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第274図 1	壺 弥生式土器	B (34.6)	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部は強くくびれる。最大径を胴部中位に持つ。胴部中位からやや下位に長径14.0cm, 短径10.5cmの穿孔がある。外面は無文でヘラナデ, 内面はハケ目整形されている。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄褐色 普通	P32 70% 南東コーナー付近覆土下層 内面は剝離が著しい
		C 10.0			
2	壺 弥生式土器	B (18.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部から頸部にかけては大きく内彎して立ち上がり, 頸部は外反している。外面は無文でナデ調整, 内面は胴部上位がヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P33 35% 南東コーナー付近覆土下層
第275図 3	壺 弥生式土器	B [35.6]	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。外面は無文で, 縦位のヘラ削り後, ナデ調整, 内面は横位のヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P34 35% 南東コーナー付近覆土下層
		C 12.2			
第274図 4	広口壺 弥生式土器	A 18.4	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部上位に持つ。縄文施文の単口縁を呈し, 頸部は無文帯としている。胴部には直前段反燃りの縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P35 90% 南東コーナー付近覆土下層 外面スス付着
		B 29.1			
		C 8.3			
5	広口壺 弥生式土器	A 18.0	底部欠損。胴部は大きく内彎し, 頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を胴部中位に持つ。口唇部には縄文が施されているが, 外面は無文である。内・外面ともにハケ目整形後, ナデ調整されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P36 80% 北東コーナー付近床面
		B (20.6)			
6	広口壺 弥生式土器	B (20.1)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり, 頸部は外反している。頸部は無文帯とし, 胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P37 70% 北東コーナー付近床面
第275図 7	広口壺 弥生式土器	B (18.6)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり, 頸部は外反している。頸部下半は無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており, 羽状構成をとる。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P38 60% 北東コーナー付近床面
8	広口壺 弥生式土器	B (19.1)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり, 頸部は外反している。頸部下半は無文帯とし, それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており, 羽状構成をとる。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P39 65% 南東コーナー付近覆土下層
9	甗 弥生式土器	A 12.4	平底。焼成前の孔を持つ単孔式。胴部は底部から内彎して立ち上がり, 頸部から口縁部にかけては外傾している。口唇部には縄文が施されている。縄文施文の単口縁を呈し, 頸部上位は磨消されている。胴部には細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄褐色 普通	P43 100% 南東コーナー付近床面 内面炭化物付着
		B 16.0			
		C 6.7			
		孔径 2.2			
10	甗 弥生式土器	A 17.4	突出ぎみの平底。焼成前の孔を持つ単孔式。胴部は底部から内彎して立ち上がり, 頸部から口縁部にかけては外反する。最大径を胴部中位に持つ。外面は無文で, 口縁部は横ナデ, 頸部は粗いヘラ削りがなされている。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P44 90% 南東コーナー付近床面
		B 19.3			
		C 7.4			
		孔径 0.8			
11	鉢 弥生式土器	A [16.3]	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり, 口縁に至る。外面は無文で, 胴部上位は縦位に, 内面は横位にヘラ磨きされている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P45 80% 南西コーナー付近床面
		B 8.4			
		C 6.0			
12	高坏 弥生式土器	B (7.1)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き, 裾部で外反する。坏部は内彎して立ち上がる。外面と坏部内面はヘラ磨き後, 赤彩されている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P46 40% 南東コーナー付近床面
		D 7.9			
		E 4.9			
13	高坏 弥生式土器	B (3.5)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P47 20% 南東コーナー付近覆土下層
		E (1.4)			

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第276図 33	紡錘車	5.2	5.2	1.4	8.0	37.4	100	覆土下層	DP1

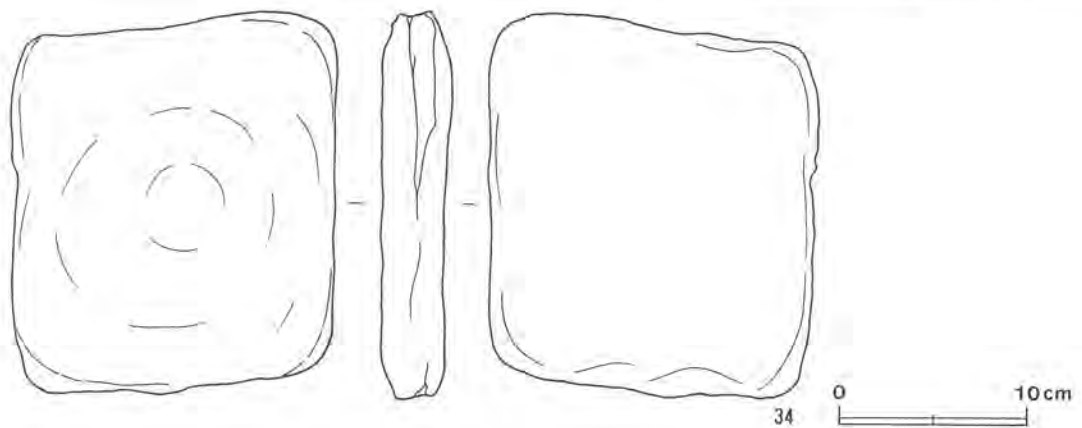
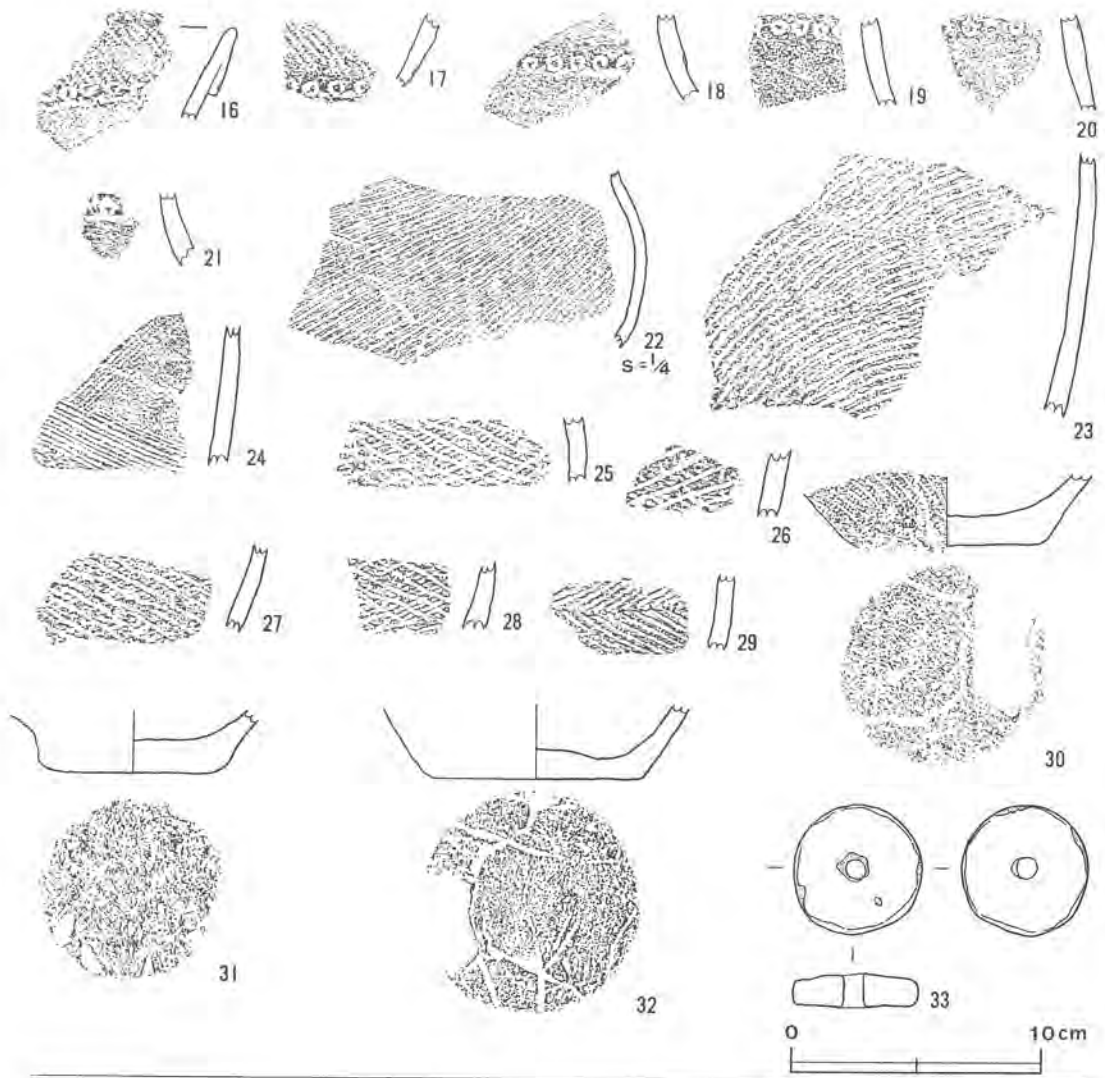
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第276図 34	石皿	20.7	17.4	4.0	2320.3	片麻岩	床面	Q1



第274图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第275図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第276图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

第275・276図14～32は、第6号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。14～17は口縁部片である。14は「く」の字状に外反して立ち上がる甕形土器の口縁部片である。口縁部には単節縄文が施され、頸部を無文帯としている。15は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている単口縁を呈し、口唇部にも縄文が施されている。16・17は単節縄文の施されている複合口縁を呈し、口縁下位に円形刺突文が施されている。頸部は無文帯としている。18～21は同一個体と思われる、外面無文で、頸部下位に段を持ち、その位置に円形刺突文が施されている。22～29は胴部片であり、24は櫛歯状工具による斜位の条線文が施されている。22・23・29は附加条1種（附加2条）による縄文が施されており、29は羽状構成をとっている。25～28は附加条2種（附加1条）の縄文が施されている胴部片であり、羽状構成をとっている。30～32は底部片であり、平底を呈する。30は胴部に縄文が施されているが、31・32は無文である。いずれも底面に木葉痕を持つ。

第7号住居跡（第277図）

位置 調査区西部、A4i₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.16m、短軸4.53mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-10°-W。

壁 壁高は24～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

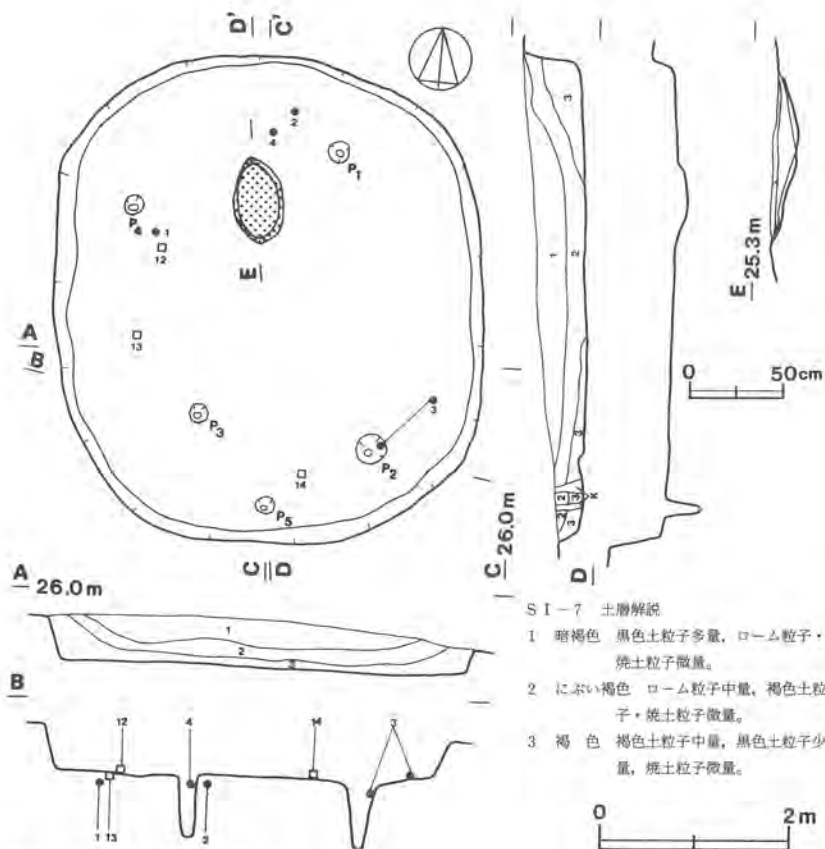
ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は径20～33cmの円形を呈し、深さ52～70cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P₅は径21cmの円形を呈し、深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径175cm、短径98cmの楕円形を呈し、床を25cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

覆土 にぶい褐色土・黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 北壁・南壁付近の床面を中心に、弥生式土器片（壺1、広口壺2、鉢1）、弥生式土器細片（105点）が出土している。その他、石器が出土している。1の広口壺は炉の西側の床面から逆位の状態で、2の広口壺は北壁中央付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。4の鉢は北壁中央付近の床面から逆位の状態で出土している。12の磨石は炉西側の床面から、13の磨石は西壁中央付近の床面から、14の砥石は南壁中央付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



SI-7 土層解説

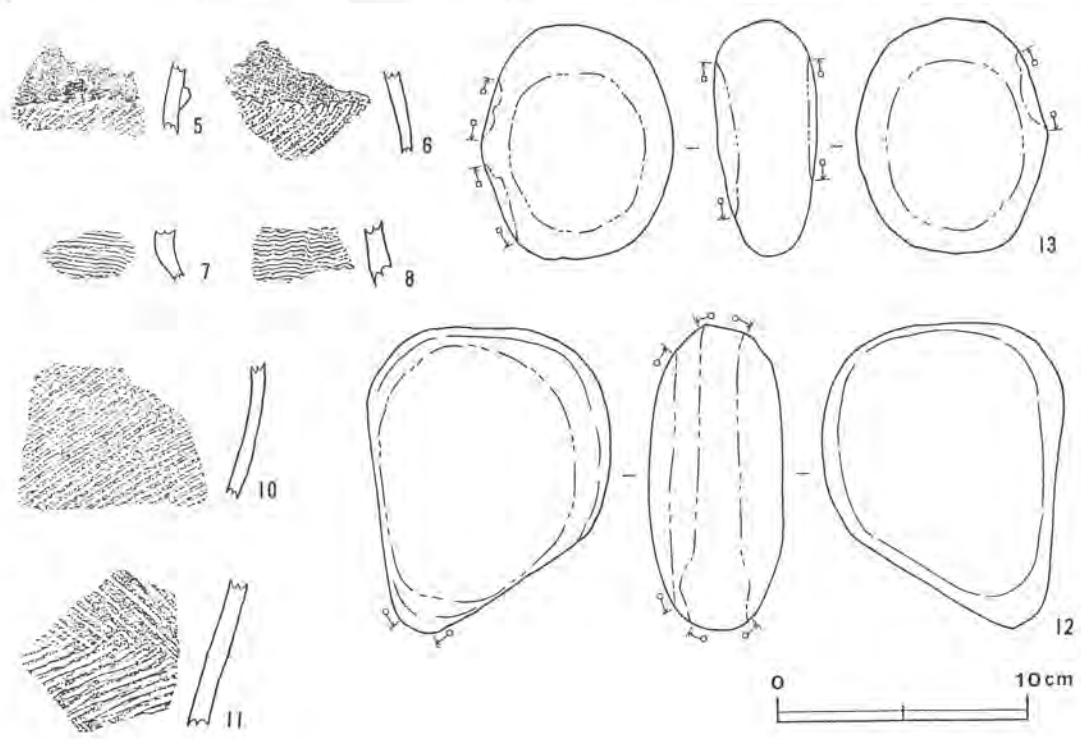
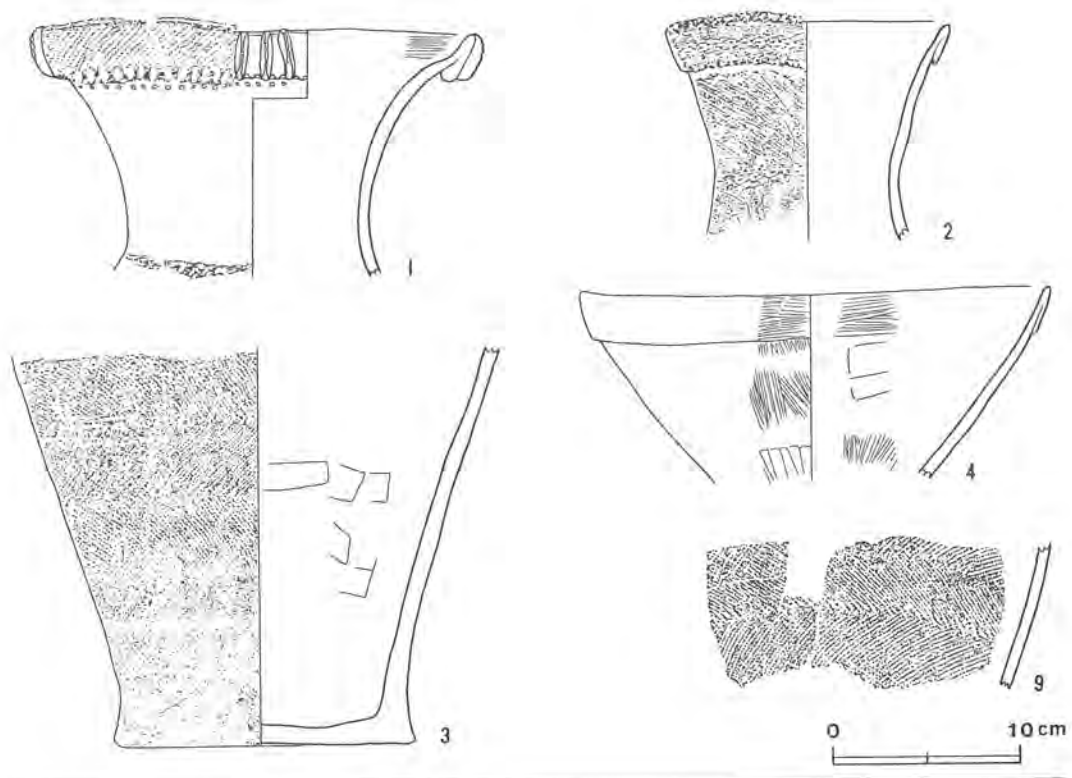
- 1 暗褐色 黒色土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量。
- 2 にぶい褐色 ローム粒子中量、褐色土粒子・焼土粒子微量。
- 3 褐色 褐色土粒子中量、黒色土粒子少量、焼土粒子微量。

第277図 第7号住居跡実測図

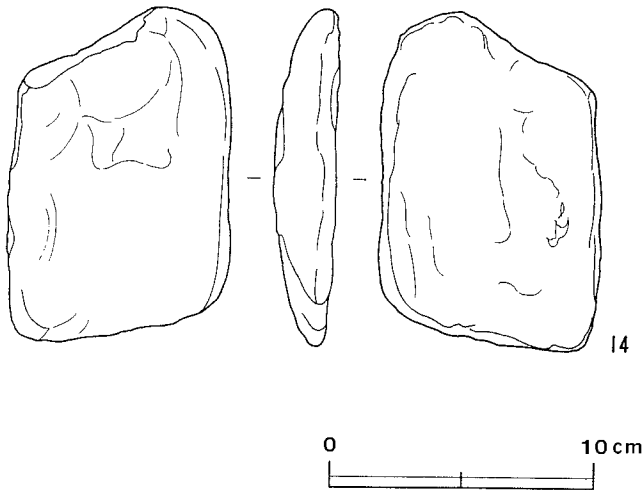
第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第278図 1	壺 弥生式土器	A 23.8	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。縄文施文の複合口縁を呈し、3本1組の棒状浮文が4単位にわたり貼られ、下端にはキザミ目が施されている。頸部を無文帯とし、胴部には単節縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P48 30% 炉西側床面
		B (12.8)			
2	広口壺 弥生式土器	A 15.2	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。結節文の施される複合口縁を呈し、下端は縄文原体による押圧がなされている。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、結節文により、無文帯と区画している。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P49 30% 北壁中央付近床面
		B (11.8)			
3	広口壺 弥生式土器	B (21.1)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成を持つ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P50 40% 南東コーナー付近床面 内面は剝離が著しい
		C 16.1			
4	鉢 弥生式土器	A 25.1	底部欠損。胴部は外傾してから、緩やかに内彎して口縁に至る。複合口縁を呈し、外面は無文で、口縁部・胴部上位はハケ目整形、胴部下位はヘラ削りされている。	砂粒・長石・パミス 明赤褐色 普通	P51 60% 北壁中央付近床面 2次焼成
		B (10.3)			

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第278図	12 磨	石	12.3	9.8	5.5	952.0	砂岩	床面	Q2
	13 磨	石	9.4	7.7	4.1	440.2	安山岩	床面	Q3
第279図	14 砥	石	12.7	8.5	2.5	347.0	花崗岩	覆土下層	Q4



第278图 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第279図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

第278図5～11は、第7号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は無文の複合口縁を呈し、口縁下位に貼瘤を持つ。頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6は頸部下半を無文帯とし、胴部には縄文が施されている。7・8は頸部片であり、横走波状文が密に施されている。9～11は胴部片であり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9・11の縄文は羽状構成をとっている。

第8号住居跡(第280図)

位置 調査区西部、A4h₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.60m、短軸5.54mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-10°-W。

壁 壁高は10～42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体によく踏み固められ硬い。

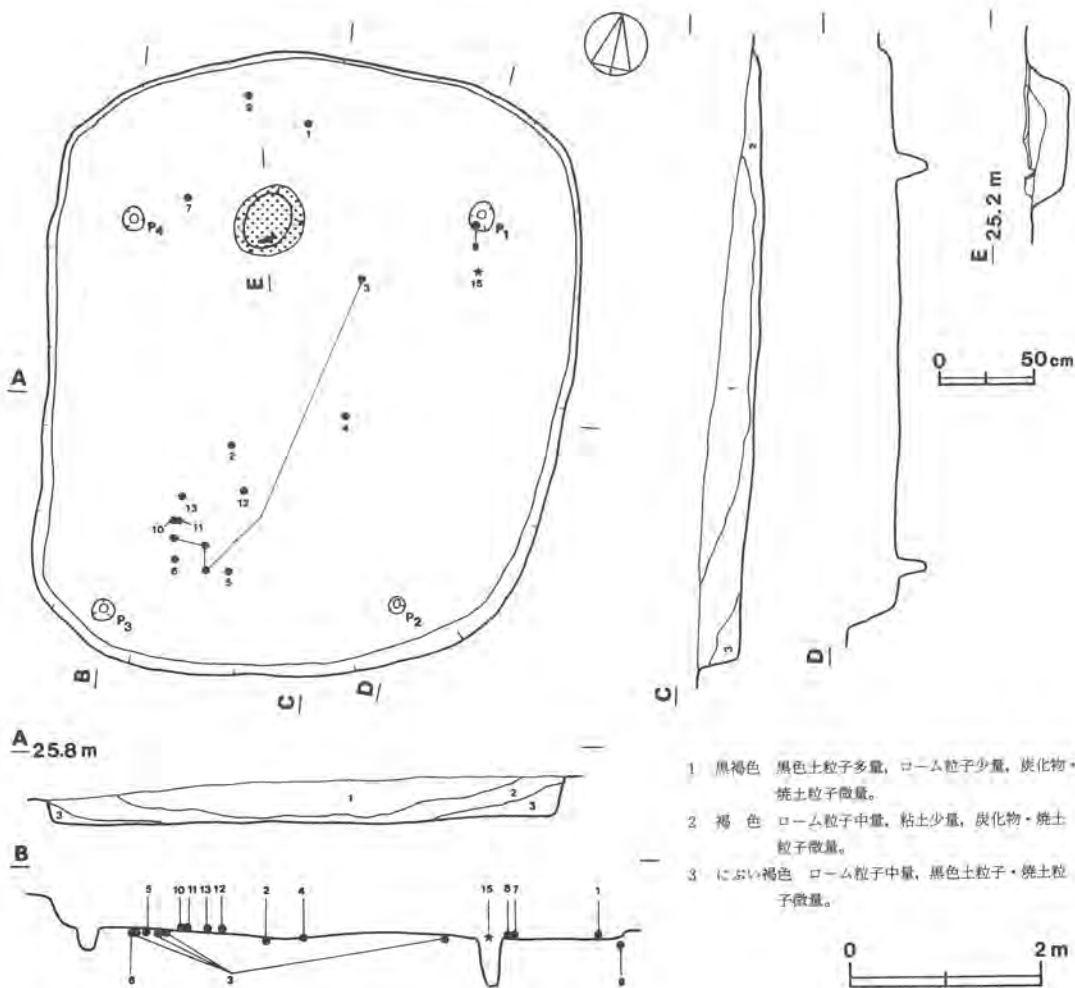
ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁～P₄は径18～28cmの円形を呈し、深さ27～52cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径74cm、短径68cmの楕円形を呈し、床を21cm掘り込んだ地床炉である。炉の南部には長軸と直交するように弥生式土器の胴部片が立て掛けられた状態で出土しており、置台と思われる。炉床は熱を受け、赤変硬化している。

覆土 褐色土・黒褐色土が厚く堆積し、自然堆積と思われる。

遺物 南西コーナー付近の床面から、遺存状態が良好な弥生式土器片(甕2、壺2、広口壺6、鉢1、甑2)、弥生式土器細片(167点)が出土している。1の甕は北壁中央付近の床面から、3の壺は南西コーナー付近の床面から逆位の状態で、5・6の広口壺と11の鉢は南西コーナー付近の床面から、5・6は正位の状態で、11は横位の状態でそれぞれ出土している。2の甕は中央から南西壁寄りの床面から横位の状態で出土している。12・13の甑は南西コーナー付近の覆土下層から、9の広口壺は北壁中央付近の床面からそれぞれ出土している。15の土錘は北東コーナー付近の床面から出土している。

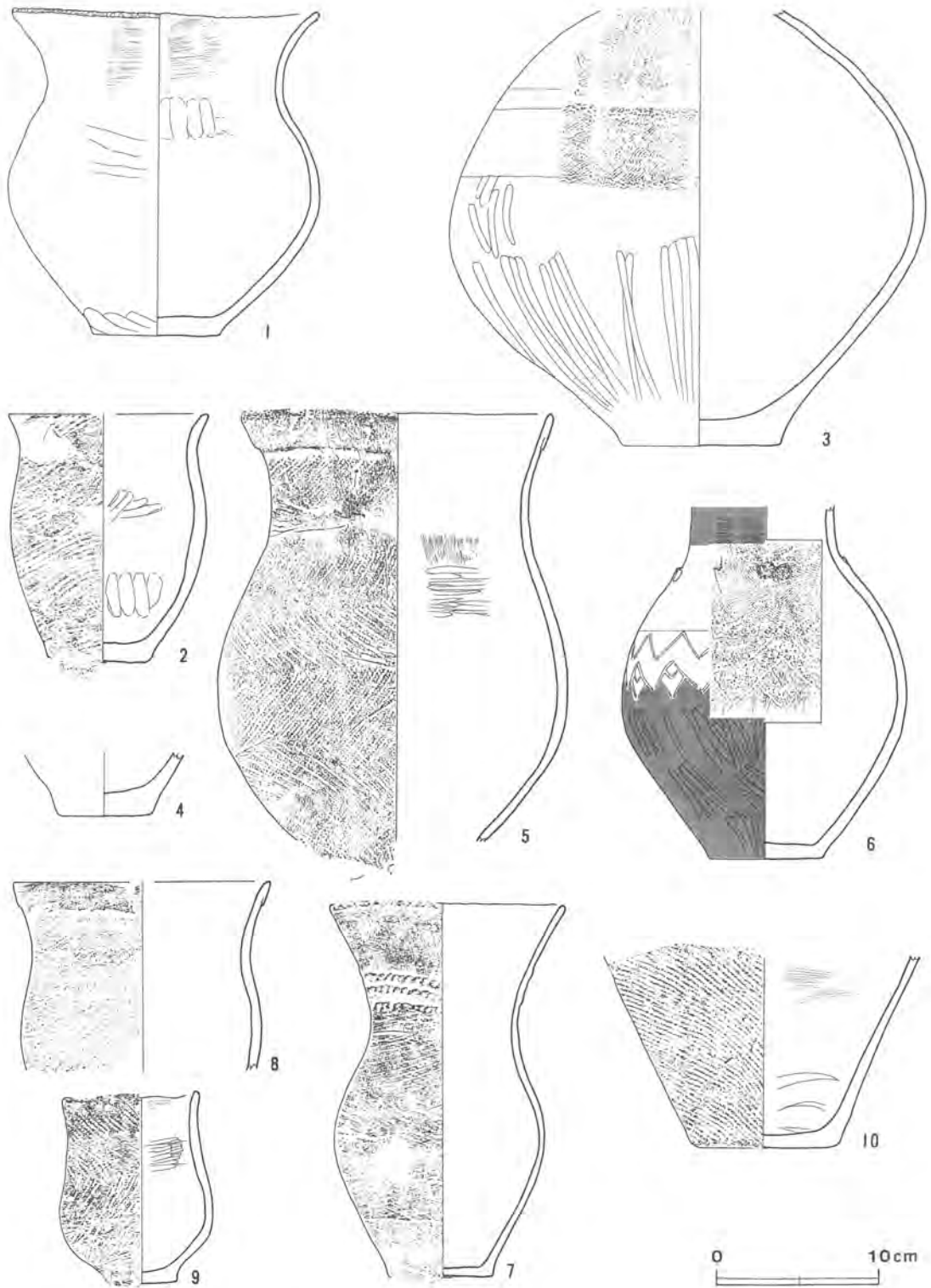
所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半のものと考えられる。



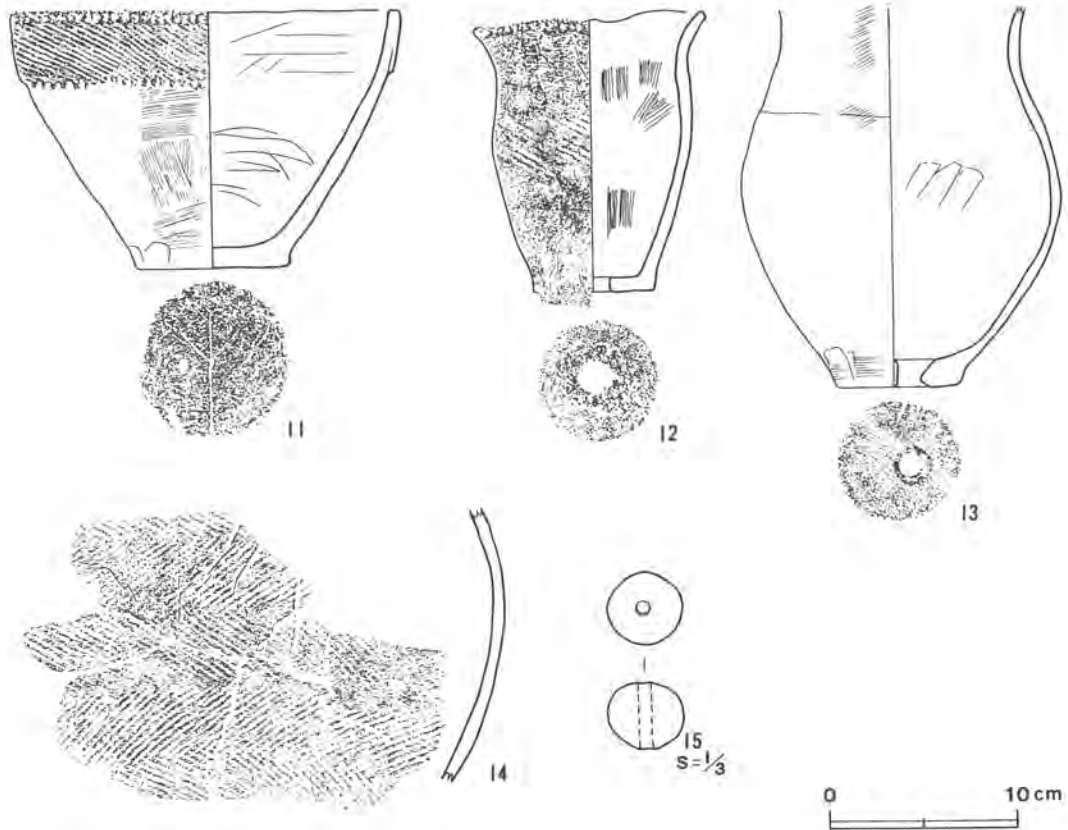
第280図 第8号住居跡実測図

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第281図 1	甕 弥生式土器	A 19.2	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては大きく外反している。口唇部には木目状工具による押圧がなされている以外、文様は施されていない。内・外面とも口縁部は横ナデ。胴部上位はヘラ削りされている。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P56 60% 北壁中央付近床面 2次焼成
		B 20.4			
		C 8.0			
2	甕 弥生式土器	A [12.6]	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。全面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが羽状構成をとらない。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P58 45% 中央から南西寄り床面
		B 15.7			
		C 6.2			
3	壺 弥生式土器	B (27.5)	胴下半部。平底。胴部は底部から球形に内彎して立ち上がる。最大径を胴部中位に持つ。胴部上位に2段にわたり結節文区画による縄文帯を持つ。原体は細目の単節縄文である。胴部中位以下は無文であり、ヘラ磨きされている。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P53 70% 南西コーナー付近床面 内面は剝離が著しい
		C 9.8			



第281図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第282図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第281図 4	壺 弥生式土器	B (4.0) C 6.1	底部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面は無文でヘラナデされている。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P60 5% 中央部覆土下層
5	広口壺 弥生式土器	A 19.1 B (26.9)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては緩やかに外反している。最大径を胴部中位に持つ。無文の複合口縁を呈し、頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加糸1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P52 85% 南西コーナー付近床面 2次焼成
6	広口壺 弥生式土器	B (22.2) C 7.0	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内彎して、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。最大径を胴部中位に持つ。頸部を無文帯とし、胴部上位に網目状捺糸文区画の羽状縄文帯を持つ。その下には沈線区画による鋸歯状文が周回している。鋸歯状文内にも網目状捺糸文が施されている。頸部はハケ目整形後、胴部下位はヘラ磨き後、赤彩されている。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P54 80% 南西コーナー付近床面 内面は剝離が著しい
7	広口壺 弥生式土器	A 14.8 B 23.4 C 6.6	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。無文の単口縁を呈し、頸部とは3本の押窪隆起線で区画している。頸部以下には附加糸2種(附加1条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・雲母・パミス にふい橙色 普通	P55 70% 北西コーナー付近床面 2次焼成
8	広口壺 弥生式土器	A [16.2] B (11.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反している。無文の薄い複合口縁を呈し、頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加糸1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい赤褐色 普通	P57 30% 北東コーナー付近覆土下層

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第281図 9	弥生式土器 広口壺	A 8.6	平底でやや突出している。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部のくびれは弱く、頸部から口縁部にかけては緩やかに外反する。全面に縄文が施されており、上半部は単節による、下半部は附加条1種（附加2条）による縄文が施されており、羽状構成をとっている。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 59 100% 北壁中央付近床面
		B 12.2			
		C 4.6			
10	弥生式土器 広口壺	B (12.0)	胴下半部。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 62 50% 南西コーナー付近床面
		C 9.2			
第282図 11	鉢 弥生式土器	A 20.7	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、口縁に至る。縄文施文の複合口縁を呈し、下端には縄文原体による押圧が施されている。外面は無文で、ハケ目調整されている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 良好	P 61 95% 南西コーナー付近床面
		B 13.8			
		C 8.1			
12	甗 弥生式土器	A 12.4	平底。焼成前の孔を持つ単孔式である。胴部は外傾して立ち上がり、上位で僅かに内彎する。口縁部は大きく外反する。口縁に最大径を持つ。口唇部は押圧により、小波状を呈している。無文の単口縁で、胴部上位には単節縄文が施されているが、下位はナデ調整により、無文となっている。	砂粒・長石・石英・雲母 黄橙色 普通	P 63 100% 南西コーナー付近覆土下層
		B 15.1			
		C 6.5			
		孔径 1.7			
13	甗 弥生式土器	B (20.5)	口縁部欠損。平底。焼成後の孔を持つ単孔式である。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はほぼ垂直に外反する。外面無文でハケ目調整されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P 64 70% 南西コーナー付近覆土下層 広口壺の再利用
		C 6.4			
		孔径 1.2			

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第282図 15	球状土鉢	3.1	3.0	2.7	6.0	22.7	100	床 面	D P 2

第282図14は、第8号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。14は大きく内彎し、附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。

第9号住居跡（第283図）

位置 調査区西部，A4f₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.90m，短軸4.85mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-2°-E。

壁 壁高は2～22cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部は踏み固められ硬い。

ピット 2か所（P₁・P₂）検出されている。P₁・P₂は径23～25cmの円形を呈し、深さ52～59cmの主柱穴と思われる。P₁・P₂は東壁・西壁際のほぼ中央から検出され、主柱穴を結んだ線は、北壁・南壁とほぼ平行となることから、2本柱の住居跡と考えられる。

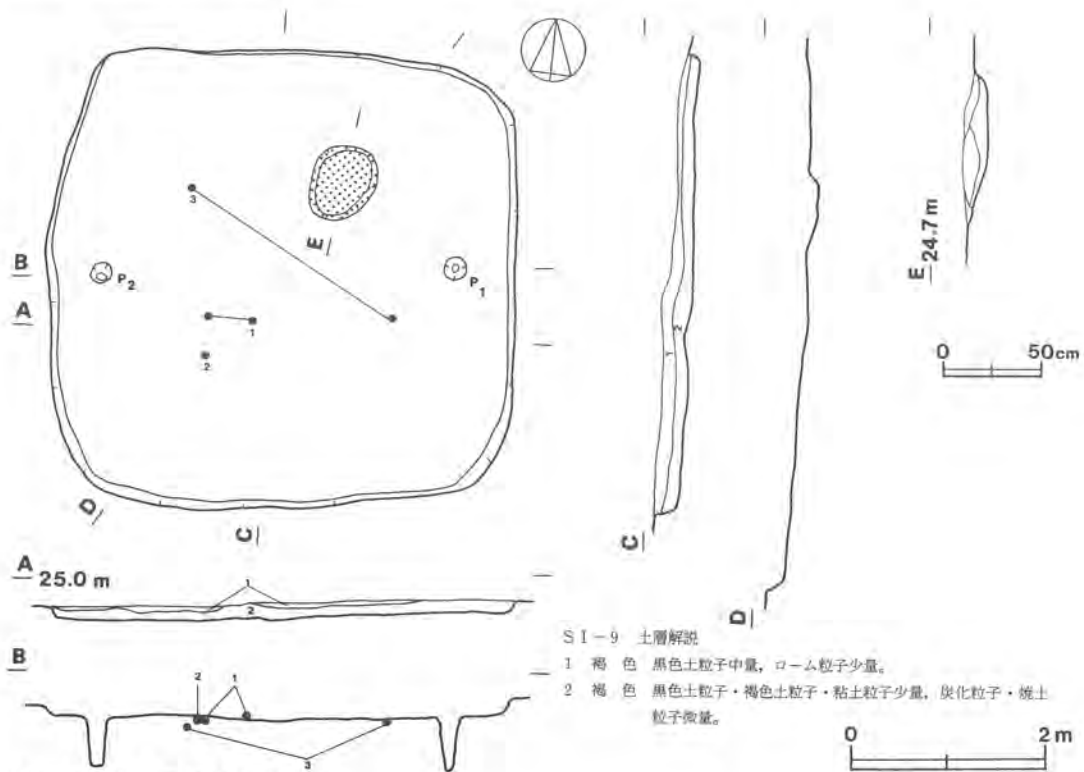
炉 長軸線上の中央から北寄りに検出されている。平面形は長径78cm，短径64cmの楕円形を呈し、床を13cm掘り込んだ地床炉である。炉床はよく熱を受け、赤変硬化している。

覆土 褐色土が全体に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 中央部の床面を中心に、弥生式土器片（壺1，広口壺2，蓋1），弥生式土器細片（181点）が

出土している。1の壺は中央部の床面から、横位の状態で出土している。2は広口壺の胴下半部で中央から南西寄りの覆土下層から出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

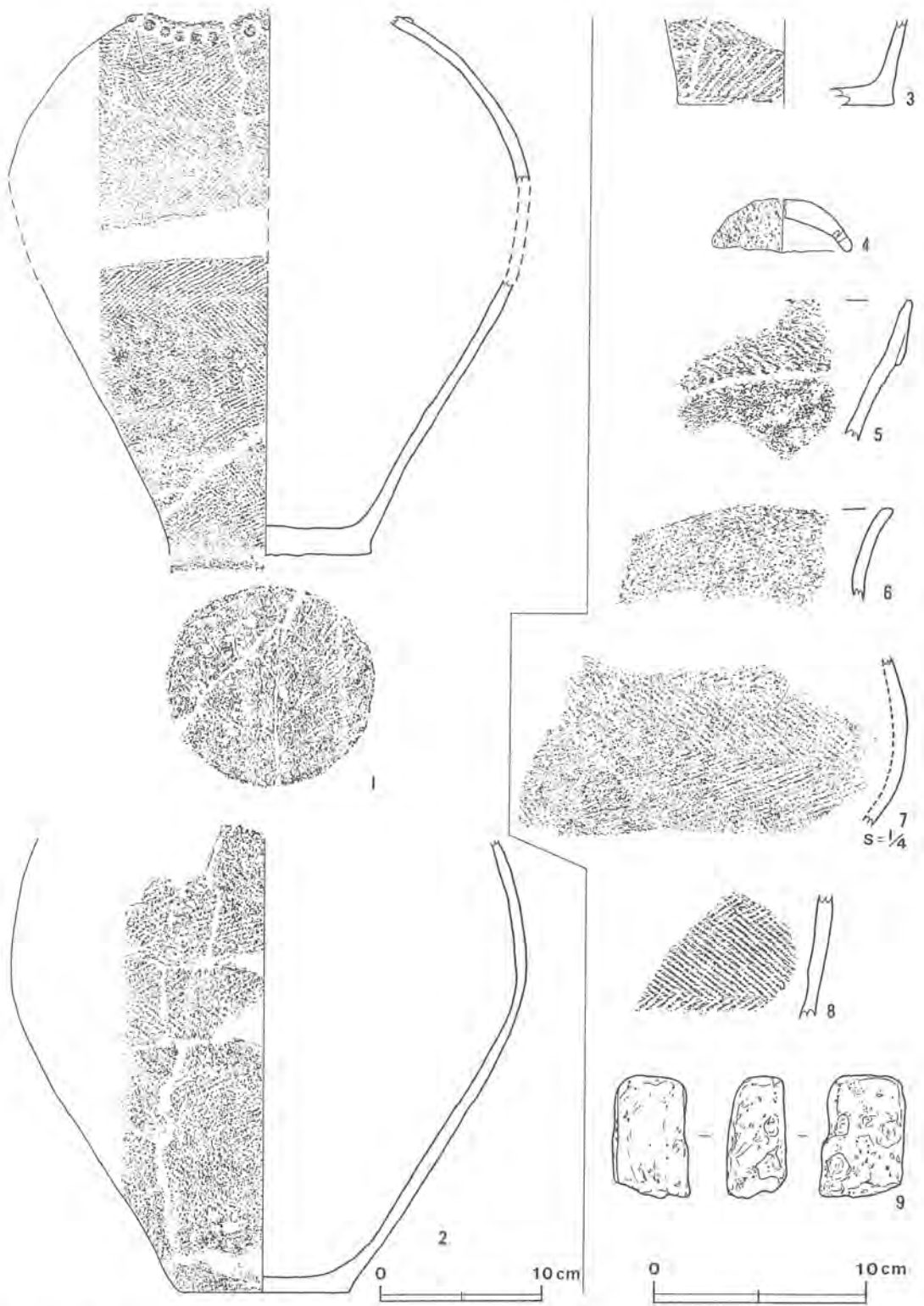


第283図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第284図 1	壺 弥生式土器	B [34.0] C 12.7	頸部から口縁部にかけて欠損。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部下端に「ボタン」状の貼付けが密になされている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄橙色 普通	P65 中央部床面 60%
2	広口壺 弥生式土器	B (28.4) C 11.2	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には太目の単節縄文が施されており、羽状構成をとっている。内・外面とも剝離が著しい。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 不良	P66 中央から南西寄り覆土下層 35%
3	広口壺 弥生式土器	B (5.6) C [13.6]	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとる。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P67 中央から南東寄り床面 10%
4	蓋 弥生式土器	A 6.7 B 2.5 C [1.5]	天井部は内彎し、器厚を減しながら口縁に至る。口縁近くに孔を持つ。内・外面とも摩耗が著しい。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P68 中央部覆土下層 40%

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第284図	9	砥石	5.8	3.7	2.9	15.7	砥石	覆土 Q32



第284图 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

第284図5～8は、第9号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は縄文施文の複合口縁を呈し、下端は縄文原体により押圧されている。頸部は無文帯としている。6は無文の単口縁を呈し、口縁部は大きく外反している。7・8は胴部片であり、附加条1種（附加2条）による縄文が施されており、羽状構成をとっている。5～7は摩滅が著しい。

第10号住居跡（第285図）

位置 調査区西部，A4f₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.78m，短軸4.43mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-4°-W。

壁 壁高は5～32cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

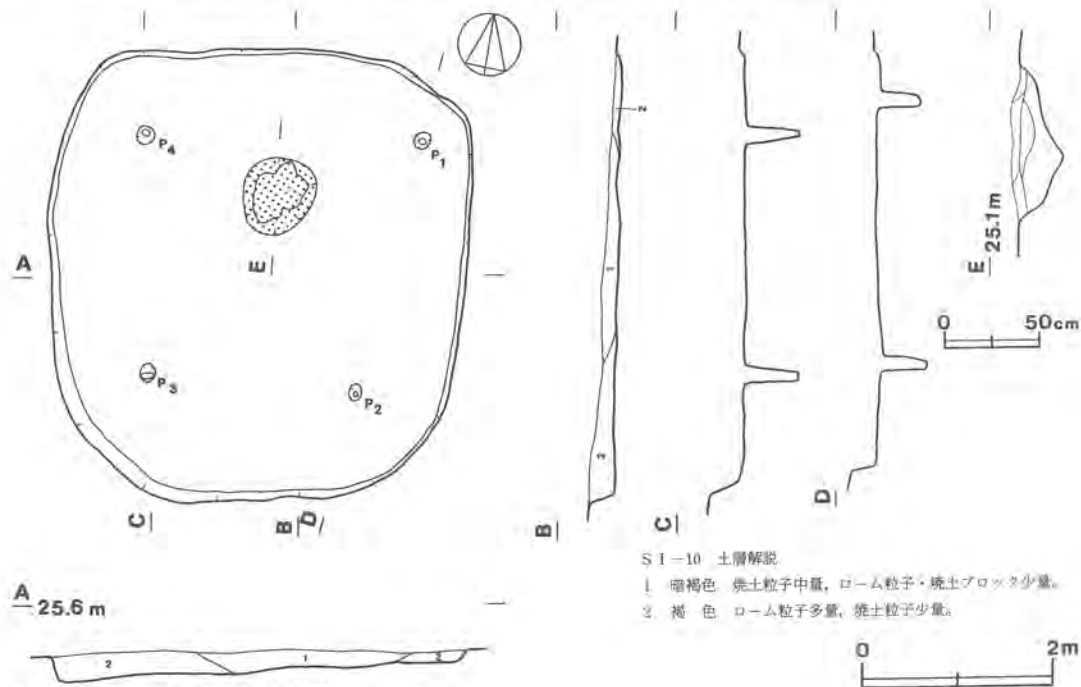
ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は径15～21cmの円形を呈し、深さ45～58cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径94cm，短径80cmの不定形で、床を25cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土下層から弥生式土器細片（48点）が少量出土している。

所見 住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



S1-10 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
 2 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子少量。

第285図 第10号住居跡実測図



第286図 第10号住居跡出土遺物拓影図

第286図1～3は、第10号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1～3は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。

第11号住居跡（第287図）

位置 調査区西部，A4e₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.36m，短軸4.02mの隅丸方形を呈している。

長軸方向 N-2°-E。

壁 壁高は4～30cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 2か所（P₁・P₂）検出されている。P₁・P₂は径22～28cmの円形を呈し，深さ39～55cmである。主柱穴と思われるが他に柱穴と思われるピットは検出されていない。

炉 長軸線上の中央からやや北寄りに検出されている。平面形は長径92cm，短径74cmの楕円形を呈し，床を21cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく熱を受け，赤変硬化している。

覆土 褐色土・灰褐色土が厚く堆積しており，自然堆積と思われる。

遺物 北西部の床面及び覆土下層を中心に，弥生式土器片（広口壺2），弥生式土器細片（151点）が出土している。1の広口壺は炉西側の覆土中層から横位の状態で出土している。2は広口壺の胴下半部で西壁中央際の床面から逆位の状態で出土している。

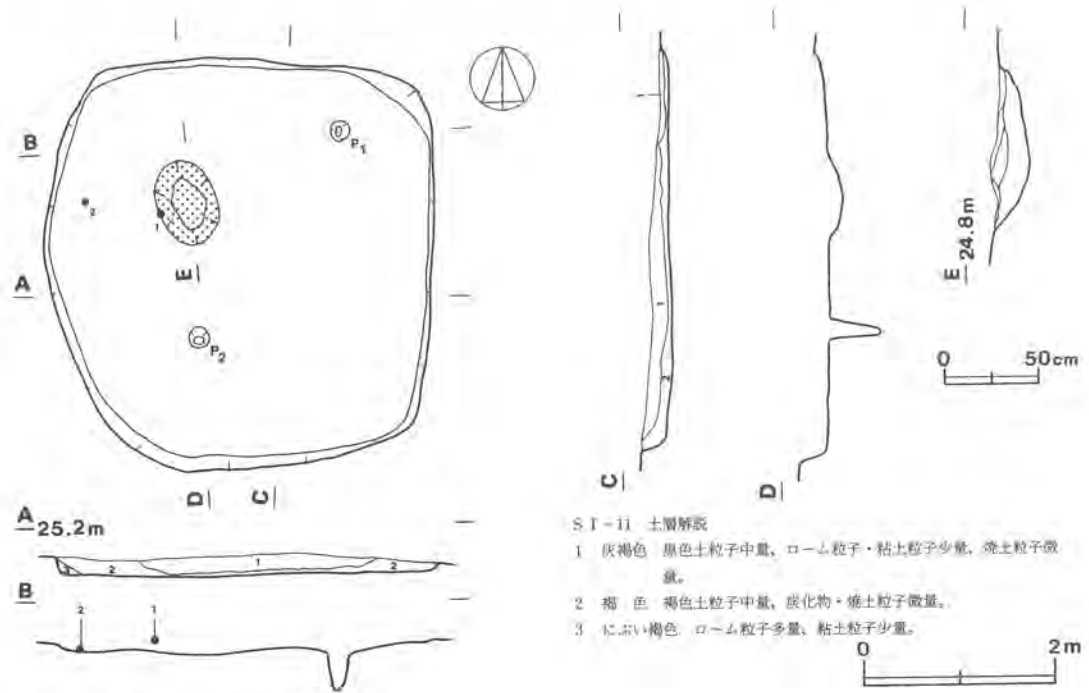
所見 住居跡の形態や出土遺物から，弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第11号住居跡出土土器観察表

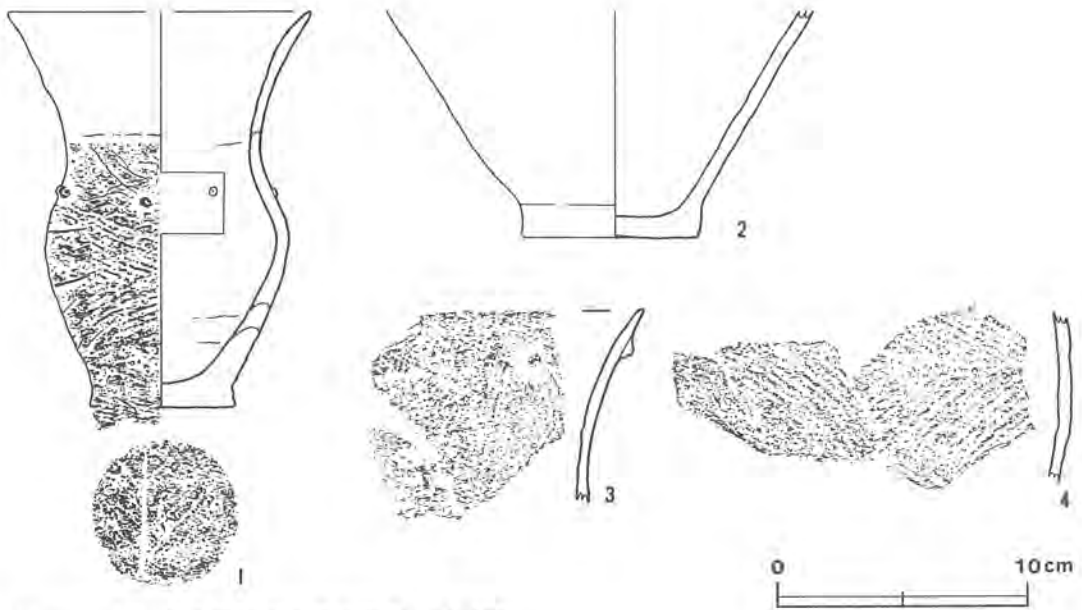
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第288図 1	広口壺 弥生式土器	A [12.0] B 16.0 C 5.8	平底で張り出しを持つ。胴部は底部から内湾して立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反する。最大径を口縁に持つ。口縁部から頸部にかけての文様は摩滅により不明であるが，頸部下端に「ボタン」状の貼付けがなされ，胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されており，羽状構成を持つ。底面には木葉痕を持つ。	砂粒・長石・石英・雲母 淡黄色一部黄灰色 不良	P69 80% 炉西側覆土中層
2	広口壺 弥生式土器	B (9.2) C 7.0	胴下半部。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面は無文と思われるが，摩滅が著しい。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P70 30% 西壁中央際床面

第288図3・4は，第11号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は複合口縁を呈し，口縁下端に瘤が貼られている。頸部を無文帯とするものと思われるが，摩滅が著しいため不

明である。4は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、羽状構成をとっている。



第287図 第11号住居跡実測図



第288図 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図

第12号住居跡 (第289図)

位置 調査区東部, A6f₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.74m, 短軸3.01mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向 N-40°-W。

壁 壁高は12~24cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 検出されていない。

炉 長軸線上の中央から北西寄りに検出されている。平面形は長径58cm, 短径46cmの楕円形を呈し, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床はよく熱を受け, 赤変硬化している。

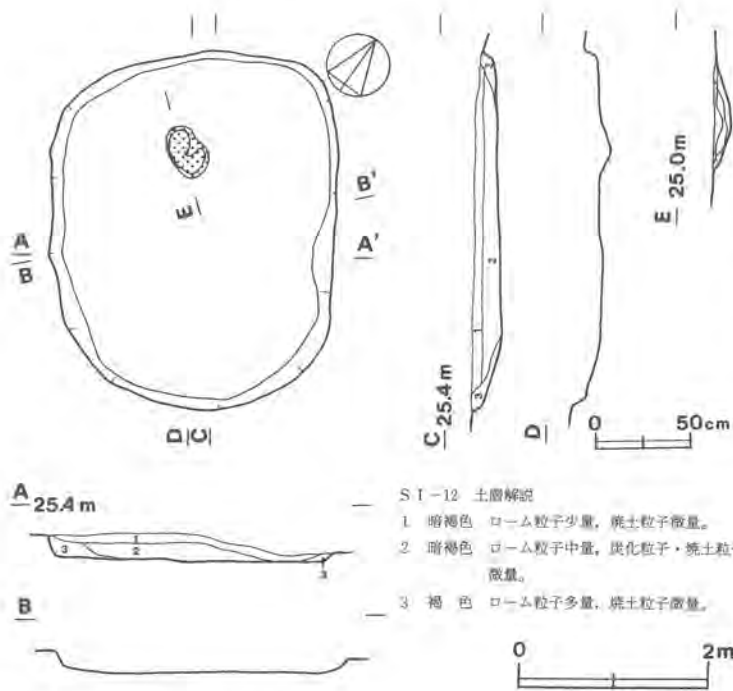
覆土 暗褐色土が厚く堆積しており, 自然堆積と思われる。

遺物 中央からやや南側の覆土下層を中心に, 弥生式土器細片(51点)が出土している。

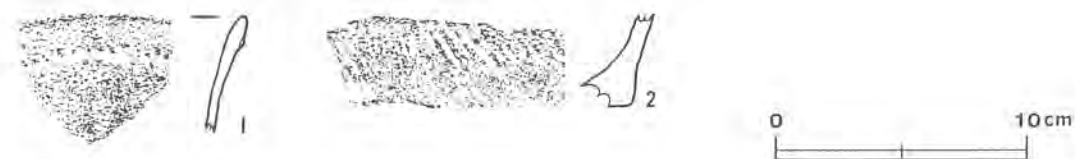
所見 住居跡の形態や出土遺物から, 弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

第290図1・2は, 第12号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。

1は複合口縁を呈し, 口縁下端は押圧されている。2は底部片であり, 胴部には縄文が施されている。1・2とも摩滅が著しい。



第289図 第12号住居跡実測図



第290図 第12号住居跡出土遺物拓影図

表5 原田西遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)						
1	B8e2	N-73°-W	隅丸方形	4.82 × 4.42	35~46	平坦	5	1	自然	弥生式土器片94, 土師器片11, 縄文式土器片5	
2	B7f5	N-14°-W	隅丸長方形	4.70 × 4.05	36~48	平坦	4	1	自然	弥生式土器片58, 縄文式土器片5	第1号溝と重複
3	B7a3	N-60°-W	隅丸方形	4.92 × 4.62	30~48	凹凸	4	1	自然	弥生式土器片129	一部攪乱
4	B6e7	N-21°-W	隅丸方形	6.28 × 5.70	22~56	平坦	5	1	自然	弥生式土器片132, 縄文式土器片5	火災住居跡
5	B5a6	N-74°-W	不整隅丸長方形	6.74 × 5.54	15~50	平坦	5	1	自然	弥生式土器片106, 縄文式土器片27	
6	B4c4	N-14°-E	隅丸方形	5.12 × 4.80	43~60	平坦	4	1	自然	弥生式土器片766, 土師器片10, 縄文式土器片47, 土製品1, 石製品1	
7	A4i3	N-10°-W	隅丸長方形	5.16 × 4.53	24~48	平坦	5	1	自然	弥生式土器片109, 石製品3	
8	A4h3	N-10°-W	隅丸長方形	6.60 × 5.54	10~42	平坦	4	1	自然	弥生式土器片180, 土製品1	
9	A4f1	N-2°-E	隅丸方形	4.90 × 4.85	2~22	平坦	2	1	自然	弥生式土器片185	
10	A4f4	N-4°-W	隅丸方形	4.78 × 4.43	5~32	平坦	4	1	自然	弥生式土器片48, 縄文式土器片1	
11	A4e3	N-2°-E	隅丸方形	4.36 × 4.02	4~30	平坦	2	1	自然	弥生式土器片153, 縄文式土器片1	
12	A6f5	N-40°-W	隅丸長方形	3.74 × 3.01	12~24	平坦	0	1	自然	弥生式土器片51	

2 土坑

当調査区から検出された土坑は、95基である。第70号土坑は、土器棺が出土しており墓墳であることが確認されている。その他、整理の段階で検討した結果、第70号土坑以外は直接遺構に伴う出土遺物はなく、時期や性格も不明であるので、ここでは一覧表に記載した。なお、土坑番号は調査当初に付した番号である。

第70号土坑

位置 調査区東部、B8e4区に確認されている。

規模と平面形 長径〔0.65〕m、短径〔0.40〕mの楕円形を呈するものと思われ、深さ24cmを測る。

長径方向 N-75°-E。

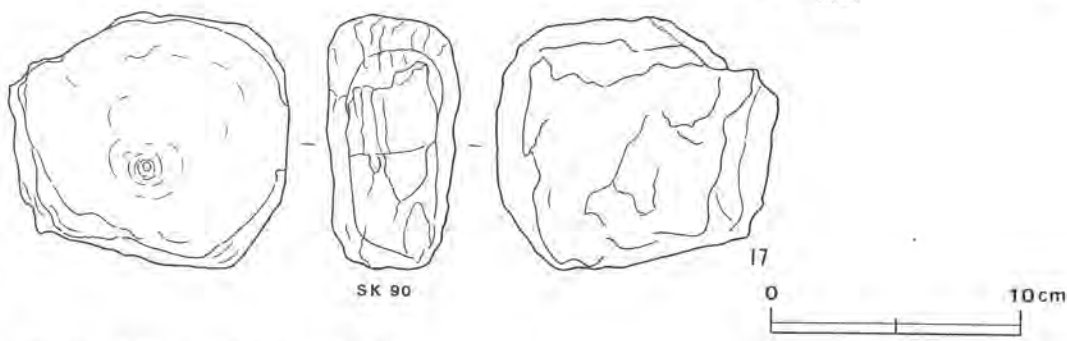
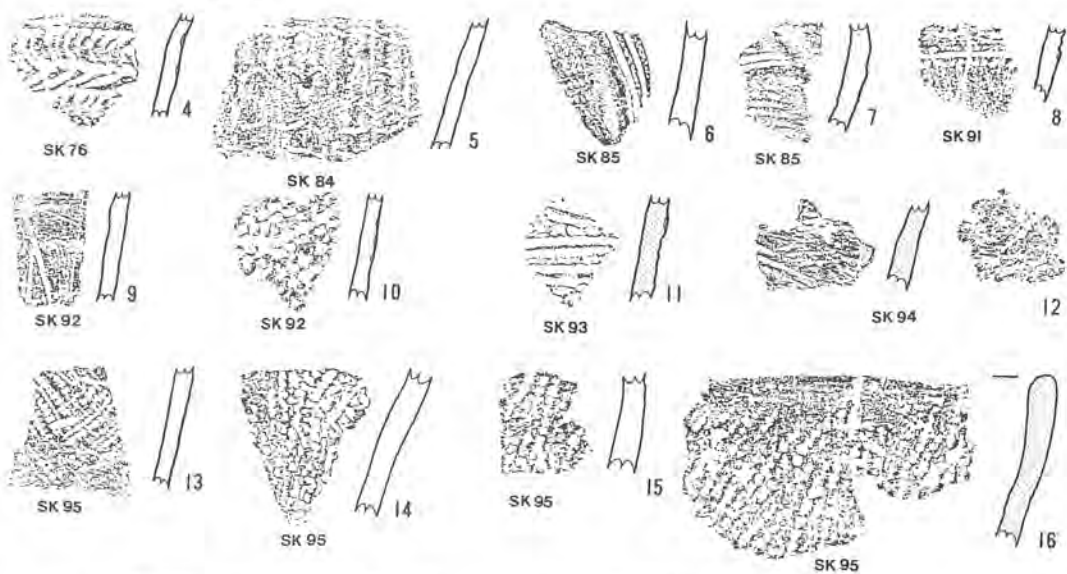
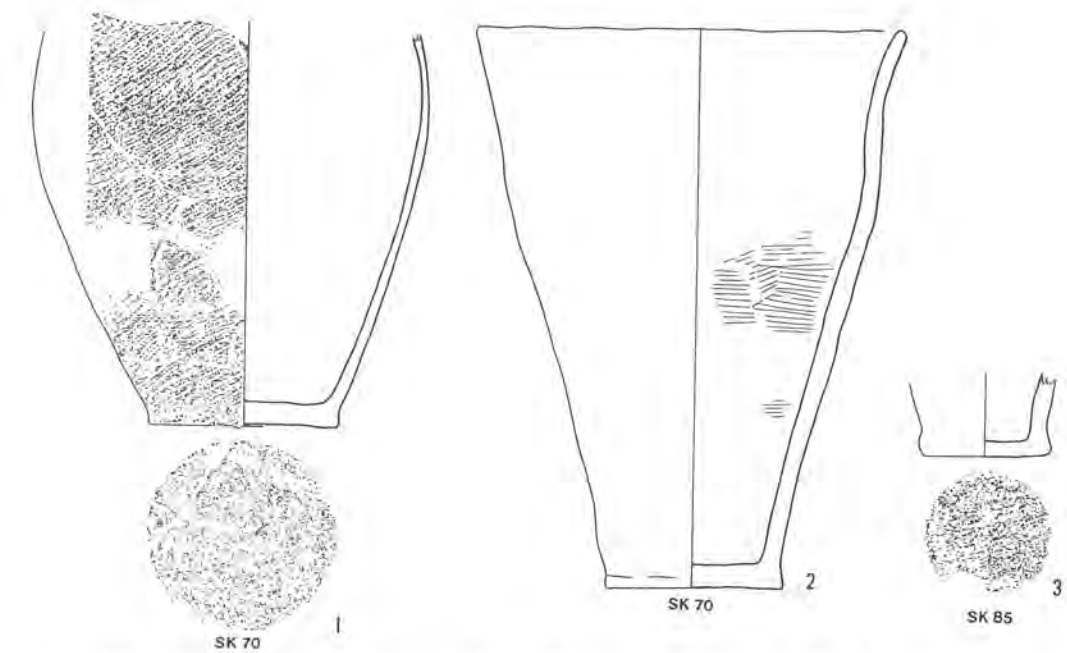
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 楕円形を呈し、ほぼ平坦である。

覆土 褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 弥生式土器片2点(壺1, 鉢1)が出土している。1の壺は、底部が南向きで胴下半部がつぶれた状態で出土している。2の鉢は、1の東側から隣接して底部を東向きに、口縁部を西向きにしてつぶれた状態で出土している。さらに、1の土器片3点が2の土器内覆土から出土している。その他、土器内から副葬品は出土していない。

所見 1と2は合口の土器棺であり、1の胴上半部は欠損しているが、2の蓋として用いられたものと思われる。本遺構は、出土遺物から弥生時代後期のものと思われる。



第291图 土坑出土遺物実測・拓影図

第70・85号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第291図 1	壺 弥生式土器	B (15.8)	頸部上位欠損。突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。胴部外面には、附加状1種(附加2条)の縄文が施されている。底部布目痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P71 60% S K70中央部床面
		C 7.6			
2	鉢 弥生式土器	A 17.4	突き出した平底。胴部は下位から中位にかけて外傾し、上位で内彎気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。胴部外面ナデ、内面ナデ後一部ハケ目整形。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P72 85% S K70中央部床面
		B 22.4			
		C 7.3			
3	壺 弥生式土器	B (3.4)	底部から胴部下位にかけての破片。突出した平底。胴部は外反気味に斜上方に立ち上がる。胴部内・外面ナデ。底部木葉痕有り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P73 15% S K85覆土中層
		C 5.3			

第90号土坑出土石器観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第291図	17 凹石	10.3	10.4	5.3	835.7	砂岩	S K-90	Q7

表6 原田西遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
1	B3d ₂	N-71°-W	円形	2.65	2.51	43	外傾	平坦	自然		
2	B8c ₀	N-26°-W	楕円形	1.04	0.79	12	外傾	緩い傾斜	自然		
3	B8c ₁	N-85°-W	楕円形	1.01	0.81	14	緩斜	平坦	自然		
4	B8d ₁	N-30°-W	楕円形	2.13	1.90	71	垂直	凹凸	自然		
5	B8d ₃	N-54°-W	円形	2.47	2.33	41	外傾	平坦	自然		
7	B8c ₁	N-18°-W	楕円形	3.87	2.77	47	外傾	平坦	自然		
8	B7e ₉	N-53°-W	楕円形	0.97	0.74	13	緩斜	凹凸	自然		
9	B7d ₉	N-67°-E	楕円形	0.78	0.56	22	外傾	平坦	自然		
10	B7d ₉	N-41°-E	楕円形	0.60	0.44	52	外傾	平坦	自然		
11	B7d ₈	N-73°-E	楕円形	0.61	0.51	11	緩斜	平坦	自然		
12	B7d ₃	N-24°-W	不整楕円形	1.12	0.83	17	緩斜	平坦	自然		
13	B7d ₈	N-23°-W	楕円形	0.82	0.73	45	垂直	平坦	人為		
14	B7f ₈	N-58°-W	楕円形	0.73	0.59	13	外傾	平坦	自然		
15	B7f ₃	N-24°-W	円形	0.66	0.63	23	緩斜	傾斜	自然		
16	B7e ₇	N-81°-W	円形	0.71	0.66	42	垂直	平坦	自然		
17	B7g ₁	N-44°-W	円形	2.90	2.81	35	外傾	平坦	自然		
18	B6g ₀	N-22°-E	楕円形	1.16	1.02	23	外傾	平坦	自然		
19	B6i ₀	N-19°-E	隅丸長方形	3.22	1.66	69	垂直	平坦	自然		
20	B6i ₃	N-80°-E	楕円形	1.54	1.15	51	外傾	平坦	自然		
21	B6h ₈	N-7°-E	楕円形	1.87	1.08	34	緩斜	平坦	人為		
22	B7e ₁	N-5°-E	楕円形	1.66	1.30	23	緩斜	平坦	自然		
23	B6e ₀	N-90°	楕円形	0.78	0.68	33	緩斜	傾斜	自然		
24	B6b ₀	N-15°-E	円形	0.50	0.47	26	緩斜	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
25	B6c ₃	N-86°-W	橢 円 形	0.53	0.47	19	緩斜	傾斜	自然		
26	A7j ₁	N-75°-E	不 定 形	1.03	0.62	70	垂直	平坦	自然		
27	B6b ₇	N-70°-W	橢 円 形	1.32	0.88	29	緩斜	平坦	自然		
28	A6i ₆	N-7°-W	円 形	0.97	0.93	21	緩斜	平坦	自然		
29	A7i ₁	N-14°-W	不 整 楕 円 形	1.55	1.03	47	緩斜	平坦	自然		
30	B7i ₁	N-30°-E	橢 円 形	1.51	1.01	28	緩斜	平坦	自然		
31	B6h ₈	N-34°-E	橢 円 形	0.94	0.81	18	緩斜	平坦	自然		
32	B6i ₈	N-16°-E	不 定 形	3.25	[1.15]	27	外傾	平坦	自然		
33	B6h ₈	N-8°-W	円 形	0.83	0.81	23	外傾	平坦	自然		
35	B6e ₈	N-62°-E	橢 円 形	3.32	1.88	40	緩斜	平坦	自然		
36	B6f ₆	N-7°-W	橢 円 形	1.31	1.18	41	外傾	平坦	自然		
37	A6j ₇	N-90°	橢 円 形	1.25	1.03	25	緩斜	傾斜	自然		
38	A6j ₇	N-6°-E	橢 円 形	1.45	0.79	21	緩斜	平坦	自然		
39	A6j ₈	N-66°-E	橢 円 形	0.69	0.56	28	緩斜	平坦	自然		
40	A6i ₁	N-71°-W	橢 円 形	2.93	2.30	39	緩斜	凹凸	自然		
41	B6a ₈	N-55°-E	橢 円 形	1.55	1.02	24	緩斜	平坦	自然		
42	B6d ₁	N-77°-E	円 形	0.74	0.69	19	緩斜	平坦	自然		
43	A6g ₁	N-55°-W	橢 円 形	1.68	1.43	22	緩斜	凹凸	自然		
44	A6j ₁	N-20°-E	橢 円 形	3.12	1.51	64	緩斜	傾斜	自然		
45	A6j ₈	N-6°-W	円 形	0.67	0.62	20	緩斜	平坦	自然		
46	A6f ₂	N-55°-W	円 形	1.01	1.01	17	外傾	平坦	自然		
47	A6f ₂	N-47°-E	橢 円 形	1.70	1.07	27	外傾	平坦	自然		
48	A5g ₉	N-78°-E	橢 円 形	20.8	0.86	26	緩斜	平坦	自然		
49	A6i ₁	N-12°-W	円 形	1.30	1.21	35	緩斜	平坦	自然		
50	A6i ₁	N-41°-E	橢 円 形	1.43	1.16	36	外傾	平坦	自然		
51	B6c ₂	N-51°-E	不 定 形	0.99	0.87	29	緩斜	平坦	自然		
52	B6a ₂	N-28°-W	橢 円 形	2.62	2.01	52	緩斜	平坦	自然		
53	B6e ₈	N-36°-W	円 形	0.84	0.78	26	外傾	平坦	自然		
54	B6f ₂	N-86°-E	橢 円 形	0.84	0.60	47	垂直	平坦	自然		
55	B6g ₂	N-72°-E	橢 円 形	0.86	0.58	26	外傾	平坦	自然		
56	B6g ₂	N-81°-E	不 定 形	1.95	1.18	54	垂直	平坦	自然		
57	B6e ₁	N-29°-W	円 形	0.81	0.80	43	外傾	凹凸	自然		
58	B5e ₈	N-17°-W	橢 円 形	1.17	0.91	31	外傾	平坦	自然		
59	B5c ₆	N-28°-E	円 形	1.17	1.13	43	緩斜	凹凸	自然		
60	B6b ₁	N-64°-W	橢 円 形	1.66	1.21	27	緩斜	平坦	自然		
61	B5c ₆	N-2°-E	円 形	1.41	1.33	18	緩斜	平坦	自然		
62	B5c ₆	N-39°-E	橢 円 形	0.76	0.63	18	緩斜	平坦	自然		
63	B5d ₂	N-12°-E	橢 円 形	0.70	0.63	30	外傾	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
64	B5f ₉	N-56°-W	楕 円 形	2.11	1.22	45	外傾	平坦	自然		
65	B5c ₅	N-15°-W	楕 円 形	2.16	1.79	62	緩斜	平坦	自然		
66	B5c ₉	N-18°-W	楕 円 形	1.27	1.02	18	緩斜	平坦	自然		
67	A5i ₆	N-84°-W	楕 円 形	1.50	0.94	25	緩斜	平坦	自然		
68	A5i ₄	N-49°-E	楕 円 形	2.54	1.30	47	外傾	平坦	自然		
69	B5e ₄	N-19°-E	楕 円 形	2.03	1.68	97	外傾	平坦	自然		
70	B8e ₄	N-75°-E	楕 円 形	[0.65]	[0.40]	24	外傾	平坦	自然	弥生式土器片 8, 石器 2	礎棺
71	B6g ₃	N-73°-E	楕 円 形	1.58	1.06	22	緩斜	平坦	自然		
72	B5b ₅	N-12°-E	楕 円 形	2.15	1.78	78	外傾	平坦	自然		
73	B3c ₆	N-26°-W	楕 円 形	1.79	1.14	60	外傾	平坦	自然		
74	B5d ₂	N-54°-E	円 形	1.62	1.51	66	垂直	平坦	自然		
75	B4g ₆	N-57°-E	円 形	1.95	1.93	58	外傾	平坦	自然		
76	B4g ₁	N-42°-E	不 定 形	2.62	[0.96]	41	外傾	平坦	自然	縄文式土器片 6	SK80と重複
77	B4e ₅	N-29°-E	楕 円 形	2.23	1.98	60	垂直	平坦	自然		
78	B3d ₆	N-90°	円 形	1.42	1.40	43	外傾	平坦	自然		
79	B4f ₆	N-90°	円 形	1.11	1.11	32	外傾	平坦	自然		
80	B4g ₁	N-42°-E	楕 円 形	3.65	[2.72]	41	外傾	平坦	自然		SK76と重複
81	B4f ₃	N-39°-E	円 形	1.61	1.47	46	緩斜	平坦	自然		
82	B4f ₃	N-79°-E	楕 円 形	1.55	1.32	36	緩斜	平坦	自然		
83	B4h ₂	N-67°-E	楕 円 形	2.75	1.73	48	緩斜	平坦	自然		
84	B4g ₁	N-80°-E	楕 円 形	4.42	2.18	34	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片 1	
85	B4h ₁	N-2°-W	楕 円 形	3.25	2.45	52	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片11, 弥生式土器片 1	
86	B4f ₁	N-37°-W	円 形	1.48	1.39	46	外傾	平坦	自然		
87	B3d ₄	N-32°-W	不 定 形	1.82	1.34	51	外傾	平坦	人為		
88	B4e ₃	N-86°-E	不 定 形	3.82	1.68	56	緩斜	平坦	自然		
89	B3c ₆	N-64°-W	楕 円 形	1.84	1.68	70	外傾	平坦	自然		
90	B4b ₁	N-79°-E	楕 円 形	3.56	1.88	25	緩斜	平坦	自然	石器 1	
91	B3j ₅	N-57°-E	楕 円 形	1.91	1.25	46	外傾	平坦	自然	縄文式土器片 1	
92	B2j ₉	N-69°-E	楕 円 形	3.02	2.05	111	外傾	平坦	人為	縄文式土器片 2	
93	B2j ₆	N-90°	円 形	1.14	1.12	35	外傾	平坦	自然	縄文式土器片 1	
94	C2a ₁	N-56°-W	楕 円 形	3.30	2.56	18	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片14, 弥生式土器片 1	
95	C2a ₈	N-9°-W	楕 円 形	3.18	2.68	58	外傾	平坦	人為	縄文式土器片18	
96	C2a ₁	N-56°-W	隅 丸 方 形	3.52	3.30	55	垂直	平坦	自然		
97	B2j ₉	N-86°-E	円 形	1.26	1.17	42	外傾	平坦	自然		

第291図4～16は土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。4～15は胴部片であり、16は口縁部片である。4は沈線の下位に変形爪形文が施されており、前期後葉の浮島式に比定されるものと思われる。5は結節を施した無節Lの縄文が施されており、前期後葉の粟島台式に比定されるものと思われる。6・7は縄文を地文とし、微隆帯内に棒状の平行沈線が施されており、中期前葉の五領ヶ台式に比定されるものと思われる。8は横位の沈線と刺突文が施されており、早期中葉の田戸上層式に比定されるものと思われる。10は太め羽状縄文が施されており、前期前葉の黒浜式に比定されるものと思われる。9は斜位の沈線が施されており、後期後葉の堀之内式に比定されるものと思われる。11は横位の沈線間に連続刺突文が施されており、早期中葉の田戸上層式に比定されるものと思われる。12は内・外面に条痕を施し磨り消されており、早期後葉の芽山下層式に比定されるものと思われる。13は斜位の縄文が異方向から施されており、前期前葉の黒浜式に比定されるものと思われる。14～16は単節LRの縄文が施され、16は胎土中に繊維を含んでおり黒浜式と思われる。

3 溝

当調査区からは、溝が2条検出されている。重複関係からいずれもその他の遺構より新しい時期に構築されたものと考えられるが、出土遺物がないためそれぞれの構築時期や性格をとらえることはできない。

第1号溝 (第292図)

位置 東部、A8区・B8区・B9区にかけて確認されている。本跡の両端は調査区域外に延びている。

規模と形状 全長は約44.89mで、上幅1.44～1.96m、下幅0.39～1.15m、深さ40～47cmである。

断面形は皿状を呈し、底面は平坦である。

方向 B9d₁区から北西方向(N-64°-W)へほぼ直線的に延びている。

覆土 褐色土・黒褐色土・褐灰色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土上層から、縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片が極少量出土している。その他、第293図3の石鏃は中央部の覆土上層から出土している。

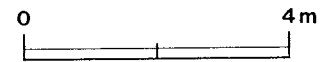
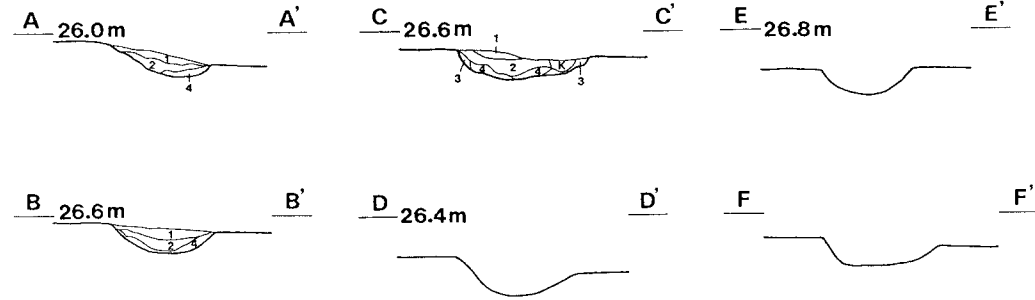
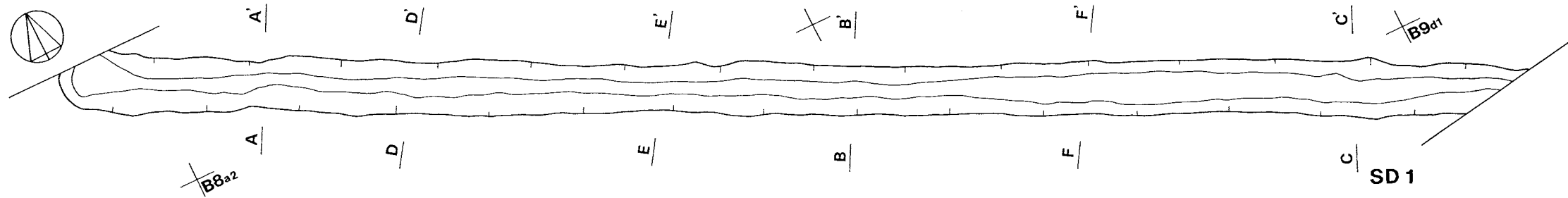
所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、時期・性格共に不明である。

第2号溝 (第292図)

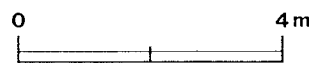
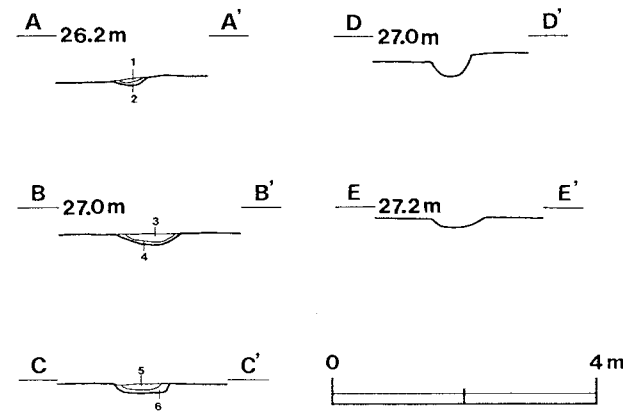
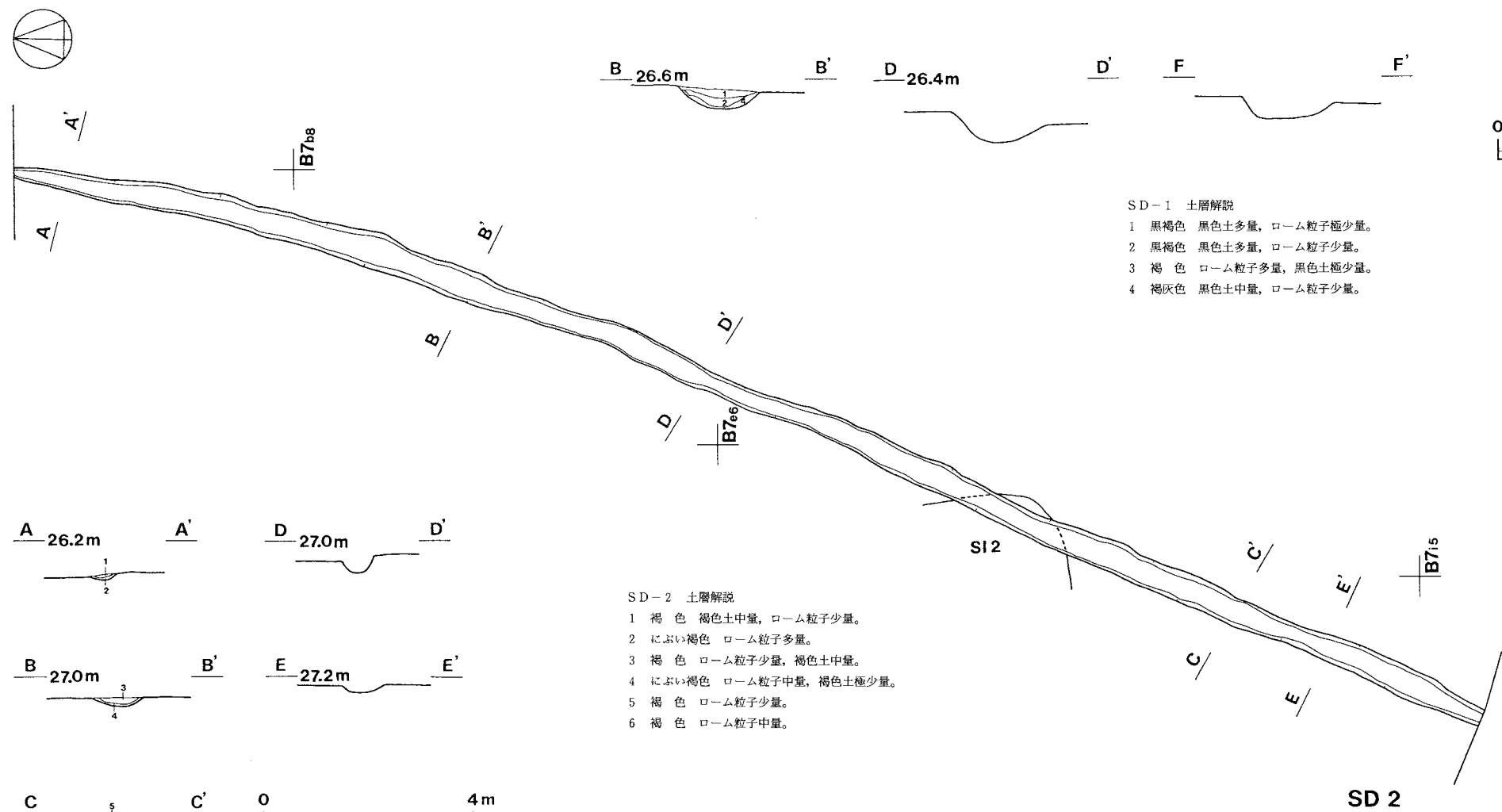
位置 東部、A7区、B7区にかけて確認されている。本跡の両端は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡はB7g₅区で第2号住居跡の南東コーナー付近を掘り込んでいる。

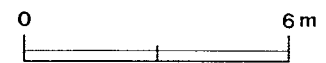
規模と形状 全長は約44.90mで、上幅0.27～1.05m、下幅0.15～0.78m、深さ14～28cmである。



- SD-1 土層解説
- 1 黒褐色 黒色土多量, ローム粒子極少量。
 - 2 黒褐色 黒色土多量, ローム粒子少量。
 - 3 褐色 ローム粒子多量, 黒色土極少量。
 - 4 褐灰色 黒色土中量, ローム粒子少量。



- SD-2 土層解説
- 1 褐色 褐色土中量, ローム粒子少量。
 - 2 におい褐色 ローム粒子多量。
 - 3 褐色 ローム粒子少量, 褐色土中量。
 - 4 におい褐色 ローム粒子中量, 褐色土極少量。
 - 5 褐色 ローム粒子少量。
 - 6 褐色 ローム粒子中量。



第292図 第1・2号溝実測図

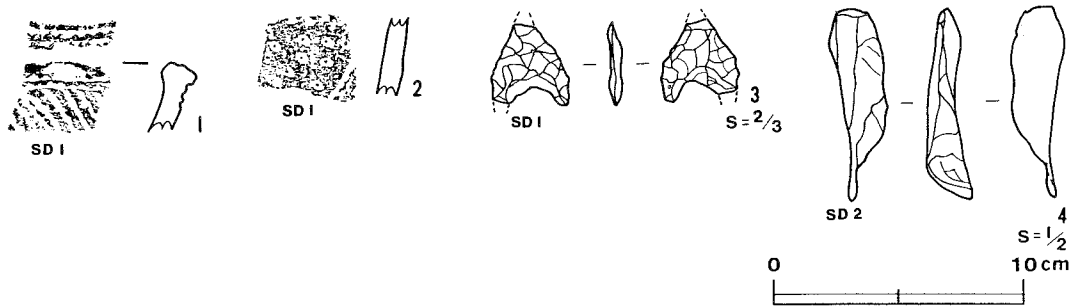
断面形は皿状を呈し、底面は平坦である。

方向 B7j₄区から北東方向(N-25°-E)へほぼ直線的に延びている。

覆土 褐色土・にぶい褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 覆土上層から、弥生式土器片、土師器片が極少量出土している。その他、第293図4の剥片が覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、弥生時代後期と思われる第2号住居跡を掘り込んでいることから、弥生時代後期以降の溝と考えられる。性格及び第1号溝との新旧関係は不明である。



第293図 第1・2号溝出土遺物実測・拓影図

第1・2号溝出土石製品観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第293図	3 石 鏃	(1.7)	1.5	0.25	(0.8)	頁岩	覆土上層	Q5 SD-1
	4 剥片	5.2	1.4	1.2	0.8	頁岩	覆土下層	Q6 SD-2

第293図1～2は第1号溝から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口唇部から口縁部にかけて連続刺突文が施されている。2は胴部片で竹管文が施されている。中期中葉の阿玉台式に比定されるものと思われる。

4 遺物包含層及び遺構外出土遺物

谷部に遺物を包含する層(以下、遺物包含層と呼ぶ)は、調査区中央部北寄りのA4区、A5区から検出されている。遺物包含層は、原田北遺跡と原田西遺跡の間に存在する支谷につながる谷部である。A5j₁区からA4c₀区にかけての北北西に傾斜する、最大長35.0m、最大幅18.0m、標高差5.2mの包含層である。

遺物包含層からの出土遺物は縄文式土器片が中心で、草創期から中期中葉に至る時期の、主に井草式・黒浜式・浮島式に比定される土器が包含層の合流部近くで比較的まとまって出土してい

る。谷の基部付近からは草創期の表裏縄文土器片が出土し、その上の層からは早期の井草式・芽山式に比定されると思われる土器片、前期の関山式・黒浜式・浮島式等に比定されると思われる土器片、及び中期の五領ケ台式等と思われる土器片が層位的に出土している。覆土上層からは弥生式土器片、土師器片等も出土し、谷が埋没するまでには長い年月が経過していることが窺える。

遺構外覆土からの出土遺物は縄文式土器片が中心で、早期中葉から中期前葉に至る土器片が出土している。その他、弥生式土器片、土師器片、磨石や敲石等の石器が出土している。

ここでは、遺物包含層及び遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図で一括して報告する。

なお、群及び類の分類については、第5章第7節の原田北遺跡の項目に準じた。

第1群 縄文時代草創期及び早期の土器

第1類 表裏縄文土器（第296図1・2）

1は口縁部片で、口唇部断面は丸頭状を呈する。内・外面に縄文が施されており、胎土に砂粒・石英を含んでいる。2は胴部片で、外面は単節LRとLRの羽状縄文が施されており、内面は単節RLの縄文が施されている。草創期に比定される土器である。

第2類 無文土器 本遺跡においては出土しなかった。

第3類 撚糸文系土器（第296図3～10）

3・4は口縁部片で、口唇部及び口縁部に縄文が施されている。5は口縁部片で、口唇部に縄文が施され、口縁部に単節RLの縄文が施されている。6・7は胴部片で、単節縄文が縦位に施されている。8は口縁部片で、斜位の細い沈線が施されており、焼成後の穿孔(径3mm)を有している。9は口縁部片、10は胴部片で、横位の単節縄文が施されている。井草式に比定される土器である。

第4類 沈線文系土器（第296図11～19）

11～13は口縁部片で、横ナデが施されて、粗い粒子が移動している。14は胴部片で、縦位及び横位の細い沈線で幾何学模様を施している。三戸式に比定される土器である。

15は胴部片で、斜位の太めの沈線が施されている。16・17は胴部片で、横位の太い沈線が施されている。18は胴部片で、横位の平行沈線間に刺突文が施されている。田戸下層式に比定される土器である。

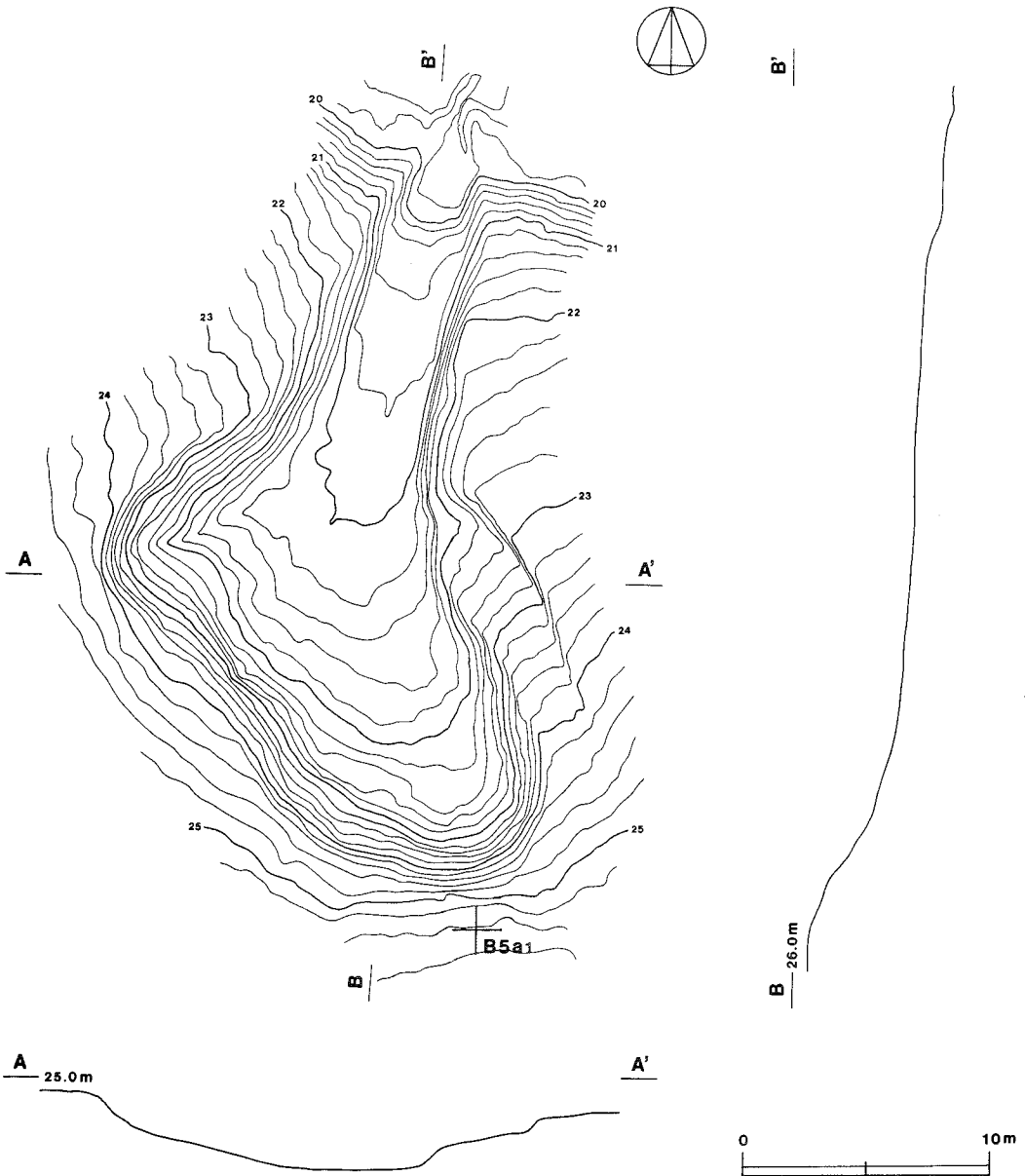
19は口縁部片で、口唇部の突起に貝殻腹縁による沈線が渦巻き状に施されており、その下位には横位の沈線が施されている。田戸上層式に比定される土器である。

第5類 条痕文系土器 (第296図20~23)

20は口縁部片, 21~23は胴部片である。20は口唇部にキザミ目が, 内・外面には横位及び斜位の太い沈線が施されている。21~23は内・外面に横位及び斜位の太い沈線が施されている。広義の芽山式に比定される土器である。

第2群 縄文時代前期の土器

第1類 羽状縄文系土器 (第297図24~40)



第294図 原田西遺跡遺物包含層実測図

24は口縁部片で、単節R LとL Rの羽状縄文が施され、上位には紐状の微隆帯が施されている。25～28は地文に組紐による縄文が施されている。24～28は関山式に比定されるものと思われる。

29は口縁部片で、地文に附加条縄文が施され、その上に横位の沈線が施されている。30は口縁部片、31～35は胴部片である。30は横位及び斜位の細い沈線が施されている。31は附加条縄文が施されている。32は単節R LとL Rの羽状縄文が施されている。33は斜位に縄文が施され、34は斜位及び円弧状に沈線が施され、35は波状に沈線が施されている。36は口縁部片で半截竹管による沈線が横位に施され、37は胴部片で半截竹管による沈線が弧状に施されている。38は胴部片で無節RとLの縄文が施されている。39は胴部片で、附加条縄文の単節R Lと同じ方向に無節Rを施し、羽状縄文を施している。40は胴部片で、附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。黒浜式に比定される土器である。

第2類 貝殻沈線文系土器（第297・298図41～81）

41は口縁部片、42は胴部片で、横位の連続爪形文が施され、その下位には斜位及び横位の沈線が施されている。43は胴部片で、横位の連続刺突文が施され、その下位には斜位の平行沈線が施されている。44・45は胴部片で、半截竹管による平行沈線が斜位及び弧状に施されている。46は口縁部片で、内そぎ状を呈し横位の沈線が施されており、焼成後の穿孔(径4mm)を有している。47～53は胴部片である。半截竹管による平行沈線が49は横位に、47・48・50・52は横位及び斜位に、51・53は円弧状に施されている。54～56は口縁部片で、横位の変形爪形文が施され、その下位には沈線が施されている。57～59は胴部片で、横位の変形爪形文が施されている。浮島I式に比定される土器である。

60～65は口縁部片である。60～62は輪積み痕が文様化されている凹凸文が施されており、下位には縄文が施されている。63は折り返し口縁で、口縁部下位には刺突文が施されている。64は凹凸文に貼瘤が押圧されている。65は折り返し口縁で、輪積み痕の上に縄文が施されている。66は口縁部片で、口唇部は棒状工具による押圧で波状口縁を呈し、口縁部は横位の波状貝殻文が施されている。67は口縁部片、68～71は胴部片で、横位及び斜位の貝殻文が施されている。浮島II式に比定される土器である。

72は口縁部片で、口唇部にキザミ目を施し、口縁部に横位の沈線を施している。73は口縁部片で、貝殻沈線文が施されている。74は胴部片で、横位の連続爪形文が施され、その下位には貝殻沈線文が施されている。75は口縁部片で、口唇部には棒状工具による押圧が施され、口縁部は半截竹管による横位の沈線を施し、その間に棒状工具による沈線を施している。76・77は胴部片で、棒状工具による押圧を施し、その下位には半截竹管による横位の沈線を施している。78は口縁部片、79は胴部片で、貝殻腹縁を使用した横位の波状貝殻文及び刺突文が施されている。80・81は胴部片で、横位の三角刺突文が施されている。浮島II式からIII式に比定される土器である。

第3類 縄文原体圧痕及び結節文が施されている土器（第298・299図82～88）

82は口縁部片で、無節Lの横位の縄文が施されている。83・84は口縁部片で、口縁部は折り返し口縁で、単節RLの縄文が施されており、下位は無文地である。85は口縁部片、86は胴部片で縄文原体の縄紐が縦位及び横位に押圧されている。87は口縁部片で、縄文原体の短い縄紐が斜位に押圧されている。88は口縁部片で、波状口縁を呈し、単節LRの縄文上に結節文が横位に施されている。粟島台式に比定される土器である。

第4類 細沈線及び浮線による文様が施されている土器（第299図89～95）

89は口縁部片で、口縁部内面に紐状及び瘤状の押圧を施し、外面は縦位の隆帯間に沈線を施している。90～93は胴部片で、縦位の隆帯及び瘤状突起を貼付けしており、その地文には半截竹管による沈線が施されている。89～93は諸磯C式に比定される土器である。

94は胴部片で、波状沈線及び刺突文が施されている。95は胴部片で、横位の結節状浮線文が2条施されている。十三菩提式に比定される土器である。

第5類 縄文を地文として沈線が施されている土器（第299図96～103）

96～98は口縁部片で、横位の半截竹管による連続刺突文が3条施されており、その下位には単節RLの縄文地文上に棒状工具による斜位の沈線が2条施されて山形沈線文を構成している。99～103は胴部片である。99は単節LRの縄文地文上に棒状工具による沈線が横位及び斜位に2条施されている。100・102は単節RLの縄文地文上に棒状工具による沈線が2条施されて、山形沈線文を構成している。101・103は単節RLの縄文地文上に棒状工具による沈線が斜位に2条施されている。99～103は大木5式に比定される土器である。

第3群 縄文時代中期の土器

第1類 沈線文が施されている土器 本遺跡においては出土しなかった。

第2類 集合沈線文及び彫刻手法を持つ土器（第299・300図104～135）

104は口縁部片で、単節Rの縄文が施されている。105は口縁部片で、縦位の沈線の上に横位の沈線が施されている。106は口縁部片で、縦位の沈線が施され、その下位には竹管による刺突文が施されている。107は単節RLとLRの羽状縄文が施され、その上に横位の結節文が施されている。108～113は胴部片で、縄文地文上に結節文が施されている。114は胴部片で、有節沈線文が施されている。115は口縁部片で、口唇部直下は隆帯で縦位のキザミ目を施し、下位には半截竹管による山形沈線文が3条施されている。さらにその下位には、微隆帯に縦位のキザミ目を施し、無文帯に横位の沈線及び彫刻手法による三角文が施されている。116は波状口縁の口縁部片で、輪積み痕を残し、単節LRの縄文を施している。117は波状口縁の口縁部片で、山形状の突起を施し、波状部にはキザミ目が施されている。外面には三叉文が施され、沈線文が横位及び斜位に施されてい

る。118は口縁部片で、口唇部は外そぎ状を呈している。外面は棒状工具による縦位の沈線を施し、その上に横位及び円弧状の沈線を施している。119は口縁部片で、口唇部内面には微隆帯が施されており、外面は縦位のキザミ目が施されている。口縁部外面は棒状工具による縦位の沈線を施し、その上に渦巻き状の沈線及び三叉文が施されている。120は口縁部片で、口唇部内・外面に縦位のキザミ目が施されており、外面には横位の平行沈線が施されている。121は胴部片で、棒状工具による横位の短沈線が施され、その上に縦位の沈線が施されている。122は胴部片で、半截竹管による連続刺突文が横位・斜位及び弧状に施され、その間に無文の微隆帯が巡らされている。123は胴部片で、微隆帯によって区画された内側に、半截竹管による連続刺突文が渦巻状に施されている。124は棒状工具による沈線及び刺突文を施し、上位には縄文地文上に円形の沈線が施されている。125は胴部片で、横位の沈線が施されており、その上に棒状工具による沈線が施されている。さらに下位には三角文が施されている。126～128は胴部片で、半截竹管による連続刺突文が施されており、隆帯により無文帯と区画されている。129・130は胴部片で、半截竹管による連続刺突文が横位及び斜位に施されている。131は胴部片で、半截竹管による連続刺突文が円形に施されており、施文間が隆帯貼付になっている。132は口縁部片で、横位の平行沈線が3条施されており、その上・下位に縦位の刺突文が施されている。133は胴部片で、縦位の平行沈線と無文帯を区画する連続刺突文が施されている。134は胴部片で、上位には棒状工具による横位及び斜位の沈線が施されており、下位には平行沈線及び竹管による刺突文が施されている。135は胴部片で、横位の沈線及び三角文が施されている。五領ケ台式に比定される土器である。

第3類 隆起線が貼られている土器 (第300図136・137)

136は口縁部片で、内そぎ状を呈している。外面は無文上に細い粘土紐を山形に押圧しその下位には横位の刺突されている微隆帯が2条施されている。中期初頭に比定される土器であると思われる。137は胴部片で、縦位の微隆帯が施されており、その上に単節RLの縄文が施されている。五領ケ台式に比定される土器である。

第4類 隆帯文と磨消縄文がみられる土器 (第301図138)

138は口縁部片で、沈線と隆帯によって区画され、区画内は単節LRの縄文が施されている。加曽利EIV式に比定される土器である。

第4群 縄文時代後期の土器 本遺跡においては出土しなかった。

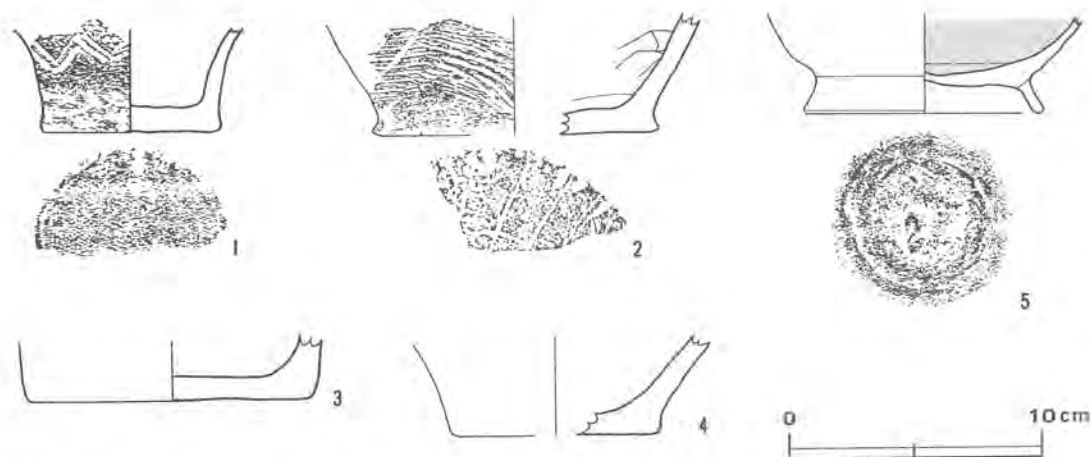
第5群 弥生時代中期の土器 (第301図139)

139は胴部片で、半截竹管による山形の沈線が施されている。中期後葉に比定される土器であると思われる。

第6群 弥生時代後期の土器 (第301図140~145)

140は口縁部片で、口唇部にキザミ目が施され、外面はハケ目整形が施されている。141は口縁部片で、口縁部にキザミ目が施され、外面は附加条1種(附加2条)による縄文が施され、その下位には縄文原体による押圧痕がある。142は胴部片、143は複合口縁の口縁部片で、附加条1種(附加2条)による縄文が施されている。140~143は上稲吉式及び南関東系の土器である。

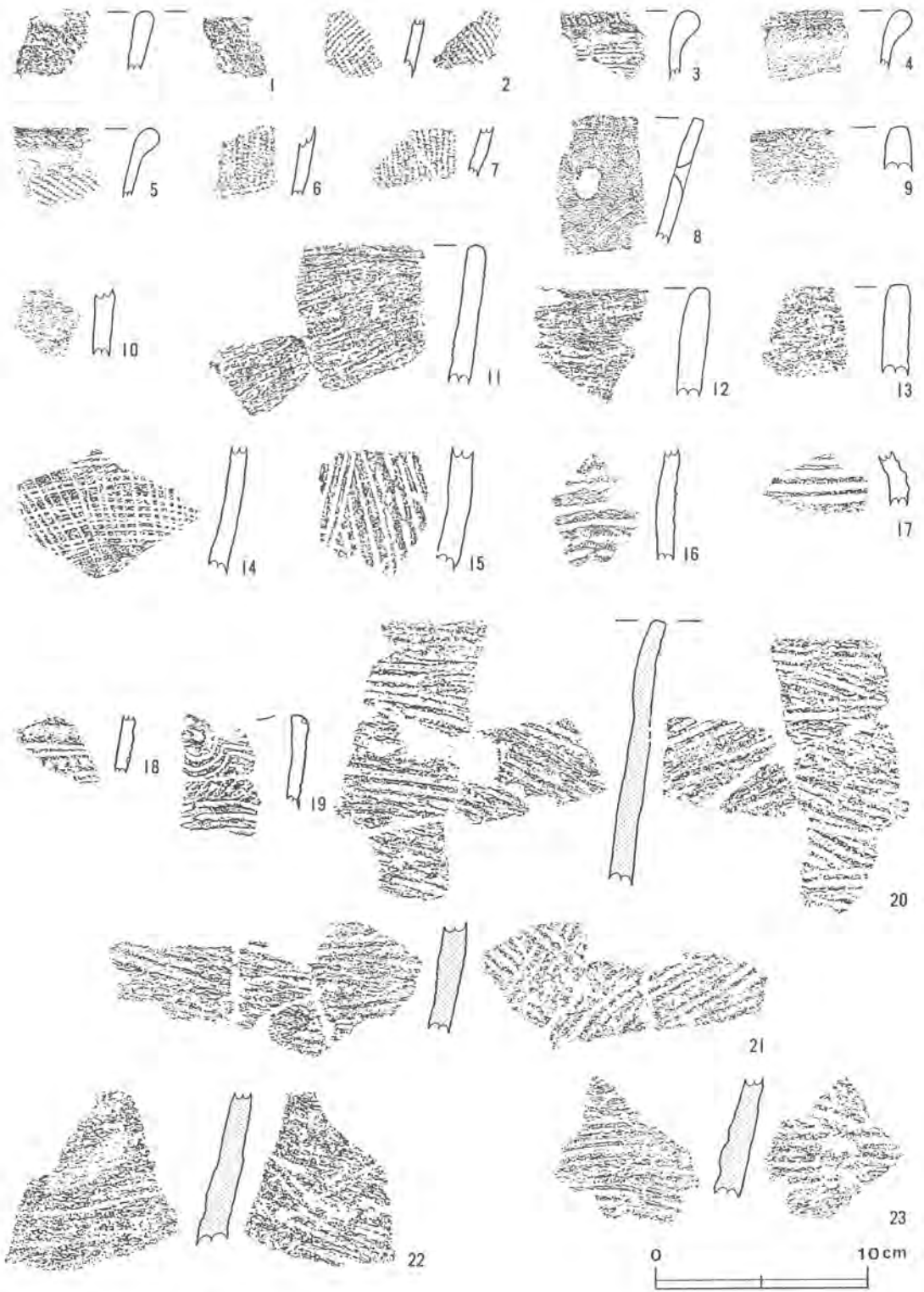
144は胴部片で、4本櫛歯による縦区画充填波状文が施されている。145は胴部片で、附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。十王台式に比定される土器である。



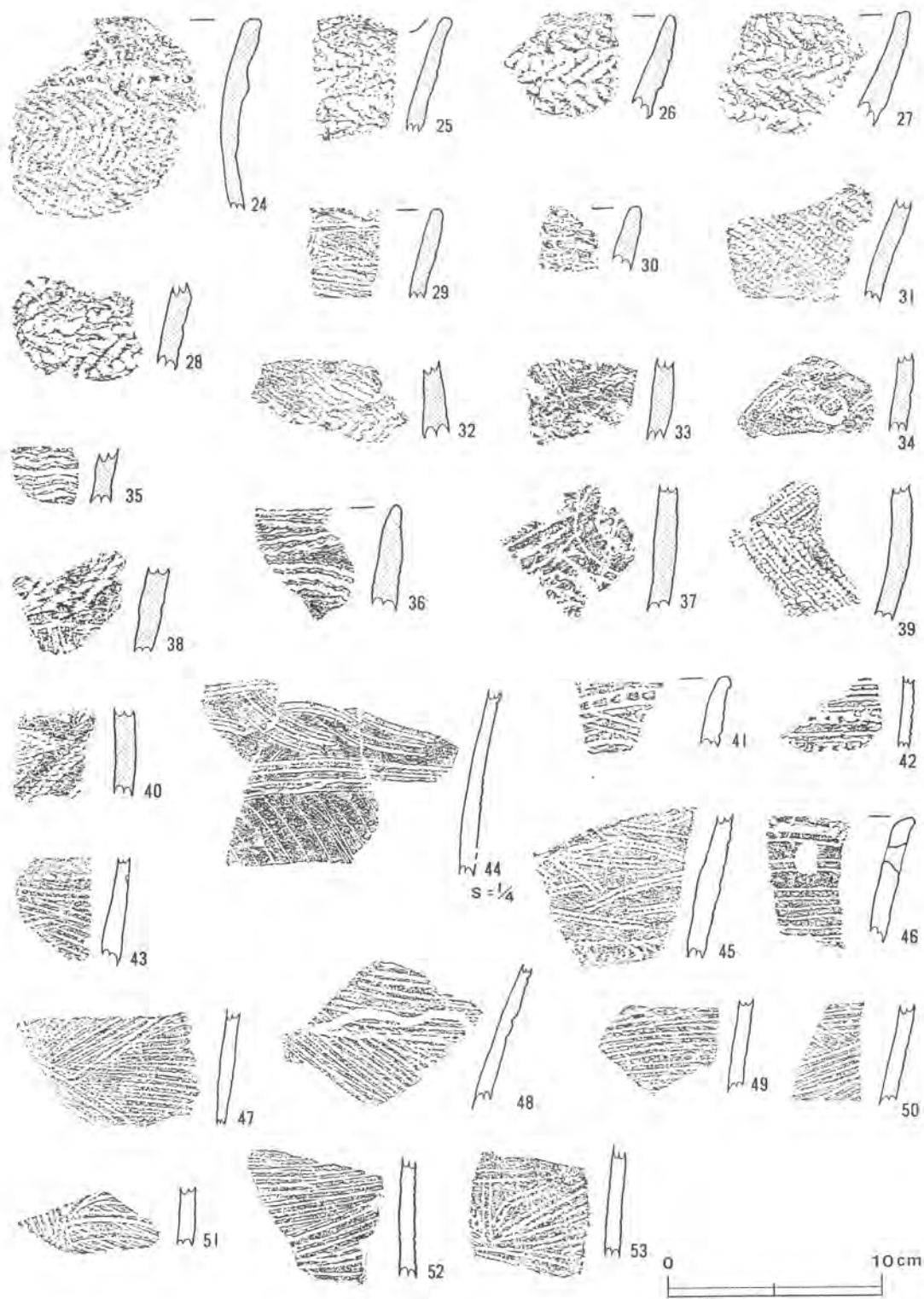
第295図 遺物包含層・遺構外出土遺物実測・拓影図

包含層及び遺構外出土土器観察表

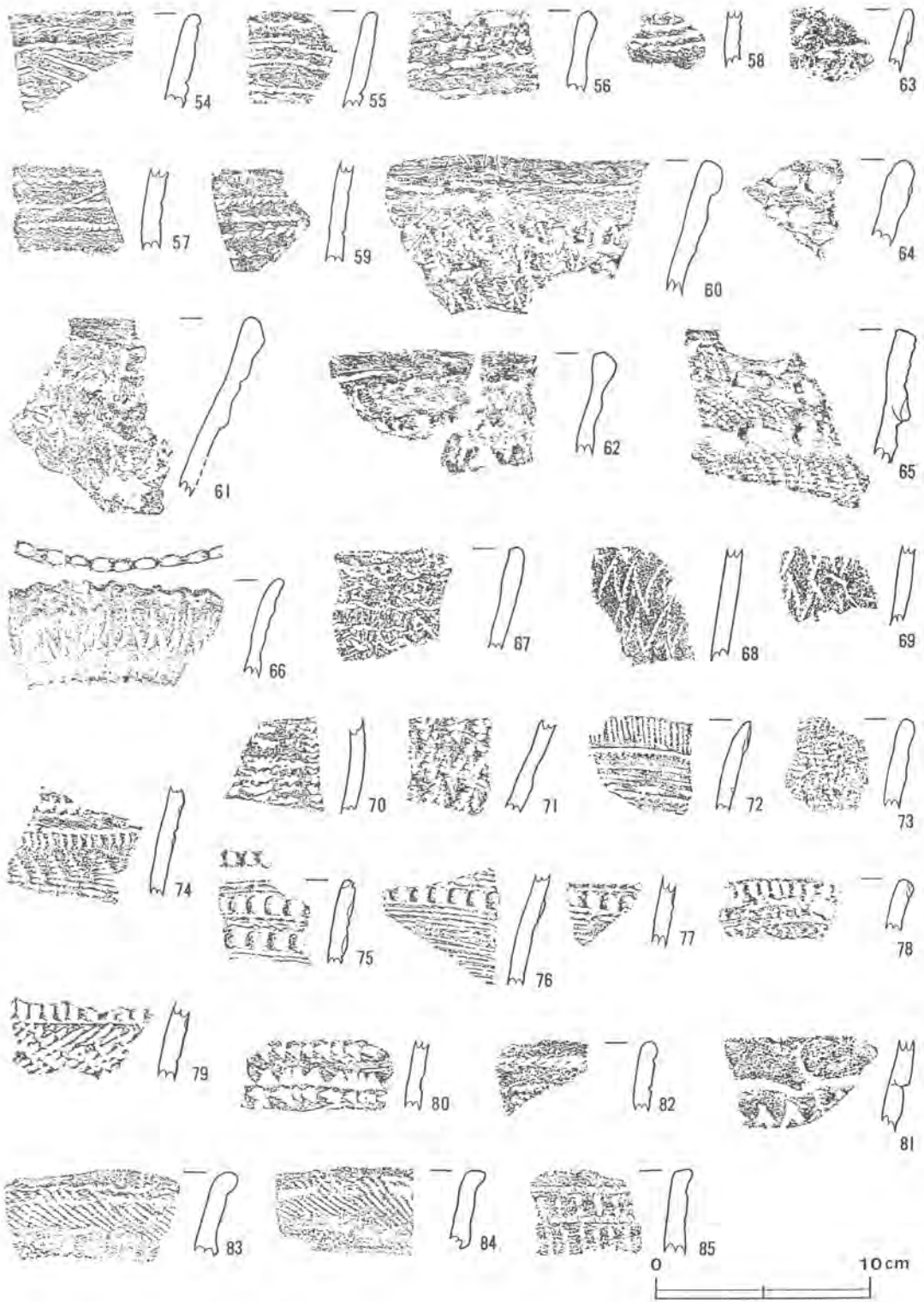
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第295図 1	壺 弥生式土器	B (4.2)	底部から胴部下位にかけての破片。底部は平底で、胴部は外反気味に斜上方に立ち上がる。胴部下位に、半截竹管による山形文が施されている。胴部内面ナデ、底部布目痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P77 33G 10%	
		C 6.9				
2	壺 弥生式土器	B (4.8)	底部から胴部下位にかけての破片。底部は突出した平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部外面に、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部内面へう削り、底部木炭痕有り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P76 36G 10%	
		C [11.4]				
3	壺 弥生式土器	B (2.4)	底部片。平底。内・外面摩擦著しい。底部網代痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P74 表採 5%	
		C 11.0				
4	壺 弥生式土器	B (4.3)	底部から胴部下位にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾気味に斜方向に立ち上がる。胴部内・外面ナデ調整。二次焼成を受けている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P75 A5f.区覆土上層 10%	
		C [8.3]				
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第295図 5	高台付坏 土師器	B (3.9)	底部から体部下位にかけての破片。平底で、「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	貼付け高台。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。内面はへう磨き後黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P78 38G 30%
		D 9.5				
		E 1.5				



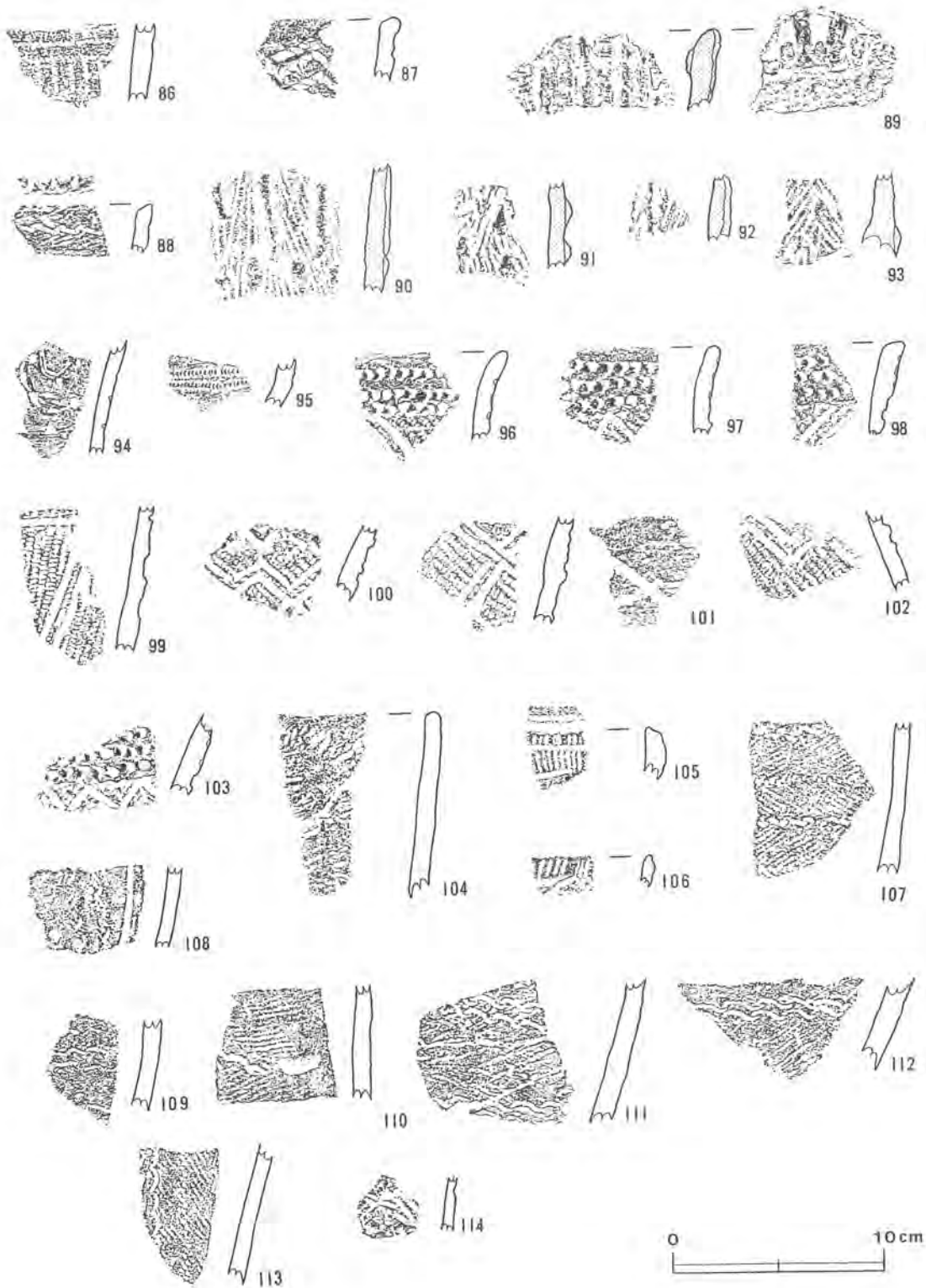
第296图 遗物包含層・遺構外出土遺物拓影图(1)



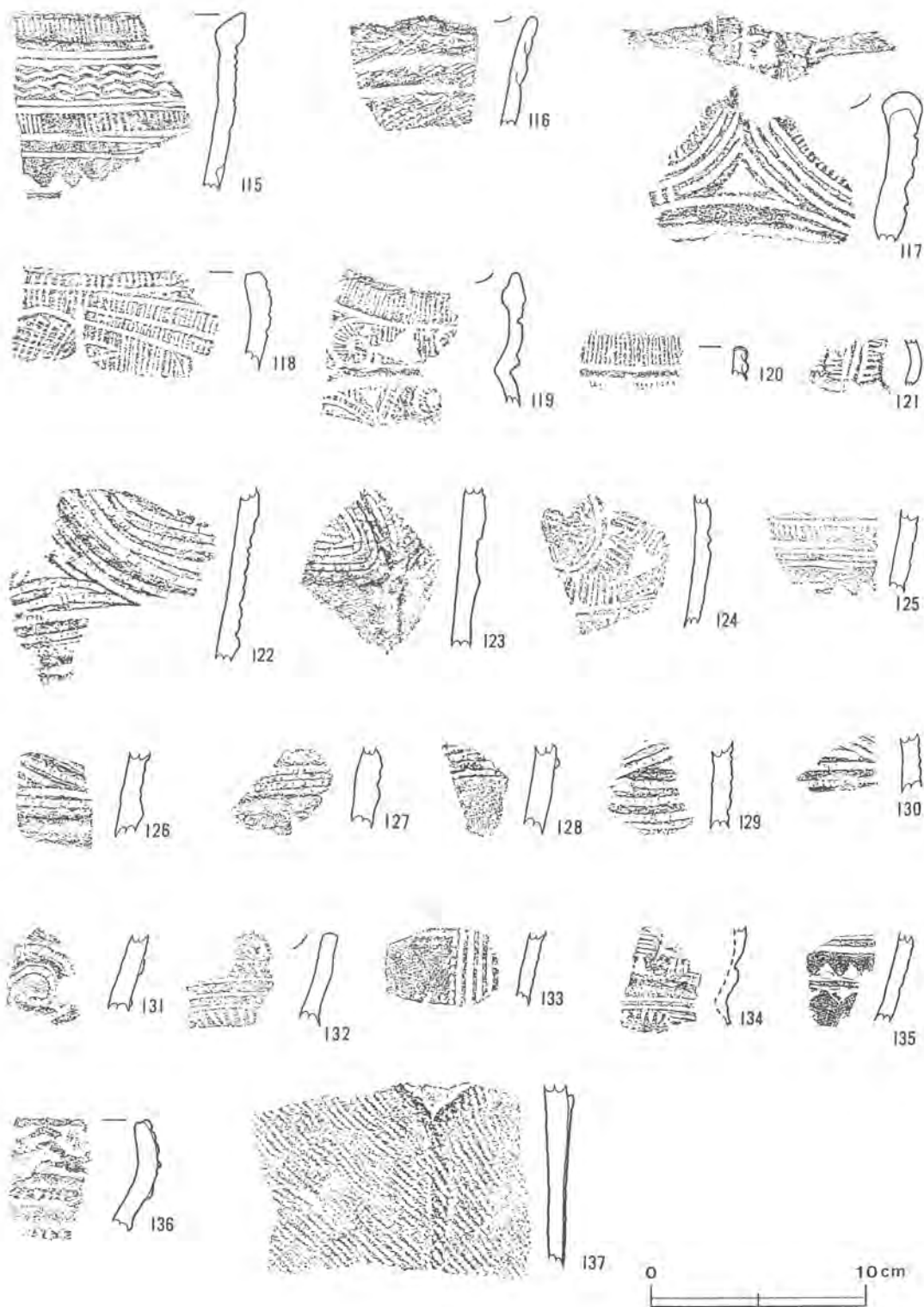
第297图 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影图(2)



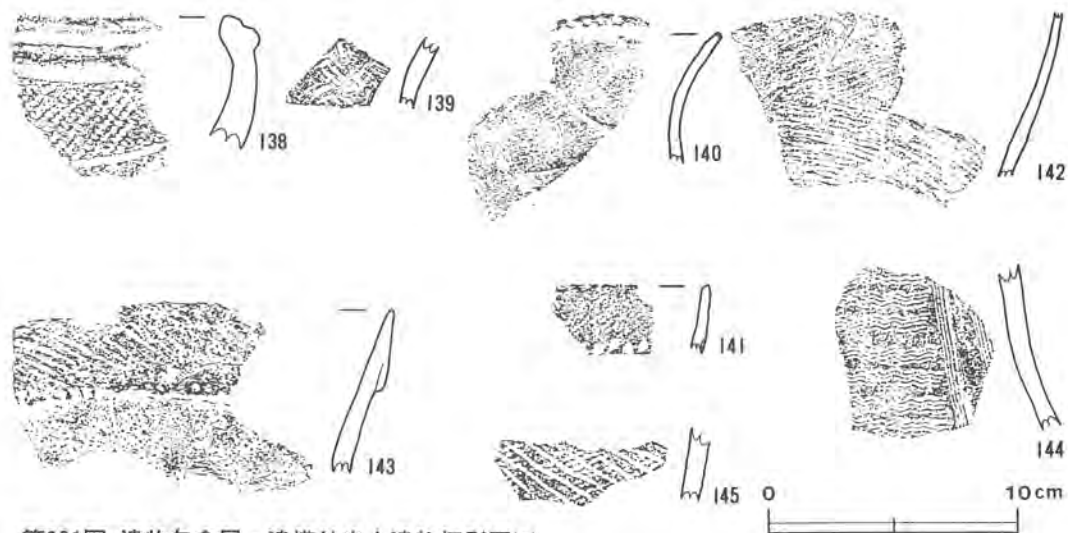
第298図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(3)



第299图 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影图(4)



第300图 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影图(5)



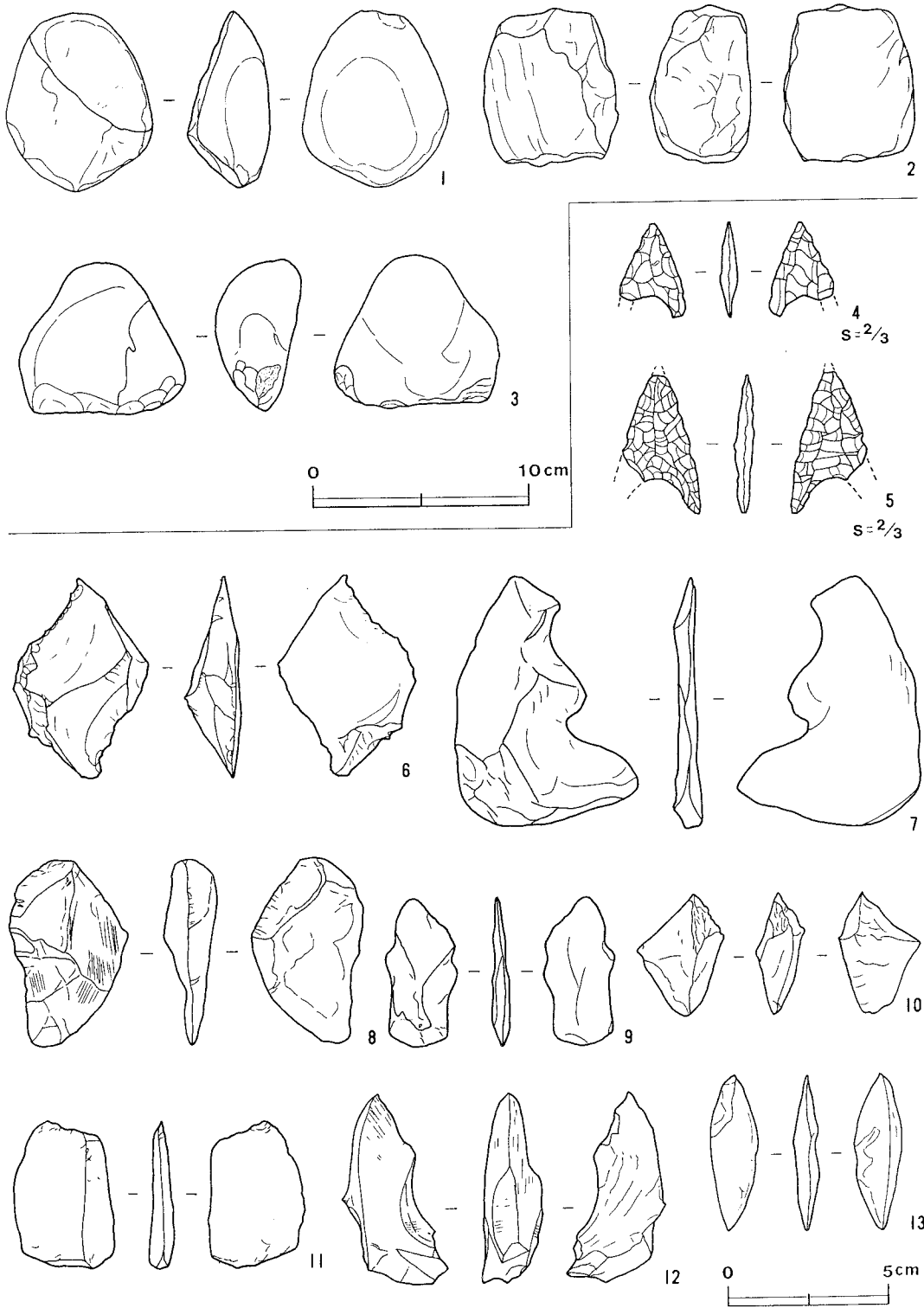
第301図 遺物包含層・遺構外出土遺物拓影図(6)

遺物包含層・遺構外出土遺物一覧表

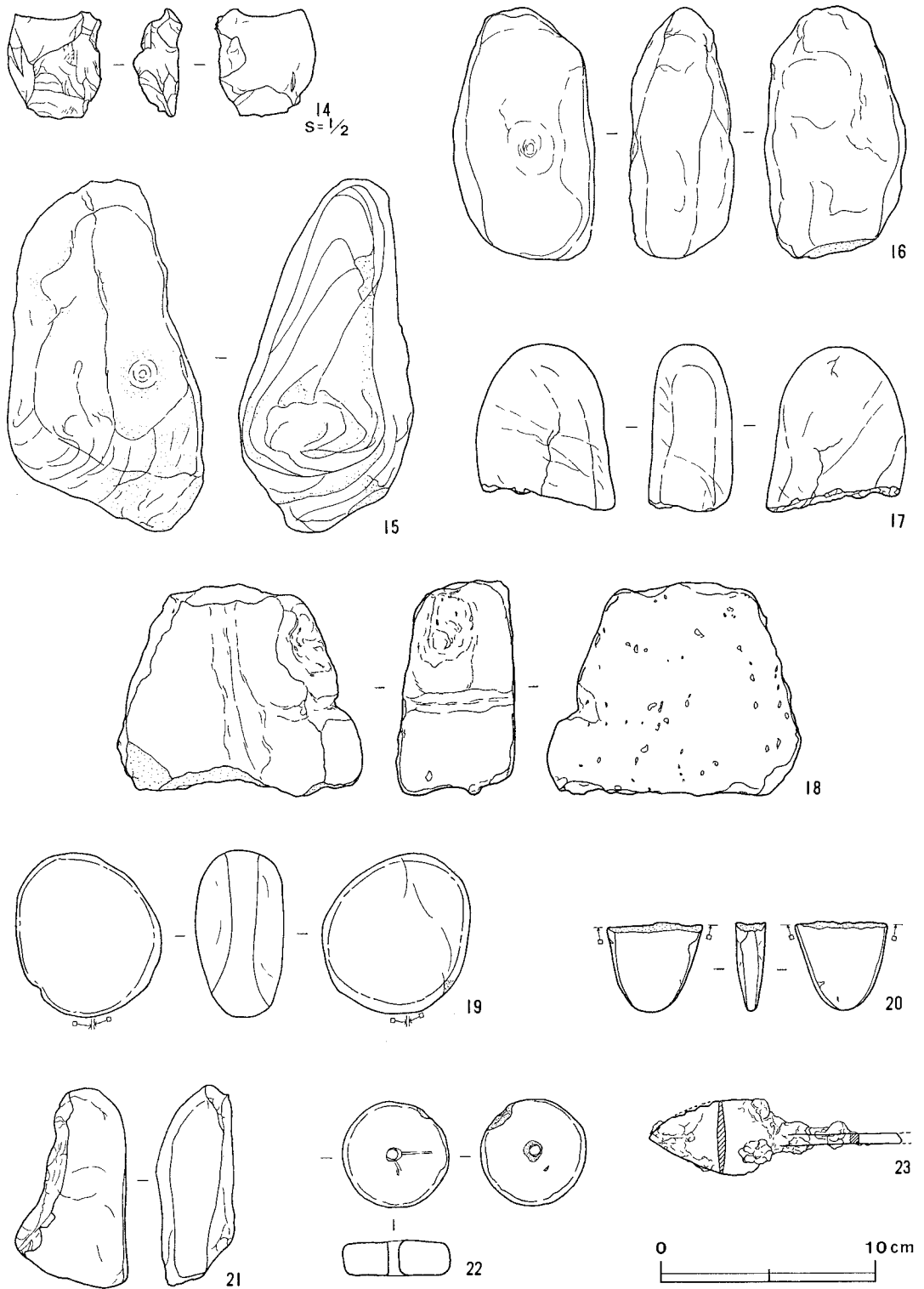
図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第302図	1	礫器	砂岩	8.1	6.8	3.9	156.8	19G	Q 8
	2	礫器	砂岩	7.3	6.2	3.7	309.7	12G	Q24
	3	礫器	砂岩	7.1	7.7	4.0	238.5	20G	Q25
	4	石鏃	安山岩	2.3	1.5	0.4	0.8	B5b ₁	Q15
	5	石鏃	ホルンフェルス	(3.3)	(1.7)	0.5	(1.6)	52G	Q30
	6	剥片	頁岩	6.2	4.2	1.8	31.0	A6h ₂	Q11
	7	剥片	頁岩	7.7	5.7	1.0	26.4	A6h ₆	Q12
	8	剥片	頁岩	5.8	3.7	1.7	21.6	A6h ₇	Q13
	9	剥片	頁岩	4.6	2.2	0.6	5.4	B5d ₁	Q14
	10	剥片	ホルンフェルス	3.8	2.7	1.5	8.3	B 6区	Q16
	11	剥片	頁岩	4.5	3.2	0.8	9.1	B7c ₁	Q17
	12	剥片	頁岩	5.9	3.3	1.9	21.0	C4b ₁	Q19
	13	剥片	頁岩	4.9	1.5	0.8	4.3	C 2区	Q20
第303図	14	剥片	頁岩	3.3	3.0	1.4	10.4	A 4区	Q31
	15	凹石	砂岩	16.6	9.3	8.3	941.4	A4d ₀	Q 9
	16	凹石	砂岩	12.0	6.7	4.9	526.6	A4f ₀	Q10
	17	敲石	流紋岩	7.8	6.6	3.9	247.4	33G	Q27
	18	敲石	安山岩	10.1	11.4	5.6	640.8	33G	Q28
	19	磨石	砂岩	7.8	6.8	4.2	295.2	33G	Q26
	20	磨石	砂岩	4.2	4.4	1.4	34.7	52G	Q29
	21	砥石	砂岩	9.5	5.4	3.5	202.0	C 2区	Q21

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					
第303図 22	紡錘車	5.0	5.0	1.7	5.0	(52.8)	98	39G	D P 3

図版番号	全長	鍔身長	鍔身幅			関幅	茎長	備考
			先幅	中幅	元幅			
第303図 23	(11.9)	5.8	—	3.5	(3.0)	0.8	(6.1)	M 1



第302図 遺物包含層・遺構外出土石製品実測図



第303図 遺物包含層・遺構外出土石製品・土製品・鉄製品実測図

第3節 考察

当遺跡から検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡12軒、土坑95基、溝2条、遺物包含層1か所である。本節においては、時代別に解説するが、縄文時代については、遺構が検出されなかったため、土器区分からは省くこととする。弥生時代については、土器をⅢ期に区分し、それをもとに遺物や遺構について考察を試みる。

1 縄文時代

当遺跡からは、遺物包含層を中心に縄文式土器が出土している。遺物包含層から出土した遺物⁽¹⁾で注目されるのは、本県において、石岡市宮部遺跡に次いで2例目の出土である草創期の表裏縄文土器が、草創期の土器や早期の土器とともに層位的にとらえられたことである。表裏縄文土器の上層から草創期の燃糸文系土器である井草式土器、さらにその上層から早期の三戸式土器と田戸下層式土器が出土している。その地点から西側では、井草式土器の上層から田戸下層式土器、さらにその上層から田戸上層式土器が出土し、表裏縄文土器→井草式→三戸式→田戸下層式→田戸上層式という、草創期から早期にかけての変遷が確認されている。

その他、前期の土器では後葉に位置付けられる浮島式土器が比較的まとまって出土している。当遺跡においては、この浮島式土器と東北の大木5式土器や南関東の諸磯c式土器が伴出しており、並行関係を知ることができる。前期末葉の土器では、南関東を中心に分布している十三菩提式土器が結節文の施されている土器と伴出している。

2 弥生時代

当遺跡から検出された弥生時代の遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑1基、遺物包含層1か所である。本節においては、出土した土器の形態や特徴から時期区分を行い、それをもとに住居跡の特徴を述べ、集落についても検討を加えていくこととする。

(1) 土器の変遷について

当遺跡から出土した弥生式土器は、弥生時代後期後半という限られた時期のものである。原田北遺跡における弥生式土器も後期後半の時期のものであったため、当遺跡の弥生式土器についても、原田北遺跡の土器変遷を参考に考えていくこととする。

当遺跡の弥生時代住居跡のうち、第10・12号住居跡については、出土遺物が少なく時期決定が困難であったため、ここでは、時期決定できた10軒の住居跡について述べることとする。

原田西Ⅰ期

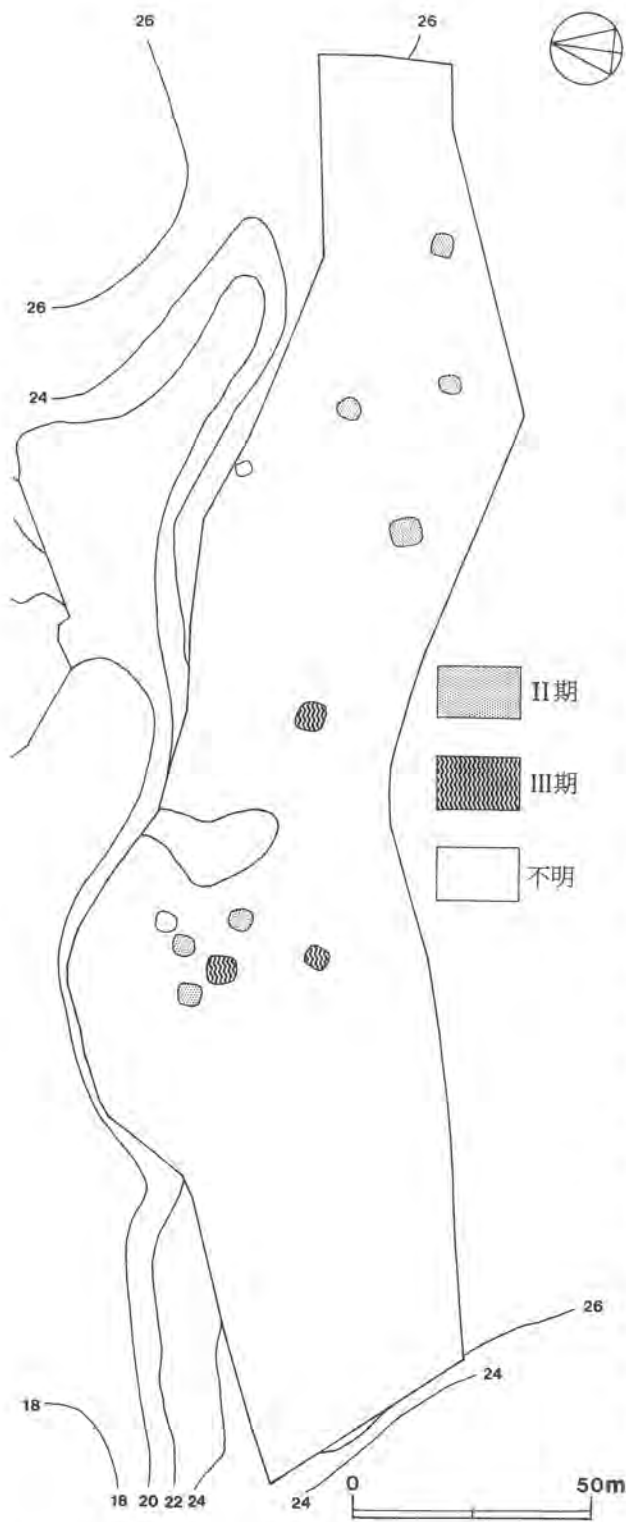
本時期は原田北Ⅰ期と並行する時期である。住居跡の覆土や遺物包含層から土器片が少量出土しているだけであり、本時期の遺構は検出されていない。広口壺と甕が出土しており、広口壺は縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下端に貼瘤を持つもので、頸部を無文帯としているものである。縄文施文の複合口縁や頸部の無文帯などに長岡式土器からの流れが考えられ、上稲吉式直前の後期後葉（新）に位置付けられるものである。包含層においては、口縁部にキザミ目が施される甕が出土している。外面はハケ目調整されており、南関東系のものと思われる。

原田西Ⅱ期

本時期は原田北Ⅱ期と並行する時期であり、第1・2・3・4・7・9・11号住居跡の7軒が該当する。本時期の土器の特徴は、所謂南関東系土器で組成を成すことにある。原田北遺跡において、主体を占めていた上稲吉式土器は客体の土器となっているのである。本時期の壺は2種類確認されている。縄文施文の複合口縁を呈し、3本1組の棒状浮文が貼られているもので、胴部は球形を呈するものと思われる。胴部上位には沈線や結節文により区画される縄文帯をもつものである。もう1例は頸部下端に「ボタン」状の貼付けがなされ、胴部には縄文が施され、長胴を呈しているものである。広口壺は無文で、頸部下端に輪積み痕が観察されるものと、縄文施文の複合口縁を呈し、頸部を無文帯とするものが出土している。甕は口唇部が小波状を呈し、内・外面は横ナデされているものである。その他、鉢は縄文施文の複合口縁を呈し、内彎して立ち上がっているもので、高坏は脚部が「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がり、赤彩されているものである。その他、無頸壺、蓋が出土している。このように、当遺跡における土器の特徴は南関東の土器そのもので、特別な器種だけが持ち込まれているのではなく、生活に必要な器種すべてが南関東系のもので占められており、その地域からの移住によるものと考えられる。

本時期に伴っている上稲吉式土器は第1・3号住居跡出土の無文の複合口縁を呈し、下端に2個1組の貼瘤を持つものである。原田北遺跡においては、Ⅱ期に多くみられたものである。第1号住居跡からは、頸部と胴部が櫛描波状文で区画される十王台式の破片も出土しており、本時期は後期末葉（古）に位置付けられる。

他地域の土器として、群馬を中心に分布し、複合口縁上に櫛描波状文が施されている樽式土器が第4・7号住居跡から出土しており、第4号住居跡出土の片口を呈する鉢や赤彩されている高坏はその影響によるものと考えられる。第11号住居跡からは二軒屋式土器が出土している。頸部下端に「ボタン」状の貼付けがなされ、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されているものである。二軒屋式Ⅳ段階のものである。



原田西III期

本時期は原田北III期と並行するものであり、第5・6・8号住居跡の3軒が該当する。本時期においても当遺跡においては、南関東系土器が主流である。壺においては無文化が進み、器形は在地に多く見られる長胴化の傾向を示すようになることに特徴がある。壺は2種類出土している。縄文施文の複合口縁を呈し、口縁下端に円形の刺突文が施され、胴部上半に結節文区画による羽状縄文帯を持つものと、頸部以下無文でやや長胴を呈するものである。広口壺は単口縁を呈し、無文のもの、胴部上半に網目状撚糸文区画の羽状縄文帯と沈線区画による鋸歯状文を持つ土器で無文部は赤彩されているもの、複合口縁を呈し、頸部下半を無文帯としているものが出土している。甕は口唇部にキザミ目が施され、外面無文のものである。鉢は縄文施文の複合口縁を呈するものと、無文のものがある。高坏は脚部が短く「ハ」の字状を呈するものと、脚部が「ラッパ」状に開くものが出土しており、赤彩されている。また、甕形を呈する土器で、2cm前後の小孔が穿たれる土器が4点出土しており、甕として利用されたと思われる、新しい器種が加わっていることも特徴である。

第304図 原田西遺跡弥生時代時期別住居跡配置図

上稲吉式土器は、第5・6号住居跡から出土している。単口縁を呈し、頸部下半を無文帯としているものであるが、貼瘤は持っていない。附加条1種(附加2条)の縄文から上稲吉式土器と思われ、単口縁であることから、上稲吉1(新)式に位置付けられる。十王台式土器は第6・8号住居跡から出土している。第8号住居跡出土のものは、口縁部文様帯が幅広であるが無文で、押圧隆起線もさほど高くなく、胴部には附加条2種(附加1条)の縄文が施されているものである。十王台1(新)式のもので、後期末葉(新)に位置付けられる。

他地域の土器としては、第5号住居跡から太目の単節縄文が施文され、複合口縁を呈する土器が出土しており、吉ヶ谷・赤井戸式土器と思われ、当遺跡においても各地との交流がなされていたことが窺える。

(2) 住居形態と集落構成について

本項においては、時期ごとに住居形態や集落構成について述べる。集落構成については「世帯共同体」や「農業共同体」の概念を用いて解説する。

原田西Ⅰ期

本時期に該当する遺構はなく、遺物も少ない。当遺跡は原田北遺跡や原出口遺跡に住んでいた人々の畑あるいは森林等の生活面となっていたと思われる。

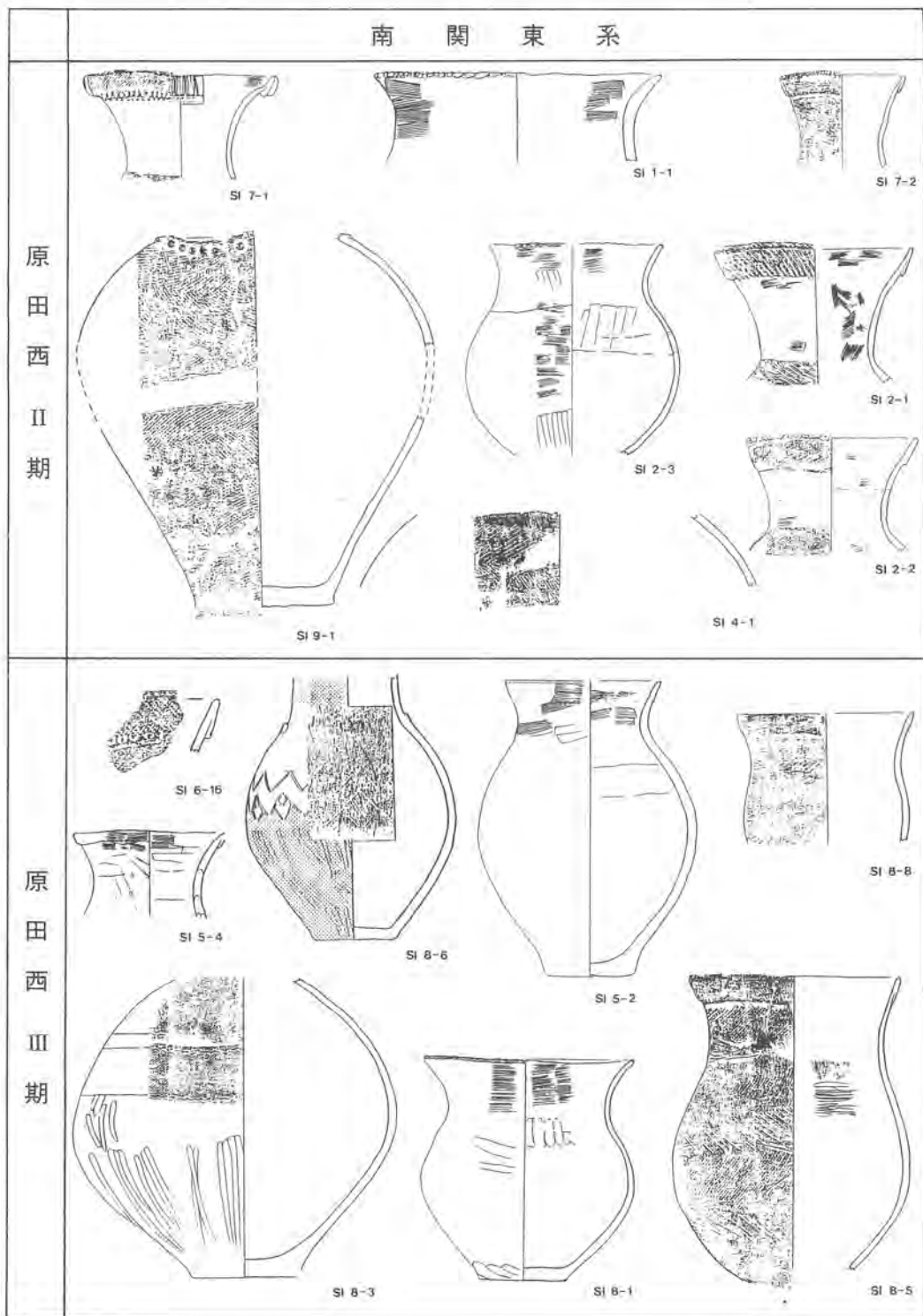
原田西Ⅱ期

本時期に該当する住居跡は7軒である。平面形については、隅丸方形5軒、隅丸長方形2軒である。原田北遺跡と比較して隅丸方形が多いということは、当遺跡が南関東からの移住者による集落であることが関係していると思われる。

炉の位置は、すべての住居において北側支柱穴のほぼ中央にある。南関東の千葉県市原市唐崎台遺跡⁽²⁾や八千代市権現後遺跡⁽³⁾などにおける後期末葉の住居跡の炉の位置も同様であり、関連が考えられる。

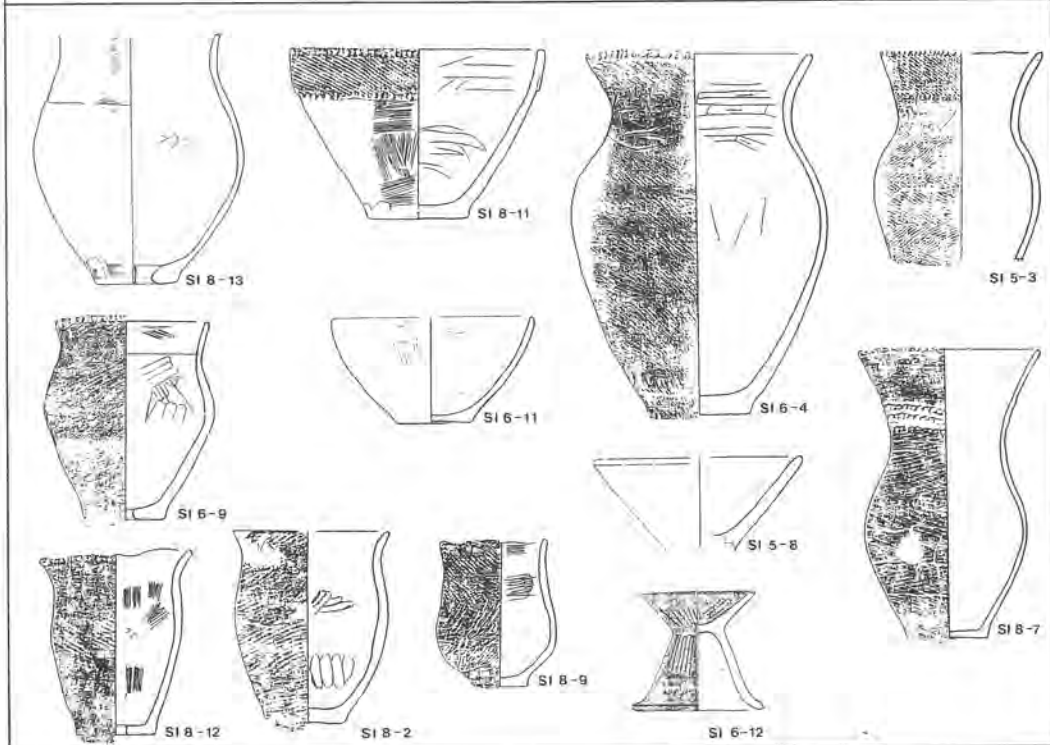
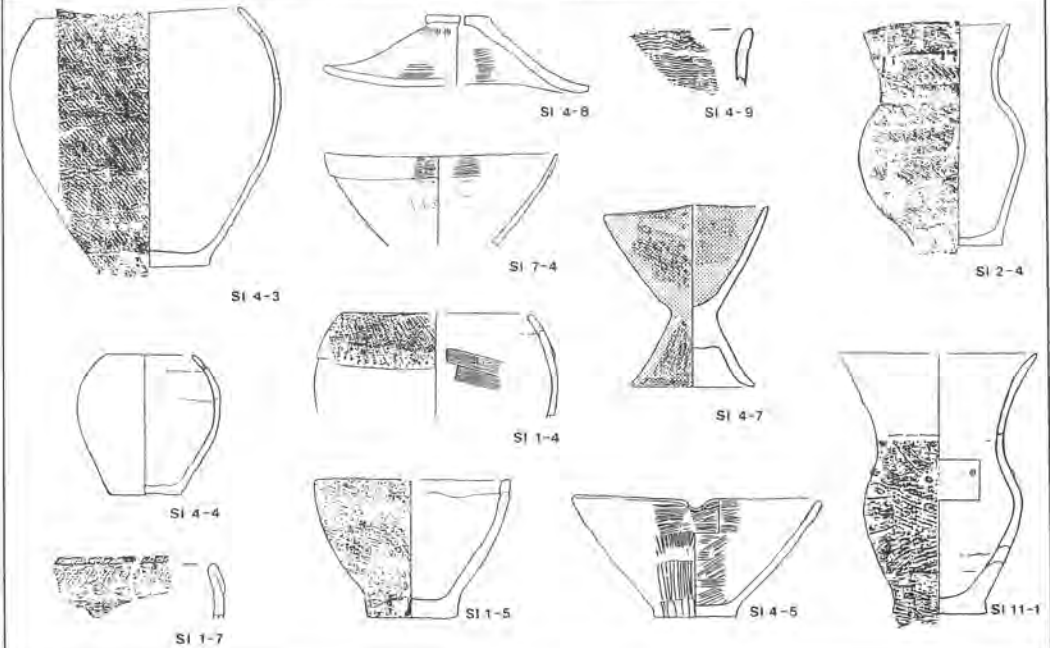
住居の規模は床面積30㎡以上1軒、20～30㎡4軒、20㎡以下2軒で、平均は23.34㎡である。柱穴の状況は4本柱を基本とし、出入口施設に伴うと思われるピットを持つものも多い。第9号住居跡は中形、第11号住居跡は小形のものであるが、柱穴と思われるピットは2本だけの検出であり2本柱の可能性はある。

本時期の集落は東部の第1～4号住居跡のグループと、西部の第7・9・11号住居跡のグループの2つのグループから成る。これらのグループは「世帯共同体」と思われ、東部のグループでは30㎡以上の第4号住居が中心となると思われる。原田北遺跡の「世帯共同体」と比べ、東部の「世帯共同体」は一軒一軒の距離が30mから60mと離れて存在しており、南側に広がる台地に入口を向けている。台地の中央部の方に入口を向け、一軒一軒がある程度の距離を持ち「世帯共同体」



第305図 原田西遺跡弥生式土器変遷図

南関東系・上稲吉式・樽式・二軒屋式・十王台式



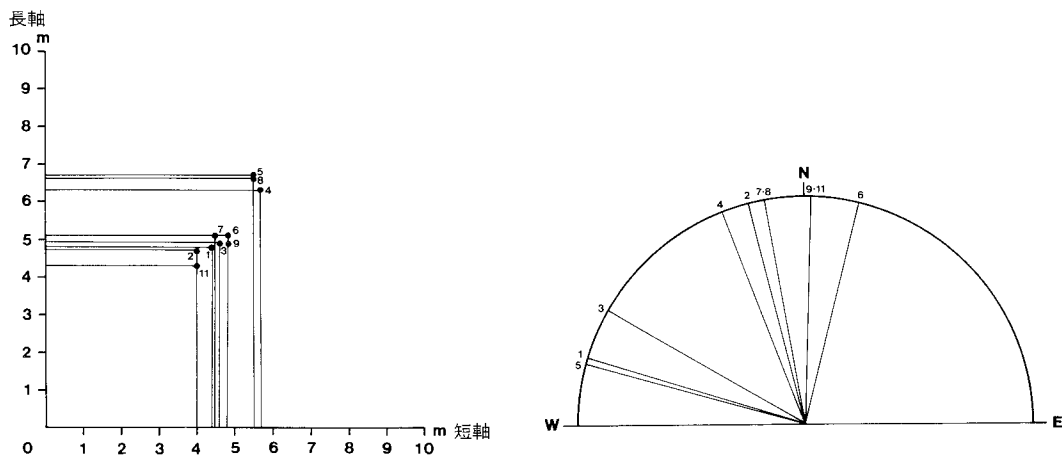
を構成する例として、県内の遺跡では勝田市東中根遺跡⁽⁴⁾があり、東中根遺跡においては、「移動式焼畑農業」の可能性が指摘されている。当遺跡の東部の「世帯共同体」も、台地中央の方に広がりを持つように、「世帯共同体」が位置すること、当遺跡と原田北遺跡の間の小支谷は幅が10～20mであり、本時期の二つの遺跡を合わせた住居数28軒分の水田としては狭すぎるなどから、畑作も行っていたと思われる。

原田西Ⅲ期

本時期に該当する住居跡は3軒であるが、当調査区の南側に広がる台地に遺跡がのびる可能性があり、住居数は増えるものと思われる。平面形は隅丸長方形1軒、不整隅丸長方形1軒、隅丸長方形1軒で隅丸長方形が多かった原田北Ⅲ期と似た傾向を示している。

炉の位置は第6・8号住居跡が北側柱穴のほぼ中央にあり、前時期や本時期の特徴を示している。第5号住居跡の炉は中央からやや北寄りにあるものの主軸は短軸上にあるものと考えられ、原田北遺跡の古墳時代前期の住居の主軸も短軸上にとることが多いから、第5号住居跡についてはより古墳時代に近いものとするできよう。

住居の規模は、床面積30㎡以上2軒、20～30㎡1軒で平均は32.82㎡である。30㎡以上の住居跡は「世帯共同体」の中心となる家と考えれば、本時期においては「世帯共同体」の中心の家が2軒以上は存在することになり、原田北遺跡Ⅲ期にみられたように「世帯共同体」間が協業をとる段階「農業共同体」の段階に達していたと考えられる。



第306図 原田西遺跡住居跡規模・長軸方向

註

- (1) 茨城県教育財団 「宮部遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第Ⅺ集 1982年
- (2) 市原市教育委員会 『唐崎台』 1979年
- (3) 千葉県文化財センター 『八千代市権現後遺跡』 1984年
- (4) 勝田市史編さん委員会 『勝田市史別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年

結 語

土浦北工業団地造成地内に所在する遺跡の調査は、平成2年4月から実施されている。今回対象となった原田北（A・B・C・D・Z地区）・原田西遺跡の調査は平成2年4月から平成4年3月まで実施したものである。平成4年4月からは、原田北遺跡（E・F・G地区）、原出口遺跡、西原遺跡の調査が実施されている。

原田北遺跡からは、弥生時代の住居跡67軒、古墳時代の住居跡29軒が検出されている。弥生時代の住居跡は後期後半のもので、上稲吉式期のものが中心である。上稲吉式土器分布圏の中心地において拠点集落と考えられる当遺跡の遺構・遺物は、当時の社会解明に大きく役立つと思われる。集落は後期後葉に営まれ始め、次第に住居が増加し、後期末葉に隆盛を迎える。大規模な住居を中心に数軒を単位とするいくつかのグループからなる集落の構造が明らかになっている。

弥生時代の遺物では、各地域からの土器が出土していることが注目される。茨城北部の十王台式土器、栃木東部の二軒屋式土器、群馬南部から埼玉西部の吉ヶ谷・赤井戸式土器、南関東の久が原・弥生町式土器であり、当遺跡の人々が各地と交流していたことを知ることができる。

当遺跡においては、弥生時代終末期に突如として、集落が消える。古墳出現期であり、当遺跡周辺も再編成されたのであろう。

古墳時代の前期（五領期）後半になり、また人々の生活が営まれる。中期（和泉期）前半になると、100㎡を越す大形住居が、中形のものや小形のものとも組み合わせり、集落を形成することが確かめられている。当遺跡に隣接する愛宕山古墳群や原出口遺跡から検出されている方形周溝墓などとの関連が考えられる。

原田西遺跡からは、弥生時代の住居跡12軒が検出されている。原田西遺跡出土の弥生式土器は後期後半のものでありながら、原田北遺跡の土器と大きく違っている。壺・甕・鉢など生活に必要な土器すべてが、南関東系のものである。このことにより、原田西遺跡は南関東からの移住者による集落と想定されている。

このように、今回の調査は幾つかの新たな事実が判明し、大きな成果を上げることができた。時間的な制約の中で膨大な資料を十分に検討し得なかった感もあるが、本報告書が今後当地域の歴史の解明の一助となれば幸いである。

なお、本報告書をまとめるに当たり、土浦市教育委員会をはじめ、関係機関並びに関係各位から御指導・御協力を賜ったことに対し、文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

附 章

原田北遺跡第62号住居跡出土直刀の分析調査

帝京大学山梨考古学研究所

1. はじめに

茨城県教育財団からご依頼のありました標記について、科学分析を含む自然科学的な観点からの調査を行いました。その結果についてご報告いたします。

2. 調査項目および方法

(1) 試料採取

通常X線透過写真により、金属部分の確認をしてから試料採取を行うが、本資料には鞘と思われる木部が両面に残存していることと、古代の直刀として貴重なものであり、資料採取には極力少量に留めることが要求されていたため、付着木部部分を避けて試料採取することになった。全重量は65gほどあり、金属部の残りが良いと想定されたので、金属探知機を使用して確認のうえ、高速回転切断器で分析用試料と物理試験用試料で合計(8g)を採取した。外観写真参照。

(2) 化学成分分析

(2)-1 方法 ②、③の分析フローシートを図1に示す。

①E PMA……………C：(炭素) S：(硫黄)

②誘導結合プラズマ……………Al：(アルミニウム) Ca：(カルシウム) Co：(コバルト)

発光分析(ICP) Cr：(クロム) Cu：(銅) Mg：(マグネシウム) P：(燐)

Mn：(マンガン) Mo：(モリブデン) Ni：(ニッケル)

Sn：(錫) Ti：(チタン) V：(ヴァナジウム) Zn：(亜鉛)

③モリブデン青吸光度計…Si：(珪素)

(2)-2 結果 表1に示す。

表1 出土直刀定量結果

試料名	C	S	Si	Al	Ca	Co	Cr	Cu	Mg	Mn	Mo	Ni	P	Sn	Ti	V	Zn
出土直刀	0.17	<0.01	0.054	0.007	0.056	<0.002	<0.002	0.004	0.010	<0.001	<0.001	0.006	0.018	<0.003	0.002	<0.001	<0.002
方法	E PMA	吸光法	誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES)														

② CおよびSの定量結果はE PMAによるものである。

(3) EPMAによる調査

(3)–1 介在物分析

金属の中に閉じ込められた介在物を調査することによって、原料の推定や加工状況を知ろうとするもので、採取された試料を樹脂に埋め込み、表面を鏡面研磨してから、電子顕微鏡で表面を観察し形態の異なる介在物2カ所について特性X線像により調査した。

(3)–2 調査元素 下記のとおりであり、結果を写真1～8に示す。

Fe:(鉄) Si:(珪素) Ca:(カルシウム) O:(酸素) Al:(アルミニウム)

K:(カリウム) Mg:(マグネシウム) Ti:(チタン) Mn:(マンガン)

S:(硫黄) P:(燐)

検出元素は上記アンダーラインのとおりである。

(4) 金属組織観察

試料を樹脂に埋め込み、鏡面研磨をした後に、ナイトール液によりエッチングして金属組織を観察した。A部はフェライト組織、B部はパーライト組織になっているのが観察された。

(5) 硬度測定

金属組織観察により差異のあったA/B部分についてマイクロヴィッカース試験機により、硬度を測定した。結果を表2に示す。

表2 硬度測定結果

・出土直刀 (HMV)

測定値 試料	荷重=500g 保持時間=30秒					平均
	1	2	3	4	5	
A 部	95	92	99	101	99	97
B 部	150	141	142	141	136	142

(6) EPMAによるA部・B部のC:(炭素)定量分析

分析結果は表3に示す。

表3. EPMAによるA部とB部の炭素(C)の定量分析結果

(wt%)

A 部	<0.01
B 部	0.26

3. まとめ

- (1) 化学成分分析の結果から、V:(ヴァナジウム)Ti:(チタン)Zn:(亜鉛)等が少なく、また介在物からもTiが検出されていないため、製鉄原料は鉄鉱石ではないかと推定出来るが、山砂鉄を原料にした製鉄製品でもほぼ同様の値を示すものがあり断定は難しい。
- (2) 金属組織と含有炭素量および硬度試験の結果から、A部とB部は同一材料を焼入れしたりしたものではなく、異なった材料であると判断される。

部位	金属 組織	炭素量	平均硬度	備 考
A部	フェライト	<0.01(wt%)	97Hmv	
B部	パーライト	0.26(wt%)	142Hmv	

この資料はごく一部の層だけが残在しており、大半は酸化鉄となってしまうため判定は出来ないが、材料の異なるものを重ね合わせて鍛造したと推定され、実用に供された直刀と思われる。

- (3) Ni:(ニッケル)Co:(コバルト)が少ないため古い時代の物と思われるが、年代の推定は難しい。

写真図版



原田西遺跡第6・8号住居跡出土遺物



調査後全景（原田北遺跡Z地区，原田西遺跡）



調査後全景（原田北遺跡A・B地区）



遺跡遠景



遺構確認状況（B地区）



調査前全景



遺構確認状況（Z地区）



遺構確認状況（D地区）

PL4

原田北遺跡



遺構確認状況(A地区)



遺構確認状況(B地区)



調査後全景Z地区(1)



調査後全景Z地区(2)



調査後全景B地区(1)



調査後全景B地区(2)



第14・16号住居跡出土遺物



第41・78号住居跡出土遺物



第1号住居跡



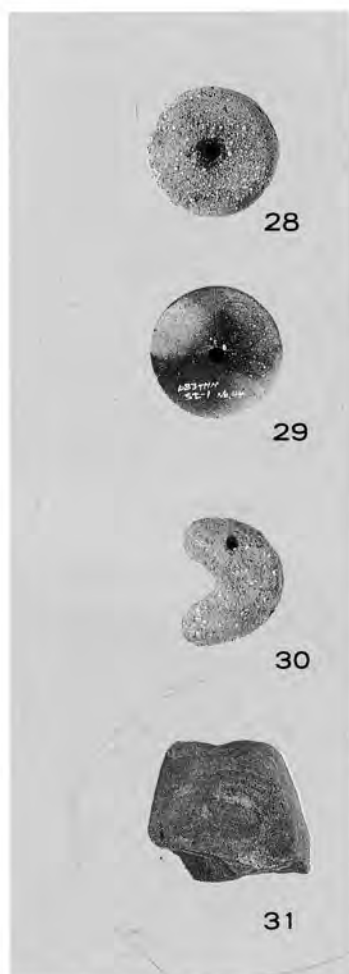
第1号住居跡遺物出土状況(3)



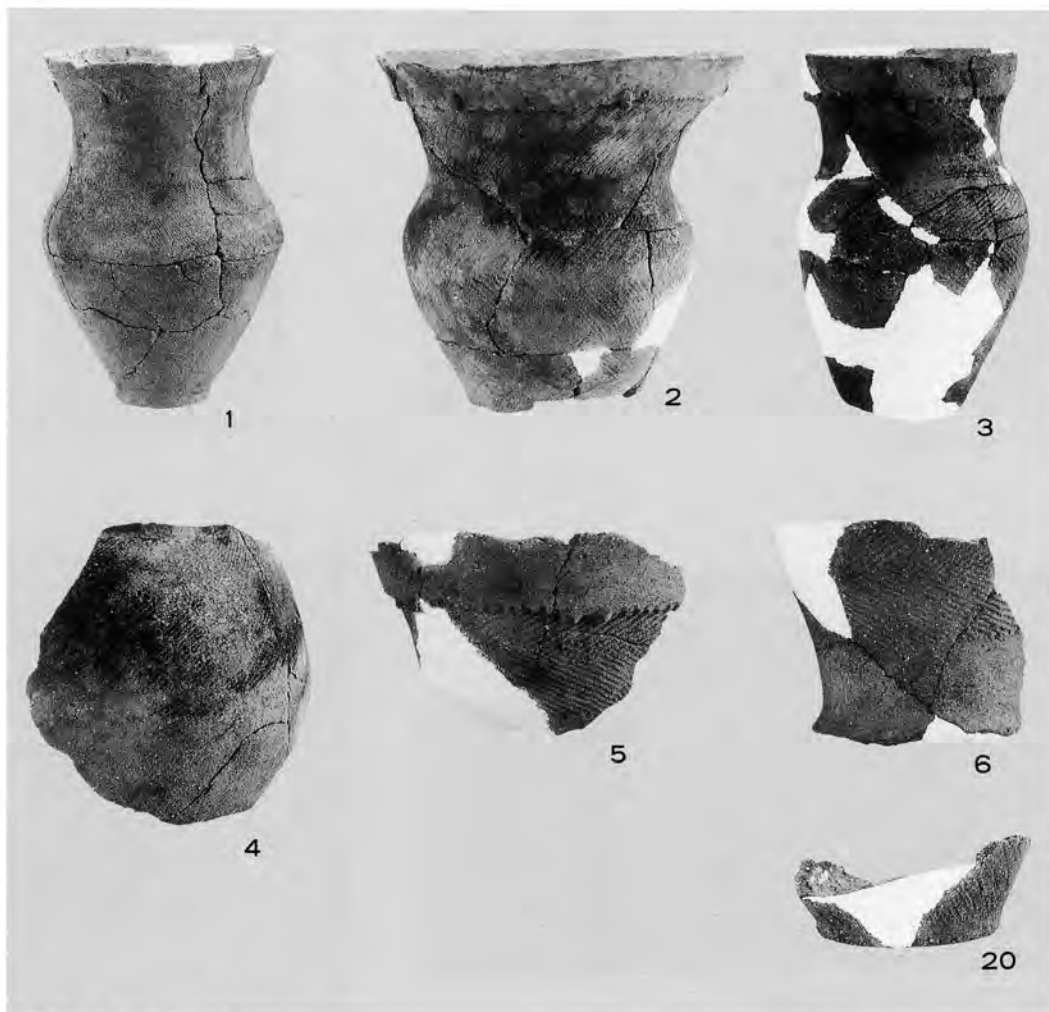
第1号住居跡遺物出土状況(1)



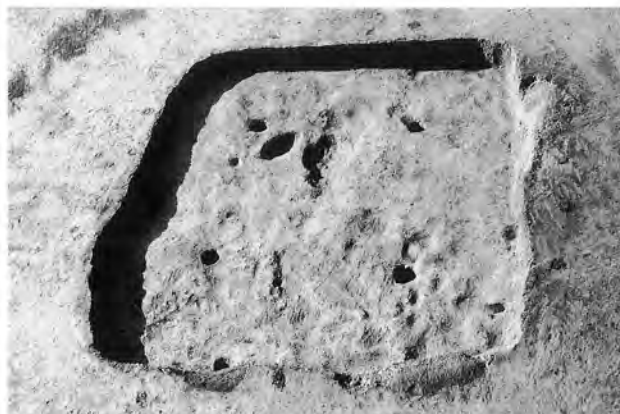
第1号住居跡遺物出土状況(2)



第1号住居跡出土遺物(1)



第1号住居跡出土遺物(2)



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況(1)



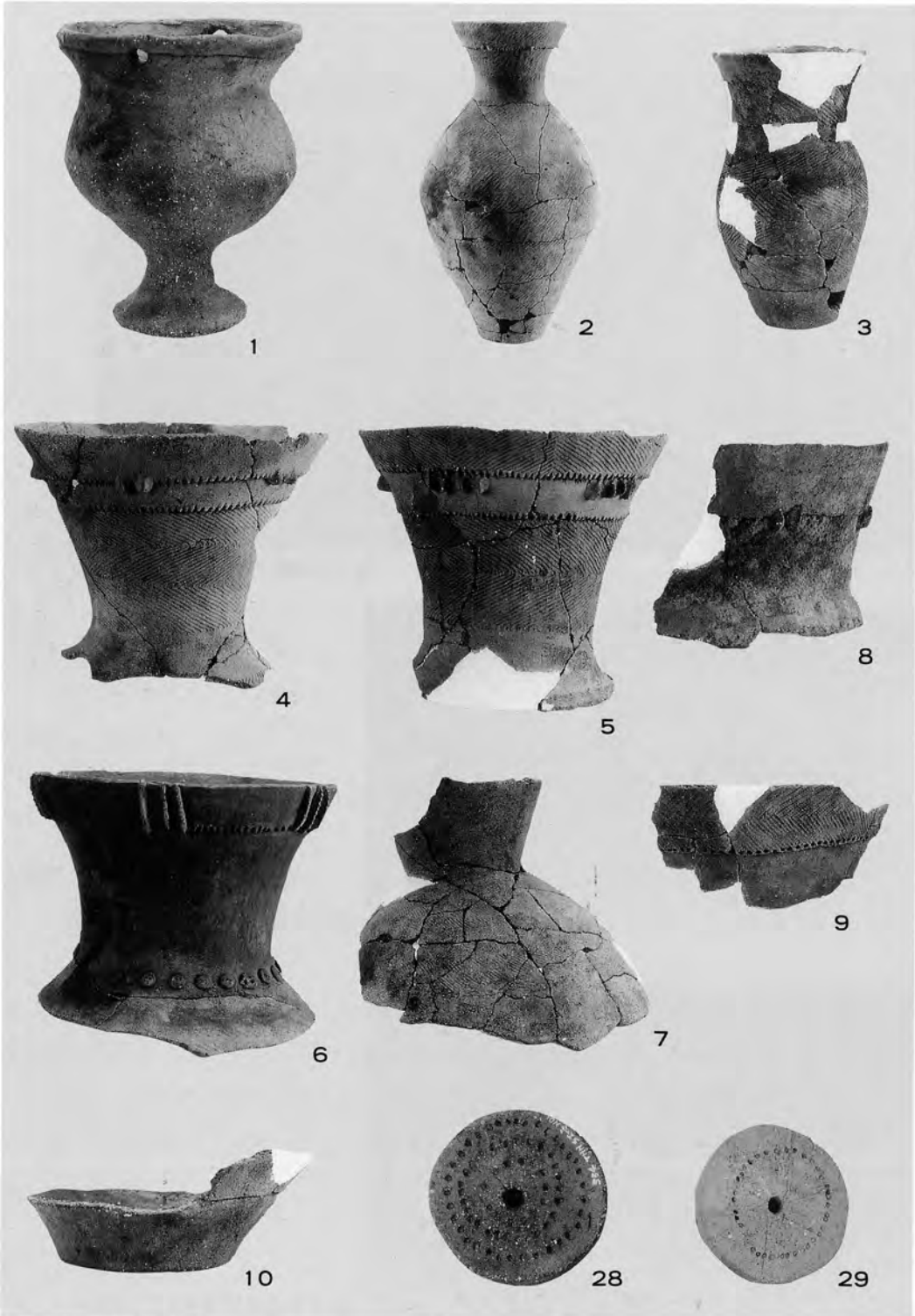
第3号住居跡遺物出土状況(2)



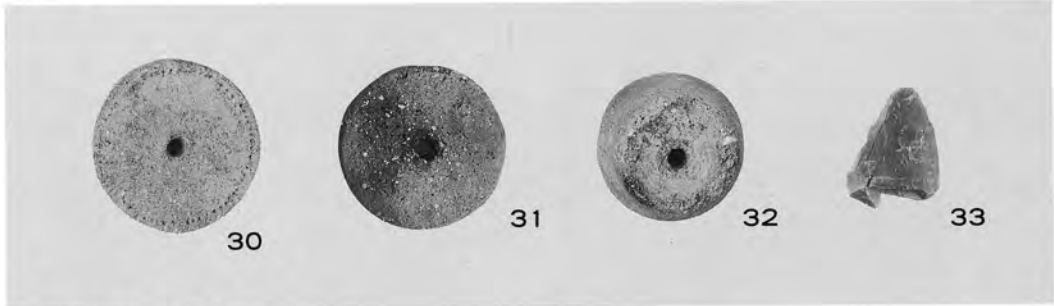
第3号住居跡遺物出土状況(3)



第3号住居跡遺物出土状況(4)



第3号住居跡出土遺物(1)



第3号住居跡出土遺物(2)



第4号住居跡



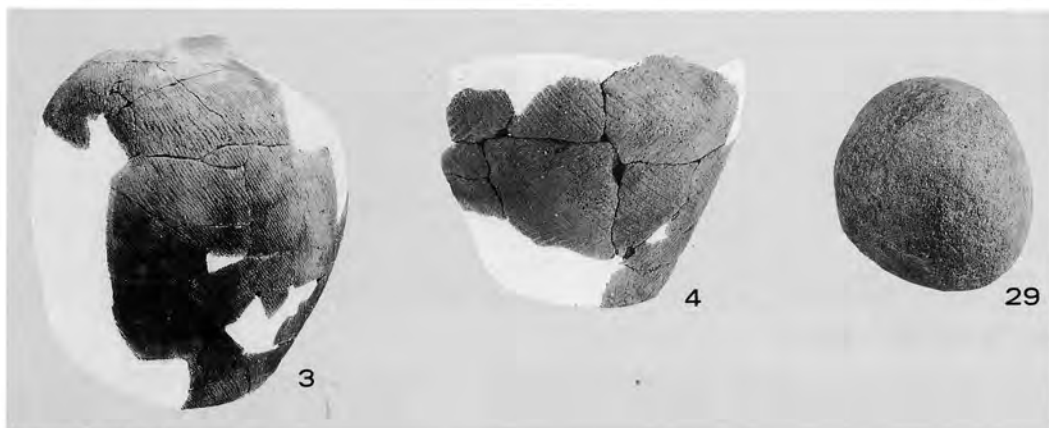
第4号住居跡遺物出土状況(2)



第4号住居跡遺物出土状況(1)



第4号住居跡出土遺物(1)



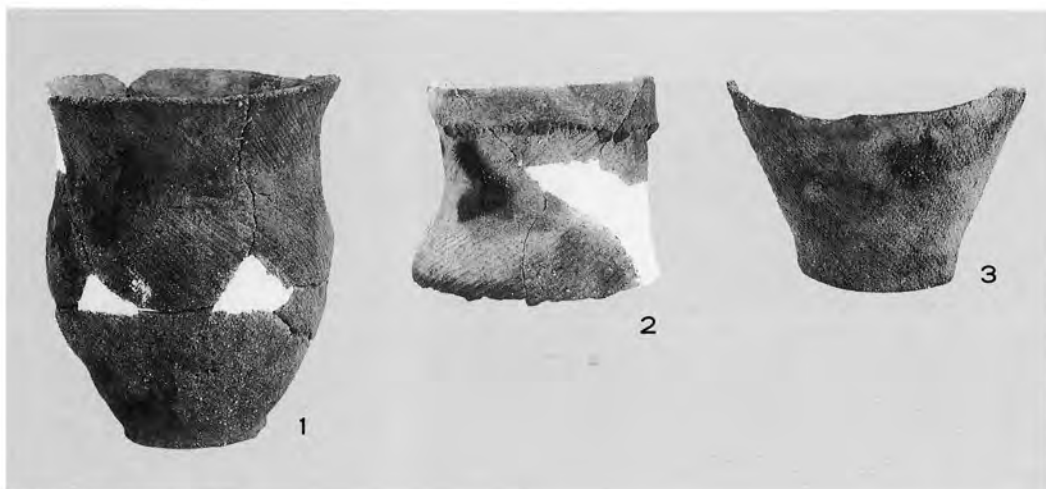
第4号住居跡出土遺物(2)



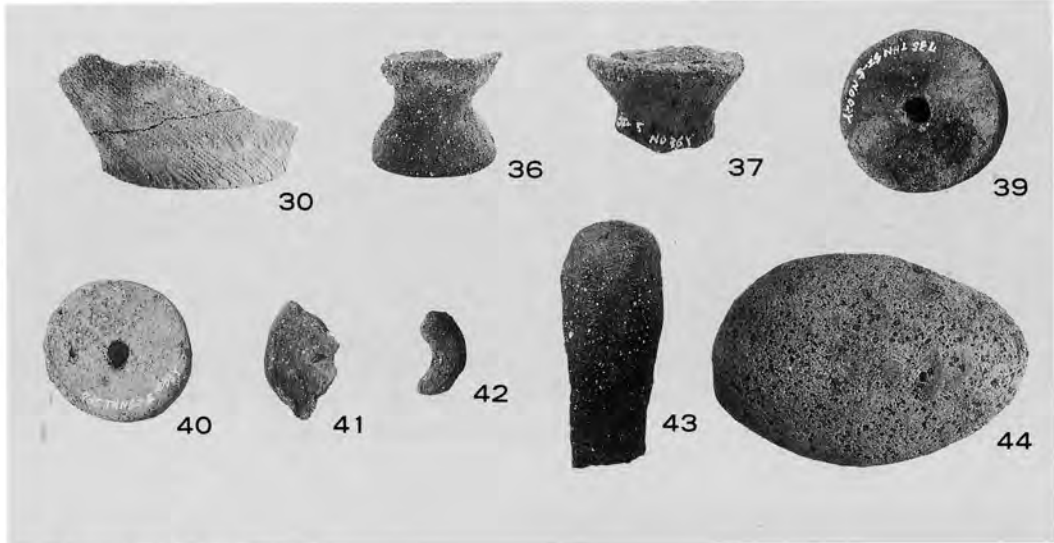
第5号住居跡



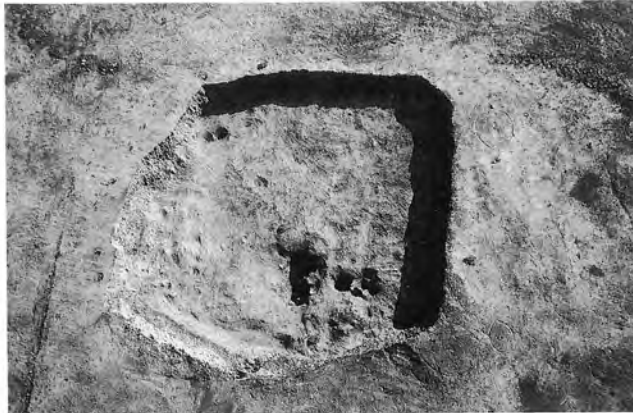
第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡出土遺物(1)



第5号住居跡出土遺物(2)



第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土状況(1)



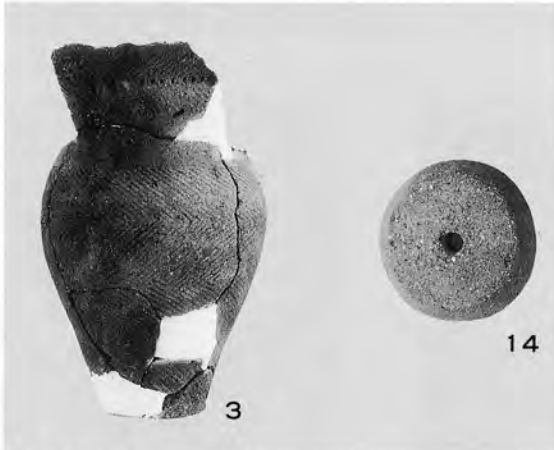
第6号住居跡出土遺物(1)



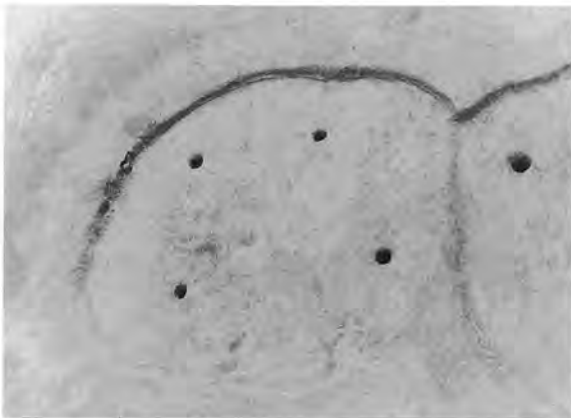
第6号住居跡遺物出土状況(2)



第6号住居跡遺物出土状況(3)



第6号住居跡出土遺物(2)



第7号住居跡



第7号住居跡出土遺物



第 8 号住居跡



第 8 号住居跡遺物出土状況



第 8 号住居跡出土遺物



第 9 号住居跡



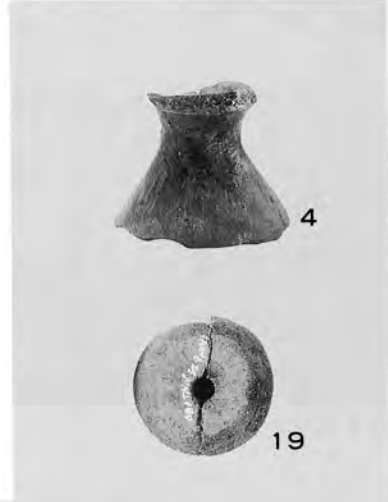
第 9 号住居跡出土遺物(1)

PL16

原田北遺跡



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡出土遺物(2)



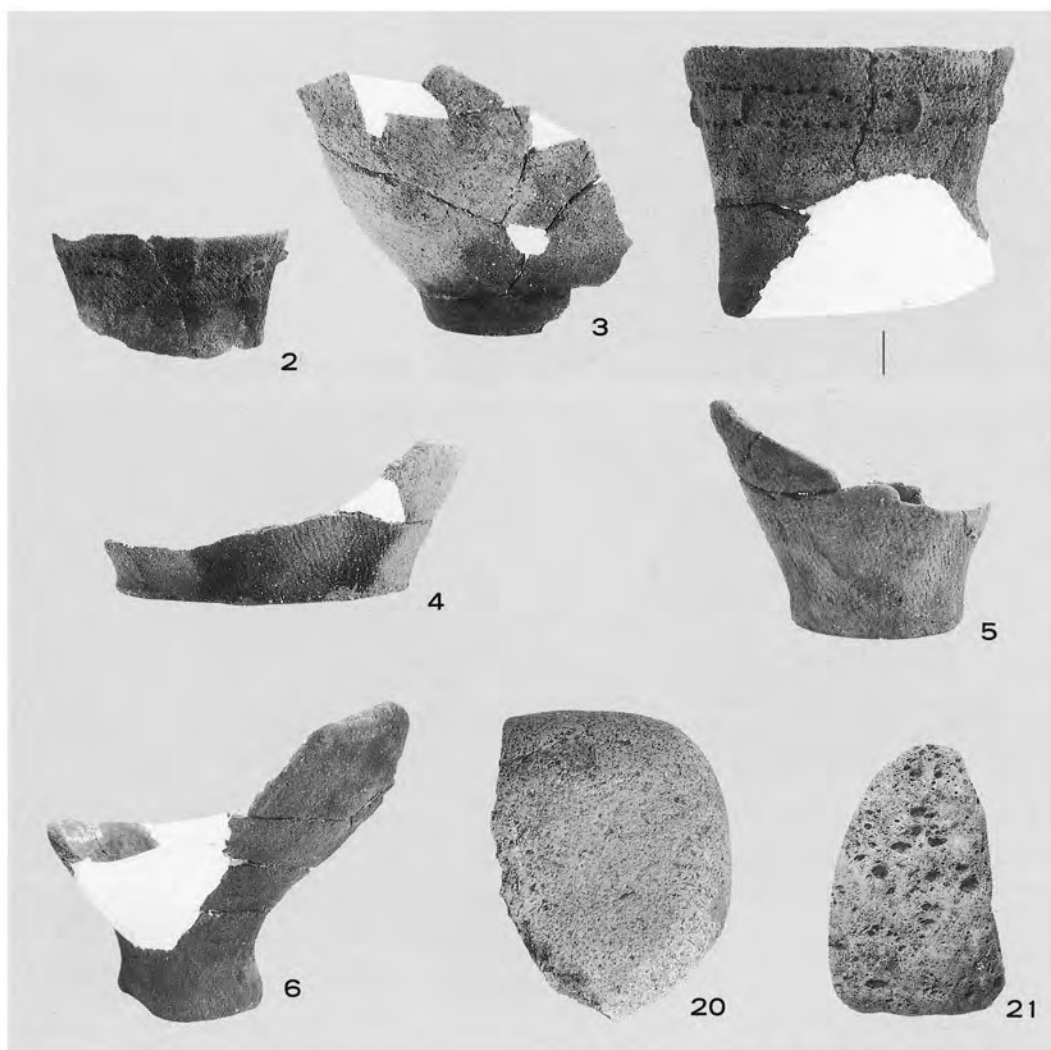
第11号住居跡



第11号住居跡出土遺物(1)



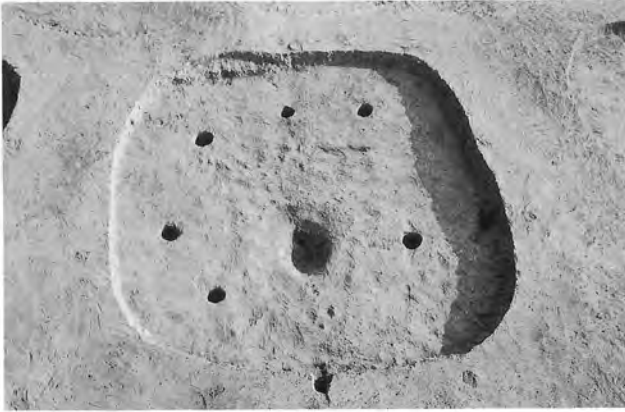
第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡出土遺物(2)

PL18

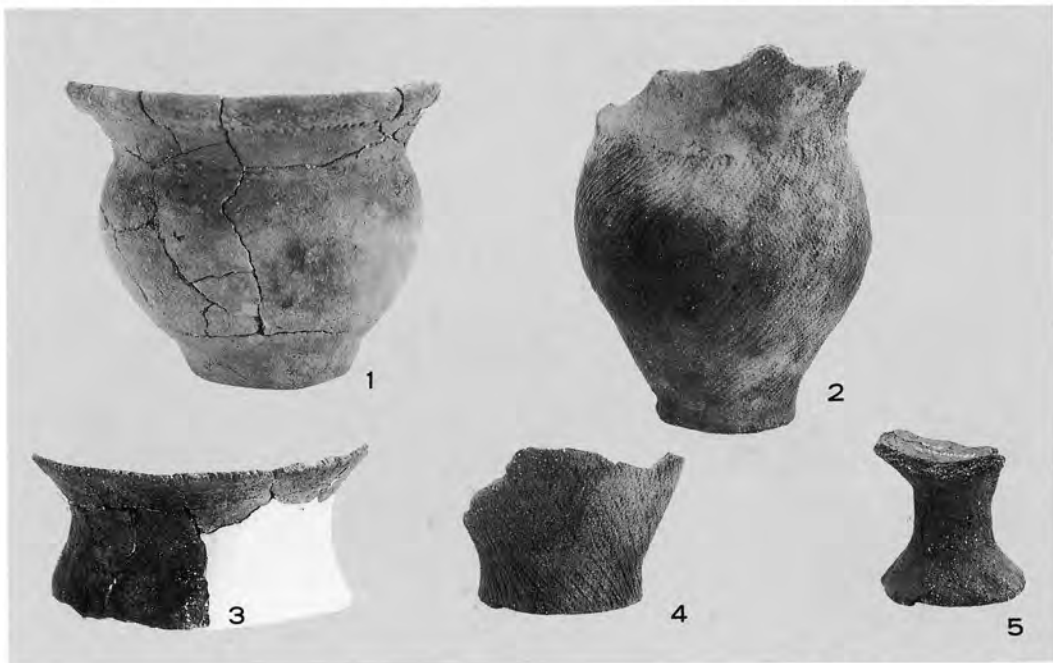
原田北遺跡



第12号住居跡



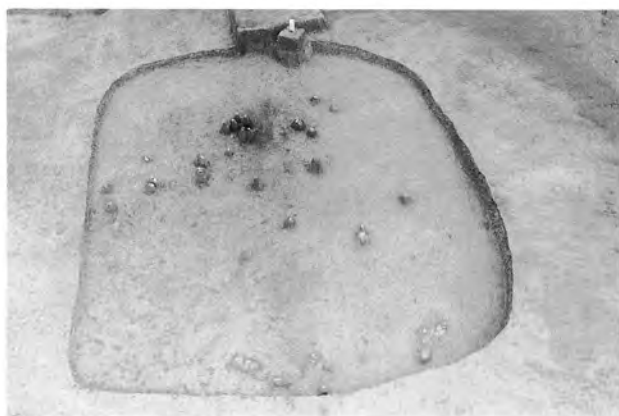
第12号住居跡遺物出土状況



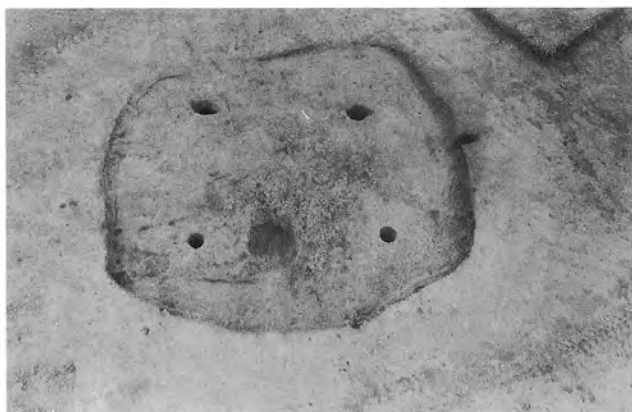
第12号住居跡出土遺物



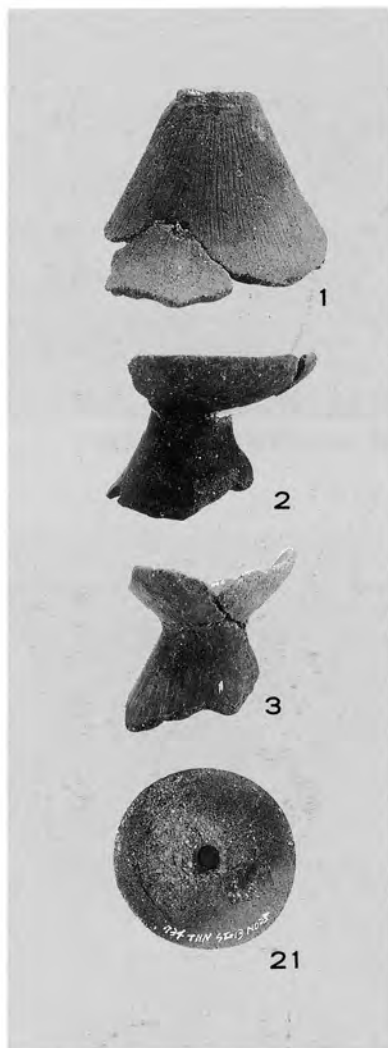
第13号住居跡



第13号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡



第13号住居跡出土遺物



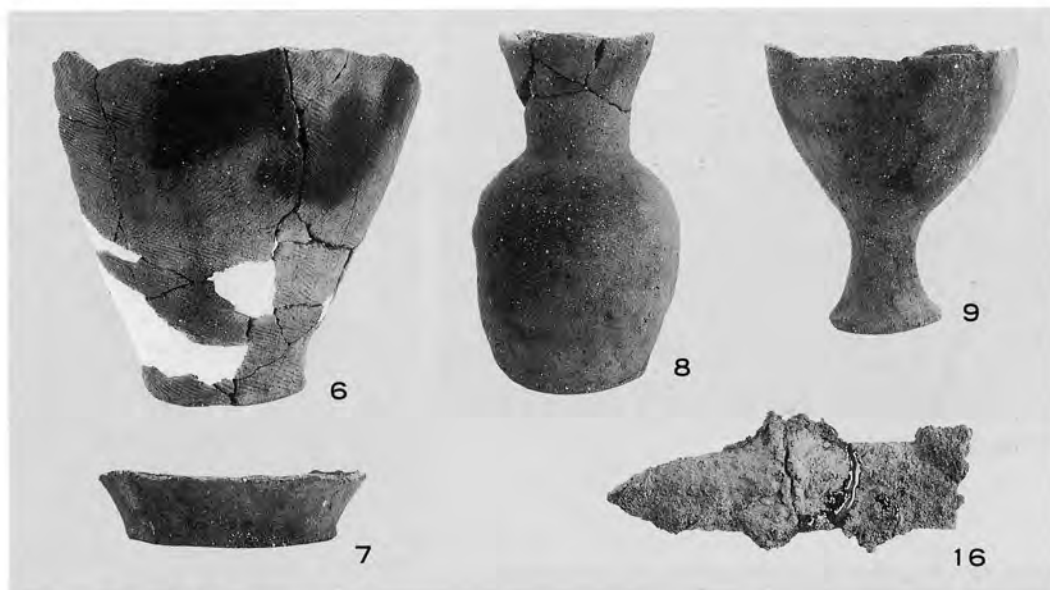
第14号住居跡遺物出土状況(1)



第14号住居跡遺物出土状況(2)



第14号住居跡出土遺物(1)



第14号住居跡出土遺物(2)



第15号住居跡



第15号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況(1)



第16号住居跡遺物出土状況(2)



第16号住居跡出土遺物(1)



第16号住居跡遺物出土状況(3)



第16号住居跡炉土層断面



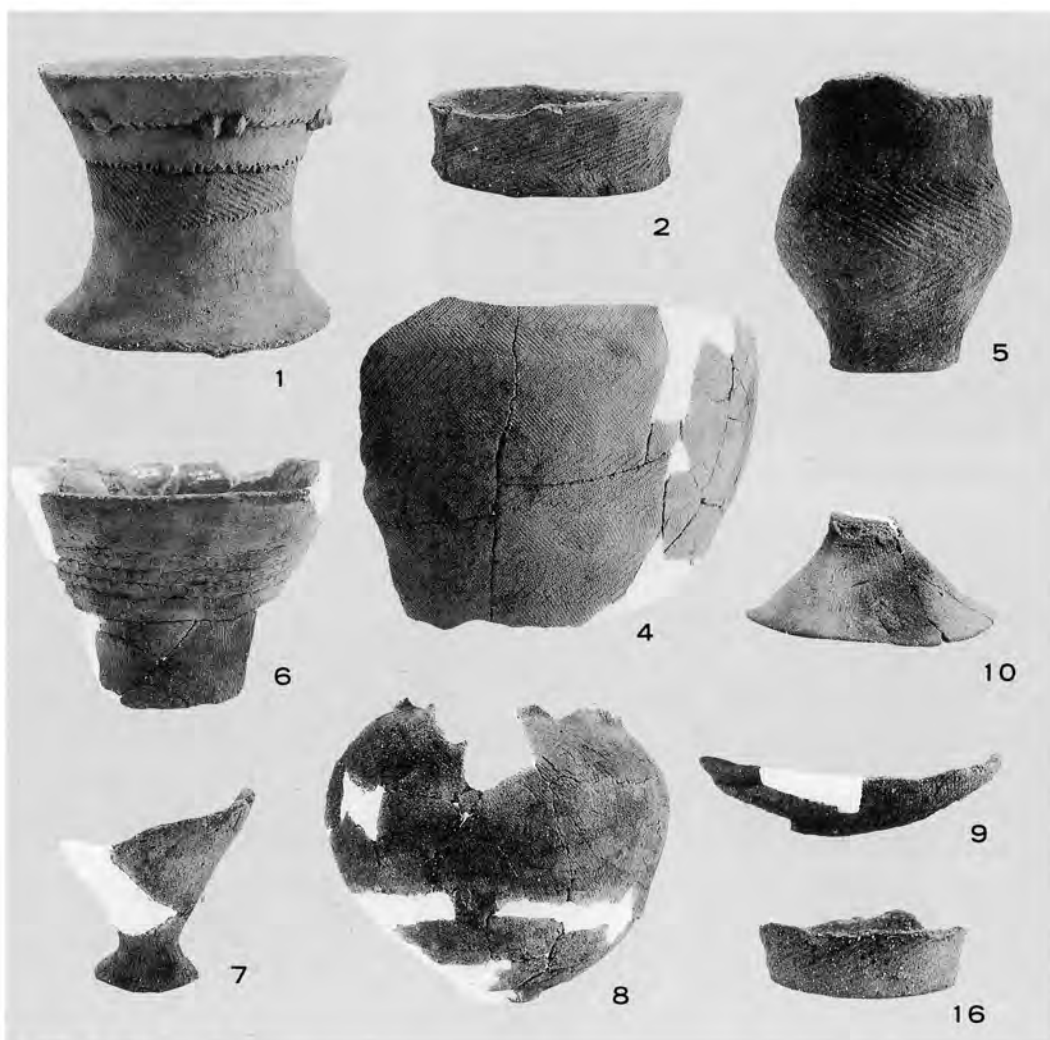
第16号住居跡出土遺物(2)



第18号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況



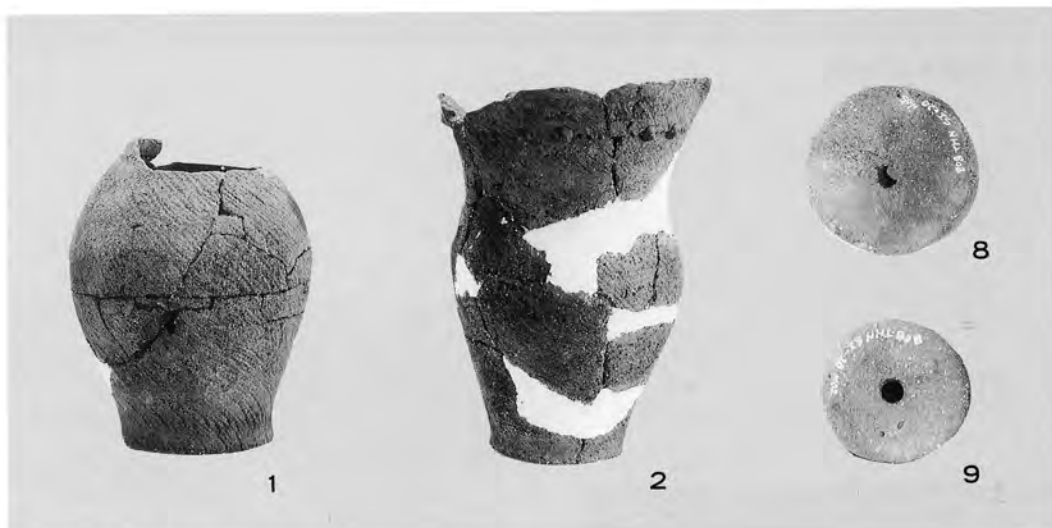
第18号住居跡出土遺物



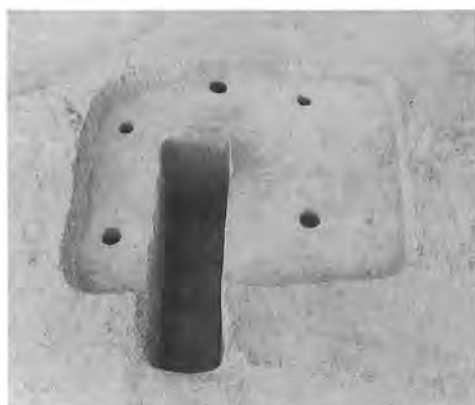
第20号住居跡



第20号住居跡遺物出土状況



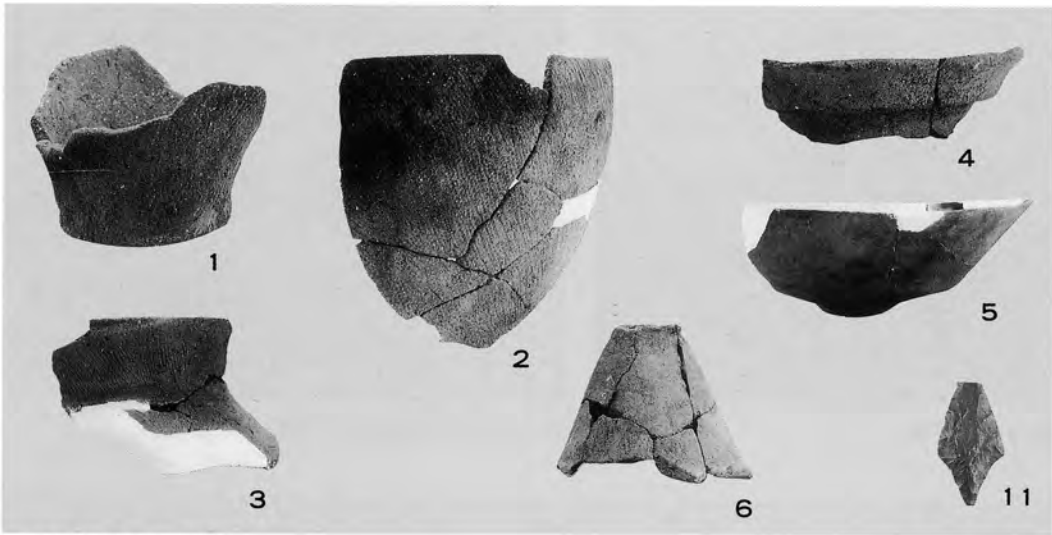
第20号住居跡出土遺物



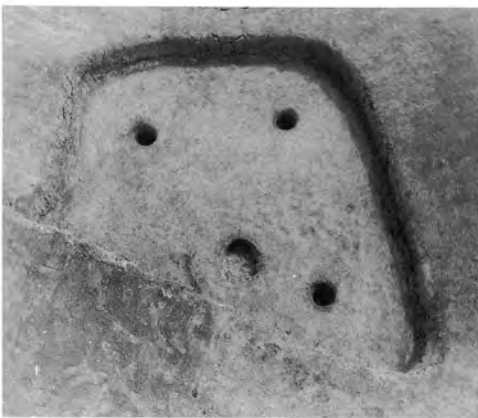
第21号住居跡



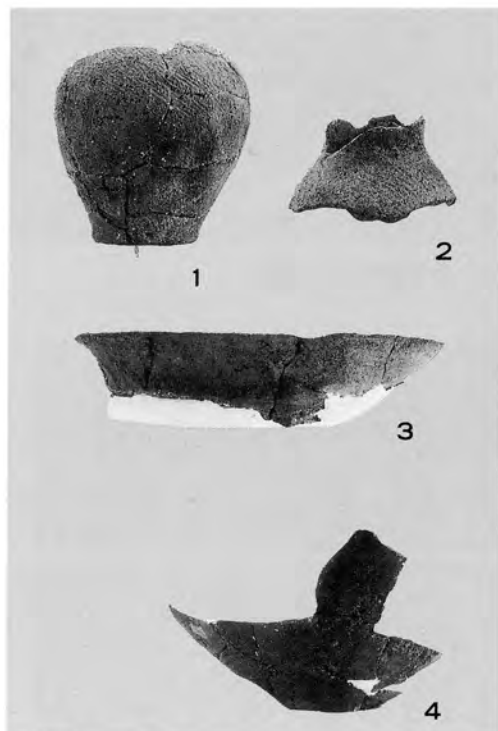
第21号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡出土遺物



第22号住居跡



第22号住居跡出土遺物



第22号住居跡遺物出土状況



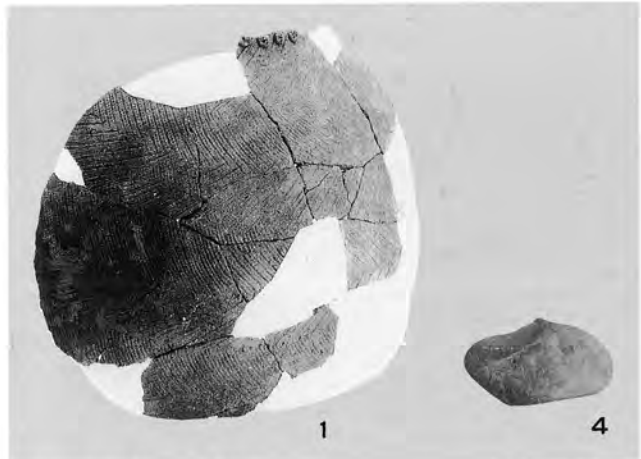
第23号住居跡



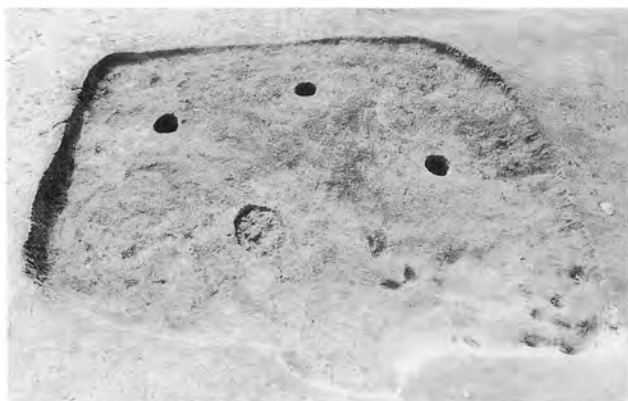
第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡出土遺物



第24号住居跡出土遺物



第24号住居跡



第24号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡



第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡出土遺物



第27号住居跡



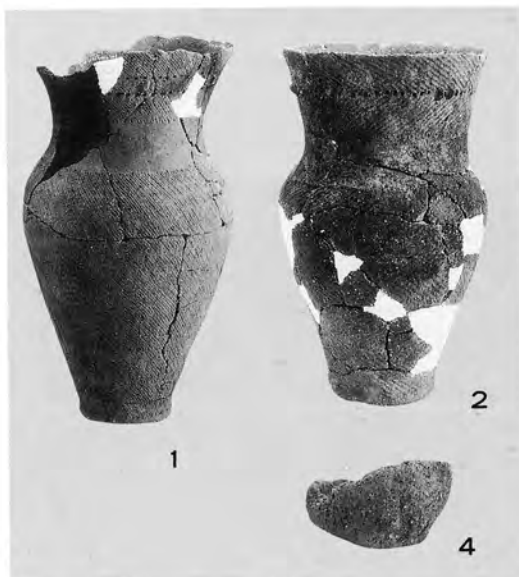
第27号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡



第27号住居跡出土遺物



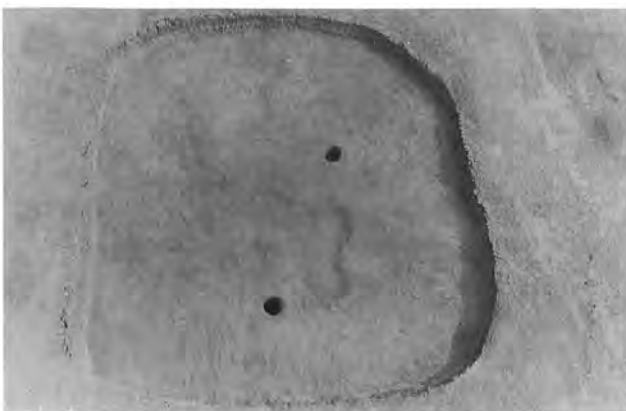
第29号住居跡出土遺物



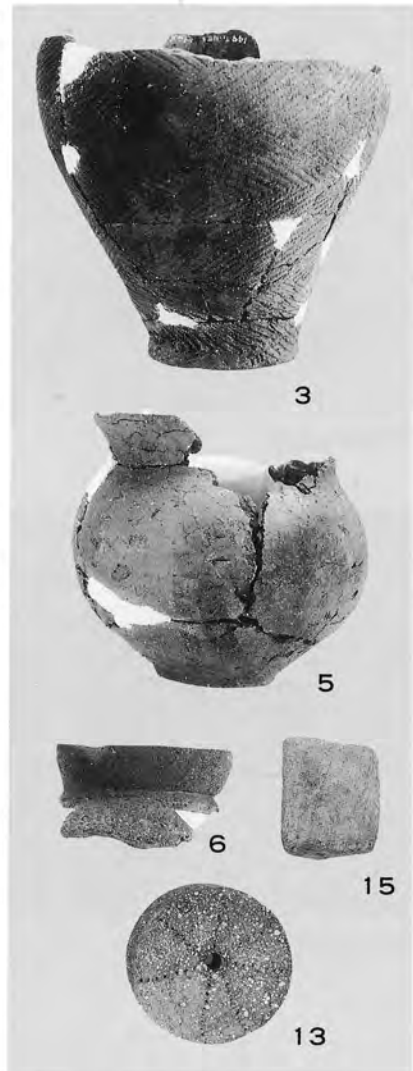
第29号住居跡遺物出土状況(1)



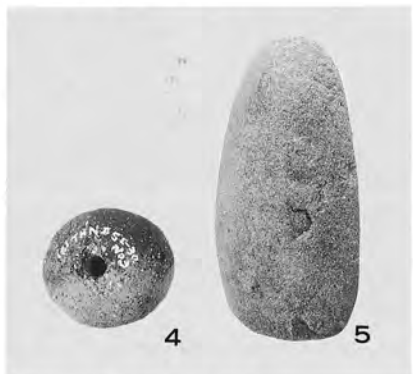
第29号住居跡遺物出土状況(2)



第30号住居跡



第29号住居跡出土遺物



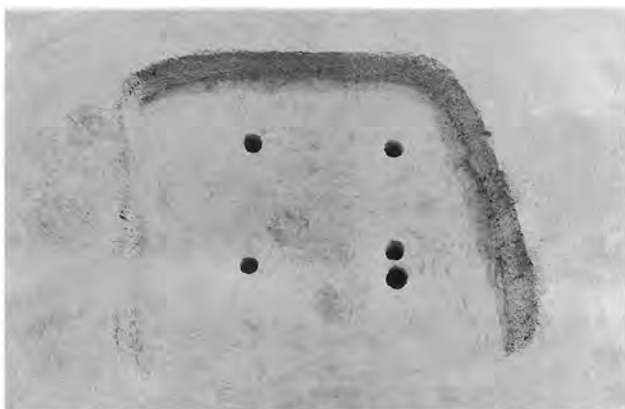
第30号住居跡出土遺物(1)



第30号住居跡遺物出土状況



第30号住居跡出土遺物(2)

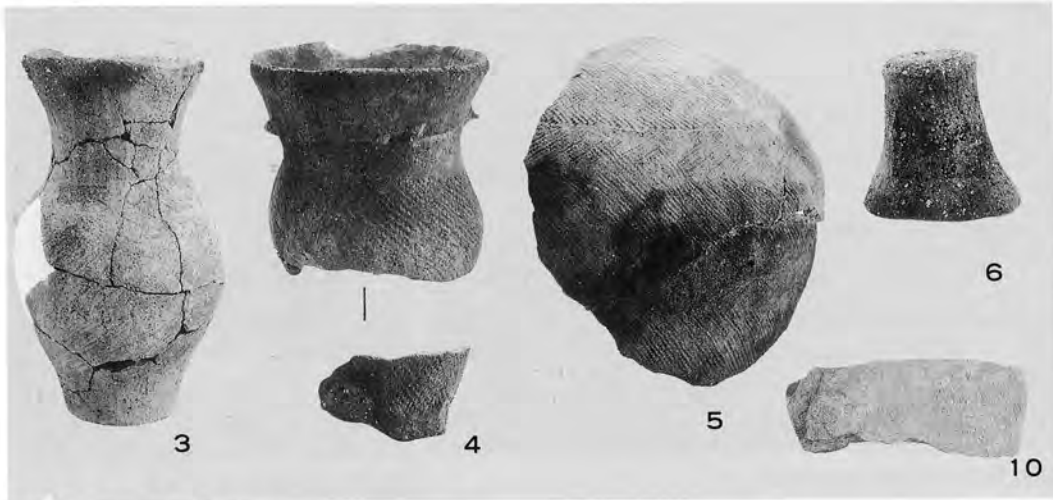


第31号住居跡

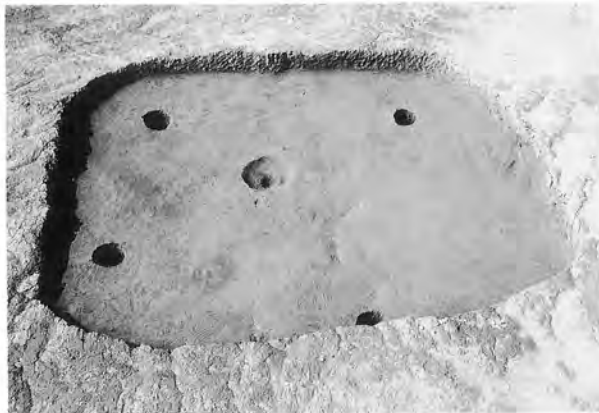


第31号住居跡遺物出土状況

第31号住居跡出土遺物(1)



第31号住居跡出土遺物(2)



第32号住居跡



第32号住居跡遺物出土状況



第32号住居跡出土遺物



第33号住居跡



第33号住居跡遺物出土状況(1)



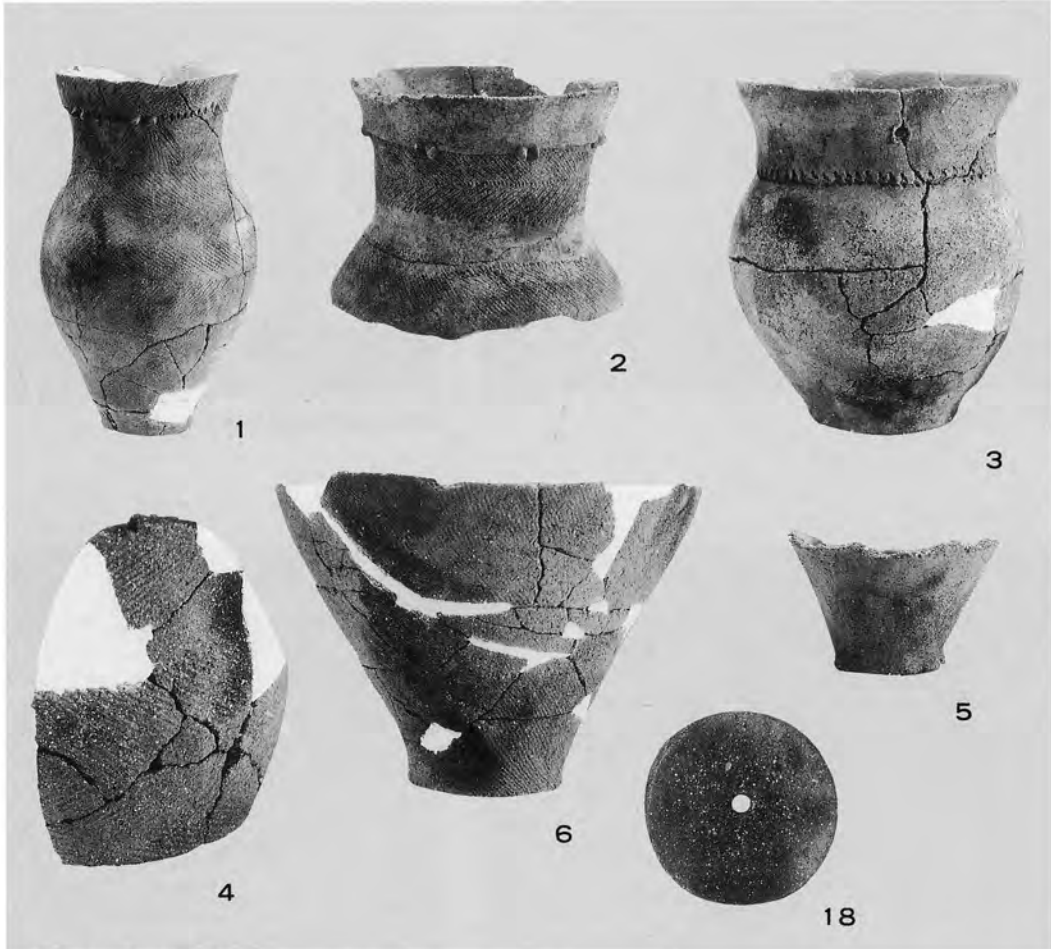
第33号住居跡遺物出土状況(2)



第33号住居跡遺物出土状況(3)



第33号住居跡遺物出土状況(4)



第33号住居跡出土遺物



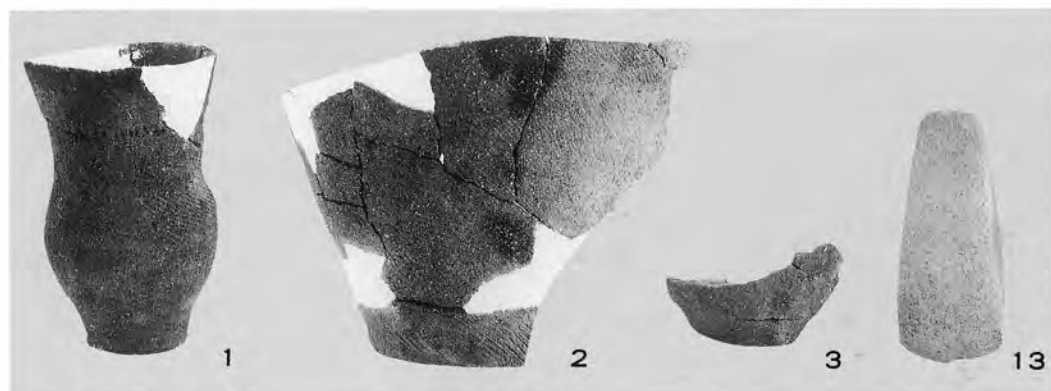
第34号住居跡



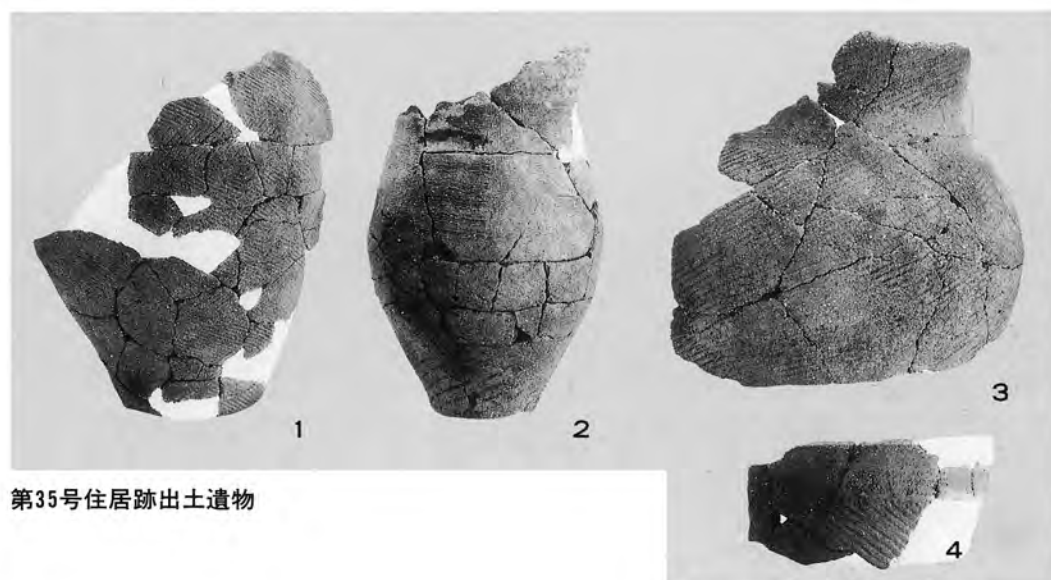
第34号住居跡遺物出土状況(1)



第34号住居跡遺物出土状況(2)



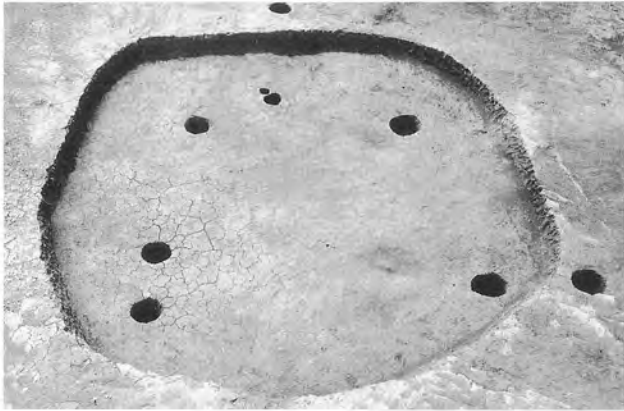
第34号住居跡出土遺物



第35号住居跡出土遺物

PL36

原田北遺跡



第35号住居跡



第35号住居跡遺物出土状況



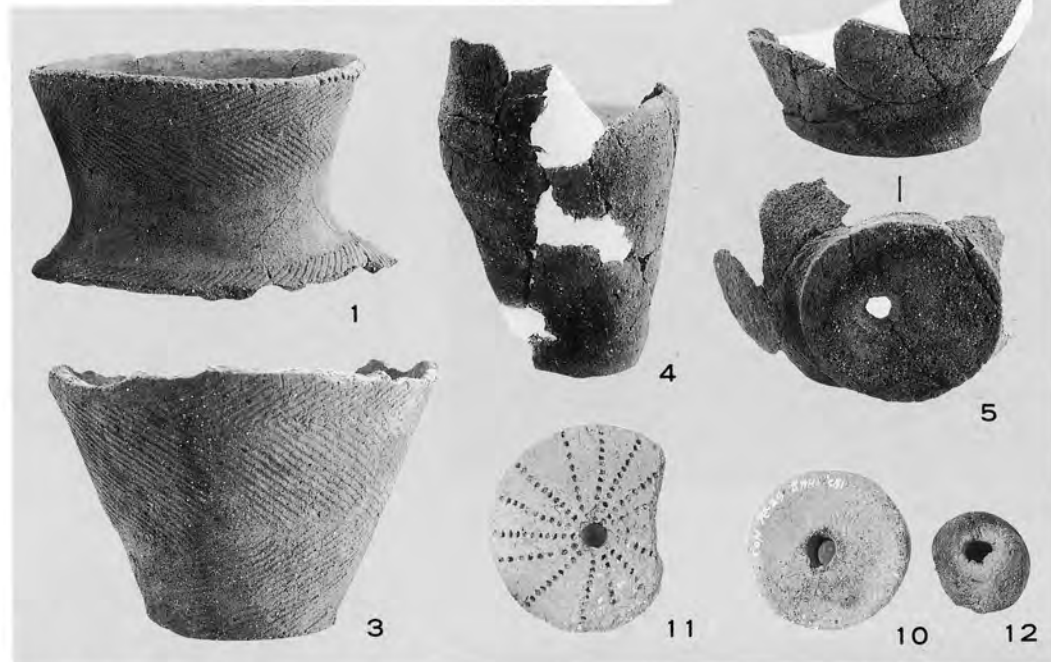
第36号住居跡



第36号住居跡遺物出土状況(1)



第36号住居跡遺物出土状況(2)



第36号住居跡出土遺物



第37号住居跡出土遺物(1)



第37号住居跡



第37号住居跡出土遺物(2)



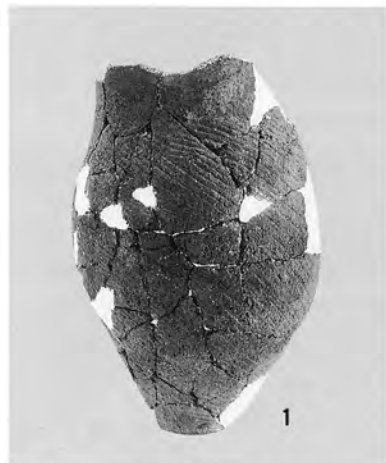
第38号住居跡



第38号住居跡出土遺物



第39号住居跡



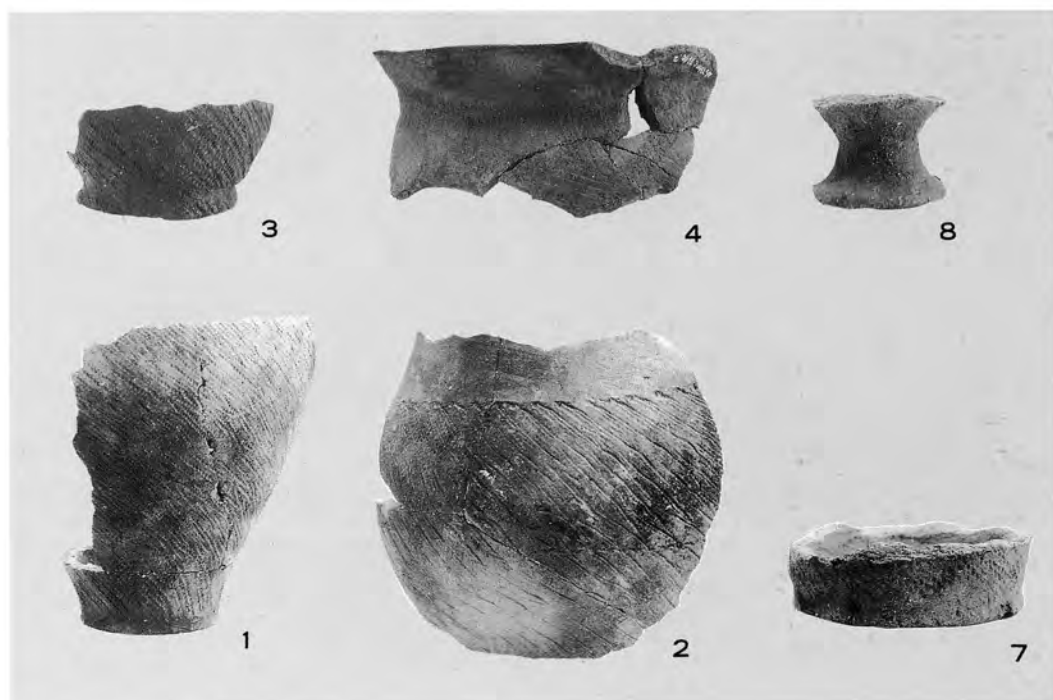
第39号住居跡出土遺物(1)



第39号住居跡出土遺物(2)



第40号住居跡



第40号住居跡出土遺物

PL40

原田北遺跡



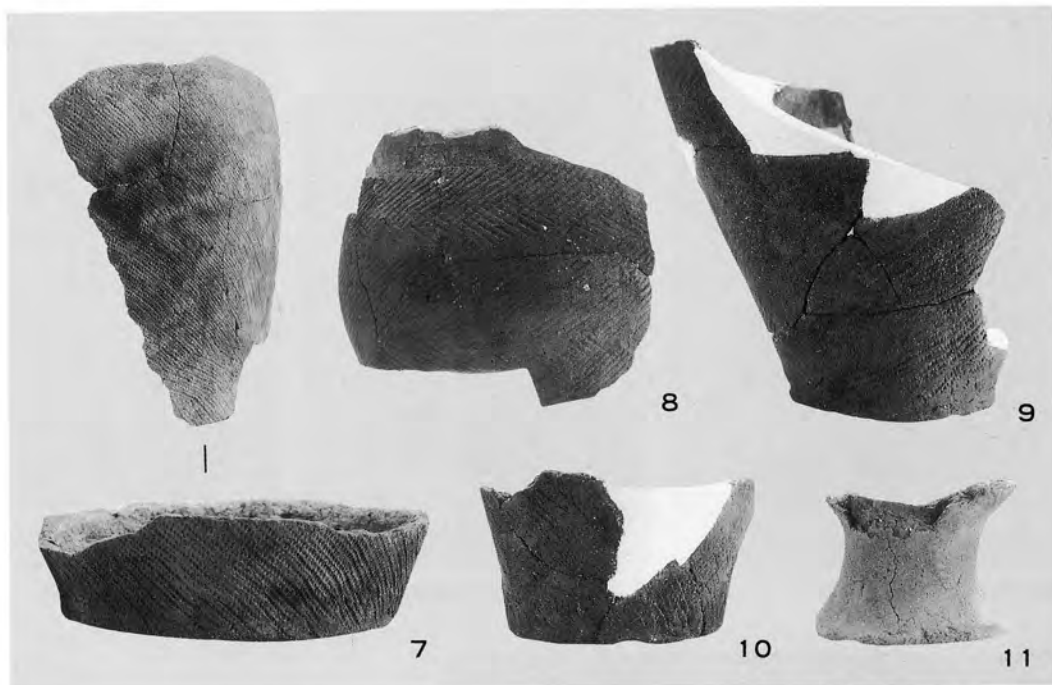
第41号住居跡



第41号住居跡炉確認状況



第41号住居跡出土遺物(1)



第41号住居跡出土遺物(2)



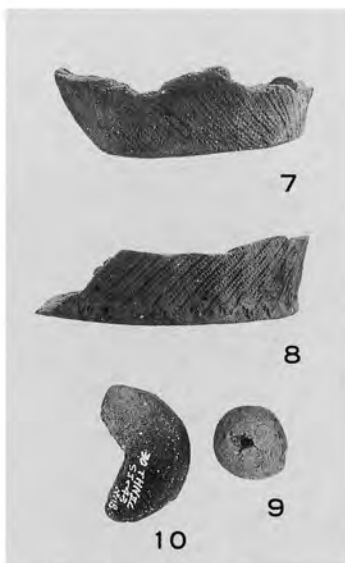
第42号住居跡



第43号住居跡



第42号住居跡出土遺物



第43号住居跡出土遺物



第47号住居跡出土遺物



第47号住居跡



第50号住居跡



第50号住居跡出土遺物



第56号住居跡遺物出土状況



第56号住居跡出土遺物



第62号住居跡



第62号住居跡遺物出土状況(1)



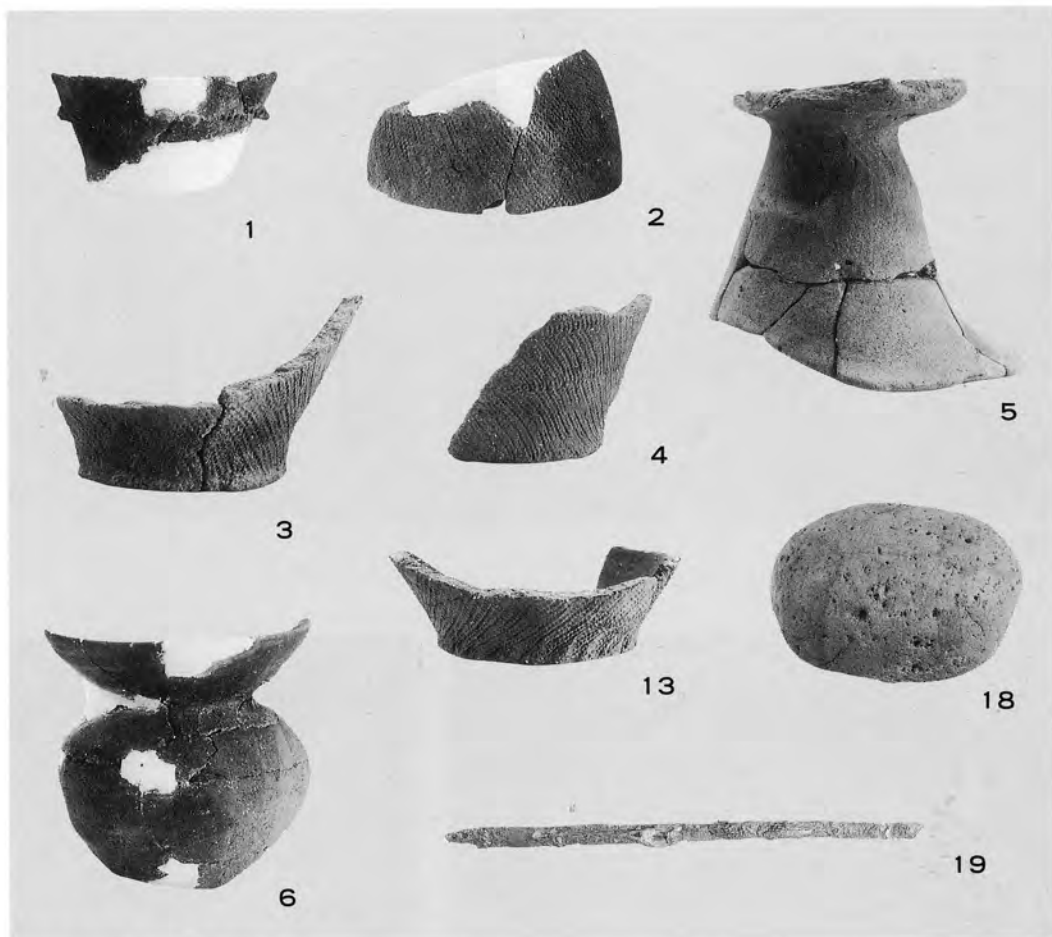
第62号住居跡遺物出土状況(2)



第63号住居跡



第62号住居跡直刀X線写真



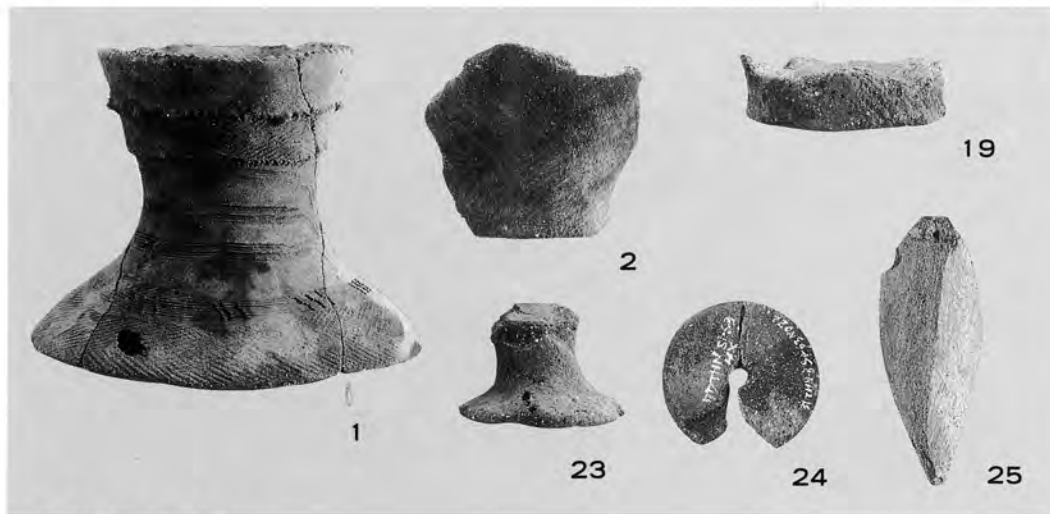
第62号住居跡出土遺物



第63号住居跡遺物出土状況(1)



第63号住居跡遺物出土状況(2)



第63号住居跡出土遺物



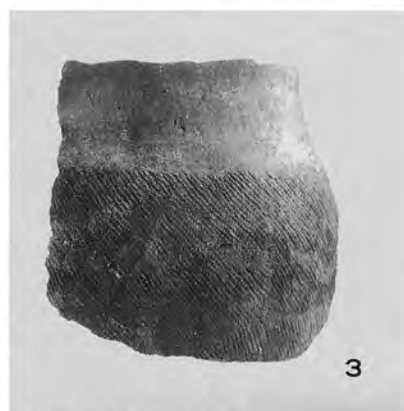
第67号住居跡



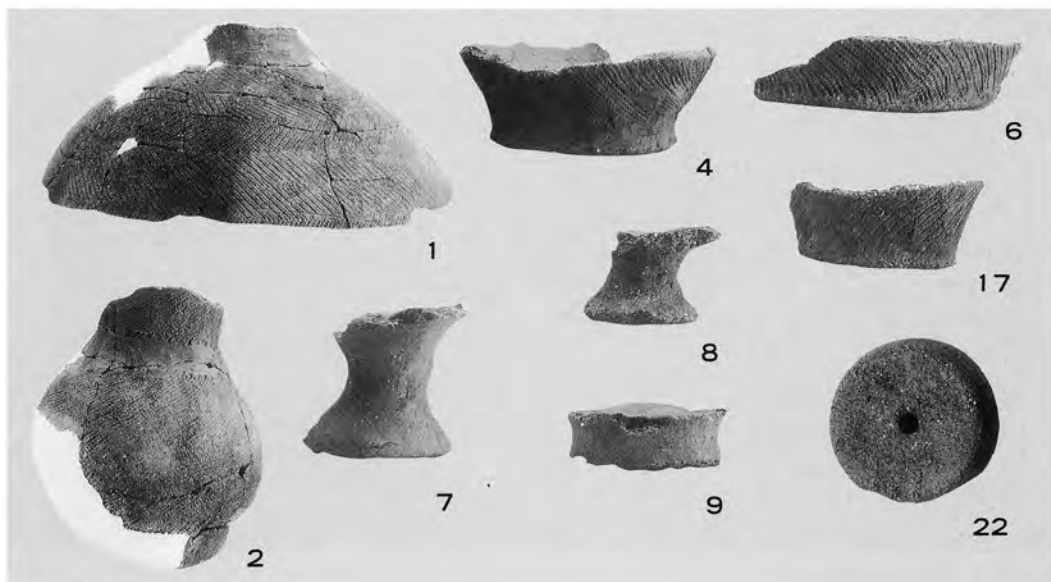
第67号住居跡遺物出土状況(1)



第67号住居跡遺物出土状況(2)



第67号住居跡出土遺物(1)



第67号住居跡出土遺物(2)



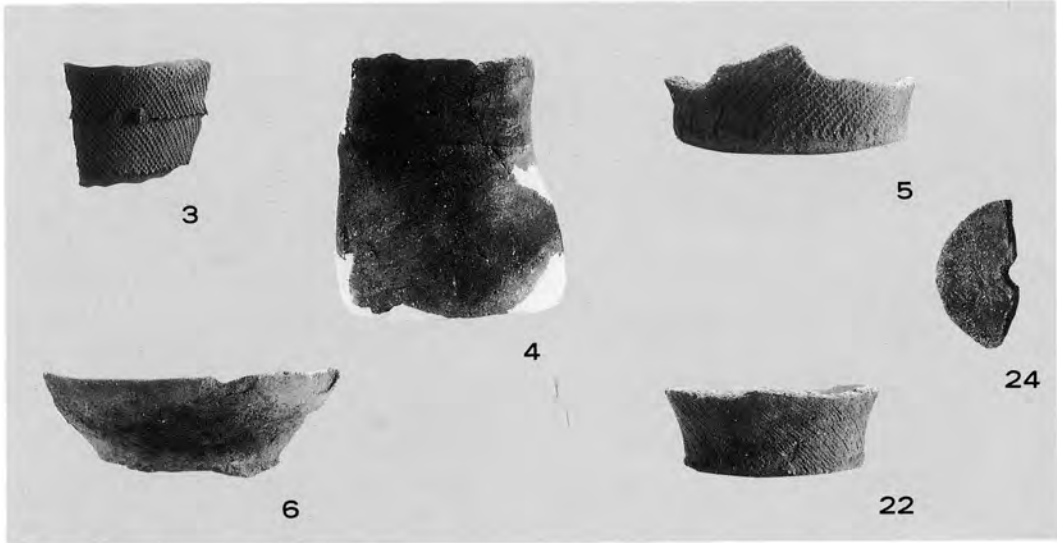
第68号住居跡



第68号住居跡遺物出土状況



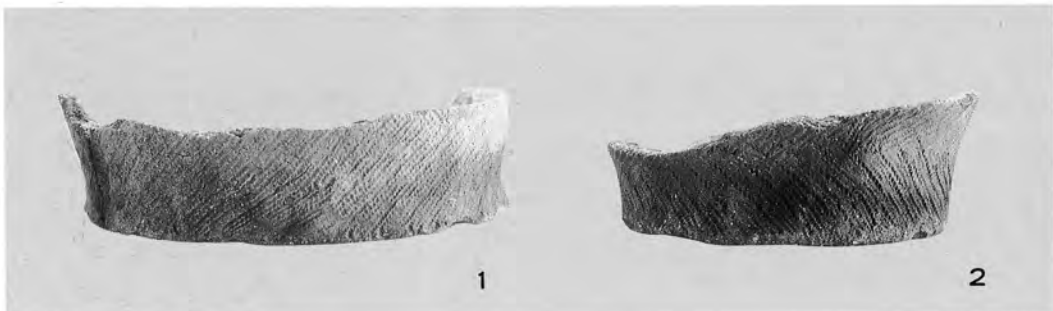
第68号住居跡出土遺物(1)



第68号住居跡出土遺物(2)



第70号住居跡



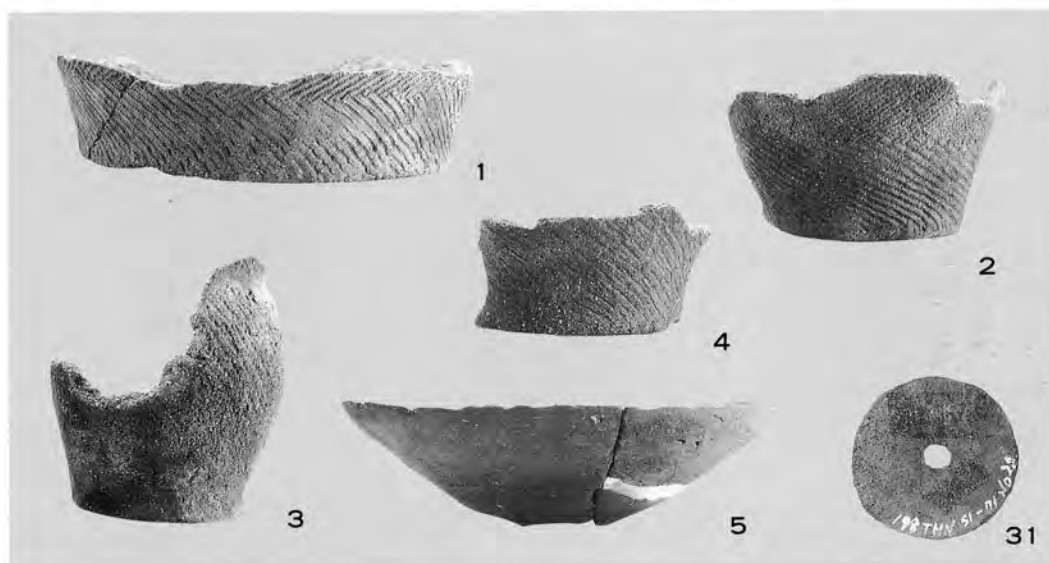
第70号住居跡出土遺物



第71号住居跡



第71号住居跡遺物出土状況



第71号住居跡出土遺物



第72号住居跡



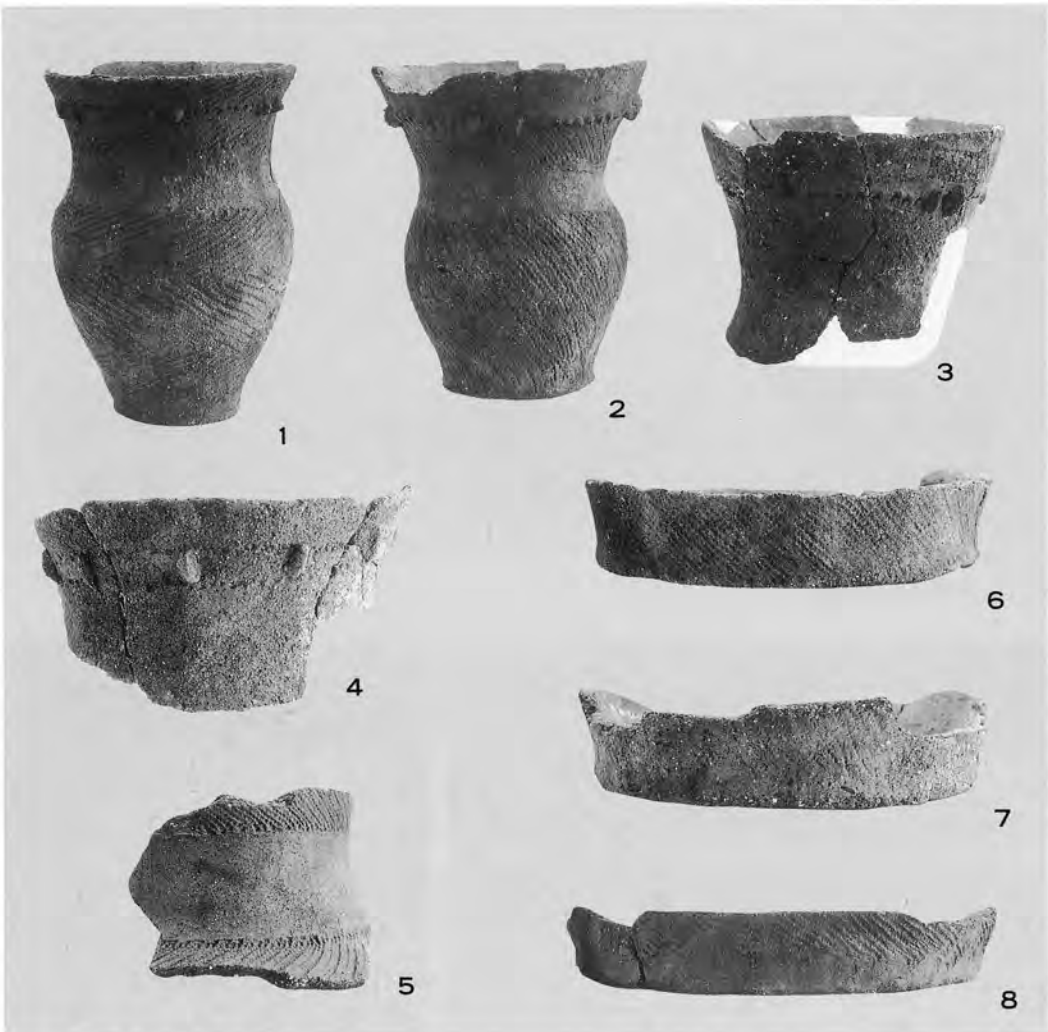
第72号住居跡遺物出土状況(1)



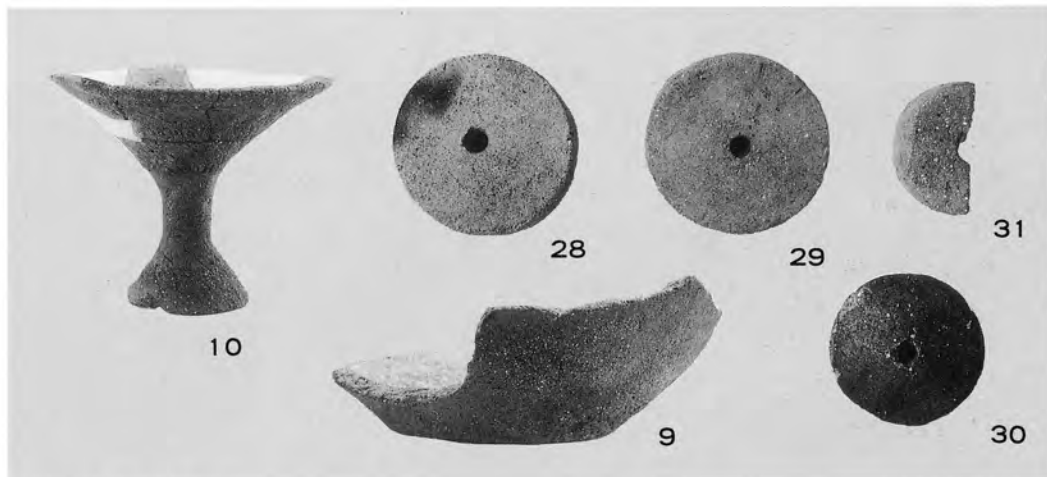
第72号住居跡遺物出土状況(2)



第72号住居跡遺物出土状況(3)



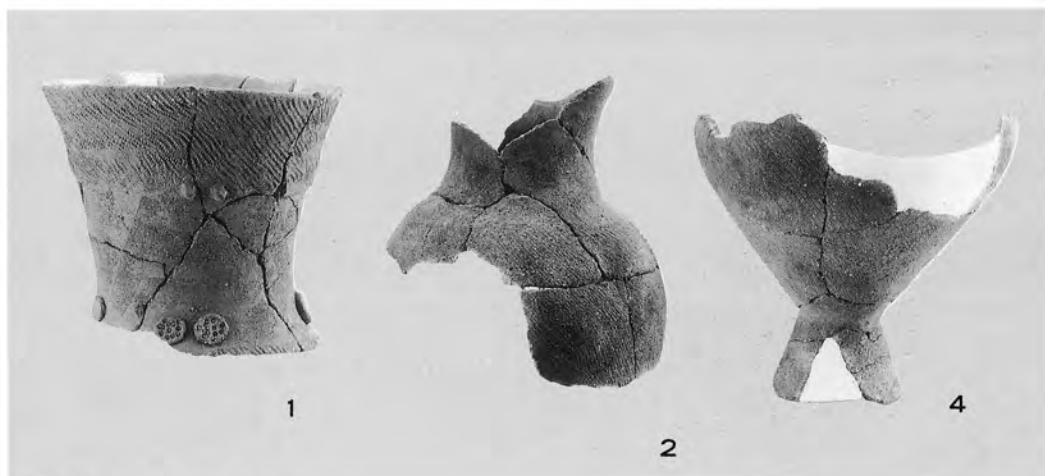
第72号住居跡出土遺物(1)



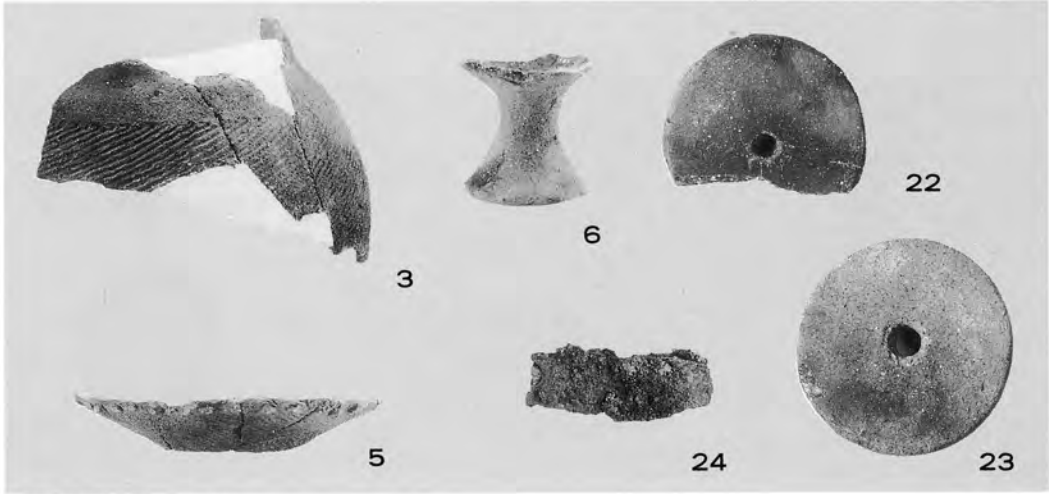
第72号住居跡出土遺物(2)



第73号住居跡



第73号住居跡出土遺物(1)



第73号住居跡出土遺物(2)



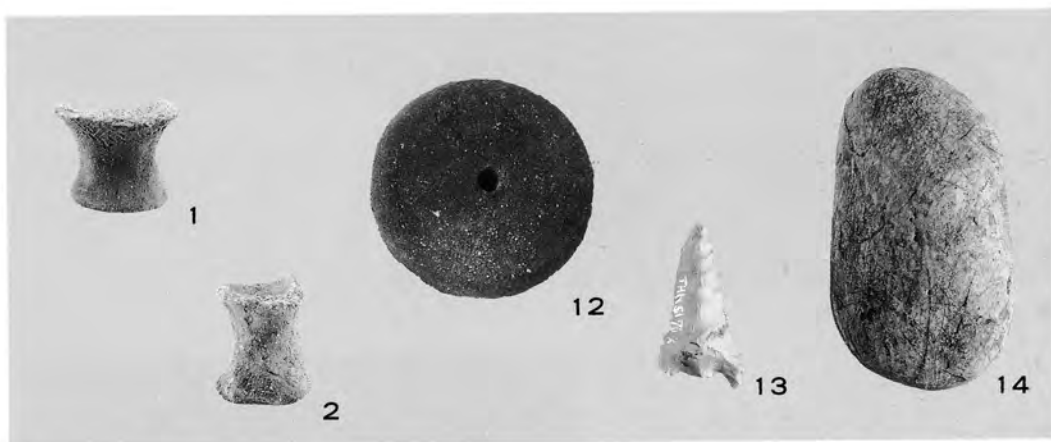
第75号住居跡



第75号住居跡出土遺物



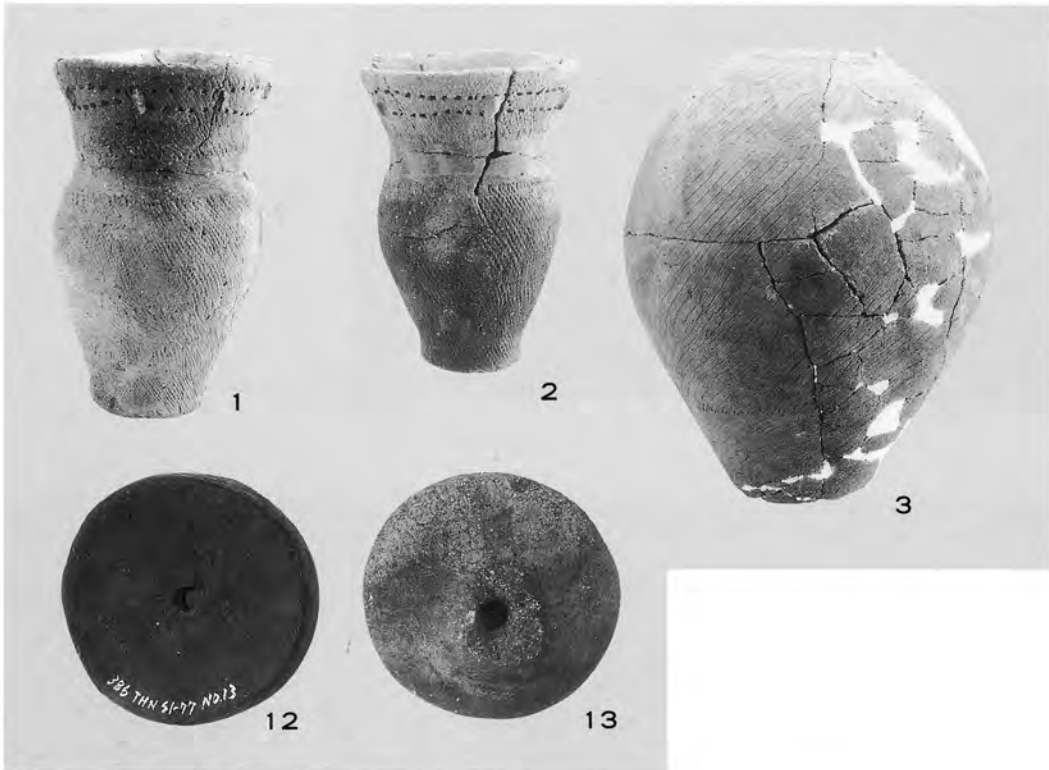
第76号住居跡



第76号住居跡出土遺物



第77号住居跡

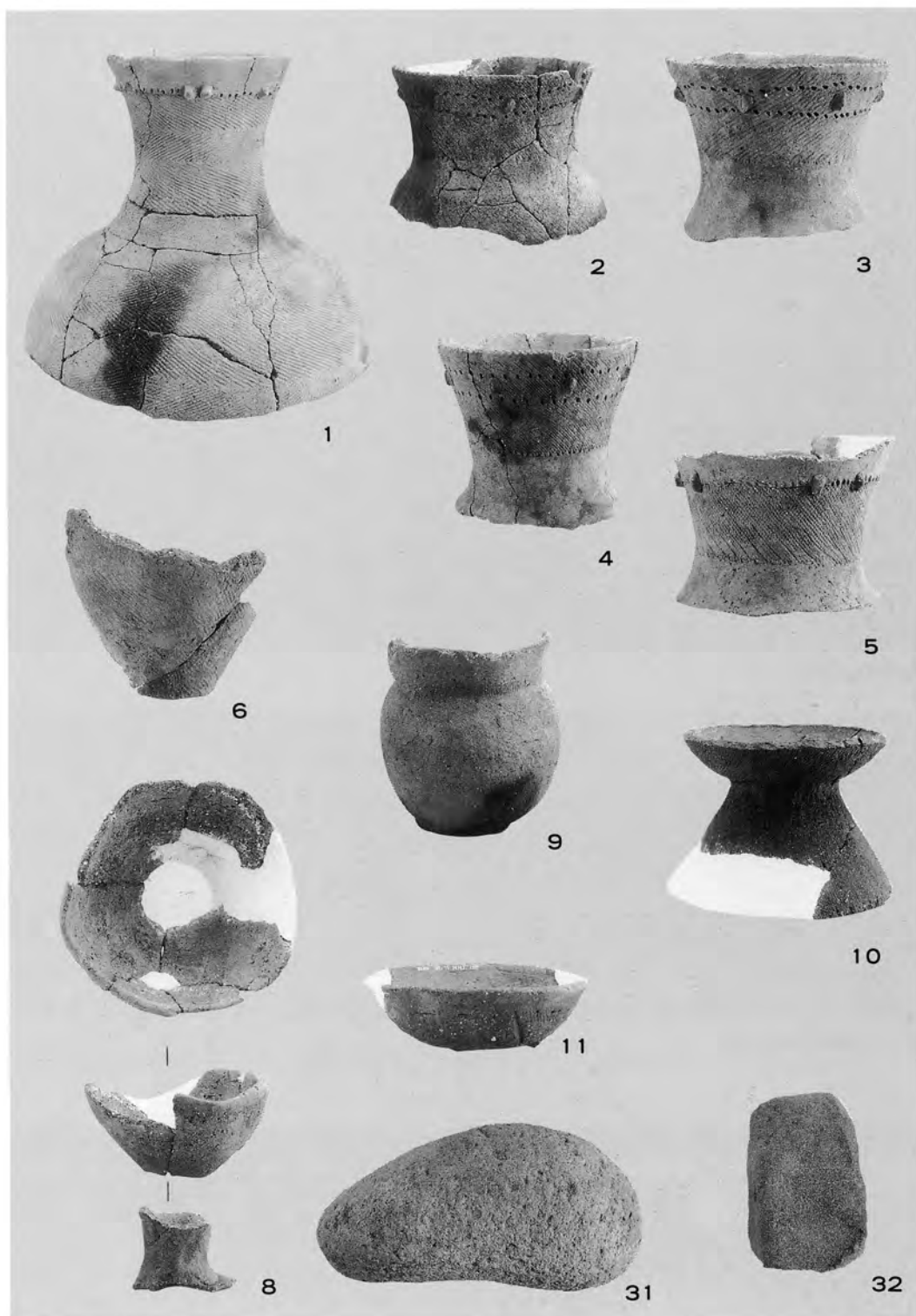


第77号住居跡出土遺物

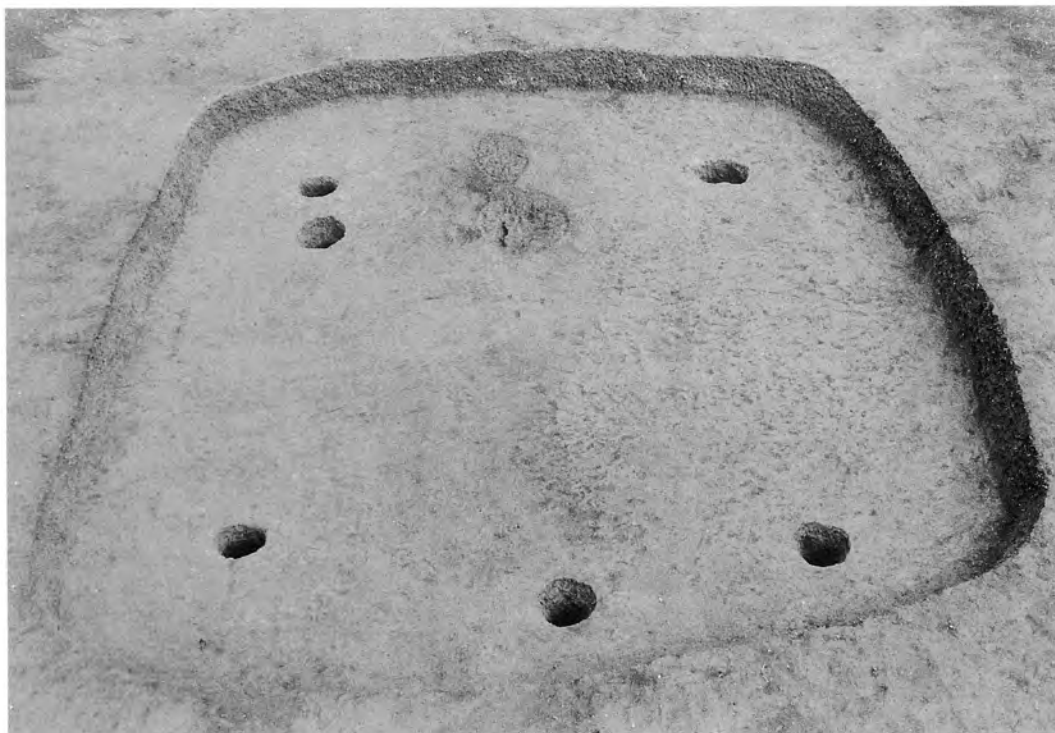


第78号住居跡

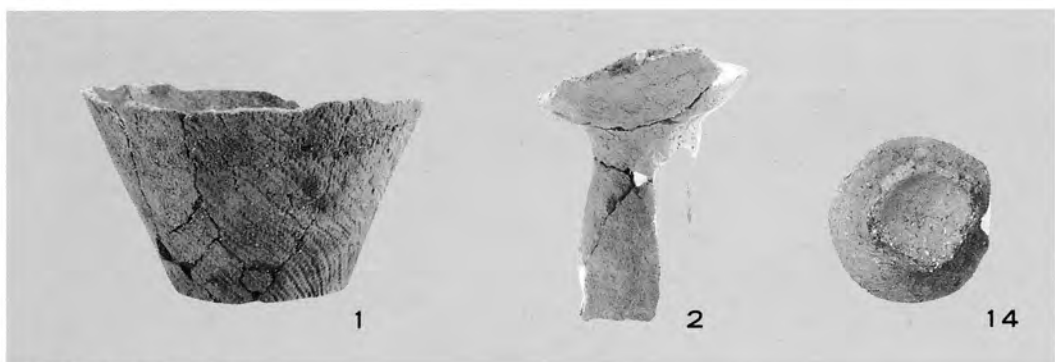
第78号住居跡遺物出土状況



第78号住居跡出土遺物



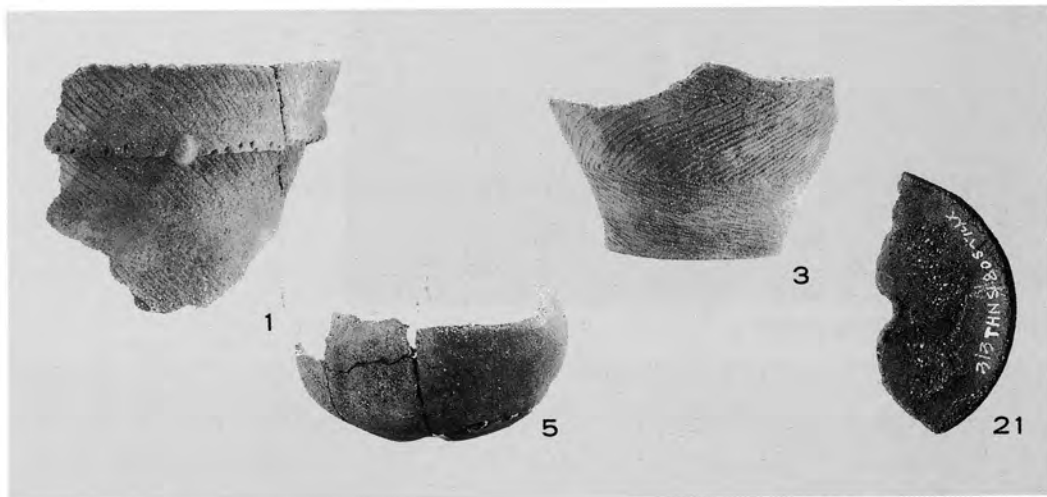
第79号住居跡



第79号住居跡出土遺物



第80号住居跡出土遺物(1)



第80号住居跡出土遺物(2)



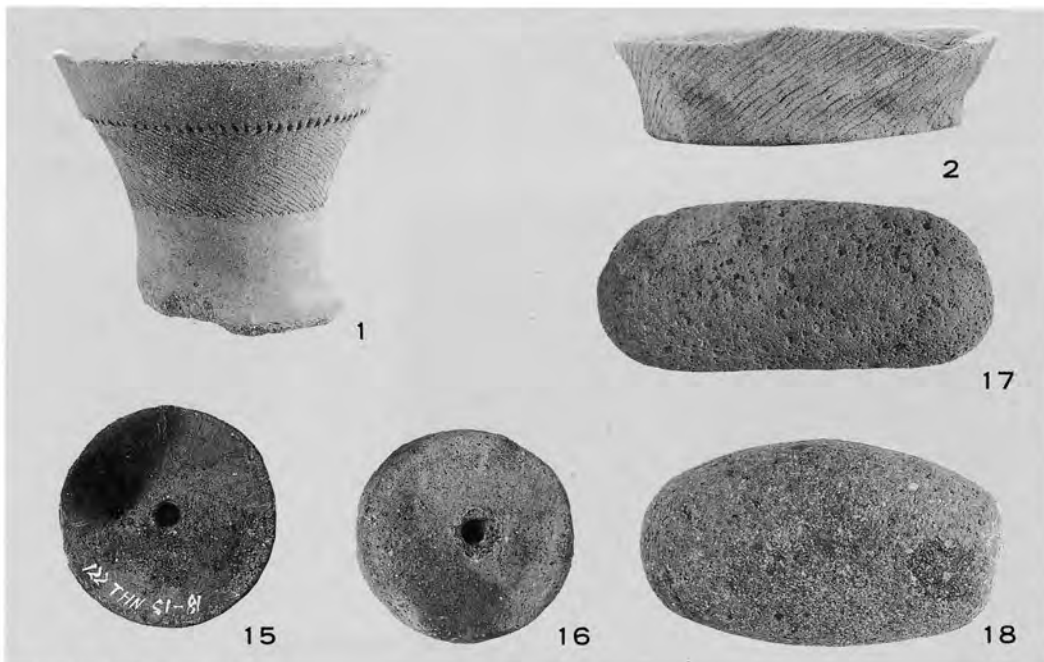
第80号住居跡



第81号住居跡



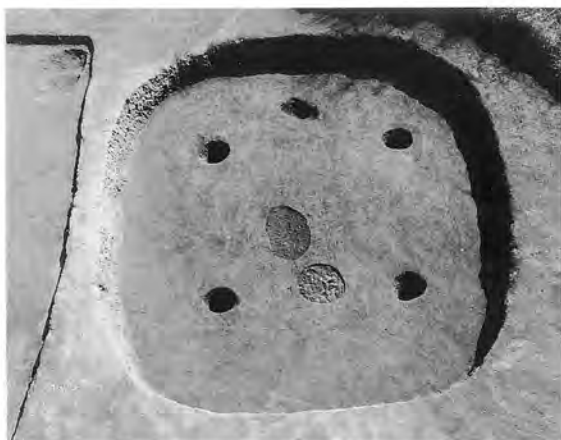
第81号住居跡遺物出土状況



第81号住居跡出土遺物



第82号住居跡



第84号住居跡



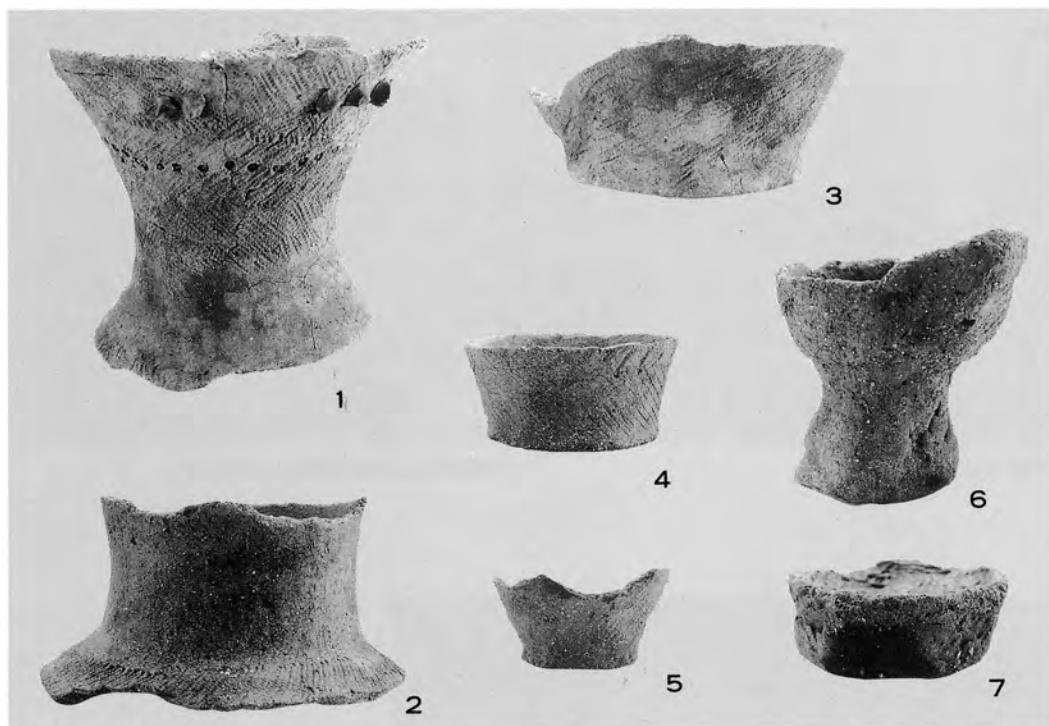
第84号住居跡遺物出土状況(1)



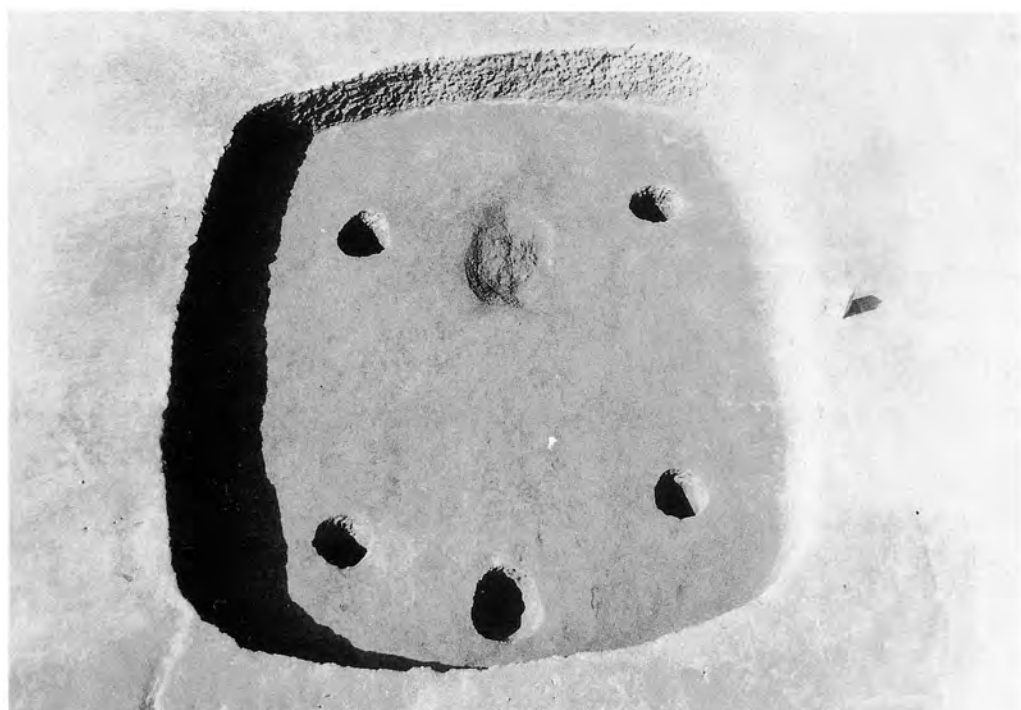
第84号住居跡遺物出土状況(2)



第84号住居跡出土遺物(1)



第84号住居跡出土遺物(2)



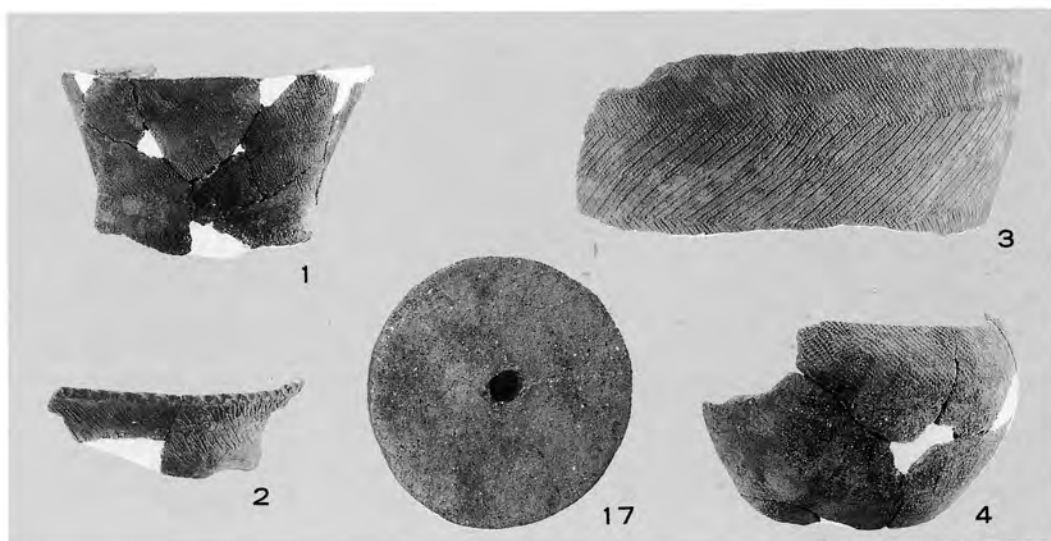
第86号住居跡



第86号住居跡遺物出土状況



第86号住居跡炉土層断面

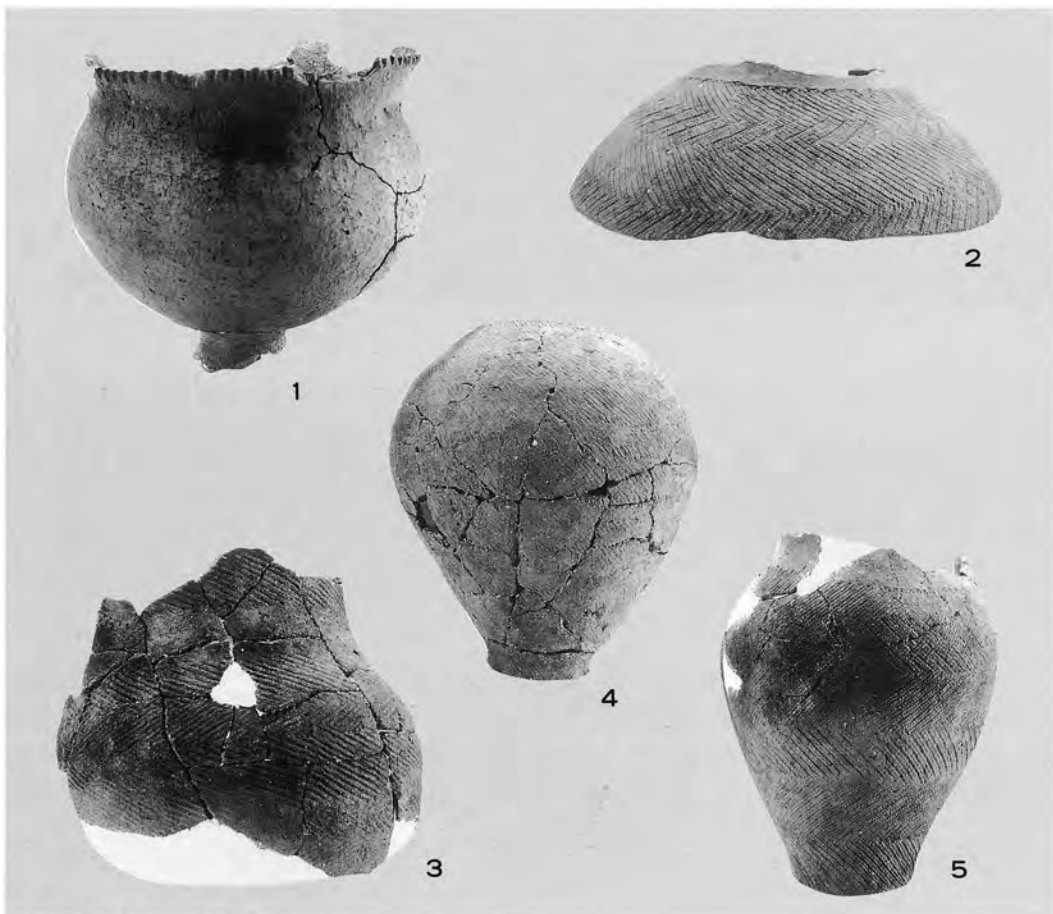


第86号住居跡出土遺物

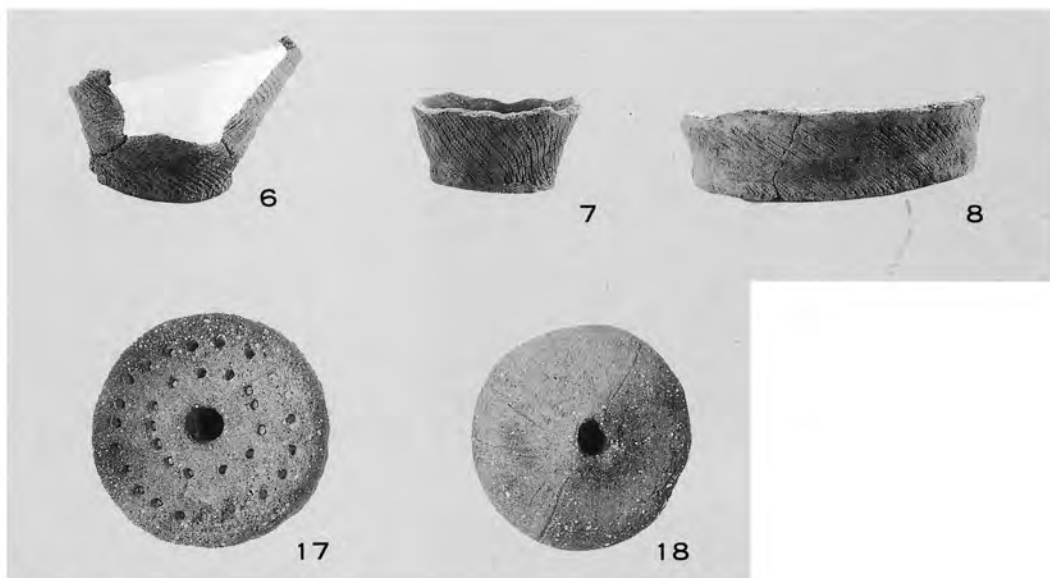


第87号住居跡

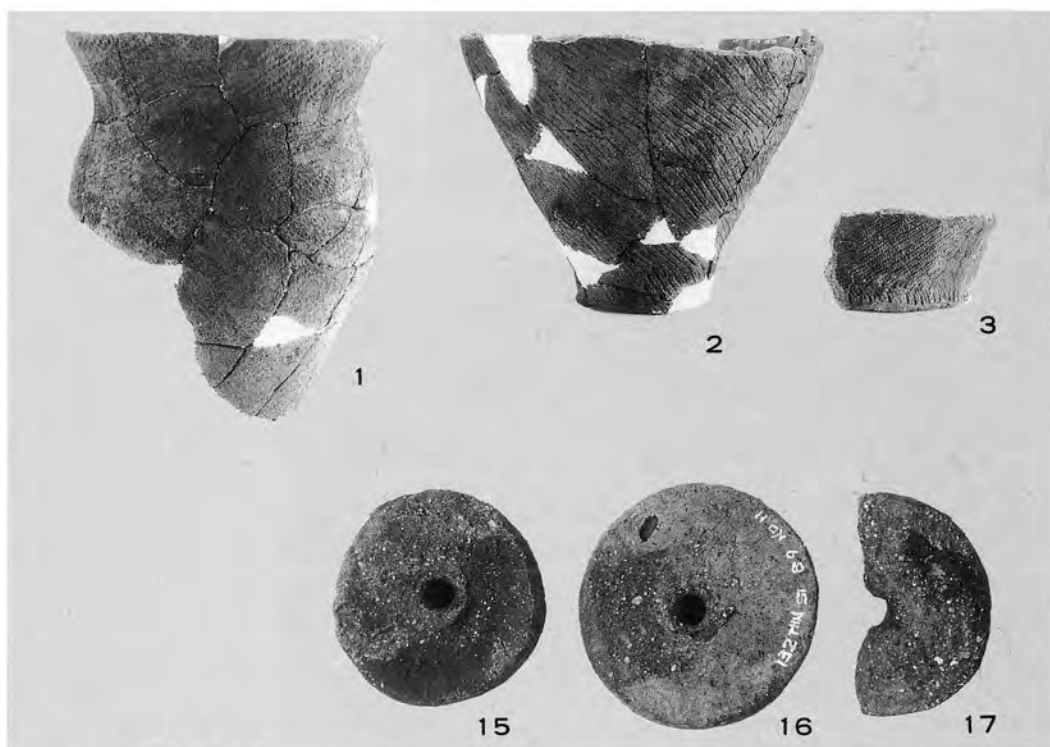
第87号住居跡遺物出土状況



第87号住居跡出土遺物(1)



第87号住居跡出土遺物(2)



第89号住居跡出土遺物

PL64

原田北遺跡



第89号住居跡



第90号住居跡

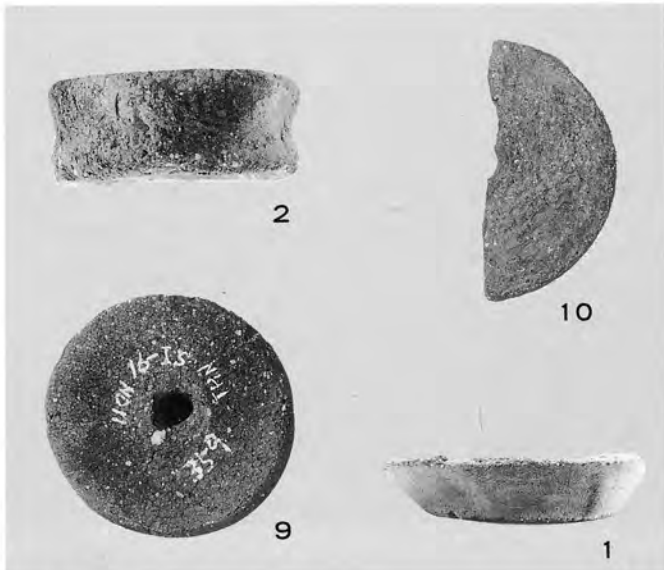


第91号住居跡



1

第90号住居跡出土遺物

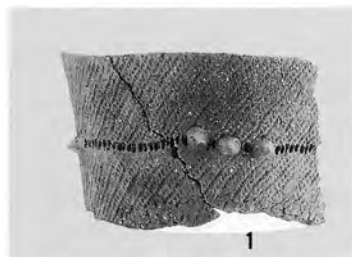


2

10

9

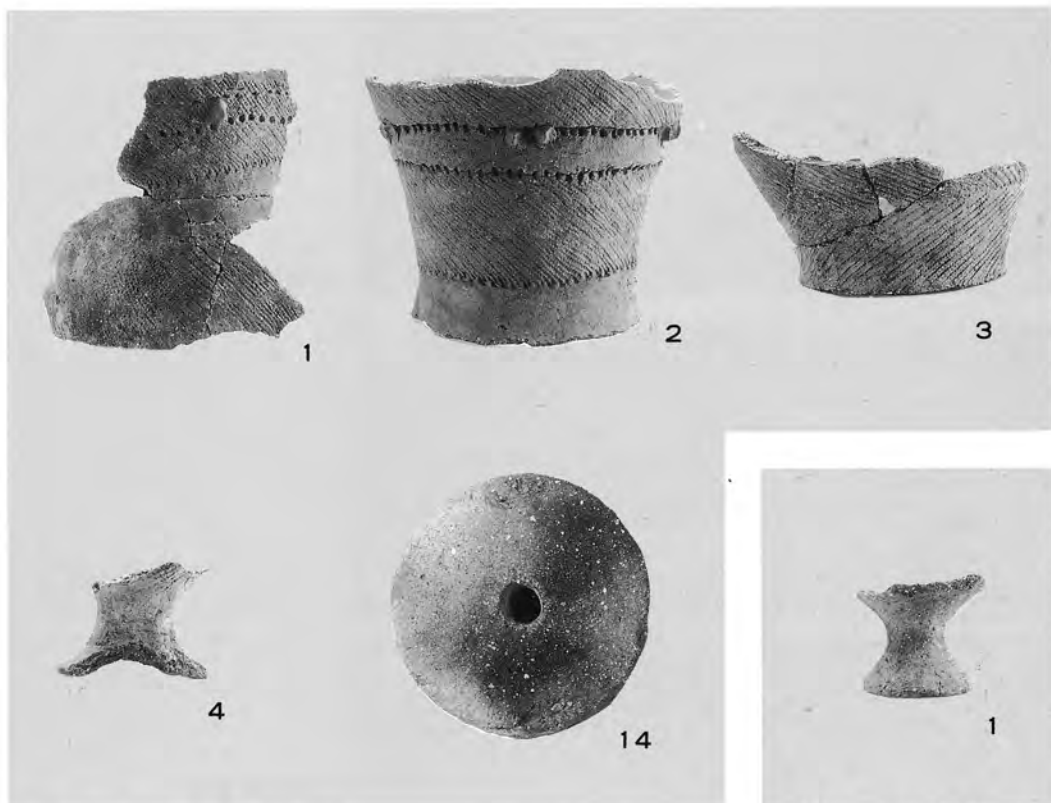
1



1

第92号住居跡出土遺物

第91号住居跡出土遺物



1

2

3

4

14

1

第93号住居跡出土遺物

第96号住居跡出土遺物



第92号住居跡遺物出土状況



第93号住居跡



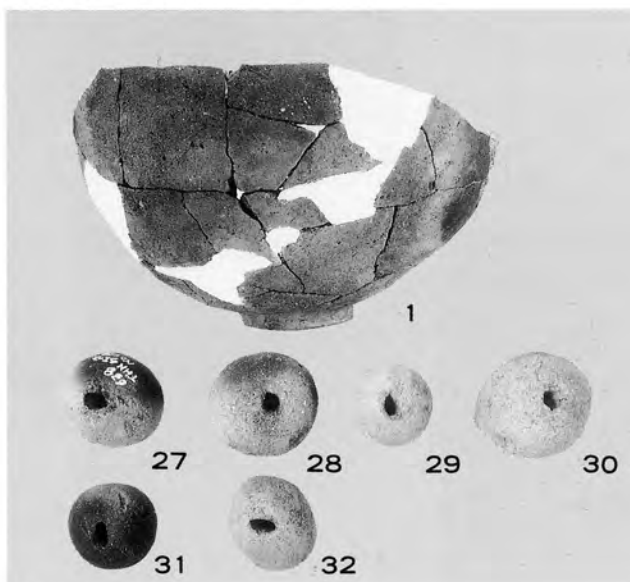
第96号住居跡



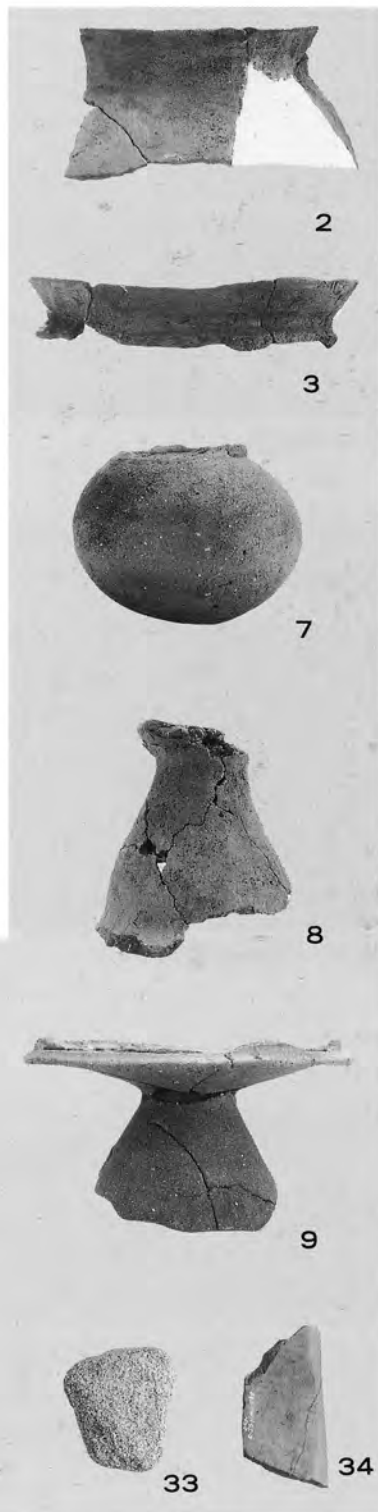
第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡出土遺物

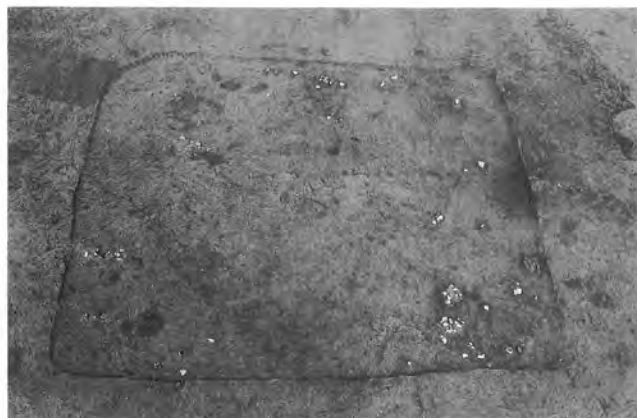


PL68

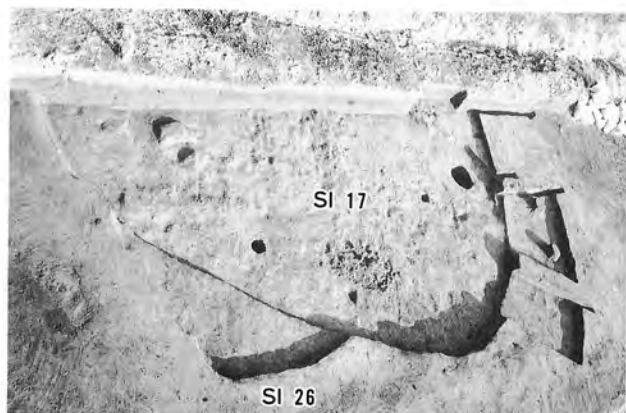
原田北遺跡



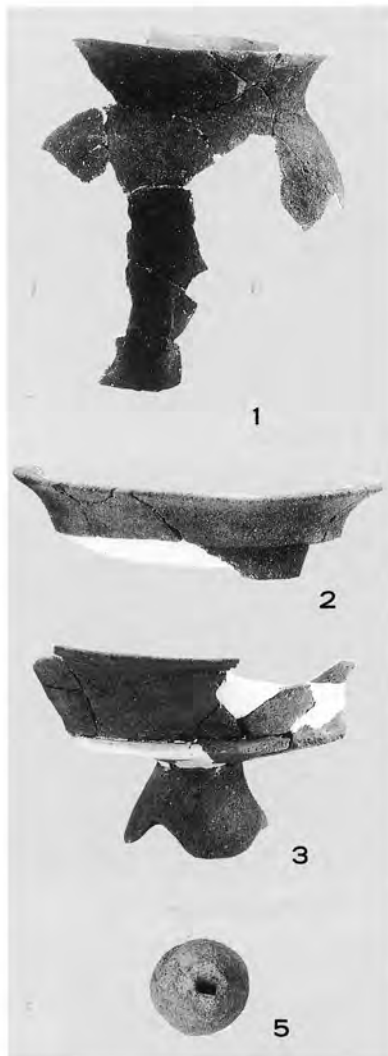
第10号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第17・26号住居跡



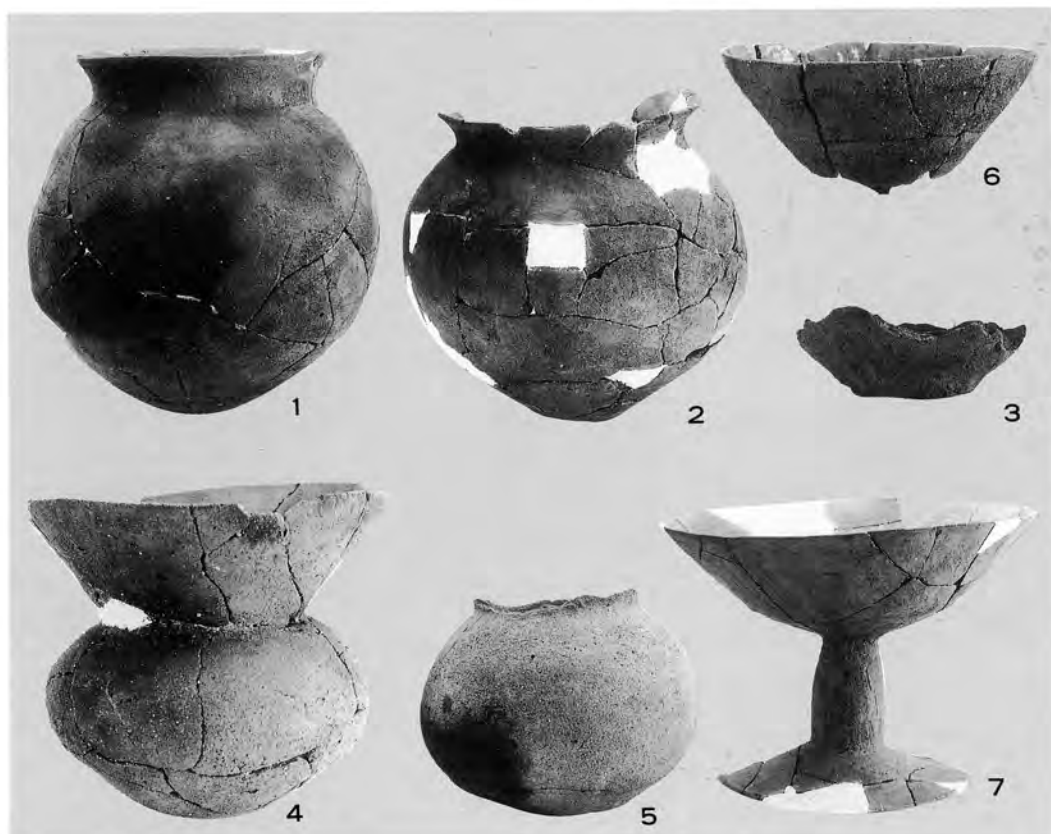
第10号住居跡出土遺物



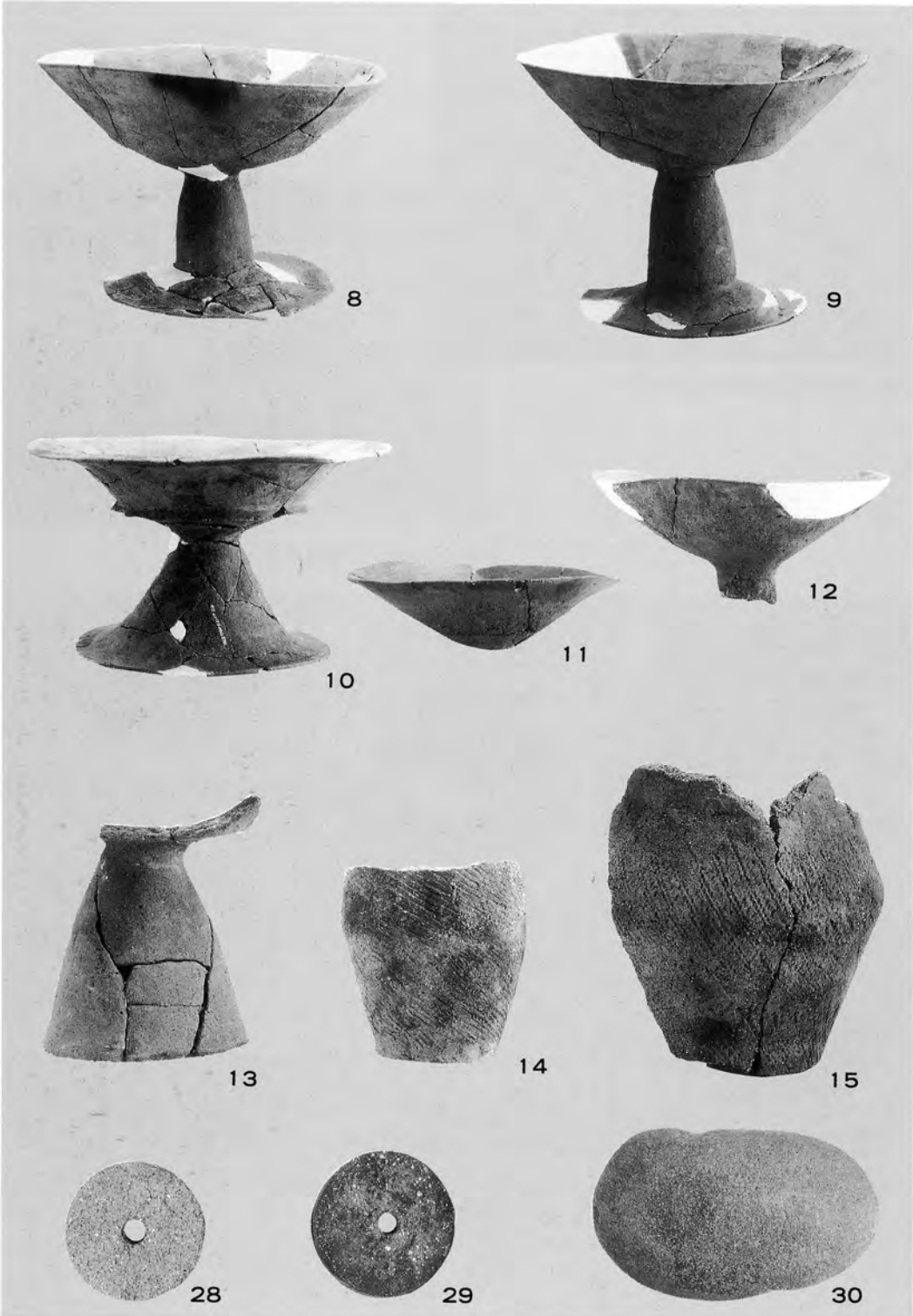
第17・26号住居跡遺物出土状況(1)



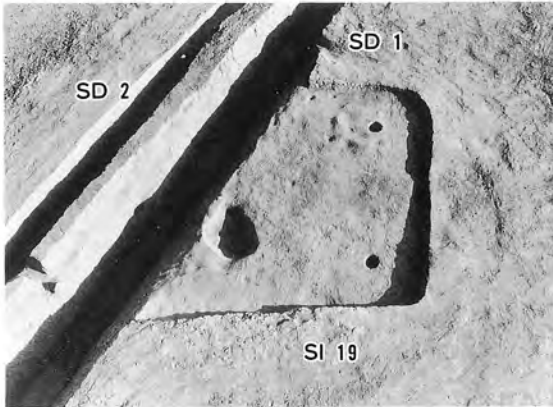
第17・26号住居跡遺物出土状況(2)



第17号住居跡出土遺物(1)



第17号住居跡出土遺物(2)



第19号住居跡



第19号住居跡遺物出土状況



第28号住居跡



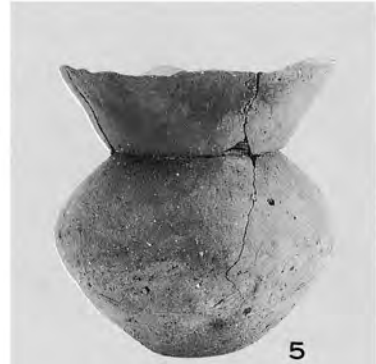
第28号住居跡出土遺物(1)



第28号住居跡遺物出土状況(1)



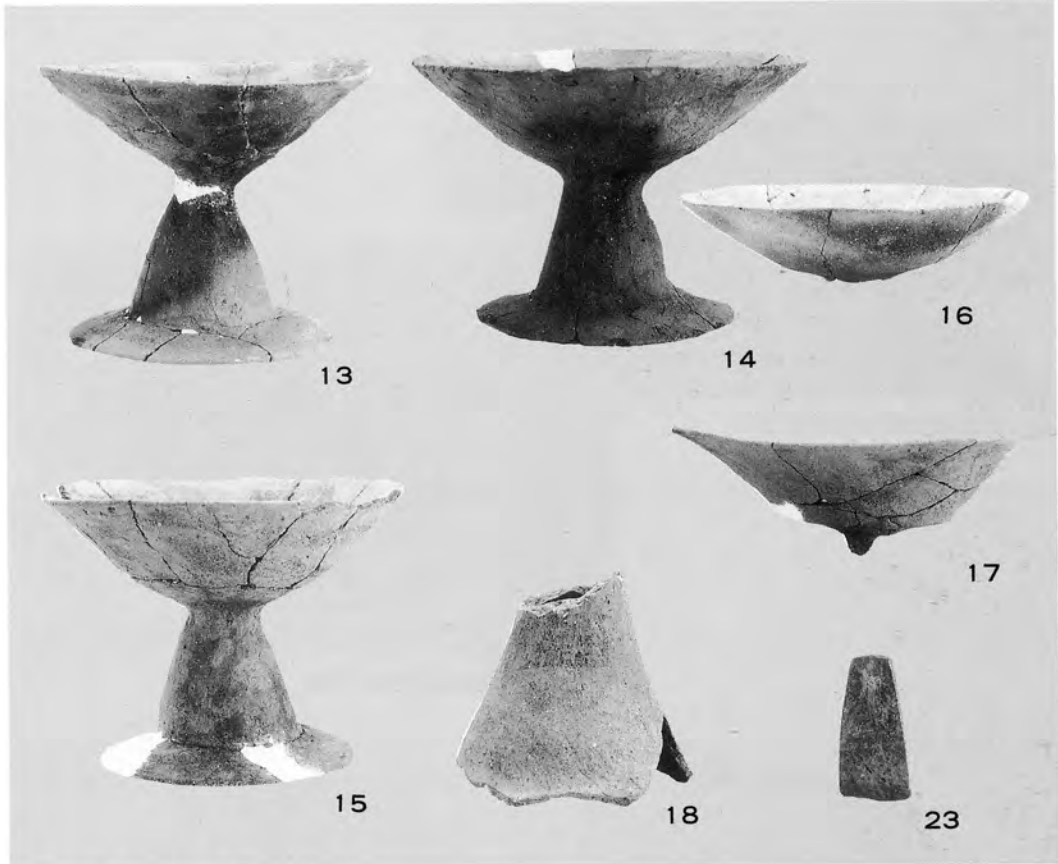
第28号住居跡遺物出土状況(2)



5



第28号住居跡出土遺物(2)



第28号住居跡出土遺物(3)



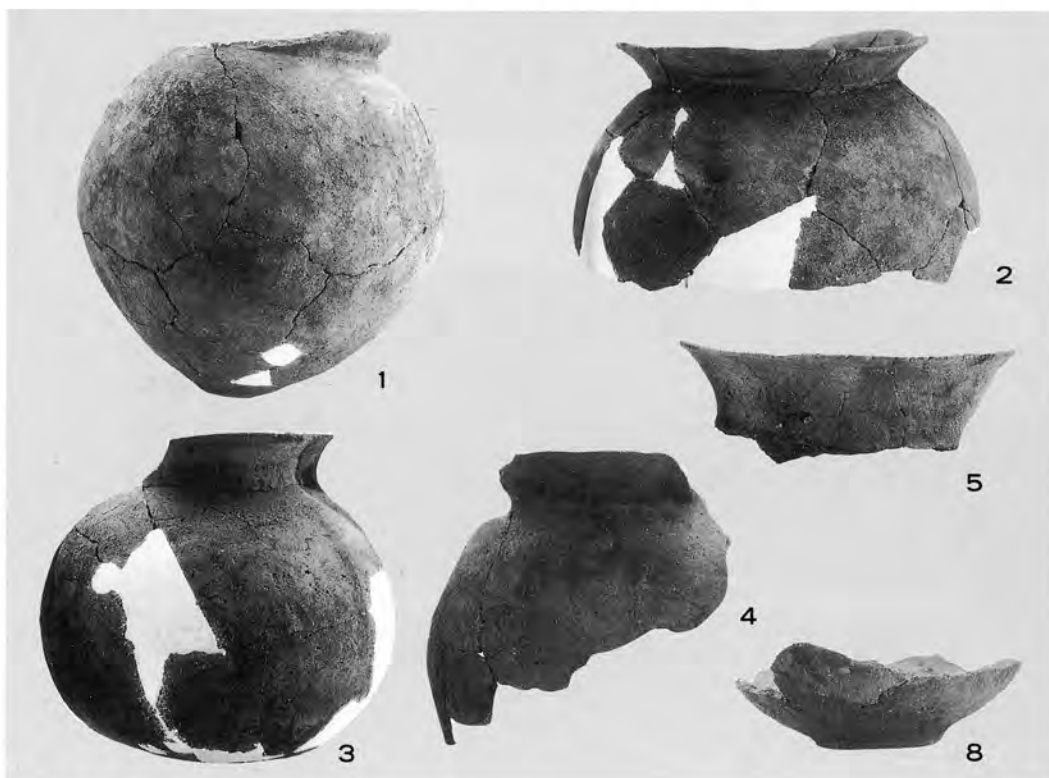
第44号住居跡



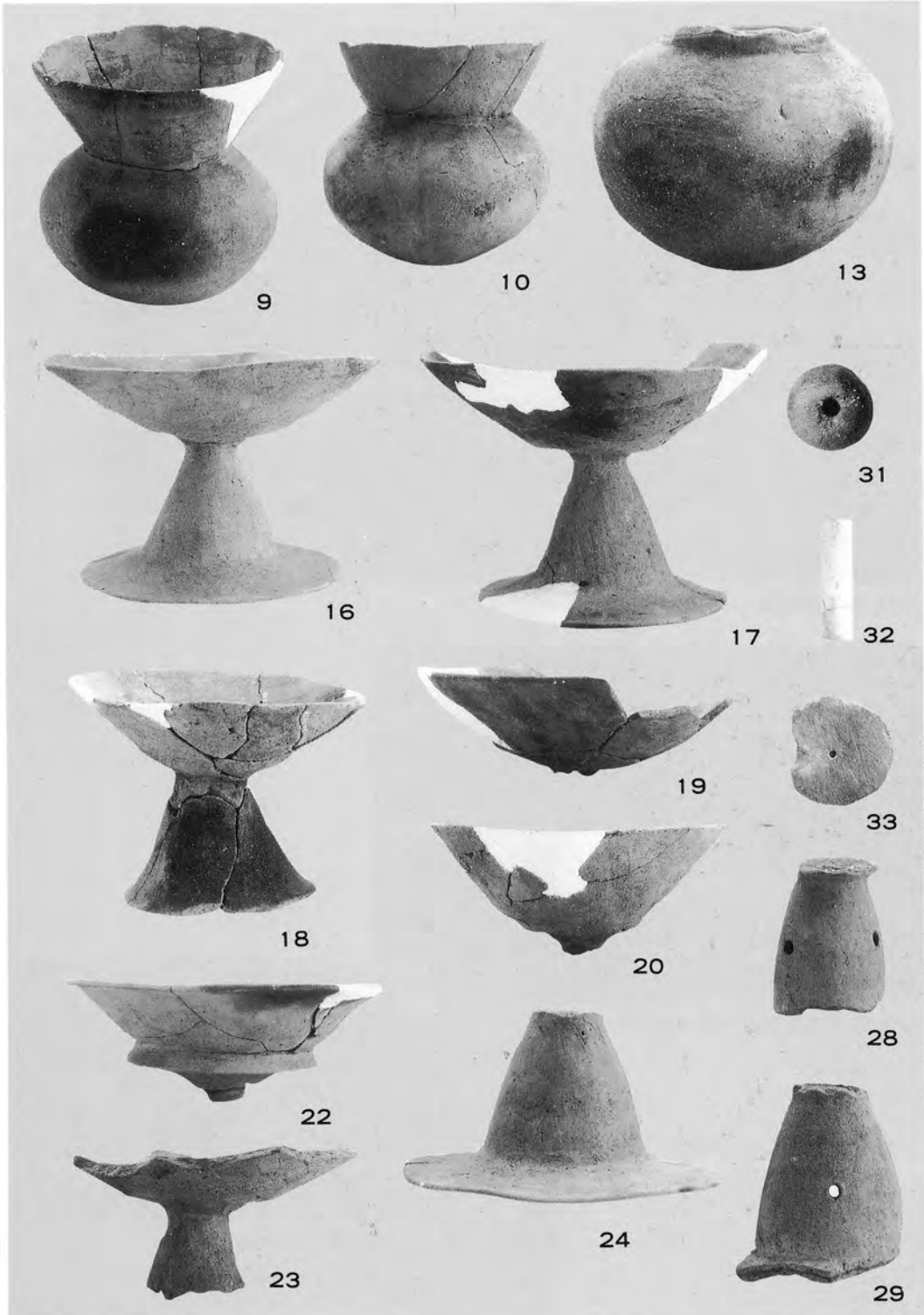
第44号住居跡遺物出土状況(1)



第44号住居跡遺物出土状況(2)



第44号住居跡出土遺物(1)



第44号住居跡出土遺物(2)



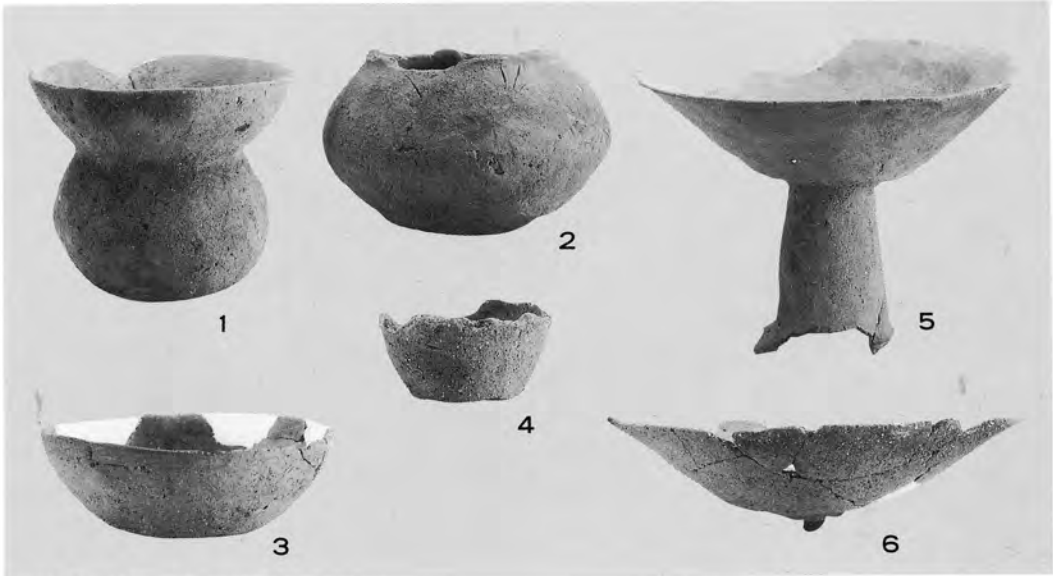
第45・46号住居跡



第45・46号住居跡遺物出土状況(1)



第45号住居跡遺物出土状況(2)



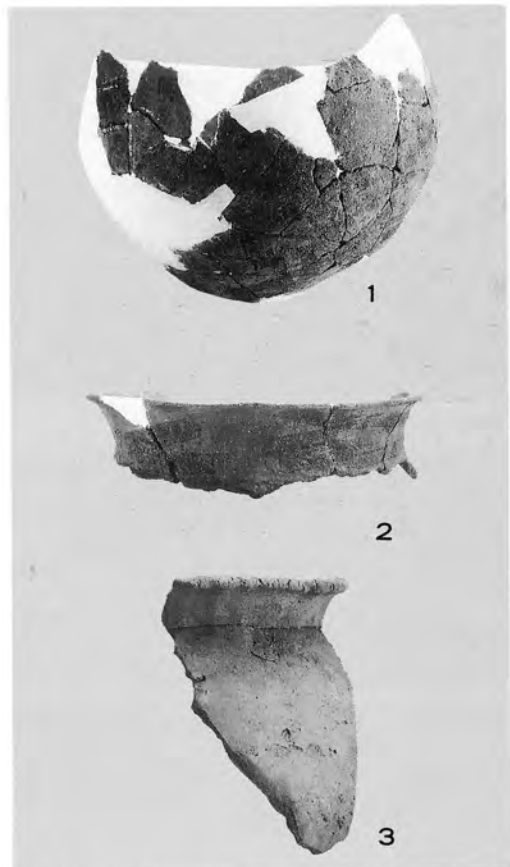
第45号住居跡出土遺物



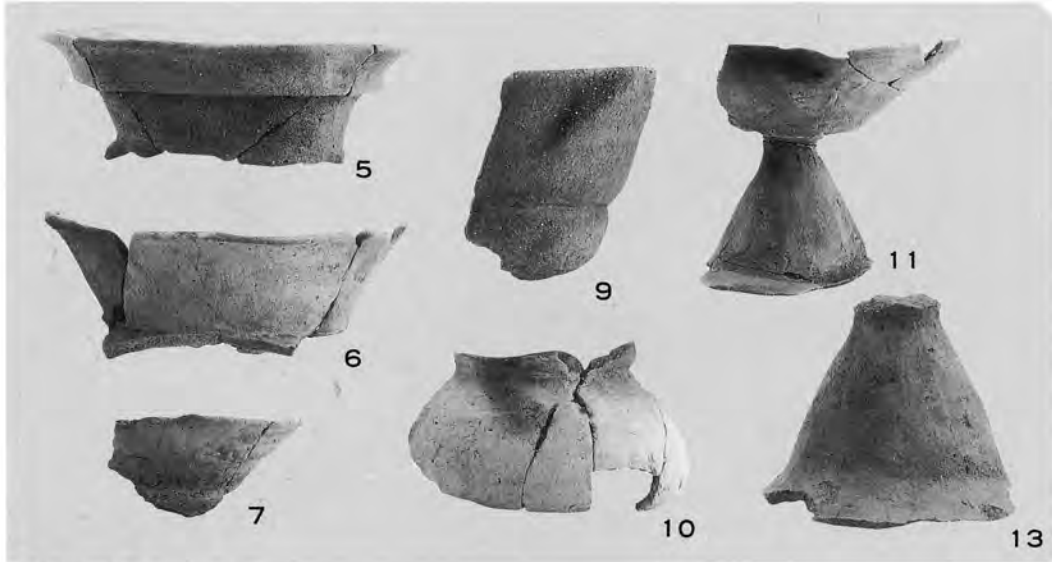
第48号住居跡



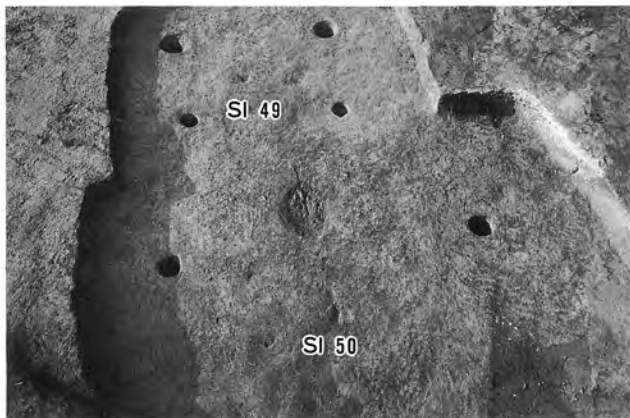
第48号住居跡遺物出土状況



第48号住居跡出土遺物(1)



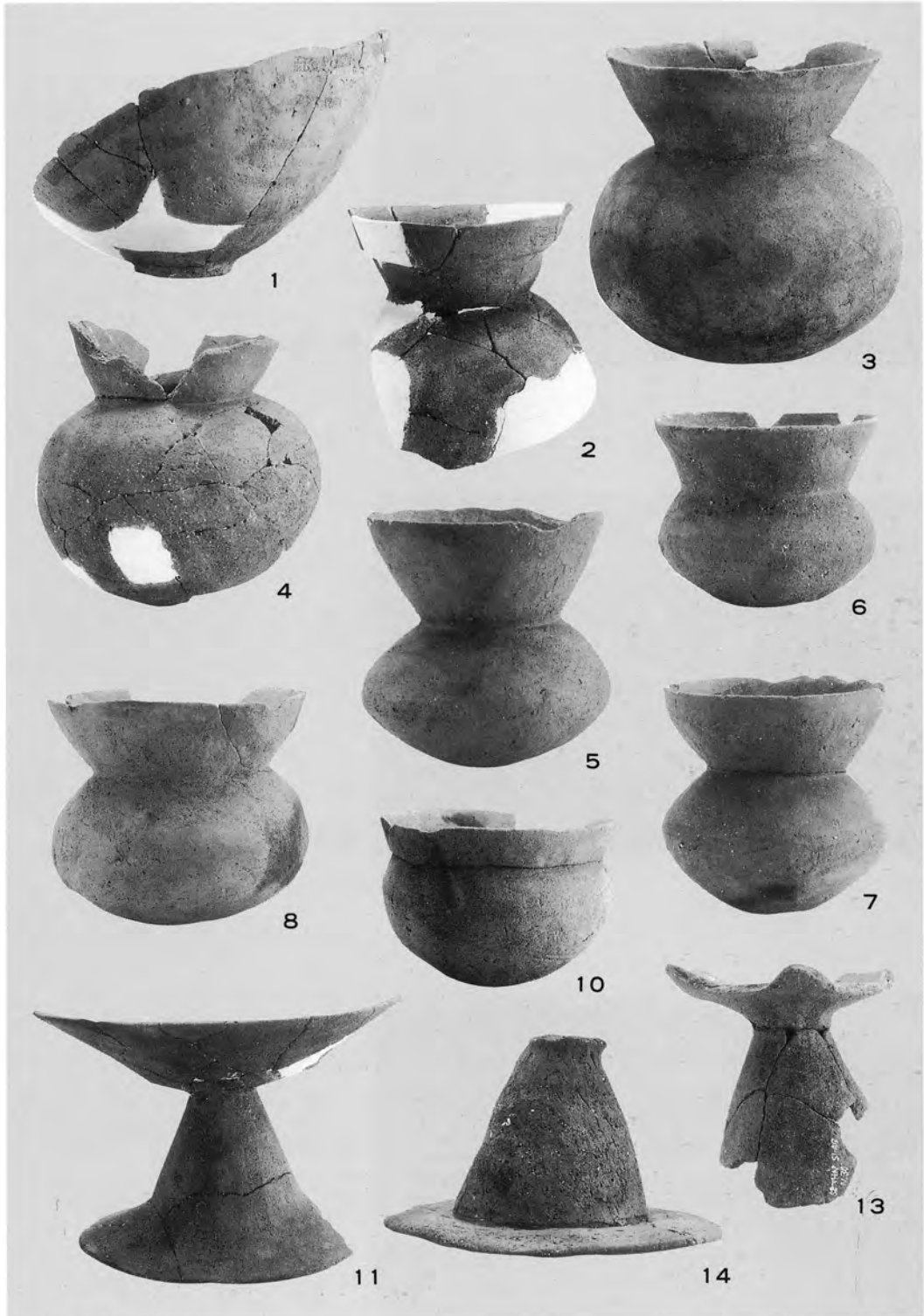
第48号住居跡出土遺物(2)



第49・50号住居跡



第49・50・94号住居跡遺物出土状況



第49号住居跡出土遺物



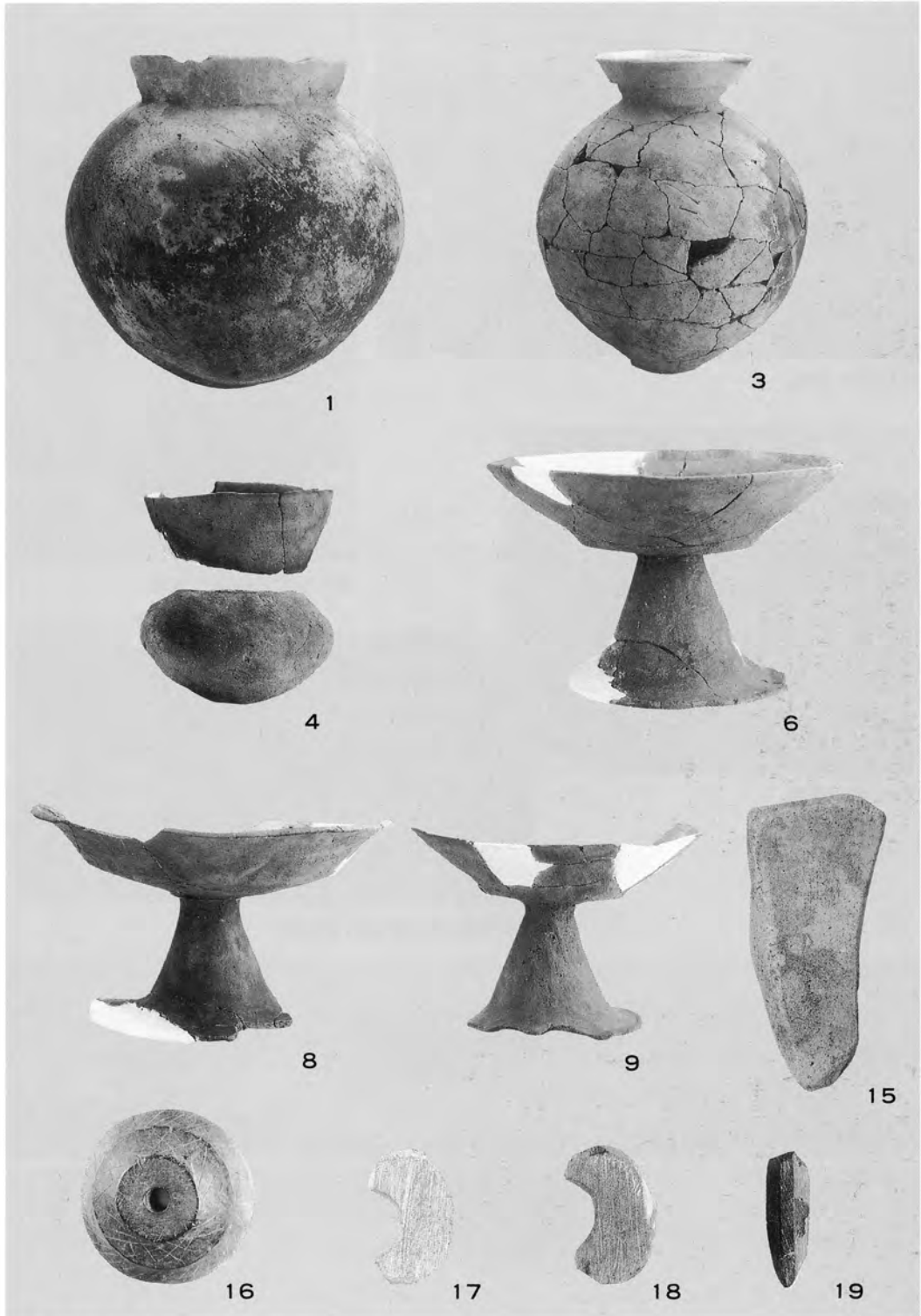
第51号住居跡



第52号住居跡



第52号住居跡遺物出土状況



第52号住居跡出土遺物



第53号住居跡



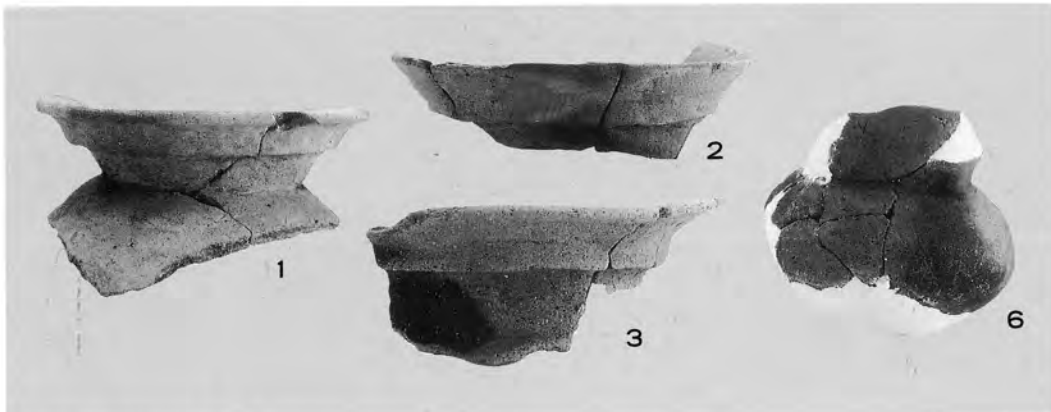
第53号住居跡出土遺物



第54号住居跡



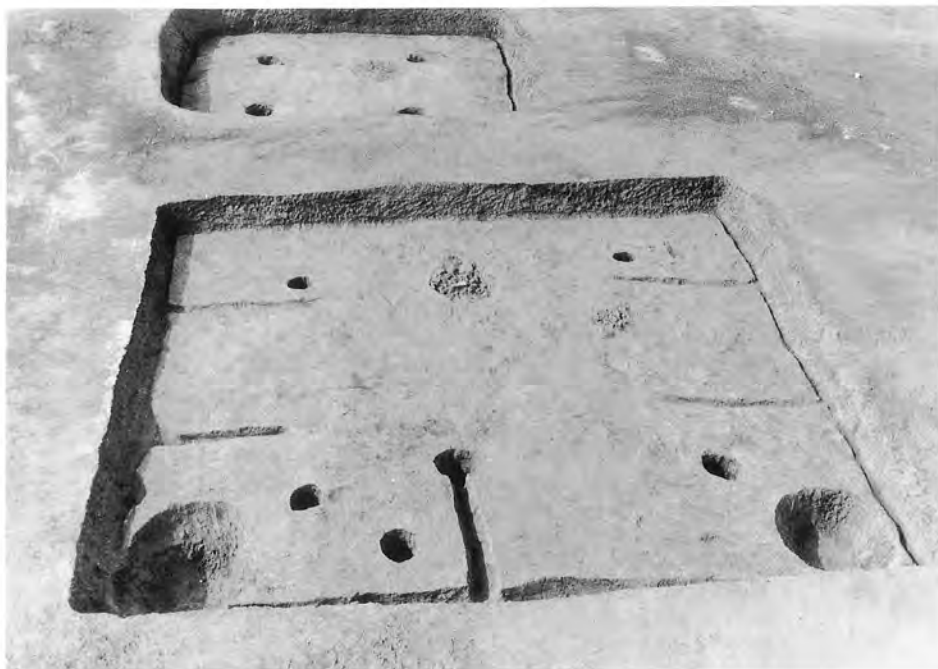
第54号住居跡遺物出土状況



第54号住居跡出土遺物(1)



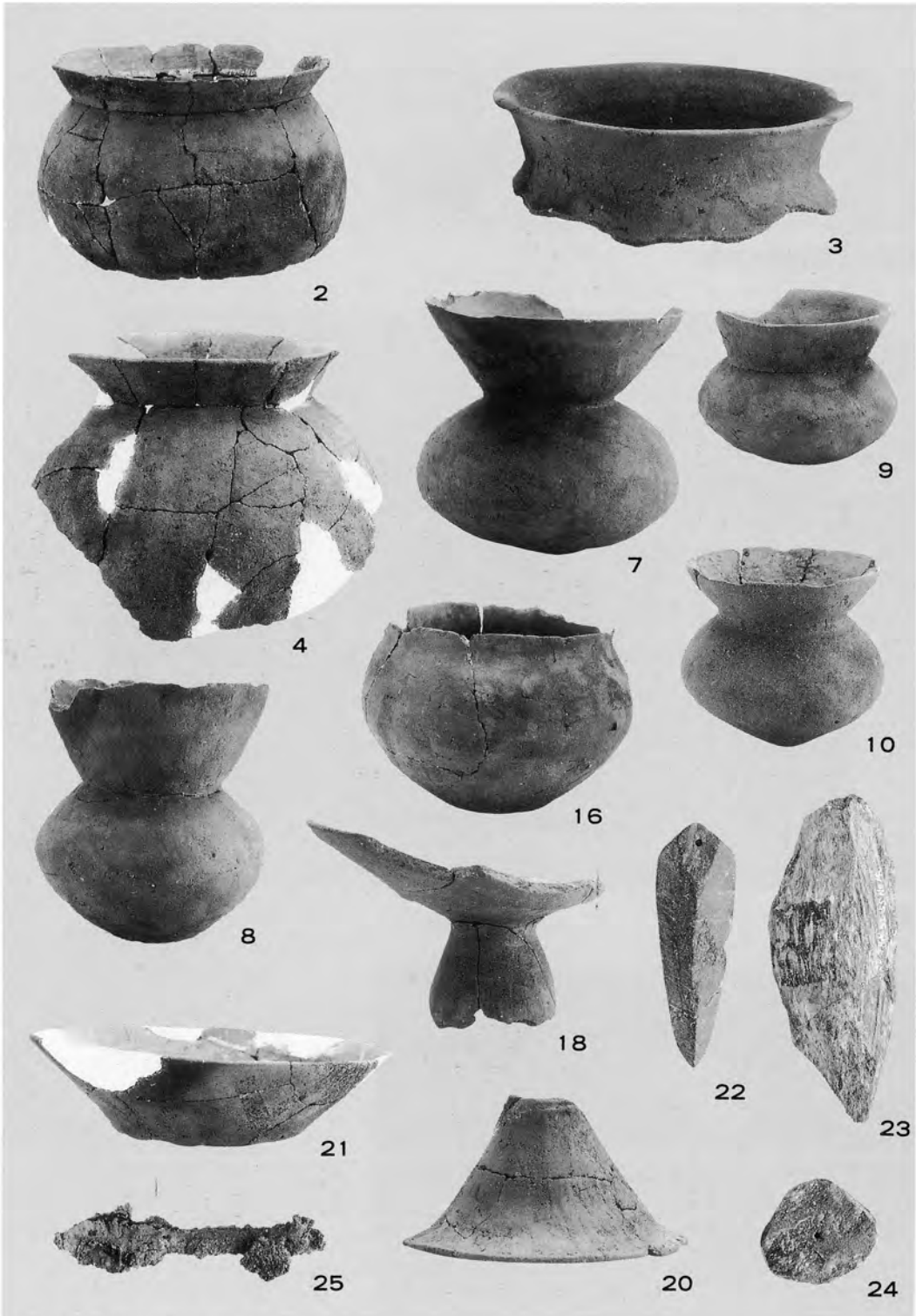
第54号住居跡出土遺物(2)



第55号住居跡



第55号住居跡遺物出土状況



第55号住居跡出土遺物



第57号住居跡



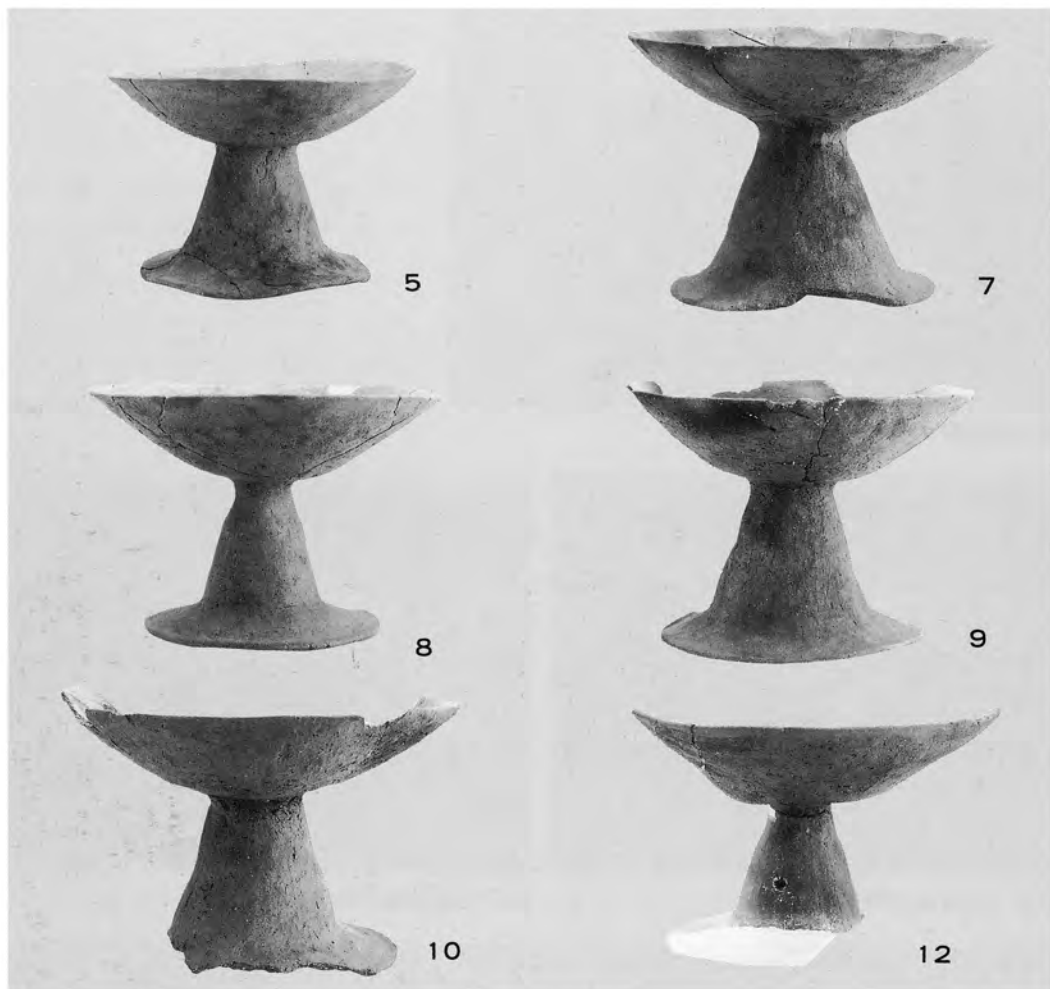
第57号住居跡遺物出土状況(1)



第57号住居跡遺物出土状況(2)



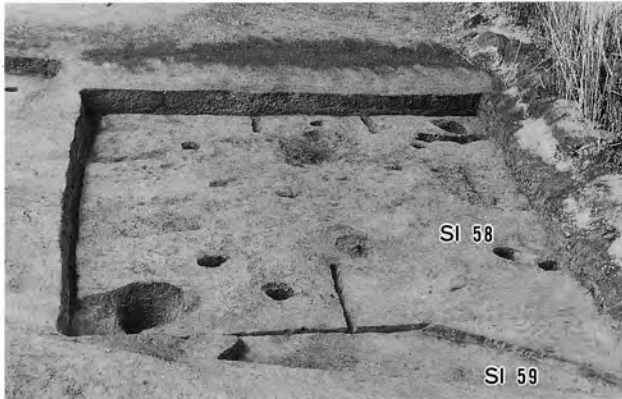
第57号住居跡出土遺物(1)



第57号住居跡出土遺物(2)



第58号住居跡出土遺物(1)



第58号住居跡



第58号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡出土遺物(2)



第60・62号住居跡



第60・62号住居跡遺物出土状況



第60号住居跡出土遺物



第61号住居跡



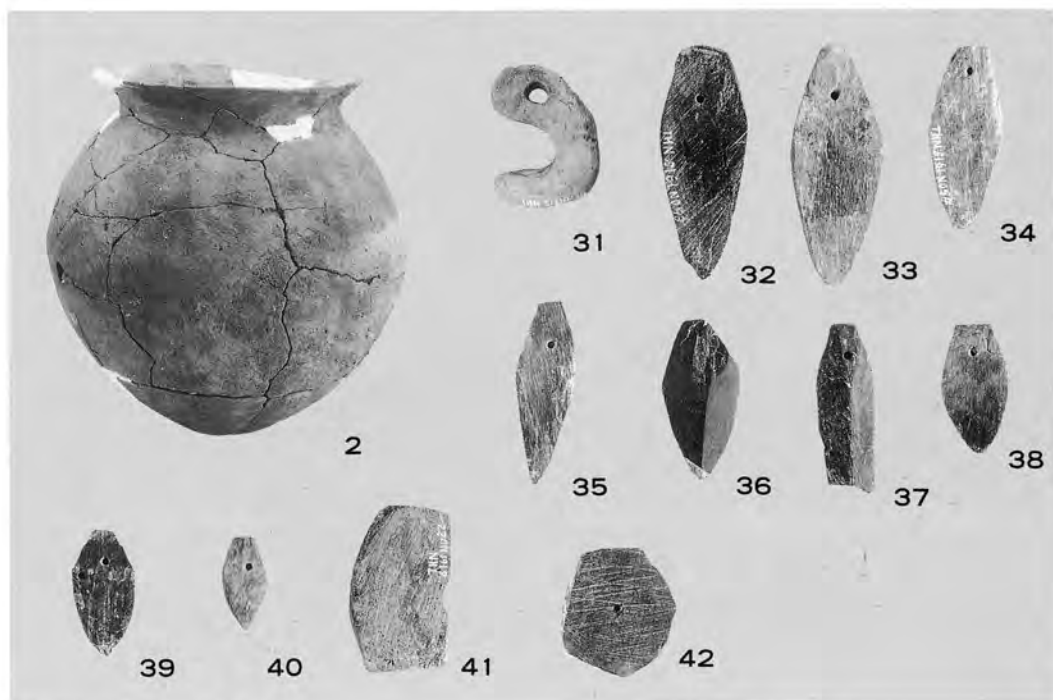
第61号住居跡出土遺物(1)



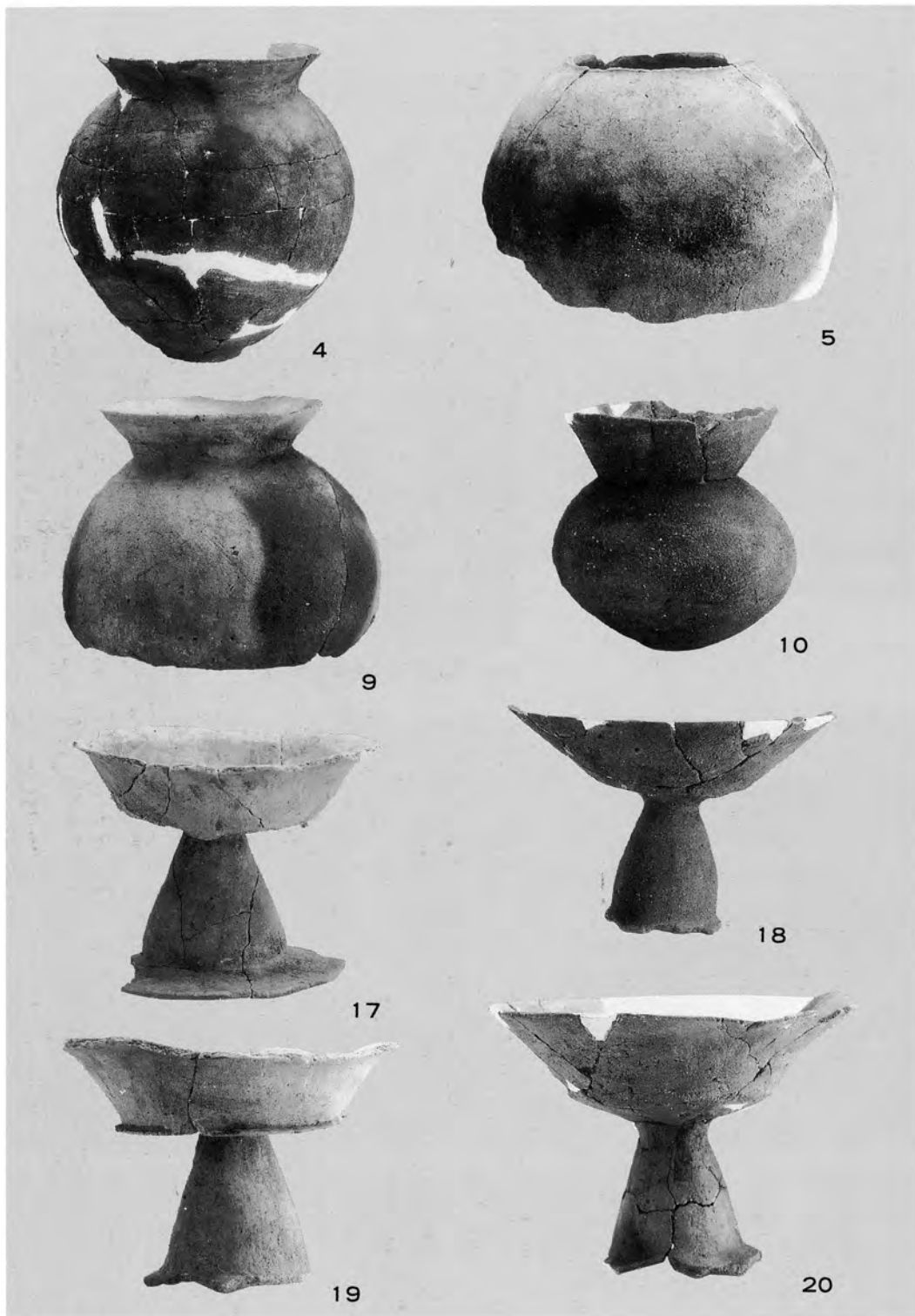
第61号住居跡遺物出土状況(1)



第61号住居跡遺物出土状況(2)



第61号住居跡出土遺物(2)



第61号住居跡出土遺物(3)



第64号住居跡



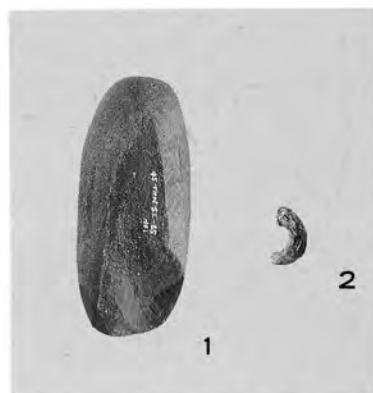
第64号住居跡遺物出土状況



第64号住居跡出土遺物



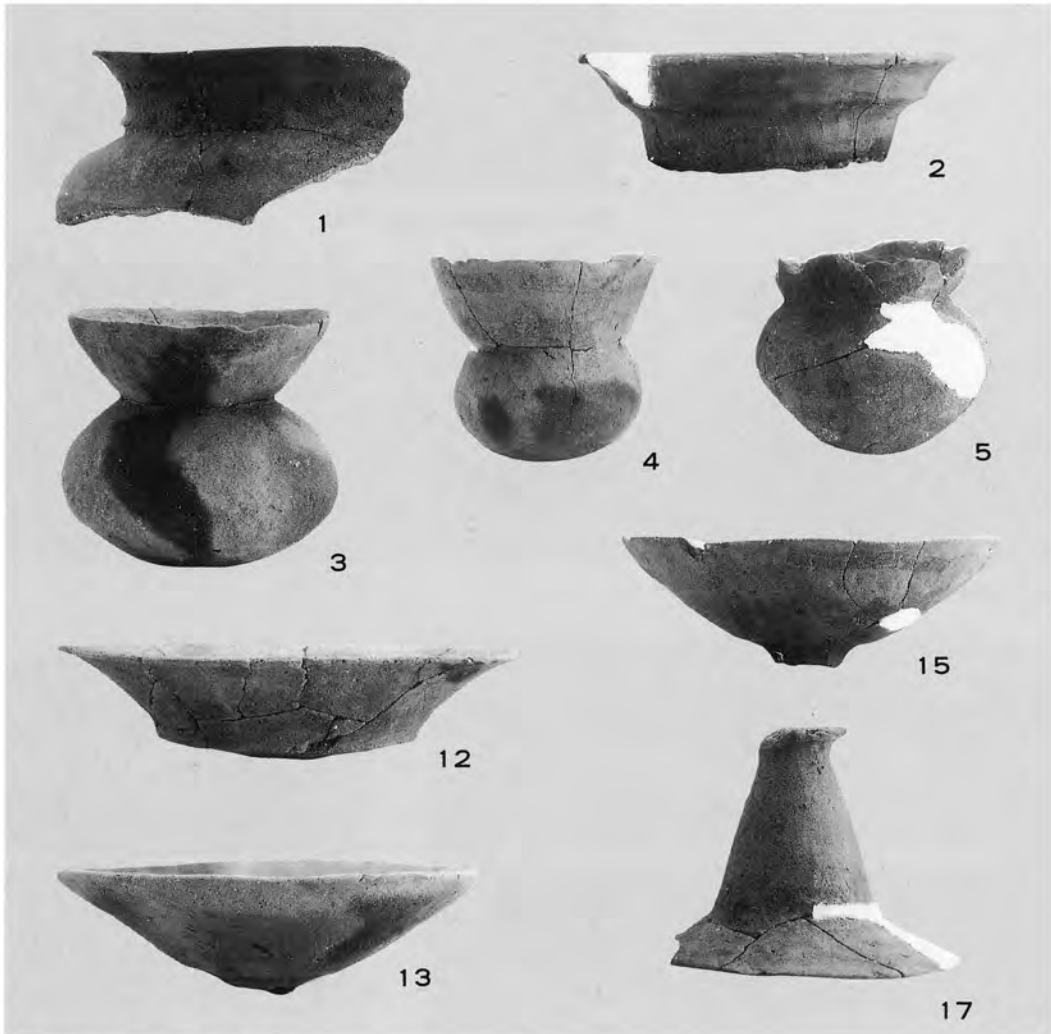
第65号住居跡



第65号住居跡出土遺物



第66号住居跡遺物出土状況



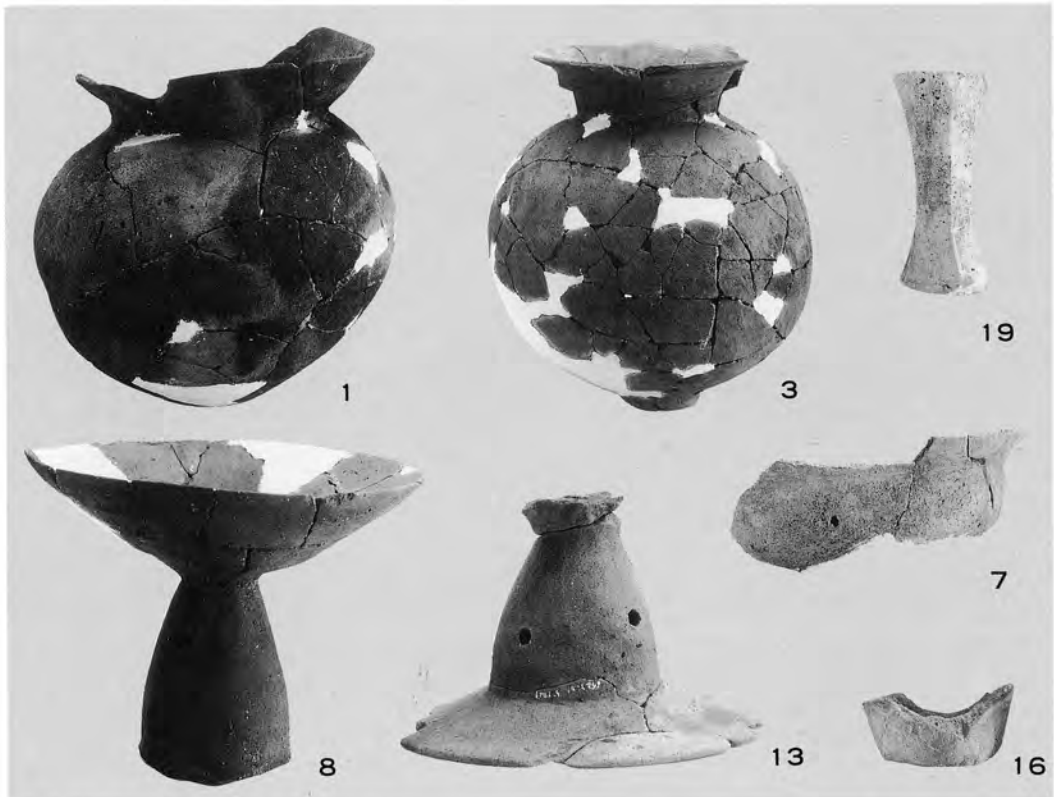
第66号住居跡出土遺物



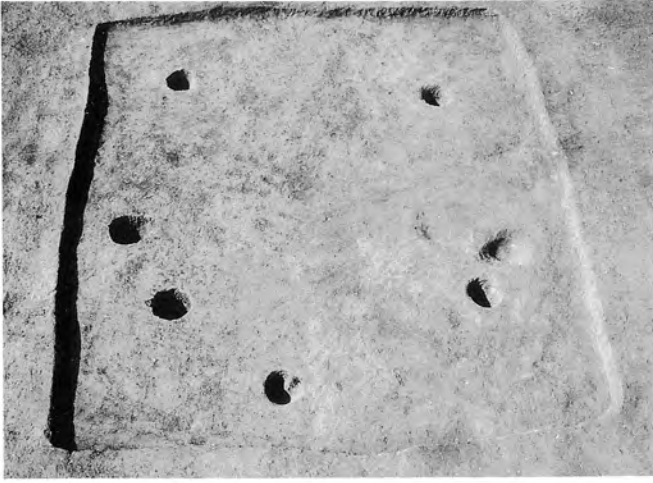
第69号住居跡



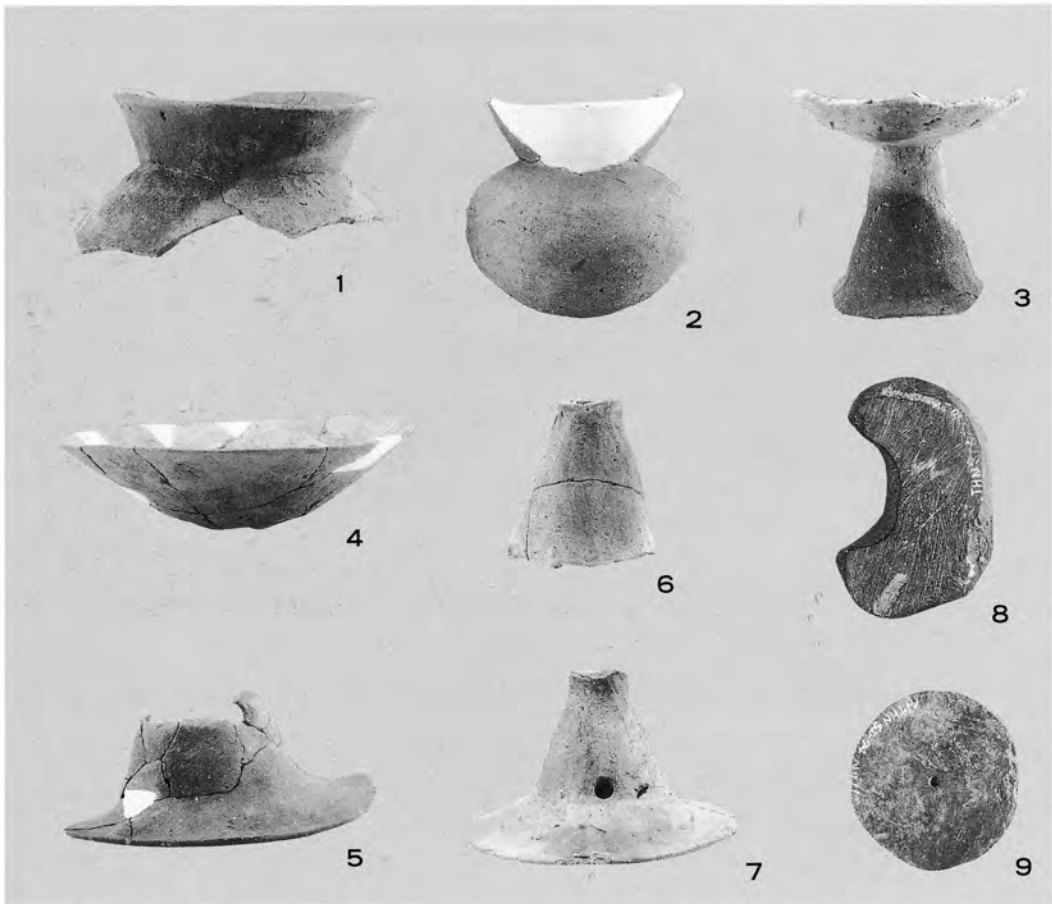
第69号住居跡遺物出土状況



第69号住居跡出土遺物



第74号住居跡



第74号住居跡出土遺物



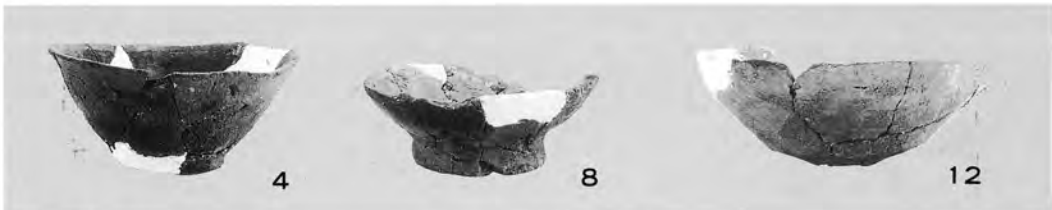
第83号住居跡



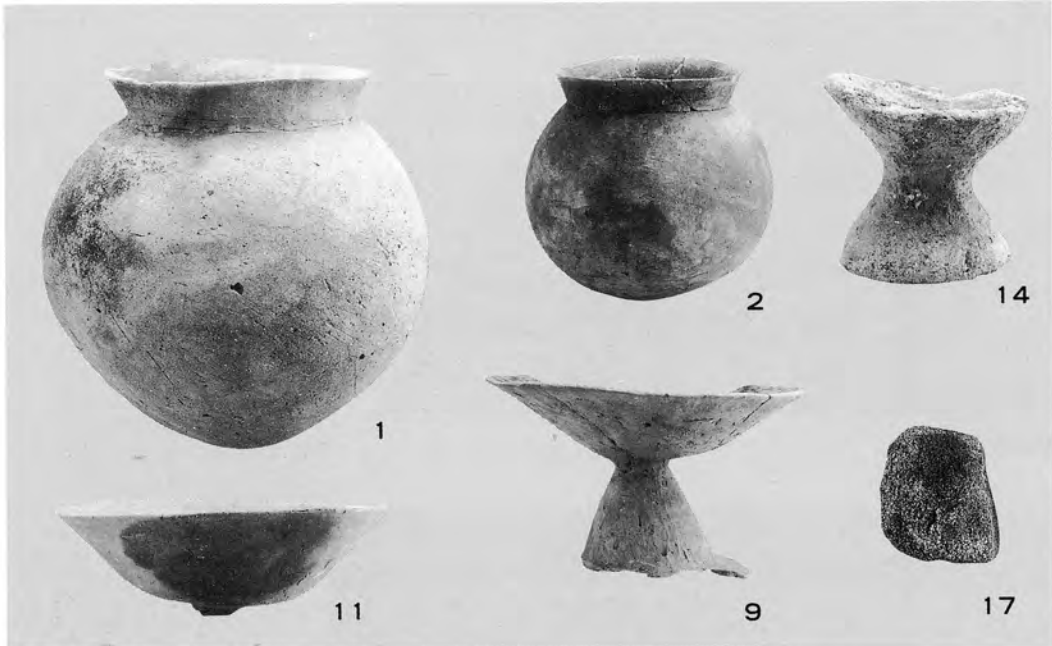
第83号住居跡遺物出土状況(1)



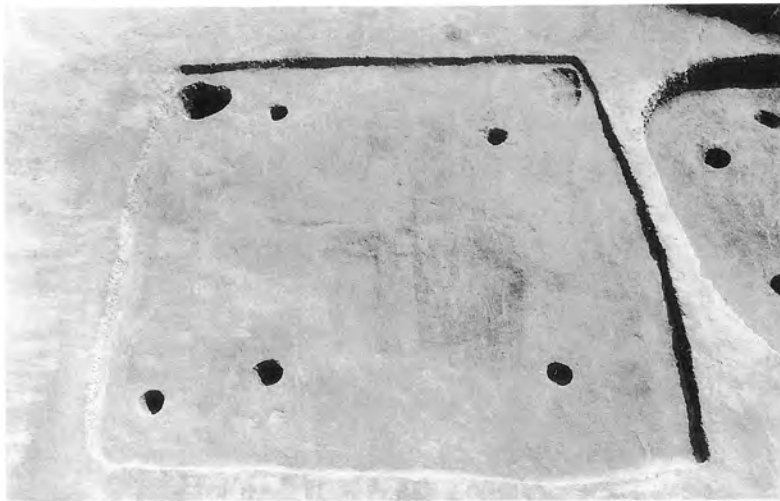
第83号住居跡遺物出土状況(2)



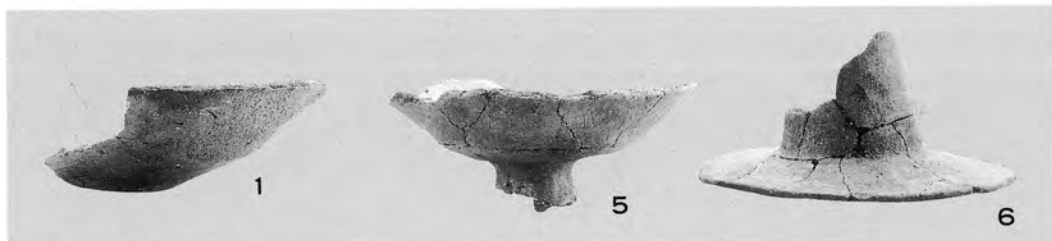
第83号住居跡出土遺物(1)



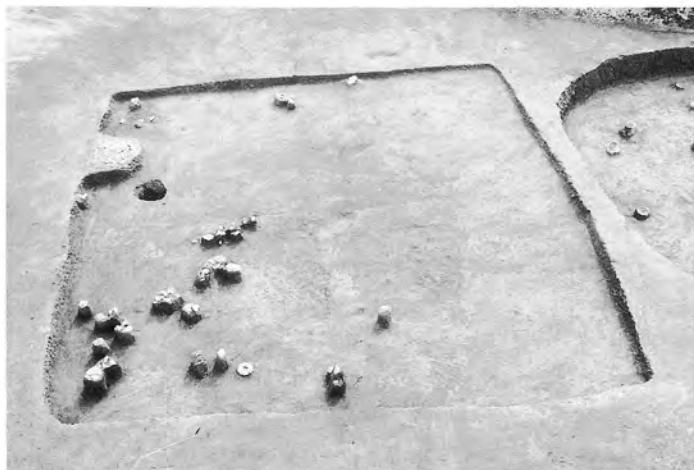
第83号住居跡出土遺物(2)



第85号住居跡



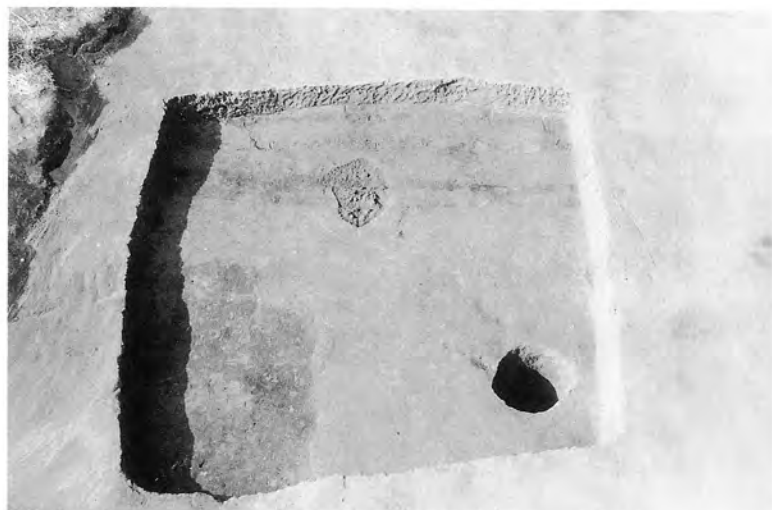
第85号住居跡出土遺物(1)



第85号住居跡遺物出土状況



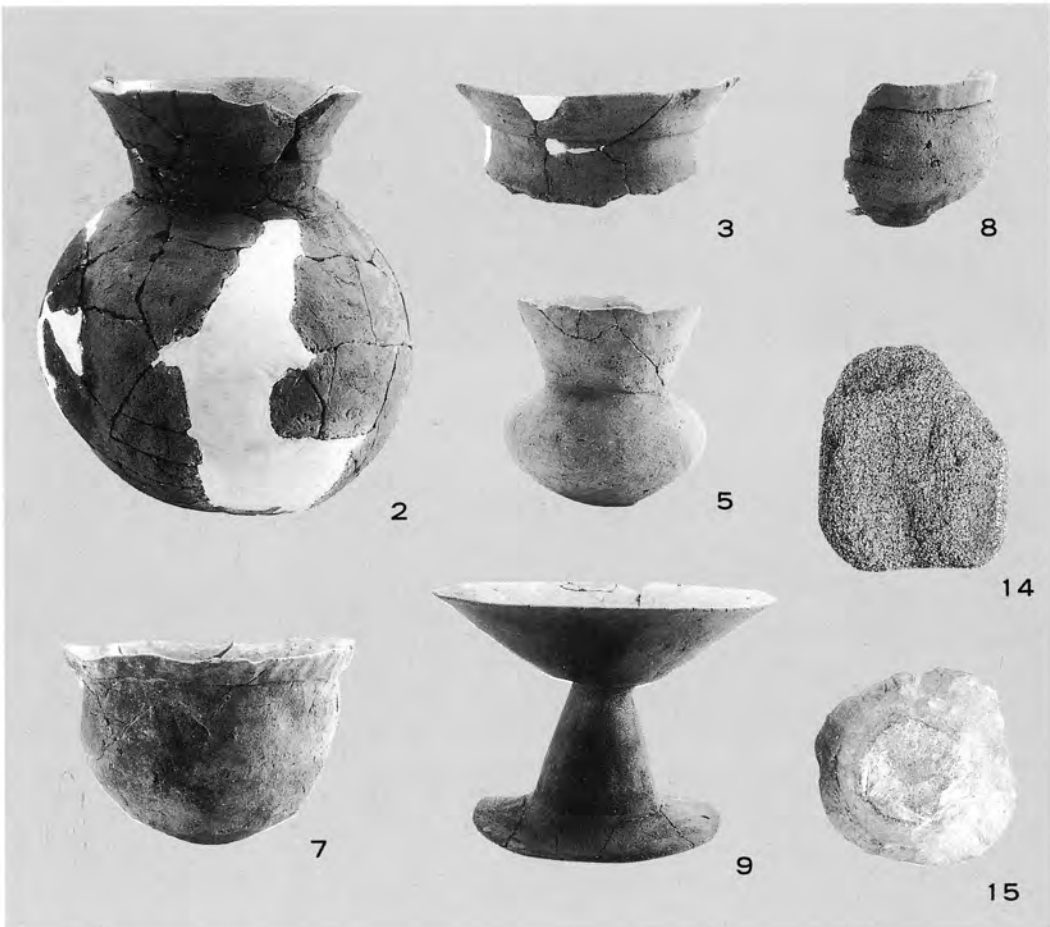
第85号住居跡出土遺物(2)



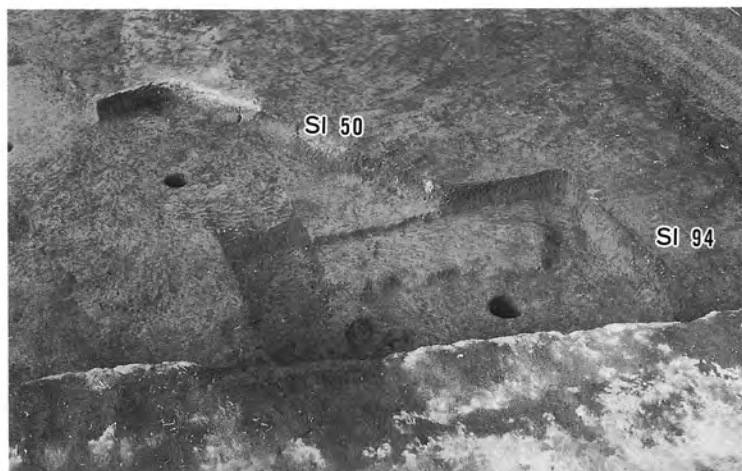
第88号住居跡



第88号住居跡遺物出土状況



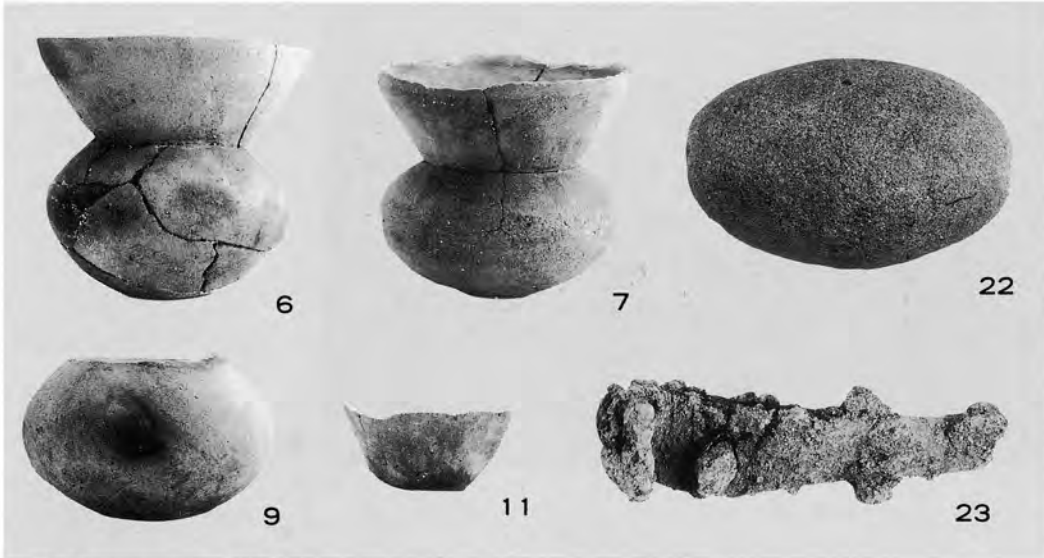
第88号住居跡出土遺物



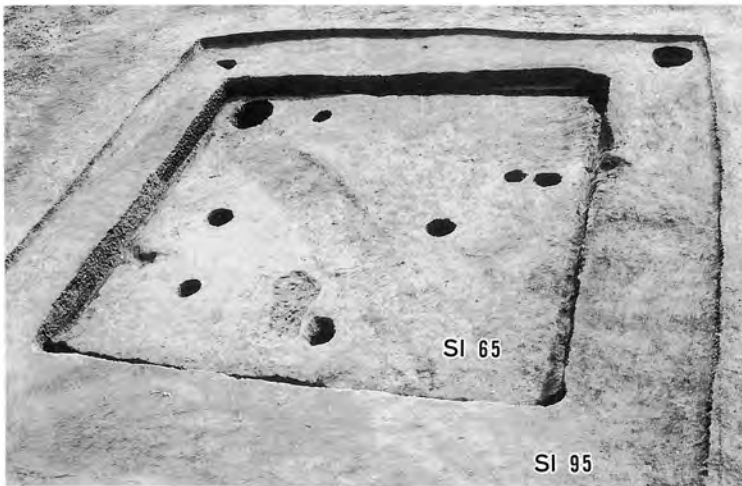
第94号住居跡



第94号住居跡出土遺物(1)



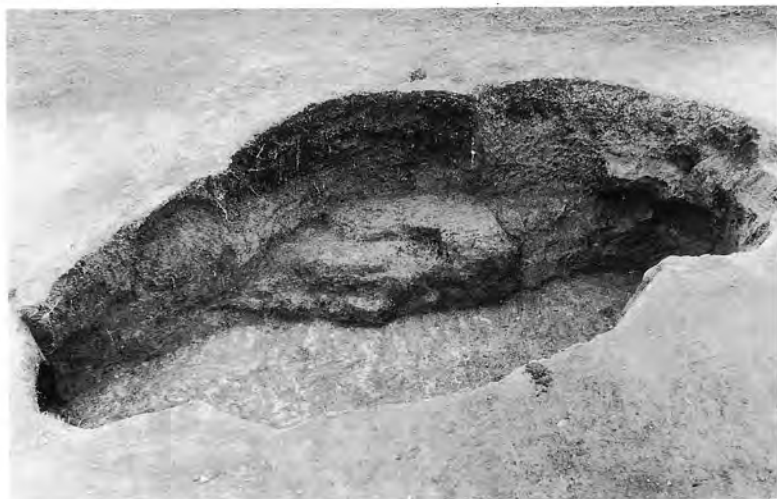
第94号住居跡出土遺物(2)



第65・95号住居跡



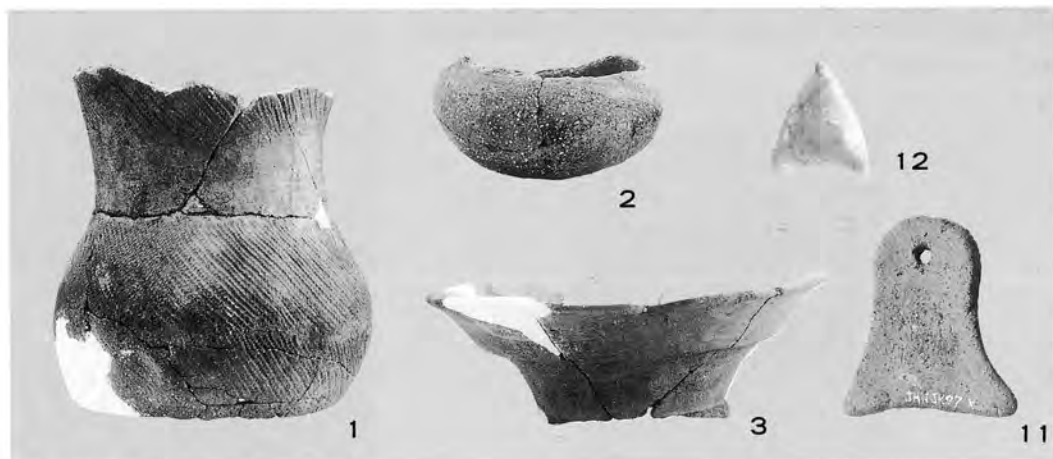
第95号住居跡出土遺物



第6号土坑



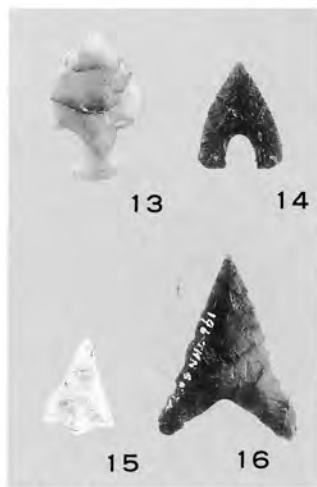
第27号土坑土層断面



第20・27・30・50・97号土坑出土遺物



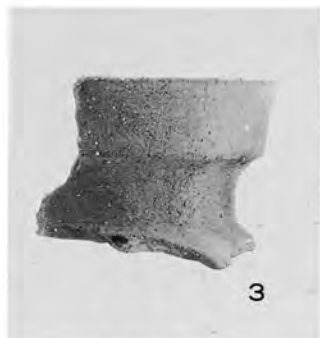
第50・51・52号土坑



第59・72号土坑出土遺物



第1・2号溝(1)



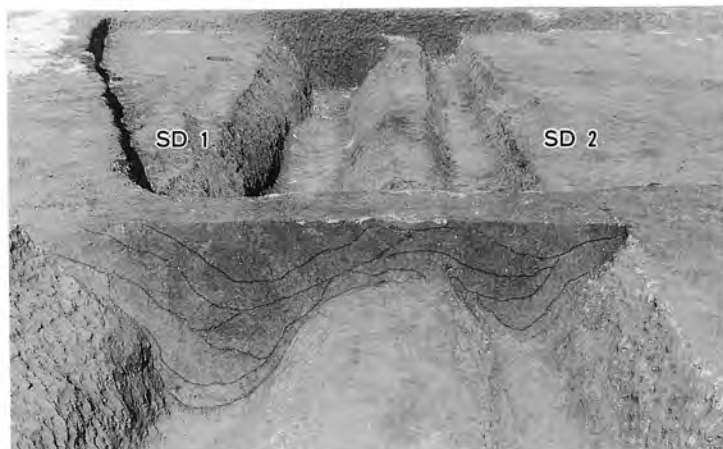
第1号溝出土遺物



第1・2号溝(2)



第1・2号溝(3)



第1・2号溝土層断面



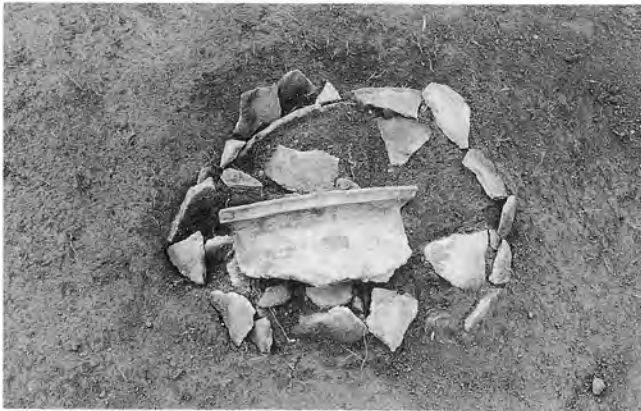
第1号方形周溝状遺構



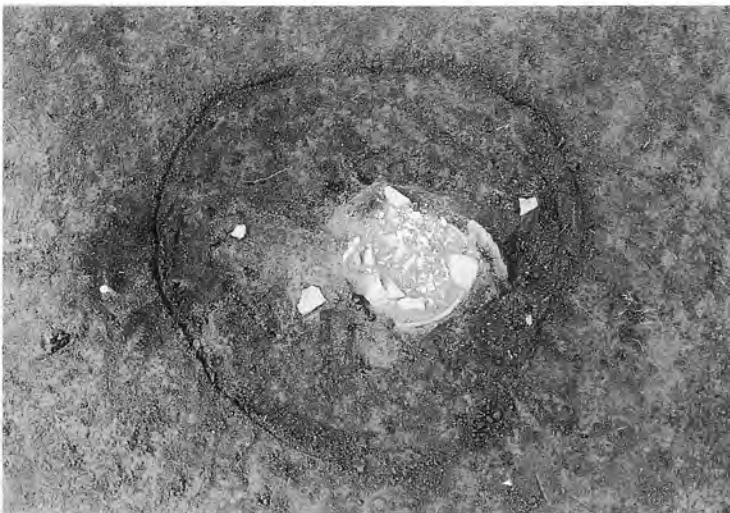
第1号火葬墓土層断面



第1・2号火葬墓出土遺物



第1号火葬墓遺物出土状況



第2号火葬墓遺物出土状況



第1号炭烧窠



第2号炭烧窠



第3号炭烧窠



第4号炭烧窯



第7号炭烧窯



第5・6・7号炭烧窯



第8号炭烧窯



第9号炭烧窯



第10号炭烧窯



遺跡全景 (Z・D地区)



遺物包含層全景



遺物包含層(1)



遺物包含層(2)



遺物包含層(3)



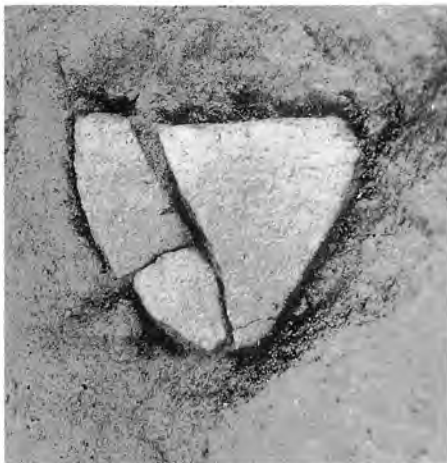
遺物包含層土層断面



遺物包含層遺物出土状況(1)



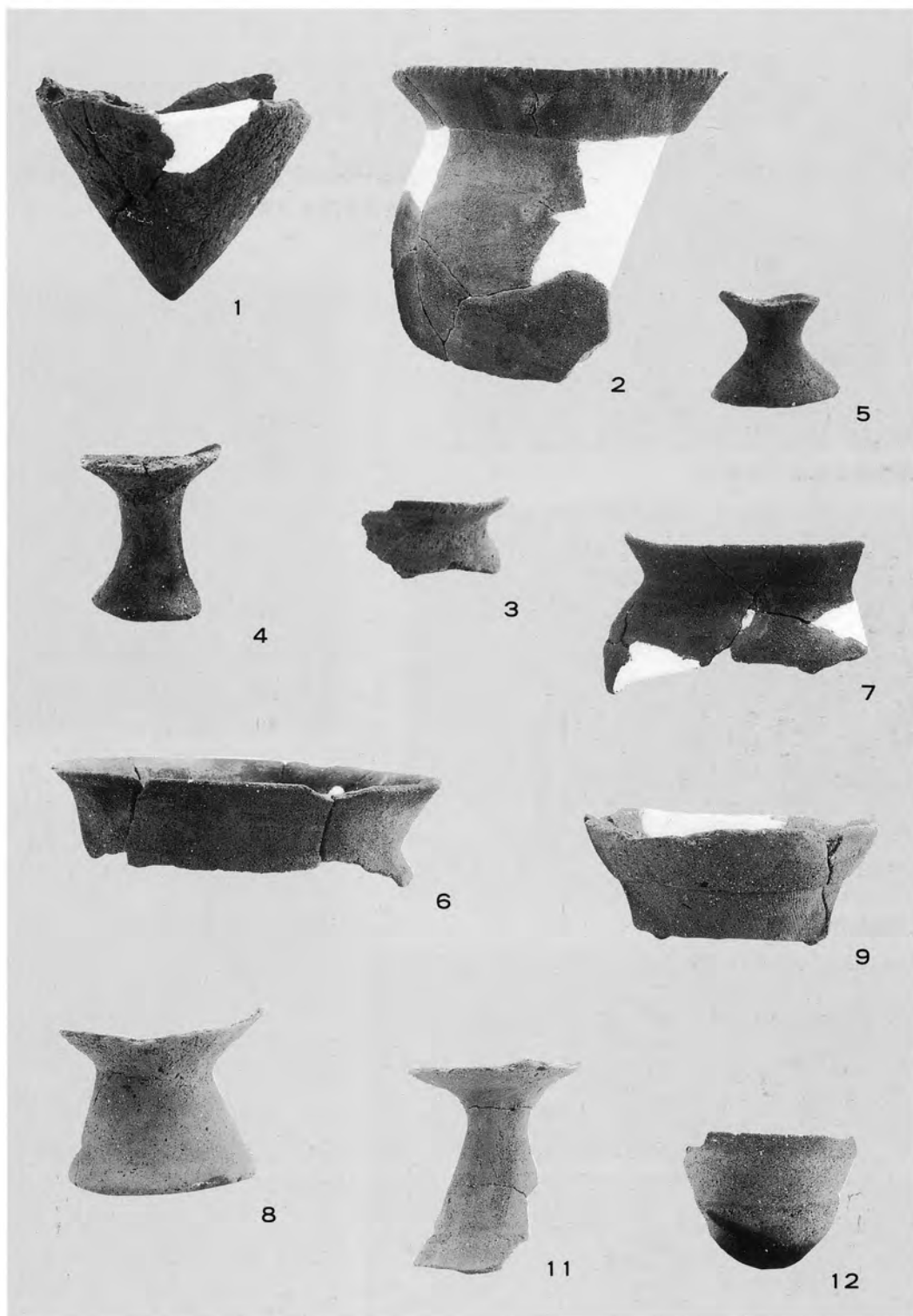
遺物包含層遺物出土状況(2)



遺物包含層遺物出土状況(3)



遺物包含層遺物出土状況(4)



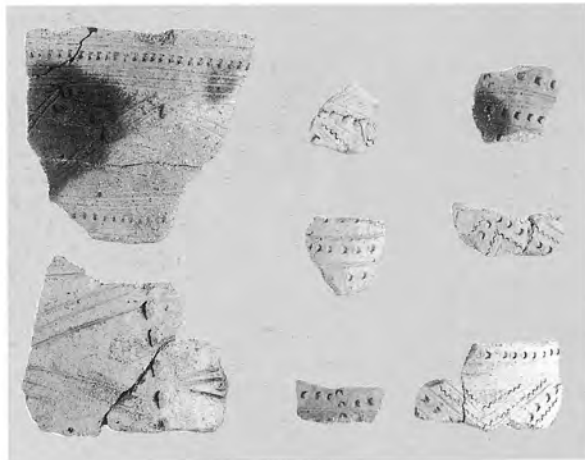
遺物包含層出土遺物(1)



遺物包含層出土遺物(2)



遺物包含層出土遺物(3)



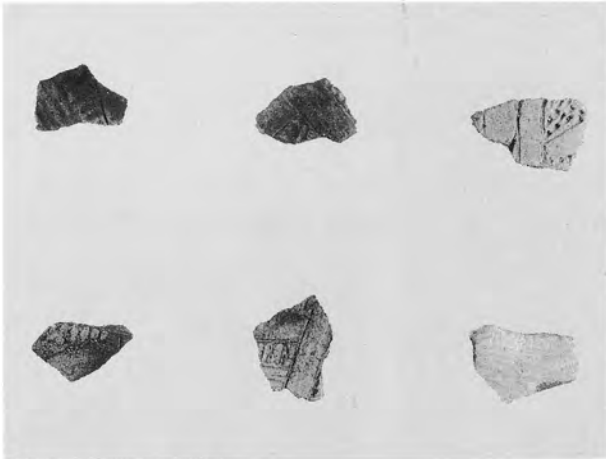
遺物包含層出土遺物(4)



遺物包含層出土遺物(6)



遺物包含層出土遺物(5)



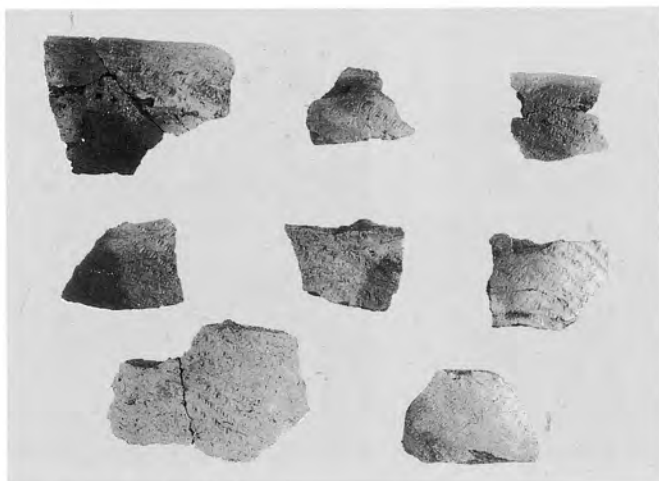
遺物包含層出土遺物(7)



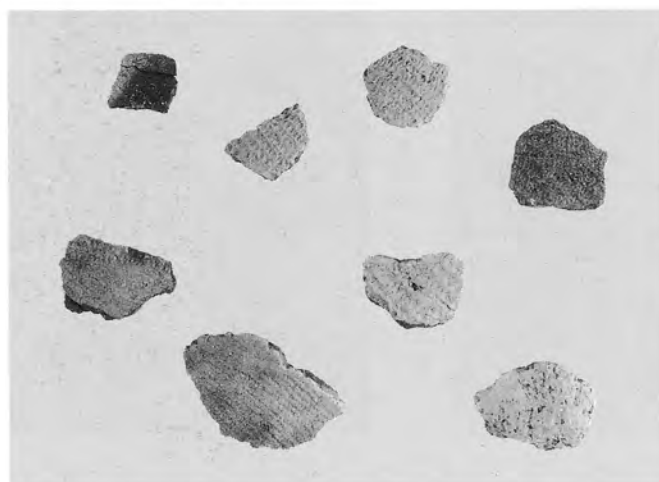
遺物包含層出土遺物(8)



遺物包含層出土遺物(9)



遺物包含層出土遺物(10)



遺物包含層出土遺物(11)



遺物包含層出土遺物(12)



遺物包含層出土遺物(13)



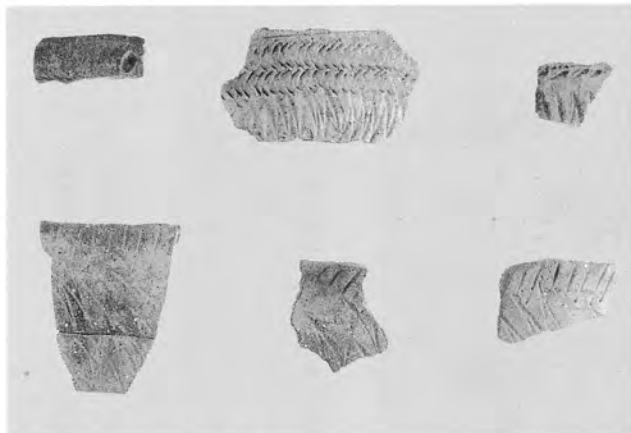
遺物包含層出土遺物(14)



遺物包含層出土遺物(15)



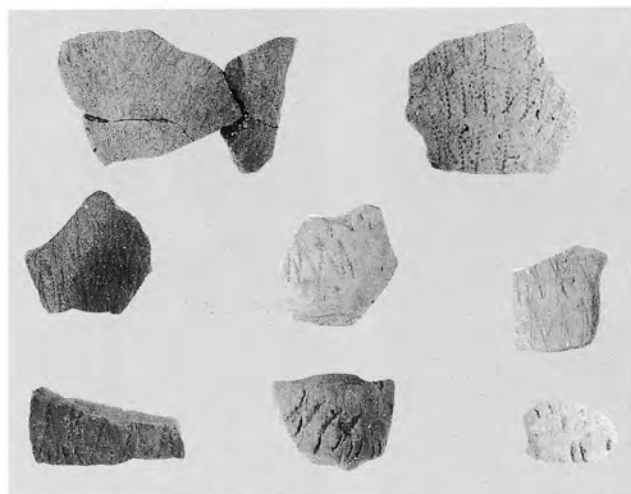
遺物包含層出土遺物(18)



遺物包含層出土遺物(16)



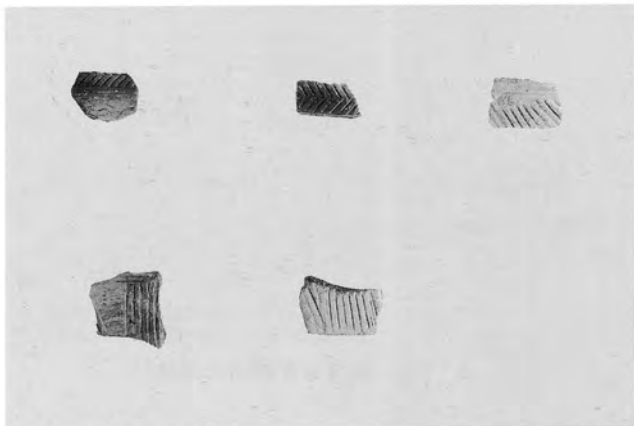
遺物包含層出土遺物(19)



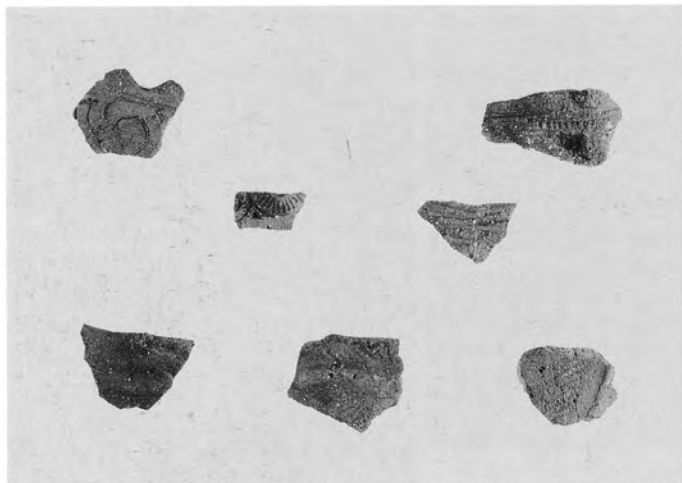
遺物包含層出土遺物(17)

PL116

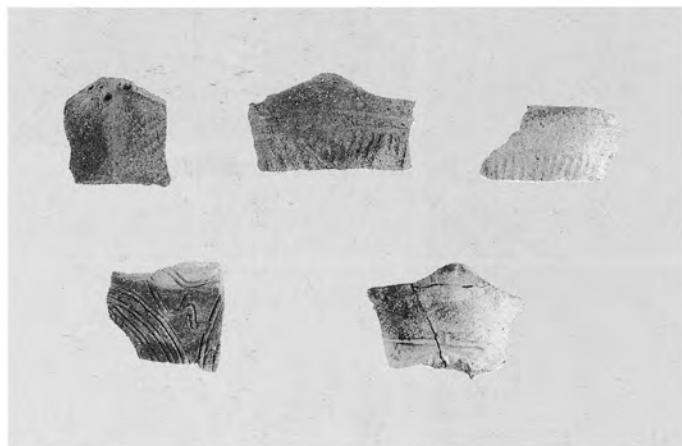
原田北遺跡



遺物包含層出土遺物(20)



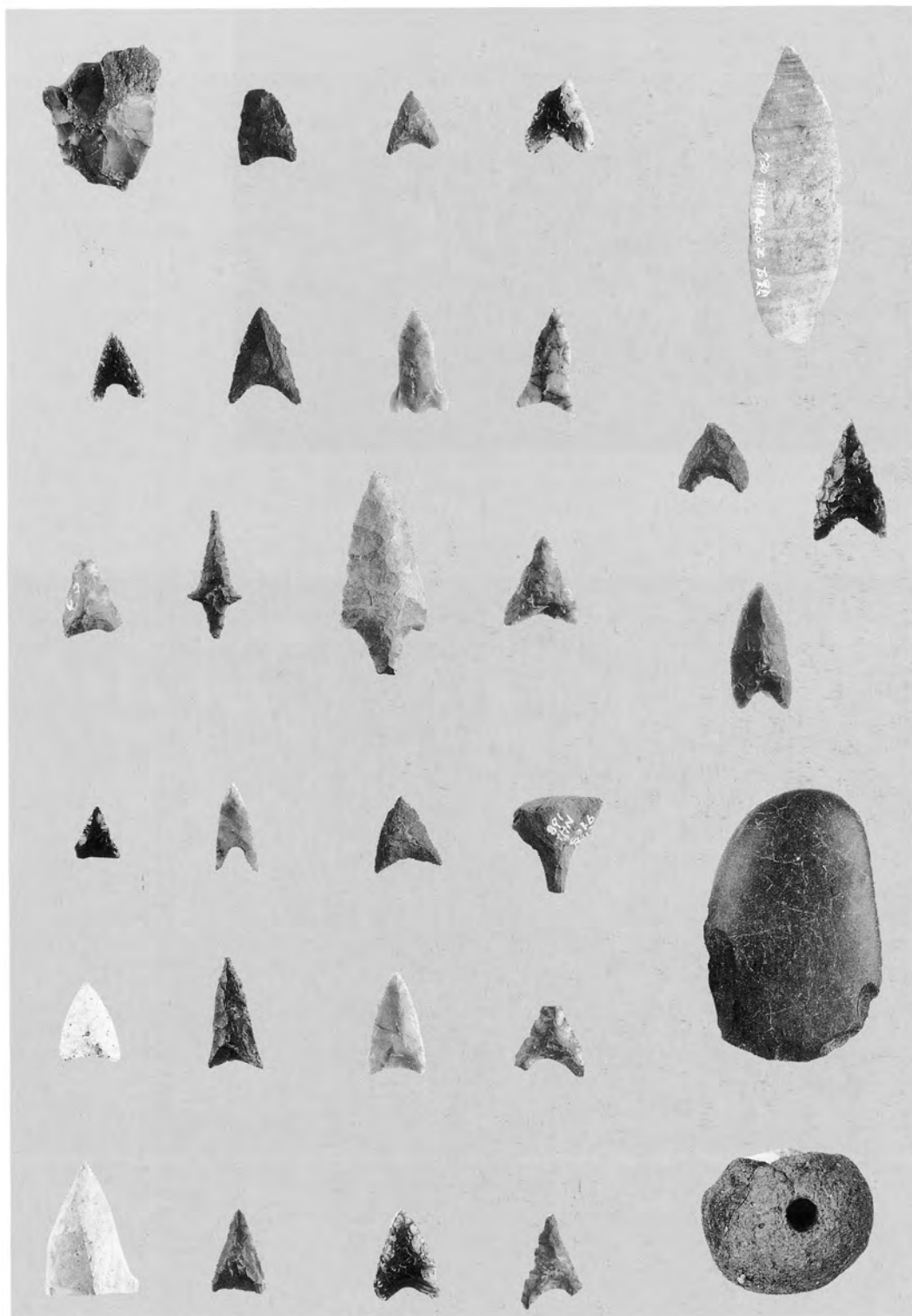
遺物包含層出土遺物(21)



遺物包含層出土遺物(22)



遺物包含層出土遺物(23)



遺物包含層出土遺物(24)

PL118

原田西遺跡



遺跡遠景



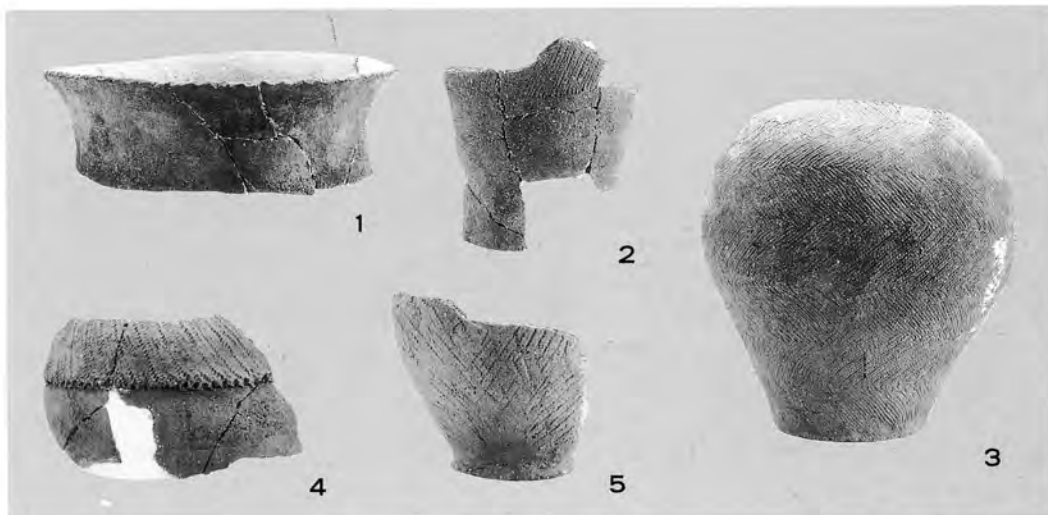
遺物包含層全景



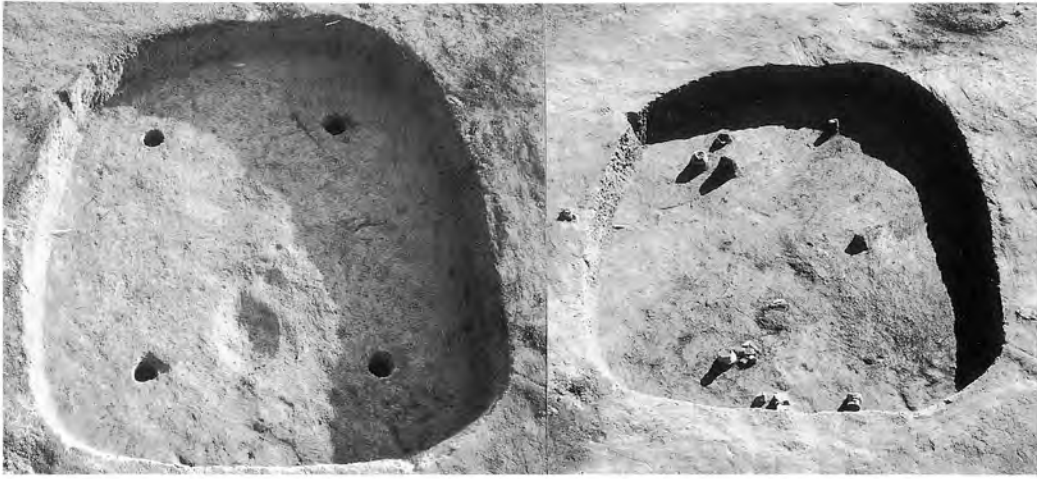
第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況

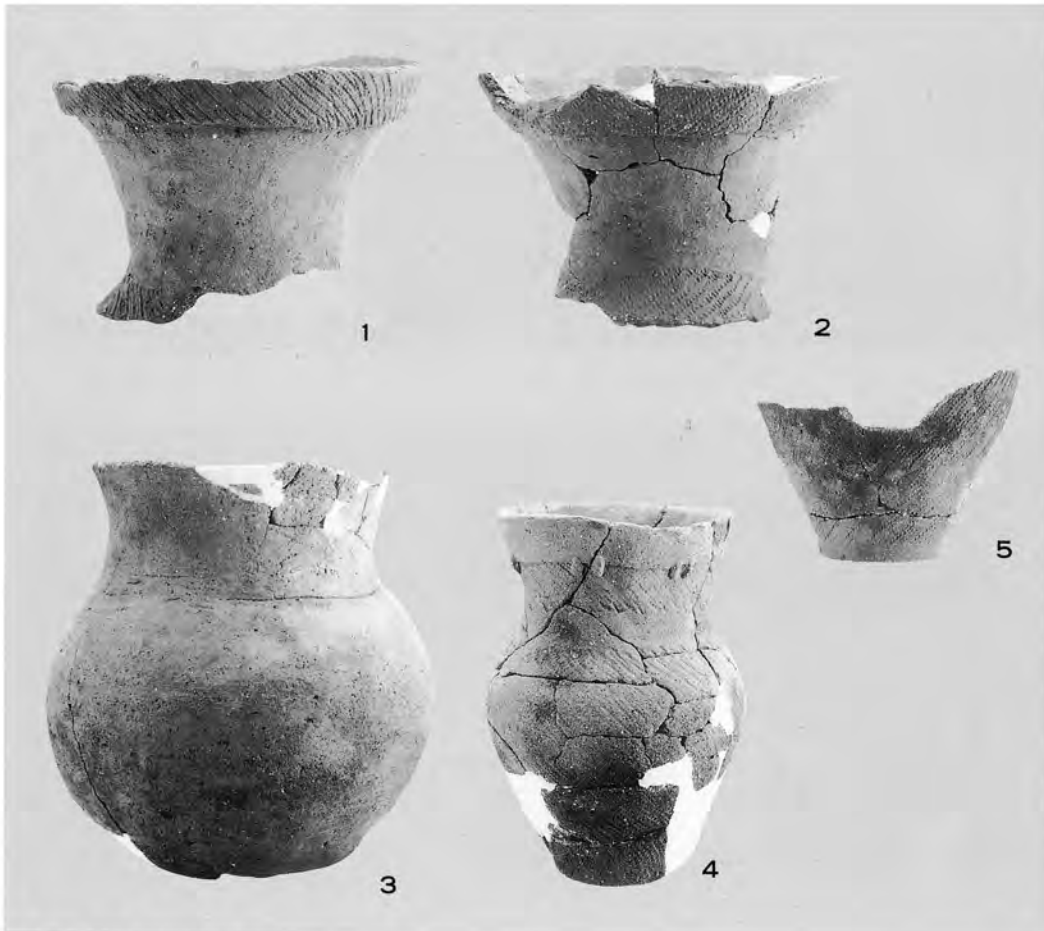


第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡

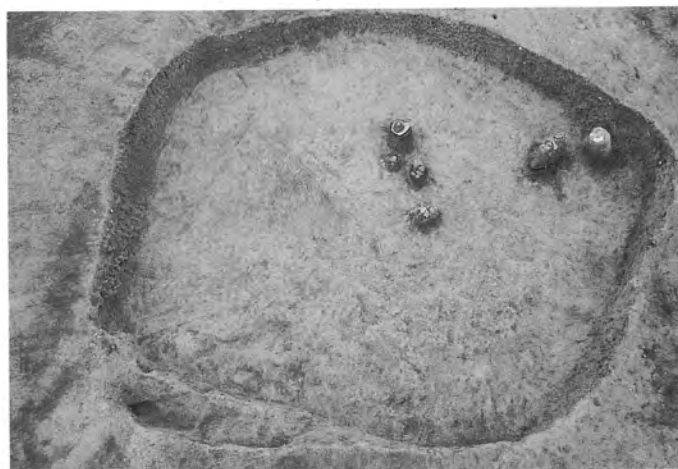
第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



1

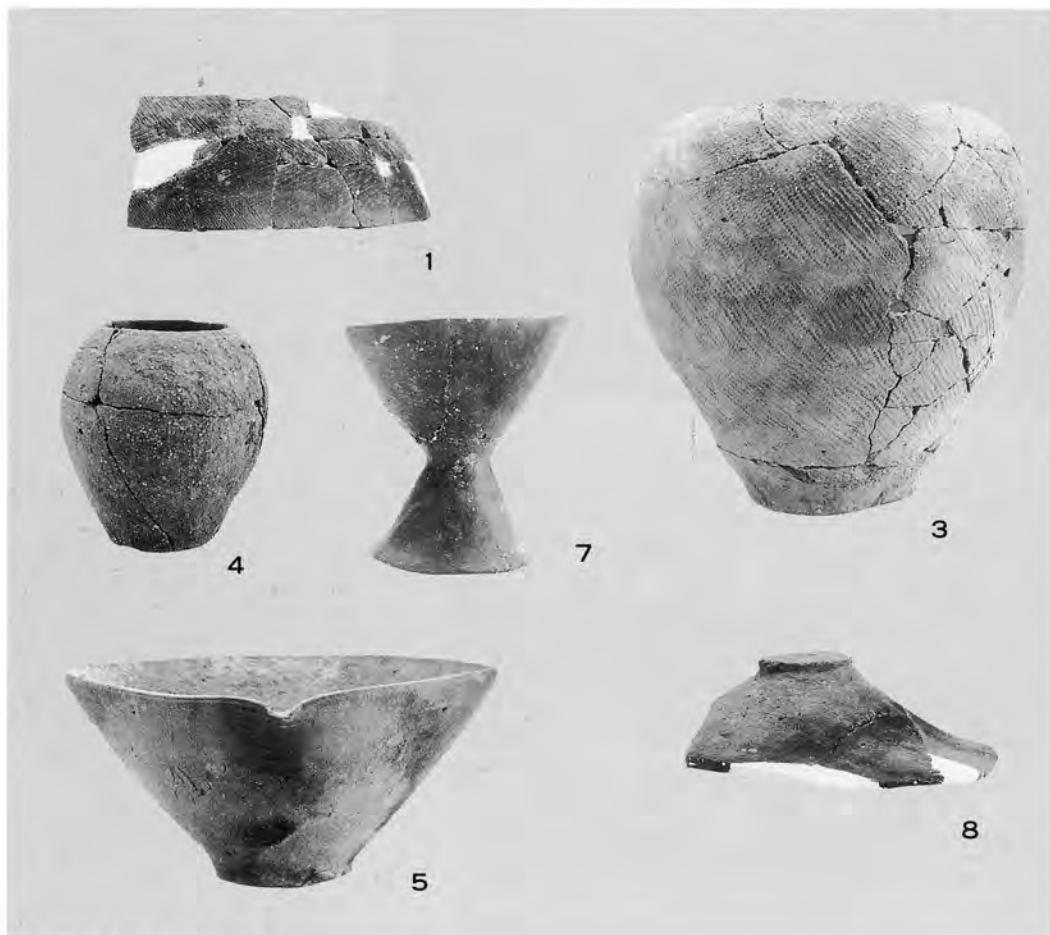
第3号住居跡出土遺物



第4号住居跡遺物出土状況(1)



第4号住居跡遺物出土状況(2)



第4号住居跡出土遺物



第 5 号住居跡



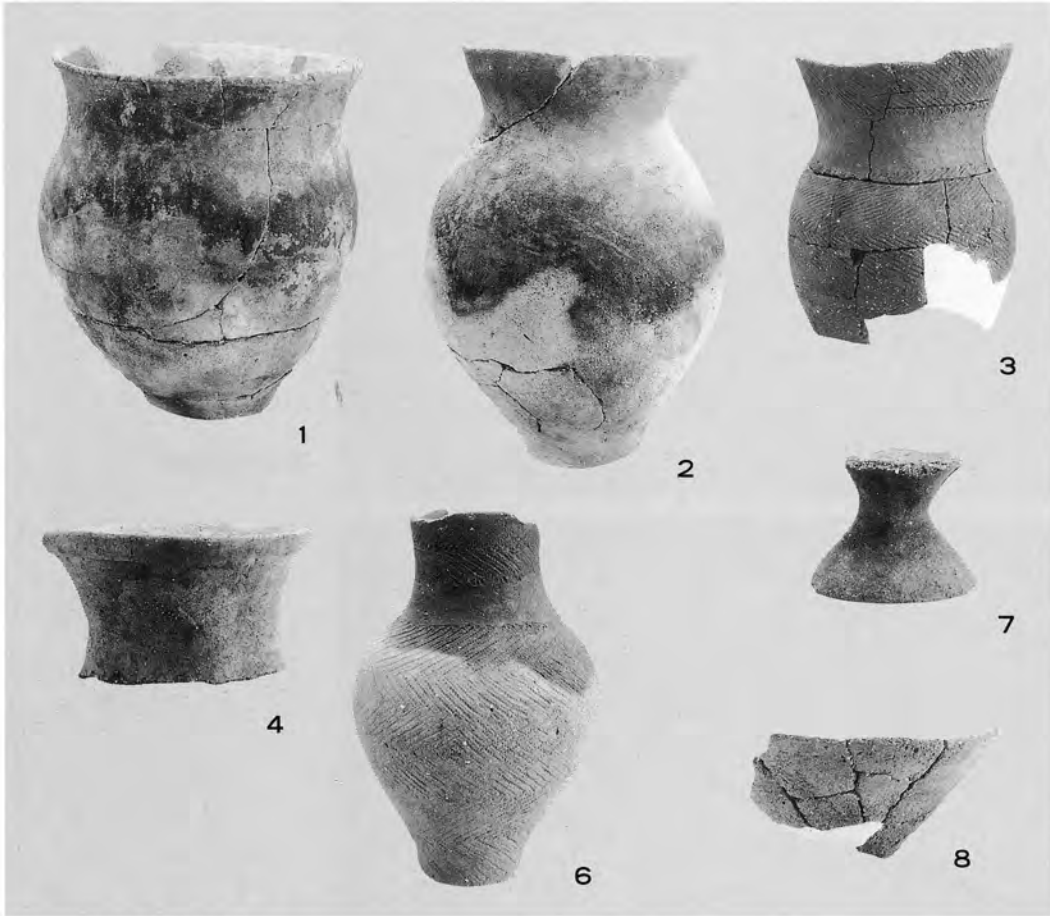
第 5 号住居跡
遺物出土状況(1)



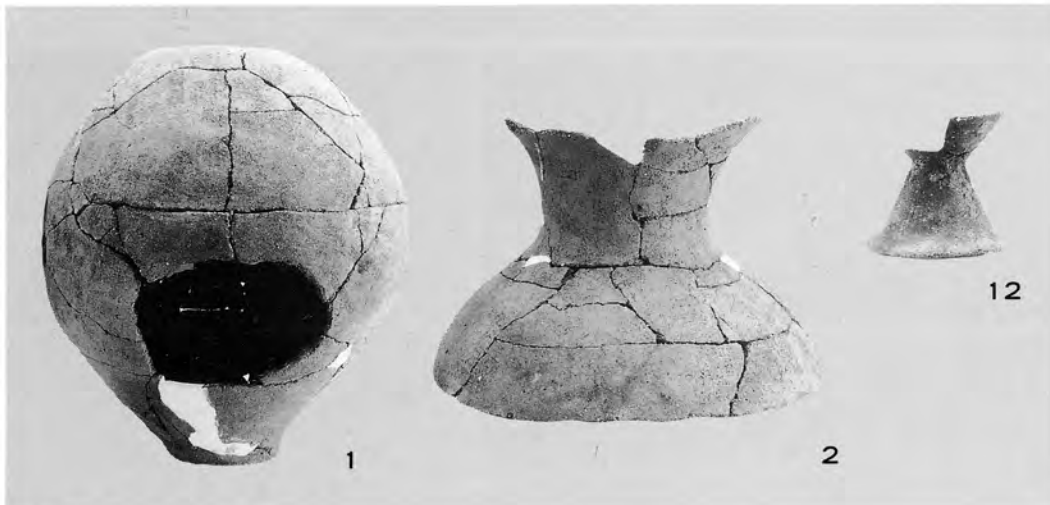
第 5 号住居跡遺物出土状況(2)



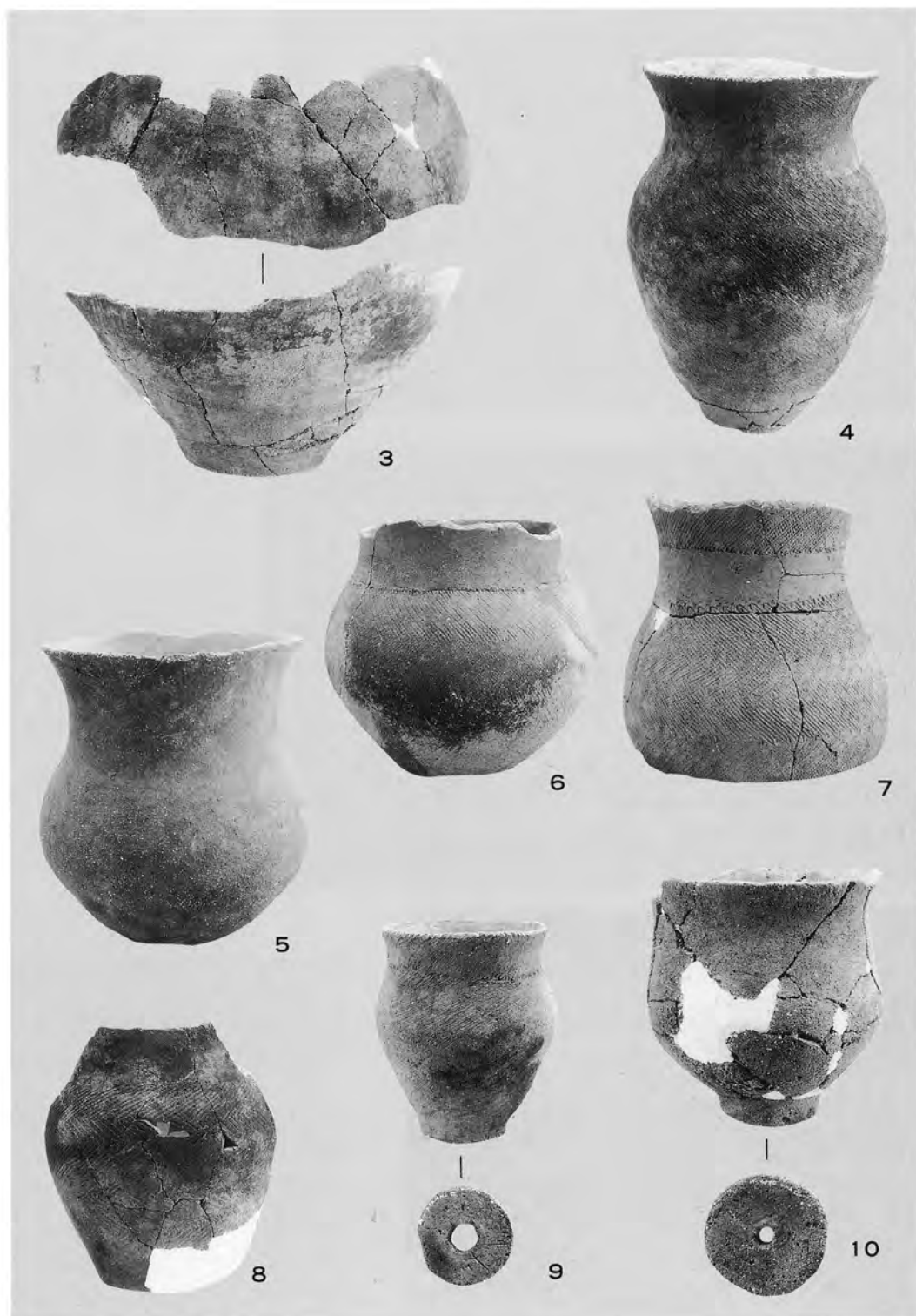
第 5 号住居跡遺物出土状況(3)



第 5 号住居跡出土遺物



第 6 号住居跡出土遺物(1)



第6号住居跡出土遺物(2)



第6号住居跡



第6号住居跡
遺物出土状況(1)



第6号住居跡遺物出土状況(2)



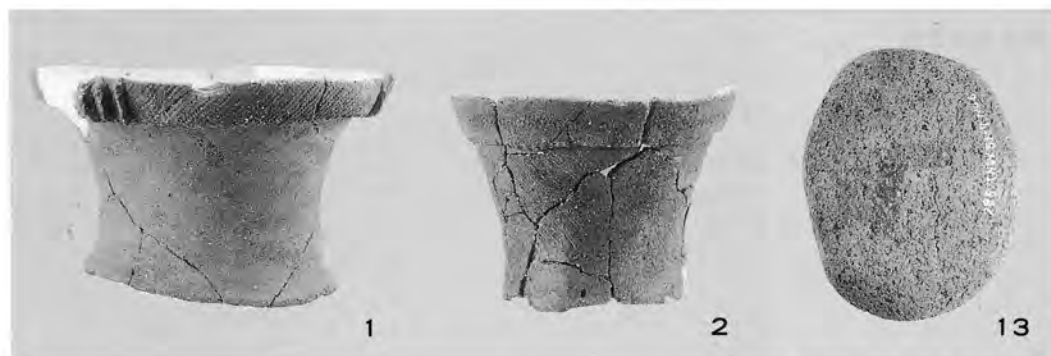
第6号住居跡出土遺物(3)



第7号住居跡



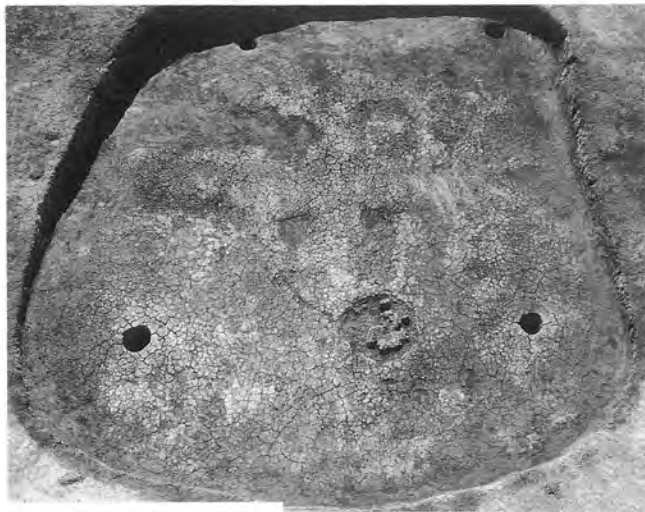
第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡出土遺物(1)



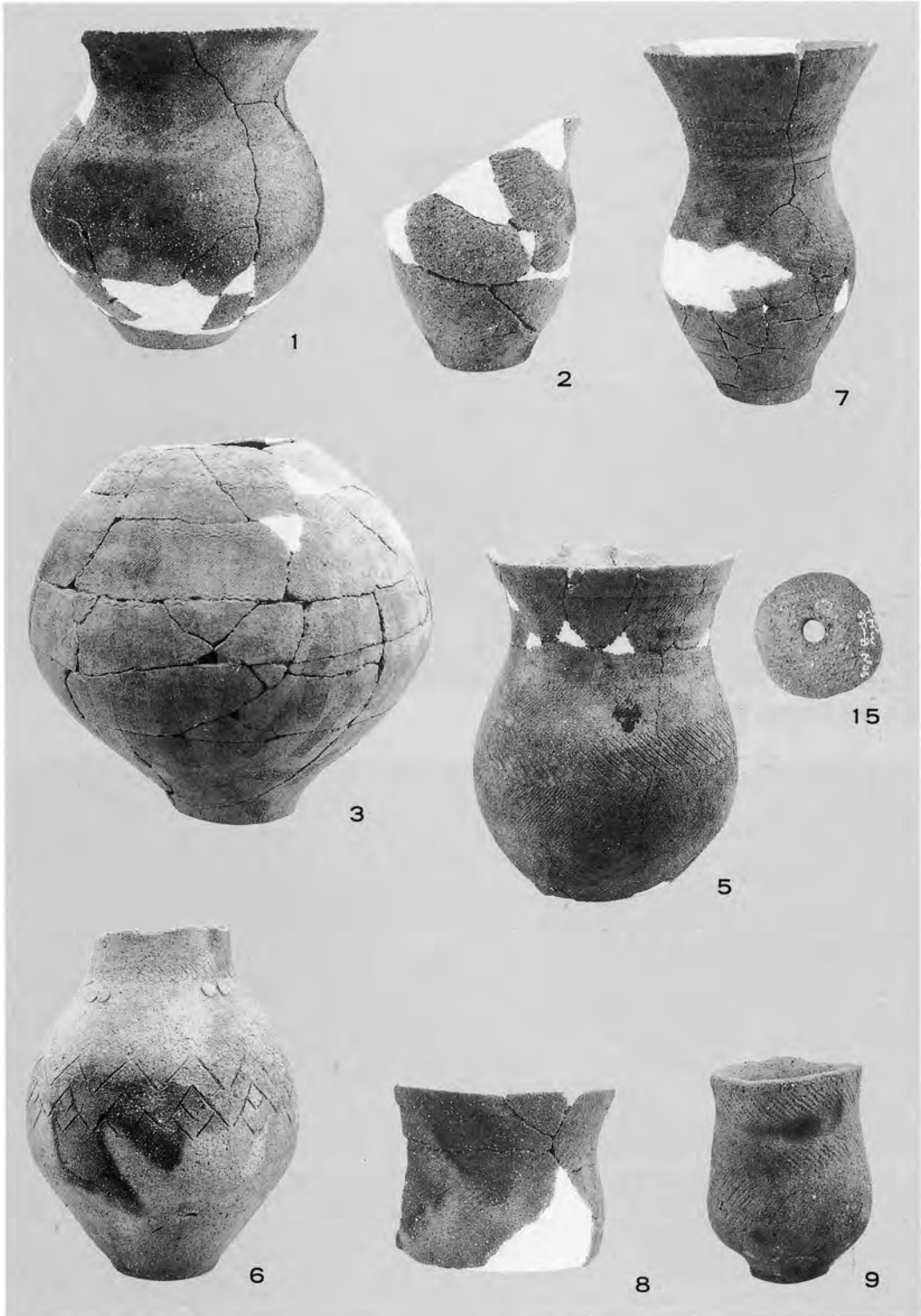
第7号住居跡
出土遺物(2)



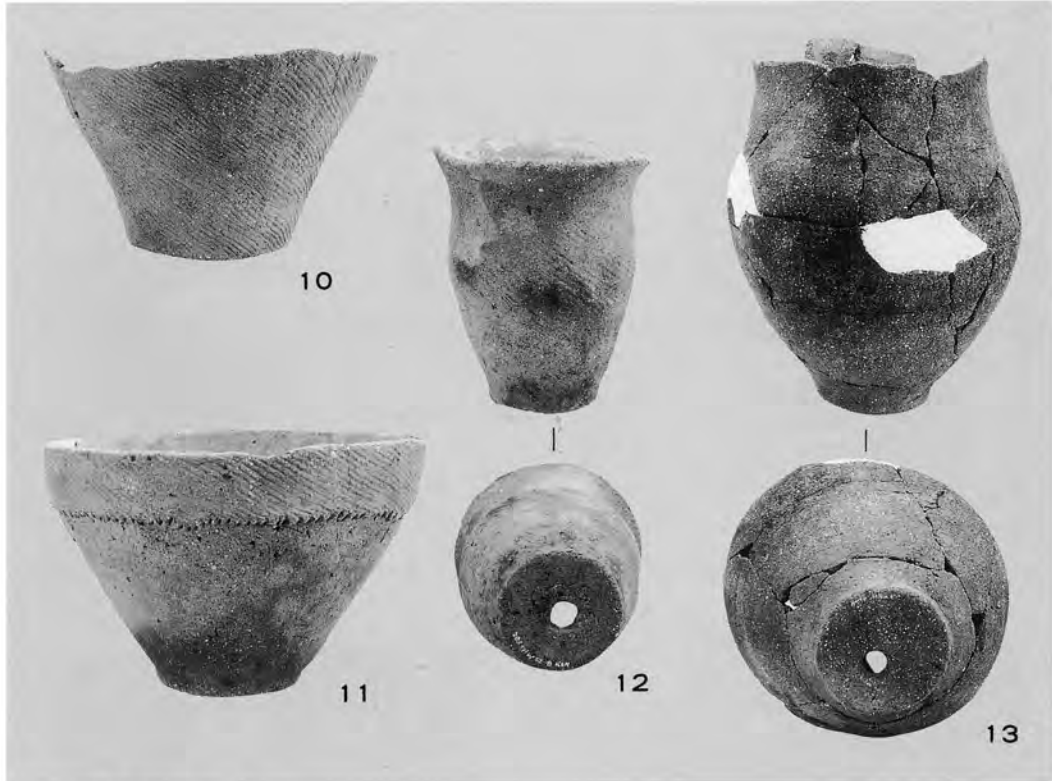
第8号住居跡



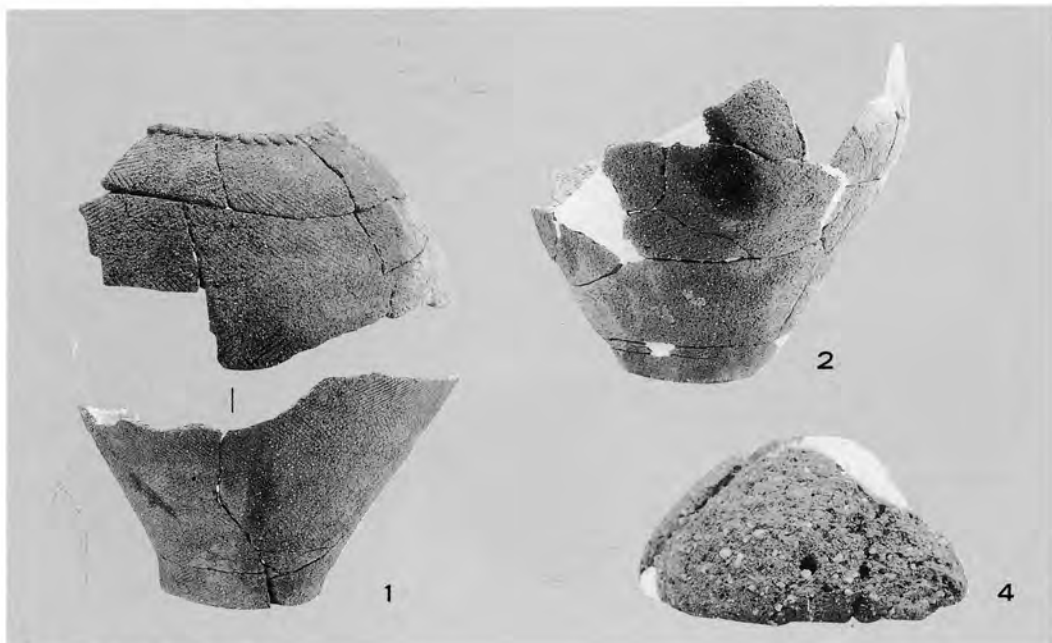
第8号住居跡遺物出土状況



第 8 号住居跡出土遺物(1)



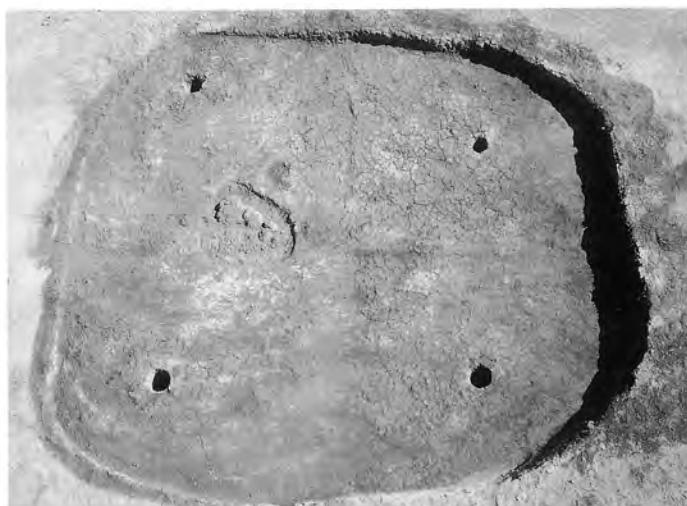
第8号住居跡出土遺物(2)



第9号住居跡出土遺物



第9号住居跡



第10号住居跡



第11号住居跡出土遺物

PL132

原田西遺跡



第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡



第85・90号土坑出土遺物



第1号溝出土遺物

第1号溝



第2号溝(1)

PL134

原田西遺跡



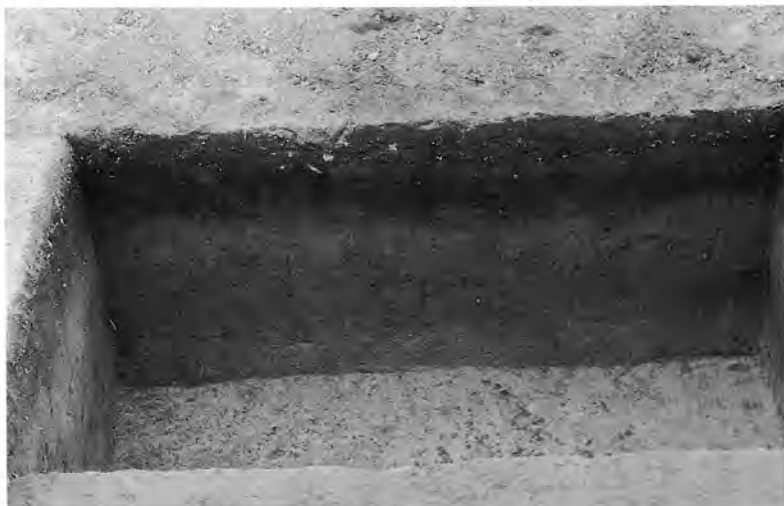
第2号溝(2)



遺物包含層



遺物包含層出土遺物



試掘土層断面



第70号土坑及び遺物包含層出土遺物



遺構外出土遺物



遺物包含層遺物出土状況(1)



遺物包含層遺物出土状況(2)



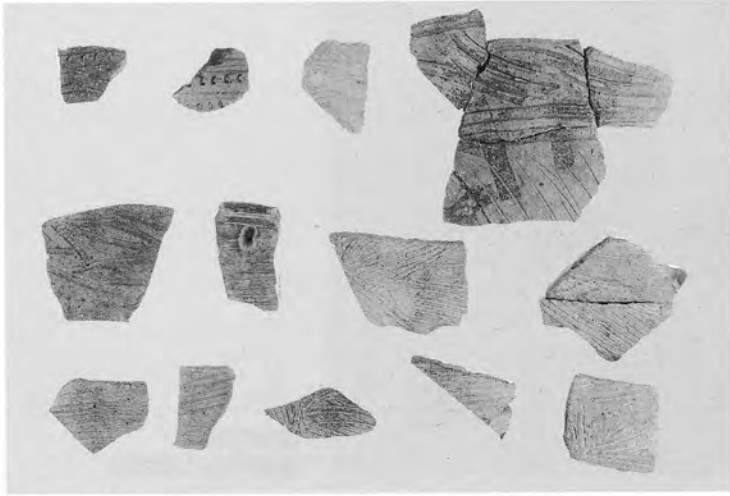
第70号土坑
遺物出土状況



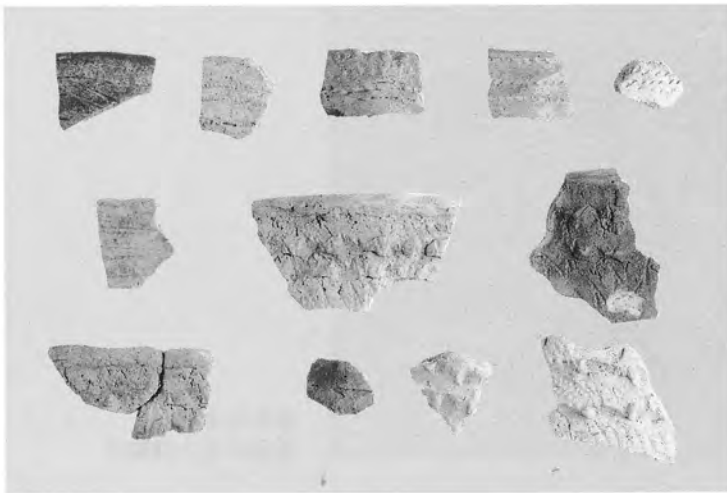
遺物包含層・
遺構外出土遺物(1)



遺物包含層・
遺構外出土遺物(2)



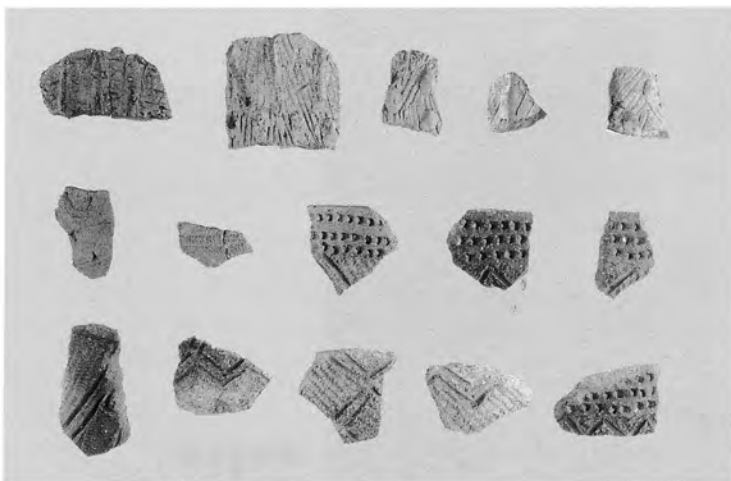
遺物包含層・
遺構外出土遺物(3)



遺物包含層・
遺構外出土遺物(4)



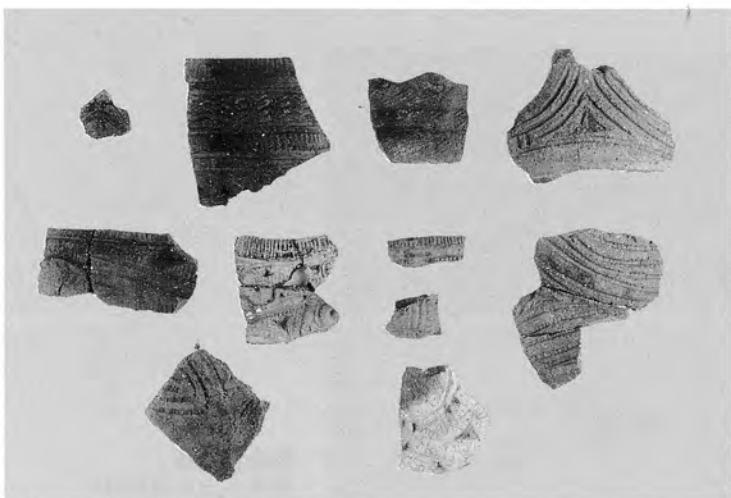
遺物包含層・
遺構外出土遺物(5)



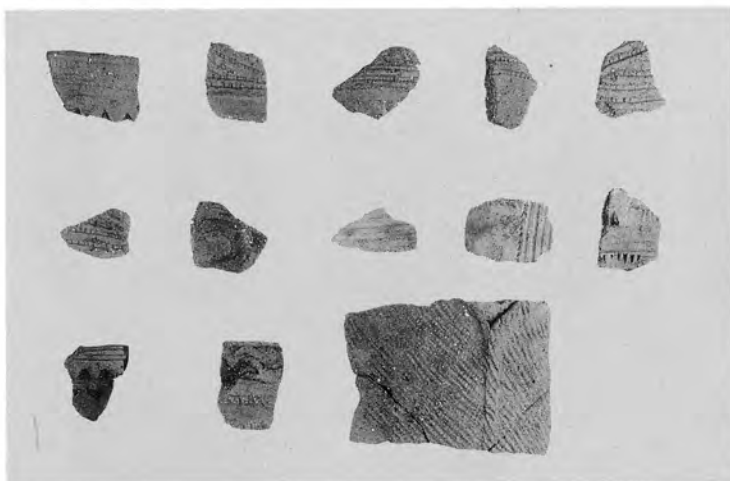
遺物包含層・
遺構外出土遺物(6)



遺物包含層・
遺構外出土遺物(7)



遺物包含層・
遺構外出土遺物(8)



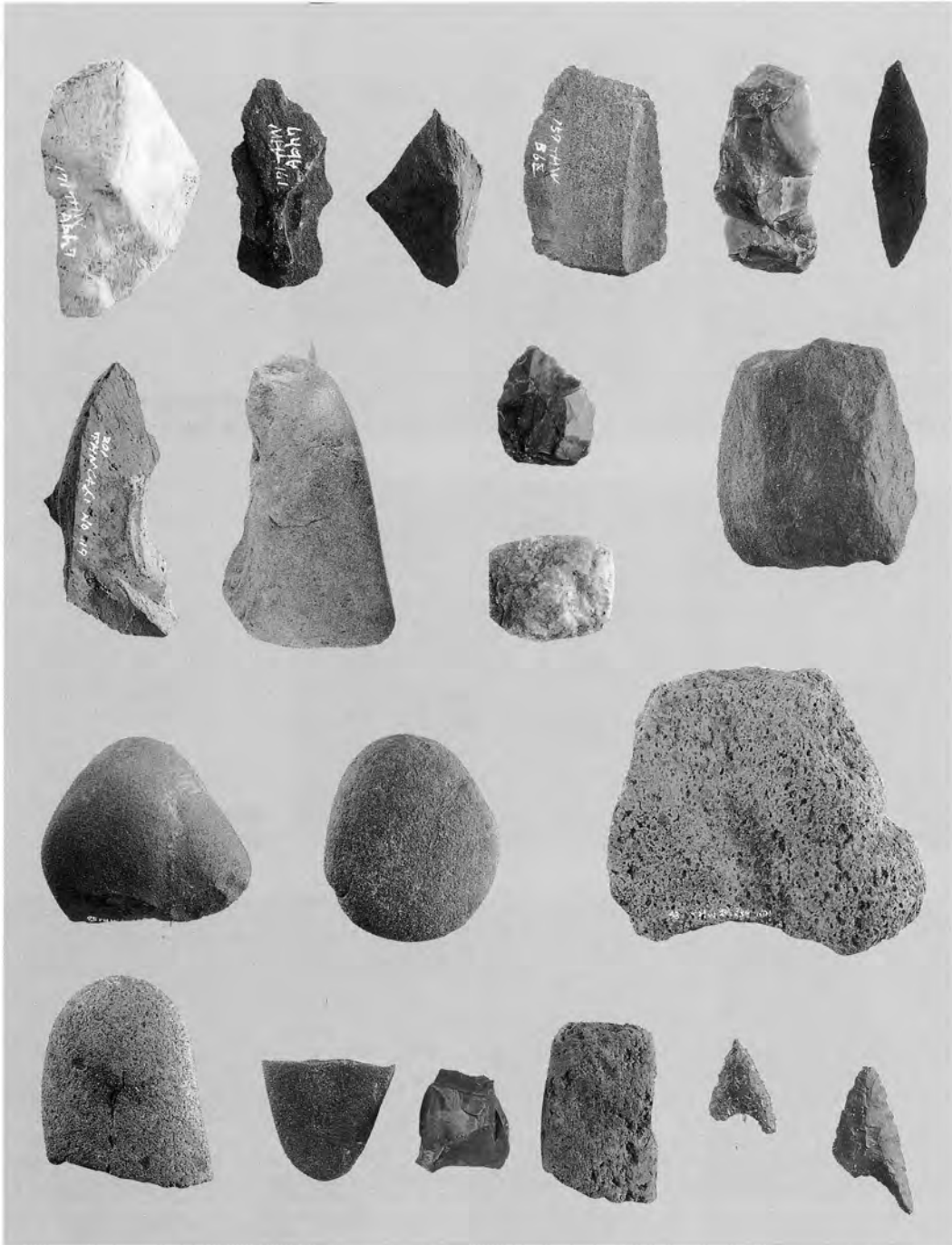
遺物包含層・
遺構外出土遺物(9)



遺物包含層・
遺構外出土遺物(10)



遺物包含層・遺構外出土遺物(11)



遺物包含層・遺構外出土遺物(12)

茨城県教育財団文化財調査報告第80集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 I

原田北遺跡 I

原田西遺跡

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番2号

Tel 0292-25-6587

印刷 (株)あけぼの印刷社
水戸市松が丘2-6-24

Tel 0292-51-5265

